

起きたらゴリラ顔だった

mi—ta

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

起きたらゴリラ顔だった

これは朝起きたらドンクリーク（シヨタ）に憑依をしていた男のお話

スタートは原作開始より前になってます、現在は原作の時間軸に入りました!!

それからキャラクターに関してですがオリキャラは最低限に抑えていきたいと思ってます。

悪魔の実なんかもオリジナルは出来うる限り控えますが

ワンピースの劇場版やアニメオリジナルのキャラクター及び悪魔の実、アイテムや設定などは利用しますので悪しからず。

基本は原作準拠でいきますけども。

# 目次

プロローグ	1	
海軍軍曹	ドンクリークくん	6
海軍少尉	ドンクリークくん……さん？	12
副官補佐	ドンクリークツ！	17
密林争乱	ドンクリークさん	22
対鋼鉄戦	ドンクリークさん	27
鍛錬海兵	ドンクリークさん	32
海軍中尉	ドンクリークさん	37
海軍少佐	ドンクリークさん	42
海軍中佐	ドンクリーク	47
対金獅子	鈍熊クリーク	52
入院直後	ドンクリークさん	57
特務大佐	ドンクリークさん	61
習熟航海	ドンクリークさん	65
悪魔武器	ドンクリークさん	70
火吐鉄鷲	ドンクリークさん	75
四色問答	ドンクリーク	79
鈍熊考察	ドンクリークさん	83
隠密潜入	ドンクリークさん	87
鈍熊上陸	ドンクリーク	93
考古学者	ドンクリーク	97
幼女同行	ドンクリーク	101
幼女と熊	ドンクリークさん	106

黄金未満	ドンクリークさん	110
旧・50話記念 もしも彼が海軍に入らなかつたら		114
世界貴族	ドンクリーク	128
鬼の跡目	ドンクリーク	133
指名手配	ドンクリークさん	138
目標接触	ドンクリーク	142
母娘再会	ドンクリーク	146
怪力根源	ドンクリークさん	152
脱獄報告	ドンクリーク	155
包囲作戦	ドンクリーク	159
戦闘決着	ドンクリーク	163
熊と鈍熊	ドンクリーク	167
逃走幫助	ドンクリーク	171
赤青黄鈍	ドンクリークさん	175
東の海へ	ドンクリークさん	180
漂着親子	ドンクリークさん	186
東の知識	ドンクリークさん	188
中将遭遇	ドンクリークさん	193
赤髪戦闘	ドンクリークさん	198
赤髪対話	ドンクリークさん	202
蜜柑大尉	ドンクリークさん	206
海軍准将	ドンクリークさん	212
覚悟中将	ドンクリーク	216
赤犬同乗	ドンクリーク	221
殲滅作戦	ドンクリーク	225

謀報機関	ドンクリーク	229
翔ける熊	ドンクリーク	233
旧・100話記念	もしも彼が狙撃の道へ進んでいたら	237
状況終了	ドンクリーク	244
海軍少将	ドンクリークさん	249
腐敗王族	ドンクリークさん	255
白町騒乱	ドンクリークさん	259
復讐誓い	ドンクリークさん	263
不明少年	ドンクリーク	267
治療思案	ドンクリーク	270
訓練進捗	ドンクリークさん	275
聖地襲撃	ドンクリーク	279
鈍熊暗躍	ドンクリーク	283
四海制覇	ドンクリークさん	287
若き黄金	ドンクリークさん	291
緑髪少女	ドンクリークさん	295
新進気鋭	ドンクリークさん	300
緑の病毒	ドンクリークさん	304
深海の島	ドンクリークさん	308
魚人の国	ドンクリークさん	312
竜宮王族	ドンクリークさん	316
いざ探検	ドンクリークさん	322
金の少女	ドンクリークさん	326
遺跡訪問	ドンクリークさん	330
遺跡探索	ドンクリークさん	333

輝く黄金 ドンクリークさん

旧・150話記念 もしも彼が平和主義者だったら？

親娘再会 ドンクリークさん

いざ脱出 ドンクリークさん

地上帰還 ドンクリークさん

四色晚餐 ドンクリークさん

海賊白髭 ドンクリークさん

白髭会談 ドンクリークさん

白髭手合 ドンクリークさん

緑の姉妹 ドンクリークさん

所見報告 ドンクリークさん

人見知り ドンクリークさん

治療計画 ドンクリークさん

北の海へ ドンクリーク

新人配属 ドンクリーク

作戦開始 ドンクリーク

墮落准将 ドンクリーク

海賊海兵 ドンクリーク

お正月特別企画 SBSコーナー

糸の牢獄 ドンクリーク

石の巨人 ドンクリーク

旗の猛威 ドンクリーク

桃鳥焦燥 ドンクリーク

銀の一閃 ドンクリーク

桃鳥追跡 ドンクリーク

339

343

350

354

358

362

366

371

375

379

383

387

391

396

401

405

409

413

417

423

427

431

436

440

445

熊武装班	ドンクリークさん	541
教育総監	ドンクリークさん	538
七星魔剣	ドンクリークさん	535
呪い聖剣	ドンクリークさん	532
七星の剣	ドンクリークさん	529
村長交渉	ドンクリークさん	526
藍の少女	ドンクリークさん	523
アスカ村	ドンクリークさん	520
アスカ島	ドンクリークさん	517
情報収集	ドンクリークさん	514
砂への策	ドンクリークさん	512
姫の考え	ドンクリークさん	509
砂の姫君	ドンクリークさん	506
砂の猛威	ドンクリークさん	502
砂漠の王	ドンクリークさん	499
砂漠の国	ドンクリークさん	496
双子の岬	ドンクリークさん	493
火の暴虐	ドンクリークさん	489
花の旅立	ドンクリークさん	485
蹴脚極意	ドンクリークさん	479
鈍熊怪鳥	ドンクリークさん	474
五色姉弟	ドンクリークさん	469
200話記念	彼がもし彼では無く彼女だったら	458
情報考察	ドンクリークさん	453
対桃鳥戦	ドンクリーク	449

新七武海	ドンクリーク	624
250話記念	もしも彼が料理の道に進んでいたら	618
幽霊姫君	ドンクリーク	614
影支配者	ドンクリーク	611
怪物の島	ドンクリーク	608
魔の海域	ドンクリーク	605
古き旗艦	ドンクリークさん	601
白黒医師	ドンクリークさん	598
金緑白黒	ドンクリークさん	595
医師志望	ドンクリークさん	592
平和主義	ドンクリークさん	589
新生七星	ドンクリークさん	585
新生装備	ドンクリークさん	582
天才医師	ドンクリークさん	579
英雄魚人	ドンクリークさん	575
赤髪双剣	ドンクリークさん	571
原作改変	ドンクリークさん	567
魚人隠匿	ドンクリークさん	564
魚人動向	ドンクリークさん	561
真珠同行	ドンクリークさん	558
東の真珠	ドンクリークさん	555
東方方面	ドンクリークさん	553
東海状況	ドンクリークさん	550
黄金鈍熊	ドンクリークさん	547
黄金果实	ドンクリークさん	544



空の楽園	ドンクリークさん	699
いざ空島	ドンクリークさん	696
天峰秘境	ドンクリークさん	693
鈍金銀小	ドンクリークさん	690
雪の行方	ドンクリークさん	687
珀鉛完治	ドンクリークさん	684
熊子供達	ドンクリークさん	681
鈍熊休暇	ドンクリークさん	678
不穩船影	ドンクリークさん	675
黒の禍魚	ドンクリーク	672
偵察鳥騎	ドンクリーク	669
小人参入	ドンクリークさん	666
小人決断	ドンクリーク	663
妖精の王	ドンクリーク	660
妖精の力	ドンクリーク	657
妖精の国	ドンクリーク	653
険しき橋	ドンクリーク	650
妖精伝説	ドンクリーク	647
王軍隊長	ドンクリーク	644
情熱の国	ドンクリーク	641
竜宮顛末	ドンクリーク	638
竜宮切札	ドンクリーク	635
原作竜宮	ドンクリーク	633
頭痛鈍熊	ドンクリーク	630
新たな船	ドンクリークさん	627

300話記念 もしも彼が手っ取り早く強くなろうとしたら

空相違点	ドンクリークさん	703
空上の貝	ドンクリークさん	706
空の大地	ドンクリークさん	709
空の遺跡	ドンクリークさん	712
風の小舟	ドンクリークさん	715
金鐘在処	ドンクリークさん	718
黄金の金	ドンクリークさん	722
神の友誼	ドンクリークさん	725
先住の民	ドンクリークさん	729
熊の帰還	ドンクリークさん	732
造船の島	ドンクリーク	735
船舶大工	ドンクリーク	738
廃船の島	ドンクリーク	741
蠢く策謀	ドンクリーク	744
稚拙策謀	ドンクリーク	747
警告鈍熊	ドンクリーク	750
一時避難	ドンクリークさん	753
造船達人	ドンクリーク	756
赤色鈍色	ドンクリークさん	759
医者之道	ドンクリークさん	763
緑と雪と	ドンクリークさん	766
鈍色授業	ドンクリークさん	769
一味過去	ドンクリークさん	772

火拳顛末	ドンクリーク	866
鈍熊火拳	ドンクリーク	862
火熊密談	ドンクリーク	858
火拳勧誘	ドンクリーク	854
炎の海賊	ドンクリーク	851
鈍熊中將	ドンクリーク	848
海軍中將	ドンクリークさん	844
飴の確執	ドンクリークさん	841
少年奮起	ドンクリークさん	837
飴の悪魔	ドンクリークさん	833
潜入銀色	ドンクリークさん	829
裏切の将	ドンクリークさん	825
造船の島	ドンクリークさん	821
骨の海賊	ドンクリークさん	817
動白骨体	ドンクリークさん	814
神の御山	ドンクリークさん	810
少年の心	ドンクリークさん	806
海底寒村	ドンクリークさん	803
海の大虚	ドンクリークさん	800
後の祭り	ドンクリークさん	797
生死の花	ドンクリークさん	794
祭り強襲	ドンクリークさん	791
祭りの島	ドンクリークさん	788
新世航路	ドンクリークさん	785
麦藁航路	ドンクリークさん	781

理論実装	ドンクリーク	870
心海賊団	ドンクリーク	873
心熊会合	ドンクリーク	876
鈍熊心医	ドンクリーク	879
熊心激突	ドンクリーク	883
心熊決着	ドンクリーク	887
髑髏の影	ドンクリーク	891
黄金の王	ドンクリーク	895
赤熊秘信	ドンクリーク	899
原作突入	ドンクリークさん	903
原作開始		
麦藁の海賊		907
鉄拳の大尉		911
海のコック		915
海軍の乱入		919
最強の剣士		923
剣士の誓い		929
剣聖遭遇	ドンクリーク	933
コックと剣士		937
赫脚の矜恃		941
コックの決意		945
赤色のカモメ		949
コックの船出		954
赤鷗大尉	ドンクリークさん	958
黄金銃の海兵		962

魚人との遭遇

東海の魚人

魚人との激突

三刀流と六刀流

蜜柑の航海士

受継がれた蹴り

魚人の猛威

魚人との決着

試練執行 ドンクリーク

赤き脅威 ドンクリーク

緋鳥正体 ドンクリーク

軍艦姿島 ドンクリーク

不明の少女 ドンクリーク

声聞く子 ドンクリーク

千年の竜 ドンクリーク

竜の願い ドンクリーク

旋風之力 ドンクリークさん

用兵巧者 ドンクリーク

鈍熊一行 ドンクリーク

戦術と力 ドンクリーク

無双鈍熊 ドンクリーク

准将真価 ドンクリーク

鎌鼬に剣 ドンクリーク

消失楽土 ドンクリーク

鈍熊鉄拳 ドンクリーク

竜騷顛末	ドンクリーク
声と鈍熊	ドンクリーク
東方將軍	ドンクリーク
東海の番犬	
海賊王の吊い酒	
海賊狩と女劍士	
海賊狩と妖刀	
一周年記念	クリークさんのあれやこれ
狙撃手と少女	
子連れのダディ	
狙撃の名手	
赤い狙撃手	
道化の蠢動	
伝説の始まり	
騷動顛末	ドンクリーク
指名手配	ドンクリークさん
歓迎の裏側に	
海賊狩りの受難	
更なる受難	
王女の策謀	
砂漠の姫とその臣下	
妖艶なる花	
花の提案と忠告	
煙の勘繰	ドンクリークさん
鈍熊の力	ドンクリークさん

鈍熊と花 ドンクリークさん

得体の知れぬ密林

巨人との出会い

小さな庭での悪巧み

不穏なる影達

鉄壁と液体

蠟燭の猛威

鉄壁の砲撃

蠟燭の策謀

風雲急を告げる

鉄壁と蜜液と蠟燭と

迅速なる奇襲

小さな庭での激突

蠟燭の脅威

液体と剣士

鉄壁への一矢

黒幕との会談

小さな庭での戦闘決着

鉄壁鈍熊 ドンクリークさん

蠟燭交渉 ドンクリークさん

蠟燭激突 ドンクリークさん

蠟燭誤算 ドンクリークさん

鋼蜜隠遁 ドンクリークさん

雪閉ざされし国

元・守備隊長の後悔

雪崩の猛威

雪原に響く声

ファンキーな女医

かつての支配者

雪山の化け物

鉄壁の不審者

医者 of 覚悟

雪国の守護者

鋼鉄への憧憬

鋼鉄牙城の陥落

雪島騒乱の終わり

雪月花景 ドンクリークさん

吸血変種 ドンクリーク

傲慢喰王 ドンクリーク

黄金火拳 ドンクリーク

鈍銀金火 ドンクリーク

砂国策謀 ドンクリーク

砂国方針 ドンクリーク

策謀への牙

砂の動乱の始まり

ゴムと煙の鬼ごっこ

金色と麦わらと

砂の国での方針を

牙を研ぐ砂の姫

反乱軍の戦士



砂の姫の計画

周到なる砂漠の王

砂賊の娘砂の姫

350話記念 もしも彼が剣の道に進んでいたら？

砂賊の娘の慟哭

砂漠鈍熊 ドンクリークさん

不意邂逅 ドンクリークさん

四番真価 ドンクリークさん

土竜強襲 ドンクリークさん

鈍熊土竜 ドンクリークさん

小競合々 ドンクリークさん

砂王頭痛 ドンクリークさん

混沌情勢 ドンクリークさん

黄金砂鰐

砂鰐焦燥 ドンクリークさん

砂鰐の懐へ

鰐顎いらずば何とやら

砂鰐と砂姫の邂逅

ゴムと砂鰐の激突

秘密の悪巧み

謎の女怪盗見参

砂の姫の蠢動

終演前の一波乱

砂漠の王の真価

砂熊激突 ドンクリークさん

砂王顕現 ドンクリーク

砂漠の王と砂漠の姫

砂漠の姫の最上計画

騒動の幕引き

衝突する反乱軍と王国軍

激突する両軍

砂漠の王の終演

砂国騒乱の終結

砂漠の姫と白猫の海兵

砂漠の姫と砂漠の王

砂漠の姫と秘密会合

海軍事情 ドンクリークさん

砂国顛末 ドンクリークさん

不穏先触 ドンクリークさん

黒髭誤算 ドンクリークさん

黒髭考察 ドンクリークさん

兎条誤算 ドンクリークさん

黒髭動向 ドンクリークさん

銀狐海賊 ドンクリークさん

猫視眈々 ドンクリークさん

空島の序曲

空の者との激突

銀色鈍色 ドンクリークさん

鉄壁雪女 ドンクリークさん

聞く少女 ドンクリークさん

空島大騒乱の始まり  
空にて開く大輪の花  
大いなる絶望と僅かな希望  
四百話記念 もしも彼が原作に忠実だったら？  
激昂する神  
空の騒乱の終結  
さらば空島  
鉄壁要塞 ドンクリークさん  
非常事態発令！悪名高き海賊船潜入！  
分かれた一味！鉄壁のナバロン要塞！  
唸る策謀！要塞司令ジョナサン！  
潜入！ナバロン要塞大食堂！  
冴える推理！要塞司令カミソリジョナサン！  
走れチョツパー！ナバロン決死の鬼ごっこ!!  
敵か味方か！謎の少女アピス！  
思わぬ再会！銀腕のサガ！  
整備長メカオ！告げられた仲間の危機！  
立ちはだかる壁！海軍中将”鈍熊のクリーク”!!  
剣士の集い！唸る海軍剣客隊!!  
居合の極致、最速剣士トウマ！  
因縁の再会！海軍女剣士たしぎ！  
もたらされた情報！脱出を阻む脅威！  
蠢く策謀、謀略のナバロン要塞！  
謎の船大工！死を待つだけの海賊船!!  
最強の兵器？ネロの戦車講座！

最強の船？海兵王バラクーダ号！

動き出す闇、麦わら一味のネロ！

医者 of 矜持！チョツパーと海軍医師コバト！

緊急事態！バラクーダ号強奪事件発生！！

騒乱！奪われたバラクーダ号！！

激動！牙を剥いたバラクーダ号！

偽物を止めろ！ルフィ怒りの鉄拳！！

謎の情報！動き出す海賊料理人！！

集う仲間達！いざゴーイング・メリー号へ！！

ナバロン海軍大佐、ドレイク怒りの咆哮！

ゾロとたしぎ！剣士の激闘！！

鋼鉄牙城、最強の戦艦ガルガンチュア！

激闘！ルフィ救出作戦！

超絶体技、サンジvsネロ！

人質と海賊！ナミとアピスの内緒話！！

乱入！海軍本部曹長シグマ！

何とかか何とか！！タイトルが思いつかない！！

動き出す一味！人質奪還の狼煙！！

モネとロビン、二人は仲良し！

唸る舌戦、カゲ対麦わらの一味！！

吹き荒れる熱風魂！ナバロン第八海兵隊！！

三つ巴の戦闘、熱風隊vs麦わら一味vs海イタチのネロ！！

1725

脱出せよ！要塞ナバロンの包囲網！！

司令室での舌戦！要塞司令カミソリジョンナサン！！

17331729

172117171714171017071703169916951691168716831680167616721668166516611657165316491646

出撃！青空を舞う戦鳥騎！！

恐るべき猛者、海軍戦鳥騎部隊！

最高権力 ドンクリーグ

手配更新 ドンクリーグ

450話記念 もしも彼がCP9だったら？

特命任務 ドングリーグ

七武海誘 ドンククーク

鋼鉄魔人 トンクリーグ

悪童鈍熊 ドンクリーグ

和国情報 ボンクリーグ

夢跡始末 ヨンクリーグ

仲間の行く末

仲間の危機！ロビンの行く末

花と鈍熊 ドンクリーグ

メリーとロビン、仲間を救え！

鈍熊市長 ドヤクリーグさん

水都策謀 トンクリーグ

花と鈍熊 ドンクリーグ

装甲列車 ドンクリーグさん

列車襲撃 ドンクリーグ

武装列車の大騒乱

激突！海賊狩りvs船斬り！！

激走！夜闇を走るファイブスター号！！

暴走海列車!?機関室での激闘！

暴走列車 ドンクリーグ

一味危機	ドンクリーク	1840
事態真相	ドンクリーク	1844
立ちほだかる強敵！CP9ロブ・ルツチ！		1848
花熊船問	ドンクリークさん	1852
鈍熊目的	ドンクリークさん	1856
鈍熊愚者	ドンクリークさん	1860
熊豹激突	ドンクリークさん	1864
花の確執	ドンクリークさん	1868
熊豹決着	ドンクリークそん	1872
手配更新	ドンクリークさん	1876
闇狼問答	ドンクリークさん	1879
闇狼激突	ドンクリークさん	1883
闇狼決着	ドンクリークさん	1886
情報奪取	ドンクリークそん	1890
氷街道中	ドンクリークさん	1893
暑家問答	ドンクリークさん	1897
長兄奮闘	ドンクリークさん	1901
鈍熱激突	ドンクリークさん	1905
特兵装研	ドンクリークさん	1909
新型兵装	コングリークさん	1912
戦国鈍熊	Donクリークさん	1915
ナイトメア・ビフオア・ゴーストアイランド		1919
鉞担鈍熊	ドンクリークさん	1922
モンスター・オブ・デッド・ムーンナイト		1925
ヴァンプ・オブ・プリンセス		1929

第520話	第519話	第518話	第517話	第516話	第515話	第514話	第513話	第512話	第511話	第510話	第509話	第508話	第507話	第506話	第505話	タイトル四字縛りがキツイので暫くは数字話でいきます。	第503話	赤具足熊	赤鉄の咆哮	450話記念	空塞鈍熊	海峽鈍熊	驚天動地	ホウ・ノー・グライ・ウオーター・ノウ・ソー・コカラ
																	ドンクリークさん	ドンドーンク	もしも彼が極道を目指したら	ドンドーンク	ドンリリークさん	ドンクリークさん		
																	ドンクリークさん							
2014	2010	2006	2002	1999	1995	1991	1987	1985	1982	1980	1978	1976	1974	1971	1969	1966	1964	1960	1956	1949	1945	1941	1937	1933

第 第 第 第  
524 523 522 521  
話 話 話 話

2025 2022 2020 2017



## プロローグ

朝起きたらゴリラ顔だった。

布団から起きて顔を洗おうとして気づいた。

というか顔どころか体も縮んでるし自分の部屋で寝たはずなのに起きたら全く知らない場所という。

水桶に映った顔を見て考える

「うーむ、なんともなしの既視感」

年の頃はまだ10にならないくらいか、野放図に伸びた薄紫？の髪にゴリラ顔というか唇が厚くゴツい顔になることが予想される顔立ち。

というか悪そうな顔である、イケメンな気配はまるで無い。

昨日の記憶は仕事が終わって帰ってきてから布団に入ったとこまで、日本生まれの日本育ち、黒髪黒目の一般的な顔の日本人だった筈で断じてこんな遺伝子に逆らった髪色でもこんな悪そうな顔でもなかった

「そこんとこどう思うよおっさん？」

「ああ!?!何言ってるんだ？起きたならさっさと稼ぎ行ってこいや!!」

横にいたおっさんに聞いたら靴投げつけられ怒鳴られたでござる。

とはいえ怒鳴られるのは好きじゃないのでさっさと靴を肩にかけると扉を開けて家を出る、ドアを閉めると壁が崩れた。

というか家？がボロい外の景色も雑然としておりカラリと晴れた天気も合わさり行った事無いけどスラムってこんな感じかしら？という風景。

ガラが悪そうな方々が多いし。

潮の香りがする事から海の近くと言う事が伺えるがとりあえず日

本で無い事は確かだろう、ついでに言うとは皆様カラフルな頭をされてるので染めてる可能性も除き地球でもないだろう。

「異世界転生パターン、いや憑依かしらね？」

そして歩きながら記憶を辿ると仕事というのは物拾い○のようだ、勝手に品物を取っていくのを物拾いと言うならだけでも。

さっきのおっさんは拾ってきた○物を金銭に変える十寝床として家を貸してるようだ、十中八九ピンハネしてるだろうけども。

と考えながら歩いていると海まで出た、海というか港。

数台の帆船が並んでおり生で初めて見たのでとりあえず口開けてポケーと見るとすっごく見覚えのある船が目に入った

陽を受けて燦然と輝く帆にはMARINEと誇らしげに書かれた文字とカモメのマーク

「オウシット、ワンピースの世界じゃねえかこれ」  
海軍の軍艦が停泊していた。

割と厳しい世界だった気がする、といっても結構おぼろげだが。

とりあえず選択肢としては

- 1、同居のおっさんにぶん殴られながら今の生活を続ける
- 2、上官にぶん殴られながら（偏見）海軍にはいる
- 3、海に出て一旗揚げる

の3つ、痛いのは嫌いなので3を選びたいとこだけどなんの取り柄もないのに海に出ても碌な未来が見えないので

「というわけでこの船で働かせてください」

「何がというわけか知らんが坊主、迷子か？」

折衷案として海軍で必要な技能を身につけてから辞めた後で海に出る方向性で行く事に決定。

そこからへんで暇そうにしてる海兵に声をかける

「…親はいません、寢床を貸してくれる人は居ますが俺みたいなのに盗みをさせ酒に浸って殴ってくるような人で辛くて辛くて」

ヨヨヨ、と俯いて目を抑える仕草をしながら今の環境が酷く人間関係がフリーな事をアピール

「そうか、待ってる。上に相談してみる」

海兵さんはそう言うのと頭にポンと手を乗せ

「親御さんが亡くなって辛かったろうが頑張ったな」

と言って船の方へ向かった、あややだイケメンなどと思いながら痛み良心を抑えつつ待つときさっきの心がイケメン海兵さんが戻ってきた。

「とりあえず俺の上司に会わせるから…まずは風呂だな、それからそのボサボサな髪も切ってしまうおう」

あれよあれよという間に風呂桶にぶち込まれ髪を切られ海兵の制服を着せられ姿見を見ると

「ドン・クリークじゃねえか!!」

海兵服を着たちっちゃいドン・クリークがそこにいた。

諸君は首領・クリークをご存知だろうか

5000人という一国の軍隊に相当する人数を配下に50隻の船を擁する大艦隊を率いる海賊艦隊の提督であり、”騙し討ちのクリーク”、”海賊艦隊提督”などの異名を持つ。

懸賞金額は”1700万”ベリー

配下も粒揃いでクリークに忠実で高い戦闘能力を誇る冷徹なる戦闘総隊長”鬼人”ギンや戦艦の大砲すら弾き返す防御力と防御術を併せ持ち戦闘で血を流した事がないとされる二番隊長”鉄壁”パールと共に自身も”武力を最も多く持ったものこそが強い”という考えを持ち数多の武器、防具を用意し周到な戦術の元に相手を倒し

てきた男である。

原作では数多の武器、手段を用いて主人公を圧倒するも己の鎧と共に信念とする”武力”を破られ敗北し半狂乱に陥ったところを部下であるギンに気絶させられ退却した

要するに強い筈だが相手が悪かったパターンである(多くの主観を含みます)

たしか元・海兵で(違う)任された軍艦を奪って(監獄から海兵になりすまして脱獄)色々な騙し討ちでのし上がったんだっただか。

武器防具を用いない素の戦闘力は”大戦槍”と呼ばれる重さ10t(1tです)の爆発する槍を軽々と操る程の怪力を持つ豪傑である

そして肝心なのは

「たしか40歳くらいだったか?(原作開始時42歳)となると今10歳として原作から30年前…なんかあつたっけ?」

「おい新入りいーさっさと甲板磨き終わらせろ!!」

ぼやいていると怒られた

とりあえず床をブラシでゴシゴシしつつ

えーと、フランキーとロビンが30手前だった筈だから(フランキー34歳、ロビン28歳)今から数年後に産まれるってのと原作から20年前?位に(22年前)ロジャールが処刑されたんだっただけ?

あんまり原作は覚えてないので開始までは大人しくしてたいところ、くいなどか助けたいけど。シャンクスの腕とかも。

「うーむ、考えても仕方ない」

「終わったなら次!武器磨きだ、ついてこい!」

へいへい、見習いは大人しく従いやすよ、などと考えつつ磨き布で渡された銃をゴシゴシ磨きながら方針について考える。

原作では10t(1tです)を振り回した怪力は素養があるのだから

ら伸ばした方が良さだろうし六式（と呼ばれる海軍独自の戦闘術）は身につけておきたいところ。

覇気は使えるようになっておきたいし悪魔の実は食べない方向で行くかな、能力は魅力的だけどピンキリだしデメリットが痛いし。

”ガチガチの実”とか欲しいけど（カチカチの実）

よし、とりあえず自身の身を守るのを優先として原作開始までは大人しくしておいて助けられる時だけは助ける。

自身の海賊団は立ち上げるとしてサンジのどこだけ何とかしないと不味いよなあ…

## 海軍軍曹 ドンクリークくん

どうも皆さん、強くてカッコいい海賊らしい海賊、ドン・クリークです。

今は海兵だけど。

海軍に入ってから4年、入って暫く東の海の支部にて教育を受け連れてこられたのは海軍のお膝元マリンフォード。

あまりのキツさに何度逃げようと思った事か。キツかった。

本当にキツかった。

とりあえずこの4年の成果、なんと見習いから正式に入隊し”軍曹”になりました！

”首領”はまだまだ遠いけども。

そして確かコビーやヘルメツポが海軍に入って一年足らずで曹長や軍曹になってたのを思い出して凹む。

あと同期とか他の仲間になんか避けられるのよね、やっぱ悪人ヅラだからかしら？

いいもん！強くはなつたし！とぶつくさ呟きながら素振りを行う。

ある海兵の話

「おい、軍曹閣下またアレで素振りしてるよ…」

クリークの後輩達がそんな風景を見ていた。

クリークが素振りを行なってるのは人一人分の大きさと重さを超える鉄柱だった。それを振り回してる彼はまだ子供のはずなのだが。

ブオンブオンと風切り音を鳴らすそれを片手で軽々と扱う様はそれだけの怪力と技術を思い起こさせた。

「あの人顔が怖いってのとあんま喋らないから何考えてるかわかんないんだよなー、喋ってもぶっくらぼうだし、小さいし」

というのと同じくその風景を見ている海兵の言。

「それはわかるけどまだ14らしいしな、知ってるか？なんか子供の頃虐待されてたらしくてそれであんな性格らしいぜ？（違う）」

強さだけなら尉官クラスらしい、小さいけど」

「ああ、確か年齢の件もあって暫くは軍曹で留めるとかって聞いたな、しかしそんな事があってあんな仏頂面なのか」

「確実に佐官クラスにはなるだろうな、今度この前軍教官になった元・大将のゼファーさんが直々に指導するらしいぜ？」

「うわ、それだけ期待されてるって証拠かねえ、六式も3つは使えるらしいしすつげえ怪力だしわかるわ、顔怖いけど」

ある海軍教官の話

「すまんがゼファー、教官になって早々だがこいつをしばらく預けたい」

海軍を纏めるコング元帥に呼び出され執務室に入って渡されたのは一通の書類だった。

「拝見します」

渡されたソレは一人の海兵の書類、現在の階級は軍曹（据）。

「元帥、この据というのは？」

「ああ、年齢の件もあって暫くは軍曹に留め置くのでな、それでだ。強さだけなら尉官クラスに匹敵するが追い追い昇進させるさ」

書類に目をおとすと現在14歳、まあ妥当か。

しかしこの年でそのレベルの戦闘力とは恐ろしいな。

ふむ、経歴は東の海出身。

孤児であり親は不明、「守る強さが欲しい」という理由から海兵に自ら志願。

”鉄塊”、”指銃”、”月歩”を使える三式使いで持ち前の怪力で巨大な鉄柱を武器として使用。

それに慢心する事なく貪欲に鍛錬を欠かさないがその一方であまり話をしない、常に仏頂面、一人で黙々と作業する、などコミュニケーション能力に乏しいようだ。

「わかりました、暫く私が面倒見ましょう。

期間はどのくらいになりますか？」

「暫くは、お前の側付にして期間は…そうだな2、3年見ておいてくれ」

こういう話があったらしく。

「今日から俺がお前の教官を務めるゼファーだ！守れる強さとやらをしっかりその身に叩き込んでやるぞ小僧お！」

ゼファーさんが直々に指導してくれる事になりました。

ゼファーさんが教官になりました

しぬ！たすけて！

…とかなんとか言ってるけど元・海軍大将だけあってこのゼファーさん、何しろ強い。

あと異名である”黒腕”の名の通り武装色の覇気を得意としており師事するにはうってつけの人材である、厳しいけど。

というわけで

「考えるな！感じる!!」と「疑うな！」

というスパルタのもと覇気を武装色は合格、見聞色は最低ラインで習得、六式も（一応）全部習得したよ！どんどんぱふぱふ

4年かかりました、才能の無さに凹みそうです。

あと六式と覇気を身につけたところ曹長に昇進しました、苦節6年かかってるけど。

原作三大将がこっちがおっさんと過ごしてるあいだにメキメキと昇進してるだけにねえ!!

何だあの光お化けとマグマお化けと氷お化けえ!!

ダメージ与えても復活するし向こうの攻撃は致死レベルだし!!

思い出しても泣けてくる



光お化けは速くて当たらないしビームは超高熱だからこっちの鉄柱溶かすしさあ！防いだと思つたら鉄柱貫通してきたんだぜあのビーム！

マグマお化けは一番容赦なくこっちを殺す気で攻撃してきた、熱いし範囲が広いし！こっちの攻撃は当たってもロギア系だから武装色の覇気使わないと効果無いしさあ！

氷お化けは一番マシだったけど…いや、あんま変わらないか、冷たいし鉄柱が手にくつきそうになつたし、でも当たった感触はわかりやすいし鉄柱溶かすことも無かつたから他のお化けよりはマシか

三人ともロギアだから攻撃が当たっても効果がないってのが一番でかい気がする、ロギア系探すか？いや、原作でも手に入りそうなのってメラメラとかゴルゴルくらい？原作崩壊甚だしいし難しそうだからやらないけど。

そこから指導を、覇気の習得にシフトしてもらって自身の身に武装色の覇気を纏う事は出来るようになった。

武器に纏わす事は出来ないけどね！

という事でゼファアのおっさん（おっさんと呼ぶと蹴られる）に休みをもらってやってきました海軍科学班！

というわけで海楼石で出来た棍下さい

「ああ?!舐めてんのか?いいか!説明してやる!」

曰く海を固めた鉱石で（適当）

めっちゃや、硬くて加工が容易ではなく

そもそもめっちゃ希少なのでそんな大きな武器を作れないらしいめっちゃや端折って説明したけど

「わかったか!そのでけえ図体に合わせた武器なんぞ作れねえよ!」

スモーカーは使ってたけどなあ、先端に仕込んであるだけ?

それとも大佐クラスだからか?

あ、体もでかくなり身長も2mを超えました。

とある訓練風景

「鉄塊い！」

「ふんっ!!」

ぐっふう！痛い！死ぬ！死なないけど！

「おいこらおっさんてめえ！覇気纏わせんな！」

「うるせえ小僧！鉄塊に入るのに時間かかり過ぎだ！そのでけえ図体は何のためにあるんだ！何回も言ってるんだろうが！全身を瞬間的に引き締めろって言ってるんだろうが！」

正拳突きを喰らった脇腹をさすりながら怒鳴ると怒鳴り返された。

まったく図体だけでかくなって態度は全く変わんねえなあ、この小僧

不機嫌な面を浮かべてこつちを睨むクリークを見て思う

最初は三式使いという事で才能溢れる素晴らしい若者だと思っていたが口数も少なく動きも乱暴で習得したとされてる三式もどちらかというと鍛錬による成果らしい。

その三式も自己流で習得した様子で完璧とは言い難く持ち前の怪力で何とか形になってるような物であった。

最初はそこを修正して、六式を正しく教えていたが交流の為に着々と昇進を重ねていたロギア系の能力を持つ期待の若手三人と模擬戦をさせた所粘りはしたが流石に相手がロギア系という事もあって決定打に欠けていたようであった。

自身もそう思ったのか

「おいおっさん!!ロギアをぶん殴る手段ねえのか!!」

と言ひ募つてきたので海楼石と覇氣の話をする

”教えやがれ!!”と怒鳴つてきたので武装色を纏わせて頭ぶん殴つておいたが。

ぐぬおおおお!と頭を押さえて地面を転がるクリークを

耐久力が高いんだよなあ…と思いつつ考える

覇氣を習得させるとして今のままだとどちらも中途半端になりそうだが…

「おい小僧、海楼石製の武器を使うという方法もあるぞ?」

と聞いたところ

「大量の武器は有用だ、だが壊されりや身一つじゃねえか」

と返された

「いい覚悟だ!厳しくなるがやる気のようにだな!しっかりその身に刻み込んでやるから覚悟しろ!!」

え、ちよ、という言葉は無視して六式も覇氣も並行して教える事にした。

そしてその結果、覇氣に関しては武装色はほぼ使いこなせる一方見聞色は及第点。

六式は全て使用できその持ち前の怪力で”月歩”や”嵐脚”を使いこなし”鉄塊”に至っては使用中は動けないという前提を覆して「指銃が鉄塊かけて撃つんなら鉄塊かけて動けねえわけねえだろ!」と、鉄塊拳法などと言って鉄塊をかけたまま戦闘行動を行うという戦法を編み出した。指銃の鉄塊は腕から先だけだろバカ。

海軍少尉　ドンクリークくん…:さん？

なんか若手の海賊が新しく七武海に入ったらしい、砂の能力を使う  
ロギア系…:つてクロコダイルじゃないですかー

なんか豪華な椅子に座っておっきな猫膝に乗せてワイン飲んでそ  
う(偏見)

あの人絶対強いでしょ、原作ではルフィに敗れたけど油断と慢心が  
なければ絶対強かった筈

というのは置いていて

ゼファアのおっさんから認められ晴れて尉官に昇進しましたク  
リークです、少尉・クリークです。そしてとある企みを思いついたの  
でゼファアのおっさん…:には却下されそうだから話がわかりそうな  
ガープ中将にするか

とある海軍中将の話

「鎧と武器が欲しいじゃと？」

突然呼び止められ振り向くと視線の先にいたのはつい先日同僚で  
あるゼファアの指導をクリアし少尉に昇進したクリーク少尉じゃつ  
た。

自分の身体を鍛えそれを戦闘の抛り所に行っていると思っていたが  
…:いや、武装を多く持つのは有用だと認めてはいたか、鉄柱を武器と  
して使用しておるのう

話を聞くと今使ってる鉄柱が度重なる酷使(ビームで穴を開けら  
れ、マグマで溶かされ、氷でボコボコにされ、黒腕に殴られ、持ち主  
からは握り潰されそうになり)でボロボロらしく今より細く尚且つ  
もつと重いものが欲しいらしい、鎧は鍛錬の為重りがわりにそこそこ  
頑丈で重量があるものが欲しいとの事じゃった。

「ふむ、なら儂が科学班に一筆書いてやろう」

懐から出した紙に

”クリークに武器と鎧を作ってやるように”

と書きつけ儂の名前とついでにセンゴクのやつの名も書いてやろう

「これを科学班に持って行って行って好きな武器を作ってもらおうと良い、きつと満足するものが出来上がるじやろう」

「うつつ、ありがとうございます」

それからガープちゅーじょー殿はイーストブルーには出かける予定であるでありますか？」

と言ひ慣れぬ敬語で聞いてきたので

「一応再来月に視察（遊び）に行く予定があるがどうかしたのか？」

「へい、おれ：自分、東の海からここに来てずつとここしか知らないんで外の海つてのを見たくなくてですね、ガープちゅーじょー殿はよく東の海に視察に行かれるって聞いたんで一緒に一緒にしたくて…」

「わかった、その位なら儂の一存で決めても構わぬじやろう。」

詳しい事は書面で通達するでな、暫く待て」

「へい、ありがとうございます」

では自分は科学班に行つてきますので」

と儂の書いた書きつけを手にのそのそと去る姿は

「熊みたいじゃの、あやつ」

と率直な感想を述べた、実際でかい図体でのそのそと歩く姿は熊のようである、とそこかしこで囁かれてるのをクリークは知る由も無い。

というのはさておきゼファアの修行を完遂し強さは佐官クラスなら勝るとも劣らず、年齢は16歳、若手のエースとしてクリークは各部隊での取り合いになっていた

自らの副官に欲しいと言うゼファアを始め、クリークと同じ時期に海軍に入ったボルサリーノとサカズキの奴は手柄を立てさせとつと昇進させるとせつつくし、センゴクは優秀な若手だからこそ人員が不足している支部に送り経験を積ませるべきだ、と言ひコング元帥は

一船任せて遊撃させるべきとも言い方針が全く纏まらない有様である。

本人の好きにさせればいいと思ったが要らん事言つて怒鳴られるのは目に見えてると静観しておつたが、飛んで火にいる夏の虫とばかりに本人が飛び込んできおつた。

暫くはあちこち連れ回して経験を積んでもらうとするかのう

そうして良いものを貰つたとばかりにクリークは早速技術班を訪れた。

そしてその直後受付では

「とりあえず棍だな、太さは片手で握れるくらいで、長さは俺の身長ぐらいだな、んで叩きつけると爆発するようなのが欲しいな。

んで石突きには海楼石とか仕込んでくれ。

後大事なものは重さだな、いやー最近だと今の鉄柱でもそこまで重く感じなくてな、一応1t近くあるんだぜ？

だから思い切つてもつと重くしてくれよ。

後めつちや頑丈にしてくれ、最近だと持ち手に握つた跡がついちやうんだよ、なんかいい手段考えて。

後携帯性も欲しいな、鎧の一部、肩当てとか合体させると棍になるようなの、その場合棍っていうか槍？

後鎧はとにかく頑丈で重い奴、上半身だけでいいよ、ウーツ鋼とかいうやつ？それが硬いんだっけ？

兜とか腰はいらなからな？あ、でもガントレットは欲しいな、拳にダイヤモンドとかかかたいのつけてあるやつ

あ、肩当てに火炎放射器とニードルガンとか仕込んで：それならガントレットも鉄網とか仕込んでくれ鎧とかの下に銃とかも仕込めねえか？連射できるやつ

あ、時間は暫くかかつてもいいから、その代わり再来月に任務あるからそれまでにこの鉄柱直しておいて？後鎧も頼む、胴体だけでいいから」

作業中の机の上に馬鹿でかいボロボロの鉄柱を置いてふざけた紙を持ってベラベラと話すふざけた男に

「一回紙に書けえ!!!!」

受付の男がクリークの顔面にペンと紙を叩きつけた姿が見られたのであった。

丁寧に要望を科学班に話したら怒鳴られたでござる

ギンやパールなど人材探しの下見の為にイーストブルー行きだが口実の武器作りが思ったより良いものをガープさんがくれたので、これ幸いとばかりに構想していた武器を話すととりあえず紙に書けと言われたのでペンを持ってチマチマと書く

まあ海軍本部のお膝元だし原作クリークの武装くらい作れるだろう。

とある技術将校の話

とある会議室にて数人の人間が持ち込まれた案件に対し頭を抱えていた。

「あー、皆集まってくれてありがとう今回はこのアホが考えたような武装に関して皆の意見を募りたい」

代表らしき男が口を開いた

「これ作る必要あるんですか？」

一人が聞くと

「残念な事にガープ中将とセンゴク大将のサイン付きの許可書持ってきたきやがった、しかも発案者は若手のホープ、熊殿だ」

でかい図体を丸めてちまちまと書類を書く後ろ姿を思い出しながらそう言っただけの方針を纏める。

「ああ、あの顔が怖いクリーク少尉ですか…」

「とりあえず再来月までに必要だという棍と鎧をなんとかしませんか？」

別の作業員が言うと

「そうだな、修理と言われたがこんだけボロボロなら新造が早いだろう」

とわざわざリフトで運んできた鉄柱を見下ろして言う

「本武装に近い方が良いだろうから今のより細くしよう片手で握れるくらい：後でクリーク少尉の検診結果を取り寄せてくれ、サイズが知りたい」

「とにかく頑丈につて事だけど普通の鉄でこれなら鋼とか合金とかでしようか？」

「重さも求めてるからなあ、いつそのこと本武装が出来上がるまでの繋ぎですしとりあえず鉄を超圧縮した塊とかで良いのでは？2tくらいあれば本人も満足するでしょう：するよね？」

「この1t近くある鉄柱振り回してんだぜ？ちよつと重いかもしれんが5tくらいぶっこんじまえ」

「鎧も同じ方針でいいのでは？間に合わせと書いてますし武器は仕込まないで胴鎧単品で良いでしょう」

「よし、急ぎで必要って言うてる分はそれでいいか

じゃあ本武装についてだが：」

そんなこんなで武器を作ってもらいに科学班へ顔見せに行き寮に帰ってきたクリークを待っていたのは一通の辞令

ガープの副官であるボガードの補佐としての辞令であった。

一回東の海に同行するだけだった筈がガープ中將の副官補佐つて：武装作るのが口実に後々の仲間を探す為にイーストブルーに下見に行くだけの筈が：

どうしてそうなった



## 副官補佐 ドンクリークツ！

船出が迫ったある日技術班にとりあえずの方の武器が完成したとの事で受け取りに行く。ガープ中将の副官補佐に関してはとりあえず上からの命令なので考えても仕方ないので諦めた

「重さと頑丈さをご希望との事でしたのでとりあえず鉄を高圧縮したものを素材にしています、その代わり重量は5tとちよつと重いかもしれませんが…」

科学班が部屋の奥からリフトで持ってきたのは鈍色を放つ六角棍と胴体部だけの鎧だった。

とりあえず棍を受け取って軽く握る。片手で握れる太さで力を込めても潰れる気配はない。

少し離れて軽く振ってみるが重さもなかなかいい感じだ。

科学班の方に礼を言おうと思っただらええ…と言う視線で見られたでござる、話を聞けば頑丈さを追求したら5t近くの重量になってしまったそうだから、軽々と振り回すので頭おかしいんじゃないだろうかと思っただらしい

おいこら、誰が頭おかしいだ。

こういう武器を作ってくれと言うところです。と、原作クリークの装備要請書を見せられた。

いまいち納得いかないながらも早速新しい武器をなじませる為演習場に向かう

そこにいたのは

「なんじやあクリーク、お前も鍛錬か？

丁度ええ、ちよいと相手せい」

赤いお化けこと未来の海軍本部大將”赤犬”ことサカズキさんでした。

オウシツト、後にすればよかった。

非常に不本意ながらこの人（ついでに黄猿ことボルサリーノも）は海軍に同期（という用語があるが）で入った人達なのである。それぞれ当時23歳と26歳でこの8年の間にこっちはやっとこさ少尉、相手はどちらも大佐というこの差よ

「マグマお化けと戦えるか！こっちは新しい武器の試しに来てんだよ、作ったばっかで壊すつもりか！」

「ふん、武器なんぞ壊れるのは当然じゃろ。じゃったらこの模擬戦でおんしが勝つたら一つ言う事を聞いちゃろう」

「どうせ自分が勝つたら一つ命令聞けつて言うんだろが」

「何じゃあ、怖いのか？」

「ああ!?上等だ！相手してやるよ！後で泣いてもしんねえからな!!」

ある本部大佐のお話

あいつかわらさず挑発にはよう乗るのう…

新しい武器、と言った通り鈍色の棍と鎧を手に持ったまま演習場の端に向かうのせられやすい同期に色々と残念に思うがこれで手元に置ければそれでいいので気合を入れて相手する事にする。

初めて見たのは海軍に入った年だった、入って暫くしたあたりから海兵服を着た一人の子供の姿を所々で見かけるようになり当時の上司に聞いたところ東の海で自ら志願してきた孤児だと聞いた。

演習場にて見かけた時駆られたように鍛錬を行い自らの身体を徹底的に痛めつけるかのようなその姿は鬼気迫るものがあつたのを覚えてる。

明らかに過剰だと思つた時は止めに入るのが常となつていた。

元・海軍大将ゼファアの教えを受け、六式、覇気を習得し年若く偶に向かう近海パトロールでも海賊の捕縛をこなし、とこれからの海軍の中樞を担うに相応しく是非部下に欲しい人材である。

今回の争奪戦ではガープ中将にかっさらわれたが次の任期には是非手元に来るよう今回の賭けで仕向けた所だ。

そしてクリークはまんまと挑発にのせられてしまったなどと思いつながら

「降参ありの一本勝負、致命打と思われる攻撃を受けた方が負けじやき」

審判を受けたと思われる海兵に説明する。

…逃げていいかなそんな事を考えつつ

「ではお互い向かい合って！」

若い海兵が立会いの合図を出して

「始め!!」

そういうわけにもいかないよなあ、とまずは棍を大上段に振りかぶつてからの振り下ろし。受け止めようとしたサカズキであったが直前で飛び退くと

ドゴオオン!!

地面に大きくめり込む棍

「チツ、感づいたか」

鉄柱を使っていた時より細くなったから重さが軽くなっていると思ってくれりや良かったのに。

「おんしは殺す気か!絶対前より重くなつとるじやろ!!」

「重量5tだ!くらえ!今までの恨みい!!」

唐竹、横薙ぎ、袈裟懸け、突き、振り上げ、逆袈裟と縦横無尽に棍を操る。

前のままであれば鉄柱ごと溶かされていたろうが今回の武器は超圧縮した効果なのか当たっただけでは溶かされないようだ。

しかも一発一発が超重量を持った一撃、相手が溶岩化しようにも逆に当たった部分を弾く事ができるだろう。

サカズキもそう判断したのか回避に専念

大上段に振りかぶったところなど隙がある所に時々腕先から火山弾の一撃を放つも

「どっ…っらあ!!」

左手だけ武装色の覇気を纏い迎撃。

近接は不利と悟ったのかサカズキは素早く距離を取り足元を溶岩化、真っ赤に焼けた岩塊をいくつもこちらに向けて射出してきた。

あつつ! しぬ! しなないけど!

飛んできた岩塊を迎撃しながら手を考える、近づこうにもこの連射される溶岩塊を何とかせにやいかんが…使うか

棍を地面にガスつと刺し両腕に武装色の覇気を纏う

原作で飛ぶ指銃”撥”なるものが出てきた。

拳で打つ指銃”獣敵”なるものも出てきた。

ならば…と、グツと両の拳を握り後ろに引き

飛ぶ指銃が嵐脚の亜種とするなら拳で打つ指銃も飛ばせるだろうと判断した結果

「長距離 拳砲”…4連斉射あ!!」

ロケットパンチ…げふん、飛ぶ拳圧の出来上がりである。

初めて見る技に虚を突かれたのか相手の連射が一瞬止まる、そしてその間に拳圧は溶岩を撃ち払い、両拳を合わせて組みながら相手の懐に入り込み

「連装”拳砲”、一点斉射あ!」「大噴火ア!!」

咄嗟に出されたソレに打ち払われとおきを出そうとしたところで

「双方それまで!!」

ゴシヤツ!!メシヤツ!!

聞き覚えのある声と共に突如上から降ってきた何かに叩き潰された

何とか顔を上げるとそこにいたのは現本部大将にして将来的に元帥になる男、センゴクさんの姿があった

横を見ると赤お化けも潰されてる、ぷくく、ザマーミロ。

「全く貴様らは演習場を壊すつもりか!! 周りを見らんか!」

「そう言われて周囲を見回すと

しこたまにぶん殴られて穴だらけの地面

ところどころ溶岩化している地面

壁に刻まれた薙いだような傷跡

あちこちに突き刺さる岩塊

「こいつがやりました!」

お互いがお互いを指しあつた

お互いぶん殴ろうとしたところで「連帯責任じゃ! 二人でちやんと直せ!」

鬼の形相で怒られたので渋々その言葉に従う

「おう、クリークよ

さっきの勝負は引き分けじゃけえお互いそれぞれ願いを聞くんつてのぞどうじゃ?」

「叶えられる範囲でつて事ならいいぜ!」

という風にお互い悲惨な事になつてゐる演習場から目を逸らして話は纏まつた。

## 密林争乱 ドンクリークさん

サカズキの模擬戦の数日後船上の人となっていたクリークであったがさらに数日後何故か密林の中に一人いた。

それもこれもグループが東の海に入って暫くした頃に

「ちよつと重要な任務○があるから修行してこい、お主は刃物の扱いと、見聞色が苦手じやろうからそこを中心修行すると良い、暫く生き残れば合格じやわい！」

の言葉と共に通りがかった島のジャングルに殴り飛ばされたからである。ついでに数打ちの刀も投げてよこした。

まじふあつきん

それにしても流石この世界のジャングルなのか猛獣が出るわ出るわ

棍を薙ぎ払い右から来たライオンを打ち据え、上空から飛びかかってきた怪鳥は

「指銃・鉄！」

と棍での指銃を繰り出し、足元から飛びかかってきた大蛇を”拳砲”の要領で脚にて踏みつけ

と、最初は律儀に相手していたもののあまりの多さに一時撤退、海辺の方に拠点を作る事にする、サバイバル知識なら一応習ったからな。

その前にこれどうするかなあ…、と量産品の刀を見やって眩く

実は刀というか刃がついたものの扱いが苦手なのだ。

刃物が怖いとかでは無い、ただ単についつい力任せにやってしまうため直ぐに刃がボロボロになってしまい酷い時には折れたり欠けたりが頻発した為である。

手入れの仕方は習っているが折れてしまっってはどうしようもないのでもっぱら打撃武器ばかりが中心となり斬撃は六式の一つ、”嵐脚”ぐらいしか手札がないのである。

…そうじゃん、なにも直接斬りつけなくてもいいんじゃないか

蹴りによって飛ぶ斬撃が出せるなら刀振っても同じ事が出来るはず、ゾロもキメ顔で

「飛ぶ斬撃を見た事あるか？」って言ってたし。

あ、刀で出せるんなら腕で嵐脚の真似事も出来るかも、そっちも要練習だな。

よし、方針は刀による飛ぶ斬撃と腕で出す嵐脚、それから見聞色の覇気の強化。

見聞色の覇気はどうも苦手で半径200mくらいしか察知できないのよね・・・

そうと決まればまずは安全の確保、水の確保、食料の確保、火の確保か、今回の場合は。

呼吸の確保は必要無いし救助は暫くすれば中将達が迎えにくるだろうし

そうと決まれば水の確保だ！と、棍で地面をぶっ叩き大きな音を立ててから大穴を開け拠点○を作ると行動を開始する

うん、なんか楽しくなってきたぞ！

とある海賊の話

ドゴオオオン!!

「・・・何の音だあ？」

クリークが投げ飛ばされた地点の反対側に近くの町での”仕事を、終えて一隻の船が島に停泊していた。

「船長ー！あつちで土埃が上がってるナゾン！」

と、報告するのはトゲ付きの鎧を纏ったノツポな男

「あらあ、何かしらあ行ってみます？」

そう訊くのは黒髪で妖艶な色気を漂わせる妙齢の女性

「ふん、なんか知らんが俺様が吹っ飛ばしてやる」

船長と呼ばれた”まるで熊のような”若々しい大男が両拳を合わせるとガァン！と明らかに人体が出さないような音が響いた。

そして土埃が上がった方向に向かうと、そこには刀の素振りを行なう一人の男の姿。

「船長、海兵ナゾン。」

「でも周りに軍艦は見えないわよお？」

「ふん、たかだか一人だし見た所武器も刀じゃねえか。俺様の力の前には無意味だぜ！おいそこの海兵！」

「おいそこの海兵！」

森で食糧を集めてきた後、技を完成させるべく刀の素振りを行なっているとき突然その声をかけられた。

森の中から現れたのは

「はあい、はじめまして若い海兵クン？」

長いコートを羽織った妙齡の女性

「お前一人ナゾン？遭難者ナゾンか？」

トゲトゲの鎧を纏ったノツポな男、そして

「ぐえははははっ！何でこんなところに海兵がいるか知らんが死んでおけえ!!」

巨漢の若い男が突然右腕を振り上げて襲いかかってきた。

咄嗟に手に持った刀で男の腕を斬りつけると

ガギイン!!

と明らかに人体を斬りつけた感触でない手応えと共に耳障りな音が辺りに響いた

「ぐえははははっ！体が鋼鉄の体と化すカチカチの実だ！幾らやろうと無駄な事だあ!!」

と、斬撃を意にも解さない様子

「何だ突然！どこのどいつか知らんが海軍に攻撃するとはどういう了見だ！敵対行動とみなすぞ!!」

とりあえず相手の素性を確認しようと一旦距離をとりそう尋ねる



と

「あたし達い？そうねえアタシはこのトランプ海賊団の幹部、クイーンの名前を持つビューティークイーンっていうの、よろしくねえ？」  
ねつとりとした声で答える露出が多い女性

「そして僕はトランプ海賊団、ジャックの名前を持つバンジャックつて言うんナゾン！」

大声で元気良さそうに答えるノツポな男

「そしてこの俺様がぁ！トランプ海賊団船長！キングの名を持つベアキング様だ、ぐえははははっ!!!」

ガギイン！と両拳を打ち付け戦意をみせる大男

トランプ海賊団：カチカチの実：

ああ!!劇場版のやつか！

ガチガチじゃなくてカチカチだったかあ…、見た目こんな奴らだつたっけ？ベアキングは覚えあるけど他の二人は覚えがないぞ？忘れてるだけか。

などと思い

「海賊というならば捕まえさせてもらうが命を落としても文句言うなよ！」

これ以上ボロボロになっても困るので刀を腰に戻して棍を構える  
と

「ふふふ、一人で何が出来るのか知らないけど、あんた達い…やってしまいなさあい！」

ビューティークイーンと名乗った女が何処からか取り出した鞭を  
地面に叩きつけると

「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」

森の中から30人ほどの集団が現れ、剣や槍などの武器を手に襲いかかってきた。

ばかやろう！一人相手にばっかじゃねえの!!

などと思いきやチラと幹部を名乗った奴等に目を向けると真つ先に襲いかかってきたくせに静観の模様。

とりあえず棍をやったらめったら振り回して片っ端から吹っ飛ばしていくと砂浜には元通り自分とベアキング、ビューティークイン、バンジャックの3人だけになった。

「やるじゃないのお、うちの兵隊達をみいんな吹っ飛ばしちやうなんてえ」

「じゃあ次は僕が相手するんだナゾン！」

「はっ、3人同時でも構わねえよ、それとも大将がやるかい？」

と、ベアキングの方に向かって棍を突きつけると

「ぐえははははっ上等だ！俺様の力に平伏せえ!!」

そう言いながらベアキングの名乗った巨漢は足音を響かせつつこちらに走って来るのだった。

## 対鋼鉄戦 ドンクリークさん

相対して思った。

丁度良い鍛錬になるのでは？

硬いだけだから覇気を使用すればとどめはすぐ刺せるだろうし  
相手の攻撃は殴ってくるだけだから鉄塊さえかけてしまえば防げ  
るし（熱攻撃を忘れてる模様）

覇気は使わず見聞色を中心によける練習だな

そう思つて棍を砂浜にズンツと刺すと

「何だあ？俺様相手に武器を手放すとはどういうつもりだあ？」

「てめえ如きに武器は勿体無いんでな、素手で相手してやんよ」

「ぐえははははっ…舐めるなあ!!!」

まずは右、そして左…振り上げてからのハンマーアタック、流  
石にその巨体から繰り出す攻撃は威力は強そうだが…

見聞色を使うどころか遅すぎて目を瞑つても避けられそうだなこ  
の速度ならば、と相手の両の腕を掴み

「どうした力自慢！、その巨体は飾りかあ？」

と挑発ついでに大口を開けて欠伸をして見せる

「欠伸がでるぜ」と更に挑発しついでに目を瞑つて掴んだ腕をパツと  
離す

「おのれ舐めやがってえ!!」

とさつきより素早くなつた攻撃が降りかかる

右左右右振り下ろし左右左右左右振り上げ

見聞色を頼りにスイスイスイツと避けて見せると

右右左右左振り下ろし「ホットボーリングスペシャル!!」ひだ…  
あつつう!!!

いきなりの熱さに思わず攻撃を喰らい吹っ飛ばされた。

目を開けると相手の右腕が真っ赤に赤熱しており

「ぐえはははははっ!!見たか！余裕こいて居眠りなんぞするからだあ

！」

「あんたカチカチの實の能力者だろうが！何だその腕!？」

予想外の攻撃に思わず尋ねると

「ふん！教えてやろう、鋼鉄と言ったろう。」

溶けた鋼鉄の状態に出来ないとは言っていないだろお!!」

親切にも教えてくれた、教えてくれたと同時に殴りかかってきたが。

迂闊に当たるわけには行かなくなったので

「長距離拳砲、四連斉射！からの嵐脚・辻風！」

とりあえず飛ぶ拳砲と十字状の飛ぶ斬撃で距離をとっての戦闘に切り替える

「ぐつ、変な攻撃だがそんなへなちよこな攻撃なぞ効かんわあ！」

と効果はない模様、ならばと遠距離拳砲を撃ちながら少しづつフォームを変える

イメージするのは嵐脚を撃つ時の動き、何回か撃ったところでカチリ

とイメージと動きが一致した手応えがあった。

「おっ・・・らあ!!」

ザンツ!!

身体はやはり斬れなかったが相手の服に袈裟懸けの切れ目が入った事から腕による嵐脚・・・脚じゃないからなんだろう、鎌鼬？の成功を確信する。

やはり素早くやるのが重要らしく今であれば刀でも出来そうな気がするので腰に差していた刀を抜き大上段に構える

「俺様に攻撃は効かんといっただろお!!」

ドスドスドスッ!

とこつちに走ってくるベアキングに対して

鉄塊にて重さを増し振り下ろすスピードは最速を構えは大上段よ

りさらには後ろに振りかぶり

「極大斬撃…嵐一閃!!」

音を超えて振り下ろし

そしてバキイツ！と派手な音を立てて刀が粉々に折れドゴオオオオン！とばかりに辺り一面が”全て”吹き飛んだ。

…怒られないよねこれ、と想定以上の威力に我ながらドン引きしつつ、壊れた刀と抉られた地形を見てどうでもいい事を考える。

幸い拠点から少し離れた場所で素振りしていたため寝床や食糧は無事なようだ。

そしていつのまにかバンジージャックとビューティークイーンは姿を消しており周りの手下達も引き上げていた。

肝心なベアキングはうつ伏せで倒れたままピクリとも動かない様子で棍を手にソロソロと近づきツンツンとつついてみるが反応は無し。

「なんまんだぶなんまんだぶ、化けて出ないでくれ」

と、手を合わせておく。この世界死体が動いたりするから怖いんだよ。

流星に死体をそのままにしとくわけにもいかないので巨体を引きずりながら丁度いい拓けた場所があったのでそこに寝かす。

あ、ゴツイ拳銃もってる。貰ったところ。

スコップ…が無いのでさっきの復習がてら

「鎌鼬！連装鎌鼬！四連装鎌鼬！八連装鎌鼬！…」

とだんだん撃つ数を増やしつつ数撃ちタイプの技だなこりゃ、などと思いつつ地面に向かって撃つ。

結構な深さが掘れたのでベアキングの骸を落とすと上から土をかける

埋めたら浜辺にあった大岩を上置いて目を瞑り両手を合わせておく。

そして帰り際そこらに落ちてる兵隊の武器を集めながら寝床に帰りいざ食事でも取ろうかとしたところで気づく。

食料は密林の中に色々と果物が実っていたので色々ととってきて小積んでおいたが、そこに紛れていたのは渦巻き模様を持ち毒々しい色とすつごく見覚えのある特徴を持った果実。

悪魔の実がその中に鎮座していたのだ。

「は？・なんでここに悪魔の実が…」

もちろん果物を集めてきた時にこんな果実は無かった、なにこれホラー!?と考えるもハタと気づく。

ベアキングが亡くなったからか？

原作でも毒ガスのオオサンショウウオ（ウーパールーパー）が死んだ時近くの林檎が変質してたよな…

と言う事は能力者が亡くなった時近くにある果物に変化する？

いや、凶鑑があるっていつてたしそれぞれの能力に対応した果物があつて今回の場合カチカチの実に対応した形の果物がたまたま集めた中であつた為に今ここに悪魔の実があるわけか…、まああくまで推論だが。

若しくはたまたま紛れ込んだまた別の実つて可能性があるがそれは置いておくとして考えるのは一つ。

この（推定）カチカチの実を食べるか、食べないかだ。

食べた場合のメリットは能力者になるという事だ。どんな悪魔の実も使い方次第では弱くなる事はない、と誰かが原作で言つてた気がする。

ひよつとしたら上層部からの覚えも良くなるかもしれないし。

デメリットは弱点が増える事か、泳げなくなるし海楼石に弱くなつてしまう、上には覚えが良くなる、ではなくて警戒させるつて可能性もあるしなあ…

そしたら”例の計画”ができない可能性もあるわけで

うーむ…

よし決めた！確か腐らない筈だから形を覚えておいて後で凶鑑借りてから確認しよう。

それまでどっか埋めておいて海軍で必要な技術を学んでから食べるようにしよう！

そうと決めれば決心が鈍らないうちに何か箱みたいなものを…と  
考えているとドオン！ドオン！と砲撃の音が聞こえてきたのであつ  
た…

## 鍛錬海兵 ドンクリークさん

慌てて穴蔵から飛び出すと砲撃を仕掛けてきたのは一隻の船。

ひるがえる旗は熊をモチーフとした海賊旗……ってベアキングの船か

さつき逃げた仲間達だろうなあ、そのまま逃げてくれれば良かったのになどと思いながら対応方針を考える。

向かってくる事だし月歩で飛び乗る？いや、そのまま船ごと吹っ飛ばそうかしら、丁度よくさつき拾った武器もある事だし……

そう思い刀を大上段に振りかぶったところではたと気づく。

さつきは壊れてしまった事だし今度は壊さないように、そう思いながらやんわり振ると

ブオン!!

空を斬る音だけが響いた。

「……あら？」

スピードが足らなかつた様だ、もう一度!

バキヤツ!

「ええ……」

斬撃は飛んだが刀は壊れてしまった、しかも狙いが逸れた様で目標はこちらに対し元気に砲撃を続けてきおる。

仕方がないので次の刀を手にして……曲がりくねった変な刀身だなあ

振る、飛ぶ、壊れる

振る、飛ばない

振る、飛ぶ、折れる

振る、飛ばない

振る、飛ばない

振る、飛ぶ、粉々になる、海賊船も真つ二つに



結果、斬撃が飛んで壊れるか壊れないが斬撃が飛ばないかの二つに一つという結果が出た。

そんなイマイチな結果に

極端だなあおい！やっぱ刀はダメだな！（本人の所為である）

と、武器のせいにしておく。

取り敢えず遠目で見ると真つ二つになったベアキングの船からは乗組員達が泳いで逃げていくのが見えたので明日になったらちよつと行ってみて使えるものがあつたら回収しようなどと思いつつ穴蔵に帰った。

そしてなんだかんだで数ヶ月が過ぎた頃

そこには腰ミノ一丁でジャングルを駆け回るゴリラの姿が！

げふん、元気に密林を駆け巡るクリークの姿があつた。

あれからクリークは取り敢えず使えそうな物を回収して拠点を整え

悪魔の実はベアキング海賊船の中に丁度いい宝箱があつたのでその中に入れて地面に埋め

海兵服を汚さない様に畳んで武器や防具と一緒に仕舞うと島の猛獣達に片っ端から挑みかかりはじめた。

武器や鎧は使わずに己の身一つで徐々に、本当に徐々に感覚を研ぎ澄ませながら動きを洗練させ、見聞色を文字通り見て、聞きながら感覚を広げつつ立ち向かい

沖の方を眺めて髑髏を掲げる船があれば斬撃や打撃を飛ばす練習がてら船を真つ二つにするか大穴を開けるかして立ち往生させてから必要そうな物資を回収し

と鍛錬がてら海賊の撃退をしながら自由に生きていた。

そんな折にようやく、本当にようやく船首に犬を象つた海軍旗を掲げた船が島にやってきた

そうして数ヶ月ぶりに見覚えのあるその船を見て

「……はっ!!」

クリークはようやく正気に戻ったようであった。  
数ヶ月ぶりに寄った密林しか無いような小島。

そこに降り立ったガープは呆れたものを見るような目で

「おぬし……この数ヶ月何しておったのじゃ……？」

と浜辺に大量にあった”それら”を指差した

そこに山と積んであったのはどれも折れたり曲がったり持ち手しかなかったり、と大量の壊れた武器と所々原型を残しながらもその用途を満たせそうに無い大量の船の残骸であった。

しかも船の残骸はある程度雨風をしのげるように組み合わされ天辺には複数の海賊旗が掲げられていた。

「技の練習と治安維持活動デス……」

それらからクリークは目をそらしながら答えていた。

密林生活でテンションが上がり過ぎて色々とやり過ぎてしまったようである、海兵がこんな海賊旗を掲げた小屋？に住むわけがないだろう。

住んでたけど

しかし……とガープは呟く

「前と比べて海賊が増えてきたのう、これからは更に忙しくなるぞクリークよ。」

まあお主の事じゃから直ぐに上に昇って来るじやろう、ボガードよ  
ここの旗で懸賞金がかかっておるのはわかるかの？」

「この26枚の海賊旗のうち懸賞金がかかっているのは”狩鋏海賊団”、”カラタキア海賊団”、”酔鳥海賊団”、”トランプ海賊団”、”トルデレーテ海賊団”の五つ、トランプ海賊団に至っては確か船長が悪魔の実の能力者だったかと」

うへえ、ボガードさん海賊全部覚えてんのかよ

「うむ、重畳じゃな。」

能力者であっても一般的な強さなら仕留めれるくらいじゃ、本部に通信をいれて今回の成果でクリークの昇進を打診してみよう、クリー

クよ昇進祝いに何か欲しいものはあるかの？」

「やったぜ昇進、でも決まっていないうちから昇進祝いは早いような気もするけど…まあ貰えるんなら貰ったところ」

「ではちゅーじょー殿、悪魔の実に頼らない戦闘術を持つ海軍の人間を教えてください！」

「そう。またとない機会であるので是非ともガープの拳骨や原作では海王類を両断していたモモンガ中將の斬術などを知っておきたい。」

「例え悪魔の実の能力者でなくても有用な技を持つてる海兵は多く存在する」

「ならば今のうちに戦闘力の底上げとしてそれらを習得できるのならしておきたいし、会得できなくても知っておけば何かの役に立つかもしれないからだ。」

「む？そんなもので良いのか？ならば後で何かに書いてやろう、ついでに儂の技も教えてやろうかの」

「と、ガープはそう言って残骸の山の中に転がっていた鉄球を掴むと「これをじゃな…こうじゃ!!」

と浜辺から見える小高い丘に向かって投げつけた。

ドゴオオオオン!!!!

丘が吹っ飛んだ

ええ…

「その名も拳骨隕石(ゲンコツメテオ)じゃ、ただ投げるだけじゃないぞい？掴んで、振り上げ、投げる途中、手を離す瞬間、と色々コツがあつてじゃな。ほれ、やってみい」

「そう言つて砲弾を渡された」

「一回見ただけでやってみろと言われても…」

「などと思ひながらとりあえず」嵐一閃の要領で思い切り振りかぶり

「りゃあっ!!!」

バアンツ!!

飛んで行く前に砲弾が粉々になった。

「何故そうなるんじや!!」  
ガスッ!

ついでに頭も叩かれた、俺が知りたい。

## 海軍中尉 ドンクリークさん

密林脱出から数ヶ月。

あれからボガード さんの指導の下、海図の読み方や東の海の島の名前や地理(所々気になるところもあった)、操舵や帆の張り方など操船に関する技術、刀の使い方に加えて時たま「訓練じゃあ!」とガープ中將のお言葉と共にポンポン飛ばされながらである。

そして拳骨隕石は習得出来なかった。何故かというところ

「何故そつちに飛ばすんじゃない! 違う! 足元じゃない! 今度は上すぎじゃ!!」

物を投げるのが下手だったからである。

正確には投げて目標に当てるのがヘツタクソ、コントロールがダメだったのである。

密林での海賊船シューティングの時は練度不足かと思つてたけどコントロール能力がボロボロとは。

…近距離(数十メートルくらい)なら当てれるし! そうそう遠距離戦にはならない!

そしてそんな風に訓練に並行して将来の仲間探しであるが…

結構あちこち回つたのにギンもパールも見つかんない…なんでえ…? (ギン一歳、パール産まれていない)

あ、でも中尉に昇進しました。やったね!

そして今日も今日とて上陸した島にてパトロールついでに仲間候補を探すのだった。

とある海兵から見た彼

「え? クリーク中尉ですか?」

ああ、彼なら向こうの砂浜に素振りをしにいきましたよ、え? なんてわざわざ砂浜につて?

あー、中尉の武器つてちよつと特殊なんですよ。特殊っていうか重いだけなんですけど。

僕達下つ端が数十人がかりで運んだんですけど後で聞いたら5  
つて言われたんですよ、びつくりしますよね。

そのせいかなんか素振りしていると衝撃波が出て危ないとか言っ  
ても離れたとこでやってるんですよ。

え？人柄ですか？

いい人だと思いますよ？

顔や態度のせいで誤解されやすいかもしれませんと一緒に船に  
乗っているとわかりますよ、僕達下つ端に気を使ってくれているのが何と  
なくわかりますし。

この前なんか泣いてる迷子の子供を一生懸命あやしてましたよ？  
結局その子は中尉の顔が怖くて泣いてたんですけど。

あの人、人との接し方が不器用なだけなんですよね。」

ある海賊から見た彼

「ああ!?!あの熊みたいな大男か!今でも夢に見るぜ、あの野郎…海を  
走ってきやがった!

ありや偶々海軍の船と遭遇した時だ、海軍艦の方から水柱が連続で  
立ったからてつきり撃ってきやがったと思ったわけよ。

ところが水柱が段々近づいてきたと思ったら先頭にいたのは鈍色  
の胴鎧を纏った大男だったんだよ!

んで奴あ船に飛び乗ってくると思口一番

”この船の頭はどいつだ!”

って宣いやがった。そしたら船長が

”海を走ってくるなんてどんな悪魔の实の能力者か知らんが海兵  
がたつた一人で乗り込んできてタダで済むと思うなよ!”

って言ったから、なんだ能力者だからあんなおかしなことできたの  
かってみんな思ったんだよ、そしたらあいつ

”悪魔の实い?何の事か知らんが脚が沈む前に逆の脚出してそれ  
を繰り返せば走れるのは普通だろうが!!”

って巫山戯た事ぬかしたんだぞ?

それからは酷かった、船長の号令で一斉にかかったんだが野郎が手  
に持っていた鈍器が振るわれるたびに仲間たちが吹っ飛ばされてん

だよ

でかいから動きは鈍いだろうと一齐に銃撃しても身に纏った鈍色の鎧に弾き返され、挙げ句の果てには拳で甲板から船底にかけて大穴あけやがった。

あんな化け物が海軍にいるなんて聞いてねえよ！俺もなかなか強いつもりだったがこれからは真面目に働くさ……」

ある海兵中尉の話

「あ？話だあ？何だあんた……え？少将さん？

……何でありましようかしよーしよー殿！

はっ！自己鍛錬を行なっていたところであります！

え？持ってみたい……でありますか？本当に重いでありますよ？

とととっ！だから言ったでありますじゃないですか、5tでありますよ？

え？冗談だと思ってた？いやはや世の中には船持ち上げたりする化け物がいるんですから自分なんて大したもんじゃないでありますよ。

昇進でありますか？今の中尉になるまでに8年かかっているでありますからなー、ゆっくりと構えてるでありますよ」

そして場所は移り変わり

「以上が彼の評価です。

他にも”新しく色々な技術を習得しようとする向上心がある”、”たまたまによくわからない技を試そうとする”、”トレーニングルームのサンドバッグをよく再起不能にしている”、”よく四人で食事しているところを見かける”などの意見もあります。

戦闘力においては悪魔の実の能力こそありませんが六式、覇気を習得し既に将官クラスに匹敵する能力を持ちますし人柄も実際のところ問題無いでしょう。

若干行動が荒いところもあるようですが私的には彼の昇進は賛成ですが皆さん如何でしょうか？」

所変わってここはマリンフォード海軍本部にある会議室の一つ。

そこでは中将の地位についているケタガーリ中将の司会の元で上

級人事についての可否を決める”海軍佐官人次会”が行われていた。司会を務めるケタガーリ中將の意見にザワザワとお互い確認しあうような動きを見せ

「因みに今回の佐官昇進の申請には”ゼファー軍教官”、”ガープ中將”、それから准將昇進が確定している例の”三大佐”などからも推薦が来ております、では皆さんクリーク中尉の佐官昇進に賛成の方は挙手を願います」

ケタガーリ中將がそう告げるときが止み多数の手が上がった。

「ではクリーク中尉はマリンスフォードに帰還次第大尉に昇進、佐官教育を終えた後に少佐への任官と致します。

では次に佐官昇進に当たって彼のコードを決めたいと思います。

因みに参考程度に現在囁かれているのは

海軍であれば”熊殿”、”鎧熊”、”ゴリーク”、”身体能力おかしい人”、”厄介な武装案提出マン”など。

海賊側だと”鉄熊”、”海熊”、”鉄人”、”熊男”、”ゴリラ男”、”鉄でできてんのかあのでかいの!”、”生身で大砲効かない奴”などで

寮近辺の一般人からは”熊さん”、”クリークさん”、”顔のこえーにいちやん”、”でけー海兵さん”、”バナナとか好きそう”などと呼ばれているようです」

「熊が関わる二つ名が多いな」

「ゴリラもだな」

「色々候補はあるだろう仲の良い”三大佐”に合わせて”銀熊”や”鉄熊”などはどうだ?」

「…いや、それなら鎧の色や武器なんかからとって”鈍熊”なんかどうだろう」

という一人の意見にざわざわと場がざわつき

「いいですねそれ、巨体故に鈍そうな見た目も相まって海賊なんかは侮ってくれそうですしね。



ではクリーク暫定佐官のコードは”鈍熊(どんぐま)”で宜しいですか？賛成の方は拳手を願います…はいでは賛成多数によりクリーク現中尉の佐官昇進とコードの決定を終了します、では次の議題に入ります…」

そしてほぼほぼ一年間過ごした東の海を離れ帰ってきたマリルフォードにて待っていたのは一通の辞令を持った人の事をおいてさっさと出世した同期(十後輩)の三人であった。

怪訝に思いつつ辞令を受け取ると

大尉に昇進し更に佐官教育を受けるようにとの辞令十コードの拝命であった

「ぴったりじゃの”鈍熊”」

「鈍熊…名は体を表すとはこの事だねえ」

「”ゴリーク”とか”ゴリラ男”じゃなくてよかったじゃないの、センパイ？」

どいつもこいつも好き勝手言いやがって！あとクザン！確かにあなたは後輩だけとお前のセンパイって言い方はとってつけたようにしか聞こえないんだよ！

こうして佐官教育を終え新たに海軍に有望な少佐が就任した。

”鈍熊” クリーク

掲げる正義は

”守るための正義”

クリーク19歳の時の出来事であった。

## 海軍少佐 ドンクリークさん

東の海より戻り半年間の佐官教育を終えやっところさ少佐に昇進しました。

9年間掛かったけども。他の三人のお化けはほぼ同じ年数で既に少将に昇進してるのに。

まあ？あの三人は悪魔の実の能力者だし？しかもロギア系だから馬鹿みたいな攻撃力と攻撃範囲持つてる戦略兵器みtainなもんだし？俺みtainな一般人とは違うんですよ。けっ

しかしなんだかんだでよくわからないうちに転生してから色々とかむしやらにやっってきたけどあつという間だったなあ…

そうして昔を思い出していると

「あれえ？センパイじゃないの。そんな遠い目してどうかしたの？」

出たな氷お化け。

「おーおー、海軍本部少将様が俺みtainな一般人少佐に何の御用ですか」

「僻みじゃない…センパイだってついこの前少佐になったじゃないの。」

「毎度思うけどあんたの先輩って呼び方ノリで呼んでるだけだろ、確かに海軍に入ったのは俺の方が早かったけど年はあんたの方が5歳上だろ」

「やだなあ、センパイはセンパイじゃない、年は関係ないでしょ

それにおんなじ先生の元で学んだ仲だしそこまで堅苦しいのもねえ？」

そう言って手に持った瓶牛乳を飲みながらそう言った

まあいいんだけどね…

「で、クザンこそどうした？俺は今日非番だけどもお前は違うだろ？」  
「いやあ、海賊の護送に行く途中でセンパイを見かけたもんだからねえ。」

センパイこそ非番の日にこんな本部の近くで何やってんの？」

「いや、俺は大した用事じゃねーよ、サカズキのヤローの奥さんに

ちよつと用事があつてな」

と、手にしたバッグを掲げてみせる

そうなのだ、マグマお化けには奥さんがいるのである

あの顔が怖いマグマお化けのくせに勿体無いほどの美人の奥さんである。

偶に酔い潰れたサカズキを家に連れて帰る縁で知り合つたのだがとても料理が美味しいのだ。

「あー、美人だもんねえ」

偶に四人でサカズキの家に集まる事もあり当然クザンも知つてい

る  
「ちげえ！料理教えてもらいに行くんだよ！」

「ああ、センパイ料理苦手だもんね。」

あ、いつだつたかの炒り卵は美味かつたですよ」

「卵焼きだよこんちくしょう！もういい、知らん！」

「じゃあ今度また食べさせてよ、センパイ？」

後ろからそう声かけしてくるクザンと別れ当初の目的通りサカズキの家に向かう。

すると途中で

「あらあらあらクリークさん、早いですね」

サカズキの奥さん、サクラさんの姿があつた。

「あ、どもつす。」

今回は無理言つたのにありがとうございます」

「いいのよお、とりあえず今日は簡単なものにしませうか

あの人辛いものとか好きだからお酒に合うちよつと辛いおつまみでも作ろうかしら？」

「あ、この前鷹の爪和えたのをおかずにご飯食べてましたよ？」

とりあえず体に悪そうな行動を、チクつておく

「あらあらあら、それは後でお説教ねえ？」

そんな話をしていると

「どけっ！」

「なんだあいつ！」

「銃持ってるぞ！近づくな！」

にわかに前方が騒がしくなり

「そこをどけえ！」

銃を片手に一人の男がこちらに走ってきた。

「サクラさん！逃げてくださいっ！」

咄嗟にサクラさんに背を向けさせ男の方に駆け寄ろうとする男はこちらに発砲した。

当たらねえよ！そう思つて男の手首を掴もうとしたところで

「ギャアツ！！」悲鳴と何かが倒れる音

しまった！素早く男を蹴り飛ばして気絶させ「誰か！医療班を呼べ！急いでだ！！あと担架もだ！」そう周りに怒鳴つてサクラさんの元に戻る。

痛みによる気絶か意識はないようだった。

自分がいながらにして巻き込んでしまった事に不甲斐ない思いながら医療班が来るまでの応急処置ぐらいならできるだろう、と応急治療のセットをいつも持っている鞆から取り出して素早く傷口を確認、背を向けていたためか腰の辺りに当たったようである。

弾の摘出はできないので消毒だけでもと、治療を続けていると

「クリーク！！」「センパイ！！」とサカズキとクザンがこちらに駆け寄ってきた。

そして場所は変わって海軍病院。

「すまんサカズキ：俺がその場に居ながらみすみす撃たせてしまった」

幸い一命はとりとめたものの撃たれた場所が悪く軍医からは「この先歩く事ができるかどうかわからない」と言われてしまった。

そうだ、自分のせいだ。

犯人の捕縛では無くあの時俺は周囲を守る事を優先すべきだったのだ。

俺ならば例え撃たれたとしても銃くらいなら簡単に弾く。  
だが周りはそうじゃない、海軍本部のお膝元とは言え居住区である。

サカズキの奥さんをはじめあの辺りにいる人間は普通の一般市民なのである、当然銃弾なんかくらったらひとたまりもない。

「おんしのせいじゃなか、わしが…わしが甘っちょろい事考えたからじゃ…」

あの時サカズキとクザンは支部からの報告書と捕縛した賞金首の護送の為、近くに居たそうだと。

そのうち捕縛した一人の賞金首がサカズキに”二度と悪い事はしません！許して下さい！”と土下座して頼み込んだそうだと。

サカズキも少し哀れに思ったのかとあえさず辛かろうと思つて拘束を少しだけ緩めてやったのだ。

昔の自分だったらそんな事はしなかつただろう。

しかしクリークや他の人間の話を聞いて海賊もどうしようもない奴等ばかりでは無い、そう思い出した矢先だったからである。

何かあつても自分なら直ぐに対処できると言う自負、所詮相手は小物との驕り、能力者としての油断があつたのこともかもしれない。

一瞬の間隙で近くに居た支部の海兵を盾にされるとその海賊は海兵から銃を奪い逃走したのだ。

直ぐに後を追うべく指示を出すも支部から来た海兵はおろおろするばかりで自分が追いかけた時には自分の愛する妻が撃たれた後だったのだ。

「海賊に慈悲は無用じゃ…クリーク、おんしの話もわかる。」

じゃけども今回はわしが情けをかけたけえこうなつたんじゃ、じゃから二度と油断はせん！やはり悪は潰さにやならん！」

「サカズキさん、病院内でマグマ化せんでください。」

センパイもあんまし自分を責めないで下さいよ…」

激情の為かサカズキの右手は握り締められ溶岩になりかけていた。

それからのサカズキは精力的に動いた。

サカズキだけではなくクザンも、自分も、そしてボルサリーノも。

あれから何となく気まずくて疎遠になってしまったが四人共が、それぞれにである。

四人共頻繁に出撃し特にサカズキはまるで昔に戻ったかの如く多くの海賊船を沈め海賊を捕縛、時には殲滅し寝る間も惜しんで彼方此方と何かに駆られたように奔走していた。

そして季節は過ぎ年が明けた頃

『海賊王ゴールドロジャー捕縛!!』

そのニュースが世界を駆け巡ったのだった。

海軍は安堵した。

ようやく、ようやくこの海賊の時代も終わる。

捕縛ではなく自首ではあるが、この海賊が蔓延る時代の筆頭を処刑してしまえばこの馬鹿騒ぎも沈静化するだろうという判断だった。

そのニュースを受け思った

違う、これで終わるんじゃない、これから始まってしまおうんだ。

全ては…全てはこれからなんだ。

ロジャーの逮捕を受け安堵する海軍、少なくなる海賊達

しかしこれからが激動の時代である。

海軍本部中佐 ” 鈍熊 ” クリーク 20歳の事である。

## 海軍中佐 ドンクリーク

『海賊王ゴールドロジジャー捕縛』

長きに渡り偉大なる海を航海し制覇した海賊の捕縛は海軍海賊関  
わらずあらゆるところに衝撃を与えた。

そして海軍、海賊共にこれから激動の時代を迎える事になる。

そう考えて頭を抱えた。

もうそんな時期かあ…。

確か原作から20年前？（22年前）となるとこれから20年間が  
忙しくなるよなあ。

原作主人公を含むメインメンバー達の誕生にそれらに関わる事件  
等、海軍なら関わりそうなのはオハラの大スターコール、マリージョ  
ア襲撃あと魚人島関連もだし、あー、ドフラミンゴ関連もだよなあー  
”例の計画”についてもちよつと本格的に計画立てないといけな  
いしちよつと一年ぐらいマリンスフォード離れてようかしら…

そういう風に色々考えながら歩いていると

「おうクリーク・丁度良いお前も儂らと一緒にこい！」

ガープ中将に捕まった。

あ、嫌な予感がする

話を聞くと案の定であった。センゴク大将を筆頭にガープ中将以  
下数十名での海賊王ゴールドロジジャーのローグタウンまでの護送  
任務であった。

いやー！確か金獅子来るんじゃないやなかつたつけ!?あと他の勢力も押  
し寄せてきそうじゃないですかやだー、納得いかない連中が山と押し  
寄せてきそうだし貧乏くじじゃんこれ！

…いやここで手柄を上げておけば後々有利に働くか？

幸いセンゴク&ガープの二枚看板がいるから対金獅子の戦闘は請

け負ってくれるだろう、となると問題となるのは金獅子以外の戦力だが…

よし！

「ガープちゅーじょー殿！ご一緒するのは構わないですが一つだけお願いがあります！」

ロジャーの護送について人員の招集を請け負ったので取り敢えず気心の知れている部下であるクリークを加えようとしたところそんな事を言われた。

「ん？なんじゃ？」

「はっ！今回の任務かなり激戦が予想されます！」試作兵装群”の使用許可を頂きたいであります!!」

ふーむ、確かにこの護送任務、対象が対象だけにその可能性は十分にありうるのう。しかし…

”アレ”の使用許可のう…」

”試作兵装群”、いわばクリーク中佐の本気武装である。

クリーク中佐の発案と科学班の悪ノリにより開発された複数の武装でありそれらを纏ったクリーク中佐はいわば”歩く武器庫”と言つても過言ではない。

一度だけ試運転としてその状態で出撃させたことがあるが、中佐と儂とセンゴクの奴との話し合いで流石に過剰だと判断して運用には大将クラスの承認が必要という事にしたのじゃが…

「わかった、何が起るかわからんしセンゴクに儂から掛け合ってみよう。ロジャーの処刑については十日後、ローグタウンまでは六日程じゃから明後日には出発となるでな。それまでに準備をしておくよう、では頼んだぞ！」

ガープはそう言い残すと大将執務室へと去っていった。

よし、これで方が一にも生き残れるだろう。

流石にシキ相手だと持たないかも知れないがそれ以外であれば問



題無いはずだ。

確か護送の途中に襲ってくるんだったか？（違う）

何隻かの船も持ってた筈だしきつと大勢で来るんだろう。（一人で来る）

具体的にいつ来るか覚えてたらよかったんだが：（処刑の一週間前）

まあ、覚えてないから仕方ないしきつさと準備を済ませてしまおうかね：

そして数日後、それはロジャー処刑の一週間前。

折しも天候は悪く雨が降っていた。

出航の為にマリンフォード海岸広場にてこの任務の為に招集されて俺の部下として入れられた人員。

それと共に”試作兵装群”と呼称される足元に届くようなマントと肩当て付きの鎧を装備し手には愛用の超重量の棍を、腰には刀と厚手の剣を4本装備してセンゴク大将、ガープ中将の到着を待っていた時の事だった。

ウーツ鋼なんて軽々しく言ったから金ピカで目立つんだよなあこの装備：

そんな割とどうでもいい事を考えていた時の事だった。

最初に攻撃を受けたのは船に物資を搬入する作業を指示していた少尉、そして斬りつけた後に返す刀でもう一人。

悲鳴が上がり俺がそちらを見ると両の手に持った刀で更に二人を斬りつける男。

金色のボサボサになった長髪に長い羽織、口には葉巻を咥え何より特徴的なのは頭に刺さった船の舵輪

なんで：なんでここに”シキ”がいるんだ!!

原作ではロジャーとも渡り合い白ひげや海賊王に並ぶ伝説の海賊、”金獅子”シキの姿がそこにあった。

混乱の間も無く周りの人間を次々に斬りつけるシキ。  
くそつ、船を襲撃するんじゃないのかよ！

「金獅子い！なんでてめえがここにいやがる!!」

思わず声を上げるとこちらを睨みつけ

「うるせえよ…、何処のどいつか知らんがロジャーを連れてこい…」

ゾツとするような冷たい声と激情に駆られた強い視線を放った

思わず一步退くもシキの凶刃は止まらず更に他の海兵達を巻き込み被害範囲は拡大する。

シキの仲間は見当たらない、一人で殴り込みに来たのか!

だったら…

「全員一旦退けえ!!俺が相手して時間を稼ぐ!」

早くガープさんとセンゴクさんを連れて来い!!!」

大音声で周りに告げ愛用の棍で殴りかかった。

「中佐!!」

「中佐こそ逃げて下さい!」

周りの海兵達がそう言うが

「馬鹿野郎！俺が時間を稼ぐって言うてるだろうが！俺の戦闘の邪魔になるって言うてんだ!!さっさと行けえ!!」

そして振り上げた棍を相手の脳天に叩き込む…が

「誰だか知らんが…中佐如きがお呼びじゃねえんだよ!!」

軽く腕を振るだけで弾き返された

っ!!軽く弾きやがって、流石は伝説の海賊ってかちくしょう!

だがそれだけじゃねえぞ！喰らえ!!

クリークが纏う”試作兵装群”

クリークが原作クリークの装備を参考に案を提出しそれに悪ノリした科学班達と一緒に作成した鎧型の装備である。

高い防御力を持ち鎧としての機能に加えてあちこちにありとあらゆる武装が仕込まれたソレは、流石に馬鹿みみたいな威力と攻撃範囲をもつロギア系には及ばないながらも並みの海賊相手では文字通りの過剰火力を誇り、”対船”対集団”であっても押し負けない程の火力を持つ。

これを装備した状態こそクリークの本気モードである。

そして鎧のあちこちからズガガガガッ!! 一人二人なら簡単に挽肉に変えてしまえる様な弾幕が展開された。

さて、倒せるとは思ってねえが何とか二人が来るまでに持ちこたえられれば…!

くっそ、どうしてだ。

どうしてここで出て来やがる! 俺の思い違いのせいか? だがこれ以上は…これ以上はやらせねえぞ!!

「金獅子いいいいいいっ!!!」

## 対金獅子 鈍熊クリーク

秒間50発の仕込みガトリングの銃撃を受けたや金獅子だったが  
…

「ちっ、だよなあ…やっぱり…」

そのまま平然とした姿のシキに思わずぼやく。

この世界の奴等は一定クラスを超えると普通の銃による攻撃が効果を出さないから嫌いだ…

お返しとばかりに振るわれたのは二本の刃。

四方八方からの軌跡を描き迫るソレは、

「っ！一応この鎧ウーツ鋼で出来てんだけど…なあ!!」

軽々とウーツ鋼で出来た鎧の表面を抉る。

「それが何だっ！おれの桜十と木枯の前にそんな物は無駄だっ!!」

そしてそれに加えて厄介な点がある、今も脚を払うべく振るった棍があらぬ方向に弾かれた。

そう、この男が持つ能力である”物を無重力状態にする”フワフワの実際の能力。

「生物以外を操るってんなら！」

両腕を構え、手首から火炎を放つ。

「無駄だあっ!!」

勿論これで効くとは思ってないので

「知ってるよ！ついでにこれもくらっつけ!!」

両の手に4つずつ、計8発の炸裂弾を投げつける。目眩しくらいになっけてくれりやあ上等！くらいにしか考えていない。

「効かぬと言ってるだろうっ!!引っ込んでやがれっ!!」

このクラスの相手に攻撃を途切れさせたらダメな事くらいわかるのでそのまま拳打を放つ。

「そういうわけにも行かねえんだよ！これでどうだっ、特殊合金製の拳だあ!!」

原作ではダイヤモンドだったが無駄にそんなモンを使うわけにはいかないので複数の金属を掛け合わせた特殊合金仕様になっている。

1発、2発、4発、8発、16発、32は…ガシツ!!  
が、その鉄をも砕く連打はシキにより受け止められた。

「少しはやるようだ、だが…そんなオモチャではなあ!!」

鈍く光る両刃の二本の剣が迫りそれをからくも防弾、防刃の効果を  
持つマントで受け止めるもシキが独特の手の動きを見せて地面が盛  
り上がり

”獅子威し・地巻きい!!”

四方八方から地面で作られた獅子が襲いかかってきた。

「ぐっ…まだまだあつ!!」

両腕を振るい炸裂弾をばら撒く。

序でに肩当ての裏からジャラリと取り出されたのは握り拳程の大  
きさの鉄球を持った鎖付き鉄球。

徐々にその回転速度を上げつつ懐から取り出したガスマスクを装  
着し十分な加速を得たソレを炸裂弾により脆くなった獅子の一部に  
叩きつけ薙ぎ払う。

そしてシキへの射線を開き右側の肩当てを構えて放つのは、

「喰らつとけやあ!!麻痺ガス弾”MH3”!!」

強力な麻痺効果を持つ麻痺ガス弾である。流石に毒ガスは使えん  
のでな。

「ついでにこいつとこいつもな!」

反対側の肩当てを構えて大型炸裂弾に合わせて放たれるのは人の  
腕くらいの太さがあるニードルガン。

「おしーこれなら…」

そう思ったのも束の間

「なかなか…名前を聞いておこう、後で墓に刻んでやるぞ?」

シキの姿には所々焦げているもの目立ったダメージは見られな  
い。

「うえ…どころどころボロボロだけどあんまダメージ無しって  
ちよーつと伝説とやら、遠すぎない?」

「ジハハハハ、嬉しい事いつてくれるじゃねえか…それよりも海兵テ  
メエの名は?」

「オレは…オレの名はクリーク！ドン・クリークだあ!!」

麻痺ガスも大型炸裂弾も鋼鉄製のニードルも全て打ち払われた、流石伝説クラス…と、その高い戦闘力に弱気になりそうになるも叫び自らの心を奮起させ両の肩当てを合体させる。

くっそ、麻痺ガスなら効果あると思っただが…

仕込み武器は殆ど使い切った、鎧はあちこち抉られたがまだ大丈夫そうだな、マントは…後何回か攻撃受けたらダメになりそうだし武器に関しては4本の剣、それにこの”とっておき”と棍くらいか…

「さて、テメエの奮闘を認めてこちらも少し本気を出させて貰おうか…」

「上等っ！なんとか耐えてやろうじゃないかよ！」

両肩の肩当てを合体させて柄を引き出して構えるのはクリークにとつてとつておきにして最大火力を誇る槍、”大戦槍”。

重さは8tを誇り素材からこだわって作られた仕込み槍。

そしてその真骨頂は…

あらかじめ触れておいたのか両側から迫ってくる石畳を弾き飛ばすと同時に”爆発”させる。

接触させた物を爆発させる力を持つ機械槍である。

シキは大型のソレを先程の棍と同じ様に手で触れようとするも

「させるかあ！触れた物を浮かせるんなら触れさせなけりやあいいんだらうが!!」

柄を捻り表面に爆発を発生させて触れようとする手を弾き返し、そこから更に地面に叩きつけ大爆発をおこして煙幕を作り出しそこから振り上げて全力でもって叩きこむ。

「叩きつける力が強けりや強い程爆発力が増す”大戦槍”だ！」

今までより更に大きい爆発が起こり二本の剣で攻撃を受け止めたシキを吹き飛ばした。

「見たかあ！オレを舐めるなよ金獅子い!!」

「ああ…そうだな、侮って悪かった。だがさつきも言ったぞ？おれも少し本気で相手してやると!!」

「まじかよおい…」

シキが両手を振り上げると空に浮かび上がるのは停泊していた海軍艦、そしてそのままその大質量がシキが手を動かすと同時に頭上に降ってきた。

「くっそー嵐い…一閃っ!!」

腰にさしていた剣を振るいその大質量を斬り払うも当然の如く振るった剣は威力に耐えきれず砕け散った。

更にシキはこいつもついでと言わんばかりに

「振り落とされるう!!」

「おい!押すな!」

「な、なんだ!?船が浮かんで…!」

「全員海に飛び込めえ!!」

「誰かあ!誰か助けてくれえ!!」

「な…おいこら周りを巻き込んでんじやねえよ金獅子いいいい!!」

わざわざ人が多く乗った軍艦を持ち上げて見せた。

「ならロジャーをここに連れて来やがれえっ!!」

そのまま降ってきた軍艦を

「こん…ちくしよお!!」

ゴガアツ!!

”大戦槍”を手放し両の腕を広げ受け止める、軍艦一隻とてつものい負荷が全身にかかるも、

「おおおおお!!りやああああ!!」

火事場の馬鹿力とでも言うべきかなんとか衝撃を殺し地面に降ろす。

「おいおいおい?相手はおれなんだがなあっ!!」

二本の白刃が鎧ごと切り裂き、咄嗟に鉄塊を用いて斬撃に耐えようとするが

「ぐっ…くうー!」

衝撃までは殺せず体が傾く、体の芯に響き気が薄れそうな痛みを堪えつつ逆手に剣を二本抜き放ち

「二刀斬撃!双翼鷗え!!」

左右同時の斬り付けからの鋒を合わせた刺突技を放つ。

多大な貫通力を誇るソレは盾として浮き上がらせたであろう石畳を貫き、金獅子の右脚を太股から吹き飛ばした。

「こ…の…若造があ!!斬…」

それに対しシキが両腕を振り上げトドメを刺すべく斬りつけようとしたところでシキの後ろから銃声が上がった。

「そこまでだ金獅子っ!!」

そこにいたのは多数の海兵を後ろに引き連れたセングク大将、ガープ中将であった。

俺は彼らが駆けつけたところを見て元々限界に近かったのか助かったと、ふつと意識を手放した。



## 入院直後 ドンクリークさん

時は少し遡りガープが出撃準備をしている時の事であった。

「敵襲！敵襲！各員配置につけえ！」

にわかに周囲が騒がしくなり何事だと思いつつながら

「何事じゃあー！」

「侵入者です!!!場所はマリノフォード海岸の広場！」

「敵の数は!!!直ぐに付近の中隊を急がせろ！」

「一人です！敵は…」金獅子のシキ”一人です!!!

無差別に襲撃を行っている模様!!」

「な…直ぐに兵を退かせろ！」

「それがその場にいたクリーク中佐と交戦中です！時間を稼ぐから大将が中将を呼んで来いとこの事です!!」

なっ…無茶じゃー！いくら将官クラスに迫る実力を持つてるとは言え。

「直ぐにワシが向かう！誰かセンゴクにも伝えい!!」

そう言い残してコートを羽織り海岸広場へ向かう。

途中センゴクと合流し轟音が聞こえてくる広場へ到着すると

そこにいたのは右足を無くし今にも刀を振り下ろしそうな金獅子と、自慢の鎧をボロボロに両手に剣の残骸を持ち膝をつくクリーク中佐の姿じゃった。

「っ!!全員撃てえっ!!」

直ぐに攻撃を止めるべく気を逸らせ周りの海兵に中佐を救出させるべく指示を出しシキに相對する。

「シキイイイ！それまでじゃあ!!」

「ガープにセンゴクかあ!どういう事だ!ロジャーがお前エらみてエなカスに捕まるハズがねエんだ!このおれが認めた男だぞ!!」

「やめろシキ、間違いなく海賊王ゴールド・ロジャーは捕まったんだ」

「何をしようが今更無意味じゃ!大人しく投降せい!」

「海賊王!?それが何だ!!あいつがおれに手を貸せばおれ達は全世界を

支配できた!!

適合する事はなかったがあいつとは同じ時代をやって来たんだよ!!

いるんなら連れて来い！殺すならおれの手で殺してやる!!」

「…ロジャーは海賊王、お前との勝負なら奴の勝ち逃げだ。

処刑は一週間後奴の生まれ故郷”東の海”の”始まりの町”ローグタウン…」

「ロジャーの死はあらゆる海賊達の心をへし折るじやろう」

「海賊王ロジャーの伝説が…あの最弱の海”東の海”で終わるのか？

笑わせるな!!それはあのクソつたれに対する最後の侮辱だよな！」

「最弱とは言い様だ…」東の海”は平和の象徴…！」

「その最弱の海とやらの男相手に傷を負っておるお主に処刑の邪魔はさせん…!!」

そしてガープ中将、センゴク大将、金獅子のシキの三人が衝突。

マリンフォードが半壊する程の激戦を経て決着しシキは捕縛され大監獄に収容されたらしい。

そして一週間後、処刑される直前の海賊王の言葉と共に俗に言う”

大海賊時代”が幕を開けたのであった。

と、その様な事があつたらしい、俺がこの十日寝てる間にであるが。それを聞いた俺の頭に浮かんだのは”全部終わってるじゃないか!!”という事だけであった。

み…見逃した…、作中屈指の有名シーン！大海賊時代の幕開けとなつてしまった海賊王の死に際の一言お!!

…おれの財宝か？欲しけりゃくれてやる、探せ！この世の全てをそこにおいてきた！

だったっけ？しっかしそれにしても…

「シキ強かったあ…」

包帯だらけの体を撫でつつそうぼやく。

鎧、武器一式はボロボロ、体もあちこち怪我だらけとなり軍医からは完治には一月はかかるだろうとの事であった。

「そう言うな、金獅子に手傷を与えただけでも上等じゃ」

そう言ってくれたのは煎餅をバリバリと食べながら寝てる間の事を伝えてくれたガープ中将であった。

「ガープちゅーじょー殿、人のベッドの上に煎餅のカス散らかさんどってください…」

「ぶわっはっは！堅い事言うなクリークよ、それよりも喜べ今回の件でお主に昇進の打診が来ておるぞ！何か欲しい物はあるか？昇進祝いじゃ！」

昇進祝い…”計画”の為此の際ちよつと難しい事でもいいか？

「…すみません、直ぐに思いつかないのでちよつと一晚考えさせてもらってもいいですか？」

「ふむ、とりあえずお主はゆっくり養生する事じゃ。何か思いついたら言うといい。」

そう言つてガープは病室から去つていった。

そして看護師に半身を起こされて包帯を替えてもらいながら考える。

例の計画をなす為に前段階として実際に行動して実績を重ねなければならぬだろう。

現在の俺の階級は中佐、原作ではローグタウンを任されていたスモーカー然りアラバスタにて海軍の船団を率いていたヒナ然り俺が知ってるのだと全員大佐クラスだった、例外もあるが。

ならば大佐クラスになれば一つの支部を任せられる若しくは船を率いるだけの資格があり自ずとその権限も増えるだろう。

となれば今回の昇進は渡りに舟である。

今回の話を受けて尚且つ数年程、この近海だけでなく複数の海にまたがって遊撃の許可を貰おう。

マリンフォードにいればどうしても動けない事もあるだろうし、数年前から埋めたままの悪魔の実も…あ、凶鑑借りるの忘れてたな。

その序でに仲間も集めたい、前回の東の海への遠征ではギンやパールを見つけきれなかったしその二人以外にも航海士や船医など的人员もいる。

そして何より：

金獅子に負けた事が俺の心の中にあつた。

覇気を武装に纏う事が出来ていれば、武器の選択を誤らなければ、  
気絶をしなれば。

振り返れば振り返る程もうちよつとなんとか戦う事が出来たので  
はないか、というものだった。

相手は伝説クラスの海賊である。

わかっている、わかっているのだがどうしても自身の能力と装備に慢  
心していたという思いは拭い去れなかつた為更に自身の力を研ぎ澄  
まさせるべきだと強く思ったのである。

そしてそうと決まればグループ中将与序でにセンゴク大将にあてて  
その旨を紙にしたためる。

そして後日それはグループ中将与センゴク大将、更にコング元帥の名  
によって承認されて新しい役職を得る。

”海軍独立中隊”

特務大佐” 鈍熊” クリーク

それが新しく受けた辞令であつた。

主な任務はこれから増えるだろう海賊に対する本部、支部の垣根を  
越えてのあらゆる海での遊撃である。

## 特務大佐 ドンクreekさん

完治に一月と言われた怪我を半月足らずほどで完治して退院となったクreekです。

医者からおかしなものを見るような目で見られたでござる、え？治験？目が怖いのでやめときます…

まあそんな事より”海軍独立中隊”の事である。

自らの計画の為に実績作り、人員探し、武者修行を含めてのあらゆる海を越えた海賊の撃滅。

後にクreek中隊と呼ばれるソレを設立するにあたって上からでた条件は

”年に一度の本部帰還”、”海賊達の動向の調査”、”有望な人間の海軍への勧誘”

主にその3つを守りつつ海域を限らずの遊撃を担当する事になった。

主となる人員は俺ことクreek大佐を隊長に副隊長 ラパヌイⅡ パスクア大尉、そして5名1組の小隊を4小隊、そこに船医などの非戦闘員を含めての30人ほどの小規模な部隊である。

副官として付いてきてくれるラパヌイ大尉は数十年前に海軍に入って以来自ら現場に立ち功績を挙げて昇進の話が来てもまだまだ現場で動きたいとの事からそれを断っている超ベテランの海兵である。

どーつかで聞いた事あったようなないような…気のせいかな？

他の人間もある程度自分がいたらないところがあれば助けてもらうべくガープ中将の指摘を参考に有用な人間を選んだつもりである。

有事の際に迅速な対応を行う為自らが書類と面接にて審査した上で人数こそ少ないもののベテランを揃えた。

まあ人員が必要な際には各支部からの借り受けを前提とした事により小規模な部隊になってしまったのではあるが。

センゴク大將曰くなんでも最初は大隊規模の船団を作る予定であったが海賊王の処刑以降海賊が増えた為そこまで大量に回せる人

材がいなかったとのことであつた。

しかし人数が減つたかわりに他は潤沢に用意してくれた、各武器、弾薬を始め船の資材や食料などだ。

中でも部隊の足となる船は改造許可をつけた上で中型海軍艦1隻をまるまる与えられるという大盤振る舞い。

早速今頃俺の武装を修理してくれてるであろう技術班を訪れこれこういう武装が欲しいと伝えるとまたペンと紙を叩きつけられたでござる。

事情を話し少ない人数でも動かせるように船の各所の簡略化、武装も一般的に積まれてる物よりも性能が高いものが搭載され船体自体もあちこち改良、改造を施してもらい攻撃力、防御力、機動性を高めてもらつた、その分センゴク大将から予算がかかり過ぎだという苦言を呈されたが。

これ沈めたら何言われるかわからんよな…この世界は簡単に船が沈むのよね、海軍艦は特に。

そして出来上がったのは改造戦艦ベアトリス号（命名 技術班）である。

主な武装として船首に大型衝突式尖角と超大型三連装砲、船横には後装式長距離砲と大型機関銃を片舷4つつつ設置そして船尾には小型の船艇を格納するハッチなど、あちこちに技術班と話し合いながら便利そうだと思つた機構を仕込んでもらった。

そして後は試運転がてら部隊で近海への習熟航海を残すのみとなりその準備にクリーク達が追われている頃。

時は遡り、海軍本部元帥執務室。

「…というわけなんじゃがどうする?」

「コングさん、私は賛成だ。これから海賊は増える一方だろうからどうしても手が届かない所は出てくるだろう」

「しかしここで将官候補が本部を離れるのもな…」

そこには海軍本部元帥コング、大将センゴク、中将ガープの三人の姿があつた。

集まつたのはガープが持ってきた手紙、先立ってマリンプォードに

単身乗り込んできた金獅子のシキとの交戦により現在入院中である  
”鈍熊”ことクリーク中佐のセンゴク、ガープにあってたお願いが理由  
であり、その内容曰く”部隊を率いての海域を問わない遊撃任務に当  
たらせてほしい”との事であった。

主な理由としてはこれから増えるであろう海賊の迎撃と武者修行  
というのが本人の談である。

「わしは構わんと思うがのう、どのみち数年は支部を運営させるべき  
じゃと思うとつたし」

「しかし誰か将官の下に副官として配属させようとも思っていたのだ  
が・・・」

「今の内に部下を率いる立場を経験しておくのも良いでしょう」

ガープ、センゴクは海賊の増加や経験を積んで欲しいとの事から賛  
成の意を示しコングは優秀な人材が海軍本部を離れる事からあまり  
積極的では無い様子。

海軍本部中佐 ”鈍熊” クリーク

歳は20歳、出身は東の海で海軍に入ってから既に10年が経つ。  
身の丈は3m近くでガツシリとした体を持つ大男で薄紫の髪は短  
く揃えられ目つきは鋭く顔がゴツイ。

無愛想でぶつきらぼうながらも顔に見合わず料理が趣味だったり  
子供が好きだったりしてよく熊やゴリラなどに例えられている。

戦闘力に関しては持ち前の怪力を以てして重さにして5tの棍を  
振り回し、海軍に伝わる戦闘技術”六式”を全て習得しており高いレ  
ベルで操り、更には対ロギア相手には必須となる覇気も身につけてい  
る。

強さだけにおいては新世界に放り込んでも問題ないだろう、何せそ  
の実力は中佐でありながら将官クラスに迫る実力だというのが海軍  
上層部の見解だからだ。

まあその高い実力故か、何か問題があっても周りを頼らず自分だけ  
で何とかしようとして自分の力に頼る傾向が見られるが。

「うーむ、長い間離れさせるのが気が進まぬなら年に一度は必ず本部  
へ帰還するなどの条件をつけたらどうじゃ？」

「まだ若いのじゃからそんな急いで将官にする事もないじやろう」

「そうだな…わかった、いくつか条件をつけてこの案件を認めよう。」

「それで人員についてはどうする？」

「私がピックアップして後で中佐に選んでもらいましょう、部下を率いて外洋に行くのは初めての筈ですからベテランを揃えておきましょう」

「大船団じゃ！景気良く連隊ぐらい率いさせてやるか？」

「ガープ！これから忙しくなるだろう時にそこまでの規模は流石に無理だ！人員は中隊規模で設立してくれ」

「その分他は潤沢に揃えてやりましょう、船に関してはどうしますか？」

「近々就航予定のがあったろう？外洋巡回用の中型のが、あれを回せ。」

「使い易いように改造も許可しておきましょう、人数に関しては必要な時は支部から借りさせるよう後で通達しておきます。」

「うむ、では…センゴク、ガープ、後は委細任せたぞ。」

「ああ、最後にわかり易いように旗印を掲げさせようと思うのだが…」

「旗印…？海軍の旗で良いのでは？」

「海賊の旗でも掲げさせるか？」

「違あう！抑止力としての意味合いで敵味方にわかりやすいようにだ！…最前線で赤く染まる海の抑止力として”赤いカモメ”を掲げさせよう」

「と、そんな話があり海軍元帥コングの発案により白地に真紅で染められた海軍マークを旗印とした部隊”海軍独立中隊”の発足が決定したのだった。」



## 習熟航海 ドンクリークさん

習熟の為近海の航海に出て2日程、大尉と二人で甲板にて立ち話をしているの見張り台の部下から

「大佐ー！右舷前方に船影！小型の船、帆にドクロ！海賊船です！」

との報告が、また海賊かと思いつつ

「旗印は何だー!!」

「旗印は髭面のドクロです！」

との答えに覚えている海賊マークを一通り思い浮かべるも一致する物は無かったので

「取り敢えず停船命令を出せ！髭面のドクロ・・・知ってる者はいるか？」

徹夜で頑張って作った海賊メモをペラペラと捲りながら確認するも該当は無し。

周りに聞くも知ってる者はいない模様、となると最近旗揚げしたか危険度がかなり低いかのどちらかか・・・

「目標船停止しません！砲撃を行いますか？」

「砲撃は必要無い！それから本部情報班に確認！大尉、威嚇攻撃をお願いします。当てないでくださいね？」

「ガハハ、わかってますよ大佐殿、これで食ってますから今更そんなミスしねえですよ、フィンガーボムツ!!」

そう言つて大尉はポケットからコインを取り出し指で弾くと物凄い勢いでコインが撃ち出され目標船の前方に着弾し水柱をあげる。

大尉は指の力が異常に強くこの”指弾”という技を得意としており、この前なんか海賊船の土手っ腹に大穴を空けていた。

「止まったようですか？」

もちろん撃ち方を教えてもらったがあらぬ方向に飛んでいって大変だった。

「本部から何か返信はあったか？」

「はい！数年前から見られるようですが特に略奪などをする気配はなく偶に釣りをしているのが見られるとの情報です！」

「…海賊の定義が時々わからなくなるな。まあいい、何があるかわからんから取り敢えず俺が見てこよう。」

「捕まえるので?」

「いちいち危険度が低いのを捕まえててもキリがないでしょう、ではちよつと行つてきます!」

そう告げてその場で一度屈むと空に飛び立つ。

空中を蹴りながら前方で停止していた船の甲板に到着したが、人が出てくる気配は無い。

まあ見えていなくても…と、この2年で上達した見聞色を使って探つてみると船底近くに気配が二つ。

待つていても仕方がないのでそちらに向かうと船室には食事の用意があり分量的には一人分、それと床に動物用の餌入れがあった。

となるとこの二つは一人と一匹かな?と考えつつ気配があり、そこに居ると思しき部屋のドアを開けると

「とりやあああ!!」

モツプを待った男に奇襲されるも左手で受け止め右手で腰に挿していた銃をつきつける。

単発式大型拳銃”ベアコング” かつてカチカチの実の能力者であるベアキングがくれた○銃を技術班に改造してもらったものである。

佐官クラスの海兵ともなると武器が無くとも戦えるがやはりこう言う時にはわかりやすい形の物が必要なので何気に重宝している。

襲撃してきたのは紫を基調とした服に腰にピストル。胸に赤い刺青の中年の男だった。傍らには…ブルドッグ?にしちや脚が短いし耳が長いよな?よくわからない犬がこちらを見て唸っていた。

「おっさんは海賊でいいのかい?一応手配はされてないみたいだが…」

と左手で握っていたモツプを離すと

「おうともよ…海兵さんが俺に何の用だ?」

「いや、何の用もなにも海賊旗掲げてるからだろうが」

「むう…」

「まあ一応事情聴取だけしとくか、おっさんの名前と航行目的は？」

「…俺はシュナイダー、こっちは相棒のバズだ」

「アオン！」

「航行目的はこの先の島に食糧を確保しに行く途中だ」

「食糧の確保…街を襲ってか？」

「違う！俺はそんな事しない！ちゃんと金を払って購入するさ！」

「ふむ、何故海賊旗を？それと掲げてどれくらいだ？」

「3年ほどになるが別に違法な事をやった覚えはない！掲げてるのは余計なのをおびき寄せないようにだ…」

「ああ、海賊避けか、納得した。取り敢えず船の臨検だけさせてもらうがいいか？」

「ぐ…勝手に物を取り上げたりしないか？」

「何か持つてるのか？」

「むう…けつ仕方ねえか、海兵さん俺達は前回寄った島でこいつを手に入れた。」

シュナイダーが部屋の奥から引っぱり出したのは一つの宝箱。

「ほう、遺跡の探索か何かか？」

「いや、こいつを見てくれ」

そう言つて箱を開けると中にあつたのは

「な、悪魔の実だど!？」

独特の渦巻き模様の浮かんだ果物であつた。

悪魔の実…それは摩訶不思議な力を持つ海の悪魔が宿る果実。

海に嫌われて泳げなくなる代わりに凄まじいまでの人間離れした力を得る事ができる不思議果物である。

此処で語るには多すぎるので割愛する構えだその能力は十人十色、千差万別。

以前にも見た事はある、最も今回の形は別の物であつたが。

「食おうとも思つたんだが何の能力かわかんねえし売っぱらつた方がいいかとも考えたんだが…」

「まあこのまま持つてただけだと狙われる可能性はあるだろうな、物

が物だけに」

「そこで、だ。良かったら海兵さんが引き取ってくんねえかなあ？俺が売ろうにも伝手がねえし足元見られそうだからなあ」

「その犬が食いたそうにしているが…」

「ばっ、やめろバズ。動物が食っていいもんかどうかわかんねえだろうが」

「引き取るにも下手すれば一億はいくからなあ…」

「うわ、そんなに高えのかい。」

まあそんな大金持っても怖えから程々の値段で買わねえか？」

と、しゃがんでバズと呼んだ犬の頭を撫でるシユナイダー。

少し考えて…うん。困った時には上司に相談、報連相は大事よね

「わかった、ちよつと上司に確認しよう」

そう言つて念のために持つてきていた鞆から航海に出るに当たつてセンゴク大将より待たされた電伝虫を取り出す、でかいから持ち運びには向かないのだが…

「あ、センゴクたいしょー殿、いま大丈夫でありますか？」

『クリークか、どうした？緊急の案件か？』

「いえ、緊急というわけではないのですが悪魔の実を海軍で引き取つて欲しいという海賊がいます…」

『海賊が悪魔の実を？何でまた海軍に？』

「売る伝手も無いし食べるのも怖いしこのまま持つても狙われそうだからというのが本人の談であります。」

『因みにだが手配済みの海賊ではなからうな？旗と海賊の名前は？』

「その辺りは情報班に確認済みであります、名前はシユナイダー、旗は髭面のドクロでありますか捕まえますか？」

『髭面のドクロ…ああ、”犬連れ”か、それなら必要ないだろう。捕まえねばならない海賊は幾らでもいるからな。』

それよりもその海賊と代わつてくれないか？」

え？海賊全部覚えてるの？ばねえ、などと思いつつ固唾を飲んでこちらを見るシユナイダーに受話器を渡し

「上司が本人と代わつてくれだ」と。

そうしてシユナイダーとセンゴク大将が話す事数分。

晴れ晴れとした笑顔でシユナイダーがこちらに受話器を差し出したので受け取ると

『私の私費で買い取ったから好きにしろ、自分で食べるなり部下に与えるなり、ただ売り払う気ならこちらに寄越すように』

「え!?悪いでありますよ!自分で出すでありますよ?」

『9600万ベリーだ払えるのか?...いいから貰っておけ、出世祝い、お前の将来性を買っての事だ。』

「:わかりました、有り難く頂戴するであります」

『他には何もないか?』

「はっ、現在航海は順調であります。予定通り5日後にはこちらに戻る予定です」

『うむ、気をつけるように。それではな』

そう言う通信は途切れた。

「9600万ベリーとは良かったじゃないか」

「おうよ、月々50万ベリーづつの受け取り予定だ、一気に受け取つても持つとくのが怖いからなあ。でも海賊旗は掲げないように言われちまったがな...」

こうして俺は新たな悪魔の実をゲットしたのであった。

どうするかな?これ。

## 悪魔武器 ドンクリークさん

受付でカリカリと書類を書いていた男は見知った顔が廊下の向こうからやって来るのに気づいてその手を止めた。

頭痛をこらえてそうな顔で脇の小電伝虫を取ると

『各員に通達、熊殿のお越しだ。』

右手に包みを持つてる事から推測するにまた鹵獲武器の改造依頼だ。

伝達は以上』

と告げてペンと紙を脇に用意する、そして見知った顔が口を開こうとしたタイミングで

「紙に書け!!」

と顔面に叩きつけた。

一週間の習熟航海から帰って来た。

航海中の問題点の洗い出しを行いつつ試したい事があったので技術班本部にやってきたら顔面に紙とペンを叩きつけられたでござる、まあいつもの事だけど。

実は武装開発の許可を得て技術班に来るようになって以降ここにはよくお世話になっている、自分で考えた武装のアイディアを持ってきたり、大型拳銃”ベアコング”など敵が持ってたちよつと変わった武装の改修だったり武装のメンテナンスなどだ。

そして今回頼むのは

「全員こいつを見てくれ!!」

包みを開いて見せるのは先日シユナイダーと名乗る海賊から手に入れた悪魔の実。

因みに海賊旗を降ろすように言われた本人はセンゴク大将との話し合いの元、民間協力者として今までの海賊旗を下ろし新たに飼っていた犬のバズをモチーフにした旗と海軍旗を掲げて近海の哨戒任務（と言う名の旅行）についているらしい。

まあ海賊旗掲げてりゃ手配されてなくとも人によっては問答無用

で沈める人もいるし海賊が海軍から金を受け取っているのも（実際の理由はともかく）イメージはあんまり良くないからかな？

そして今回の悪魔の実、実はすつごく悩んだ、凶鑑で調べた所一致したのが一つ。

トリトリの実 “モデル” 鷲（イーグル）”

ガトリングファルコンことアラバスタで一番かつこいい男ペルさん（個人的主観を多く含む）も世界に5種しか確認されぬうんぬんかぬぬん言ってた。

結構珍しいとも思うし食べてもいいかとも思ったのだが…ぶつちやけ言う” 月歩使えるからなあ” と思ってしまったのだ。

そこで思い出したのがラッシーやらファンクリードやらの” 悪魔の実を食べた武器” の存在である。

まあとりあえず悪魔武器とも呼ぶか…

ただ、作中の物に悪魔の実を食べさせる技術がいまいちよくわからなかったのでこうして技術班にやってきたわけである。

「うわ、悪魔の実じゃないですか」

「え？今度は何処で拾ってきたの？」

「ふえ、何でわざわざ此処にい…」

「今度はどんな厄介ごと持ってきたんでしようか…」

しやらつぶ、別に厄介ごとじゃないからな！

「誰か物に悪魔の実を食べさせると言う情報を何か知らないか？」

ざわざわと研究員達が話し合うも

「いや、物にどうやって食べ物食べさせるんですか？」

と代表者が答えた

ですよね！となるとまだその技術は開発されてないのか…

となるとどうやってやるかだが。

「取り敢えず色々試してみるか…」 試作兵装第六号” を用意してくれ！

と試作で作ったガトリングを持ってきてもらい色々試して見る。

一つ目 横に置く

結果 変化無し

「そりやそうでしょ、それで出来たら宝箱が変化してますよ」

二つ目 上に乗せる

結果 変化無し

「え、この調子でやるんですか?」

三つ目 刺してみる

結果 少し動いた?

「気のせいじゃないんですか?」

四つ目 少し切り取って果汁を満遍なく塗りたくってみる

「これってどつちに悪魔の実の能力って宿ってるんですかね?」

五つ目 グリグリと押し付けてみる

結果 なんか引っ張られるような力を感じる

「ええ・・・?」

六つ目

「そおおいっ!!」

ぐっしやあっ!!

「何やってんですかあああああ?」

…ぐりぐり

「聞いてるんですか大佐殿! めがっさ珍しいんですよ悪魔の実って

!!」

…(じ)し(じ)

「ちよ、誰かー! 袋と布巾持ってきて!! 拾い集めればまだ使えるかも  
しんない!!」

「おお…」

「聞いてるんですか大佐殿!! ってうわっ、気持ち悪っ!」

そこにはうねうねと動きながら徐々に果肉や果汁が武器に吸収さ  
れていく姿が!

そして完全にそれが吸収されてしまうと武器がうぞぞと形を変  
え

「よしっ! 成功だな!!」

「はあああああ?」

そこには一匹の機械が入り混じったような意匠の鷲の姿があった。



そしてその驚は周囲を見てこちらに目を向けるとすつごく睨んできた。

聞いた事がある、動物と視線を合わせた時は逸らした方が負け、というどっかの知識を。

なのでこつちも負けじと睨み返す。

どれくらい時間が経っただろうか、ようやく相手が目をそらした。よし勝った、さてとりあえずこの事をセンゴク大将に報告するとして

「まずはお前に名前をつけないとな！イーグル…イーグル…イーグル…火…撃つ…嵐…嵐…、よし！お前の名前はカフウだ！いいか！」  
「クアツ！」

「よし！いい返事だ！今は鳥の状態か、別の姿になれるか？」

そうカフウに聞くと身を縮めると少し驚っぽい意匠があるが元となった武器に近い姿になる。

「よし、ならば中間の姿にはなれるか？」

そう聞けば今度は嘴から先がガトリングガンの砲身に変化し機械的な意匠が強くなった姿に変化する

「よし、三形態には変化できるみたいだな、ならば行くぞ！カフウ！」  
やはりこの世界の動物は頭が良いなどと思いつつそう言つて腕を差し出すとバサリと羽を広げて飛び乗る、そしてもう一度羽ばたくと肩に留まった。

そしてそのまま呆然とした様子の技術班職員を置いて大将執務室…その前に海軍図書館に向かうのであった。

「なあ、これって報告した方がいいのか？」

「ふええ、どうやってレポートに纏めるんですかあ…」

「ぶつけてなすりつけたら出来ましたって書くわけにはいかないでしょうしねえ…」

「とりあえず大将とかに聞かれたらそう言うしかないですよねえ… ああ、なんかどっと疲れた」

「過程が無くて結果だけというのはねえ…いつもながら嵐みたいな人だ…」

「とにかく出るまでに頼まれてた新しい武器をさっさと完成させてしまおうか…」

「そうですね…、とりあえず情報だけ科学班と共有しておきましょうか…」

## 火吐鉄鷲 ドンクリークさん

飛翔鉄鷲” 火風” ことカフウ

元となった武器は技術班に開発を依頼して一緒に考えて（させられて）作った個人兵装である” 試作兵装群” の中の一つである。

その内鎧に仕込む為のガトリングの開発において作られたうちの一つがカフウの元となっている” 試作兵装第六号” と呼ばれる大型ガトリングガンである。

これは発砲の威力を重視して作られたものであるが、鎧に仕込むには大きさが不適合という事でお蔵入りになったものであり、今回それを元にして悪魔の実を食べさせた事により空飛ぶガトリングバードへと変化した。

それに加えて映像電伝虫を搭載した事により受信機器を接続する事により映像、音声の送受信が可能となり船に居ながらにして高度からの隠密偵察や威力偵察が可能とされている。

言ってしまうえば武装ドローンのような存在へと変化した。

弾薬は不思議な事に餌を食べて勝手に体の中で生成されるようで別に火薬や鉄を食べるわけではないようであった。

：何故かミネストローネが好物のようだが。

というような事をクリーク大佐から説明を受けたセンゴクは

「すまんが聞き間違いか？ガトリングガンに悪魔の実を食べさせた？」

と尋ねる。

最初、悪魔の実は結局どうしたのかと聞くと” 食べさせました” と答えたので部下に与えたのかと思ひ、何の実だったのだ？と聞いたところ” こいつを見て下さい！”と意気揚々と肩に乗った鷲を見せてきその上で武器に変化させた。

「ほう！鷲に食べさせたのか、ブキブキの実あたりだったのか？」

「いえ！トリトリの実であります！ガトリングガンに食べさせてみました！」

と、言われたところで暫し無言になる。

「あー…悪魔の実を武器が食べる？…すまんが何を言ってるかわからないのだが…」

疑問を抱くももう一度同じ事を言われて”後は技術班の面々が詳しいか?”と言われたので後で呼び出して詳細を聞いてみるか…とセンゴクは考えつつとりあえずその手に持っている”鷹の飼い方”が本当に役に立つのか?と思いつつ部屋を出るクリークを見送るのだった。

海軍図書館で借りてきた”鷹の飼い方”を手にセンゴク大将に報告に行くとりあえず悪魔の実を食べたガトリング、カフウに関して是有用だろうから役に立てるようにとの言葉を貰った。

さて、報告は終了したので一旦自室に戻ってこれからの方針を考える。

まず自分の船と部隊が持ってた為だいぶ動きやすくなった。

まず向かいたいのはオハラである。

作中ではロビンの故郷であり海軍の”バスターコール”と呼ばれる大規模攻撃により島ごと地図から姿を消した場所だ。

確か避難船をサカズキが沈めてた?からその辺りを踏まえて中将(この短期間に三人ともいつのまにか中将に昇進してた、がっでむしつと)が明日、俺の出立の壮行会という事で集まってくれるのでそこで話すとして

確かロビンが指名手配されたのは8歳だった…筈、当時まだ8歳の女の子がうんぬんって誰か言ってたと思うし。

そして初登場時が28…であってたよな?30にはなかってなかった筈だ。

そうなるも今オハラに行ってロビンに会えれば年齢を確認してそこから逆算して今が原作から何年前かが把握できる…筈だ。

それがわかれば原作メインメンバーが20…なかってなかった筈、確

か16とか17とかだったか？

それによって大体の生まれる時期がわかればえーと、フリーシャ村、シモツケ村（シモツキ村）、…ミカン村？（ココヤシ村）、シロップ村、東の海のどっかのキノコみたいな孤島と…他あったかな？…だいたいはその辺りか。

あ、後ギンとパールも探さなきゃな、悪魔の実置いてるところにも。とは言えギンの故郷もパールの故郷もわかんねえからなあ…パールが密林育ちって言ったか？…そうは言ってもなあ、密林なんてあちこちあるしなあ。

悪魔の実に関しちや図鑑をどっかで借りてくるとして…悪魔の実かあ…

確かに食べればそのメリットは大きいんだよなあ。

”どんな悪魔の実でも使い方次第”って誰かが原作で言ってたよ。うな気がするし…

できれば物理無効となるようなロギア系が欲しいがあれは数が限られてるだろうし、物理無効だけならパラミシア経験もあるだろうが純粋な戦闘力で言えばやはりゾオン系も捨てがたい…

ルッチも言っていたが”迫撃においてゾオン系は最強”…だったか？

パラミシアやロギアなど特異な能力は数知れず、だが純粋に自らの身体能力が強化されるのがゾオン系の特性だ。

鍛えれば鍛えるほどその身体能力は増幅されそうになれば今の数倍する戦闘力を手に入れる事が出来る可能性はある。

しかし…

「ぶっちゃけ海に落ちる可能性があるとするとき笑えないんだよなあ…」

その一言に尽きるのだ。

”悪魔の実の能力者は海に嫌われる”…ようするにカナヅチとなり海につかると力が抜けて泳げなくなるのだ。

海軍という仕事上、海の上…船の上で戦う事がかなり多い。

そこで海が弱点となるのは正直頂けない、しかも海楼石も弱点にな

るといっておまけ付きで悪魔の実と対する弱点となりうるものも発現する可能性もある。

そう考えると気軽に能力者になるわけにもいかないんだよなあ…

などと考えながら深く思索に耽り、その日はいつのまにか寝てしまっていたのだった。

## 四色問答 ドンクreek

航海への出発前日、サカズキ、ボルサリーノ、クザンの三人が壮行会を開いてくれるとの事でサカズキの家へ集合となった

「お邪魔します」

「あ、クreek様、今準備してますのでこちらでお待ちください。」

そう言って出迎えてくれたのはステラさん。

ステラさんは俺がシャボンディ諸島へ行つた時に偶々ヒューマンショップで売られているのを見つけてしまい悩みに悩んだ挙句闇夜に乗じて解放してしまったのである。

そして解放したのはいいものの天竜人に見つかったらマズイどころの騒ぎじゃないし、かと言って匿っておけるような拠点もないので当時一緒に来ていたサカズキに相談した所、マリンプォードなら早々見つかる心配も無いだろうし歩けなくなってしまう車椅子で生活するようになったサクラさんの介助その他をやってもらおう、という事でサカズキの家で住み込みの家政婦として働いてもらう事になったのである。

「あ、これ差し入れですんでサクラさんと一緒に食べてください」

そう言って来る途中に買った甘味が入った袋を渡し部屋に通されると

「おう、早かったのう」

同期の筈なのについてこの前中將に昇進した同期であるサカズキがお猪口片手に手を挙げた。

「おう、ボルサリーノとクザンは？」

「クザンが遅れそうじゃけえのう、ボルサリーノのやつに迎えに行かせとるわい、それよりか悪魔の実を手に入れたつちゆうんは本当か？」

流石耳が早いな

「ああ、あんたらみたいなのロギア系じゃなくてゾオン系だけだな」

「ほう、悪魔の実つちゆうてもピンキリじゃからのう。能力者にはならんのかい？」

「ああ、紹介するよ、カフウ！」

そう呼び腕を前に伸ばすとバサリと一羽の鷲が止まった。

「トリトリの実を食った武器、カフウだ。」

「悪魔の実を食った武器？ようわからんが元となった武器の能力を持った鳥という理解でええのか？」

「あーうん、それでも構わないと思うが」

「へエ、それが噂の悪魔武器とやらねエ」

「センパイもおかしな発想するねえ、物に悪魔の実の能力を宿らせるなんてさあ」

二つの声がかけられたのでそちらを見やるとサカズキと同じくついでこの前中将に昇進したボルサリーノとクザンの二人が来たところであつた。

「個人的にコスパが合いそうにないがな。」

「パラミシアとかを混ぜるとどうなるんじや？」

「流石にやってみないとわからないがその特性を待った武器になるんじやないか？」

「ロギアであつても同じ事かもしれないねエ」

「そもそもゾオン以外でも大丈夫なもんなんですか、センパイ？」

「その辺りは何とも言えないのよなあ、今回の件だって偶々上手く行っただけだろうし同じようにやってまた成功するという保証は無いな」

「二つ食わせるとどうなるんじや？やはり爆発か？」

「人間が二つ食べると爆発するとかいうのは聞いたなあ」

「一つでもリスクがあるのに二つも食べたらそりやあねエ・・・」

と、そのように話していると家政婦のステラさんが準備が出来ましたよ、と呼びにきたので一旦話を切り上げ向かう事にす。

美味しい食事に舌鼓を打ちながらも他愛もない話をしながら食事を終え、それぞれグラスを片手に昨今の情勢などを話し合う。

そしてそこに

「所で話は変わるが：世界政府は一体どこまで信用できるんだ？」



爆弾をぶち込んだ。

「クリーク、ここじゃからええもんをあんま他所で言わん方がええぞ」  
「まア、確かに信用できない所はあるけどねエ〜」

「急にセンパイらしくない真面目な話なんて熱でもあるんじゃないの？」

しやらつぷクザン。

「いやなあちよつと気になって調べたんだがな…」

そう言つて懐から書類の束を取り出し机の上にバサリと広げる。

「出るわ出るわ、上からの圧力で手配になってたり逆に手配が消えてたり、他にもどうも怪しいのがかなりあつてな」

机の上に出したそれを三人はそれぞれ手に取り難しい顔で答えた。

「わかつちやあおる、そこまで多いとは知らんじやつたが罪があるとされる以上捕縛はせにやらんじやろう」

「いやあ、その罪が作られたかもしれないって事なら実際手配された人間は罪を犯してない以上それもどうかと思うけどねえ」

「実際何か考えでもあるのかイ？現状であれば僕はサカズキに賛成だけどねエ〜」

という答えが返つてきた。

「そうだな、例えばだ。」

最近東の海で名を上げている”黄金海賊 ウーナン” 彼は海賊旗を掲げているが懸賞金はかかつていない。

なおかつタチの悪い海賊共を倒して財宝を巻き上げているが一方で得た黄金以外の財貨を持ち主に返したり貧しいところに分け与えたりしている。果たして我々は彼を捕縛すべきか否か」

「捕縛すべきじゃ、もしそのタチの悪い海賊達とやらがおらんくなつてみい、市民にその矛先が向く可能性が無いとは言い切れんじやろう」

「ほつといてもいいんじゃない？何か法に触れてるならまだしも他の海賊達の力を削いでくれるわけだし」

「そうだねエ、懸賞金がかかつてるならまだしもまだ市民の通報も支部の報告もないなら放置でいいと思うよオ〜？」

「じゃあ次、ゼニイという金貸しがいる。

こいつは海賊相手に金貸しをしていてそれが海賊の資金源となっている。

だが懸賞金はかかっていない。これは捕縛すべきか否か」

「捕縛じゃ、他の海賊の資金源となつちよる以上無視はできまいて」

「捕縛とまでは行かなくても何らかの注意勧告は必要じゃないかなあ？」

「要調査だねエ、貸している海賊の種類にもよるだろうし相手がピースメインとかなら放置でいいんじゃないのオ？」

「ならば、猛牛斧 ウェットン」、こいつは多くの市民相手に略奪を繰り返してきた海賊で懸賞金がかかっていたが、数十年前に世界政府の役人に裏での献金により手配取り消しとなっており現在はルルカの町長となっている」

「捕縛するべきじゃ、略奪を繰り返してきたクズがマトモになるわけなからう」

「懸賞金を取り消されてて尚且つ現在市長というのがネックかなあ」

「内偵なり何なりで証拠を掴んで再手配後の捕縛かねエ」

「では次、”白ヒゲ”ことエドワードⅡニューゲート。彼に懸賞金はかかっているが、その一方で現在は各縄張りの守護の対価としての上納金を資金源としており彼の存在により一定の治安が保たれている。彼は捕縛すべきか否か」

「捕縛じゃ、問答無用懸賞金がかかちよるんなら是非もなし」

「放置、彼のおかげで一定の治安が保たれている以上捕縛するにしても対案が見つかってからの方がいいでしょ」

「クザンに賛成かなア？急ぎすぎて仕損じてもことだろうしねエ」

「な！海賊は捕縛するべきじゃろう！」

「落ち着けサカズキ、今回はその対策を話し合いたいと思ってたんだ。まあ聞いてくれよ。」

こうして計画の第二段階の為俺は話を始めた。

## 鈍熊考察 ドンクリークさん

「まず俺が考えてるのが現在の状態、世界政府からの横槍がこちらこちらで入る状況を何とかしたい、というのが本音だ。」

確かに海軍は世界政府の下部組織ではあるがこうも圧力が多くてはその内こちらまで巻き込まれて共倒れになるかもしれない、最近囁かれだした”革命軍”なんかが良い例だろう。

とりあえず今考えているのは上からの命令で手配になってたり手配取り消しになったりする現状の対策として専門の委員会の設立を行いたい」

「専門委員の設立どう？どんなもんを作る気なんだい？」

「簡潔に言えば、通報即手配ではなく事実関係を調査の上で懸賞金をかけたり、同じく現状を調査した上で手配取り消し、過去に懸賞金がかかったまま現状が不明の者も多いのでその整理も兼ねて行う内部組織の様なものの設立だ。」

「いつだったかコング元帥に上申して採用された”情報班”、”補給班”、”工作班”の設立及び”科学班”と”技術班”への分離と同じ様にその役割に応じた 部署の設立を考えている」

「ふーん、で先輩の狙いはなんなのさ？」

「狙いは3つ、1つは上からの圧力や虚偽の報告による指名手配及び手配取り消しの低減。」

2つ、虚偽の申請による不正な懸賞金の受け取りの防止。

3つ、危険度と手配額の均一化、これは不均等となっている危険度に対し見合わない手配額やその逆を防止する目論見だ。陸と海での手配額の差も何とかしたいがな」

「そうそう上手く行くもんじゃあなかろう、だいたい今の世は海賊が多すぎるじゃけえ」

「まあサカズキの言う事はわかる、がそもそもだ。」

海賊の定義が現状では曖昧すぎるんだ、だから海への冒険…主に財宝探しや未開拓地域の探索で海に出るにあたって誰もが”海賊”とこののを気軽に使っている。

俺が考えた海賊の定義としては

”船舶、町や村、人または財産に対して行われる、私有の船舶による私的目的のために行う不法な暴力行為、抑留又は略奪、及びそのような行為を煽動又は故意に助長するすべての行為”

これらを行う者達に重点に置き冒険を主とする”自称海賊”においては捕縛よりも指導、警告を行うべきだと考えている」

「まあ、確かにしつかりとした定義はあった方がいいだろうねえ」

「自称海賊が何故海賊を名乗るか、それは知らないだけだからだ。

そうじゃないと現状いちいち捕縛してはキリが無いしこれから更に自称を含み海賊は増えていくだろう。

そして警告を守らず海賊旗を掲げ続けたりする場合はそれこそ処罰を与える体制に持つていけばいいし、何より海軍の人員が限られる上に各支部と本部の能力差が激しい以上全ての海で同じだけの成果を上げる事は不可能だ。

一罰百戒により海賊の出現低下を狙うのは勿論ありだがそれでも海に出る理由として海賊旗を掲げる者は後を絶たないだろう、今回の海賊王の宣言による自称を含めた海賊の増加が良い例だろう？」

「うーん、確かにセンパイの言う通りかもしれないねえ」

「海賊王云々言うが言ってしまうえばこれはロジャヤーの財宝探しだ。

それなのに海に出る者全てが自分の海賊旗を掲げている。これまで海賊に対して厳しくあたってきたにも関わらず、だ。

俺はそういう風に考えてるが三人はどう思う？」

「じゃが簡単には言うがそれだけの体制を変えたとすると少なくとも数年はかかるじゃろう？」

「とりあえずこの三人と俺、後ガープ中将とセンゴク大将にも話を通してコング元帥に上申して来年辺りから動き出せればと考えているが賛同してくれないか？」

「うーん、まあ構わないかなあセンパイの言う事にも一理あるわけだし？」

「わっしも構わないよオ、上に好きにやられるのが今よりは減るんならそれに越した事は無いしねえ」

「サカズキはどうだ？」

「うーむ…じゃが海賊は捕縛するべきじゃとおもうがのう」

「サカズキは頭が硬すぎるんじゃないのオ〜？」

「今のところ海賊に対してもそれぞれ手配、懸賞金の見直しもするし情報班と連携して危険度が高いのから捕縛すればいいんじゃない？」

「一先ず、今後の方針として今までは海賊旗を掲げた船への対応はある程度本人に任されていたが、これからは情報班と連携してをしつかりとっていく体制にしたいと思う。

そして本題の世界政府からの干渉だが…サカズキとクザン、お前達ちよつと対立しないか？」

「対立じゃと？」

「えー、今度は何企んでるの？」

「別に今すぐ対立というわけじゃなくてな、この制度に反対な”海賊に慈悲なし”なサカズキと”ちゃんと見極めるべき”のクザンにするのだな、多分この件に対して快く思わない勢力がサカズキに接触してくるんじゃないかと思うんだよ、なに政府とは言わないがな。」

「成る程ねエ、それでその接触してきた勢力に入り込みこちらに情報を流してもらおうという事かア〜」

「面倒そうじゃのお、クザンがやればええじゃろう」

「いやいや、海賊死すべしを掲げてるサカズキさんじゃないとダメでしょ、おれなんかいきなり強硬派になるのも怪しき満点でしょ」

「その点ならあつしも賛成だねエ、あつしは何をしたらいいのかねエ〜？」

「ボルサリーノにはどつちつかずな感じで動いてもらいたい、どちらの陣営に属してるとも言い切れない状態が良いだろうからな」

「クリークよ、わしらにばかり面倒なことさせんでおんしもさつさとお上に登ってこんかい」

「あ、サカズキさんセンパイこの前准将への昇進試験落ちたんでそれ言わない方がいいですよ？」

「筆記、特に数学がダメだったらしいねエ、大事だよオ？弾道計算とかに必須なんだし」

「む・・・それはすまんのうクリーク、まあまだ次があるじゃろうからその時頑張ればええじゃろ」

「しゃらっぷ・・・どいつもこいつもお！こちらあんたらみたいな化け物じゃ無いんだからそう簡単にいくか！三人共その内大将になるだろうけどこちら一般人間じゃない！」

こうしてクリークは自身の考えをこの会談により伝え終えた。

詳細はつめる必要はあるがこれで計画は一步前進したな。

さてとりあえずこっからの20年ほどが勝負か、まずは予定通りオハラへの介入といきますかね・・・

## 隠密潜入 ドンクリークさん

あの時の会談から数日後、一旦船を置きマリージョアを通過、反対側の支部にて軍艦を借りクリークの姿は現在西の海の海上にあった。

「しかし大佐殿、何故にオハラへ？」

そう聞くのはこの部隊に副官として着任したラパヌイールパスクア大尉、陽に焼けた肌にサングラスをかけたカッコいい中年で海軍の歴史も長いベテランなおっさんである。

「ちよつとコング大將が気になる事を言つてな（言つてないが）それで少し様子見にな」

そう言つて机の上でビスケットを齧る鼠を眺めつつ手に持ったコーヒーを啜っているとゴングン！とドアが叩かれ

「大佐あ！目標の島が見えましたので司令室までお願いします！」

との報告がなされた。

原作では20年前に軍艦10隻と中将5名によつてなされる総攻撃、通称“バスターコール”にて地図から名前を消された島“オハラ”。

考古学の聖地として各海から集められたあらゆる蔵書を持ち、歴史の探求の為に考古学者達が各国から集まり島民達もそんな島に誇りを抱いてる島だった。

ある一点、禁止されている古代文字の解読を行なっていなければであるがそれさえなければこの島は変わらず考古学の聖地としてあり続けただろう。

そして“バスターコール”はこの島の出身であり当時まだ8歳の幼女、原作では大きな役割を果たす麦わら一味のミステリアスで理知的な考古学者、メリハリボデーのクールビューティー、ニコロビンの心にも深い傷を残した事件であった。

この一連の出来事を何とかできないか、それから現在のロビンの年齢から逆算して現在が原作から何年前なのかを把握したいからである。海賊王の処刑が原作から二十数年前としか覚えてないからなあ

：

そうしてつらつらと考えつつ司令室に來ると望遠鏡を渡されたので覗いてみるとそこにはオハラ象徴とも言うべき大樹”全知の樹”が写っていた。

「よし、帆を全部降ろせ。暗くなるまで一旦停泊する。」

「上陸はしないんですか？」

「少し調べたい事がある、それまでは一旦ここで待機だ。それから映像電伝虫の受信モニターを起動してくれ、カフウを飛ばす。」

了解しました、と各自散々個々に己の仕事にかかるのを尻目に

カフウの名を呼ぶと”クルルルツ!”という鳴き声と共に掲げた腕に止まったので、背中に取り付けた映像電伝虫と子電伝虫を起動させる。

これは映像と音声の送信ができる電伝虫と音声の送受信ができる無線機の様な物でこれで船にいながらにしてカフウに指示を出したり遠くの映像を観れる仕組みである。

「いいか？まず島の周りを一周してきてくれ、それをこちらで確認しながら追加の指示は追って出す。」

帰ってきたらお前の好きなミネストローネを食べさせてやるから頼んだぞ！」

「クルツ!!」

そう一声鳴くとカフウは島の方へ飛び立った。

やはりこの世界の動物は頭がいいな、と思いつつ船のコックにミネストローネを作るようにとの伝言を近くの海兵に頼むのであった。

そうして日も暮れて月も登った頃、その船は明かりを点ける事もなく海の上に停泊していた。

数キロ地点に島があるにも関わらず何故か帆を畳み錨を降ろして佇むクリーク含む中隊が乗船する借り物の海軍艦である。

「では大尉殿、留守番をお願いします。」

「何も大佐本人が行かなくてもいいと思えますがねえ…まあ自分らは船以外の上陸手段が無いんですが…」



「少し調べ事をしてくるだけですよ、数時間で帰ってきますので」

そう言つて甲板に立つクリークは何時もの鈍色の胴鎧に海軍コートを羽織つた姿では無く深い藍色の全身を覆うスーツに、これまた同色の厚手の手袋に丈夫そうなブーツ、額にはゴツイ機械式のゴーグルとそして腰元にくつつかのポーチをつけただけの姿で愛用の棍さえ手にしていなかった。

「了解しました、では我々は交代で見張りにあたります」  
「ではまた後ほど」

そう言つて宙を蹴つて上空に登つていくクリーク、そしてある程度の高さまで来ると今度は島の方へ向かつて進路をとる。

しばらく”月歩”で宙を蹴りつつ辿り着いたのは”全知の樹”、その上層部。

既に樹の中の伽藍に存在する図書館は明かりを落としており人の気配は存在しない。

とりあえず幹の近くまで移動し丈夫そうな枝の上に着地してしばし休憩を挟んだところで目を閉じ集中する。

戦闘中などではまだまだ上達の余地がある見聞色ではあるが静止した状態できちんと集中すればほぼ完璧に扱える。

つまり何が言いたいかというところ

「地下かあ…面倒だな…」

戦闘中でなければ建物の中だろうが地下だろうが生命の位置を探る事など造作も無い事である。

そして徐に腰のポーチから取り出したのは一匹の鼠

「よし、あつちに小さな穴があるからそこから入り込んでこの足元の窓の鍵を開けるんだ、できるな?」

「デュツ!!」

「頼んだぞ”イシズミ”、船に帰ったら高級チーズ食わせてやるからな」

そう言つてから鼠を解き放つ。

”石色の鼠”の意を持つイシズミ、この世界の動物は人の言う事をきちんと理解するほど頭が良い。

ダメ元で船に出た鼠に色々教え込んでいるといつのまにかきちんと言う事を聞く様になったので何かの役に立つだろうと連れ歩く事にしたのだが今回の様な潜入や諜報など極めて役に立つと確信した。別のポーチから水筒を出してコーヒーを飲みながら待っているとかチャリ、と足元の窓から音がした。

コーヒーを一気に飲みポーチに水筒を仕舞うと一度伸びをして幹の所々を掴みつつ窓まで近づき少し開け鍵がかかってない事を確認するとそのまま音がしないように開ける。

そのままイシズミを回収して腰のポーチに入ってもらい窓から内部に潜入する。

中は殆ど真っ暗で月明かりに照らされた本棚が見えるだけであった。

見聞色で探った時に図書館部分に人がいない事は確認しているが念の為に額につけていたゴーグルを降ろし起動すると眼下には一面の本。

技術班謹製の暗視ゴーグルを通して見たその視界は流石世界中から集められただけあって各本棚にびっしり入ったそれらは圧巻の一言に尽きた。

やはり見える範囲に人の気配は無く音を立てないようにスルリと床に着地する。

今回は地下室への入り口の確認、扉は上から見た感じカウンター奥や本棚の間に何個か。

まあ間違えて入り込む事が無いように多分隠し扉か何かがあると思われる、秘匿して研究してるくらいだから早々わかりやすい場所にあるとも思えないし。

再びイシズミを床に下ろし怪しい箇所が無いか調べて来るように頼み、イシズミが行った方向と反対側から探し始め時折見聞色で地下の動向を探るのも忘れずにだ。

そして怪しい箇所を確かめたり扉を少し開けて室内を確認していると地下の気配の1つが動くのが感じられたので慌てて本棚をスルスルと登り天井まで来ると息を潜めた。

カウンター奥の扉が開いて出てきたのは一人の男、先程確認した時はあの扉の向こうは本棚が何個か並んでいただけだったが：

男が館の外に出たのを確認して素早く先程の扉に向かいそつと侵入する。

やはり先程見た時と変わりなく小ぢんまりとした部屋で壁は一面本棚に家具は机と椅子、おそらく調べ物か何かの為の部屋なのだろう。

そうして外に出ていた男が戻ってきた為素早く飛び上がり天井に張り付く。

天井と掌の間の空気を出るだけ真空に近づけ、まるでヤモリだなと思いつながら息を潜めているとガチャリと扉が開いてそのまま男は右側の本棚へ。

そうして何個かの本を押し込むとズズズ：：、と本棚の一部が引込んで通路が現れ、そしてそのまま男はそこに入って行くと今度は巻き戻すように本棚は元通りとなる。

気配が遠ざかるのを確認して静かに床に降り立つ。

成る程こういう仕組みだったか、開き方は：：と脳みそ絞って思い出しているといつのまにか来ていたイシズミが「ヂュツ！」と鳴いて何個かの本を往復し始めた。

ふむふむ赤、緑、赤、黄、藍、藍、青、緑で最後に赤と黄を同時に、かな？

イシズミに聞くとそれで合っていたようで「ヂュヂュツ！」と首を頷かせた。

とりあえずメモに残しておきさつさと出よう、本棚の先を確認しておきたい気もするが一気に発見されるリスクが上がるだろうからなあ。

しかし、やはり賢い：：と記憶力で負けたのを複雑に思いつつイシズミを回収して素早く入ってきた窓から脱出、去り際にまだ日が昇っているうちに確認した島の要点も忘れずに確認しておく。

ロビンと思しき黒髪幼女が歩いてきたコースと腰掛けて本を読んでいた場所と居候してると思われる親戚だったか？の家である。

声をかけなきゃいけないのだが…怖がられないよな？  
実際子供には泣かれた事あるからなあ…

## 鈍熊上陸 ドンクリーク

開けて次の日

オハラ”全知の樹”内部、大図書館館長室

特徴的な頭髪の初老の眼鏡をかけた男が一冊の本を読んでいるとゴンゴン!と部屋の扉がノックされた。

「博士・クローバー博士!」

「どうしたそんなに慌てて、何事じゃ?」

「西の海岸に海軍の船が一隻停泊してるんだ、まさかとは思うが念の為に警戒を…」

「うむ、至急学者達を集めろ、また調査かもしれんからの」

そう言つてこの図書館にいる考古学者達のリーダーとも言えるクローバー博士は読んでいた本をパタリと閉じ本棚に仕舞うとそのまゝ黙考する。

世界文化へ対し数々の貢献を果たした考古学会の権威”オハラのクローバー博士”と言えば学のあるものの中では知らない者はいない程の学者である。

そんな彼が警戒しているのは自身を含む学者達が行っている古代文字の解読、歴史の書”ポネグリフ”と呼ばれる石碑の解読に関してだ。

それを解き明かすことよって歴史上で”空白の百年”と呼ばれる歴史の空白を解き明かそうとしている、がただの歴史解明であれば問題は無いのだがこの”空白の百年”については別である。

”空白の百年”についての研究あるいは古代文字の解読は世界政府によって重罪とされているからであり、下手すれば死罪も十分にあり得る程の犯罪行為だからなのだ。

一般的には古代文字を解読する事により古代兵器の復活が可能だから、という理由であるがこの考古学者達はそんな事はカケラも考えておらずただ失われた歴史の解明、探求の為に研究を続けている。

勿論犯罪である事は理解しており見つかったら、捕まったら首が飛ぶ事は覚悟の上でやっているのであった。

「此度の海軍艦の訪問、またぞろ何処かで”歴史の本文”を探索する船でも捕まったのかもしれんのう、此処との関連があればそこを基点にこの考古学の聖地であるオハラを潰す気じやろう」

「そう心配しなくても調査で来たと決まったわけじや無いんですし…」

「じゃと良いのじやが、とにかくもしも此処に相手が来た場合決して地下室を悟られんようにするのじやぞ」

「もし調査に来たとしても早々見つからないですよ、今までもそうだったんですから」

「油断は禁物じや、他の学者達にも伝えるのじや、地下室には近づかず普段通りにして気取られんようにするんじや」

そうして学者達が緊迫した空気を醸している同時刻

村から少し離れた小高い丘の上で

「こんにちは、お嬢ちゃん」

「おじちゃん誰？」

鈍熊が黒髪幼女との遭遇を果たしていた。

…少しだけ時間は遡りクリークは西側の海岸へと上陸した。

相手は学者達Ⅱ頭がいいⅡ武力をあまりよく思っていない（偏見）だろうから

こういう時はやはり見た目が大事なのできっちり正装してから向かった方がいいだろう…

そう考えたクリークは鎧と棍は置いていき黒の三つ揃いに海軍コート、そして先に2小隊程先行させて全知の樹に向かわせるとまづはニコⅡロビンとの接触に向かった。

昨日ロビンの姿を確認した場所へ向かうと確認した時と同じように木に寄りかかり本を読んでいる子供の姿。

…なんて声かけりやいいかな？幼い子供に見ず知らずの大男が声をかける、人を呼ばれてもおかしくない。

とは言えいくら考えていても仕方ないので

「こんにちは、お嬢ちゃん」

としやがんでから無難な声をかける。本から顔を上げた少女は「…おじちゃん、だれ？」

と、こちらをじっと見つめて口を開いた。

艶のある肩までの黒髪に飾り気のないワンピース、そして理知的な光を宿す両の瞳。間違いなく幼少時のロビンであろう。

あら賢そうな…とか、おじちゃん…とか思うも

「おじさんはグランドラインから来た海兵でね、クリークって名前なんだ、お嬢ちゃんの名前は？」

そんな考えはおくびにも出さずにロビンだと断定して話を聞く。

「ロビン」

「ロビンちゃんか、本が好きなのか？」

「うん」

「難しそうな本だ、読めるのかい？」

「うん」

「それは凄いなロビンちゃんは何歳だい？」

「6さい」

「そうか、6歳でこんな難しそうな本を読めるなんて凄いなあ」

「そう」

会話続かねえ…、見事に短文で返してくるなこの幼女お！

しかし6歳という事はアラバスタの時が28歳だったから…今は原作から二十二年前か！

多分28だった筈だけど間違ってたとしても1、2年程度…だよな？

「その本はお嬢ちゃんの本かい？」

「ううんこれとしまかんでかりたの、それからおじようちゃんじやなくってロビン」

「…ロビンちゃんは図書館にはよくいくのかい？おじさんは図書館のクローバー博士って人に用があつてね」

「はかせのおきやくさん？」

「博士を知ってるのかい？よかつたら会わせて欲しいんだけど…」

「わかった、こっち」

そう言つて本をパタリと閉じたロビンは立ち上がり全知の樹の方へ歩き出した。

偶に道中で”妖怪!だの”ようかいおんな”だの言われているのを見かけて

「さつきから子供達が言ってるのは何の事だい?」

「わたしがきみわるいんだつて」

そう言つと自分の腕をフワリと増やして見せる

「へえ：ハナハナの実か…」

「きみがわるくないの?」

「別に悪魔の実なんて海軍にいとそこまで珍しくも感じないからなあ、カフウ!」

「クルルルツ!」

バサリバサリと飛んできたカフウを腕に止まらせ

「この子も能力を持ってるんだよ、動物だけどね」

「わ、わ!」

間近で見る事がないからだろうか少し紅潮した様子でカフウをおっかなびつくり撫でる様子は年相応の様子であった。



## 考古学者 ドンクreek

「はじめましてクローバー博士、海軍本部大佐クreekです」

敵意はないよー、別に捕らえにきたわけじゃないよーと言う意図を込めて右手を差し出す。

「はじめましてクreek殿、考古学者をしておるクローバーじゃ」

クローバー博士も右手を出しお互い握手をする。

「どうも、お噂はかねがね伺っております。お会いできて光栄です」

「いやいや、ただの年寄りの趣味じゃよ、所で海軍本部の大佐殿が何故わざわざこんなところに？」

「いえ、今回は少しお話にきただけですよ、ニコルビアと言う名の女性をご存知で？」

「おかあさんのなまえ…？」

横で話を聞いてたロビンがそう反応しクローバー博士はしまった、という表情を見せる。

「お母さん…ロビンちゃんはニコルビアの娘さんなのかな？」

しゃがんでからロビンにそう聞く、まあ知ってるんだけど。

「うん、わたしがちいさいころにしごとでうみにでてそれっきりの…」

「そっか、一人で偉いなロビンちゃんは」

と頭をポンポンと撫でる。

「クreek殿、場所を変えませぬか？折角の客人じゃしお茶ぐらいなら出しますぞ？」

「そうですね、ではお言葉に甘えさせてもらいます」

そう言って立ち上がりクローバー博士に着いて行く。ロビンも着いて行こうとしたが

「ロビン、お前はここで待ってなさい」

「え、でもおかあさんのことわたしもしりたい…」

「大事な話なんじゃ、頼むから大人しく待っておいでくれるな？」

強く念押しするようにロビンに言いつけてそのまま案内を再開、そうして通されたのは周りに本棚があり書齋のような場所。

「良かったのですか？」

「何の話じゃ、それよりも先程も聞いたが何の用でマリージョアからこんなところじゃ？」

「先程も聞きましたがニコルビアと言う女性を知っていますか？」

「…考古学者としてここに所属していたが4年程前に歴史探索の為に海に出てそれきりじゃがそれがどうかしたのか？」

「ではただ歴史の探索で海に出ただけで”歴史の本文”を探しに海に出たのでは無い、と？」

「”歴史の本文”の解読は政府が禁じておる、用事はそれだけかの？」

「いえ、実はこの”英知の樹”にて古代文字の解読が行われているという疑惑がありましたね」

「何の事じゃ？疑惑があるならここを調べればよからう」

「…本当に調べてもよろしいので？例えば博士、”歴史の本文”解読の研究、その痕跡があったとしましょう。その場合ここはどうなると思いますか？」

「…この学者達は良くても投獄、普通ならば死刑じゃろう、そして研究結果が表に出る事はないじゃろう」

「…万が一、の話ですが本当にそれだけで済むと思いますか？」

「この考古学の聖地、オハラでの古代文字の解読を世界政府が本当に考古学者達の身命だけで済ませるとお思いですか？」

「どう言う意味じゃ？わしらがもし、万が一そのような事をやっていたらとしてわしらが捕縛されるだけじゃろう」

クローバー博士、俺だから言えるけど実際にはそれで済まなかったんだよ…」

「例えば、の話ですがクローバー博士。この英知の樹には地下室があり、そこには”歴史の本文”があつて、ここ科学者達は夜な夜なその解読を行なつてるとしましょう」

「!!…じゃからそのような事は行っておらんと言っておろう」

まあ、ちゃんと調べたから間違いないのだけでも

「”例えば”と言つた筈ですよクローバー博士。」

話を続けます、解説が進んで空白の百年についての解明がなされた  
とします、そしてそれが世界政府によってバレました。その場合それ  
に関わった学者達が無事に済むと思えますか？」

「まあ無事では済まんだらうな、何が言いたいんじや…？」

「これはあくまでオハラがそこまで行き着いた場合の話ですが、その  
ような事になれば世界政府は海軍に対して”バスターコール”の発  
動を要請するでしょう、まあ予想ですが可能性は高いです」

「な…！じや、じやが過去にそのような研究を行なっているのが発見  
された時投獄、死罪はあり得ても”バスターコール”の発動なぞあり  
得んかった、お主の予想でしかなからう！」

予想というか実際そうだったのだが…まあ俺とあと一人しか知ら  
ない事だけでも。

「オハラだから、ですよクローバー博士。」

貴方が先程無関係だと言ったニコルオルビア、彼女のように歴史探  
索の名の下”歴史の本文”を探す者は大勢いた、そしてそういう者達  
を捕縛する度に政府はオハラとの関係を探してきた。

…何故かわかりますか？」

「…この学者達を全員捕らえて空白の百年を探ればこうなるという  
見せしめを行う為じゃらうな、此処が考古学の聖地という事ゆえに  
な」

「言っておきますが学者達だけでは済みません、知り得た人間、知り得  
る人間、知らない人間それらを考慮せず口封じのため、再び解説され  
ぬように、知ろうとすればこうなるぞという見せしめの為殺されるで  
しょう。」

その為の”バスターコール”そして発動された暁には学者達だけ  
では済みません、この島に住まう人も、この英知の樹も、世界中から  
集められた資料も、そして島そのものも焼き尽くし地図から消される  
でしょう」

「愚かじや！それに世界政府はそこまでやるか！！」

そして海軍はそれに加担して学者達だけでは無く民間人も！それ

に各国から集められた人類の叡智を何の感慨もなく消し尽くすというか!!」

激昂したかのようなクローバー博士。ただ海軍は組織である以上たとえ気がすすまなくてもねえ…

「まあ、命令とあれば仕方がないでしょうね。」

世界政府は我々海軍の上にありますし古代兵器復活の可能性とあれば座したままというわけにも行きますまい」

まあ、一度命令があれば拒否しますーというわけにはいかないの…

「な！我々はそんな事など…研究しているものとして古代兵器復活など考えておらんかもしれぬじやろう！」

「考えているいないは関係ないのですよクローバー博士、解説がなされたとすれば古代兵器復活を目論む勢力は絶対に出てきます。」

例え解読した本人が歴史を紐解く為にと研究しても、武器として転用する輩は絶対に出てくるのですよ。古代文字に限らずどのような研究であつてもね…」

鉄条網やダイナマイト、飛行機などが良い例だろう。軍事技術として研究、開発されてなくても利用可能なら転用されるのが世の定め、ちよつと違つかもしれんが

「というわけでクローバー博士、私は今回忠告にきたのです。」

まあ”解読なんて行なっていない”とは思いますが、”解読を行なっていた場合”貴方を含む考古学者達の身命だけでなくこの島そのものを巻き込みかねないという事は覚えておいてください、もしそんな事になつても私は関知しませんので。

では御機嫌ようクローバー博士、そんな事にならないよう私は祈っていますよ」

そう言つて席を立つ。

頼むからこれで思いとどまってくれよクローバー博士、じゃないと原作での惨劇が行われるんだからな…

## 幼女同行 ドンクリーク

クローバー博士との話を終えた帰り際、ロビンが”お母さんの事教えて!!”と詰め寄ってきた。

流石にこれは話さない方がいいだろうと思ったが、やっと掴んだ手がかりだからか全く引く様子はなかったので場所を移してオルビアの現状を話して聞かせる。

勿論話を聞いたロビンは何故なのか、何とかする方法は無いのかと詰め寄り、しどろもどろになりながらも方法としては今はまだ懸賞金は懸かってないのでその前にオルビア本人を探し出して説得するくらいしか現状では方法が無いだろうという事を話した。

話してしまった。

そしてその結果、帰り道にて

「つれてって!!」

「ダメだ、君はまだ幼いし周りの人も心配するだろう?」

「まわりがゆるせばつれてつてくれるの?」

「いや、我々は海軍だから民間人をずっと船に乗せるわけにも」

「おかあさんをとめなきやいけないの! いいからわたしもつれてつて!!」

連れて行ってコールが鳴り響いた

理知的でしつかりした大人しい子だと思ってたが…母親への想いが強いのか随分と年相応になってるといふか何というか…

「…わかった、じゃあクローバー博士が同行を許すのならば一緒に連れてってあげるよ」

これで大丈夫だろう、直接話したクローバー博士だからこそこちらにいい印象は持っていない筈。

考古学者の皆もロビンを大切に思っているだろうし許しが出る筈も無いだろうからこう言っておけば諦めるだろう。

「はかせのきよかがあればいいんだね！わかった！」

「明日の朝には発つのでそれまでに説得できなければ諦めてくれ」

図書館の方へ走っていくロビンの背中を見ながらそう声をかける。

ごめんよ幼女ロビン、クローバー博士が許す事は無いとわかつてるが大人はズルいものなんだ。

すっかりした子とは言え君はまだ幼いしちゃんと原作みたいな考古学者になって主人公達を手助けして欲しい。

オハラ的事件がおこらなかつたとしてその代わりに麦わら一味に入るようにはこちらから誘導しなければならぬが…まあサンジの件も含めてこちらで上手く動くしかないか。

しかしオルビアを助ける方法かあ…

船への道すがら考える

まずどこにいるかがわからないからなあ、レッドラインの向こう側である東の海、南の海にはいないだろう。

ここからカームベルト、グランドライン後半の新世界を横断でもない限り北の海でも無いだろう。

となるとこの西の海カリヴァースマウンテンを越えてグランドラインに入っているかの2つに1つ

・・・いや、原作ではここに流れ着いたサウロは階級は忘れたけども確か本部の人間だったな、面識はないが遠目でそれらしき巨人はマリージョアで見た事がある。

となるとオルビアが居るのはグランドラインの可能性が高いか？

だがまあ見つかる可能性は低いしロビンにはオルビアの事は諦めてもらうしかないよなあ…

「クリーク大佐！お疲れ様です！既に二小队帰投済みです！このまま補給を終えたら明けて午前中に出る予定です！」

「ああ、ご苦労。予定に変更は無しだ。取り敢えず着替えさせてくれ、スーツだと首が苦しくて敵わん、それから後で大尉を艦長室へ呼んでくれ以上だ」

ネクタイを解きつつ報告を受けてそのまま艦長室へ向かう。

大尉に他言無用を言い含めた上で顛末を話し横になると気の疲れからか直ぐに寝入ってしまった。

そして次の朝

「大佐殿おー！お客さんですよー起きてますかあ！大佐殿おー！」

ドンドンドンと扉を叩く音で目を覚ます。

お客さん？クローバー博士が苦情でも言いに来たのか・・・？

などと思いつながら欠伸を噛み殺して甲板に上がり船縁まで来ると

浜にクローバー博士と数名の学者と思しき者達、そして背中と両手に荷物を提げて顔をキラツキラさせた幼女がいた。

…え？その様子に一瞬固まるも直ぐに浜に飛び降り同行していた博士に小声で話しかける

「クローバー博士、一体どういう事でしょうか…」

「どういう事も何もクリーク殿、あなたがこの子の母親を探してくれらるとおっしゃったでな」

確かに言っただけども…

「反対ではないのですか？あの子はまだ幼い、同居している親戚の事もあるでしょう」

「…このまま置いておくのも酷じやろう、あの家の者も快く送り出した。いい厄介払いじゃと思うたのだろう」

「ぐ…」

確かにそうだけでも何で海軍を快く思っていない筈の博士が許可を出した？

「確かにあの子はまだ幼い…じゃから母親には昔から会わせてやりたいたとは思うとったんじゃ」

「ぐ…貴方は我々海軍が嫌いなのでは？」

「…確かにお主の事は気に入らん、じゃが儂らではあの子を海に連れてやってやる事もできんしオルビアを探す事もできん。…説得する事もな」

「オルビアの事を認めてるのですか…？」

「何の事じゃ？それに一晩考えたがお主、命令を受けてここに来たわけでなからう？」

「う…、何でその事を…」

「やはりか、お主のその言葉で確信できた」

「ぬぬぬ、流石学者…やはり頭脳戦では分が悪いか…」

「いや、頭脳戦云々の問題じゃなからうと思うが…お主はもう少し腹の探り合いを覚えた方が良いじゃろう」

「何故わかったのですか？」

「お主ここで”歴史の本文”の研究が行われている事を確信しておつたろう、しかし何故か我々を連行する事なくしかも”忠告”という形で我々の事を止めようともした。

命令できたのであれば態々そんな事せずとも捕まえてしまえばよい話じゃ、もちろん研究に関する物も押収してな」

確かにそつちの方が手っ取り早いし今回俺は命令を受けたのでは無くなるとかオハラの子の悲劇を回避しようかと思つて個人的にここに来ただけだ。

「…わかりました、しかし彼女を船に乗せる事は反対です。

幼いのもありますし危険でしょう、もし私が悪い人間だったらどう責任をとるおつもりですか」

「あの子は幼いが聡明な子じゃ、お主が悪人かどうかぐらいわかる。

それにお主ならばあの子を守ってくれるじゃろう？」

乗せるつもりはなかったのだが…しかし自分からクローバー博士が認めたら乗せると言った以上約束を破るのは気がひけるし…

「はあああ、わかりました、彼女は我々が責任持つて母親の元へ連れて行きましょう、ただ彼女の母親が捕捉できるかどうかはわかりませんが」

クローバー博士の真つ直ぐにこちらを見る眼を見て思ったが説得は無駄だろう。

「それからオルビアに会った時この手紙を渡してほしい、これで変に話がこじれる事もなからう」

「わかりました、オルビアに逢えたなら渡しませう」



「ではクリーク殿、ロビンの事をしかと頼みましたよ？」  
そう言ってクローバー博士はニカツと笑ってみせた。

そうして船に一人、新しい同行者ができたのである

## 幼女と熊 ドンクリークさん

大佐殿の気紛れによって船に新しい同行者が増えた。

今も大佐の肩に乗って水平線を眺める僅か6歳の少女、考古学者見習いのニコロロビンちゃんだ。

幼いながらも頭の回転が早く船に関する事もスポンジが水を吸うかの如くどんどん覚えていき知識も並みの大人顔負けのものを持っており一生懸命船の仕事も頑張つてこなしておりそんな彼女の姿にいつしか乗船に反対していたものも居なくなった。

そんな彼女は母親を捜すためにこの船に乗せてもらったらしい、何でも幼い頃に母親が海に出てそれきりとの事で渋る大佐殿を拝み倒して乗船させてもらったとの事だ。

大佐殿曰く”連れて行くつもりなかったのだが一度約束した以上破る訳にもいかないだろ…”との事だった。

でも大佐殿、あなた結構彼女に甘いですよ？今も肩に座らせて色々指差しながら教えてますし偶に数学を彼女から教えてもらつてる姿も見ますし口ではなんだかんだいいつつもそこまで邪魔には思っていないのでは？

：なんかパスクア大尉が微笑ましい物を見るかのような目でこちらを見てる

どうも皆さんドンクリークです。

オハラを出て支部に船を返してマリージョアを抜けマリンプォードにとんぼ返り、そのままさっさとベアトリス号に乗船して約束通りロビンの母親探しに出航してはや数ヶ月。

本当は西の海を暫く回ってからグランドラインに入る予定だったんだけどね。

「おじさん、またかいぞくせん」

「旗はなんだ？ロビン」

「つらなるどくろのしたにあかもじ」

「よし、情報班に連絡を！それから停船命令を海賊船に送れ！」

「おじさん、むごうのたいほうこつちむいた」

「む、撃つてくる気か。右舷砲門開け！但しまだ撃つなよ！」

「情報班から連絡ありました!!懸賞金2000万、”乱れ撃ちのパルサー”率いるパルサー海賊団です！主に一般市民や商船からの略奪により危険度中、優先度高です！」

「札付きか、よし！相手が撃ってきたら撃ち返して構わん！相手からは俺が防ぐ！」

そう言いながらダウンツ!!と相手が撃ってきた砲弾を

「小断(こだち)!!」

と嵐脚の腕バージョンで迎撃しつつ反対側の腕でロビンを軽く抑えながら指示を出す。

「おじさん、かいぞくせんこつちにくる」

「主砲用意！拡散弾を装填しろ！引きつけてから撃て！」

そうして近距離で拡散弾の直撃を受けた相手の船は船体のあちこちに穴を開けなすすべも無く沈んでいった。

その後賞金首であるパルサーなにがしを引き上げ牢に叩き込むと再びロビンへの教育に戻るのであった。

いや、俺がちゃん付けするとムツとした顔するんだもん…

おかあさんへ

ろくさいになりましたロビンです

オハラをでてもうすうかげつになります

さいきんはふねのこともいろいろおぼえました

こうこがくのベンキようもはかせがほんをもたせてくれたのでじゅんちようです

クリークおじさんがとてもよくしてくれています

でもおとななのにするうががにがてなのでわたしがおしえています

わたしがせんせーです、すごいでしょ

おじさんはすぐくおおきいのでたまにかたにのせてくれるけどわたしがでつかくなつたきがしてすごいです

たたかうときもでつかいてわたしをまもりながらたたかってく

れます

「みんなからまもってもらってばかりだな…」

その日の夜日記を書いていたロビンであったがはたと気付く

明日あたりおじさんに戦う手段でもおしえてもらおうかな?と考  
えるロビンであった

翌日そういう事を伝えてきたロビンに対し”取り敢えずもう  
ちよつと大きくなってからな?”としゃがんでから諭す大男の姿が  
あった。

そしてマリنفォードへの道すがら、あつという間に年も明け諸々  
の報告の為マリنفォードへと一時帰還する頃となってしまった。

オルビアの捜索やら海賊の捕縛、注意勧告やらで結局東の海には顔  
を出す事が出来なかった…

来年こそ東の海に行こう、埋めてある悪魔の実もなんとかしなきゃ  
いけないし。

…見つかってないよね?

ああ、シヤボンデイにも顔出さないと、俺以外に原作知識を持つ  
てる”あいつ”の進捗も確認しなきゃいけないしな。

「おじさん、マリنفォードってどんなところなの?」

艦長室の机で書き物をしながらそう考えてると傍の子供用に作っ  
た椅子に腰掛けて本を読んでいたロビンがふと顔を上げて尋ねてき  
た。

「マリنفォードは海軍の本拠地だな、中心地は無理だが海軍の家族  
が住んでる外町なら見て回れるだろう」

「おじさんもいっしょにくるの?」

「残念ながら俺はお仕事があるから一緒には回れないなあ、まあパス  
クア大尉をつけるから一緒に買い物でも行つてくるといい」

「むう…おしごとならしかたないよね、たいいさんといっしょにみて  
くる…」

若干気落ちしたように言うロビン、すまんな元帥やら大将やら会う  
用事が目白押しなんだよ…

しっかしオルビアは一体何処にいるんだろう、捜索願いは出してる

のだが全然引つかからないしグランドラインにいるという推理は間違ってたか？

そんな事を話してるとズズンと船が揺れた、この揺れは接岸したかな？

コンコン、と部屋がノックされ案の定マリリンフォードの接岸を知らせてきた為停泊中の補給や交代での休暇、入渠に關しての指示を出し両手を広げたロビンを抱えて肩に乗せそのまま外へ向かうと

「おやアゝその子どうしたのオ？」

「なんじゃ、嫁さんの前に子供が出来たのか」

「ちよつとセンパイ、どこで攫つてきたの？」

三者三様好き勝手に言う三色お化けが待ち構えていた。

「母親探しに付き合つてるだけだ。お前からでかいんだから怖がるだろうが近づくな、サカズキなんか特に顔が怖いんだから」

” お前が言うな” と三人から返された、げせぬ。

ロビンをパスクア大尉に預け報告と今後の方針を話し合う。

取り敢えず前回話し合いをした懸賞金の適正化等は上手くいっているようだ。

危険度、優先度を設定し海賊を発見した場合情報班に問い合わせる  
停船勧告、威嚇射撃、攻撃と段階を踏んでの捕縛。

そして海賊旗を掲げるだけの場合は注意勧告、それでも掲げ続ける場合は危険度、優先度共に低の賞金首として手配

これによって無用な殺生は減らせるであろう。

そしてやはりサカズキの方には世界政府から接触があったらしい。

とは言つてもまだ役人との懇親会などへ招待された等のもの  
こちらに口出しのような事柄では無いらしい。

これなら数年内には海賊に対する制度を次の段階へ進められるかもしれないな

そうして中將三人との軽い話し合いを終えその場で別れると次に向かうのは技術班、船を見てもらうのと武器のメンテナンス、カフウの経過報告などである。

## 黄金未満 ドンクリークさん

ゼファアのおっさん、センゴク大将、ガープ中将にお土産渡すついでに諸々の報告を終え一週間程後に再びマリンスフォードを発ちロビンの母親探しに出航

ついでに

「ロビン、誕生祝いにこれをやろう」

思いつきり私的目的で技術班に依頼して作ってもらった黒い革でできた鞆をロビンの7歳のお祝いにプレゼントする。

腰に装着する事も背負う事も出来るし肩にかける事も出来るように作られており大きさは二、三冊の本が入る程度で外側には大きいポケットが1つと小さいポケットが数個ほどついたものだ。

素材にはなめした海王類の皮を使用しており軽くてとても丈夫でちよつとやそつとじや破れる事も無く優れた耐水性、防汚性を持つ。

そして鞆の横についたストラップはついてる紐を引つ張ると大音量でアラームが鳴り出す仕掛けである。

「わあ！ありがとうございます！だいじにするね！」

「喜んでもらえて何よりだ、使い方も教えておこう」

と頭をわしわしと撫でて使い方を説明し、それ以降何処に行くにも鞆を背負ってるのが見られるようになった。

そして数隻程の海賊船を捕縛、警告し数日が経った頃

「大佐あ！目的地が見えましたぜ！」

「よし！予定通り60番GRに向かえ！」

グランドライン特有の磁気を持っていない島”シャボンディ諸島”への到着を見張りが告げた。

この島は島と言ってもヤルキマンングローブと呼ばれる樹木の集合体で独特の気候を持つ島であり天竜人、職業安定所、無法者など”色々”複雑な事情を持つ島でもある。

60番GRに存在する海軍の駐屯地にて捕縛していた海賊達の引き渡しを済ませ色々見て回りたいたいと言うロビンにこの島での注意事

項、特に天竜人と人攫いに気をつけるように言ってイシズミと三人ほど海兵をつけてついでにカフウにも上空からの監視をお願いして送り出した後用事を済ませに5番GRに向かう。

明確に決まってるわけではないがこの諸島はそれぞれ番地と言い換えてもいいGRと呼ばれる番号があり1～29番は無法地帯、30～39番は繁華街、40～49番は観光関係、50～59番は造船所、60～69番は海軍駐屯地、70～79番はホテル街が多い傾向にある。

これから向かうのは無法地帯、それ故絡まれるのを減らす為海兵服を脱いで私服に着替え愛用の棍を背中に括り付け目的地に向かう。

目的地に着くまで何度か因縁をつけられるも適当に叩きのめし到着したのは一軒のボロ屋、ドアを開けると

「オラアッ!!」

武装色を纏って黒く染まった拳、左で受け止めるとそのまま掴み右手を下から巻き込んで

「そらあッ!!」

背負い投げで叩きつける

「があッ!!」

「修行は順調みたいだな、”テゾーロ”」

「ここじゃ修行相手には事欠かねえからな、おおいてて、ちよつとは手加減してくれよ…」

将来”新世界の怪物”、”黄金帝”等の異名を持つことになった男、”ギルド・テゾーロ”が床に座り込んで地面に叩きつけられた背中をさする姿があった。

俺にとってこの男は恩人である。

俺が初めて愛した女、ステラを救ってくれた事とその後の面倒を見てくれる事。

他にも今の生活の面倒見てくれてる事とか戦い方を教えてくれた事など色々感謝はしてる、面と向かつては言わないが。

出会いは最悪だった。

何せ開口一番”女は預かった。詳しく聞きたければ付いて来い”  
だったからである。

勿論頭に血が上って殴りかかったが、逆に組み伏せられて事情を  
懇々と話し聞かされ、ステラが穏やかな顔で家政婦をしてる写真を見  
せられてようやく冷静になった。

そして俺とステラの生活の面倒を見る代わりに色々やってほし  
いと言われて聞かされたのはこの世界にとって劇薬とも言える知識、  
曰く”俺は未来を知っている”との事だった。

勿論あまり信じていなかったが今のところ海賊王に関する事柄は  
合っていたし他にも否定しきれないような事柄を聞かされており今  
は半信半疑で受け取っている。

そしてその上でこの男は俺に対して”お前は将来ビッグになる男  
だ、未来を知ってる俺が保証する、お前はやれる男だ”と言っただけ  
で生活の面倒を見る代わりに取り敢えず戦闘訓練や色々な知識の習  
得などを課されたのである。

そうして現在

武装色を纏った両腕で殴りかかるも受け流されバランスを崩した  
ところに打撃を受ける。

咄嗟に頭を庇い衝撃に備えるも攻撃が来たのは胴体、衝撃を受け流  
すべく後ろに下がろうとしたが脚を踏まれており逃がさないつもり  
らしい。

そのまま地に倒れこむように見せ地を這う姿勢から足払いを繰り返すも

「いっ…てえ!!!」

鉄を蹴ったかのような衝撃に一瞬動きが止まりそこを突かれて眼  
前に拳を突きつけられ目の前の男は

「だいぶ仕上がってるじゃないか…」

と満足そうに言った。

テゾーロの成長ぶりに脅威を覚えつつも感嘆しつつ、流石将来新世



界の怪物と呼ばれるだけの事はあるなあ、とこれからに想いを馳せる。

「兎に角今はまだ基礎訓練と覇気の習熟が優先だろう。」

覇気の習得はゆっくりやる予定であったが既に両手に武装色の覇気を纏わせているところを見るとこの一年程で習後自体はしてしまったようである、ぱねえ。

ただ現状はまだ少しムラがあるようなので後は安定的に使えるようになるだけである。

劇中では猛威を振るっていたテゾーロが所持していた能力”ゴルゴルの実”に関しては早く訓練を行いたいところであるが情報が上がってこないのの後回しだな。

というか何処で手に入れたんだろ？（ドフラミンゴのオークション襲撃で手に入れた）

最終的には映画のように一大エンターテインメントシティを営するビッグスターになって欲しいところである。

ところでエンターテインメントって何すればいいんだろ、なんかのショーとか？

## 旧・50話記念 もしも彼が海軍に入らなかつたら

「シャハハハハ!!これが生まれ持った魚人の力だ!!」

天はてめエら人間を差別し力を入れて与えなかつた、だから下等なのさ!!

生まれた瞬間から既に次元が違うんだよ!!」

東の海 コノミ諸島アールンパーク、今ここでまさに二人の男が激突せんとしていた。

かたや20000万の高額賞金首、魚人でありグランドラインにてかつて名を馳せていた”ノコギリのアールン”

かたや懸賞金こそかかってないものの東の海で名のある海賊を討ち果たしてきた”麦わらのルフィ”

「だから何だー!そんなの自慢すんな。」

…別に噛みつかなくても石は割れるぞ?」

「そうそう、身体能力に胡座かくのは良くないんじゃないかって言わなかつたっけ?」

まさに戦闘が始まると言うところに響いたのは一人の男の声。

「テメエ…なんでテメエがここにいるんだ!!クリークよお!!」

いつのまにか屋根の上には腰掛けていたのは一人の大柄な男。

黄金の鎧の上から黒いロングコートを羽織った男は地面に降り立ち戦おうとしていたルフィの側に来ると

「戦おうとしてるとこ失礼、ちよつとここは譲ってくれねえかな?」  
と頼んできた

「おい、今クリークって言わなかつたか!」

「ああ、間違いねえ!あの黄金鎧!海賊喰らい”だ!なんでこんなとこにいやがんだよ!」

賞金稼ぎコンビのヨサクとジヨニーが騒ぎだすも

「なんだお前?こいつはうちの航海士を泣かしたから俺はこいつをぶっ飛ばすって決めてんだ!引っ込んでろ!!」

「おいクリーク！何でテメエがここにいるかって聞いてんだろがあ  
!!」

引っ込んでろと言う妻わらと今にも乱入者をぶん殴りそうな勢いのアーロン

「よおアーロン、久しいじゃねえか。」

何で俺がここにいるかって？お前をふん縛って連れ戻してくれとある人からの頼みでな」

「ああ？上等だ！返り討ちにしてやろうじゃねえかよ！」

「まあ待てよアーロン、先客がいるらしいから先にそつちを相手してやったらどうだ？」

「そうだ！俺がぶつ飛ばしてやるから覚悟しろ！」

「ツツ：いい度胸だクソゴム野郎！クリーク！てめエはそこで待ってやがれ！このゴム野郎が終わったら次は貴様だ！」

話がまとまったようなので二人から離れてギャラリーに混ざる、すると

「ねえあんた、アーロンの知り合いなの？」

そう聞いたのはナミ

「まあ知り合いというか身内というか：ところで嬢ちゃんよ、俺がここに来た時にはこういう状況だったんだが何がどうなってるのか教えてくれるか？」

そう聞いてきた男にナミはアーロンの非道とルフィがやって来た時の事、先程までの状況を話して聞かせると

「：すまん、アーロンに変わって俺が謝罪する。」

男が頭を下げた、そのでかい体を縮こめて詫びを入れたのである。

「身内だか何だか知らないけど別にアンタに謝られても困るだけよ、  
というかその男二人は何で固まってんのよ？」

ナミの声かけに対してようやく再起動を果たしたヨサクとジョ  
ニー。

彼らは賞金稼ぎ故に知っていた、今はまだ絶対に無理だろうが将来こんな相手でも倒せるようになってえな、と二人で眺めた手配書の束

の中にあつたそいつの名は

「ナミの姐さん！そいつはクリークですよ！鬼人”のクリーク！懸賞金額9900万ベリーの超大物ですよ！」

「自らは海賊と名乗らず”海援隊”なる集団を率いて賞金稼ぎの真似事をやつてるグランドラインの賞金首つすよ！何でこんなところにいやがるんだあ!？」

「さつきも言ったがある人に頼まれてアーロンを連れ戻しに来たんだよ、だが…なかなかいい勝負するじゃねえか、俺が手を出すまでもねえか？」

取り敢えず倒れている魚人達をまとめて建物の敷地外に運ぶ、後は部下が船まで回収してくれるだろう。

アーロンとルフィの戦いは白熱していたがそれも二人がもつれ込んで入った建物の天辺より飛び出した長く伸びた脚が振り下ろされその衝撃により戦っていた二人は建物ごと巻き込んで崩れた事により決着した。

「あー、やっぱ負けちまったか」

「あ、何だお前やんのか？」

血だらけになりつつファイティングポーズをとる麦わらに苦笑しつつ

「いや、今回はほんとにこいつを連れ戻しに来ただけだよ。

しかし昔より弱くなっているとは言えアーロンを打ち負かすとは思ってなかったぜ」

「ふん！ナミを泣かせるからだ！というかお前結局誰だ？」

「…俺はクリーク、海援隊のリーダーをやつてる」

「そうか！俺はルフィ！海賊王になる男だ！」

「ほお、海賊王とは大きく出たな。

だったら早くグランドラインに入るこつたな、今やあちこちで海賊達が海賊王の宝目指して鎬を削ってやがる、お前さんもさっさと登ってくるこつたな」

「他の奴らは関係ねえよ、俺がなるって決めたんだから後は目指すだけだ！」

「ははっ！そりゃいいや！」

よし、そんなてめえにアドバイスしてやろうじゃねえか。

お前さん防御が下手というかゴムである事にかまけて防御をしようとしないうだろ。

そんなお前さんにいい事を教えてやろう、取り敢えず俺に一発打つてみな」

「なんだ？結局やんのか？まあいいやゴムゴムのおブレットお!!」

長く後ろに伸ばされた腕が反動で戻ってくるところで力を加えて加速した衝撃を相手に叩き込む技である。

” 魚人拳法・拝浪拳 ”

相手の後ろに回り込み左右両側からの手刀を相手の脇腹に繰り出す

「がはっ！いてええ!!なんでだ!？」

「ちよつとあんた！怪我人になにしてんのよ!!」

「あ、やべっ

兎に角世の中には悪魔の実の能力を無効化する方法は何個かあるって事だ。

これに懲りたら防御をちゃんと練習するこつたな」

そう言い残すと気絶して倒れているアーロンを背負い素早く空中を蹴って停泊している船へと向かう

” すごい！空飛んでる!” やら” な！なんだあいつ！悪魔の実の能力者かあ!?” やら聞こえるが無視してさっさと船に戻る。

アーロンパークにいた魚人達は全員回収できたよう

「ヌアハハハ、全員回収したぜボス」

骸骨がドク口をカタカタと鳴らしながら報告してきた。

「おう助かったぞジョーク、怪我してるやつは治療して無事な奴は取り敢えず船倉に放り込んで」

「ヌアハハ、了解したぜボス」

そう言い残すと骸骨は再び回収した魚人達の方へと向かっていった、兎に角背負ったアーロンの治療を優先しねえとな。

ふつと意識が浮き上がる感覚

目を開けると木製の天井が映る、どこだ？いつもの俺の寢床じゃねえ…

起き上がると身体中を走る痛みに思わず顔を顰める、それと共に何があつたかを思い出し

「くっ…そお!!あのゴム野郎!下等種族の分際でえ!!!」

サイドテーブルに思いつきり拳を叩きつける、それと共に散乱する水差しや薬、包帯など

「負けたのか、おれは…」

思い出すのはあの男の真っ直ぐな目、危険を顧みず仲間を助けようとする男の姿

「おうおう、荒れてるじゃねえかア—ロンよお」

「っ…!」

響く声に思わず身構える

「お前こつちにいた頃より弱くなつてんじゃねえか?まあ8年近くも戦いから離れてりや鈍つて当然だろうけどな」

「クリーク…てめえが俺を連れてきたのか…」

「言つたら、ある人に頼まれて連れ戻しに来たって、後数日もすれば魚人島に着く…いや、魚人島はマズイか?一旦どつかに身を隠すか。」

お前一ヶ月近く眠つたままだったんだぜ?このまま起きねえんじゃねえかと思つたぞ」

まあ、そんな事になれば俺が怒られるんだけどよ、と宣う大男

揺れてる気がしたがやはり船の上だったか…

「くそっ、てめえに助けられるとはとんだ失態だぜ、礼は言わねえぞ」

「はっ、気にするなよ”お義兄ちゃん”」

「!!てめえやっばぶつ殺す!!そこになおれや!」

「ははっ!軽い冗談だ何歳下だと思つてんだよ。」

それよりお前を倒したゴム人間な、奴もグランドラインに入ったぞうだぜ?聞いて驚け”3000万ベリー”だぞうだ」

「けっ、俺を倒したんだからそれでも安すぎるくらいだ」

「お？やけに素直じゃねえか。」

てつきり目が覚めたら奴の息の根を止めに行くかと思っただが」

「…別に気が乗らねえだけだ、話はそれだけか？俺はもう少し寝る」  
そう、ただ気が乗らないだけだ。

別にあの姿を見て昔を思い出したとかではない、そう気のせいだ  
「そうか、まあ兎に角ゆっくり養生しろ、何か欲しいものがあつたら言えよ？」

そう言うときクリークは俺が殴った跡を片付けて部屋を出て行った。

そうして時は流れて二年後、グランドライン魚人島ギョコンコルド広場にて

広場外周には、国王や王子達を心配して大勢の住人が集まっていた。

王子達は、ホーデイーを筆頭とした新魚人海賊団に捕えられ軍の兵士、大臣、王族が負け、もうこの国に戦える者達はいないとオオセの魚人であるゼオが言い放った。

「公共の広場でバカ騒ぎして…品のないコ達ね!!お調子にお乗りでないよ！ホーデイー・ジョーンズ!!」

国家転覆を企み己が王になり全ての人間を抹殺せんとするそんなホーデイ達新魚人海賊団一味とそれに同調した、させられたならず者10万人の前に立ちはだかったのは一人の魚人

「懐かしい顔だ…何の用だ！マダムシャーリー!!」

「粹がってるお前に一言いわせて貰いたくってねえ!!ある男が魚人島を滅ぼす」と出たんだよ私の占いでね」

「実質滅ぼす事になるかもな、そこに俺が映つてたのか!？」

「いいえ、この島を滅ぼすと出た男は”麦わらのルフィ”だよ…!!」

「?!…何が言いてエんだ!!」

「わかる事はこれだけ…あんた達じゃあなかった!!」

そうか！成る程！と騒めく話を聞いていた周りの納得に対しホー

デイは静かに右手を上げるとマダムシャーリーに超高速の水弾、”撃水”を放った。

が

本来ならシャーリーを撃ち抜いていたであろうその攻撃は直前で大きな音を立てて弾かれた

「おいおいおいホーデイ：てめえ誰に断つて人の女に手え出してやがんだあ？」

そこにいたのは一人の巨漢。

筋骨隆々としたその男は人魚の中でも大きい方に分類されるマダムシャーリーと同じくらいの身長を誇りその身に纏うは黄金の鎧。

「クリークさん！戻ってきてたの!？」

「悪いなシャーリー、遅くなった」

「てめえクリーク！どこにいやがった！人間の分際で魚人達に肩入れし拳句の果てには人間と魚人達の懸け橋になりたいなどと戯言を抜かす偽善者があ！」

「おいおいおい、別にそんなこと言った覚えはないんだがな。」

俺はただ愛する女が害される事の無い世界にしたいとしか言つてねえぞ？」

「変わらねえよ！だいたいシャーリー！てめえも気に入らねえ！人間なんぞに肩入れしやがって、何が予言だ馬鹿馬鹿しい。」

おれはお前の兄とは違う!!そりやあガキの頃はお前の兄、アーロンは”魚人街”中の憧れだった!!

だがおれ達は力を手に入れ!!実際今じゃ”アーロン一味”の名は結束の為の空っぽのシンボルでしかねえんだよ!!

見ろ！この規模を！見てろ！この実力を!!おれの作戦は10年前からすでに始動してる!!

教えてやろうか…！このリュウグウ王国の…お前らが愛して止まねエ王妃!!



オトヒメを殺したのはおれだ!!!」

「…だとよ、”アローン”」

クリークの傍に控えていた男が深く被っていたフードを下すとそこに居たのは

「な!!アローンさん…」

「やっぱりか、クリークの野郎に言われて思ったが話が上手すぎると思っただよ…」

大方人間を雇って騒ぎを起こしそれを犯人に仕立て上げたってと何か?

…なあホーデイよ、人間嫌いは結構だがなぜ同胞たちまで手にかける?」

「…今更出てきて何の用ですかアローンさん、しかも人間如きとつるんでるなんて見損ないましたよ…」

それに同胞?おれは人間如きに肩入れする奴は同胞だなんて思っちゃいけませんよ!

だいたい邪魔だったんですよ!なあしらほしよ!!人間への復讐を”悪”とし、人間と仲良くしようと島中に触れ回り!!それを実現しか

けたあの女が目障りだった!!

お前の母親は死んで当然の女だった!!だから殺したのさ!!犯人はおれなんだよ!!」

そう問いかけるもその事実を”知っていた”と答えるしらほし、彼女は母の言いつけを守りその事実を数年間一人ですつと抱え込んでいたのである。

それに対しホーデイはそれを嘲笑すると見せしめに捕えた王達に攻撃を加えその姿に周りのならず者たちも同調して馬鹿にしたように笑う。

そんな景色に子供達が言い出した

帽子をかぶった海賊はいつこの島を壊しに来るのか…

実はマダムシャーリーはある予言をしていた。

”ルファイが将来的に魚人島を滅ぼす”

そんな子供の言葉に周りの大人たちも王が殺されるより、今の状況

よりはマシだ、と同調して周囲に響き渡り始めたのは“麦わら”を呼ぶ声。

「呆れたぜ…ウラにもすがるとはまさにこの事、第一シャーリーの占いは今回ばかりはウソだ…」

「虚しい叫びだな…」

「血迷ったバカ共を現実に引き戻してやろう!!よく見ておけ、先代国王ネプチューンの頭が飛び散る様をオ!!そして次はクリーク!ためエとアーロンさん…いや、アーロン!!アンタも殺してやるよ!!」

今にも王を殺そうとするホーデイ

そして「そろそろか…」とぼそりと呟くクリーク

そこからは怒涛の連続であった、“麦わらのルフィ”に大声で助けを求めたしらほし

それに対し隠れて機を伺っていたルフィが飛び出しホーデイに一撃を加え

同じく隠れていたナミが奪われていた人間と魚人達の交流を後押しするとしたためられた天竜人の書状を奪い返し

ロビンが捕えられていた王たちの拘束を解き

麦わら達の船“サウザンド・サニー号”が広場に集まっていたならず者達に砲撃を加えた隙に捕らわれていた王達を救いだした。

ここまでの流れはすべてジンベエ、麦わら、クリーク、アーロンでの一計であった。

勿論麦わら一味とアーロンの間にはひと悶着あったが今は置いておく。

これにより“しらほしの願いにより国王を助けた”という事実を作り“魚人をブチのめす凶暴な人間”というイメージを無くす狙いがあった。

そしてその企みは成功したようである。

「じゃあ俺達もいくか」

「なあクリークよ、おれは人間が嫌いだ」

「知ってるよ、今更それがなんだ」

「だからこれは同胞まで手にかけるホーデイを止めるために戦うだけ

だ、決してテメエやクソゴムを助けるための戦うんじゃねエ」

「わかったわかった、で、それがなんなんだ」

「・・・別に、ただそれだけだ」

そう言うのと崖から飛び降りて広場に向かうアーロン。

それに続こうとするも

「ねえクリークさん、アタシには何もないのかい？」

「あー：アーロンの事黙ってて悪かったな」

「その事じゃないんだけどねえ：まあいいわ、いつてらっしやい無事に帰ってきてね？」

そう言うのとシャーリーは自らの大きな躰でクリークを抱きしめ首元を甘く咬む。

「ああ、お前が俺を助けてくれたあの時から俺の命はお前のもんだ。

此処で待つてくれ、お前が愛していると云ってくれた男の帰りを」

シャーリーの頬に口づけを落とすと濡れたように光る尾がしゅりと解かれクリークはアーロンに続いて崖から飛び降りた。

その場は乱戦であつたが全体的には麦わらの一味が優勢に戦闘をすすめていた。

緒戦の麦わらの活躍により半数近くがダウン、クリークは持ち前の火力で辺りを薙ぎ払いアーロンはこの二年で再び鍛えなおした技を振るう。

だがその時

空から船が落ちてきた

魚人島本島と同規模の大きさの“ノア”と呼ばれる巨船がまさに島ごと潰さんと迫っていたのである。

これはホーディと協定を結んでいたある悪魔の実の能力を持った男の仕業であるがそれは今は置いておこう。

兎にも角にもそのままにはできなかつたところ落ちてきている船の目標となつているしらはしがまず飛び出した。

それに続いて飛び出したのは何かを思いついたのかホーディ。

更にその二人を追って麦わらが飛び出し

「バカッ！ゴム野郎！魚人相手に水の中で戦おうなんぞ何考えてやがるッ!!」

そう言つてアーロンまで飛び出していった。

「ええ…まあいいや兎に角何とか船止めれねえか？」

周囲を見回すと建物ほどの大きさの鎖を必死で引つ張る民衆たち。

「加勢するぞ!!」

鎖を脱ぎ捨て素早く近づくと鎖を掴む、本気で力むと壊れちまうからな。

「そおおおおおらあつ!!」

周りの群衆と一生懸命引つ張るも足場が悪い、空中に浮いた形の為に幾ら力を込めようが引つ張りきる事が出来ないのだ。

そうこうしていると

「正気かよオイ…一ミリも動くわけ…馬鹿な!」

“ノア”の動きが少しだけ速度を落としたのである。

とは言え微々たるものであり“ノア”自体は未だにしらほしを追いかけている。

ホーデイの眼下には鎖を引く民衆に交じる筋肉をギチギチと鳴らしながら鎖を全身に巻き付けた一人の男の姿。

「ツツ…矢武鮫エ!!!」

人一人くらいなら簡単に撃ち抜く水弾、“撃水”がホーデイの腕の一振りでも発せられ民衆に向かって放たれた。

「魚人拳法・連環撃水陣!!」

鎖を巻きつけたまま素早く構え、拳からの衝撃を連続して放つ事により何とか相殺

「くそっ…まあいいてめエは後だ」

そう言い残してホーデイは甲板めがけて素早く泳ぎ去っていった。

あつちはルフィとアーロンが行ってるから大丈夫だろう。

…詳細覚えてないけど大丈夫だよな？

なんとこの男、絶大なアドバンテージになり得る原作知識を今はも

う殆ど覚えていないのである。

まあ30年近くの時が経つというのもあるし何よりこの男の今までの人生がそんな知識など不要と言わんばかりに波乱を起こしていたからであるが。

まあ原作主人公と鍛えなおしたアロンなら負けは無かろう、と眼下の戦いに目を向ける。

取りあえず目に付くのは大声で船長に見捨てられたと泣き喚ぐデカブツ

：なんだつたつげとにかくナントカ：ああ思い出したワダツミだ、アホみたいな大きさの巨人にも引けをとらない大入道。

「あんたらー！ここは任せるぞ！」

「任せてくれ！クリークさん！少しでも姫様に向かう速度を抑えてやる！」

ホーディ一味の幹部による誤魔化しと薬によって強化を遂げた模様でワダツミは自分と同等以上の巨体を持つクラーケンを一撃で地に沈め

「敵はろころろろろ！！！」

と大きく叫ぶ：少し大人しくしてもらおうか。

「ここにいるぞおおおおお！！魚人拳法・鮮風飛瀬撃！！」

鎖から飛び降り空中で回転しながら手刀で後頭部の首付近を攻撃、こちらに気づいて拳で迎撃するワダツミであったが威力を拳だけでは殺しきれずバランスを崩す。

「魚人拳法・鉄漸疾帆靠！！」

地面に降り立ち瞬時に間合いを詰め、背面部で体当たりを加えその巨体が弾き飛ばされたところに

「魚人拳法・八卦！湊導掌！！」

両の掌を合わせたの双掌打：これで少しはダメージはいるか？

「んんんんもう怒ったどろろろ！！威嚇！！」メガ入道」

などと思っていると空気を取り込んで巨大化した、まあ攻撃は効いてるようだが。

「ぶくく驚いたか？俺はトラフグの魚人なのら！」

トラフグ：ああ、威嚇で膨らむ奴か

「まだまだだな、もつとでけえの見たことあるぞ？」

具体的にはゲッコモリアのところで見た氷漬けの化け物とか黒ひげの野郎のこの山みてえのとか

「なんらとくくく!!!ならこれでろうらくくく!!!」

とさらに膨らむワダツミ、そうこうしていると魚人島本島に避難勧告が響き渡り国民の皆がノアが落ちてくる現状とそれを何とかせんと奮闘する麦わらとアローンの状況を知りそして語られるホーデイの正体。

俺の所為だと自らに怒るアローン、そしてそんなアローンに“俺が、俺達が憧れてた男はもういねえ!!”と悪し様に罵るホーデイ。

そんな中で麦わらは懇願される

「過去などいらない！ゼロにしてくれ!!この島をタイヨウから遠ざける亡霊を消してくれ!!お前の手で！魚人島を“ゼロ”に!!!」

「兄ほし!!おれの好きにしたいいんなら安心してろ！」

広場に降りた時からおれ達はジンベエと：ついでにアローンも一緒に魚人島は誰にも傷つけさせねエって決めてるんだ!!全部任せろ兄ほし、友達じゃねエか!!」

そう言うといよいよ戦闘は佳境に入り

「上は決着したか…」

ホーデイが麦わらに敗れたとの声が響く。

「これれどうら!!」

「まだやってたのか：ああ驚いた、凄いものを見せてくれたお礼にこつちもいいものを見せてやるよ」

「ぐふふフグフグ…このまま転がってみんなペシヤンコにしてやるのら！」

「ひとつ教えておくがなデカブツ、俺の使う魚人拳法はベースが魚人空手なんだよ」

「ぐフグフグそれなんらろ」

「魚人空手の神髄は辺り一面の水の制圧。

それに対し俺の魚人拳法は空気中の振動、謂わば“波動”の制圧を

神髄としている」

そのままワダツミの巨体に両の掌を押し当てる

「それがなんだっていうのら!!」

「つまりだ魚人拳法絶招・浸透水鏡双掌!!」

内面に衝撃を与え内部を破壊する掌打を放つ、その威力は今までの技よりも一段階上でありワダツミは上から地面に叩きつけられた。

「ブオフェ~~~~!!オオ~~~~エ~~~~!!」

「わざわざ波動を通しやすい空気を大量に取り込んだテメエはやりやす敵って事だ」

「オ:オオ:オブ空気が:もれ:ブフオ~~~~!!」

さしものワダツミもこれにはこらえきれず吸い込んだ空気を全て吐き出し

「さて、これでとどめだ。待たせてる女がいるからさっさと帰りてえんだ

魚人拳法奥義・海王招式!通天砲!!」

丁度いい位置に来たワダツミに放つのはアッパーパンチのような下からの突き上げ技である。

覇気を纏わせ威力を底上げし波動を用いたその技は相手を内部と外部から破壊する魚人拳法の奥義である。

「じゃあなデカブツ、そのデカさだけは一級品だったぜ」

そう言いつつクリークは飛んで行くワダツミを尻目に決着がついた広場へ、自身の愛する女の元へ戻るのだった。

## 世界貴族 ドンクリーグ

「おい、なんか海兵の巡回らしい、1番GRから順番に回ってるらしいぜ？」

明けて翌日シャボンディ諸島12番GR

「げ、ここ一年ほど無かったのに…何処の誰か知らんがまた面倒な事を」

無法地帯に分類される此処はあまり海兵の手が入らない、まず捕まえてもキリが無いしよつぽどの事があれば別だが巡回など入るのは久し振りの事であった。

やがて噂していた男達が目にしていたのは海軍コートを羽織った巨漢の姿と後ろに続く数名の海兵。

先頭の筋骨隆々とした男は短く刈り上げられた薄紫の髪に黒鉄の額当、目つきは鋭く黒と青の虎柄シャツの間からは鈍色の鎧が見えており下は黒のタクティカルパンツにコンバットブーツ。

そして、重厚なガントレットを装着した手には一本の棍。

「げえ！ありや」鈍熊「じゃねえか!!戻ってきてたのかよ!？」

「ん？有名なのか？なんか海兵ってより海賊みてえな顔してるけど」

「有名も何もお前…ああ、お前こつちに来てまだ日が浅かったな。」

いいか彼奴は海軍の”鈍熊”ことクリーグだ。確かに悪人ヅラかもしれないがあれでも本部大佐だぜ?」

「どんぐま…なんか鈍そうだな、でかいし。」

というか本部大佐くらいならそこまで警戒しなくてもいいだろ、確かに大佐クラスなら億越えを相手にするとは聞くがそんなの一握りじゃねえかよ」

「馬鹿野郎！あいつはその一握りなんだよ！自分の部隊を設立して他の海に行つてると聞いてたんだがなあ…」

「あ、それはなんか聞いたな、有望な若手が部隊組んで別の海に出たつてのは。」

確か”カモメの水兵団”だったか？赤い海軍旗掲げてるのかなん



とか」

「ああ、その事だよ！幸いにも悪魔の实の能力者では無いが二年前くらいの話だが奴がこの近海でやった”暁の海事件”位は聞いたことあるだろうが!」

「あー、確か海軍の少数精鋭による圧倒的火力を用いての海賊の一斉検挙だったか。確かに聞いた事はあるが別に悪魔の实の能力者じゃないんだろ？警戒しすぎだろ」

「奴の真骨頂は大量の武器を用いての海賊の殲滅だ、ここだけの話例の一斉検挙はほとんど奴一人の仕業だよ。」

検挙された奴は数十にも登り中には億越えも数人いたらしい」

「いや、そうは言うけど今のあいつ武器は棍しか持っていないぜ？」

「…いや、今でこそ纏ってないがあの時奴は黄金の鎧を纏っててな、全身のあちこちに大量の武器を仕込んでやがったんだ。」

付いたあだ名が”歩く武器庫”、”海賊喰らい”、”火力主義”、”一人軍隊”今でもその姿を夢に見て魘される奴もいるって話だ、見た目が簡素でも山ほど武器を仕込んでるに違いねえ」

「はー、そんなもんかねえ？」

「とにかく触らぬ神に何とやらだ、さっさとここを離れるぞ」

なにやらコソコソと言われているドンクリークです。

昨日はテゾーロとの手合わせを済ませた後今後についての話し合いと帰ってから船のみんな＋ロビンとの食事を終えて明けて翌日、昨日テゾーロから受け取っていた無法地帯に潜んでいる賞金首リストを元に海賊達の捕縛に来たところである。

前は数ヶ月単位で巡回してたが一年も放っておくとやっぱり増えるな。

お陰で一番GRから順番に回る羽目になってしまった。

やがて見廻りをしなくなってから増えた多数の手配犯の捕縛を終えた後、これで一通り終わりだななどと思いつつ船に戻ろうとしていると

「そこのお前、わしの護衛に就くことを許すぞえ？光栄に思うが良い

ぞえ？」

うわあ：厄介なのに捕まったなあ：

そう言い放ったのはまるで宇宙服が如き格好をした男、その後ろには行列が続いており中には首輪と鎖をつけられた人間も混じっていた。

世界貴族、別名天竜人。

世界で最も誇り高く気高い一族とされているが、その実態は世界中の全ての地域において殺傷行為や奴隷所有等の傍若無人の限りを尽くす極悪非道を当たり前のように行う外道である。

が、その存在は絶対的であり所有する権力は絶大。

世界貴族が道を通る時には、一般人はムリヤリ顔を引きつらせながら、土下座してでもやり過ぎなくてはならず、更に世界各国から自分達の為の「天上金」と呼ばれる金を徴収し酷い場合は世界政府加盟国を飢餓で滅ぼしている。

彼らの強権の前には世界政府加盟国の王族や指導層ですら人権は無きに等しく大人しく嵐が過ぎるのを待つしかないのである。

話は戻るがこういう天竜人は基本的に気紛れである。

今回のようなのがいい例で今は海軍の制服を着ているから護衛をするように言われるだけで済んだが私服で歩いてたら奴隷にされたり撃ち殺されたりする可能性も無いとは言い切れないので恐ろしい事である。

海軍が取り締まれば：なんて事も出来ず見て見ぬ振りしかできない海軍の闇と言ってもいい。

とりあえず小電伝虫にてシャボンディ駐屯地に所属と天竜人の護衛を行う旨を告げ伝言を頼み、腰に装着した大型拳銃”ベアコング”のマガジンを確認しておく。

そしていざ護衛についたが：

くっ：そムカつく！本気で後ろからぶん殴ってやろうかと思うくらいには胸糞悪くなっていた。

取り敢えず道中やった所業だと”第13夫人にしてやるぞえ!”と若い女性に無理矢理首輪を嵌める、土下座する通行人を”顔が気に入らんぞえ”と何回も蹴る、目についた商店に入っては荒らすだけ荒らして何も買わずに”商品を置いてないとはどういう店ぞえ?”などと抜かす始末、天竜人にとって一般人が買う物は商品ではないらしい、死ねばいいのに。

そしてとうとう天竜人の前にボールが転がってきてそれを追いかけて飛び出してきた一人の子供、それを見るや当然と言わんばかりに銃を抜く天竜人、おもむろに子供に向けその前にベアコングを構えて子供に向かつて発砲した。

響き渡る1発の銃声と倒れる子供

そして子供の名前を呼んで継り付く親に対して更に1発撃つと子供に折り重なって倒れる父親と思しき男

銃を構えたままの天竜人に対して素早く膝をつき

「このような者、貴方の様な高貴なお方が手を下すまでもありません、弾が勿体無いじゃないですか」

と、悪びれもせず堂々と言い放つ

「ふむ、それもそうぞえ。よくやった、褒めてつかわすぞえ?」

「では私は”これ”を始末してきますのでここで失礼します」

そう言つて地に倒れ伏す少年と男を指差すと

「うむ、よきにはからうぞえ」

そう言い残すと天竜人は再び散策に戻った。

見えなくなるまで頭を下げ見えなくなった途端

「あの、クソ金魚鉢星人…」

天竜人が去っていく方を見て毒づく突如

「あ…あんだそれでも海兵か!!」

と、突如として声上がる。

「そうよ!別に何も悪い事してないじゃないの!!」

「天竜人の犬め!これでもくらえっ!」

やはりこれか、と飛んできた石を受け止め

「うるせえ!!悪い事してないだあ?お前らもわかってるだろう!あの

金魚鉢星人：じゃなかったてんりゅーびとサマの前で不敬な行いを行う事が悪い事であり罪なんだよ！

ちなみに不敬な行いというのはあのクソツたれクズども：もといてんりゅーびとサマの気分が変わるから撃たれたくなきや重々気をつけるこつたな!!」

「：なんか天竜人の悪口言わなかったか？」

取り敢えず先程撃った二人に対し腰のポーチから取り出した気付け薬を口に含ませると

「うう：あたまがいたい：」

「あれ？私は撃たれた筈じゃ：？」

撃たれた二人は目を覚ました。

タネは簡単だ、技術班に依頼して作っていた血糊内蔵式の超即効性麻酔弾、秘匿呼称”青色弾”である。

これは研修時に天竜人の横暴性を見て何とか市民の命を守れないかと考えて技術班に依頼して考案された弾頭である。

考案当初はこれでシャボンディ諸島での天竜人の横暴による死者は減るだろうと思っていたが、材料が高価故に全体に行き渡るほど支給が出来ていない状況に加え、即効性に重点を置いた為効果時間が10分程と短い為に医療用としたり他の目的にあまり使い道がなく量産がされない、更に量産がされてないので弾頭が支給されてるのが尉官以上に限られてる事もあつて劇的に死者が減ってるわけではない。「いいか貴様ら！今この場で見た事は”無かった事”だ！決して口外する事の無いように！」

それから天竜人にはしかと気をつけるようにしろ！今回の2人の件もそうだが不用意な行動は絶対に慎むように！

今回はこれで済んだものの本当に撃たれ殺されたとしても文句も言えず黙ってるしか無いんだからな!!」

周りにも親子にも念入りに言い聞かせてその場を離れたのだった。

## 鬼の跡目 ドンクリーク

ベアトリス号の甲板で先程の事を思い出しながら何とかシャボンデイの被害を減らせないか考える。

実際あの天竜人達が排除できればと思うがそうそう簡単にはいかない。

まずアレらがここシャボンデイ諸島に来るのは奴隷の買い付けに来てるからでありこの時点で他の場所に行かせるというのは使えない。

次に権力の大きさが違う、何しろこちらは世界政府の下部組織であり奴等にとつては小間使い程度のものであろう。

無理に排除しようとすれば世界政府あたりから苦言が呈されよう事が目に見えている、下手すればこっちが物理的に排除されかねん。

”例の件”が、上手くいってしまえばアレらの横暴による死者は減るかもしれないが上手くいくかはわからんしな…

「ガチで暗殺でも視野にいれてやろうか…」

「…いや物騒な事言わんとって下さいよ大佐あ」

暗殺云々を聞いていたのだろう、パスクア大尉がそう言いつつこちらに話しかけてきた。

「ん、すまんがシャボンデイだと考え方が物騒になって敵わん。でどうした、何か緊急か？」

「はい、センゴク大将からの緊急案件ですぜ、緊急らしいんで直ちに通信室までお願いします」

センゴク大将からの呼び出し…しかも緊急とは、厄介な事にならないければ良いが…

まあ勿論厄介事で無いわけが無くクリークはその難題に頬を痺震らせるのだった。

そして数日後、クリークとはある島にて巨漢と一騎討ちを行なっていた。

片や筋骨隆々と言って差し支え無いクリークは棍を、片や負けず劣らず筋骨隆々な素手の男は両手が黒く染まった状態で自在に拳を繰り出す。

そして素手の男が振り下ろしの一撃を加え、そしてクリークはそれを棍を横にして受け止めようとして

「ぬああああ!!俺のグングニール二号があ!!」

殆ど抵抗無く、半ばから分解された愛用の鉄棍を手に嘆く、ちよつとこの任務キツすぎないか!?!と思いつながら。

時は遡りつい先日、海軍大将センゴクよりとある海賊の捕縛命令が下つたのが始まりであった。

目標の名は”ダグラス・バレット”、現在多くの部隊を割いての作戦行動中であり既に戦闘が始まって1日が経過しているがイマイチ決定打に欠けており攻めあぐねているとの事でこうなれば一気に力タをつける事になつたらしい。

”バスターコール”の発動も視野に入れているとの事だったが原作だと発令されたのってオハラとエニエスロビーの2つだけじゃなかったっけ?ビッグママより後の話か原作で語られてないだけ?・

バレットはかつて海賊王、ゴールド・ロジャーの一味であり”ガルトバークの惨劇”を引き起こした張本人である。

ロジャー亡き後海賊海軍政府問わず無差別に襲撃を繰り返しておりその危険性から今回の作戦が承認された模様である。

注意事項として相手の能力により武器等はあまり効果が無いだろうとの予測から”試作兵装群”は置いてきたが愛用の棍までやられるとは思わなかった。

武器に覇気を纏わせる練習をもっとしっかりやるべきだっと思ふも相手は勿論待つてはくれない。

「まだだあ!!」

棍を投げ捨て殴りかかってくるバレットの拳を両腕で受け止め動きが止まった所に

「ちよつとは考え事ぐらいさせろやあ!!」

ふくらはぎと大腿部に蹴りを叩き込む。

相手がよろめいた所で素早く距離を取り

「小断・大断・鎌威断い（かまいたち）!!!」

脚で斬撃を放つ嵐脚の変形型の腕による三連撃で相手を吹き飛ばし改めてバレットを見やる。

ボロボロの軍服のような意匠の服に筋骨隆々とした体軀。

棍が半ばで分解されたのは能力によるものだろうがそれが無くても凄まじい戦闘力である。

「ふははははーいいぞ海兵い!!」

もうやだこの筋肉おぼけ、バトルジャンキーかよ。

鷹の目もかくやと言わんばかりに鋭い眼光と歓喜するかのような表情、泣く子も更に泣きそうな凶悪な表情でボロボロになった軍服を脱ぎ捨てて悠然とこちらに歩みを進めるバレットに対して泣きたくなる、これで更に悪魔の实の能力を使ってないというのだから始末に負えない。

とは言え現在作戦行動中でありクリークの仕事は友軍が完全撤退するまでの足止めの為逃げる訳にも行かず何とか足止めに徹するも先程より更に重たくなつた拳に対しこちらも正面から殴りかかる。

というか一人で足止めつてなんか上層部か政府に目をつけられるような事したかしら?など思いながら鍛え上げた拳を振るう。

そして数分後

「はははー楽しいなあ!海兵い!」

バレットが一発殴る、それをノーガードで受けよろける

「楽しくねえよ筋肉おぼけえっ!!」

そしてこつちが殴り返す、バレットがノーガードでたたらを踏む技術もへつたくれもない単なる一発ずつの殴り合いが行われていた。

そしてそんな中

ぷるぷるぷるぷる

気の抜けるような鳴き声で腰ポーチの子電伝虫が鳴き出した

相手の拳を「ちよつと待ったあ!!」と言いつつ両腕を交差して受け止め：ズシツと地面に足裏が食い込む感じがしたが無視する。

『クリーク!!五分以内に撤退しろ!それを越えたら』バスターコールを始める!!』

それだけ言つて切れたセンゴク大将からのありがたいお言葉である。

「なあダグラス・バレット」

腕を振り抜いた状態で律儀に待つてくれていたバレットに対し声をかける

「どうした海兵」

「もうすぐ」バスターコール」が行われる」

「!!：海軍の総力を上げた最大攻撃とやらか。上等だ、正面から迎え撃つてやろうじゃねえか!!」

「俺まで巻き込まれるからこの場は撤退していいか?」

取り敢えずダメ元で聞いてみると

「ちつ、骨のある相手がいたつてのに：ならば誓え、おれはここを生き残り再びおまえの前に現れてやる。」

そしたらその時にまたこのおれと戦うとー」

てつきりまだやり合うものかと思つていたが意外にもその言葉だけで離脱を認めてくれた。

”バスターコール”がかかったんなら生き残る事は無いだろうがここは受けておこう、相手も覚悟決めてるようだし：

「わかった、お前が生き残ったらまた再戦する事を誓おう」

そう言い放ちバレットに再戦を誓う、というか断つたらこの場を逃げ切れるかわからないし。

「：そうだ海兵、お前の名前はなんだ」

「俺はクリーク、ドン・クリークだ。海軍で大佐をやつてる」

「そうか、覚えたぞドン・クリーク。いつか必ずまた戦おう：」

そう言うとはバレットは脱ぎ捨てた軍服を拾い軍艦が見える方向へ去つていった。

取り敢えず手を合わせてなむなむと祈つてそんな事やつてる場合



じゃない！と気付いて大慌てでその場を離れる。

結局その時の戦闘は”バスターコール”による攻撃の後バレットにのされた海賊達の急襲が決め手となりようやく捕縛されダグラス・バレットはインペルダウンへの投獄が決定されたそうである。

というか生き残ったのにびっくりである、だがまあ脱獄不可能と言われるインペルダウンに収監されたんじゃないや出てこられな…

”黒ひげ”、”level6”、”脱獄囚”いやな単語が頭をよぎり

『ならば誓え、おれはここを生き残り再びおまえの前に現れてやる。そしたらその時またこのおれと戦うと。』

あの時のバレットの言葉を思い出す。

「おいまさかこれ脱獄からの再戦とかないよね？」

技術班のとこに行く途中で立ち止まって漏らした言葉は誰にも聞かれずに消えていった…

## 指名手配 ドンクリークさん

「…という訳で新しいのを頼む」

呼ばれて受付まで行くどぐるぐるに包帯を巻かれたミイラ男、もとい半端な長さの棍を手に熊殿がしよぼくれていた。

「ええ…、これをここまでやった上にそこまでボロボロになるってどんな化け物と戦ったんですか…」

聞けばかなりの大物とやり合ったらしく包帯は医務局の連中に無理矢理巻かれたらしい。

治療は大事ですよ？と言うと”最近あいつらの実験生物を見るかのような目が怖い”と返された。

そういえば兵器開発局の連中がサイボーグを作りたいとか言ってたな…と思いつつも変な事に首を突っ込みたくないのも黙っておく。

そして頼む、と渡された棍を受け取ろうとしたが半ばしかないとは言え元々5tの棍、無用な怪我などしたくないので持つてきていた台車に乗せてもらい

「取り敢えずこっちで見ますので何日か下さい、今例の強化プランを実装した形で作成してますんで」

そう言う熊殿はとぼとぼとした足取りで引き返していったのでそのまま台車を押して研究室まで戻る。

ここは技術班に割り当てられた区画のうちの一角”試作兵装局”

主に熊殿のアイディアを元に武装を作成しそれを実際に使ってもらってその意見を参考に改良、技術班兵器開発局へ申し送り採用された武装はそちらで簡易化、低コスト化を行い海兵へ支給される形となっている。

近年だと”青色弾”と呼ばれる麻酔弾頭や”黒色弾”と呼ばれる鉄網内蔵型の捕獲用の大型弾頭などである。

黒色弾に関しては安価な事に加え携帯式の大砲など既存の武器でも使用が可能で普通の人間だけでなくパラミシア系の能力者にも割と有効なようでハイペースで生産が進んでいる。

ぶつちやけ熊殿の武装専属班と言ってもいいが。

「熊殿の棍が壊されたらしい」

そう言つて台車を指差すと五人ほどのメンバーが

「うわ、どんな化け物と戦つたんですか？」

「ありやりや名前つけて結構大事にしてたのに……」

「ふええ：単純故に頑丈さは折り紙つきの筈なのに……」

「で？新しい武器の要望かい？」

「だいぶ落ち込んでそうだな、いっちよ例の武装でも出すか？」

などと口々に言い出した。

「はいはいストップ、取り敢えず新しいのは今作成中の棍をさつさと仕上げてしまふぞ、それから空島からやつと手に入った例の”アレ”、使えそうか？」

「ああ、今作つてるのならあと何日か……いや、出来るだけ早めに完成させるか」

「ふえまた徹夜ですかあ……」

「まあまあ、熊殿は毎日海賊と戦つてくれてるんだしこっちはちゃんとしてこつちの仕事やらなきやだよ」

「例の”アレ”はちよつち難しいねえ、入手したはいんだけどどつちも希少とかなんとか言う話で結局一つづつしか手に入れられなくてねえ」

「あと割とヤバい代物だぜ、俺らが使つたら軽く骨折れそうで怖いんだが……」

「そうか、今作つてる棍に関しては兵器開発局に応援を頼もう、あとそつちのに関しては何処に試してもらいなながら作るしかないだろう、というか熊殿は何処で存在を知つたんだ？」

「空島じゃ割とメジャーらしいぜ？そこから人伝にでも聞いたんじゃないか？」

「ふーんそんなもんか、取り敢えず熊殿には数日見てもらつてるからその間に完成させてしまふぞー」

了解、とそれぞれ返事をするそれぞれ作業に戻っていった。

そして後日新しいおもちゃでも買ってもらつたかの如く演習場で大はしやぎで両端が白い鈍色の棍を振り回すクリークの姿が見受け

られたらしい。

そして無事に装備を受け取りクリークはロビンを傍に、再び海軍独立中隊を率いて海に出たのだった。

「手配班……これはどういう事だ!!」

そしてそれは海軍独立中隊として再び海に出て一年が経とうかとした頃の話であった。

毎月届けられる手配書の束を確認中に看過できないものを見つけてしまい、とある手配書を手に本部の指名手配の決定機関である手配班に慌てて確認する

『そ、そう言われましても！今回は世界政府から”重要参考人”としての手配の要請でして……』

くっそ、問答無用の生死問わずの指名手配は防げるようになったけどやり方変えて来るかやっば……

「……わかった、ただ危険度と優先度がどちらも高認定なのは何故だ」

『それが上から一刻も早く捕まえろとの指示が下ってまして……』

世界政府寄りの大将か中将あたりか……

「なるほど、だが危険度は下げておけ。あまり一般人と変わりない戦闘力しか持たないのに危険度高は後々の認定度合に影響を及ぼすかもしれないからな」

『わかりました』

「お前らはよくやっている、これからも頼んだぞ」

そう言って電伝虫を一旦切り再び別のところに繋ぐ。

『はいこちら海軍本部情報班』

「こちらM，C00919、海軍本部大佐クリークだ」

『お疲れ様ですクリーク大佐、本日はどのようなご用件でしょう』

「すまんが現在サウロ中將の船がどの辺りにいるか調べられるか？」

『わかりました、少々お待ちください……ああ、つい先日定期連絡を終えて出立していますね。』

今回の割り当ては西部前半海域ですのでマリージョアに向かわれたようです』

「わかった、感謝する」

『いえ、おやすい御用ですよ…一応サウロ中将ですが大将直々の任務を受けているそうですので気をつけて下さい』

と、一段階声を落としての情報を受け取る。

「了解した」

そう言つて受話器を置くと考えを巡らせるながら目の前には一枚の手配書を眺める。

白い髪に意志の強そうな目を持つ目鼻立ちの整った女性、彼女の名は”ニコ・オルビア”、今現在この船で面倒を見ている”ニコ・ロビン”の母親である。

そして作中ではサウロ中將が指名手配となつたオルビアを捕縛しておりその後には離反している。

サウロ中將が受けてる任務というのはオルビアの捕縛の可能性が高いだろう、今まで情報があまり無くあつたとしてももぬけの殻だつたオルビア達をそう簡単に捕縛できるとは思えんが作中では実際捕縛してるから楽観は出来ない。

こうなつたら誰よりも先にオルビアを見つけて事情を話し探索を止めてもらいたいオハラに帰つてもらうしかないか…

「どうかこうならない為に早めにオルビアを探し始めたのに…というかこれロビンにも言わなきゃいけないよな…」

今の時間はきつと書斎か、しかし手配される前に母親と会つて話すると約束した以上こうなつたら話さないわけにもいかんだろうからなあ…

ああ、気が重い

## 目標接触 ドンクリーク

案の定ロビンは書齋で本を読んでいた。

コンコンと机を軽く叩くと本から顔を上げて

「おじさん、何かあったの？眉がこーんななってるよ？」

と自分のこめかみを両手で押さえてみせるロビン。

顔に出てたか…？と思いつつ話を切り出す

「ロビン、落ち着いて聞いてほしい…恐れていた事が起きた」

「!!…お母さんが政府に捕まったの!?!」

「いや、幸いにもまだ捕まってはいいないが手配書が発行された以上時間の問題だろう。」

「おじさんは何か考えがあるの？」

「一応だがな、うまく行けば他に先んじてオルビアを捕捉できる…」  
答

「確信は持てないんだね…ううん、わたしはおじさんを信じる。」

わたしを海に連れ出してくれてそれに加えて2年もわたしにつきあってお母さんを一緒に探してくれて…

だからもしお母さんと会えなくてもおじさんをうらんだりなんてしない、だって今まで探してくれたしこの状況になってもまだなんとかしてくれようとしてくれてるから」

ロビンの頭にポンと手を乗せ

「…できるだけの事はやってやる、だからそんな泣きそうな顔をしないでくれ」

何かをこらえるかのような表情、本当は母親に会いたいだろうに会えなくても仕方ないと言えるのか…

ワシワシと撫でるとそのまま司令室に向かう

「本艦はこれより緊急につきマリージョアへ向かう！どれくらいかかりそうだ？」

「ここからであれば何事もなければ一週間かからないかと」

「幸い今の所天候には恵まれてるので真っ直ぐに向かえば5日かからないくらいでしょう、エターナルポースも備え付けてある事ですし」

「真つ直ぐ向かうのなら補給をしておくべきだぜ、今はまだ大丈夫だが途中で備蓄が切れる可能性もある、幸い近くに島もある事だしな」  
「向かう道中の海賊はどうしますか？捕縛しますか？」

「道中の海賊に関しては優先度”特”、”高”以外は捨て置いて構わん。」

とりあえず近くの島で補給を急いで済ませてマリージョアへ全速で向かう、その後直ぐに新世界に入るから各員そのつもりでいてくれ」

「了解しました!!」

とりあえずサウロ中将と合流して”話し合い”をした後に合同でオルビアを探索しよう。

原作を覚えてる感じだと詳しい事情を把握しないまま命令に従ってただけのようであんなにいい人のようだしきちんと説明すればわかってくれるだろう、ダメだったらその時は強硬手段に出るしかないか…

よしんばサウロ中将の方が上手くいったとしても作中通りオルビアを捕捉できるか、更にはオルビアを捕捉したとして話を聞いてくれるかどうか。

クローバー博士の手紙を持つてるとはいえあの海軍というか政府を目の敵にしてそうだからなあ…

ま、問題は多いがやるしかない、会わせると決めた以上できるだけの事はやるべきだろうしな。

そして数日後、ようやくその姿を捉える事が出来た。

「見えました！前方にサウロ中将座乗艦です！ですが交戦中の模様!!」

首に下げた双眼鏡を持ち上げると軍艦側には海軍コートを羽織った巨人、間違いなくサウロ中将であろう。

「相手は海賊か！」

「いえ！旗は上げておらずおそらく装備を見るに探査船の類かと！」

目をやると武装は少なくクレーンや掘削装備、小型艇などが装備された船。

おいおいおい、まさかオルビアの船じゃなからうなあ！

「信号弾あげろ！停戦要請だ！」

ボシュツと赤と青の信号弾をあげると向こうの軍艦も確認したのか応答の信号弾が発射される

「よし、俺は先に向かうから船を横付けしろ。

危ないからロビンは書斎で待っていてくれ、曹長！この子を頼んだ！」

それだけ言い残すと月歩で空を駆けサウロ中将の船に移動し降り立つ。

「はじめましてサウロ中将、海軍独立中隊隊長のクリークであります。状況を伺いしてもよろしいでしょうか？」

でかい。

それがまず感想だった、ここまで間近で巨人を見たのは実際初めてだし個人的には見下すことが多かったので余計に大きく感じる

「おお、おめえさんがかの”鈍熊”だでか噂は聞いたとるでよ。

じゃが状況ってゆうても探査船を止めようとしただけじゃて…おめえらあ！撃つのをやめろと言っておるだろうがあ!!」

「しかしまだ抵抗してきており…」

「荒くれの海賊じゃあるめえし！それを抑えられんほどお前ら弱卒かあ!!」

うわ、流石中将だけあってビリビリとくるほどの迫力だな

「交戦規定でも海賊でないのなら出来るだけ被害は抑えるように、と、規定が変わった筈なんですけどね…」

「すまんなあ、どうにもまだ徹底できんようだで。

しかし歴史の探査船は何度か捕らえてきたどもこいつらが死なにやあならん意味がワシにはわからんですよ…」

「実際彼らは歴史を知りたいだけのようですが上はそれを潰そうとする。」

古代兵器復活の阻止とお題目を掲げていますがはてさて、本当のところはどうなんでしょうね…」

「…？大佐、それはどう言う意味だですよ？」



などと話していると

「サウロ中將!! 生存者が一名おりました!!」

と海兵が一人の人間を連れてきた。

白い長い髪に整った顔立ち、しかし表情はこちらを睨みつけその瞳には涙を浮かべる女性。

「どうか生存者一名!! 攻撃のしすぎじゃないか? 交戦規定どこいった!」

「…よくも仲間達を!!」

あー、間違いないオルビアだ。

「おめエ本当に兵器が欲しいのか」

「哀れな人達…! 意思も無く私達を裁くのね…!! 法律を疑いもせず兵器阻止と口を揃えて…!」

「あー、ニコ・オルビア取り敢えずそこまで。

サウロ中將取り敢えず彼女の身柄はこちらで引き受けたい、その為にここまで来たのですから。

それから先程の話に戻りますが政府が何を考えているか、聞くつもりはありますか?」

「身柄を寄越せと言っても…しかしわしは政府が何を考えてここまでやるのかわからん、取り敢えず話は聞くだで、身柄云々はそいから考えるですよ」

「ではちよつと込み入った話になるので彼女と一緒にこちらの船へお願いします」

しかしオルビアに会うのがギリギリ間に合ってよかった。

さーてここからはサウロ中將をなんとかして丸め込まないとな、真面目な人だからこつちとオルビアとそれぞれ話し合えば理解するだろう…

## 母娘再会 ドンクリーク

場所をこちらの軍艦に移しいぎ丸め込み

「取り敢えずニコ・オルビア、貴女にはこれを。ああ中身は読んでませんでご心配なく」

と、クローバー博士からの手紙を渡す

「…何の手紙よ」

と、怪訝そうな顔をしながら受け取り宛名を見て顔を強張らせる。

「狭いところですよみませんサウロ中將」

「いやいや、気にする事ないですよ、それよりかお前さんが言っておった話聞かせてもらおうですよ?」

とその巨体を丸めてこちらに話を急かす。

「取り敢えず私が知ってる事を話しましょう。」

まず”歴史の本文”これの解読が古代兵器の復活に繋がるかもしれない、というの事実です。」

「…お前さんもそう言うか」

「ああ、勘違いしないでください、話はここからですよ。」

古代兵器の復活に繋がるかもしれないとは言いましたが解読と古代兵器の復活はイコールではありません。

そして学者達は歴史を紐解こうとはしていますが別に古代兵器の復活を意図してはなりません。」

「おお、確かにわしが見ても歴史を知ろうとしてあるようにしか感じんかった」

「しかし政府はこの歴史を知ろうという動きに関しては徹底的に許しません、それは何故か。」

表向きは古代兵器復活の阻止となっています、勿論学者達が解読する事によって他の第三者が古代兵器の復活を目指すという可能性もあるかもしれません。

しかし政府が恐れているのは古代兵器の復活ではなく実はその歴史そのものの、詳しい事は把握できてませんが空白の100年には世界政府にとってとてつもなく不都合な事があるらしいのです」

「私からもいいかしら」

と、いつの間にか手紙を読み終えていたらしいオルビア

「貴方がどんな手を使ってこの手紙を書かせたのかはわからないけど取り敢えず私達考古学者は古代兵器を復活させたいわけではないわ。

先程貴方が言っていた通り過去の歴史を紐解きたいだけなのよ。」

なのに世界政府は決してそれを認めない、世界政府は何か隠している事があるのかもしれないというのは私達考古学者殆どの見解よ」

「それこそ不都合な事実が無いのなら、危険だというのなら政府主導で手助けを行なって解説を進めればいい、違いますか？サウロ中將」  
「実際その通りだよ、わしもそんな危険な研究ならこっちから手助けしてやりゃあええとは思うとっただよ」

「そして今回ニコ・オルビアが捕縛された場合何が起こるかですが…」  
そう言つてクローバー博士にも話して聞かせた事を二人に話す

「…そんな!!」

「流石にそれはあんまりだよ、歴史を知ろうとするだけで何故そこまでせにやならん」

「先程も言いましたがただの見せしめですよ、よっぽど知られて困る事があるのでしよう。」

なのでサウロ中將、彼女の身柄をこちらに譲って頂けませんか？

その上で彼女には変装なりなんなりしてもらつてオハラに戻つてもらいます」

「…わかった、今はお前さんの話を信じるですよ。上にはオルビアは取り逃がしたと報告しとくだで」

「ありがとうございますサウロ中將、あとこの件に関してはくれぐれも内密に願います。」

ニコ・オルビア、貴女もそれで良いですか？」

「…どうせ拒否権はないのでしょうか？それからいちいちフルネームで呼ぶのはやめてもらえないかしら、オルビアでいいわよ」

「わかりました、ではサウロ中將後はよろしく願います。」

近々またこちらから連絡いたしますので」

「わかったですよ、探査船はどうすればいい？オハラに曳航するか？」

「個人的には探られてオハラからの痕跡を見つけられる可能性もあるので沈めていただけると有難いのですが…」

そう言つてチラリとオルビアを見ると

「そうね…探せばオハラから来たと示す物は出てくるでしょう。」

それに仲間達をあのままにしてはおけないわ…」

そう言つてそつと目を伏せた。

「…わしのした事とは言えすまん事をした」

「恨む気持ちがないと言えば嘘になるわ、でも貴方はそうするしかなかったんでしよう?」

身を屈めて謝辞を述べるサウロとそれに対し答えるオルビア、これでオルビアの身柄はこちらで預かる事となりサウロに礼を言つて彼女を伴い

「時にオルビア、貴女にはお子さんがいるらしいですね?」

沈む船と死者に黙祷を捧げ進路をオハラに向ける。

「どうせ全部調べているのでしよう、あの子は関係ないわ。」

まさか貴方クローバー博士達に対してロビンを人質に手紙を書かせたんじゃ…?」

え、まっつてすごい誤解が

「落ち着いていただきたい、そんな事はしてないですよ。」

娘さんに会いたいとは思わないのですか?」

「…今更どんな顔して会えばいいっていうのよ。」

私はあの子を捨てたも同然で海に出た、きっとあの子も私を恨んでるに決まってるじゃない…」

「…会いたくても合わせる顔がないと?」

「…そうよ、それにあの子は何も知らない。」

元気ならそれでいいのよ、一度この道に踏み込んだ以上断ち切らなければならぬの、あの子を罪人の娘にするわけにはいかないのよ」

「…」ついでに事を教えましょう。

あの子はずっと考古学者になる勉強を続けてきました、それもひとえに貴女に会うために。

彼女は言つてましたよ?」いっしょにうみにつれてつてもらうの”

と。

あの子は貴女の背中をずっと追っています。この6年間ずっと。私が思う限りですが彼女は貴女の事を決して恨んでなんかいませんよ」

思わずと言った感じで口元を押さえ涙をこぼすオルビア。

その時コンコンと部屋がノックされ

「おじさん、お客さんとお話終わった？」

とロビンが入ってきた…ってなぜに！後でゆっくり感動の再会って感じで会わせる筈だったのに！

「ロビン！ちよつと待って、まだお話中だからもうちよつといい子で待ってて！」

「…ロビン？」

俯いて嗚咽を堪えていたオルビアがその名前に顔を上げる

「おじさん…女の人泣かせるなんて…後で大尉さんに言いつけちゃおうかしら？」

オルビアを見てそう言うロビンだったが何か感じとつたのかじつとオルビアの顔を見つめて

「お母さんですか…？」

そうオルビアに尋ねる。

「大きくなってわからないかもしれませんがロビンです！あなたは私のお母さんじゃないですか…？」

その言葉に再び涙を溢れさせるオルビアに

「今更母親だなんて名乗れないとでも…？」

とぼそりと告げる。

「いつか…いつか一緒にお船で旅をしたいと思ってました！」

そのために考古学の勉強もいっぱいしました！あなたは私のお母さんじゃないんですか!？」

涙をボロボロとこぼしながらそう言うロビン。

同じく涙を溢れさせるオルビアの背をそつと押し

「ロビン、彼女の名前はニコルオルビア。いい加減貴女も素直になつたらどうですか？」

「ずっと！ずっと会いたかったです！もう…一人にしないでください！！」

そうしてオルビアにぎゅつとしがみつくロビン。

これ以上は野暮だろう、と抱きしめあってわんわん泣く二人を置いてそつと船室を出る。

甲板に出て一息をつく、これでロビンとの約束は果たせただろう。

そしてオルビアとロビンが無事に再会して数日後、クリーク達の姿は西の海、オハラにあった。

「…ありがとう、感謝するわ」

夜、密かにオハラへ上陸しオルビアとロビンを送り届ける

「いえいえ、お気になさらずともこの子の為にやった事ですから」

「おじさんその喋り方へん」

何らかの変装なりなんなりは必要だろうという事で白い長髪をバツサリと切りその上で髪を黒く染めたオルビアといつかプレゼントしたカバンを大事そうに抱えるロビン

「…さてオルビア、貴女はこれからどうしますか？」

「そうね…とりあえずクローバー博士に会ってそれから決めるわ、この子の事もあるしゆっくり決めるわ」

「わたしはお母さんといれたらそれでいいよ！」

オルビアの足にしかと抱きつくロビンの頭をポンポンと撫でて

「そうか、お母さんに会えて本当に良かったなロビン」

「おじさんのおかげだよ！…でもおじさんはもう行っちゃうんでしょ？」

「そうだね、約束は果たせたとおじさんはまだまだやらなくちゃいけない事がたくさんあるからね」

「だったら…だったら私が大きくなって立派な考古学者になれば一緒に連れてつてくれる？」

「うーん…確約はできないかな、でもその気持ちはありがたくもらっておくよ」

ロビンには何事もなければこのまま平和に過ごして欲しいし原作通りに麦わら一味に入るといふ事になる可能性もある

「…人の娘を誑かして何をしようというのかしら」

「いやいやいや、何を考えてるんですか」

ちやんと自分の娘として認めてるようで何よりなどと思いつつも

「というかい加減その喋り方止めたらどうかしら、ずっと思ってたけどロビンと話してる時の方が素でしょ、貴方」

「わかりま…わかった、とりあえず現状はいいとして世界政府がこのオハラについて諦めたと楽観はできない。

下手すれば世界政府の諜報機関”CP”が動いてる可能性もあるから手配書がまだこちらに出回ってないとはいえ重々気をつけてくれ」

「わかってるわ、でも大丈夫なの？海軍の人間なのに私を見逃したりオハラの事を隠したり…」

「まさか、バレた時はクビで済めば御の字さ。

そこは色々裏で動いてるからバレてはないだろ…多分」

「多分って貴方…まあいいわ、そして本当にありがとうこの子のことも私のことも…」

「ありがとうおじさん、この事は忘れないよ！わたし、大きくなったら立派な考古学者になるから待っててね！」

「ああ、オルビアもロビンも達者でな、いつかまた会いにくるよ」

そう言つて名残惜しげにいつまでも手を振るロビンと頭を下げるオルビアに背を向けて船に戻る。

裏で動いてるといえど所詮付け焼き刃、本職を誤魔化せてるかどうかはわからんがとりあえずオハラに関してはこれ以上出来る事はなからう。

## 怪力根源 ドンクリークさん

オハラを発ち数ヶ月クリークの姿はグラントラインに再びあった。四方の海とグラントラインを守る海の守護者“海軍”、その総本山、海軍本部マリンフォードの演習場である。

下はいつものような黒いズボンにブーツ、上はコートもいつもの鎧も装着しておらず諸肌、あちこち刻まれた傷跡はくぐり抜けてきた戦場の激しさを物語っていた。

手には一本の棍、自ら”白尾棍（はくびこん）”と名付けたソレは今までの鈍色単色ではなく両端に海楼石が仕込んであり白くなっているのが特徴、ちよつとしたギミックを搭載しており重さに至っては先代の”グングニール（命名 クリーク）”を優に超える何と重さ10t

馬鹿じゃなからうか。

その馬鹿げた重さの棍を軽々と・・・流石に軽々とは行かないようで何度も持つ位置を変えたり振り方、持ち方を変えて試行錯誤を繰り返しているようである。

しばらく棍を振っていたようだがここまで、と言わんばかりに棍を壁に立てかけ・・・立てかけた壁ごと崩れるも気にせずその横で胡座をかいて目を閉じ瞑想を行う。

そのままじつと動かず瞑想を続けていたがしばらくすると額に脂汗が滲み出し苦痛に耐えるかのように顔を顰める。

彼が瞑想して行なっているのは”生命帰還”と呼ばれる技術でありバイオフィードバック（生体自己制御）とも呼ばれる操身術である。そしてその真骨頂は髪の毛一本爪の先まで全身全てを知覚し身体のを制御下に置き本来は知覚外にある領域の部分さえ操作できるというものだ、具体的には髪を手のように動かしてみたり体型を自在に変えたりなどである。

人間は本来産毛から爪先の先まで神経を張り巡らせれば自在に操れない箇所は無いと言った者がいるがクリークが行なっているのはその応用。



彼は原作のクリークが10tの棍を軽々と振り回していた（実際は1t、彼の思い違いである）ので実際その為にはどうすればいいか知恵熱で寝込むほど一生懸命考えて出た結論が

そうだ、筋肉を増やせばいいんだ

というものである。

そしてどうやったら筋肉を増やせるか、というのをこれまた一生懸命考えて出た結論が”生命帰還”が使えないか、というものであった。

簡単に言えば身体操作による自己改造である。

まず最初に行ったのは筋肉の性質の変化

彼はクリークになる前、それこそ前世にて人間は持久力を持つが瞬発力が少ない赤筋と、瞬発力に優れるが持久力があまり無い白筋を持つておりやり方によってはその中間に位置する桃筋と呼ばれる持久力と瞬発力を両方併せ持った筋肉が作れるという事を覚えていた。

その為には確かトレーニングあるのみとしか覚えてなかった彼はそれはもう鍛えた、めちやくちやに身体をいじめ抜いて鍛えた。

無茶な鍛錬で身体は酷使されたもののそこは生命力の賜物か不明だが肉体はその過酷な試練を乗り越えて見事に生まれ変わった。

それにより晴れて彼は元々の体格もあり1tどころから5tの重量を軽々と自在に扱えるほどの怪力を発揮したがそれでは原作のクリークが振り回していた10t（1tが正解、ただの記憶違い）には及ばない、そうして彼が行ったのは体の部位全ての知覚。

頭のとっぺんから爪先まで、更に己の筋肉、内臓、骨に意識を巡らせる。

最初は勿論うまくいかない、しかし回数を増やし時間をかけ徐々にそれは実を結び始める。

そしてクリーク20歳己の身体全てを知覚し更なるステージへ進んだ。

まずは内臓や爪、髪の毛など本来自分の意思では動かせない筈の部分を動かす鍛錬。

そして筋肉の知覚を経て更に研ぎ澄まし筋肉の一本一本、筋繊維を

一本づつ知覚しそれを引き締めて細くしてゆく。  
すなわち筋肉密度の上昇である、それに加えて更に筋繊維を増やし  
空いたスペースに更に筋肉を増やしたのである。

勿論筋肉の密度を上げて他が付いてこられないので骨の密度、血  
管や内臓の強度を上げその運動能力と代謝の向上を作り出したので  
ある。

勿論欠点はあった、身体を作り変える際の凄まじい苦痛と身体エネ  
ルギーを大量に消費する事による空腹化である。

苦痛はどうしようもなく空腹は食べるしかない為食事の量は増加  
したようであるが。

そして未だ身体改造は途中であるもののようにやく10tの重さを  
持てるようになった。

軽々と振り回すというわけには未だいかないもののそれでもこの  
ままこの瞑想を続けていけば原作クリークのように10t(くどいよ  
うだが間違い、原作では1t)を余裕を持って扱う事ができるだろう。  
そしてこの鍛錬は思わぬ成果をもたらした。

筋肉の密度の増大による硬度上昇と筋肉の瞬発力の強化による速  
度の上昇である。

未だ試していないのでこれらが強敵相手にどこまで通用するかは  
未だわからぬが彼の怪力の秘密はたゆまぬ鍛錬によって造り変えら  
れた常人の数十倍の密度を誇る身体だったのだ。

頑丈なフレームにそれに見合った筋肉量を、まるで巨人族のような  
考え方である。

そしてこの身体改造は未だ途中であり未だ全ての筋肉を置き換え  
れたわけではない、この肉體改造が完了した時彼はまたもう一段上の  
ステージへ進むのだろう…

## 脱獄報告 ドンクリーク

「はあ!?金獅子が脱獄しただと!?!」

その報告を受けたのは今度こそ東の海へ向かわんとマリンプォー  
ドを発つて暫くした頃であった。

「ええ、間違い無いようです。報告によりますと獄卒数名と獄卒長ハ  
ンニヤバル氏と交戦の上これを下し空を飛んで逃げたとか。」

「海楼石の手錠はどうした!両手に嵌めてたのだろう?」

「それが片足にしか嵌めておらず自分で足ごと切り飛ばして外したよ  
うで…」

くっそ、脱獄フラグ回避の為に死ぬ気で頑張つて片足切り飛ばして  
腕に手錠つけてもらう筈だったのに!

両足切つて脱獄するのは覚えてたからインペルダウン側にも懸念  
点をしっかりと伝えるべきだったか…

「何かこの件に関して命令はきてるか?」

「搜索命令は来ていますが相手は直ぐには動かないという判断の下優  
先度は低いです」

「…そういうわけにはいかんだろう、進路変更!インペルダウンへ向  
かう!」

仕方ねえ、東の海は後回しだ。

「ではエニエスロビーが近いので政府に問い合わせてタライ海流の使  
用許可をもらつてきます!」

とりあえず状況確認でインペルダウンに行つてそれからシキが潜  
んだたのは…何だったつけメンヴィル?ネルヴィル?確か固有種の  
動物が数多くいた島だったか?

電伝虫を手に取り

「情報班!こちらM・C00919海軍本部大佐クリークだ!」

「はいこちら情報班、御用件は何でしょうクリーク大佐」

「調べて欲しい島がある、ネンヴィルだかメルヴィルだかそんな感じ  
の名前の島で場所はグランドラインにある筈だ。」

特徴としては高い山に固有種の動物が数多くいた筈、島がわかった

「らそこへのエターナルポースを送ってほしい！」

「了解しました、早急に調べた上でそちらに連絡いたします」

「それから金獅子についての情報を俺宛でインペルダウンに送付してくれ、手数をかけてすまないがよろしく頼んだ！」

「了解です、レポートは近日中に送ります」

そうして電伝虫を切ると

「各員に通達！本艦はこれよりインペルダウンより脱獄した金獅子のシキの捜索につく！進路はエニエスロビー！その後タライ海流にてインペルダウンに向かう！各員準備に取り掛かれえ!!」

と指示を出しにわかには船が騒がしくなる。

例の島に本当に既にいるのかどうかはわからんから応援要請はまだ出せないな、見つけ次第応援を寄越してもらおうとしてシキの戦闘能力がどこまであるかそれが問題だ。

2年間繋がれてたのなら戦闘能力はあの時よりは落ちてる筈だ、映画通りなら脚先が剣になってる筈だが片脚を太腿から切り飛ばしたからどうなってるかはわからんが弱くはなってる筈。

試作兵装群の使用許可も一応取るべきだな、改造中だから後でインペルダウンに届けてもらってそこで受け取るか。

：シキから顔覚えられてねえよな？と思いつつも数日程でエニエスロビーに到着し、海に空いた巨大な穴を見てぞわぞわしたり正義の門の巨大さに驚いたりしてようやくインペルダウンに到着した。

海に空いた穴といえば確か東の海にもあったよな、海のヘソとかなんとかで願いが叶う秘宝…至宝だっけ？忘れてなければ探してみるか。

インペルダウン、それは世界政府が所有する世界一の海底大監獄の名だ。

無論監獄がこれ一つだけと言う事は無いがこのインペルダウンは別格扱いされている。

理由として、まず建物はカームベルトの海中に造られている。獄内は複雑な迷路の様な構造で、いたるところに監視用の電伝虫が目を光らせている。付近の海は巨大海王類が生息し、さらに海上は無数の大

型軍艦によつて常に警備されている。その体制の嚴重さは「鉄壁」と称され、侵入も脱獄も不可能とされている：いや、されていた。

今回の金獅子ことシキの脱獄により今まで脱獄者を出した事が無かつた絶対神話は破れてしまったがそれでもそれ以外は決して逃しはしない地獄の釜である。

インペルダウンについて早々に交戦したハンニバル獄卒長に話を聞くとやはり己の刀二本は回収したらしい、そして聞いていた通り片足を切り飛ばして海楼石の枷を外し逃走したとの事であった。

現場検証でもするかと思つたがシキがいたのがレベル6エリア、要するに最も罪が重い者が収監される最下層と聞いて現場検証は止める事にした。

なぜならバレットがいる可能性が高く下手すれば掴み掛かられかねないので念の為に何かの役に立つかもしれないと思ひレベル6エリアの囚人達のリストの写しをもらつておく。

ざつと目を通すと見覚えある名前その他にやはりバレットの名前があつたので行かなくて正解だつたと安堵しつつ次いで本部情報班から送つてもらつた資料を確認すると配下の海賊、拠点としていた場所、ナワバリだつた場所など数々の詳細な情報が記されていた。

ひとまずそれらを頭に叩き込みセンゴク大将に許可を取り送つてもらつた試作兵装群を確認。

今回は新型であり素材にウーツ鋼ではなく何個かの金属を合わせた合金を使用した為特徴的だつた金色でなく落ち着いたガンメタルカラーになりそれに合わせて防御力が上昇。

他には既存の武装に加えて今は絶滅種となつている貴重な空島原産のダイヤルを仕込んだガントレット、腰には頑丈さだけを追求して作つてもらつた剣が左右に2本づつ

そして背中に背負うは未だ軽々とは扱えないものの最初に比べるどだいぶ扱えるようになったクリークの代名詞とも言うべき超重量の“白尾棍”こと重量10tの仕掛け棍。

更に船の小隊全員にも何点かの武装を支給しもしも金獅子が居た場合には確実に仕留められるように準備を整えていく。

情報班から届いた一つのエターナルポース、そしてそこに書かれていたのは”メルヴィユ”  
グランドライン、雲に届く秘境”メルヴィユ”である。

## 包囲作戦 ドンクリーク

メルヴィユから離れた所で錨を下ろしカフウに頼んで情報を集めてもらうと予想通り数隻の海賊船が停泊しておりその中には金獅子の旗印も確認できた。

残念ながらシキ本人の姿は確認できなかった為残党を見つけたと本部に報告をしたところシキの姿が確認できないかどうか探ってくれとの言葉をもらったのでもう数日停泊したまま偵察を続ける。

そしてとうとう

「ははっ、見つけたぞ金獅子い…」

写真映りは悪いが金の髪の大柄な男、頭に舵輪が刺さってるくれば間違いない。

直ぐに本部に報告し増援を送ってもらい独立中隊は先行して応援が到着するまでの間シキの足止めが指令として下った、空を飛んで逃げられると厄介だからであろう。

直ぐ様船の人員を招集し作戦を立てる、偵察の結果主要なメンバーはシキと常に側にいるピエロのような化粧をした科学者らしき男、多分Drインディゴだろうその二人。

定期的に二人でメルヴィユのあちこちを見回っており二人のところを包囲してDrインディゴをパスクア大尉を筆頭とした2小隊、シキの相手はこの中隊の最大戦力たる自分、そして他の海賊の急襲も考え2小隊を遊撃として周囲に配置する事になった。

島への上陸は相手に悟らせない様に夜中に行いそれぞれ武装の確認、罠の設置等を行う。

そして作戦決行当日

「トリモチ弾！てえっ!!」

シキとDrインディゴを囲む包囲網は上手く行き四方を囲んで大型のバズーカ砲から相手の動きを阻害する粘着弾が発射されるシキは全てを避け切りDrインディゴも少しは当たったが大半は避けられた。

だがまあこの攻撃がシキにあたるなんぞ思っていない。

「黒色弾でえっ!!」

鉄網を仕込んだ特殊弾頭を四方からDrインディゴめがけて打ち込み引つかかったところに更にトリモチ弾を打ちそりやもう過剰な程にぶち込み身動き取れなくした所に鉄製のロープでがんじがらめに縛り上げる。

「ジハハ、よく俺がここにいとわかったな

だがたったこれだけで相手するっていうのはちよつと舐めすぎじゃあないか?ええ?」

「久しぶりだなあ金獅子い、勘違いしてほしくないんだがあんたの相手はおれ一人だよ。

こいつらは他の奴らの相手に連れてきてるだけさ」

「ああ、てめえの顔覚えてるぜ…?」

てめえに切り飛ばされた右脚が疼きやがる、まあじきにお前もお揃いにしてやるがな…」

そう言つて脚先が剣となつた左脚をカツカツと地面で鳴らす。

「いやいや、気を使わなくてもいいさ金獅子よお。

右脚だけ義足なのも収まりが悪いだろうから左脚も同じとこで切り飛ばしてやるよ」

「ジハハハハッ!!いい度胸だ若僧!今回こそ決着をつけてやろう!!」

そう言つてシキはスラリと剣を抜き

「ああ、ここに捕まってもらうぞ金獅子!!」

背中から引き抜いた白尾棍を構える。

先手必勝とばかりに腕を振り炸裂弾を相手に投げつけ目眩し代わりにしたところに白尾棍で振り下ろしの一撃を放つ。

「そらあっ!!」

「そんな見え見えの一撃にい…つつ!!なんつう重さだ…!」

余裕を持って右手の剣で受け止めるも足が地面にめり込み嫌な音を立てた剣を見るシキ

「いくら名刀でもこの重さの合金の塊を受け止めて無傷で済むわけないだろうがよお!!」



「ちいつ、なんつう馬鹿力だ…だがいくら重さがあっても俺の能力の前に”重さ”なんざ無意味だ！」

そう言つて剣で棍を払い左手で棍に触れようとするシキだったが  
「ぬうつ！まさか海楼石か!!」

「ご名答!!:前回は触れられたせいでまったく使えなかったから対策済みだ!!」

ちょうど海楼石が仕込まれてる部分に触れた為棍に能力を及ぼす事が出来ずにギリギリで突きをしゃがんで避けそのまま地面に手を触れ

「獅子千蔵（ししちぐら）!!」

地面から獅子の顔を作り出しその大口でクリークを飲み込み

両手を広げ「噛み砕けつ!!」潰す様に合わせる

「ぐうつ…おらああ!!」

飲み込まれた瞬間に全身に力を込め圧力をかけられた土ごと弾き飛ばす

「おいおい若僧、てめえどういう身体能力してやがる。

かなりの圧力がかかっているからすり潰されてもおかしくねえんだが…」

呆れたと言わんばかりに思わず戦いの手を止めそうぼやくシキ

「はっ、鍛えてるからなあ！そら次だ!!」

そう言つて右手を上げガントレットに仕込まれた機関銃を連射するも捲り上げられた地面で受け止められ

「それはこの前見せてもらったぞ！獅子時雨（しししぐれ）！」

土の塊や石が雨霰と言わんばかりに飛んできた。

この程度なら、と両腕を交差しガードを固めた所で

「かかったなあ!!獅子松信楽（ししまつしぐら）!!」

左右と後ろから獅子の顔を象った土塊が押し寄せてきた。

「ちいつ!!だがまだだあつ！」

左右から迫る獅子に炸裂弾をありったけ投げつけ後ろから迫る獅子を空中に飛び上がって避けるも

「斬波あ（ぎんぱ）!!」

左脚と右腕の刀による斬撃が飛んできた。

素早く肩当てを前に構え斬撃を受け流しそのままニードルガンを放とうとするも

「まだまだあ!!獅子・千切谷(しし・せんじんたに)!!」

飛ぶ斬撃の連発によりニードルガンを撃つ間も無く防戦一方となる

「ジハハッ!!前だけでいいのかあっ!!」

飛び上がったはいいものの着地点には先程の獅子が迫っておりそのままでは食い千切られかねない為反対側の肩当てを構え

「安全装置解除!発射あっ!!」

大型の弾頭を発射、大きな爆発音を立てて獅子はおろか周囲一帯の地面ごと吹き飛ばす。

可燃性のガスを弾頭に封じ込めた新型弾頭“MH6”である。その大きさ故一発しか搭載できないが。

「なんつう威力だ…だがまあこれで終わりだ!」

そう言つて両手を上に掲げるシキ、その動作にぱつと上を見やると数個程の巨大な岩塊がふわふわと浮いていた。

「ガープの野郎が言つてたが若僧、お前東の海出身だそうだな?」

「それがどうした金獅子」

「ジハハハハッ、別にどうという事もねえさ、ただ最弱の海の男にしてはなかなかというだけの事さ。

じゃあなドンクreekとやら、これで終いだっ!唐獅子牡丹(からじしばたん)!!」

そう言つて振り上げた手を一気に振り下ろしそれに追従して巨大な岩塊がいくつもクreek目掛けて降ってきた。

## 戦闘決着 ドンクリーク

大質量が襲いかかりそれらが降り注ぎ終わった後も岩山と化した場所を油断なく見据えたままシキは動かず。

「アーマーパーッツ!!」

岩山が弾き飛び先程まで纏っていた鎧に仕込んでいた火薬により岩山ごと弾き飛ばしたクリークが出てくると

「ジハハハッ!てめえなら出てくると読んでたぞ!!」

待ち構えていたと言わんばかりに地面から獅子を生み出し左右から飛びかからせるシキ

それに対して腰に差していた二本の剣を左右それぞれに投擲、更に二本抜き放ち

「二刀斬撃…双翼鷗え!!」

「ジハハハハッ!その技は前回見させて貰ったぞお!!!」

突き技は切っ尖さえそらしてしまえばなあっ!獅子斬波あ!!」

脚先の剣と手に持つ剣をそれぞれ下から振り上げクリークの剣を上向きに弾き

「くっ!!」

「そして死ねえっ!!獅子咬《ししがみ》・獣王武刃《じゅうおうむじん》”!!!」

左脚の桜十、右手の木枯。

二本の名刀を獅子の顎門に見立てた上下から挟み斬る技である、決まりさえすればクリークは袈裟懸けに斬られていたであろう。

しかし

「はははっ!!あんたなら対応してくると思ってたよ!!」

岩山からの脱出の時にあらかじめ上に放り投げておきそして今まさに天から落ちてきた白尾棍を桜十と木枯、二つの牙の間に挟み込みそのまま手首を返して両の剣を弾き飛ばす。

「っ…なにをおっ!!」

そのまま払い退けられたシキの左手首を掴み足払いをかけ地面に引き倒し胴部に右手を当て

「なあ、金獅子よ。」

「あんたインパクトダイアルって知ってるか？」

「…ジハハハハッ!!それが切り札ってか!？」

「今更そんなもんが俺に効くと思ってるのか!飛んだお笑い種だな!!」

「残念、その10倍だ」

「ジハハ…てめえまさか!!!」

「正解!!排撃《リジェクト》”オッ!!!」

一撃で戦艦を沈めるほどの衝撃がシキの胴体に向かって解放された。

この世には色々な用途で用いられる貝がありそれらは主に空島と呼ばれる空の上の島にて”ダイアル”という呼び名で生活のあらゆるところに用いられている。

例えば熱を溜め込むものや音を溜め込むもの、風を溜め込むものや水や匂いなど様々なものがありその一つに衝撃を溜め込む”衝撃貝《インパクトダイアル》”と呼ばれるものが存在する。

これは名前の通り蓄積した衝撃を一気に解放する事が可能で、その威力は一般人相手なら一撃で死に至らしめる事が可能な威力を持つ。

今回クリークが使ったのはその上位種である。

これは”衝撃貝”の10倍の衝撃を溜め込む事が可能でその威力は絶大。

歴戦の戦士でさえ一撃で葬り去る程の威力を持つがその反面反動も絶大。

本来なら相打ち覚悟で使うような一品であるが今回は空島の事を覚えていたクリークがダメ元で技術班に”排撃貝”とか”噴風貝”手にはいらねえかなあ…ともらして詳細を聞かれたので、それに答えるところどういうツテを使ったのか二つとも手に入れとりあえず試作としてガントレットに搭載したものが届いたのである。

急遽切り札が手元に転がり込んできたクリークは反動がヤベエという事はかろうじて覚えていたが同時に鍛えてるから大丈夫だろう

という思いもあり今回シキとの戦闘で使用し決着をつける事と相成ったのである。

動かなくなつたシキの捕縛を大尉達に任せると痛む腕に鞭打ち腰のポーチから高タンパク、高カロリーの軍用携帯食料”カロリーフレンド”を取り出しモソモソと食べる。

というかりジエクトダイアルやばい。

途中で反動のヤバさに気づいて腕から脚へ、地面に流したけど腕が吹っ飛ばかと思つた。

やはり反動無しでやるにはまだまだ鍛える必要があるか…

未だに痛む腕をさすりつつそう考える。

生命帰還で身体を作り変え始めて以降本気で戦闘すると戦闘に使うエネルギーが増大した為か滅茶苦茶腹が減るようになってしまつた。

本当だつたら携帯食料ではなく肉を食べたいところだが撤収にはまだ暫くかかりそうなのでそういえば船の食料は肉が少なかったなと思ひ出し散策ついでに獲物を狩ってくるか、と大尉に一言告げ森へ向かう。

雲届く秘境”メルヴィユ”

多くの固有種の動物が存在しこの島に住む人々も一風変わった特徴を持っている。

これらは全てこの島にしか生えてない草…なんとかつていう草…なんだつたつけ？（IQとよばれるこの島特有の品種）

それによつてこの島の生物は独自に進化を遂げておりシキ達の狙いはこれらを凶暴化させ東の海を叩き潰す計画であつた。

それらしき草を片手に鼻歌を歌いつつ散策していると突如襲いかかつてきたのは触手。

クリークに巻きついたソレはブチブチと音を立てて力任せに解かれ触手を千切られ怒りを表すのは巨大なタコ

「なんで森にタコ？まあいいや肉じゃないのが残念だが…」

迫り来る幾多もの触手を白尾棍にて弾き、払い、受け止めつつ接近

し大上段の一撃を加え大きく頭を凹ませるも

「む、打撃は効果が薄いか…」

凹んだ頭は直ぐに元に戻り更に苛烈に無数の触手が降り注ぐ。

飛び上がりそれらを全て避け更に伸びてくる触手を

「嵐脚・斧鉞！」

カカト落としの要領で威力を高めた二本の斬撃を繰り出し叩き斬りそのまま相手の眉間に白尾棍を突き入れ柄を捻る事によりギミツクを発動させる。

そのまま距離を取ると徐々に相手の動きが鈍り最終的には動きを止めた所でタコの脚を何本か斬り落としそれらを抱えて撤退、胴体部食えるところ少なそうだしね。

棍に仕込んでいたのは柄を捻る事により針が飛び出すという単純な仕掛け。

だがそこに深海大クラゲから採取し精製した麻痺毒を纏わせる事により能力者相手でも通用する一品である。

海棲石を仕込んだ部分の中心から飛び出すのでまだ試していないがロギア相手にも有効だろう、多分。

そうしてタコ足を抱えたまま歩きしばらくすると少し離れた所に開けた場所があったので火を起こしそこらにあった枝を削り出し串を作つて其々にタコ足を刺して炙り焼きに。

しばらく待っていると辺りに香ばしい匂いが立ち込めそれにつられて邪魔者が姿を現わす。

つぶらな瞳と裏腹に鋭そうな爪と長い腕を持つ白と黒のシマシマ模様の熊が現れた。

## 熊と鈍熊 ドンクリーク

ん？ストロングワールドで出てきてた気がするぞ？

最初の感想はそれだった。

クリークは知る由も無い（というが覚えてない）がテログマと呼ばれる種で、パワーと素早さを併せ持ちルフィの一撃を避けた程の身体能力を持つ。

勿論シキの一派により凶暴化していたという側面はあれど、なかなかの強さを持つ個体であった。

最初に白尾棍を構えたのが不味かったのか相手は既に前屈みとなり臨戦態勢、そのままスルーというわけにも行きそうに無いので

「仕方ない、ちよつと大人しくしてもらおうか」

そう思い棍を地面に刺し徒手空拳で構える。

相手の振り下ろしの一撃を交差した両手で受け止めそのまま横に逸らして横蹴りを放つ。

相手もさるもので受け止められたと見るや否や反対側の腕にて蹴りを受け止め大きく飛び上がり空中からの両手での振り下ろし。

その長い腕と鋭い爪から繰り出される一撃は遠心力もあり無防備に受ければ大怪我になるであろうが

「鉄塊！！」

素早く全身に力を込め全身を硬化、その一撃は鈍い音をたて弾かれそこに

「連装拳砲！」

両手での鉄塊をかけたままの拳が白黒熊の胴に突き刺さり大きく弾き飛ばす。

これで大丈夫かと思いつつもまだ立ち上がる白黒熊

までよ…？匂いに釣られてきたのなら餌やれば大人しくなるか？

と考え焼きあがったタコ足の一本を放り投げるとその長い両手で掴んだ後こちらを数秒見て綺麗に焼きあがったタコ足にかぶりつく。

美味そうに食べる様を見てこちらもさっさと食べてると横からニユツと長い腕が伸び焼いていたタコ串の一本を掴んだ

…まあいいか、そう考えこちらも食べるスピードを上げる。  
もともと結構でかいし獲物はまた狩ればいいだろうと考え白黒熊  
の好きにさせる。

食べ終わらせて次の獲物を、と更に森に分け入って行くとノソノソ  
と後ろをついてくる白黒熊

しばし考えた後踵を返して白黒熊の元へ

「お前は言葉がわかるか？」

この世界の動物は割と頭が良かったよな？と考えそう聞くと

「ぐるるる」

と頷く白黒熊

「俺についてくるつもりか？」

「ぐるるる」

重ねて尋ねるとそれも頷く白黒熊

「俺はこの島の人間じゃ無いからそのうちここを出て行くがそれでも  
か？」

そして少し考えるそぶりを見せてから頷く白黒熊

「俺についてくるならちゃんと言う事きくか？餌はちゃんと与える」

「ぐるるる」

「ふむ…じゃあ名前をつけてやるか。」

白黒…熊…しましま…モノクロ…モノクマ…は怒られるな、よし！

お前の名前は白黒しましま熊だからシグマだ！宜しくなシグマ！

「ぐるるっ!!」

そう言う嬉しそうに鳴く白黒熊改め”シグマ”

そうして獲物を数匹狩った後部隊の皆がその姿を見て混乱をおこ  
すまで後一時間程の出来事であった。

船まで戻ってきた後に残っていたシキの一味や研究所と思しき場  
所、停泊していた海賊船などしらみつぶしにあたり不安要素を消して  
いく。

その途中でDr. インディゴの研究資料、ダフトグリーンやI・Q  
と呼ばれるこの島の特有品種の研究資料が見つかったのは嬉しい誤  
算であった。



「というわけで選べDr. インディゴ、捕まるか俺の下につくか。」  
「ピーロピロピロ、お前ら海軍なんか協力なんてするもんか！」

クリークとDr. インディゴ、この二人が檻を挟んで向かい合っていた。

「因みに捕まった場合はインペルダウン行きだから覚悟しとけよ？」

「…シキ様はどうなる」

「シキは当然処刑、若しくはインペルダウン行きだ、ネームバリューがデカ過ぎてどうしようもないからな。」

「もしワタシがキサマの下についた場合シキ様を処刑では無くインペルダウン行きに確実にできるか？」

「インペルダウンに送ることによりシキの命だけは助けたいってか？」

「できるかできないか、で答えろ。」

シキ様が処刑されるかもしれないのならワタシはキサマの下にく気は無い」

Dr. が出したのはシキの助命嘆願。

インペルダウンに投獄され一度脱獄した以上処刑の可能性が無いとは言い切れない、そこは上が判断するだろうからである。

「インペルダウン送りにしたとてあそこの環境は過酷だ、獄中死しないとはいいきれんぞ？」

「ピーロピロピロピロ！あのお方がそれぐらいで死ぬ筈がないだろう！」

「わかったわかった、こちらは出来るだけその方向で動く。」

しかし絶対と確約は出来ないがそれでいいか？」

「シキ様が処刑されないなら構わない、なんとしてもキサマが止めろ。でなければこの話は無しだ、ワタシを殺すなりインペルダウン送りにするなら好きにすれば良い！」

ピエロなのにふぎける素振りも無くシキの命を助けんとするその真っ直ぐな目に根負けしたクリークは

「わかった、シキが処刑されないように俺は最大限動こう。それでいいか？」

「うむ、それでワタシは何をすれば良い？」

「あんたにはこのままダフトグリーンの研究とI・Qの研究を続けてもらいたい」

「方向性は？」

「ダフトグリーン匂いに含まれる強い毒性を持った粒子の抽出及びそれに対する解毒剤の開発を頼みたい」

「わかった、それでワタシはどうしたらいい？ここで脱走したらいいのか？」

「これから船でシャボンディ諸島に向かう、そこで脱走というていで船から出てこちらで隠れ家を用意しているので暫くそこでほとぼりをさましてもらいたい。

そして然るべき時がくれば研究を再開して欲しい。

こちらの研究所にあった資料、資材は後でその隠れ家に届けさせる。

必要なものがあつたら俺が来た時か協力者を紹介するから彼に言つて欲しい、何か質問は？」

「わかったオマエの言葉を信じてオマエに従つてやる。

ただシキ様が処刑なんて事になったらワタシはオマエを絶対に許さない」

「よし、じゃあ契約完了だ。しばらくの間よろしくたのむ、Dr・インデイゴ」

「ああ、そのかわりシキ様の事くれぐれも頼んだぞ？」

そう言つて鉄格子を挟んで握手をする、後はシャボンディ諸島の後マリンフォードに向かうだけだな。

## 逃走幫助 ドンクリーク

シキは応援で来た他の艦に任せベアトリス号はメルヴィユから一路マリンフォードへ

その道中で念の為にダフトグリーンについてD r. インデイゴに確認をとっておく。

「ん？ダフトグリーンやI・Qについて知りたいだど？」

：まあいいオマエがワタシの雇い主となるなら知っておいた方がいいだろう。

さて、何から説明してやろうか。

そうだな、オマエはこのメルヴィユについてどう知っている？

ふむ”固有種が多く生息する島”か、確かに間違いじゃないな。

なら何故固有種が多く生息しているかだがここに関わるのがこの島の固有植物の一つである”I・Q”だ。

この”I・Q”はメルヴィユの特定の場所にのみ咲き、後で教えるがとある病気の特効薬の原料になる。

そしてこの”I・Q”には動物を臨機応変に進化させる作用がありこの島の固有の動物達はこれによる進化の結果だ。

そしてワタシ達はこれに着目しこの”I・Q”を用いて島の動物達をより戦闘的な進化を促し世界征服の尖兵にしようとしたが・・・

まあ結果はそれを行う前にオマエに止められたわけだ。

それからもう一つのこの島の固有植物”ダフトグリーン”についてだったな。

”ダフトグリーン”は動物たちが嫌う特殊な臭いを発する樹木だ。

まあ動物だけでなく虫や魚などにも効果が見られるから匂いというのには少し語弊があるかもしれないが危険な動物等を近づけなくさせるため、メルヴィユにも集落があるのだがその周囲を囲むように植林されている。

ん？ゾオン系やミンク族には有効かだど？

うむむ、私見ではあるが有効だろう、実際試してみない事には断定はできないが。

ただゾン系は知つての通り動物に変化する悪魔の実だが実際は人間、人間と獣の間、そして完全な動物型と三形態に変化する。

この”ダフトグリーン”、動物はこの匂いを苦手とするが人間はこの匂いを苦手としないのでゾン系であれば人間形態であれば効果は無く獣形態なら大きな効果がある、というところだろう。

中間ならそこそこ効果はあるだろう、ミンク族もまあ同じくらいではないか？

そしてこの”ダフトグリーン”、人間はこの匂いを苦手としないと言つたが決して無害ではない。

この臭いの粒子には強い毒性があり、例えば短期間に多く吸い込むと急性中毒を引き起こす。

それでなくとも長い間体はその毒素が蓄積すれば体に緑の斑点ができて広がり斑点が出来た箇所から体が動かなくなる”ダフト”という病気にもなる。

そしてこの”ダフト”と呼ばれる病気の特効薬になるのが”I・Q”から作れる薬だ。

このメルヴィユという島はこの二つの植物がバランスをとり人間と動物がうまく共存している島なのだよ。

うん？”I・Q”による人間の進化や”ダフトグリーン”の毒素を抽出して”ダフト”に感染する毒を作れるかだと？

確かに”I・Q”が人間に与える影響というのは不明だがこの島の住人達はワレワレと違い腕に翼らしきものを持っている。

長い間この島にいる住人達だからこそ成し得た”I・Q”の影響を受けての変化だろう。

それから”ダフトグリーン”の毒素の抽出？ふん、この天才科学者たるワタシにかかればその程度造作も無いわ！

ただしそれなりの研究設備が無いと話にならない、研究をして欲しいならそこらへんをさっさと何とかするのだな！」

確認は取れたのでやってほしい事の説明を行い、そして航海の途中でメルヴィユにて仲間になった熊・・・熊？のシグマにこの世界の常

識や一般知識などを教える一方カフウやイシズミなどとも交流を持たせる。

そしてシャボンディ諸島にて所用のために停泊し時間は草木も眠る丑三つ時。

コソコソとD r・インディゴを連れてあらかじめ無法地帯に確保している何軒かの隠れ家のうち一件にインディゴを移送し注意事項やこのシャボンディにいる協力者の事などを含めて聞かせ暫くはここでほとぼりをさましてもらおう。

そして朝になりD r・インディゴの脱走を見張りが発見。

本部に報告するもシキは捕縛したのだからそんなの捨て置けと返事が。

それでいいのか海軍本部・・・などと思いながら全員に通達し見つけたら捕まえるぐらいのゆるいスタンスで捜索がてらの休暇を船員に与え俺はそのまま私的に工事をしている現場へ向かった。

シャボンディ諸島72番GR

その一部で作っているのは小規模な港である。

お世辞にも立派とは言いがたいが土地代の方が高かったので個人で作るとそこまで立派なもののは作れそうになかった。

隣の20番代のGRなら土地代も安かったがさすが無法地帯、治安に雲泥の差があった為多少高くついてもこちらの方が良いだろうと判断し今に至る。

発注した業者に話を聞けば遅くとも来年いっぱいには完成するとの事。

全て上手くいけばここが重要な場所になり得るのでしつかり仕上げて欲しいところである。

そうして無法地帯のうちの5番GRに向かいテゾーロの元へ。

「ようテゾーロ…ってなんでそんな嫌そうな顔してんだよ」

「前にここに来てからまだ一年立たない中途半端な時期に来たって事はまた何か厄介ごと持ってきたんじゃないかなと思っただが…」

「お、鋭いじゃないか」

テゾーロは仕方ないとばかりにため息を吐き

「で、今度は何だよクリークさん。」

賞金首のリストならいつも通り纏めてるが？」

「いや、金獅子がインペルダウンから脱走したのは知ってるな？」

「ああ、流石にあんだだけでかどかと新聞に載ってりやな。」

しかしあの監獄を脱獄って一体どういう手を使ったんだか？」

「んで、今回金獅子を再度捕まえたわけだが、因みに脱獄手段は繋がれた枷を自分で脚を斬ってその後能力で脱出したみたいだぞ？」

「うっへえ、肝が座ってるというか正気じゃないというか。」

で再度捕縛って事は今度は処刑になるのか？」

「まあこちらとしてはそうなると困るから色々動くがな、でテゾーロに頼みたいのは金獅子一味の一人をこちらで匿う事になったからほとぼりがさめるまで暫く世話をしたいんだが」

「うげ、やっぱり厄介ごとじゃねーか、何番GRの隠れ家だ？」

「場所は12番GR、一応戦闘能力はあるが科学者だからそこまで過信はできないだろう」

「科学者か…名前は？」

「名前はDr. インディゴ、主に植物の研究学者でちよつとしたものを作ってもらう為の一時的な繋がりだ」

「という事は例の知識は秘匿か、了解した。」

そうして細かい点を詰めリストを受け取り一度駐屯地へ戻る。

さて、何人が連れて掃除だな。

明日にはマリンフォードに行かなきゃならんから手早く済ませてしまおうか。

## 赤青黄鈍　ドンクリークさん

マリルフォードに到着し頭に海兵帽を乗せたシグマと本部に報告に行く途中で出会ったのは大将になるのは確実と言われている三中将ことサカズキ、クザン、ボルサリーノの三人であった。

「おんやアゝあの子はどうしたのオ〜?」

「今度からあれじゃ一人動物園とでも呼んじやろうか?」

「あれ? 娘じゃなくて今度は奥さん連れてき、いったあ! 覇気込めて蹴らなくてもいいじゃない!!」

割とイラツときたのでクザンにローキックをかます、勿論普通に蹴ってもダメーシが無いので覇気を纏った上でだ。

「しゃらつぷ、あの子は母親が見つかったからそこで別れた、あと一人動物園は勘弁してくれ最近自分でも思ってるから。」

あとクザン、蹴飛ばすぞ」

「ちよつとした後輩ジョークじゃないの…:というか蹴飛ばしてから言われても…:」

「今のはクザン、おんしが悪かろう。」

それより聞いたぞクリーク、脱獄しちよつた金獅子を捕らえたんじやろ?」

「多分その件だと思っけどもオ〜センゴク大将が君が着いたら執務室に寄越してくれて言っただよオ〜?」

「あー、了解した。」

取り敢えず積もる話は後だな、呼ばれてるんなら早いとこ顔出しとかなきやいかんだろ。」

そう言っって三人と別れシグマを連れてセンゴク大将の執務室へ。

コンコン、とドアをノックし

「センゴクたいしよーどの! クリーク大佐であります! お呼びとお聞きしましたが!」

「おおクリークか、入っしてくれ」

「失礼します!」

そう言っって部屋に入ると唾然とした顔でこちらを見るセンゴク大

将。

何かやったかと思えば

「…クリーク大佐、その熊…熊らしき者は何だ？」

「はっ！新しく入った海兵見習いであります！後学のために基地案内をしてるところであります！」

そう答えるとセンゴク大将はすつごく複雑そうな表情をしすつごく長いため息を吐いて

「…わかった、取り敢えず一旦置いておく。

それよりクリーク、今回の金獅子捕縛と海軍独立中隊による多数の海賊の捕縛を功績としてお前に昇進の話が来ているが受けるか？

受けた場合准将となるから半年程将官教育の為こちらにいてもらう事になるが…」

将官教育で半年…先に東の海に行つときたい気もするがどうするか…

「センゴクたいしょーどの、昇進した場合中隊はどうなるでありますか？」

「うーむ、一旦解散という形になるだろうな。

それから再度人員を組み直して今度は一隻ではなく艦隊を率いてグランドラインにて巡回、若しくはどこかの支部を預かる形になるだろう。

本部での勤務を望むならこちらで役職を用意するがどうする？」

となると今の人員で動けるのは大佐の間だけか…

「昇進の件は先送りでもよろしいでありますでしょうか？少々心残りがありまして大佐のうちに済ませときたい用事があります…」

「ああ、昇進の話は急ぎではない。

いきなり言われてもやるべき事も多いだろうからまたその時で構わん」

よし、じゃあ補給を終え次第今度こそ東の海へ向かわなければ。

おっと、その前に今夜の夕食に三人を誘って例の件を話しとかなきゃならんな。

そしてその日の夜、クリークの発案によりいつものメンバーが集ま



る。

「で、どうなのよ各国の状況は？」

そう口火を切ったのはクザン。

場所はベアトリス号の食堂であり集まったのはサカズキ、ボルサリーノ、クザンそしてクリークを含めて四人。

重要な協議として船員の立ち入りは禁じてある。

「ああ、どこも酷いもんだった。

まともに運営している国もあるにはあったが極少数、どこの王も天竜人の真似事で高い税金に国民への圧政や横暴な振る舞い、そしてそれを国の上に居座る者として当然と思ってる奴等が大半だった」

「やはりねエ、言われてた事ちよつと調べてみたけど世界政府加盟国から天竜人に納める”天上金”だけどやっぱ年々増加傾向にあつたよオ〜？」

そう言つて詳細が書かれた資料を机の上に広げるボルサリーノ

「海賊の増加で”天上金”を運ぶ世界政府の船が襲われちよるのも影響があるじやろ、世界政府の船への襲撃率も前とは比べもんにならないわい」

そう言つてこちらにも資料を広げるサカズキ

「世界貴族自体も昔に比べて増加傾向にあるしねえ、最初の20人：アラバスタのネフェルタリ家を除いて19人だったっけ？それからこの800年の間で倍どころの数じゃなく増えてるからねえ」

「各国の天上金の負担と各国王族が贅沢の為に課している重税で下手すりゃ数年以内に潰れそうな国もあつた、革命軍とやらが蠢動するのも無理ないだろ…」

「じゃからというてやり方が性急すぎるんじや、世界政府の打倒を公言しておるが倒してはいお終いとはいかんじやろ」

「倒すにしても世界政府が抱える戦力も厄介だよねエ、海軍は一旦置いておくとしても曲者揃いの”七武海”に世界政府諜報機関の”サイファーポール”も油断できないからねエ」

「世界政府が持つてる世界をひっくり返しかねない爆弾も詳細が全くわからないからねえ」

「七武海と言えばボルサリーノ、頼んでおいた”公認海賊”に関して  
は進んでるか？」

「略奪を行わない財宝探しや冒険を主とした海賊の存在を認める、  
だったっけエ？」

「洗い出しはしてるけど何しろ数が多いから暫くはまだかかりそう  
だねエ」

「そいからおんしが提案しとった世界貴族専用通貨の発行じゃがこれ  
はダメそうじゃ。」

”天上金”の輸送船襲撃に対して輸送を容易にする為ちゅう事  
でコング元帥を通して世界政府に上げたんじゃが”そこをなんとか  
するのが海軍の仕事だろう？”じゃと

「特別扱いって事なら喜ぶとおもったんだがなあ、取り敢えずそれは  
諦めるしかないか」

「やっぱ輸送船の襲撃率の上昇で”天上金”が届く額が減ってそれに  
よりもっと献上するように指示が出るって負のスパイラルに陥って  
るわけだしますは世界政府の輸送船、これの護衛を増やすべきなん  
じゃないの？」

「やっぱそれで全体の額を抑えるしかないかあ…」

「じゃあ取り敢えず三人から護衛を増やすようにセンゴク大将とか  
コング元帥に頼んでくれ、俺はまだペーパーの大佐だからな」

「何じゃ、金獅子の捕縛で昇進の話の一つも来とらんのか？」

「まさかセンパイが熊を連れてきたからお流れになったとか？」

「いやいやいや、昇進の話は来てるけどちよつとやり残してる事が  
あつて取り敢えず昇進は先送りだ。」

「しかし”マリージョア辺りが襲撃されてくれれば”世界貴族の人  
数が減るから有難いんだけどなあ」

「ちよつとオノ騒な話はやめてほしいねエ」

「いやいやいや、流石にあの場所に襲撃かけれる手段も人間もない  
でしょ。」

「取り敢えずコング元帥辺りに護衛の話は提案してみるけえ、おんし  
はさっさとこつちにはかし苦労させんでさっさと中将辺りにならん

かい」

「はいはい・・・取り敢えず昇進云々は上が決める事だから俺は地道にやるだけだよ」

そうして他にも未だ残る悪習である奴隷制度や悪しき法である古代の研究の禁止などを話し合い夜は更けていった。

## 東の海へ ドンクリークさん

マリルフォードを発ち早数ヶ月。

道中の海賊を捕縛したり指導を加えたりしてやってきました東の海。

今回の旅の目的は大きく分けて3つ。

まずはカチカチの實の回収、凶鑑で調べたところ記憶にある形と一致したので断定。

次にギンとパールの勧誘、年齢を覚えてなかった事もあり今何歳なのかわからないのがネックだが多分原作開始当時20代だろうと予測の元現在はまだ一桁だろう。

そして原作で出てきた島の把握、これは各国の現状を調べるついでがいいか。

このうちカチカチの實の回収は直ぐに終わるとしてギンとパールを探すのは時間がかかるかもしれないから地理の把握のついでで良いだらう。

そうして考えながら補給の為にとある島に寄った時にその出会いはあった。

何人かで島の見回りをしていた時海兵の一人にぶつかり倒れる幼い少年

「おい坊主、大丈夫か？」

とぶつかられた海兵、軍曹が声をかけるも何も言わずに逃げ出した為

「…盗られたものはないか？」

直感的に閃きそう聞くとぶつかられた軍曹はハッと気づいたような顔をして腰に手をあてると

「すみません！携行用ロッドをやられました！」

「財布なら別にいいが武器はいかん、何人か連れて行け、取り返した上で連れてこい。」

あの身なりから察するにストリートチルドレンだろう、飯くらい食わせてやろう」

この島はどうにも治安が悪く孤児と思しき子供達も何人か見かけた、さっきの子供もその一人だろうと判断し命令する。

そうして何人かが少年を追いかけ暫くしてから少年は軍曹の小脇に抱えられ戻ってきた。

「すいません、すばしっこくて時間がかかりました…」

そういう軍曹を手で制し

「さて坊主、親はどうした？」

そう聞くと

「…いねえよ、わるいかよ」

と答える少年、やはり孤児か。

しかしどつかで見たような気も…

「おい軍曹、こいつを船の風呂に叩き込んで食堂に連れてこい」

そう指示を出して見回りを中断、船に向かい暫く待つとさつきより身綺麗になり無然とした面持ちで少年がやってきた。

予めコックに頼んでおいた飯を出すとそれらを凝視したまま手をつけない少年

「どうした？食わんのか？」

「ねらいはなんだ…おれみたいなおやなしにここまでするのはなんでだ、ひとかいにでもうろうつてか？」

「別に理由はねえよ、強いて言えば海兵相手にスリを働こうとした度胸を買っての事だ。」

早く食わねえと冷めるぞ？うちのコックが腕をふるってくれたんだ、熱いうちに食わねえと失礼だろ。」

暫く此方を見ていたが恐る恐るスプーンをとりシーフードピラフを一口、目を見開きそれから猛然と食べる少年。

「食いながらでいい、俺も昔はお前みたいなストリートチルドレンでその日その日を生きてたようなもんだ。」

お前に昔の自分を重ねたのかもしれないねえな。」

そうして居るうちにやがて少年も食事を終え…つてあの量全部食ったのか、余分に作ってもらってたがあの小さい体のどこに入るんだ？

「…ありがとうございます」

そのうちのたれじんでたところをここまでしてくれておれにこのおんをかえさせてくれ!

ざつようでもてっぽうだまでもなんでもやる!

だからおれをこのふねにおいてくれ!!」

そう言つて深々と頭を下げる少年。

鉄砲玉つておい、うちは海賊じゃねえよ。

ふーむ、しかしこのままこの島に居ても野垂れ死ぬ可能性が高い以上このチャンス逃したく無いってどこか?

まだ幼い割に頭は結構回るようだ、軍曹もすばしっこいと言つてたしこれは化けるかもしれんな

「…見ての通りこれは海軍の船で俺たちは海軍の人間だ、この船に置かせてくれというのは海軍に入れてくれという事か?」

「いや、かいぐんにはいれというならはいるけどあんたのもとにおいてほしい」

「…坊主、名前は?」

「ギン、かめいなんてもんはもってねえ」

…ここですか!同名の別人って可能性もあるが何となく既視感があるので多分間違いないだろう

「わかった、ギン。」

この船に乗りたいと言うなら乗せてやる、ただ客人扱いじゃ無いからしつかり働いてもらうぞ?」

「…よろしくおねがいます!!」

そう言つて元気よく答える少年改めギン、口の端にソースくつついてんぞ?

新たに加わったギンを船の人間全員に紹介し暫くは俺の侍従扱いとして船のルールなどを教える傍ら船の案内をしてそのついでに雑用でやる事や一般教養等を教え航海を続ける。

そうして数週間が過ぎ最初は恐れていたシグマにようやくギンが慣れた辺りでようやく目的の島を見つける。

数年前にグループ中将に放り込まれた密林の緑が生い茂る島である。

丁度いいので各乗組員に拠点の設営を指示しこの機会にギンがどの程度動けるか確認と基礎訓練の為何日か停泊する事にする。

原作では”鬼人”の異名を持っており武器として先端に鉄球着きトンファーを使って戦いその一撃はサンジの蹴りを受け止め、戦艦の大砲すら通じないと称するパールの鎧を叩き割るほどであった。

性格は提督のクリークを心から尊敬しており、クリークの命令には例え相手が命乞いをしようとも、クリークの敵とあらば躊躇なく殺すその冷徹さから”鬼人”と呼ばれていた。

しかし、餓死寸前だった自分に無償で食事を出してくれたサンジに大きな恩を感じ、絶対服従しているはずのクリークにサンジとバラティエを見逃すよう泣いて懇願するなどしてクリークの逆鱗に触れたため毒ガス攻撃を受けて瀕死の重傷を負うも何とか一命を取り留める。

最後はルフィに敗れて半狂乱状態になったクリークを気絶させ、偉大なる航路での再会を約束して船員たちと共に店から退散していった。

まあ毒ガスとか持ってないんだけど、というかそんなひどい事しないけども。

「と言うわけでとりあえずどっからでもかかってこい、武器が必要な何か用意させるが？」

武器も防具も一切持たず諸肌で立ちそう聞くと  
「ならあのロッドをかしてくれ、できればふたつ」

そう言ったギンに近くにいた海兵2人からロッドを借り投げて渡す。

携行用折畳式ロッド、これはこの船の人員は全員身につけており技術班に作ってもらったちよつとやそつとでは壊れない頑丈さと携帯性の高さを併せ持った殴打武器である。

両手にロッドを持ち低く飛びかかるかのような体勢のギン、そこから素早く距離を詰める

年の割には素早いが…

「動きが直線的だな」

そう言つて半歩ずれて避ける、まあ当然と言えば当然。

スリを働いてきたと言えど闘い方を知つてゐるわけでも無いだろうしな。

避けられたと見るや素早く距離をとりまた此方への距離を素早く詰める。

近づいてきた相手を掴もうとした直前で半歩後ろに下がられ捕まえようとした手は空を切りそこに飛び上がったギンがロッド二本を合わせての打撃を加える。

「フェイントを挟んできたか、上出来だ」

が、そのロッドはパシリと手で受け止められ、反対の手は相手の襟首を掴んで宙吊りにした。

「…まいました」

「スピードはその歳にしちやなかなかのもんだ、取り敢えず暫くは体力の向上を図り速さを伸ばす方向だな。

何かしら使いやすい武器を見繕つてやろう」

そう言つて軍曹にギンの指導を頼みシグマを伴い足を延ばすは島の反対側、かつて数年前に拠点としていた場所である。

「うわ、ボロボロじゃねえかよ」

かつて海賊船を積み上げ小屋としていた場所は嵐にでもあつたのか大きく崩れていた

「入口も崩れてるなあ…」

などと思つてると

「ぐるる」

と崩れていた船の一部を持ち上げるシグマ

「おう、すまん」

そうして中に入つていき悪魔の実を埋めたところに着くも

「まじかおい…」

中は荒らされており埋めていた場所は掘り返した後が。

「ちっ、仕方ねえそこまで執着してるわけじゃ無いが盗られた以上どうしようもないか」

そうぼやきつつ崩れかけた小屋を出て船の場所に戻ろうとすると



視線の先に1人の少年。

ギンよりも幼いであろうその少年の格好は腰蓑一丁で片手に四つ足を縛ったこの島のものであろう兎、狩の獲物だろうか？

此方を見て怯えたように後退り更にシグマが「ぐるるるる」と鳴いたのを見て

「ひいっ!!ミのキケン!ミのキケン!!」

そう言っつて両腕同士を打ち付けガキンガキンと人体からは考えられないような金属同士を合わせる音がして

「ミのキケン!!!」

少年の体が燃え上がった。

カチカチの実食ったのお前か!!というかその台詞!お前パールだろ!!!

## 漂着親子 ドンクリークさん

何とか宥めて落ち着かせて暫定パールが話した事を要約すると  
父親と船に乗っていた

凄い嵐がきた

船から落ちた

父親が助けてくれた

この島に流れ着いた

ここでずっと暮らしてる

父親が動け無くなった。

きつとここに漂流してきてから子供を養うために無理をし過ぎたのだろう、住んでいるという場所に連れられていくと大きな葉と木を組み合わせて作られた小屋があり中には1人の男が寝ていた。

「これは酷いな・・・」

髪も髭も野放図に伸びておりぱつと見の年齢はわかりにくいがおそらく30代くらいであろうか、引き締まった体つきをしているが目を引くのは右肩から左脇腹にかけての大きな三本傷。

包帯が無いのだろう、粗末な布で巻いているが血が染み出しており傷口は塞がっておらず化膿しているのが見てとれた。

「おい、しつかりしろ大丈夫か？」

「ア・・・誰かわからんが・・・息子を頼む・・・息子を・・・」

軽く診るも高熱のせいであろう、意識が朦朧としているようだ。

外に出て信号弾を打ち上げ何人か寄越すように連絡して

「坊主、今からお前の父親を俺の船に連れて行く。

ここには戻ってこれないかもしれない、付いてくるんなら持つて行くものを今すぐに纏めてくれ」

そう言うときとコクンと頷いて小屋の中にきびすを返す少年。

助かるかどうかは半々、傷はかなり深く処置も満足にできなかったからか傷は塞がる事無く化膿もしているが後は船医に診てもらえないか・・・

しばらくすると背中に荷物を引きずった少年が戻ってきており

「そーいや坊主、名前を聞いてなかつたな。」

「パール」

やっぱりか・・・

原作では”鉄壁”の異名を持つておりドンクリーク率いるクリーク海賊艦隊の第2部隊隊長。

体を巨大な2枚の盾で挟まれておりそれに加えて両手両脚に盾を装備、その防御力は戦艦の主砲を跳ね返す程の防御力を持つとされていたが、あえなくギンに自慢の盾を砕かれダウンした。

ジャングル育ちでパニックになると両手の盾で自身に着火し燃え上がるという悪癖を発していた。

まあ今はただの寡黙なちびっ子だが・・・そーいや悪魔の実食つてたんだった。

「坊主、お前こんな感じの果物食ったことあるか？」

そー言つて地面にサラサラとカチカチの実を描いてみせると

「おとしゃんがくれた、すごくまづかつた」

と簡潔な答えが。

やがて船員達が駆けつけてきたので事情を説明、手早く担架を有り合わせで作るとパールの父親を搬送させ海兵の1人にパールと引きずっていた荷物を預け先に船に戻ってもらう。

そうして小屋を確認し中であつた本や書き物などを確認し武器などもあつたので念の為に鞆に詰め込んでいく、父親が亡くなった場合子供を送り届ける必要があるだろうからな。

船に乗りたいたいという事であれば乗せるが父親が助かり親子共に暮らせるのならそれに越したことは無いから本人に任せよう。

## 東の知識 ドンクリークさん

子供同士という事でギンにパールの面倒を見てもらっていたところ懐いたのか、パールはギンの仕事を手伝ったりギンの鍛錬を見ていたり時には参加したり（すぐにへばっていたようだが）するのが見られるようになって数日。

ここ数日生死の境を彷徨っていたパールの父親が漸く目を覚ましたと聞いてひとまず安心だなと思いい面会に向かう。

船の医務室に入るとベッドから身を起こそうとしたパールの父親を手で制して

「そのまま、まだ治りきってないのだから無理は禁物ですよ」

その言葉に

「申し訳ない、まだ痛みが抜けないものでこのままで失礼します」

と返すパールの父親。

野放図に伸びていた髭や髪は切られており優しそうな顔、大きな怪我を負っていた胴体は包帯でグルグルに巻かれており完治には暫く時間がかかるだろう。

「俺は海軍大佐のクリークだ、補給の為にあの島に寄つたのだがその時にあなた方親子を見つけたので船に連れ帰り治療させてもらいました」

「どうも助けていただき感謝します、申し遅れましたがパールと言います」

「ポールさんは船から落ちて漂着という事で間違いないですか？」

「はい…実は仕事でローグタウンに向かう途中でして知り合いの船に乗せてもらっていたのですが…」

「ああ、その途中で嵐に巻き込まれたのですか？」

「はい、そこであの子が船から投げ出されてしまったので咄嗟に後を追って飛び込んだのです。」

「船へ戻る事は出来なかつたのですか？まあ嵐に巻き込まれたとなると難しいかもしれませんが…」

「乗っていた船は嵐の中だった事もあり見失ってしまつてなんとかあの子と流木に捕まって耐えていたところあの島に流れ着いたのです」「因みにどれくらいこの島に？途中で船が通り掛からないわけでもないと思います…」

「正確にはわかりませんが流れ着いて1年ほどになりますかねえ…」

「通りがかかる船はどれもこれも海賊旗を掲げておりそこに助けを求めめるのも気が引けたので…」

「まあ海賊に助けを求めて本当に助かるかどうかなどわからないだろうしなあ…」

「ここは潮の流れの影響で主要な航路から外れてますからねえ、それでも通るのは人目を避けたい輩ですからまあ当然といえば当然ですか…」

「幸いにもある程度戦う事は出来るので獣を狩ったり果物を集めたりで何とか暮らしていたのですが猛獣相手に不覚を取ってしまいました…このざまですよ…」

「そう自嘲するパールの父親改めポール」

「そういえばご職業は何を？」

「ああ、私は鑑定士をしてましてね。」

「鑑定士は宝を持ってしていると勘違いされるのか襲われる事も多々ありまして自衛のために訓練は受けているのですよ」

「なるほどそういう事でしたか、奥さんは船の方に？」

「いえ、妻はパメラと言うのですがあの子を産んで暫くして亡くなったので…」

「すみません、配慮が足りませんでした。」

「ところでお子さんのパール君ですが悪魔の実を食べているようですがどこで？」

「実は漂着してすぐ周囲を探した時に海賊のアジトらしき場所がありましてそこで見つけたのですよ」

「えーと、誠に言い難いのですがあれは私の隠れ家です…」

「!!すつすいません！海軍の管理下とはつゆ知らず漁ったり武器をとったりするだけでなく悪魔の実を持ち出しその上に食べさせてし

まうとは!!」

飛び上がり土下座しようとしたので慌てて手で制す

「ちよー落ち着いてください!別にどうこういうつもりはありませんから!」

海軍の管理下なんてご大層なものではなく個人的なもの、子供が作った秘密基地みたいなもんですから!」

「本当に申し訳ありません、しかしあれを見つけた時少しでも生き残る確率が上がるだろうと思いい息子に食べさせたのです…」

まあそこまで執着してたわけじゃないし止むに止まれぬ理由があるようだし別に良いのだけどね

「事情は把握しました、我々はしばらくはこのまま停泊しますのでしつかりと養生してください。」

息子さんは我々が責任持つて面倒見ますので何かご用があれば言ってください」

「何から何まですみません、息子共々助けにいただき本当にありがとうございました。」

そうして事情の聴取を終え後は船医に任せる事にして医務室を離れた。

とりあえずポールの怪我が落ち着き次第ローグタウンに向かうとするか、と思いつながら艦長室に戻り机の上に複数の海図を広げ白紙とペンを用意する。

まずローグタウン、原作ではスモーカーが支部長をしていたが今の時期は別の人間だろう。

というかスモーカーが海軍に入るのいつだったつけ?というか初登場時何歳だつけ? (ロジャー処刑時12歳、原作開始時34歳)

まあとりあえず置いといて出発順だとまずフーシャ村、イベントは特に無し。

でもエースとかサボが流星街にいるんだったか? (誤 グレイ・ターミナル)

今何歳かわかんないけど後で見ただけ見に行ってみるか、と考え紙にゴア王国と書く

次がゾロが仲間になるんだけど…町の名前覚えてない（シエルズタウン）

モーガンが町を支配してたよな、確かクロの件で大佐になったんだっただか、その前はくっ殺とか言ってたから真面目な海兵だったんだらうから後でちよつと調べてみるか（因みにクリークとは同じ年である）

えーと次が町長…シエリー？シエシエ？そんな感じの名前の町長がいて（誤 プードル町長、シユシユは犬の名前）街の名前は…覚えてないけどそこまで重要じゃないからいいか（オレンジの町）ナミとそれからバギーのイベントだったか。

んで次がシロップ村

カヤお嬢様のところともいウソップとクロだな、クロがいつクラハドールになるかわからんがお嬢様はまだ生まれてないよな？（原作開始時カヤ17歳クロ33歳、執事として潜入してから3年）

うーん今は特に寄る意味はないか、よし次

えーと次はサンジだけど…俺かあ。

バラティエはまだ開いてないだろうけどゼフの手配書があるか後で確認してみるか。

サンジの実家は…どうしたもんかな、下手につついて蛇がでてくるのも怖いし、ぶつちやけヴァンスモークのところ（ヴィンスモーク）はつきり覚えてないけど、サンジが生まれて数年後に北の海からレッズラインを越えて来たってのは覚えてるから今いるとしたら北の海だから後回しだな！

んでナミとアロンだな。

ジンベエが七武海どころかフィツシャー・タイガーの聖地襲撃も起きてないからまだまだ先だな。

えーとオレンジ島？みかん島？そんな感じの名前だったような気がする、たしかココヤシ諸島の中の1つだったよな。（誤 コノミ諸島のココヤシ村）

あ！となるとまだ20年前ならナミは生まれてない筈だしベルメールさんはひよつとしたらまだ海兵か！

(0巻にてコートを着ている?：ように見えるのと東の海に来たら、と言つてることから支部の将校(少尉以上)得意武器はおそらく銃)

後で所属海兵のリストを取り寄せてみるか。

後は：あ、ゾロの生まれ故郷のシモツケ?シモツキ?そんな感じの名前だったか。

くいなもゾロも産まれてないだろうから行かなくてもいいか(くいな誕生済み)

あとあるかどうかわかんないけど海のヘソだな、これは凄く印象に残つてるから覚えてるが海に穴が開いてること以外さっぱりだからな：

とりあえず向かうのはフーシャ村だけでいいかな?

ひよつとしたらシャンクスとかもいるかもしれないな、おつと”公認海賊”の件で例の黄金海賊にも声掛けとかないとだな



## 中将遭遇　ドンクリークさん

回復したポールとパールをローグタウンまで送り届けて進路は一路ゴア王国へ。

2人には優秀な人材に唾つけるためという理由をつけて困った事があれば頼ってください、と連絡先を渡してある。

ギンと別れるのがイヤだったのかパールが泣いてたのが印象に残る別れであった、またいつか遊びに来ると伝えて納得してもらったが。

将来の部下候補だから大事にしないとね。

ローグタウンでは色々といツポンマツの武器屋など見て回ったが一番見たいと思つてた海賊王の処刑台は思つてたより普通の処刑台だなあ、という印象しか思い浮かばなかった。

処刑当時に居たのなら別だがその時は病室でダウンしてたのでその場にはいなかったのである。

そうして見て回り他は特に見るべきところも無いので早々に錨を上げゴア王国へ向かう途中で骨を啜えた犬の船首に海軍旗：ガープ中将の船がいる事を見張りが報告してきた。

船を横付けするように指示を出し考える。

そういやあの人マリンスフォードに顔を出した時居なかったな、しかしどうしたものか：理由を聞かれた場合馬鹿正直にエースがいるかもしれないので確認しに来ましたというわけにもいかないし…

そうこうしてるうちにベアトリス号は横付けされ悩んでばかりいるわけにもいかないのでパスクア大尉を伴いガープ　中将の元へ

「おうクリークよ!!シキを捕まえたそうじゃな！よくやったのう！」

「なんとか運に恵まれていたのと金獅子が油断してたおかげでありますよ、そういうえばガープちゅーじよー殿はどうしてこちらに？」  
「わしか？うーむ…あれじゃ！孫が生まれたので顔を見にな！」

ルフィ…じゃないよな多分年代的に。

となるとエースは確定か、となるとわざわざワグシーヤ村は寄らなくてもゴア王国の現状確認だけで良いか。

「なるほど、お孫さんでありますか。是非見てみたいものでありますな」

「おお！興味があるか！今は帰りじゃが良かろう！もう一度フーシャ村へ進路をとれえ!!」

慌ててそれを止めようとする側で話を聞いていたボガード大佐とそれに対して”わしは休暇中なんじゃ！それくらいいいじやろ!”と言い募るガープ中将

「いえいえ！大丈夫でありますですよガープ中将！自分も色々回るところがありますのでお孫さんについてはまた後日ということ!!」

「む、そうか：ならまた今度連れて行ってやるわい、しかしシキを捕らえたのに何故こんなところにおるんじゃ？」

もつともな質問である。

「自分は海賊の調査及び捕縛であります、実は昇進の話が来てましてその場合こうして動くのも難しくなるのでその前にと思いました。」

東の海はちゅーじょー殿に連れてこられて以来一度も来ていない上に噂によれば海賊王の元クルーもこの辺りで動いてるとかなんとか」

たしかシャンクスってこの時期東の海にいるよね？いたっけ？

バギーはわかんないけど多分どっかにいる：はず。

「なるほど、そういう理由じゃったか。」

しかしその若さで准将とはやるのう、この調子でいけば大将も夢じゃなからう」

「いえいえ、大将はあの三人がなるでしょうからね。」

しかも自分はまだまだ若輩の身でありますよ、与えられた仕事を精一杯こなすだけでありますです」

「うむ！それでこそじゃ！ではわしは先にマリンスフォードに戻るでな、巡回頑張るんじゃぞ！」

挨拶を終えベアトリス号に戻る、しかし自分で言っておいてなんだがシャンクスか：ついでにバギーも。

今の時期この海にいる可能性は確かに高いよな、遭ったらどうしよ

う…

はてさて、そんな考えがフラグになったかどうかは不明だが

○月○日

今日はいいい天気です

○月×日

今日はいいい天気です

波が少し高いです

○月△日

今日は雨が降りました

海も荒れていました

△月○日

今日はいいい天気です

△月×日

今日はいいい天気です

船のみんなで釣りをしました

魚が美味しかったです

△月△日

「今日はいいい天気です…つと!」

と、砂糖とミルクをたっぷり入れたコーヒーを飲みつつ航海日誌を書いているとその報告は飛び込んできた。

『大佐あ! 前方に海賊船です!』

「旗印は?」

伝声管から聞こえる声にそう返すと

『交差した剣に赤いライン! 情報班によると赤髪海賊団です! 懸賞金1000万ベリ!』

ぶっふうっ!!

びっくりしてコーヒー吹き出したじゃねえか!!

え? 赤髪ってシャンクスだよね!?! いるかもとは思ってたが…

というか1000万? いや、まだ原作より20年も前だし仕方ない

のか？

「直ぐに上がる！停船信号を打ち上げろ!!」

コーヒーを飲み干し慌てて司令室へ向かう

「詳細は？」

「は！赤髪のシャンクス率いる赤髪海賊団、危険度低、優先度低です！海賊旗に関して数回の注意勧告を受けても改める事なく一年程前に前に手配書入り。」

その上で捕縛しようとした海兵や賞金稼ぎを退け続け数ヶ月程前に3回目の更新で現在の額に落ち着いています！」

そっかー：海賊旗の掲揚への注意勧告無視かあ：んでその上で実力行使に出たかー：

「うーむ、気になる事があるからちよつと俺だけ行ってくる。船はここで待機だ、いいな？」

「はっ！了解しました！」

普通なら止められるとこだけ信頼なのか放任なのか止められる事なく月歩にて空中を蹴り赤髪の船へ。

よく見れば船も原作のあののでかいのじゃないみたいだしこれから四皇へ至るんだろうなあ：

万が一戦いになっても大丈夫なように剣と棍を持ってきたがはてさてどうなることやら。

甲板に降り立つと複数人に囲まれる。

お、ベックマンにラッキールウ、ヤソップもいるな。

「落ち着け、戦いに来たわけじゃねえ。船長はどいつだ？」

そう聞くと

「船長は俺だよ、鵬の水兵団団長さんよ」

現れたのは赤い髪に麦わら帽子、腰にある一本の剣に手を添えた上で油断なくこちらを見据える目。

というか若っ!!

「へえ、知ってくれてるとは光栄だな、挨拶が遅れたが海軍独立中隊長のクリークだ」

「俺はこの船の船長をしているシャンクスつてもんだ。」

あなたのところが掲げる赤い鷗の海軍旗は有名だからな、知らない海賊はいねえよ。

ところで今回はなんだ？海賊旗を下ろせって事なら断るぜ、俺たちの自由の象徴なんだからな」

「いやそれについては何回も注意勧告した上で改善の余地がなかったから諦めたが…」

「ま、そういう訳で賞金首になっちまったがな。

お陰で最近賞金稼ぎが俺の首狙ってくるんだがなんとかなんねえか？」

「なるわけねえだろ、海軍に何頼んでやがる。

しかしその若さで海賊か、年は幾つだ？なんで海賊をやっている？」

「はっ、まだ17だが年は関係ねえよ。

海は広くて大きいからな、冒険をしてえんだよ、それに何と言っても海賊つてのは自由だからな!!」

成る程、これがシャンクスが海賊である理由か…

ルフィみたい…というかルフィがこれに影響されて、か。

## 赤髪戦闘 ドンクリークさん

「自由か…、羨ましいもんだな」

「なんだ、あんたも海賊になりてえのか？ ipp そのことおれ達と一緒に海賊やらねえか？」

「はっ、俺は海兵だぞ？ そんな勝手な理由で海賊に鞍替えはできねえよ」

「残念だな、あんたの噂は色々聞いてるからな…で、海軍本部の大佐殿がおれ達みたいなの新米弱小海賊に何の用だ？」

「はははっ、新米弱小とはぬかしおる。」

海賊王の元クルーが率いる海賊団が弱小新米とは何かの詐欺か？「げ。そこまで調べてんのか、自分から吹聴してるつもりはないんだがな…」

「うーむ、その気はなかったがここで会ったのも何かの縁だ。捕まえとくのもありか？」

そう言つて左手に持った棍を両手で持ち構える。

「おいお前等！一騎打ちだから手え出すなよ！」

それに対しやんやんやと騒ぎ立てる周囲の船員達

「じゃあ小手調べだ、そらっ!!」

いつもの如く大上段からの振り下ろし。

下手に受け止めようとすればその超重量と超硬度で武器ごと端折り相手は地面に埋まる。

今までの海賊達は殆どこれだけで決着がついてきたが果たして…？

「つつ!!おっ…もっ…てえなあっ!!」

腰の剣を抜き放ち受け止めようとしたが直ぐに気づいたのか受け止めるのではなく刃を滑らせ受け流す。

「へえ、気づいたか」

「なんだそれ！めっちゃ重てえんだが!? いちちまだ痺れてやがる…」

剣を持っていた手をぶらぶらと振つてみせるシャンクス

「ははは、折り紙つきの頑丈さを持つ10tの特別製だ。」

今までの海賊達はどいつもこいつも殆どこの一撃で地面に沈んだんだがな」

「あんたどんな身体してんだよ…なんかの能力で軽くしてんのか？」

「いやいや、純粹に鍛えた結果だ。それより次いくぞ？」

仕切り直して袈裟懸けに振り下ろし反対側で振り上げ、突きからの横薙ぎと連続で繰り出すも

受け流し避けて偶に剣を盾にしながらしのぎ、時には斬りつけてくるシャンクス

だが…

「はははっ…この合金チョッキはレーザーじゃなきゃ斬れねえよ！それにそんな簡単に受けてていいのか？」

見たところ使ってる剣は普通のカトラス、この超重量を受け流しているとはいえ受け続ければ

バキリ、と嫌な音が響きシャンクスの剣に大きくヒビが入る

「くっ…」

ピタリ、とそこで棍を止めて

「まあ捕まえる云々は冗談として、だ。」

シャンクスの眼前に構えた棍を引き戻す、というか結構ヤバイぞシャンクス

レーザーじゃなきゃ斬れねえとか死亡フラグ立てたからかその合金チョッキにあちこち深い傷が入ってやがる、というかその衝撃が身体中にはしってるのだが…

確かに本気ではないとはいえまだ四皇なっていないから大丈夫とかナマ言ってますいませんでした、口には出さないけど

「はあ!?…ここまでやつといてか?…というかこれ無銘だけど結構気に入ってたんだぞ!？」

そう言つて深々と亀裂が入った剣を掲げてみせるシャンクス

「まあ落ち着けよ赤髪、今回はお前等海賊団にいい話を持ってきたんだ、まあ聞けよ」

と言うか業物ではないだろうと思つてたが無銘のカトラスである威力…未恐ろしいな、流石未来の四皇ってか？

途中で中断した事が不満なのなシャンクスは慚然とした面持ちながらも

「ちつ、まあいいぜ？いい話ってのは何だ？」

とこちらの話を聞いてくれる模様。

それに対してずつと温めていた計画を話始める。

「実は海軍は”公認海賊”と呼ばれる制度の設立を考えていてな」

”公認海賊”だあ？海軍が海賊を認めるっていうのか？」

「勿論全ての海賊を認めるというわけじゃない、例えば海賊旗を掲げていても探検家、トレジャーハンターなどの秘境探索や財宝探しを主とする面々も多い」

「まあおれ達もそうだが別に海賊だからって好き勝手暴れまわるわけじゃねえ」

「ぶつちやけた話、海賊王の処刑からこつち”海賊”と名乗って海に出る奴らが多すぎるんだよ。」

海軍の手が足りねえんだからいちいちそういう”海賊”を捕まえてもキリがねえんだよ」

「海軍の人間がそんなこと海賊に話していいのか？」

「まあお前なら大丈夫だろ、話したからと言って何か不利益を起こすわけでもないだろ」

「その信用はどつから来てんだか？」

「話を戻すぞ？”公認海賊”ってのは商船や街、政府の船などに襲撃を行わない事を前提に海軍の手配リストから外し海賊旗を掲げる事を認めるという制度だ。」

「へえ、確かに海賊旗掲げてるだけで何もしてないのに海軍に追われるのを煩わしく思う奴らもいるだろうからな」

「そうだ、簡単に言えば”王下七武海”を海軍版にして諸々特権を除いた形になるな。」

”王下七武海”ねえ…色々の特権が認められてる代わりに政府の召集には応じないといけないんだろ？”公認海賊”とやらもそうなのか？」

「まあ召集もかかるかもしれねえがこれは別に集まらなかつたからと



いってデメリットは無い、来てくれたら報酬は出すがな」

「狙いはなんだ？」

「簡単だ、今までそれらに割かれてた手を略奪や政府の船の襲撃を行う凶悪な海賊達に回す為だ。」

一般の市民達はいちいち旗印なんざ覚えてないだろうからそれが冒険や宝探しを主とする”ピースメイン”なのか、それとも村や町を襲う欲と暴力に塗れた”モーガニア”なのかわからねえ。

それなら海賊旗を掲げるだけでも違法だぞ？というのを周知させ海賊自体の発生を抑えるのが目的だったが…」

「それがうまく働かず海賊旗を掲げる奴が異常に多かつたってところか？」

「そこで今回の”公認海賊”だ、因みにピースメインの海賊で支部にて申請すれば審査の上で誰でもなれるぞ？」

「で、おれ達に持ってきたうまい話ってのはそれか？」

「ああ、ちなみに”公認海賊”になった上で町の襲撃や海軍と敵対した場合再度手配リストに入った上で本部大佐クラスを派遣する予定だ。」

で、どうするよこの話受けるか受けないか。

受けるのなら手配リストは取り消して海軍の追討も中止になるから賞金稼ぎの襲撃もなくなる、自由に冒険できるぞ？」

はてさてどう出るかな？赤髻のシヤンクス

なーんて、まあ答えはうすうす予想ついてるけどね…

## 赤髪対話 ドンクリークさん

「すまん、悪いが断らせてもらおうよ」

「ですよー…」

「ちなみに理由を聞いても？」

「クリーク、あんたの持ってきた話はありがたいがおれの考えには合わないってだけさ。」

おれ達は自由を求めて海賊になったんだ、あんたの言う話を受ければ海軍に追われたり賞金稼ぎから狙われる煩わしさはなくなるだろう。

「だかそれは自由って言えるのか？誰かの保証で海賊をやるってのは本当の自由とは違うだろう？」

「確かにおれ達は海賊旗を掲げてるしお宝探しや冒険を主としている、賞金稼ぎに狙われる事もあるし海軍に追われる事もある。」

「そんなのおれ達の手で切り開けばいいだけさ、そうだろう！お前等！」

「シャンクスの声に賛同する周囲の船員達」

「まあ、確かに本当の自由とは言えないだろうな。」

「言い方は悪いが海軍の保証つきで海賊をやるって事は海軍の紐付きになるって見方もできる」

「だろ？だからせっかくこの話を持ってきたあんたには悪いが今回の話は断らせてもらおうよ」

「あーあ、断られちゃったか。」

「お前はデカくなりそうだから今のうちに唾つけときたかったんだが…」

「へえ、本部大佐のお墨付きとは嬉しいねえ」

「まあなんと言っても未来の四皇様だしな」

「ただの直感さ、腕も確かで仲間にも慕われてるようだしな。」

「さて振られちゃったし俺はそろそろ戻るとするか」

「ああ、また何処かで会おうクリーク、ひよつとしたら次はグランドラインで会うかもな」

「ふん、そんな時は本腰入れて捕まえるかもしれないぞ?」

「やれるもんならやってみろよ、おれもその時は本気で抵抗するぜ?」  
それでさっきの戦闘を思い出す、無銘の剣であそこまでの威力未恐ろしいし本気でとなるとどれ程のものやら…

「そうか、楽しみにしておこう。」

ならこれは餞別だ、その剣じゃもう幾らも持たないだろう」

そう言つて腰に装着していた剣のうち一本を鞘ごと差し出す

「いいのか?」

「詫びだ、気に入つてたと言つてたしな」

「成る程、じゃあありがたく貰つておくよ…つて重つ!!」

受け取ると同時に深く下がるシャンクスの両手

「特別製だからな、だがまあ、重たい替わりにちよつとやさつとじゃ壊れないぞ?」

「いや重たいつて言つても限度が…まあいいや、ありがたく貰つておくよ」

「頑丈さだけは折り紙つきだからな。」

「じゃあなシャンクス、何処かの海でまた会う事もあるだろう」

「ああ、じゃあなクリーク。」

「この剣の礼はいつかさせてもらうさ」

その言葉を受けながら来た時と同じようにシャンクスの船から月歩でベアトリス号に引き返す。

しかしやはり断られたか、ダメ元での勧誘だったが惜しい事をしたなあ…

多少残念に思いつつもシャンクスとの話を終えベアトリス号は本来の目的である黄金海賊ことウーナン”の”公認海賊”への勧誘に向かう。

とは言え東の海とだけ表してもなんせ広い、当て所なく探しても彷徨うだけになってしまふのでいったん支部にて情報集めをする事になり進路を最寄りの支部である第48支部に向けたが

「へえー、貴方が噂の鷗の水兵団の団長? 思つてたよりも若いのねー」

穏やかそうな支部長と面会し事情を説明すると支部所属の海兵を一人つけてくれるという事になり呼ばれたのが彼女

「ベルメール、挨拶ぐらいちゃんとしなないか…」

「はっ！海軍第48支部所属ベルメール大尉です！」

そうして俺は見事な敬礼を見せるベルメールと出会ったのである。

いや、確かにまだ海兵だろうと思ったし東の海にいるだろうなとは思ったがまさかここで会うとは…

ベルメール、原作で主人公一味の航海士であるナミと彼女の義理の姉であるノジコの母親であり原作開始より10年前に東の海に現れた魚人海賊団のボス”ノコギリのアーロン”により殺された女性である。

ナミの人生、性格、嗜好に大きく影響を与えており最後までナミとノジコの母親でありたい、と助かる道を捨て例え死ぬとしても母親である事を捨てなかったベルメール、まあ今は只の海兵であるが。

というか元海兵って事は知ってたけども大尉だったのね、まあアーロンを長銃片手に組み伏せた動きは見事だったからなあ…

とまあ現実逃避しても仕方ないので

「海軍本部所属、海軍独立中隊長のクリークだ。階級は大佐、短い間だがよろしく頼むベルメール大尉」

そう言つて右手を差し出す

「クリークね、宜しく！で、海軍本部大佐なんてエリートがこんな辺鄙なところに何しに？」

「実はだな…」

そう切り出し”公認海賊”の事、候補としてピックアップしたウーナンの事、その為の情報収集に来た事などを伝える

「なるほどねえ、確かに昔と比べて増えてるからねえ。」

ま、海賊に頼らなきゃいけないってのはちよつと癪だけだね」

そう言つて腰に差した長銃を右手で撫でるベルメール

「ベルメール大尉は銃が得意なのか？」

「銃が得意っていうか銃を使つての格闘術だね、我流だけど中々戦えると自負してるよっ。」

「ほう、それは後では是非見せてもらいたいもんだな」

「お？私とやってみる？…って言っても流石に相手が本部大佐となると分が悪いどころの騒ぎじゃ無いんだけど」

「なら俺の部下と戦ってみるか？丁度この前うちに入ったのがいるからな、そいつならいい勝負するだろう」

「うーん…よし！女は度胸、やってやろうじゃない！」

そうして戦いに適した広い場所という事で支部内の訓練所へ移動しベルメールには準備をしてもらいその間に一旦ベアトリス号で留守番をしてる相手呼びに向かった。

## 蜜柑大尉 ドンクリークさん

「…本部の海兵には変わった人もいるのね」

「海兵見習いのシグマだ、んでこっちはベルメール大尉だ」

「ぐるる」

「とでも言うと思ったか!!熊じゃないの!しましまで手が長いけど熊じゃないの!わたしにこんなおっかないのと戦えっていうの!?!」

猛然と捲し立てられ

「むう、丁度いいと思ったのだが…」

ならば歳の少年相手がいいか?入ったばかりだし、流石に実力に差があり過ぎると思うのだが…」

「はあ!?5歳の少年だあ?まともな相手はいないのかー!!」

両の襟を掴まれガツクンガツクン揺すられ

「うーむ…仕方ない、軍曹!彼女の相手をしてやれ!」

仕方ないのでうちの隊で近接戦闘をメインとする軍曹に戦ってもらう事にする。

ベルメールもそれで納得したのか長銃片手に開始位置へ戻る。

ベルメールは右手でストックを握り左手は銃身に、トリガーに指をかけてはおらずぱつと見ただけだが長銃自体も金属で補強されており近接武器として使用するのであろう。

それに相對する軍曹は右手に我が隊の人間には全員配布されている折り畳みロッドを、左手にはこれまた隊員には全員に支給されている金属製のガントレット。

相手にロッドを向けて構えは半身に、腰は低く脚は肩幅程度に開いた状態。

「それではいざ尋常に…始め!!」

先手を取ったのは軍曹、低い体勢から相手の足元へ接近してロッドの柄底で相手の顎を打ちに行くもベルメールは上体を後ろに逸らすことで軽く避けそのまま後ろに仰け反り後転しながら軍曹の顎を蹴り上げようとする。

ブーツに金属を仕込んであるのだろう、軍曹がロッドで蹴りを防ぐ

とガキンツ！と鈍い音が響く。

そのまま後転から着地、長銃にての刺突。

それを左手のガントレットでいなしつつロッドにて振り下ろしを行おうとするも長銃がベルメールの手によりくると半ばから回転し銃身を両手で持ったの大上段からの殴打：ってそんな乱暴な使い方して大丈夫なのか？

成る程その為の補強か、ちゃんと機関部では無くストックの部分を攻撃に使ってるようだし。

振り下ろしの一撃をガントレットとロッドを交差して受け止める軍曹、それからは一進一退であった。

堅実に攻撃を受け止めながら隙を見つけてはロッドを叩き込もうとする軍曹と、もともとかなり身軽なのかすると相手の攻撃をいなしてかわしつつもくるりくるりと銃を持ち替えながら長銃をまるで杖術を行うかのように突き、払い、振り下ろし、と自在に操るベルメール。

というか…

「…どう思う？パスクア大尉」

「いやいや、あの嬢ちゃんなかなかのもんですな」

「あれで支部大尉？なにかの間違いじゃないのか？」

もともと本部と支部とでは同じ階級でも3階級程の差があると言  
う。

例えば支部大佐クラスで本部大尉クラスと同格、という風に。

だが彼女は支部大尉で本部で言えば准尉クラス、因みにうちの軍曹は本部軍曹とは言え戦闘力だけで言えば本部大尉とでも戦えるように鍛えてある。

だからこそベルメール支部大尉がどれくらい食い下がれるか見るともりだったか…

「こりゃあ掘り出し物かもしれないね」

そう呟くパスクア大尉に全くもって同意である。

彼女の戦闘力は原作でサンジに簡単にのされた本部大尉の鉄拳のなんちゃらくらいなら上回るだろう。

下手すれば本部佐官クラス、少佐クラスなら善戦できそうである・・・

「双方！それまで!!」

膠着状態になってしまった為に試合終了の声を上げる。

こちらに戻ってきた軍曹に対しどうだったか尋ねると

「いや、正直支部大尉だと思って油断してました。

偶々お互いに近接戦闘同士だったから良かったものの遠距離で戦おうとしたらスルスルとあつという間に距離を詰められてたかもしれません。

それからなんか凄くやりにくかったんですよ、手応えがないと言うかなんというか。

多分衝撃をうまく受け流しているんだと思いますがそのせいでこちらの攻撃はあまり手応えが無いように感じました。

それから武器の使い方が上手いですよあの人。

受け止めたと思ったら反転して別の方向から殴打が飛んできますし何より銃ですからね、撃たれるかもしれないと思うと迂闊に止めるのも難しいと思いますよ?」

殴打の攻撃自体も大振りと言えばダメそうに聞こえますが実際は遠心力によつて威力をあげてるので中々に重いですよね

多分彼女は鍛えれば化けますよ、今でこそ支部大尉って言ってますけど軽く階級詐欺なんじゃ無いですか?」

成る程成る程、それは是非強くなつて欲しいところだが：

「ベルメール大尉！本部に来るつもりはないか?」

そう声をかけると長銃を分解して確認していた彼女は顔をあげ

「え?本部に?」

と不思議そうな表情を見せる

「ああ、何しろ今は海賊が増えていてどこも人手が足りないので優秀な人材は是非とも来て欲しいのだ」

「うーん：折角のお誘いだけどここの支部長には色々とお世話になつてるしわたしは東の海が好きだしなあ：」



「成る程、では一年ほど研修に来るつもりは無いか？」

住む所は用意するし毎月の手当ても支給しよう、なんなら食費もこちらで待つぞ?」

「なんかすごい待遇だけどなんでそこまでしてわたしを本部に?」

「いやなに、ベルメール大尉に光るものを感じたまでの事。」

保証しようベルメール大尉、貴方は鍛えれば最低でも本部大佐クラスにはなれる筈だ。」

「うーん…そこまで熱烈に誘われちゃあなあ…」

「因みに支部と本部では給料も大きく違うぞ?」

「よしのった!!支部長に研修の許可貰ってくる!!」

そう言つて手早く分解していた長銃を組み上げると急いで建物内に戻つていくベルメール大尉。

ええ…ナミがお金大好きなのつてひよつとしてベルメールさんの影響?」

いや、そんな事より今は研修についてだ。

鍛えれば化けるといふのは俺、パスクア大尉、軍曹三人の共通意見だ。

そうと決まれば予定をさっさと済ませてしまおうと東の海の各支部に連絡をとつて情報を集めて数日、回遊しているルートがやっと掴めた為進んでる方向から反対周りにルートを辿りようやく出会えた黄金の海賊ことウーナン。

”黄金の海賊”ウーナン

現在懸賞金2000万ベリー（劇場版では6000万ベリー）

複数の船団を率いており世界中を股にかけ海賊などから財宝を巻き上げながらも商船や市民には決して手を出さずそれどころか得た黄金以外の財貨は貧しい所にばら撒いたりするような義賊めいた海賊である。

懸賞金はその規模の大きさから危険視する声もあるために現在の価格になつている模様でこの先更に上昇する可能性もあり、それならいつそのこと今のうちに話を通してこちら側についてもらおうというわけだ。

実際会ってみれば中々話のわかる男で”公認海賊”のメリットデメリットをしつかりと話して聞かせ、心からお願いと快く承諾をしてくれた。

まだ本格的に設立されてるわけではないので懸賞金の解除は時間かかるかもしれない事や早急に優先度は下げておく事を約束して黄金の海賊団の旗艦、ウーナンの乗るゴールド・トレジャー号から離れる。

しかし彼の船の甲板に山と積まれた黄金は一見の価値があった。

夜になれば甲板の周りで篝火が焚かれ闇夜に浮かぶ揺らめく火の光を受けてキラキラと輝く黄金の山は幻想的な光景で船の人員はみな口をポケーと開けて感嘆の声を上げていた、ベルメール大尉やギンさえもである。

ロビンにも見せてやりたかったな…などと思いつつベルメールの支部に戻り支部長に再び挨拶、三日ほどの期間をあけてベルメール大尉を乗せると船は一路マリンフォードへ。

しかし今回の東の海への遠征、中々収穫があつて何よりだったな。

原作でクリーク海賊団戦鬪総隊長を務めたギンを仲間に出来たし2番隊長を務めたパール(と彼の父親)に伝手を作ることも出来た。カチカチの実こそパールに食べられたものの色々な手段を使つても彼にはこちら側についてもらうので問題はない、というか鍛えがいがありそうで中々に楽しみでもある。

赤髪海賊団と顔合わせする事が出来たのは大きかったな。

エースが誕生している事は把握できたし原作中の各島々の大体の場所も把握し地図に記入済み、これで何かあつても真つ直ぐ向かう事が可能だな。

頼まれてた各国の状況についてはレポートにまとめたしウーナンの”公認海賊”の勧誘も問題無し、ベルメールさんも本部でしっかりと鍛えればそうそうアローンにやられる事も無いだろう。

あ、そーいや時期的にロビンの九歳の誕生日か。

カフウのネットワークで何か届けてやらないと、何がいいかな？

数週間後、オハラにて

「おやロビンちゃん、そんなに慌てて走ってどうしたんだい？

おや、モノクルなんて首に下げてどうしたのかな？」

「今朝届いたの！私への誕生日プレゼントだって！」

「ほう、誰から届いたんだい？」

「えへへ、内緒だけど私の大切な人！」

「そうか、良かったねロビンちゃんあんまり走って転ばないようにね」

「うんわかった！じゃあまた後でね”ラスキー”さん!!」

## 海軍准将 ドンクリークさん

なんだかんだで将官教育に一年近くもかかってしまった…

ロビンから勉強を教わってなければまだかかったかもしれない。

どうもみなさんこんにちには、世界で最も再登場を期待されている  
(大嘘) 男、ドン・クリークです。

結局俺が原作を読んでいたビッグマムのところ辺りまで再登場は無  
かったけども。

そしてどうとう海軍本部准将になりました！どんどんぱふぱふ

准将ですよ准将！プリンプリン准将：は出番がしょっぱかった  
なあ、支部准将なら本部大佐並みの実力がある筈だが：流石に相手が  
悪かったか？

それから：あれ、他に准将いたっけ？(ヤリスギ、ビリッチ、ブラ  
ンニュー、ダイギンなど)

けっ、時代はやっぱり中将ってか？あのお化け共も中将だしモモン  
ガとかオニグモとか知ってる名前は今でこそ大尉とか少佐だけど将  
来的には中将にまでなってるしな！

そういや結局原作の俺はどうなったんだか、ギンに気絶させられ船  
に乗せられたが多分賞金首に討ち取られたか海軍に捕まったかであ  
ろう、扉絵連載とかでも姿は無かったし。

東の海からマリルフォードへ戻ってきて”海軍独立中隊”、有名な  
名前だと”かもめのすいへいだん”は一旦解散となった。

実際誰かに任せようかとも思ったのだが中々いい人材が無かった  
ので花の団員達には事情を話してそれぞれの職務について貰った、皆  
この数年で中々に鍛えられており昇進した者も多いしこれからの海  
軍を担っていく者も居るであろう。

そうそう、ギンと言えばこっちのギンは今現在俺の元にはいない。

実はベルメールをゼファーのおっさんに紹介した時に目敏く見つ  
けられ数年でいいから俺に預けろと言われたのである。

たしかにゼファーのおっさんなら俺も色々教わったし仮にも海軍  
本部の教育総監として数々の海兵を育て上げた男だから十二分に信

用できるし腕も確かだろう。

ギンに聞いてみれば”アンタに追いつけるなら”とシンプルな答えが返ってきたのでベルメール大尉と一緒にゼファーのおっさんに預けてあるのだ。

そして俺はセンゴク大将含め他数人から将官教育を受け晴れて本部准将となれたのである。

というか覚える事が多過ぎて本来なら半年くらいのところ覚えが悪いせいで一年近くもかかってようやく教育期間を終えたのである。

何しろ将官クラスとなれば佐官と比べれば指揮権限の及ぶ範囲が大きく異なりそれに伴う責任も大きく違う。

その為佐官教育や将官教育の必要性はかなり高いのだと常々センゴク大将やコング元帥に直談判していたがまさか自分が苦勞する羽目になるとは…

ネズミ大佐とかシェパード中佐とか変なのを出さないようにと思っただけだったのだがなあ…

まあ何にせよとりあえず晴れて准将にもなれた事だし手当ても増えて懐に余裕もあるしゼファーのおっさんのところに顔出しに行くか。

なんだかんだで頭に詰め込む事が多すぎてここ半年顔を出せてなかったからな。

一方その頃海軍本部会議室、そこで再び人員が招集され人事会議が行われていた。

議題に上がっているのは勿論

「では皆さんお揃いのようなので会議を始めたいと思います。

お手元の資料をご覧ください、今回は先日新たな試みである将官教育を終了して晴れて准将となりましたクリーク本部准将についてです」

クリークに関してであった。

「確か佐官教育や将官教育などの重要性を常々説いていたのも彼じゃなかったかね？」

「ええ、その通りです。」

「ですのでゼファー教育総監の意見もあり教導部門に配属という案もあります」

「今決めては早計だろう、彼の配属を論議する為の場合なのだから早々に決めなくても良いだろう」

「彼の希望はどうなっている？かの」海軍独立中隊”を率いていた男だ、海域を問わない巡回任務か？」

「はい、しかし人数は必要最低限で艦隊を組むのは遠慮したいと言っておりますが…」

「ほう、それまたどうして？」

「彼曰く”人員が多い事はいい事であるが緊急時に臨機応変に動く為には逆に邪魔になってしまふから”その少数精鋭”という事でした」  
「ううむ、しかし単艦であれだけの成果を上げていたのだし人員を多く回したい気もするのだが…」

「すみません、科学技術局からもよろしいでしょうか？」

「そちらも彼を希望しますか？」

「はい、彼のアイディアは素晴らしく近年の発明も彼の功績によるものも多く是非ともうちに技術将校として頂きたいなあと。」

幸い技術班には彼の武装を専属で開発する部署もあるのでそこで武装の開発研究をしてもらって海軍の武装にフィードバックして戦力の増強に努めてもらいたいと考えています」

「それなら総合衛生局からもいいだろうか、彼については医療班から興味深いデータが上がってきているのでな。」

詳細は省くが常人と比べて身体の造りが違っておりなおかつ話を聞けば後天的に成し遂げたと言うではないか。

これらを詳しく研究して応用できれば必ずや海軍の戦力強化に繋がるだろう」

「いや、それよりも早く手柄を立ててもらってさっさと昇進させるべきだ！

資料にも書いているが六式を習得しその変形も使いこなし武装色、見聞色の覇気を習得。」

見聞色は不得手ながらもある程度は使う事が可能で武装色は武装硬化も使う事が出来るのだぞ？

更には大将候補である例の三中将とも仲が良く間違いない次の世代を担う人材になる筈だ！」

「しかしまだ24歳ですし”合法海賊”という彼と三中将連名の発案により少しは人員に余裕も出来たのですから」

「そう言えば彼の悪癖と言うのかどうかかわらんが色々航海の度に拾ってくる癖はどうなったのだ？

また航海に出してとんでもないもの拾って来られては困るのだが……」

「えーと、今までだと多くは海賊の持っていた武器や宝飾品の類で動物と時々子供、これは孤児ばかりですね。

武器は基本的に科学技術局に回してますし動物は大半は野生に返して一部は彼の直属になっています、シグマ二等兵がいい例ですね。

子供達は大半が彼が支援している孤児院に、一部は海軍の入隊を希望していますのでゼファー教育総監に預けてあります」

「あの熊っぽい謎の生き物は昇進してたのか……」

「……色々と特例です、くれぐれも皆様は同じような事をしようとはしないでください。」

と議事進行の男……ナツ中將はぐるりと周りを見るのだった。

## 覚悟中将 ドンクリーク

海軍本部所属 ギン二等兵

海軍第48支部所属 ベルメール本部大尉

これが現在の2人である。

ギンは海軍に見習いとして、ベルメールは東の海の第48支部から研修としてそれぞれ本部に来てそこで教育総監であるゼファーに特別指導を受ける事になった。

その結果ベルメールは元々の戦闘能力に加えてゼファーの指導によつて海軍体術である六式、そのうち高速の移動術である”剃”と最小限の動きで回避行動が可能な”紙絵”の2つを習得し二式使いとなった。

今も訓練場でゼファーと手合わせをしておりひらりひらりと相手の攻撃を紙一重でかわしつつ殴打を加えている。

流石に一年で六式全てとはいかなかったが大尉でありながら二式使いでも大したものである。

実は少佐に昇進という話もあったのだが数年前から取り入れられた佐官教育の話聞きベルメールが辞退、曰く”座学なんて苦手だし”との事。

一方ギンはゼファーの方針によりまだ体が出来上がってないから、との事で身体の動かし方と座学の2つに絞つて指導を受けている。

身体の動かし方については主に柔軟性の向上を取り入れておりそれに加えて生命帰還にて身体の全てを制御下におけるように訓練中、座学は一般教養や戦闘技法、海図の読み方や船の操作の仕方など海兵に必要な事を片っ端から教えている模様で一体どう育てるつもりなのか甚だ疑問である。

そうこうしているとベルメールとゼファーの手合わせは終わったらしくゼファーはギンの指導へと向かった。

「あらくリーク大佐：准将に昇進したんだっけ？久しぶりじゃない」「ベルメール大尉こそお疲れ様、急ですまないがちよつと話があつて



な」

そう言いつつ懐から手紙を取り出す

「48支部支部長のシブチョー中佐からベルメール大尉宛てだ、君の帰還を希望している」

「ありがとう、急に帰還命令なんて何かあつたかな？」

そう言いつつ手紙を受け取り読み進めていくベルメール

「…なるほど。」

ねえクリーク准将、急で悪いんだけど今から東の海への船は出せるかしら？」

「準備に一日くれれば軍艦を用意するが何かあつたのか？」

「うーん、うちの支部の近くの国、オイコット王国って言うんだけどそこで内乱が発生してて手が足りないらしいの。」

「なるほど、そういう事であれば直ぐに手配しよう。」

残念ながら俺は一緒に行けないが信頼できる人間をつける、元々無理を言つて本部に研修に来てもらったのはこっちだからな」

「もうちよつとここにいたかつた気もするけどね、支部長には好き勝手させてくれた恩もあるし必要としてるんなら行ってあげなきゃね」

「しかし寂しくなるな、ギンも結構懐いていたようだからな」

「ええ？あの子結構一人で居るのが好きっぽかつたけど？」

「近くにいる時点で結構懐いてる方だ、元々の環境のせい結構初対面の相手には警戒が強いからな」

「なるほどねえ…まあ後であの子にも挨拶はしておくわよ、ゼファー総監にもね」

「では東の海への船と人員は明日までに用意しておく、すまんが俺はちと約束があつてな。」

後で人を寄越すからそいつに従つてくれ」

「わかつたわ、色々とありがとう東の海にもまた遊びに…じゃないか、また顔だしてね」

そうしてベルメール大尉に別れを告げ待ち合わせをしている場所へ向かう。

しかしサウロ中將、緊急の用事って何事だ…？

手早く緊急の書類仕事を片付け呼び出された場所へ、そこには緊迫した表情のサウロ。

「こりやまさか、と思っていれば案の定サウロは「クリーク、落ち着いて聞くでよ。」

わしに極秘裏にバスターコールに参加するように指令が来たでよ、目標は”オハラ”だで」

と口火を切った。

サウロ中將によればオルビアの件以降今まで通り歴史探索の船の調査という名目の裏で各地の”歴史の本文”の探索やオハラに調査という名目で学者たちを含めオルビアやロビンの様子を見に行ってもらっていたが先日日本部に戻ってくるように指示が来たらしい。

戻ってみればオハラに対してバスターコールをかける可能性がある為五人の中將のうちの一人として待機命令が下っているとの事であった。

バスターコール、五人の中將と10隻の軍艦による最大攻撃である。

発動権は海軍元帥及び三人の大將がもっており委託する事も可能で多くは世界政府の要請で発動される。

その攻撃は島1つを地図から消してしまうほどと言われており昨今だとダグラス・バレットに対し数年前に使われている。

…後でまだちゃんと捕まってるか確認しとこう

そしてそのバスターコール、原作ではロビンが8歳の頃に彼女の生まれ故郷のオハラに対して発動されておりそれによりオハラは地図から姿を消した。

しかし原作からずれて2年後になってやってきたか…

「…オルビアの件がばれたのでしょうか？」

「わからんでよ、クローバー博士も言いよったしわしが調べた限りでも空白の1000年の研究は中止しとる。」

オルビアにも変装はしてもらったが誰かに通報されたつちゆう可能性もあるだで」

「多分オルビアが見つかったとなると世界政府がまず動く筈です、私は心当たりを当たってみます」

「わしは今からオハラに向かうですよ、今回の命令はわしにはどうにも納得いかん。

お前さんも言つとつたが世界政府はどうにも信用できん、ここ数年で他の学者達とも話したがわしには色々納得いかんですよ」

「…待機命令が出ている現状でオハラに向かうとなると罪に問われる可能性が」

「納得の上だですよ、わしは自分の正義に従うですよ」

「…わかりましたサウロ中将、くれぐれもお気をつけて」

「おう、お前さんも気をつけえよ？お前さんはまだ若くこれからを引つ張つていく人間だでくれぐれも短慮はおこさんようにな？」

去り際にくれぐれも迂闊な行動は起こさないように、と釘を刺してサウロ中将は軍港へと足を向けた。

原作ではクザンの攻撃によって氷漬けになったサウロ中将だが今回はどうなるか…

とにかく情報収集の為胸元から笛を引つ張り出し大きく息を吸つて吹く。

びびる、びる、びる、びびる、びる、と一定のリズムでごく小さい音が響くがこれで十分。

暫く待つとばさりばさりと羽音をたてて悪魔武器であるカフウが肩に降り立った。

ポーチから干し肉を取り出し与えると

「カフウ、アサミドリ部隊を飛ばして出航準備をしている軍艦のピックアップを頼む。

それから足が速いのをこちらに一羽寄越してくれ、手紙を運んでもらいたい」

くるるるっ!!とカフウは要件を聞いて一声鳴くとばさり、と再びさらに飛び立っていった。

出会って数年、カフウは身体こそ大きくならないが知能は高くなつており今では時には会話で時には武力で傘下に収めた数百羽の鳥類

で構成された通称”カザミドリ”のトップに君臨している。

もちろん知っているのは俺だけだが主に諜報や通信において大きく役に立っている。

素早く要点だけをまとめた手紙を書きカフウの指示でやってきたであろう何度か伝書を運んでもらってる燕の足に手紙を括り付ける。

「四号鳥舎まで頼んだぞ、帰ってきたら美味いもん食わせてやる」

ぴっ！と鳴いて燕は素早く飛び立った、手紙が届くまで数日はかかるだろう。

たしか原作ではクザンとサカズキが参加していたな、二人にもちとあたってみるか。

## 赤犬同乗　ドンクリーク

残念ながらクザンは巡回任務にて海に出ており不在、その為サカズキや他の人間から情報を集めつつ何とか裏からバスターコールを止めようと奮闘するも時は無慈悲に流れてとうとう本部よりサカズキを含めた人員がマリージョアへ向かった。

G-1支部へ向かい軍艦に乗り換え道中でクザン含めた他の人員と合流する手筈らしい。

とりあえず休暇という事で一月ほどの休みをもぎ取ってサカズキの船に同乗させてもらったがサウロ中将もどうなったかわからないし注意を促す手紙もオルビアの元に届いているか不安だ…

「おうクリークよ、そんな隅で小さくなってどうしたんじや」

考え事をしてたところに声をかけてきたのはサカズキ、そういや原作では避難船沈めたんだっけ？

「なあサカズキ、バスターコール発動されても避難船に砲撃するなよ？」

「なんじやと？命令なら別じやがわしがそんな事すると思っちよるか？」

　　だいぶ丸くなったよなサカズキも

「ちよつとした冗談だ、しかしバスターコールは発動されると思うか？」

「可能性は高かろう、わしとクザン含めモース中將、グタ中將、イエキ中將も招集を受けちよる。

　　世界政府の船が先に上陸して証拠を探すつちゆう事じやが証拠の1つ2つ奴等ならでっち上げてても不思議じやあなかろう」

　　と手振りを加えつつ状況を説明してくれるサカズキ

「だよなあ…、オハラはちよつとした縁で研究を依頼してるし知り合いもいるからバスターコールをかけられると凄く困るんだが…」

「どんな知り合いかわらんが内通を疑われんようにせえよ？」

「覚えてるか知らんが母親探しをした女の子とその母親だ、考古学者だったらしいから」月人伝説「について調べてもらってるんだよ」

「それがあるからバスターコールを止めるつちゆうんか？クリークよおんしも海軍の人間なら覚えとるじやろう

” 何を持ってもまず殲滅”

バスターコール実行艦隊の作戦行動は迅速かつ徹底した任務最優先の行動が絶対とされちよる、そうそう止めれるもんでもなからう。

おんしが何とかしたくてもそう簡単に覆らん、できるとしたら知り合いじゃあいう親子を避難船に乗せるぐらいしかなかじやろう。

幸いにもおんしは休暇中でバスターコールの人員ではないけえの」「…島が見えたら俺はその時点で離脱する、いざバスターコールが始まったとしてもこっちは気にせずによつてくれ」

「ふん、おんしがそんなくらいで死ぬとは思うとらんわい

…何する気か知らんがくれぐれも政府に疑われんようにせえよ、おんしにはまだやつてもらおう事が色々あるき」

行動目標はバスターコールを止める、次点でオルビアとロビンその他を助ける。

サウロ中將がどうなってるか不明だが原作通りであればこっちの目くらましになってくれるだろう。

クザンとも少し話をした方がいいか、たしかクザンに氷漬けにされたんだったよな？

緊迫した空気が漂う海軍艦を余所に

「ロビン！おめでとう!!」

「よくやったわ!」

「ケーキもあるぞ!!」

「おめでとう、ロビンちゃん」

西の海、オハラ島

オハラ図書館 兼 考古学研究所” 全知の樹”

そこではロビンが考古学者として見事に試験に合格した事を祝つて祝杯が挙げられていた。

「先日の博士号試験！見事満点じゃったぞ!!

今日からお前も一人前の考古学者じゃ!!」

クローバー博士のその言葉にロビンの顔に驚きと喜びが広がって

いく。

「はいロビンちゃん、これが学者の証だよ、無くさないようにね？」

「ありがとうラスキーさん！私おかあさんに見せてくる！」

そう言って学者の証である徽章を手にとっても嬉しそうに駆けていくロビンを見てラスキーと呼ばれた男はひらひらと手を振る。

「しかし凄いですね彼女は：若干10歳で博士号試験に合格、しかも満点とはいやはやいるもんですね天才っていうのは」

「才能だけじゃなく本人の努力もじゃよ、ここで遅くまで勉強したり母親に教えてもらったりしておったようじゃからのう」

オハラ、オルビア宅

オルビアはテーブルの上の手紙を見て険しい顔をしていた。

白く長い髪は肩のあたりで切り揃えられ黒く染められておりぱつと見た限り手配書の写真とは同一人物とは思われないだろう。

しかし手紙に書いてあるように政府の船が来るとなれば別だ、きつと彼らは地下に隠された”歴史の本文”を見つかるだろう。

過去に研究こそしていたが今はあの海兵の説得により中断しており過去の研究資料は図書館中の本の間考古学の知識があるものでなければわからないように隠してある。

「いつそのこと最初から地下に”歴史の本文”がある事を公開した方が良いだろう、研究資料と一緒に置いてあるわけでもなし今では広い部屋に大きな立方体の石碑があるだけなのだから。」

そう思い立ち適当な紙にさらさらと政府の船が来る事やバスターコールの可能性、地下室を最初から公開する事などを書き上げ封を閉じる。

しかしどうとう来てしまったか：

テーブルに肘をつき顔を覆い考える。

いや、来るのが遅すぎたくらいだ。

あの男が上手くやったのか政府の役人が来ることも手配書がこの島まで回って来る事もなくこの2年間を過ごすことが出来た。

しかし政府の役人が来るのならこのままというわけにも行くまい、大人しく出頭して捕まるか別の場所に逃げて身を隠すか。

どのみちロビンは連れていけないだろう、彼女に日陰の道を歩ませたくはない。

何かを握りしめてこちらに走って来るロビンの姿を窓の外に見てオルビアはそう思う。

「ごめんねロビン、とても楽しかったわ」

そつと眩かれた言葉は誰にも聞こえず消えていった。



## 殲滅作戦 ドンクリーク

結論から言うと俺が島に着いたタイミングは詰みに近かった。

世界政府の船は既に到着しており町はこの島から脱出すべく荷物を持った住人達が避難船に向かうべくごった返しそれに紛れて島の中心に聳える大樹に向かう

全知の樹は一部から出火、煙を上げており全知の樹前の広場にはオリーブとクローバー博士を含む学者達が集められていた。

そしてその周囲には確かCP9長官：スパンダインだったか？と銃を持った世界政府の役人達。

ロビンは：いた、眼鏡にオールバックの男ともじゃ髪に丸サングラスの男の側。

確かCP9の諜報員だった筈、ロビンが古代文字を読める事がばれてるのか？と言うかロビン読めるのか？

いや：決めつけるのは早計か、単にロビンが図書館にいる時に世界政府の船が来たと言う可能性もある。

くそ、情報がたりねえ：

しばらく様子を伺っているとスパンダインとクローバー博士を残し遠巻きに

なにになに？”か・せ・つ・を・ほ・う・こ・く……” まずい!!クローバー博士！それは言っちゃいかん!!

くそ！研究は止めた筈、いやこの学者たちの事だすでに研究を止めさせた四年前には既にその仮説にたどり着いていたか!!

クローバー博士、ダメだ！それを言っちゃ！

スパンダインが懐から銃を取り出しクローバー博士を銃撃くつそ！なにかないか！なにか…考えろ…考えろ…

懐から黄金の電伝虫を取り出しボタンが押される

なにか…何か手が!!サウロ中將を先に探すべきだったか！

大音量でバスターコールの発動を報せる警報が鳴り響き

時間がない！せめてロビンを助けるくらいは…!!

島を囲む周囲の軍艦からの砲撃が始まる。

…あーもう!!! どうしろってんだ!!!

それと共に覆面を被り

もともと俺は考えるのは苦手なんだよ!!

個人を特定されそうな装備はすべて外し

海軍に入ったから必死に色々勉強して考えて来たが!

黄金の電伝虫を持つスパンダインの元へ駆け抜け右腕を武装色で

硬化、無言で思いつき振り抜く!!

「がっ…はあっ!!!」

錐揉みして吹っ飛ばすパンダインと

「長官!!」

「な、貴様! 何者だ!!」

それを追いかける政府の役人とこちらに素早く構えるCP9の二人

決めた、取り敢えず細かい事はぶっ飛ばしてから考える。

バスターコールは発動されたが学者達はまだ無事だ、取り敢えず役人達をぶっ飛ばし追い払ってロビンとオルビア、クローバー博士を含む学者達を島から脱出させればいい話だろ!!

こちらに構えるCP9を尻目にロビンをちらりと見るとオルビアに向けて顎をしゃくる。

ロビンは驚いたように目を見開くと小走りでオルビアの元へ

それを確認し全身を武装色で硬化

「貴様…何者だ…」

静かに構えるオールバック男と無言で構えるもじや髪男

さあて、さっさとぶっ飛ばされてくれやCP9

こちらとらロビン達に事情を聞いたり学者達を避難させたりやらなきやならん事が多いんだよ!!

”剃”を使つての超高速での接近に対しこちらも”剃”を使い対応。

常人ならば目に捉える事すら出来ない超スピードをしつかりと視界に捉えつつ接近

(崩拳砲!!)

無言で超密度の筋肉を引き締め鋼以上の硬度を持たせる”鉄塊”に加え生命エネルギーである覇気によって更に硬化がなされたその拳はクリークが執念によって鍛え上げたその類い稀なる身体能力とがっしりと噛み合い

「ごっ…は…」

咄嗟に”鉄塊”を全身にかけて耐えようとしたもじや髪の腹部を打ち抜き相手に膝をつかせる。

並の相手なら問題なかった、多少強い相手でもCP9の諜報員たる者悠々と戦う事ができただろう。

しかし相手が悪かった。

勿論覆面にオリブグリーン一色の全身の装備、身元がわかりそうな物も装着していない為立ち塞がった2人は知る由も無いが

元々常人では耐えきれぬ程の苦痛を受けながら身体改造に取り組み超高密度の筋肉を手に入れそれに耐えられるよう骨、血管なども強化。

更にそこに”六式”と呼ばれる海軍体術を基本形に加え変形させて使う程の熟練度。

そして極め付けに覇気と呼ばれる生命エネルギーを操る事によって可能となる”武装硬化”

この3つがかなり相性良く噛み合った結果がCP9の相手となった男だった。

一撃で崩れ落ちたもじや髪を見て

「…もう一度聞く、貴様何者だ？」

オールバックにサングラスをかけ顎鬚を生やした男、ラスキーが警戒しつつ冷静に静かに聞くも黙秘を貫くクリーク

「オハラの用心棒か？いや革命軍の者か？六式を使っていたようだし軍人崩れか？」

正体を悟られぬようなおも黙秘するクリーク

「だんまりか…まあいい、貴様は長官を攻撃し更にはCP9を攻撃してきたのだ。」

投降するのならば命だけなら助けよう、でなければここで死ぬ」

「…」

「そうか、ならば世界政府の敵とみなす。貴様はここで死ぬ」

そう言つて先程のもじや髪と同じく超高速の移動術である”剃”によつて間合いを詰めるラスキー、しかし先程のもじや髪と違い緩急を加えてどこから来るか悟られぬような動き方。

端的に言つてもじや髪と比べてかなりの熟練した動きである。

それもその筈、ラスキーはCP9の実質的リーダーを務め上げる程の熟練者であり、もじや髪の男モジャオ、六式を習得しそこそこ戦える人間ですら歯牙にも掛けないCP9所属の諜報員、が見劣りするほどに格が違う。

「指銃・黄蓮（しがん・おうれん）」

そんな彼の”剃”による緩急自在な接近から放たれる左右両手の人差し指での一本貫手、そのスピードと一点に集まった貫通力は鉄すら貫く程の威力を持つが

「…頑丈だな」

鋼鉄以上の硬度を持つクリークを貫く事は出来なかつた。

お返しとばかりに放たれるのはクリークによる”指銃”の速度で撃ち放たれる拳である”拳砲”

貫通力こそ”指銃”に劣るものの破壊力では勝る一撃である。

だが、先程の攻防を見ていた為か六式のうち回避術である”紙絵”によりヒラリとその攻撃を避けるラスキー

…こりや長引きそうだな

クリークはそう思いギチリと革手袋をはめた拳を握りなおした。

## 諜報機関 ドンクリーク

「嵐脚・凱鳥！・（らんきゃく・がいちょう）」

月歩と呼ばれる空中移動の技法にて素早く離れたラスキーは鉄板さえ切り込みを入れる飛ぶ斬撃を放つ

しかしそれでさえもクリークの身体に傷をつける事が出来ない

「…ずいぶんと硬いな、悪魔の実の能力か？」

空中で空気を蹴りつつその場に留まるラスキーは声をかける。

そこに同じく月歩で飛び上がり接近

（拳砲・斉射!!）

左右の腕を同時に振るつての拳砲を放ち

「ぐっ…！」

紙絵にて避けようとしたラスキーに左腕が掠めるが

「…月歩も使えるのか、やはり元海軍の人間か？」

脇腹を抑えつつ言うラスキーに舌打ちをしたくなる

やはり世界政府直属の諜報機関CP9、そう簡単にはいかないか：先程のもじや髪は多分CP9でも新入りだったのかもしれないな、多分この男こそが一般的なCP9の強さなのだろう。

こんなのが数名いるのかと世界政府が抱える戦力を脅威に思いつつ一刻も早く決着をつけるべく空に浮かぶラスキーに対し”剃”と”月歩”を組み合わせた直線的だが超高速の空中移動術”剃刀”で相手に接近する。

避けられるならば避ける隙間を無くせばいいと言わんばかりに放たれるのは短距離の”剃刀”で相手を囲むように移動しつつ上下左右前後から繰り出される”拳砲”その名も

（檻籠目!!）

相手を籠に囲い込むように動きそこに全方向から高威力の攻撃が襲い掛かる檻籠目（おりかごめ）である。

これは避ければ避ける程動ける範囲が削られていく為、最初は紙絵にて回避していたラスキーであったが直ぐに避ける事が出来なくなり鉄塊に切り替え、防御を固めるもそれも”檻籠目”による”拳砲”

の連打で崩れ出し

(崩拳砲!!)

とどめとばかりに放たれたのはひねりを加え貫通力を強化した”拳砲”である”崩拳砲(くずしけんぽう)”である。

その名の通りラスキーの鉄塊を崩しそこに縦に一回転してからの蹴りで地面に叩きつける。

「ぐっ…」

なんとか着地するもこちらに構えるラスキーの姿は先程より随分と精彩を欠いておりダメージは大きい事が見て取れる。

このまま攻めれば問題無いと言わんばかりに近づこうとしたが

「ラスキーさん!!撤退だそうです!!」

いつの間に戻ってきていたのか銃を持った政府の役人がラスキーに声をかける

「しかしオルビアとこの覆面の捕縛が…」

「長官がさっさと戻ってきて俺を守れと言ってます!!」

それを聞いてラスキーは苦虫を噛み潰したような顔をするところらに向き直り

「ちっ、…貴様名前は?」

「…ティーチとだけ名乗っておこう」

「そうか、ティーチとやらこの勝負は預けた、まあこのバスターコールを生き残れたらの話だな」

そう言うラスキーはもじや髪を担ぎ上げると政府の役人と一緒にその場を離れていった。

見聞色の覇気にて相手が遠くまで離れた事を確認し急いで隠していたポーチから海軍御用達である高カロリー栄養バー”カロリーフレンド”を纏めて口の中に放り込み水で流し込む。

「…ばれてねえよな?」

黒地にドクロという覆面は被ってたし装備も全て外して隠してたし名乗った時も声色を変えて名乗ったし大丈夫だろう。

あとすまん黒ひげ。

とりあえず黒ひげことマーシャル・D・ティーチに心の中で謝って

おくが直ぐにそんな事してる場合じゃない、と思い直し周囲を見る。

バスターコールによる砲撃はますます激しさを増しており全知の樹も火の手が強くなっている。

遠くでは軍艦が空を舞っており…ああ、サウロ中将か。

周囲にロビンやオルビア、学者達は見当たらないのできつと本を守る為全知の樹の中であろうとあたりを付け急いで向かう。

案の定学者達が動き回り本を外の泉に向かって窓から投げたので

「全員早く逃げろ！砲撃はまだ来るぞ！ここはもう持たん！」

と声をかけるが

「ここを放つてはおけん！」

「人類の財産を、過去からの歴史を燃やすわけにはいかないんだ！」

と逃げようとする素振りはなく

「くっ、オルビアはどこだ!!」

と聞けば

「クリーク！この子を、この子をお願い!!」

ロビンを傍らに連れたオルビア

「この子をつて…まさか！残るつもりか！」

「そんな！お母さんも一緒に逃げようよ！」

「ごめんなさいクリークそれからロビン、私達はやらなきゃいけない事があるの」

ロビン、オハラは考古学者ならわかるでしょ？”歴史”は人の財産、あなたがこれから生きる未来を照らしてくれるわ。

だけど過去から受け取った歴史は次の時代へ引き渡さなくちゃ消えていくの、私達は例えどんな状況でも歴史を未来に引き渡す事を諦めてはならない、例えこのオハラが滅びたとしても！

あなた達の生きる未来を私達が諦めるわけにはいかないっ!!」

「そんな…お母さん…」

「お願いクリーク！この子を島の外へ！」

「しかしこの子はまだ10歳だ！まだ母親は必要だ！」

「・・・あなたのお陰でこの2年間夢のようだったわ。

追われる事も無く諦めていた娘との生活もできて本当に感謝してる。

でも私は考古学者なの、それに今ここを脱出すれば私は絶対に自分を許せない、私達は歴史を未来に繋げる義務があるのよ」

オルビアを説得しようとするも全く聞き入れる様子はなく

「くっ・・・だが！」

「お願いクリーク！貴方しか頼めないのよ」

ギリツと奥歯を噛み締め

「ロビン、ここを脱出するぞ」

「でも、お母さんが！」

「ごめんねロビン、私は今ここを離れるわけにはいかないの、さあ！行きなさい！！」

「でも！」

「行くぞロビン！ぐずぐずしてはここも危ない」

そう言ってロビンを小脇に抱える

「待って！おじさん！お母さんが！」

「恨み言は後から幾らでも聞いてやる！舌を噛むから今は口を閉じててくれ！」

そうロビンに言っただけで窓から飛び出し、月歩で空中を踏みしめサウロ中将の方へ向かいつつ思う。

オルビアはテコでも動かないだろう、全員救おうなんて夢を見た拳句がこのザマである。

もつと上手くやれたのではないか、ロビンだけでなくオルビアもクローバー博士も学者達も救う事が出来たのではないか。

自分の考えの浅さに怒りを覚えつつもまずはロビンを守る事を優先すべくサウロ中将の元へ向かった。



## 翔ける熊 ドンクリーク

ひぐひぐと泣くロビンを抱えたままサウロ中將の元へ

戦闘中の為少し離れて、もちろん覆面は被ったまま声をかける。

「サウロ中將！俺はこの子を連れて脱出します！オルビアやクローバー博士含んだ学者達はあの場所を離れるつもりがないようです！」  
「ここを片付けたらわしが行くですよ！薄々予想はしとったことだ！」

わしがこの攻撃が終わるまで守ればいい話だですよ!!」

流星サウロ中將、オルビア含む学者達との付き合いは俺より長いだけある。

見れば砲撃なども全知の樹の方に飛んでいきそうなものだけ見定めて防いでいる。

原作と違いあの場に来なかったのは一人で全知の樹への攻撃を防いでいたからか…

「すみません、お願いします!!」

そう言つて素早く月歩で空に飛び立ちその場から離れる。

避難船は…と周囲を見渡せば煙を上げ沈みゆく帆船。

撃沈命令が出たか… 避難船に乗っていた住民に対し心の中で謝りつつとりあえず近くの島へ向かおうとした時

「撃てえ！俺を殴った覆面とあの考古学者のガキを落とせえ!!」

そんな声と共に砲撃が飛んできた為そちらを見やれば世界政府の船が停船しており甲板には顔の腫れ上がったスパンダインが周りに檣を飛ばしていた。

「その覆面の貴様あ!!俺を殴り飛ばした罪とそこのガキい！オハラの研究内容を知ってるという可能性を持つ考古学者である事お！どっちも指名手配してやるから覚悟しとけ!!」

ちよつとイラつとしたので飛んできた砲弾を声を張り上げるスパンダインに脚を一振りして衝撃波を飛ばす。

「ギャーッ!!おいお前ら！あいつを落とせ！俺を助けろ!!」

ちっ、しぶとい。

などと思いつつもいつまでも付き合つてられないのでその場を離

れる

「待てえ!!ラスキー!モジャーオ!奴らを捕えらろ!!」

「長官!二人ともまだ先程の戦闘から回復していません!それより船内にお戻り下さい!裏切ったサウロ元中将の攻撃も飛んできてますから!!」

そんな声をBGMにあらかじめあたりをつけておいた小島に向かって月歩で駆け抜ける

すまないオルビア、クローバー博士、学者達、サウロ中将。

俺はこの子を助ける、オルビアやクローバー博士達の元へはサウロ中将が向かってくれた。

今はサウロ中将が残った者達を助けられる事を祈るしかない、可能性は限りなく低いが:

しばらく月歩にて空をかけオハラが見えなくなった辺りにある小島に着地し島の中腹の洞窟にロビンとともに移動。

ここならば早々見つかることもなからう、とちらと見るとロビンは時折スンスンと鼻をすする音を上げつつもしかと俺の服を掴んだまま離さない。

とりあえず落ち着いてくれたか、と安堵しつつ覆面を脱ぎ首元を緩め装備を外してようやく人心地つく湯を沸かし、暖かいココアとコーヒートを淹れ未だに服を片手で掴んだままのロビンにココアを渡して何があつたのかの事情を落ち着かせつつゆっくり聞いていく。

そして話疲れたのか泣き疲れたか目元を赤くしたまますすうと寝息をたてるロビンの頭を撫でながら考える。

彼女が話してくれた事を纏めるところだ。

2年前、俺がオルビアとロビンを助けて暫くした頃に北の海から考古学者がやって来たそうさ。

男の名はラスキー、歴史研究がしたくて考古学では最先端をいくと言うこのオハラでは是非勉強させて欲しいとの事であった。

この島の学者達は新しい仲間加入を喜びラスキーもその期待に応え次々と考古学の知識を覚えていったそうさ。

そうしてつい昨日、政府の船がこのオハラにやってきて少し前に晴れて考古者となったロビンが図書館にいた時に家にいる筈の縛られたオルビア、ロビンが一時期居候してた家に住むロジおばさんとやらと共にスペインダイン含む世界政府の役人達がやってきたらしい。

クローバー博士がさらに対応したがその甲斐も虚しく更には実は政府側の人間でオハラには潜入任務で来ていたラススキーの証言により全員罪ありと為され学者達は全員捕縛、ロビンも考古者と言う事で学者達と纏めてあの広場にいたそうだ。

ラスキーって言うのかあの眼鏡の野郎は、あと何発か殴つときやよかったな、オルビアの件はそのロジおばさんとやらが通報でもしたか？

しかしそんな前から潜り込まれてたとは…認識不足だった、中に敵がいて尚且つ考古学の知識を持ってるとあつては隠された資料も探り当てられても不思議ではない。

サウロ中將も度々オハラに顔を出していたとあつては世界政府に目をつけられていただろうしそこからオルビアの事が漏れたとしても不思議ではない。

そんな事を話してくれた後ロビンはこう言った。

「あのね、おじさん…」

お母さんが言いたい事わたしわかるんだ、歴史を次に引き継がなきゃいけないって事。

それが大事な事だつてわかるんだ、でも…でもね？

それでもわたしはお母さんと一緒にいたかったの、頑張つて勉強して考古者になった、いっぱいいっぱい勉強してみんなにも色々聞いて古代文字も読めるようになった。

おじさんとの約束もあるしお母さんみたいな立派な考古者になりたかったからなんだ…」

途中ものすっごい爆弾をぶち込まれたが一旦置いておいて

「そうか…」

と目を伏せて言うロビンの頭を抱えて背中をぽんぽんと叩く

「すまん、俺がもつとなんとかできてればオルビアもクローバー博士も学者達も助けられたかもしれないのに…」

「…うん、おじさんは色々とやってくれたよ。ありがとう、助けてくれて」

泣きながら笑うロビンのその顔を見てギリと奥歯を噛み締める。

自分の不甲斐なさが許せなくなる。何が海軍本部准将だ何が若手の星だ、女の子一人笑顔にできないなど本当に自分に腹が立つ。

しかし後悔ばかりしてはいられない、今回の件がどうなるかだ。

まずはロビンの安全の確保、後でオハラの様子も確認しなければならん、それからロビンの今後だが暫くは変装してもらった上で自衛手段を身につけてもらおう。

一旦本部にも戻らねばならないだろう、その間は信頼できるところに預けておくか、と自分の力不足で救えなかった者達を心に刻み前を向いて立ち上がる。

オルビア、クローバー博士この子の事はまかせろ。

サウロ中将、色々とありがとうございました。

目を伏せて心の中で黙祷を捧げた。

旧・100話記念      もしも彼が狙撃の道へ進んでいたら

「しかし凄い腕ね、長鼻くん」

とある日の航海中、アラバスタを出航して一味に入ったロビンが飛んでいた鳥を撃ち落としたウソップを見てそう呟く

「へっへー、おれは百発百中の腕を持つキャプテン・ウソップ様だからな!!」

そう誇らしそうに言うウソップは船の狙撃手を務めておりその腕は百発百中、パチンコにて状況に対応した色々な玉を撃ち出し変幻自在な射撃術を持つ男である。

「ほんとにそうねえ、貴方ならかの”ミラージュ”にも勝るとも劣らないかも知れないわね」

「ミラージュう？　そういうやダディのおっさんもそんな事言ってたな」

かつてローグタウンで戦った男、子連れのダディことダディ・マスタートソンを思い出す

「あらダディってあの？　かつて海軍一の狙撃手と言われてたダディ・マスタートソンの事かしら？」

「ああ、ローグタウンってとこでな。」

と、ウソップはかつてローグタウンと言う町で戦った男を思い出す。

子連れのダディ、銃使い最強の賞金稼ぎでありかつて海軍にいた時は海軍一の狙撃手と呼ばれていた男であった。

その男が去り際にヤソップの事とついでにこう話していた、”ミラージュに気を付けろ、俺も昔は海軍一の狙撃手なんて言われてたが本当に海軍一だったのは奴さ……”

そんな事を言っていたな、とウソップは何とも無しに思い出す。

「そうねえ、何から話したものかしら……”ミラージュ”って言うのは一人の暗殺者の異名よ」

「あ…暗殺者か…やっぱりあれか？得意技が暗殺って事でその繋がりなのか…？」

うふふふ、と笑顔で口を閉じるロビンにガタガタと震えるウソツプ  
「話を戻すけどミラージユは百発百中の腕を持つ狙撃手よ、彼に狙われた標的は必ず仕留めると言う話よ？」

「へえー、そんな奴がいるのか…まあ？どんな奴だろうと？このウソツプ様の腕前には敵わねえだらうがな！ハーツハツハツハ！」

「因みにミラージユは狙撃に自信を持つ者には勝負を仕掛けに来るって話よ？長鼻くんも気をつけなきゃね？」

大笑いでそう言っていたウソツプはその話を聞き大口を開けて固まる

「おおおおおれにかかればああ暗殺者のなんてお茶の子さいさいだただだ…」

ガクブルと震えながら言うウソツプに対しロビンはニコリと微笑むのだった。

そして時は流れ

スリラーバークの激戦を乗り越えた麦わらの一味はとある小島にて船を停泊させ各自休息をとっていた。

そして一味の狙撃手、ウソツプは新しく作ったカブトと呼ばれる大型パチンコの手入れを行っている、音を立てて飛来する一本の矢が胡座をかいて作業をしていたウソツプの足の間に突き立った

「どわああああ!!敵襲ー!!敵襲ー!!」

びっくりしたように後ずさり大声をあげるウソツプ  
「どうしたウソツプ？」

騒ぎを聞きつけ様子を見にやって来たのはルフィ。

「と、突然矢が飛んできたんだよ！ルフィ、敵襲だ！敵がくるぞー!!」  
ルフィは突き立った矢を見て

「おっ…なんか手紙ついてんぞ？」

そう言っ矢を引き抜こうとするルフィだったが

「重っ！なんかこの矢めっちゃおもてえぞ?！」

「おいおいおい、どこのどいつだ！このサニー号に矢なんかぶっ刺した奴はあ!!」

そう言いながらやって来たのは一味の船大工、フランキーである。

フランキーはムズ、と矢を掴みふんっ！と力を込めて引き抜く

「フランキー！その紙くれ！」

フランキーは矢に結ばれた手紙をほどき催促するルフイに渡して

「しっかし重たい矢だな、多分鋼を圧縮してんなこりや。

鏃も矢羽も一体成形、こんなのどうやって飛ばしてんだ？」

フランキーは飛んできた矢を見て疑問を浮かべ

「るるルフイ？な、なんて書いてあんだ？」

「えーと

” 拜啓 狙撃の王そげキング殿

狙撃の王と言うその腕、是非勝負されたし

場所はこの島の遺跡エリア

明日昼間、太陽が中天に登った時を開始とする

ミラージュ”

ミラージュって誰だ？」

「ミラージュ・・・どーつかで聞いたような・・・」

手紙を読み上げたルフイの声を聞きウソツプは何かを思い出すように頭を手を当てひねる

「おいおいおいおい！ミラージュっていやかの暗殺狙撃手こと”幻影のミラージュ”!!億越えの弓使いじゃねえか！」

そんな奴が勝負を仕掛けてきたってか！はっはっはっ！こりやいや！確かに奴あ狙撃に自信を持つ者に勝負を仕掛けに来るとは言うが！」

「億越えだとお!?そ、そんな奴がなんでおれなんかに・・・」

「とにかく強えんだろ！そのミラーって奴！おれそいつと戦いてえ！」

「あら、辞めといた方がいいわよルフイ、いくら貴方の身体でも彼とは相性が悪いんじゃないかしら？」

そう言いながら現れたのは一味の考古学者、ニコ・ロビン

「えー、まあ今回はウソツプを指名してるしなー…ちえー、仕方ねえな！今回はウソツプに譲ってやるよ！」

「お、おいロビン！ルフィが相手でも良かったんじゃないか？」

「あら、折角かの世界一の狙撃手が相手に選んでくれたのよ？あなたの狙撃の腕が彼に認められたって事じゃないの」

「世界一の狙撃手…」

「ええ、元海軍にして現在賞金首にして暗殺者。」

世に狙撃の名手は数いれど彼ほどの技量を持つ人間はいないわよ、いい機会じゃないの？」

「ぐ…いやーおれはやるぞ！何が暗殺狙撃手だ！おれはそんなの怖くねえぞ!!」

「おーし！それでこそおれ達麦わらの一味の狙撃手だ！」

時は移り次の日昼間

愛用のゴーグルを嵌めウソツプは広場の中央に佇んでいた

目を閉じて集中する。

耳が微かな音を捉え

「必殺！鉛星!!」

音がした方向に素早く鉛の弾を撃ち込むも何の反応も無くお返しとばかりに鋼の矢が飛んでくる。

しゃがむ事によりかろうじて避け遺跡の壁の裏に回り込む

そして矢が飛んできた方向に対し

「カマキリ流星!!」

放つは山なりに弧を描いて着弾、爆発する弾

そして何かを感じて咄嗟にその場を離れるウソツプ、ぶ厚い石壁を無視するかのよう大穴を開けて貫通し先程までウソツプがいた場所を刺さったのは黒一色の鋼の矢

「なんつう力だ…」

弓矢でこの威力というのに恐れを抱きつつもその場を離れながら



牽制として何発かの火薬弾を撃つ。

そうしてどれくらい時間が経っただろうか

矢は飛んできても全く姿を見せない暗殺狙撃手に攻めあぐねるウソップは

「必殺！超煙星!!」

広範囲に煙を噴出する弾を放つ。

煙はもうもうと広がりウソップの姿を隠したがそこに高速で飛来するのは一本の矢、まるで煙の中でも見えているかのようにウソップに放たれた矢は

「わかってたぜ！世界一の狙撃手ならこの煙でも撃ち抜きに来るってな!!」

予め自分を撃ってくるかとわかっていたのだろう横になって跳びのき回避、煙を裂いたためハッキリと現れた矢の軌跡に対し

「三連！火炎星!!」

爆発する弾を三連打

中空で大きな音を立てて爆発したそれを見て

「嘘だろ・・・空中で3つとも撃ち落とすやがった・・・」

そうして先程は一発づつしか飛んでこなかった矢が三本づつ飛来して来ることにより逃げたり避けたりしながらなんとか策を考えるウソップ

おそらく矢が飛んできているのはこの遺跡の一番高い所である中央の建物だろうと考え

「ならば・・・火薬星！火薬星！ローリング火薬星！三連火薬星!!」

とミラージュがいると思しき建物の柱を狙って爆発する弾を撃ち狙い通り大きな音を立てて建物の前面が崩れた。

姿を現さないのなら柱を壊して足場ごと崩せばいいというウソップにしては割と力技であり、火薬玉を連続して発射した後も油断なくそちらを見て構える。

そして土埃が晴れそこにいたのは一人の男、被っていたフードとマントを脱ぎ捨てた男は薄紫の髪を後ろで結わえ筋骨隆々とした体つ

き。

目を引くのは発達した両腕とその手に持つ大型の弓で見る者が見れば弓も弦も鋼で出来ている事が察せられただろう。

「ふははっ・・・ふははははっ!!やるじゃねえか狙撃の王!!本気でやるつもりは無かったがちよつと楽しくなってきたぜ!!

さあ!!第2ラウンドといこうじゃねえか!!ギロギロ!ホワイトア  
イ!!!」

そして男の目には全てを見通す視界が出現する。

暗殺狙撃手

”幻影のミラーージュ”

ギロギロの実の能力者で覚醒者

懸賞金”7億6200万ベリー”

主な罪状

天竜人の殺害

政府要人の殺害

海軍要人の殺害

武器

総鋼鍛造大弓”雉鳴(きじなき)”

常人では引くどころか持ち上げる事すら能わぬ大弓

状況に応じて使い分ける複数種の総鋼造りの矢

本拠地はアマゾン・リリー近くの小島

暗殺稼業でマリージョアにいた際フィッシュヤータータイガーによるマリージョア襲撃がおこりそれに際してボア三姉妹を救出しその縁でサンダーソニアと交際をしている。

アマゾン・リリーにてきちんと覇気を教えてもらい武装色と見聞色の覇気使い、矢に覇気を纏わす事ができる。

ギロギロの実際の覚醒者、現実世界に影響を及ぼす。  
簡単に言うとも眼使い。

中の人覚えてる魔眼を使う事が可能、もちろん制限はあるが。  
これにより海軍大将などの追撃も逃れきった。

因みにドレスローザ編でお助けキャラとして登場する

## 状況終了 ドンクリーク

明けて次の日の朝ロビンは洞窟の入り口に立ち海を見ながらこう言った。

「おじさん、わたしは空白の1000年を解き明かしたい、博士やお母さんが調べていた消された歴史を知り、受け継ぎたいの。」

だからわたしはいつまでも泣いていられない、おじさんはわたしが空白の1000年のことを知るのには反対？」

「…賛成か反対で言えば勿論反対だ。」

「そっか…だっておじさんは海軍の人間だもんね、仕方ないか…」

反対との言葉を聞き俯くロビン

「だが！」

膝をつきロビンの肩に両手をそつと置く

「俺が反対だと言ってもロビンは調べるつもりだろう？」

沈黙するロビンだったがそれを肯定と受け取る。

「5年だ、5年間で一人でもやっていけるよう色々教えてやるから調べるのはそれまで待ってくれ。」

俺はまだ海軍でやらなきゃいけない事が色々あるから海軍の人間として賛成はできない、だが個人的に手助けしてやるのは構わんだろ？」

驚いたように顔を上げるロビンの頭をワシワシと撫でる

「それに子供の夢は応援してやるのが大人の仕事だ」

「ありがとうおじさん!!」

朝日を受けて微笑む彼女を見て思う、古代文字が読める以上好む好まざるに関わらず騒動に巻き込まれるだろう。

それに母親を亡くしクローバー博士や学者達、親しい人間を亡くし天涯孤独の身の上ながら母の夢を受け継ごうと言う姿。

なら俺にできるのはそれを手助けしてやる事ぐらいだ。

同時刻、世界政府巡視船セーフ・ジュンシー号内サロン

「はあ!?!モジャーオを一撃で倒しただど!?!」

この事件の首謀者であるスパンダインは包帯でグルグル巻きになった状態で寝台に横たわり護衛として連れてきていたCP9の実務隊長であるラスキーより事の報告を受けていた。

「はい、更には月歩や剃といった六式に似た技を利用していました。

グランドラインには似た技を使う者も多い為”六式”だと判断するのは早計かもしれませんが…」

「モジャーオは道力1000を誇る文字通り1000人力の”超人”だぞ!？」

クソっ、モジャーオを一撃で葬り道力3000近くを誇るラスキーを苦戦させる謎の覆面だとお?ふざけるな、俺の仕事に汚点が残っちゃうじゃねえか!!」

「更には何かしらの能力なのか不明ですが尋常じゃなく防御力が高かったのでこちらの攻撃はほぼ通用してないように見受けられましたな」

ギリギリと歯を噛み締めるスパンダインにそう告げるラスキー

「その男は”ティーチ”と名乗ったんだよな?」

直ぐにそれだけの事が出来そうでティーチと名のつく男をピックアップしろ!幸いにも奴が空を飛んで逃げた時に撮影が成功してる、あの考古学者のガキも合わせて指名手配してやる!!」

そんなやりとりがあつて数日後

”悪魔の子 ニコ・ロビン 3900万ベリ!”

”ドクロマスク 4000万ベリ!”

手配書に新しくまだ幼い少女と黒地に白いドクロのマスクを被つた男が仲間入りしたのだった。

とりあえず月歩でマリルフォードまでロビンを抱えていくのは流石に無理があるし、そのままだと捕まる可能性もある為適当に変装して近くの街まで行く商船に乗る。

俺は三揃えのスーツに鉄仮面を、ロビンは髪を白く染色し後ろで1つに結わえてもらいフリッツフリの黒いドレス、ゴスロリって言うのか?こういうの。

艶やかで綺麗だったロビンの髪だったが背に腹は変えられまい、設

定はお嬢様とその護衛である。

船に乗るにあたって鉄仮面を奇異な目で見られたがロビンの

「わたしの護衛は過去にわたしを守って酷い火傷を負ってるのよ、できれば触れないであげて？」

という一芝居でなんとかなった。

金を惜しまず一等船室に通してもらい暫くするとロビンは柔らかなベッドの上でいつの間にか寝入っていた為今のうちに今後の予定を立てておくとする。

紙とペンを8歳の誕生日祝いにロビンに送った鞆から取り出すとま

ずは”グランドライン”と記入、だいぶ曖昧になっている原作での出来事を書き記していく。

まず最初にリヴァースマウンテンを越え、グランドラインの入り口”双子岬”、これはラブーンとクロツカス。

この時期ならば灯台守として常駐しているだろうが特に用事は無いので飛ばす。

次に賞金稼ぎの町”ウイスキーピーク”ここでアラバスタ王国王女である水色の髪のチャーミングガール”ビビ”（ついでにカルー）が仲間になるがたしか彼女は16、7くらいだった筈なので今はまだ生まれてない筈（初登場時16歳、未だ生まれておらず。）

なので根本から関わるとしたらアラバスタ関係でだろうからここも飛ばす。

次が：リトルパーク？なんだったか、リトルアイランドだっけ？（リトルガーデン）

ここは巨人族であるドリーとブロリー（ブロギー）の二人がいる、本部に帰ったら手配班に顔出して確認しとくか、リトルアイランド（リトルガーデン）はちよつと用事あるからいつか顔出さないとな。

巨人族といやビッグ・ママが何か関係してるんだっけ？とりあえず一旦置いておこう。

次、ワポルのところ：ああ、ドラムだ医療大国ドラム。

ここで優秀な医者である”チョツパー”が一味に加入だったな、今

の王がどつちかわからんが医者 of 追放が起こってないんだったら良  
いが：

ま、帰ったらこれもちよつと調べるか。

次は：アラバスタでいいんだっけ？これは規模がデカすぎるので  
後で詳細を詰めるか、空島も一緒だな。

そして次がウォーターセブン、そしてエニエスロビー編か：（空島  
の次にロングリングランド編）

これはロビンがどう動くかだが：いや、待てよ？

この時期ならまだ海列車開発途中とかじゃないか？となるとトム  
さんの件はなんとかなるかもしれない、これは帰ったら早急に調べてみ  
るか、上手くいけばトムさんを助けられるな。

次はスリラーバーク：モリアって新世界でカイドウとやり合った  
んだっけか？（ワノ国にて抗争、敗れた）

具体的にいつかわかんないんだよなあ（原作開始から10年以上  
前）たしかフロリアン・トライアングルだったよな、これも帰ったら  
本部の書庫でも漁ってみるか。

次がシャボンディ諸島と：頂上戦争編か：

よし、一旦飛ばそう。

それから2年後にシャボンディ諸島にて一味再集結して魚人島編  
へ

オトヒメ王妃は上手くいけば助けられるかもしれない、確かアレに  
関してはマリージョア襲撃の後だった筈。

そして次がパンクハザード：であつてたっけ？シーザーがどうし  
てるかわからないから帰ってからこれも調べないとな。

次がドレスローザ、ドフラミンゴのどこだな、リク王だったか？国  
の篡奪はたしかローが子供の頃だったよな。

そうか、ローとドフラミンゴの弟の：コラソンは助けられるかもし  
れん、帰ったら白鉛で有名な白い町：そうそう、フレヴァンスがどう  
なってるか後で調べよう。

んで次、ビッグ・マムのところ：ああ、でっかい象のところもだな。

ここら辺は殆ど覚えてないんだよなあ：確かサンジの実家も関

わってるんだっただか。

ここら辺は色々調べて記憶を補完していくしかないか。

そして原作知識はここで終わり、ビッグガム編以降はわかんないんだよなあ。

多分エルバフとかワノ国とか、そーいやバレットのバスターコールもあつたな。

それもビッグガム編以降で関係してくる事件だったのかもしれないな。

うむ、こうしてみると回らなきゃいけない場所が何箇所もあるな、ついでに調べないといけないのはそれ以上か…まあやれるだけの事はやるとするか、最初に決めたとように”拾える命は拾っていこう”



## 海軍少将 ドンクリークさん

とある島で500人の兵士が海賊の人質になる事件が発生。

世界政府によって人質を全員殺害する事によって事態は収束した模様。

聞いた事あるよな?と思いつつ詳しく調べてみれば単身敵地に潜入し人質を全員殺害したのは13歳の少年:やっぱルッチじゃん!

原作ではウオーターセブン編、エニエスロビー編にて世界政府の諜報機関であるCP9最強の男として麦わらのルフィと戦闘、破れた後で今度は最強の諜報機関、CPOの所属として登場した。

ロビンを守る上では大きな壁になりうる男である。

そしてそんな世界政府から狙われる懸賞金3900万ベリー、”悪魔の子”ことニコ・ロビンであるが現在13歳。

最初の一年でみっちり体力づくりをしてもらい現在は主に能力の強化に重点をおいて訓練している。

この3年で長く伸びた髪は白く染められたままだが後ろで1つにまとめられ幸いにも未だ手配書と同一人物と発覚してない為이었다か民間の協力者として海軍に登録されているシュナイダーと同じように民間協力者として船に乗ってもらっている。

そうそう、現在の俺の役職であるが准将になった後に海軍G-8支部、ナバロン要塞にて3年程司令を務めつい先日少将に昇進した。

そして少将への昇進を機にかつて海域を問わない遊撃任務を主として多くの海賊を監獄送りにしたその名も高き”カモメの水兵団”こと”海軍独立中隊”を強化した上で復活、名も改められ”海軍独立遊撃隊”のその総司令として就任した。

掲げる旗はもちろん赤いカモメの海軍旗。

大隊規模の人員に改造戦艦ベアトリス号を旗艦として2番艦アルビオン号、3番艦クイーンズ・メイファイア号にジョナサン大佐とリユードー大佐をそれぞれ司令官として配置。

かつてと同じように東西南北とグランドラインを行き来する遊撃任務に就いたのであった。

そして最初にやって来たのは北の海。

何故かというところの北の海、数年ほど前から海賊が増加しており北の海のアチコチで小競り合い、場合によっては大規模な抗争まで起きているという話であったからだ。

調べた限り他の海は例の”公認海賊”の制度により落ち着いているがここだけでも海賊が増えておりその対策として今回乗り込んできたのである。

残念ながら3隻の改造戦艦はレッドラインを越えることが出来ない為置いて来たが変わりの軍艦を借りて哨戒任務に当たることになる。

北の海…北の海…

あ、モンブラン・ノーランドか。

ノーランドと言えばサンジの実家、”ジェルマ”があるんだったか…うわあ、あんまり関わりたくないけどあの科学力は魅力的だよなあ、後で最寄りの支部で調べるだけ調べてみるか…

そんな事を考えつつ時折海賊を捕縛しながら数ヶ月程、今日も今日とて”カモメの水兵団”を倒して名を上げようと考えたり赤いカモメの海軍旗を見て逃げ出す海賊旗を掲げた船を拿捕したりしている時の事だった。

「あ？センゴク大将から通信？」

見張りについていた兵士が報告してきたのは政府の船が単艦でやってきて此方に横付けしてきたというのだ。

「はい、何か行って欲しい場所があるとか…」

「急に何事だ…？何かの任務か？」

「いえ、そこまでは…とりあえず通信室までお願いします。」

ジョナサン大佐もリユードー大佐もそれぞれ別れて海に出てるからなあ…

「仕方ない俺が出る、”オリヴィエ”はここで待っていてくれ」

「わかったわ、おじさまも気をつけてね？」

艦長室で本を読んでいたロビンこと”民間協力者 ニコラ・オリヴィエ博士”に一声かけて報告しにきた兵士と共に通信室に向かう。

「はいこちら海軍独立遊撃隊総司令のクリークであります」

『おお、急にすまんなクリークよ。どうだ北の海は?』

「何故かこの海は海賊が多いですね、小競り合いなどもよく見られますね」

ほんと頭が痛くなりそう。

『ふむ、そうか…とりあえずお主を呼んだ理由だがある人物の保護をしてその人物をマリージョアまで連れてきて欲しいのだ』

…ある人物?保護?

「誰か重要な人物ですか?」

「うーむ、まあ行ってもらう以上話しておかないといけないだろう、保護対象はフレバンスの国王、アクドーイ国王陛下だ」

ん?フレバンス?フレバンス…フレバンス…; 白い町”フレバンス!ローの生まれ故郷!かつて世界一美しい町と呼ばれた国か!

手元の紙に”至急フレバンスについて調べよ”と書き横にいた兵士に見せてふと考える。さて、伝染病というか実際伝染病じゃないけどこつちのアンテナには全然ひつかかってないぞ?

「ちなみに”珀鉛”の名産地、フレバンスの国王陛下を何故保護するのですか?」

『フレバンスで疫病”らしきもの”が発生した。』

本来は政府の船が向かう筈だったがどこから聞きつけたか噂に名高い”カモメの水兵団”が現在北の海にいる事を知り是非迎えに行ってもらおうとなったらしい』

うっわ、完全なとばちりじゃねえか、というか要するに国を見捨てて逃げるから手伝えって事じゃないか。

「疫病らしきものですか…医療部隊の派遣はするのですか?」

『…残念ながら認められなかった、恐らく国ごと”不都合な真実”を消してしまうつもりだろう』

「不都合な事実…; 珀鉛”の毒性ですか?それとも地質調査の時に既に毒性があると王家も政府も把握してた事ですか?」

原作を思い出しつつそう聞く

『知っておったのか!?...クリーク、お前の言う通りだ。』

長い間扱って来た事により一斉に世代を越えて中毒が発症、周辺国家は既に疫病だと思い込んでおり国境の封鎖する動きがある。

だから国境が封鎖される前に王族達と合流しマリージョアまで連れてこい、なお、フレバンスについてはお主に一任する。

多少は自由にやってもらって構わん、ただこちらからは追加は出せないので”独立遊撃隊”の人員で何とかせよ、通信は以上だ、何か質問は？』

その言葉にクリークは了解と返しつつ直ぐに準備を始めるのだった。

”白い町” フレバンス

北の海にある巨大な島の5つの国で形成された連邦国家、フェデレイション連邦に属しており四方をそれぞれトーナ王国、リノ王国、クウニ王国、マーマシー王国に囲まれた小さな国である。

原作でも活躍するトラファルガー・ローの出身地でありその国は国全体が地面も草木も真っ白でまるで童話に出てくる雪国のような幻想的な風景を持ち島の人々は皆裕福で人々の憧れの国だったという。

この幻想的な風景はこの国の地層から採取される”珀鉛”という鉛の影響でフレバンスはこの珀鉛を一大産業としておりこの高品質な”珀鉛”は食器、化粧品、塗料、甘味料そして武器に至るまで質の高い商品として世界中から求められ”珀鉛”は底無しの金を生み、周辺国家や世界政府も”珀鉛”製品の運輸などに参入しフェデレイション連邦に巨万の富をもたらした。

だが”珀鉛”を扱うフレバンスの民は知らなかった、世界政府と王家は100年前行った地質調査により知っていた、”珀鉛”は毒だったのだ。

掘り起こさなければさして害は無くだがしかし取り扱えば人体に悪影響を及ぼす毒、しかし王族と世界政府は”珀鉛”が生み出す巨万の富に目が眩み、その事実を隠蔽しやがて世代を重ねることで蓄積してきた毒が、世代を問わず一斉に牙を剥きフレバンスの民達が珀鉛病を発症すると早々に逃げ出したのである。

そして原作では国民が珀鉛病を一斉に発症した為伝染病と思い込

み周辺諸国は他国へ通じる通路を八方から封鎖、隔離処置を行った。

他国への亡命、治療を希望する者たちも迫害され射殺されたという。生き残った国民たちは珀鉛でできた武器を使い抵抗を試みて全面戦争が勃発しこれに対する反撃という口実を得た周辺諸国から一斉攻撃を受け、周囲から火を放たれて滅亡した。

そしてこの国の生まれであるトラファルガー・ローは家族、友人、恩師の全てを殺されながらも、死体の山に紛れて隣国に脱出し、珀鉛病に蝕まれながらもドンキホーテファミリーの元へと向かったというのが原作でのフレバンスである。

そして今回通達された任務はフレバンスの王族の保護。

はつきり言って色々ど気に入らないがこの件に関してはやり過ぎなければ此方に一任するとの事だったのでその言葉に甘えて色々ど動かさせてもらう。

「全乗組員に告ぐ、これより本艦は南西に舵をとる。

目標はフレバンス、目的はフレバンスの住民達への人道支援とそのついでに王族の保護

国境の封鎖が噂されている為事態は急を要する、各員直ちに行動を開始せよ!!」

船の各所に繋がれた伝声管でそう通達すると”はっ!!”と各所から一斉に返事が返ってくる。

「ジョナサン大佐とリユードー大佐に通信を繋げてくれ

…ジョナサン大佐、リユードー大佐聞こえるか?こちらクリーク、各自応答されたし」

『こちらジョナサン、通信に問題無し』

『こちらリユードーです、同じく問題ありません』

「これより”海軍独立遊撃隊”はフレバンス近海にて合流する、そちらで拿捕した海賊の中に船医はいるか?」

『ふーむ…リストを見る限り何名かいるようですね』

『こちらも数名程います、どうかされたのですか?』

「よし、ならばその者達に減刑を餌にこちらの指示に従うように通達しろ、指示に従う者は見張りをつけた上で纏めておいてくれ、これか

らフレバンスにて医者の出番が増えるぞ？」

『フレバンスと言えは』 白い町』 だったかい？ここからだど2、3日はかかるかねえ』

『こちらもそれくらいですかね、とりあえず言われた通りに準備はしておきます』

「二人とも頼んだ、目的は人道支援だ。

国境封鎖の動きもあり戦争にもなりかねん、無理して急げとは言わんが時間との勝負だというのを念頭に置いておいてくれ。」

『了解した』

『はい、了解しました！』

そう言って二人に繋げていた通信を切る。

「こちらも拿捕した海賊の中に船医がいなか確認しろ！時間との戦いだ、ほら急げ急げ！」

## 腐敗王族 ドンクリークさん

フレバンスは騒乱の一途を辿っていた。

ジョナサン大佐、リュードー大佐の船と合流しついでにその辺で拿捕した海賊船二隻を含んで計5隻が合流した後に海軍第165支部があるマーマシー王国に接岸した、勿論海賊旗は取り上げたが。

支部長に事情を話したところ既に連邦内部の会議にて国境封鎖が決定、この国境も数日もすれば封鎖されてしまうだろうという話であった。

リュードー大佐に第2から第4中隊を任せかき集めた海賊船医十数名と共にフレバンス国内を回ってもらい、ジョナサン大佐には第5中隊を預け船の護衛及び拿捕した海賊船に乗せる為避難民の受け入れ準備に。

こちらは第1中隊と海賊船医5名を率いてフレバンス首都へ向かう、一応任務が国王の保護である以上国王を迎えにいかなくてはならんだろう：

その前にこの国の王に会いに行く、国境の封鎖をなんとかしてもらえないかどうかである、そして”珀鉛病”は中毒症状であり疫病では無い、という事などを話し合った結果

1. 国境の封鎖は行方が海軍の人間と一緒にならば通っても良い
2. フレバンス国民の治療、移住、亡命などは認めないが通行は許可する

3. 時間猶予は三日間  
というものだった。

なんでも深いため息をつき疲れたように玉座に座る王が言うには”連邦議会により国境の封鎖は決定している為やらなかったら今度は此方が睨まれるのだ：例えば疫病でなくともな：”との事であった。

とにかく通行許可はとったのでさっさとフレバンス国王をとっ捕まえて船の中に片付けてリュードー大佐に合流しよう、そうして混乱する街の中を抜け王宮につけばそこにいたのは

「ふほほほほ、ようやく来たか。わちしを待たせるとはいかに名高い

”カモメの水兵団”とは言え所詮は庶民ぞえか」

金色に光るアクセサリーをあちこちにつけてつぶりと腹が張り出した小男

「まあなんと粗暴そうな顔立ちかしら、やはり海軍というものは野蛮人達の集まりなのですわね…」

背が高く、顔立ちは整ってるがどこかキツそうな雰囲気を漂わせる女性

まあうちのロビンの方が美人だがな

「…お二方はフレバンス王族の間違いありませんか？」

取り敢えずイラツとしたのを堪えてそう聞く、多分間違い無いだろうが念の為。

「そうじゃ！わしこそがこのフレバンスの国王、アクドーイ・フレバンスじゃ！まあ時間は掛かったが迎えに来た事に免じて許してやる！感謝するがよい!!」

色々とツツコミたいが我慢する、下手に反論して睨まれるのもイヤなので

「そして、私はこの国の王妃ガーマツイ・フレバンスよ？私達を護衛できる事を光榮に思いなさい？」

どうしよう、既に任務をほっぽり出したい…まあそういうわけにもいかないので軽く愛想笑いをしつつ

「私は海軍本部少将クリークです、今回お二方をマリージョアまで送り届けるように言われています。」

しかしフレバンスの国王陛下はこのような国の一大事にそんな顔をしてるんですわね」

とりあえず色々と押し殺し国の一大事に何も考えてなさそうな顔を見て嫌味を込めてそう聞くと

「ほ？わちしの顔を知らんだと？そうか、よっぼどの田舎者なのだ…」

「仕方ないわよあなた、野蛮人はきつと教養が無いから私達のことを知らないのよ」



という感じにナチュラルに神経を逆撫でしてくる為さつさと船まで送りつけてやろうと街中で徴収した馬車に乗ってもらおうようにお願いした。

「ふん、そんな貧相なものには乗れんぞよ、馬車と荷物は用意してある故はようわちし等を脱出させぬか！」

そう言つてこちらに着いて来るように言い着いた先は王宮の裏庭

そこには金銀宝石をあしらった豪華な馬車が一台、それと別に華美な宝飾を施された馬車が数十台。

「…陛下、まさかこれを全部運べと？中身は大事なものののですか？」

「ふほはほ、当たり前じゃろう。いいからさつさと運び出さぬか」

知るかっ!!と心の中で叫び出しそうになるがぐつと抑え

「しかしこれだけの量となると運ぶだけで2、3日取られるかも知れませんがよくですか？」

「ふむ、まあわちしは寛大じゃからな。

それくらいなら許してやるぞよ、そうそう連絡もせんといかんの」

そう言つてフレバンス国王は電伝虫を取り出し

「ああ、あちしだ。こっちは今から国を出る、”約束通り”後はお主らの好きにせい」

「陛下、今のは？」

少し気になったので内容について聞けば

「ん？ああ、わちしはもうこの国はいらんのでな、他の国に売っただけの話ぞよ」

と、最悪な事をのたまいやがった。

「何て事してくれとんじゃ!!そんな事すれば周辺国家があつという間に押し寄せて来て取り合いになるだろうが!!」

これには思わずそう怒鳴ってしまった

「な、何を急に怒っておるのじゃ!この国はわちしの物じゃ!わちしの物をどうしようとお主には関係なからう!!」

と言い出す始末、やつはこいつらの考えは俺には理解できん、それよりも時間的猶予を見て2、3日と言ったがその猶予はもう無いだろ

う。

「今日明日中にこの島を発ちます、この馬車全てを持っていくのは諦めて下さい」

「な、何を言うか！先程2、3日で運び出すと言ったろうが!!」

言つてねえよ!!

「知るかつ!!さっさと馬車に乗ってくれ！アンタが余計な事しでかした所為で時間猶予が無くなったんだ!!荷物はこちらで適当に選別して後から持つていく！それでいいだろ!!!」

流石にキレた、後で文句言われるかも知れんが緊急事態だったので仕方ないという事でセンゴク大将あたりに仲裁してもらおう

まさか怒鳴られるとは思ってなかったのかさすがごと一番豪華な馬車に乗る二人、しっかりと別の馬車から出したこれまた宝飾だらけの鞆を持って。

フレバンス王家の馬車には小隊を1組つけて先に船に向かつてもらい取り敢えず残された馬車は有効活用させてもらうか、と考え手近な馬車の扉を開ける。

黄金が山と積まれていた。

無言で扉を閉め次の馬車を開ける。

黒い鞆が大量にあり中を開けてみれば札束の山。

無言で扉を閉める。

まさかこの数十台の馬車、全部こんな感じじゃなからうな？

## 白町騒乱 ドンクリークさん

「急げ！ぐずぐずしていると攻撃が始まるぞ！」

「もうダメだ、もうこの病気も治らないんだから逃げてたつて意味ないや！」

「うわああああん!! パパー！ ママー！ どこ!？」

二小隊程を王宮の探索に、一小隊を馬車群にあて残りの人員と共に街に訪れれば辺りは荷物を持って逃げようとする者、疲れたように壁に背をつけ座り込む者親とはぐれたのか泣いている子供。

遠くからは微かに銃声も聞こえておりまだ遠いが黒煙が上がっているのも見えており、中には武器を持ち出し”殺される位なら一人でも多く道連れにしてやる!”だの”皮肉だろ? こちとら鉛玉なら山程あるんだよ!”と興奮して国境へ向かおうとする者もおり大人も子供もその誰もが髪や体のあちこちに白いアザを持っており彼等が全員”珀鉛”に侵されている事が察せられた。

武器を持ち出した者達を止めようかとも考えたが死にたがりには放っておく事にした、冷酷に見えるかも知れないが船に乗せられる人数に限りがある以上は助かる気がないのなら見捨てさせてもらう。

近くにいた荷物を抱えて逃げようとしていた人間を捕まえて

「おい! この辺で一番でかい病院は何処だ!!」

「こ、この辺なら街の中央にあるトラファルガー記念病院だ! あそこが規模が一番大きい!」

その言葉に従い街の中央を目指せばそこには先遣隊として出立していたリユードー大佐と海賊船医のまとめ役のドクトルの姿があった。

「リユードー大佐! ドクトル!」

何かを話し合ってた二人はこちらに気づくと

「クリーク少将! お疲れ様です、例の件は終わったので?」

「ああ、色々と酷いもんだ、しかも置き土産としてとんでもない事をやりやがった、さっさと助け出さないと戦争に巻き込まれかねん」

「何かあったのですか・・・?」

「この国の王は国を売りやがった、直ぐに周辺国家のハイエナ共が武器を抱えて押し寄せて来るぞ、土地や財産の取り合いだ!ドクトル!」  
「珀鉛病」の見立てはどうだ!!」

「へい、旦那の言つてた通り伝染病なんかじゃなく、珀鉛」の鉱毒蓄積による中毒症状つすね」

海賊船医のまとめ役、ドクトルに”珀鉛病”について調べるように頼んでいたがやはり知識通りだったようだ。

「治療方法はあるのですか?」

と尋ねたのはリユードー大佐

「一番てつとり早いのは原因となつてゐる物質を体内から抜く事なんすけどその手段が無く残念ながら有効な治療方法は今のところ無いつす

： しかもこの医者に聞いたんすけど症状としては白いまだら模様のアザが体や髪にあらわれ激痛と共に広がっていき最終的には死に至るつて話らしいつす、なので長い時間をかけて体内からゆっくり鉱毒を抜くつてのも難しい有様で…」

やはり治療に有効な手立ては今のところ無しか…

そうやって三人で頭を抱えて考え込んでゐると

「すみません!あなた方は海軍の方ですよね!子供達を逃す事はできませんか!」

そう声をかけてきたのは顔の一部に白いアザがある一人のシスターだった。

「どうか!どうかお願いします!子供達だけでも避難させることはできませんか!」

自らは珀鉛病に侵されてるであろう女性は必死な様子で

「失礼ですが貴方は?」

とリユードー大佐が聞くと

「す、すみません私はその教会で子供達に勉強を教えているのですが、数週間前にこの症状がみんなに発生して頑張つて対応しているところに隣国が攻めてきたと聞いていてもたつてもいられなくて!!」

「落ち着いてくださいシスター、子供たちは何人くらいいるのですか？」

「ええと、一度みんなを集めないと分かりませんが50人にはいかないほどです、家族と居たい子もいるでしょうし…」

「リユードー大佐、王宮から大型馬車を何台か回してもらってくれ。」

シスター、我々は今日中にはここを発つ予定だ、馬車を用意するので子供達を集めておいてくれ。」

「ありがとうございます!!みんなに声かけて集めてきますね!!」

そう言つて走り去るシスター、とりあえずこの医者にも話を聞きにいかねければならぬだろう。

「俺はこの医者と話をしに行く、大佐は避難準備を、医療班は大佐について患者の救護を、ドクトルは俺についてきてくれ」

そうして何人かの人間にここで一番の医者を聞いて面会できたのが

「どうも海兵さん、この院長を務めていますトラファルガー・ルークですこちらは妻のレモ、私の助手をしております」

そう自己紹介してくれたのはこの病院の院長である男性とその妻、二人とも白い斑が浮かび上がっている上に目元のクマがひどく必死でこの事態に対応していたであろうことが見てとれた。

「どうも、海軍本部から来たクリークです。」

本来の任務から外れますが市民のこの窮状を見過ごせませんので避難の支援に来ました」

「いえ、政府がきちんと周辺国家にこれは伝染病ではなく珀鉛による中毒だと発表してくればこの騒ぎも納まるでしょう。」

それから医者と血液をこの国に送ってもらってきちんと研究すれば時間はかかるかもしれませんが珀鉛を体から除去する方法は必ずある筈です。」

…世界政府を信じているのか

「トラファルガー先生、この騒ぎは収まりません、この国の王は周辺国家にこの国を売りわたしました。」

それに珀鉛の運搬に一枚噛んでいた政府も世界各地にある珀鉛製

品にケチがつく事を恐れこれが伝染病ではないと発表する事はないでしょう、それに巷ではすでにこの中毒が伝染病扱いされています。

医者も、血液も足りないとおっしゃいましたね？私も一応医療班を連れて来ましたが微々たるものです、ハッキリ言っこのままだとじり貧、死を待っただけです!!」

その言葉にルークは悔しそうに下を向いた。

## 復讐誓い ドンクリークさん

とりあえず海軍側から見た現状の説明や今この国を取り囲む国の状況、国民を避難させるための準備などいろいろと話して聞かせ何とかトラファルガー夫妻の説得に成功した。

しかしいざ脱出するにも病人への対応や準備にも時間がかかる為半日ほど時間が欲しいとの事だったので話し合いはここまでとし準備の為にドクトルを含め医療班数名を同行させ俺は一旦王宮に向かう。「どうだ、何か進展はあったか？」

王宮の搜索に当たった人員を捕まえ進捗を確認すれば

「はっ、とても重要な物が見つかりました、こちらを確認してください」

そういつて渡されたのは何枚かの書類、ぺらりぺらりと読み進めていけば

「…王国地層の調査報告書か」

しかもきちんと当時の王族と世界政府の署名が入っているものだ。

「これって上に提出した方がいいんでしょうか？」

「…いや、俺が預かっておく、というかなんでこんな重要書類を置きっぱなしにしていつてんだあの王サマは」

しかし読みすすめればきちんと珀鉛の特性や毒性などについてもしっかり書かれており、やはり危険性を政府も王族も知っていたながら国の産業として推進していたことがわかる。

「とりあえず王宮の搜索は殆ど完了しましたので搜索班は馬車の準備に合流します、やはり避難民は多そうですねですか？」

「ああ、まず子供たちは優先せねばならんだらう。」

それから医者や病院関係者、それでも余裕がありそうであれば希望者に乗せよう。

どの道全員連れての脱出は不可能だ、ある程度は自力で何とかしてもらおうしかないだらう…」

とは言え自力で何とかするのは不可能に近いだらうが…すまん。

「馬車の金品はどうされますか？かなりの量がありますが…」

「ある程度纏めておいてくれ、バラ撒きに使うぞ」

「了解しました、こちらは準備ができ次第馬車を率いて街へ向かいま  
す」

「よし、ではこちらは頼んだぞ、こちらクリーク、ジョナサン大佐応答  
してくれ」

『こちらジョナサン、どうかされたかクリーク少将?』

「どこか国がなく医療設備が整ってる島がないかピックアップしてく  
れ」

『避難民の移送ですな、確かに国があればよい顔をしないどころか排  
除しに来る可能性もあるでしょうからなあ…』

わっかかりました、早急に調べます、候補としては国がなくそれなり  
に大きな海軍支部がある島ですな』

「頼んだぞジョナサン大佐、場所によってはかなり時間がかかるかも  
しれんが落ち着いて治療できる場所がなければ話にならんからな。」

そして王宮でどんどんとやる事を片付けていき最終的に数十台の  
馬車が苦しむ国民を乗せるべくクリークと共に街へと向かったの  
だった。

「少年！君も早く馬車に乗りなさい!!」

シスターや学友たちが次々に馬車に乗り込んでいくのを見ている  
と海軍のコートの下に鈍色の胴鎧を装着した大男が話しかけてきた。

「あ、海兵さん!!妹が死にそうなんだ！それにまだ父様と母様もまだ  
来てねえから行けねえよ!!」

「大丈夫だ、妹さんも親御さんも俺達がちゃんと連れ出してやるから  
君は友達と一緒に行きなさい」

「でも…」

逡巡していると

「ロー君！急いで!!馬車をもう出すそうよ!」

「行こうぜロー!」

「そうだよ！ラミちゃんだって海兵さんが連れ出してくれるわよ!!」



とシスターや学友が口々に言う。

「ほら、シスターや友達もそう言ってることだから行きなさい」

そう言って大柄な海兵は俺の背を押したので

「わかりました…ラミを…妹と父様母様をよろしくお願いします!!」

と、大柄な海兵にお礼を言って馬車に向かう。

「子供達はこれで全部?他にはいない?...海兵さん、馬車を出してください!!」

シスターが御者をしてる海兵にそう声をかけると馬車がゆっくり動き出し目に映った病院が遠ざかっていく、この国で生まれて過ごしてきた色々な思い出が頭に浮かんで消えてゆき涙が出てきた。

しかしやはりラミを残してきてよかったのだろうか、一緒にいてやった方が良かったのではなからうか、そう考えるとやはり不安になって来る。

「シスター!みんな!!ごめん、おれやっぱラミが心配だから戻るよ!!」  
みんなにそう声をかけて馬車から飛び降りる、体を地面に強くぶつけたがこれくらいラミの痛みには比べるとどうって事ない。

「ロー君!!戻って!危ないわよ!!」

そう声をあげながら遠ざかる馬車に心の中で謝りながらも来た道を走る、馬車が走り出して時間が経ってしまっているが頑張って走れば戻れる筈だ、そうして元の場所に戻ってきたときにあたりは日も落ち暗くなっていたが目に入ったのは

”周囲を煌々と照らし炎を上げてゴウゴウと燃える病院だった”

なんで?どうして?そんな言葉が頭に浮かび

「ラミ!!父様!!母様あ!!」

そして海兵の言葉が頭に浮かぶ

『大丈夫だ、妹さんも親御さんも俺達がちゃんと連れ出してやるから君は友達と一緒に行きなさい』

そうか…最初からおれ達を助けるつもりなんて無かったんだ、王様が逃げたってみんな言ってたんだから海軍はそれだけしか助ける気なかつたんだ!!

「くっそお…かいぐううううん!!!」

今頃馬車で先に行つたみんなも道中で見た防護服を着たやつに殺されたに違いない！あいつら銃も持つてたし撃ち殺された人も見かけた！！見てろ海軍、おれは生き延びてやるみんなのかたきをとつてやる！！全部ぶつ壊してやる！！！！

脳裏に浮かんだのは悪人面をした海兵の大男、きつとあいつが首謀者だ。

湧き上がる怒りを押し殺して俺は何とかこの場所から逃げるべく踵を返した。

## 不明少年 ドンクリーク

「クリークさん！すみません！私の息子を、こんな感じの帽子をかぶった少年を見かけませんでしたか!？」

トラファルガー先生がそう言つて焦つたように声をかけてきたのは病院の患者や避難する人員を王宮の広場に集め終え順次馬車に乗せている時の事だった。

「ああ、その少年ならシスターや学友たちと一緒に馬車に乗せましたよ？今頃は船に向かつてる途中だと思えますが…」

まだ幼かったが帽子のおかげですぐにローだと気付けたので友達と一緒に馬車に乗せたので彼がドンキホーテファミリーに行くことは無いであろう、原作が変わるかもしれないがそこは何とかするしかないだろう。

「そうですか、よかった…一番娘の事を心配してたのが息子だったのでひよつとしたらまだそのまま残っているかもしれないと思ひまして…」

「病院から連れ出しておいてなんですけど娘さんの容態におかわりはないですか?」

「ああ、今のところ安定してますので大丈夫ですよ。」

しかし何とかして早くこの病気の治療方法を見つけなければ…」

「焦つてはいけませんよトラファルガー先生、とりあえずこの国を脱出する事が先決です。」

水も空気も地面も“珀鉛”だらけのこの場所から離れるだけでも少しは効果がある筈ですから、我々海軍も全力でバックアップ…とは行きませんが個人的に力は貸しますよ」

そう言つて安心させるようにトラファルガー先生ことルークの両肩に手を置く。

海軍が全面的にバックアップと叫ぶのが辛いところであるがなにも支援が無い状態よりはマシだろう…と思いたい。

「…しかし患者全員を助けられないのは医者としては忸怩たる思いで

す」

まだ多くいる病に侵された人々を置いて脱出することに引け目を感じるのはかそうこぼすルーク

「俺も全員避難させる事ができないとあってそう思います…しかしトラファルガー先生、どの道全員を避難させる事はどうあっても不可能です。」

もつと早い段階からわかっていれば、若しくはこの国王、いえ元国王が余計な事さえしなければ周辺国家が攻め入って来る事も無く時間的猶予はあつた筈なんです。

先生もそして我々海軍にもこの状況となつては出来る事はありません、せめて避難させる人間たちだけでも救う努力をすべきです

それにここを離れたがらないものや治るわけがないと諦めているもの達も大勢います、物理的にも心情的にも国民全員は避難させることはできません」

そうだ、どの道馬車も、船もフレバンス国民全員を脱出させる事は出来ないので諦めてもらうほかない。

「そうですね…とにかく私は珀鉛病の治療に全力をつくします。」

そう言っている間に全員が馬車に乗り終えたようでリユードー大佐が避難の準備が完了した事を告げに来たためルークと共に馬車に乗り船へと向かう。

さらばフレバンス王国、そしてすまないフレバンス国民、君たち全員を助ける事は俺にはできない。

時間がなくいろいろと準備が足りないのも理由だがやりすぎて“今”世界政府に目をつけられるわけにはいかねえんだ。

これは完全に俺の都合だから恨むなら恨んでくれて構わん。

そうして避難民を乗せた馬車が軍艦の元まで到着し息子であるローが途中で馬車から飛び降りた事をシスターから聞くのは数時間後のことであつた。

シスターからの報告を受けて息子を探しに行こうとするトラファルガー医師を必死で押し留め変わりに数名の海兵を捜索に向かわせた、冷たいかもしれないが取り敢えず一日だけ探して見つからなかつ

たら諦めて下さいと説得、意気消沈して承諾したトラファルガー医師であるがこのままこのマーマシー王国に留まる事は出来ないのだからなかつたら諦めてもらおうしかない。

避難民をそれぞれ鹵獲した海賊船に振り分け王族は軍艦の貴賓室に通したとの事なので取り敢えず様子を見に、”荷物は何処だ?”と聞かれたので”すみません、他国の兵士が略奪に走った為これだけしか持ってこれませんでした”と持ってきた金品の四割を提示する、まあ残りの六割はこちらで有効活用させて貰おう、避難民達の治療にもお金かかるだろうし。

口から唾を飛ばして怒鳴るフレバンス元国王に対して申し訳ない表情をしてあーうるせー、と心の中で考えつつぺこぺこ頭を下げる。

そしてジョナサン大佐、リユードー大佐と話し合い移送先について幾つかピックアップされた中で話し合い第一候補として割と大きな島であるが国があるわけでは無くあるのは海軍要塞だけ、というグランドライン後半にあるファウス島に移送を決定、ただし勝手に移送するわけにもいかないのでコング元帥に電伝虫で連絡を取り土下座する勢いで頼み込み施設の一部利用許可をなんとかもぎとれたので移送先をファウス島に決定。

リユードー大佐とジョナサン大佐には先に軍艦二隻、鹵獲した海賊船二隻でファウス島に向かってもらいたいこちらは王族をマリソフォードに送り届ける為に一時離脱、後から合流する事になる。

## 治療思案 ドンクリーク

そうして諸々を終えようやく軍艦内の執務室にてようやく一息つくことができた。

「おじさまお疲れ様、コーヒー飲む?」

「ああ、ありがとうロビン」

周りには誰もいないので偽名ではなく名前で呼ぶと何が嬉しいのか軽く笑みを浮かべコーヒーを入れるロビン。

取り敢えず椅子に座り珀鉛病の治療について考える、専門的な治療についてはトラファルガー医師に何とか考えてもらおうとして此方は未来知識を元に出来そうな事を考えるか。

まずはオペオペの実の力で物理的に取り除く、これはオペオペの実が現在何処にあるかわからない為一旦保留。

次に治療出来そうな人間に協力を依頼する、これはベガパンクやDr.くれは、医療大国と名高いドラムの医師達だな。

ついでにDr.インディゴにも協力を要請するか、あの人は植物学が専門だが何かの役に立つかもしれない。

取り敢えず話すだけ話すとして次にホビホビの実にて患者をおもちやに変え病の進行を止める、これはいい案だと思ったのだがよく考えたら患者達の事を忘れてしまう可能性があるんだよなあ…

ついでに言うところもホビホビの実が何処にあるかわからんしな。

そして最初は名案だと思った身体の時を12年戻すモドモドの実。症状悪化前に戻してしまえば治療方法が発見されるまでの時間稼ぎにはいいと思っただが…

12歳以下の人間に能力を使うと存在が消えてしまう為大人はともかく子供には使用できないという事になってしまうのだ。

時間を戻すのはいい考えだと思っただがなあ…あるとすれば時間を操れるトキトキの実とか?原作では聞いた事ないけど。(クリークの原作知識はワノ国前で止まっています)

なんか良い方法無いかなあ?時間を止める…遅らせる…

ん？時間を遅らせる？

「そうか!!ハートオブゴールドがあつた!!」

と、かつて生まれる前に見た記憶の残滓を思い出したのだった。

「どうしたのおじさま？急に大声出したらびっくりするじゃない」

両手にマグカップを持ったまま目を見開いて言うロビンに対し

「ああすまない、びっくりさせてしまったな。」

ロビン、ちよつと聞きたいんだがアルケミって知ってるか？とある島の名前なんだが…

そう聞くとロビンは机の上に持っていたマグカップを置き

「アルケミアルケミ…どつかで見たような…ちよつと待ってねおじさま」

そう言つて壁一面の本棚の方に行くとしばらく見渡し一冊の本を持って戻つてきた。

” 国名大舎 ” と背表紙に書かれた茶色の皮の分厚い本をぱらぱらとめくり

「アルケミ…あつた、錬金術…今で言う金属研究が盛んだつた島ね。」

かつて南の海に存在、今から約200年程前に何らかの要因により島ごと消滅…？何があつたのかしら。

ええつと、そして”ピュアゴールド”の精製に成功したという伝説がある事で有名…”ピュアゴールド”って何かしら？」

そうしてまた本棚に行き今度は古そうな”錬金術について”と書かれた青い色の本を持ってきてパラパラとめくる

「ええつと…あつた、”ピュアゴールド”、かつてアルケミにて作られた事のある金属でいわく”世界を買い取れるほどの莫大な価値”いわく”錬金術の極地”いわく”伝説の金属”…本当にこんなものあるのかな？」

具体的にどういう風に価値があるかわからないし眉唾物っぽいけど…」

そう言つて顎に指を当て考え込むロビンに対し

「その”ピュアゴールド”眉唾物じゃなくちやんと存在するぞ？」

「え？存在するの？」

「ははは、知りたいか？」

「ちよつと待って、もうちよつと調べてみてわからなかったら教えて？」

そう言つて本棚の方に向かい何冊かの本を待つてきて調べ始めたロビン を見ながら考える

”ピュアゴールド”

それは人工的に作られた金属でその金属から発せられる光はなんと”成長をほぼほぼ停滞させる事ができる”という極めて特殊かつ破格の効果を待つ。

オペオペの実の”不老手術”の様に完全な不老ではないがほぼそれに近い効果を持ち劇中では見た目6歳にして御年206歳のロリババアが出てきたほどであるから不老と言つても差し支え無いであろう。

因みにこのロリババアは約200年前当時不治の病を患つておりその病気の進行を止めるために父親が”ピュアゴールド”を精製したがそれを知つた欲深い者達や海賊によつて島は襲撃され少女の母親は死亡、更にダメ押しとして”ピュアゴールド”が大好物な超巨大アンコウ、通称ボンボリ様によつて島ごと食べられてジエンド、これがアルケミ島消失の真相である。

とりあえず今後の動きとしてはまず避難民をファウス島に移送、要塞の一部を使用させてもらい仮設の治療所をなりなんなりを作る。

次に海賊船医達こと医療班とトラファルガー医師、それから可能であれば他の医師達に治療法を探してもらいこちらはピュアゴールドの確保。

ピュアゴールドを確保してしまえば急場は凌げるだろうからそのままトラファルガー医師には治療方法を探してもらおう。

最終手段としてはオペオペの実を使つての治療であるがオペオペの実を探すにしろローがオペオペの実の能力者になるのを待つにしろ手に入るまでは時間がかかるだろうしあの能力は体力を著しく消費する為一度に避難民全員の治療は無理、どの道時間稼ぎは必須であ



ろう。

ただ問題がない訳ではない。

「うーん、やっぱここにがある本だけじゃ殆どわからないなあ…」

”200年前に忽然と消えた伝説の島”、”金属学者ミスキナ・アシエ”、そして彼が生み出したと言われる”ピュアゴールド”

曰く”暗闇の中でも光り輝いていて世界を買い取れるほどの莫大な価値があると言われている”そしてもう一つ”しかしそれを手にした者は身を滅ぼしてきたと言われる”…

今ある範囲でわかったのはこれくらいかな？さてと、じゃあおじさまが知ってる事教えてもらえる？」

流石に諦めた様子でロビンは机の上に色々本を開いたまま聞いてきたのでフレバンスの状況、白鉛病の事、そしてその治療計画の為にピュアゴールドの真価や島喰いである超巨大アンコウことボンボリ様の事を話した。

勿論極秘情報だから絶対に他者に漏らしてはいけないよ？と忠告もしておいたが。

「成長の停滞…確かにそんなものがあれば世界はひっくり返るよねえ…」

ところでおじさまはそのピュアゴールドを探す気みたいだけどそのボンボリ様って何処にいるの？」

…問題はそれである

ピュアゴールドがアルケミにあるのは確定しているのだがそのアルケミを腹の中に収めるボンボリ様の居場所が分からないのだ。劇中ではごく小さなピュアゴールドのカケラでボンボリ様をおびき出したが今現在そんな物は手元に無く劇中で使ったカケラは今はまだまだおそらくボンボリ様の腹の中にいるであろう少女が所持している。

劇中ではその少女がひよんな事でボンボリ様の腹の中から脱出したからこそ出来た手であり今の俺には不可能…ならば探すしか無いだろう、あんまり時間をかけまくるわけにはいかないが幸いにも今の身分は結構偉いので色々と権限はあるから有効利用させてもらおう。

「ロビン、頼みがある」

「あらおじさま、何かしら?」

「海軍書庫の閲覧許可をなんとかしてねじ込むから東西南北の海とグランドライン、それらの海域で共通する話を探し出して欲しい。」

それらの海域で共通してなくても超巨大アンコウの情報を見つけたら教えてくれ。

だが俺の予想が正しければボンボリ様はこの5つの海域を長い時間をかけて回遊している筈だ」

「そうね、そんな特性を持つ生物が一か所にとどまってるとは思え辛いわ。」

でも海軍書庫の閲覧許可って一応機密扱いじゃないかしら?」

「まあ将官以上の承認が必要だな。」

しかし本人しか使えないわけじゃなくて許可を得れば海軍関係者なら利用は可能だ、ロビンは一応民間協力者の民俗学博士、ニコラ・オリヴィエ”だから大丈夫だ。

それに俺は頭使うのが苦手だからな、その点ロビンなら安心してまかせられる、もちろん何かあっても大丈夫なようにシグマにもついて貰うから安心しろ」

「…わかったわ私にまかせてちょうだい、でも護衛がシグマって事はおじさまは別行動かしら?」

「ああ、俺はこの件に関してまずDr. インディゴに協力を頼むのに合わせて他の医師達にも協力を仰がねばならんからな。」

そうして話し合いを終え開けて翌朝、ローの搜索の期限が来た為搜索は打ち切り、トラファルガー医師は涙を浮かべながら苦渋の決断を下しジョナサン、リユードー両大佐と共に4隻の船でファウス島は出航、こちらは王族を送り届けるという面倒な任務があるためマリージョアへ向かった。

## 訓練進捗 ドンクリークさん

フレバンスを発つて数週間、ようやく船はマリージョアに到着したのでフレバンス元国王をマリージョアにて世界政府の役人に引き渡しそのついでに元国王が国の権利を周辺国家に売り渡した事とそれにより戦争状態になった事をちくつておく。

そしてこちらはそのままマリージョアを突っ切つてマリンプォードへ向かいコング元帥に今回の件を報告し書庫の閲覧許可を貰いに。王族を怒鳴りつけた事や避難民二百人程の脱出については

”：こちらで何とかしておく、避難民については世界政府に報告する必要は無いだろう”

との事だったのでこの件は後で箱口令を敷く事となった。

そしてゼファアのおっさんのところで訓練をしているシグマ、カフウ、ギンの元へ向かいかくかくしかじかうんぬんかんぬんとゼファアのおっさんに説明、シグマとカフウの訓練を中断し書庫にいる間、ロビンの護衛についてもらう。

ギンが”オレも手伝いますか?”と聞いてきたので”大丈夫だ、お前はゼファア先生の特訓を頑張つてクリアしてくれ”と10歳となり背も伸びたギンの頭をワシワシと撫でながら言う”とシグマ達の方に向かい”シグマ、カフウ、ロビンねーちゃんを頼むぞ”と伝えていた。ゼファアのおっさんことゼファア先生に進捗を聞いたところ

「この3年間で座学と基礎は固めた、体力づくりも勿論だ。後は今からの2年で戦闘技術を教え込む、後で本人にも聞くが、どういう風に鍛えて欲しい?」

などと言われたので

「おっさんにまかせる、若しくはギンの好きにさせてやってくれ。おっさんはプロだからな、下手に素人が口出すよかいだろう」

と言うと

「おっさんじゃねえ、ゼファア先生だ」

と黒腕の異名に恥じぬ武装色にて黒く染まった腕でゲンコツされた。

ちよつと、普通に殴つたら硬いからつてわざわざ武装硬化しなくても……とは思つたが口には出さないでおく。

そうしてゼファー先生達と別れ海軍書庫に、書庫の管理人に話を通してロビン、シグマ、カフウを入れてもらいこちらは単身、丁度シャボンデイ諸島行き船があつた為乗せてもらい半日程で到着、御礼を言つてシャボンデイ諸島の土を踏んだ。

ついた時間は既に夕方になっていたそのまま泊まつて行きますか？と聞かれたが”少し用事を済ませたいのでな、先に片付けてくる”海軍コートを脱ぎ無法地帯へ足を踏み入れ目指すは12番GRへと向かう。

12番GRの隠れ家のドアを開ければ少し鼻につく異臭

「ドクター！Dr. インディゴ!!」

「ウルサイぞキサマ！怒鳴らなくても聞こえている!!」

コツコツと足音を立て部屋の奥から出てきたのは一人のピエロ……

「待て、そのメイクは目立つからやめてくれて言った筈だが……」

「ピーロピロピロピロ、ワタシのアイディンティティーだ！今更辞めはせんわ！」

元氣そうなDr. インディゴに頭を抑えつつもかくかくしかじかまるまるうまうま、とばかりにフレバンスでの件を説明していく。

「…なるほど、珀鉛か。たしかフレバンスだったな、ただの鉛でさえ人体には毒となるのだからそれで中毒になれど不思議はないダロウ」

Dr. インディゴにフレバンスの一件について話すとそういう風に言われた。

「治療は可能か？」

「ウウム、実際患者を見てみないと何とも言えんダロウ。」

「というか何故その件をワタシに持ってきた、ワタシは自分が天才だと自負しているが一応科学者ダゾ？しかも植物分野のな」

と、当たり前な事を聞かれたのでそれに対し

「いやいや、使える手はうつといた方がいいだろう？」

珀鉛病はまだ治療法が見つかつていない上に現状治療法を探しているのは数名の医者だけだ、他の意見もあつた方がいいのは道理だと

思うが？」

と返しておく

「フム、それも道理か。しかし他の医者やそうだな、鉱物学者なんかがいれば珀鉛の特性もわかるダロウ。

何はともあれ実際その珀鉛も患者も見てみなければ分かんナ」

うーん鉱物学者ねえ：そんな伝手ないしなあ、後で誰かいないかセングク大将とかに聞いてみるか。

「とりあえず明日の出立を予定してるから準備だけ済ましておいてくれ、俺は今からテゾーロのところに顔出してくるから」

「ワカツタ、まあ天才学者のワタシが手伝ってやるのだから大船に乗ったつもりでいろ」

自信満々に言うインディゴに対して凄い自負だなと思いつつその場を離れ今度はテゾーロの元へ。

到着したのは無法地帯にある隠れ家では無く前々から作っていた小規模な港、そこにある二階建ての建物。

辺りは既にもう暗くなっておりついでに泊めてもらうかなどと考えつつ”ステラ・プロダクション”と書かれた看板を見ながら扉をノックすると奥から出てきたのは

「あらクリークさん、いらっしやいテゾーロなら上の部屋にいますよ？」

豊かな金髪に優しそうな表情をした女性、ステラさんが出てきた。

かく言う彼女はこの港が完成してテゾーロが無法地帯からこちらへ引越してきたのを機に去年くらいからマリolfォードとシャボンディを行き来しておりマリolfォードではサカズキ夫婦のところの家政婦を、シャボンディではテゾーロの手伝い、主に事務仕事を行なっている。

軽く挨拶をしてそのままテゾーロがいる二階に上がり軽くノックをし

「俺だ、入るぞ？」

とドアを開ければそこには高く積まれた書類の山。

「ああ、クリークか。ちよつと散らかってるが今回はどんな厄介事

持ってきた?」

と机の上の書類が喋った、もとい書類の向こう側からテゾーロの声。

「別に厄介ごとじゃねえよ」

と前置きしてフレバンスの状況とそれでD r. インディゴをしばらく連れて行くという事を伝えた。

「なるほど了解した、ちなみにここの本格稼働はまだしばらくかかりそうだ。

船もそうだし未だ看板が見つからん、誰かいい人材しらねえか?」

うーん、誰かいたかなあ…頭の中で原作で出てきたキャラを思い浮かべてると

「ぶるぶるぶるぶる、ぶるぶるぶるぶる」

とバックに入れている電伝虫が鳴き出したので一言断って出てみれば

「はいこちらクリーク…はあ!?! マリージョアが襲撃されたあ!?!?」

驚愕の知らせが飛び込んできた。

## 聖地襲撃 ドンクリーク

時刻は少し遡る

「センゴク大将！マリージョアから緊急応援要請です！！マリージョアが何者かによって襲撃されています！！」

センゴクがいつものように書類仕事を終え外もだいぶ暗くなっていた為そろそろ夕食にでもするか、などと考えているとその知らせは入ってきた。

「マリージョアに襲撃だ！？何があった！！」

”聖地”マリージョアの襲撃というあつてはならない事態に思わず語尾が荒くなってしまう。

「状況は不明！何者かが次から次に奴隷達を解放しており勢力は依然増大中！火災も多数発生しており手が足りないそうです！」

”赤い港（レッドポート）”の人間は何をしていた！みすみす襲撃者を通じたというのか！！」

そもそもマリージョアはレッドラインの両側にあり嚴重な警備がある”赤い港（レッドポート）”を通りその上でシャボン玉で飛ぶ「ボンドラ」と呼ばれるエレベーターを使う事でしか入る事はできない。

「それが…その時間帯ボンドラ（エレベーター）を利用したものはおらず”赤い大陸（レッドライン）”をよじ登ってきたと考えられます！！」

しかし襲撃者はそれらを通る事なく直接雲に届くほどの断崖絶壁をよじ登ってきたというのだから驚きもする。

「な…馬鹿な！！レッドラインの標高は6000m以上はあるんだぞ！！それを素手でよじ登ってきたというのか！！」

「しかしそれ以外考えられません！どうされますか？」

少しだけ考え矢継ぎ早に指示を出す、自分以外の大将は不在の為中将を指揮官に据えとにかく何人かわかせねばならんだろう。

「…とにかく付近の海兵を向かわせろ！ビッグジェ大将もネラル大将も今はいないか…ボルサリーノ中将を筆頭に月歩を使えるもので第一陣を編成させろ！それから付近の海域の軍艦をレッドポートに向

かわせる、第二陣が編成でき次第本部からも軍艦を出す!!」

「近隣の支部にも応援を要請しますか？」

「そうだな、近隣の支部に将官クラス以上を応援に出すように連絡しろ！私は第二陣の編成を行う、頼んだぞ!!」

「了解しました!!」

そして舞台は再びシャボンディへ

「テゾーロ、マリージョアが襲撃された」

「…という事は例の件をいよいよやるのか？」

手伝いはいるか？一応月歩は使えるが」

「…すまん、思ってたより早く襲撃が起こったから手が足らん。何羽かフィッシャー・タイガーにつけとけばよかったな」

原作でのマリージョア襲撃がいつか覚えてなかったため悠長に構えていたがこんな事ならカフウの配下に見張らせておけばよかったなと思うも

「いやいや、今更考えても後の祭りじゃねえか。俺は何をすればいい？例の件の手伝いか？」

「いや、お前は」クリーク少将から指示を受けた公認海賊」として動いてくれ。

逃げ出した奴隷達を纏めて脱出の手伝いを、海兵に何か言われたら公認メダルと俺の名前を使え、例の件は俺一人で片付けてくるさ。」

そう言いながら床板を剥がし次々に全身を覆うスーツや防弾チョッキ、コンバットブーツやゴテゴテした小型の銃やDr.インデイゴに依頼していたものを取り出し装備を整えていく。

「…気をつけてくれよ？あんたが今捕まったら悲しむやつは多いんだからな」

「まあ見てろ、上手くやるさ」

そう言つて”黒地に白い髑髏が書かれた覆面”を引き下ろした。

闇夜に紛れて月歩を使いマリージョアへ、いつもなら砲撃もかくやと言わんばかりの足音も最小限に抑えて突き進む。

そのまま騒ぎとなつているマリージョアへ潜入し道中で会う人々は奴隷であれば無言で首輪を外し港の方を指差してそのまま離れ、一



人きりで右往左往してる天竜人がいれば首筋をトンつとやって気絶させた上で”処置”を施しそのまま道の端に放置。

ちなみにこの”処置”というのは別に殺す訳ではなくリトルガーデンやメルヴィユにて材料を集めDr. インディゴに依頼して作ってもらった”とある薬剤”をこれまたDr. インディゴに作ってもらった小型の無針型アンプルガンで首筋にチクツと、これだけである。

そうして護衛が大勢ついた天竜人や海兵は隠れてやり過ぎつつやってきたのは聖地中央に聳える”パンゲア城”、ここには何かヤベー国宝があるらしいが詳細は不明。

今回の騒ぎに乗じて侵入を考えていたが

「……りやあ侵入はやめといった方が無難か」

城の周りは海兵や銃を持った世界政府の役人達が厳戒態勢を敷いておりやろうと思えば侵入できない事はないが元々”可能であれば”程度の事だったので侵入は諦める。

危ない橋を渡るのもイヤだし元々今回この襲撃に合わせてマリ―ジョアに来たのは出来るだけ多くの天竜人へ”処置”を行う為なので城への侵入は二の次なのだ。

そうして建物の上に登り単独の天竜人がいれば”処置”を行い：とやっていたが

「思ったより天竜人が少ないな……？」

未だ十数人しか”処置”を行なっていないが護衛を大勢引き連れていた天竜人を合わせてもそこまで多くない。

落ち着いて見聞色の覇気にて周囲を探ってみれば

「……ちっ、屋敷の中で閉じ籠ってる奴等がかなりの数いるか……まあ穴熊決められてもこちらは困るので炙り出すがな」

愚鈍でも危険が及ばざらんと判断するのか今回の襲撃に際して屋敷を脱出、避難するよりも屋敷の防備を頼りに助けが来るまで待つべきだと考えたのだろう。とは言え閉じ籠っていられるのは困るので腰のポーチから円筒状の物体を取り出しピンを抜き屋敷に向かっ

て

「ほいっとな」

放り投げればゴウツと音がしそうな勢いで投げた筒から炎が吹き出しあつという間に屋敷に燃えうつった。

これは技術班謹製のフレイムグレネードをD r・インディゴに改造してもらったもので主に証拠隠滅ができるよう外装の素材変更と中の薬剤の比率を弄り炎の勢いを強化したものである。しばらくすると思った通り天竜人が慌てたように屋敷の中から逃げ出してきたので首筋をトンつと叩き処置を終える。

よし、この調子でどんどんやっていくかと思って顔を上げたその矢先、視線を感じてそちらを見れば唾然とした顔でこちらを見る赤い色をしたかなり大柄な魚人。

げ、フィツシャータイガーじゃねえか！なんでここに…いや襲撃しにきてる張本人だしいて当然っちゃ当然だよな…

クリークはマリージョア襲撃の主犯と遭遇したのだった。

## 鈍熊暗躍 ドンクリーク

フィッシュヤー・タイガーは警戒した様子で

「なにもんだてめえ…何の用か知らんが見られたからには黙らせてもらうぞおつ!! 鮫瓦正拳!」

踏み込んでの強力な一撃しかも覇気を纏ってやがるし!

「ちよつとは話を聞けよ!? 拳砲!!」

思わず素に戻ってしまい突っ込むもそのまま相手に対し拳砲で迎え撃つ。

両者の正拳突き同士が激突、双方が弾かれたように距離をとり

「火華カカト落とし!!」

フィッシュヤー・タイガーは縦に回転してから威力を底上げた力カト落としを

「打ち上げ判子おつ!!」

指銃の速度での踏みつけ（スタンプ）その変形で下からの打ち上げ蹴りで迎え撃つ

「てめえ…いや待て、その覆面手配書で見たな。確か四千万の賞金首だったか? こんなどこに何の用だ、本当におれを捕らえに来たってんならまだ抵抗させてもらおう…」

と軽く構えたので

「待て…だから話を聞いてくれと言ってるだろう、別に戦いに来たわけでは無い。」

声を低くしてそう言つて軽く両手をあげる。

「今回ここに来たのは奴隷達の解放と天竜人の排除が目的だ、貴様を捕らえる意図は無い」

重ねてそう言えば納得したのか

「…偶然おれの計画とお前の計画が被ったとは考えづれえな、おれの計画を何処で知った?」

「別に貴様の計画を知つてこちらも襲撃を行った訳では無い、こちらには独自の情報網があつてな、マリージョアが襲撃された事を掴んだのでな便乗させてもらったただけだ」

「ちつ…くえねえ野郎だ、まあいい目的が奴隷解放って言うのなら利害は一致してるな」

「因みに天竜人からは”逃げ出した奴隷なんぞどうでもいいから自分を助ける”という命令が出てる、海軍はこれを言質に奴隷の救出を行ってる、マリージョア側の港だ。」

と、フィツシャー・タイガーに対し空いた時間に連絡を取ってテゾーロに聞いた情報を流しておく。

「そうか、情報感謝する」

そう言うフィツシャー・タイガーは再び奴隷達を救うべく走り出した。

さて、此方も続ききつと考えつつ見聞色にて周囲を探り天竜人がいる屋敷を見つけたらばフレイムグレンードを投げ入れ出てきたところを気絶させて”処置”した上で道の端に放置、途中で放火現場や襟首を掴んでる姿を海兵に見つかった為逃げ回る羽目になったが五百人分あった薬剤はほぼ無くなりかけていたのでこちらで離脱する事にした。

とにかくマリージョアから遠く離れて装備一式を隠し下に着たいいつもの服の上から海軍コートを羽織り月歩で今度は指揮をとっているボルサリーノの元へ。

さて、テゾーロはうまくやつてるかな？

そして日は聖地の襲撃から数日がたち

聖地マリージョア パンゲア城 ”権力の間”

ようやく事態も収束してきたその頃、そこには世界政府の最高権力を持つ五人、通称”五老星”が集結していた。

が、いつもは世界の舵を取るものとして泰然とした姿を見せているが何故か今は誰も彼も疲れた様な表情をしており余程の事があったであろう事が伺える。

「どうしたもの…」

「奴隷達の解放というのはまあ良い、いや良くはなからうが」

「まずあちらこちらで起きた火災で焼かれた邸宅が問題だ、一応この城を一部解放して世界貴族を住まわしているが早急に建て直しを図

らねばならんだろう」

「火付けの犯人も例の男らしい、やはり名前も公開した上での指名手配に切り替えるべきでは？」

「そうだな、例の覆面が三大海賊の一角“白ひげ”のところの者である可能性がある為あまり刺激したくなかったがそうも言ってもらえん  
だろう」

「それから例の魚人の冒険家も早急に手配すべきだろう、しかしこの件はやはり共謀した上での事か？」

「だろうな、単独犯にしてはあまりにも時期が一致しすぎている。

フィツシャー・タイガーが奴隷の解放を、ティーチが世界貴族への攻撃をと役割分担して二人で計画を立てたと見るのが自然だろう」

「フィツシャー・タイガーは新たに指名手配に、ティーチは懸賞金をあげた上で名前を公開という事で海軍に指令を下すか。

しかし今はそれよりも世界貴族達だが……」

「医者の話だとやはり未知の病気らしい、性質的には最初の症状はインフルエンザに似て高熱の発生や身体の気怠さ、関節の痛みなどだがその後、身体に浮かぶ緑の痣や痣ができた場所が壊死するとあって治療は未だ不明だ。

既に数十人の世界貴族が発症している、疫病なのかどうかさえまだわからん故未だ他の者が潜伏期間であるならパンデミックにもなりかねん」

「やはりこれは意図的にばら撒かれたものだと考えられるか？」

「現状では不明としか言いようが無い、その可能性もあるが長い間保護されてきた世界貴族故に耐性：免疫を持つてなかったという可能性もあり得るだろう」

「とにかく今は医者を集めて治療法を探るしかなかろう……」

そんな会話が数日前にマリージョアでなされていたとは露知らず、俺は新しく届いた手配書の束をペラリペラリと捲りながら眺めているとあるところで手が止まった。

「派手にやったのう、おんしは一体何をしたんじゃ？」

「うお、サカズキかびつくりさせるな。それより何の事だ？俺は見覚

えのある写真だったから手が止まったただけだぞ？」

「…まあええわい、しかし覆面を被った写真でこの額にせいとは上も無茶をいうもんじゃな」

「ああ、絶対名前を騙る奴がでてくるだろう額が額だけにな」

そう話す二人の目に写っていたのは一枚の手配書

” 髑髏覆面 ティーチ ”

懸賞金 3億9000万ベリ

## 四海制覇 ドンクリークさん

「それよかおんしは天竜人共に発生しとる病気は聞いちよるか？」

「ああ、日頃の行いに対する天罰だと噂になってるからな。治療法は未だ不明、病状は悪化の一途を辿ってるらしいな。」

「高熱の発生から体内のあちこちに炎症を引き起こした上で体表、体内の至る所に緑の斑点が発生し壊死。未だに死者は出とらんが予断は許されん状況じゃあいう事だ、わしはアレらがどうなろうが構わんがの」

当たり前だ、この病気はリトルガーデンから採取してきたケスチアやメルヴィユから持ってきたダフトグリーン、更に他に色々と合わせて作られたDr.インディゴ特性の人工病疫である。

一日から一ヶ月の潜伏期間を持ち発症した暁には高熱や炎症で地獄の苦しみを味わった挙句衰弱や高熱で一ヶ月ほどで死に至る。もちろん発症は直接薬剤を注射した場合であり感染は無いので天竜人以外に広まる事はない。

その名も”ギフト・グリーン”

俺から天竜人に対してとっておきの贈り物だ、喜んでくれるかな？

「まあ俺も同意見だ、まあ何としても治療法を見つけるように言われているが精々医者を集めるくらいしかできんがな」

「全くじゃき、まあ話は置いておくがわしはおんしを呼びにきたんじゃ。センゴク大将がおんしを呼んじよるけえさつきといかんかい」  
む？何かあったか？

などと思いつつサカズキと別れセンゴク大将の執務室へ

「おお、わざわざ呼び立ててすまん。マリージュアの襲撃に対する後始末ご苦労、お前を呼んだのは今後の方針について話しておくのとお主が前々から提案しておった件に対してだ。」

今回のマリージュア襲撃の責任を取る形でビッグジェ大将とネラル大将の二人が辞任、そしてコング元帥が全軍総帥として上にあがり私が海軍元帥として昇進、そして空いた大将の席にクザン、サカズキ、ボルサリーノに着任してもらおう新体制に移行する話になっている。

そこでお前にも中将に昇進する話が来ているがどうする？」

中将か…たしかに権限は増えるが今はまだ色々と仕事如山積みだからなあ…

「いえー自分はまだ未熟ですので中将としての責任を負う自信がありません！

ですので今回の昇進は誠に申し訳ないのですがお断りさせていただきます！」

「ふむ…まあ良い、それからお前が前々から提案していた計画”四海制覇”についてだが今回の新体制への移行に併せてこれを採用する事になったので対象者に対しての説明を頼みたい」

「長い間採用がなかったのでてっきり流れたのかと思ってたであります…」

”四海制覇”

数年前から提案していた人事案がようやく採用とあって半ば無理だろうと思っただけに驚きもひとしおである。

これは東西南北4つの海にそれぞれある海軍支部とグランドラインにある海軍本部及びグランドライン支部という戦力格差などは正や本部に業務が集中している状態の改善を目的とした人事案である。

とりあえず代表となる人員は既に招集をかけているとの事だったので一度資料を取りに自室に戻り海軍本部将官専用会議室へと向かう。

「さて、今回は集まって頂き感謝する、今回は僭越ながら”海軍独立遊撃隊”総司令を務めさせていたでいる私が説明させてもらう。

まず今回集まってもらったのは海軍の組織改革についてだ。

今の海軍は海軍本部とグランドライン支部、そして4つの海に散らばる支部という構造だ。

今回の組織改革、通称”四海制覇”はまず海軍の中心となる海軍本部の移設、そして4つの海に散らばる第1支部から第2・1・3支部、これらをそれぞれ”東方方面軍”、”西方方面軍”、”南方方面軍”、”北方方面軍”の4つに再編成、其々に”方面軍総司令本部”を設置す



る。

そしてここに集まってもらった4名にはそのトップとして就任してもらおう。

知つての通り支部の最高階級は“准将”であり今回はその制限を解放、支部階級の最高位を少将としそれぞれ4つの海で“方面軍総司令”として着任、そしてその下に各方面軍がつく形になる。

ここまでで何か質問は？…ないようだな。

そしてかつてアスカ島にあった“海軍道場”を復活、ここを“教育局”の管轄とし海兵の養成施設として各方面軍には定期的にここで研修を行ってもらおう。

これらの狙いはまず本部の負担軽減、これは各支部からの陳情や支部の手に負えない件の処理など本部に負担が一極集中している形の是正。

次に本部と支部での戦力格差の是正、グランドラインの海兵と各支部の海兵では同階級でも戦力に3階級以上の差があると言われ海賊に支部海兵が軽んじていられている状況だ。

そして最後に本部の移設だがこれはレッドライン両側にあるレッドポート、ここに海軍本部の移設を計画している、最もこれはまだ許可が降りてないので現状ではいつになるか不明だが。

これには様々な狙いがあるがわかりやすいのは本部からグランドライン両側へ迅速な移動を可能とし各事件の対応に当たる為である。

とりあえず辞令は諸君らも知つての通り大規模な人事異動が行われるのでそれに合わせて追って出すから心構えだけしておいてくれ、各方面軍司令本部については暫くは支部を使用してもらって方面軍総司令部の完成を待つ形になる。

とりあえず以上だ、何か質問は？」

とりあえず“四海制覇”の概要についてステンレス准将、モザンビア准将、メイナード准将、バスターイーユ准将の4名に説明しこの4人を少将として昇進させ

まずメイナード少将、彼は准将になってまだ数年程なので最も平均

懸賞金額が低い東の海に東方方面軍総司令官としてE1～E50支部の指揮を担当

次にモザンビア少将、彼は真面目でしっかりと実務をこなす為北の海、西の海と比べるとまだ平和な南方方面軍総司令官としてS1～S50支部の指揮を

バステューユ少将は武闘派として知られており主に戦闘面を期待して五大ファミリーが牛耳る西の海に西方方面軍総司令官としてW1～W50支部を

そして一番厄介な北の海には准将としての歴が長く元々少将に昇進予定であった海軍でも上位に位置する戦力を持つステンレス少将を北方方面軍総司令官としてN1～N50支部を担当してもらおう事になる。

そうして海軍本部、東方本部、西方本部、南方本部、北方本部それぞれをカバーする形で”海軍独立遊撃隊”が動く形に持つて行く試みである。

## 若き黄金 ドンクリークさん

例のマリージョア襲撃に際して本来なら翌日ファウス島に向かう筈だったのが伸びてようやく出立となった。

ついでに新たに元帥として就任したセンゴク元帥から：：というか世界政府からルブニール王国に手紙を届けてこいとこの指示も出た。世界中から医者を集めて例の天竜人に蔓延してる病気の治療に充てさせるそうだ。

：とりあえずシャボンディにDr. インディゴを迎えに行つて先にルブニール王国に向かつてからファウス島に向かうか

シャボンディへ到着しDr. インディゴの世話をしていたテゾーロにも一言言つておこうとステラ・プロダクションのドアを叩けば

「はい、どちら様でしょうか：？」

初めて見る顔の黒髪の美少女：誰だ？新しく雇つたのだからと思うも何故か警戒されており、心当たりも無いがとりあえず

「テゾーロはいるか？クリークが来たと伝えてくれれば良い」

と告げればこちらに視線を向けたままソロソロと下がりバツと二階に駆け上がった。変わった従業員雇つたなあ、などと考えているとテゾーロが階段から降りてきて

「よおクリーク、派手にやったじゃねえか」

と快活とした声

「ああ、先の件では手間かけさせたな。解放奴隷達の件は片付いたか？」

「ああ、自力で逃げた奴隷もいるから解放された奴隷全員ではないが何割かは故郷へ返す予定になっている、これもあんたが持ってきてくれた纏まった金のおかげだな」

：とりあえずフレバンス王国の王宮で拾った金だとは言わないでおこう

「そーういや変わった従業員雇つたみたいだな、かなり俺の事を警戒してたようだが：」

「ん？ああすまねえな、彼女ら三人も解放奴隷で故郷に送り返す予定

なんだがいかんせん遠くてな。

今俺の知り合いに：レイさんって言うんだが伝手を辿ってもらってんだよ」

待って、今聞き捨てならん名前が：

「レイさん…？」

「ああ、クリークにはまだ話してなかったか？ 無法地帯に居を構えててな、ギャンブル好きなのが玉に瑕だが腕がいいコーティング職人をやってる人だよ」

「やっぱいい！ コーティング職人のレイさんってシルバース・レイリーじゃねえか！ 冥王！ 若しくは海賊王の右腕！！」

「お前…レイさんと知り合いなのか…」

「お？ 知ってるのか？ まあそれであの三姉妹を送り届ける予定でそれまでうちに置いてるんだよ」

と親指で二階を指す、ふと二階の方を見やればさっきの黒髪と金髪、緑髪…

「因みにだが彼女らはどこまで送り届けるんだ？」

「ああ、普通のとこだったら手っ取り早かったんだがなにしろアマゾン・リリーだからなあ…」

「うおお流石将来”新世界の怪物”とも称される映画ラスボス、持ってやがるなあ…ロジャー海賊団副船長に加え未来の七武海である海賊女帝ことボア・ハンコックを合わせたボア三姉妹とも繋がりを持つてるとは。」

「まあ確かにアマゾン・リリーとなるとそう簡単にいかねえか。」

と、そうだった俺とDr. インディゴは暫くここを離れるからこっちの事はお前に任せる、何かあったらこの電伝虫に連絡をくれ。」

そう言っつて連絡先が書かれたメモを渡す

「はっ、まあ任せとけよ、プロダクシヨンの方もようやくアプローチかけてた舞台女優からokが貰えたし行き場が無い解放奴隷でうちで働きたいって言ってる奴もいる、それに船も発注が完了してるからこっちの事は問題ねえよ。」

「まあそこらへんは信用してるからな、じゃあ後は頼んだぞ」

そう言つてテゾーロ、ボア三姉妹に軽く手を振つてDr. インディゴの元へ向かった。

そして数日が経ち

「ハーハツハツハツ！海兵共おつ!!俺を誰だと思つてやがる!この手配書を見るおつ!!3億9000万の男!髑髏覆面のティーチとは俺の事だあ!殺されたくなければ大人しくしろぐはあああああつ!!」

髑髏を掲げた船が急に横付けしてきて覆面を付けた男が乗り込んでくるなり手配書を見せびらかして名乗りを上げ、そしてそれをぶん殴る。

「:全くもつてこれで何回目だ?」

「今ので10を超えましたね」

マリージョア襲撃後の色々が片付きようやくファウス島へ出立、その前に北の海にあるルブニール王国へ医者者の招集を知らせる手紙を届けに行く道中

「おい、ティーチとやら俺は忙しいんだ、お前が世界政府の役人に暴行を加え天竜人に暴行を加え天竜人の屋敷に放火してマリージョアに襲撃をかけて世界政府に喧嘩を売つたティーチで間違いねえな?」

ちなみにインペルダウン最下層行きだ、喜べ」

「!」

「!」

「:ごめんなさい」

とりあえずもう一発ぶん殴り気絶させ

「他のと同じくふんじばつて船倉にぶちこんどけ!俺は艦長室に戻るから何かあつたら連絡しろ」

乗組員の”了解しました!!”との声を背に受けながらロビンが居る艦長室に戻る。

「おかえりおじさま、またニセモノ?」

ドサリと椅子に腰を下ろしそのまま背もたれにぐたりと寄りかかる。

「ああ、全く覆面で高額賞金かけたらこうなるってわかりきつてただろうに世界政府の奴等めゴリ押ししやがって:」

「大丈夫？ コーヒー淹れる？」

「ああ、愚痴ですまん。それよりさっきの説明の続きを頼む」

「わかったわ、さっき言ったように”ぼんぼり様”の名前は南の海の何個かの民間伝承の中に存在したわ。

その伝承が確認されたところに印をつけるところ」

机の上に広げられた地図にバツテンを書き加えて行くロビン

「そしてこの点同士を繋げれば…」

「ふむ、レッドライン近くのカームベルトから反対側のレッドラインのカームベルト…半円を書いているな」

「そこから更に調べたわ、残念ながらぼんぼり様の名前は他に見当たらなかったけど”島喰い伝説”その中でもぼんぼり様の仕事と思しきものが確認されたのが…」

そう言つてばばっ！と残りの3つの海にバツテンを書き加えていき

「ふむ…他の海でも半円上というか東、南の海と西、北の海でそれぞれ円を描いているのか」

「ええ、おじさまが言つてた通り広い範囲を長い時間をかけて回遊していると考えられるわ。」

私が考えるにこのぼんぼり様は単一種、しかもぼんぼり様は魚類…海王類になるのかしら？だからレッドラインを抜けることなんて造作も無い筈よ？」

「そうか、魚人島があるレッドラインの大穴を中心として8の字を描きながら回遊してるわけか！」

「だから捕捉できるとしたら魚人島の可能性が高いわね、どうかしら私の調べ物は？」

「ああ…よくやってくれたロビン！」

そう言つて頭をワシワシと撫でてやれば

「えへへへへへ」

目を細め嬉しそうに笑うロビンの姿があった。

## 緑髪少女　ドンクリークさん

偽ティーチを含む海賊の襲撃は何度もあったもののなんとか無事にルブニール王国に到着、ロビンは町中を見たいと言うので待ち合わせをして町に、Dr. インディゴは声はかけたが”白鉛病”についてレポートを読み込んでいたので部屋に籠りきりそして俺はルブニール国王に世界政府からの手紙を届けに。

そうして手紙を無事に渡し口頭で色々質問を受け答えセンゴク元帥に頼まれてた用事はこれで終わり、さっさとファウス島へ向かおうとロビンとの待ち合わせ場所に着いてみれば

「あら、早かったわねおじさま。」

「…この人が貴方が言ってた人？」

長い髪を白く染めてポニーテールにした変装ロビンこと”ニコラ・オリヴィエ”とその傍らに緑の髪をした女性…というか少女、年の頃はロビンと同じくらいか？

「ロビ…オリヴィエ、彼女は？」

「紹介するわ、彼女はモネ。私を脅してお金と食料を手に入れようとした強盗よ？」

「え、そんな言い方したら…」

時は少し遡る

ロビンの町中を見て回っているとふと視線を感じたさりげなく周囲を見回したが視線の送り主は見当たらず。

素性がバレた？いえ、でもプロなら気取られるような事はしない筈…後でおじさまから怒られるかもしれないけどおびき出して正体を確かめてしましましょう。もし世界政府の追手だったとしても逃げる事くらいは出来るし普通の役人であればノックアウトできるだろうし。

そう考えてふと路地裏に入れば案の定人が居ないあたりで

「…この貴方止まって」

振り返ってみれば年の頃は自分と同じくらいだろうか？緑色で肩までくらいの髪を持つ薄汚れた少女がおりその手にはアイスピック

が握られていた。

「あら、私になにか用なの？」

素性がバレて世界政府の追手がかかったと言うわけではなくただの物盗りだった事に安堵する。

「大人しくお金と食べ物を出しなさい、命までは取らないわ」

どうしようかしら…おじさまから鍛えられてるし簡単に制圧できるけども…

「食べ物とお金ならあげるわよ、それより少し話さない？」

「お金と食べ物を足元に置いてここから離れなさい、二度は言わないわ」

やっぱり先に拘束して話を聞こうかしら

「わかったわ…」

そう言つてバックを地面に置こうと屈む…フリをして緑髪の少女に急接近、万が一を考え悪魔の実の能力は使わない、そのままアイスピックを持った右手首を左手で掴んで右手は相手の襟を掴んでそのまま

「椿落とし!!」

おじさまから教わった体術を繰り出す。

これは相手の手首と首を掴んだまま背を向けそのまま跳ね上げて地面に叩きつける技である、おじさまは柔術とか言ってたけど。

「カツ…ハツ…」

背中から地面に強かに打ちつけられた少女は中々にダメージがあつたようで息を吐き出し握っていたアイスピックも手放しているように

そのままこれまたおじさまから教わった腕ひしぎという技を追撃チャンスと言わんばかりに繰り出して相手の肘関節を極める。

「さて、大人しくするって言うならこの手を放すけどどうする？」

「わかった！わかったから手を離して!!」

よっぽど痛かったのか半ば悲鳴のような声を上げる少女

さて、まずはお話しだけでも聞いてみましょうかしら？



事の次第を聞いてまず思ったのは

：ロビンに手を出すなんて無謀な事したなあというものだった。

ロビンは原作では主に”自分の身体の一部を場所を問わず生やす事ができる”というハナハナの能力で戦闘を行なっていたがうちのロビンはそれに加えて主に投げ技や関節技を使用した徒手空拳を俺との修行によつて会得している。

一人でもやっていけるように心は傷んだが割とスパルタでやったのでそんじよそこらの大人にも引けはとらない筈だ。

それでモネの事情だがロビンが聞き出したところによると母親はある日彼女と妹を残して蒸発、父親は安酒で飲んだくれ時折暴力を振るい妹はまだ幼くモネがなんとかしてお金を稼ぐしか無く今回の凶行に及んだという。因みに狙った理由は身綺麗で大人しそうで少女一人だったからという理由だったらしい。

ふーむ、どうしたものか、話を聞いて考える。

ロビンからはなんとかできない？とアイコンタクトが飛んできているがモネつてどつかで聞いたんだよなあ…ネモの間違い？

：ああモネつていたな、でもハーピーじゃなかったっけ？見る限りは普通の人間だけど悪魔の実の能力だっけ？

「よし、嬢ちゃんはここを出るつもりはあるか？」

と膝をついてモネに聞けば

「妹も一緒なら出るけど行き場所なんてないし…」

と答えが返ってくる。

「安心しろ、実はやってもらいたい事があってな…」

そうしてグランドラインへ行く事やフレバンスの事、”白鉛病”の事などを小声でゴニョゴニョと話す

「…でも父が反対すると思うわ、あの借金もあるし私が逃げたと知ったら絶対追いかけてくる」

うわあ…ダメ親じゃねえか…とは言え追ってくる手段があるとは思えないが…

しばし考え決意を固める、やはり筋は通しておいた方がいいだろう。

「…よし、嬢ちゃんのお父親のところに案内してくれ、口…オリヴィエはこれを持って先に船に戻っててくれ」

と海軍コートを渡す、今からやる事を考えたら海軍の人間だとわかるのはあまりよろしくないからな。

そうしてやってきたのはボロボロの小屋とでも呼ぶべき建物

…：そういう俺が最初に意識を持ったところもこんな感じの建物だったな、あのおっさんは元気だろうか？

建て付けが悪いのか軋む音を立ててドアを開ければ

「モネえ!!どこでちんたらしてやがった!金は持ってきたんだろうなあ!!」

という怒声と共に酒瓶が飛んできたのでヒョイと避ける

「どうもはじめまして、貴方がモネさんの父親で?」

「あ?なんだてめえ…、おいモネえ!こいつ誰だてめえの男か!けつ色付きやがって…」

手入れもされておらず野放図に伸びた髪と髭、服はヨレヨレで酔っているのか赤い顔に据わった目

「実は娘さんから借金があると伺いました…」

「てめえ…おいモネえ!人ん家の事情をベラベラ喋ってんじやねえよ!借金があるからなんだってんだ!てめえが払ってくれるって言うのかよ!!」

「払いましょうか?」

「は?」

「因みにお幾らですか?」

「おいおいおい!マジか!マジで払ってくれんのか?400万ベリーだ!払えるってんなら払ってみろや!!」

「400万ですか、ならここにありますが?」

そう言つて肩掛け鞆から札束を4つ取り出す

「ひやはははは!マジか!さっさと寄越せ!!」

血走った目つきで詰め寄る男を手で制す

「しかし条件があります、お子さん達はこちらで預かせてもらい今後一切貴方はお子さん達に関わらないというのを条件に出させても

「らいます」

「は？なんだ、モネ達を金で買うってか？」

「因みに承諾するのなら今なら追加でもう100万ベリー出しましょう」

更にもう一つ札束を取り出す

「わかった！その条件を飲むからさっさとくれ!!」

そうして500万ベリーを渡し姉妹を保護

「…良かったんですか？あんな大金を私達なんかの為に」

「別に嬢ちゃんが気に病む必要はねえよ、わざわざグランドラインまで来てもらうんだから報酬は必要だろう？」

しかしほんとに荷物とかは無いのか？妹と二人だけ、身ひとつでいいのか？」

「そうですね…思い入れあるものもありませんし精々武器であるこれくらいですかね」

そう言ってアイスピックをポケットから取り出すモネ、こええよ

「よし、ならばさっさと船に行くぞ。妹さんとロビンも先に着いてるはずだ、しかしあんなクソ親に金を渡すつてのは嫌だったけど金で解決するんなら安いもんか。」

…それにあの調子だと借金返したとしても長く持たないだろ」

追加で100万ベリーを餌にさっさと決めてもらったが500万なんてあつという間に消えちまうぜ？

ま、筋は通したんだしこっちの知ったこっちやないがな。

## 新進気鋭　ドンクリークさん

「ふむ…フィッシャー・タイガーによる魚人の海賊団”タイヨウの海賊団”が軍艦三隻を撃沈…、軍艦三隻って船舶部が頭抱えてなきやいけど…」

海列車が初航海に成功…ほう、こりやグッドニュースだな、後でウォーターセブンに見物にでも行くか

プロボクシング協会より選手の一人が凶器を使用した事が発覚、凶器を使用した選手を除名処分…これは関係ないか」

ニュースクーと呼ばれる新聞配達カモメが持ってきた”世界経済新聞”を眺めつつロビンが淹れたコーヒーを飲みながらゆっくり寛ぐ。

モネとシュガーを保護した後ファウス島へ向かい諸々の件を片付けて姉妹はトラファルガー夫妻に助手という事で預けた後暫くはそこに居る筈だった…のだが今何故か俺は北の海にいた。

これも単にセンゴク新元帥の

『北の海で非合法の海賊の動きが活発化している、これは』とある一つの海賊団”の動きが活発化しておりそれに触発、影響された形と思われる。

お前は北の海に赴いてそれらの遊撃にあたれ、お前の旗艦”ベアトリス号”はこっちに持って来れないが頼まれていた船は仕上がってるから持って行け』

と”改造戦艦　ベアトリス号”を元に造られた新造艦”シヤールロット・アンジェ号”を渡されカモメの水兵団の一部を乗組員に北の海に送り込まれたのである。

因みにリユードー大佐とジョナサン大佐はそれぞれ准将に昇進、リユードー准将はファウス島に家族を呼び寄せてフレバンス避難民達の治療の指揮にあたっておりジョナサン准将は俺が不在の間レッツドラインの反対側での遊撃任務についてもらっている。

魚人島にも行きたいんだが…などと考えていると

『船長！また新しい海賊です！旗印は針が刺さったドクロ！賞金額4

500万”毒針のロイフェン”率いるブルーバイス海賊団です！」

と伝声管にて司令室からの通信が入る

「すぐ上がる、停船信号を上げておけ」

それだけ伝えると伝声管の蓋を閉め

「北の海に来てから海賊ばかりねえ…おじさま全然ゆつくりできてないけど大丈夫？」

「元々海賊が活発化してるから俺達遊撃隊が送り込まれたんだしそれにこれでも人よりは頑丈でな」

と心配するロビンの声にドンと胸を叩いて答えそのまま艦橋の司令室へ

「船は停止したか？」

『停止は無し、一隻と侮っているのか交戦準備を始めている模様で大砲をこちらに向けている途中ですね』

「現在追い風です、波の状態も良好」

見張りと電伝虫でやりとりをしたり航海士の言葉に耳を傾けたりして状況を確認

「よし、お前ら！いつも通りだ！右舷側砲門開け、マストに向ける！まずは航行能力を奪え!!」

砲室と電伝虫で繋がれた火器管制に指示を出しまずは相手の足を止めさせる

「目標、敵船マスト…：目標ヨシ！装填完了！いつでも撃てます!!」  
「てえっ!!」

発射命令と共に右舷側の後装式長距離砲三門が火を噴き狙いは違わず着弾、爆発し相手の船のマストをへし折った為次の段階へ

「次！舵と大砲を狙え！しくじるなよ！」

「目標、敵船後部舵及び武装！照準合わせ…：目標ヨシ！装填完了！」  
「てえっ!!」

続いて足が止まった相手の船の舵とこちらに向けていた砲門を撃ち抜く

「船首向けろ！衝角用意！強制接舷する!!」

と足を止めさせ遠距離攻撃能力を奪ったところでこちらから相手

の船に突っ込んでいく。

そのまま沈めてもいいんだが捕縛や救助も面倒になるし押収なんかも相手の船が浮いてた方がやりやすいしな。

あつという間にブルーバイス海賊団の船を航行不能にしいつも通り処理していく、そうした事を繰り返しながら数日、その海賊はやつとまともに姿を見せた

『船長！例の海賊です！至急上までお願いします!!』

航海日誌を書いていると再びそんな声が伝声管から届く。

書くのを中断し本を読んでいるロビンに一声かけてから司令室に向かい部下から双眼鏡を受け取り覗いてみればそこにはフラミンゴを象った船首に斜線が入った丸いドクロ。

北の海の家賊達が活発に動き出した元凶、闇取引を主としその商品は武器や悪魔の実、時には人さえ売り捌く悪のカリスマ”ドンキホーテ・ドフラミンゴ”率いる新進気鋭の家賊団ドンキホーテファミリーの船である。

「今度こそ逃すなよ!!右舷側砲門開け!照準合わせえっ!!」

センゴク元帥からの情報により何度か補足はしていたのだが此方が一隻な事や船の足の差により毎回取り逃しているので今度こそ捕らえたいところであるが…

ドンキホーテ海賊団 ヌマンシア・フラミンゴ号甲板

「クソっ!!また奴か!3回に一回は遭遇するな、全く嫌な縁だ!左舷90度回頭しろ!この先の岩礁地帯で撒くぞ!奴の船は喫水が深いからそこまではこれねえ!」

グラディウス!!砲塔を奴等に向けろ!簡単に沈めれるとは思えねえが撃ちまくれ!!」

ドンキホーテファミリーのボスドンキホーテ・ドフラミンゴは舌打ちしたくなるのを抑えて指示を部下達に出す

人が折角取引を終えてゆっくり帰ろうとしてりやあ現れやがって…そんな風に考えてると

「あいつら海軍か？いつもの軍艦じゃねえぞ？」

双眼鏡を覗いていた数ヶ月前に”珀鉛病”に侵されながらもドンキホーテ・ファミリーの元・本拠地スパイダー・マイルズに辿り着き一味に加入したわずか10歳のローがそう呟くのを聞き

「そうか、ローは奴等に会うのは初めてだったな。」

奴等は”海軍独立遊撃隊”、主に海賊の捕縛を任としてあちこちの海に出てきやがる海軍の部隊だ。

率いるのは海軍本部少将”鈍熊”クリーク、実力だけならとつくに中将クラスだろうにんで少将に甘んじてるか知らねえがな……

流石に今奴等とやり合うのは自殺行為だからこうやって尻尾巻いて逃げるしかねえ、というのは心に仕舞っておく。

自分の実力が奴に対して劣っているというのを認めるのは癪にさわるが相手は海賊王処刑前から海軍にいる叩き上げだ、今はまだ力を蓄えるしかねえ……

そんなドフラミンゴを余所にロー、からくもフレバンスから逃げ出す事に成功した”トラファルガー・ロー”は見覚えのある”赤い海軍旗”を心に留め先程のドフラミンゴの言葉を思い起こす

海軍本部少将”鈍熊”クリーク：覚えたぞ、そして覚えてるお前が殺したみんなやとうさまやかあさま、ラミの仇はいつかとってやる!!!  
そしてそれをドンキホーテファミリー幹部”コラソン”は望遠鏡を構えながら歯をギシリと噛み締めるローを離れた所から見ていた、何か恨みでもあるのか？と考えつつ。

## 緑の病毒 ドンクリークさん

『クリーク、北の海での海賊掃討は順調のようだな』

シャーロット・アンジェ号艦長室、そこで俺はセンゴク元帥からの電伝虫の通信を受けていた。

「はっ、しかしながら活発化の原因であるドンキホーテファミリーは未だ捕らえる事はできておらず…」

センゴク元帥からの劳いの言葉を貰うが本来の目的であるドンキホーテファミリーの捕縛ができていない為言葉を濁す

『他の海賊達の捕縛だけでもかなりの人数を捕らえているのだから気にするな、それよりお前が前から言っていた魚人島行きだがようやく目処がついたから一度報告がてらこちらに戻ってこい』  
「はっ、了解しました！」

『ドンキホーテファミリーは北方総司令のステンレス少将に暫く任せ予定だ、引継ぎだけしつかりやっておいでくれ』

そして通信が切られる

にしてもやっと魚人島行きか、多分何かしら任務もあるだろうがやる事は何点か。

タイヨウの海賊団の動向、これは探れたらで良いが海に出てる以上はあまり情報は無いであろう。

次に原作、魚人島編で騒ぎを起こしていたホーディ・ジョーンズを筆頭とした新・魚人海賊団の動向、今何歳かわからないが確か昔はリュウグウ王国の兵士をやったんだっけか？

そして超巨大アンコウことぼんぼり様のルート確認、これはロビンと俺の予測が正しければであるが捕捉できる場所は魚人島が一番可能性がある。

取り敢えずはこの三点か？

司令室に赴き進路をマリージョアへ転進。

新たに北の海に赴任した”北方方面軍総司令”のステンレス少将に連絡をとりドンキホーテファミリーや注意すべき他海賊団の情報を引継ぎし数日の後俺はマリージョアに到着していた。



「お前には魚人島に行くついでにタイヨウの海賊団の情報も拾ってきてもらいたい、それと提案していた作戦だが今天竜人の権限が弱まってるからこそ可能と判断しその前準備としてシャボンディの無法地帯、これの掃除ついでに情報を集めて来い」

そんなセンゴク元帥の命令にやはり任務は与えられるか：などと思いつつ”了解しました!”と元気よく返事をしておく。

しかし天竜人の権力が弱まってるとは言えよくあの作戦をやる気になったな、正直ダメ元だったんだが：

執務室から戻る道すがら考える、噂によれば天竜人に蔓延している例の病気はここ半年の間に既に100人以上の死者を超え治療法は未だに見つかっていないという状況らしい。

そして発症者はその倍以上に上っており無事な天竜人はこれ以上減らされないように世界政府の方針によりなだめすかして何とかマリージョアに留まってもらっているとの事、まあぶっちゃげ言えば軟禁されているらしい。

まあその病気、ギフトグリーンをばら撒いた俺が言うのもなんだが早く治療法が見つかるといいね、見つからないだろうけど。しかし無事な天竜人が一割程しか居ないとあつてはその対応も無理は無いだろう、ああだからこそ天竜人が来ない今の内にやれるだけの事はやってしまえという事か。

マリルフォードを出立し半日程でシャボンディに到着、その足でホテル街にあるステラ・プロダクション社屋にて代表兼プロデューサーのテゾーロ、補佐であるステラ嬢、そして前々から手紙にてアプローチをかけておりつい先日このシャボンディに到着した舞台女優、ビクトリア・シンドリ嬢を交えて簡単な話し合いを行う。

すぐく大雑把な方針としてはテゾーロの夢である”エンターテインメントを世界に”という事でまずは分かりやすく歌や踊りを披露しつつまずは近海を、そして世界中にというものである。

シンドリ嬢には主にそのトップとしてひいてはこれから増えるであろう後輩達の指導役としてアプローチをかけておりシンドリ嬢はテゾーロの夢に賛同し貴族でありながら国を出てわざわざシャ

ボンデイまで来てくれたのである。

先ずは売り込みが肝心だろうとこのホテル街にてあちこちにテゾーロが営業を行なっている模様だ、金はあるからな。

そしてそんな業務の傍らテゾーロからシャボンデイ諸島無法地帯の資料を受け取りシャボンデイ駐屯地へ、先ずはセンゴク元帥の命令だという事を伝え軍艦を一隻コーティング作業を行わせる。

因みに魚人島へ行くのはこのコーティング作業という工程が必要不可欠であり直ぐに出発は出来ない為先に”掃除”を済ませておくべく今度は部隊を引き連れ1番GRへ

士官教育を終えたばかりの兵を率いて賞金首の捕縛を行なったり”職業安定所”や”世界貴族”など海軍の裏側を知ってもらったりすることを目的としたシャボンデイ諸島の巡回は毎年、年に一度の事であるが今回は違った。

そのことにまず気づいたのは長くここにいる古参でこの辺のならば者達を纏めており皆からはお頭と呼ばれている男だった。

「…あの野郎戻ってきやがったのか」

お頭は愕然とした様子を見せておりそのことが気になったならず者の一人がお頭の元へ。

「お頭？どうかしたんすか？」

「全員に伝えろ、鈍熊のお越しだ！いつもの巡回じゃねえぞ!!全員ぜってえ大人しくしてろよ!!」

お頭から大喝された子分は慌てて住処から飛び出し傘下の組織達に伝言を伝えに行く。

「おやっさん、なんかいつになくピリピリしてるじゃねえっすか”鈍熊”ってアレでしょ？昔はこの辺りで暴れまわってたっていう…」

「…おめえ、一年の巡回がなんで始まったか知ってつか？」

「なんでって言っても…そりゃ賞金首が潜んでたりするからじゃないつすか？」

「そうだ、ありゃ数年前の事だ。」

それまでここらは俗に言う”ヤベエ奴等”が取り仕切ってたから海軍も下手に手を出さなかったがそれまで見逃されてたそいつらを

奴が一人づつぶちのめして捕縛していったんだよ。”無双流”ル  
ガート・ウオンや”死の商人”コルネオ・ルドマン、”変装暗殺”レ  
イス・ドノバンとか”億越え”、”殺人鬼”、”マフィア”、”暗殺  
者”といったヤベエ奴等を！

そうして一度リセットされたおかげで海軍の奴等はここらを堂々  
と巡回するようになったんだ、全て奴が原因でな！

奴が出てきたって事はこれまで見逃されてた大物も捕縛されるぞ、  
くれぐれも軽挙妄動は謹めよ！他の組にも”熊が降りてきた”と伝  
えておけ!!”

そうして次々と降りてきた熊の恐ろしさを知らない賞金首は続々  
と捕縛されていくのであった、中には勿論立ち向かうものもいたが鎧  
袖一触とはこの事であろう、多くは棍の一振りで持ったとしても五合  
もしないうちに叩き伏されたのだった。

## 深海の島 ドンクリークさん

数日かけてシャボンデいの無法地帯における大掃除を終えて、ロビン、兵達と共にコーティング作業を終えた軍艦にて魚人島へ。

船に施されたこの”コーティング”と呼ばれる作業は色々な圧力を減圧する力を持っており、船底の空気を船の中に空気を注入、浮き袋を外す事により船は浮力を失い徐々に海に潜り始める。

「よおし！帆を開け！出航だ!!」

帆を開くように指示し船員を激励し船は海流を受けつつ深海へ。

「これがコーティング船：見事なものねえ…」

徐々に遠ざかる明るい海面を見ながらロビンは呟く。

「ああ、シャボンデイ諸島のヤルキマンマングローブもそうだが魚達の群れも凄いな…」

シャボンで覆われた甲板にてクリーク、ロビンを含めた船員達が初めて見る幻想的な絶景に圧倒されていると

「前方に大型海獣!!」

見張りの悲鳴のような声が響きその声を聞くや直ぐさま月歩にて海中に突っ込み

「(大拳砲っ!!)」

右の拳を振るい殴り飛ばす。ふう、危なかった：ちよつと景色に見惚れすぎたな。

「このシャボンはデリケートだ！船の損壊、一度に多数の穴などでアウトだぞ！…因みに魚人島へ行く船の七割は到着前に沈没というデータがあるからな！全員気合い入れて作業にあたれ!!」

景色に見惚れていた自分も人の事を言えないが全員にしつかり伝えておく。

”はっ!!”一矢乱れぬ遊撃隊の精鋭達の返事に満足しつつ船は”受光層”、”白明層”を抜けそろそろ深海1000mを越えた頃にロビンがブルリと身を震わせたので

「全員コートをそろそろ羽織つとけ！こっからかなり冷え込む筈だ!!」

そう言いながらも全く寒さを感じないので手に持っていたコートをロビンに被せておく。

そして目に映るのは巨大な海中の滝。

「あれが下降流…」

ぶかぶかの黒いコートから顔を覗かせたロビンは目に映った滝を見て眩く。

下は真っ暗で何も見えないがこの時の為に態々船に搭載させたサーチライトを点灯、船はゆっくりと下に降りていきそろそろ700mを超えた辺りだろうと推察。

後3000mほどか、まあ目的地の魚人島は海底1万mだからな。

サーチライトで照らしていなければ辺りは真っ暗だったろう、無理言って搭載しておいて良かった…

「少将!!サーチライトのバッテリーが僅かです!充電お願いします!!」

…無理言って搭載したので電力問題があるがな!

その言葉を受けグォングォンと音を鳴らすサーチライトの後ろに回れば大型の機械にコードで繋がれた大型の自転車…らしき物。

おもむろにそのらしき物に跨って

「おつらあああああ!!」

全力でペダルをこぐ、何を隠そうというか隠さなくてもわかるが発電機である。ハイパワーであるがとてつもなくペダルが重いのが欠点であり倉庫で埃を被ってたらしい、そんなに重いか?

数分も発電機を回せば充電はいっぱいになり船は更に下降、そうして暗い穴の底を潜っていけば急に視界が明るくなり

「あれが魚人島…」

深海10000m地点”海淵(かいえん)”

目に写るのは眩い光に照らされた、とても巨大なシャボンに包まれた海の中に浮かぶ島、目的地の魚人島へようやく到着である。

無事に魚人島に到着、入国審査を終え先ずはこの国王に挨拶くらいはしておいた方がいいだろうとその旨を兵士に伝えると兵士は何

処かと連絡をとり

「申し訳ありませんが今はちよつと手が離せないらしくて…挨拶だけでしたらこの電伝虫を使つてください、国王様に繋がってますので！」

と電伝虫の受話器を渡される。

「確かこの国王は結構まともだったよな？末っ子のしらうお姫（しらはし）は今の時期はもう生まれてるんだったかな、王妃の暗殺事件は確かまだ先だった筈…」

等々魚人島の王族に関する事柄を道中で思い出しつつ受話器を受け取り

「海軍本部少将のクリークであります、ネプチューン陛下で宜しいですか？」

『わしがこの国の王、ネプチューンじゃもん!!今少し手が離せないもんで電話で失礼するんじゃもん!』

「いえいえ、急に来たのは此方ですのでお気になさらず、今回は我々の頼みを聞いていただきおりがとうございます」

『海賊の取り締まりであれば大歓迎なんじゃもん!』

元々ここは海賊の往来が激しくわしの友人”白ひげ”の名前に守られてるとは言えまだ人魚を誘拐しようとする者らはおる、地上では若い人魚の娘は高く取引されると聞いたんじゃもん!』

「こちらにも調べ物のついでですのでお気になさらず。とりあえずこちらにいる間海賊達の取り締まりについては我々にお任せ下さい」

『うむ!頼むぞ、クリーク殿!オトヒメもよろしくと言っていたんじゃもん!』

「オトヒメ…?」

『わしの妻じゃもん!挨拶しようとしたんじゃがオトヒメは体が弱いのでな!今日は体調が悪いから大人しくしてもらってるんじゃもん!』

「あー…お大事にとお伝え下さい。

そう言えばネプチューン王、輝くチョウチンを持つとてつもなく巨大なチョウチンアンコウについて何か知りませんか?具体的には島

を食べる程の大きさの…」

とりあえず来た目的であるぼんぼり様の情報をダメ元で聞いてみれば

『超巨大なアンコウ…あやつかのう？』

ふむ、多分お主が言っておるのと同じじゃと思うが数年に一度とてつもなく巨大なチョウチンアンコウがこの辺りを泳いで行ったり来たりしておるんじゃもん、前に通ったのは…うむ！後で兵に調べさせておくんじゃもん!!』

思わずロビンと顔を見合わせる、あまり期待してなかったが最初で情報を拾えたのは大きい。

取り敢えず続報を大人しく待つとして街の非合法的な海賊共を掃除するかな

そしてネプチューン国王へ挨拶を終え兵士を一人付けられた、案内役との事で

『何処か行きたいとこがあれば彼に言うんじゃもん！』

それから今は手が離せないが明日の夜には時間があるからお主らの為に晩餐会を開くんじゃもん!』

との言葉であった。

案内役というか見張りって線もあるかもしれないが好意としてとっておこう、晩餐会か楽しみだな。

そーいや魚人島と言えば…

「そーうだ、我々はここには初めて来たもので詳しく無いのだがなんでも海の中に森があると言う噂を聞いたんだが…」

## 魚人の国 ドンクリークさん

魚人島国王、ネプチューンに挨拶を終えとりあえず見回りをするという旨を案内役に伝えると”わかりました、国民には伝えておきますね”と何処かに連絡をとりに行った。

一旦船に戻り武装はいらないうらう、と判断し海軍コートだけを服の上に羽織り数名を引き連れ町のほうに向かう、ロビンは色々見て回ると言って何処かに行った。

まあ今のロビンなら大抵の事は対処できるだろう、念のため小型電伝虫と発煙筒も渡してあるしいつだったかプレゼントした革靴に防犯ブザーもついているから何かあっても直ぐに飛んでいけるしな。

「へっへっへっ！ホントに人魚がいるじゃねえか！おいちよつとこつちこぶへえっ!!」

「ひひひ、こいつらを連れて帰りやあ一攫千金間違いないねぐほおっ!!」

「に、人魚のお嬢ちゃん、ぼ、僕と楽しいことしなぶつほおっ!!」

「おらあつ！てめえら大人しくしろ！金目の物は身ぐるみおいてぐわあっ!!」

まったく次から次に…

髭面の海賊をぶん殴り地面に沈めつつパンパンと手をはたく。

「どうも魚人島の皆さん！お騒がせいたしました！我々海軍はしばらく此方にいますので何かあったらご連絡下さい!!」

と私は皆さんの味方ですよアピールをしておく、とりあえずは歩み寄る事が大事だろうと思いつつ。

閑話休題、案内役に人魚がよく集まったり誘拐の被害に遭う場所がないか確認したところ”人魚の入り江”という場所が島の端にありそこによく集まるのが見られるらしい。

「しかし地上と違い風景もそうだが珍しい物がたくさんあるようだな」

サンゴの大陸や空中に浮かぶ水路などを見つつ案内役に言う

「ええ！例えばあの空中に浮かぶ水路、”ウォーターロード”と言うんですがうちの自慢のシャボン職人達が作ったもので海中と繋がっ



てるんですよ、この島ではポピュラーな移動手段の一つですね」

そのように道中で色々この島に関しての話を聞きながら到着したのは島の端

そこにはまだ若い女性、上半身は人で下半身は魚の姿をした美しい人魚達が集まっていた。

目をハートにして騒ぎ立てる部下達に”はしやぎたいのはわかるが落ち着け!!”と一喝すれば大人しく整列した。

「さて、お嬢様さん方。俺は海軍のクリークと言う者で君達に聞きたいことがあつて来たんだが少しいだらうか？」

人魚達は顔を見合わせて何事かコシヨコシヨと相談し一人の人魚が前に出てきた。

「あの…聞きたいことつてなんでしょう?」

警戒されているのか少し硬い口調、顔が怖いのは自覚しているので心の中で悲しみつつ聞く

「ここら辺に海賊が来ないか、君達に不埒な行いをしようとする”人間”がいないかを聞きたかったんだ」

「そうですね、たまにこの辺りまで来て私達とお話ししに来る人達はいます、…それに私たちを連れて行くこうとする人達も…」

「連れ去られたのかはわかりませんが何人か行方不明の人魚や魚人もいますね」

案内役が小声でそう補足してくれたのでやはりか…と思いつつ「おい…看板とペンキ持ってこい!!」

部下に無地の看板を持ってこさせペンキでスラスラと”警備!! 海軍独立遊撃隊 クリーク”という文字とその下に赤いカモメの海軍マークを書きつけて人魚の入り江の目立つところに立てて置く。

「これでどの程度の効果があるかわからんが町にいる悪い海賊達はしよつびいておいた、お嬢ちゃんかたも何かあつたら直ぐ兵士が誰か大人の人を呼ぶんだぞ?」

ありがとうございます!!と感謝の言葉を背に受けつつひらひらと手を振る、そっぴい人魚は歌がうまいらしいという前世での雑学を思い出し

「案内の兄ちゃん、この魚人島に人魚の歌が聴ける場所ってのはあるか？」

と尋ねると”マーメイド・カフェ”なるものがあるというのを聞いたので後でロビンと一緒に顔出してみるか、と考えつつ人魚の入り江を離れた。

明けて次の日魚人街に赴いて絡んでくる魚人達を適当にどつき回してセンゴク元帥から頼まれていた”タイヨウの海賊団”についての情報を集める。

海軍がわかつてるのはタイヨウの海賊団はフィッシャー・タイガーが一味のボスで魚人達で構成されてるということだけなので情報集めとしてここに送り込まれたのだろう。

と言ってもフィッシャー・タイガーの他にジンベエやアーロンが一味にいるというのは知っているので裏付けだけであるが。

適度にぶちのめしていると殴り合いで”自称アーロンのライバル”というシャチの魚人含めて仲良くなった魚人もいたが物陰からこちらを睨み付けてくる魚人もいた、というかこつち睨んでるあいつホーデイ・ジョーンズだな、なんとなく面影あるし。

流石に手を出してはこないか、手を出してきたらたいておこうと思っただが：取り敢えず視線を合わせるとフツと鼻で笑って挑発だけしておく。

しかし人間に友好的な魚人、人魚もいれば今回のようにこちらを見下してるというか何というか人間を敵視する奴等もいるからなあ、オトヒメ王妃の理想は立派だがいかんせん人間と魚人の間にある溝はでかいからなあ、シャボンデイの作戦で少しはマシになればいいんだけども：

しばらく歩き回って魚人島本島に帰還、ロビンと合流して気になっていたマーメイドカフェへ、腰にシャボンを纏ってふわふわと浮いた状態の人魚達はこちらを見て少しフリーズした後何故か熱烈に歓迎の挨拶をしてきた。

揉みくちやにされそうになったので手で制して歌を聞きにきた旨を伝えておく。

何故かロビンが人魚達に囲まれる俺を見てむうっという顔をしていたがそれを見ていた人魚達に囲まれて奥の方に連れて行かれた、女子のお話しだから聞いちやダメとかなんとからしい。

暫くするとロビンは店の奥から帰ってきて横に座り先程不機嫌そうだったのは気のせいだったかな？と思わんばかりにいつもの状態に戻っていた。

人魚達の歌声をBGMに色々と話聞いておく、主に魚人街やこの王族についてである、知ってる事はあれど忘れてる事もあるしな。ついでにロビンにここに来て行った場所などを聞いたりしているという時間帯になったのか案内役の兵士が呼びに来たので人魚達に別れを告げ兵士の後に続く。

昨日言っていた通り晚餐会を開きたいと考えているので何か意見があれば言って欲しいとの事だったので国王夫妻と”色々”話をしたかったので部下達とは別でできないかとお願いしたところ快く承諾してくれた為部下達は大広間にて宴会を、こっちはこっちで食堂にて会食という形になった。

夕方頃に船に迎えを向かわせるとの事だったので一度船に戻り留守番組にその旨を伝えておき外出組と交代のタイミングでちゃんと伝えるように念押ししておく。

遅れた時は知らんがな。

## 竜宮王族 ドンクリークさん

迎えが来て部下達と共にこのリュウグウ王国の王城である竜宮城へ。

魚人島本島と竜宮城があるシャボンは別れており唯一の通路である”連絡廊”を貸切の巨大なお魚バスにて抜け次の”総門”を抜けるとそこにあるのは色とりどりに存在を主張する独特な意匠を持つ大きな城。

初めて見るその姿に口から漏れるのは感嘆のため息ばかり。

王宮の総門である”御門”を抜ければそこは既に竜宮城城内、全員シャボンを纏いバスを降りてそのまま案内されたのは大きな広間、既に食事が用意されており更にクリークとロビンはその広間を見下ろせるテラスのような席に通された。

「海兵の諸君！よく来てくれた!!わしがこの国の王、ネプチューンじゃもん!!」

「みなさん！地上からわざわざこんな深海までご苦労様です、今回は色々和我がリュウグウ王国が誇る名物を用意してますので皆さん楽しんでいってくださいね！」

少しすると中空にてシャボンを纏いふわふわと浮かびながら大柄な人魚とそれに比べると小柄な人魚の二人。

この国の王であるネプチューン王とその妻、オトヒメ王妃である。二人の挨拶を聞きつつこの国に来てから集めた情報を思い出す。

ネプチューン王、深海に存在する魚人島リュウグウ王国の国王でありシーラカンスの人魚でもある、てつきり鯨の人魚だと思ってたが：かつては騎士として王国を侵略者から守っていたかなりの武闘派であり”海の大騎士”の異名をとっていたらしい。なるほど、たしかにとても大きな体の持ち主であり屈強な逆三角形の体格に赤毛の長髪と髭を蓄えた威風堂々とした外見である。

まあとは言え昔の話であり今は温厚で思慮深い仁君であるらしいが。

そして特筆すべきは電伝虫で挨拶した時に本人も言っていたが”

旧四皇”（現在は三大海賊）でありかの大海賊 “白ひげ” と交流があるらしくその縁のお陰でリュウグウ王国は白ひげの縄張りとなつてゐる…らしい。

ここが白ひげの縄張りになつてから魚人や人魚を拐う者は激減したが未だにごくごく偶に誘拐未遂や行方不明が発生するとの事。まあ人魚、特に30歳以下の若い女性の人魚は他と比べても破格で取引されており白ひげに目をつけられる愚を犯してでも拐おうとする輩が現れるのは無理もないが…

というか縄張りになつてゐるんなら人攫いとかが現れないようにちゃんと管理せえよ、と愚痴りたくなるがそこは置いといて次。

そして王妃であるオトヒメ、リュウグウ王国王妃であり金魚の人魚…メダカの人魚とかもいるしつっこまないでおこう。

魚人に対する差別を解決する事を悲願としており現在は国民にリュウグウ王国を海上に移設する、という計画への署名を集めておりよく城下に降りてきては演説する姿が見受けられるとの事。

とても体が弱いらしいがそうであつても自己犠牲も厭わず他者を助けようとする精神から国民に非常に愛されている人物であるらしい。

そして俺だけが知つてゐる情報ではあるが具体的な時期が不明であるがホーデイ・ジョーンズがリュウグウ王国の兵士をやっている時&ジンベエの七武海加入後の時期にホーデイの策略により暗殺されるというものである。

この二人の他に息子が三人と娘が一人、この娘というのがかの人魚姫だろうな。

集め情報を脳裏につらつらと思ひ出しながら海獣の肉や新鮮な貝類、海藻や魚人島で作られたお菓子などこりリュウグウ王国の地物にロビンと二人で舌鼓を打つていたところネプチューン王、オトヒメ王妃の二人がやってきて席についた。

「今日はこのような場を開いていただきありがとうございます」

「ほっほっほ、気にしないでいいんじゃもん！そしてわしがネプチューンじゃもん、顔を合わせるのは初めてじゃのうクリーク少将」

「ええ私たちから心ばかりの催しですよ、私は妻のオトヒメと申します、今回は楽しんで行つてくださいなね。」

「そういえば電伝虫で話はしたがこうやって顔を合わせて話すのは初めてだったな。」

「どうも、海軍本部少将のクリークです。こっちは私の協力者で優秀な学者であるニコラ・オリヴィエ」

その言葉にロビンがペコリと頭を下げる。

「さて、まずはお主らが言っていた事からじやの。」

お主らのいう巨大チョウチンアンコウじゃがこやつは数年に一度グランドライン前半部から後半部へ、そしてまた数年の後に後半部から前半部へと移動するのが見られる、前回は4年程前に見られておるから運が良ければ数週間で遭遇できるじやろう」

「おお運が良かった、ここがダメだったら広い海を探し回る羽目になるところだったから助かったな。」

「なるほど、わざわざ調べていただきありがとうございます。」

「とりあえずその巨大アンコウに用がありますのでこちらに数週間程滞在させてもらつても？」

「うむー構わないんじやもん、お主達の話は国民の者達から聞いておるんじやもん、国民に無体を働く輩を捕縛したり魚人街の荒くれ者達を抑えたりとな！」

「ええ、とてもよく動いてくださつてるようで感謝しますわ。そうだ、よろしければ今度子供達にも会つてやつて下さいな、地上のお話を聞かせてあげてくれませんか？」

「なるほど、私なんかの話でよろしければ喜んで。」

「そういえばオトヒメ王妃におかれましては魚人達の地上への進出…というかりユウグウ王国の地上への移設を希望して署名運動をしているとか」

「…やはり海軍の方はこの署名運動には反対ですか？」

表情を曇らせてそう聞くオトヒメ

「まあ海軍が反対…というわけではないですが個人的にはいい事だと思えますよ？ただ…」

「ただ?」

「フィツシャー・タイガーによる奴隷解放」

そう言うのと僅かにたじろぐ二人

「彼のやった襲撃でこの国は立場が悪くなっており来年開催予定だった”世界会議(レヴェリー)”には参加できないでしょう、来年どころかここ暫くは。」

いえ、個人的には彼に対しとやかく言うつもりはありませんよ?ここだけの話個人的に世界政府というか天竜人に対していい感情を持ってませんし。

ただ私が言いたいのは署名だけでは難しいでしょうから何かもう一つ別の手も打っておいた方がいいのでは?という話です」

その言葉に顔を曇らせる二人、：言いすぎてしまったかな。

しかしそれ程までに魚人達と人間の間には深い溝があるのだ、この国が世界政府加盟国でありいくら署名を集めたとは言え地上に出てくれば白ひげがここをナワバリ宣言する前と同じ事態になりかねない、誰かの保護を受けなければこの国はあつという間に強欲な者達の餌食となってしまうだろう…

その後も暫くこの国の事や魚人街についてなど色々話を聞き眼下の大広間にて騒ぐ部下達に頭を抱えてると”よかつたら泊まっていかれては?”との言葉を受け甘えさせてもらう事にした。

割り当てられた部屋を抜け出しバルコニーにて考え事をしていて

「む?クリーク殿寝れないんじゃないやもん?」

との声、振り返ればそこにいたのは酒瓶を手に持ったネプチューンの姿があった。

「陛下こそこんな夜遅くにどうされたので?」

「わしは晩酌なんじゃもん、良ければ付き合わんか?」

”わたしでよければ”と言うと侍従を呼びツمامミとグラスを持ってこさせるネプチューン。薫製の貝をツمامミに色々この国について話しながら飲んでいたところふと思ひ出す。

「そういえば陛下は”古代兵器”についてご存知ですか？」

「む？まあ名前ぐらいは知っておるんじゃないやもん、これでも一応一国の王なんじゃもん」

「わたしも全て知っている訳ではないですが神の名を冠する3つの古代兵器”プルトン”、”ウラヌス”そして”ポセイドン”…」

真面目な話だと推察したのかネプチューンの目つきが鋭くなる

「何の為に存在するか分からぬが遠い昔に実在したこの世界を滅ぼせる程の力を持った兵器じゃもん、それがどうかしたのか？」

「古代兵器”ポセイドン”の正体は”海王類を動かす力”である」

そう言うとなぷチューンは驚いたように目を見開いた

「お主…どこでそれを…」

「いえいえ、ただ気になつて色々調べただけですよ。」

いやあ、流石に800年以上も前、空白の100年の間の事とあつては調べるのに苦労しましたが…」

「む…まあ良いお主の言う通りなんじゃもん、”ポセイドン”は海王類を動かす力…むしろ風に言えば海王類と話ができる力なんじゃもん

むしろ魚人や人魚は海に棲む者達と話ができる、じゃが大半の者は魚達ぐらいとしか話は出来ず相手の体が大きい程話ができぬ、現にクジラと話せるのはわしくらいであり海王類と話せるのは歴史上ただ一人、その”ポセイドン”だけなんじゃもん」

「当時の人魚姫ですね、まあこれから先現れないとも限りませんが…」  
「その力を持って生まれてくるのが男なのか女なのか、人魚なのか魚人なのかはわからないじゃもん。まだまだ先の話じゃ」

「空白の100年当時の人魚姫が”ポセイドン”だったのなら”王族”であり”人魚”に発現する可能性は高いでしょうね、…例えば貴方の子供達、その末っ娘とか」

「…ほっほっほ、ありえないんじゃないやもん。確かにポセイドンの話は伝わっておる、じゃがそうは言っても伝説なんじゃもん。」

「ここ数百年その力を持つ者は生まれておらん、その力の真偽はわからないんじゃないやもん」



…まあそうだよな、この時はしらうお（しらほし）はその力に目覚めてないからそうなるよなあ

「…まあ心の片隅にだけ留めおいてください、でももし万が一そんな能力があれば世界中が欲しがるでしょうねえ」

「そうじゃな、もしそんな力があれば政府も海賊もあらゆる勢力が手中に収めようとするんじゃないもん」

「…長々と話に付き合わせて申し訳ない、美味しい酒とツマミありがとうございます、私はこちらでお暇させていただきますね」

「うむ、わしこそ晩酌に付き合わせてすまんじゃもん。」

そうそう、こちらに滞在するといふのであれば貸しておる部屋は自由に使ってもらって構わないんじゃないもん」

「重ね重ねありがとうございます、ではお言葉に甘えさせてもらいます」

ま、そんな簡単にはいかないよな。

## いざ探検 ドンクリークさん

あれから暫く、夜道を歩いていけば突如襲撃をかけてくる特徴的な黒覆面軍団にビンタをかましたり、予行演習として魚人島の海で泳いでいけば海の底に引き摺り込もうとしてみる特徴的な黒覆面軍団に拳骨をかましたりしていると案内役の兵から新世界側に巨大チヨウチンアンコウが現れたとの報告がなされた。

というか覆面が特徴的過ぎて正体がホーデイと愉快な仲間達ってバレバレなんだが。

人間の100倍の筋力？長年の鍛錬と肉体改造によって作られたこの肉体、戦うんならその100倍はもってこいなども思いつつ適当に道端に放置しておく。

案内役の兵士を待たせてロビンの元へ

「ロビン、ぼんぼり様が新世界側に現れたそうだ。少し力を貸してくれないか？」

「あらおじさま、デートのお誘いならもつと情熱的にしてくれない」とと軽口を言われたので話に乗ってやるかと思いつつ

「ロビン、お前が必要だ。ちよつと俺と一緒にデートにでもいかないか？」

まさか本当に返してくるとは思わなかったのか暫くフリーズしたロビンであったが

「…準備するから待っててくれないかしら、おじさま」

と冷静に返してきた、普通に相手が冷静に返してきたので恥ずかしい。

何があるかわからないのでこちらも準備を進める、とは言え海中を通るのであまり重い装備は持つて行くべきでは無いだろう。

胴鎧と棍は置いていき腰に佩くのは頑丈さだけを追求した無銘16号と17号、因みに1号から15号は全て御臨終になっている。その他にいくつかのポーチをベルトに装着、黒いタンクトップに青と黒の迷彩柄のズボン、足は丈夫なコンバットブーツにバサリと羽織るは赤い海軍マークが入った特注の海軍コート。

「お待ちせおじさま」

そう言つて出てきたロビン、背中にはいっただったかプレゼントした海王類の皮でできたバッグと胸元にはこれまたいつかプレゼントしたモノクルペンダント。

腰のベルトには両サイドにポーチと後ろには遊撃隊には全員支給されている折り畳みロッドが2本交差して差されており頭にはクリークが用意した内部に鋼糸が編み込まれたつば付きのキャップが乗せられ白く長い髪は首元辺りで結われている。

羽織っているのは丈夫な革の長袖ジャケットに手には黒い同じ素材でできた革の手袋、下はクリークのものと同じ迷彩柄のズボンに足はこれまたクリークの履いている物にた意匠の膝まである丈夫なコンバットブーツ。

「…未知の場所だし肌は晒さない方がいいんじゃないか？」

丈が短い為褐色の腹部があらわになってヘソが見えていたのでそう言うとう

「あら、コートの下がタンクトップ一枚のおじさまに言われたくないわ？それにただのお洒落よ、おじさまは女心がわかってないわね」

女心がわかる訳でもないのでぐうの音もせず言葉に窮する、まあ一緒にいるから大丈夫だろう

「よし、じゃあ行くか」

「ええ！おじさまが私を頼ってくれて嬉しいわ、一生懸命頑張るから見ててね！」

その言葉に嬉しく思いつつ案内役の元へ向かう、二人で冒険に行くのは初めてだなと考えながら部屋の外へ、そこでリュウグウ王国の兵士から”これをお使い下さい”と短めのサンゴの枝を渡される。

「これは？」

「これは”バブリーサンゴ”と申しましてこの出っ張ったところを押しますとシャボンが出てくるのですよ。

船を利用しないと聞きましたので海の中で空気を必要とするあなた方にとっては必要かと思いい準備させていただきました。」

そう、本来はコーティング船にて魚人島に来た遊撃隊全員で向かお

うと考えていたのだがここ数週間で謎の覆面、ホーデイと愉快的仲間達の襲撃により考え直したのだ。

流石に手塩にかけて鍛え上げた遊撃隊の精銳が負けるとは思わないが船で向かっている途中に襲撃を受けて船に穴を開けられても面倒なので人数は絞って俺とロビンの2人、残りの人員は念のため船の警備と魚人街の見張りにあたってもらったのだ。

兵士の好意をありがたく受け取りつつ王国が用意してくれた海獣に跨りリュウグウ王国を出立、勿論御者席はシャボンが張ってあり道中は快適である。

：最悪息を止めて泳いで行く予定だったのでリュウグウ王国とネプチューン王には感謝しておこう。

暫く進めばそこにいたのは黄金色に光る巨大な提灯を持つアンコウ。

「思ってたよりかなりでかいな…」

「あれがぼんぼり様…」

悠然と泳ぐその姿は巨大な提灯に見合ったとてつもなく巨大な体を持ち鋭い牙が並んでいるのが少し開いた口から見て取れた。

成る程これが島喰いか…などと思いつながら言葉は通じるかわからないがここまで乗せて来てくれた海獣に”ここまでで良い、今から奴の中に入るから少し離れた所で待っていてくれ”と伝え

「よし！行くぞロビン！」

そう言って大きく息を吸い込むとロビンと共に海獣に張られたシャボンから飛び出しそれと同時に”バブリーサンゴ”を一度押しロビンを包み込む。

そのままロビンを横抱きにしてこちらは息を止めたまま海中にて月歩を繰り返すぼんぼり様の元へ。

僅かに開いた、と言ってもこちらからすれば大きな隙間からスルリと口内へ侵入し、更に加速し巨大な口蓋垂を横目に断崖絶壁となった咽頭を抜け、更に食道を抜ければとても明るく空気もある開けた場所に出た。

月歩にてそのまま空中で飛び跳ねつつ辺りを見回しここが冒だろ

うとアタリをつける、所々に陸地があるがこれがぼんぼり様の食事によつてできた物であろう事は想像に難くない。

とりあえず一旦休憩すべきと考え緑が生い茂った島に降り立ち口ビンを地面に下ろす。

「ぼんぼり様の中の筈なのに凄く明るいわねここ…」

「ああ、てつきり真つ暗なもんだと思つてライトを持ってきてたが嬉しい誤算だなこりゃ。」

とりあえず何かアルケミについて手がかりがないか探してみるか、どうする？二手に分かれるか？」

「うーん、未知の場所なんだし一緒に行動した方がいいんじゃないかしら？」

ロビンのその言葉にそれもそうか、と考え緑に覆われた島の奥の方へ分け入っていけば

「…まさか恐竜がいるとは思わなかったわ」

「久々に見たな、種類は少ないようだが」

そこにいたのは大型の恐竜、口には同じくこの島のものであろう草食恐竜を啜えている事から恐らくこちらは肉食。

「あら、おじさまは過去に何処かで？」

「ああ、太古の島…リトルガーデンつとこでな」

まあ倒しても問題は無いだろうがとりあえず少し様子を見る事にして遠くから伺つてると

「ヒョッ!?おやおやおや驚いたわさ、アタシ以外にここで人間に会うなんてホントに驚いたわさ！」

後ろからした場違いな声にパツと二人して振り返ればそこにいたのは一人の少女。

年の頃はまだ10歳になっていないくらいだろうか、藍色のシンプルなワンピースを着た褐色の肌を持つ赤い色の瞳が特徴的な金髪の少女

出たな、えーと…名前なんだっけ？

忘れた！アルケミの生き残りの見た目少女のババア！

## 金の少女 ドンクリークさん

「…こんなところに子供？」

「おそらく島喰いの時に巻き込まれたんだろう、お嬢ちゃん名前は？」  
「アタシはオルガだよ、アンタらもぼんぼり様に飲み込まれたクチかい？」

そう言つてオルガと名乗つた少女は親指で天井をピツと指す。

「いや、俺たちは少し探し物があつてな…お嬢ちゃんは飲み込まれたクチかい？」

「はっ、アタシは島ごと飲み込まれたもんでねえ、以来ずっとここで流れてきた魚をとったり明るいお陰で植物が育つてるから果物を食べたりして生きてきたつてもんさ」

「そういえば気になつてたがなんでこんなに明るいんだ？一応体内なのだから真つ暗だと思つてたがお嬢ちゃんは知つてるかい？」

「ああ、そりや簡単さ。ぼんぼり様の提灯のおかげさね、ぼんぼり様の提灯は強烈で体の中を通り抜けて胃の中まで光が届くのだけに」

「成る程、だから四六時中明るいのかこは」

等と話しているとロビンが何かに気づいた様子で

「あれ…その服の紋様…まさかアルケミの文字？貴方あのアルケミと何か関係があるの？」

ロビンがオルガにそう尋ねるとぐむむ、と口を閉ざしそっぽを向く  
オルガ

「なんだ、嬢ちゃんはアルケミの関係者か？少し話を聞かせてもらいたいんだが…」

「けっ、気付かれちゃったか…んでなんだい？でかいゴリラに若いねーちゃん、アンタらもわざわざこんなところに散歩しにきたつてわけじゃあないんだろ？」

「私達は探し物をしてるの、”ピュアゴールド” っていうんだけど知ってる？」

「ふん、教えないよ」

「成る程知つてはいる、と」

「づ…」

その答えにオルガは渋い顔。

「ちよつとのつぴきならぬ事情で此方はどうしてもピュアゴールドが必要なんだ、何か知ってる事があれば教えてくれないだろうか？ 勿論ここから連れ出した上で幾らか報酬も出す、どうだろうか？」

「まっっておじさま、アルケミが飲み込まれたとおぼしき時代は200年近く前よ？」

この子がアルケミの事知ってるって事はまさか…」

そんなロビンの言葉に

「ん？ ああ見た目通りの年齢ではないだろうな、中身は老婆ちゃんだぞこの少女」

「誰が老婆ちゃんだい！ まったく失礼なゴリラだねえ、それならアンタの方がよっぽど年上に見えるんだわさ！」

「そうは言っても俺は29だしな…」

「私は15年しか生きてないし…」

「なんだい！ アンタら私よりもめちやくちや年下なんやねえ！」

「貴方アルケミの関係者って事は200年間ずっとここで？」

「間違いないだがや、アタシは200年前にこのぼんぼり様に飲み込まれたんだわさ、200年前のあの日アタシは家族三人で鉄工の島アルケミで暮らしてたんだわさ。」

でも、くそ科学者のクソ親父がピュアゴールドを作り出してからおかしくなっちまったきに

ピュアゴールドの噂を聞きつけた海賊がやってきてお母さんは殺されちまった、アタシはクソ親父を責めてピュアゴールドを海に捨てようとしたさね、そこに現れたのがピュアゴールドの光に釣られたぼんぼり様でそこで島ごとってわけさね」

成る程細かいところは結構忘れてしまってたがそういう理由だったか、と思いながらオルガが語ってくれた話を聞いた。

「貴方のお父さんが”ピュアゴールド”を作った…と言う事は貴方のお父さんの名前は”ミスキナ・アシエ”で間違いないかしら？」

「そうさね、なんだい外ではクソ親父の名前は知られてるのかい？」  
”ピュアゴールド”を作り出した張本人って事で調べれば名前が出てくるという程度だけどね」

「親父さんはどうしたんだ？」

「ふん！知らないねえ、飲み込まれた時に死んだ筈だわさ、ざまあみろつてもんさね」

…どこだったか忘れたがぼんぼり様の中のどっかで生きてるんだったか？

「そう…そして貴方は一人ですつとここに居たのね…」

長い睫毛を伏せて哀しげに言うロビン

「そう、生き残ったのはアタシ一人だけ、それから2000年一人でこの胃袋の中で生きてきたんだわさ」

「そうか、お嬢ちゃん…いやお婆ちゃん？一人で大変だったな…」

「誰がお婆ちゃんだい！まったく失礼な男さね、まあアタシの事は一旦置いて今度はアタシから質問さね。」

「アンタたち”ピュアゴールド”を探しに来たつてのは本当かい？」

そう言つて赤い瞳でこちらを真つ直ぐ見つめるオルガ

「ああ、とある事情でどうしても”ピュアゴールド”が必要でな。」

何か知つてる事が有れば教えてくれ、ここから連れ出しても構わな  
いし報酬も出すしなんならその後の生活もこちらで保証してもいい」  
「ふうん、えらく剛気な事さね。そこまで言われると何か裏があるんじゃないかって勘繰っちゃうねえ…その事情つてのはなんだい？それを聞いとかないとアタシが知つてる事は教えられないねえ」

…まあ政府の息がかかつてるわけでもなし構わないだろう、そう思  
い多くの人間にとある鉱物により最終的には死に至る中毒症状が発  
生しており治療法が未発見なのでその進行を止める為に”ピュア  
ゴールド”が必要だという事をかいつまんで話す。

「成る程ねえ、病気の進行を止める為かい…しかし”ピュアゴールド”  
”を手に入れるつてんならまあ見かけ通りならアンタはデカイし強  
そうだけどそつちのお姉ちゃんは大丈夫なのかい？」

「あら、心配してくれるの？」



「こういうのもなんだがロビンは俺が手塩にかけて長年大事に育てきたんだ、そんじよそこらの海賊には負けないさ。」

強さで言えば…そうだな、本部大佐くらいなら完封できるぞ?」

「ふうん…まあ本部大佐つてのがどのくらいか知らないけどそのコート、アンタ海軍の人間かい」

「ああ、そういや言つてなかったな。海軍本部で少将を務めているクリークだ」

「私は海軍の人間じゃないけどね、ニコ・ロビンよ、宜しくねオルガ…さん?」

「…オルガで構わないんだわき、まあ宜しく頼むさね」

そう言つてオルガは小さな手を差し出したのでこちらも”宜しく”と手を出し握手を…サイズが違いすぎたのでお互い手のひらを打ち付けた。

## 遺跡訪問 ドンクリークさん

「さて…じゃあ説明するだわさ、まずぼんぼり様はみつつの胃を待ってるさね。そして今アタシらがいるのが第一の胃、アルケミがあるのは第三の胃さね」

そう言って地面にガリガリと棒で軽い図を書いて見せるオルガ、へえ上手いもんだな。

「成る程、”ピュアゴールド”を手に入れる為には一番奥まで行かないやならないのか」

「そうだわさ、そして其々の胃を行き来するにはこの海を渡らなきゃいけないんだわさ」

「…まあ見た感じでわかるが海水ってわけじゃないんだろ？胃酸ってオチか？」

浜に寄せては返す明らかに海水とは違う波を見てそう答える

「その通りさね、長い間浸かってりやあつという間に骨だけになっちゃまうさね。アタシや方法があるけどアンタらはどうするつもりだい、泳いでいくなら止めやしないよ？」

「オルガが持つてるその方法って言うのは何かしら？」

「ああ、そうさね…おいで！エリザベスー!!」

そうオルガが声を張り上げると”クワー!!”と言う砂埃がこちらに向かってきた。やってきたのは鞍をつけた大きな緑色のトカゲ、足が長く二足歩行で形としては恐竜をイメージさせる。

「紹介するだわさ、アタシの相棒のエリザベスさね。この子はバシリスクって言う種でねえ、特徴としては水の上を走れるのさ」

「ほう、水の上を走れるというのはすごいな」

「どうやって走るのかしら？」

「簡単さね、この種は強靭な脚力が特徴でねえ、右足が沈む前に左足を出しその左足が沈む前に右足を出す、この繰り返しだわさ」

成る程、見れば足の指の間にはヒダがありこれと脚力を合わせて月歩と同じく水面を走るわけか。

「まあおじさまも似たような事できるしそれができる人…ではないけ

ど動物がいてもおかしくないわね…」

多分ロビンは海賊の遊撃をやった頃俺が海の上を走って海賊船に乗り込んでいたのを思い出してるんだろうな…

「へえ、人間が水の上を走れるのかい。…まあそんな冗談はさておき流石に胃酸の海を走る以上ノーダメージというわけでもないから脚を保護した上で休ませつつ走る事になるきに」

「冗談じゃ無いんだがなあ…」

「よし、なら第三の胃までひとつ飛びといくか。」

そう言つてオルガとロビンを其々小脇に抱える。

「ちよつと！何すんだい！乙女の体に気安く触れるんじゃないよ！」

「…おじさま、薄々どうするか勘付いてるけど安全運転でお願いね？」

「よし！エリザベスとやら！お前のご主人サマは俺がしつかり見ておくから安心しろ！それから二人とも舌を噛むからちやんと口閉じてろよー！」

そう言つて鍛え上げた強靱な脚力により地面を蹴り空中に飛び上がりそのまま砲撃のような音を立てつつ何も無い空中を蹴り月歩にて上空に飛び立つ

「な!?なんなんだいアンタ！あれか！能力者つてやつかい!？」

「舌噛むぞオルガ！それより道案内はまかせたぞ！」

二人とも軽いので特に負担を感じる事もなくそのまま第一の胃から第二の胃へ、そしてそのまま月歩で駆け抜けて第三の胃へ向かう

「見えた！アレがアタシが生まれた島、ピュアゴールドが眠る、アルケミだよー！」

第三の胃は第一の胃と比べて奥にある為かまるで提灯から届くという明かりが仄かに輝くまるで夜空のような印象だった。

そのままアルケミに着地

「ピュアゴールドが眠る研究室は廃坑の奥にあるだわさ」

というオルガの言葉に従いそれらしき場所に向かう

「廃坑というか遺跡みたいな見た目ね」

「む、何か入り口に書いてあるな…ロビン、これ読めるか？」

「ええと…」輝く剣と共にこの地に足を踏み入れし者、死を以って代

償とする。我が名はミスキナ・アシエ”

ミスキナ・アシエ、”ピユアゴールド”を作った科学者ね…輝く剣、何かの比喩かしら？」

「ふん…ただのクソ親父さね」

手元の本と入り口に記された文字を交互に見つつ解読したロビンに対しそっぽ向いて返すオルガ

「しかし死を以って代償とするとは…こりやあ明らかに罠があるって事だろうし本腰入れて行かなきゃならんかな？」

ぶつちやけ罠の内容殆ど覚えてないんだよなあ、というかこんな事なら先に何処かに居るであろうアシエ博士探し出して連れてくればよかったな、帰る時でいいかと思ってたが…

## 遺跡探索 ドンクリークさん

物騒な感じの入り口の文を読んだ為警戒しながら石造りの通路を進み暫くすればとても開けた空間に出た。

下に降りる階段の先はこれまた石造りの部屋になっており天井は高くその部屋の中心には不釣り合いなパイプオルガンと壁からは水…？が流れ出しており階段とパイプオルガンがある場所以外はそれで満たされていた。

「…見た感じこれはぼんぼり様の胃液だわさ、本来だったら海水だろうけど外がぼんぼり様の胃の中だからねえ」

「潜りやあなんかあるとも思ったがそれも厳しいか、真面目に謎を解けてことだな」

「あら？…ここにも何か書いてあるわね、えーと」正しき音を奏でる者、心清き者だけが輝く金に近づける”…」

「どういった意味さね？」

「まああのオルガンに楽譜があるようだし多分それ通りに弾いてみせろって事だろうな…ロビンか嬢ちゃんはオルガン弾けるか？」

「ごめんなさいおじさま…オルガンは扱ったことないかな…」

「アタシがそんなの弾けるように見えるかい？」

「だよなあ…まあ譜面見ながらなら俺でも弾けるだろ、二人ともここで待っていてくれ、何かあるかわからねえからな」

そう言っつてロビンとオルガを階段の上に残して一人オルガンの前にやってくる椅子に座り楽譜を確認する

「…おいおいおい、これどうしろってんだよ」

楽譜の最初は問題ないが問題は後半、長い年月の所為か後半の譜面がかすんでおり極めつけに最後の部分が破れていると言う状態だったのだ

とりあえず仕方ないから弾いてみるかと身を屈めて譜面と鍵盤を交互に確認しつつ両手の人差し指で一つづつしっかりと確認しながら弾いていく

「遅過ぎてよくわからないけどひよっとしてこの曲…」

「おじさま、やっぱり私が弾こうか？おじさまの体格的に結構厳しいとおもっただけど…」

そんな声を聞きながら交互に人差し指を動かしても時間をかけながらわかるとここまで弾いたがそこで手が止まる

さて問題はここからだな、多分これだろうと思って演奏？を再開するも暫くしたところで

ヒュンツ！と聞こえる風切り音

「おじさま！危ない！」

「クリーク！危ないだわさ！」

その風切り音と共に壁の左右から打ち出されたのは矢の雨

「うおっ！間違えたら矢が飛んでくる仕掛けか!!」

そう判断し全身に力を込めればまるで金属にでも当たったかのような音をたてて弾かれる複数の矢

ものの数秒で矢は途切れるが全くもって心臓に悪い、とりあえず一時撤退すべきと考え楽譜を持ってロビンとオルガのいる階段上へ。

「アンタはビツクリ人間かい!?さつき空も飛んでたし今度は矢を弾き返しちまうなんてやっぱり能力者ってやつかい？」

「おじさま…とても…とっても心臓に悪いのだけれど…」

鍛え抜かれた肉体による、そんなじよそこの鉄塊よりも強固な鉄塊である。…お陰で注射が嫌いなので無意識に力が入る為か医者に文句をつけられたが。

「とりあえず危ないから二人共階段から降りないようにな？それから戻ってきた理由なんだが…」

そう言つて楽譜を二人に開いて見せる。

「後半がわからないわね…」

「ふむ…でもさつきアンタが弾いてたのを聞く限り多分アタシが知ってる曲だわさ。」

遅過ぎて最初はわからなかったけど」

「ぐ…仕方ないだろ、俺は音楽家じゃないから鍵盤を一個づつ確実に押す事くらいしかできねえ」

「まあちよつと歌つて見せるだわさ」

そう言つてオルガは先程弾いたのと同じようなメロディーで歌い出した。

透き通つた声で歌われるその歌は成る程子守唄であろう、なるほど優しい感じの歌だな。

「と、こんなもんさね弾けそうかい?」

先程のメロディーを頭の中で反芻し：

「おじさま、これでどうかしら?」

そう言つてロビンは一枚の紙を渡してきた、そこには読めなかつた部分が手書きで書かれており

「おお!これで問題無いな、助かつたぞロビン!」

「弾けはしないけど耳はいいのよ、間違っている部分もあるかもしれないから気をつけてね?」

楽譜とロビンから渡された紙を持つて再びオルガンの元へ。

その後何度か間違つたところを矢を受けながら修正しつつ一曲を弾き上げるとガコンツツ!と何処か音がしてゆっくりと周囲の壁から流れ出し地面にも満ちていたぼんぼり様の胃液がゆっくりと引いていく

「ヒツヒツヒ、正解みたいさね。でも、この罫を作つたのがクソ親父ならなんでアタシが好きなのをわざわざ…」

微かな疑問を抱くオルガに答える者は居なかつたが何はともあれ隠されていた次への道があらわれたのだった。

そして第一の部屋を抜け石造りの通路を歩いていけば再び開けた場所に、最初の部屋とは違いこちらはいかにも洞窟内といった感じはこちら側と対岸の間は深い渓谷になっている。

それぞれ切り立った崖になっておりその更に下にはおそらくぼんぼり様の胃酸であろうものが流れているのでそのままでは渡れない様子であつた。

「お、ここにもあるな。」

入り口を入つてすぐのところの碑文を見つけたのでロビンに伝えると

「あれ、という事は其々の場所にある感じかな?」

えーと”輝く金を手に入れる者、優れた集中力と果敢なる勇氣を合  
わせ持つ者なり、聖なる鷹を射抜き、橋を作るべし”：聖なる鷹つて  
あれの事かしら？」

そう言つてロビンが指差した方を見ればいかにもと言つた感じに  
反対側の崖に跳ね橋がありその上にはトリをモチーフとしたであろ  
う的があつた。

「こりゃあ多分的を射抜けば橋が倒れてくる仕組みだわさ、まあ道が  
途切れてるから他に方法は無いさね」

「まあ下はぼんぼり様の胃液みたいだし跳ね橋を下ろして渡つた方が  
無難だろうな、二人共ちよつとここで待つてくれ」

そう言つてロビンとオルガの二人を入り口近くで待たせておき一  
人だけ階段の下に降り立つ。

どうも先程から見えてた石で縁取りされた洞窟が怪しかったので  
様子見とばかりに一人で降りてきたが：

そう考えながらゆっくりとそちらに近づいていけば

「…ほらね、絶対なんかあると思つた。」

洞窟から出てきたのは三本角を持つ四足の恐竜、たしか突進力が強  
いんだつたか？なんて豆知識を思い出すも時既に遅し、相手は前足で  
ガツガツと地面を打ち付けると吠え声を上げながらこちらに向かっ  
て真つ直ぐに突進してきた。

鉄塊かけて受け止めても良かったがここは気絶でもさせて置いた  
方がよからうとサラリとギリギリで避けると相手が横を通り抜ける  
途中で背中から腹部に両手を回しそのまま抱え上げ

「そらああああ!!」

そのまま相手を抱きかかえた状態でブリッジ!!哀れ三本角の恐竜  
は頭から地面に叩きこまれこちら側の衝撃と自身の体重をモ口にく  
らい口から泡をふいていた。

「…ロビン、あれも能力者つてやつなのかい？」

「あれはおじさまの普通よ、オルガは真似はしないでね？」

「あんなビックリ人間と一緒にしないで欲しいだわさ…」

何か聞こえるがとりあえず無視、取り敢えず邪魔者はいなくなつた



のでさつさとの的を射抜いてしまえばよかろうと考え腰のホルスターから取り出すのは一丁の大型拳銃。

”ベアコング・改”

あれはまだ海軍少尉だった頃、初めて倒した能力待ちだった敵のベアキングから貰った（奪った）銃を改良を重ねた上で運用、更にそこから色々と改造を施したのがこの”ベアコング・改”である。

威力は高く何より拳銃（）なのに連射ができるのが良い点だ。その分装填には時間がかかる上に拳銃と言いつつも一般の人間にとつてはかなり大きく反動も大きいのが玉に瑕であるが。

スツと片手でグリップを持ち反対の手はグリップの下に添え足は肩幅、腕は外向きに軽く曲げる。

そのままガオン！ガオン！ガオン！ガオン！ガオン！ガオン！ガオン！ガオン！！と装填していた弾を全部撃ちきる、射撃が苦手でも”下手な鉄砲数撃ちや当たる”って言葉もあるからな！

「おじさま…」

「なんだい！あんだだけ撃つといで一発も当たってないどころかかすりもしていないじゃないかい！」

ほつとけ！遠距離は投擲も射撃も苦手なんだよ！！

「嵐脚・辻風えっ！！（つじかぜ）」

とりあえず誤魔化す為に左右の脚で十字状の飛ぶ斬撃を繰り出しかつを破壊する。

するとガコンツッ！と何処かで音がしてキリキリキリキリと跳ね橋がゆつくりと下されこちら側とあちら側に橋がかかった。

「よし二人共降りてきていいぞー！」

「ほんとビックリ人間だねえ、今のはどうやったのさね」

「足を振って衝撃波を出して破壊したのよ、外の人は出来る人は多いわね」

おいロビン嘘を教えるな…いや、あながちウソというわけでも無いか？飛ぶ斬撃なんて珍しくないしな。

橋を渡っている途中で翼竜の強襲があったがロビンの

「トレス・フルール…クラッチー！」

相手がどんなに速かろうと空を飛んでようと関係ないその能力にて両の脇腹と背中から生えたロビンの腕により翼と首を極められた翼竜は哀れにもそのまま胃酸の海に落ちていった。

「なんだい！あんたも能力者だったのかい！」

驚いた顔でそう言うオルガに”他の人には内緒でお願いね”と言うロビン。手配書のニコ・ロビンがハナハナの実の能力者である事は知られてるからな…

## 輝く黄金 ドンクリークさん

今更だがさつきのところは橋が降りてなくても二人を抱えて月歩で飛び越えれば良かったな…等と考えながら石造りの通路を歩き再び開けた場所に出た。

「…絶対何かあるさね」

「…そうね、見ただけで怪しいし」

開けた先は石造りのとても広い部屋になっており俺たち三人が入ってきた扉の反対側には口を開いたワニの石像、口の中は人一人ぶん以上の高さがありかなり巨大である。

まあ二人が何かあるかも、というのは明らかに怪しいのでまあわかるが…

そして部屋の中央には小さな台がありその上には一つの鍵がありその側に碑文があったのでまたロビンにお願いして読んでもらう。

「えーと、”輝く金を手にせしもの、信頼を得る者なり、勇気ある仲間たちと共に鍵をあけよ、その先に宝はある”…

まあ見た通りじゃないかなあ、これ見よがしに台の上にある鍵でワニの口の中にある扉をあけるって事じゃないかしら？」

鍵を片手に持ちそろそろとワニの石像に近づきワニの口の奥を見ればそこには大きな扉、そして二重の円を描いて並ぶ鍵穴。

「いちにいさん…内側に9個、外側に9個の全部で18個か。」

よし、二人ともここで待ってる俺が開けてくる」

そう言つて扉に向かおうとすれば

「今度は私も行くわ、さつきからおじさまが動いてばかりじゃないの」と言われた、危ないから待っててくれと言っても”あら？おじさまが守ってくれるんでしよう？それに私もいつだって守られてばかりじゃないのよ？”と言う始末。

仕方ないのでロビンとついでに一人残しておくわけにもいかないのでオルガも連れて口を開いたワニの石像の中へ。

きつと何か仕掛けがあるんだろうなあと考えつつ扉の前まで来れ

ば感圧版でも扉の前に仕込んであったのかガコンツッ!という音と共に開かれたワニの口が段々と閉じ始める

「やっぱ仕掛けがあったか…」

そう言っつて何歩か下がり片腕を上げ閉じるワニの口を支える。

「おじさまはそのまま支えてて、私が開けるわ。」

「大丈夫なのかい?結構重そうだけどねえ」

「いやまったくもって軽いもんだ、扉を開けるのは頼んだぞロビン。」

そうオルガに返しつつロビンに鍵を渡す。

「この18個のうちどれかが正解つて事でしようね、とりあえず内側から…キヤアツ!!」

「どうしたロビン!？」

突如響いたロビンの悲鳴に思わず駆け寄ろうとするも閉じるワニの口を支えているので踏みとどまる。

「いたた…これ、間違えると電気が流れるみたいね」

電流か…わかっててロビンに痛い思いさせるのもなんだかなあ…

あ、そうだ

「ロビン、これを使え」

そう言っつて空いていた反対の手で腰のポーチをゴソゴソと漁り取り出したのは黒い手袋、対エネルギー用に作っておいたゴムでコーティングされた皮の手袋である。

「あら、ありがとうおじさま…大きいわね」

サイズが違うのは勘弁してくれ、と考えていると効果はあったのか次から次に鍵穴に鍵をさしていくロビン

それと共に少しづつ重くなっていくというか閉じる力が強くなっっていくワニの口。

成る程、間違えるたびに電流+重くなるという仕組みか。

とは言っつても電気は無効化してるしこの段々重くなる口も大した重さじゃない、俺を潰したいのならせめて100t以上は持つてこい、と考えていると

ギャギャギャギャツギャリツ!!と嫌な音が響きだしバキンツ!!と、致命的な音が壁の向こうから聞こえてきた。

「…嫌な音がしたな」

「…クリーク、アンタ絶対今の畏壊した音さね」

そう言っているのがチャリと音がして

「あら、開いたわ」

とロビンが言うやいなやバカリと足元が開き三人共急に足場が無くなった為宙に放り出された。

扉が開くんじゃなくて足元が開くのかよ!!

と思いつつ空中で素早く体勢を立て直しそのまま

「きやあつー!」

「ぐえっ!」

横を落ちるロビンを左手で抱きかかえ右手でオルガの襟首を掴んで引き寄せそのまま着地

大した高さで無くて良かった。

「ありがとうおじさま」

「ちよいとーなんか扱いに差がありすぎないかい!？」

喚くオルガにスマンスマン、と詫びつつ辺りを見回す。

見た感じは唯の洞窟だ、足元には落下の衝撃を和らげるためか分厚いマットがあるだけでそれ以外は今までと違い石畳も無くホントに唯の洞窟といった感じである。

どうも緩やかな傾斜になつてようどとりあえず行ってみるか、となだらかに上に続く方へ三人で向かい暫くすれば行き止まり、そこには洞窟とは不釣り合いな木の扉。

「罨だと思うか?」

「罨じゃないとは思うけど…」

「なんかえらく不釣り合いだわさ、…まさかクソ親父の研究室かい?」

オルガのその言葉に警戒しつつ扉を押せば手応えは軽くキィ…と  
言う音を立てつつ

扉の向こうは一つの部屋になっていた。

広さはそこまで広いわけでは無く壁には本棚と黒板、そして机の上にも本がうず高く積み上げられており他にも何か実験に使いそうな器具が色々あった。

そしてその中に目を引くのが

「あれがピュアゴールドか…」

机の上にある円筒状の容器に入った卵形の黄金に鈍く光る金属の塊、大きさは子供の頭くらいの大きさである。

そして何か調べていたロビンが”あら?”と声をあげる

「どうしたロビン?」

「これはピュアゴールドの研究日誌だわ、えーと

”私は禁断のピュアゴールドを作る決意をした、科学者として間違っていることはわかっている、だが娘を不治の病から救う為だ、私は悪魔にでも魂を売る、ピュアゴールドの光にはあらゆる生命の成長を極端に抑える効果がある事がわかった、これを浴びていれば娘の病の進行を止めることが出来るはずだ”

成る程、それでミスキナ・アシエはピュアゴールドを作ったんだ：効果はおじさまの言ってた通りの様ね」

最後の方だけボソリと言うロビン、チラリとオルガの方に目を見やれば彼女はアシエがピュアゴールドを作った理由を聞いて伏目になり左手の人差し指にはめた指輪を軽く撫でながら言った。

「…お母さんが死んだ時あのクソ親父もきつと苦しんでたんだわさ…それなのにアタシは…アタシのためのピュアゴールドだったのにアタシは大馬鹿だ！」

アタシを助けてくれたクソ親父をアタシはこの200年間もずっと憎しみ続けていたなんて!!」

最後の方には涙声で叫び初めてわかった真実に大粒の涙をボロボロと溢すオルガの姿があった。

旧・150話記念　もしも彼が平和主義者だったら？

世界徴兵によつて召集されたのは藤虎、緑牛など海軍本部大將以外にも本部中將や本部大佐などとして召集された者がいる。

そして彼もそんな世界徴兵によつて召集された者の一人であつた。元・海軍の人間でありながら”とある事件”によつて十数年前にインペルダウンに投獄されていたが2年前の集団脱獄に際して解放、事件が収束した後その足で新海軍元帥である赤犬ことサカズキ元帥の元まで出向き自らを海軍に戻してくれと泣いて頼み込んだそうである。

そして説得の甲斐あつてかサカズキ元帥が戦力を欲しがつた為か不明であるが海軍に復帰。

海軍本部中將　”廻転のクリーク”

そして彼には一つの噂があつた。

曰く、平和主義者

彼の内面は慈愛に、彼の行動は情愛に、彼の目的は至愛に、とにかく彼は愛に満ちていた。

彼はよく周囲に洩らしている。

「人が何の為に生まれたか考えた事ありますか？」

彼の言うこの言葉は質問ではなく自問、故に答えも決まっているので相手の答えは聞かず続け様に言う

「それはこの世に平和と秩序をもたらす、それ以外の理由は有りませんし有り得ません。

争い事など実に下らないものです。

私が備えるこの力は世界に樂園を創造すべく天から与えられたものに違いないのです、もちろん私の能力だけではありませんよ？世界に散らばる悪魔の実と呼ばれる天からの贈り物、これらも皆樂園を作るべく使われるべきなんですよ。」

彼はよくそんな事を言うが相手にする者は今はもう居なくなつてしまつた。

そんな愛に満ち、平和を愛する彼であつたが欠点もあつた。

「海軍は正義の集団です、進んで海賊や悪党を殲滅し常に誰かのために戦う、これが正義でなくてなんなのでしよう」

わたしが聖者の前に軍人であるのは海軍こそが争いを治めようと行動する正義の体現者であるからです」

その思想によるものなのかは不明だが海軍の正義を盲信するきらいがあったのだ。

まあ彼がどれほど例外だろうと彼がどんな性格でどんな思想を有しているようと彼は海軍の絶対正義の体現者であるのだ。

たとえ誰一人として部下がついていかなかったとしても誰一人彼の思想に賛同しなかったとしても

彼は絶対正義、サカズキ元帥が掲げる徹底的な正義には相応しい男なのである。

そしてそんな彼に一つの命令が下された。

行き先はドレスローザ、任務は不穏分子の捕縛。

一応やりすぎるなよ？と釘を刺されるも

「やり過ぎ？何の事ですか？」

私は私の思想に基づき正しく義にのっとり正義を実行するまでです。」

その言葉と共に彼はその辺にいた軍艦に飛び乗り怯える海兵達に先に出発した新大将藤虎や中将達を追うように指示を出して王下七武海が一人”天夜叉”ドンキホーテ・ドラフィングが王として君臨するドレスローザへと出航したのであった。

ドレスローザ

ドンキホーテ・ファミリー特別幹部 シュガー、彼女の能力”ホビホビの実”の力によっておもちゃとなっていた人間達が元に戻りドレスローザは大混乱に陥っていた。

海賊や海兵、世界政府の役人や各国の王族に猛獣といったこれまでおもちゃになっていた物がある者は暴れ出しあるものは外部に連絡を取ろうとしたいたさなかに国の中心地、王宮が大地ごと持ち上



がり時を同じくしてドンキホーテ・ドフラミンゴの能力により国全体を白い柵が覆った。

これはドフラミンゴの能力”イトイトの実”の力によるもので彼はこれを”鳥カゴ”と呼んでいる。

これは長年練り込んだ強靱な糸を使用する為簡単には使えない技ではあるが一度発動してしまえばその力は強力無比、先ずは鋭い刃物の様に触れば切れるし易々とは切断できない強靱な糸。

そして更に”寄生糸（パラサイト）”と呼ばれる技によって操られ周囲を攻撃する一般人達

そして極め付けにこの”鳥かご”は徐々に縮小し最終的には閉じ込めたものの全滅という恐ろしい技である。

そんな混乱の中彼の姿はあつた。

長い紫の長髪に酷く痩せた体、その上に羽織るのはボロボロの海軍コートで武器の類は持っていないように見える。

そんな彼はドフラミンゴによって操られ暴れ回る海賊にスツと指を向ける

彼が指をくるり、と回せば指を向けられた海賊の頭がぐるりと回りゴキリ、と鈍い音が響く。

それに驚いたのは周囲である。

暴れていた海賊を止めようとしていた仲間の海賊は何の前触れもなく死んだ仲間の姿に。

クリークについてきていた部下はいきなり凶行に及んだ上官に。

逃げようとしていた市民はいきなりの惨劇に。

「クリーク中将！何を?!」

見張りとしてついてきていた大尉はクリークに問い詰めた

「何を?と言われましても…無駄な争いを止めただけですがそれが何か?」

そう言ってる間にも更に一人、くるりと回せばゴキリと首がまわる。

仲間の海賊はそのクリークという名前を聞き思い出す、確か海軍には平和主義者として知られるそんな名前の海兵がいた事を。

「おい！アンタ！何をしたんだ！止めると言っても他にいくらでもやりようがあつただろう!!」

彼はその言葉にも疑問を顔に浮かべながら首を傾げるとまた一人暴れてる海賊に指を向けくるり、と回す。

そしてぐるりと回る頭、ゴキリ、と響く音。

「てめえ！やめろって言ってるんだろ!!」

そう言つて手近にいたいきなりの惨劇に呆然と佇む海兵を捕まえ首に剣を突きつけた。

既に二人も仲間を殺された海賊の男は思いだした。

平和主義者、海軍にあるまじき思想を持つ男。

能力者という噂はあれどどのような能力を使いどのような任務を果たしてきたか、その辺りは不明であるが彼が仲間を見殺しにできるような海兵ではないだろうと考えた。

そんな姿を見てクリークは言う。

「落ち着いて下さい、たしかに性急だったかもしれませんがね。」

しかし暴れ回る人間は多いです、時間をかければかけるほど無駄な争いは増えていきます。」

そう言つてクリークは再びスツと指をさし、くるり

それと共にぐるり、と回る人質となつた海兵の頭。

「つ…てめえ!!自分の仲間になんて事しやがる!!」

「え？人質に取られるような仲間などたとえ今ここで助けたとしてもまた人質となり無駄な争いを生むのは明白ですよ。」

ああ、仲間をこの手にかける事になるなんてなんと悲しい、しかし人質に取られるような海兵に生きてる価値はありません。

否、彼はもともと私の仲間では無かつたのでしよう、むしろこうして無駄な争いを生んだという点においては同情の余地もない、この場で私に殺される事が彼らにできる唯一の正義だつたのです。

だつたらここできちんと殺しておくべきでしょう？」

不思議そうに聞くクリークを信じられない目で見える男

「なんだそりや!!貴様は平和主義者じゃあないのか！」

「平和主義者ですよ、だからこそわたしは平和のために、秩序のために

労力も犠牲も厭いません。」

そう言つて男に指を向ける。

「た、たすけ…命だけは…」

「これはなんと心外な、ご安心ください私は命だけしか奪いません」

そう言つてくるり…と指を回そうとしたところで

「おやめなさいまし、あつしもこれ以上は見過ごせやしやせん…」

その腕を一人の男が掴んで止めた。

短く刈られた頭に紫色の着物、その上には海軍コートを羽織つており手には仕込み杖。

何より彼は目の部分に傷跡が刻まれており彼が盲目である事を示していた。

「おや、これはこれは海軍大将の藤虎さんではないですか。

こうやつて直接会うのは初めてですかね？」

確かにこうやつて会うのは初めてである、まあ自分がこの男のことを避けていたから当然ではあるが…と藤虎ことイツシヨウは思う。

噂には聞いていた、破綻していると、狂っていると。

しかし同じ海軍の仲間さえ手にかけるとは思わなかった、と自分の認識不足を嘆く。

「確かに会うのは初めてじゃありやすが色々噂は聞いとりやす、アンタさんは一体何を考えて殺しをやるんですかい、平和主義者つていうのは大嘘ですかい？」

「大嘘？何を言つてるのですか？

私の正義は”一殺千生”、紛う事なく世界から争いをなくす為にいるのですよ？」

「いっさつせんしよう…？」

聴き慣れない言葉に首を僅かに傾げる藤虎

「ええ、一人殺して千人救う。

それが私の平和主義、例えばさつき私は四人殺しました。

つまりそれはさつき私は四千人を救つたということです。

ああ、なんで晴れがましいのでしょうか、また一步理想は現実に近づきました。

このぶんなら私が現実主義者と呼ばれるのも遠くないことでしよう」

滅茶苦茶な理屈だと藤虎は思った。

殺されそうだった海賊の男もそう思ったのか

「な、なにいつてんだこいつ！めちやくちやだ！」

そう言つて男は恐怖からか手にしていたカトラスで斬りかかろうとしたが

「滅茶苦茶なのは世の中の方です、だから私は秩序を求めます」

そう言つて男に指を向けくるり、と回す。

ゴキリ、と響く音を後ろに

「これで更に千人、まだ暴れてる人達がいるみたいですね…」

そう言つて今度は手首ごとくるり、と回せば海賊、海兵、市民の区別なくドフラミンゴによつて操られ暴れ回る者達のクビがまわる。

「更に千人、更に千人、更に千人、更に千人…最後に千人。」

ああ！なんと晴れがましい！！これで私は今日合計で1万人を救いました！代償として10名を殺してしまいましたでしたが差し引き九千九百九十名を救いました…

代償となつた十人には深い冥福を捧げましょう、ああ悲しいですね…人の命を奪うというのは。

本当に悲しいですね悲しいですねとても悲しいですね人殺し…」

「クリーク中将！暴れとるもんには海賊も海兵も一般人もおりやす！！流石にやりすぎつてもんじゃあありやあせんですかい！！」

あまりの惨劇に咄嗟に刀を抜き放とうとする藤虎だったがすんでの所で自制心を働かせる、海軍同士やりあつて喜ぶのは海賊だけだからだ。

「落ち着いてください藤虎大将、私は一刻も早くこの無駄な争いを止めたいたのです、考えても見てください私たちが争う理由なんてこの世のどこにもないでしょう？同じ海軍の仲間でしょう？」

その物言いに呆然とする藤虎であったがまだ操られて暴れ回る者達がいるこの場にこれ以上いささせるわけにはいかない、そう考え息を大きく吸い心を落ち着かせると

「……この件はサカさんに、元帥に報告さしてもらいやす。

それよりもアンタさんは王宮に向かつてくだせえ、そこに元凶であるドフラミンゴがいる以上奴を止めなければこの争いは続くでしょう。

奴を殺せば千人どころか万人を救えるとだけ言っておきやしよう」

その言葉に成る程、とクリークはうなずくと

「では私は方を救いましょう、では私はこれにて」

そう言つて地面に指を向けくるくるくと回せば旋風がおきそれに乗つてクリークは宙へと飛び立った。

藤虎は思った、アレに言葉など通じない、アレに言葉など意味が無い。

”一殺千生”

その思想には驚くほど揺らぎがなく

その思想には轟くほど隙がない

狂っているが故に言葉は通じず狂つてる故に省みることも無い。

まわれ、まわれ、くるくるまわれ

狂い乱れて狂々まわれ

”廻転のクリーク”

別名”狂乱のクリーク”

フレバンスの惨劇を引き起こしフレバンスの国民数十万名を殺害した上で覚醒した能力により四方八方にハリケーンを発生させ更にそれを島に上陸させフレバンスだけでなく周辺国家を含む五国を壊滅に追いやった犯人である。

かつてより良い結末を目指して現実に敗れ去った男の壊れた姿であった。

## 親娘再会 ドンクリークさん

オルガと握手を交わしちようど良さそうな木箱があったのでそこにピュアゴールドが入った容器を慎重に入れ厳重に梱包、ここを出る為に準備にとりかかる。

「オルガ、なんか持っていきたい物あるなら今のうちに言ってくれ」  
そう言いながら先ほどの間にロビンに目を通してもらい分別してもらった必要そうな本や研究資料をバッグに詰め込みながら聞けば「そうだねえ、先立つものは必要だろうしお金に変えれそうなもんは持っていくだわさ」

そう言っであちこちに置かれた鉱石類を持ち上げて見せるオルガ。それに了承の意を返し予備の袋に鉱石類を詰め込んでいきそれが済めば研究所を三人で出てピュアゴールドやら研究資料やら鉱石などが入った鞆を背負いロビンとオルガをそれぞれ小脇に抱え込む。

「よし、じゃあ戻るぞ。また飛んでいくから舌噛まないように口閉じてろよ?」

「うげえ、また飛んでいくのかい…」

「オルガ、船なんか無いから仕方ないじゃない」

そのままドオン!ドオン!と大砲でも撃つかのような音を響かせながら大きく地上から宙を蹴って飛び立つ。

眼下に見える研究所があつという間に小さくなっていきオルガが「もう2度と来る事はないかねえ…さよならだわさ…」

ぽつり、と寂しそうに言ったのが印象に残った。  
というか研究所の位置的に遺跡の入り口をぐるっと反対側に地上を歩いてれば着いてるじゃないか!

そんな事を思いつつ砲撃のような音を響かせながら第二の胃を抜け第一の胃へ、そして来た時と同じ島の浜辺に降り立つ。

二人と荷物を下ろし

「さて、遺跡に入って数時間は経ってるし腹も減っただろう?一旦食事も兼ねて休憩にしよう、俺は何か食べれる物を探してくるがリクエルトはあるか?」

「肉!!肉がいいさね!しかもガツツリいけるやつ頼むだわさ!」

「私はおじさまに任せるわ、私達は火をおこして準備しておけば良いかしら?」

「ああ、頼んだぞロビン。」

「そういう恐竜がまた出るかもしれないが…まあオルガのお守りも頼んだぞ?」

後半だけ小声でロビンに言いそのまま獲物を探しに森へ分け入る。さて…ミスキナ博士はどこかねえ?

そう考えつつ森をうろつきリクエストがあつた丸々と太つた恐竜を見つけたので嵐脚で首を切り飛ばし肩に担ぎ上げ散策を再開、しばらくした辺りでガサガサと茂みが揺れる音がしたので咄嗟にベアコングを引き抜きそちらに構えれば

「ま、待ってくれ!撃たないでくれ!」

そう言いながら両手を上げて出てきたのは一人の男性。

恐竜を横しているのか不格好な着ぐるみを着たその男は被り物をとって顔を晒した。

元は金色だった髪はくすんだ色になっており同じ色の髭も髪と同じく伸びに伸びてそしてなんとと言っても特徴的なのは

「アンタ…人間か?」

「失礼だな君は!僕は人間だよ!…ああ、着ぐるみを着てるから仕方ないか、これは奴等を欺いて食事にあつたためだね…」

そう言つてよいしょ!つとばかりに着ぐるみを脱ぎ身を晒す、うん、相変わらず滅茶苦茶に太つておりまるで樽のような有様になっており、とても人間には見えないな…何はともあれミスキナ・アシエを発見したのでオルガも腹を空かせてるだろうしさっさと戻るか。

浜辺に行く道すがら聞いたところによれば数時間前に連続して砲撃するような音が聞こえその時は気のせいかと思つたらしいが先程も同じ音が響いたのでひよつとすれば自分以外にも誰かいるのでは?と考えるように人がいないか探しに出てきたそうだ。

名前はミスキナ・アシエ、やはりオルガの父親で間違い無くとりあえず娘のオルガが生きておりこちらで保護しているという事も伝え

ると

「そうか…生きていたのか…良かった、本当に良かった…あの子には苦勞をかけた、こんな嬉し事はない!」

と感極まったのか涙を流した。

浜辺につき何か話していたロビンとオルガに声をかけ二人がこちらを向き同行していたアシエを見て怪訝そうな表情を浮かべたが少ししてオルガは気づいたのか

「まさか…親父殿だわさか…?」

と、驚愕を露わにした。

「ロビン、ミスキナ・アシエ博士だ。ここで遭難していたところを発見した。オルガ、お前の父親もどうやらぼんぼり様に飲み込まれた後生きてたようだぞ?」

…まあこの200年恐竜の巣で肉ばかり食べてたからこんな姿になってるが」

「オルガ!生きてて良かった!今更僕がこんな事言う資格は無いかも知れないが…心配してたんだ!どうか生きて欲しいと思ってたんだ!」

そう言つて両腕を広げてドストスと足音を立てながらオルガの方に向かうアシエ

それに対してオルガもアシエに向かって走り出し

「こんの…クソ親父!!」

勢いをつけたままドロップキックを繰り出した。

勢いが足りなかったからかオルガが軽かったからかそれともアシエが蓄えた脂肪により軽減されたがあまりダメージは無いようだったがアシエは驚いた様子で

「な、何をするんだいオルガ!」

「うるさい!何で生きてるんだい!アタシはずっとアンタが死んだと思つてたんだよ!?!それになんて!なんて言つてくれなかつたんだいクソ親父!!」

ピュアゴールドはアタシのために作ったものなんだろう、アタシの病気の進行を抑える為に作ったんだろ!?!ちゃんと説明しなかつたから



わからなかったじゃないか！

アタシはアンタに酷い事を言った！例え知らなかったとは言えそれは変わらないさね！きつとアンタも苦しんでたんだろう？何でちやんと言ってくれなかっただわさ！」

思わぬ再会に思いのたけをぶち撒けるオルガ。

「オルガ…」

「酷い事言っでごめんだわさ…ずっとアンタのせいでお母さんは死んだと思っただ…」

でも…やっぱ言ってくれなきゃわかんない事だつてあるんだわさ…おとうさん…」

そう言っただけでアシエに抱きつきポロポロと涙を溢すオルガとそれをそつと抱きしめるアシエ。

「おじさま、博士が生きてたの知ってたの？」

「いや、可能性があるかもしれないなと思っただけさ」

本当は生きていると知っていたがそれは心の奥底にしまっておく。「とりあえず火はおこしてるし食事にしましょう？おじさまも獲物は獲ってきたみたいだし」

「そうだな、あの泣き虫な嬢ちゃんがお腹空いた！と言い出しかねんからな」

そう言っただけで抱き合いながらワンワンと泣くオルガとアシエの親子を尻目にこちらは食事の準備を始めるのであった。

## いざ脱出 ドンクリークさん

「そうか、君達はピュアゴールドを手に入れたのか…しかしここに来てから数時間、三つの試練は結構自信作だったんだがなあ」

ようやく二人とも落ち着いてアシエ博士にピュアゴールドの事を言えばそう溢した。

そこまで難しいあれでもなかったけどな…いや、挑戦する人によって難易度は変わりそうだなあは。

「すまんがどうしても必要でな、ピュアゴールドはこちらでもらうが構わないか？」

「…そうだね、理由を聞いてもいいかい？何故ピュアゴールドが必要なのか。」

理由如何によつては僕は力づくでもピュアゴールドを取り戻すよ？」

そう聞かれた為オルガに話したのと同じくフレバンスの件について概要を話しその上でアシエに提案を行う。

「以上が俺がピュアゴールドが必要な理由だ、そしてアシエ博士に提案なんだが貴方には是非珀鉛病の患者達を治療しているファウス島へ来ていただきたい。」

貴方はとても優秀な鉱学者と聞いている、ピュアゴールドの精製に成功している事からその腕も確かだろう。

そんな貴方だからこそこの”珀鉛”が引き起こしている中毒症状の治療に役に立つのではないかと思うのですがどうだろうか？

ああ、勿論私に雇われるといういで月々幾らかは支払わせてもらうし住む場所も用意させてもらう」

フレバンスで王族から奪った…げふん、フレバンスで王宮広場に落ちてた財宝はまだまだ残ってるしな。

その言葉にアシエは少し考え決断を下した。

「…そうだね、そう言う理由であればピュアゴールドは持っていつてもらつて構わない。」

それにここを出たとしても行く宛は無いいしね…わかった、僕で良け

れば力を貸そう。」

固い握手を交わし

「さて、そうと決まればさつきと脱出するか。」

「どうやって脱出する気だい？船も何も無いが…というか君達はどうかやってここに来たんだい？」

もつともなアシエの質問になんと言うか考えたがとりあえずポーチから丈夫な縄を取り出しアシエ博士と研究所から持ってきた荷物をグルグル巻きにする。

”な、何をするんだい！”と喚く博士+荷物を背中に背負いこれまた別のロープで縛る。

そしてオルガとロビンを小脇に抱えて再び空中に飛び立った。

流星にオルガとロビンは慣れただろうが慣れないアシエは悲鳴を上げていたが

「アシエ博士！舌噛みますから口を閉じてて下さい！！」

その言葉で静かになった。

そのまま来た時の逆を辿りそのまま牙の間から脱出と同時に大きなシャボンを展開

「ひよっ!!なんだいこりや!ここは海の中かい？」

「…クリーク君ここはいったいどの辺りだい？」

そう疑問を抱いたアシエ博士に

「ここは深海一万m、グランドラインにある魚人島の近くですよ」

と遠くに見える乗ってきていた海獣に大きく手を振りながら答えるのだった。

周りを見回しながら感嘆するミスキナ父娘を他所に海獣は真っ直ぐにリュウグウ王国へ、そのまま船へと向かう。

「男性の方がアシエ、年は30歳で女兒の方がオルガ、年は6歳だ。」

どうやら数年前に父娘でピクニックに来ていたところを島喰いに喰われたそうでその時にはぐれた為この数年間食生活は全く別。

アシエは主に肉類を主食として生活、逆にオルガは魚や木の实などを中心に食べていたようだ。

見たところは健康体だが見ただけではわからん事もあるだろうか

ら頼んだぞ?」

流石に200年という事は伏せつつも体調については何かあつてもおかしく無いので軍艦の船医に遭難者としてオルガとアシエを診てもらおう事にして二人を預け、そしてその足で人魚の入江やマーメイドカフェ、魚人街や竜宮城などここに滞在中に世話になつた場所にあちこち出立を告げていく。

人魚の入江では色々とその魚人島や最近の流行、おすすめスポットなどについて色々教えてくれた最初の警戒は何処へやら、いまはすっかり仲良くなつたイシリーやメロ、セイラなどの若い人魚達に。マーメイドカフェでは晚餐会で華麗な歌を披露してくれたマリア・ナポレに。

次いでに是非その歌を地上にも披露して欲しいので陸に来る事があれば大歓迎する、というのも伝えておく。

魚人街ではこの辺りで海賊行為を行なっており、同じくこの辺りで海賊をやつていた魚人海賊団のアーロンのライバルだというシャチの魚人、ウイリーや魚人街から魚人島へ移住をしようとしているシャリーリーに

シャリーリーは魚人街にいた頃から占いで有名であつた為俺も占つてもらつたところ”いずれ大きな選択を迫られる時が来る”という意味深な予言を貰つてからはアーロンの事を聞きに行つたりロビンと歳が近いのもあつてロビンを連れて行つたりと割と仲良くなる事ができた。

次いでに魚人街から帰る途中に襲つてきた黒覆面達についてはどつき回して

「俺はもう地上に戻るがまた暴れるようなら相手してやる、じゃあな」とだけ告げてその辺に縛つて放置しておいた。

そして竜宮城では残念ながらネプチューンは手が離せない模様だったので2、3言だけ交わし”またいつでも来るんじゃない!”との言葉を貰つた。

そしてその足で魚人島でお土産として海獣ハムや貝の薫製など魚人島の特産品や食料、物質などその他色々と買い込みその足で船へ向

かう。

船は既にコーティングが張り直してあり甲板にクウイゴスのブロックも設置してありいつでも出立できる状態になっていた。

手を振り見送る魚人や人魚達にこちらも手を振り返しつつ魚人島を後にしたのだった。

「いやあ人魚なんてはじめて見ただわさ、伝説上だけの話とばかり思ってたさね、つくづく上陸できなかったのが残念さね」

そう言うのは船の縁から身を乗り出し興味深そうに手を振る人々を見るオルガ。

腕には注射の跡があり医者曰く彼女がかかっていた病気は”サウスブルー皇帝熱”と呼ばれる南の海特有の風土病で一昔前なら不治の病だったが現在では特效薬が開発されており2、3日で治るだろうとの事であった。

「うん、グランドラインと聞いてもっと恐ろしいところだと思ってたんだけどね」

アシエ達は南の海にいたし200年前ともなるとそんなイメージなんだろうなと思いつつクウイゴスのブロックを放出しつつ船は海上へ向かうのだった。

## 地上帰還 ドンクリークさん

魚人島での成果を頭に入れつつこの後、地上に上がった後の作戦について書類にまとめていると

「クリーク、さつき船から放出してた木材はなにさね？」

いつのまにか艦長室に入り込んで色々とみて回っていたオルガが聞いてきた。

「ああ、ありやくウイゴスって言って簡単に言えば浮力がとても強い木材だ」

「ロープで繋がっていたでしょ？あれをシャボンから出す事によって船体を浮かせるのよ」

「うん？船は水に浮くもんじゃないのかい？」

そうかオルガはシャボンについて何も知らなかったな、と思いつつシャボンの特性について説明をする

「ふうん、世の中にやあ変テコなものもあるんだわさ」

「ええ、だからコーティングされた船単体だと浮く事が出来ないから別の浮力が必要なのよ、浮き袋みたいなものね。」

シャボンからこの浮き袋を出す個数によって浮き上がるスピードを調整するのよ？」

「へえー、クリークもロビンもよく色々知ってるだわさ、アタシは南の海にいたからねえ他の事は何にも知らないからねえ」

感心したように言うオルガ、まあシャボンやクウイゴスなどは南の海では見かける事などないだろうかそれも当然だろう。

それよりも一つ注意しておくべき事を思い出し

「そうだオルガ、一つ注意しておいてほしいん事があってロビンの名前についてなんだが・・・二人きりの時なんかは問題ないがな、一応ニコラ・オリヴィエという名前になってるから普段はこっちで呼ぶようにしてくれ」

「うん？なんだわさ偽名かなんかかい？」

「ああ、実はロビンは無実の罪を着せられてな・・・」

そう言って引き出しに仕舞っていた一枚の手配書を見せる

「いちじゅうひやく…うへえ、3900万とはまた剛毅な事だわさ。

しかも写真を見るに今より幼いだわさ、どんな罪を着せられたさね？」

「古代兵器の研究及び島を一つ滅ぼしたというものさ、因みに当時10歳の事だ」

「ちよつと無理があるんじゃないかねえ…？まあ名前の事はわかつたさね、誰かいる時はニコラなりオリヴィエなり呼ばせてもらうだわさ」

頼んだぞ、とオルガに伝え別件を片付ける為に電伝虫の受話器を取りセンゴク元帥に連絡をとる

『私だ』

「本部少将のクリークであります、現在魚人島を出立し地上に向かってる途中であります」

『ご苦労、頼んでおいた事は掴めたか？』

「はっ、頼まれていたタイヨウの海賊団の構成員ですがまずはそちらでも掴んでいる通りフィツシャー・タイガー。」

元は冒険家で例のマリージョア襲撃事件の主犯でもある彼を中心に主だったメンバーとしては元・リュウグウ王国の兵士隊長を務めていたジンベエ

深海に來る海賊などをターゲットに魚人島周辺で海賊行為を行っていたアーロン一味

それからシャボンディ諸島で何回か見かけられていた人攫い屋のマクロ一味も合流しているようです。」

『ふむ、誰も彼も一筋縄ではいかなそうだな…了解した、詳しい件は後でこちらにレポートをよこしてくれ、後は引き続きこちらで捜査を続行する、お前はシャボンディの作戦が終了次第再び北の海へ向かってくれ』

「了解しました、それから島喰いに飲み込まれていた民間人を2名程発見しましたがどうしますか？」

『本人達が望むなら送り届けてやれ、別にお前の主導しているファウス島で働かせても構わん』

よし、言質はとった。

「ではこれにて失礼します」

そう言つてガチャリ、と受話器を置き司令室に今後の予定を伝えに席を立つのであった。

そして魚人島から地上へ帰還した次の日、クリークの姿はシャボンデイ諸島、1番GRにあった。

「各班、状況知らせ」

『一班から五班準備完了』

『六班から十班移動完了です』

『十二班がまだ…十一から十五班、所定の位置に着きました！』

並べられた子電伝虫から次々に報告が届く。

「よし、ではこれより”違法奴隷商一斉摘発作戦”を開始する！各員！踏み込めえっ!!」

そんな大音声を張り上げると一斉に待機していた人員達が無法地帯に点在する奴隷商館へ踏み込んでいった。

これは本来世界政府非加盟国の人間や犯罪者といった奴隷にしても問題ない人間以外の奴隷にするのを禁止されている人間（世界政府加盟国の人間）を奴隷として平然と扱っている現状の打破として上に提案していた事柄であった。

元々天竜人の影響もありこの作戦が認められる事はないだろうと思つていたがそんな折何処かの誰かのお陰で天竜人の人数が激減、無事な天竜人も現在は軽い軟禁状態にありこのシャボンデイまで降りてくる事は無いという絶好の機会にセンゴク元帥もようやく重い腰を上げたようであった。

最初は原作で出てた一箇所を潰せば良いかと思つていたが調べてみれば現在は無法地帯にそれぞれ何軒かづつ散らばつており原作のヒューマンシヨップはドンキホーテ・ドフラミンゴがそれらを纏めた事によって出来上がった物だと理解できた。

その為手が足りないので本部から手すきの海兵を送ってもらい電伝虫にて連絡を密に、同時進行で一斉摘発に臨んだのである。



因みに現在地は一番GRにあるおそらく原作のヒューマンシヨツプの元となつたであろうかなり規模が大きい奴隷商館近く、その近くの平家の建物の中にあつた。

部屋を仕切る壁は全て取り払われ中には電伝虫や書類の束、海兵達が忙しく行き来しているここはこの作戦の司令本部でもある。

因みにロビンやオルガ、アシエ博士は護衛をつけてホテルの最高級スイートに泊まらせておいた、今頃はシヨツピングでもしてるだろうか？

そして続々と寄せられる報告を確認しつつ奴隷を違法に扱っていた者は逮捕、そのままインペルダウン送りに。

ルールを守っていたものの中で世界政府非加盟国の一般人を扱っていた者は別のリストに纏めておく、後で”覆面髑髏”が上手くやってくれるだろう。

勿論ルールを守っており犯罪者を扱っていた者については手は出さない、ただ奴隷達をリストに纏め後で手配班に提出、照合させるだけのことである。

今回の件は大きな転換点となるだろう、今まで見逃されてきた場所に海軍のメスが入つたのだから。

奴隷商だけではない、人攫い屋も安穏とはしていられない。

これで世の中がどう動くか、…願わくば世界が優しくなりますように。

まあそう簡単には無理だろうがな。

## 四色晚餐 ドンクリークさん

「と、以上がこれまでの報告になる」

鉄板の上でジュウジュウと音を立てる分厚い肉をナイフとフォークで丁寧に切り分けながら現在の状況の説明を終えた。

海軍本部将官専用食堂にクリークの姿はあった、シャボンディ諸島での一斉摘発から次の日の夜の事である。

その場には給仕を務める人間は別としてクリークを含め海軍の中  
枢にいる四人。

”徹底的な正義”を掲げ目つきは鋭く常に不機嫌そうな表情を  
讚えた赤犬大将ことサカズキ

”どつちつかずな正義”を掲げ垂れ目がちで飄々とした印象を  
与える黄猿大将ことボルサリーノ

”だらけきった正義”を掲げ眠たげな目が気怠げな印象を抱かせ  
る青雫大将ことクザン

そして他の三人より階級は落ちるが”利己的な正義”を掲げる本  
部少将であり、この集まりの主催者である鈍熊ことクリーク

数年前から行うようになったこの集まりは単に”晚餐会”と呼ば  
れ、不定期ではあるがそれぞれの状況の報告及び今後の海軍の動向に  
ついての話し合いを行う為の集まりである。

「奴隷の件で言えば天竜人共が文句言ってこなかったねエ」

シャボンディ諸島での一斉摘発についてそう意見を述べるボルサ  
リーノ

「ああ、やっぱ天竜人に蔓延してる例の病気”緑斑病”って名前に  
なったみたいだけアレが結構深刻らしいんだってさ」

ボルサリーノの疑問にそう返すのはクザン、と例の病気と云えば  
「クザン、その”緑斑病”だがやはり発症は天竜人のみか？死者と発  
症者はそれぞれどれくらいになっている？」

その疑問にステーキを食べる手を止め横の書類の束を何枚か捲り  
ながら

「そうだねえ…、ああ発症者は天竜人のみ、民間での症例は未だに報告

無し。

天竜人の発症者は全体の八割以上に上ってるねえ、そのうち死者は半数以上で無事な天竜人は…だいたい百十数人ってところだねえ」

「自然発症か故意にばら撒かれたもんかはまだわからないのか？世界政府は相当参つとるようじゃき頻繁にこつちに問い合わせが来ちよるわい」

「フィッシャー・タイガーとティーチの二人についてか？」

「主にその二人じゃの、世界政府は主に奴隷解放をフィッシャー・タイガーが、天竜人への攻撃をティーチが、という風に考えちよる」

「そうそう、フィッシャー・タイガーと言えば例のタイヨウの海賊団の対処にG2支部のカダル少将が招集されたらしいよオ〜？」

「どいつもこいつも曲者揃いだから気をつけて欲しいんだが…」

「そうじゃクリーク、おんしの発案の”四海制覇”じゃが本部の移設についてはどうも世界政府…というか五老星が首を縦に振らんけえ諦めた方がいいかもしれん。

代わりにやあならんかも知れんが天竜人の激滅による天上金の値下げは検討するとの事じゃけえ」

「お、天上金の下がるんなら護衛はしやすくなるんじゃない？」

「天上金の増額とそれによる護衛の分散で海賊の襲撃には困ってたからねエ〜」

「例の病気に関しては俺の子飼いの医療班からレポートが上がってるからそれをセンゴク元帥に出そう、しばらくすれば少しはそれで落ち着くだろう」

八割以上減らせたなら上出来だな、と考えつつそう提案しておく。「そうじゃ、例のティーチと名乗つとる覆面じゃが捜査線上に一人浮かび上がったけえ伝えとくわい。」

三大海賊の一角、白ひげのところに同じ名前の奴があるつちゆうことじゃけえ確認しちよつてくれ」

「センパイ、これも織り込み済み？」

「なんの事だ？白ひげのところに關しては俺がいこう、どの道ファウス島に明日出立予定だからな、道中で挨拶でもしに行ってくるさ」

他にも何個かの議題を話しつつその日の夜は更けていった。

そして次の日、ファウス島へ出発前にセンゴク元帥にDr. インデイゴに書いてもらったグリーン・ギフトこと緑斑病に関するレポートを提出しておく。

これは天竜人もだいぶ減ったので点数稼ぎとしてこれ以上の発生を止める為の物で主に毒素を排出してる細菌に関してのレポートでありこれがあれば細菌の除去は可能であろう、細菌が出した毒素である壊死を引き起こす緑斑については知らんが。

とりあえずレポートを元に至急研究に取り掛かるとの事だったので後は任せよう。

そのまま自分とロビン、オルガ、ミスキナ博士、そしてつい先日ゼファアのおっさんの修行を完遂したギンの面々を引き連れ新世界側のレッドポートへ向かい海軍独立遊撃隊旗艦である”シャールロット・アンジエ号”へ。

出航準備は既に遊撃隊の面々が済ませており乗り込みさえすればいつでも出立できる状態になっていた。

そして船の傍には白衣を着た一団、クリーク専属の武装研究班がいたので何かあったのか?と思いつつ四人を先に船に乗り込ませそちらへ向かう。

「少将!ギリギリになってすみません!頼まれてたの出来上がってますよ!」

そう言って研究班の班長が渡してきたのは人抱え程もあるケース

「サイズを調整するんでちよつとそこに座ってもらえないかしら?」

そんな女性研究員の言葉にその辺の木箱に腰掛ける。

「頼んでたやつというマルチガントレットか?それともリジエクトダイアルの方か?」

「ガントレットの方っすね、両手真っ直ぐ伸ばしてもらっていいっすか?」

軽い調子の研究員の言葉に真っ直ぐ腕を伸ばせばガチャガチャと鈍色に輝くガントレットが両腕に嵌められていく。

「えとえつと、ご要望が頑丈さと仕込み武装、遠距離での攻撃手段との

事だったのでその辺を色々と搭載してます。

仕込み武装と頑丈さっていうのが相性は悪いので仕込み武装に関しては前回のものより減ってますですよ」

そう言ってメガネをかけた大人しそうな研究員が説明をしてくれたので両腕にガントレットを嵌めた状態で腕を振ったり曲げたりしてみる

「ふむ、見立て通り干渉は無いですね。」

「ちよつとだけ調整するわ…はい、OKよ」

班長が最終確認をし副班長がサイズを調整、特に動きを阻害することもなく重さもそこまで感じない。

「性能、武装は？」

「名称は試作14号ガントレットです、遠距離の武装とのものでしたので特製の小型ボウガンを左腕に搭載しています」

「専用弾の他に石ころなんかのその辺のものでも撃てるように作ってるわよ、後新しい試みとして指の先まで完全装甲になってるから多少荒く扱っても大丈夫よ」

「他にも鉤付きのワイヤーも切り替えで撃てるようになってるっす、素材は例の棍と一緒に重いのは勘弁してくださいっす」

「えっと、後仕込み武装に関しては左腕は容量の都合で搭載してませんが右腕は前回のものから引き続いて鉄製の投網と火炎放射器、近接用のブレード、手首のところに小型のワイヤーも仕込んでますう」

「わかった、とりあえず今回は持って行きレポートは後日そちらに送る、後これはボーナスだ、全員で何か美味しいものでも食ってこい」

武装の礼と共にそう言っただけで財布を取り出してある程度纏った額を班長に渡す

「ありがとうございます！他の武装についても鋭意制作中及び研究中ですのでもうしばらくお待ち下さい！」

その声を背にガントレットをケースに仕舞い小脇に抱えると頭を下げる研究員達を背にヒラヒラと手を振りながら「シャーロット・アンジエ号」へ向かうのだった。

## 海賊白髭 ドンクリークさん

ゼファアの修行を完遂したギンを新たに加え、一行はフレバンスにおける珀鉛病の人々を匿っている拠点「ファウス島」へピユアゴールドと鉱学のエキスパートであるアシエ博士とその娘オルガを送り届ける為に向かっていた。

そんな中「シャーロット・アンジェ号」の甲板で二人の男が向かい合っていた。

片方は筋骨隆々とした男で丈夫そうな青い迷彩柄のズボンと黒いブーツにネイビーのタンクトップを着た3mはある大男

もう片方は男…といってもまだ年の頃は10代前半といったころであろう、身長は150cm程で動きやすそうな灰色の長袖、長ズボンの上下に足には鋼鉄製のレギンスと腕にガントレットが嵌められその両手には棒に持ち手が付いた武器、トンファーと呼ばれる武器を構えていた。

「よし、どつからでもかかってこい」

「いくぜボス…」

その声にギンは身を低くかがめ一気にクリークの懐へ、そのスピードは驚異的であり一般人では目にも捉えれぬであろうスピード。弾丸のように駆けその低い体勢から右腕のトンファーがクリークの脇腹に向かって振り上げられた。

それをその成長ぶりに驚きつつも左手でいなし右手ですくい上げるような掌底を胴部に向けて放つクリークだったがそれは右手のトンファーで防がれた。

が、流石に小柄な体格ではその衝撃までは防げなかったようでそのまま跳ね上がられるも器用にクルクルと空中で回転し衝撃を殺してそのまま離れたところに着地する。

「驚いたな、スピードは元々速かったがここまで速くなっているとは…後は自分から飛んで衝撃を殺したのも正解だ」

「教官からは重点的に鍛えられたんで…」

そのまま再び低い体勢からの突進

「最初は驚いたが2回目と同じ手は悪手だぞギン！」

そう言つて右腕を引きこちらに真つ直ぐ突つ込んでくるギンに正拳突きを放つも

「同じ手は通用しないってのはわかってますよ」

そう言つたギンの姿がブレその正拳突きは空を切った。

そしてそのまま伸びきった腕に左手をかけそのまま地を蹴り左手を基点に宙に跳ね上がりクリークの後ろに、そのまま右手を首に回し締め上げる。

「ほお、歩法の一種か」

首を締め上げられたまま平然と話すクリークにギンは「だよなあ……」という表情を浮かべる。

タネは簡単だ、クリークの正拳突きに対してギンは間合いを詰めた直後、相手の眼前で正拳突きにバックステップを行い、相手のタイミングをずらしたのである。

そして正拳を放ち終えたところに拳を掴みその身軽さで地を蹴ることで加速、相手の背後に回つたのである。

そこから絞め技をかけたのであるが全くこたえていない様子だったが。

「上出来だ、さすがゼファアのおっさんだかなり仕上がってるじゃ無いか。お前もよく頑張つたな、並々ならぬ鍛錬だったろう」

そう言いながら締め上げられたギンの腕を掴みグググツと引き剥がす

「…いや、流石に通用するとは思ってなかったですがこうも易々と対応されるのは悲しいんですけど」

そう言つて通用しないと見るや背中を蹴って直ぐ様離れ、そして再び駆け出そうとしたところで

「少将！海賊船です!!旗は…十字の骨に半月のヒゲ！白ひげです！白ひげの船です!!」

そう声を上げて報告する見張りの声を聞きクリークは訓練の中断をギンに告げるのだった。

警戒態勢を指示、望遠鏡を取り出して報告のあつた方角を見れば成

る程、白い鯨を模した船首を持つ巨大な帆船、間違いなく白ひげ海賊団の旗艦である”モビー・ディック号”である。

という事は白ひげはあの船にいるのか…

「少将、どうしましょうか？交戦準備をしますか？」

そう聞く艦長にカブリを振る

「とりあえず停船信号を上げろ、それから接舷の準備を。とりあえずこちらからは決して攻撃しないように全人員に通達しろ」

暫くすればモビー・ディック号は速度を落とすシャーロット・アンジェ号に横並びとなつて停止したが誰かやってくる気配はない。

「仕方ない、少し行つてくるか」

「ボス、大丈夫ですか？白ひげといえばかの大海賊の一人じゃ…」

「別に戦いにいくわけじゃねえよ、心配すんな！」

そう心配するギンの頭をガシガシと撫で安心させる、と言つたもののこちらは海軍、あちらは海賊。戦闘になる可能性は十分にあるので武装はしておく、本気モードで行つて無用な刺激もしたくないので軽装ではあるが。

準備だけしっかり整え船の事は艦長に任せて一人月歩にて飛び立ちモビー・ディック号へ。

甲板に降り立てば当然であるが周囲は海賊しかいない、が雑然とした様子はなく、整然と隊列を組んでいたのはちよつと予想していなかった。

成る程、きちんと規律が行き届いているのか訓練してあるのかわからんがこれは厄介そうだ…そう考えながら平然とした様子で整然と並んだ隊列が開かれた場所を進めばその先には老いて尚堂々たる威容を誇る巨軀。

大海賊白ひげ…エドワード・ニューゲート

世界最強の男、最も海賊王に近い男、世界最強の海賊などの異名を持ちグランドライン後半の海である新世界に君臨する三大海賊の一角であり、多数の島々を縄張りとして保護しておりその強さは海軍大將ですら単独で相手をするのは危険と言われている。

それもひとえに彼の能力によるものでもあり彼の能力は”グラグ



ラの実”を食べたいわば地震人間、彼の力は世界を滅ぼすことさえ容易なのだ。

「えー…と、エドワードさん？ニューゲートさん？」

白ひげの眼前に立ってそう尋ねれば何故か慄然とした面持ちで

「…白ひげでいい、てめえは？」

「はじめまして白ひげ、俺はクリーク、海軍本部少将をやらせてもらってます」

なんでもない口調で答えるが内心は冷や汗だらだらである。

原作では年齢やら病気やらで弱ってたらしいが十数年前だからかどうか不明だが見た限りそんな事は全く無く威圧がビシバシ飛んでくるのだ。

堪らず周囲に視線をやれば手配書なりで見た顔がちらほらあり有名どころで言えば隊長格である不死鳥のマルコやダイヤモンド・ジョズ、他にも複数の隊長格がいる様子である。

「グララララ…そうか、てめえが赤カモメの頭か」

赤カモメは一年程前から囁かれ出した”海軍独立遊撃隊”の異名である。

お陰で海軍や民衆は親しみを込めて”カモメの水兵団”と呼び海賊からは旗印の赤い海軍マークからか血に塗れた海兵と意図してか”赤カモメ”と呼ばれる事が多くなった。

「ああ、言い遅れましたが”海軍独立遊撃隊”の総司令も務めさせてもらってます」

ニコニコと愛想良く答えるが

「てめえ普段敬語使うような人間じゃあねえな、敬語はいらねえから普通通り話せ」

一発で見抜かれた様子である。

「…白ひげの、アンタの話はよく聞いているぜ？  
だがこうして会うのは初めてになるな。」

「グラララララ…そりゃあ、会う機会なんぞ普通はないからな。それに赤カモメの評判はよく聞いている、北の海では大層暴れたそうじゃあないか」

ぐぬぬ、赤カモメって呼ばれ出したの北の海で片っ端から海賊捕まえてたくらいの時期なんだよな、動向はしっかり探られてるわけか、大海賊なんだからたかだか少将の部隊如き歯牙にかけなくていいのに…

## 白髭会談 ドンクリークさん

「ところで赤カモメの頭がどういう用件だ、おれの首を獲りに来たつてのなら一隻でいい度胸だと褒めてやるぞ?」

「誰が戦争の引き金を好きこのんで引くかっての、ここであなたの船と会ったのは偶然だ。」

だが丁度いいと言えば丁度いい、2、3聞きたい事があるんだがいか?」

特に機嫌が悪そうでもないので遭遇したら聞こうと思ってた事を何点か聞いておこう

「グララ：まあいいだろう、言ってみろ」

「まずはあなたの縄張りとなってる魚人島」

「魚人島がどうした、縄張りから外せていうんなら断るぞ」

「とらねえから、俺が言いてえのは縄張りにしたんならしたで人を置くくらいはしとけてんだ。確かにアンタが縄張りを宣言してからは人攫いの類いは殆どいなくなったが、ゼロにはなってるねえんだよ。」

先日ちよつとした用事で魚人島に行ったんだが年に2、3件は誘拐が発生してるそうだが、未遂ならもつと多いらしい。」

「：耳が痛えな、だがそういう事であれば人を置くくらいはするがそれでもいいか?」

「ああ、そつちでそうしてくれるんならいいさ。ただ海軍の立て札だけ多発地域に立たさせてもらったがそれは勘弁な?」

「まあいい、で他はなんだ?」

「アンタはかの海賊王ゴールド・ロジャーが亡き後海賊王に最も近い男と言われているが：アンタはひとつなぎの大秘宝を、ワンピースを探しにラフテルにはいかねえのか?」

「いや、別に興味ねえな。おれはおれで好きにやるさ、別に俺以外に目指す奴は山程あるだろうが」

「いや、それはそうなんだが：」

「で、次は何だ?下らん話ならさっさと帰りな」

白ひげが獲ってくれりやこの大海賊時代も終焉だと思っただが

…まあいいや、こつこつらが本題だ。

「そつちの配下にティーチって男がいるな？彼と話をさせて欲しい」  
流石にこれには少しだけムツとした顔つきになる白ひげ、海軍が  
ティーチって男と会いたいというのだから警戒して当然だろう。

「用件によるな、うちのティーチと話をしたいっていう理由は何だ？」  
「いや、理由も何もアンタならわかるだろ？」

そう言つて懐から四つ折りにした手配書を広げて見せる、そこに書  
かれていたのは

「髑髏覆面 ” ティーチ ” 3億9000万ベリ

オハラにて世界政府の役人を襲撃し怪我を負わせ、マリージョアで  
は天竜人の邸宅に放火、天竜人への攻撃もしたという正体不明の覆面  
男、自称ティーチの手配書だった。

「…わかった。が、うちのティーチじゃあねえぞその覆面は？」

「名前くらいしか手がかりがないから捜査線上に上がってるだけだ、  
とりあえず話だけでもさせてもらえないか？何個か質問するだけだ、  
捕らえようと思つてるわけじゃあねえよ」

その言葉に対し白ひげは本当か？とでも言いたそうな怪訝な表情  
を見せるが側にいた船員に言伝を頼むとその船員は船倉へ走つて  
行つたのだった。

そうして暫く待てば船倉の入り口からドスドスと足を踏み鳴らす  
音が聞こえ扉が開く。

「親父い！俺に客つて聞いたがどこのどいつだ…ああ？海軍？」

扉から出てきたのは大柄な男、だいたい3m程で身長はあまり変わ  
らないか？年の頃は20代程だろう、シンプルな白いシャツと黒いズ  
ボンを身につけ腰には何挺かの拳銃が挿さっている。

「ティーチよ、お前に何か聞きたいことがあるそうだから答えてやれ。  
それから質問するならここでしろ、ティーチをどこか連れて行くのは  
断らせてもらうぞ？」

「わかったわかった、はじめましてティーチ…でいいのか？俺はク  
リーク、海軍本部少将をしている。」

「ゼハハハハ、そうだ俺がティーチだ。知つてるぜアンタの名前、赤の

海軍旗掲げた奴らのボス、鈍熊のクリークってのはアンタの事だろ？  
金獅子を倒したという海軍の英雄さんが俺みたいな一介の海賊風  
情に何の用事だ？」

そう言っつてこちらにガンを飛ばすティーチに対しチンピラみたい  
だなあ…と思いつつ気を取り直して話を再開する

「知つてるとは思うがまずこれを見てくれ」

そう言っつて見せるのは先程の手配書

「ゼハハハハ！俺も有名になったもんだな！」

「よし、自白したな。白ひげ自白したからこいつ連れてつていいか？」

「ティーチ…おれはお前を信じていたんだが…だが自白したのならし  
ようがねえ、おれはお前が一刻も早く罪を償ってシャバに出てくるの  
を待つとしよう…」

そう言いながらヨヨヨと目元を拭う白ひげ

「ちよっ！冗談だ！冗談だからな！で！その手配書はおれじゃねえが  
質問ってのは何だ!!」

思つたより白ひげのノリがいいな…

「手がかりがこの覆面が名乗った”ティーチ”という名前だけでな、  
捜査線上にアンタが浮かんできたから事情聴取しにきただけだ」

「何だそんな事か、この手配書にやあ名前が同じで顔がわかんねえか  
らおれも迷惑してるんだ。」

「とりあえずまず名前は？苗字持つてるならフルネームでな」

「…マーシャル・D・ティーチだ」

「へえ、アンタもDの名前持つてるのか」

「…アンタ”も”？」

おつと失言、ルフィもエースもまだ無名だったな。

「いや、何でもない。血液型は？」

「Fだ、それが何だつてんだ？」

「いや、聞くことが思いつかなくてな。趣味は何だ？」

「ギャンブルと歴史研究、おれに質問をしにきたんじゃねえのかよ」

「いや、そうなんだがどつちかというと実際見ておく事の方が大事  
だったからな。好物は？」

「チェリーパイとケバブだ、なあこれ続くのか？」

「いや、こんくらいでいいだろ。」

時間とらせて悪かったな、じゃあなティーチ。

白ひげ、アンタにも時間取らせて悪かったな、俺はそろそろ戻るとするよ」

そう言つて船に戻ろうと踵を返そうとしたが

「グララララ…まあ待てやクリーク、自分の用事だけ済ませておさらばっていうのは薄情じゃあねえか？」

白ひげに呼び止められた。

…いやな予感がする。

## 白髭手合 ドンクリークさん

どうしてこうなった…!!!

白ひげ海賊団の旗艦でありそれに見合った巨大さを誇るモビー・デイク号、その甲板の上には白ひげ海賊団の船員たちが大勢集まっております。真ん中を開けた円状に人垣ができていた。

これも全て自分の用事だけ終わらせて云々言い出した白ひげの所為である。奴はそう言うのと側にあつた大薙刀を掴み大音声を持って周りに

「てめェら!!場所を開けろお!!!」

そう言つてゆつくりと立ち上がつて更に言つたのは”シキの野郎を倒したつて言うその実力を見せてもらおうか…”などと宣つただ。

勿論あの時はフル装備で今は準備してないだのあれは半ば相討ちに近かつたなど言い募るも取り合つてくれる様子は無し、あれよあれよと言う間に人垣が割れ船員たちに押されて中央へ。

こんな事なら変に刺激しないように…などと考えずフル装備でくれば良かった。

「グララララ…まあ本気ではやらねえさ、覇気も能力も使わないでおいてやろう…が、簡単には潰れてくれるなよ?」

「だったら帰つていいか?今の装備じゃアンタ相手に不安しかないんだが」

そうは言つてみるも取り合つてはもらえないだろう、仕方がないので試作48号と49号を左右の手に構えて向き合う。

軽装状態で身につけているのは防炎、防刃、防弾加工の赤い海軍マークが入つた特注の海軍コートに脚に仕込みブーツ、武器と言えろのはひたすら頑丈に造られた二振りの両刃剣と両腕に嵌められた技術班達が丹精込めて作り上げた新しいガントレット。

半ばガントレットの破損については免れないだろうな、と諦めつつ涙しながら左手のボウガンに特製弾を込めていく

「行くぞおっ!クリークッ!!」

最初に放たれたのは白ひげの大薙刀による横薙ぎ、素直に当たる気は無いので軽く下がって左腕を上げボウガンを撃つ。

一発、二発、三発と鉄製のボルトが発射されるも大したダメージにはなっていないようで

「グララララ：そんなもんか？」

次に放たれるのは下段からの振り上げ、これを敢えて本人に近づく事で躲しもう一度左手を向ける

「グララ、そんな豆鉄砲いくら撃ってもツツツ!!」

余裕を持って喋っていた白ひげの言葉が中断される。

放たれたのは目を焼く様な閃光、予め目を閉じていたクリークはまだしも1回目の三連撃に対し鉄製のボルトが撃たれると思いついていた白ひげはまともに閃光を見てしまい思わず動きが止まる。

そこにクリークが白ひげの膝に足をかけ飛び上がりながら左手の指を右手首の輪っかにかけて引き抜けば仕込まれたワイヤーが引き出されそのまま白ひげの首にかけようとする。

が、白ひげもさるもので首に違和感を感じるや否や咄嗟に首元に手をやった。

おりしもそれがワイヤーと首の間に入った事によりクリークの絞首は不完全に終わり目が見えずともそれが何らかの縄の様なものであると察した白ひげによりギリギリと引かれとうとうバキィツ!!という音と共にワイヤーとガントレットを繋いでた基部が破損、仕込みワイヤーは使い物にならなくなる。

すぐ様拳だけ無防備な頭に一発だけ叩き込みながら首元から離れる。

「グラララ、やってくれるじゃねえか…」

思ったより回復早いなチクシヨウ!?

「だから言ったろうが、メインウエポンもないんだからこんな戦い方しか出来ねえぞ?」

せめて棍があれば良かったんだが…

「…仕方ねえじゃあこの一発だけ耐えてみる、それで終いだ」

そう言っつて片手で大上段に大薙刀を掲げる白ひげ、その姿に片手だ



から本気じゃ無いよね!? グラグラ使ってないよね!? と頭の中で警鐘が響くのを感じる。

大上段から振り下ろされるのは7メートル近くの長さを誇る薙刀であり世界に散らばる最上大業物12工、最高ランクの十二振りが内の一振りである”むら雲切り”。

振るう男は”世界最強”とその名も高き白ひげ海賊団船長である白ひげこと”エドワード・ニューゲート”

一瞬遠い目をするもそれに対応するために両腕を頭上に。

そして響くのはとても大きな、そして不快な金属同士がぶつかる音と木が砕ける音。

「グララララ…やるじゃねえか、叩き潰すかもしれないねえと思ってたぜ…」

そこには手に持つ剣は二本とも半ばから折れ、ガントレットは機構部分はひしゃげ膝をついたクリークの姿があつたがクリークは振り下ろし前のその姿を留めていた。

タネは簡単だ。

二本の剣を逆手に両腕に持ち腕を交差させた上で受け止める体勢を取る、所以交差受けと呼ばれる物に近い。

その上で全身に力を込め普段用いる鉄塊より強力な硬度を持つ”金剛鉄塊”を発動させる。

これは普段使っている鉄塊より硬いが鉄塊拳法こと”金剛体術”の持ち味である動きながらの鉄塊発動が出来ないのが欠点ではある。

が、その防御力は通常使う鉄塊よりも頑丈でありそれに併せガントレットと二本の剣にて受け止めたのである。

余計な手札を見せなくなつたので覇気は使わなかつたがなんとか防げたようで冷や汗ものである。

「ど…どんなもんよ…」

「しかし随分と硬えじゃねえか、何かの能力か？」

いや、身体能力によるものだが? と答えようとしたところでハタと気付く。そうか、ティーチも聞いてるんならそれもやはりか。

「よくわかつたな、俺は”ムキムキの寒”を食つたマッスル人間だ。

己の意思一つで筋肉を強化し銃弾すら弾き返す鋼の肉体を得る能力だ!!」

そう言って両の拳を合わせマチョマチョしいポージングをとってみせる

「…そうか、安心しろクリーク、どんな悪魔の実であれ使い方次第だから気にするな」

「ゼハハハハ、だから親父の攻撃を受け止めれたのか！聞いた事は無かったがまあ確かに実感はしにくい能力だからなあ!!」

怪しまれた気配は無し、白ひげに至っては慰めてくる始末。

真つ赤な嘘であるがこれでティーチが俺を能力者だと勘違いしてくれば、更にそれがティーチがヤミヤミの実の能力者になりいずれやり合う時までバレなければ儲け物である。

そうして白ひげとの手合わせ、白ひげにとつてはお遊びであろうがそれを終え白ひげ海賊団に別れを告げつつシャーロット・アンジェ号に戻るのであった。

はあ、折角技術班が作ってくれたガントレットが…

## 緑の姉妹 ドンクリークさん

「飴」

と、そう一言だけ言って手を出す少女。

白ひげ海賊団が乗るモビー・ディック号と別れ航海は順調に、時折海賊と交戦しつつも無事にファウス島へ到着した。

ファウス島海軍基地に入港し山とある荷物を抱えて海軍基地と別の場所に作られたフレバンス国民の避難所及び白鉛病の治療施設へロビン、ギン、オルガ、アシエ博士と数名の海兵で向かう。

赤い海軍旗を掲げた船が入港するのが見えたのだろう、入口には数名の人間が迎えに出てきておりその先頭には一人の少女がいた。

まだ幼く10歳になつてないくらいだろう、肩までの長さの緑の髪が印象的な少女が腕組みをして立っていた。

そしてこちらの姿を確認するなり走り出し

目の前でジャンプし

両足を揃えて繰り出すのはドロップキック。

とは言え羽のように軽いためダメージは毛ほども無く地面に落ちる前に襟首を掴んでぶら下げる。

「シュガー…挨拶もなくドロップキックはやめろというに…」

そう言つて注意するもプイと顔を逸らす少女の名前はシュガー。

いつだったかルブニール王国にて借金を支払う代わりに身請けした姉妹の妹の方で未だにこちらを敵視しているのか時折攻撃を仕掛けてくるのだ。

「飴」

と、そう言つて手を出すシュガーにとりあえずもので釣ろうという考えで腰のポーチから出したキャンディをその小さな手に乗せてやる。

そつと地面に下ろせば再び走って建物内に戻っていくシュガー、攻撃からの捕獲、飴での懐柔とこの一連の流れは度々繰り返されているがシュガーが懐く気配は無い。

「あの野郎…ボスに対して…」

「野郎じゃないだわさ、しかし随分とお転婆な娘さね」

「アンタも年齢変わらないだろ」

「ふん！アタシはにひやく…いや、アタシはこれでも10歳だわさー！」

「ふん！じゃあやっぱ似たような歳じゃねえか」

勝ち誇ったような顔のギンとギギギ、と悔しそうに歯噛みするオルガの会話を聞きながら入り口まで歩き荷物を下ろす。

「クリークさん、お疲れ様。ごめんなさい、あの子にはいつも言い聞かせてるんだけど…」

そう言つて声をかけてきたのは腰くらいまでの長さがありこちらはシュガーより明るい緑色の髪を持ち年の頃は10代後半、シュガーの姉であるモネ。

「おうモネ、別にいいさワガママは子供の特権さ。それより医術の勉強は順調か？」

「うん、と言つても覚えなきゃいけない事がたくさんあつて大変だけどね…」

そう言つて肩を竦めて見せるモネ。

「モネ！久しぶりね！」

そんなモネに声をかけたのはロビン、最初にあつてこつちと引き合させたのがロビンだったからか歳が同じだったからかわからないがモネとロビンは仲が良い。

「ロビン！おかえりなさい！」

そう言つて抱き合う二人、いやあ小さい頃からずっと海軍の船に乗つて、オハラに戻った後もオハラを出てからも友達と言える人間が作れなかったロビンにようやく仲の良い友達ができてくれて本当に良かった。

そうだ、友達と言えばギンにも子供達を紹介してやろう

オルガは…あれで6歳は可哀想なので書類上は10歳にしたが本当は200歳前後だしどうするかな…

そんな事を考えつつファウス島に残り護衛を務めていたシグマに海獣の肉で作られたハムの塊をあげたり、カフウのメンテナンスを行ったり重篤患者の見舞いに行ったりフレバンスの子供達にオルガ

やギンを紹介したり、と諸々を終えて医療チームの元へ。

そのついでにアシエ博士に施設の案内を兼ねてグルリと一周。途中で背中に飛び蹴りをくらい今度は

「オムライス」

と一言だけ言われたので今夜はオムライスを作ってやるかと考えながらアシエ博士を伴いピュアゴールドを持って今も研究を続けている部屋へ向かう。

「トラファルガー先生、治療はどんな感じですか？」

久しぶりにあうフレバンスの脱出者であり珀鉛病の治療における陣頭指揮をとるトラファルガー・ルークに声をかける。

「ああ、クリーク殿。Dr. インディゴが考案してくれたI・Qを基とした薬により症状の軽減を狙う薬がもう少して完成しそうです、これを基に何とか完治に漕ぎ着けたいとここですが時間があとどれくらい残されているか・・・」

そう話すルーク医師は前見た時より白斑が増えており目元に隈もできていた為寝る間も惜しんで研究に没頭していた事が伺えた。

「ルーク先生？ちゃんと休んでます？」

「フーン…この男はワタシが休めと言っても聞き入れん！天才であるワタシがいるのだから少しくらいなら休んでも問題ないと言うのにまったく・・・」

そうこちらに対して言うのはDr. インディゴ、元々金獅子のシキのお抱えの学者でありシキの助命と引き換えにこちらに協力してもらっている植物分野の研究のエキスパートである科学者だ。

「今回は二人に紹介したい人間がいる、こちらは鉱学博士のアシエ博士だ。」

アシエ博士、こちらはトラファルガー・ルーク医師であつちが科学者であるDr. インディゴだ」

「はじめましてお二方、今日からこちらでお世話になるアシエです。分野は鉱物学、金属などを専門にしています。」

珀鉛病の治療に対し少しでも助けになればと思いきりくんに頼んでこちらに来ました。」

「なるほど鉱物学を専門とされているのですか、それはありがたい」  
「ホウ、珀鉛自体を何とかするとう手はありかも知れんな。クリーク、キサマにしてはいい人材を連れてきたなと褒めてヤロウ」

「はっはっは、確かにその狙いもあるが本題はこっちだ」

そう言つて袋から取り出し机の上に置いたのは溶液に入った黄金の塊

「聞いて驚け、この黄金の名は”ピュアゴールド” 奇跡を可能とした世界を買い取れる程の莫大な価値を持つ金属だ！」

「…すみません金属に関しては専門外で」

首を傾げるルークと

「ピュアゴールド…ウムム、何処かで聞いた気もするんだガナ…」

頭に手を当てて考え込むDr. インデイゴ

その二人に対しアシエがピュアゴールドの特性を説明すると

「何と!!それは本当ですか!?!それでしたらちゃんとした治療法が見つかるまでの時間稼ぎになるじゃ無いですか!!」

「ウムム…何気にヤバイ代物じゃないカ…これは使用にはかなり気を使わなければならんだロウ」

「とにかくこの施設のあちこちに灯りに仕込むなりなんりの形でピュアゴールドのカケラを設置していく予定だ、陣頭指揮はアシエ博士にやつてもらおう。」

それが完了次第アシエ博士には珀鉛の除去若しくは無害化の方向から治療研究をもらう予定だ、何か質問は？」

その後何個かの質問に答え方針が決定したところでそれぞれの作業に入ってもらったのだった。

## 所見報告 ドンクリークさん

「クリークであります、少しご報告よろしいでありますでしょうか？」  
わざわざお隣のファウス島海軍基地まで向かい盗聴電波を無効化する電波を発する希少な白電伝虫を借り受けてセンゴク元帥に連絡をとる。

『おお、どうかしたのか？』

「例の髑髏覆面の捜査上に浮かび上がった白ひげ海賊団に所属するティーチについて報告するであります」

『む、白ひげと遭遇したのか。大事なかったか？』

「道中で偶々行き合っただけなので特には問題無かったですであります、それよりティーチでありますが身長は3mほどと報告にあつた髑髏覆面と同じくらいでした、勿論男性だったでありますね。」

因みに事件当時は奴は白ひげ海賊団と共にいたと言つてたであります、身内の証言故に実際のところは不明でありますが…」

『分かってる点が少なすぎるから何とも言えんな、身長と性別が一致してるだけでは断定はできんだろう。』

それに一応アリバイはあるのか、やはり別の人間か？』

「いえ、そう決めつけるのは早計であります。実は白ひげがかばつており口裏合わせてアリバイを作っているという可能性もありませんと考えます。」

オハラについては白ひげの関与は不明ですがマリージョアについては彼のナワバリである魚人島、そこから連れ去られた魚人達を解放する為に送り込んだという線もあります。

それから戦闘力については不明ですが白ひげの船に乗っている以上、ある程度の戦闘能力は持っているでありませんからCP9を退ける事も不可能ではないのではないかと。

それより自分が気になったのは奴は自分が聞いた趣味に対して歴史研究と答えたであります、覆面髑髏はオハラの件に関与しているのでもしかしたら、という可能性もあると考えるであります」

『なるほど…お前の結論は？』

「個人的な意見と致しましては名前、体格、性別の一致及び趣味の歴史研究というのが気になるであります、戦闘能力もかの海賊団に所属しているのならある程度はあるでしょう。」

よって黒ではないでしょうが白とも断定出来ないのでグレーと言ったところであります、とりあえずもう少し情報を集めてみるつもりであります。」

『そうか、こちらでもその件は政府に報告しておく。ああ、後お前にはしばらくしたら北の海に行ってもらう事になってた筈だが…』

「はい、だいたい一月後にこのファウス島を出立予定であります。何かあったでありますか?」

『北方司令のステンレス少将には伝えたがドフラミンゴのここについているこちらの手の者と連絡が数週間前から取れなくなっていてな、こちらから奴の居場所をこちらに伝えるのは不可能になったのでドフラミンゴに関しては上手いこと探してくれ』

…ああ、コラソンか。

「はっ！了解したであります、後でステンレス少将にも連絡をするであります！」

『頼んだぞ、それではな』

そう言つて電伝虫は切られたのでこの口調面倒だな、と思いつつ次は“四海制覇”によつて北方方面軍総司令、北の海での海軍のトップに抜擢されたステンレス少将へ連絡をとるのであった。

そして日々の業務を色々こなしつつファウス島に滞在して十日ほど経つた頃、時刻は夜も遅くクリークが書齋にて机に向かいカリカリと治療計画の進捗についてまとめっているとコンコン、とノツクの音が響いた。

こんな時間に誰だ?と首を傾げつつも“どうぞ”と声をかければ扉が開き入ってきたのは二人の少女

「夜遅くにごめんねおじさま、少しお話があるんだけどいいかしら?」  
「遅くにごめんなさいクリークさん、ちょっとお願いがあるんだけどいい?」

ロビンとモネの二人が訪ねてきたのであった。



「とりあえず立たせたままにもいくまい、と思いながら二人に声をかけて部屋に入ってもらい適当な所に座ってもらおう。

自分も立ち上がり飲み物の用意をしようとすれば

「おじさまは座ってて、私とモネでやるわ」

そう言つて部屋の一角に作られたミニキッチンへ二人で向かいモネに”おじさまはコーヒーにはミルクと砂糖をたっぷり入れるのを好むから必ずつけてあげてね?”などと教えつつ三人分のコーヒーを淹れこちらに戻ってきて再び椅子に座った。

「さて、まずはロビンだな。話というのは何だ？」

「えっと…オハラでの事件の後おじさまが私に言つた事覚えてる？」

その話か…

「ああ、覚えてるさ。”5年間で一人でもやっていけるよう色々教えてやるから調べるのはそれまで待つてくれ”だろ？」

「うん、私もねもう16歳になったしそろそろ独り立ちする頃かな？と思つておじさまにそれを言いに来たの。」

「…歴史の本文を探す、という意味は変わらないんだな？別にここにも構わないんだぞ？」

正直手元にくれればこちらで守つてやる事は可能だ、原作通りにいざれクロコダイルの元に行くにせよルフィの元に行くにせよ

「…この6年間、おじさまとの生活は楽しかつたわ？」

正直言つとずっとここにもいいかなくて思つた事もある、そんな風に思つてたからズルズルと一年も経つちやつたけども…でもお母さんや博士の遺志を受け継ぎたいと言うのもあるしそれに何より…」

「なにより？」

「それになりよりずっとおじさまの庇護下にいたまま…ずっとおじさまに護られたままというのがイヤなの」

護られるのがイヤ…か、確かにロビンはこの6年ほどでかなりの実力をつけ海軍でも大佐クラスくらいなら完封できる実力を手に入れただろう。

が、そんな実力を持つてからという理由なら論す必要があるが…

「あ、勘違いしないでね？自分が強いから護られるのがイヤとかそんなのじゃないわ？」

あ、違ったのか

「うん？となるかどうかという理由だ？」

「私はね、おじさまの庇護下じゃなくておじさまの隣で肩を並べられる存在になりたいの。」

大それた夢かもしれないけどそれならいつまでも護ってもらってばかりというのもなと思って」

：肩を並べられる存在か。

ふと6年前のあの時を思い出す、涙を流し、それでも悲しみを押し殺し毅然と前を向き朝焼けを受けて輝く少女

「立派になったもんだな…」

思わずそんな言葉が口に出る

「おじさま？」

「いや、なんでもない。とりあえずその話については明日細かい事を決めよう。」

今日はもう遅いし寝た方がいい、睡眠不足はいい仕事の敵だ。それに美容にも良くねえからな」

「ふふっ、おじさまも人の事言えないわよ？」

「男はいいんだよ、さて後モネのお願いってのもあったな。お願いってのは何だ？」

## 人見知り ドンクリークさん

モネのお願いというのは簡単だった。

”戦い方を教えてほしい”との事だったのでまあ自衛能力くらいは必要だろうと考えこれを了承。

理由を聞いてみれば色々ロビンの話を聞いてやっぱりある程度戦える力は必要だろうなと感じたらしい、色々世の中は物騒だしな。

取り敢えずもう夜も遅いので二人を返そうとしたところでこちらモネに聞きたいことがあったのをハタと思い出す。

「ああそう言えばモネ、俺も少し聞きたい事があるんだが…」

その声に部屋を出ようとしていたモネは振り返り

「ん？どうかしたのクリークさん」

と小首をかしげる。

「いやシュガーの事なんだがな、どうにも俺はあの子には警戒というか威嚇というか嫌われてるようだから懐柔するにはどうしたらいいと思う？」

と出会うたびに毎回攻撃をけしかけてくるシュガーに関して姉であるモネに聞いてみた、ひよつとしたら姉であるモネなら何かいい案を出してくれるかもしれないと思いつつ。

そんな質問にモネはしばらく頭に手を当て

「あー、ひよつとして気付いてない…？いや、まあわかりにくいと言えはわかりにくいし…」

「…モネ？」

一人で小声でぶつぶつ言うところらに向き直り言った

「クリークさん、あの子は十分あなたに懐いてるわよ？」

「いや、毎回攻撃されるし何かしらの要求を受けるのだが…」

「あー、やっぱ気付いてなかったのね。あの子がそういう風に遠慮なくワガママを言うのってクリークさんにだけなのよ？」

あの子はあの男のせいで大人が苦手になってるわ、ここに來てからも他の大人達には近づかないもの。

あの男の元から救い上げてくれたあなたは別だけどね、ただ好意を表すのが苦手なだけよ。

あの子があなたに持っている印象を言葉にすれば、このひとはいいひと、たすけてくれたひと」とかそんな印象だから嫌われてるなんて事はないから安心して?」

とモネは説明してくれた。

うーむ、嫌われてはいないのか…その言葉に日々を思い出す

ドロップキックをかましてくるシュガー

こちらの注意にはそっぽ向くシュガー

食事中苦手な苦いものはこちらのプレートにそっと置くシュガー

他の人と話をしてる時に遠くから木の実をバシバシ投げてくる

シュガー

…あれで?

「わかった、まあ心に留めておくとする。さて、話は仕舞だ長々とすまん。二人とももういい時間だからおやすみ」

「おやすみなさいおじさま」

「おやすみクリークさん」

そんな二人を入り口で見送り再び机に向かう、せめてこれだけでも纏めておきたいからなと思いつつロビンが淹れてくれたコーヒーを一口

うん、ミルクも砂糖も利いてて甘くて美味しいな。

そんな話し合いがあつて次の日

「よし! 全員揃つたな! では今から戦い方についての授業を始める!!」

珀鉛病の治療施設の裏手、土が剥き出しとなっており広い場所にその姿はあつた。

赤い海軍マークの入った特注の海軍コートを羽織つた大男、その対面には十代半ばの白い髪の少女と緑の髪の少女、10代前半であろう黒い短髪の少年、それからまだ10歳になっているかどうかの金髪の少女と緑の髪の少女

キリツとした顔をしていたり軽く微笑んでいたり明らかに面倒臭

そんな表情を浮かべてたり何も考えてないようにポーッと立っていたり顔に浮かべる表情は三者三様。

「なんでアタシまでやる必要があるさね…」

明らかにやる気がなさそうな表情でぼやく金髪の少女で褐色の肌に赤い瞳ととても特徴がある容姿を持っている彼女の名前はオルガ。

見た目こそ10歳前後だが実はなんとおんとし200歳オーバー、因みに公的には現在10歳となっている。

彼女はとある事情で今でこそ普通に成長するようになったが今まで体がその成長を止めていた為である。

「そこ…私語は慎め！知ってるぞ？指輪を外してからは毎日ゴロゴロ、食事も大好物の肉ばかりだろうが！

少し前よりふくよかになってるからこのままだと前のアシエ博士みたいにブクブクになるぞ？」

オルガはその言葉にしばし無言になり

「なんでもないだわさ、流石にアレみたいになるのはいやさね…」

脳裏にその姿がよぎったのであろう、それだけはゴメンだとちよつとはやる気を出したようである。

「ボス、戦い方を教えると言ってもここにいるメンツだと戦闘力に差がありすぎると思うが何を教えるんだ？」

そう尋ねるのは黒髪の少年、灰色の動きやすそうな上下を着ており腰にはトンファーと呼ばれる打撃武器が吊ってある。

彼の名前はギン、詳細は割愛するがクリークがスラム街で拾ってきた少年であり元海軍大将の指導のもと5年間の訓練を積んでおりまだ13歳でありながら大人顔負けの戦闘力を持つ少年である。

「えーと、クリークさん？私とシュガーは初心者だから手加減してね？」

恐る恐る言うのは豊かなプロポーションを持ち緑色の長髪を首の後ろで結んだ10代半ばの少女。

彼女はモネ。妹である緑の肩までくらいの髪でポーッと立っているシュガー共々姉妹でクリークが保護した少女である。

あのままだと人買いに売られていた可能性も高かった為クリーク

を恩人として慕う少女である。

「あら、全く戦闘経験が無いわけじゃないでしょ？今でもありありと思い出せるわ、アイスピックを持ってこちらに攻撃を仕掛けてきた時の事…」

そうモネに言うのはロビン、ポニーテールで纏められたその髪は本来はとても艶やかな黒髪であるがとある事情のため変装として髪の色を変えており歳はモネと同じく豊かなプロポーションを持つ16歳の少女でこの中でも一番クリークとの付き合いが長い。

「安心しろ、今日は口頭での説明と軽い運動だけだ」

以上5名が今回の戦闘授業の参加者である。

## 治療計画 ドンクリークさん

「とりあえずまずは戦い方を教えてくれと言っても色々あると言う事を伝えておこう。」

まず俺は海軍の人間だから敵を倒す為の戦い方だ、これはギンにも当てはまる。

次に自分の身を守る為の戦い方、これに当てはまるのはロビンだな。

他には敵から逃げる為の戦い方や足止めの為の戦い方などがあるな。

個人的に言えばモネやシュガー、オルガには自分の身を守る為の戦い方、わかりやすく言えば護身術を身につけてもらおうと考えているがどうだ？」

「わたしは構わないわ、別に海賊を倒しに行くわけじゃないし」

「アタシも賛成さね、というか別に運動がてらだからどちらでもいいさね」

「どっちでもいい」

「よし、じゃあとりあえずまずは体づくりからだ！じゃあ三人共…いや、五人共この建物の周りを走れ！」

そう言つてパアンと手を打ち鳴らす。

それと共に軽く走り出すロビンとギン、遅れてモネが二人に続いて走り出しオルガとシュガーは明らかに「えー」という顔つきをしている。

「よし、じゃあ一位になったら今日の夕食は好きなものを作ってやる」

仕方ないのでそうハツパをかけてやれば

「肉！それも分厚いやつがいいさね!!」

「ふわふわたんぽぽオムライス!!」

そう叫んで先に行つた三人に続いて走り出す二人。二人とも単純だなあと思ひながらその背を見送るとその場にあぐらをかいて座り込む。

すると建物内からドタドタと誰かが走ってくる足音。

何事だ？とそちらに顔をやればルーク医師、D r. インデイゴ、アシエ博士の三人が紙束を片手にこちらに走って来たのだった。

「三人共どうかしましたか？」

そう声をかけると三人は膝に手をつき呼吸を整えて捲し立てる

「クリークくん！やつとだ！やつと目処がたったんだ!!」

「落ち着けルーク、それではわからないダロウ」

「クリーク君！珀鉛病の治療の目処が立ったんだ！これを見てくれ!!」

そう言つて手に持った紙をバサリと広げるアシエ博士。因みに彼はその激太りしていた姿が嘘のようにスラリとした昔の肉体に戻っている。

これは珀鉛の研究過程で彼が作り出した”スリムメタル”なる脂肪を急速燃焼させる不思議金属を精錬し自分に投与したからである。

”アルケミダイエツト”なる言葉を掲げてこちらに持ってきたがアルケミの名がどんなのを引きつけるかわからない為その名称は却下しなんの変哲もない”スリムメタル”なる名前にしてもらった。

そして彼らが口々に言う言葉を纏めればまずはピュアゴールドで珀鉛病の進行を止める、これが第一段階。

次にメルヴィユに生息する進化を促す薬草、”I・Q”を原料としD r. インデイゴが作り出したI薬を投与、珀鉛に対して体にある程度の耐性を持たせる、これが第二段階。

そして第三段階でアシエ博士が基礎理論を完成させた珀鉛を吸収する金属を投与し最終段階で集まった体の一部に凝縮した珀鉛を一部臓器ごと抽出、というものらしい。

「臓器を一部抽出しなければならぬが今できる方法としてはこれが精一杯でね…」

「仕方あるまい、背に腹は変えられないカラナ」

「早ければ半年以内に投与を開始できる見込みさ、とりあえずまずは材料を揃えないといけないがね」

「気を落とさないで下さいルーク医師、これで珀鉛病の患者達に光明が見えたんです！三人共お疲れ様です！必要な物資は直ぐに手配す



るので後でリストに纏めて下さい！」

人材を、資材を、お金を集めた甲斐があった。

良かった、これで多くの人が救える、ルーク医師も奥さんのレモさんも、フレバンスの連れ出した他の大人達も、シユガーと歳が近いこともありとても仲が良いラミちゃん含む子供達もその面倒を見ているシスターも。

「良かった…本当に良かった…」

そう考えながら走らせた五人を忘れて急いで研究室に向かい詳しい話を聞きに行くのだった。

そうして五人を走らせていた事を思い出した時は既に夕方、様子を見にいけば息も絶え絶えとなり倒れ込む五人がおり平謝りしつつそれぞれの大好物を作る羽目になったのはまあ蛇足といえものだろう。

ようやく珀鉛病に対しての治療の目処も立ち、諸々の用事も片付いたので

「じゃあ行ってくる、すまんが長くなると半年くらいかかるかもしれない、ロビンの独り立ちに関してはその後になるからもう少し待っててくれ」

ファウス島に来てから一月、そろそろ任務へ向かう事となりファウス島の皆に別れを告げカモメの水兵団の旗艦であるシャーロット・アンジェ号へ向かう。

「本当に私も行かなくて大丈夫？」

「ああ、ロビンは俺が向こうに行ってるあいだ他の子達を見てやってくれ。」

カフウは連れて行くが護衛としてシグマも残していくしそれに独り立ちとなればあいつらと会うのも簡単には行かなくなるからな、今のうちにいっぱい遊んでおけ」

「ぐるぐるー」

「安心しろロビンねーちゃん、ボスの事はおれが見ておくから」

任せろ！と言わんばかりに胸を叩くシグマといつも灰色の上下に両腕の鋼鉄製のガントレット、腰にはトンファアを吊ったギンが言う。

そう、今回ロビンは留守番で北の海に行くのは俺とギン、カフウ、それからカモメの水兵団の面々である。

ロビンは今年で独り立ちし西の海でしばらく過ごしそこからグランドライン入りする為この新世界まで気軽に来る事は出来なくなる。それならば俺が北の海に行ってる間はここにいてもらいゆっくりしてもらおうという算段である。

西の海ではあえて存在を見せる為変装は解いてもらう予定なのでゆっくりもできないだろうからな。

モネやシユガーにも別れを告げて(どこからか拾ってきた木の実をビシバシと投げられたが)ちゃんと戻ってくるから安心しろ、とぼんぼんと頭を撫でて本部から届いた新武装や物資を積み込み北の海へ出立する。

さて、ここで少しこの世界の地理について説明しよう。

この世界はまず赤い大陸(レッドライン)という惑星を一周する大陸がありこれでまず二つに分けられる。

そしてそのレッドラインと垂直に交差するグランドラインと呼ばれる海域がありそれでさらに分けられ丁度4等分された形となりそれぞれ”東の海(イーストブルー)”、”西の海(ウエストブルー)”、”南の海(サウスブルー)”、”北の海(ノースブルー)”という風に分かれている。

位置的に言えば東の海と南の海、西の海と北の海という形でレッドラインに遮られており今いるファウス島は西の海と北の海の間横たわるグランドライン後半部、通称”新世界”と呼ばれる位置にある。

この為ロビンが独り立ちした場合西の海からグランドラインに入れば東の海と南の海の間横たわるグランドライン前半部、通称”楽園”に行く事になりそうなればこのファウス島に来るのはこの星を半周以上して来なければならぬと言う事なのだ。

それならば西の海から新世界に入ればいいという話になるがそう簡単にはいかない。

楽園、新世界共にグランドラインの両側にはカームベルトと呼ばれ

る海域が存在しここは波も風もなくとても穏やかな気候でありそれ故に超大型海王類の巣となっている為直接グランドラインに入るのは自殺行為となっているのである。

とは言えこのシャールロット・アンジエ号や本部所属の軍艦なんかは船底に海棲石と呼ばれる海のエネルギーを発する不思議鉱石が敷かれている為海王類にこの船の存在を気付かれる事なく安全にカームベルトを抜けることができるのだ、長時間その場に留まってなければであるが。

とにかくまずは北の海へ、任務としては活発化している北の海の非合法海賊達の捕縛及びその中心となっているドフラミンゴ・ファミリーの位置の搜索。

個人的な目的としてはコラソンやローといったオペオペの実に関する事柄で二人の身柄の確保などが目標となる。

はてさて上手くいけばいいのだが…

## 北の海へ ドンクリーク

まずは”四海制覇”という大規模人事により新設された各方面軍の中で北方方面軍総司令として着任したステンレス少将に連絡をとる。

ステンレス少将は海軍の歴も長く戦闘力も高い為なにかと騒がしい北の海に着任してもらった各方面軍司令の中でもベテランの将校であり、彼に連絡をとって詳細を聞いたところそれまではセンゴク元帥の情報により補足できていたドフラミンゴ・ファミリー及びその船であるヌマンシア・フラミンゴ号の消息が情報の消失により二ヶ月ほど前から途切れているとの事であった。

因みに情報が途切れるまでの進路はあちこちの島に寄りつつグランドラインの入り口であるリヴァース・マウンテンへ向かっていたとの事である、十中八九グランドライン入りを計画しているのだろう。だが残念だなドフラミンゴ、お前の旅路はこの北の海で終わらせてやる。

通信を切り指笛を吹いてトリトリの実モデル”鷲（イーグル）”を食べたガトリングガン、悪魔武器のカフウを呼び寄せカフウがボスとして君臨する鳥群の一つ、カザミドリ部隊を招集、カザミドリ部隊は主にカモメなどの海を縄張りとする鳥達を集めた部隊でありこれらは主に高度からの索敵を行わせている為彼らに餌を与えつつヌマンシア・フラミンゴ号の搜索を行ってもらおう。

数日もすれば情報が集まり現在位置も判明、直ぐにシャーロット・アンジェ号にて急行、第一段階でまず見つかる前に夜の帳もおり真夜中の寝静まった頃合いでこっそりと海中から泳いで錨を下ろし停泊する船に近づき船底に自分のビブルカードの親紙を返しがついたナイフで突き刺しておく、これでちょっとやそつとでは抜け落ちない筈だ。

このビブルカードというものはグランドライン後半部、新世界にしか存在しない店で自身の爪を混ぜて作られる不思議アイテムで別名”命の紙”と呼ばれている。

これは不思議な特性を持っており一部を破りつつ床などに置く  
と、カードの親紙の方に向かってジワジワと動くのだ。

濡らしたり燃やしたりしても平気であり他にも爪の持ち主の命が  
消えかかるとコゲて小さくなり、元気になる元元大きさに戻るとい  
う特性がある。

今回はこの親紙に子紙が引き寄せられる特性を利用し親紙をヌマ  
ンシア・フラミンゴ号に取り付け、子紙をこちらが保持する事により  
常にヌマンシア・フラミンゴの元へ行く事ができるというゼファーの  
おっさんから教わった追跡術である。

しかし流石にまだグランドラインに入っていないとあって誰も見聞  
色の覇気など身につけていない為何の妨害も無くスムーズに事を済  
ませた。：とかここで船底に穴でも空けて沈めてしまえば早い  
話だが流石に子供達まで殺すのは気が引けるし流れが読めなくなる  
のでやめておき工作活動だけに留めておく。

次に第二段階として次の日の夜に今度はこっそりと後ろから泳い  
で近づきバレないように船内にイシズミ二世をリーダーとした10  
0匹程の鼠を送り込む。これは普段は船のあちこちに潜んでもらい  
いざという時はイシズミ二世の指示の元この船に対しての妨害、攪乱  
を行なってもらおう手筈だ。

そしてこれも拍子抜けする程あっさり終わり次に第三段階へ、今  
度は白昼堂々シャーロット・アンジェで姿を現し襲撃を仕掛ける。

距離をとりつつ砲撃を行い相手が逃げの一手に入ったところでそ  
のまま追討はせずに見送る。

「ボス、追わなくていいのか？」

「いや、今はまだいい。足を止めさせるならそれこそ俺が泳いで行っ  
て舵でももぎとれば済む話だ、奴らの船の場所はいつでも見つけられ  
る上に俺の予想が正しければ奴にはまだやってもらおう事があるから  
な」

そう言った事で納得したのかギンは「成る程…」と頷きつつヌマ  
ンシア・フラミンゴ号を見送るのであった。

そして1日開けてビブルカードを頼りにして再び追跡、程なくして

見つけたヌマンシア・フラミンゴを遠目にクリークは本部から送られてきた新武装の一つである弓、幾重にも縊られた弦と幾重にも重ねられた弓身が軋みを上げながらゆっくりと構える。

”雉鳴（きじなき）”と名付けられたこれは弓身も弦も”白尾棍”と同じく合金で作られており、弦は幾重にも縊り合わされ尋常ではない丈夫さを持ち、弓身は圧縮された複数種の合金の板を何枚も重ねて整形された俗に”複合弓”と呼ばれる種類のもので作られている。

カモメの水兵団の猛者達が数人掛かりでも弦を張ることが出来ない程の凄まじい弾性を持ち、常人では持ち上げることすら出来な来ぬその身の丈の半分はある大弓を軽々とクリークは引き絞る。

勿論そんな馬鹿げた弓では木製の矢が耐え切れるはずも無く矢でさえも圧縮鉄で作られた特別性のものであった。

そしてその鈍く黒く光る矢は放たれると本来山なりに飛んでいくであろうところを、大気を貫きながら500m近くの距離を真っ直ぐに標的に向かい刺さるどころかそのまま貫通して風穴が開けられる。

非常にゆっくりとした動作ではあるが見聞色まで使い相手の位置を把握、腰の矢筒から鉄製の矢を取り出し鍛え上げられたその肉体で大剛弓に矢を番えキリキリと引き絞り目標に狙いを定め撃ち抜く。

そうして十数本ほど撃ったところで矢筒へ伸ばした手が空を切った。

「…今日はここまでだな」

当然そんな馬鹿げた矢をいくら海軍とは言え大量に増産する事はなく”試作兵装群”の一つである為そこまでの数は無いのであった。

「当たったのは半分くらいか、直射ならまだマシとは言え全部当てるのはやはり厳しいか…」

撃った数の半数程の風穴を空けつつも逃げ出すフラミンゴを象った船首のその船を双眼鏡で見送りながらクリークは呟く、まあ帆や舵など動かなくなるような場所は狙ってないので当然ではあるが。

一方その頃襲撃を受けていた側は

「くそっ!!赤カモメの野郎っ!!」

サングラスをかけた若い男が苛立たしげに所々に穴があいた船の

縁を蹴りつける。

ドンキホーテ・ドフラミンゴは端的に言っても苛立っていた。コラソンがローの病気を治してくる、という書き置きだけ残して船を降りて二ヶ月程、あれだけ頻繁にあった海軍の襲撃もパタリと止みようやく海軍も諦めたか、と安堵していたところにかつて北の海の家賊達を次々と捕縛していくつもの辛酸を舐めさせられた”海軍独立遊撃隊”こと海賊側では“赤カモメ”の名前で恐れられる赤い海軍旗を掲げた集団の登場であった。

当然海軍側に潜ませた伝手により調べはついている。

率いるのは海軍本部少将であり”鈍熊”の名を持つクリークという男で10代から海軍に所属する叩き上げの海兵、かつて中佐の頃に金獅子の足を奪うという大金星を上げその功績を持って大佐へと昇進、その後今の部隊の前身と思われる”海軍独立中隊”と呼ばれる部隊を率いて東西南北の海及びグランドラインの巡回を行っていた。

そしてその頃インペルダウンに収監されていた金獅子のシキが脱走しており見事にこれを討ち破り再度インペルダウンに投獄している。

その後准将へ昇進、ここで一旦赤カモメは解散しており奴はナバロ要塞の司令官を数年程務めあげその後少将へ昇進した時にこの部隊を強化した上で復活。その後はこの北の海で味わっている通りあちこちの海に出没しては海賊を捕縛して回っているという男であった。

戦闘スタイルは武器兵器を纏ったり棍を用いて戦ったりと戦闘力はかなり高いらしく他にも”公認海賊”の制定や海軍新体制の発案など頭もきれる事が予想される。

しかし問題は何故こちらの場所が割れているかだ。てっきりコラソンが降りた後に追手がかからなくなったから奴が裏切っていた可能性もあるかもしれないと考えてたが…

仕方ねえ、予定変更だ。

そう決断し秘密裏にヴェルゴ、海軍本部にスパイとして潜ませた部下に細心の注意を払い連絡をとる。

新たな指令として”海軍独立遊撃隊へ入り込め”という指示を出す為に。



## 新人配属 ドンクリーク

「G5への異動はいいのかね？」

「はっ！やはりあれから色々考えたところ自分はクリーク少将率いる  
”海軍独立遊撃隊”への異動を希望します！」

「ふむ…まあよからう、ところで左頬のハンバーグだが…」

「ヴェルゴです!!」

そんなやりとりが本部であつたらしく目の前には原作では本部中  
将まで上り詰めた男にしてドフラミンゴ側のスパイであつたヴェル  
ゴがいた。

少し時間は遡つて

センゴク元帥からドフラミンゴの捕縛に関して新しく人員を送る  
との事で俺はギンと共に楽しみにしていた。

なんでも海軍に正式入隊して一年程で武装色の覇気を使いこなす  
才能を見せ武装硬化を会得しておりその活躍には目をみはるものが  
あるとの事。

現在27歳で若手の中ではエースであり現在の階級は少尉であり  
本人の希望でこちらに配属という事らしい。

これはなかなか有用な人材だと到着の知らせを受けて出迎えに出  
てみればどこかで見たサングラスに左頬にはレタスがくつついた男。

「今日からこちらに配属になります、ヴェルゴです！」

ヴェルゴじゃねーか!!

そんな事は露知らず、その頃北の海であちこちの病院を回っていた  
コラソンことロシナンテとロー

一隻の小さな船に黒い鳥の羽がついたコートをきた特徴的なメイ  
クを施した大男と帽子を被り白い白斑があちこちの肌に浮かび上  
がったまだ幼い少年が乗っていた。

「…そーいやロー、お前あの赤い海軍旗を掲げた船になんかあるのか  
？」

コラソンが前から気になっていた事をローにそう聞けば

「…あいつらは俺たちのとこに、フレバンスに来たんだ。」

そして助ける、なんて事言っておきながらみんなを殺したんだ！だからおれは海兵が嫌いだ！奴らは逃げだしたっていう王さまを迎えに來ただけでおれ達の事なんかはなっから殺す気だったんだ！

だから政府のやつも嫌いだ！吐き気がする!!」

「ロー…」

それを聞いたロシナンテはしばし考える。

ローには内緒にしており、今こそドンキホーテ・ファミリーにてドンキホーテ・ドフラミンゴの弟として2代目コラソンと名乗っているが、実はその正体はセンゴクの指示で潜り込んでいる本部海兵ドンキホーテ・ロシナンテ。

それ故に海軍独立遊撃隊の事もそのトップも知っており同じ海軍の人間であるクリークの人となりも知っているがとてもそんな事をする男とは信じられない。

ひよつとしたらこれは何かあるのかもしれないと思いつつ涙を流すローを慰めながら考えるロシナンテであった。

そしてそんな事を考えられているとは知らないクリークだったが

さて、とりあえず今のところの情報を纏めておくか、そう思い腰のポーチから使い込まれたメモ帳を取り出す。

こちらの第一目的はドフラミンゴの捕縛、そして余裕があればコラソンの救出及びローの確保。

幸いというかなんと言うか原作の方でコラソンがスパイとしてドフラミンゴに露見する原因となったヴェルゴ、ドフラミンゴの指示で海軍に潜り込んでいたスパイはなんの因果が何故かこっち、海軍独立遊撃隊にやって來た。

まあドフラミンゴの指示であろうがとりあえずそれとなくどうやって追いかけてるのかを聞いてきたのでヌマンシア・フラミンゴ号の船底に取り付けたビブルカードの事は伏せつつ”勘だ”と答えておく。

ヴェルゴは”…勘…ですか”とえらく納得してなさそうな感じであったが。しかし捕縛するとは言えかの一味は誰も彼も一筋縄では

いかないだろう。

すっかり薄れた原作知識を絞り出して思い出しつつ周囲からもドフラミンゴ・ファミリーの情報を集めて紙に纏める。

一味のボス、ドンキホーテ・ドフラミンゴ。

イトイトの実際の能力者にして原作では元の懸賞金は3億7千万であり天上金を積んだ船を襲撃、これを人質にする事によって七武海に加入した男でありとある計略によりドレスローザ王国の国王として君臨していた男である。

とは言え現段階では懸賞金額7000万の普通の海賊に過ぎず、ついでに天竜人が減りその分天上金も世界政府との交渉で減額させる事ができたので分散していた護衛も厚くなったからそんな簡単に人質にはできないだろうしな。

とにかくこのドフラミンゴを筆頭にベタバタの実際の能力者であるトレイボル、ヒラヒラの身の能力者であるディアマンテ、イシイシの実際の能力者であるピーカ、それから海軍にスパイとして潜入しているヴェルゴ。

この四人を筆頭にアトアトの実際の能力者であるジョーラ、能力こそ持たないが類稀なる格闘センスを持つラオG、トントンの実際の能力者であるマツハヴァイス、スイスイの実際の能力者であるセニョール・ピंक、パムパムの実際の能力者であるグラディウス。

そしてまだ子供ではあるがグルグルの実際の能力者であるダスヤン：あれ何か違う気がする。それからブキブキの実際の能力者であるベビー5とまだ5歳にもならないであろう闘魚と呼ばれる特殊な魚の半魚人であるデリンジャー。

：層が厚いなあ、どいつもこいつもクセが強く一筋縄ではいかなかっただろうがそれを纏めるドフラミンゴも大したものだな、兎に角決戦は原作ではオペオペの実際の取引が行われるタイミングだな。

とりあえず後でその辺りはそれとなく探ってみるとしてまずは目の前の事から片付けるか。そして手帳をパタンと閉じてポーチに仕舞う。

目の前には十数隻の海賊船、奥にはヌマンシア・フラミンゴ号の姿

も見える。

思った通りやはりこちらを沈めべく数を揃えてきたか。

…だが舐めるなよ、こちらは一隻といえどこれでも俺が手塩にかけて育てた兵と技術班が頑張ってくれた戦艦だぞ？

果たして十数隻で足りるかな？

## 作戦開始 ドンクリーク

そさくさと逃げていくヌマンシア・フラミンゴ号を見送りながら海兵達に指示を出す。

おそらくこの船を沈めるためにドフラミンゴが集結させたであろう海賊同盟はシャーロット・アンジェ号とその船にのるカモメの水兵団の団員及び過剰火力を身に纏ったクリークの前に数時間と保たず全て大破か撃沈：率直に言つて戦力が少なすぎた。

そして捕虜をゴスゴスと小突いて聞いたところによればやはりドンキホーテ・ドフラミンゴの発案でなにかと面倒な赤カモメを包囲して沈めるために組まれた同盟であつたらしい。

うちを相手にしたきやせめて10倍は持つてこい、などと思いつつ捕虜を確認、公認海賊は居らず全て非合法の海賊だったので全員縛つて付近の海軍支部に連行する。

まあ縛り首になるか監獄行きか知らんがついでにそこで電伝虫を借り受けセンゴク元帥に連絡をとつておく、船にも搭載しているがこつちの方が盗聴なんかの心配はないからな。

そして海軍本部元帥執務室、そこでセンゴクが業務をこなしていると電伝虫が鳴き出した。

「わたしだ」

『お疲れさまです、クリークであります』

「おお、クリークかどうだそつちは」

『こちらは特に問題ありません、強いて言えばドフラミンゴの幹部であるコラソンが何やら病院を襲撃していたりドフラミンゴが逃げの一手に入っているというくらいですかね。』

とりあえず無用な刺激をしないようにコラソンはまだ捕縛していませんが捕えますか？』

その言葉にギクリ、となるも

「ま、待てクリーク：この電伝虫はどこからかけている？」

『ご安心を、海軍支部のもので盗聴の心配はありません』

「ふむ、実はわたしがそちらにドフラミンゴの居場所の情報を数ヶ月

前まで流していたのは知っているな?」

『はあ、情報が流れてこなくなつたため自力で探し出しましたが…』

「その情報を流してたのが奴だ、ドンキホーテファミリー幹部コラソ  
ンことその正体は海軍本部所属のロシナンテ中佐だ

だから逮捕は不要、お前はそれを念頭に置いて行動してくれ」

逮捕されても大いに困るので真実を教えてください

『了解したであります、それからお聞きしたい事があるのですが…』

「ん? ああ、何なりと聞くがいい」

『単刀直入に聞きます、海賊と政府で悪魔の實の取引があるのは事実  
ですか?』

「ブフツ! ゲホツゴホツ!! クリーク何処で知つた!? トップシークレツ  
トだぞ?」

その言葉に驚きお茶が気管に入って大きく咳き込むセンゴク

『非合法の海賊相手にわざわざ取り引きなどするまでもありません、  
さっさと捕縛したいので相手の海賊の動きを教えてください』

「そうは言ってもお前…そう簡単に見つかるもんでも…」

『ドフラミンゴが嗅ぎつけているようです、奴に奪われますよ?』

その言葉に少し考えたとそれで奪われては元も子も無いと考えた  
のか

「…一月後にルーベック島だ。相手の海賊は”デイエス・バレルズ”、  
知ってるか?」

と取引の日時と場所を教える

『ああ、海軍の裏切り者…確か元・海軍准将でしたか?』

「ああ、その男で間違いない…わかつた、バレルズについてはお前に任  
せる。

取引の詳細は追って文書で送る、お前はオペオペの實の確保及びバ  
レルズの捕縛、ドフラミンゴが手を出してくるようであればそちらの  
保険として動け」

『…極めて了解、とりあえずこちらは秘密裏に動きましょう』

「ああ、頼んだぞ」

それだけ言うとう通信を切るセンゴクだったがしばらくしてまた鳴

き出す電伝虫、今度は誰だ?と思いつつ通話に出れば先程の話題にも出たコラソンことロシナンテ中佐であった。

『そうか、取引の三日前にスワロー島か・・・』

よし、そこでドンキホーテ・ファミリーは一網打尽だ、ドフラミンゴ共々終わりにしてやる!

：お前は島には近づくなよ?』

黒い羽のついたコートを纏った大男が電伝虫でどこかに通信をとっていた。

傍らには珀鉛病の患者であろう白斑に侵された少年、顔の広範囲に及んでいることから病状はかなり進んでいるものと思われる。

：そのつもりです、奴と繋がっていた大物達やあらゆる商売相手のリストは後日確実に渡します、これで北の海も今よりだいぶマシになるでしょう。」

『最近のカモメの水兵団のお陰で海賊に関しては一昔前よりだいぶマシになっているが陸はそうはいかないからな』

「そういえばあと一点聞きたいんですが：フレバンスについて海軍は何か隠してますか?」

すると電話口からは焦ったように咳き込む音と何かがひっくり返るような音。

『お、お前何を：いいか?フレバンスでは王族を助けに行っただけだ、最もその王族も国を世界政府の断りなく勝手に周辺諸国に売り払ったという事で追放処分されたらしいが・・・』

「二応同じ海軍ですし彼は有名なのでその人となりは知ってますが果たして彼が病に苦しむ人々を見捨てるような男ですか?」

『：まあお前にならないだろう、これはオフレコだぞ?簡潔に言えばあいつは一部の国民を率いて脱出、ある場所に保護しており治療法を研究中だ。』

因みに海軍はこの件に関しては一切関わってない、せいぜい場所を用意したくらいだ。

因みに奴が”個人的にやってる事”だからな、くれぐれも世界政府その他には悟られぬようにしろ、痛くない腹を探られても敵わんから

な』

「因みに場所をお聞きしても?」

『…わたしの口からは言えん。が丁度いい、奴はドフラミンゴに対する保険と共にデイエス・バレルズ捕縛の為に動いているはずだから直接聞いてみるといい』

「わかりました…ありがとうございます」

そう言っつてガチャリと電伝虫を切ると

「ロー…喜べ!!お前の家族は生きてるかもしれないぞ!!」

と傍らにいた少年を振り返ればそこには地面に倒れ伏すローの姿が。

「ハア…ハア…」

「おい嘘だろ!?!しっかりしろ!やっど可能性が見つかったつて時に!!」

「コラさん…とおさま達が生きてるつて…本当?」

「ああ!!だからお前も病気を治して会いに行くんだろ!?!嘘だろ、熱もある!・医者はどういつもこいつも使えねえし…あと3週間!生きててくれよ!なんとかチャンスをくれ…!!」



## 墮落准将 ドンクリーク

タカミドリ部隊や北方方面軍などを使って情報を集めた結果  
取引場所であるルーベック島や原作で出たでっかい鳥の形をした  
島であるスワロー島。

そしてその近くにあるミニオン島、かつて栄えた町があったが海賊  
の襲撃を受けてゴーストタウンへと様変わり。そしてそこに住み着  
いたのが元海軍支部准将であった”デイエス・バレルズ”であった。  
そして奴は偶然にもオペオペの実を手に入れ政府の指示により海  
軍が提示したオペオペの実と50億ベリーの取引を受け入れた。

だが非合法の、しかも市民を守るべき元・海兵でありながら一般の  
船や港など色々と襲撃を繰り返している海賊と取引する事自体が馬  
鹿らしい。

そして居場所を突き止め監視をしつつ時を待つ。

「ボス、捕縛しなくていいのか？今なら奴ら油断してるぞ？」

「慌てるなギン、予想が正しければ騒ぎが起ころはずだその時まで静  
かに待て」

まあコラソンがオペオペの実を手に入れに動くだろうからな、ドフ  
ラミンゴは…来たら来たで構わない今度は正面から相手してやろう。  
とりあえず邪魔そうなのは今のうちにどこかに行ってもらおうか

「ヴェルゴ少尉、お前は何人か連れて巡回にあたれ。くれぐれも見つ  
かるなよ？」

「はっ！了解しました!!」

そう言つて素直に駆けていくヴェルゴ、何か動くかと思つたが取り  
越し苦労だったか…？

一方ヴェルゴは巡回に当たりつつ少し離れドフラミンゴと連絡を  
とっていた。

『なに？赤カモメの奴らがミニオン島に？それからバレルズの捕縛を  
計画しているだと…？』

『どういう事だ？海軍の奴らは金を払つてオペオペの実を手に入れ  
るつもりじゃねえのか？』

「ああ、どうも食い違いがある、この取引自体が罫かもしれない」  
『だがオペオペの実があるというのは事実、この機会をみすみす見送るには惜しいが…』

「とりあえずこちらでわかる情報はそれだけだ、それからそちらの居場所の追跡に関しては奴は勘と答えたがひよつとしたら隠している事がある可能性もある」

『一時期言ってたがおれの家族にスパイがいるかもしれないって話か…』

だがあいつが船を降りた後も海軍の襲撃は一旦止んだが続いてるから一概には奴あいつがスパイとも言えねエだろ』

「ドファイ、こう考えてみる奴が船を降りる前と降りた後、追いかけてくる海軍は別のルートで情報を仕入れてたという可能性だ。」

それなら奴が降りた直後襲撃の空白期間があつた事は納得できるだろ?」

『疑いたくはねえが…わかった、お前がそこまで言うならあいつと合流予定のスワロー島で確認しようじゃねえか。』

赤カモメがバレルズの野郎のところに張り付いてるんならスワロー島に海軍が現れりやお前の言う事が正しいんだらう、そして奴がおれに牙を剥くってんなら…』

「落ち着けよドファイ、まだ決まったわけじゃない。じゃあそろそろ切るぞ」

そう言っつてヴェルゴは通信を切ると巡回部隊の元に戻る、あまり長い事外しては怪しまれる可能性もあるからな…と考えつつ。

そして一方遊撃隊本隊では

「少将！見張っていたバレルズのアジトから突如火の手が!!」

よし、コラソンが動いたな。そう確信したクリークは直ぐ様指示を出す。

「よし！俺が確認に向かう!!全員周囲の海岸を搜索！子電伝虫は持っているな？不審な船、人物を発見したら直ぐに連絡しろ!!」

了解しました!!との声を上げ散る集団を他所にギンを連れてバレルズのアジトに、その道中でコラソンの姿を探すも道より外れた場所

にいるのかロー共々その姿は見当たらずバレルズが拠点とするアジトに到着。

右往左往しながら”悪魔の実が盗まれた!!”と騒ぐバレルズ一味を殴り飛ばしながら建物の中へ進めば、中央の広間には散らかった料理や酒瓶、所々火の手が上がっており襲撃があったという事を端的に示していた。

「さっさと探せえ!!50億だぞ!!わかってんのかてめえら!!!」

そしてその中央にて周囲に櫓を飛ばす海軍コートに似た衣装のコートを纏ったもみあげの長い男が一人。

「よお元・海軍准将ディエス・バレルズ」

「ああ?なんだてめえ!てめえが悪魔の実を盗んだのか!!」

「ああ、顔を合わせるのは初めてか?海軍本部少将のクリークだ、海軍独立遊撃隊を纏めさせてもらってる」

「そうか!アンタみたいな奴がいれば百人力だ!!取引予定の悪魔の実が何者かに盗まれたんだ!!取り返すのを手伝ってくれ!!」

最初とは一転、こちらに懇願する姿はこちらを味方として微塵も疑っていないのだろう、元々海軍と取引する予定でいたようだしな。

「ああ、なにを勘違いしているか知らんが俺はお前を捕らえに来ただけだぞ?」

「へ:?:い、いや海軍は俺と取引したいんだろ?俺を捕らえても悪魔の実の手に入らねえぞ?」

一瞬気の抜けた声を出すも直ぐに切り替えてこちらにそう言うバレルズ

「ああ、悪魔の実なんざ俺にとつちや別にどうでもいいんだよ。

ディエス・バレルズ:元・海軍准将でありながら守るべき市民に手を出し行われた襲撃の数々!!恥を知れ!!」

大音声で一括すれば一瞬後ずさるも直ぐに剣を片手にこちらに向き直るバレルズ

「く、クソがあっ!!ようやく運が向いてきたと思えばこれかあ!!」

そう叫びながらこちらに斬りかかってくるも

「遅い!崩拳砲!!」

ひねりを加え貫通力を増した拳がバレルズの手を持った剣を叩き折れ持ち主を吹き飛ばす。

「殺しゃあしねえよ、せいぜいインペルダウンで己の罪を反省しろ！」  
そう言い捨てて縄で縛り端の方に転がしておく。

そんな時だった、半壊した壁の向こうにヒュルルルという音と共に打ちあがる赤い煙の尾を引いた弾丸。

「ボス、緊急信号だおれが行くか？ドフラミンゴを待つんだろ？」

少し迷ったが今のギンであれば余程の敵でなければ遅れは取らない筈だ

「わかった、だがヤバそうな相手なら迷わず信号弾を上げろ。」

そう言ってギンの頭をぽんと叩いてやれば

「わかった、無茶はしない」

ギンはその場から掻き消えるように姿を消した、ギンの足なら数分とかかるまい。

とりあえず無茶はしないようにと思いつつながら部屋にあった椅子に適当に腰掛けドフラミンゴを待つのであった。

## 海賊海兵 ドンクリーク

時間は信号弾が打ちあがる少し前に遡る。

ロシナンテことコラソンは一人でバレルズのアジトを襲撃し首尾よく悪魔の実を手に入れたところまでは良かった。が、その途中で敵に発見され銃撃を残念ながら受けてしまっておりローにオペオペの実を食べさせた後に倒れこんでしまったのだ。

そして自分は動かないから、とローに海兵にこれを渡してくれと小さな鍵付きの筒である情報文書を託ししっかりとコラソンを恩人として認め彼に感謝しているローはコラソンから託された情報文書を手にはた走る。

周囲を探すも残念ながら一人でいる海兵はおらず仕方がないので四人程の近くにいた海兵に声をかければ海兵達はきちんとローを落ち着かせてその身を心配しつつ情報文書を預かった。

そして泣きながら恩人を助けてくれと、おれの為に撃たれたんだと懇願するローにまかせろ、と海兵達は快く了承し何故か頬にタコさんウインナーをつけた男がローを背負いローを含んだ五人はコラソンの元へ

そこから先はめぐるましく状況が変わった。

「っ…!?ヴェルゴ!」

「な…コラソン!?どうしてお前がここに!!って今声を…?」

仮初とは言え知ってる顔に遭遇してしまったコラソンは不意に喋れないと言う事にして仲間の前では発していなかった声を出してしまふ。

「ヴェルゴ少尉、知り合いか?」

そんな同僚の声に先程ローから預かった情報文書の入った筒を壊し中身を改めるヴェルゴ

「ヴェルゴ少尉!それクリーク少将に先に提出しないと!俺達が見るようなものじゃないっすよ!」

そう言っつて止めようとした同僚を武装色により硬化した脚で蹴り飛ばし

「そうか…理解したよロシナンテ…とりあえずまずはうるさい口を封じておくか…」

突如起こった仲間の凶行に残ったカモメの水兵団の二人は直ぐ様対応して動く

「少年！危ないから隠れていなさい!!」

一人は銃を構えてヴェルゴを牽制しつつ蹴り飛ばされた仲間の方へ向かい

「ヴェルゴ少尉！どういうつもりだ！仲間への攻撃と我々には閲覧権限の無い機密封書の開封及び閲覧！いずれも口頭注意どころか下手したら軍法会議ものぞいで！」

もう一人はカモメの水兵団に支給されている折り畳みロッドを腰から引き抜き片手に持つてヴェルゴに対峙する。

無言で仕掛けてくるヴェルゴの拳撃を捌きつつ時折ロッドによる刺突を入れるものの相手が悪かった。

いくら実戦経験豊富なカモメの水兵団に在籍してるとは言え相手は海軍に入って一年足らずで覇気を身につけ全身硬化まで行うようになった天才、攻撃は鉄塊にて問題なく受ける事が出来たものの端的に言つて火力が足りず相手の防御が突破出来ず攻めあぐねていた。

そしてそんな折銃を構えて牽制していた男が蹴り飛ばされた仲間の元へ、素早く容体を確認し命に別状は無いと分かるとぐつたりとした男の腰から単発装填の中折れ式の短銃と信号弾を取り出し素早く装填、空に打ち上げた。

ヒュルルルという音と共に空に上がる煙を見て苛立たしげに顔を顰めたヴェルゴはより一層攻撃の苛烈さを増しとうとうロッドを叩き折り鉄塊を崩してヴェルゴは対峙していた海兵を地に沈めた。

そしてその脚でコラソンの容体を確認していた信号弾を撃った海兵を背後から急襲、慌てて対応するも自らが得意とする長銃はコラソンの容体確認にあたって横に置いていた為数合やり合ったところで先の海兵と同じく地に沈んだ。

そしてヴェルゴはコラソンを詰問し蹴り飛ばし苛立たしげに攻撃を加えていき、先の海兵が言っていたように隠れていたが恩人が攻撃

されるのを見ていられなくなり止めようとしたローさえも地面に叩きつける。

そんな時だった。

「…ヴェルゴ少尉、これは一体何事だ？」

灰色の動きやすそうな上下に腰には一対のトンファー、赤い海軍マークが入ったコートを羽織ったまだ年若い少年がヴェルゴの前に現れた。

ギンの質問に対し沈黙で返すヴェルゴ、しかし武装色で硬化した両腕で構えをとった事でその返答は察する事ができた。

「動ける者は怪我したものを守りつつ下がれ、ここはおれが受け持つ」  
そう言つて腰のトンファーを取り出しヴェルゴを見直して見据えれば瞬間ギンの姿は掻き消え、そして金属同士の衝突音が辺りには鳴り響いた。

トンファーの刺突を武装硬化した腕で交差して受け止めるヴェルゴに対し、受け止められたと見るやギンはすぐ様逆の手に携えたトンファーをヴェルゴの首元に伸ばす。

その刺突に対し僅かに首を後ろに下げその攻撃を避けようとするヴェルゴであったがカチリという音がトンファーから響き飛び出すのは鋭く尖った針、意表を突かれた為か僅かに動きが止まるヴェルゴであったが仕込み針はヴェルゴが纏った武装色の覇気を貫く事が出来なかった為所詮その程度と言わんばかりにヴェルゴは右手でギンを下から殴りあげた。

ギンは咄嗟に体の前でトンファーを交差させるもまだ成長途上の体は大きく吹き飛ばされそれに対してヴェルゴは言い放つ

「ふっ、例えおれと同じ少尉だろうがたかだか十代なかば、恨むならその若さで出世させたクリークを恨め!!」

「おれを…おれを取り立ててくれたボスを舐めるなよ?」

ギンはそう言つてトンファーを振れば飛び出すのは分銅つきの鎖、グルグルとヴェルゴの振り上げた腕に絡まるとギンとの間にピンと鎖が張られその反動でギンの身体はヴェルゴの元へその勢いを利用してそのままヴェルゴの首をしかと殴りつける。

武装硬化してるとは言えあまりの衝撃にタタラを踏むヴェルゴ

「ぐっ、やってくれるなあっ!!」

「目上の者にはさん付けしろと自分で言っただけでなかったか？ヴェルゴ少尉」

そのままギンは懐から筒のような物を取り出し筒から飛び出した紐を引いて空中に放り投げればその筒は灰色の煙を引いて空中へと躍り上がった。

目的は明白、相手は武装色の覇気を纏っており現在の力では倒し切る事は難しいと判断したギンはすぐ様クリークの言葉通りに行動、応援を呼んだのだ。

そしてクリークの副官であるギン少尉が信号弾を打ち上げればやってくる人間が誰かは明白。

そしてそれを察したヴェルゴは顔を歪ませるも流石に今からやって来るであろう人物は相手にしてられない、と選択した手は逃走。

ここで戦闘を行うよりも己のボスであるドフラミンゴに連絡をとりコラソンの真実を伝える事を優先した為だ。

そして逃走したヴェルゴをギンが追う事も無い、必要が無い深追いは禁物というのを教えられたのもあるが何より負傷者がいる為その手当てをせねばならないからだ。

そうして負傷者に向き直れば

「すいませんギン少尉、油断しました…」

「仕方ない事だ、まさか奴が裏切るとは…おい、黒いコートの男は？」

負傷者と思しき黒いコートの男が倒れていた所には血溜まりが残るのみ

「…少年もいなくなってますね」

同じく怪我をしていた少年も姿を消している。

しかし何故ここに少年が、しかもあの白斑はファウス島で接してきた珀鉛病の患者と同じ症状…？

疑問に思いつつも怪我をした部隊の仲間に応急処置を施しつつ報告の為ギンはクリークの到着を待つのであった。



## お正月特別企画 SBSコーナー

お正月企画、SBSコーナー!! どんどんぱふぱふ

今回は予め募集していた質問に対し答えていきます、説明を挟みつつ一人二つまでで答えていきます。

まずはプルプルゲルマニウムさんからのお便り

①クリークの強さを測る目安として、大体これくらいだろう位の感覚でいいので時系列ごとに道力で知りたいです。まあ、比較対象がCP9だけなので厳しいのは分かっていますが

えー道力というのは銃を持った兵士一人を10道力として計算した強さの基準でエニエスロビーででてきた世界政府に所属する諜報機関“CP9”が使っていた単位です、作中ではルフィと死闘を演じたロブ・ルッチが4000道力でした。

今現在のクリークはフル装備であれば銃を持った衛兵など鎧袖一触なので何とも言い難いですが少なくとも一万道力、千人力くらいはあるかなーと考えてます。

②クリークには浮いた話は無かったのでしょうか。強さが重要なステータスになる時代でならゴリラ顔でもモテると思うんですね。ましてや海軍本部務めのエリートですし。鍛練鍛練でそんな暇が無かっただけなのかもしれませんけど。

これは簡単ですね、鍛錬ばかりというのもありましたが彼の場合本部ではなく大体が海の上に居た為浮いた話が殆どなかったと言うのが真相です。

お次にじよなあどさんから

①ベガパンクとクリーク殿との関係は？後クリーク殿の事をどう思っている？

ベガパンクは海軍科学班の所属でクリークはいろいろ提案を出しているとは言え直接の面識はありません、あるとしてもベガパンクが色々な案を出す優秀な海兵がいるというのとクリークは原作知識ゆえに天才科学者がいるという事くらいですね。

② ①で2つの質問にならないのならば

ロビン殿はクリーク殿の所に居るけど麦わらの一味の戦力変わったりするん？

ロビンには原作の通り麦わらの一味に入ってもらおう予定ですのでメンバーの変更はない予定です。

次はアルト&シエリルさんの質問

①お正月記念の返信時点で、もしクリークに懸賞金がかけられた場合の額は、どれくらいになるんでしょうか？

いまのところは海軍ですので何とも言い難いですが危険度はともかくとして戦闘力であれば億越えは確実にしようねー

②今後もクリークは、海軍の儘なんでしょうか？

詳細は伏せますが海賊にはなるという事だけ書いておきます。

次は棚橋さんから

①クリークはクザンの先輩らしいのですが、階級は少将で下ですが戦闘力はどちらのが強いのですか？ガープって例外もいるし気になりました

現時点なら何でもありで戦えば三大将相手には何とか互角といったところでしょうかねー

②今後悪魔の実を食べさせる予定はありますか？

現在アンケートで投票受付中ですがこのままであれば食べない方

向でいきそうですなー

次はマドールさんからのお便り

①クリークのところにロビンがいる関係上、クロコダイルの陰謀の件はどうなりますか？なるべく知られないようにしていることとクリークの方が強いので口封じも出来、アラバスタ編が発生する余地は無いと思いますが。

現時点ではロビンには一人立ちしてもらおう予定ですが彼女の目的上アラバスタへは向かうでしょう、クリークもロビンの目的を知っていますし彼女を麦わらの一味に関わらせる以上邪魔する事は無いのでコミック準拠でいく予定です(とどこどころ変更点があると思いますが)

②クリークは、新聞ではどのように評価されていますか？モルガンズは、ロジャー世代から活動していた為、目立った成果を上げている主人公を取材しても不思議ではない。

新聞での扱いは新進気鋭のたき上げの海兵ってところですかねー、金獅子の捕縛やあちこちの海を回っており赤い海軍マークというわかりやすいシンボルもある為力モメの水兵団の知名度はそこそこあります。

次はどん兵衛ーきつねーさんから

1. クリークの武装開発予算はどれくらい？

開発予算というかその辺りは割と自由にやらせてもらってますね、もともと海兵の装備の開発における試作品開発という面もありますので。

2. ぼんぼり様のお腹にいた間、ぼんぼり様は大人しくじっとしてたの？アニメ見てないけど、サイズが大きいなら移動距離も凄いなと思うのですが

・・・多分ぼんぼり様も一休みしていたとかそういう感じでしょうか。

お次にメルテイオさんからの質問

①マリolfォードでの一般市民のクリークへの評判が知りたいです。以前孤児院とか支援しているとかあった気がしたので、クリークに憧れて海軍目指してる子とかいそう

基本は海兵に助けられた孤児でしょうからね、クリークだけではなく助けてくれた海兵に憧れて、というのはあるでしょうねー

②海軍将官や佐官からのクリークの行動はどんな評判何でしょう？結構色々な武器や改革が海兵達に影響を及ぼしているけど

将官や佐官からすれば実力もあり中将へ昇進するのも間違いなし、上からの信頼も厚い結構な武闘派とかそんなところですねー、後は動物連れてるとかそんな感じ

次は経津主さんから

①シキ戦2回目の時点でリジェクトとジェットダイアル一つずつあったはずですけどジェットの方はどこいったんでしょう？

リジェクトは仕立て直し中みたいですが。

シキ二戦目の時点では鎧の肘に仕込んであり空島編にて出てきた神官の一人、ゲダツと同じくジェットパンチが撃てるようになってましたがそのまえにアーマーパージしたためその時は出番無し、現在はリジェクトダイアル共々仕立て直し中です。

②海のへそには結局行かない感じでしょうか？

具体的な時期は決めてませんがそのうち行こうかと考えていますのでお楽しみに。

お次に東風乃扇さん

質問1

クリーク的に今までの中で一番命の危険を感じたのはどんな時ですか？本編中に描写が無かった事でも構いません。

命の危険という事であればマリolfォードに金獅子のシキが襲撃をかけてきたときでしょうねー、実力にもかなり開きがありました

何とかセンゴク、ガープが間に合ったことにより助かったという感じですね。

## 質問2

クリークの好きな悪魔の実って何ですか？

海兵としてのクリークであれば殲滅力はあるが希少なロギアではなく、千差万別なパラミシアでも無く戦力として安定しており分かりやすいゾオン系を好んでいます。中の人の単純な好みで言えばスナスナとか好きです

次はカドールフックベルグさんの質問、いつも誤字訂正ありがとうございます。

①本物語の着地点については既にアイディアはありますか？最終回のぼんやりとしたイメージでもあれば知りたいです。

着地点というか原作次第かなーというのが正直な感じですが、ただ着地点というのは違いますがこの作品の裏コンセプトが映画、アニメオリジナルエピソードのフラグ潰しというものがあるので最終回のイメージとしてはその辺りをクリアした上で完結させたいですねー

②質問というより要望ですが、本作を執筆するきっかけとなったとおっしゃっていた”アルビダ姐さんはチャホヤされたい!”への応援メッセージがあればお願いしたいです。作者さんが長いことスランブに陥っているとのことですので、なにかアドバイスがあれば更に嬉しいです。

アルビダ姐さんはチャホヤされたいはコンセプトとかも好きですが非ともVSハンコックやVS小紫など美女達と火花を散らして欲しいです！アドバイスという点では私が言うのも烏滸がましいかもしれませんが”オリジナルキャラ”や”オリジナルエピソード”などを増やしすぎると途端に考える事が増えるためそこら辺のさじ加減はあるかもしれませんねー

そして最後は蒲鉾侍さん

1、返信時時点のクリークの実力は原作で言う誰ぐらい、誰より上ぐらいでしょうか

多分現時点の実力だとビッグマムのとこの最強の幹部カタクリは倒せるくらいでしょうかねー、死ぬ気でやれば勝てはしないまでも三大将と善戦できるでしょう。

2 クリークの部下達 ギン ロビン また名のある部下の強さの順番はどのような感じでしょうか

ネームドの部下がほとんどいないですが単純な戦闘力で言えばクリークから結構開いてギン、次いで僅差でロビンといった感じですかね、まあ二人の戦い方の方向性の違いもあります。

さて今回の質問はここまでですね、お付き合いありがとうございます。

## 糸の牢獄 ドンクリーク

「ドファイ、やはりコラソンは黒だ！奴は海軍のスパイでお前を陥れる為にファミリーにいたんだ！」

ヴェルゴはクリークが到着する前にすぐさまその場を離れ電伝虫にて己のボスであるドフラミンゴに連絡をとる。

『ああ…さつき合流地点のスワロー島を遠くから見ているら軍艦が2隻現れやがった。』

…流石のおれも察したよ、可愛かった弟がおれに牙を剥いたと!!』  
「ドファイ、今どこだ？」

『信じたくは無かったが悲しくもお前の読みは当たったようで…今お前らのいる”ミニオン島”にいた所だ。…だが少々手遅れだったよ。うで着いてみりやバレルズの手下共が悪魔の実を盗まれたと走り回ってやがる!!』

犯人はコラソンだ！奴が”オペオペの実”を持つてるに違いない！そこにいるなら絶対に逃すな!!』

「…すまんどファイ、コラソンを捕らえる為赤カモメと戦闘になった。こっちは奴に目をつけられてるからこれ以上海軍にいるのは難しいかもしれない…」

『…まあいい、町から出てねえなら…おれが逃しはしない!!』  
そこからの変化は劇的であった。

”イトイトの実”の能力者であるドフラミンゴ、彼の奥の手である”鳥籠”と呼ばれる技は数年かけて練り上げた糸にてそこにいる者を逃さない空間を作り上げる技である。

そしてドフラミンゴが作り上げたその空間は決して内に捕らえたものを逃さぬ牢獄、中にいる者は術者であるドフラミンゴとその一味。

そしてオペオペの実を無事に盗み出したコラソンとオペオペの実を食べた珀鉛病の少年ロー。

そしてオペオペの実を奪われたデイエス・バレルズを筆頭としたその一味。

そしてドフラミンゴが捕らえるつもりであった肝心のカモメの水兵団は最初のクリークの指示により海岸部を搜索していた為大半は鳥籠の外に。

鳥籠の中には唯一バレルズのアジトでドフラミンゴを待ち構えておりそこからギンの信号弾の元へ急行していたカモメの水兵団筆頭、海軍本部少将クリークのみ。

状況を悟ったクリークは鳥籠の一番端へ、到着してみれば天へと伸びる太い糸、間はかなり広い隙間があり通り抜けるように見えるがその間には極細の糸が張り巡らされており抜ける事はできないように作られていた。

「流石にそこまで甘くないか…」

自らを閉じ込める鳥籠に対し鉄さえ切り裂く手刀を繰り出すも長年かけて練りこまれている為か流石にそう簡単には切れそうには無かった為

「…まあ、ドフラミンゴを捕縛さえしてしまえば解除されるだろう」

とりあえず遠目に見えた鳥籠の外にいるカモメの水兵団の団員を大声で呼び指示を出しこちらは鳥籠内に海兵がいなか探すついでにコラソンとローの姿を探すのであった。

「ちっ、電波もやはりダメだな…」

ドフラミンゴの影響か仲間同士の殺し合いを始めたバレルズの一昧を気絶させ縛り上げながら電伝虫にて連絡を取ろうと試みるもこの鳥籠の影響か電伝虫は雑音を吐き出すのみ。

まあ指示は海岸の方を搜索するように言っていたし見たところ鳥籠内に囚われた海兵は自分だけのようなので大丈夫だろうと考えつつコラソンとローの姿を探す。

とりあえず地面を走り回ってもラチがあかないので月歩で上空に躍り出せば

「お、ドフラミンゴのこの…ああ、たしかセニョール・ピンクだったか」

眼下にドフラミンゴ・ファミリーに属するスイスイの実の能力者、



セニョール・ピンクの姿を捉えた為反転。「天空十字落とし!!」

両腕を交差し空中にて斜め上を蹴り空気を足裏に捉えて踏み込めばまるで隕石でも落ちたかの如き爆音と衝撃。

しかしセニョール・ピンクもさるもので直前で察知したのか自身に迫っていた超硬度の質量攻撃を大きく飛び退いて回避、相手の羽織った海軍コートを見て自身のボスから注意する様に言われていたクリークだと察して即座に踵を返し、報告のために自身の能力であるどんな場所でも自由に泳げる能力で逃げの一手をとった。

だが

「逃がさ…ねえよ、”大踏判子おっ!!（おおぶみはんこ）”」

片脚を大きく上げ地面に衝撃を叩きつける。

震脚という技がある、これは中国武術の用語で足で地面を強く踏み付ける動作のことで歩法の一つであるがクリークはこれを独自に改良、その超絶的な身体能力で引き起こした踏み付けの衝撃は地面ごと局地的な軽い振動を引き起こす。

セニョール・ピンクも地面の上に立っていれば問題なかったであろう、だが彼は自身の能力で地面を泳いでいる状態、すなわち身体中を地面に包まれている状態であればその振動、衝撃が身体中に及ぶのは自明の理。

そうして気絶したセニョールをクリークが近くの木に縛りつけていると先ほどの音を聞きつけたのか黒い服を着た口元までマスクで覆った男と横に広く背中に大楯を背負った男の姿がこちらへ駆けつけるのを見て

「お、ラッキー」

そう言つて手早くセニョールピンクを縛り上げると相手が気付く前に”剃”と呼ばれる超高速の歩法にて相手の眼前に。

「なっ!!」

「崩拳砲っ!!」

黒い服の男グラデイウスが気づいた時にはもう遅く、自身の能力である自身の身と無機物を破裂させるパムパムの実の力を発動させようとしたがその前に腹部にクリークの拳が突き刺さりその衝撃によ

り大きく吹き飛ばされて崩れ落ちる。

一方大盾を背負った男マツハ・バイスは自身の能力である自身の体重を自在に操る事ができる能力で極限まで体重を軽くしフワリと空中に浮き上がると

「なんでこんなのがいるんだイーン!! トントン! 10トンヴァイス!! 潰れるんだイーン!!」

空中で今の自分が今できる最大の重さである10tという超重量に変化してクリークを押し潰さんとしたが

「…なんだ、たったの10tか」

相手が悪かった。

極限まで圧縮された超高密度の筋肉はそれに見合った筋力を発揮し今では10tの重さを持つ手持ちの武器である”白尾棍”を自在に操れる男がその程度で押し潰されるだろうか。

答えは否、クリークは落ちてきたマツハ・バイスを両手で受け止めると地面に腹から叩きつけた上で背中に背負った分厚い鉄の大楯ごと拳を打ちつけ碎けばマツハ・バイスは気絶。

瞬く間にドフラミンゴ・ファミリー三人を無力化したクリークは三人纏めて縛り上げ次の獲物を探すのであった。

## 石の巨人 ドンクリーク

セニヨール・ピンク、グラディウス、マツハ・バイスの三人を瞬く間に無力化し縛り上げ小高い丘の上にあるバレルズのアジトに向かっている途中で数発の銃声が響いた。

舌打ちをしつつ到着してみれば開けた場所に血塗れで倒れ伏す2代目コラソンことドンキホーテ・ロシナンテ中佐、そして反対側に相対するは未だ煙たなびく拳銃を手にしたサンングラスの男：ファミリーのボスにしてイトイトの実の能力者であるドンキホーテ・ドフラミンゴ

ドンキホーテ・ファミリー幹部にしてヒラヒラの実の能力者であるディアマンテ、同じく幹部でありベタベタの実の能力者であるトレーボル。そして現在は能力者であるか不明だが原作ではイシイシの実の能力者であった同じく幹部であるピーカに、能力は持ってないながらも優れた格闘センスを持つラオG上空にはグルグルの実の能力者で体の各部を回転させる事ができるバッファローが、そしてその能力でホバリングしている彼の背中にはブキブキの実の能力者であるベビー5。

総勢7名、情報にあつた他のメンバーは三人は捕縛しており残りのジョーラ、デリンジャーの二人の姿は見えない事からおそらく船の方だろうと推測しまずは周囲を無力化する為駆け出す。

と、その前にと腰のポーチから金属製の筒を取り出し蓋を開けると倒れ伏すロシナンテ中佐にぶっかけておく

「があああああっ!!!」

ロシナンテ中佐が痛みに悲鳴を上げるも消毒液なので痛みは勘弁してくれ、と心の中で思いつつまずは手近にいたラオGの元へ

「ぬっ！貴様っ!!!」

眼前に迫ればすぐさま気付き対応するため構えをとるラオGであったが律儀に付き合う必要もないので左腕のガントレットから特殊弾を射出

優れた動体視力により弾丸を見切って打ち払おうとしたその腕に

弾丸が着弾と同時に破裂、強力なトリモチを撒き散らしラオGの腕を封じ込める。

「ぐうっ！おのれこんなもの直ぐに外してくれるわあっ!!」

そう言いながら引き剥がそうとするラオGにトリモチ弾を連射、すぐにトリモチの塊となり動かなくなる、まあ距離が近かったのでちゃんと胴体にしか当たってないし息はできるから大丈夫だろう。

「全員奴の武装を剥がせえっ!!奴は大量の武装頼りの男だ!!それさえ消費させりやおれが殺す!!」

一瞬でラオGを無力化しこちらの格好からその正体を察したドフラミンゴの怒号が飛ぶ

「つつ…ベトランチャー!!食らえだもんねー!!」

しかし武装頼り?そう考えていると飛んできたのは何かしら液体の塊、足を踏み込んで飛び退り飛んできた方向をみればベタベタの実の能力者であるトレーボル。まあいい、お望み通り大盤振る舞いしてやろう

背中には交差させて背負ったハンマーと棍のうち愛用の棍である白尾棍を引き抜きまず粘性の高い液体を操るトレーボルに対して振り抜く。

が、トレーボルにダメージは無し。

まるでロギアに攻撃しているかのように棍による一撃はその体をすり抜けたのだ。ならば物理攻撃じゃなければよかろうと考え右手を持ち上げ親指をコキリと鳴らせばそれに連動して手首の部分から火炎が発射される

「ばっ!!これは可燃せ…」

そう言おうとしたトレーボルの言葉は突如起こった大爆発により途切れた。

彼が纏う粘液は可燃性であり本来は粘液を相手に飛ばしそれを引火して敵を爆殺する事を得意としていたが今回はそれが裏目に出てしまい周囲を巻き込む大爆発を引き起こしたのだ。

爆発には驚いたもののこの特注の海軍コートは多くの耐性を持っておりもちろん耐火性も備えている為爆発と同時にガード、当然なが

ら無傷であったが

「やつべえ!!ロシナンテ中佐!無事か!!」

と彼が倒れていた方向を見やればそこには大きく聳える石の巨人。  
「やってくれる…!!」

甲高い声でそう言うピーカのに振り返ればそこにいたのはかなり大柄なクリークが見上げる程の石の巨人、彼が上手く盾になっていたようでコラソンに爆発のダメージは行ってないようで安堵しつつ鎧の各所を展開してそこから現れるのは鉄の銃身

「そらっ! たっぷり食べてけ!!」

そんな声と共に凄まじい勢いで石の巨人となったピーカに弾幕が張られるも

「ピツキヤララ…そんな豆鉄砲、おれの前には意味などない!おれはイシイシの実を食べた”岩石同化人間!ドファイの敵であるお前はおれの力で潰してくれる…!!」

その声と共に足を振り上げて踏みつけてくるピーカ、ガトリングは巨体の表面を削るばかりであり効果がないうようなので直ぐに銃身を収納し愛用の棍を振り下ろしてくる足元に向ける

「連指銃・鉄えっ(つらねしがん・くろがね)！」

白尾棍が連続して突きを放ち相手の足を破壊するも

「無駄だあっ!!いくら石が壊せようともおれにダメージなどない!!」

すぐさま回復してその巨体を取り戻すピーカそんなピーカに対し少しイラっとしつつも

「なら頭吹っ飛ばせばいいんだろが!!連拳砲(つらねけんぽう)!!」

月歩にて飛び上がりクリークの連続で放たれる拳による指銃、拳砲が相手の頭部を吹き飛ばすも

「ピツキヤララ…無駄だ無駄、おれは岩石同化人間!この全ての石がおれだ!頭を吹き飛ばしても無意味と分からんかあっ!!」

「うるせえ!甲高い声で喋りやがって…ロギアみたいで面倒な奴だ…」

「お前…今おれの声を笑ったか!石押(イシウス)!!」

しかし頭を吹き飛ばしても止まる気配は無いピーカ、それどころか

頭を吹き飛ばしたにも関わらずそのまま大地を飛び出して石のスパイクがクリークを挟み込み閉じる。

「よし！よくやったピーカ！全員奴に対して攻撃をたたき…」

ドフラミンゴがそう言いかけるもすぐさま大きな音を立ててクリークを挟み込んだ岩が破壊されその中からボロボロのコートを纏ったクリークが姿をあらわす。

「ピツキヤラララ…鎧のお陰で助かったか。だがそのコートはもうダメそうだな？」

「くそっ、一張羅のコートをこんなにもボロボロにしやがって…」

そう言つてクリークは白尾棍を地面に突き刺しボロボロになったコートを脱ぎ捨てる。

そして背中に背負っていたもう一つの武器である巨大なハンマーを構え再びピーカの元へ

ハンマーを振り回し次々に石の巨人となった体の各所を吹き飛ばすも

「無駄だと言ってるだろう！舞踏石（チャールストン）！！」

それと共に体の各所から石の刺が飛び出すもクリークはハンマーを自在に振るい弾き飛ばして

「ならこれでも食らつとけやあっ！！ジェット！ハンマアアア！！」

振り下ろしながらハンマーの柄を右に捻れば叩きつける面と反対側からゴウツという音と共にハンマーが加速、ピーカの体の半分以上を吹き飛ばした。

## 旗の猛威 ドンクリーク

「ピツキヤラララー！一撃で上半身ごと砕いたのは見事だといってやろう!!」

そんな甲高い声が下半身だけになった石の巨人から響く

「あーもうしぶといなあっ!!」

「だか無意味っ！おれは石がある限り何度でも！何度でも復活する！さあ第二ラウンドと行こうじゃ無いかっ!!」

そんな声と共に先程より更に大型となり石の巨人としての姿を取り戻すピーカ

「いやーこれで最終ラウンドだ!」

そんな声を上げてもう一度ピーカの頭上へ、”衝撃”はもう十分に溜め込んだ。

できれば後にとっておきたかったがいかげんピーカがしぶといのでここで叩き潰す!

「いくら叩こうが無駄だと分からんかあっ!!噛石(パイストーン)!!」

その巨体のままこちらを噛み砕こうと大口を開けて迫るピーカであったが

「デッドハンマー…リジエクトおっ!!」

クリークはハンマーがピーカに当たる瞬間に今まで無作為にハンマーを振り回し”排撃員(リジエクトダイアル)”と呼ばれる衝撃を溜め込む貝にたまった今までの衝撃を一気に解放。

あまりの衝撃にハンマーは柄の程から折れてしまうも、その衝撃は余す事なく石の巨人全体に伝わり纏った岩石弾け飛び元の人間大の姿をあらわすピーカ

「ぐ…一体何を…」

何が起きたか分からずそんな声と共に倒れ伏すピーカそんなピーカを見て倒れた仲間たちを介抱していたドフラミンゴは苛立たしげな顔をしながらディアマンテに指示を出す

「ディアマンテ！畳み掛ける!!」

「おおっ！まかせろドファイ!!」

そんな声と共に帽子をかぶった背の高い男、ダイヤモンドが剣を片手にこちらへ向かってきた。

「ちっ、面倒な…」

そう言いつつ腰に吊っていた剣、試作53号と54号を抜き放ち両手に構える

”陸軍旗（アーミーパンテラ）”!!」

「ぐっ…足元を！」

「ウハハハハ！どうだヒラヒラとひらめく大地は！おれはヒラヒラの実を食べた”旗人間（フラッグにんげん）”!!あらゆるものを旗に変える能力だ！」

「それで地面を旗に変えたってか！だが足場が揺れる程度船に乗ってればいつもの事だろうが!!」

そう言つて二本の剣を水平に横薙ぎでダイヤモンドに対して振り抜くも

ガアンツと鉄同士がぶつかる甲高い音

「ウハハハハ！気をつけなあつ！マントは鉄だ！そして食らえつ！”蛇の剣（ウィーベラグレイブ）”!!」

それと共に振るわれるのはダイヤモンドの能力によってまるではためく布のようにヒラヒラとした剣がクリークに伸びその鎧に浅く傷をつけていく

「鉄のマントか…いいもん持つてるじゃねえか」

「ウハハハハ、残念ながらおれ専用だ。そうだ今からでも遅くねえお前がドファイの下につくつてんならくれてやつてもいいぞ？」

「冗談、使えるだけ使つて後ろから刺されるのが目に見えるじゃねえか”二刀斬撃・海蟹挟（にとうざんげき・みがざみ）”!!」

「ウハハハ！よく分かつてんじゃねえか！」

「ちっ、剣術くらい習つときやよかつたか…」

相手を挟み込むように振るわれる二刀はダイヤモンドの剣に阻まれお返しとばかりにダイヤモンドのヒラヒラとした剣が振るわれる

「半…月う…グレイブ!!!」

ダイヤモンドが距離をとり剣を下段から大丈夫段へ半月の軌跡を



描いて構えを変えるとそこから繰り出されるのは大上段の一撃

これは!!その威力を素早く見極め慌ててコラソンが倒れ伏すところに、そしてその前で両腕を組み衝撃に備える

「なかなか…だが俺を倒す事はできないみたいだなあっ!!」

「ウハハハハハ、守ったな?」

「…何を?」

「お前は裏切り者のコラソンを攻撃から守った!ならおれはこうするだけさ!!」

そうしてディアマンテはコートの内側から細長い紙を数本取り出して辺りにばらまいたのであった。

「ウハハハハ!これが何かわかるか!」

ディアマンテが地面に撒いたものはポンツという軽い音と共に連続して細い筒のような物が地面に並んだ。

更にそれらは上空に向けて発射され上空で破裂したソレはまるでヒラヒラと紙吹雪のように広がる

「なんだ?花火…紙吹雪?」

「そうだ!この紙っぺらはおれがヒラヒラにした物だ!!ドファイ!他のやつを連れて下がってろ!」

そう叫んで自らの仲間を遠ざける、こちらも相手が上空に放った紙吹雪の正体がつかめないのでコラソンを安全な場所に運ぼうとしたが

「逃すか!解除(ヒラリリース)」

そんなディアマンテの声と共に上空に舞っていた紙吹雪が元の姿を取り戻す

「なっ!!棘の鉄球だど!」

「ウハハハハ!美しいだろ!まるで星屑のようじゃないか!!」

ディアマンテはそう言って笑いながら能力で持っていたのだろう分厚い鉄の傘をさす。

「こんな物でどうにかできると思ってるのか!」

「慌てるな慌てるな、これは軍隊すら皆殺しにする星屑!いくらお前が鎧を纏っており無事でもその裏切り者はどうかなあ?」

こちらがコラソンを庇ったからかニヤニヤと笑いながら自慢げに言うディアマンテ

「舐められたものだ…海軍本部少将を少し軽く見すぎではないか？」

そう声を漏らしながら鎧を脱ぎ捨て倒れているコラソンを鎧を覆うように被せ意識はあるようだったので少しだけ声をかけると二本の剣を構えディアマンテに向き直る

「ウハハハハ！自ら鎧を脱ぐとは愚かな！精々もがくがいいさ！」死の星屑（デス・エンハンブレ）”!!”

そんなディアマンテの声と共にゴウツと降ってくるのは棘だらけの鉄球。

なるほどディアマンテが自信を持つのもわかる、ヒラヒラと旗状にひらめく故に高度まで上げる事が可能で撒き散らした後は高度にある時に元の鉄球に戻せば元々の重さに加えて落下による重さが広範囲に降り注ぐからだ。

だが

「だから舐めすぎだと言ってるだろ!!」

二本の剣を放り捨て無手で鉄の傘をさすディアマンテに肉薄していく、確かに並の軍隊で有ればこの技一つでケリがつくであろう。

だがこんな技で海軍将校を倒そうというのは少し海軍を甘く見ていると思えない。

「なっ！なんだそりゃあっ!!お前も能力者だったのか!？」

ガキンツ、ガキンツと金属同士がぶつかる音を立てつつディアマンテに一步、また一步と迫るクリーク

「さあな、精々自分で考えるこった!」

未だ棘の鉄球が降り注いでいるため未だに鉄の傘を手放さないディアマンテは懐から銃を取り出し撃つもカンツと軽い音を響かせて弾かれ

「ドファイ！こいつ能力者…」

「歯あ食いしばれ!!連装拳砲！技極・双葬（れんそうけんぼう、ぎごく・そうそう）”!!”

ドファイに大声で告げたその言葉は、咄嗟に盾にした分厚い鉄の傘ご

とクリークの二つの拳により砕かれその身を吹き飛ばされる事により途切れたのだった。

## 桃鳥焦燥 ドンクreek

ディアマンテの倒れ様の一言に思わず動揺するドフラミンゴ  
「くそっ！奴も能力者だと！そんな情報なかったぞ！？折角装備は全部剥がしたつていうのに…」

ドフラミンゴの勘違いも無理はない。

クreekが武装無しで戦った事は数える程しかなく、最近はおっぱらあらゆる武装を用いた戦闘がメインとなっていた為ドフラミンゴがクreekの情報を集めた先であるカモメの水兵団に所属しているヴェルゴ。

これはヴェルゴがカモメの水兵団に潜り込んでからのクreekの戦闘スタイルを間近で観察したものと、そして主に北の海に蔓延る海賊をメインとしたカモメの水兵団と戦った者たちからの情報。

それらの情報の中には武装が無い状態でのクreekの戦闘力についての情報は無かった為、これらの情報からドフラミンゴはクreekを

”身に纏った武装で遠近中と対応して戦うオールラウンダー”  
と見ていたのである。

その為装備さえ引き剥がしてしまえば流石に本部少将であるからまあ楽勝とはいかないだろうがその戦力は大幅に低下すると考えていた。

砲弾の直撃を受けても大したダメージを受けていないという情報もあつたが、これは本部海兵が身につけている六式と呼ばれる技術であろうということも見抜いていたが、それにしてもディアマンテのあの技でもノーダメージといえのはいくらなんでも丈夫すぎる。

故にディアマンテはクreekはなんらかの悪魔の实の能力者だと判断し、ドフラミンゴもそう判断した。

いや、そう判断してしまったのだ。

実際のところクreekは別に悪魔の实の能力者でもなんでもなく、ただ単に海軍に伝わる超人的体技である鉄塊を発動させたまま行動

可能な鉄塊拳法、クリーク曰く金剛体術を発動させているだけであり、並の鉄塊と比べて数倍以上の硬度を持っているのは単にクリークの生命帰還を用いてまでの狂的な程の弛まぬ肉体鍛錬における成果なのであったが

「さて、後はお前だけだなドフラミンゴ：」

ディアマンテを地に沈めたクリークがその場から離れていたドフラミンゴに向き直る。

いつも余裕を持った態度を見せているドフラミンゴは今や余裕なく全力でその優れた頭脳に考えを巡らせていた

ここで奴を倒すか？いや、奴が能力者であると言う以上簡単に倒すのは難しいだろう。

逃走する？だが、こちらは一人であり奴がおれを見逃すというのは考え難い。

人質をとる？奴に対して人質になりそうなコラソンは奴の後ろだし赤カモメの野郎共は姿が見えない：

：待てよ、赤カモメの奴らの姿がない？

そしてドフラミンゴはたと気づく。これだけの戦闘音を鳴らししているのに来ないという事はまさかこの鳥籠の中には奴の仲間はいないのか？

だとしたらこのままここで戦うのは下策、元々赤カモメの奴らの同士討ちによる全滅とコラソン、ローを逃がさない為の鳥籠ならオオペの実を食べたローは海軍に保護されたと連絡をベビー5が盗聴にて得ている上に全滅させるべき赤カモメがない以上この鳥籠は無意味だ

そうしてドフラミンゴは手を上に上げ絶対無敵の結界である鳥籠を解除しクリークに向き直る

「まさか悪魔の実の能力者だとはな。その情報隠蔽能力、恐れ入ったよ……」

「なんの事だ？それよりもこの結界を解いて良かったのか？」

「てめえには無意味だろ、閉じ込めておくメリットもないしな……」

そのまま両手でスツと構えをとるドフラミンゴに対しクリークも

軽く前傾姿勢をとる。

そして

「今だドファイ！ここはおれが時間を稼ぐ！一旦引いて体勢を立て直せ！！」

初手から全身を武装硬化にて覆ったサン格拉斯の男、ドンキホーテ・ファミリー幹部にしてカモメの水兵団にスパイとして潜り込んでいたヴェルゴが建物の影から走り出してクリークに組みついたのであった。

突如建物から飛び出したヴェルゴにより踵を返してこの場から逃走したドフラミンゴへの対応が遅れ

「さて…一応聞いておくがどういうつもりだヴェルゴ少尉？」

戦いの場に乱入しこちらに組みつき邪魔をした上で、最優先捕縛目標のドフラミンゴを逃したヴェルゴ少尉にそう尋ねるクリーク。

「どういう事もなにも少将はとつくに気付いてるんじゃないですか？」

そう答えるヴェルゴは既に全身に武装色の覇気で武装硬化を用いており明らかな戦闘体勢に入っていた

「…まあ確かに貴様の行動については逐一把握していたからな。だがヴェルゴ少尉、貴様は優秀な海兵だ、今ならまだ不問にするからドフラミンゴの捕縛に協力しろ。」

まあ協力しないのならばそれでも良い、どの道ドフラミンゴを捕縛する事には変わりはないがな

そう言つて再び両の腕を持ち上げ静かに構え直すクリーク

「少将も気付いておいて放置とは人が悪い、それに貴方が能力者だなんて初耳ですよ、てつきり大量の武装を用いて戦うとばかり思ってたが…」

「何の事かさっぱりだな、それからいい事を教えてやろうヴェルゴ少尉。」

戦う者はな常に奥の手という物は用意しておく物だ、例えば俺が武装が全て破損して使えなくなっても戦えるという事とかだな」

「ええ、それは自分もそう思ってますよ。だからこそ…」

ヴェルゴがそう言葉を切った直後に銃声が響く

その肉体によって着弾した銃弾は弾かれるも銃声が見ればグルグルの实の能力者であるバッファローと、その背中には彼女が撃ったのであろう腕から先を銃に変化させたブキブキの实の能力者であるベビー5

「だからこそクリーク少将、奥の手として伏兵を潜まさせてもらいました」

そうかバッファロー達の事頭から抜け落ちてたな、まあこの程度ならダメージなどないが。

「ふむ、まあ及第点だヴェルゴ少尉。」

「んにくん!!ヴェルゴさん!攪乱は任せろだすやん!!」

「敵というなら容赦しないからね!」

グルグルの实の能力である自身の体を回転させる能力を持つとても大柄な男、バッファローがこちらの後方にてホバリングを

そしてその背中には自身を武器へと変える能力を持つ少女、ベビー5が両腕を銃に変化させこちらに狙いをつけている。

「だがその程度の対策なら俺も用意してるさ、ギン!!後ろの二人を相手してやれ!!」

その言葉の直後、鳥籠が解けたと同時にこちらに急行して上空から様子を窺っていたギンが両腕にトンファアを構えバッファローに向かって奇襲をかけたのだった。

## 銀の一閃 ドンクリーク

クリークの指示にギンはスツと目を細めて腰からトンファアを抜き放ち月歩で滞空していた場所からクリークの背にてホバリングをする大柄な男に強襲をかける。

「ぐうつ、仲間がいたですやん！」

「いいわー! だったら先に相手してあげる!!」

防がれたか：自分の奇襲を腕にて何とか防いだ大柄な男を見て思う。

この二人は確か：ドフラミンゴ・ファミリーのそれぞれの特徴と調査結果をもとに二人は大柄な男が自分の体を回転させる事ができるグルグルの实の能力者であるバッファロー、その背中にいる少女が自身の体を武器に変化させる事ができるブキブキの实の能力者であるベビー5だと確認し

「ボスの指示だ、悪く思うな」

そう言うて先ずは対空した相手を地面に叩き落とすべくトンファアの柄を捻れば仕込まれた鎖分銅がバッファローの首に絡みつく。

「んにゅっ!! こいつガキの癖にいつ!!」

そのまま鎖を引っ張るギンの腕が盛り上がりバッファローの大柄な体を地面に引き倒し

「くっ、やってくれるわね!」武器変貌・銃脚（ブキモルフオーゼ・レポルベルレグ）!!」

そのままバッファローが地面に叩きつけられる前に跳躍、己の片脚を銃に変化させたベビー5がギンに向かって発砲するも

「ブキブキの实の能力者か、だが甘え!!」

素早く海軍に伝わる6つの超人体技の一つ、”鉄塊”を発動させる。これは全身の筋肉や皮膚を引き締め硬化しその場から動けなくなるという欠点はあるが体を鉄と同じ硬さまで引き上げる技である

鉄塊をかけたまま行動できる”鉄塊拳法” または”金剛体術” という技があったり、馬鹿げたほどの筋肉密度を誇り鉄の硬度なんて話



にならない程の超硬度を持たせたどこぞの筋肉達磨などという例外はあるが。

話を戻すがギンは己が使える六式の一つ”鉄塊”を発動、ベビー5の銃撃を難なく弾き返しお返しとばかりに”鉄塊”を解除して六式の一つ超速を待つ歩法”剃”を用いてベビー5に接近しトンファアを振り上げると

「鉄閃（てっせん）!!」

鋭い軌跡を描きベビー5の首元に吸い込まれるも響くのは金属同士がぶつかる耳障りな音が響く

「…無駄よ、わたしはブキブキの実の能力者。わたしの体は武器の硬度と同じ硬さを持つわ、そんな蹴りは無駄よ」

涙目で攻撃が当たった自分の喉元をさすりつつベビー5はギンにそう告げる

「なるほど、変化させるだけじゃねえのか…」

「ベビー5！あれやるだすやん!!」

そんな折地面に沈んでいたバツファローがムクリと起き上がりベビー5に指示を出す

「わかったわ！武器変貌・剣女（ブキモルフオーゼ・エスパードガール）”!!”」

それと共にベビー5の体があいよんと変化、その上半身を巨大な曲刀の刀身として変形させそんな彼女をバツファローががしりと掴むと

「うお〜覚悟するだすやん！グルグルソード!!」

自身のグルグルの実の能力で回転させて遠心力を用いた高威力の振り下ろしがギンを襲うも

「…大きいってのも考えものだな」

ギンはそう言いつつ”剃”を用いて剣を振りかぶったバツファローの懐へ

トンファアを持った片腕を掲げ頭上で剣の柄を受け止めたギンはそのままトンファアの柄を捻ればトンファアに仕込んだ仕込み鉤が発動

「えっ！キヤアッ!!」

「撃・鉄閃（げき・てっせん）!!」

剣と化したベビー5の脚を捕らえ離れようとするその動きを封じると反対側の手首の回転を加えた高い威力の打撃がベビー5の腹部を捕らえあえなくベビー5は意識を失った

「やってくれるだすやん!」

意識を失い剣の姿を保っていられなくなり少女の姿を取り戻したベビー5をバツファローは脇に避けると

その巨体に見合った大きな腕を振りかぶったが

「遅え!!双鉄閃（そうてっせん）!!」

月歩にて素早くバツファローの首元へ向かったギンの両のトンファーがバツファローの首を挟み込みバツファローは崩れ落ちるのであった。

そして時は少し戻りギンとバツファロー and ベビー5のコンビが戦闘を始めた頃こちらは緊迫した空気を漂わせるクリークとヴェルゴ。全身を武装色の覇気で覆い武装硬化したヴェルゴは大きく息を吐く。

ここで少しこの覇気というものについて軽く説明しておこう。

覇気とは”意思の力”。その意志によって流れる”体内エネルギー”を比喩的な表現をした例えば気配や気合、威圧、殺気、闘争心、怒気、等々々と言葉はあるがそれらと同じ概念であり、この武装色の覇気はより過酷な鍛錬と実戦の極限状態で開花すると言われる。

それらを乗り越えて習得すれば攻撃にも防御にも転じ、武器に纏うことも可能な不思議パワーである。覇気にも何個か種類はあるがここではヴェルゴの纏う武装色の覇気についてだ。

武装色の覇気というものは悪魔の実の能力者の実体をとらえて攻撃を加える事ができるため、自然系能力者への代表的な対抗手段としても挙げられる。

なお海楼石や一部の悪魔の実とは違い、あくまでも実体をとらえることができるだけで能力を無効化できるわけではない。

さて、ここでヴェルゴが使用している武装色の覇気を用いたテクニツクの一つである武装硬化だが、これは体内部から身体を覆うように纏った覇気を硬化させる技術だ。

硬化させた覇気は基本的には今のヴェルゴの姿のように黒光りする鋼鉄のような姿に変化し攻撃力の上昇に伴って相手に強烈な攻撃を加える事ができる他、武装防御として相手の攻撃の防御にも扱えるため、戦闘力の強化につながる。

この武装硬化は腕や足など一部を武装硬化させたり武器に纏ったりと使い方は複数あるがヴェルゴは全身を武装硬化させて、戦闘の補助として使用している。

しかしこれは体内の覇気を体全体に集中させる以上、覇気の消耗性が大きくあまり効率の良い使用方法とは言えない。

そのため、殆ど最終手段として行われるがヴェルゴはクリークと対するにあたって最大攻撃を相手に叩き込むべく自身のできる最大限の戦闘形態としてこれを選択した

「クリーク少将、貴方がいくら能力者と言えど武器も鎧も失ってしかもこのおれの武装硬化した状態で相手にできると思ってますか？」

「さてな、伊達に赤カモメを率いている訳ではないとでも言っておこうか？」

そう語るヴェルゴをクリークは油断なく見据え再び両腕を構える

「何の能力者かわからないが貴方がいくら頑丈でも武装色の覇気を纏った拳は能力者の実体を捉える、貴方が能力で頑丈になろうともそれが悪魔の実の能力である以上ダメージは覚悟してもらおう!!」

そう叫びながら真っ直ぐにクリークへと向かいその体に正拳を繰り出すヴェルゴだったが、その腕は腹部に当たるも鈍い音を立てただけに終わりそれに対してクリークは、正拳突きを放ったヴェルゴの腕をガシリと掴みスツと軽く息を吸って右腕を後ろに引くと

「拳砲三極・魏呉蜀（けんぽうさんごく・ぎごくしよく）!!」

三連打の正拳突きが真っ直ぐに向かってきたヴェルゴの顔面、胸部、腹部を捕らえその衝撃が後ろに突き抜ける。

「ガツ…馬鹿な…」

「一つ教えてやるヴェルゴ少尉…いや元・少尉か。

誰かを逃すと言うなら時間を稼ぐ事に重点を置くべきで最初から全身に武装色を纏った状態で戦うのは悪手だ。それに相手の戦力の見極めができていないのもマイナスだ、誰がいつ俺が悪魔の実の能力者だと言った？

銃弾を弾き返したりしたのは貴様も知ってはいるだろうが六式の一つ、ただの”鉄塊”だぞ？」

そう論すように言うクリークに対しヴェルゴは口の端から血を垂らしつつ反論する

「馬鹿なっ!!いくら”鉄塊”を使つてたとは言えディアマンテのあの技でも傷一つ無いと言うのは異常だ!

ゴホッ、それに”鉄塊”を使っている間は身動きできない、反撃出来る筈がないだろう!!」

ダメージは大きかったのであろう、腹部を抑え肩で息をしつつ更に反論を重ねるヴェルゴだったが

「まあ世の中は広いと言う事だ、並の鉄塊を遥かに超える頑丈さと鉄塊を使用しているても動けると言うのはあれだ…えーと、頑張ったからだ」

「っ…巫山戯るなあっ!!」

クリークのおどけたような言い方にヴェルゴは頭に血が上り最後の力を振り絞ってその首に手を伸ばすも

「さよならだヴェルゴ、”剛崩・拳砲っ(ごうほう・けんぽう)!!」

その手は届かず体と共に地面に倒れるのであった。

## 桃鳥追跡 ドンクリーク

「ボス、こっちは終わったぜ」

「ああ、こつちも完了だ。さて後はドフラミンゴ本人と残ってるのはジョーラ、デリンジャーの二人か。」

バツファロー、ベビー5の2人を縛り上げトンファーを腰に仕舞いつつこちらへ声をかけるギンに、クリークはヴェルゴを縛り上げ高カロリーの栄養バーである”カロリーフレンズ”を口に咥えながらドンキホーテファミリーのメンバーリストにばつ印を書き加えていく「時間食ったけどどうします？すぐ追いかけますか？」

「俺が奴なら一度退いて体勢を立て直す、多分奴は一度船に戻りジョーラやデリンジャーと合流しこの三人で仲間を取り返しに来ると思うがどう思う？」

「じゃあ奴の船、ヌマンシア・フラミンゴ号の方か」

ギンのその言葉に軽く頷くと小電伝虫を取り出し

「こちらクリーク、誰か応答できるか？」

『はっ、何かありましたでしょうかクリーク少将』

「丘の上にあるバレルズのアジトに何人が寄越してくれ、怪我の酷い要救助者もいるから応急装備も持たせるように。」

それから捕縛目標のドフラミンゴが逃走した、奴の船の場所はわかるか？」

『はい、南の入江に奴の船があるのを確認しています。第三、第四小隊が船の制圧に向かっています』

「南の入江か、了解した。これから俺はドフラミンゴの追跡にかかる、ドフラミンゴの一味については捕縛した上でその辺にいると思うから檻にいられておけ。通信は以上だ」

『了解しました！御武運を』

そう伝えて通信を終えると

「ギン！あつちにドンキホーテファミリーのコラソンがいる、奴の正体は海軍本部所属ロシナンテ中佐だ。」

部隊が来たら彼の治療と他のファミリーの捕縛を頼んだぞ」

ギンにコラソンの事を伝え今から来る部隊の指揮を頼みつつ空中を移動する歩法、月歩で南の入江へと向かうのであった。

一方ヴェルゴの尽力によりからくもクリークの手から逃れたドフラミンゴは自身の船であるヌマンシア・フラミンゴ号にてジョーラに指示を出していた

「ジョーラ！お前とデリンジャーの2人で大砲を奴らに撃ちまくれ！それで時間を稼いでる間におれは他の奴等を助けに行ってくる!!」

「しかし若！若の姿がなければ奴らは血眼になって若を探すザンス！ここは一旦どこかの島で戦力を立て直すべきザンス!!」

そう言い募るジョーラであったが

「おれに家族を見捨てろというのか！それにはおれの分身を置いていく、流石に一体しか出せねえが赤カモメの奴らには通用するだろう」

「わかったザンス…若も無理は禁物ザンスよ?」

「…すまねえなジョーラ、だがおれは家族を見捨てることはできねえ」  
そのドフラミンゴの言葉に従いジョーラはデリンジャーを伴い大砲がある船倉へと向かいドフラミンゴは

「影騎糸(ブラックナイト)!!クリーク、テメエを舐めてたのは確かかもしれない。」

だが奴は装備を失ってる、悪魔の実の能力者というのも最初からわかってりやあ問題ねえ！悪いがおれの家族は取り戻させてもらおうぞ!!

その言葉で自身が食した悪魔の実の能力であるイトイトの実の力を使い糸を自在に操り己とそっくりの分身を作り出したのである。

南の入江に到着すれば情報通りドフラミンゴ・ファミリーの船、ヌマンシア・フラミンゴ号が停泊しており片舷に並んだ大砲から砲弾を次々に撃ち出しておりその合間に銃弾も飛ばしているようであった。

こちらから送り出したカモメの水兵団による先行部隊は連続して飛んでくる砲弾に攻めあぐねているようであったが上空から確認したところジリジリと近づいているようだったのでこのままいけば遠

からず制圧は可能だろう

「ふむ、奴の事だから仲間を取り返しにくるか一旦退いて体勢を立て直すかと思っただが何故まだ留まっている…?」

甲板の上からイトイトの実際の能力であろう、指先から糸を発射しこちらの部隊を押し留めているドフラミンゴを見てそう考えるクリーク

とにかく先ずはこの抵抗を止めるべく指笛を鳴らしあらかじめヌマンシア・フラミンゴ号へと潜ませていたイシズミ2世を筆頭とした百匹程のネズミによる攪乱部隊“タビネズミ”に合図を送る。

暫くすれば砲撃の頻度が少なくなりやがて完全に沈黙、ここぞとばかりにカモメの水兵団が船へと殺到、こちらはドフラミンゴを捕縛すべく上空から甲板へと降り立つ

「さて、頭のいいお前のことだから一旦退くと考えていたが未だこんなところにいるのは僥倖だった、大人しく捕まる気になったか?」

ドフラミンゴを捕縛すべくそう告げるとドフラミンゴは無言でこちらに構えを取る

「…なんだ黙りか、お前が大人しく捕まるんなら仲間の無事は保証するがどうか?」

その言葉にも無言のまま構えを解かないドフラミンゴ

「まあいい、それだったら普通に捕縛するだけだ!」

そうして大きく踏み込みドフラミンゴに一気に接近すればドフラミンゴは五本の指先から糸を出しこちらを斬りつけてくるもクリークの防御を突破出来ずその技は不発に終わり、そしてクリークの手がドフラミンゴの首元をガシリと掴みその身を吊り上げる。

せめての抵抗とばかりにドフラミンゴの指先から短い糸が発射されるもそれすらも無駄とばかりにクリークには痛痒を与える事は出来なかった

「…ドフラミンゴ、お前なんか弱くないか?」

あのドフラミンゴの戦闘力がこれくらい?と肩透かしをくらいつつもとりあえずドドメとばかりに拳砲を繰り出せば

「なっ!!糸だど!」

ドフラミンゴのその身はバラバラとなり糸へとその身を変化させやがて消えた

「そうかつ！偽物だったか!!」

直ぐに船を制圧すべく船内に入り込んだ部隊と合流、大砲を操作していたジョーラ、デリンジャーは捕縛されていたので安堵しつつ船にいたドフラミンゴが偽物だという事を伝え直ぐに南の入江から月歩にて飛び立つ

「こちらクリーク、捕縛したドンキホーテファミリーの状況は誰かわかるか？応答求む」

『こちら第六小隊、少将が捕縛した一味の者は現在収容作業中です。』

コードネームピーカ、ディアマンテが大柄ゆえに未だ収容が終わってませんが他のメンバーはシャーロット・アンジェ号へと移送作業中ですが何かありましたか？』

「こちらにいたのはおそらく奴の能力だろうがドフラミンゴの分身だ、本物がどこかに潜んでおり仲間を取り返しにくる確率が高い。」

追加で部隊を送るが十分注意をしてくれ」

ポーチから小電伝虫を取り出し一味の捕縛に向かっていた部隊に連絡をとりその後で更に手すきの部隊を増援として送り込む。

そしてクリークは再び丘の上のバレルズのアジトへと向かうのだった。



## 対桃鳥戦 ドンクリーク

「そこまでしてもらおうぞドフラミンゴっ!!」

バレルズのアジトまで戻ってきてみてみればそこにはお互いにロッドを振りかざして戦うカモメの水兵団の団員達の姿がそこかしこで見受けられた。

「フッフッフツ、見つかったなら仕方ねエ…おれの仲間を取り返させて貰うぞクリーク!」

そんな声と共に首を掴み上げていたギンをこちらに投げて寄越した上で、さらに手を動かし自身のイトイトの能力、”寄生糸（パラサイト）”にてカモメの水兵団の兵士をあやつり、クリークに攻撃を仕掛けた。

が、クリークは飛んできたギンを受け止めると素早く状態を確認、気絶しているだけだとわかると安堵しつつその目をドフラミンゴに向ける

「ドフラミンゴ…いや、これ以上は言うまい。お前は今ここで俺が捕らえさせてもらおうぞ!」

「フッフッフツ!!出来るもんならやってみろ!!自分の仲間相手にお前がどれだけ戦えるかなあ!?!」

こちらに”すみません少将!”だの”少将!よけてください!!”だの言いながらロッドを片手に振りかぶり殺到してくるカモメの水兵団の団員達にクリークは

「お前ら乱暴かもしれないが、ちよつと痛いのは我慢してくれよ?”鞞内小断・乱舞つ（さやうちこだち・らんぶ）!!」

わざと斬れ味を落として切断能力を無くした手首を用いての衝撃波を辺りに大量に繰り出し殺到してきた仲間達を次々に気絶させていくクリーク。

更にその勢いそのまま操られていた仲間達を全員気絶させるとその勢いそのまま真っ直ぐドフラミンゴの元へ向かいその豪腕を振り上げるも

「フッフッフツッフッフツッ!お前なら正面から来ると思ったぞ!”超

過鞭糸つ（オーバーヒート）!!」

ドフラミンゴがその掌から生み出した建物すら真つ二つにする威力だけなら自身の最強の技をクリークに叩きつける。

「ぐっ、なかなか…だがまだまだっ!!」

ダメージが無いとはいえ流石にその高威力の攻撃に対し衝撃を殺しきれず僅かに後ろに下がるクリーク、そこにさらにドフラミンゴは「弾糸つ（たまいと）!!」

と指先から人体くらいなら簡単に穿つ事ができる糸の弾丸を連射、その弾幕がクリークを襲う

が、糸の弾丸ではクリークの歩みを止める事は出来ずとうとうドフラミンゴの前にクリークが到着する。

バキリバキリと指を鳴らしながらドフラミンゴの前に立ち塞がるクリークは言う

「さて、何か言い残す事はあるか？因みにお前はどうかあってもインペルダウン行きは免れないだろうから助けてくれと言うのは無しだ」  
「っ…仲間を…おれの家族を全員無事に解放しろ」

流石にこれは無理だと察したのかドフラミンゴはその場に腰を落としてそうぼつりと呟いたのだった。

そうして無事にドフラミンゴの捕縛を完了してから1日が経った、今はギンと二人でこの事件の報告書を纏めているところである。

さて、この事件の顛末をここで語ろう。

ドンキホーテ・ドフラミンゴは大人しく捕縛されその代わりに彼の家族、すなわちドンキホーテファミリーのメンバーは解放する事と相成った。

これは彼との取引というのもあるがドフラミンゴと違い他のメンバーに懸賞金がかかっていなかったという理由もある。

まあ今回無罪放免となったドンキホーテファミリーの面々もこちらに對しての攻撃や、この北の海にいる間の行動に問題が無かったとは言わない、探れば色々出てくるだろうから懸賞金を懸けるのは簡単だろうが、センゴク元帥に聞いたところドンキホーテ・ドフラミンゴさえ捕縛してしまえば一味は崩壊すると考えているようで彼らにつ

いては解放しても問題無いと考えているようであった。

しかし

「うーむ…確かに元々は北の海にいた小さなギャングがここまで大きくなったのはドフラミンゴの手腕によるものだとは思いが…」

「上が奴を危険視してるとつてのは聞いてますけど、奴だけ捕らえて他の面々を無罪放免というのも納得いかないですけどね」

調べは一応ついている。

元々は北の海にいたトレーボルをボスとした小さなギャングでその時のメンバーは現在ファミリーの幹部であるディアマンテ、ピールカ、そして海兵としてカモメの水兵団に潜り込んでいたヴェルゴ。

この4人が当時放浪していたドンキホーテ・ドフラミンゴを仲間として迎え入れ、彼の資質を見抜いたトレーボルがボスの座をドフラミンゴに譲り、そこから更にセニョール・ピンクやラオG、グラディウスやマツハ・バイスといった仲間を増やして今のドンキホーテファミリーがあるというのが調査の結果だった。

故にドンキホーテファミリーは一人の傑物、この場合はドンキホーテ・ドフラミンゴがいたからこそここまで大きくなったのであり、彼さえいなければトレーボル達は北の海のどこかで小さなギャングとして一生を終えていたであろうし、ここまでの彼らの行動も無かつたであろう。

「確かにベビー5やデリンジャーといった子供達もいるしな…あのバツファローもまだ17歳らしいし…」

「ボスが引き取ると言ったら本人達に嫌がられた上に他の一味の奴らが猛反対しましたからね…」

「まあ上の意向なら仕方ない、それよりコラソン…いや、ロシナンテ中佐はどうなった?」

「残念ながらまだまだ目は覚ましていません、ファウス島への移送準備は完了しています」

ドンキホーテファミリーに海兵側のスパイとして潜り込んでいたコラソンことドフラミンゴの実の弟、ドンキホーテ・ロシナンテは多数の銃弾を受けており救出直後は生死の境を彷徨っていたが懸命な

治療によりなんとか一命を取り留めた。

だがしかし一命は取り留めたものの彼の意識は戻っておらず、今後ファウス島に移送しその医者達に診てもらおう予定である。

「ロシナンテ中佐と共にいたという珀鉛病の少年も行方不明のままだからな…」

そう言っつてこめかみを抑えれば

「最初に報告があった少年を保護したという通信で早とちりしましたからね、多分こちらがそちらに気を取られている間に逃走したのではないかと」

ギンが補足してくれた。

オペオペの実を食べたフレバンスの生き残りであり現在ファウス島にいるトラファルガー・ローク医師の実子でありフレバンス脱出の際に行方不明となつてしまったトラファルガー・ローをここで保護できなかつたのは痛い。

少年を保護したというのでこれでローク医師を安心させてやれると思つていたのだが実際会ってみればそれはローでは無く今回オペオペの実を手に入れ世界政府と取引予定だったディエス・バレルズの実子、ディエス・ドレークだったのだ。

そんな彼はこちらに海軍に入れてくれと頼み込み、現在はカモメの水兵団に見習いとして在籍する事が決まっているが、ローの行方については未だ知れず、こちらの原作知識ではローがコラソンと別れた後どこにいたかというのは語られていない為お手上げ状態なのだ。(小説版では語られています)

とりあえずドンキホーテ・ドフラミンゴ、ディエス・バレルズの両名は大監獄インペルダウンへの収監が決まっております。ファミリーの他のメンバーに関しては無罪放免、コラソンことロシナンテ中佐は死んではないものの意識は未だ不明、保護対象であったローは行方不明と原作と比べて上手くいったところもダメだったところもある結果と相成つたのであった。

## 情報考察 ドンクリークさん

ドフラミンゴのオペオペの実強奪未遂事件から数週間、クリークの率いる“カモメの水兵団”の船はファウス島へと進路を向けていた。「ふむ、とりあえずドフラミンゴは捕縛してインペルダウン送りになった事だしドレスローザはこれで問題ないだろう・・・ないよな？」インペルダウン、黒ひげ、脱獄なんて言葉が頭に思い浮かぶも大丈夫だろうと自分に言い聞かせつつ。

お陰で

『ならば誓え、おれはここを生き残り再びおまえの前に現れてやる。そしたらその時またおれと戦うと。』

というあのバレットの言葉まで関連して思い出してしまい頭を抱えつつクリークはシャーロット・アンジェ号の艦長室にてこれからの計画について考えを纏めていた。

ギンは新しく所属した新人のデイエス・ドレークの教育係として彼に船を案内している頃だろう。

とりあえずまずはファウス島への帰還が最優先、そこでロシナンテ中佐を医師達に診てもらう必要がある。

そしてロビンを西の海へと送り届けなければならない。

最初は四つの海で最も懸賞金アベレージが低く他の海に比べれば安全な東の海から出立させるべきかと考えたが、ロビンの意見でそれよりも西の海から目撃情報を作る方が良いと言われた為変装を解いた上で西の海からの出立とあいなった。

そしてロビンを独り立ちさせた後は幸いにも珀鉛病については治療の目処が立ったのでそちらについては問題なし、海軍の任務においても急ぎの指令は来ていないのでしばらくはそれぞれの海への遊撃が主になるだろう。

となるとギンはこれまで通り副官として同行させて良いだろうしモネは：医術の勉強の進捗によっては本格的に勉強させるべく海軍本部に連れて行くのもありだろう。

シユガーはまだ幼いしオルガは：中身はともかく見た目がまだ幼

いからなあ：

とりあえずこの二人はフレバンスの子供達と一緒に一般常識や勉強に励んでもらう傍で基礎体力をつけさせるところから始めるか。

そして原作関連だがまずは逐一情報を集めている赤髪のシャンクス率いる赤髪海賊団。

既に懸賞金2億を超え大海賊の一角となったシャンクス達がグランドラインから東の海へ入ったという噂が届いている。

ならば原作の主人公、麦わらのルフィと既に接触している、若しくはこれから接触する可能性は高いと見ていいであろう。

ゾロやウソップに関しては特に問題は無いだろう、強いて言えばキャプテン・クロであるが未だ設立前なのかクロネコ海賊団についての情報は無し。

海賊団の情報と言えば原作では海上レストランバラティエのオーナーであったオーナー・ゼフことクック海賊団を率いる赫脚のゼフがグランドライン入りするのでは無いかという噂が流れている。

次にアーロンに関してだが彼はジンベエの七武海入りの恩赦で釈放された後に東の海へと向かったのであり、今はまだフィッシャー・タイガーが無事であり彼が船長を務め率いる”タイヨウの海賊団”に在籍している為問題無し。

それにベルメールは海軍本部への研修により強化されているから相手が魚人とは言えそうそう遅れを取ることもなからう。

ドラム王国に関しては情報は得ているものの医者 of 追放などという馬鹿げた情報は無いため未だ問題無し、そんな事になれば大騒ぎだろうし追放された医者達をこちらに匿うという目的もあるからなあ。

アラバスタについては興味深い情報が届いている、若くして七武海に数えられた天才、サー・クロコダイルが数年前からアラバスタに居を構えているという情報だ。

下調べとして一度は訪れるべきだとは考えているが中々いいタイミングが無かったがやはり一度は行くべきだろう。

一度訪れるべきと言えばウォーター・セブンにも一度向かわなければならぬだろう、海列車のテストは成功したというのはニュース・

クーでも大きく取り上げられており現在は全線開通に向けて動いている筈だ。

執行猶予は後数年ほど残っておりCP9の…なんだったかスペインダムだったか？そいつの暗躍はまだ先だろう。

ブルックに関しては彼に大きく関わるゲツコー・モリアが現在はまだ新世界のワの国にて三大海賊の一角、”百獣のカイドウ”と小競り合いを繰り返しているという情報を掴んでいる。

フロリアン・トライアングルと呼ばれる霧が立ち込める魔の海域を探せば会えるかもしれないが特に用事もないのでこれは放置でいいだろう。

とそんな風に考えつつも一度一息入れるか、と椅子から立ち上がりコーヒーを入れる。

砂糖とミルクもたつぷり入れゆつくり飲んでいけば

『少将!!ジェルマです!海遊国家、ジェルマ王国です!!』

「ゲホツゴホッ!なんだと!何故気付かなかった!」

艦橋から伝声管を通して伝えられた突然の情報に、大きく咳き込みながら聞き返すのであった。

”ジェルマ王国”

かつて北の海を武力で制覇したヴィンスモーク家が収める国家で世界唯一無二、国土を持たない海遊国家の名である。

国民は船に住み、何十隻もの船がそれぞれ移動し、また集結する事で国の形を成しており、世界政府にも加盟した歴とした一つの国家でもあり、国民のほぼ全員が男性であり兵士、彼らによつてジェルマ66という軍隊が組織されている。

ジェルマ66は、とある事情により世界的に有名ではあるが作り物、架空の話としてフィクション世界の組織程度にしか認識されていない。しかし、実際には世界中の戦争に金銭を条件に軍事的支援を行っており、元が政府加盟国軍であるため世界政府とも繋がりがあろうである。

そしてジェルマ66の存在を知っている者にはこうも呼ばれている。

”戦争屋”と。

「うーむ、いくら普通の島と誤認したとは言えここでスルーするのもなあ……」

海を渡る事が可能な電伝虫の亜種が連結して国家を作る”ジェルマ王国”、もちろん生き物なのでその目はばっちりこちらの姿を捉えているようである。

「よし、素通りつてのも何だし顔だけでも出しとくか。船を止めろ！他の者は一時待機、俺は少し挨拶だけしてくる！」

そう言つてこちらをジツと見る目に大きく手を振る。

暫くすればガコンツと音がして海遊電伝虫が船の側までやって来た為、月歩にて飛び上がり着地

「海軍の方とお見受けします、どのような御用でしょうか？」

そう言いながらこちらにやって来たのは顔の上半分をマスクで覆い黒い服を着た男。

おそらくこの国の兵士であろう彼に手短に所属と”挨拶に来た”という事だけ伝えるところという事ならばと船はジェルマ王国の本体へと再び戻り、案内されたのは巨大な広間。

壁には大きな翼開く鷲の紋様、至る所に白いラインが入った黒十字の旗がぶら下がり、トドメには黒いドクロをモチーフとした玉座らしきもの

うわあ……なんか悪の秘密結社みてえ、とそんな率直な感想を抱きつつ周りを確認し、再びその目を玉座に戻す。

玉座には一人の男、目元まで覆う兜をかぶり斜め上にピンと伸びた髭。

金の豊かなうねりを持つ髪は後ろに大きく広がり……あれ？髭は黒で髪は金？

……まあいいか

「海軍本部少将クリークと言ったか。この私に何の用だ？」

ヴィンスモーク家当主、ジェルマ王国 国王にして科学戦隊”ジェルマ66”の長を務める”怪鳥(ガルダー)”ヴィンスモーク・ジャツ



ジの姿がそこにはあった。

そして傍にはジャツジと同じく金色の髪を持つ子供達。

全員10歳になるかならないかかってところだろう、とクリークは見当を付けてあれが例の改造人間か…と考える。

ぶつちやけ詳しく覚えてはいないが能力者でないにも関わらず毒を操ったり銃弾を跳ね返したり空を飛んだり消えたり電撃を使ったり…と、中々にバラエティー溢れる敵だったというのは覚えている。

うん？五人？…そうか、まだ死んだ事になってないのか

原作ではこの兄弟の一人、麦わらの一味でコックを勤めていた”黒脚のサンジ”。

彼はこのジェルマでジャツジの息子として生まれ、そして失敗作として死んだ事とされて幽閉され、そしてある日を境にそこから逃げ出して客船に乗り込んだのであった。

今はまだ幽閉されていないので一番年上の嬢ちゃんとその下の四つ子として揃っていた為、ここで手を出そうかとも考えたが

…やめておこう、いらん事に手を出してもな、とそう思い直してジャツジに向き直った。

## 2000話記念 彼がもし彼では無く彼女だったら

「…やってくれたなイワンコフううううっ!!!」

麦わら帽子をかぶった少年が仲間を集め色々な冒険をして色々な事件を解決する事となる数年程前、グランドラインのとある島にてある男…いや、とある”女性”の慟哭が響いた。

そして後日新聞にて一面を飾った記事があった。

『白ひげ海賊団、2番隊隊長”灼炎のクリーク” 食中毒にて死亡!!』

それは若くして白ひげ海賊団に所属し数年で頭角を現し長らく空席となっていた2番隊隊長とまでなった男の死亡のニュースであった。

多くの者はそんなまさか、と考えたが実際にそれを境に彼は姿を見せる事なくやがて世間は彼が本当に死んだのだらうという結論になり人々からやがて世間の人々から彼の姿は風化していくのだった。

そして時は流れて死亡のニュースが流れて数年後…

「親父い、どうするよい?」

白ひげ海賊団2番隊隊長”火拳のエース”が捕縛され公開処刑が決定したという事を受けて白ひげこと”エドワード・ニューゲート”は考えていた

火拳のエースの身柄を手土産に新たに七武海として就任した黒ひげこと”マーシャル・D・ティーチ”、七武海加盟にあたって政府に彼が手土産として捕らえたエースの身柄を海軍本部にて公開処刑する事を決定したのだった。

勿論エースを救出するのは決定だ。

「やってくれるなセンゴク…マルコ、傘下の海賊を集めろ」

「わかったよい、奴にはどうするよ親父い?」

「グララララ…そうだったな、あの男…いや今は違うか、奴にも連絡をとれ!海軍との全面戦争といこうじゃあねエか…」

場所は変わりここはグランドライン後半部、通称“新世界”

そしてそこで豊かな温泉で知られ湯治の名所でも知られる“セカ  
ン島”という島、その山頂。

火山であるために火口にはぐつぐつと煮えたぎる溶岩が溢れてお  
り並みの生物なら生きていけぬ環境にその女の姿はあった。

ぷるぷるぷる、ぷるぷるぷる、と火口から少し離れた場所にはある  
が、それでも汗をダラダラと流しながら鳴き出す電伝虫に気づいた女  
は気怠げにそちらを見やるとゆっくりとした動作で

”まるで湯船にでも浸かるかのようにリラックスしていた溶岩溜  
まりから立ち上がると”

その豊かなプロポジションをひけらかすようにそちらに衣一枚付  
けずに歩き出しその細くしなやかな手に電伝虫の受話器をとる。

「なんじゃ…今？今はセカン島に湯治に来ておるとこじゃ

あん？エースのぼんが捕まった？なんじゃぼんは何かへマしたの  
かえ？

ニユース？いや、こつちまでは飛んで来ないから見てないのじゃが

：

はー、ティーチの野郎がか…成る程あいわかった

いや、こつちは直接向かうぞえ、エースのぼんはわつちにとつても  
大事な大事な弟分だし後継者。

わつちがいかずして誰が行くのかえ？」

そう言うとその女は電伝虫の受話器を置き

「さて、いっちょ救ってやろうじゃないさ

見とらりやんせ海軍、わつちはわつちのやりたいようにやるぞえ  
？」

そうしてその豊かな長い薄紫の髪をかきあげるのだった。

そこからさらに数日が経ち

海軍本部のお膝元、マリソフオード

そこには世界各地から集められた精鋭を含む約10万人の海兵達。

三日月状の島は50隻の軍艦が取り囲み湾岸に幾重にも並んだ銃砲は今か今かと火を吹くのを待っていた。

そしてその最前列には五人の曲者

”天夜叉” ドンキホーテ・ドフラミンゴ

”暴君” バーソロミュー・くま

”海賊女帝” ボア・ハンコック

”鷹の目” ジュラキユール・ミホーク

”影の支配者” ゲツコー・モリア

といずれも曲者揃いの王下七武海が五人

そして広場の最後尾には高く聳える処刑台がありそこに捕らえられしは今回渦中の人物となっている”火拳のエース”の姿がありその眼下に陣取り処刑台を堅く守るのは

”青雉” クザン

”赤犬” サカズキ

”黄猿” ボルサリーノ

海軍本部の最高戦力三人の海軍大将

それ程の戦力が四皇の一角である大海賊”白ひげ”を待ち受けていた。

そしてセンゴク元帥から告げられた一つの真実

”火拳のエースはかの海賊王、ゴールド・ロジャーの息子である”  
という真実。

その事実により一時騒然となるも少し経てば否応にも皆我を取り戻す

何故なら海上に突如現れたのは総勢43隻の海賊船

”遊騎士ドーマ”、”雷卿マクガイ”、”ディカルバン兄弟”、”

大渦蜘蛛スクアード”といった新世界にも名を轟かせる錚々たるメンツが顔を並べ更に続け様に

「布陣を間違えたかねエ…」

海軍本部中将”大参謀”おつるがぼやくと三日月状となった島の湾内、海軍の鉄壁の布陣の内側に白ひげの船、モビーディック号と続け様に三隻の船が浮かび上がったのだ。

彼らは特殊な技術を用いて海底を航行、そして海軍の目を欺きま  
まと海軍の布陣の内側へと姿を表したのだった。

そして二言三言話すと決戦の火蓋が切られた。

初手は大海賊白ひげ、彼の能力グラグラの実の力により引き起こさ  
れた海震は巨大な津波となって帰ってきた。

彼はグラグラの実の能力者である”地震人間”振動を自在に操る  
その男は文字通り世界を滅ぼす力を持っている人物であった。

そしてその巨大な津波はマリソフォードを島ごと飲み込もうとし  
た時

「氷河時代（アイスエイジ）!!」

海軍三大将の一角にしてヒエヒエの実の能力者にして氷人間であ  
る青雫により津波は凍らされ氷壁へとその姿を変えた。

そこから更に青雫は湾内を全て凍らせ相手の身動きを封じればそ  
こからは乱戦であった。

海賊と海軍で斬っては斬られて、斬られては斬ってと。

そして戦場に大きな動きがあったのは丁度海軍本部元帥”智将”  
センゴクが己の策を発動させようとしていた時の事である

空から突如降って来たのは一隻の船。

いずれも大監獄インペルダウンから向かって来た面々であり目的  
は違えと

元七武海である”砂漠の王”クロコダイル

同じく元七武海”海侠”ジンベエ

”奇跡の人”エンポリオ・イワンコフ

実は赤髪とは同期でありかつてはゴールド・ロジャーの船に見習い  
として乗っていた”道化のバギー”

そしてその後ろにいるのは過去に名を馳せた脱獄囚や海賊達。

そしてそれらの無秩序な集団の先頭には

「助けに来たぞ〜〜!!」

麦わら帽子をかぶった精悍な顔つきの少年、”最悪の世代”の一人  
に数えられるエースの義弟にして話題に事欠かない”麦わらのル  
フィ”の到着であった。

そこから更に戦場は混沌となり更に明かされる別の真実

” 麦わらのルフィはかの革命軍総司令、ドラゴンの息子である”

という真実、その言葉と同時にルフィが海軍本部の巨人の海兵を殴り飛ばし

処刑台のエースは俯き深く決意したように

「もうジタバタしねエ、みんなに悪い」

と、一言だけこぼした

そんな折

「なんじゃ、諦めるのかえ？」

戦場に響くは凜つとしたよく通る女性の声

「なんじゃと!?!」

「貴様っ! いつの間に!!」

「なっ、どうして姉御がここに!?!」

処刑台を見下ろすようにフワフワと浮かぶのは豊かな胸元を惜しげもなくはだけさせた黒い着流しの女性。

その上から更に豪華な着物を羽織り、長く豊かなその薄紫の髪は首元で結えられた多少目つきは悪いものの絶世の美女がそこにいたのであった。

急に現れたその姿に咄嗟に構えをとるガープとセンゴク、その姿を知っているのか驚愕したように言うエース。

それと同時に戦場には異常が起こり始める。

「…おい、なんか暑くないか？」

一人の海兵が言う

「っつ! なんだあ? くちびるが切れやがった…」

脱獄囚の一人が急に切れて血が流れた唇を抑える

「あの女…最初からガチモードかよ…」

白ひげ海賊団に所属する男は急激にカサつき出した自分の肌をさすりつつぼやく

「ようやく来やがったか…遅えぞ」クリーカ!! 何処で油売ってやがったっ!!」

「すまんのお親父殿、なんとか早く辿り着こうと思ったのじゃが少々

” 温度を上げるのに手間どってしもうたのじゃ”

「まさかここで貴様が出てくるか！数年前に亡くなった元2番隊隊長  
” 灼炎のクリーク”、奴の妹でありその能力を受け継いだ” 微熱のク  
リーカ”!!」

激昂したかのように言うセンゴクに対してクリーカは何処吹く風  
とも言わんばかりについて、と顔を背けると

指先を左右の氷塊に向けて縦横無尽に振るえば

ザンツ！と白い煙を上げながら分厚い氷壁が切り崩されるのは一  
瞬の出来事であった。

そしてそのまま眼下の三大将の元へ降り立ち素早く氷人間である  
青雉の襟首を掴むと” 深く青雉の唇に自身の唇を押しつけた”

突然の出来事に驚き目を見開き青雉であったがすぐに両手でク  
リーカを突き飛ばし大きく咳き込む

「ゲホッゲホッ！・・・やってくれるじゃないお姉ちゃん・・・」

一瞬で体内を” 焼き尽くされかけた” 青雉は口から出る血を拭い  
つつそう告げる

「名付けて” デス・キッス” じゃ、男じゃとわっちのような超絶美女に  
急に接吻されるとどうなると思うかえ？

例え短時間でも相手は硬直するのじゃ。

悪いのう、厄介そうなのは早めに潰すべきじゃと思うてのう？」

青雉を見下ろすように口から火をチロチロと出しつつクリーカは  
告げる

彼：もとい彼女は自身の能力である” 体から超高熱を発する力”  
を用いて自身の吐息を灼熱に変え、青雉に口づけを行いほんの少しの  
硬直の際に超高熱の吐息を青雉の体内に流し込んだのである。

これには堪らず青雉は膝をつく。

現在自身の能力で体を修復しているが氷と熱、相性が悪かった故に  
青雉の戦線復帰には少し時間がかかるだろう。

しかし海軍本部も座して見ているわけでは無い。

青雉を一時戦闘不能に追い込んだとは言えその場にはまだ黄猿、赤  
犬の二人が存在しており彼らは猛然と彼女に攻撃を仕掛けるも

「温い：温いのう、赤犬大将に黄猿大将。はあ、どこかにわつちを熱くさせるのはおらんのじやろうか：」

黄猿の放つ光を操ったビームは彼女に当たる直前にあらぬ方向へ飛んでいき

赤犬の放ったマグマの拳はジュウジュウと音を立てて蒸発しクリーカに触れる事ができていなかったのだ。

そしてそんな折

「ほう、面白そうなものが出て来たのう：？」

クリーカが眼下に見て眩くのは七武海の一角”バーソロミュー・くま”の姿を模した海軍の切り札の一つ

”人造兵器 パシフィスタ”の出現であった、しかも数は数十体はいるだろう。

「どれ、一つ親父殿達にも加勢するとするかの」

「待たんかクリーカ!!」

「ちよつとおくこつちを無視していくのかい？」

激昂しながら追いつがる赤犬と尚もビームを飛ばしてくる黄猿に

「やれやれ、しつこい男は嫌われるぞえ?」超!熱熱吐息つ(ちよーあつ

つあつつぶレス)!!」

そう言つて口からとても巨大な火の玉を二人に吐き出し湾内に飛び降りパシフィスタの一体の首元に抱きつき

「超!熱熱抱擁ーっ(ちよーあつつぶあつつはぎゅーっ)!!」

それと同時にパシフィスタがパアンと一瞬で赤熱化し”弾けた”

タネは簡単、身に纏つたその超高熱でパシフィスタを溶かした。それだけの事だが見ていた海兵達はそう簡単には理解できない。

瞬く間に恐慌状態に陥る海兵達、しかしセンゴクはそれを見て状況を立て直すべく一喝

「しつかりしろっ!!たかが一体やられたただけだ!全員奴を、クリーカをかこ・・・」

するもその言葉は尻すぼみに途切れた。何故なら

「ふむ、これだけかのう?」

そこには満を辞して出撃したパシフィスタがあるものは腕を、ある



ものをは足を、そしてあるものは顔を、中には体の全てを溶かされたパシフィスタ”だった”者達の姿が転がるだけであつたからだ。

「ちくしょう！こいつらには一人一人に軍艦一隻分の金がかかつてるんだぜ!!」

パシフィスタ達の指揮をとつていた戦桃丸が自身の斧を大きく振り上げ戦場に立つクリーカに振り下ろすも

ガシリ、とその斧は掴まれそこから赤熱化しドブリ、と溶け落ちた「ぐっ…やつてくれる、たつた一人でこれだけ引つ掻き回しおつて…”たつた一人の〇番隊”、白ひげ海賊団最高戦力という名前に偽りなしか…さっさと包囲壁を作動させろ!!」

腹部に赤熱した一撃をもらい倒れ伏す戦桃丸を見て、思わずセンゴクは頭を抱えなくなるも気を取り直しすぐに指示を出す。

さてこれは原作の話になるが本来ならここで赤犬に騙された白ひげ傘下の海賊”大渦蜘蛛スクアード”が白ひげを刺していた。

が、流石の彼も原作では傘下の海賊を阻んでいた両側の氷壁はクリーカによつて粉碎され、原作では傘下の海賊のみを襲撃していたパシフィスタはクリーカに溶かされ、と薄々自分が騙されている事に感づき一旦様子を見る事にしたのだ。

そしてそれは隠れて様子を見ていた者も同じで消耗をした白ひげを自身が討ち取り、彼の能力を手に入れるべく黒ひげこと”マーシャル・D・ティーチ”が建物の影から様子を伺っていたが白ひげの消耗が見られない為様子見に徹していた。

だからこそ包囲壁が発動され、赤犬の溶岩の拳が振り下ろされ、足場の氷が溶かされようとも

能力で包囲壁を越えられる者は越えて、唯一の出口となつた包囲壁が無い場所に対し白ひげが”切り札”を出してその唯一の出口に海底に隠していた船を包囲壁の外へと突っ込んだ事により

”無傷の白ひげ”が広場に、処刑台の目の前に降り立ったのであつた。

そこからは白ひげ海賊団の猛攻が続いた。

パシフィスタが全てクリーカに溶かされた上に三大将の一人、青雉が未だ戦線に復帰しておらずとうとうエースの弟、麦わらのルフィが数多の人間の助けを借りてエースの元へと辿り着く。

しかしそこに待ち構えるは海軍本部元帥“仏のセンゴク”

彼は自身の能力、“ヒトヒトの実 モデル大仏”の力で巨大化、その巨大な拳で処刑台ごと殴りつけ更に崩れゆく処刑台に対してエースにトドメを刺そうと四方八方から砲弾が降り注ぐも

「なんだ…？爆炎の中に炎のトンネルが…!!」

自身の実を炎に変え炎をを操る者、メラメラの実の能力者“火拳のエース”の解放である。

「さてさて、親父殿を父親と慕う兄弟達よ。

あとはおわちが請け負うゆえさつさと退散しておくれ？」

そう言つてクリーカがザツと足を踏み出し飛び上がると白ひげに對して延髄蹴りをかます。

流石にこれまでの疲労と病状の悪化もあつたのだろう、味方からの突然の攻撃に堪らず崩れ落ちる白ひげ

「おい！クリーカ！いきなり何するよい!？」

その突然の凶行にマルコが白ひげに駆け寄るも

「わっちが殿を務めるゆえ親父殿と一緒に下がれとっておろうが…」

そうしてその身を纏った熱により燻らすクリーカのを見て

「やべえ!!奴が本気出すぞ!!」

「俺たちも巻き込まれるじゃねえか!？」

「逃げる！マジで全員さつさと逃げろっ!」

クリーカのその言葉を受け気絶した白ひげや仲間達を抱え上げ、一斉に踵を返して逃げ出す白ひげ海賊団及び傘下の海賊達

「姉御！姉御も逃げろよ!!」

エースが一人残ろうとするクリーカに言い募れば

「エースのぼん、わっちは大事な弟分でありわっちの後継者であるぼんを助けに来たのじゃぞ？」

それなら最後まできつちりやるのが筋さね」

「だが姉御おっ!!」

「それよりもぼん、炎の本質はわかったかえ?」

「っ…炎は熱、熱は全てを灼く、相手の攻撃も、防御も。」

熱に限りは無くその温度を高め続け、そして俺の炎も例外では無い…だろ?」

「その通り、そこまで理解したなら最期のレクチャーじゃ、わっちから二つの技をぼんに授けよう。」

そう言っつてクリーカは指先の一点に全ての超高熱を集中させマリ  
ンフォードに対して振るえば

ズパンツ!!!

そんな音を立て海軍本部に縦一直線の斬撃が走る

「わっちの熱全てを指先にのみ集中させておる。」

燃えもせぬし爆炎も吐かぬ、ただ触れる者全て跡形もなく消し飛ばすのみよ。

その名も超!熱熱灼剣(ちょうあつあつブレイド)：は流石にあんまりじゃのう、旭日刃(きよくじつじん)”と名付けてやろう」

あまりの威力に周りがドン引きする中

「おのれクリーカあつ!!海軍本部を!よくもやってくれたのうっ!!」

赤犬がクリークに対してその溶岩の拳を振り抜くもその拳は消えていた

「そしてこれが”超!熱熱外套(ちよーあつあつコート)”もあんまりじゃのう、お主は”残日獄衣(ざんじつごくい)”と呼ぶが良い。

これは太陽を纏っているのと同じじゃ、どんな物でさえ自分に触れる前に溶かしてしまう最強のコートじゃ。

さあ、レクチャーは終わりじゃ!さっさと行くのじゃ!」

尚も渋るエースをルフィが引つ張っつていきようやくその姿が見えなくなりクリーカはゆっくりと赤犬に向き直る

「別れを待っつてくれるとは随分律儀じゃのう?」

「…わしやあ奴を逃せどおんしを殺す事ができれば海軍の勝ちじゃあ

思うちよる」

「おお怖い怖い、しかしわっちの技は、わっちの思いは既に大事な後継者に伝え終わったえ。」

わっちの熱はまだまだ冷めぬぞえ？それに…いつまで持つかな？」  
それまで常に口元に湛えていた笑いを引つ込め赤犬に告げる

「…灼けるようじゃ、眼も、髪も、喉も。」

わしがこの実の能力者でなければ一瞬で灰になっとなつたろうのう」  
「さて、じゃあいつかの続きだサカズキ」

「ふん、やはりクリークおんしじやつたか。」

いくら何でも妹と言えどおんしほど”アチアチの実”を自在に操る人間はおらんじやろうと思うとつたが」

「えーと、あれだ。オレにも色々あったんだよ」

「…まあええわい。じゃあの”クリーク”あの時は決着はつかんかったが今回はここでおんしを殺しちやるわい」

「はっ、いい度胸だオレの熱はマグマすら灼くぞ？」

そうして灼熱と溶岩はぶつかるのであった。そしてこの勝負の結末は神のみぞ知る…

## 五色姉弟 ドンクreekさん

「初めまして国王陛下、海軍本部少将のクreekと申します。

本日は偶々近くを通りかかったので挨拶とそれからお願いがあつて参りました」

その言葉にジェルマ王国国王、ジャツジは訝しげに

「お願いだど？…何か政府からの依頼か？」

そう聞く、クreekのお願いを世界政府からの戦争稼業の依頼と考えたのだろう。

「いえ、お願いというのはとても個人的な事にしてジェルマ王国、ジェルマ66で使用している科学武装をこちらにも分けて頂けないかなと思ひまして…」

まあ可能性は低いだろうが折角なので近くを通りかかったし、とクreekは前から考えていた事をジャツジにお願いする。

「…装備か」

その言葉に少し唸りジャツジは考え込む

ジェルマの王国軍の科学装備はどれもジャツジが開発したものである。

が、今はジェルマ独自のものであれど海軍にかつて共に研究を行なっていたベガパンクがいる以上彼もそれ相応のものを開発するだろう。

それに相手は海軍本部少将、普通の本部少将であればつつぱねても問題は全く無いが相手はクreek。

こちらでも要注意人物として詳細なデータは手に入れてある実質本部中将クラスの戦力を持ち活躍目覚ましい”海軍独立遊撃隊”の長でもある男。

「販売という事であれば少しは出しますが…」

考え込むジャツジにそんな事を追加で言うクreek、これでもかなりの高給取りでありついでに賞金首の捕縛でまあ、流石に海軍の人間なので全額ではないが三割ほどが褒賞として入るので金は持っているのだ。

「ふむ…いや金はいらん、そのかわり私のお願いも少し聞いてもらおうか？」

ジャツジは考えを纏めてクリークにそう告げるのであった。

まるで悪の秘密結社のような謁見場から所変わって、ここは王城の外にあるとても広い演習場。

ジェルマの兵士達が汗を流して訓練していたところにやって来たジャツジは二言、三言告げると兵士達が場所を開けた。

そこには片や筋骨隆々として鈍色の胴鎧を纏った大男。

向かい合うのは桃色の髪の子に赤、青、金、緑とバラエティ豊かな髪を持つ少年達。

「あー、国王陛下？本当に構わないのですか？」

「ああ構わん、それから子供達よ、全力で”やって構わん。”

ジャツジの狙いは子供達の実力の確認。

桃色の髪の長子であるレイジユでも11歳、その下の四つ子の弟達はまだ8歳と本来であれば絶対に大人には敵わないであろう年齢だが、ジャツジは”血統因子”理論を元に子供達には”とある処置”を施しそれ故にこの年齢でも成人した男でも圧倒出来るほどの戦力を持たせる事に成功していた。

流石に完全勝利とはいかないだろうが戦力を測るには丁度いい、もし万が一死んだとしてもそこは今までの任務の事を盾に世界政府に交渉すればなんとかなるだろう。

と、ジャツジはそう考えるのであった。

先手を打つのは赤髪の少年、イチジ。

「おいおっさん！父上から全力でって言われてるからな！」

とは言え戦闘の駆け引きはまだ未熟であり繰り出されるのはバチバチバチツと火花を纏うパンチ

「おおっと、危ない危ない」

それをわざと大袈裟にクリーク が避けて見せれば

「へっ！タダの人間がおれ達に敵うと思ってるのかよ!!」

そこに右脚で蹴りを叩き込むべく青髪の少年、ニジ。

クリークはそれを腕で受け止めると

「ほう、子供にしては凄いな。力もなかなかだ。」

そのまま弾き飛ばせば背中に衝撃を感じ

「おっさん！よそ見してていいのか？背中がガラ空きだぞ！」

振り向けば緑色の髪の少年、ヨンジが拳を振り抜いた体勢をとっていた。

しかし5姉弟の長姉で桃色の髪の少女、レイジュは

「みんな！バラバラじゃダメよ！あのおじさんは絶対に手強いわ!!」

そう言っ手合わせが始まるや否や飛び出していった三人を纏めようとするが

「あ？タダの人間がオレ達に勝てるわけないだろ？」

イチジは自身の力を過信しているのかまるで相手にしようと思わず

「タダのおっさんのくせにおれの攻撃を受けとめやがって…!!」

ニジは自身の蹴りを受け止めた事に苛ついたのかまったく話を聞いておらず

「…なんかこのおっさん硬いぞ？」

唯一ヨンジだけが違和感に気づきレイジュの元に戻った。

「…どうする？レイジュ」

レイジュに問いかけるのは金髪の少年サンジ。

「ヨンジ、あなたが感じた違和感っていうのは何？」

「…そこの役立たずみたいにいいつも通りの力でぶん殴ったんだけどイチジ達と手合わせしてるみたいな感触があった」

と、サンジをギロリと睨みながら拳を握りしめるヨンジ。

「…凶鑑でそんな感じの能力は結構あったからそれじゃないの？」

と、サンジは睨むヨンジに怖気つもかかって読んだ悪魔の実凶鑑の事を思い出してそう言うが

「決めつけるのは早計よ、噂には聞いたけど海軍には全身を硬化させる体術もあるって話だわ」

そう言っ火花や電気をあちこち散らしながら拳撃や蹴撃を繰り返すイチジとニジの姿を眺めるレイジュ。

なおクリークは笑いながらそれをひよいひよいと避けてたまに相

手を空中にポンポンと放り投げキャッチするという事を繰り返していた。

そうしてしばらく話し合い作戦が決まったのかまず駆け出したのはヨンジ。

「おらあつーちよつと大人しくしてろ!!」

彼は怪力の血統を得ておりまずその力でクリークを足止めすべくクリークの右脚に取り付いた。

「お？さっきのパンチの少年か、…って子供にしちや凄い力だな」

子供にしてはどこか並の大人以上の怪力でクリークの進行を止めるヨンジ。

そこに更にサンジが背中から忍び寄り他の姉弟と違い何の力もなく普通の子供と変わらない身体能力しか持たない為、遅々としつつも一生懸命クリークの背中をよじ登りクリークの後頭部にとりつき必死で抑える。

「ん？どうした金髪の少年、そんなんじや俺は倒せないぞ？」

「見てろゴリラのおっさん！レイジュのさくせんだ！」

「作戦？」

そこにレイジュがクリークの目の前まで飛び出し手のひらを口に添えフウツとクリークの顔面に吹き付けければ

「目エっ!!」

思わずクリークが目を押さえて膝をつく。

彼女の持つ血統は”毒”

とは言え流石に相手を殺せるような毒を今は持ってないので軽い刺激がある程度のものであるが。

「やった！レイジュ!!」

そう言つて地面に投げ出されながらも起き上がって嬉しそうに言うサンジに

「まだよーイチジ！ニジ！ヨンジも今のうちに攻撃しなさい!!」

畳み掛けるべく先程まで暴れていた火花の血統を持つイチジと電気系の血統を持つニジにそう声をかければ

「待てレイジュ・・・さっきから投げられまくって・・・」



「うぶ、ぎもちわるい……くそおっさんのくせに……」

完全にグロッキーになって地面に蹲る二人

完全に油断していたのかまともに目にくらったクリークは全力で瞬きを繰り返し涙で毒を押し流し立ち上がる

「なるほど、一人が動きを止め、一人が頭を固定して真打がトドメを刺しに来たか。」

なるほど良い手だがここは畳み掛けるべきだったな」

そうして悔しそうな表情を浮かべるヨンジを、啞然とした表情のサングジを、そして溜息をつき困った顔で笑うレイジユを纏めて空中にぽんぽんと放り投げるのだった。

## 鈍熊怪鳥 ドンクリークさん

とりあえず5姉弟をぼんぽんとお手玉して五人ともグロッキーと  
なってしまったので

「はっはっは、少年少女よ。身体能力だけでどうにか出来るほど、世の  
中甘くないぞ?」

「うるせえおっさん…」

「うぶ、おっさんこそ身体能力だけだったじゃねえか…」

「ちちうえとおなじくらいつよそう…うっ、きもちわるい…」

「景色が回る…」

「あー、まだふらつくわ…」

そんな光景を見て顎に手を当て何か考えるような表情をすると

「おいクリークとやら、こちらの調べではお前は非能力者だったと記  
憶してるが悪魔の实の能力者だったのか?」

” 血統因子理論 ” を元に” 人間を超える存在として ” 改造を施し  
た最高傑作たる我が子達をまるでお手玉のように軽くあしらったク  
リークを見てそう聞いた

「いや、能力者ではないが…」

とクリークは腰のポーチから飴玉を五つ取り出しながら不思議そ  
うに答える

「ふむ…、クリーク…少将でいいか?少し身体検査をさせてもらって  
も良いか?」

「いやいや国王陛下、クリークでいいですよ。なかなか呼ばれ慣れな  
いもので」

そう言っって首裏に手を当てて困ったように笑う

「ではクリークと呼ばせてもらう、私もジャッジと呼んでもらって構  
わない。ところで身体検査の方が…」

「あー、実は今回は挨拶だけのつもりだったので船を待たせていまし  
て…」

そう言いながら嫌がるサンジの頭をぐりぐり撫でくりつつ言うク  
リークに

「そうか…、ならば今日は泊まっていけるがよい。」

今回の礼として渡す物の説明もある事だし船も停泊させると良い、それぞれに食事と寝床くらいなら用意しよう。

ついでに補給もしていくがいい、大体のものは揃うだろう」

「ああ、それはありがたい。では俺は一旦船に戻りますのでまた後程」  
そう言つてクリークはその場から月歩にて飛び立ち、そんな姿を見てようやくふらつきが治まったのかレイジュはぼかんと口を開けて

「お父様…あの人、うちの装備身につけているのかしら？」

自身の国の軍で採用されているソレを思い出し父親に聞くも

「…いや、おそらく海軍で習得させるという噂の体術の一つだろう」

ジャツジはそうアタリをつけ、本当にうちの装備必要か？と思いな  
がら愛娘の質問に答えれば

「ちちうえーあのゴリラのおっさんは生身でちちうえみみたいな事ができるのか!？」

そこにサンジがガバリと起き上がり聞いてきた

内心、四つ子の中で唯一血統因子”理論による改造が発現しなかつたサンジを見下しつつも

「そうだ、奴は改造も何も受けていないし能力者でもない人間だ。」

貴様と一緒にだサンジ、ならば貴様もあのくらいのレベルには到達でき  
る筈だ

では私は奴らの船の受け入れの準備をさせる、お前達は回復したら  
今回の反省点を五人で話し合え」

とレイジュ、サンジ、ヨンジの対クリークに対する連携は評価しつ  
つもそう厳しく言つて聞かせ自身はその場を去るのだった。

噂に名高いカモメの水兵団、その機動力を支える海軍の改造戦艦と  
カモメの水兵団の長、かの”鈍熊”クリークのデータをとる良いチャ  
ンスだと考えながら。

「これは…凄まじいな…」

ジャツジはクリークの検査の結果を見つつ呟いた。

”データを取る良いチャンス”だったのは確かだ、しかしそこで得  
られたデータはどれも一般人を遥かに上回る馬鹿げた数値の数々で

あつた。

まず驚いたのはその身体の丈夫さ。

部下が採血しようとした注射の針が通らず仕方が無いので了承をとって鋭い刃物をあてがったがそれでも切断出来ず採血は諦めざるを得ないという結果になった。

そして筋肉。

これは見た目通りかなり鍛え上げているのだろうという推測であつたが異常だつたのはその質と密度。

聞いてみれば鍛え上げる事により本来二つに分かれる性質の筋肉を合わせた性質に作り変え、更に生命帰還という技術を使用して元々の筋肉を密度を高め細くしなやかに、そして空いたスペースに更に筋肉を増やし、という事を繰り返したらしい。

もちろんジャツジも生命帰還、又はバイオフィードバックと言う理論がある事は知っている。

これは身体の隅々まで、髪の毛や骨、内臓まで意識を張り巡らせ自在に操る技術の事で、戦闘においても自身の髪の毛を操って手足のように自在に動かしたり、爪を鋭く伸ばして相手を斬りつけたりという物は知っているがこのような事が可能だとは考えすらしなかった。

「…狂気的な程の鍛え方だな、常人なら痛みで死んでもおかしくないぞこれは」

もちろん筋肉だけ鍛えても骨や血管が元のままでは不具合が出ると考えたのだろう、検査の結果ではそれらも常人以上の数値を叩き出していた。

皮膚も強靱だがその異常な程の密度の筋肉により防御力も凄まじいものとなっていた。

ジャツジが自ら完成させた”血統因子理論”の一つにより似たような事はできる。が、これは身体に外骨格を発現させる事により鋼鉄の肌を得るものでありクリークのものとは別。

外骨格と違って中身まで頑丈であり、その硬さも外骨格より遙かに上で色々と試したがピストルや小銃、ナイフ、剣、挙げ句の果てには大砲なども試したがどれも全くのノーダメージ。

これでは子供達がダメージを与える事が出来なかったのも納得である。

三大海賊のうちビッグマムやカイドウの肉体も異常な程の頑強さを持つと言うが、もしかしたら似たようなものかもしれない、と考えつつも他のデータに目を通す。

そして特筆すべきはその身体能力。

異常な程の密度を持ったフレームと筋肉に見合ったパワーを見せ、何と徐々に段階を上げてテストをしていけば最終的に50tを持ち上げて見せるという化け物ぶりを発した。

しかもこれは上限ではなく他に持ち上げられそうなものが無かった為だ。

普段は自在に振り回す為に10tほどの重さの棍を愛用しているらしいが、確かにそれだけの身体能力が有れば10tくらい自在に振り回せるだろう。

とは言えメリツトばかりでは無くデメリツトもあり、常人と比べたら数倍以上の筋肉を持つ故に発する熱量も高くなっており、端的に言えば燃費が悪い。

その為エネルギーは大量に摂取する必要がある、食事もそれに見合った量を摂る必要があるというものである、具体的な弱点ではないが。

「…本人は鍛えた、と言っていたが常人がここまでできるものなのか？」

当初はクリークの身体を調べて応用できるところが有れば自身の研究に取り込もうと考えていたが、検査の結果とクリークへの聴取の結果決まった結論は

とてもじゃ無いが真似はできない。

というものだった。

「…これは敵に回すのは悪手だな、船の調査が出来なくなったのは残念だがな」

クリークのデータに目を通し終わりポツリと呟く、噂に名高いカモメの水兵団の船「シャーロット・アンジェ号」

船の整備を提案したが残念ながらこれは断られてしまい、ならばこつそり調査しようかと思つたが万が一バレて敵対する事になつたら目も当てられないからであつた。

## 蹴脚極意 ドンクリークさん

「ゴリラのおっさん!!ちよつとききたいことがあるんだ!」

それは検査を終えた後、ジャツジと二人で歓談しつつ食事をとり用意された部屋に向かっていた時の事であった。

声をかけてきたのはヴィンスモーク5姉弟の中で4番目の少年、金色の髪を持つサンジだった。

原作ではいつであるか不明だが彼は改造人間として失敗作だった事が原因で父親に死んだ事にされ監禁。そこから：確かジェルマ王国がレットラインを越えて北の海から東の海へ侵攻したタイミングで逃げ出して客船に拾われ、更にそこからクツク海賊団にその客船が襲撃された事によりクツク海賊団船長” 赫脚のゼフ” と共に漂流だったか？

そして彼と共に海上レストランを開きそこに訪れた原作の主人公” 麦わらのルフィ” と共に海上レストランに襲撃をかけてきた当時50隻の船と5000人の部下を持っていた東の海で最大の勢力、海賊艦隊提督” 騙し討ちのクリーク” を筆頭としたクリーク海賊団を撃退しその縁で麦わらの一味に加入というなかなか波乱万丈な経緯をしてきた男だった。

とは言え今は監禁されている事も無いようで見たところ普通の少年であるが。

「どうした少年、聞きたい事ってのは何だ?」

そう言つて膝を着き問いかければ

「:..なあゴリラのおっさん、そらをとぶのはどうやってやるんだ? おっさんはのうりよくしやじやないんだろ?」

との質問

「ううむ、どうやってと聞かれてもな:少年、どこかに開けた場所はあるか?」

「うんー:..ちぎて!!」

そう言つてこちらの裾を引っ張るサンジに苦笑しつつ先導されるがままに行けば

「あら、サンジ…と昼間のおじさんじゃない。どういう組み合わせかしら？」

先導される途中で桃色の髪の少女、ヴィンスモーク5姉弟が長子レイジュにばったりと出会った。

そこでサンジがかくかくしかじかとレイジュに説明をすれば

「ふうん、成る程ね。私もおじさんが空を飛んでたのは気になったのよね、私も付いて行っていいかしらおじさん？」

「なあ少年少女よ、今のうちに言っておくがゴリラのおっさんとかおじさんでは無くちゃんとクリークと言う名前があるのだが…」

「あら、私にもちゃんとレイジュと言う名前があるわよ？」

「おれもちゃんとサンジって名前がある」

「…わかったわかった、今度からはそう呼ぶからそれでいいか？」

と聞けばうむ、と満足そうな顔で再びこちらの裾を引っ張り先導を再開する二人。

暫くすればなかなかの広さを持つ城のバルコニーに連れてこられた

「よし、クリークのおっさん、このくらいのひろさならいいか？」

「さて、空の飛び方を教えてもらおうかしら？」

そう意気込む二人であったが

「まあ待て二人とも、俺が空を飛んでいたってのはこれの事であつているか？」

そう言って超人的な脚力で空気を踏みしめて空中に軽く躍り上がりつつ六式の一つ、月歩を披露してみせれば二人とも首肯した為再び地上に降り立つ。

「うーむ、やり方を教えろと言われてもな…まず言っておくがこれは海軍でも教えられる”六式”と言う体術の一つでな、この六式の習得には超人的な脚力が必須なんだが…」

この空中移動を可能とする月歩、それから後二つ、剃という歩法と嵐脚と呼ばれる体術があるがこの二つには類稀なる脚力が必要となる」

「そるっ…らんきやく？」



「ああ、説明してなかったな。剣と言うのは高速移動の体術で嵐脚と言うのは蹴撃により衝撃波を出す技術でなこんな感じだ」

そう言つて地面を連続して素早く蹴り目にも止まらぬスピードで移動して見せて、そのまま素早く右脚を斜め上に振り上げればズパッ！と言う音を立ててバルコニーの一部が切断された。

「あ、やべ」

「…私からお父様に言っておくわ」

「すごいなクリークのおっさん、くだけるんじゃないでキレイにせつだんされてるぞ?」

「とまあこんな感じだが先程も言ったようにこれらには凄まじい脚力が必要だから多分今の二人には難しいと思うぞ?」

と、そう言い含めておく。

原作ではサンジはゼフから教えを受けた蹴り技に凄まじい適正を見せてそれをメインとしており、月歩の類似技である”スカイウォーク”を習得していたが流石に今の年齢だと難しいだろうと考えてそれを伝えれば

「そつか…すぐにはむずかしいのか…」

「まあそう簡単には行かないと思つてたけどね…」

「まあ何事にも近道は無いぞレイジュにサンジ、俺もこれの習得は地道に積み重ねたものだ。」

頑張れよ少年少女、大志を抱けてやつだ。二人がこれらを出来るようになるのを楽しみにしているぞ」

そう言つてポーチから出した飴玉を渡しつつ二人に言つてその場を去るのであった。

「流石にレイドスーツは渡せんからな…とりあえず適当に見繕つておいた」

明けて次の日、流石に王族からの歓待とあつて豪華な朝食を終えるとクリークは演習場にてジャツジが待っていると話を受けて演習場へ。

演習場には台が置かれ、その上にはいくつかの装備を並べられてお

り、その横には腕を組んで待つジャッジの姿があった。

「待たせてすまない、説明を頼んでも？」

「ああ、本来ならレイドスーツ：形状記憶鎧を渡したいとこだがあれは流石に無理でな…」

「レイドスーツ？」

「そうか、貴様はレイドスーツについては知らないのか。」

レイドスーツは私も今装着しているが形状記憶合金を使用した戦闘用スーツで着用すれば防御力の向上、敏捷性の向上、空中移動も可能とし不燃性もある一種の鎧のようなものだ。

流星にこれはこの国でも私しか持つておらず、今は我が子たちの分を開発している途中だからな。」

「成る程、かなり良さげな装備だけに残念だな」

「代わりと言っては何だがまずはこれだ」

そう言つて台の上にあるブーツを指し示すジャッジ

「これは…何かの移動装置か？」

「ご名答、これは踵に加速装置、足の裏に浮遊装置がついており空中移動やスピードの向上が可能な”レイドブーツ”と呼ばれる物でジェルマの兵の基本装備だ。」

「空中移動か…一応生身でも可能だが？」

「海軍で教える六式というやつだろう？私が見たところアレは空中を蹴り続ける必要があると推測しているがどうだ？」

「まあ…その通りだな。」

「これは靴底に空気と反発する力を持っていてわざわざ貴様の月歩のように蹴り続ける必要が無いというのが大きな違いだな。」

それから踵のブースター、これは移動だけでなく蹴りの威力を飛躍的に高める事も可能だ。」

「成る程、ありがたく頂戴する」

「次はこのマントだ、これは一見唯の布に見えるが実際には幾重にも複数の素材を重ね合わせて作られている。」

一見ひらひらしたマントであるが耐久性に優れ、攻撃を受けても盾として利用する事が可能だ。」

…まあ貴様はこれが無くとも生半可な攻撃は効かぬだろうが」  
「いや、それは違うぞジャツジ。最終的には武力を多く持っているに越した事は無い。」

例え銃弾すら弾く肉体を持っていようが鎧を更に纏っていた方がいいに決まっている。

武器もそうだ、例えば俺は武装が無くても戦えるが普段は棍や仕込み武装などあらゆる武器を所持している。

それも単に俺の考え方が”武力”に重点を置いてるからに他ならない、戦闘手段は多いに越した事はないからな。」

「ふむ、それが貴様の根底にある考え方か…そういう考え方もあるとこののは覚えておこう。」

さて説明を続けるが次が最後で1番の目玉で私の使用する槍…のスペアで”電磁機械槍”と呼ぶ」

「機械槍…という事は何かしらの機能があるという事か？」

「その通り、この槍は電磁気を操りそれを纏った斬撃を繰り出す事ができる」

そして貴様に渡すこれらの装備だが…くれぐれもこれらの技術を海軍に流出させないと誓えるか？」

そう言つてざわり、と戦意を滾らせるジャツジ

「あくまで個人的な範囲でという理解でいいか？」

「ああ、あくまで貴様が個人的にこれらの技術を使うならば良いがこれらの技術を海軍全体に行き渡らせるつもりならば…」

流石にジャツジもジェルマの科学技術を海軍にみすみす渡す気はないのだろう、誓えないならば総力を上げてこちらを排除しようという意気込みが感じられた。

「わかった、”海軍全体に行き渡らせる事は”しない、これらの技術はこちらで個人的に使わせてもらうという事でいいか？」

そう答えるとフツと力を抜くジャツジ

「よし、ならばこれらは貴様にくれてやる。とりあえず装備の説明はこんなところだ、何か質問はあるか？」

「いや、十分だ。そうだ、流石に子供の相手をしただけでこんな色々貰

うのも悪いし俺の装備からいくつか見繕って渡そうと思うがどうだ？」

「ふむ、貴様の武装か。まあ貰えるならば貰っておこう」

「よし、善は急げだ船に積んであるからついてきてくれ」

そうしてジェルマの科学装備を貰った礼にクリークは自身の予備の装備をいくつかジャツジにプレゼントするのであった。

## 花の旅立 ドンクリークさん

腕を組むジャツジ、大きく手を振るレイジユ、睨みつけてくるイチジ、ニジ、暗い表情のサンジ、ふてくされた顔のヨンジ

港にて見送りに来た彼らに大きく手を振りつつシャーロット・アンジェ号は一路新世界、クリークが拠点としているファウス島へと出航した。

半月ほどすれば船はファウス島へ到着、そして留守番をしていたロビンと合流し、この後の行動について話し合う。

「やはり東の海からがいいのではないか？」

やはり旅立つにあたって他の海よりはかなり平和な東の海からグランドライン入りを進めるが

「でもおじさま、私がいいたのは西の海よ？東の海での目撃情報を作るのは得策とはいかないわ」

ロビンは自身の目撃情報を作るべく、元々いた西の海からの旅立ちを希望している。

確かに今のロビンであればそんじょそこらの海賊なら相手にならないし本部大佐くらいなら抑え込む事も出来るだろう。

万が一CP9が出張ってきてても逃げ切る事は可能だろうからこちらとの繋がりを隠す為にあえて目撃情報を作るといえるのは理解できるがやはり心配なものは心配である。

「確かに今のロビンであればだいたいの敵には問題なく勝てるだろうし、西の海には悪名高い”西の5大ファミリー”が存在しているから裏社会に潜り込むのなら手っ取り早いだろうが…」

「だったら西の海からでいいわよね？」

しばし考え、渋々ロビンの戦闘力や西の海から出発する事のメリットデメリットを考えて仕方なく了承しロビンは西の海から出発する事になった。

そうと決まればすぐさま出発準備に取り掛かり、私的目的で技術班に依頼していたものや必要な物を取り寄せ、数日後にはロビンとクリークは船上の人となっていた。

「友達に別れは？」

「昨夜のうちに済ませたわ、それに二度と会えなくなるわけじゃないから大丈夫よ」

「…二度と会えなくなるわけでは無いとは言え、俺ならまだしもモネなんかとの再会はきつとかなり先の話になるぞ？」

「おじさま、確かにモネ達との別れは惜しいわよ？でも私は前に進む、あの時の誓いを果たす為に私は海に出るわ」

毅然とした態度で強い視線でこちらを見据えるロビンにどうやら決意は固そうだと感じつつ船は進み、数日もすれば西の海へと入り、船はとある島に停泊していた。

「これが俺の電伝虫の番号だから何かあったら連絡してくれ、万が一に備えて覚えた後は燃やすなりして処分するように」

それからこっちはお前が頼んでいたビブルカードだ、配るのは俺とモネだけで良いのか？」

そう言っつて番号が書かれたメモとロビンの爪から作られたビブルカードの親紙を渡す

親紙をロビンが所持し子紙をこちらが持つていればこちらはロビンの居場所がわかるというのはかなり大きいな。

「ありがとうおじさま」

「本当は俺のビブルカードも渡したいところだが…」

「わかってるわ、万が一があつて繋がりがバレると一気におじさまが窮地に立たされるからね…」

「済まん、ではロビン何かあれば連絡してくれ、くれぐれも食事はちゃんと摂って」

「睡眠もしっかりとって無理はしない事、でしょ？わかってるわおじさま」

私は今から敢えて目撃情報を作りつつ”歴史の本文”を探しながら何処かの海賊団に潜り込んでグランドラインに入るわ」

「ああ、予定通り行けば世界政府からの追手がかかるだろうから潜り込んだ海賊団は自動的に消滅するか情報をくれれば俺が片付けてやる。」

「うふふ、頼もしいわね…ありがとうおじさま、あの時待つ事しか出来なかった私を連れ出してくれて

あの時おじさまが私をオハラから連れ出してくれたからお母さんと再会できた。

オハラのバスターコールの時には私を助けてくれた。

そして何の力も無かった私をここまで教え導いてくれた。

ねえ、クリークのおじさま。どうして私にここまでしてくれるの？」

それはロビンが昔から抱いていた疑問だった。

今回の旅立ちにあたってつい漏れてしまった軽い質問、それに対してクリークはロビンの髪をクシヤリと撫でると

「子供の為に大人が頑張るのは当たり前だろ、それに俺にとつちやロビンは娘みたいなもんだ、いちいち遠慮するな」

そう答えた。

「…娘、か。」

「ん？何て言った？」

「いえ、何でも無いわおじさま」

そう言ってクリークの腰にギユツと抱きつくロビン

「ありがとうおじさま、そしてまた会う日まで」

「ああ、元気でやれよ？何かあったらすぐに言え、どこにいてもお前の元に駆け付けよう」

こうしてロビンは自分の足で前へと歩み出したのであった

もうそんなになるか…とクリークは感慨深く椅子に身を沈める。

そして”原作”での航海について考えていた。

原作では麦わらの一味は東の海からリヴァースマウンテンへと入り、そこからサボテン島（ウイスキーピーク）、リトルガーデン、ドラム島、アラバスタ、そしてジャヤヤから空島へと向かい、そこからロンランド？（ロングリングランド）、ウォーターセブン、エニエスロビー、スリラーバーク、そしてシャボンディ諸島というルートを通っていた、合ってるな？

と、薄れている原作知識を思い出しつつ書き留めていく。

そしてセンゴク元帥から様子を見に行くように頼まれているのは数年前に七武海に就任した”クロコダイル”、彼が数年前からアラバスタに拠点を構えているらしいとの事でここは回らなければならぬだろう。

そう、旅立ちを決意したロビンが数年後に一味に加入したアラバスタである。

他はシャボンディ諸島はいつも顔出ししているので問題なし、空島に関しては計画はあれどまだ時期じゃ無いので急ぎでは無い為後回し。

原作では魔の三角海域（フロリアン・トライアングル）に潜んでいた七武海の一部、ゲッコウ・モリアも今はワの国にてカイドウと抗争中という報告を受けている為今はまだ無視で構わない。

ウォーターセブンも海列車のテスト航海が成功したとの報告はあれど裁判自体はまだ猶予があるから急ぎでは無く、エニエスロビー、サボテン島（ウイスキーピーク）、ジャヤ、ロングランド（ロングリン グロンランド）は別に用事は無いしドラム王国もワポルはまだ国王になっっていない。

リトルガーデンは天竜人にばら撒いた人工病疫ギフトグリーン の材料であるケスチアを採取しに行った時にドリー、ブローギーの二人とは接触したのでこれも問題なし。

ギフトグリーンと言えはいつだったか提出したレポートを元に各国から集めた医者達の努力にて天竜人に蔓延していた病の進行は止まったようだ。

まあ進行が止まっただけで完治では無いのでその分長く苦しむだけだろうけど。

取り敢えずはこのまま哨戒行動を行いつつリヴァースマウンテンへ、その後大回りをしつつアラバスタへ向かい国王への謁見とクロコダイルの調査という流れで良いだろう。

クリークはそう判断し航海計画をたてるのであった。



## 火の暴虐　ドンクリークさん

西の海にてロビンと別れて船は一路マリージョアへ。

シャーロット・アンジェ号はリユードー大佐に任せ、クリークはギン、カフウと共に別の船でマリソフォードへ向かい北の海についての報告を済ませる。

そして次は海賊王の遺言により、東西南北からの海賊がリヴァースマウンテンから流入し、活発化しているグランドライン前半部、通称”楽園”での治安維持活動を頼まれたので、カモメの水兵団の前身である”海軍独立中隊”の頃から使用している”ベアトリス号”を出航可能状態にしてもらい、船は東西南北の海からの入り口であるリヴァースマウンテンへと進路をとった。

そしてそれは途中とある島に停泊していた時の事である

「少将！向こうの島が燃えています！詳しい原因はわかっていませんが海賊の襲撃かもしれません!!」

時刻は夜、ベアトリス号は港町がある島の近くにある別の小島に停泊しており、報告があった方角を見れば港町のあった島の空が赤々としていた。

直ぐに船を出すように指示し、クリークは単身月歩にて島へと向かい降り立つ。

「くっ、火勢が強いな。誰かいないか！生きている者は何か音を出してくれ!!」

燃え盛る街のあちこちには町の人間だろうか、素朴な服を来た人間が背中に大きな刀傷をつけられて死んでいたり、元の性別もよくわからない黒こげの死体や銃で撃たれたと思しき親子の死体なんかもあった。

そしてそんな時クリークの耳がコツン、コツンと何かを叩くような小さな音を拾いそちらに向かえば、既に半分以上が激しく燃え盛る崩れかけた家があり、小さな音はその崩れた部分から鳴っていた。

「しっかりしろ！今助けるぞ!!」

「うっ…」

瓦礫を掴み放り捨ててその中から助け出されたのはまだ10歳になるかならないかであろう、朱色の髪の少女。

炎に巻かれたのか意識が朦朧としているようでぐったりとしたままで、その小さい身体はあちこちに火傷があり、特に手に負った火傷が酷いようだ。

呼吸と脈はあるようなので素早く羽織っていた耐火性も持つコートを脱ぎ捨て少女を包み背中に背負うと素早く船の方へ戻ろうとする。

が、そんな時にとある声を耳が拾いクリークはそちらの方へ

「よしお前ら!!海賊達は片付いたか!」

そこにいたのは海軍コートを羽織った一人の男。

コートを羽織つていと言う事は尉官以上であろう、男の両腕には何かしら筒のような物がついておりそれはホースを通して腰のタンクへと繋がっていた。

「いえードロウ少佐、まだ逃げてる者が何人かいるようです!」

「ああ?仕方ねえ!てめえら全部燃やしちまえ!全部燃えりゃあ海賊もいなくなる!」

そう言つてドロウ少佐と呼ばれた男が未だ燃えていなかった建物に向け両腕を掲げると筒の先からゴウツと火柱が建物へと食らいつき、そんな勢いの炎に纏いつかれてはひとたまりもなく建物は燃え盛った。

「何をやっている!!!」

「あ?なんだここの住人か?それとも海賊か?」

海兵にあるまじき暴挙に思わずドロウ少佐に怒鳴つてしまい少佐と部下であろう海兵達は怪訝な表情でこちらを見る。

「何をやっていると聞いている!民衆の安全を守るべき海兵が率先して町を焼くとは何事だ!!」

「なんだてめえ...?おれはただ海賊の殲滅をしてるだけだ、もちろん市民の皆サマの為にな、もちろん”多少の犠牲”は出るかもしれんが海賊殲滅の為にはやむを得ぬだろう?」

「...っ!!海兵が聞いて呆れる!ドロウ少佐と言つたな!貴様はそれで

も海軍本部の、それも佐官クラスである自覚がないのか!!」

「…さつきから黙って聞いてりやうるせえな、てめえも実は海賊か?」  
そう聞かれてハタと自分の所属を示すコートは少女を包んでいるのを思い出し

「俺は海軍独立遊撃隊のクリークだ! 今回の件は上に報告した上でこの島に関して後はこちらが受け持つ、貴様はさつきと帰れ!!」

そう言ってドロウ少佐の前に立ち塞がる

「面倒だな…、田舎回りの下っ端如きがおれに命令してんじやねえよ!」

その言葉と共に腕を持ち上げるドロウ少佐、そして筒から噴き出る高圧の炎に対し、クリークは両手が塞がっている為射程を短くし、斬撃を衝撃波に変えた嵐脚の変形技を数発放ち炎を掻き消し

「言い方が悪かったか? 本部少将のクリークだ! 貴様は暫く反省していろ、鉄拳制裁!!」

その言葉と共にドロウ少佐は頭からクリークの拳を受け、地面に叩きつけられた。

そうこうしてうちに後続のカモメの水兵団が到着、ドロウ少佐の拘束と町の消火、人命の救助にあたるのであった。

何とか明け方には火は消し止められたものの犠牲者は町にいた海賊、町の住人達と多くの死傷者が出ており生き残りはごく少数。

しかもこれは海賊の襲撃によるものではなく、市民を守るべき海兵である筈のドロウ少佐が引き起こした火災によるものであった。

負傷者の救護や死者の埋葬、ドロウ少佐の部下への聴取などを行い、ひと段落がようやく着いた頃には既に日は高く上っていた。その後ドロウ少佐本人への取り調べを行い、彼の今までの思想や行動が明らかになった。

彼の思想は「うなれば」海賊殲滅主義、海賊殲滅の為なら犠牲はやむを得ないという考え方でいうなれば海軍の過激派である。

しかし彼の場合その犠牲が大きすぎた、海賊の殲滅の為なら平気で市民や子供を盾にとり、己の武器である火炎放射器にて町一つを焼き払うという事を何回か繰り返しているのが彼の部下への聴取でわ

かっている。

流石にこれは見過ごせないので身柄を拘束、彼の所属基地や本部に連絡をとる。処分は免れないであろう。

非道な海賊を倒すのは大いに構わない、が守るべき市民を犠牲にしてまで行うことでは無い。

クリークはドロウ少佐にそう話して聞かせるが、ドロウ少佐本人は”海賊がいなくなればおれがこんな事する必要も無い”と、話は平行線を辿ったため後の事は上に任せる事となりクリークは再びベアトリス号へ戻った。

助け出された少女は親をこの火災で亡くし身寄りも無かった為、クリークの出資しているマリنفォードの一角にある孤児院へ送られる事になった。

その為にクリークが紹介状をしたため少女と彼女の護衛としてカモメの水兵団から数人をつけドロウ少佐の護送と共に本部へ。

そしてベアトリス号は当初の予定通りリヴァースマウンテンへと向かうのだった。

## 双子の岬 ドンクリークさん

「…凄まじい大きさだな」

「何食ったらこんなでかくなるんですかね…」

ベアトリス号はようやく当初の予定通りグランドラインの入り口、リヴァースマウンテンの双子岬へと到着した。

そしてそこにいたのは規格外の大きさを持つ超巨大な鯨、原作ではラブーンと名付けられていた鯨である。

この種はアイランドクジラと呼ばれており本来グランドライン後半部、通称“新世界”に生息する種でその特徴はその名の通り島ほどの巨体に成長するというものである。

その巨体故にマリージョア下の海底トンネルを抜ける事も、リヴァースマウンテンを遡ってくる事もできない筈のラブーンが何故このグランドライン前半部にいるのかと言えば、それはラブーンがここに来た時はまだ小舟程の大きさしか無く、一緒に西の海から来た海賊達と共にリヴァースマウンテンを越えて来たのであった。

だがまだ小さいからとラブーンはここで預けられ、それ以降彼はここでずっと彼らの帰りを待っているのだった。

「ラブーンは元々そういう種だ、何を食ったとかそういう理由じゃない」

双子岬に停泊したベアトリス号の甲板でそう言っていたクリークとギンに訂正を入れたのは一人の男。

年は初老に差し掛かったあたりだろうか、白い髭にまるで花のような特徴的な髪型をした老人だった。

「アンタはここの住人か？」

「そういうお前たちは見たところ海軍のようだが、わざわざこんな所に何の用だ？」

「ああ、自己紹介が遅れたな。俺はクリーク、”海軍独立遊撃隊”を率いている。」

ここに来たのはグランドライン前半部の哨戒任務で立ち寄っただけだ。

そしてこっちは俺の副官を務めているギン、階級は少尉だ。」

「：私はクロツカス、この双子岬で灯台守をやっている。」

「ほお、あなたが：お噂はかねがね、優秀な医者であるそうで」

「どんな噂か知らんが：私はただの灯台守だ」

「いえいえ、少し小耳に挟んだだけですよ。かの海賊王の件とか」

まあ原作知識なんだけどね、とクロツカスがかの海賊王ゴールド・ロジャーの最後の航海に船医として船に同乗していた事を匂わせる  
と

「ほう、ならば私を捕らえにきたのか？」

「まさか、ただの哨戒任務ですよ」

自身を捕らえに来たのかと疑うクロツカスであったがそんなつもりは毛頭無いので否定しておく

「しかし”海軍独立遊撃隊”、噂に名高いカモメの水兵団に会えるとは光栄だ、そっちの噂こそ色々聞いているぞ？」

チラリとベアトリス号に掲げられた赤いカモメの海軍旗を見やりながら答えるクロツカス

「どうせまたどこかしらの海賊がやられたとかそういう噂でしょう？」

「まあだいたいそうだがお前の噂も聞いているぞ？」

若くして海軍本部少将であり大海賊”金獅子のシキ”を捕らえたとか、海賊相手には”赤カモメ”の名で恐れられるカモメの水兵団を率いて東西南北の海及びグランドラインで八面六臂の大立ち回りを演じているとか。」

「いやいや、仲間の活躍あってこそですよ。」

取り敢えず、我々は船の補修が終わり次第こちらを発ちますので船はしばらくここに停泊させていただきたいのだが構わないですか？」

「：好きにしろ、私は只の灯台守だからな」

「それからその間ここで検問を設けますので悪しからず」

「ああ、数年前から見かける”青十字”の旗を上げた海賊か？」

「ええ、公認海賊は海軍で発行されたその旗を掲げるルールでそれが無い海賊達を取り締まる予定です」

「ふん、まあ好きにしろ私には関係ないがな。…だが本当の海賊と言うのはそんなものではないのだがな」

ぼそり、とそんな事を言ったクロツカスの言葉に聞こえないフリをしつつ、クリークは己の船に戻るのであった。

わかってるよクロツカスさん、赤髪なんかがいい例さ。

この分ならホントに信念を持つてる奴らは海賊にはなれど、公認海賊にはならないだろうからな…

ルフィなんかもう説明しても公認海賊にはならないだろうなあ…

## 砂漠の国 ドンクリークさん

リヴァースマウンテンから大回りをしつつ、違法海賊達を捕らえながらベアトリス号はアラバスタへと到着した。

アラバスタ、グランドラインの前半に存在するサンディ島にある砂の王国である。

モチーフとしてはエジプトなんかのイメージが近いだろうか。

原作では麦わら一味がこの国の裏側で蠢いていた王下七武海の一“角、”サー・クロコダイル”と彼が率いる秘密犯罪組織相手に大立ち回りを見せて見事その陰謀を阻止、クロコダイルの国家乗っ取りを阻止したという物語があった。

まあまだまだ先の話だけでも。

この国に来たのはクロコダイルがこの国に居を構えたという報告があったのでその動向を探る為と”ちよつとした仕掛け”を行う為である。

「しかし…この暑さは何とかならんものか…」

「砂のロギアであるクロコダイルがこの国に住み着いたのもわかりますね…」

クリークは折角アラバスタに来たのだから、ギンと共に物見遊山気分で町の郊外に出てきたが暫くすれば楽しい気分も薄れており、照りつける太陽に怨嗟の声を送っていた。

まあそれも無理はない、アラバスタ王国があるサンディ島。

ここは広大な土地の大半を砂漠が占めており、「偉大なる航路」でも有数の文明大国とされ、非常に乾燥した気候であり、照りつける太陽は容赦なく人の気力を奪っていく。

唯一雨が降るのは王都であるアルバーナだけでありそれを人々は奇跡と崇めている。原作ではそれが悪い方に作用していたが。

「…ギン、さっさと戻るぞ」

「了解ボス、気軽に来るもんじゃないですな…」

成る程、この気候を砂のロギアであるクロコダイルが気に入ったのも納得だ、などと考えながら来た道を引き返し休憩をとる。



そんな折に一人のアラバスタの兵士がこちらへと駆けてきた。

聞けば面会を求めていたアラバスタ王国 国王”ネフェルタリ・コブラ”の時間が空いたので呼びに来たらしい。

ネフェルタリ・コブラはそれとなく街の人々に聞いても殆ど悪い噂は聞かないまさに”仁君”とでも呼ぶべき人物らしい。

原作においてもその人柄が窺え、民を慈しみ大切にすることの世界的王としては異質な国王で、王としての自覚も強くあり悪い噂も親バカであるだとかその程度のものであった。

そんな事を考えつつクリークとギンは兵士に先導され王宮へ。

広い部屋の中央には鋭い目つきで黒いクセツ毛を持つ偉丈夫、アラバスタ王国 十六代目国王”ネフェルタリ・コブラ”

そして右手側には黒いおかつぱ頭の巨漢、集めた情報によればアラバスタ王国 護衛隊副官”チャカ”

そして左側には白い肌に目元の化粧？が特徴的な、アラバスタ王国 護衛隊副官”ペル”

因みに彼は”アラバスタ最強の戦士”として名高く、守るために強くあろうとする武人でもある。

因みに二人ともなんと悪魔の実の能力者であり、並の相手なら歯牙にもかけぬ程の戦力を持つ。

どちらもそれぞれジャツカルとハヤブサのゾオン系であった為、原作では相手の相性が悪かった為敗北したが。

「はじめまして国王陛下、海軍独立遊撃隊長のクリークです。本日はお時間を作って頂き感謝します」

「うむ、私がアラバスタ王国 国王ネフェルタリ・コブラだ。

君たちカモメの水兵団の噂はよく聞いている、会えて光栄だよ。」  
そう言つて玉座から立ち上がり握手を求めてくるコブラに対して

「いやあ、名君と名高い国王陛下にそう言つて頂けるとは光栄です」  
と言いながら握手を返す。

「して、今回は如何様な用向きか？」

早速本題に入ってきたのでクロコダイルの視察の件は伏せつつ、適当に”前半部の哨戒ついでに違法海賊の取り締まりとして暫く逗留

させて頂きたい”という事を伝えれば快く承してくれた上に、どうせだったらここを使えば良いと王宮の一角まで解放してくれた。

取り敢えず礼を言いつつ最後に一つだけ聞いておく。

「そういえばレインベースに居を構えている王下七武海の一角、”クロコダイル”はどうですか？」

「…どう、と言つても彼には助けられている。

つい先日我々王国の軍が到着する前に海賊達を殲滅してくれたとの報告を受けている、彼がここに来てからというものの助けられてばかりだ」

うーむ、やはりもう印象づけは始まつてるか…

「…まあこれは忠告ですがあまり信用しすぎないよう、彼の力はこの国にとつては魅力的ですし気持ちは分かれますが、引き入れるなら引き入れるで”徹底的に心を折ってから”にする事をおすすめしますよ？」

と、変なこと言つて失礼しました。では私は一旦船に戻りますのでそれでは失礼します。」

と、変な空気になった玉座の間をクリークはそそくさと去るのであった。

## 砂漠の王 ドンクリークさん

「むう…なんか裏で操作してるんじゃないかこれ？」

カジノのスロットに財布に入れてた金が半分以上呑まれた所でその愚痴を零す

「いえ、そんな事ございませんよ!？」

と案内をつとめるボーイがそんな事は無いと否定した

ここはアラバスタ王国の首都アルバーナから少し行った場所にある町”レインベース”

そこに建つ王下七武海のクロコダイルが経営するカジノ”レインデイナーズ”である。

政府関係者は立ち入り禁止だと言われたが、クロコダイルに面会を求め無理を言って交渉した所、何とか一人だけ入って良いと許可をもらい、クロコダイルが手が空くまで適当に時間を潰す。

それでスロットを回していたのだが全く当たらず、既にこの短時間で数万ベリーが消えていった。

そんな中、別のボーイが側までやってきて

「お待たせしました、オーナーがお会いになるそうです」

と呼びに来たので素直にその後ろを着いていく。

案内されたのは広い部屋、壁面には水が流れ部屋の中央には長いテーブル。

そしてそのテーブルについている一人の男。

黒い髪に黒いコート、特徴的なのは目の下に走る横一文字の傷。

希少なロギア系でスナスナの実の能力者にして世界政府に認められた王下七武海の一角”サー・クロコダイル”である

「よう、顔を合わせるのは初めてだな」

「ああ、初めましてクロコダイル。」

俺はクリーク、海軍独立遊撃隊を率いている」

「噂は色々聞いてるぜ？海賊の間じゃ”赤カモメ”の方が通ってるがな。」

それで？今日は一体何の用事だ？」

「ああ、お前がここに住み着いたとの報告を受けて上が心配している  
ようだな、様子を見てこいと仰せでな。」

「この辺りの海の哨戒任務がてら寄らせてもらった。」

「はっ、特に疑われるような事はしてないぜ?」

「ふん、俺に言われてもな。そういう文句は直接上に言ってくれ」

そんな折にボーイが飲み物を運んできたのでありがたくもらえば  
「海賊が用意したのを何の警戒も無く飲んでいいのか?」

と尋ねてきたので

「俺に何かあつてみる、今ならもれなくうちの部隊がこのカジノに押  
し寄せてくるぞ?」

それにお前はそこまで短絡的でもないだろ」

と返しておく。

そう、クロコダイルは砂のロギアであるというのは脅威であるが何  
よりも頭が切れる。

原作での国盗り計画も何年もの時間をかけて水面下で周到に計画  
を進め、実際あと一歩というところまでできていた。

惜しくも麦わらの一味の前にその野望は阻まれたが。

「クハハハハツ、全く持ってその通り。そんな事しても百害あつて一  
利無しだからな。」

「今日のところは顔見せにただけさ、そーいやなんでここは政府関  
係者の立ち入りを禁じている?」

「簡単さ、おれは七武海とは言え海賊、政府の奴らに痛くもない腹を探  
られるのは嫌でね」

はー、痛くない腹どころか真っ黒けだろうに、などと考えながら  
「なるほど、てつきり何か不都合でもあるかと思つたがそういう理由  
か。」

無理言つて入れてもらつてすまん」

と言つておく、まあこの地下に牢獄やら何やらクロコダイルの秘  
密基地があるのは原作により知っているが。

「いやいや、噂に名高い赤カモメのボスのツラを拝んでおくのも悪く  
ねえと思つただけさ。」

ま、ついでに言えばあとひとつてめえに頼みたい事があるんだが…」

「頼み？まあ無理を言っ入れてもらったし俺に出来る事なら構わねえぞ？」

その言葉にクロコダイルはニヤリと笑い

「なに、簡単な事だ。ちよつとおれと手合わせしてもらおうか」と答えるのだった。

## 砂の猛威 ドンクリークさん

クロコダイルの提案に了承しつつ街の外へ。

クロコダイルってこんな好戦的だったか？などと考えていると「ボス、クロコダイルと手合わせって事ですけどいいんですか？手の内を晒しても…」

とギンの言葉ではたと納得した。そうか、こちらの戦力を少しでも探ろうと言うことか。

まあ自慢じゃないがこの六年間カモメの水兵団を率いて、海軍の中で一番多くの海賊を捕縛したのは自分だという自負はある。

それ故に自身の計画の障害になる可能性を考慮して念のために戦力を計ろうという算段なのであろう。

政府からも信用されており、海軍の一部にもクロコダイルを信用してアラバスタに海軍をおく必要は無いと言う者がいるくらいだ、計画の障害になりそうな者は後は付近を哨戒する海軍や最寄りの海軍支部くらいのものであろう。

それ故に海を問わずあちこちを回るカモメの水兵団は注意をしておくに越した事は無く、その為には情報が必要であり、その一環として今回の手合わせなのだろう。

そう考えながら街を抜け、広がるのは砂のみの不毛な大地。いや生物や植物がないわけではないわけではなからうが一般の人間にとっては生活に適さない環境である事は間違いない。

「砂のロギアであるお前と砂漠で戦うのは自殺行為な気もするが…」  
そう言いながら外していた装備を装着していく。

「クハハハハッ、すまねえな。だが流石に本部少将とやり合えるような場所がなくてな。」

合金製のレギンスにガントレット、武器は白尾棍だけで良いだろう。

「まあ分からなくもないが…、ルールはあるか？」

最後に指先まで可動装甲に覆われたガントレットで白尾棍を何回か振ってそう聞けば

「たかだか手合わせだ。致命的な攻撃は無しでどうだ？」

との答えが返ってくる、まあこんな手合わせで命を落とすのもバカらしいからな。

「それから町を巻き込むような大規模攻撃も控えてもらおうか。」

「じゃあこちらから行かせてもらおうか。」 砂漠の宝刀(デザート・スパーダ)!!」

クロコダイルが自身の右手を大きく振り上げ、そのまま振り下ろせば腕が砂の刀となり鋭い斬撃がクリークを襲う。

「流石ロギア系！ 間合いはアテにならない!!」

そう言いながら白尾棍を下から上に大きく振り上げ全てを断つ斬撃と化した砂を打ち払う。

「クハハッ！ いなしておいてよく言う！」 砂漠の宝刀!!」

有効と判断したのか、もう一度自身の腕を砂に変え振り下ろしてくる斬撃を高速歩法の”剃”で回避。

回避したところには砂漠が大きく割れておりその威力の高さを示していた。

「次はこっちから行かせてもらうぞ!! 嵐脚・辻風(つじかぜ)!!」

そう言いながら左右の脚で十字を描く斬撃をクロコダイル目掛けて放つも

「無駄だ！ おれは砂だからな…そんな攻撃は効かねえなあ？」

悪魔の実は大まかに三種類に分ける事が出来る。

その中で自然現象を操るロギア系が恐ろしいとされる所以がこれである。

” 攻撃が効かない ”、これに尽きる。

勿論白尾棍の先端の海楼石や覇気を纏って攻撃すればダメージを与える事はできるが別にただの手合わせなので、覇気は使用せずどこまでロギア相手にやれるか試すいい機会なのでちょうど良い、と考え「なら…」 拳砲・千々連(ちぢれ)っ!!」

そう言って放つのは拳法の連打。

一発一発丁寧に放ち10、20、40と放つも

「無駄だと言っている！」 三日月形砂丘(バルハン)っ!!」

ダメージを与える事が出来ず、逆にクロコダイルの振るう腕にクリークの左腕が絡め取られその水分を奪う。

「ちっ、水分をとられるのは絶対か…が、金属は問題ないようだな。」  
素肌が剥き出しの上腕部が水分を奪われるもガントレットをはめていた部分は

「ふん、腕鎧に救われたか、ならこれはどうだ!」砂漠の向日葵” (デザート・ジラソーレ)」

地面にクロコダイルが手をつけば円形に流砂となり、それがクリークを飲み込まんとする。

「っっ!厄介な!」

思わず舌打ちしつつ悪態をつく。

流砂は駆け上がろうとしても流れる砂により足が取られ、最後には飲み込まれてしまう蟻地獄のようなものであるが、そこは素早く月歩にて空中に踊り出る。いくら足を取られようが空中に躍り出れば問題ない。

「そらーそこならば避けれんだろう!」砂嵐 (サブルス)!!」

そして空中にクリークが躍り出た所をクロコダイルが掌から起こした砂嵐を放つ。

流石にこれに飲み込まれるのは面倒なのでクリークは深く大きく息を限界まで吸い込むと

「■■■■■■ーッ!!」

限界まで吸い込んだ息を声にならない声として吐き出し、その衝撃波によりクロコダイルの起こした砂嵐を”かき消した”

「どういう肺活量だ、てめえ?!」砂漠の…」

そう思わずクロコダイルが怒鳴りならば、と更なる技を出そうとしたところで

ぶるぶるぶるぶる

と、間の抜けた電伝虫の音が響き

「ちよつと待ったあっ!!」

とクリークは素早く地面に降り立ち、攻撃してこようとしたクロコダイルに海楼石を仕込んだ白尾棍の先端を突き立てその動きを止め



るのであった。

## 砂の姫君 ドンクリークさん

「…なんでおれまで行かなきゃならねえ」

「はっはっは、アラバスタ王族に恩を売るいい機会じゃねえか」

そう文句を垂れるクロコダイルをクリークはせつついてアラバスタ王都、アルバーナへ急行していた。

それもこれも全て電伝虫で連絡があつた件に關してである。

”アラバスタ王女、ネフェルタリ・ビビを見失つた”との連絡があつたからである。

元々ビビ王女にはアラバスタ王宮に滞在させてもらっている事もあり、カモメの水兵団を一部護衛としてつけていたのだが、今回クロコダイル面会に際して大半を連れて来た為護衛についていたのは一人。

さらに折悪く最近王女が喧嘩を経て仲良くなつたアラバスタの子供達の集団である”砂砂団”、ビビ王女が王宮を飛び出して城下に遊びに行くようになり、更に言えば王女にしてはあまりにお転婆ですباشつくく大人顔負けの運動能力を見せる事もある。

いつもだったら見失つても他の人員がカバーする所だったが一人となるとそうも行かず、見失つた時点で直ぐにこちらに連絡が入り、万が一があつては不味い、とアルバーナに急行しているのである。

ついでに丁度手合わせをしていたクロコダイルも連行してである。それがクロコダイルが愚痴をたれている理由である、まあ何かあれば恩を売れると考えたのだろう最終的には着いてきたが。

町外れで見失つたとの事だったので直ぐに見聞色の覇気を広げて居場所を探る、そしてビビ王女の気配を見つけたが

「…走っているな…いや追われている？おい、クロコダイル！こつちこいー」

「つたく、何だ？いきなり目を閉じて黙りだしたと思つたら…」

「いいからこい！ビビ王女が誰かに追われている！」

「…へえ？そりやいい、わざわざ来たかがあつたつてもんだ、場所は？」

見聞色の覇気にて探知した気配の走る方向から行き先を計算しクロコダイルと共に急行。

町の外から更に外れた遺跡地帯、そして目撃したのは大柄の男に目を切りつけられながらも手にした棍棒でそれを殴り飛ばす少年だった。

更にそこに殴り飛ばされた男の仲間であろうガラの悪そうな男達、直ぐに敵だと判断し

「砂嵐（サーブルス）っ!!」

「長距離拳砲改め…飛拳砲っ!!」

片やクロコダイルの起こした砂嵐で空中に巻き上げられる男。

片やクリークの放つ飛ぶ拳撃にて吹き飛ばされる男。

「ゴリラさん！それから、サー・クロコダイル!？」

第一印象だろうか、すっかり定着してしまった愛称でこちらを呼び、更に有名だからだろう顔は知っていたらしくクロコダイルの出現に驚くビビ王女

「ビビちゃん、その子を診せてくれ、クロコダイル！辺りに他に潜んでないか見てくれ!!」

直ぐに切りつけられた少年の傷の具合を確認、痛みによるショックで気絶はしているものの幸いにも命に別状は無いと判断し応急処置だけ行う。

そのうちに後を追ってきたのだろうコブラ王と護衛隊隊長であるイガラムの二人が現れてこちらを見るや状況を察したのか

「すまないクリーク殿！礼を言う！」

「いえ、ビビ王女が無事であったので何よりですよ」

と言ってみれば

「全くだコブラ王、てめえの娘ぐらいしっかり見てろ…」

そう言いつつ現れたのは両手にならず者達の仲間であろう男の顔を鷲掴みにして現れたクロコダイル

「サー・クロコダイル！君も助けてくれたのか、感謝する！」

「コブラ王、国王がそんな簡単に頭を下げるようなものでは…」

と、クロコダイルと共に現れた護衛隊副隊長であるチャカ、ペルが

苦言を呈するも一人の父親として娘を助けてくれた事に礼を言っているのだと取り合わず。

人が良すぎるのも考えものだな…などと思いつつながらそんな光景を眺めるのだった、というかこれクロコダイルが信用されるという意味で余計な事したか？

## 姫の考え ドンクリークさん

ビビ王女の誘拐未遂事件から数日後の事である。

「ゴリラさん！サー・クロコダイルの事を教えて！」

ある日は王宮にて朝食を摂っている途中に

「ゴリラさん！サー・クロコダイルって砂漠では最強なのかしら？」

またある日はアルバーナで市街の見廻り中に

「ゴリラさん、サー・クロコダイルはこの国の何が気に入ったと思う？」

これまたある日はベアトリス号にて近海の見廻り中に突如荷物の中から、という風に水色の頭がひよこひよこことクリーク近辺に出没するようになった。

ネフェルタリ・ビビ5歳。

彼女は誘拐事件の後はなんだか落ち込んでいたようであったが暫くすればいつもの調子を取り戻し何があったのかえらくクロコダイルを気に入った様子でこちらに質問をしてくるようになった。

突如として現れたり撒いたかと思えば別のルートから追ってきたり挙げ句の果てには軍艦に忍び込み隠れ潜む程の事をやってのけて見せた。

勿論直ぐにアラバスタ王宮に連絡し船はとんぼ返り、護衛隊長であるイガラムに怒鳴られていたが。

何が気に入ったのかと聞けば

「え？それはサー・クロコダイルの能力がこの国にピッタリだからよ！」

それに私を助けてくれたしね！あ、勿論ゴリラさんにも感謝してるわよ？」

との事だったので流石にこれは不味いと思ひ溜々とまだ幼いビビ王女に話して聞かせる。

子供だから、と適当な説明ではなくきちんと順を追って説明を始める。

それにこの子はこの年にしては賢いから大丈夫だろう。

丁度王宮に滞在しているので勉強会としてイガラム殿やコブラ王に話をつけ週に数回1時間くらいのペースでビビ王女に時間を作ってもらおう。

という事でまず王下七武海という制度の事から順にサー・クロコダイルの経歴や能力の詳細。

そして海賊というものの悪辣さやずる賢さやも合わせていくらサー・クロコダイルが七武海であり政府側の人間であっても簡単に国の味方とは考え無い方がいいと教え込む。

更にその上で彼が裏で何か企んでいると仮定した場合、何を企んでいるか仮説を立ててみたりとして最終的には

”サー・クロコダイルは自身の能力が最も最大に使えるこの国で何かデカイ事をやるつもりだ”

という結論になった。

そのデカイ事がなんなのか、というのは結論が出なかったが出た意見としては”砂漠を拠点化”、”建国”、”大規模な海賊団の設立”などの意見が出た。

勿論こちらが原作知識を活かしてそれとなく思考を誘導したからであるが。

「…成る程、じゃあサー・クロコダイルを王家の一員に加えたら一挙に解決じゃ無いかしら？」

…とんでもない爆弾を落としおったぞこの幼女。

「いやビビちゃん、王家に加えるってどうやって…」

「簡単よゴリラさん、彼が私と一緒に頑張って婿養子として王家に入ればいいんだわ！」

思わず頭を抱えなくなる、これも全て自分とクロコダイルで助けに入ったのが原因だろうか？ひよっとしてビビ王女にはクロコダイルが白馬の王子様に見えたのだろうか？

「いやそうは言ってもビビちゃん、年齢の問題は一先ず置いておくけどこの前の勉強会の時に言ったようにクロコダイルは何か企んでいる可能性が高いんだよ？」

「だからこそよゴリラさん。」

彼が何か企んでいるとするならそれこそ好機だわ、前言つてたじゃない”徹底的に心を折らなければ”って。

彼が何か企んでるなら綿密に計画を立てて長い時間をかけて行動する筈だわ、ゴリラさんもそう思ってるんでしょ？」

「まあ確かに奴が何かやるとしたらそうするだろうが…」

「長年の準備をかけて慎重に計画していた事が、もし計画直前で、それも私みたいな歳の離れた子に計画を潰されたらどう思うかしら？」

あれ、何かビビの方向性がおかしくなってるかい？

と考えるもとりあえずビビ王女にクロコダイルの危険性を警告する事は出来たのでまあ良しとしてビビ王女の考えにはコクコクと頷いておく。

## 砂への策 ドンクリークさん

「ふむ、今のところクロコダイルに不審な動きは無し、か。」

「はい、普段はレインディナーズから出て来る事も無く、外出が確認されたのはこちらで近海から誘導した海賊が港に接舷した時だけですね」

アルバーナのアラバスタ王宮にてクリークはギンから報告を受け思考する。

とりあえず先日の子ビちゃんの場合は一旦置いておこう。

ギンは数名を率いて秘密裏にクロコダイルの動向を探るように任務を受けており、その為にアルバーナに到着以降アラバスタ王国の各町を回っておりその報告としてクリークの元に戻ってきていた。

それらを元に考えをまとめ、暫くはまだこのアラバスタに留まる事を伝え、数日の休暇をとるように伝えその後の任務続行を言い渡す。

「ではボス、失礼します。」

そう言って部屋から出て行ったギンを見送りつつ、クリークは思考を纏める。

ここで軽くおさらいをしておこう。

原作でクロコダイルが起こした騒動。

最終目的は”自身を王とした理想国家の建国”

そしてその手段としてこのアラバスタ王国に眠る古代兵器”プルトン”の奪取、及びアラバスタの王族であるネフェルタリ家の失墜。

更にその為の策として世界政府では所持、製造を禁止されている雨を降らす粉、ダンスパウダーを用いて反乱を誘発、及び”プルトンの入手の為にその位置が記してある”歴史の本文(ポーネグリフ)”を解読の為に唯一古代文字を読む事が可能なニコ・ロビンを手元に置いていた。

最もロビンは未だ西の海にいたのでまだ先だろうが。

そしてそれらの策の為の手足として完全秘密主義の犯罪組織”バロックワークス”を設立していた。

だが現状バロックワークスは影も形も見受けられず未だ設立は果



たされていないのだろうと考え、それならば他のところから探ってみるか、とダンスパウダーの影がないか探るもこれも空振り。

となると今後の行動としては原作にて”オフィサーエージェント”、若しくは”フロンティアエージェント”と呼ばれていたバロックワークスの幹部達を補足、及びこちらの手の物を賞金稼ぎとして名を上げさせバロックワークスに潜入できるように取り計らうべきだろう。

今のところ潜入させるべき人間は…ギンはカモメの水兵団としても本部少尉としても顔が知れてきているし他だと…この前カモメの水兵団に入ったドレーク二等兵…いや、流石に訓練がまだ終わっていないのに送り出す事は出来まい。

：仕方ない、どうせまだ設立はされていないのだから潜入については後回しにするか。

となると人員を割くのは将来オフィサーエージェント、フロンティアエージェントとしてバロックワークスの幹部になる連中の捜索だろう。

バロックワークスは社員たちは社長の正体はもちろん、仲間の素性も一切知らされず、互いをコードネームで呼び合う程の徹底した秘密主義が取られており、よって世界政府や海軍でさえ組織の存在を把握していなかった。

そしてその幹部であるオフィサーエージェント及びフロンティアエージェントは12人と1匹、および彼らとペアを組む女性エージェントから成る、まあ例外もいるが。

そして彼ら、彼女らの殆どが悪魔の实の能力者であり、誰も彼も一筋縄ではいかない曲者ばかりである。

とりあえず別の紙に原作を思い出せる限りのバロックワークス幹部達の情報を書き込んでおく、やはり原作を知っているというアドバンテージはでかいな、と考えながら書類を纏めていると突如中庭に面した窓がバンツと開かれ

「ゴリラさん！私に戦い方を教えて!!」

そう言いながら水色髪の少女が飛び込んできたのであった。

## 情報収集 ドンクリークさん

「七武海が？」

『はい、新たに就任したのはアマゾン・リリー皇帝”ボア・ハンコック”です。』

最初の遠征で8000万の懸賞金がかけられたその後直ぐに七武海入りしました。』

「…まあ九蛇の海賊団は放っておいて構わないだろう、七武海入りしたのならこつちがどうこう言えないからな、他は？」

「西の海からの情報です、ゲッコー・モリアがワの国の抗争にて敗れ西の海に敗走、拠点としていた島が消えたと報告が来ています」

「…西の海で？」

『はい、何度か大きな音が響き一夜のうちに忽然と姿を消したそうです。』

先程報告したゲッコー・モリアはワの国で三大海賊の一角”カイドウ”に敗れた後西の海へと敗走、その報告した島を拠点としていたとの情報を掴んでいます。』

「…わかった、引き続き調査を頼む。他に報告はあるか？」

『「こちらも西の海からですが賞金首である”ニコ・ロビン”の姿が西の海で何度か確認されています、人を送りますか？」』

「いや、上からは指示が来てないから放置で良いだろう。それに個人的には彼女への容疑に納得いかないからな」

『心中お察しします、確かに10歳の少女がというのは考え難いですからね。』

他の報告は海遊王国のジェルマが北の海からレッドラインを越えて東の海のコジアへ侵攻したという情報が東の海からあがっています。

これによりコジアは崩壊、ですが世界政府加盟国では無い為動く必要は無いとの事です。』

「ふむ、ならば今後の動向の情報だけ集めておいてくれ。」

東の海と言えば東の海に入った赤髪海賊団の動きはどうなった？」

『依然としてゴア王国を港としています、数回程海に出ていますが最後には戻っていますので暫くはこのままかと』

「なるほど動きは無しか、それからこちらから頼んでいた人探しはどうなっている？」

『はい、何人が捕捉する事ができました。』

「まず西の海から賞金稼ぎであり”殺し屋”の異名を持つダズ・ボーンズ

そして有名ではありませんが最近運び屋として一部で名の知れているミキータ

次に南の海で闇金業者として知られるギャルディーノ

申し訳ないですが現在居場所が掴めたのはこの3名だけです、とりあえずこの件に関しては引き続き調査にあたります』

「ご苦労、顔の特徴だけでよくそこまで探してくれたもんだ」

『いえ、仕事ですから。あ、それからお探しだった悪魔の実が北の海で見つかったようです』

「ほう、因みに動きは？」

『どうやら売却するようです、あの実であれば一億どころか倍以上で取引されてもおかしく無いですからね』

「よし、最優先で実の動向を探るよう頼む、それからこちらも近々そちらへ帰還する、後で船舶部や技術班に話を通しておいてくれ」

『了解しました、しかしこのマリージョアから出てもう一年ですか、早いものですね』

「ああ、たった一年の哨戒任務で違法海賊をごまんと検挙する羽目になった、まだ増えると思うか？」

『一度大掃除したのなら暫くは落ち着くでしょう、新聞にもカモメの水兵団がグランドライン前半部で哨戒しているのは取り上げられていますからね』

「…逆効果じゃないか？まあいい出立の日は改めて連絡する、引き続き情報調査を頼む」

『了解しました、道中お気をつけて』

そして海軍情報部からの電伝虫は沈黙する。

さて、出立となるとまずはコブラ王に話を通しておこななきゃな。

ビビちゃんはどうしたものか、既に体力作りやら戦い方の指導を始めて半年以上になるが今ここで発つと中途半端になるし…

よし、連絡員として何人か残しておいてそのメンバーに指導を任せるか。

となると誰を残したもんかな、とクリークはそう考えながら人員の選抜に勤しむのだった。

## アスカ島 ドンクリークさん

アラバスタでクロコダイルの動向の見張り、及びビビ王女の指導役として数名の人員を残してクリーク率いるカモメの水兵団はアラバスタを出立、報告などの義務を果たすべく船は一路、マリルフォードへ向かっていた。

そしてクリークの姿はベアトリス号の通信室にあり丁度通信を受けていた所である。

「海軍道場の視察…でありますか？」

『ああ、お前が丁度マリルフォードに向かっていると聞いてな。』

お前が提唱していた四海制覇の一環である”戦力の均一化”、それに対するものとしてアスカ島の海軍道場の復活。

建物自体の再建は完了したのだがどうやらいざ運営しようとした所で島の住人との揉め事になっていてな、お前には様子を見に行ってもらった上で住民達の説得を頼みたい。』

「わかりました、元々俺が言い出した事なので。因みに揉め事とは一体？」

『うむ、今一要領を得ないのだが呪いがなんとかと住民達が言っているな、しかも海軍道場が廃れた理由である当時の海兵達の横暴ぶりはまだ記憶に残っている者もいるようだ』

かつてアスカ島にあった”海軍道場”

昔は海軍剣士の修行場であったが海賊の増加により充分なカリキュラムを組めなくなり、いつしか不良海軍の溜まり場と化して行き、それを鑑みた当時の海軍元帥の判断により閉鎖となっていた。

しかし”四海制覇”計画の一環として各海の戦力の均一化を図るべくクリークが復活を提言、この度晴れて道場の再建は完了していた。

「なるほど、では私はアスカ島へ向かいます。

エターナルポースがありませんので少し時間はかかると思いますが」

『それなら心配ない、先んじてエターナルポースをそちらに送ってい

る。ではくれぐれも頼んだぞ？」

そうしてセンゴク元帥からの通信は切れた。

「しかしアスカ島か…えらく日本風な名前だがどっかで聞いたような気がするんだがな…？」

通信室から私室に戻り本棚へと向かう。

一時期ロビンが乗っていた事もあり本の種類は豊富にある、その中で目的の本を探し出すとそれを持ってデスクに座りペラペラりとめくると暫くして

「アスカ島…アスカ島…あった、えーとなになに？」

穏やかな気候を持ち綺麗な海と砂浜を有するビーチは観光名所として有名。

他にも昔は海軍道場を有しており、かつては海軍剣士の聖地としても知られていた。

残念ながら今は閉鎖されており古びた建物が残っているのみである。

島の住民達は多くが観光客相手の商売をしているが、一部の村では対照的に皆どこか閉鎖的でありあまり観光客に関わろうとしない。

やはりこれも古くからこの島に伝わる”七星剣伝説”に関わるのだろうか。

…って説明少ないな!?!しかし”七星剣”どっかで聞いたな、しかも結構前に」

暫く頭をひねって考えてようやく思い出す、劇場版であったなそういやと。

確かあらすじはゾロが昔のよしみで敵側につくとかなんとかだったな、んでその昔のよしみって奴がボスでそいつが持ってたのが”七星剣”って名前だった…気がする。

ふむ、いらん事件が起こる前にこちらでその剣は預かるか。

確か呪いが何とかって話だがそんな非科学的なもんなら技術班か科学班に解析させれば何かわかるだろう。

そうと決まれば司令室へと向かい手短に追加任務の事とアスカ島

へ向かう事を告げる。

そして再び私室に戻り、今度は自身の知識の中にある思い出せる事をメモに書き出す

「えーとたしか麦わら一味とゾロの昔馴染み、ヒロインみたいな娘とその祖母？あれ、祖母だっけ？

確かゾロの顔馴染みがボスで他に何人か仲間がいたよな…」

額に手を当てつつ思い出せる事を書き連ねていくが

「とは言え映画で事件があったのよりだいたい前だし別に敵がいるわけじゃないだろうしなあ…」

と、とりあえず海軍道場の復活が優先だし”七星剣”自体に関してはそこまで急ぎじゃないだろう。

## アスカ村 ドンクリークさん

「ワシは反対じゃ」

「いえしかし昔と違ってこれからはきちんと運営しますので…」

海軍道場の運営に反対していたのはアスカ島に古くからある村でその名も”アスカ村”

その中でその村の長老を含む一部が猛反対していた。

クリークはスムーズな説得のために自身の貯金からいくらか包み持ってきて交渉に臨んだがイザヤと名乗った老女は首を全く縦に振ろうとしなかった。

「ふん、信用できたもんじゃないわい。」

それにこの島は呪われておる！その為の祭事を禁止したのはお主らじゃろう!!」

呪われてるって…んな非科学的な、などと考えるも顔には出さずに「不勉強で申し訳ない、呪いとは一体なんの事で？」

「なんじゃ、知らんのか…仕方ない、話してやろう。」

そうしてイザヤが話してくれたのは一つの昔話だった。

簡単に纏めると昔昔のその昔、一つの国がありその国には三人の王子がいたそうだ。

そしてその国には一人の美しい巫女がおり、三人の王子は三人ともその巫女に恋をした。

そして当然誰も引き下がらず争いに、最終的にはその国の象徴である神から授かった剣まで持ち出して血で血を洗う惨劇へと発展、神から授かりし聖剣は多くの血を吸い呪われた剣となったらしい。

そして巫女はその惨劇に心を痛め、とうとう崖から身を投げ出しそれを見て王子達は正氣に戻り巫女の死を深く、とても深く悲しんだそうだ。

それを見た神々はそのような惨劇が二度と起こらないように呪われた剣を封じる為の3つの宝珠を天より与えたそうな。

そしてそれ以来この村の民は剣と宝珠を受け継ぎ、代々その教えを守ってその呪われた聖剣を封じているらしい。



「なるほど、しかしそうは言っても百年に一度…でしたか？そんなに心配なら壊すならなんなりしたらよろしいのでは？」

と提案するも

「無駄じゃ、”七星剣”の破壊は不可能じゃ。じゃからワシらは鎮魂の儀をおこなっておる…しかしそれを禁止したのはお主ら海軍じゃろう？」

それを禁止するならワシらは絶対海軍道場の運営は認めん!!

話は他にないか？外はもう暗い、寝床ぐらいは貸してやるから今日は泊まって行くがええ。マヤ、客人を案内せい」

そう言つてイザヤは立ち上がり側に控えていた年はまだ10に満たないだろう、藍色の髪の少女にこちらを任せると外に出て行った。

「あー、マヤちゃん…でいいのかな？君はこの村の子かな？」

「さっきのはわたしのおばあちゃん」

「なるほどお孫さんか、という事は村の事は色々知つてるといふ事か。

だったら色々とお話を聞かせてくれないかな？」

「いいよ、でもかわりにそとのおはなしいろいろきかせて？」

「ああ、構わないとも。そうだお嬢ちゃんにはこれをあげようじゃないか」

そう言つて腰のポーチから飴玉を取り出して小さな手に乗せてやるとそれをつまんで不思議そうに見るマヤ

「おじさん、これなに？」

え、キャンディー見るの初めてなのか？と思いつつ包紙を剥がして再びキャンディーを手のひらに乗せてやる。

「これはキャンディーって言つてお菓子の一種だ。

口に含んでおくとだんだん溶けてくるから食べてごらん？」

そう言つるとマヤはキャンディーを摘んで暫く眺めた後にキャンディーを口にするると暫くして

「甘い！宝石みたい綺麗なのに甘くて美味しい!!」

と頬をゆるませとても気に入った様子だった。

「気に入ったようで何より、取り敢えず先に食事を済ませるか。どこか食事をとれるところはあるかな？」

「このむらはそんなところないよ？うちでたべる？」

とキャンディーを口の中で転がしつつそう言うマヤに対しクリークは暫く考え

「…いや、食材だけ何処かで分けてもらう事はできないかな？」

マヤはあのイザヤの孫だと言っていたのな、でこの子の家となるとあのイザヤもいるだろう。

まだ対策が出来ていないのにイザヤにこの短時間で再び顔を合わせるのはゴメンなのでそう断ると、食事は自分で用意するかと考え食材の融通だけお願いする。

ついでに調理の為に開けた場所が無いかも聞いておき、食材をそこまで持ってきてもらうようにキャンディーをあげつつお願いすればマヤはドンと胸を叩いて

「まかせてーあとでちゃんといろいろきかせてね？」

そう言うマヤは外へかけていき、クリークは教えられた村の外れへと向かうのだった。

## 藍の少女 ドンクreekさん

「赤き月が満ちる時に大いなる力が剣に宿る。七星これに敗れたれば、闇が支配する世界が始まる」…ね」

クreekはマヤから貰った食材を適当に切って焼いたもので食事を済ませるとイザヤの話に出てきた一節を思い出していた。

因みにマヤは食材を持ってきた後は自分もそろそろお家でご飯だから、と帰ってしまった。

食事を終えたら後でお話に来るそうだ、イザヤに止められなければ良いが…

「赤い月ねえ…」罪を犯した者共の、穢れを清める赤い月」ってか？」  
どつちかって言うのと穢れを多々含む気がするがな…いや、真面目に考えよう。

おそらくイザヤが言っていたのは近くに海軍施設がある場合に適用される”集会条例”の事だろう。

えーと確か将官への昇進にあたって勉強したな…

”演説者の氏名及び会同の場所及び日時を詳記し、所轄海軍に届け出た上で認可を受けねばならない、ただし屋内に限る。

海軍は正規の海兵に監視させることができ、派出の海兵は認可証の提示が拒まれるときや、講談論議が届出事項以外の行為、または治安に害があると認める場合などは解散を命ずることができ”

だったか？これは海軍に対する妨害活動、破壊活動を防ぐ為の条例だがこのアスカ島で行われていた儀式とやらを当時のここの責任者が気に入らなかつたのだろう。

となるとその儀式とやらの詳細を確認、安全性があるものとセンゴク元帥に報告の上でこの件にのみ集会条例の免除をしてもらって、それを基にイザヤに交渉してみるか…

そうと決まればクreekは持ってきた電伝虫を大きなリュックから取り出す。

電伝虫は小電伝虫と違ってサイズが大きく重いのが欠点だが、小電伝虫では島一つの範囲くらいしかカバーできない。

それに対して電伝虫は遠くまで電波が届くのが魅力だよな、と考えるつつベアトリス号の通信室に繋ぐ。

暫くすれば応答があった為今夜はこちらで過ごす事を伝えた上で、明日は休みにするので各自交代の上で休むように伝え電伝虫を切れば

「おじさーん!」

村の方から藍色の髪の少女が歩いてくるのが見えた為立ち上がり

「やあマヤちゃん、暗いんだから気をつけなよ?」

そう言つて手を差し出せばその手にフルーツを乗せるマヤ

「:別にフルーツをくれというつもりじゃなかったんだが」

「しょくごのデザートだよ、とこでかいへーのおじさんはなにがききたいの?」

と、早速本題に入つてきたので食事の為におこした火の側に移動し儀式とやらについて聞く

「ぎしきつていつてもとくべつなことはしないよ?みんなでかみさまにおいのりするの」

「お祈り?」

「うん、しゅうにいつかいやるのとひやくねんにいちどのとあるんだけど」

「儀式の内容は違うんだよな?」

「えっと、さつきいったみんなでおいのりするのがいつもやってるの、ひやくねんにいちどののは”みこ”をえらんで”ほーぎよく”をとうにおさめてけっかいをつくるまいをおこなうの」

「えーと、塔と言うところに宝玉を納めた上で巫女が舞いで結界を作ると言う事でいいのかな?」

「そうだよーそれにいまのみこはおばあちゃんだけどつぎのみこはわたしができるんだよ!」

なるほどなあ…あれ?劇場版で出てたヒロインっぽい子つてこの子か?

…まあいいか、しかし儀式とやらの内容的に特に危険な点は見られないしセンゴク元帥にあたってみる価値はあるな。

話があれば特例として認めれば海軍道場も運営できるだろう。

「じゃあわたしははなしたからそとのおはなしきかせて！」

とコートを抱んで揺すってくるマヤちゃんに山より大きなクジラの事や恐竜の島の事など色んな話を聞かせるのだった。

## 村長交渉 ドンクリークさん

遅くまで起きていた為か眠ってしまったマヤを背負い事前に確認しておいた村長の家へ。

すうすうと寝息をたてるマヤを背に扉をコンコンと叩くと扉の向こうからゴソゴソとした音と共に、ガチャリと共に扉が開けばそこにいたのはこのアスカ村の村長であるイザヤ

「…なんじゃお主か、何の用…む、マヤを送り届けに来たのか」

「ええ、色々話を聞かせてる間に眠ってしまった様で…」

「世話をかける…送り届けてくれた事は礼をいおう、じゃがお主の持ってきた件については別じゃ、先ほどの提案を了承せぬ限りワシらは首を縦には振らんからのう」

「ええとそれなんですが…というか一旦この子を先にベッドに運んでも宜しいですか？」

先にそう断って寝入ってしまったマヤを先に寝台に運びイザヤの元へと戻る。

「先程言いかけた話ですがこの村で行う祭事に関しては特例での”集会条例”の免除を考えています。

ですので考え直して頂けないかと思うのですが…」

「ふむ…それならばこちらに断る理由は無いのじゃが…本当にその特例とやらが通るのか？」

と、何処か懐疑的な様子の子のイザヤに

「取り敢えず明日我が海軍のトップに連絡を取って確認してみますので」

「そこはお主の交渉次第という事か、そうとなれば今日はさっさと休むのじゃな」

「あー、では軒先だけお借りします」

「何を言っておる、一応は客人なのじゃから部屋に案内するゆえ暫し待て」

そう言つて案内された先には一つの部屋、寝台の上でセンゴク元帥に話す事を纏めているとその日はいつの間にか寝入ってしまったの

だった。

明けて次の日クリークは電伝虫にてセンゴク元帥に連絡をとっていた、席の対面には村長であるイザヤとその孫のマヤが側に控えている

『どうしたクリーク、何か進展があつたのか？』

「はい、実は話を色々聞かせてもらったところ…」

と、この島に伝わる昔話やそれに対する祭事についての詳細を報告する

『ふむ、確かに通常であれば“集会条例”が適用されるが…

いや、海軍道場の再建は戦力の均一化を図る上での重要事項だ故に特例をとりたいたい所だが…どうしたもんか』

「えーと、何かネックでも？」

『その七星剣とやらの詳細を知りたい、場合によっては海軍で保管の上解析してしまえば島民たちの不安も消えよう』

「えー…だそうですけど村長さん、一度その七星剣とやらを確認させてもらう事は出来ますか？」

「しかしアレは破壊は出来ぬと…」

『ああ村長殿、破壊不能というのが例え事実でもとれる手段は色々ありますから。

例えば破壊が不可能としても単純に頑丈なのか、超自然的に壊れても回復するのかなどはわかりますか？』

「…いや、そう言われると人の力で破壊できぬとしか伝わっておらぬな」

「その剣に例えばそう…例えば悪魔の実のような能力が備わってるならその詳細を解析し、破壊が不可能なら封印という手もあります。溶岩に沈める、氷床に封じるなどの手もありますしね」

「確かに言われてみれば考えたことは無かつたのう…」

『だから一口に破壊不能とは言え取れる手段は色々あるかと思うのですが…』

伝承を守っているだけでそれ以外については頭が回らなかつたの

だろう、初めて気づいたとばかりに納得し提案するイザヤ

「わかった…、では七星剣を確認してもらおう故それで良いか？」

「ええ、取り敢えずまずは見てみないと何とも言えませんからね。では元帥、また後ほどご連絡します」

そう言つて電伝虫を切り七星剣がある場所に先導するイザヤとマヤの後ろへと続くのであった。



## 七星の剣 ドンクリークさん

イザヤに案内されて到着したのは一つの遺跡：建物の風化度合いからかなり古い遺跡だとクリークはロビンから教わった事を思い出しながら軽く遺跡の年代を推測する。

あちらこちらに文字のような物はあるが流石にそこまでは教えられてないのでかなり古いと言うことしかわからないが。

イザヤとマヤはそのまま中に進もうとするが、中がかなり暗いと判断したクリークは荷物からランタンを取り出して点灯、それをマヤに持たせる。

自身が持つより何かあった時に自分が対応できるようにマヤに持たせておいた方が良かろうと判断した為だ。

そして通路を抜けて出たのは広い部屋、そして部屋の真ん中には石棺が一つポツリと置いてあった。

「…この中じゃ」

「前に開かれたのは？」

「…正確にはこの中に入っていると伝わっておる」

「という事は盗られている可能性も？」

「無いとは思いますが…今までは伝承を信じとったわけじゃし開けて見ぬ事には何ともものう…」

そう言つて石棺の蓋に手を置くイザヤ。

石棺はかなり表面が苔むしていたりとかかなり古そうではあるが、軽く調べたところ隙間などは一切なく堅く蓋を閉ざしていた

「かいへーのおじさん、これすごくおもそうだよ？」

「マヤの言う通りじゃ、一人ではこれは荷が重いのだ。」

村の男共を呼んでくるべきじやろう、しばし待っておるがええ」

と、イザヤとマヤが言う通り石棺の蓋はかなり厚く常人なら一人で開ける事は難しそうだったが、そこは仮にも海軍本部少将の地位にある男。

このくらい問題ないと言わんばかりにガントレットをはめた両腕をガシヤンと打ち鳴らし

「まあ村長殿、マヤちゃん、このくらい海兵なら余裕さ」

そう言つて石棺の蓋に手をかけるとズズツツと重い音がして更にもう一息込めるととてつもない重さを持った石棺の蓋が持ち上がる。クリークはそれを軽々と運び部屋の壁に立てかけると

「さて、七星剣とやらはあるかな？」

とポカンと口を開けるイザヤとマヤを尻目に石棺の中を覗き込む。そこにあつたのは一振りの両刃の洋剣。

長さは2mはいかないものの、普通の剣と比べるとかなりの長さを持った刃。

目を惹くのはベーシックな洋剣と違い樋がかなり広く、そこに刻まれた紋様なのか文字なのかわからないが広い樋には何かの紋様のようなものが入っていた。

握りには何かの皮であろうか、白色のもので覆われおり柄頭には赤い飾り紐。

鏢は柄頭と同様の丸い飾り意匠を持ち、黄金か真鍮か見ただけでは不明だが共にランタンの光を受け鈍い輝きを見せていた。

そして何よりその剣は何故か無性に手に取りたくなるようなそんな異様な雰囲気を出していたのであつた。

「村長殿、これが七星剣で間違いないですか？」

「うむ、この禍々しき姿、間違いなく伝説にある七星剣じやろうて。」

「と言う事は長い間ここにあつたもので間違い無いと？」

「そうじやろうが…何か気がかりでも？」

「いえ、いくら石棺がきつちり閉じてあつたとは言え刃も鏢も柄も、更にはこの柄頭の紐なんかも錆などの腐食が一切見られないんですよ、ですからこの剣自体呪いなどはさて置くとしてもかなりの特殊な剣なのは間違い無いでしょう」

「ふむ…材質などは一切伝わっておらん、何しろ七星剣はアスカ七星の神々から下賜された剣故な」

ま―た非科学的な…とは思ふも顔には出さずに

「さて、取り敢えず鞘のような物は見当たらないので何かに包んで後で丁度良いものを探すとして…」

そう言つて七星剣の柄に手を伸ばすクリーク

「いかん！それを持つては!!」

「おじさん！だめ！」

とイザヤとマヤの警告は一步遅くクリークはその手に七星剣を握り締めた。

指まで装甲に覆われたガントレットを装着した状態で。

## 呪い聖剣 ドンクリークさん

「えー何かあるのか!？」

忠告が遅く七星剣の柄を握ったものの二人の警告に慌てて手を離すクリーク

「お主…何とも無いのか?」

「おじさん、からだだいじょうぶ?」

と言うイザヤとマヤに何かあるのかこれ…と思いつつ

「聞くが握ったらヤバイとかその系統か?」

とそう尋ねれば

「この七星剣は呪われておる、これを手にした者は破壊と殺戮を繰り返すと伝わっておるが…」

「手にした者は、ねえ…」

そう言つてガントレットで包まれた指をガシヤガシヤと鳴らすクリーク

よし、と気合を入れてもう一度七星剣の柄を握るもやはり特に異常は無い。

自分が特別だとは考え難いためその呪いとやらが発動しないと言う事は何かあるのだろう、そう考えて右手のガントレットをおもむろに外すとその下から現れたのは黒い革手袋に包まれた手。

何をするのかとイザヤとマヤが固唾を飲んで見守る中クリークはその状態で七星剣の柄を掴む。

が、これも特に異常は無い

ならば、と今度は黒い革手袋を外し完全に素手になると指先で慎重に柄に触れる。

すると

「…っ!!」

弾かれたように直ぐに指先を離す。

「…肌と接触した場合に何らかの手段で思念を送ってくるようだな」

「お主、問題ないのか?」

「俺が判断したところ素手でなければ問題無いようだ、最初ガント

レットを通して掴んだ時とその次革手袋をはめていた時は先程のよ  
うなイメージは浮かばなかった。

が、素手で触れた時こちらに斬れ、壊せ、などの負のイメージが流  
れ込んできた。」

「やはり呪われていたのか…じゃが直接触れなければ触れるというの  
は大きな発見じゃ」

「…少し試したい事があるので村長殿、マヤちゃん、少し離れて頂き  
たい」

そう言つてクリークはイザヤとマヤが直ぐに逃げられるよう出口  
付近に促しまずはカメラ機能を持つ電伝虫にて何方向からか七星剣  
の写真を撮影。

そしておもむろにガントレット、革手袋を外した状態の素手で七星  
剣の柄を握る

途端に脳裏に流れ込んでくるのは

”不安、焦燥、緊張、恐怖、殺意、嫉妬、殺意、恨み、怨み、苦  
しみ、悲しみ、絶望、憎悪”

と、そう言つた数々の負の感情。

だがクリークは瞬時にその影響を払うために

「そおい!!」

七星剣を分厚い石棺に叩きつけた。

「お主!!七星剣に何ということ!!」

それを見てイザヤが思わず声を上げるが

「ほんとうにおれてない…」

マヤのその言葉により七星剣を注視する。

クリークの常人の十数倍の膂力で力任せに叩きつけられた剣、普通  
なら簡単に折れていただろうが、流石に破壊不能と伝えられているだ  
けありなんと七星剣にダメージは見られなかったのだ。

「ちつ、マジで頑丈だなあっ!だがこれでどうだっ!!」

が、脳裏に流れ込んでくるイメージは少し弱まった為、長い修練の  
果てにようやく身を結んだ技能で七星剣に対して武装色の覇気を流  
す

「古今東西、こういう持ち主を侵食する系の武器は剣を屈服させるって相場は決まってるよなあっ!!」

変化は徐々に現れた。

クリークが持つ七星剣は純白の柄から黄金の鍔、そして紋様が入った刀身へとクリークの手から徐々に黒金色に染まり始めたのだ。

七星剣はそれを嫌がるように自身で息を持っているかの如く刀身を震えさせるも

「大人しくしてろっ！剣は人が使ってこそだ!!剣に使われるなんぞ真っ平御免だからな！」

クリークはそう言っつて剣先を地面に向けて打ち込み更に右手は柄に、左手は柄頭に乗せ七星剣を押さえつける。

そうしてどれくらい時間が経っただろうか。

いつの間にか七星剣の震えは止まり豪奢なその色は完全な黒金色に染まっていた。

クリークはそのまま地面から七星剣を引き抜くと何度か振るう。

が、先ほどと違い負のイメージが全く流れ込んでこず一先ず成功か、と安堵するのであった。

## 七星魔剣 ドンクリークさん

「なんと面妖な…七星剣が黒く染まりおったじゃと…？」

「おじさん、なにやったの？」

武装色の覇気にて黒く染まった七星剣を見てそう言うイザヤとマヤ。

タネは簡単である、武装色の覇気による装備への武装硬化。

これを七星剣に施して魔剣である七星剣を塗り潰したのである。

もともとクリークは装備に対する武装硬化が苦手であったが三大将であるサカズキ、クザン、ボルサリーノなどを相手に模擬戦をした時にロギア系の能力者相手には戦闘スタイルの関係もあり装備への武装硬化は必須だと考えていた。

ロギア系は海軍が独占しているというわけでもないし。

故にコツコツと練習をしていたのだが先日、ようやくそれが身を結び”近接武装であれば”武装硬化を施す事が出来る様になったのだ。

最も効果が大きい遠距離武装への武装色の付与は全く出来ないが。

近接武装の武装硬化であればイメージ的には身体への武装硬化の延長線上で手にした武装に覇気という考え方だが、銃弾や矢への付与はどうにもイメージが掴みにくくその為とっかかりが掴めずにいるからである。

「ああ、これは意志の力で妖刀を塗り潰したんだ、まあ一時的なものだな」

そう言つてクリークが七星剣を地面に突き刺したまま手を離せば黒く染まっていた七星剣は黒く染まっていた禍々しい姿から元の姿を取り戻した

「なんと…この年になつても知らぬ事は色々あるのう…」

「いちじてきにおじさんのいろにぬりつぶしたつてこと？」

「まあその考え方で間違つてはいないな、ところで村長殿どうでしょうか？この七星剣を海軍で預かるというのは？」

「まあ…確かに宝玉による祭事以外に対処方法があるのは分かったが…」

「素手で触らなければ普通の剣と変わりありませんし先程私がやった方法もあります。」

それに海軍の科学班、技術班は優秀ですからこの七星剣の詳細なんかもわかるでしょう」

「流石にこれはワシの一存では決めかねるの、一度村に戻り皆で話し合うべきじゃろう」

「おばあちゃん…」

「わかりました、ではこの七星剣は一度村に持ち帰りましょう」

そう言つて再び革手袋とガントレットを装着して荷物の中から大きめの布を取り出すと刃が剥き出しの七星剣をそつと置き包み込む。

その上で革紐を取り出すと布で包まれた上からグルグルに巻くと腰に挿した

「うむ、とりあえず一旦村に戻るべきじゃ。」

いくらお主が平気とは言え異常がないか一度薬師にでも見てもらうべきじゃろう」

そうして一行は村に戻りクリークは異常が無いか診てもらおう傍ら、イザヤは人を集めて七星剣についての話し合いを行い、そしてその話し合いの結果クリークが七星剣に対処出来る事をもう一度全員の前で実演してみせる事によって晴れて七星剣は海軍が預かる事となったのだった。

そしてこの村の祭事については念の為という事で続ける事としそれについては海軍側から”集会条例”を免除の上で許可、それにより当初の目的である”海軍道場”の運営にあたる島民の説得も無事に完了したのであった。

「では村長殿、マヤちゃん、そして村の皆さん。」

この七星剣は海軍が責任持つて預かりますので皆様は念の為に引き続き今までと同じように祭事を執り行つて下さい」

「礼を言う、確かに考えてみればこの島に置いたままであれば悪しき者の手に渡らんとも限らぬしもう」

そう言つて深々と頭を下げるイザヤ

「ありがとうかいへーさん、わたしもつぎのみこととしてちゃんとがん



ばるよ！」

と、こちらも頭を下げて言うマヤ

「いえ、こちらは出来る案を提出しただけです。

後日こちらに再び海軍の者が来ると思いますがそちらには話を通しておきます、その後数日すればあちらの山の中に再建した”海軍道場”の運営を開始しますのでしばらくは騒がしくなるかもしれません  
んがご容赦ください」

そう言つてクリークは頭を下げ色々に入った大きなリュックと共に七星剣が入った包みを持ちアスカ村を去るのであった。

## 教育総監　ドンクリークさん

アスカ島を出てベアトリス号は一路マリنفォードへ。

マリنفォード到着後クリークは船の指揮をギンに任せてセンゴク元帥の元へ報告に向かった。

グランドライン前半部の海賊達の動向を伝え捕縛リストを提出、そして頼まれていたクロコダイルの動向とアスカ島の海軍道場の再運営に関して報告する

「うむ任務ご苦労、まあしばらくは急ぎの件も無いから暫くはこつちに居るとよい。

ああ、それからゼファー教育総監にこの書類を持って行きアスカ島の詳細を伝えてくれるように頼む」

「ゼファーのおっさ…ゼファー教育総監が海軍道場へ？」

「ああ、彼は教育に関して第一人者だからな。彼に任せの方が良いだろう

とりあえず何かあれば誰かつかわせる、船で待機するか？」

「いえ、少し個人的用事がありましてシャボンディに向かおうと考えています」

「ならばそちらに誰かつかわせよう、まあゆつくり休め」

「わかりました、ではこちらの書類をゼファー教育総監に届けて技術班に顔を出して、それが終わり次第シャボンディ諸島へ向かいます。

それでは失礼します」

と敬礼をして今度はゼファーの元へ

「ゼファーのおっさん、これセンゴクさんから」

「む？クリークか。どうだ見聞色の修行は順調か？」

「動きながらだとやっぱ精度は落ちるな、武装色なら装備に付与できるようになったぞ？」

「時間がかかりすぎだ、お前のポテンシャルならもっと早く習得できたのではないか？」

「俺は才能豊かなわけじゃねえんだよ、地道に努力するしか方法が無いからな」

と軽口を交わしつつ書類を取り出して眺めるゼファア

「…ふむ、海軍道場がようやく運営準備が整ったか」

「ゼファアのおっさんが赴任するって聞いたが？」

「ああ、この書類にも書いてある。お前も来るか？」

「いやいや、これでも海軍少将だから色々忙しいんだよ。」

「そういやしばらくゆっくり出来るらしいからゼファアのおっさんにまたギンを見て欲しいんだが…」

「そうか、何か用事か？」

「ちよつとシャボンディに用事があつてな」

「わかった、とその前にクリークちよつとそこに立て」

「ん？分かったが…」

「言われた通りクリークはその場に立つと」

「よし、では全力で殴るぞ！」

「そう言つて突如一步下がりを腕を振りかぶるゼファア」

「つてーいきなりか!!」

それを聞いて素早く全身に鉄塊をかけ両腕を交差、更に動けない変わりに鉄塊拳法の更に上の段階の硬度を持つ”真鉄塊”を発動させてゼファアの拳撃に備える。

そしてゼファアの”全力で”という言葉を出しゼファアが振りかぶる腕を見れば振り上げた腕は武装硬化により黒く染まっており慌ててクリークも覇気を用いて両腕を包む。

直後凄まじい爆発音のようなものが響き地面に跡を残しつつクリークはその身を大きく退がらせる。

「…ふつ、修練は怠っていないようだな。」

その言葉と共に腕の武装硬化を解除するゼファア

「…つはあ、死ぬかと思った」

「そう言つて真鉄塊と武装硬化を解除するクリーク」

「噂を聞いているとどうにも武器を多用して戦闘しているという事だったから白兵戦を心配していたな。」

しかし武装硬化のスピードはだいぶ上がったみたいで何より。

次は…よし、物に対する武装硬化を習得したと言っていたな、見て

やるからちよつとやって見せろ」

「普通可愛い教え子をいきなり全力で殴るか!? しかも武装硬化までしやがって!!」

「自分で可愛い教え子をなんて言ったりやあ世話ないな」

「ぐ…全くいきなりすぎるんだよ、成果見てくれるなら見てくれるって言えばいいのに…」

とブツクサ言いつつもゼファーに成果を見てもらうのはいい経験になる為、その言葉に従い背負っていた棍を引き抜き構えれば重さ10tを誇るクリーク愛用の仕込み棍、”白尾棍”が持っている場所からズズズ…と黒く染まっていきしばらくすれば両端が白く他は鈍色だった棍は完全に黒く染まっていた。

「…時間がかかりすぎだ」

そう言つて訓練用の剣を取りに行きそれに素早く武装硬化を施すところちらに見せるゼファー

「いやー習得したばかりなんだけど!!」

「…まあお前は覇気に関しては見聞色より武装色に向いているようだからな、お前もこのくらい出来るようになる。」

「まあ努力はするがよお…」

と曖昧に肯きクリークはしばらくゼファーに戦闘技術等を確認してもらったのであった。

## 熊武装班 ドンクリークさん

「あー、全員集まってくれて感謝する」

「熊殿が帰ってきたと聞いたわよ、その件かしら？」

「ふええ…また何か拾ってきたんでしょか？」

「あの人が色々持ってきますからね、武装もそうっすけど子供や動物拾って来るって噂を聞いたっすか？」

「熊の子供達…ね、副官のギン殿なんかがそうだろう？いつか連れてた熊らしき生物なんかも有名な話じゃないのか？」

「ここは海軍本部、海軍技術班の施設の一角で五人の人物が集まっていた。」

彼等、彼女等は昔から当時まだ尉官だったクリークが身に纏う武装に関わっておりいつの間にか、今では少将にまで昇進したクリークの専属武装班となっていた者達である。

彼等、彼女等はクリークの武装の開発及び製造、そしてその武装の報告を受けレポートを海軍の武装を担当する技術班、及び武装の開発等を行う科学班にフィードバックするのが主な仕事である。

その他にもクリークが拾ってきた（奪ってきた）珍しい武器を研究したり、長い航海から帰ってきたクリークの武装のメンテナンスを行なったりというのが鈍熊専属武装班の日々の作業だった。

「はいはい、話はそれまで。前回ほかのジェルマの武装という事で色々な発見や新技術もあり驚いたが今回はこれだ」

そう言ってリーダー格の男はおもむろに厚手の皮の手袋をはめると、長机の上に一つの長い包みを置く

「あら…随分と綺麗な剣ね？」

「タダの剣を拾って来るとは思わないし、なんか宝剣みたいなものですかあ？」

「しっかし普通の剣と比べて随分長いっすねえ…」

「で、タダの剣じゃないとしてどういう剣だ？手袋をはめた事に関係あるのか？」

と、机に置かれた造りが丁寧な七星剣を見てそれだけでは無いだろ

う、と判断し口々に言う班員達

「ご名答、これはさる島で伝説の宝剣として祀られていたらしい。

因みに曰くつきの剣でなんでもこの剣を手にした物は剣に呪われて無差別に殺戮を繰り返すらしい」

「あら、随分と物騒な物持って帰ってきたわね？」

「ふええ、なんて恐ろしいものを…」

「因みにこうして持って帰って来たって事は何か手があるっすか？」

「さしずめ魔剣とでもいう代物か、妖刀なんかも噂だけならごまんとあるしな。」

「因みに剣の銘は“七星剣”、熊殿の見立てでは肌との接触により負のイメージを持った者に叩き込むらしい。

先立って科学班の方で色々調べてもらったが…その島に伝わる伝承と合わせて詳しく剣を調べた結果だが、少なくとも作られて数百年は経っている。

だが何故か錆びや歪みが無く、数百年以上経過しているにしては異常に劣化が無い。

注目したいのはその材質で科学班の結論は“材質不明”、だが分子構造的にはかの破壊不能の鉾石である海楼石に似ているようだ」

「あら、随分と特殊な剣のようね？」

「しかもだ。この剣にはその島では人の力では破壊不能という逸話があり…何と熊殿が全力で叩きつけたにも関わらず一切の破損が無かったらしい!!」

「ふええ?ふええええ!?壊れなかったんですか?あの人全力で叩きつけて!?!」

「よかった、俺たちの作り続けて来た362の試作剣がようやく報われたんっすね!?!」

頑丈さに特化して来た筈のあの剣達はこれで折れる事はもう無いんっすね!?!」

「何と…、海楼石の武器以外で熊殿の力に耐えられる武器が…しかも剣があるとは…」

クリークの馬鹿力でも壊れない、これは専属武装班にとっては大きい

なニュースであった。

特に語尾が特徴的な軽そうな男はクリークの近接武装を担当しておりクリークの求める頑丈さを追求した剣を研究、作成して来たがどれもこれも戦闘に耐えきれず全て折れて帰って来ていたので頭を抱えていたのだ。

「そして呪いとやらに関してだが…

まあ便宜上”呪い”と呼ぶが、剣が特殊な力場を形成しており肌に触れる事でその力場が活性化、それにより剣の握りには殆ど分からないような凹凸があり刀身にはガラス質の埃に似た物が不思議な規則性を持って並んでいるのが見つかった。

意図的に作られたか、偶然なのかわからないが刀を握り込んだ時に微細な光の反射が全て持ち手側に行く点と触覚から伝わる微細な凹凸の手触り、更にこの剣自体が人間の可聴域を超える微かな音を発しており、人間の視覚、聴覚、触覚の三感から持ち主にイメージが行くように揃っている。」

そう言つて科学班からのレポートを読み上げるリーダー格の男

「狙つてつくられたならオーパーツと言つても過言ではないわね…」

「炎を吐くなんかの伝承もあるがこれに関しては詳細は不明だった」

「炎を吐く…気になるですう」

「とりあえずこれを使うようにするつて事でいいんすか？」

「ジェルマの技術を流用した専用装備もまだ開発中ですし忙しくなりそうだな」

「満を持して送り出したハンマーやガントレットなんかの解体もあるけどな、さあ！仕事だ仕事！」

そう言つてリーダー格の男は手を叩くと話を纏めて先ずは、とクリークの鎧のメンテナンスに移るのであった。

## 黄金果实 ドンクリークさん

「皆様では本日の目玉商品!!摩訶不思議な力を食べた者に与えるというその名も高き悪魔の実です!

何の実かは食べてからのお楽しみ!ですが自身の戦力強化によし!護衛に食べさせてよし!はたまた奴隷に食べさせてみてもよし、まずは最低価格5000万ベリーから!」

「6000だ!!」

「こっちは7500だもんね!!」

「8000だすぞ!!」

ここはシャボンディ諸島オークションハウス。

過去に行われた一斉摘発により殆どの違法奴隷商が拘束、留置場送りになり残ったのは証拠を残さない狡猾な者や犯罪奴隷などを扱うまあまともな奴隷商だけでこのオークションを開いた男もその一人であった。

彼はもともと犯罪奴隷や珍しい物を取り扱いオークションを開催するスタイルでこのシャボンディにおいては珍しく古参ながらも摘発を逃れた店のオーナーだった。

そんな彼は今回オークションの目玉商品として北の海から来た海賊が売りに来た”悪魔の実”これを出品したがどんどん上がる額にほくそ笑んでいた

「いやあ最低価格一億からだと思っただと売れないと思っただと5000万にしたが…」

どんどんと吊り上がる入札額に最低価格はもうちょっと上げていても良かったなと考える

「一億!一億出すぞ!!」

「一億!一億が出ました!他にありませんか!!」

「一億一千万だもんね!!」

「一億一千万!一億一千万以上ございませんか!」

なるほど一億はやはり超えてくるな、一億一千万か、もうちょい上がれば良かったが…やはり何の実か調べるべきだったか?



とそう考えていると一人の男が動いた

「一億五千」

「なんと！一億五千！一億五千が出ました！他にございませんか!?」  
値段を一気に上げたのは緑の髪に白いラインが入った黒いスーツ  
の大柄な男

そんな彼を見てオーナーは

「げ、テゾーロか。最近人魚とかに歌わせて荒稼ぎしてるステラプロ  
ダクションのオーナーじゃねえか…」

と呟き、なるほど彼なら余裕で出せるだろうと考える

一方落札寸前だった男は

「ぐ…一億六千だもんね!!」

と値段を提示するも

「二億」

「…二億一千万だもんね!」

「三億だ」

その言葉に流石に無理だと諦めた、どんな額を提示しても上回って  
くるだろうという判断である。

「三億！三億ベリー！他にいらっしやいませんか!」

ではこちらの悪魔の実が三億ベリーにて落札です！

では落札されたテゾーロ様は後ほど商品のお受け取りに来てくだ  
さい！

皆様本日は当オークションにご来場いただきありがとうございます!  
ました!!」

そうして客は「きつと珍しい悪魔の実なんだろう」、”3億出すく  
らいだし後で何の実が教えてもらおう”などと噂しながら次々に出  
口から出て行き、目玉商品の悪魔の実を落札したテゾーロは三億ベ  
リーと交換で悪魔の実を手に入れたのだった。

悪魔の実を手にしたテゾーロは直ぐに小電伝虫を懐から取り出す  
と

「オークションは終わった、例の実は手に入れたので今からそちらに  
戻る」

『了解、襲撃の可能性もあるから気をつけて帰ってこいよ?』

「わかった、この悪魔の実はどうするんだ?」

『とりあえず探していたゴルゴルの実なのかどうかだな、まず間違いないと思うが…』

「わかった、とりあえず直ぐにそちらに戻る」

そう言いつつ小電伝虫を切ると無言で後ろから近づいて来た男に素早くピストルを構える。

「その男、悪いがその悪魔の実は置いて行ってもらおう」

近づいて来たのは頭に目の穴だけ開けた頭陀袋をかぶる声からして男か。

何故か頬にあたる位置にハンバーグが付いているのが気になるがおそらく物盗りの類だと判断し

「何者だ、おれを誰だか知らないのか?」

そう誰何するも物盗りの男は無言でこちらに殴りかかって来たため素早く対応、相手の正拳を右腕で打ち払いつつ膝蹴りを放つ

「その黒く染まった腕…そうかお前も覇気使いか」

そう判断しこのまま戦えば長引きそうだと判断したテゾーロは素早くピストルの引き金をひく。

甲高い音を立てた銃弾が弾かれると同時に、懐から出した筒をピンを抜いて襲撃者に放り投げると筒は凄まじい量の煙を吐き出した。

そしてそれにより煙幕に紛れてテゾーロは脱出、人通りが多い場所へ向かい一息つくと襟を整え直し悠然と己の事務所に戻るのだった。

## 黄金鈍熊 ドンクリークさん

シャボンディ諸島リゾート街、その港に停泊する一隻の大型客船。その中に二人の男の姿があった。

「うん、間違い無い。これが”ゴルゴルの実”で間違い無いだろう”  
テゾーロがオークションにて手に入れた悪魔の実と悪魔の実の凶鑑を机の上において断定するクリーク

「パラミシア系悪魔の実”ゴルゴルの実”、特性は黄金を操る：ねえ？別に黄金を生み出すわけでも無し何か役に立つのか？」

と、大金を出したにも関わらずあまり使い道が無さそうな悪魔の実に疑問を抱くテゾーロ

「まあな、この悪魔の実は黄金を流体として操るから攻撃にしろ防御にしろ充分役に立つさ。

それに覚醒まで行けば周囲を黄金に変えられるのではないかというのが俺の見立てだ」

「しかし誰に食わせるんだ、クリークが食うのか？」

「いや、俺は食わないぞ？」

「じゃあ誰に：っておいおい、まさか俺に食わせる気か？」

「ああ、この前話した”知識”を元にな」

「まあ納得するかどうかは別として：覚醒ってやつにはかなりかかるんだろ？操るってだけなら大量の黄金が必要だしどうやって手に入るんだ？」

「それにはあてがあるからな、時間が取れる時にちよつと付き合ってもらうぞ？」

「て、おれの資産を黄金に変えろとかいうなよ？今回のオークションに使ったやつ、半額アンタが出してくれたとは言えかなりでかい金額だったんだぞ？」

「まあまあ、ちゃんと手は考えてあるって。

しかしどうだマリア・ナポレのツアーは上手く行きそうか？」

「ああ、彼女の歌は凄まじいな。これなら物珍しさもあって集客数は見込めるだろう。」

とクリークはテゾーロと話し合って新たな試みとして始める予定であるグランドライン前半部を回るツアーを行うという計画を立て、そして船や人員など諸々の準備も整い出発を数日後に控えていた。その過程で歌や踊りをメインとしたショーを各地で開催しようと考えておりその一環として今回超大型ゲストとして深海のリユウグウ王国より深海一のデイーヴァと名高い”マリア・ナポレ”を招待しているのだ。

因みにこのステラプロダクション、オーナーはテゾーロ、そして副オーナーとしてテゾーロの恋人であるステラ。

そして演技や歌の技術指導や教育を行う元・舞台女優”ビクトリア・シンドリー”

そして他は例のマリージョア襲撃の際に匿い、そして行き場が無い者達で構成されている。

助けられた恩なんかもあり彼らの忠誠はかなり高いので安心だ

「まあツアーに関してはそちらに任せる、俺はあくまで裏からの協力者だし海兵が特定の業者と親密だといらぬ疑いをかけられるかもしれないしな

そう言えばシンドリー嬢の元で働きたいと言ってきたあの医者はどうだ？怪しいところは無いか？」

「いや怪しいってんなら見た目が既に怪しいが…調べさせたところ”ドクトル・ホグバツク”で間違い無い。

外科医として天才的な手腕を持ち、数々の奇跡を起こした名医だ。そして医者として得られる地位と名声の全てを手に入れたが突然として姿を消して失踪だの誘拐だの噂になっていたが…」

「…好きな女の為に全部投げ出して来たってか。

しかし優秀な外科医か…ステラプロダクションに加える予定は？」  
「まあ本人の希望ならな、優秀らしいし船医として乗ってもらうのも悪くないかと考えている。

まあ今回のツアー次第か、初の試みだし何かあるかわからんしな、何か人手いるのか？」

「ああ、ファウス島でやってる病人の治療に彼の力を借りれないかと

思ってたな。

まあ話をするのはツアーが終わってからだな、とりあえずこの悪魔の関してもこちらで預かっておく方がいいか？」

「ああ、あんたに任せるよ。おれが持つてるよりもアンタに任せた方が安心だしな」

とテゾーロはそう判断し悪魔の実をクリークに任せるのであった。

そうしてその他諸々を話し合いその日は夕食だとステラが呼びに来るまで続いたのであった。

## 東海状況 ドンクリークさん

現在、クリークの姿は東の海にあった。

海軍の大規模な人事移動計画”四海制覇”、その調整の為に彼女の力を借りようと考えたからだ。

電伝虫で連絡をとろうとしたところ既に海軍を辞めたと聞き、話をする為にわざわざ自ら足を運んだのである。

ここはコノミ諸島ココヤシ村、農業や漁業などの一次産業が盛んな村でクリークは住人達に彼女の居場所を聞くと村の外れに住んでいると教えられた。

「一体彼女に何の用だね？」

とこちらが私服の為か不審そうに聞くこの村の駐在と思しき人間。頭に風車つけてるって事はこの人が”ゲンさん”か、と考えつつ

「失礼、自己紹介が遅れたな、俺は海軍本部少将のクリーク。

今回は元海兵である彼女に頼み事があって休暇を利用して来ただけだ。」

「海軍の…しかも本部の人間とは、失礼最近何かと物騒なものでね」「お気になさらず、貴方は貴方の仕事をすれば良い。それでは」

と頭を下げる駐在に鷹揚に頷くとそのまま教えられた村の外れの家に向かう。

というかやはり海軍コートくらい羽織ってくるべきだったか？顔が確かに悪人ヅラなのは自覚しているが…

そんな事を考えていると小さな家が見えてきたが何よりも隣接する果樹園の方が自己主張していた。

「こりや見事な果樹園だな…」

そう思い近づいていくと太陽の光を受け橙色に照り返すみかんを手取る。

が

「ベルメールさーん!!!みかんどろぼー!!!」

そんなまだ幼い子供の声と

「くおらあああああつ!!何処の誰か知らないけどそこに直れ

「やあああああつ!!」

と家の方から女性の怒鳴る声と走って来る音が。

いつだったかプレゼントした金色に輝く銃を左手に持って走ってきた特徴的な髪型の女性を見て

「元気でやってるようだな、ベルメール本部大尉」

と声をかければ

「クリーク!?何でアンタがこんなところに…」

「少しお願いしたい事があってな…その子達はベルメール大尉の子供か?」

おそらくみかん泥棒呼ばわりした子供だろう、ベルメールの後ろには薄青色の髪とオレンジ色の髪の二人の少女がこちらを伺っていた。

特徴的な髪色、あれがきつとナミとノジコだろうけどちっちゃいな…:とそんな感想を抱きつつ

「あー、血は繋がってないけど何より大事な私の子供よ。」

「どうか私はもう海軍を辞めた人間よ?既に階級は無いわ」

やはりか、と思う。

とりあえず話をするにしろあまり公に聞かれてもいいわけでは無いので

「その件も含めて少し話があつてきた、そこのお嬢ちゃん達おじさんがお小遣いをあげるから少し村まで遊びに行つて来るといい」

そう言つて二人に500ベリーづつ渡すと

「えー!いいの!?!」

「ありがとう!かおはこわいけどいいひとね!!」

と目を輝かせ、ベルメールに許可をもらい颯爽と駆け出していった。

「…やはり俺は顔怖いか?」

「…言いくいけど海兵には見えないわね、私服だと余計にね」

と微妙な空気になるもカブリを振つて本題に入る

「今回わざわざ訪ねてきた用件だが…」

「待つて、流石にお茶くらい出すから上がつてよ」

そう言つて家の方に戻るベルメールに着いて行く。

そうしてお茶を頂き一息つくつと

「で、用事つてのは何かしら？」

とベルメールが本題に戻ったので用件を伝える。

「なるほどねえ、えーとその”四海制覇”だっけ？その概要はわかかったわ。」

「理解してくれてなにより、その一環で東方方面、ようするにこの東の海も支部の統廃合を行なっている話だがそれによりココヤシ村に小規模ながらも海軍支部：派出所とでも言うべきかそれを置こうと考えていてな。」

「ふーん？で、何でその話を私に？」

「ベルメール元・大尉にはその代表となってもらいたい、部下として一人か二人の海兵がつくと思うが……」

「うーん、そうは言ってもアタシはみかん畑の手入れもあるし、ナミヤノジコの世話もあるからねえ……」

「……一つ老婆心でお節介を焼くがベルメール元・大尉、ちゃんと食事を摂っているか？」

「う……」

「……やはり凶星か、流石にみかん農家の仕事だけで本人と娘二人を満足に養うのは難しかろうと考えていたが。」

ちなみに新しく作る派出所には週に2、3回顔を出してくれればいい。

主な仕事としては海に出るのは支部の仕事だ、派出所に行ってもらうのは沿岸の警備だから長期間家を離れる何て事はない。

もちろん給料はこちらから出すし諸々保険もつけるがどうだ？」

と、クリークは計画の主導者であるのをいい事に立てた計画をベルメールに頼み込むのであった。



## 東方方面 ドンクリークさん

ベルメールは少し考えさせて欲しいとの事だったので一週間後に返事を聞きに来るといふ事を伝えてベアトリス号へ戻り、船はそのままローグタウンへ向かう。

何故ローグタウンかというとかつて無人島にて遭難していたところを助けたポール親子…パールの父親のポールから数ヶ月前に本部に連絡があつたからだ。

と、その前にローグタウンには“四海制覇”の一環で東方方面臨時司令部があるのでそちらに挨拶がてら顔を出しに行く。

「へ？メイナード少将は不在だと？」

「はい、つい先日船で出て行かれましたが…」

「因みにどこに行つたか知ってるか？」

「はい、優秀な能力者がドイナーカ島にいと聞いて少将自らスカウトしに行つたときいています…」

「優秀な能力者？どんな能力者だ？」

「いえ、そこまでは…」

と困つたように言う受付にまあいいか、と考え直す。

メイナード少将は今回の人事異動によつて新しく少将になつた為何らかの成果を出そうと頑張つているのだろう。

だつたらこつちの仕事は各方面軍のフォローであることだしそう深く追求する事では無いだろうと考え邪魔したな、と受付に伝え連絡があつたポールの元へ向かう。

まあ何か困つた事があれば、と連絡先は渡していたので不思議では無いがその内容が

『息子が悪魔の身の能力者であるのを鼻にかけ我が物顔で街で乱暴狼藉を働いているのでそちらで預かつて貰えないだろうか？』

という話だつた。

ローグタウンに到着したクリークとギンは直ぐにポールの元へ向かう

「いやお久しぶりですクリークさん、いつかは私とポールを助けてい

ただき本当にありがとうございました」

出迎えるや否や頭を下げるポール氏、そんなポールに

「いえいえ、市民の救助は海兵の義務ですからお気になさらず。

それよりも連絡にあった件を詳しく聞いてもよろしいですか？」

そう言っている話の聞きかたの頃からか何の攻撃も受け付けない自身に対して増長していったとのことだ。

不良少年を率いて商店を荒らしたり市民に対して恐喝を行っている。

幸いにも喧嘩騒ぎ程度で済んでおり暴力沙汰にはなっていない、まあ本人の能力故にであろうが。

ポールが苦言を呈しても全く聞き入れようとせず家にも数日帰らないのはザラだという話だ。

現在弱冠一歳であるがその能力のせいで大人でも手がつけられなくなっており今回クリークに相談をしたというのが事の次第であった。

「なるほどわかりました、息子さんはこちらで預かりましょう。

しかし海軍に入るのであれば二度とは会えない…とまでは言いませんがほとんど会えなくなりますか？」

そう尋ねるとポールは目を閉じて悲しそうに

「はい、ポールがあの島で悪魔の実の能力者になった時にいつか私の元を離れる時は来ると思っていました。

私は考えたんですよクリークさん、あの子は力を持て余しているんです。

あの子にとってはこの島は狭すぎたんですよ、だからこそ命の恩人であり信頼できる貴方に預けて世界に飛び立って欲しいんですよ」

まあ、こんな若く旅立たせる事になるとは思いませんでしたけどね…

と額に手を当てるポール。

その言葉にふむ、と頷きつつクリークはポールがいると思わしき場所を何箇所か聞いて街中へ向かうのであった。

## 東の真珠 ドンクリークさん

「あれか…」

「みたいですね」

「しかし何というわかりやすいグレかた…」

建物の影から伺うクリークとギンの視線の先には一人の少年の姿があった。

年の頃は10代前半、上半身は肩にかけた白いマントに下は簡素な皮のズボン。

特徴的なのはその髪型、俗にリーゼントと呼ばれる事も多いポンパドールヘア―

その髪を揺らしながら

「おい…さっさとお菓子持ってこい！」

などと十代後半の少年たちを周りに従え横柄に指示を出していた

「ボス、どうします?」

「仲間にする予定だしな…俺が出ていっても大人と子供だしギン、お前が行ってこい。」

増長しているようならその抛り所となっている力を一度叩きのめす必要があるだろうからな」

「了解」

とギンは短く答えると特徴的な髪型の少年、カチカチの実の能力者であるパール元へ向かうのだった。

少年は退屈していた。

小さい頃に食べた悪魔の実、おぼろげな記憶から食べる必要があったというのは理解している。

だがここに越してきて以降自身が悪魔の実の能力者と知ると化け物でも見るかのように見る周囲。

面と向かって言ってくる者がいないだけで裏でヒソヒソと言う辺りが実に気に入らない。

父親は気にするなと言ってくれていたが周囲の環境から少年は次第に鬱屈していきそしてある時街を襲いに來た海賊達を叩きのめした事でとうとう少年はグレた。

そりやもうわかりやすくグレた。

周囲はまだ十に満たない子供が一人で海賊を倒したと聞いて更に化け物を見る目で見えるようになったのだ。

そして少年は若く力の有り余る町の不良を自身の力で屈服させ自身に従わせるとそれらを率いて一気にこのローグタウンで名前を上げていったのだ。

いつか、自身と配下に従えた不良少年達と海に出るために。

そんな彼の前に一人の黒髪の少年が現れた。

「お前がパール・・・でいいのか？」

そう尋ねてきた少年は黒い短髪に灰色の動きやすそうな上下。

両腕には銀のガントレット、両脚には銀の膝までのレギンス。

只者では無いだろうと判断したパールは血気にはやる部下達を手で制して

「あん？おれがパールだが何だてめえは」

立ち上がって睨みを利かせる、まだ年は11歳故に身長が低いのでイマイチ迫力には欠けているが

「なに、かなり強いと聞いてな少しその腕試しさせてもらう」

そう言って武器を持たずに構える黒髪の少年

「どこのどいつか知らねえが…舐めたクチきいてんじやねえよ!!」

そう言って自身の能力を用いて鋼鉄の硬さとなった腕で殴りかかるも

「なるほど、これが例の能力ってやつか…」

鋼鉄同士がぶつかるような音を立ててその身を持って拳を受け止める黒髪の少年。

「な！パールさんのパンチが止められたぞ！」

「馬鹿な！あのパンチは鋼鉄の硬さを持ってるんだぞ！あの黒髪もなんかの能力者に違いねえ!!」

「全員囲め！相手は一人だ、全員で袋叩きにすりやあどうとでもなる

!!

「そう言いつつそれぞれ武器を手に黒髪の少年を取り囲む不良達であつたが」

「やめろてめえら!!サシの戦いに水きしてんじゃねえ!!」

「パールの一括で大人しく端の方による。」

「態々自分達がボスの機嫌を損ねる必要は無いと考えたのだろう。」

「悪いいな、子分共が騒がしくてよ」

「問題ない、次はこちらからいくぞ?」

と、黒髪の少年が高い軌道を描き踵を打ち下ろし相手の肩に打ち付けるも再び金属同士をぶつけるかのような音が響き

「はっ!効かねえなあっ!!俺の体は鋼鉄だ!鉄壁!故に無敵ってなあっ!!」

「そう言いつつ自身への攻撃を意にも介さないで肩を前方へ向け体当たりを繰り出すパールであつたが少年はそれを両手で押し留め素早く距離をとる」

「へっ、おれの攻撃を食らっても起き上がるとはやるじゃねえか…」

「いや、倒れてもいないが…」

「ごちやごちやうるせえ!!だったらこれでもくらええっ!!」

と腕を交差させてそのまま勢いよく右腕を耳障りな音を立てて左腕に擦り付ければ右腕が真っ赤に赤熱していく。

これは自身の能力を思考錯誤してる時に思いついた技で鋼鉄の力を持つ自身の腕同士を摩擦で高熱化させる技である。

最も片腕しか出来ないが。

「へえ、赤熱化も使えるのか、ボスの言う通りこれは先が楽しみだな」

「その涼しい顔をボコボコにしてやるよ!ヒート・ナックル!!」

と赤熱化させた右腕で殴りかかれれば

「が、まだ力不足、壁を知っておくといいい」

「そうボソリと言った少年の腕で自身の技を左腕で払い退けられると同時に腹部に強い衝撃を受け」

「かつ…なに…が…」

「パールの意識は暗転したのであつた。」

## 真珠同行 ドンクリークさん

鋼鉄の硬度を得る事が出来るカチカチの実。

確かに一般人であれば脅威であろう、何しろどんな攻撃でもその硬さに阻まれてしまうのだから。

だがそれに対しての対処法が無いわけでもない。

鋼鉄を打ち砕く威力で攻撃するか、もしくは攻撃に覇気を纏わせるか。

他にも海棲石を使うという方法なんかもあるが今回ギンがやったのは、相手の赤熱化した拳を左腕で払いつつ、膝頭に武装色の覇気を纏わせて相手の腹部に膝蹴りを叩き込んだだけの話である。

そして崩れ落ちるパールの姿に

「パールさんがやられた!!」

「無理だ! かないっこねえよ!」

そう言つて騒めく周囲

「:何だ、ボスがやられたつてのにかかってくる気概も無いのか?」

とギンは煽るも

「う、うるせえ! 元々下についてりゃいい思いが出来るって思つてたからついでただけだ! てめえらみたいな化け物に敵うわけねえだろうが!!」

と言ひ捨てて逃げる不良少年達にやはりそんなもんか、と嘆息しつつ気絶したパールを背負いクリークの元へ戻る。

「ボス、終わりました。」

「とりあえず船に運んで寝かせといてやれ、気絶してるだけなら直に目を覚ますだろう」

とクリークとギン、そして背負われたパールは港に停泊しているベアトリス号の元へ向かいパールを医務室に預けると自室に戻る。

暫くすればコンコンとドアをノックする音とパールが目を覚ましたという報告。

直ぐに書き物を中断してギンと共に医務室に向かえばそこには状況が掴めないのかキョロキョロと周囲を見渡すパールの姿。

「目が覚めたようだな」

とそう声をかければ

「何だてめえ!!何処だよここ!!」

と乱暴に言い返すパール

「てめえとは随分な言い様だな、しっかし昔と違って随分と口が悪くなつたもんだ…」

「昔だあ?…どつかで会つたか?」

「そうだな、お前が3歳の時にな」

「3歳の時…」

そう言つて頭を抑えるパール

「そうだな、7、8年くらい前になるか?」

「…思い出した!アンタおれと親父を助けてくれたあの時の海兵か!!  
という事はそつちのおれをぶつ飛ばした黒髪はギンのあんちゃんか!」

よく覚えていたな、と感心しつつ

「そうだな、密林で遭難していたのを助けた時だな、こつちはお前が最後に泣いて別れを惜しんだギンだ。俺の副官をやっている」

と、その言葉に軽く首肯するギン

「…あん時の事は感謝してる、で今回おれをこんなところに連れて来たのは何の用だつてんだ?」

「…お前の親父さんから頼まれた、お前を預かってくれとな」

そうクリークが伝えるとパールは

「…あんだけ言つときながら親父も結局おれを捨てるつてののかよ」

と奥歯をギシリ、と鳴らすパールにクリークは手紙を差し出す

「短絡的だな、詳しくは親父さんから手紙を預かっているから読め…  
おっと、破るなよ?」

受け取るや否や破り捨てようとしたパールにそう声をかければ  
パールは渋々封を開けて中身を読む。

詳しくは聞いていないがポールは自身のパールに対する思いを手紙に綴つたと言つていた。

そして手紙をたつぷり時間をかけて読んだパールは

「ぐっ…親父い…ごめん、おれが馬鹿だった。

言う事も全部うるせえって切って捨ててきたのに親父は俺の事考えて…っ、くそ！」

瞳を涙で濡らしつつ唇を噛みしめた後にそんな言葉を漏らした、手紙に綴ったポールの思いが伝わったのだろう

「色々と言って悪かった、虫の良いお願いだとわかってるがおれを連れて行ってくれ！」

そう言って床に膝をつけ懇願するパールに

「落ち着け、顔を上げろ。親父さんに別れは言わなくていいのか？」

と立ち上がらせつつ聞けば

「…今度親父の前に姿を見せる時は今より立派になってからだ」

と、何かを決意した目でいうパールに

「そうか、改めて名乗ろう。海軍独立遊撃隊隊長のクリークだ。階級は少将だ、よろしく頼む」

手を差し出すクリーク

「おれはパールだ！よろしく頼むぜクリークのおっさん！ギンのあんちゃん!!」

その手を握り返すパール

とりあえずまずは言葉遣いを直させようかと考えるクリークであつた。



## 魚人動向　ドンクリークさん

その連絡があったのはパールを船に乗せてコノミ諸島へベルメールの返事を確認しに行った帰りの事であった。

赤い海軍旗を掲げたベアトリス号は一路ゴア王国を目指しておりクリークは自身の私室にて航海日誌をしたためているとほとんど鳴る事の無い電伝虫が鳴り出したのだ。

これはクリークが個人で所有している電伝虫で大枚はたいて購入した盗聴防止の白電伝虫まで接続しているものだ。

因みにこの通信先を知っているのは幼い頃から交流のあるロビン、クリークの協力者でもあるテゾーロ、それからサカズキ、クザン、ボルサリーノの海軍三大将とファウス島にいるDr. インディゴの六人だけである。

よっぽどの事が無い限りは鳴らない電伝虫であり前回鳴ったのは数年前に接続テストをして以来だった。

連絡先を知ってる者に何事かあったのかもしれない、と慌てて受話器をとる

『…ゴールドだ』

と受話器から聞こえた声に

「何だテゾーロか、どうした？」

と安堵しつつ答える、ロビンがピンチにでも陥ったのかとかファウス島に何かあったのかと悪い想像をしていたので尚更であった

『少し…いや、かなり厄介なモンを拾ってしまったな…』

「厄介なもの?…グラン・クラウン号に何かあったのか?」

と今頃グラントラインの海遊ツアーで遠くの海にいるテゾーロに確認すれば

『いや、ツアーは今のところ順調だ。ゲストのマリア・ナポレにも関係している事なんだがこの電話は大丈夫か?』

「うん?盗聴なら問題ないが…マリア・ナポレ関係?まさか彼女に何かあったのか!」

『いや、本人がどうこうと言うわけじゃないんだが…』

「びつくりさせるな、彼女はリュウグウ王国からのゲストだからな、彼女に何かあつたら今後に響くからな…」

と安堵するクリークだったが次のテゾーロの報告に思わず固まっていた

『簡潔に言うぞ、フィッシュャー・タイガーを保護した』

「…はあっ!？」

テゾーロの報告は奴隷解放の英雄であり彼のマリージョア襲撃で世界政府からも追われているタイヨウの海賊団のボス、”フィッシュャー・タイガー”を保護したというものであった。

これには流石のクリークも混乱する。

原作では彼は奴隷であった少女を生まれ故郷に送り届け、その故郷の者が通報した事により海軍の攻撃を受け負傷、そして輸血さえすれば助かるのにそれを拒んで命を落とした、という流れを辿っていた筈だ。

どう考えても何でそうなったかわからない、と思いつつ質問する

「…とりあえず聞きたい事は色々とあるが何があつたか順を追って話してくれ、なぜそういう経緯になった？」

『わかった、まずは客船グラン・クラウン号は補給のためにフルシャウト島の近くで停泊していた。』

「ああ、島の近くでツアーの船が停泊していた、と。」

島の名前にどこか引掛かりを覚えるも思い出せないので考えから外す

『んで次に知つての通りグラン・クラウン号には人魚でも寛げるように船底に海と繋がったプライベートプールがあるだろ?』

「ああ、魚人ならまだしもマリア・ナポレのような人魚となると船内にいてもらうのは無理だからな」

『でだ、そこに大挙して魚人が押し寄せて来た』

「…マリア・ナポレに怪我等は?」

何でだよ!!と叫びそうになるのをグツと抑えて大事なゲストの安否を気遣えば

『ああ、その場にいたが問題なかった。んで、魚人たちの集団は一人の

大きな怪我を負った大男を抱えていた』

「その男がフィッツシャー・タイガーだったと?」

『ああ、その通りだ』

「となるともう長くは無いだろう、丁重に扱ってリュウグウ王国に還してやるのがいいだろう」

『いや、一命はとりとめているが…?』

「は?」

思わずクリークの頭の中が疑問符で埋まる、確か原作では彼は輸血するしか助かる見込みは無く、人間の血を己の体内に入れるのは出来ないという事でそれを拒んで命を落とした筈だ

『いやだから一命はとりとめているが…』

「えー…と、そこまで大きな怪我では無かったとかいう事か?」

『いや、輸血をしなければ助からないほどの重傷だった』

「じゃ何で助かった…ってまさか!!」

『クリーク、あなたの考える事は恐らく合ってる、たまたまその場に居合わせたリュウグウ王国からのゲストであるマリア・ナポレが自身の血を使えと言ってきた』

確かにツアーの発案も、船の設計も目玉として深海一と名高い歌姫を呼び寄せたのもクリークの案だったが、まさかそれが巡り巡ってここでそんな事になるとは…と頭を抱えるクリークであった。

## 魚人隠匿 ドンクリークさん

全く考慮してなかった報告に頭を抱えそうになるもクリークは直ぐに頭を回転させて、フィツシャー・タイガーが生存している事でおこるメリットとデメリットを考え頭の中に並べたてる。

原作で彼が関わってるのは魚人関係のイベントの大半である。

それにより彼が生存していた場合原作知識があてにならない可能性が出てくる、というかもつと悪い方向にいく可能性もある。

まず東の海にて麦わらのルフィと激闘を繰り広げたノコギリザメの魚人であるアーロン。

確か彼は自身の英雄であるフィツシャー・タイガーが海軍に騙し討ちされた事により直ぐ様その海軍を襲撃、そしてその時は中将だった黄猿ことボルサリーノによつて捕縛されていた。

そして王下七武海の一角であるジンベエザメの魚人であるジンベエ。

たしかフィツシャー・タイガーの死後に彼の後釜につきタイヨウの海賊団を率いる事になりそして王下七武海へ加入。

そしてその後王下七武海への加入の恩赦として捕縛されていたアーロンが釈放、その後アーロンはタイヨウの海賊団を離脱し東の海へと流れコノミ諸島にて圧政を。

そしてそれによりベルメールが殺害され、麦わらの一味の航海士を務める事になるナミはその類稀なる能力にてアーロンの下につきかれ、そして麦わらのルフィがアーロンを倒した事で一味に加入していた。

そしてフィツシャー・タイガーの死は魚人島にも深い爪痕を残しているが彼の生存のメリットとしてあげられる点はそう多くは無い。

たしかにその戦力は高く魚人たちからも奴隷解放というその偉業により一目置かれているし、アーロンの東の海行きが無ければコノミ諸島、ひいてはココヤシ村の悲劇も起こらないであろう。

しかし彼が生存していればジンベエが王下七武海になる事もなく、ナミが麦わら一味に入る事も無くなる可能性はかなり高い。

それに何より行った偉業により世界政府に目をつけられている。となればこのまま生きていくよりも死んでもらった方が得策であろう、幸い手はある

『クリーク、大丈夫か?』

と電伝虫から聞こえてきたその声で現実を引き戻される。

「よし、考えは纏まった。」

まずフィツシャー・タイガーの状態は?それから彼の生存、この情報はどこまで広がっている?」

『ああ、今のところ容態は安定している、もつとも意識は戻ってないが。』

生存について知っているのはおれとマリア・ナポレ、それからここにいる魚人達だけだ、流石に事が事だけにアンタの指示を聞いてからの方がいいだろうと思つてな』

「よし、それからそこにアールンという男はいるか?」

『ちよつと待つてくれ…ああ、今にもフィツシャー・タイガーを攻撃してきた海軍に殴り込みをかけるいきそうだが…』

「とりあえずそのまま止めておいてくれ、それからそこにジンベエという男はいるか?いたら少し変わつてくれ。」

とりあえず話を通じそうなジンベエに頼み事をしておこう。

『…ジンベエはわしじや、お前さんは誰だ?』

「いまは知らない方がまだいいだろう、とりあえず”ベア”とでも呼んでくれ」

『ベア…偽名じやな?』

「とりあえずアンタに頼みがある、フィツシャー・タイガーについてだ」

『…お頭をどうこうするつてんならそんな時やあ』

「落ち着け、別に彼をどうこうするつもりは無い。」

彼は生存するよりも今後の事を考えて死んだ事にしないか?」

と、先程纏めた考えの下でジンベエに提案する

『死んだ事に?…じやがそれで一体どうなるという』

「まあメリット・デメリットはあるだろうが…」

と纏めた考えについて現状で話せる事だけ話せば

『成る程のう…確かにお頭が生きているとなればまた海軍は襲撃してくるじやろう。』

そうなると今回の事件で死んだ事にしてしまえばいいというのは理解はできるがのう…』

「頼む。かの英雄、フィッツシャータイガーに危害を加えるつもりは無いし彼の保護についてはこちらでしっかり行う、信じられないのは仕方ないかもしれないが此方を信用してくれないだろうか？」

『…わかった、お前さんの言葉に嘘は感じん。とりあえず他のもんにも提案してみよう』

と、とりあえず他のメンバーに話は通してくれるようなので安堵しつつしばらく待っている

『話は纏まった、一人なかなか納得せんかったもんもお頭が生存は秘密にして死んだ事にする、ちちゅうんは確約させたわい』

「すまん感謝する、今は遠方だが近々直接顔を合わせる事になると思うので礼はその時に、すまないがテゾーロに変わってくれ」

とタイヨウの海賊団との交渉を纏めてテゾーロに今後の指示を出す

とりあえずこれで急場はしのげた、後は早急にグランドラインに戻る必要があるだろう。

幸いパールの件とベルメールの件に関しては済んでいる。

心残り是他の東の海出身の麦わらの一味のところに顔を出せなかった事だが…

まさかシャンクスがとつくに隻腕になってたりしないよね？

## 原作改変 ドンクリークさん

とりあえず原作の始まり、シャンクスとルフィの友情くらいは確認しておこうと考えてベアトリス号はゴア王国にあるフーシャ村へ。

夜遅くに島の影に船を隠して単身上陸するも赤髪の船であるレツドフォース号は残念ながら確認出来ず。

旅立った後かと考えるも数日様子を見てみるか、と船に連絡を取り潜伏する。

潜伏している間にゴムになるという自身の能力を見せびらかす少年が確認できたのでゴムゴムの実を食べた後であり、なおかつあれだけ大事にしている麦わら帽子をかぶってない事からまだあのシャンクスが麦わら帽子を託す超名シーンの前だと推察できる。

ふう、と嘆息し思わず拳をグツと握りしめてしまった。

シャンクスはまだあの海の主とかいうのに腕を食われてはいない、あの戦力をみすみすあんな海王類如きに下げさせるのも損失だし、そうなればシャンクスの腕を何とかする方向で行くべきだろう。

彼は別に今の時点だとまだ原作のように”四皇”とは呼ばれていない。

しかしグラウンドラインに蔓延る海賊達の中でもかなりの勢力から一目置かれているのは事実だ。

そしてそれが抑止力になっている以上このまま座してシャンクスが腕を食われるのをみすみす見逃す事は無いだろう。

となるとクリアすべき条件は

- 一つ、山賊の排除
- 二つ、赤髪にルフィを守らせる
- 三つ、ルフィに海の過酷さ、己の非力さ、そしてシャンクスの偉大さなどを知ってもらう

：箇条書きにしたが難しいなこれ、特にその三

ともあれ幼体ルフィの姿は確認出来たので一度船に戻り、これらの対策を練るべきであろう。

赤髪が現れる可能性が高い、というのを前面に押し出し数日の滞在

を周知、その間にうまい方法を考える。

そして数日が経ちとうとう待ち望んだ報告が入った、レッドフォース号のフーシャ村への帰還だ。

カフウとのリンクで既にルフィが山賊のボスに捕まっているのは把握している。

本当は最初から排除しておけば問題無かっただろうが上手くルフィを海に連れ出してもらいたかったのでスルーしておいたが今のところ原作通りに事は運んでいる。

そして山賊の棟梁が海に出て暫くした辺りで島の影から姿を表し、それと共に拡声器にて声をかける

「この山賊、今すぐ停船しろ。さもなければ沈めるぞ」

「なっ！赤い海軍旗だど!?…ちっ、おい海軍！こっちにや人質がいるんだぞ！それ以上近づいてんじゃねえ!!」

やはり交渉は無駄かと思いつつボートを出すように指示し一人で近づいていく

「おい！近づくなっついていってんだろ!!このガキがどうなってもいいのか!!」

と激昂する男を尻目に

「よし、撃て」

『は？しかし人質がまだ…』

「構わん、あの子供は能力者だ、海に落ちた場合はこちらでフォローする」

『はっ！了解です』

その言葉と共にベアトリス号の砲門が一齐に小舟へと向き凄まじい音を立てつつ砲撃を始めた。

そんな騒音を立てたからか近海の主と呼ばれていた海王類が海から顔を覗かせるも

「飛拳砲（とびけんぱう）っ!!」

と出番は作ってないので退場してもらおう

そしてきっかり1分で砲撃は止み小舟のあった場所には木っ端微



塵の木屑がプカプカと浮いているだけで他は必死に手足をバタつかせ溺れまいとする少年の姿。

あの山賊の棟梁は見当たらないのでくたばったな、と判断しつつ小舟を漕いでルフィの襟首を掴むと勢いよく引き上げる。

「大丈夫か少年」

「ゲホツゴホツ！ハー、ハー…おっちゃんありがとう…」

まだ幼いルフィは素直に助けられた事に礼を言ってくるも海の過酷さはさっきの砲撃連打で良しとして、己の非力さとシャンクスの偉大さを知ってもらう必要があるからな…

まだ小さい子供をいじめるのは心が痛むが仕方ないと思いつつ

「さて少年、君はあの砲撃を受けても生き残ってるという事は何か特別なのかな？」

とオーバーに身振り手振りを加えつつ聞けば

「え？おれはゴムゴムの実を食ったんだ、だから体がゴムみたいになるんだよ」

そう言ってみよいん、と頬を引っ張るルフィ

「そうかそうか、君は能力者だったのか。ところで少年、君は海賊をどう思う？」

と、この質問には目を輝かせて

「おれは将来海賊になるんだ！だって楽しそうだし!!」

と答えた

「…そうか、少年。君は海賊になりたいのか」

とポツリと呟きガントレットを外した腕でルフィの首を掴むとそのまま持ち上げる。

「がっ…おっちゃん何を…」

すまん！少年ルフィ！と心の中で謝りつつ上手く首を絞めないように親指と人差し指で顎を支えつつ

「見ての通りこっちは海軍だからね、海賊になりたい、しかも悪魔の実の能力者となると見逃すわけにはいかないんだよ。

それにこの程度で海賊になろうとは笑わせてくれる…」

シャンクス!!まだ来ないのかよ！とその願いが通じたのか

「てめえ!!おれの友達に何やってんだあつ!!」

と背後から振り下ろされる剣、それをスルリと躲し

「何だ、誰かと思えば赤髪か」

「てめえ!クリークか!?何でここに、というか何があつた!」

「いや少年と一緒に怪しい男がいたから停船命令を出したら無視したので沈めたときさ。」

で助けた少年が海賊になりたいというのでお灸を据えていたところだ」

そう言いつつ少年ルフィをボートの端に放ると背中から引き抜いた白尾棍をゆっくりと構える

「てめえ…それ本気で言ってるのか」

とシャンクスから漏れる気迫に思わず肌がブルリと震えるもシャンクスの強さをルフィに見せておく必要があるので黙しておく

「そうか、ならこっちはアンタをぶっ飛ばすだけだつ!!」

さーて、何で俺がここまでやんなきゃならんのだろうと思いつつも顔を強張らせつつシャンクスの二つの斬撃を白尾棍で受け流すのであつた。

## 赤髪双剣 ドンクリークさん

激昂したシャンクスが振るうのは右手にはハンドガードのついた大振りの両刃剣。

そして左手には無骨な見た目で厚い刀身を持つ片刃の剣。

右手の方は知らないが左手に持つ剣はいつの日かまだシャンクスがルーキーだった時にプレゼントした頑丈さを追求した試作剣だろう。

ちよつとやそつとじゃ欠ける事すら無い代わりに尋常では無い重さを持つが、見たところその重量に負けている様子は無く軽々と扱っているようであった。

それに右手の剣、こちらでも詳しくはわからないがかなりの上物だろう、昔に少しやり合った時に無銘のカトラスでかなり丈夫な筈の合金鎧を軽々と傷付けられたのを思い出し警戒の度合いを上げる

「どーしたクリークっ!!防戦一方か!なんとか言ったらどうだよ!!」

と、左右の手で斬撃を繰り出してくるシャンクスに

「やかましいぞ海賊っ!!海賊なんぞ海のクズだ!海賊なんてやる奴は馬鹿なんだよっ!!」

と、全く思っても無いことを口から吐いて剣撃を必死で交わしたり受け流したりして白尾棍での攻撃を加える

「なっ…何を言い出してんだクリーク!羨ましいって言ったのはアンタだろうが!

…無理もねえか、そつちは海軍だしおれは海賊。海賊の悪い面を見てきたのはそつちの方が多いんだだろうからな」

と何やらシャンクスが悲しそうな顔で言い出して動きが止まったのでチラリと舟の端にやったルフィを見れば、戦闘の余波かうまく気を失ってるようなので

「だったら今は叩きのめしておれの仲間になってもらう!そして海賊の良さを思い出してもらおうぞ!!」

とシャンクスが肌をゾワリとさせる程の覇気を放出し切りかかってきたので

「つおおお!! ストープ! ストープ!!!」

慌てて武器を置いて両手を宙に掲げるのであった。

そしてシャンクスはそれを疑問符がいっぱいの顔で慌てて振り下ろす剣を止めると首を傾げるのだった。

そしてその日の夜、クリークは酒瓶を抱えた状態で月歩を使用して赤髪のシャンクスの船であるレッドフォース号に忍び込んでいた。

甲板にはシャンクスが一人つきを眺めながら杯を傾けていたのでスツと横に降り立ち声をかける

「よお赤髪、昼間は茶番に付き合わせて悪かったな」

「やっぱり何か企んでたのか、どうにも妙だと思ってたが洗いざらい話してもらおうぞ?」

「まあまずは一杯どうだ? リュウグウ王国で仕入れたとっておきだぜ?」

「へえ、かの深海王国の酒とはまた…」

そう言いつつしばらくツマミを片手に酒を酌み交わしつつ他愛もない話をする。

海賊がどーのだのだの公認海賊がどーのだのスリムゴールドがどーののだの。

そうしてしばらくするとシャンクスが真面目な目つきになり

「さて、そろそろ本題に入るぞ?」

「ただのお節介のつもりだったんだが…」

「いいから話せ」

「いや、別に大した事じゃないぞ? お前がここを東の海での拠点にしているという調べはついてたからな、この村についても色々調べている。」

あの少年の事も同様だ、悪魔の実の能力者でありお前に憧れて海賊になりたがっているというのものな」

「やはり反対か?」

「ま、海軍だからな。だが俺にそれを止める権利はねえよ。」

今回の事だって海がどんなに怖いところか教えようと思つて

ちよつかい出しただけさ。

ま、海賊になりたいって思いが本当ならそんなもんじゃ憧れは止められねえんだがな！」

「成る程、それでわざわざルフィの前であんな事やったってか？」

「いやいや、まあちゃんと絶対に怪我とかさせないよう色々細心の注意を払ってやったんだぞ？」

あの程度の実力で何も知らずに海にできればみすみす死なせるようなもんだぞ？

流星にそれを見過ごす事は海軍としてだけじゃなく個人的にも気に入らねえからな」

「ほーん、成る程噂通り子供には甘いんだな」

「そりや子供は守るべき存在…って噂通り？」

「はっ、何だその間抜け面は。こつちもアンタの情報は色々仕入れてるんだぜ？」

大量の武器を使うとか、東の海にいた時は”破壊の王”だなんて東の海1番の怪力と呼ばれてたとか、最近はグランドラインの前半部にいたとか、子供好きだが子供に怖がられてるとかな、そりやそんな悪人面なら当然だな！」

と意味つつ口元を抑えクツクツと笑うシャンクスにイラツと来るも實際顔のせいとか怖がられるのは事実なので懽然としつつ

「うるさい、こんな顔でも懐いてくれるのはいるんだから余計なお世話だ。」

で、話は変わるがそつちはこのまま東の海にいるつもりか？

こちらの的にはアンタはピースメインだし、非合法海賊に影響力があるんだからグランドラインに戻って欲しいとこだが…」

「ああ、この拠点も随分と長い事世話になったからな。」

そろそろ潮時だろう、おれ達はグランドラインに戻るとするさ」

「それは助かる、まあ何かあればこちらからお願いがあるかも知れんがそんな時は頼むぜ？」

「いやーだね、おれは海賊でアンタは海兵。」

海賊が海兵の頼みなんざ聞けるかってんだ」

とそんな話をしつつ2人きりの酒盛りは夜も更けていったので  
あつた。

## 英雄魚人 ドンクリークさん

かの奴隷解放の英雄ことフィッシュャー・タイガーの死亡がニュースで報じられた。

流石に輸血云々は書かれていなかったのでもそこら辺は何とかしたのであろう。

そしてそれから数週間後、クリークの姿はグランドライン、シャボンディ諸島にあった。

誰もが寝静まった夜にコソコソと人目を忍び頭まですっぱりとローブを被った人影が細心の注意を払って待ち合わせ場所に向かう。

ココンココン、ココンコンと予め決めていた符丁通りにノックをする。ガチャリと内側から鍵を外す音がして扉が開かれる。

扉を開けてでてきたのは緑の髪の子、ステラ・プロダクションオーナーでありクリークの協力者であるテゾーロ。

ここはクリークとテゾーロが何かあった時のためにとシャボンディ諸島のあちこちに用意してある建物の一つで見た目はただの古い倉庫であるが、生活するのには困らないように色々揃えてあり中央の机にはローブを纏い鉄兜を被った大男が一人。

「はじめまして…ではないか、アンタが例の英雄か？」

「…アンタがテゾーロの協力者ってやつか、はじめましてじゃねえってんならどっかで会った事あるか？」

そう言った大男にクリークはバサリとローブを脱ぎ捨て私服にニット帽を被った姿で

「ああ、海軍本部少将のクリークだ」

と告げれば

「なっ！海軍!?おいテゾーロ！てめえ騙したのか!？」

と激昂したように立ち上がるも

「落ち着けフィッシュャータイガー、別に騙してないよ。」

はてさてでは俺の秘密をアンタに告げよう、これなーんだ？」

そうやってニット帽を引き下ろし覆面にするクリーク、その姿にしばしタイガーはフリーズし

「なっ!!おいおいおい、まじか例の覆面が海軍の人間だと？」

「ははっ、とんだお笑い種だなまさか海軍と政府が必死こいて追つてる奴が海軍の人間だとはな！」

「ああ、それなら確かに初めましてじゃねえな！」

「と納得したように膝を打つ。」

「これだけで簡単に信じていいのかわ？」

「ふん、やり合った時の記憶と背格好が言われてみりやだいたいは一致してやがる、それに態々おれを捕まえようってんならこんな回りくどい真似しなくてもいいだろ。」

「それにおれは一応死人の筈だからな」

「わかってくれたようで何より、さてでは本題に入らせてもらおうぞ?」

「そう言つて覆面を取りつつ中央のテーブルにつくクリーク、それと合わせてフィツシャータイガーも鉄兜を外し、テゾーロも席に座り話し合いを始める」

「まずはおれを助けてくれた事に礼を言う」

「礼はテゾーロとアンタに血を分けたマリア・ナポレに言つてくれ」

「いやクリーク、アンタの指示が無けりやおれ一人じゃどうしてたか分かんねえぞ?」

「いや、それでも礼を言わせてくれ」

「…なら気持ちだけ受け取つとくさ、でアンタを死んだ事にした経緯だが」

「ああ、その辺りならおれから説明したぞ?」

「ああ、おれを死んだ事にするという理由やら何やらは説明を受けた。

「だがおれは死んだ事になるのはいい、だが何をすればいい?若しくは、何をさせたい?」ってんだ?」

「…へえ?」

「アンタが例の覆面だと言うのは理解した、だがそれを差し置いても態々おれを助けて尚且つ死んだ事にする理由が何かあると判断したただだ、危険を犯しておれを匿う理由がある筈だとな」

「まあ正解つて感じだな」

「なあクリーク、その件に関してはおれも何も聞いてないが…」



「ああ、すまんテゾーロ。」

さて知つての通り例の覆面は俺だ、そしてそれを知っているのはここにいるテゾーロと…後は1人くらいか？」

「その後1人つてのは大丈夫なんだろうな？」

「安心しろフィツシシャータイガー、俺がかなりの信頼をおいている人間だ」

「まあ本人がそう言うなら納得しておくが…」

「そして例の覆面がマリージョア襲撃に際してやらかした事を教えておく。」

まず天竜人の屋敷の多数に火を放つたのは覆面の仕業だ」

「やっぱりか、おれが奴隷達を逃して途中にあちこちから火の手が上がり出したのはそう言う理由か」

「それから天竜人をぶん殴つて気絶させたのも覆面の仕業だ」

「…お前は天竜人に対する敬意とか持っていないんだな、海軍の人間なのにな」

「そして最後に…これは超極秘事項で知ってるのは俺とテゾーロだけなんだが…」

天竜人に対して人工的に開発した病疫を撒き散らしたのも覆面の仕業だ」

「…ハッハッハッハッ！傑作だな!!今も天竜人を苦しめてる病疫の正体がそれとはな！」

…しかし他に感染する可能性もあるだろうに、大丈夫なのかそれ？」

「安心しろ、アレは直接投与でしか発症しない。その為に態々気絶させて直接投与したんだからな」

「いやおれもそんなもん使つて大丈夫なのかって、心配だったんだがな」

「成る程例の覆面のやらかした事について話はわかった、で俺に何をさせるつもりだ？」

「と、その前に例の覆面がやった事は他にもあつてだな…」

そう言つてCP9の長官とそのメンバーへの攻撃とオハラ生き

残りを救出している事も話しておく

「成る程、さつき言つてた正体を知つており、尚且つ信頼できるつて言つてたのはその生き残りか」

「正解だ、でアンタにやつてもらいたい事だが例の覆面はあの後も望まない境遇の奴隷を解放している、人攫いから売られた奴隷何かが良い例だな。

時間に余裕がある時は秘密裏にやつていたんだが最近どうにも忙しくて手が回らなくてな…」

「成る程、それをおれにやれと言う事か？」

「ああ、因みに海軍側では例の覆面の最有力候補は、白ひげ海賊団に所属するティーチ」という男だ」

「ん？手配書の覆面もティーチという男だったが…わざとか？」

「いや偶然だよ偶然、さてどうだろうかこの話受けてもらえないだろうか？」

とそう言いながらクリークはテーブルの上の覆面をフィッシャータイガーの方に押しやるのだった。

髑髏の意匠が施された手配書に載っているのと全く同じ覆面を。

## 天才医師 ドンクリークさん

フィツシャータイガーが無事に役目を了承しその後も話を繰り返す。

その過程でお礼参りという事で单身海軍に突っ込んで捕まった魚人が1人捕まってるので救出を頼む、と依頼されたのでここは原作通り恩赦での釈放が手っ取り早いだろうと考え、現在タイヨウの海賊団を率いているジンベエを七武海に加入させるのはどうだろうか？と提案する。

メリットやデメリットを協議した結果、とりあえず前向きに検討するとしてもまずはジンベエに話を通さなければならぬだろう、という事でその日は解散した。

そして明けて次の日、前々から目をつけていた人材をスカウトすべく、クリークの姿はステラ・プロダクションの社屋にあった。

「やあミス・シンドリー」

朗らかな笑顔を見せてステラ嬢と話をしている女性に声をかける

「あらクリークさん、どうかいたしまして？」

肩までほどの長さの金の髪を持つこの女性はビクトリア・シンドリー

彼女は元々かなり高名な舞台女優であり、それに注目してこちらでスカウト、”歌と踊りで世界を変える”とステラ・プロダクションの企業理念に大きく賛同して国も、家も、婚約者さえも捨てて態々シャボンディまで来てくれた人材である。

そしてステラ・プロダクションが主催しているショーで歌ったり踊ったりするメンバーの指導にあたってもらっているが、流石に元々高名な舞台女優だけあって厳しくありつつも上手に指導して見せていた。

ステラ・プロダクションの立ち上げ当初からいるので当然クリークとは面識はある。

が、彼女はクリークの事を大規模なスポンサーというくらいにしか認識していないだろうし、詳しく説明するつもりも無い。

「君に御執心のお医者さんがいると聞いてね、少し挨拶に来ただけ  
ど何か知ってるかい？」

「ああ、ドクトルの事ね？彼だったら態々私を追って来たらしいわよ？  
全部捨てたつもりだったのだけれど…」

「それだけ貴方に惹かれてるのだろう」

「まあ今は教え子達の事でいっぱいだからそんな事考える暇なんてな  
いわ。」

それからドクトルなら朝起きた時に社長と一緒にいるのを見たわ、  
社長室じゃ無いかしら？」

「ありがとう、ではそちらに行ってみるよ」

と、品行方正なやり手の若手経営者をイメージしつつ話し終えて二  
階にある社長室へ向かう。

軽くノックをして

「テゾーロ、いるか？」

と聞けば

「ああ、入ってくれ」

と返事があつたのでそのまま扉を開けばそこにその男はいた。

尖った耳に高い鼻、丸い黒眼鏡をかけ、胴体は太っているのに手足  
が細いその異様な風態の男

「あー、ドクトル・ホグバックはアンタでいいの？」

「フオスフオスフオス！いかにも！このおれこそが世界に名高きドク  
トル・ホグバック!!通称”天才”とはおれの事さ!!」

そういうお前は一体誰だ！初めてみる顔だな！

と独特な高笑いをする男の横でテゾーロが頭を抱えているのを  
見て何となく理解をする。

「あー、はじめましてドクトル・ホグバック。

天才的外科医と名高いアンタに会えて光栄だよ。

俺はクリーク、このステラ・プロダクションのスポンサー…みたい  
なもんだ。

テゾーロ、彼を借りても構わないか？」

そう頭を抑えているテゾーロに聞けばシツシツと手を払うテゾー

口、さつさとどっかに連れて行けって事だなありや。

「じゃあドクトル、少し落ち着いて話が出来るところにいきましょうか」

そう言いつつホグバックを連れ出し本題を切り出す

「さてドクトル・ホグバック、今回俺がアンタに声をかけたのはスカウトの為だ」

「ふん、スカウトなあ？ フォスフォスフォス！ そんな怪しい話に乗るわけないだろうー！」

「因みに俺と社長のテゾーロはマブダチってやつだからなー、俺が間に入ればミス・シンドリーと同じ船にいられるかもしれんぞ？」

「スカウトについて詳しく聞かせてもらおうか」

なんだ、手のひらドリルかよと思いつつも話は早い方がいいので新世界にある島があり、そして大勢の手術が必要な患者がいる話を話す、今はまだ珀鉛病に関しては伏せておくが。

「勿論報酬についても出させてもらおうし島までの護衛もこちらで請け負おう、どうだろうか頼めるのが天才と名高いアンタくらいしか思いつかなくてな」

原作と違って何か悪い事してないし、まあ変な事さえしなけりやだけどな、とお願いをするのであった。

## 新生装備 ドンクリークさん

ホグバックはかなり悩んでいるようなのでまた今度返事を聞かせて欲しいと言ってその場を立ち去る。

そしてホグバックが乗り気になるようにテゾーロやシンドリー嬢の協力を取り付け、適当に持ち上げるようお願いしてジンベエを七武海に加入させるべく活動を開始。

海軍では穏健派という事になっている青雉に対して秘密裏に話を通しつつ、クザンからセンゴク元帥に通してもらおう。

他にもパールをアスカ島に向かうゼファー教育総監に預けたり、ミニオン島で拾ったドレークの様子を見に行ったり、そんな風に色々と用事を済ませつつ裏から手を回していると、武装班から確認をお願いしたいとの連絡があった為、そちらに向かえば何やら多数の装備が置かれた部屋に通され説明を始められた。

「えーと先ずこちらがジェットダイアルを搭載したブーツですね。」

前回は一つしかなかったので攻撃用途としてハンマーに搭載していましたがやはりリジエクトダイアルとジェットダイアルを一つの武器に搭載すると負担が柄に集中する為ほぼ使い捨て前提でした。

今回運良くもう一つジェットダイアルが手に入った為移動用途に使っています」

「なるほど、詳細は？」

「はい、操作は靴の中敷にスイッチが仕込んでありますので主に踏み方によって起動します。」

ジェットダイアルに加えて少将が使い道を自身の装備のみと限定しているジェルマの技術についても使用してましてその時々によって噴射力を上げる事も可能です。

他に足裏にローラーを仕込んであるのでこちらも中のスイッチを起動させる事でローラーブーツにもなります。

攻撃用途としては爪先に仕込み刃が入ってますので相手に対して意表を突く事は出来るかと。

それから見ての通り全面に装甲を施してますので頑丈さはかなり

のものになったと自負しています。

まあその分重量がかなりのものになってしまいました。が少将であれば問題ありませんよね?」

その言葉にブーツを持ってみればかなりの重さがある事かわかる

「ふむ、なかなかだな、とりあえず後で少し試運転をしてみよう」

「はい、では他の装備と合わせて試運転をしましょう。」

「そうだな、今のところ説明を聞いたただだがよくここまで練り上げてくれたな、ありがたい」

と専属武装班の班長を務めるリーダー格の男性を褒める。

「次はガントレットね、前回のものは遠距離にも対応可能なように小型ボウガンを仕込んでたけどレポートにもあつたようにその分頑丈さが大きく落ちてたのでそこを改良してるわ。」

具体的には内蔵型にしてるんだけど、それによって前のように何でも撃てるというのはオミットしたわよ?」

「ふむ、一種類しか撃てないという事か?」

「いえ、内蔵型でかなり小型にした分数が増えてるわ。」

こうすれば・・・見ての通り手首を内側に曲げれば穴が3つあるでしょ?」

それぞれの箇所から標準の金属製の杭と汎用として特殊弾が撃てるようになってるわ、予め装填は必要だからその場で撃ち尽くしたら終わりだけだね?」

「特殊弾は今までのやつは全部使えるのか?」

「そうねえ、大きさを揃えないといけないから過去の物は全て中身以外は共通化が必要ね。」

それさえクリアすれば撃てるわよ?」

「なるほど左手は了解した、右手はどうなってる?」

「ふふふ、今回は自信作よ?」

前回のハンマーから取り外したりジエクトダイアルを搭載しているわ。

でもこれは実は攻撃用途じゃないのよ、これはあくまで衝撃を吸収する用途として組み込んでるの。」

そしてそれに飲み込ませる衝撃が追加のジェットダイアルと一緒に手に入ったインパクトダイアルよ！

確かに威力の点だけ見ればリジエクトダイアルに軍配があがるわ、けれどその分反動も大きいから武装を作りやすいのはインパクトダイアルの方なのよね。

元々二つの違いは溜め込むことが出来る衝撃の量って事だから今回はインパクトダイアルの反動をリジエクトダイアルに流すように設計したわ。」

「なるほど、インパクトダイアルを撃ったとしても反動の殆どはリジエクトダイアルの方に飲み込まれるわけか。

因みにリジエクトダイアルの取り外しは？」

「そう言うと思ってたわ、緊急時にはリジエクトダイアルを撃てるように取り外しは可能になってるわ。」

でも今までの装備と違って反動が直で及ぶから多用は禁物よ？」

「・・・了解した」

「それから後は仕込み武装として右手側には鉄網、鉤ワイヤー。」

左手側には火炎放射器が仕込んであるわ。

それから装甲はかなり頑丈でも少し将が装着して相手を殴ってもちよつとやそつとじゃ傷一つ付かないわよ？

あと完全装甲化した指先はかなり鋭利に研いであるからそこだけ気をつけてちょうだい？」

説明を聞き少し持ち上げてみればなるほどこちらもかなり重量があるようだ

「うん、いい仕事だな。これも後でブーツと合わせて試運転を行おう」

と、説明をしてくれた武装班の副長を務めるセクシーな女性研究員を褒め、次の説明を聞くのであった。



## 新生七星 ドンクリークさん

「えとえっと、では鎧とマントについて説明させてもらいますう。

まずは鎧ですが頑丈さを追求したので特殊な機能はそこまで多くないですう。

両の脇腹と両肩に仕込み武装としてガトリングを搭載してますけどあくまでも牽制用と考えて下さいいよお？」

「かなり頑丈との事だが仕込みが少ない分かなりの丈夫さだという理解でいいか？」

「はいー、今までの試作兵装からのデータを纏めて複数の素材を何層にも重ねた複合式となってますので硬さだけならそんなじよそこの攻撃では傷一つつきませんよー？」

「鎧は了解した、次はマントか？」

「はいー、これはマントと言うよりマントにもなるコートが正しいですがこれも複数の素材を重ねて出来てまして、素材に関してはかなり厳選してますう。

その為防刃、防弾はもちろん耐火、耐水、耐電の上で衝撃や汚れにも強くしてみましたあ。」

「ほう、特殊機能はこちらは無いのか？」

「ふええ、そんな特殊って言われてもせいぜい裾にワイヤーが入ったり、袖内にナイフが仕舞われてたり、コートの内側に隠しポケットがあるくらいですよお……」

「いや、十分だよくやってくれたな」

と気弱そうな班員を褒めると

「じゃあ次はこいつツスね、少将が回収してきた”七星剣”とやら。こいつを全面的に改修したツス」

「え、一応預かりもの……」

「大丈夫ツス！何かあったら元の拵に戻す事は出来るツスからー！」

「…説明を続けてくれ」

「うっス！その前に白尾棍をこの台の上に置いてもらっていいツスカ？」

その言葉に従い持ってきてくれと頼まれていた白尾棍を同じような今回が置かれた台の上に

「ちよつと待っててくださいねー…よしー！」

と白尾棍から何かを外し、横の棍へその何かしらを取り付けた

「棍も新しくするのか？」

「ええ！こつちの新生七星剣：星剣って呼びますか、こいつにも関わってくるんすけどこの星剣は柄頭のカバーを外すと螺子になっているんすよ。」

んでこの新しい棍も一方は海楼石と仕込み針の方はそのまま移植したっすけど半分のとこに継ぎ目があつてつすね：反対側はこうやって：外すとねじ穴になつてつす

と半分ほどの長さになつた棍を指し示す

「なるほど合体で柄が長くなるわけか」

「ええ、少将は長物の方が扱いやすいだろうと思つてつすね！」

まあその分二つを合わせた時はかなりの長さになってしまっていますけどねー」

まあそれはそうだろう、元々高い身長に合わせて作られた白尾棍だ。

いくら半分になつたとは言え新生七星剣：星剣がかなりの長さを持つので剣と呼ぶには柄が長く、槍と呼ぶには剣身が長いというかなり半端な状態となっている。

しかし半端と言っても実際に長巻、もしくは大身槍というように分類が無いわけでもなく別段おかしな物を作り出したというわけでも無いだろう。

使いこなすのは難しそうだろうけども

「ふむ、リーチが長くなるのは助かるな」

「ええ、ちなみに別に絶対に合体させる必要はないっすからそれぞれ棍と剣の単品で使ってもらつても構わないっす。

あ、でも絶対素手では持たないで下さいっすよ？便宜上”呪い”つてしてまずけど未だに健在みたいっすから」

「…そうか、まだ健在か」

「いやあ何とかしようと思ったんすけど下手に手を出して”破壊不能”ってお題目が消えたら目も当てられないっすからねえ…」

「まあ言われてみればそうだな、しかし呪われた剣の改修という難事をよくやってくれた」

と語尾が特徴的な研究員を褒めつつ

「では次はその他兵装ですね、ここからは私が引き継ぎます」

と礼儀正しい班員が次の説明を始めたのでそれを聞く態勢を取る

「まずは小型炸裂弾ですね、威力は前と変わりませんがサイズを一回り小さくしています。

それからお預かりしていた大型拳銃の”ベアコング”、こちらはメンテナンスが完了してます。

一応中身を少しいじってまして六発までなら装填できるようになりました。

ですが事前に装填が必要なので弾切れしたらそれまでと考えるください」

「ほう、弾数が増えるのはありがたいな」

「それからコートの内側に仕込めるように色々取り揃えていますので詳しくはこっちのリストを確認してください」

そう言つてズラリと装備が書かれたリストを渡される、一番上は鎖分銅から始まり一番下は撃鉄爆装杭と何やら物騒な名前が書いてあった

「それからいつも通りの試作剣は星剣があるでしょうからリストの方に載せてますので必要の際は連絡をお願いします」

「よし、全員俺の装備の為に頑張ってくれてありがとう！これは心付だ、皆で何か美味しいものでも食べてこい！」

そう言いつつ財布から十万ベリーほどを班長に渡して労う、後で給与も色をつけてやろうと考えつつ。

「ありがとうございます！」

あ、そう言えば少将は科学班の噂聞きました？なんでも機械と人体を融合させたサイボーグを作ろうとしているとかなんとか…」

ん？サイボーグ？あれかな、パシフィスタ関係かな？

「…丁度センゴク元帥から呼ばれてるし少し聞いてみるか。  
ひよっとしたらこっちにも何か恩恵があるかも知れないしな」  
と専属武装班の全員を労いつつ、センゴク元帥の元に向かうのだった。

## 平和主義 ドンクリークさん

「はっ？科学班からの協力要請でありますか…？」

「ああ、科学班が提唱している人体のサイボーグ化計画に対しお前に協力をお願いしたいらしい」

あれ？海軍でサイボーグ計画って言ったらパシフィスタのことか？

「えーと、何故私なのでしょう？」

本来であれば”暴君”の異名を持つ”バーソロミュー・くま”が実験を受け入れ最終的には人間兵器となっていたが…

「お前の身体について医療班から興味深いデータが前々から上がっていてな、それに化学班が興味を示し是非ともお願いしたいのだ。」

まあ本人の意向に合わせるとの事だがどうする？  
んー、どうしようか。

確かにサイボーグ化は強くなるのは強くなるだろうけど、と原作でのパシフィスタを思い出す。

まず銃や刃物のような並みの攻撃では通用しない頑丈な身体。

これは現在でも普通に鉄塊拳法にて可能。

次に鉄を溶かす程の高熱のレーザー光線を両掌と口から照射。

これはかなり欲しいが確かこの技術が採用されたのってだいぶ後じゃなかったっけ？

そして両目の部分はモニターとして賞金首の顔と名前、懸賞金を判別する機能が備わっていたがこれは…別に覚えれば済む話だしなあ。

「えーと、個人的にはお断りしたいかなあーと…」

うん、パシフィスタがいくら麦わら一味や白ひげ傘下の海賊達に対して優位であっても戦力の固定化というデメリットは頂けない。

装備で強くするにも限度があるだろうしだからこそ身体も鍛えて対応できるようにしている。

確かにパシフィスタは高い戦力を持ち”大抵の”敵は倒す事が出来るだろう。

だがそれじゃダメなのだ、その程度では化け物達には敵わない、それならばこの話は受けない方がいいだろう。

そう判断しその意図を伝えれば

「なるほど、では科学班にはこちらから言っておこう。」

ではお前が断つたので次の話に入らせてもらおう、前々からお前の元にいる専属の武装班たちだが…」

「えーと、彼らは何か?」

”試作兵装群”を使用するのに許可がいるのは覚えているか?」

「まあ一応…とは言え最近は全然使ってませんが…」

やっぱ、あれより強力な装備をポンポン作ってるというのは黙っとこう…

「あれの運用については大将クラスの承認が必要とされていたが最近ほとんど音沙汰が無いから気になってな。」

色々調べさせてみたら出るわ出るわ、”試作兵装群”など目じやないほどの装備がな!」

「はっ!申し訳ありません!」

ばれてた事に心の中で冷や汗を流しつつとりあえず謝っておく。

「…まあそれについてとやかく言うつもりは無い、技術の向上は海軍にとつても悪い事では無いしな。」

そして決まり事では無いが慣例となっているお前の専属の武装班から科学班、技術班へのフィードバックを決まり事として行いお前専属の武装班を”ミリタリスト計画”の実行メンバーとする」

初めて聞く単語だな、そんなのどつかに出てきたっけ?

「えーとセンゴク元帥、”ミリタリスト計画”とは一体何でありますでしょうか?初耳なのですが…」

「言っておらんからな、まあ簡単に言うると科学班が提唱している”パシフィスタ計画”というさつき言ったサイボーグ計画がある。」

だがそれにはどうしても人体に手を加える必要があると報告を受けていてな。

だから保険として身体能力や悪魔の実に頼らない強力な武装の開発というのがコンセプトだ」

…となるとそれこそパスワードスーツとかその辺りが必要になってくるんじゃない？

と心の中で思うも下手に藪をつつきたくないの黙っておく。

「というわけでこちらは受けてくれるよな？なに、今までとそう変わりにない、少し書類が増えるだけだ」

と先の話は断ってる負い目もあり、もちろん受けてくれるよな？と目で聞いてくるセンゴク元帥に対して頷くのだった。

書類がまた増えるのか…

## 医師志望 ドンクリークさん

天才医者ドクトル・ホグバックがファウス島行きを了承したので、テゾーロにゴルゴルの実を預けた後今後の動きを説明して、ホグバック及びカモメの水兵団と共にレッドポートへ。

反対の新世界側まで行くところにはシャーロット・アンジェ号が準備万端で停泊しており船はそのままファウス島へ。

カモメの水兵団は船の整備やファウス島海軍基地からの補給を任せ、ギンとホグバックと共に医療センターへ向かう。

モネやシュガーに挨拶しようと考えたが先にホグバックをDr. インデイゴやトラファルガー医師、アシエ博士に紹介しておいた方がいいだろうと考え、ギンに施設の点検を任せ、ホグバックと共に連れ立って三人の研究室へ。

忙しく患者達の様子を見ているようであったが話を聞けば今のところピユアゴールドを使つての病状の停滞、I・Qを使つての身体の強化、新金属を用いての一部臓器に珀鉛を集中させる、というのは順調らしい。

ただやはり手術が可能なのがトラファルガー医師一人という事もあり、完全な摘出に至っているのは数人しかいないとの事であった。因みに完治した患者はこの施設で皆の手助けをしているとの事。

そこで有用だろうとドクトル・ホグバックを紹介すればアシエ博士は過去が過去なので知らないのも無理は無いとして

「金属学者をしているアシエだ、ここでは治療に使う金属の精錬を担当している」

「おお、貴方がかの…いや貴方が加わってくれるなら心強い！

申し遅れた、ここの主任医師のトラファルガー・ルークです、よろしくお願ひします！」

「ぴーろぴろぴろ！キサマがかのドクトル・ホグバックか！まあワタシには敵わんだろうが天才医師と有名らしいな!!

紹介が遅れたな！かの天才科学者Dr. インデイゴとはワタシの事だ!!」



他の2人はドクトル・ホグバツクの事を知っているようであった  
「フォースフォスフォス！おれこそがかの天才外科医、ドクトル・ホグバツクだ！」

今回はこの男との契約でこのおれが手伝ってやる！」  
しっかりと見た目もだが笑い方もキャラが濃ゆいな、と思いつつここは三人に任せて他の様子を見に行く。

暫くした辺りで

「あらークリークさん戻ってたんですか？」

と声をかけてきたのは何やら書類の束を抱えた薄緑のロングヘアの少女。

「ああモネか、新しい医者連れてきたんだよ。どうだ、元気でやっているか？」

「ええ、お陰様で。シユガーやオルガちゃんたちも元気よ？」

多分今は子供達と一緒にシスターから勉強を教わっている所だと思おうわ、会っていく？」

「いや、勉強が終わってからでいいだろう。それよりモネは手伝いか？」

「ええ、トラファルガー先生に色々と医学を教わってるのよ。」

先生からはスジがいいと褒められてるのよ？私も医者になろうかなと思ってるね」

「ほうーそれなら渡に船だな、今回ここに来たのはドクトル・ホグバツクと言ってるな、かなり高名な外科医だ。」

天才と名高い彼の近くにいるのはいい勉強になるだろうから色々医学について教わるといい、まあ性格的に最初はとっつきにくいかもしれないがな」

「あら、それはいい機会ね。だったらこのチャンスを活かしておきたいとこだわ」

「ああ、頑張ってくれよ。一人前になったら他の島に行つて実践を重ねるのもありかもしれないな」

「あら、だったらクリークさんの船に乗せてもらえるのかしら？」

「ま、ちゃんと勉強を終えたら考えてやろう。それよりも体づくりは

まだ続けてるのか？」

「ええ、クリークさんが出発前に教えてくれたメニューをわたしもシユガーもオルガちゃんも続けてるわ、最近だと息を切らす事も無くなつたわよ？」

「そうかそうか、だったら頑張ってるシユガーやオルガにご褒美として今日は俺が夕食を振る舞ってやるか。」

「いい考えね！あの子達もきつと喜ぶわ！」

「じゃあ俺は厨房にいるから何かあったら呼んでくれ」

そう言つて患者達のカルテを抱えるモネを見送ると豪華なオムライスでも作つてやろうと足早に厨房へ向かうのだった。

## 金緑白黒 ドンクリークさん

「なんだい、帰ってたのかい。挨拶くらいくればいいさね」

食堂に入るなりこちらを見て目を丸くし驚く金の髪の少女オルガ「いやいや、一生懸命勉強してるのをわざわざ邪魔する事も無いだろう？」

シュガーもいつまでもプリプリしてないで席に座ろうか？戻ってきてすぐ来なかったのは謝るから」

「・・・ふん！」

と短く言って不機嫌そうに自分の席に座る緑髪の少女シュガー

「ボスは好かれてますねー」

「うっさい、じみおとこ」

と呑気にいうギンに対して言葉のナイフを投げるシュガー

「シュガー、お願いだから言葉使いはもう少し・・・ね？」

そしてそんなシュガーを嗜めるシュガーの姉であるモネだったが「ぴろぴろぴろ！いいじゃ無いカ！直接的な方がわかりやすい！」

「フォスフォスフォス！まったくその通りだなDr. インディゴ！」

と植物学専攻の科学者であるDr. インディゴ、天才外科医と名高いドクトル・ホグバツクの茶々が入り

「いえ、インディゴ殿、ホグバツク殿。口調はまあ幼い今のうちに直しておいた方が…将来苦労しますよ？」

「うん、それが無難だろう。わたしの娘も口が悪くてね…」

それに対してとても優秀な医師でありこの治療計画の陣頭指揮をとっているトラファルガー・ルーク医師と金属学者であるアシエ博士が嗜める。

そして食堂には他にも大勢の人間がおり、例えばトラファルガー医師と同じく医者であり彼の妻でもあるトラファルガー・レモやその娘であるラミ。

この施設の警備を務めこの島に常駐しているリユードー大佐とその娘であるヨーコ。

この施設の子供達に勉強を教えたり、と子供達の面倒を見ているフ

レバンス出身のシスター。

他にもフレバンスからの国外脱出した人間が大勢を占めているが。

「はいはい、そこまで！では一応皆に紹介しておこう、今回からこつちで患者の手術を務めてもらう事になるドクトル・ホグバックだ」

「かの天才外科医と名高いドクトル・ホグバックとはおれの事だ！このおれが執刀するからには大船に乗ったつもりでいろ！

まあ払うものはしっかり払ってもらうがな！」

「ドクトル、報酬はこちらから出すと言ったはずだが？」

と自己紹介にちやつかりつけ加えたホグバックに対して苦言を呈しておく

「フオスフオスフオス、硬い事言わないでくれよ、おれはわざわざあなたのスカウトに乗ってやつたんだぜ？」

「シンドリ嬢の” 遠くの患者さんを助けに行くお医者さんってかっこいいと思うの” という言葉でファウス島行きを決めたんじゃないのか？」

どこでそれを！と騒ぐホグバックを無視して

「では諸君グラスを持ってくれ、フレバンスの出身である人間には長く辛い闘病生活であっただろう。

だが君たちを苦しめている珀鉛に対して対処の目処はついている！

今までは執刀医師がトラファルガー医師だけだった為全員の完治という点から見れば足取りは遅く感じていた事だろう。

だが、新たな仲間であるドクトル・ホグバック氏が協力してくれる事となり君たちが完治するのはそこまで遠い話では無くなった!!

だからもう少し、もう少しだけ我慢してくれないだろうか。

珀鉛病に対する世間の間違った意識は未だ根強い。

その為自由に施設の外に、ひいては島の外に出してやる事さえ出来ず、精々が中庭で太陽を浴びさせてやる事くらいしか出来ない。

だが！病気が治れば君達は自由だ！この施設の外で遊びまわってもいいし、島の外に出ても良い！

だからもう少し、もう少しだけここでみんなそれぞれが出来るこ

とをやり、そしてそれぞれ助け合っいていこう！」

そんな言葉に対して

”今更水くさい”だの”脱出させてくれただけでも感謝してる”  
だのと言葉が飛んでくるが否定する言葉は無かったので

「ありがとう諸君、では今回の夕食は心を込めて作ったから全員楽しんでくれ！それでは新しい仲間と諸君らの未来に乾杯!!」

そうして周りとグラスを打ち合わせてこのシスターやリユードー  
大佐に声をかけに行くのだった。

## 白黒医師 ドンクリークさん

明けて次の日、個人的な話をしにトラファルガー医師の元へ

「…そうですね、やはりまだ見つかっていませんか」

「申し訳ない、とある作戦時に珀鉛病の少年を彼が連れていた事は掴めたのですが、それ以降の足取りは残念ながら…」

「いえ、生きてるかもしれないと分かっただけでも収穫ですよ」

「…彼が目覚めてくれれば色々わかるのでしようが、容態はどうなつてます?」

「…残念ながら。打撲や銃創は完治したのですが未だに意識が戻らないのですよ。」

ここに運ばれたときは応急処置はしてあつたとは言え、予断は許されない状況でしたからね、頭などにダメージが入っていると目を覚ます可能性は低いかもしれません…」

「一応ホグバックにも診てもらいましょう、それからお子さんらしき少年の捜索についてはこちらも続けますので」

「重ね重ね申し訳ない、こちらも患者達については全力を尽くします」

「…そう言えばモネが医療の勉強をしていると聞いたのですがどうですか、彼女は?」

「ええ、中々筋がいいですよ? 本人も学ぶ意欲がある上に中々に飲み込みが早く教えがいがありますよ」

「となるとモネが一人前と名乗れるのもそう遠く無いって事です?」

「どうでしょうかね、彼女は医療を学ぶ事に貪欲ですからね…」

私の予想が正しければホグバック殿からも技術を習おうとするのでは無いかと思いますが…」

「となると流石に数年はかかるかもしれませんが、彼女がいくら学ぶ事に貪欲でありセンスがあつてもちよつとやそつとじゃホグバックの技術を得るのは難しいでしょう」

「本来ならば医者を目指している以上、医療大国であるドラム辺りに留学に行かせたいところですが…」

「なるほど! それはいい考えですね! 後で本人にも確認してみましょ

う、確かにドラム王国は最新の医療を持つ医療大国として名高いですからね！」

「ではわたしは診察に戻りますので、ここら辺で失礼します」

そう言って去るトラファルガー医師を見送りつつ、ドラムの医者達の追放はいつだったか…？とりあえずドラムについて少し調べるかと考えながら歩いていると体は丸く手足は細い特徴的な体型の男が目に入る

「お、ドクトルちよつといいか？」

「む？なんだクリークか、この天才たるおれに何の用だ？」

「ああ、ちよつとこの施設の事について一応確認をとつときたくてな…ドクトル、何か痩せたか？」

ぽんぽんまるまるとしていたドクトルのボディーが若干スリムになつていたように感じた為そう聞くと

「フォスフォスフォス、よくぞ聞いてくれた！世間では最強の痩せ薬と名高い不思議金属”スリムゴールド”！」

かなり高価な上にほとんどがグランドライン内、特に新世界側しか流通される事の無いあの金属がやつと手に入ったのだ！

まさかここで生産しているとは思わなかったぞ!？」

「まあこの島自体が新世界にあるから流通もごく限られてるからな、量も少数しか生産してないし…

というかよく”スリムゴールド”の事を知ってたな、そんなには広まってると思ってたが」

”脂肪を吸着し体外に迅速に排出する”これだけ聞けばおれの腕と合わせれば完璧な脂肪切除ができるから色々調べてたんだよ。

やはり楽しんで痩せたいから手術してくれ、という金持ちは多くてな…」

とやれやれと両手を上げるホグバツク

「と、話が逸れたな。どうだ患者達は？」

「そうだったな、最初この島に来て相手があの白い町の住民達と聞いた時は驚いたぞ！

流石に中毒症状であり伝染病では無いという事は知っていたが…」

「なんだ、きちんと見破っていたか」

「舐めるな、これでもおれは天才医師だぞ？ 専門は外科医とは言え、それくらいおれでもわかる。」

「しかしいいのか？ 白い町の人間は全員死んだと聞いているし新聞にもそう出てたが、この施設は政府の運営か？」

「流石天才、鋭いじゃないか。この施設も患者達についても政府には秘密にしてある。」

海軍内でも知っているのは一握りの人間だけさ、世界政府は珀鉛について都合の悪い事を全部闇に葬るつもりだったろうからな。

だからドクトル、アンタがここの話をもしも洩らすつもりなら…」

そう言っって壁に手をつけると石レンガの壁に握力だけで指をめり込ませ掴み取る

「…つもりなら？」

「そんな事はしないとは思うがこうなると思っってくれ」

そう言っって手のひらを開けば粉々になった石レンガ

「言われてもそんな事はしないぞ、何せきちんと報酬はもらうのだからな！」

…しかしその化け物じみた身体能力は気になるな、どうだ？ 報酬は少なくしていいからいつペン解剖される気はないか？」

と軽い脅しも何のその、どこ吹く風でこちらに解剖を持ちかけてくるその姿に

「やだよー誰が解剖なんかさせるか！」

全力で否定してその場を足早に去るのであった。



## 古き旗艦　ドンクリークさん

その連絡はシュガーに付き合っただけで人形遊びをしていた時の事だった。

遊びを中断した事で不機嫌になるシュガーを抑えつつ電伝虫に出ればセンゴク元帥からであった。

内容を要約すれば

『青雉から新たな七武海としてタイヨウの海賊団のボスであるジンベエを推薦する動きがあった。』

王下七武海に未だ空席がある状況は望ましくないものでついでもう一つ席を埋めるべく交渉に行つてこい』

との事であった。

因みに現在の七武海は

アラバスタに拠点を置く”砂漠の王”サー・クロコダイル。

女ヶ島、アマゾン・リリーを本拠地とする”海賊女帝”ボア・ハンコック。

世界最高の剣士とも名高い”鷹の目”ジュラキユール・ミホーク。

そして海賊の時は暴虐の限りを尽くしとても凶悪だったという”噂”を持つ”暴君”こと、バーソロミュー・くま。

過去には七席全てが埋まっていたらしいが海賊の引退や討死が重なり現在はこの4人しかおらず、半端な事に三席ほど空いているのが現状だ。

本来であればここに”天夜叉”ことドンキホーテ・ドフラミンゴが数えられるのだが過去を大きくねじ曲げ、彼が現在インペルダウンに投獄されている以上、七武海に加入する事は無いだろう。

そして新しく加入させる予定であるタイヨウの海賊団のボスであるジンベエ。

彼にはこのファウス島に来る途中にフィッツシャータイガーの手紙を持参して秘密裏に交渉を待ち政府から話が来たら受けてもらうように承諾を取っている。

しかし今回の交渉はジンベエ相手では無かった。

三大海賊と名高い最強の一角である”百獣”のカイドウ。

彼とワノ国にて渡り合い、そして敗れて新世界から去った”ゲツコー・モリア”

彼に王下七武海への加入を打診しろとの事であった。

伝書バットを使えばいいじゃないかと思ひ、それとなくその事を元帥に伝えたが

『彼奴が潜んでいる場所が厄介でな、お前ならばいけるだろうか?』

との事であった。

ちゃんと居場所は把握しているのな、と思いつつ続きを聞けば彼が七武海へ推薦をされた理由は”ゲツコー・モリア”の行なっている”海賊狩り”。

これを政府が一定の効果があるものと判断し、政府は彼の七武海加入を海軍に打診してきたとの事であった。

原作を知ってるから言える事だけどゲツコー・モリアの目的は戦力としての影集めだろうな。

ぶっちゃけ違法海賊も公認海賊も一緒くたに狩りまくってるからやめて欲しいんだけどね。

ともかくにも交渉に行くのは決定のようなので任務を受諾し早速準備にとりかかる。

頬を膨らませるシユガーの機嫌をなんとかとり、そのまま施設長であるトラファルガー医師と警備主任であるリユードー大佐に島を任せるとモネやオルガ、そして学者達に別れを告げるとシャーロット・アンジェ号は一路レッドポートへと向かう。

そのまま船を乗り換えるべくマリンスフォードへ向かうもそこで足止めを食らった。

”海軍独立遊撃隊”の旗艦である”ベアトリス号”のドック入りである。

慌ててセンゴク元帥に問い合わせたところ

「ああ、言うのを忘れていたな。

お前の船であるベアトリス号は老朽化がかなり酷くてな、あちこちにガタが来ていたようだな。

お前が新世界に行ってる間に大規模な補修作業を行う事になった。」

こつちに話を通してくれませんかねえっ！と詰め寄るも「いや、まさか直ぐにこつちに戻ってくる事態になると思わなかったからな……”とどこ吹く風であった。

だが一応腹案はあるらしく”お前の新世界の足であるシャーロット・アンジエ号、これの二番艦が近々就航予定だからそれをくれてやる”との事であった。

元々あの船は海軍の正式仕様だったのをあちこちに改造を施していたからその無理が祟ったのだろう。

補修が完了したベアトリス号はゼファー教育総監に預けて新兵達を乗せる教導艦とする予定との事であった。

それに合わせて現在はファウス島の周辺海域にてリユードー大佐が艦長を務める旧二番艦の”クイーンズ・メイフィア号”

そして海軍独立中隊から異動し、グラントライン第八支部の副所長を務めるジョナサン准将が艦長を務める旧三番艦の”アルビオン号”も大規模改修を行う予定との事。

だからなんでこちらに一言も無いんだ！と思いつつも新しい船をもらえるのはありがたいので不承不承に頷いておく。

まあ、確かにベアトリス号は”海軍独立遊撃隊”の前身である”海軍独立中隊”なら時からの旗艦であり、当時でこそ最新鋭の戦艦を改造していたとは言え、それから十二年も経てば旧型と言っても差し支え無いであろう。

クイーンズ・メイフィア号やアルビオン号も五年前に就航したとは言え、元が改造戦艦たるベアトリス号を祖としている為旗艦である”シャーロット・アンジエ”号と比べれば速力や火力などは劣っている。

その為に今回の大規模な改修であろう、まあ話はわかるがせめて今度からはこつちに話を通してくださいとお願いしつつ納得しておく。

まあ納得はしたが交渉へ行くための代わりの足を用意して欲しいと頼めばドッグで暇していた型落ちの船を持ち出された時は少しイ

ラツと来たが。

## 魔の海域 ドンクリーク

霧が立ち込める危険な海を一隻の船が航行していた。

特に変な箇所のない海軍の中型軍艦であるが唯一他と違うのはその軍艦が掲げている海軍旗だろうか。

マークこそ一般的なカモメをモチーフとしたものであったが違うのはその色。

一般的な海軍は青いマークであるが、その船が掲げていたのは真紅の海軍マークであった。

「どうだ、周囲に変わった様子はあるか？」

「いやあクリーク少将、流石フロリアントライアングルとでも言うべきですか、波が読みにくいと思ったらありやしないうすねー」

この赤い海軍旗を掲げる部隊は一つしかない。

海域を問わず違法海賊を捕縛、市民からは「カモメの水兵団」と呼ばれ絶大な支持を、海賊達からは悪名高き「赤カモメ」と呼ばれている、言わずと知れたクリークが隊長を務める「海軍独立遊撃隊」である。

ゲッコー・モリアへの七武海への加入を打診しろとの指示を受けここまで来たが成る程、これは確かに伝書バット単体じゃ来れないのも納得だと思いつつ前方を眺める。

ここは、フロリアントライアングル魔の三角地帯”

グラントライン前半部に存在するとある海域である。

この海域では常に毎年100隻以上の船が消息不明となっており、そして船員のみが消えた船、あるいは死者をのせてさ迷うゴースト船の目撃情報も数多く寄せられている。

年がら年中霧が立ち込めている事や海流が不規則な事もあり、フロリアントライアングルはとても危険な海であるところの海を知る者は誰もが口を揃えて言う。

そんな海だからこそ通常であれば世界政府が使う伝書バットと呼ばれるコウモリに手紙を持たせれば済む所を態々海軍を通して手紙を届けさせると言うのも無理はないと立ち込める霧に辟易として

つも考える。

「しかしこの霧ではヤツの船さえわからないな、世界政府はこの海域に潜んでいると言っていたが…」

そうクリークが思案していた時の事である。

「少将ー!!前方左方向に巨大な影が薄つすらと見えますー!」

マストに設けられた見張り台からの報告にクリークは懐から単眼鏡を取り出すと覗き込む。

真つ白な霧に遮られはつきりとは見えないが塀のようなものが見えた為指示を出す。

「操舵手!左舷前方に舵を取れ!掌帆手はマストを畳めて速力を落とせ!」

いつももだつたら経験を積ませる意味で副官であるギンに指示を出させるところであるが生憎ギンは今回はあのゲッコー・モリア相手という事もありファウス島にて留守番である。

とは言えクリークも歴戦の海兵、スムーズに部下に指示を出し船は巨大な影の元に到着し入り口が無いか塀の周りをゆっくりと回る

「:塀と言うよりまるで城壁つすねこれ」

「とりあえず舵は慎重にとつてくれ、入口があればいいが…」

操舵手とそんな風に話していると程なくして入口らしきものが見えてきたがその見た目に船の者達は絶句する

「:趣味が悪いこつた」

「これってゲッコー・モリアのセンスですかね…」

そこにあつたのは巨大な口…をイメージしたと思われる門。

幸運な事に門は開いていた為慎重に船を動かすように指示を出しそのまま城壁の内側へ入れればそこにあつたのは一つの島。

「少将、寡聞にしてこの海域に島があるって知らないんですけど、海図にも載ってませんし…」

航海士が前方と海図を見比べつつ疑問を呈してくるが

「:おそらくこれは船だ、それも島一つを内側に持つ恐ろしく巨大な」と原作知識を思い出すがバカ正直に言う必要もないのでそう答えしておく。

これこそゲツコー・モリアが所有する海賊船である”スリラーバーク”

霧の所為もありその全貌を把握する事すら出来ないが、この島と口を模した入り口を持つ巨大な城壁、世界一巨大とも噂される島一つを乗せた超巨大海賊船である。

## 怪物の島 ドンクリーク

とりあえず島の近くに停泊するように指示を出し、不要な刺激はしたくないので武器は殆ど置いていき単身、船から島へと向かう。

部下を連れて行くように言われたがああのゲッコー・モリア相手である、下手に人数連れて行くよりも単身乗り込んだ方が手っ取り早いだろう。

ただ、対策は分かっているので途中で厨房に寄り、とある物を用意してもらおう。

いざとなればこいつで何とか：と、そう考えつつ月歩を使って島にて降り立ち周囲を確認する。

まるでゴースト・アイランドとでも呼ぶべきだろうか。

目に見える範囲ではなく島を朽ちて所々崩れた城壁学校での囲んでおり古い大きな、そして不気味な屋敷が見える。

その奥には薄っすらとしか見えないが塔のようなもの。

確か原作だとモリアはあの奥の塔にいたなと考えつつ脚を進める。月歩を使って飛んで行けば早いのだろうが、折角なので色々見ていると考え歩を進める。

降り立った場所が正規の入り口では無いのでそのまま目の前の堀に飛び込みそれに沿って歩いてゆけばその所々には夥しい数の骸骨。軽く見たところまだ新しい物からかなり古いものまで様々、この島にも色々歴史があるのだろう。

そういえばいつだったか西の海から島が消えたとの報告が上がってたな。

そう考えつつ歩いていけば上り階段に差し掛かかりそのまま上がっていけばそこにあつたのは深い森。

ご多分に漏れず深い霧で覆われており所々には崩れた建物、肝試しなんかにはピツタリの場所だろうと考えつつ屋敷の方へ歩みを進めるが気がかりが一つ。

未だにゾンビが出てこないな？と思いつつ足を進める。

そしてようやく森を抜け出たあたりで少し鼻につく匂い、腐臭であ



る。

薄いものであるがとうとうお出ましか？と思いつつ墓場を前に油断なく周囲を確認すれば地面の下から湧き出る複数の腕。

おどろおどろしい声を出しつつとてもじゃないが生きてるとは思えない肌の色をした人間達が現れた。

「ああ、丁度良かった。島に降りて誰も人がいないんで難儀してたんでな。誰か主人の元まで案内してくれないだろうか？」

腐臭はするがかなり薄いもので防腐処理はしてあるのだろう、だが見たところ体に手を加えられている訳ではないようでそれもそうかと考え直す。

原作で出てきたゾンビ達はどれもこれもドクトル・ホグバックによつて改造、強化された個体でありシンドリー嬢が亡くなつておらず、ホグバックがモリアの誘いに乗つてない以上このゾンビ達はノーマルなゾンビという事だろう。

とは言え呻きながら襲つて来るゾンビ達がいではそうそう考え事も中断せざるを得ないのでガントレットをカチリと操作し手首の内側から炎を噴出させる

「おいゾンビーズ、それ以上近づけば燃やし尽くすぞ？」

「やべー！火だ！」

「離れる離れる！」

「アブねーだろゴルあ！」

となかなかの評価をゾンビ達からもらいつつなかなか流暢に喋るもんだな、と考える

「さてゾンビーズ、手短に言うぞ？」

燃やされたくなけりやさつさとゲツコー・モリアのところに案内しろ。

「いや、おれたちそういう情報関係とか言っちゃダメって決まってるんで…」

「そうそう、そういうのはそうそう言っちゃいけないってコンプライアンスで決まってる…」

「だったら知ってそんな奴の場所でもいいが？」

その問いにも沈黙で返すゾンビ達と暫く睨み合いを続けるも、まあ行く場所は決まってるからいいか、と思いつつ

「邪魔して悪かったな、じゃあ俺は行くがくれぐれも邪魔してくれるなよ?」

そう告げて立ち上がり墓場の外に向かおうとすれば

「…って誰がいかせるか!」

「やっちまえてめえら!!」

「ゾンビの危険度!教えてやるよ!」

一斉に飛びかかって来るゾンビ達。

「邪魔してくれるなと言った筈だが…」

それに対して頭を抑えつつ背中 of 棍を引き抜き襲撃して来るゾンビ達を迎撃。

決着はあっけなく着き墓場には地面に半分めり込んだゾンビ達の姿。

それを尻目にさっさと屋敷の方に向かい巨大な扉をノックすれば  
応じたのはタキシードを着ているがこれまたゾンビ。

生きてる人間はいないのかと考えつつも墓場のゾンビーズとは違い  
理知的な対応だったので身分と要件を告げ暫く待つ。

1時間程だろうか、ようやく先ほどのタキシードゾンビがこちらに  
お越し下さい、と案内を再開したのでその後ろに着いていくのであつた。

## 影支配者 ドンクリーク

案内の途中で半透明のヒトガタがふわふわと浮いているのを見た。

あの特徴的な姿、おそらくはホロホロの実の能力であろう。

となるとペローナは既にここにいるという事だろう、ホグバツクはファウス島にいたのでモリアの下にはつかないとして、今のところアブサロムの姿が見えない。

原作ではスケスケの実の透明人間として麦わらの一味を苦戦させていたが確か敗れた後はフリーライターをやっていたんだっただか？

そう思考を続けていると扉を通されそこは黒や白、赤や金を基調とした洋風で豪華に飾られた部屋。

その部屋の中央、椅子に腰掛けた男が口を開く。

「キシキシシ、海軍がそれもわざわざ」赤カモメ」が出張って来るとはな？

何か話があると聞いたからこうして席を設けてやったがおれを捕まえに来たってんなら話は別だぞ？」

角が生えた額、細く尖った顎に鋭い目つき。

その体は大男と言って差し支え無いが鍛えられた素肌に羽織るのはレザーのジャケット。

原作と違い随分とスマートなその姿に一瞬考えるがモリアも最初からあの肥満体だったわけでは無いしそれも当然かと思ひ直す。

「初めましてになるなゲッコー・モリア。

俺は海軍独立遊撃隊長のクリークだ、別にお前を捕らえに来たつもりはないぞ今回はな。

政府からの手紙だ、本来なら普通に届ける筈がお前が厄介なところにいるから俺達にお鉢が回ってきただけさ。」

「ほお？政府がわざわざ？」

そう言っ手紙を受け取り読み始めるモリア。

ゲッコー・モリア。

懸賞金額3億二千万ベリー。

スリラーバーク海賊団の船長であり、偉大なる航路にある”フロリアン・トライアングル”に浮かぶ島を改造した巨大船スリラーバークの主。

かつてはゲッコウ海賊団という全く別の海賊団を率い、当時は自力の過信と野心に満ちており、百獣のカイドウを相手取れるほどの海賊であったがワノ国にてカイドウとの抗争に敗れた後に西の海に敗走。その後どうやってかこのグランドラインにて潜み、部下の重要性に着眼してその為に”夜討ち”と呼ばれる海賊狩を行っている。

パラミシア系カゲカゲの身を食べた能力者であり、その異名は”影の支配者”

その能力の真骨頂は相手の影を奪い、そしてそれらを死体に入れる事で自身の部下として使役できると言う点であろう。

道中にいたゾンビ達はすべてこのモリアの能力により作られた存在であり、それらは痛みを感じず、死を恐れない無敵の兵士となりうるのだ。

原作で麦わらの一味と戦った時は長年の不摂生と、部下に任せきりにする性格が災いして大きく力を減じており、ドフラミンゴにも”もう七武海には力不足”とまで言われる有様であったが今のモリアはまだかつての実力を保持している。

油断はならない、と慎重に対応しようと考えモリアが手紙を読み終えるのを大人しく待つ。

やがて手紙を読み終わったモリアは顔を上げて

「ほお？このおれを七武海に？これには書いてないが何でおれを指名してきたか知ってるか？」

「お前が行なっている”夜討ち”と称される海賊狩。

これに海賊の殲滅に一定の効力がある物として政府の人間が目をつけたらしい。

個人的に言わせてもらえば海賊旗に合わせて青十字を掲げた海賊を狩るのはやめて欲しいんだがな？」

「キシキシシ！実力を考えねえバカどもが喧嘩を売って来ただけさ！」

「……とりあえず極力抑えてくれればそれでいい。」

で、この話受けるか受けないかどうする？ 受けた場合お前に掛かっている懸賞金は取り消しとなる、お前の海賊狩りについてもとやかに言うつもりもない。

そして政府からの招集がかかった場合これに応じなければならぬという義務が発生する。

以上だ、できれば早めに答えを出してくれるとありがたい。」  
と、モリアに問いかけるのだった。

## 幽霊姫君 ドンクリーク

「キシキシシ、いいだろうお前らの思惑に乗ってやる。」

「そうか、いい報告を持ち帰れそうで何よりだな。」

「ついでに後2つほど聞いておきたいんだがいいか？」

「何だ？今のおれは機嫌がいいからな、大抵の事なら教えてやるぞ？」

と余裕の表情を浮かべるモリアに問いかける

「来る途中に見えた不可思議な生物についてだが…」

「なんだ、ゾンビ共の事か？」

「いや、半透明のまるでゴーストのような生物だが」

「!!ペローナ、引っ込んでろと言ったろうが!!」

と、突如天井に向かって大声を上げるモリア、それに対して

「で、でもモリア様あ、海軍に会うって言っただけから心配でえ…」

天井を通り抜けフワリと現れたのは桃色の髪に特徴的な目をした少女、年の頃は10代前半というところだろうか。

モリアが名前を呼んだがホロホロの実の霊体人間、原作ではゴーストプリンセスの異名を持っていたペローナで間違いないようだ。

とは言え原作での勝気で我儘な様子はあまり無く見た感じしんどおどとした様子だが言葉通りモリアの心配をしたと言うのは本当だろう。

「ふむ、能力者か。しかしこんな少女を誘拐とは頂けないな、こちらで保護させてもらおうか」

「ためエー！おれの可愛い部下に何しようってんだ！それにこいつは捨てられてたからおれが拾ったんだ！」

ビリビリとした迫力でこちらに怒鳴りつけるモリア、流石に3大海賊の一角、カイドウと渡り合っただけの事はある。

「すまん、こちらの非礼を詫びさせてもらう。」

「…っ、わかりやあいなんだよ。で、もう一つの質問ってのは何だ？」

さて、ペローナがいると言う事は掴めた、後は教えてくれるとは思われないが脅威になりうる情報を確認しておかなければな。

「…」 魔人” の死体は手に入れてるのか？」

「っ！何処でそれを!!」

思わず叫ぶと同時に慌てて口を押さえるモリアであったが

「なるほど、やっぱりお前が持っていたのか」

「…どっからだ、どこからその話を聞いた？」

自分の迂闊な返事を悔やむがそれよりも情報が漏れた場所を掴む方が大事だろうと判断したのか隠さずにこちらに問いかけるモリア

「北の海に魔人の死体が眠っていると言うのは海軍内では有名な噂話でな、かれこれ十年前になるか？それを休暇がてら探しに行った時に俺が見つけたのさ。」

まあ遺体だからどうこう利用できるもんでもなしそのままにしていたが…しかしどうだろう、先日北の海で用事ついで見に行ったら忽然と”魔人”の遺体が消えていてな。

で、持つて行きそうな人物をピックアップした中にお前がいたってだけさ」

まあ全くもって真っ赤な嘘なんだけどね。

「ちっ、赤カモメは全ての海を回ってるとは言いが手が広すぎるんじゃないかねか？で、どうするんだ取り上げるのか？」

「…別に暫定七武海にどうこう言うつもりはねえよ、まあその力が一般民衆に向くってんなら容赦しないがな」

と、片手を上げ指をバキリと鳴らして見せる。

「キシキシシ、おれ」は、動かねえよ。動く気もねえしな。」

「…ならば良い、邪魔したなゲツコー・モリア。そっちのお嬢さんも騒がしくして悪かったな。」

「フン！海軍なんかさっさとどっかに行つてしまえ！」

「そう邪険にしてやるなペローナ。それよりも質問には答えたんだ、こっちの質問にも答えてもらおうぞ？」

聞くだけ聞いてさっさとおさらばというのは流石に虫がいい話だったな、と考えつつ

「…いいだろう、特秘に関わる範囲外ならな」

と答えれば

「そうだな…カイドウの野郎は今…いや、辞めとくか。お前が言う一

般民衆に悪徳業者や海賊なんかは含まれるのか？」

カイドウの何を聞こうとしたのだろうか、ひよつとして未だにカイドウに敗れた事を引きずってるのか？

「明確な線引きをしてるわけではないが…海賊なんかは公認、違法含めて自己責任だろうし悪徳業者なんかは司法の管轄だから…」

「キシシシ、となるとこっちは手を出しても問題無いな？」

「だから公認海賊にはあまり手を出さないで欲しいんだが…」

「だったら”極力”手は出さないで置いてやる、向こうが喧嘩を売ってきたら別だがな？」

「ああ、それでいい。それで二つ目の質問は？」

そこで考え込むモリア、考えてなかったのか？と思いつつ暫く待たば

「…そうだ覆面髑髏、ティーチって名前だったか？そいつについて教えやがれ。

あいつの影は是非とも欲しい、マリージョアを襲撃しそして逃げおさせたその実力、三億九千万の戦闘力をあの没人形に入れば…キシシシキシシシ！」

「んー、これは特秘情報だが…まあ調べればわかる範囲でなら教えてやる。

今のところティーチとはその覆面が名乗っただけで本名かどうかは不明だ。

現在一番有力視されてるのは白ひげの船にいる男で名前は”マッシュナル・D・ティーチ” 勿論この男が髑髏覆面と決定したわけでは無いがな。」

「白ひげ…チツ、カイドウと同じく三大海賊の一角じゃねえか…海軍に白ひげとやり合う計画とか無いか？」

「質問は二つだけ、話はここまでだ。」

お前の七武海就任については政府に報告、後日新聞などで公布されるだろうが何か質問はあるか？」

「キシシシ、しかしこのおれが七武海か。そうそう勿論部下たちにも懸賞金はつかないんだよな？」



「ああ、恩赦という扱いになるからな。じゃあせいぜい”夜討ち”のやり過ぎには気をつけるこつたな」

「キシキシキシシ！おれ”は”やり過ぎないぜ！」

含みを感じる言葉であるがここから先弱体化していくのか、と額を抑えるもそのまま別れを告げ船に戻るのであった。

## 250 話記念 もしも彼が料理の道に進んでいたら

ここは造船の街ウォーターセブン。

麦わらの一行は仲間であるロビンを救い出すために政府の諜報機関、CP9との激闘を終えウォーターセブンの市長でありガレーラカンパニーの社長であるアイスバーグに匿われ、それぞれが休息をとっていた。

彼等は新しい船をフランキーが作らせてくれと頼み込んだ事に了承しその完成を待っていたのだった。

途中麦わらのルフィの祖父であるモンキー・D・ガープが襲撃してきたり、街の人間みんなを巻き込んでの宴会等あったがひとまず置いておこう。

そんな中麦わらの一味でコックを務める男、サンジはとある話をアイスバーグから聞いたのだった。

「あ？料理コンテストだど？」

「シマー、コックなら興味あるんじゃないかと思つてな？」

「こんなアクアラグナの直後だつてのによくそんな余裕があるもんだなこの街は」

「お前さんは知ってるか知らんが海列車で繋がる町にプッチと言う美食の街があるんだ。」

そこの市長、ビミネという男なんだが彼の娘が今回のアクアラグナで被災したこの島に救援物資を持ってやって来ている。」

「へえ、美人なのか？」

「ああ、まあ婚約者はいるがな」

「…で、それが料理コンテストになんの関係があるんだ？」

「ああ、彼女の婚約者も同行してるんだがその男が復興の手助けとしてもとプッチで行うはずだった大会をここでの開催に希望してるんだが…」

「どっかのお偉いさんか？」

「シマー、お前さんも聞いた事あると思うがGIFCって知ってるか？」

「G I F C・・・グローバル・インターナショナル・フーズ・カンパニーだったか？」

世界を股にかけて食材、料理において手広くやってる超大手の企業だったな、あそこのスパイスとかは出来がいいから愛用してるぜ？」  
「ああその企業だな、何を隠そうその婚約者の男こそがG I F Cの社長であり世界最高との呼び声も高い料理人なんだが・・・」

「・・・へえ、その男も料理コンテストとやらに出るのか？」

「ああ、と言っても優勝した者とのエキシビジョンマッチのようなものだけだな」

「面白そうじゃねえか、ちよつと興味がでてきたな」

「因みに優勝賞金は一千万ベリーだ、どうだ出てみないか？」

「興味はあるがコンテストか・・・どうしたもんか・・・」

面白そうな話を聞き興味は出たが流石に一味がかなり大きな騒ぎを起こしている以上あまり大きな集まりには出ない方がいいだろう、と考えて断ろうとしたサンジであったが、その話に乱入者が。

「サンジくーん、話は聞いたわよ？」

一千万、何としてもとってきてね？一億あつた資金をうちの船長がゼーんぶ宴会で使っちゃったからカツカツなのよね・・・」

そう声をかけてきたのは麦わらの一味で航海士を務める女性ナミ。彼女は一味の財布の紐を握っており一億ベリーあつた資金を自分の船長が街の人々との宴会にほぼ全てを使い切ってしまった事に頭を抱えていた。

「因みに大会はかなり大規模だ、一般の料理人だけではなく海賊、海軍入り乱れての大会だと」

「えー、海軍も来るっていうなら捕まっちゃうじゃないの！」

と思わず声を上げるナミだったが

「ンマー安心しろお嬢ちゃん、知つての通りG I F Cは超大手だ、それこそ世界政府にすら顔がきく程にな。」

元々プツチでは年に一回その大会が開かれていてな、今回その日程をずらして開催する事になったんだが元々その大会は例え相手が海賊や海軍でも騒ぎは御法度になっている。

だから出場したからと言って別にデメリットはないがどうする？」「よしっ！サンジ君！見事優勝して一千万ベリーをとってきてね！」「任せてくれナミさん！世界最高だか何だか知らないがナミさんの為に優勝してくるぜ！」

「ソマー出場という事でいいんだな？因みに大会の名前は”エディブル・ファイト” 世界各国の料理人だけでなく海軍のコックや海賊の料理人、あらゆる曲者が集まってくる、せいぜい楽しんでくれ。

因みに大会は明後日だ、食材などは向こうが用意するから道具だけ準備しておいてくれ」

そう言つてアイスバーグはその場を立ち去り残されたサンジは

「エディブル・ファイトか…世界各国の料理人に海賊や海軍のコック…面白くなってきたな！」

とまだ見ぬ強敵に想いを馳せ密かに燃えていた、ナミからエールをもらった（もらつてない）のも影響しているかもしれないが。

そしてあつという間に日は経ち新しい船の完成待ち二日目、サンジは自らの腕を奮い次々と出されるお題に対して巧みな技で調理

そして決勝戦にてお題の”カレー” に対しサンジはウォーターセブンにおいて馴染み深い食材である水水肉を使用した”ウォーターチキン・カレー” を作り決勝相手である海軍の料理人が繰り出した珠玉の海軍シーフードカレーに対し勝利、見事優勝を飾った。

そして残るはエキシビジョンマッチ。

「サンジくん！優勝のついでに世界最高の料理人なんて負かしちゃいなさーい！」

応援に来ていた仲間の航海士の野次に苦笑しつつもそれに手を挙げて答えるサンジ。

「さあ…会場にお越しの皆様！お待たせいたしました！」

まずは今大会の優勝者であるサンジ氏！

数々の優れた料理を繰り出し決勝戦においてはこのウォーターセブンでも馴染み深い食材である水水肉を使用するという嬉しい心遣い！

馴染みが薄い食材でありながらここまでの料理にする若いながら

も素晴らしいその腕前。

「それもそうだ！皆様もご存知でしょう、東の海にあるかの海上レストラン”バラテイエ”!!」

副料理長を務め、東の海で行われたコンテストにおいては東の海で最優との呼びび声も名高い女性シェフ”カルメン”を打ち破った男！

現在は麦わらのルフィの元で一味のコックを務めてる海賊コックの”サンジ”!!」

司会その言葉に会場にはサンジを応援する声が響き紹介された本人は随分と詳細に調べてあるもんだ、と感心する。

「そして今回のファイト！対するは我がプッチの救世主にしてG I FC社長！料理界のドンとも呼ばれ、過去のエディブルファイトの全てにおいて優勝を飾ってきた世界最高の料理人とも名高いクリーク社長だー!!!」

その言葉と共に会場のボルテージは最高潮に、現れた男は大柄なその身体を赤を基調としたコックスーツに同じく赤いバンダナに薄紫の髪を閉じ込めた仏頂面の男

「マルミエータちゃんとの婚約者って聞いてたからどんな優男かと思えば…ずいぶんとゴツイやつが出てきたな…」

と、サンジはエディブルファイトが始まる前に少しだけ話した大会主催者であり、傍らに双眼鏡をしかと持っていた女性を思い出してそう言う

「なんだマルミエータの知り合いか？」

まあいい。サンジ、お前の試合は見ていたがかなりの腕前だな。

流石かの赫脚のゼフの薫陶を受けただけのことはあるな。」

「っ!!何処でそれを…」

「ゼフのおっさんには一時期料理を教わったからな。」

まあ俺は俺の作れる最高の料理を作るだけだ、せいぜい会場を2人で沸かしてやろうじゃねえか」

「それでは2人の料理人の準備が整うのを待つ間にルーレットを！

今回のテーマは…な！なんと奇しくも決勝戦と同じくテーマはカ  
レーー！

これはサンジ選手！決勝戦で最高のカレーを作ってしまった事で不利か!？」

「おい司会者、コック舐めんなよ？コックなら手札の一つや二つや三つや四つ持つてるのは当たり前だろうが。」

「たかだか数皿でそのコックの全てがわかるっていうのか？」

と包丁片手に口を開くサンジ

「おおーっと痺れる言葉！ルックスもいいがその態度も惚れちまいそうですねー！」

「よせやい、男に興味はねえよ」

「では両者準備が整ったようで…エディブル・ファイト、レディー…  
ゴー!!」

その言葉と共に2人は猛然と調理にかかり出したのだった。

そうしてその日の夜

「プラチナム・チキンカレー…流石世界最高の料理人。看板に偽り無しってか？」

サンジは1人ガレーラカンパニーの屋上にて昼間のエキシビジョンマッチを思い出していた。

こっちにも配膳されたのを食して見たがまずはルウ。

丁寧に調理され極限まで引き出された玉ねぎの甘みに濃厚な鳥の旨味。

何度も濾された事によりその舌触りはとても滑らかでありながらその合間合間に口の中に広がるボリボリとした食感。

あれはきつとキャラメルだろう、そしてその中には粗挽きのスパイスが閉じ込めてあり程良いアクセントになっていた。

そしてクミン、コリアンダー、クローブ、カルダモンといった一般的にカレーに使われるスパイスの他にラカンカヤスマツクといったスパイスにより味を一段上に押し上げていた。

そしてライスもだ。

三種類の品種のライスを使いそこに米麴を入れる事によりそれらを違和感なく一つにまとめ上げていた。

そして極め付けはルウに使われた出汁、通常は一度でいいものを「まさか三回もとつてるとは恐れ入った、二回出汁をとったチキンスープは黄金に輝くというが三回となればさしずめプラチナ：プラチナム・チキンカレーとはよく言ったもんだな…」

とクリークの作り上げたカレーに思いを馳せていたサンジに声がかけられる

「あ、いたいたサンジくん。ルフィがさつきからカレー作ってくれてうるさいのよ」

「ああ、悪い。そういや晩飯まだ作ってなかったな直ぐに作るからちよつと待っててくれ」

「…昼間の勝負、やっぱり悔しい？」

「いや、おれは出来るだけの物を作ったさ。おれ達の船長が食べたいと思うようなそんなカレーをな」

「ま、あたしはサンジ君の料理は好きよ？」

「ナ、ナミさんがおれの事を好きって!」

そんな言葉に繰り出されるのは一味の軌道修正に一役買っている鉄拳

「言っていないから!…全く落ち込んでるんじゃないかと思って損したじゃない」

「…落ち込んでるってのは違うぜナミさん、それよりもまだまだ料理の世界は広いつてワクワクしてるところさ。」

世界最高の料理人、か。オールブルーもだけどそっちを目指してみるのもありかもしれねえってさ」

「ふーん? まあ料理が上手くなるのは大歓迎だけど…」

「さて!じゃあうちの船長が腹を空かせてるだろうしいつちよ最高のカレーでも作ってやるか!」

そうしてサンジは新たな壁を心に留めつつ立ち上がり自らの腕を奮いに厨房へと向かうのであった。

## 新七武海 ドンクリーク

無事に政府からの命であるゲッコー・モリアの七武海への勧誘を完了したクリークの姿は、マリルフォードにある海軍本部、海軍のトップである元帥、センゴクの執務室にあった

「そうか」苦勞、五老星の方にはこちらから伝えておこう。」

任務の報告を終えたクリークを労い後の事はこちらでやっておくと伝えるセンゴクに対しクリークは追加の情報を伝えておく

「どうも、追加報告であります。今回七武海として就任するゲッコー・モリアであります。中々厄介な戦力を持っているようです……」

「厄介な戦力だと？それは海軍を脅やかすようなものか？」

「場合によっては。元帥殿は国引き伝説をご存知で？」

「ああ、確かそんな昔話があったな。それと何の関係が？」

「白ひげ傘下のリトルオーズJr、彼の種族は古代巨人種ですが彼の先祖でありその国引き伝説を残した張本人、オーズの死体を所有しているようです」

「あの巨体をか……何とも厄介だが彼奴とて別に表立って海軍に反旗を翻すような馬鹿ではないだろう。」

「とは言え確か原作でのオーズは右腕だったが左腕だったかが大きく破損しており現状では使い物にならなかった筈。」

ドクトル・ホグバックの改造によってあの姿だったわけだしとんでもない脅威というわけでもないだろう。」

「それから奴はティーチに興味を示していたようですが……」

「あの海域から出てくると思うか？」

「可能性はゼロではないかと、どうしますか？対処しますか？」

「とは言えカイドウに敗れて以降自身の力ではなく部下にやらせるスタイルに移行した筈だしよほどの事がなければフロリアン・トライアングルに引き籠もったままではないか？」

「……いや、とりあえず様子を見よう。」

新たに就任した七武海の2人、そのうちの1人が即刻除籍となれば



政府の面目は丸潰れだろう」

セングク元帥も大事は無いと判断したのかゲツコー・モリアについてはそこで終わりもう1人の新たな七武海であるジンベエに話は移る

「おや、となるとジンベエの方は首尾良く行ったので？」

「ああ、ジンベエの方はクザンが自ら交渉にあたり快く受諾してきた。

ただ七武海加入の条件としてマリージョア襲撃の際に逃げ出した元奴隷の解放、及び捕らえたタイヨウの海賊団の構成員の解放という条件を出されたがな。

ほら、お前が魚人島に行った時に持ってきた情報の中にあつたろう。

リュウグウ王国の近海にて海賊行為を行なっていたアーロンという魚人だ」

「ああ、例の。フィッシャー・タイガーを”騙し討ちに”した際に殴り込みをかけてきたとか言う・・・

しかし大将自ら勧誘に赴くというのは随分とこの事を重視しているようですね」

まあ赤青黄で秘密裏に話し合いをもった時に捕まったアーロンの解放も合わせて裏で話は通してあるし、海軍はそれほど重視しているという対外的なアピールの為にクザンに自ら立候補してもらったんだけどね

「随分と言葉に棘があるな、やはりフィッシャー・タイガーの捕縛は反対だったか？」

勧誘についてはクザンの奴が自ら頼み込んできてな、是非ともこの勧誘は成功させなければ、と自ら立候補してきたのだ。

しかしフィッシャー・タイガーについては残念だったな、できれば生きて捕縛したかったのだが・・・」

「でしたら何故強行な手をとったのです？彼はただ元奴隷であった少女を故郷に送り届けただけなのですよ？」

「・・・耳が痛い事だな、しかし奴を捕らえるのは政府のメンツもあり急務だったのだ、貴様ならわかるだろう？」

「個人的には納得できませんがまあ組織である以上仕方ないとは思いますが・・・」

「そういやお前の正義は、利己的」だったな、別に納得しろとは言わんが命令には従ってくれ」

そんなセンゴクの言葉にまあフィツシヤー・タイガー生きてるんだけどね、などと思いつつ退出するのであった。

## 新たな船 ドンクリークさん

マリンフォードにて報告を終えて次の日、クリークの姿は海軍船舶基地にあった。

元々は海軍のグランドライン支部の一つであり主に艦船の建造を行っていたが”四海制覇”の一環で役割を分担し新たに艦船の建造、補修をメインとした”船舶班”として生まれ変わっていた。

そして船舶基地に多数あるドッグ、三人の仮面を被った巨人が忙しく動き回る最中をクリークと船舶班の班長は連れ立って抜ける。一番奥のドッグへと向かう。

「ほう、これが・・・」

「ええ、少将が自ら提案して建造された”シャーロット・アンジェ号”をモデルとして継承しつつ新造された”フィーネ・イゼッタ号”です。」

そこにあつたのは帆装や武装などの艤装はまだ施されていないがシャーロット・アンジェ号と似たスマートで優美なシルエットの船がそこにはあつた

「シャーロット・アンジェ号と同型・・・いや、少し違うな」

「はい、シャーロット・アンジェ号と同じくバーク形式を用いておりますがモデルとしてですので所々違いはあるかと」

「バーク形式という事は・・・」

「ええ、ご存知の通りバーク型の特徴は通常の帆船と比較して船員が少なくて済む事です。」

更に所々に自動化を進めていますので操作乗員は通常の海軍艦ほどの人員は必要ありません。人数は限られていますからね。

それから他にバーク形式の特徴として船底が平らな為水深が浅いところでも航行可能です、船底にはシャーロット・アンジェ号と同じく海棲石を敷き詰めています。」

「外輪はやはり難しかったか？」

「ええ、流石にパドルシップはまだ開発されて間もないですからね、技術的に習熟がまだ十分とは言えませんからね。」

それに長期の航海が多い遊撃隊の船ともなれば各海軍基地で修理する事も有るでしょうが、技術的に全土に普及していると言いつても難しいパドル形式は壊れた際何処でも修理する事は出来ないでしょうから」

「む……最もな意見だな、確かにシャーロット・アンジエ号も各支部にて修理する事もあるからな……」

「ですがクリーク少将が提言していた”すくりゅう理論”なるものを搭載しました！」

「スクリューが実用化にこじつけたのか!?しかしそれこそ技術的にも習熟は全く無いのでは？」

「いえ、実用化とは程遠いものです。」

少将が提唱している”すくりゅう理論”なる物を技術班、科学班と協議した結果、回転翼が水をかくことによつて回転軸方向に揚力を作り出し推進する力を得る事は可能との見解を得られました。

少将の理論では蒸気機関や電気を用いての完全自動化との事でしたが、なにぶんパドル理論よりも新しいとあつて現状では完全自動化は難しいとの結論になりました」

「となれば何故搭載を？」

「はい、通常事は従来通りマストに風を受けて航行となりますが、緊急時に限りという事で”完全な人力”での機関搭載となりました」

「え……人力？」

「はい！形式は自転車と同じくペダルを踏み込んで回転させその動力を回転翼へと伝えます。」

……とは言えかなり重たいので普通の人間には踏み込む事は出来ませんが」

「……まさか俺が？」

「ええ！少将であればこの程度の重さは問題無いでしょうし、提唱者ですから！」

これを参考事例として科学班及び技術班と提携して一刻も早い実用化を目指すつもりです！

それから修理に関してはこの”人力すくりゅう機関”は人力ですので動力を伝える為の歯車がメインですから修理は容易となつてま

す。

構造が簡素な為多少の無茶は効きますしこの”人力すくりゅう機関”は全力で動かせばかなりの速力がだせるかと」

「・・・自ら提案した以上協力はしよう、非常の際に速力がある事は望ましい事だしな」

「ですので緊急時の使用の際は是非ともレポートの提出をお願いします」

「・・・善処しよう。」

そういえば”スクリュー理論”はいいとして”キャタピラ理論”はどうなっている？」

「ああ、”すくりゅう理論”と同じく提唱していた”きやたぴら理論”については試作品は完成しました。」

「・・・ですがパドルを転用する形で行なったので機関部も含め大きさがとんでも無い事になりました」

目下のところ実用化にあたっては小型化を推し進める方向ですがこれに難儀しているようで・・・」

と新たな形式を船の動力として注目している船舶班の班長と話し合いを続けるのだった。

## 頭痛鈍熊 ドンクリーク

「はあ!? マリージョアで軟禁されてるはずの天竜人が魚人島に向かっただど!?」

例の病疫で生き残ったのは少数、護衛と称してそれぞれに見張りをつけていただろうが!

一体何処のバカがどうやって! いつ! どういう理由で抜け出したっ!!」

原作で起こった天竜人の魚人島にての遭難、天竜人それぞれに護衛をつけていたので安心だと思ってたらこのザマである。

『抑えてくださいい少将! そんな政府批判みたいな事あまり大っぴらに叫ぶ物じゃないですよ!』

時期としては一週間前程です、報告が遅れて申し訳ありません』

知らせてくれたマリージョアに駐屯する海軍の知り合いが向こう側から諫めてきたので冷静になる

「・・・すまん、取り乱した。で、抜け出した経緯はわかるか?」

『見張りをつけていたのですが頭が痛い事にその天竜人が用意した金に転んだようで・・・』

「何処の馬鹿だ! 何の為の護衛という名の見張りだと思ってる!」

『えーと・・・ああ、ありました。』

今回抜け出したドンキホーテ・ミョスガルド聖についていたのはガバナー大尉ですね。

本人が強く天竜人の護衛に就く事を希望したので護衛としてつけましたが・・・」

「ガバナー大尉か・・・知らん名前だが所属は?」

『頭が痛い事に本部所属です、本人は既に抜け出したミョズガルド聖と共に魚人島に向かったようでした戻り次第捕縛する予定です』

「ったく・・・こちらは直ぐにセンゴク元帥に掛け合ってみる、可能であれば見張りを増やす事を提言して魚人島に発つつもりだ。

そちらは天竜人に護衛兼見張りとして就いている者達の経歴を全て洗い直せ、可能ならば人数を増やす事も考えておいてくれ」

『了解しました、直ちに取り掛かります』

電伝虫を切り直ぐ様自身の執務室から元帥の執務室に向かうも

「その必要は無い、見張り・・・護衛を増やすのはいいが魚人島からは既にネプチューン王から聞いている。」

ミヨズガルド聖の船は海獣種に襲われたのか難破、本人は魚人島にて治療を受けているらしい」

「でしたら直ぐに部隊を！」

「治療が終わり次第リュウグウ王国の船でこちらに送り届けるとの事だ」

「ですが！」

「しかしお前がそんなに熱心だとはな、ガープと同じく天竜人を嫌っているのでは無かったのか？」

「・・・おっしゃる通り天竜人は気に入りませんがまた政府から色々言われるかと思うと」

流石に原作云々は言うわけにもいかないので適当な理由をつけておく

「とにかく今回の件で海軍は動く必要は無い、只でさえジンベエの七武海加入でごたついているのに海軍が魚人島に行つては藪をつつきかねん」

「つ・・・わかりました、では場合によっては暫く休暇を貰うかもしれないませんが宜しいですか？」

「それも却下だ、お前には行つてもらおう場所があるからな」

「・・・行つてもらおう場所？それは私で無ければならないのですか？」

「ああ、”赤髻”は知ってるな？」

「まあ有力な海賊は一応頭に叩き込んでありますが・・・確か東の海からこちらに戻つて来たとの情報は仕入れていますが」

「その赤髪の姿がシャボンディで確認された、奴の船のレッド・フォース号がコーティング作業を施されているのも掴んでいる」

「・・・と言う事は」

「ああ、十中八九間違いない。奴も新世界に入るつもりだろう。」

カイドウ、ビッグマム、白ひげの三大海賊が制する新世界へ、現状

それ以外では最も力のある赤髪が入るとなると新世界は荒れるかもしれない」

その情報に頭を抑える。

こちらは赤髪を知っておりグラウンドラインに戻るように焚きつけたのはこちらだが、センゴク元帥はそんな事は知らず三大海賊の睨み合いにて現状を保っているところに余計な刺激を与えたく無いのだから。

「・・・わかりました、魚人島に関しては前回行った際に王族とは面識があるので何かあつたら知らせて下さい。

それから今回買収されたガバナール大尉は厳しく罰しておくようにお願いします。仮にも本部の人間が買収されたとあつては民衆に顔向けできませんから見せしめとしてお願いします」

「わかった、奴が無事に戻ってくればそのように取り計ろう」

「・・・それでは失礼します」

と、クリークはこれから先の原作知識を思い出しつつ元帥執務室を出たのだった。



## 原作竜宮 ドンクreek

原作の通りオトヒメ王妃がやってくるとは・・・

耳敏い者は直ぐにそれを聞きつけ何やら裏で動いていた。

そしてそれを取り締まる為にクreek達海軍は大忙しであった。

天竜人と一緒に来たという魚人島の王妃、噂が広がるのはあつという間で一目それを見れないか、と人々はかなりの興味を持ち、そしてやはり悪い考えを持つ者はいるもので、裏では高く取引されている魚人、しかも地上には滅多に上がって来ない王族とあつてはよからぬ考えを持つ者もいるのだ。

その為海軍は不法にマリージョアへ入ろうとする者の排除であったり、マリージョア内で良からぬ者を捕らえる為に大忙しであった。

何しろオトヒメ王妃が来る事は事前には知らされておらずいきなりだったので、当然警備の計画など立てている筈も無く海軍はその対応に追われていたのだった。

その一方でクreekはオトヒメ王妃に面会を申し込んでいたが、これがなかなか通らず、原作を知っているクreekは自身の執務室でヤキモキしつつ今後の事を考えていた。

原作ではミヨズガルド聖はジンベエの七武海加入により、恩赦として自身の奴隷から解放された魚人達を取り返そうと考え自身の船で魚人島に向かい、そしてそこで難破し魚人島にて治療を受け送り届けられるとなっていた。

今回は天竜人がとある病疫にて激減しており、その為各天竜人には一人一人護衛という名目で監視がつけられ、できるだけマリージョアから出ないように・・・言ってしまうえば軽く軟禁をしていたので大丈夫だろうと高を括っていた。

そう、高を括っておりいざその時になればほぼ原作通りとなつてしまった。

勿論今回の件でやらかしてくれたガバナール大尉についてはとりあえず抗命罪で独房にぶちこんである。

叩けば色々と埃が出そうなので最終的には見せしめも兼ねてインペルダウンに叩き込む予定だが。

何はともあれ天竜人の遭難、魚人島への漂着、そしてリュウグウ王国によって救助されオトヒメ王妃まで同行、とここまで原作と同じ流れを辿った以上、今のままならこの先も同じになるだろう。

オトヒメ王妃はミョズガルド聖に対して根強い説得を行いとうとう魚人族と人間の友好の為にと一筆を書き、それがホーディ・ジョーンズの琴線に触れ”オトヒメ王妃暗殺事件”を引き起こす事態となり、ホーディは狡猾に立ち回り人間をオトヒメ王妃の暗殺の犯人に仕立て上げた。

それにより魚人族と人間の間には再び深い断絶が横たわり、そしてそれは麦わらの一味が魚人島に訪れる十数年後まで続く事となったのが原作での流れである。

そしてそれを何とかしたいのが本音であるが

「よりにもよって何でこの大事な瀬戸際に新世界行き・・・」

代わりに誰かを行かせるとなると・・・まず最有力候補はクリーク自ら未来予知という名目で原作知識を教えてあり、尚且つある程度魚人島の住民と面識があるテゾーロ。

だが今回彼は残念ながら営業の為にシャボンディを離れており直ぐにはこちらに戻って来れないとの事。

となれば次点としてはギンだが彼もファウス島で留守番のまま。

どうしたものか・・・と考えふと思いつく。

「そうか！丁度いい人材がいたな！」

シャボンディに滞在しており、そしてそれなりの戦闘力も持ち、そしてこちら側の人間でもあり。

そして更に言えばこれ以上無いくらいに魚人島の事を知っている絶好の人材が。

## 竜宮切札 ドンクreek

「で、話しておきたい事って何だクreek、ジンベエの事に関しては新聞で読んだが上手くやってくれたようじゃねえか」

誰もが寝静まる深い夜、シャボンディ諸島の隠れ家にてフィツシャー・タイガーは自身を死んだ事として匿いその後の保証をしてくれたクreekに呼び出され、隠れ家にて話し合いを行っていた。

「夜遅くにすまないスカル、ちよつと・・・いやかなり重大な話があっただな・・・」

・・・表向きは死んだ事になっているので今は”スカル”と名乗っているが。

フィツシャー・タイガーことスカルは死んだ事になった後、最近手が足りなくなつたクreekの裏の顔である覆面髑髏として活動してもらっている。

最近はおつぱらシャボンディ諸島にて一斉監査の目を逃れた一部の違法奴隷商にちよつかいを出す仕事を行なっていた。

そんな中今回のクreekから話し合いの提案を受け、そこで聞かされたのは自身にとつてもかなり重大な情報であつた。

「なつ！オトヒメ王妃の暗殺の可能性だ?!? どういう事だクreek!!」

「落ち着けスカル、まだ起きると決まつたわけじゃない。」

この情報はあちこちに潜ませているこちらの手の者から手に入れた情報を纏め上げたものだ、起こるかもしれないという程度だが：「その情報とやらを教えてください、知ってるに越した事は無いだろう」

「先ずはつい先日の話だ。」

オトヒメ王妃の己の身を賭けた話し合いによりミヨスガルド聖の説得に成功した。

ミヨスガルド聖は人間と魚人族の交友の為に動く事を決定したよ  
うだ。」

「それだけならば随分といい話だな・・・全くオトヒメ王妃は・・・あ

の人は凄いものだな……。

で、お前が懸念する暗殺事件。それが起こるかもしれないという推察の経緯は？」

「魚人島にいる過激派、と言えはわかるか？」

「……確かに、そういう一派がいるのは事実だ。」

しかし人間嫌いの筆頭となるアーロンもそこまで恩知らずではない、それにアーロンはジンベエの七武海加入による恩赦でインペルダウンから釈放された後、マクロと同じくタイヨウの海賊団から離脱した後に何処ぞに流れたと聞いているぜ？」

「いや、魚人島にいる過激派と言っただろう？アーロンではない。」

ホーデイ・ジョーンズという男を知っているか？まだ20にならないいくらの青年だが。」

「……いや聞かねえ名だな。そいつが過激派という事か？」

「ああ、ホーデイ・ジョーンズは現在リュウグウ王国の兵士として働いている。」

そして裏から調べた限り奴は裏では人間の襲撃を密かに行い、更に人間と仲良くする魚人族相手にも制裁を行っていた。

そしてそんな男が人間との友好の為に動くオトヒメ王妃、そしてそれを可能としようる可能性のある天竜人の書状。

それを前に何も動かないと思うか？」

「……次代に受け継がせねえ筈の意志がまだ残ってたって事か。」

それでおれはどう動くべきだ？確かに暗殺事件が起こると決まったわけじゃあねえ。」

だが魚人島は、リュウグウ王国は今あの人を亡くしては魚人族と人間の間には再び深い崖が横たわる事になるぞ？」

「その為にスカル、アンタには是非とも魚人島に向かって欲しい。」

残念ながら俺も、テゾーロも手が離せなくてな……。」

「どの程度までなら問題ねえんだ？」

「少なくともフィッツシャー・タイガーの生存がバレルのはくれぐれも無いようにしてくれ。」

難しいようであればオトヒメ王妃、ネプチューン王の両者だけなら

バレても良いがくれぐれも他言無用を確約させてほしい。

覆面髑髏が魚人島にいる、ぐらいであれば問題ない。

やる事としては念の為という事でオトヒメ王妃の警護、こちらも念の為という事で魚人族と人間の友好を名目にプレゼントを贈るが絶対とは言えないからな。」

「わかった、オトヒメ王妃が魚人島に帰るのはいつだ？」

「五日前にここに来たが二日後に帰還する予定だそうだが、だからアンタには帰還する船に忍び込んでもらう事になると思うが・・・」

「船なんざ必要ねえ、おれを誰だと思ってるんだ？」

「・・・そうだったな、魚人は海こそが自分の庭だったな。」

ではくれぐれも頼む、俺も海軍の任務があつてしばらく新世界にいる事になるから付きつきりにはなれん、正体さえバレなければある程度はアンタの裁量で動いてくれ。」

そうしてフィッシャー・タイガー・・・もとい”スカル”の魚人島行きが決定したのだった。

## 竜宮顛末 ドンクリーク

それはクリークがマリンプォードから新世界に出発して数ヶ月後の事であった。

世界中を飛び回るニュース・クーと呼ばれる新聞カモメに、いつも通り数枚のコインを渡して新聞を受け取る。

一面の見出しに出ているのは

” 魚人島にて王族暗殺未遂事件発生!! 犯人は人間か!?”  
という見出しであった。

フィッシャー・タイガーは無事暗殺を阻止できたようだな、と考えつつ記事を読み進める。

犯行は白昼堂々行われたようで演説を行っていたオトヒメ王妃にどこからか銃弾が撃たれたそうだ。

幸いな事に銃弾は海軍から友好の名目でプレゼントされたストーリーによって防がれたとの事である。

これはクリークの進言で何かの足しになれば、と防弾加工が施されたストールを贈っており” 友好の象徴” を猛プッシュしていつでも身につけてもらうようお願いしたものである。

勿論、防弾加工云々は一言たりともオトヒメ王妃に告げていないが。

その身ひとつで争いに突っ込んでいくその性格からして、そんなものが施してあるなど知れば絶対に身につけようとはしなかつただろう。

そのお陰により、衝撃の所為なのか気絶はしたものの幸いにも命に別状は無く、直ちにリュウグウ王国の兵士が現場に向かうもそこにあつたのは何者かが争った痕跡とライフルを持った人間の死体。

これにより人間に対して軟化していた魚人族は再び態度を硬化させるという事態になった。

しかしオトヒメ王妃は助かったのだ原作のような断絶にはならない・・・だろう、多分。

新聞にはホーデイ・ジョーンズの事など書いてあるはずも無く死体となつた人間が犯人では無いかと結論づけられていた。

争つた痕跡があるのでまだ他に仲間がいたのかもしれないとも書かれていたが。

争つた痕跡という事はホーデイ・ジョーンズとスカルだろうか？その辺りは本人の報告を聞くしかないだろう。

何はともあれオトヒメ王妃はその命を落とす事は無かつたので何よりだ。

取り敢えずシャボンディに帰つたらスカルに話を聞かねばならぬいな、そう考えつつ次のページをめくる。

取り敢えず端の小さい記事も全て確認し気になつたニュースは何点か。

”海列車の全線開通がもう間も無く、早ければ来年にも全線開通か!?”

”クツク海賊団消息不明！セレブ御用達客船オービット号も同海域にて行方不明！嵐に巻き込まれた可能性高し!!”

”ジンベエの七武海加入の恩赦により釈放された元・タイヨウの海賊団乗組員”ノコギリのアーロン”東の海に出現”

といったものである。

海列車に関してはスパなんちゃらの件を出れば何とかしたいところである。

確か原作では全線開通の後に司法船がやって来た筈なのでそれまでにはウォーターセブンに向かう必要があるだろう。

次にクツク海賊団、嵐に巻き込まれて消息不明という事はゼフとサンジはもう遭難してると言う事か？

しかしどれぐらいの期間遭難するか不明だが今から行つたとしてもとてもじゃないが間に合わないだろう、せいぜい東方方面軍司令を務めるメイナード少将に一報入れておく程度の事しかできまい。

そしてアーロンについてである。

フィツシャー・タイガーは生存しているので原作ほど酷くは無いとは思うが・・・でもアーロンだしなあ、後でベルメールには一報入れ

ておいた方がいいだろう、と考える。

まあ今のベルメールならいくらアーロンがグランドラインから来たとはいえ一方的にやられる事は無いだろう。

さてそれらを行う為には先ず目の前の事を片付ける必要がある。

新聞を読みつつ受けた報告に対してクリークはこう怒鳴り返すのだった。

「妖精なんぞいる訳ないだろうが！置き引きで武器を盗られたなど笑い話にもならん！さっさと探してこいっ!!」

その言葉に慌てて船を飛び出していく複数の兵士達。

シャーロット・アンジェ号を港に停泊、買い物をしている間に携帯用ロッドと特注のサーベルを盗られたとの報告であった。

しかも一人では無く数人が。

ここはドレスローザ。

世界政府加盟国であり、妖精伝説が色濃く残る国である。



## 情熱の国 ドンクリーク

ドレスローザ。

愛と情熱と妖精の国と呼ばれるその国は訪れた者達に”かぐわしき花々の香り”、”この国自慢の料理の香り”、そしてまた一つは”疲れを知らぬ女達の情熱的な踊り”に心を奪われるという。

古くから”妖精がいる”という伝説が出回るなど、色々とファンシーな国であり、国土は本島のドレスローザと小島のグリーンビットで構成されている。

原作では今はインペルダウンに収容されているドフラミンゴが七武海の地位を利用して、国盗りを行い自身が王として支配していたが、まあ七武海になるどころか投獄されているのでその心配は無いだろう。

・・・無罪放免になった幹部の行方が気になるところだが。

そしてこれは原作を知っている故の知識だがこの国に伝わる妖精伝説、妖精が色々な物を持っていく(今回は買い出しに出っていた部隊の者達が武器を奪われた)という。

しかしてその正体はグリーンビットに国を持つ小人達、そしてこのドレスローザの王は償いとして小人を守る為にその妖精伝説をでっち上げたそうだ。

そしてここは港町のアカシア・・・

まあ巨人がいるのだからガリバー旅行記のように小人がいてもおかしく無いよな、とさえつつ運ばれてきた食事をつつく。

「む、このドレスエビのテルミドールはなかなか・・・」

「ええ！この島の近海でしかとれない優美な姿で有名なドレスエビを大胆に使用！」

丁寧につったベシヤメルソースをふんだんに使用しじつくりと焼き上げた一品でございます！」

店員のそんな話を聞きつつ考える

今度試しに作ってみるか、別に他の種類のエビでもいけるだろ

う・・・じゃない、取り敢えず盗られた武器が見つからなければ小人達が住むというグリーンビットに向かわなければならぬだろう。

しかし・・・となるとこの国の王である”リク王”に話を通しておいた方がいいだろうな

「お待たせしましたー！ローズイカのパエリアでございまーす!!」

「ああ、ちよつといいか店員さん」

「はいー！お水のおかわりですかー？」

「ああ、水ももらおうか。それとグリーンビットというのはここから遠いのか？」

「えーとー、グリーンビットですかー。」

「ここから北東方向へ回ったところですねー、でも行くのはお勧めしませんよー？」

「そりやまたどうして？」

「お客さんはー、闘魚って知ってますー？、グリーンビット周辺はとーっても凶暴な魚が住んでるんですよー」

「その闘魚とやらがいるからお勧めしないと？」

「そうですねー、あいつらにかかれば船とかぼーんとひっくり返されてお釈迦ですからねー」

「そうか、忠告ありがとう。」

それからこの国の王であるリク王に面会を求めたいのだがどうすればいい？」

「そうですねー、まずは王城に行ってもらわないとー何とも言えないですねー。」

リク王陛下は慕われてますしー、警備は厳しいので勝手に侵入とかはやめた方がいいでしょうねー

リク王軍の誰かに声をかけてー王軍隊長のキュロス隊長にー、話を通した方が早いでしょうねー」

「キュロス隊長？」

「ってたしか片足のおもちやに・・・いや、そうかドラミンゴが来てないからか

「凄いですよー？ここから少し行ったとこにーコロシウムがあるん

ですよー。

キュロス隊長は「コロシアムの英雄って言われててですなー、そこで三千戦全勝って歴戦の戦士なんですよー?」

「なるほどな・・・色々と話してくれてありがとう、これはチップだ受け取ってくれ」

と色々と教えてくれた彼女に例として千ベリー札をその手に握らせる

「まいどー、チップをねだったつもりはなかったんですけどねー」

「色々と有用な話を教えてくれた礼だ、気にしないでくれ。」

それから後何品かお勧めの料理を持ってきてくれ、後珍しいデザートなんかがあればそれもたのむ」

と追加で注文を頼み”かしこまりましたー”との声を聞きつつクリークは先ずはキュロスに話を通してみるか・・・と考えるのであった。

## 王軍隊長 ドンクリーク

飲食店の従業員のアドバイスの通りに従って町の見回りを行っていた兵士に声をかけると少し待っていて下さい、と待たされた後に現れたのは一人の男。

黒のクセのある長髪、髭をたくわえ厳しい目つきに鍛え上げられた肉体。

「初めましてキュロス殿、海軍独立遊撃隊のクリークです」

「おお、貴方がかのカモメの水兵団のクリーク殿ですか、お会いできて光栄です。」

右手を差し出し握り返されたその手にかなり強いな、と感じつつそれもそうか、と考え直す。

会う前に少し詳しく調べたが店員に聞いた通りコロシウムでは負け知らず、三千戦全勝の相手には他国から来た名のある戦士や驚くべき事に巨人を相手に倒したという記録や、魚人相手を水中戦で下したという記録もあった。

そうともなればその戦闘力はかなり高いだろう、悪魔の実の能力者では無いものの海軍で言えば本部大佐クラス……下手すれば将官クラスの可能性もありそうだ。

コロシアムの英雄”キュロス”

原作では、とても数奇な運命を辿った男である。

詳しく覚えていないが何かの理由（殺人・親友の敵討ち）でまだ少年だった時に捕縛、リク王に見出されるもコロシウムから出ようとせず（百勝すれば出ても良いとの事だったが出ようとしなかった）そしてとうとうリク王の説得が叶い王軍の隊長として就任した。

最初は嫌われていたもののなんだかんだでリク王の上の娘であるスカーレット王女殿下とくっついた。

最も民意を警戒して表向きはスカーレットは死亡した事になったが。

そしてレベツカという娘にも恵まれ暫くは平和な時間を過ごして

いた……が、それが大きく変わる事件が起こった。

天竜人への上納金である天上金、これを運ぶ輸送船を襲撃しその撃沈を脅迫材料として七武海へと就任したドンキホーテ・ドフラミンゴの王宮への襲撃である。

最も現在はインペルダウンに収監されている上に、もしドフラミンゴの仲間が計画通り天上金を運ぶ政府の船を襲撃しようとしたところで昔と違い天竜人が激減した上でクリークの進言により天上金は減額、そして海軍もそれぞれの役割を明確化し組織改革を行った上で、ピースメインの海賊を公認海賊として組み込む事で手の空いた人間を護衛に回す事でその守りは万全となっている。

話を戻すがドフラミンゴの襲撃によりキュロスはオモチャへと姿を変えられた上に妻のスカレットは殺害された、更にオモチャへと姿を変えられたのに付属してキュロスの存在さえ皆の記憶から消された。

そしてキュロスはその怒りと憎しみを胸に何とか敬愛する王を救おうと裏で動きそれは麦わらの一味がドレスローザにやって来るまでの十年以上雌伏の時を過ごしていたのだ。

「早速で申し訳ないがキュロス殿、少し頼みたい事があるのだがいいだろうか？」

「はい、何かドレスローザの近海で厄介事でも？」

「厄介と言えば厄介事なんです……」妖精「に我が部隊の者が武器を盗られてしまいましたね……」

「妖精ですか……妖精はドレスローザの守り神ですので笑って諦めて頂くしか……」

そんな事を告げるキュロスに対して声を落として彼だけに

「小人に関しては調査済みです、知っての通り我が部隊は最新鋭の技術を使用していますので万が一にも漏らしたくは無いのですよ」

「む、しかし……」

「盟約があるというのも搦んでいます、それが理由なのであればリク王陛下に話を通して頂きたい。」

「……わかりました、リク王様には面会希望を伝えますのでそれでよ

ろしいですか？」

「ええ、構いません。面会してリク王陛下に直接交渉します。」

我々は港に停泊している赤い海軍旗の軍艦に滞在していますので何かあればそちらに連絡をお願いします」

そう告げて船に戻るのであった。

「あれがかの”鈍熊”か……凄まじい威圧感だな……」

キュロスは握手をした時の力強さを思い返していた。

よく自身の身に受ける刺すような威圧感ではなく例えるなら巨大な山を見た時のような雄大なプレッシャー。

「鈍熊……ああ、彼がカモメの水兵団のトップを務める本部少将でしたか」

しかしただかだか武器を盗られたくらいで王にまで面会を求めるとは随分と大袈裟ですね」

「馬鹿者、カモメの水兵団は数々の最新技術が使われていると聞く。」

トンタツタ族の者達であれば問題無いと思うが万が一その技術が漏れてみる、その技術が海賊に渡れば泣くのは我々の国民だぞ？」

と、楽観的な部下に苦言を呈すれば

「軽率でした、すみません……」

「わかれば良い、取り敢えず私はリク王様にこの件を報告してくる、後の見回りは任せたぞ」

とキュロスは足を王城に向けるのだった、自身の敬愛する心優しきこの国の王の事を考えながら……

## 妖精伝説 ドンクreek

「初めましてリク王、海軍独立遊撃隊のクreekであります」

「初めましてクreek殿、私がこの国の王を務めさせてもらってるリク・ドルドだ、して今回は妖精に関してと聞いているが？」

ガツシリとした体つきに鋭い目つき。

髪は大半が白くなってるものの年齢を感じさせる訳では無く未だ充溢した気力を感じさせた。

リク・ドルド3世。

グランドライン後半部、通称“新世界”に位置する国ドレスローザの国王である。

勿論彼についても面会前に調べてある。

善政を敷き、国民達を決して戦争に巻き込むことがないように全力を尽くし、決して豊かでもなくとも国民から慕われている、各国の王としては珍しい善性を持つ王である。

どっかの勝手に国を売った王とは大違いだな。

最も原作では王下七武海ドンキホーテ・ドフラミンゴの謀略により一夜にして国民からの信頼を失い国を乗っ取られたが。

スカーレットとヴィオラという二人の娘がいるが、とある事情によりスカーレットは死亡した事になっている。

「実は我が部隊の武装が何点か妖精に盗られてしまいましたね・・・

おっと、妖精だから笑って諦めるしか無いというのは無しにして下さいね？」

勿論その正体は掴んでありますが直接行くよりは一度盟約を結んでいるそちらに話を通しておいた方がいいだろうと思ひまして」

「・・・因みに何処でその話を？」

「いえ、海軍にも伝手が色々と言ふ事ですよ、かつてのドンキホーテ王朝が小人達相手に”資源と安全の保障”を約束、これを承諾してドレスローザに住み着いたものの、条約の実態は強制労働を強いるものであったのは存じています。」

まあ海軍の情報管理室で調べたのも事実だが、原作の知識もあるん

だけどね。

「確かに妖精・・・小人種であるトンタツタ族とは盟約を結んでいる、かつての王朝の起こした事の償いとしてな。」

初代リク王が結んだのは生活必需品を国内から盗む事を”妖精の仕業”として黙認するようというものだ。」

「そしてそれがドレスローザの妖精伝説誕生という事ですな？」

「ああ、そして彼等はその見返りとして国の外に花畑を作り、ドレスローザを緑豊かな島にしてくれている。」

そして国民達も妖精たちは国の守り神を務めてくれていると実態を認知して見守っており持ちつ持たれつというやつだ。」

「しかし我々の武装は特殊なのでできれば返して頂きたいのですが・・・」

「まあ・・・何だ、そこら辺は彼等と交渉してもらうしかないな。あくまで我々の結んだ盟約は生活に必要な物を盗む事の黙認だしな」

「わかりました。では彼等との交渉は貴方の公認を経て我々で行うという事でよろしいですか？」

「それで構わん。が、くれぐれも荒ごとは辞めてくれ。武装を取り返したいというのはわかるが・・・」

「勿論ですよ、例え相手が小人とは言え我々海軍にとつては守るべき民の一員なのですから。」

ところで小人達がいるのはグリーンビットで間違い無いですか？」

「ああ、しかしあつちは厄介だな。”闘魚”と呼ばれる品種の魚があの辺りに蔓延っている・・・」

「ああ、飲食店で耳にしました。何でもえらく凶暴だと聞いていますか・・・」

「アレにはえらく手を焼かされていてな、このドレスローザ本島とグリーンビットを結ぶ橋もわざわざ鉄製に変えたのだがあまり効果は無くてな、船で行こうものなら奴らにひっくり返されてしまうし、駆除しようにもなかなか手強くてな・・・」

「わかりました、何とかこちらで安全なルートを探りグリーンビットで小人達との交渉にあたります、勿論交渉に関しても荒事は無しで」



「ああ、それで構わないが少し待て、彼等に一筆書いてやろう」

そう言つて立ち上がったリク王に

「ありがとうございます、これで交渉がスムーズにいくと良  
いのですが……」

とクリークは頭の中で交渉について考えつつ礼を言うのであった。

## 険しき橋 ドンクリーク

クリークはドレスローザの王、リク王から一筆もらうと船を停泊している港町のアカシアに戻りシャーロット・アンジェ号の進路を北東へと向けた。

そのままドレスローザ本島を回りつつグリーンビットへ向かう。

最初は直接グリーンビット島にシャーロット・アンジェ号で着けようとしたのだが聞いてたよりもかなりの獰猛さ故に断念、船員は問題なくても船が問題だったのだ。

いくらシャーロット・アンジェ号が当時の技術の粋を集めて作られたといえど流石にあの数に一齐に押し寄せられては堪ったものではない。

それほどまでに件の鬪魚とやらは数が多かったのだ。

大きく内側に湾曲した鋭い角に大きく裂けた口にはびっしりと並んだ鋭い牙。

大きさも普通の魚を遥かに上回る大きさで、その身の丈は小さいものでも3メートル以上というその巨大さ。

鋭利な背鰭を持ち、黒の体色を持ち表面には刃を通さない頑強な鱗を持ち特筆すべきはその獰猛さ。

動くものと見ればまるでミサイルのようにその身に蓄えた筋肉を総動員させ大きな角で相手に突進、その力は人間など軽く吹っ飛ばされてしまう程である。

「この橋がグリーンビットに繋がってるのか？」

「ああ、鬪魚の攻撃を受けて橋も鉄に強化されたんだが無駄だったよ。今じゃ誰も使っていない、あの立ち入り禁止の札がいい例さ。」

そう言つて鉄橋の入り口に顎をしゃくるカフェのマスターに礼を言いつつバリケードを一部解体、十名程の部隊を率いてそのまま進む。

中程まで来た所で大きな音を立て鬪魚が目の前に突っ込んで来た為素早く銃を構える部下を手で制す。

「落ち着け、銃弾はあの鱗で弾き返されると聞いている。」

それよりもお前たちは下がってる、俺は少しこいつらの相手をしてやる。」

頑丈な筈の鉄の柵を易々と曲げて突っ込んで来た闘魚を見つつ指しを出すクリーク

「しかし少将！相手は鉄橋を易々と曲げるような化け物ですよ!？」

「落ち着け伍長、お前はこの隊に入って日が浅いから知らんだろうが少将殿なら問題無い」

と部隊の隊長が新任の伍長に言うが

「ですが！」

と伍長は納得してないようだったので見せた方が早かろうと考え

「少佐の言う通りだぞ伍長、こんな鉄柵なんぞっ……ほら、人間でも鍛えりやこのくらいできる、心配するな伍長」

そう言うて鉄の柵をブチりと両手で引きちぎって見せたクリークに新任の伍長は頬をひきつらせ

「……わかりました、襲撃に備えて一時待機します」

そう言うのがやつとだった。

「さーてデカブツ、少し遊んでやろう。」

少佐あっ！少し相手してくるっ、後は頼んだぞー！

そう言うて鉄柵に顔を突っ込ませ闘魚の眉間に思いつきり正拳突きを入れれば闘魚の身がパァンと風船のように弾け飛んだ。

頭から闘魚の血肉を被りつつ”少将殿！やり過ぎです!”との声を背に受けながらブーツとコート、普段から身につけているポーチなども外し、更にタンクトップを脱ぎ捨てズボンだけの姿になり、更に棍を地面に突き刺すと大きく息を吸いこみ、そのまま深い海に飛び込んだ。

飛び込んだ先は何処を向いても闘魚の姿。

闘魚達はその気質に従い、憐れな小さな生物を襲おうとしたが自ら海に飛び込んで来たソレはいつも自分たちになす術なく殺される生物では無かった。

一匹目が鋭い角で突き刺そうとした所で眉間に正拳突きを受け。

二匹目は大口を開けてその鋭い牙で噛みつこうとした所上顎と下

顎を両手でガシりと掴まれそのまま側頭に鋭い蹴りを。

三匹目はならば体当たりだ、と言わんばかりに猛スピードでクリークに突進するもクリークはそれに対して手刀を構えると突進してきた相手に身をかがめ手刀を添えれば相手はそのスピードが災いして大きく腹を裂かれた。

次から次に襲ってくる鬪魚に対しクリークは突き、肘、蹴り、手刀、頭突き、締め、膝と駆使して屠っていく。

そしてどれほど経っただろうか。

クリークがその身を海面から飛び出させ橋へと着地

「悪いな、いくら俺でも潜ってるのは五分が限界だな。

少佐あっ!!橋の周辺は追っ払った!今のうちに全員渡れえっ!!」

大声で告げ待機していた隊の隊長に告げ、部隊を一気に渡らせるのであった。

## 妖精の国 ドンクリーク

「これはまあなんともしゃあないよ……」

「見事な程の密林ですな……」

橋を渡った先にあつたのは鬪魚による襲撃による物だろうか、打ち上げられた船の残骸と、反対側には野性的に広がる密林。

綺麗な砂浜だけに気色悪い程生い茂った密林がなんともしゃあないアンバランスだがとりあえず前に進まなければ話にならない為隊列を組み森の中に進んでいく。

そして森に入りしばらくした所で

「その人間たち！止まるれす!!」

人影が無いものの声だけが辺りから響いてきた

「何者だ！何処にいる!!」

思わず銃を構える伍長を手で制して

「落ち着け伍長、我々は海軍の人間だ！お前達がグリーンビットにいるというトンタツタ族で間違いないか！」

「そうだ！お前たちは悪い人間か？いい人間か？」

「この小人達は言った事をすぐ信じるから本当はいい人間とでも言つた方がいいんだろうが……」

「さあな！それは相手が決める事だ！俺達がここに来たのはお前達に盗られた武器を返して欲しいからだ！この通りリク王から手紙も預かってる!!」

「なつ！リク王様から？しかしお前達がいい人間と限らないれす！いい人間ならお前達の武器か食料を寄越すれすよ！」

「そうするにしても先ずは話し合うべきだ！姿を見せて欲しい！」

普通に返せと言っても簡単に返してくれないだろうから交換用として食料の類を持ってきたが相手が話し合いに応じてくれなければ意味が無いのでそう告げればガサガサと草木が騒めき

「姿を見せてやったぞれす！リク王様からの手紙とやらを見せてもらうれすよ！」

現れたのは体長20センチ程だろうか、全員が共通して尖った鼻を

持ち背中にはまるでリスのように柔らかそうな尻尾を持っていた。

「小人・・・本当にいるとは・・・」

「少将殿が説明しただろう、この国には小人種がいると。」

お前も海軍本部に所属しているのならちやんと勉強くらいしておけ」

「確かに説明は受けましたが・・・」

「・・・確かにリク王様の手紙だ、話し合いをしろとしか書かれてないが」

代表者だろう、リク王から預かった手紙を読み終えた年嵩の小人がそう返してきたので本題を告げる

「アカシアでお前達が盗んだ我々の武器を返して欲しい、本来なら窃盗でしょっ引きたいところだがこの国の法では裁けぬらしいからな。」

そこで変わりとして食料を持ってきた、これと交換でどうだろうか？」

「お前達大人間は武器が欲しいいれすか？」

「お前達が我々から盗んだ武器だがな」

「皆と話し合われず、少し待つれすよ」

そう言つて輪になり何事か話し合う小人達、それを横目に見つつ原作での小人達を思い出す。

何と言つたか、どんなものでも縫い付ける事ができるヌイヌイの実の能力を持つレオ・・・だったか？トントタツタ族の戦士とチュチュの実だったか？相手を治癒させる事が出来る治癒系の能力を持ったトントタツタ族の姫。

そして原作ではドレスローザで出るのが初めてであった虫の能力を持つゾオン系ムシムシの実、えーとスズメバチとカブトムシだったか？

聞いてはいないが原作では中将として出てきていた海軍のオニグモ大佐も恐らく虫のゾオン・・・蜘蛛系統だろうか？生命帰還で髪を動かしているという可能性もあるが。

とりあえず出てきてたのはごく少数、バツタとかクマムシとかがあつても面白そうだが・・・

そんな風に考えていると

「よし、とにかくお前達を国に連れて行く!とは言えあまり大人数で来られても困るから何人か大人間を選ぶのだ!それでいいか?」

話は纏まったようなので自分と少佐の二人で先導する小人達についていけば

「少将殿、随分と発展したところですね・・・」

「だな、もっととこぢんまりとしたところかと考えていたが・・・」

密林を抜け地下に下る洞窟を抜ければそこに広がるのは随分と発展した街並み

「それもそうれすよ、ここは我々一族が代々育て上げた大いなる森!我々に育てられない植物は無いのれすよ!」

ドレスローザでもらった武器は一ヶ所に纏めてあるれす!お前達の武器を探れすよ!」

そう自慢げに言う年嵩のトンタツタ族であったが原作ではそれをドフラミンゴに目をつけられてた上に誰でも直ぐに信じる善良さもあつて上手く利用されていたが。

更に街の一角に先導されつつ物珍しげにこちらを見る小人達を横目にしつつ更に考える。

原作でドフラミンゴがトンタツタ族に育てさせていた”スマイル”と呼ばれていた人造悪魔の実、確か作れたのはゾオン系のみだったか。

しかし任意で悪魔の実を作る事ができ、更にそれが広がればゾオン系の能力者が氾濫する事になるので恐ろしいところだ。

・・・しかし本家の悪魔の実が泳げなくなると言うんでもないデメリットがあるのだからスマイルとやらも何かあるのだろう、俺が知っているとこまでだと副作用とか出てなかったが。

と、クリークはスマイルに関しての脅威度を考えつつ足を進めると、最もクリークは知る良しもないが人造悪魔の実である”スマイル

”

これはとてもじゃないが完全とは言い難く、スマイルは身体の一部しか変化させる事が出来ない上に、スマイルを食べて不完全なゾオン

系の能力を得られるのは十人に一人というとんだ欠陥品である。

しかも副作用がありスマイルを食べた場合、例え能力が発現しなくてもその時の感情に関係無く常に笑う事しかできなくなるという。

最もクリークは原作の知識がワノ国よりも前で止まっている為そんな事知る由も無く、普通のゾオン系悪魔の実と同じ物が出来上がると考えているので勘違いしたまま脅威を覚えていた。



## 妖精の力 ドンクリーク

「そーういや名乗ってなかつたれす。

ぼくはランポー、トンタツタ族の兵士れすよ」

そーう言つて年嵩のトンタツタ族から先導を任せられた小人、深く帽子を被りランポーと名乗ったトンタツタ族が先導しながら告げたのでこちらにも名乗り返しておく。

「そーうか、俺はクリーク。しかし小人というの初めて見たがやはり小さいな、みんなそーうなのか?」

「ぼくとしてはお前達大人間の方が大きいのれす、外の世界には小人はいないのれすか?」

「公式に残つてるのはかの冒険家、モンブラン・ノーランドの手記に出てくるぐーらいだな」

「ノーランド! 僕らのヒーローれす! ぼくも知つてるれすよ!」

・・・ノーランドについて話しておいた方がいいか? いや、必要ないだろう、聞かせた所でどうにかなるわけでもなし

「どーう事はモンブラン・ノーランドはお前たちトンタツタ族との交流があつたどーう事か?」

「そーれす! 銅像もあるれすよ!」

「そーうか、後で見せてもらうとして先程からこつちを見ている小人たちはなんだ?」

そーう言つて建物の上からこちらを見る白い帽子を被り紫の髪で片目を隠した小人を指し示せば

「大人間が珍しいんじゃないれすか? この国に入つてくる事はないれすしマジマジと見る事はないれすから・・・ああ、見張りれすよ、お前たち大人間がいい人か悪い人かわからないれすからね、悪い事をしてないよーう偵察部隊が見張りについてるれす」

最初は珍しいから、と言つたランポーだったが指で指し示す方向を見て見張りだ、と言ひ直すランポーに少し気になつたので

「まあ確かにそーういふ風に言つたが・・・実はいい人だつて言つたらど

うするんだ?」

と言ってみる

「え!それは本当れすか?」

「ああ、そうだと」

「何だ、だつたら見張りはいらぬね!この人たちはいい人れすから見張りはいらぬすよー!」

そう言つて先ほどまでこちらを見ていた女性の小人に大声で告げるランポーを見て頭を抱えそうになる。

人が良すぎるといふのも考えものだなと思いつつ、原作のトンタツタ族を思い出したため息をつく。

底抜けに善良でお人好しな、そして嘘でも簡単に信じる疑う事を知らないその性格。

しかしそれは仲間が決して嘘をつかないという結束から来ているものだから決して悪い事では無いとはいへ・・・

そう考えている間に目的の場所に着いたよう

「着いたれすよ、仲間が手に入れた武器はここにまとめてあるれすよ」

「・・・多いな」

「武器は狩りをするのに必要れす、リク王様がこの国にやってきた時からの積み重ねれすからたくさんあるれすよ」

「少佐、左側から頼む、手分けして探すぞ」

うへえ、と言いつつそんな顔の少佐に指示を出し自身も右側から積み重なつた武器を手につ

「ぼくはここで待つてれすよ、見つかつたら言うれす」

短銃から長銃、剣に槍にハンマーにとバラエティに富んだ武器の山にふと疑問を覚えランポーに

「そついやよくそんな小柄な体でこの武器を持てるな、実は結構力があるのか?」

そついや原作でもめつちや早いとかなんとか言つてたな、と思いつつと尋ねれば

「このくらい軽いものれすよ?」

と返されたのでやはり種族が違うというのは大きな差だなと考え

つつ確かとてもすばしっこくて怪力、柔らかそうな丸い尻尾も芯には骨と筋肉が詰まっており武器として使用（移動の手助けにも可能）するんだっただか。

そう考えつつ搜索を続行していると

「少将殿、ありましたよーロッドとサーベル！」

一緒に探していた少佐が声を上げたので確認しに行けば

「どれどれ・・・よしロッドが四本とサーベルが二本、間違いないな。

ランポー、武器は見つかったが持って帰ろうと考えていいか？」

無事に見つかったのでさっさと帰ろうと考えて聞けば

「待つれす！その前に着いてくるれすよ、トンタ長様に会ってもらわれす！」

との答えが返ってきた。

まだ何かあるのか、と思いつつ

「トンタ長・・・というのは？」

「トンタ長はトンタ長れす、この国で一番偉い一人れす」

ああ、国王って意味か。

そういやトンタッタの姫がチュチュの実だったかの能力者だったな、ひよつとしたら存在の確認ができるかもしれないな、と考えつつクリークは先導するランポーについていくのだった。

## 妖精の王 ドンクリーク

「わしはガンチョ！トンタッタ王国で一番偉いトンタ長れす！」

トンタ長に会ってもらおう、と連れてこられたのは町の中央にある広場。

広場には特徴的な頭をした”HERO”と書かれた銅像あり、その周りにはこちらの見張りをしていた小人や、二股の帽子を被った小人や、その小人が守るようにしている白いドレスの小人など、原作で見た覚えのある姿も確認できる。

「初めましてガンチョ殿、少々お聞きしたいのですがあの銅像はモンブラン・ノーランドの銅像で？」

そしてガンチョと名乗ったトンタ長・・・この国の長という意味だろう。

サングラスをかけ、他と比べて立派な帽子を被った、長く伸びた髭がその年齢を伺わせるその男に銅像について挨拶ついでに訪ねてみれば

「おおーお主わしらのヒーローを知っておるのか！」

との答えが返ってきた、まあ知つてると言っても原作の知識もだが資料室で少し調べた程度のものだけだが。

「名前だけは、何をしたのかはよく知らんがな」

原作ではトンタッタ族とモンブラン・ノーランドの関係について説明される筈だけど全く覚えていないがな。

「ならばお教えしよう、わしらのヒーロー、ノーランドについて！」

そう言つてガンチョが教えてくれたのはこの国の遙か昔々の歴史だった。

遙か昔の話、それこそ空白の百年より前の事だ。

トンタッタ族は自国に無い資源を求めて海へ出たところを大人間・・・我々のような普通サイズの人間に発見され悪辣な密猟者達などにより絶滅の危機に瀕していたらしい。

そんな折にトンタツタ族を助けたのがかの冒険家、モンブラン・ノーランドだったとの事だ。

その為彼等はノーランドを自身達にとっての英雄、ヒーローとして讃えられ銅像が建立された。

因みにその後でトンタツタ族は当時のドレスローザの国王・・・ドンキホーテ一族の人間から”少しの労力”と引き換えに”資源と安全”を保証するという条約を結んだらしい。

最もそれは建前に過ぎず実態はトンタツタ族にとっての暗黒期、奴隷時代だったそう。

そして九百年前、ドンキホーテ一族は他の18人の王達と共に聖地マリージョアへ。

そして新たにドレスローザへ来たリク王家はトンタツタ族の実態を知り伏して謝罪、償いとして新たに盟約を結んだらしい。

話の最中に泣いたり喜んだりと臨場感たっぷり大盛り上がりを見せる小人達を横目に随分と感情豊かだな、と考えつつノーランドがヒーローとなっているのはそれが原因か、とようやく合点がいく。

「成る程かの冒険家が讃えられているのはそれが理由か」

まあ死に際は悲惨なものだったがそれは語るまい。

「その通り！だからこそわざわざとってノーランドはヒーローれすしリク王家とは800年以上の長い絆で繋がってるれすよ！」

「成る程。で、その大恩あるリク王がこちらと話し合えと書いた手紙がここにあるが？」

まあ話は分かったので本題に戻らせてもらおう。

「話は聞いてるれす、いい人か悪い人かわからないので偵察部隊が見張らせてたれす。」

ガンチョがこちらを遠くでこちらを見張っていた紫の髪で片目を隠した小人に聞けば

「特に不審な動きはありませんれした、それからいい人らしいれす」

との答えがあった為

「ああ、いい人間だからお前たちが盗っていった武器を返してくれ。

盟約に関してはリク王から聞いたから勿論タダとは言わん、食料を

持ってきたからそれと引き換えでどうだ？」

と便乗していい人だとアピールし交渉を持ちかければ

「いいれすよー！いい人だったら食料か武器を貰うのがルールれすからそれさえ守ってもらえれば問題ないれす！」

と食料と引き換えに無事に武器を取り返す事ができた、そしてクリークはものついでという事で

「所でガンチョ殿、誰か外に出すつもりはないか？」

とこの国の長に交渉を持ちかけるのだった。

## 小人決断 ドンクリーク

「外へ・・・とおっしゃるとどういう意味れすか？」

こちらの提案にガンチョはイマイチ意図が掴めていない様子の為説明を続ける

「どういう意味も何も言葉通り、あなた方トンタツタ族・・・まあ誰でも良いのですが、我々と一緒にこの国の外に出る気はないか？という意味ですよ」

わかりやすいようにガンチョに言い直せば

「そう言われてもれすねえ・・・一体どういう意図があつてこの国の外へ出るのれすか？」

ガンチョはどうしてこちらがそういう提案をしたのか計りかねている様子であった。

「まあ意図としてはトンタツタ族に外の世界を知ってもらいたいというのが大きな理由です」

と先ず大きな理由を述べる。

「それが理由としてあなた方にメリットはあるれすか？それに外は危険れすよ」

「こちらのメリットとしてはあなた方の戦闘力です、我々海軍はどんな人種であれ分け隔てなく護ります。

人間だけでなく巨人族、魚人族、ミンク族に蛇首族、手長族や足長族、あなた方小人族も例外ではありません。

そしてその為に我々海軍には力が必要なのです。

そして危険だと言うのであれば我々が護ります、それが我々海軍の務めですから。

それに言い方は悪いですがあなた方トンタツタ族は世間を知らなすぎる。

あなた方小人族が長い年月をかけて育まれてきた人間性ですから別に悪い事とは言いませんがお人好しすぎるのですよ。

先程もそうでした、我々がいい人か悪い人が理解できてない状況で

我々がいい人だと言ったらそれを鵜呑みにしてしまいました、もし我々が悪い人間だったらどうするつもりですか？」

と自身が小人族に対して思っている事を告げれば

「なんと！あなたは悪い人だったれすか？いい人なのは嘘れすか!？」  
とびつくりした様子を見せるガンチョ及び周りの小人達。

・・・悪い人とは一言も言っていないがな

「別に我々が悪い人とは言っていないません、まあいい人とも言ってますのでそれはあなた方が決める事としか言いませんが・・・

俺が心配なのはこのままでは何か致命的な事が起こりかねない、その為にも誰かしら外の世界を知っておく必要があると俺は思うのですよ」

そう、ドフラミンゴが囚役している以上ドレスローザに彼がやってくる事は無いと思うが原作ではその善性とその能力に目をつけられていいように利用されており、かの人造悪魔の実”スマイル”を作らされていた。

「・・・仲間たちと話し合われず、少し待つてほしいれすよ」

さてはて、大人数とは言わないが一人か二人共に来てくれればこちらの手札が増えるしトンタツタ族の意識改革に繋がって欲しいところだが・・・

そう考えていると二股の帽子を被った小人が

「少し教えるれす、外に出たとして戻ってこれるれすか？」

と訪ねてきたので

「個人的には数年程を考えています、別にずっとこの国に戻れないというわけではないのでご心配なく。

少しの”労力”その対価として”資源と安全”を保証します、如何でしょうか？」

そしてようやく答えが出たのだろう、ガンチョ達は話し合いを終えこちらを見ると

「あなた方の言う事はわかったれす、言葉に嘘は無さそうれすし我々の事を考えてくれているのもわかったれす。

あなたは自分たちがいい人が悪い人かは僕らで決めろと言ったれ



す、だからあなたを信じるれすよ、僕らはこの話を受けるれす！」

「ありがとうございますございますガンチヨ殿、因みに同行するのはどなたになりますか？」

「それはまだ決めてないれすよ、何か希望はあるれすか？」

「そうですね、別に年齢性別にこだわりはありませんが、敢えて言うならある程度の戦闘力があればそれに越した事は無いというくらいですかね？」

まあ欲を言えばヌイヌイの実の能力者やチユチユの実の能力者、スズメバチやカブトムシの能力者に来て欲しいところだがまあそのうち一人はトンタツタ王国の姫だし他の能力者も有用な人材だから難しいだろう。

下手に指定して断られても話し合いの意味が無いしね。

「わかったれす、とりあえず誰にするかは話し合って決めるれすからもう少し待って欲しいれすよ」

” 戦闘部隊から出すべきれすか？” や ” 希望者を募るべきれすよ ” など小人達が話し合うのを横目にクリークは交渉が上手く行った事に安堵するのだった。

## 小人参入 ドンクリークさん

トンタツタ族の代表としてこちらについてくる事になったコットンと名乗るその小人は女性のトンタツタ族だった。

道中でこちらを見張っていた紫の髪の原作で見たような見ないようなその小人は偵察部隊に所属していたらしい。

偵察部隊所属故にスピードに自信があるというその小人は動きを見せてもらったがなるほど自信を持つだけの事はある。

戦闘力もなかなかのもので能力持ちの小人には及ばないもののそのスピードと、持ち前の尻尾を活かした戦闘方法は成る程、代表として選出されるだけの事はあるだろう。

武器の代わりとして食料を渡し、肩にはトンタツタ族総出で見送られるコットンに乗せ洞窟を抜け地上に戻る。

コットンタツタ・・・なんて馬鹿な事を考えてると

「世界を知ってもらおうといってたれすがわたしを何をすればいいれすか?」

肩に乗せたコットンが喋りかけてきたので

「まあ兎に角人間を知ってもらおう事だな、おっとそう言えば名乗って無かったな。

海軍本部少将のクリークだ、よろしく頼む」

そう言っつて肩に手をやれば疑問を顔に浮かべ

「これは何れすか?」

と尋ねてきたのでそうか、握手も知らないのかと思ひ

「これは握手と言っつてな、挨拶として相手の手を自分の手で握る行為だ。

だいたい信頼の証と言う事で武器などを扱う双方の利き手で行なわれる挨拶だ」

と教えてやる。

「そうは言っつても大人間の手は大きすぎるれす、これで勘弁れすよ」

と右手の人差し指を両手で上下に振るコットン、まあ自身の体格が一般の人間よりかなり大きい事は承知しているし、コットンのような

小人族相手には致し方無いと考えつつ歩みを進める。

「少将ー！少佐ー！ご無事ですかー!!」

洞窟を抜けると伍長を含む部隊が待っていたのでそれに対して軽く片手を上げつつコットンについて紹介すれば反応は様々で小人に対する物珍しさからか殺到してきたので

「おいおい、一時的だが仲間になるんだからあまり怖がらせるな」

そう言っただけで部下を嗜めつつクリークはおもむろに指で輪っかをつくり口をつける

ぴるぴるびるびるびる、と符丁を鳴らせばクルルルツという鳴き声と共に大空から一匹の鳥が舞い降りてきた。

特徴は猛禽類・・・ワシに近く、機械的な意匠を持つその鳥はクルルツという鳴き声を上げてコットンと反対側の肩に着地した。

カフウ・・・トリトリの実、モデル鷲を”食べさせた”ガトリングガンである。

この生物はワシの特徴を持ったガトリングガンとでも言うべき生物で他のゾオン系と同じく機械の意匠が所々にある鳥形態、首から先がガトリングガンに変形した更に機械的意匠が強い人獣形態・・・機鳥形態とでも言うべきだろうか？

そして元となったガトリングに鷲の意匠を持つ武器形態である。

そしてそれに加えて背中には船と通信が可能なように小型電伝虫と映像電伝虫を搭載しており主に偵察や陽動といった事をメインに行う存在である。

因みに海軍独立遊撃隊の前身である海軍独立中隊の頃から共にいる古株であり、弾薬は食べた物から生成されるらしく、好物はミネストローネという不思議生物でもある。

ポカンという顔をしたコットンに

「紹介しようコットン。こいつはカフウ、俺達の仲間だ。」

頭はかなりいいからお前の言葉も理解する筈だ、主に偵察を担当しておりお前と組んでもらおうと考えている」

と伝えればコットンはおっかなびっくりした様子で首の後ろを回りカフウの足元へ来ると

「わたしはコットンれすよ、カフウと言ったれすかよろしくれすよ。  
・・・クリーク、この鳥は何か不自然れすね？何なのれすか？」  
と一目で見抜いた模様。

それに対してクリークは悪魔の実を食べた武器だという説明をすればコットンは得心がいった様子。

「とりあえず船に戻ったら必要な物はお前のサイズに合わせて用意しよう、何か希望はあるか？」

そう尋ねつつクリークは新たな仲間を加え部隊の者達と共にグリーンビットとドレスローザ本島を繋ぐ鉄橋へ向かうのだった。

## 偵察鳥騎 ドンクリーク

「そう言えば大人間たちはどうやってこの島に来たれすか？」

鉄橋へ向かう道すがら肩に乗ったコットンがそう尋ねてきたので「普通に橋を渡ってきただけだぞ？あと大人間だと全員になるから名前前で呼べ、若しくは階級の少将でもいい」

と答えておく、まあ周りの鬪魚を蹴散らしてたのが普通に渡ってきたと言えるかは知らんが。

「くリークは強いのか？あの橋の周りは鬪魚って凶暴な魚がいるれすよ？」

普通の大人間のはわたしたちならやつつけられるれすが普通の大人間のはわたしたちより弱いと聞いてるれすが……」

「んー……まあ間違いじゃないが別に全員が弱いと言うわけでもない。人間ってのは強さの差がでかいんだよ、一人で国を落とせるような人間もいれば普通の獣に勝つ事もできない人間もいる。」

お前たち小人族は生まれながらの資質……その尻尾なんかがいい例だな、種族差ってやつさ。」

「大人間って色々と難しそうれすね……」

「とりあえずこれからおいおい習っていけばいいさ、さてじゃあコットン、早速一仕事してもらおうか？」

と道中で話し合ってる間に鉄橋に着いたクリークは首を傾げるコットンに向かってそう伝えたのだった。

「コットン、お前には俺達が橋を渡る間に上空から鬪魚の位置を伝えて貰いたい。」

こつちが小型電伝虫、これに喋りかければこちらに声は伝わるしこつちの指示はこいつが伝えてくれる。

そしてこつちが映像電伝虫の送信機だ。

まあ今回は受信機を持ってきて無いので役には立たないがな。

取り敢えず言っておく事は一つ、勝手に野生に戻したりしない事だ、いいな？」

「わかつたれす、くりーく達が橋を渡つてる間に上から見て飛びかかってくる鬪魚がどちらからくるか伝えたらいいれすね?」

「ああ、進行方向を前に右か左かで伝えてくれればいい。」

突撃形態っ!!お前ら!今回は来た時と違い全員で駆け抜ける!露払いはしてやるから遅れはとるなよ!!」

応っ、という声と共に素早く陣形を組ませコットンに飛ぶように伝えるところのまま前身する。

愚かにも直進してくる獲物を前に鬪魚は次から次に飛びかかるもその自慢の角と牙は空振りに終わった。

愚かな獲物だと思っていた相手のスピードが尋常では無かったからである。

視認し、飛びかかり、橋を噛み砕く頃にはその姿は既に先にあつたのだ。

まあそれもこの人員においては当然の事だ。

クリークが指揮する”海軍独立遊撃隊”は精鋭揃いである。

別に精鋭が配属されると言うわけではないが一部では”海軍で最も戦闘が多い部隊”とも言われるほどに戦闘経験が多くその為否応にも一人一人が研ぎ澄まされていくのである。

当然そんな部隊に所属してはいっつ死んでもおかしく無い為全員がきちんとトレーニングを自身に課しておりその身体能力は海兵の中でも平均より高い部類なのだ。

そうして特に障害も無く駆け抜けていたところで小電伝虫からコットンの声が流れてきた

『くりーく、お前たちのスピードに合わせる為か途中で襲うのを辞めて鬪魚達が出口のところに先回りしたようれす、左右どちらにも控えてるれすよ』

そんな情報にスピードを緩めず

「数はどのくらいだ?」

『いまのところ右に3左に4、左右共に続々と向かってきてるれす、最終的に10は超えるかもれすよ』

「わかつた、カフウ機鳥形態に変更接敵時の援護を頼む。コットンは

カフウに対して可能であれば指示を出してくれ、最初は簡単なものでいいから」

『わかったれす、援護は任せるれすよ』

「全員抜刀！この先橋の出口付近で鬪魚が群れで待ち構えてるらしい！」

特に倒す必要は無い！吹っ飛ばしてしまえばいいので各自奮闘するようにな！」

と足を緩めず声をかけ暫くすればまるで弾丸の如く鬪魚達が襲いかかってくるのであった。

## 黒の鬪魚 ドンクreek

右前方から飛びかかってきた鬪魚をクreekの白尾棍が捕らえる。なぎ払いを受けた鬪魚はどんな敵でも屠ってきたその角を折られ、錐揉みしながら大きく吹き飛ばされた。

後方では少佐が月歩にて飛び上がり大きく口を開いて飛びかかってきた鬪魚は下顎から蹴り飛ばされ自慢の牙を砕かれた。

更には伍長が長銃で迎撃したりとそれぞれで出来る戦闘を行いつつ襲ってくる鬪魚を迎撃しつつ前進、更に上空からはコットンを乗せたカフウが連続で銃弾を吐き出しつつ一行は鉄橋を渡り終えたのだった。

そして全員がようやく浜辺で一息をついているとクreekが指示を出した。

「よし！全員少し休憩だ！コットン！カフウ！お前たちも少し休め、俺は少しやりたい事がある」

やりたい事があると言い出したクreekに少佐は

「何かありましたか？」

と尋ねれば

「鬪魚って海上戦闘にかなり有利だと思わないか？」

との答えが返ってきた。

少佐が”また始まった・・・”とばかりに頭を抑える

「くりーく、まさか鬪魚を捕らえるつもりですか？無駄ですよ、鬪魚はとても凶暴れます。」

その凶暴性は時に同じ鬪魚にも向かうれすよ？飼いや慣らすなんて無理ですよ」

クreekの言葉に肩に降り立ったコットンも否定意見を見せるが「いやなに、別に群れを囲い込もうって話じゃないさ。」

とりあえず一匹だけでも持って帰ろうかと思つてな、固有種だし戦闘力はかなり高いしな」

「いやまあ今更ですから止めませんが・・・」



「今更・・・れすか？」

「ああコットンちゃん、クリーク少将は子供や生き物や道具を拾って  
くる悪癖があつてな、闘魚も何かが琴線に触れたのだろう」

「闘魚は凶暴れす、飼ひ慣らすなんて不可能だと思われすけど・・・」  
少佐とコットンがそうひそひそと言うのを尻目にクリークはズボン  
だけの身軽な格好になると大きく息を吸い込んで未だに闘魚がウ  
ヨウヨと泳ぎ回る中へ飛び込んだのだった。

「くりーく！しょーきさん！くりーくがあぶないれす！」

一人で群れに飛び込んだクリークを見てコットンは思わず声を上  
げるが

「落ち着けコットンちゃん、少将なら平気さ。」

「ですが闘魚は強いれすよ！われわれでも闘魚一匹を相手するには  
複数でかかる必要があるれす！それをいくらくりーくが強いと言え  
大人間ひとりだけで群れに飛び込むなんて自殺行為れす!!」

と至極真つ当な事を言い出すコットンに対して少佐はかぶりを振  
り

「うん、すぐくマトモな事言ってるのはわかるんだけど今のうちに慣  
れておいた方がいい。」

クリーク少将は対個人戦闘力だけなら大将クラスに匹敵・・・と言っ  
てもわからないか。

クリーク少将ならちよつとやそつとじゃやられたりしないさ。

あの人の戦闘力においての非常識さはこの部隊の人間なら誰もが  
知るところ。

どうしても心配なら闘魚が飛びかかってこない上空で様子を見て  
るといい」

「・・・危ないと思つたら援護に入るれす」

「それまでは手を出さないようにね？」

少佐のその言葉を背にコットンはその丸い尻尾を揺らしながらカ  
フウに飛び乗ると上空に飛び立つのであった。

そして上空で待機するコットンを待っていたのは部隊に入った者  
を待ち受ける洗礼・・・すなわちクリークの非常識さを身を持って知

る事になった

「なんれすかこれ・・・」

上空で待機してる筈なのに次から次に海中から打ち上げられる闘魚にコツトンは唾然として開いた口が塞がらないでいた。

次から次へと打ち上げられた闘魚はある程度の高さまで上がるとそのまま自重で落下、大きな水柱を上げて再び海に落下していきダメージを受けていた。

が、闘魚もさるもので落下し海面に叩きつけられたとは言えその堅牢な黒い鱗は衝撃を軽減し突如襲いかかってきた不埒な獲物を禍々しいその角で貫くべく突進する。

クリークはそんな闘魚の角をガシリ、と右手で掴むとそのまま掴んだ角に左手で打撃を加える。

次に手強い獲物を噛み砕いてやろうと大口を上げて襲いかかってきた闘魚に蹴りを叩きこみ、そのズラリと並んだ牙を粉碎。

そして次から次に襲いかかってくる闘魚を殺さないようにしつつもダメージを与えていけばこの獲物は驚異的であり、見えない牙を待っていると理解したのかやがて闘魚達は逃走はしないもののクリークを遠巻きにしつつ襲いかからなくなったのだ。

が、どこにでも理解しない個体はいるもので再び猛然とクリークに襲いかかる個体があった。

クリークの手刀により自身の自慢の角を大きく傷つけられたその個体は周りが手を出さなくなった事を不甲斐無いと思いつつ猛然と獲物に突進を仕掛ける。

うん流石の敢闘精神、こいつにしよう  
そう考えたクリークは手加減して襲いかかってきた闘魚を攻撃する。

正拳、肘撃ち、頭突きに膝蹴り、アッパーからの踵落とし・・・自身は獲物にダメージを与える事が出来ず、尚且つ徐々にダメージを蓄積されていった闘魚はやがて”今はこいつに勝てない”と理解したのか攻撃を中断、その場を離れようとするのだった。

## 不穩船影 ドンクリークさん

今は敵わないと想着て逃げようとしたところを尻尾を掴まれ、ボコボコにされた上で引き上げられた白目を剥いた闘魚をクリークが海から引き上げた数日後。

クリークは王宮に報告だけ行った後船の補給を済ませ、捕らえた闘魚に跨りドレスローザの港町アカシアを出航しようとしていた。

「少将ー！船には本当に乗らないんですかー？」

甲板から一時的に別行動する、という事で船の指揮を任された少佐が声を掛けてくるも

「ある程度満足したら船に戻る！習熟がてらだ、こいつはまだ反抗的だからな!!それまで指揮は任せるぞ！」

クリークは早く新しく配下に加えた闘魚の能力を確認したい模様

まあ最もクリークが船の指揮をとるのは主に戦闘時、しかも最近は専ら高額賞金首を相手する時だけなのでさほど影響があるわけではないが。

「それからコットンちゃんが少将と一緒に行かせろと言ってますがー？」

そんな少佐の声にクリークは

「かまわん、カフウとコットン臨時三等兵の出撃を許可する。

しかし鞍と手綱は作り直す必要があるな、もうちょっと丈夫さが欲しいな・・・」

そうぶつぶつと言いながら新たに作り付けられた鞍の座り心地や手綱を引いた感触を確かめていた。

クリークが跨る闘魚・・・黒い堅牢な鱗に角の根本までピツシリ並んだ鋭い牙、そして右側には大きな傷が入っているものの内側に湾曲した一對の鋭い大きな角。

禍々しい姿と立派な角という意味でマガツノと名付けられたその闘魚は急拵えの鞍を背中に、同じく急拵えの手綱を綱に取り付けられ不承不承といった感じで海に浮かんでいた。

そんな姿を見ながら搭乗者の負担にならないよう、新たに専用調

整された（クリークがちまちまと作った）鞍と手綱を取り付けられたカフウに搭乗、クリークの肩に着地した小人族のコットンは

「呆れたれすよ、鬪魚を・・・しかも大人間一人で飼い慣らすとは恐れ入ったれす」

と自身より弱いはずの大人間に自分の見識を改めつつそう溢した。

「いやあまだまだぞ？比較的マシになったとは言え、隙あらば振り落とそうとしてくるぞこいつ？」

クリークの言う通りである。

この鬪魚は比較的若い個体であり有り余る鬪争心と自身の力に対する自尊心を持っていた。

特に他の同世代の個体と比べて鋭く大きい角は彼の自慢だったが、今回の鬪争でその角を大きく傷付けられた上にボコボコにした男を今は敵わないとはわかっているのだが時折振り落としてやろうと暴れる事がある。

まあすぐにクリークのドスの効いた声が響くか鋭い蹴りが脇腹に飛んでくるのでほどほどにしているが。

何はともあれクリークは海上（息が続く限り海中も含む）を自在に移動できる手段を得て肩には偵察戦鳥騎、カフウとそれに騎乗した新たな仲間。

トンタツタ王国偵察部隊に所属していた小人、紫の長い髪で片眼を隠し、柔らかそうな丸い尻尾を持つコットンと共にドレスローザから出航するのであった。

「はははっ・・・こいつはいい!!船より小回りが効くスピードもかなりなものだ！何より空気を肌で感じられるのがいいな！・・・だから暴れるな、干物にするぞ？」

ご満悦で海上を進みつつ、最後だけボソリと言うクリークに

「早すぎるれす！あまり船と離れるなれすよ！しょーささんが言ってたれすよ!!」

コットンは少将のおもりをお願いします、と自身に頼んできた少佐の姿を思いだしつつハイテンションなクリークを嗜めるのだった。

シャーロット・アンジェ号の出航を離れた島の影から旗こそ掲げて

ないものの秘密裏に伺う”フラミンゴの船首を持った”その船に気  
づかないまま・・・

## 鈍熊休暇 ドンクリークさん

新世界で一年ほどの哨戒任務を終えてクリークの姿は頑丈な水槽に入れられたマガツノと共にマリソフオードの技術班研究室にいた。

「というわけで向こうで面白いものを見つけな、調べたら他にも魚を乗り物としての奴はいるみたいで、そいつらハンドルとかステップとかつけてたがそいつらみたいにならんとか武装が欲しいんだが・・・」

と周りに話を聞いたのと合わせて提案する。

「あの・・・めっちゃ睨んでるんですけど・・・」

クリーク専属の武装班班長・・・現在はミリタリスト計画の責任者となつている男は水槽から後退りしつつクリークに尋ねれば

「ああ、そりやそうだ。」

こいつは鬪魚つて言つてな、性格は獰猛で動くものと見ればそれが自分よりでかかろうと、ぶつかつて鋭い牙と二本の角で粉碎するんだ。

沈めた船は数知れず、噛み砕いた船も数知れず、振り返りにした人間はそれより多いぞ？多分」

とクリークが物騒な事を言い

「なんておつかないもの連れて来てるんですか!!サイズと写真だけでいいのでこの生き物は連れ帰って下さい!!」

班長は思わず怒鳴り返し

「えー、休暇とるから預けようと思つたんだが・・・」

「お断りします!!」

悲鳴のような声を上げて全力で断る班長にそんなに恐ろしいか?と思いつつマガツノが入った水槽が載った台車をゴロゴロと押しつつ元帥の執務室へ向かうのだった。

時折ギョツとしつつマガツノを見る海兵達を横目に執務室についたクリークはノックを二回。

”入れ”という答えと共にマガツノと共に執務室に入ったクリー

クはギョツとしたようなセンゴクに

「クリークであります！ただいま帰還致しました！」

と告げればセンゴクはまたか・・・と言わんばかりに頭を抱え

「まあその魚については今は置いておこう、新世界の哨戒任務ご苦労、動きを報告してくれ」

と諦めたように先を促すセンゴクにクリークは新世界での海賊の動きについて報告を行う

「まず三大海賊についての報告ですが”白ひげ”ことエドワード・ニューゲート。

主に自身のナワバリの見廻りがてら同じルートを回遊しています、基本はモビー・デイツク号単独であり時折ルートから外れる事はあるものの主には傘下の船との情報交換等かと思われれます。

次にビッグ・ママことシャーロット・リンリン。

万国（トットランド）なる国を作り上げた彼女は明らかに勢力を増しています。

特に彼等の子供である四人の実力者、カタクリ、スムージー、クラッカー、スナツクは厄介でしょう。

そして最も注意すべき対象となっている百獣のカイドウですがゲッコウ・モリアとワノ国での抗争の後急速に勢力を拡大、ワノ国のトップと手を組んだ模様です。

これにより急速にワノ国の治安は悪化、殆どが勢力下に下っています」

「ふむ、とは言えワノ国は世界政府非加盟国だからよほどのことが無ければこちらから手を出す事はなからう。

それよりもビッグ・ママの方が厄介だな、国を焼く事も何件かあったと聞いているが？」

「ええ、残念ながら・・・」

それから赤髪の新世界への帰還による混乱は三大海賊においては殆ど見られませんでした。

まあ三大海賊に混乱が無かっただけで他の有力な海賊は大騒ぎでしたかね。」

「均衡が保たれたのならばそれで良い、全くヒヤヒヤさせてくれる」

「他の勢力については報告書に纏めてあります、こちらをどうぞ」

「ああ、ご苦労。．．．その魚に関して報告書に？」

「ええ、きちんと詳細まで記入しています」

「そうか、では暫くは急ぎの任務も無いしゆっくりするといいい」

「では一月ほど休暇を頂いても？」

「む？一ヶ月か．．．どこか他所の海にも出掛けるのか？」

「ええ、いつも通りファウス島へは向かいますがその後ちよつと空への旅を考えてまして．．．」

「空への旅．．．まさか空島か!？」

「はい、色々と聞いてはいるものの行った事はないですからね、これも何かの経験でしょう」

「空島か．．．。止めはしないがくれぐれも．．．く!れ!ぐ!れ!も!きちんと調べて安全には気をつけて行けよ?これでお前が死にでもしたら笑い話にもならんからな、まあ大丈夫だとは思うが．．．」

センゴクも最近では任務ばかりだったしまあ行きたいところらしいきに行かせてやるか、と考えたのかクリークに休暇の許可を出して一月の休みに対して人員編成を頭の中で組み直すのだった。



## 熊子供達 ドンクリークさん

セングク元帥に報告と休暇の申請を行いクリークの姿は演習場にあつた。

そこではパールやドレイク含む何人かの子供達数人の姿がありそれぞれが組み手を行なっておりその様子を新設されたアスカ島の海軍道場へ赴任する予定のゼファー教育総監がジツと見ていた。

「どうよゼファーのおっさん、パール達の様子ゴツ・・・」

「おっさんは止めろと言ってるだろう。」

クリークは質問している途中でゼファーに殴られた頭を抑えつつ

「いや、今更ゼファーさんとかゼファー殿とか呼ぶのもどうかと思うが・・・」

と反論すれば

「ああ、率直に言ってそれは気持ち悪い」

との酷い答えが帰ってきたのでクリークはそれに慥然とした顔をしつつ

「酷いな・・・で、パール達の様子はどうですか?」

「ああ、お前が連れてくる奴はどいつもこいつも筋がいい。特に能力者であるパールはその能力もあつてか近接戦闘には適性が高いな。」

とは言えその硬さを過信しすぎているくらいはあるがな」

そう言いながらゼファーが見る方向を見ればそこにはローグタワーの時より幾分か体つきがガツシリとした無手のパールと細い剣を持った朱色の髪の少女が相對していた。

パールが大振りの拳を少女に振るうもそれを左手で受け流しつつダメージは与えられないと分かっているのだろう、思い切りよく右手の細剣を後ろから首に振り下ろす。

「やはり硬いな、能力者とはやはり凄まじいものですね」

「とは言え硬さは鋼鉄程度だ、トップクラス相手には紙と変わらん」

「そんな一部の例外を例えに出さなくても・・・」

「お前にとつても本気なら鋼鉄と紙は変わらんだろう」

しかしそれはあえなく鈍い音を立てつつ弾かれそこに更にパール

を相手に蹴りを入れつつ距離をとる赤髪の少女。

更にそこから細剣の構えを刺突に移行、そこから猛然とパールに襲いかかる。

パールもそれを迎撃しようとするが直前で少女は跳躍、パールの後ろに回り込む。

「パールもですが相手も中々ですね」

「ん？お前が拾ってきた少女らしいぞ？」

そう、ここにいる子供達はクリークが拾ってきた子供達・・・通称”鈍熊の子供達”と呼ばれる集団である。

彼等はクリークが任務中に拾ってきた親を亡くした子供や捨てられた子供、シャボンディにて保護し、帰るところが無い子供達である。

大半はクリークが出資する孤児院に入れられたがここにいるメンバー・・・彼等彼女らは強く海軍に入れてくれと嘆願してきた子供達である。

「彼等が強い希望を持って海軍に自ら入隊したというのはわかるんだが・・・子供達を戦場に連れ出すのはどうにも」

「なら彼等の意思を尊重してやれ、無理やり戦場に出すわけじゃないんだから気負いすぎるな。」

そう話しているうちに組み手は終わったのだろうかパールと朱色の髪の少女がこちらを見て驚いたように駆けてくると

「クリークのおっさんじゃねえか！ギンの兄貴は元気か？」

「ちよつと！相手は少将ですよ!?クリーク少将お久しぶりです！あの時は助けて頂いてありがとうございます!!」

「ようパール、元気そうで何よりだ。ギンは今別件でいないが元気だぞ？」

それとそつちの女の子は・・・」

「あ、名前言い忘れてましたね！イスカです！あの火災の時は助けて頂いてありがとうございます!!」

火災の時という言葉で数年前の事件を思い出すクリーク。

「・・・そうか、君はあの時の子か。火災を起こした者と同じ海軍の人間として深く謝罪させてくれ」

膝をつき身を屈めると痛々しく火傷の痕が残る手をそつと握り深く謝罪する。

そんなクリークの姿にイスカは慌てたように

「そんなー！少将が謝らないで下さい！少将はわたしを助けてくれたじゃないですか！

確かに事件の詳細は聞かされましたがあれは一部の人間なんですよね？別に少将が事件をおこしたわけじゃないんですよ？」

そう言っつて否定するも

「いや、謝らせてくれ。まだ若いのにこんな火傷の痕まで・・・」

「落ちて着けクリーク、それ以上は彼女を困らせるだけだ」

謝罪するクリークの肩に手を置くゼファアの言葉にグツと目を閉じ立ち上がる。

「・・・すまない、困らせたな。俺は君たちに期待している、これからも鍛錬に励んでくれ。」

そう言っつてクリークはパールとイスカの肩をポンと叩きつつゼファアと二、三言話して演習場から出ていくのだった。

## 珀鉛完治 ドンクリークさん

休暇をもらって数日、道中で違法海賊を捕縛したり船を沈めたりしつつクリークの姿はファウス島にあった。

道中で面白いものも手に入ったがそれも後で調べないとな。

このファウス島では主にフレバンスから国外脱出した珀鉛病の患者達が治療を受けており、新たに天才外科医、ドクトル・ホグバックが加わったことにより治療計画は加速、この頃にはあと数名の手術を残すのみとなっていた。

この島は元々海軍支部があるだけで周りには何も無かった所をクリークが目をつけ、珀鉛病の治療にあたって世間の誤解もある事だから無用な騒ぎを起こさぬよう何も無い所に治療施設を建てたのが始まりである。

なのでこの島にいる人間は海軍支部を除けば、まずドクトル・ホグバック含む治療チームである天才科学者のDr. インディゴ、金属学者のアシエ博士、珀鉛病の患者でありながら陣頭指揮をとるトラファルガー・ルーク医師。

それから彼等から医学、薬学を学んでいるモネ、彼女の妹であるシユガー、アシエ博士の娘であるオルガ、それから現在はクリークの副官であるが念のためという事でファウス島で留守番をしていたギンや同じく海兵であるシグマ。

そして未だに昏睡から目覚めぬコラソンことドンキホーテ・ロシナントエなどである。

「そうか、未だに目は覚めないか・・・」

クリークはトラファルガー・ルークから経過報告を聞き残念がる。「ええ、ホグバック殿にも診てもらったのですが原因は不明で完全にお手あげです、ひよつとしたら脳にダメージが行ってるかもしれないとも・・・」

色々手を尽くしたのだろう、ルークも困ったような顔で両手を持ち上げて見せる。

「そうなるかと厄介だな・・・かと言って原因が分からない状態で手術というわけにもいかんし・・・」

「ルーク先生、クリークさん、いつだったか話してた”オペオペの実”とかいうのなら可能なんじゃない？」

と、横で聞いていたルークの助手を務めるモネがそう尋ねるも

「・・・あれ多分ルーク先生の息子であるロー君が食べてる可能性高いんですよね、しかも残念ながらまだ居場所が掴めてないですし」

ここで少しオペオペの実について説明しておこう。

詳細を省くがオペオペの実は特殊な空間を発生させ、空間内の生物・物体を自在に改造できる能力である。

自らの命と引き換えに、“永遠の命”を与える不老手術を施すことができるなどの能力もあるがそれは一旦おいておく。

原作においてこの実の能力者であったローは、自身の周辺に“ROOM（ルーム）”と呼ばれる球状の特殊なサークルを展開、その内部に存在するあらゆるものを自由自在に取り扱う事ができる”改造自在人間”となっていた。

例えるなら“ROOM”はそれぞれものが手術室、それを展開するローは執刀医、それ以外の“ROOM”内に存在する全ては手術台の上の患者となる。

この“ROOM”の空間内がローの能力が直接影響を及ぼす範囲であり、肉体だけでなく精神に影響を及ぼす事も可能であり切断、接合、移動、交換、調査等々自分の思うままにあらゆる処置を施す事ができるワンピースに出てくる悪魔の実の中でもかなり万能な能力である。

最もこの能力を最大限生かすためには能力者本人が人体に精通している必要があるが。

「ああ、言っていましたね。まあクリーク殿の話を聞く限りあの実は医学知識があるものが食べた方が有効らしいですからまあローなら役立てる事は可能だと思いますが・・・」

と、ローの事を知っているからこそそう溢すルークと

「そうかい、居場所が分からないならどうしようもないか・・・」

顎に人差し指を当て考えこむモネ

「そう言えば彼女・・・モネの様子はどうですか？」

そんなしんみりとした雰囲気クリークは話題を変えるべくモネの様子について聞けば

「本人を前にして言うのも何ですがかなりの腕だと思えますよ？」

私の知識もそうですがホグバック殿にも師事してますしドクターインデイゴから薬学についても習っているようですし。

実技も私の代わりに診察を行ったり、ホグバック殿と一緒に手術の執刀に助手としてついたり今の問題は無さそうですね」

とルークはかなりのベタ褒め具合でありモネはそれに対していやあ、と言わんばかりに頭を押さえて照れていたのだった。

## 雪の行方 ドンクリークさん

「うむむ、まさかこいつがユキユキの実とはな……どうしたものか」  
クリークは浜辺で行っていた仕事を中断して、休憩がてら机の上に置いた渦巻模様が特徴的な果実……悪魔の実を見て図鑑片手に唸っていた。

これはマリンフォードからファウス島へマガツノに乗って向かっている道中で賞金首リストに載っている海賊がいたので、適当に追い回しつつ小突いて没収したものである。

原作であればモネがこの能力を持っていたがドフラミンゴが早い段階で囚われた為何の因果かこうしてクリークの手元に転がり込んできたのだがクリークはこの悪魔の実の取り扱いを決めかねていた。「どういう奇術が使えるようになるれすか？」

そんな悩むクリークに対し島の全景を見ておきたい、とカフウに乗って一周し終えてきたのかコットンがカフウと共に肩にバサリと舞い降りた。

「む？悪魔の実は知ってるのか？」

「マンシエリー姫の護衛についてるレオがこれと似た果物を食べてぬいぬい”の奇術が使えるようになったれすよ、これも同じれすか？」

その言葉にやっぱあの時チユチユの姫の横にいたのはレオだったか、と思いつつ

「同じ能力……トンタツタ風に言えば奇術か、同じ奇術は存在しない。この場合この悪魔の実はお前たち風に言えば”ゆきゆき”の奇術、自分を雪にできる能力だな」

と簡単な説明をコットンにすれば

「……ユキって何れすか？」

その言葉に”ああ、雪の存在知らないのか……”と思うも”そりやそうか、ドレスローザに雪は降らないだろうからな”と思ひ直し

「えーと、あれだ寒い場所では雨みたいに空から小さい氷の粒が降ってくる事があってな、その事だ」

どう説明したのか、と考えとても大雑把でしかもあまり合っていない説明をコットンにする。

「ふーん、外には知らないものが色々あるね。」

ところでそれどうするねすか？くりーくが食べるねすか？」

それなんだよなー、とクリークは考える。

確かにこのユキユキの実、ロギア系ということもありかなり貴重である。

ただどうしても他のロギアに比べて攻撃力に劣るのだ。

確かにロギアの攻撃が殆ど効かないというのは魅力的だがそれなら自身の金剛体術で大抵の攻撃は効かないし何より雪というのもあり食すのを躊躇っていた。

ロギアに対して覇気を纏った攻撃は有効なのは当然だがその他に弱点を突くというものがある。

例えば砂には水を、雷にはゴムをといった具合にだ。

その結果で言えば雪には炎やマグマなど熱に弱いという事になり弱点が突かれ易くなると判断したのだ。

「いや、俺は食べない。これはしばらく保管しておこう、何かしらの役に立つかもしれないしな」

この世界では誰も彼も割と素で熱とか炎とか使うからなあ・・・

「くりーくがそう思うならそれでいいんじゃないねすか？」

そう言ってクリークは悪魔の実と凶鑑をリュックに仕舞い込み中断していた工作を開始し始めれば

「くりーくは何を作ってるねすか？」

釘を啜えてハンマー片手にコンコンと作業をするクリークに左肩に移動したコットンがそう尋ねる。

「ああ、船だよ。と言っても2、3人ほど乗れりゃあいから小型のボートみたいなもんだけどな。

ああ、そうだちよつとあるとこに出かけるからお前にもついて来てもらおうぞ？」

「あるとこ？」

「ま、お楽しみってやつだ。とりあえず俺とギン・・・到着時に出迎え



た黒髪の子供わかるか？そいつとテゾーロ・・・シャボンデイで見たろ？金の指輪嵌めてた奴とお前だな」

「まあどこに行くかは楽しみにしておくれす、外の世界は知らないものがいっぱいれすから何処へいっても新しい発見がありそうれすからね」

「とりあえず明日か明後日にはこのファウス島から一旦グランドラインの前半部に行つて、それからこの船で目的地を目指す事になるからそのつもりで頼む」

「地理は説明を受けたれすがこんな小さな船でどうやって前半に行くれすか？」

とコットンの最もな疑問にクリークはポンと手を打ち

「あ、勘違いしてたな。・・・という事は無駄じゃねえか！」

とクリークは金槌を放り出したのだった。

## 鈍金銀小 ドンクリークさん

連れていけと駄々をこねるシュガーを”もつと大きくなってからな?”と宥めすかしてクリークは折角だから、と作った小船にシグマとギン、必要な荷物を乗せてマガツノにくくりつけると島の他のメンバーに見送られながら出発した。

因みに島にいる珀鉛病が完治したフレバンスの人達に身の振り方を聞けばここで働かせてくれ、と望む人が多かったのでテゾーロに連絡を取りシャボンデイにあるステラ・プロダクションの本社をこちらに移し、そこで働いてもらおうかと考えている。

時折休憩を挟みつつレッドポートへ、そこでマガツノを特注の水槽に載せ替えて、少し惜しいが”ローレライ”と名付けたお手製のボートは置いていく事にした、自分で作ったボートで思い入れはあるとは言えぶっちゃけただのボートだし。

ボンドラへのりマリージョアへ、細心の注意をはらって天竜人に見つかからないように・・・とは言え天竜人はだいたい新しく作られた屋敷に軟禁されているから見かける事は無いが。

途中でエターナルポースを受け取り、そのままシャボンデイ諸島に向かいテゾーロの元へ。

予め告げていたためしつかりと準備を済ませたテゾーロがステラプロダクションの社屋前で待っていた。

「まったくクリークよ、おれも一応社屋の移設準備やら何やら忙しい身なんだが・・・」

直前に言われた為か懽然とした面持ちのテゾーロに「すまん、お前がいけない事には話にならなくてな。」

「まったく、あんま長い間は離れてられねえからな?」

「安心しろ、せいぜい一週間か長くても二週間くらいで考えている。ところで能力の具合はどうだ?」

そう、テゾーロはゴルゴルの実を食しており現在は仕事の傍、その研鑽に努めていたのだった。

「ああ、動かすだけならほぼ問題無い」

そう言つて両手指の全てに嵌めた金色の指輪を撫でるテゾーロ。  
勿論この指輪は金でできており材料はフレバンスの王宮広場でパ  
クツ・・・拾つた金塊を流用しているが。

「重畳重畳、ではステラさんしばらくお願いします。」

一応手すきだった一部の部隊を秘密裏に護衛につけていますので」  
「すまん、一応書類は纏めている。後は各所に通達するだけだから  
頼む」

そう言つてテゾーロはクリークと連れ立って港に向かうのだった。  
クリークは新たに大型のボートを借り受けマガツノに括り付ける  
と大量の荷物と共にテゾーロ、ギン、シグマをボートに、カフウとコッ  
トンを肩に乗せマガツノに跨ると

「目標！メルヴィユ！旗艦全速・・・じゃなかった、マガツノ！こつち  
の方向に進め！」

クリークのその号令と共にマガツノは猛然と進み出したのだった。  
全速のマガツノにより二日ほどで思ったより早くメルヴィユに到  
着した一行は浜辺で一時休息をとる。

久々の里帰りにこの国の固有種であるシグマも嬉しそうだったの  
で少しならウロウロしてきていいぞ、と告げギンにはこの島にはかな  
り手強い獣が多いから鍛えるには丁度いいぞ？と告げた。

ギンとシグマが森の方に向かうのを横目に

「コットンにはカフウと共に上空を警戒、二人を捕捉しつつ大きめの池  
か何かあったら知らせてくれ」

と指示を出しテゾーロと共に海図と地図を広げると

「さてテゾーロ、お前は空島伝説を知ってるか？」

と言いながら浜辺に腰を下ろした。

「聞き方が意地悪だな、伝説扱いしてるのは一部の知識不足の人間だ  
けだ。」

知ってる奴はちゃんと存在していると理解してる。しかしそう言  
うって事は目的地は空島か？」

「ああ、本来空島は正規ルートとしてハイウエストを経由して行く  
ルートがある。」

「この島は随分と離れているようだが？」

「別に正規ルートと言っていない、別のルートを使う。

ついでにハイウエストを経由するルートは十人で行って辿り着くのが一人とかいう巫山戯たルートだしな。」

「別のルート？」

「ああ、代表的なものとしては突ノックアップ上げる海流ストリームに乗って空に打ち上がるノックアップと言うものがあるが・・・」

「正気か!?ありやただの災害だぞ?」

「お前の言う通りだ、流石に部隊の皆をそんな力ケに巻き込むわけにはいかんからな。」

「おれならいいってか!冗談じゃねえぞ!」

「・・・まあそんな危険なルートはとらんがな」

「驚かせるな!・・・でどういうルートで行くんだ?」

「この島からだ」

そう言ってクリークは地図の一点を指差すのだった。

## 天峰秘境 ドンクリークさん

メルヴィユ・・・かつて脱獄した金獅子を捕らえた島であり本部二等兵であるシグマの故郷でもある。

別名”雲に届く秘境”の名を持つ島である。

別名の通り地図を指さした一点・・・天高く聳えるまるで塔のような山の麓までクリークは来ると、ボートに乗せていた大半の荷物を背負い直して月歩にて飛び立った。

クリークの考えは簡単である。

もともとそのうち空島には行く予定だったが、ハイウエストを経由するルートやノックアップストリームを使うルートは危険と考え他の方法を仕事の傍で探していた。

空島があるのは積帝雲・・・雲の化石とも称される雲の中にあり積帝雲は下層の白海、白々海の二層で構成されている。

そして下層の白海でさえ高さは7000メートル、レッドラインよりも更に高いその高さは行ける方法は少ない。

が、クリークは元々高さのある場所から直接乗り込む方法を考えた。

その為レッドラインよりも更に高い山を探し思い出したのがメルヴィユである。

金獅子再捕縛の際にたけー山だとは考えていたが頂上が雲で隠れていた事もあり、まさかそんなに高いとは思ってなかったが調べてみれば大当たり。

直ぐに本部の航海士チームと連絡をとりメルヴィユ周辺の気象を調べ積帝雲のルート上にある事を確認、予定通りであれば島に到着して2、3日中に積帝雲と接触する筈だ。

時折小休止を挟みつつ数時間程で頂上まで到着、早速背負ってきた資材を下ろし今頃テゾー口達はキャンプを張っている頃か、と考えつつ大きく伸びをする。

「やはり空気が薄いか・・・」

流石にこの高さとなると空気も薄い、早めにこつちに移り慣れさせた方がいいだろう、と考えつつメルヴィユの頂上から飛び立ち、あわや地面に激突といったところで連続して月歩を踏み込み急ブレーキ、無事に地面に降り立つクリークは浜辺に向かいウネウネと黄金を操作していたテゾーロに声をかける。

「こつちは終わったぞ、そつちは行けそうか？」

「ああ、ロープ状になって事だったがこんなもんか？」

そう言つて細くした黄金を見せるテゾーロに

「荷重は問題ないか？」

と確認すれば

「おれも最近知つたが普通の黄金と比べて能力で操っている黄金はかなり頑丈になる。

この太さならびくともしねえ、ちよつとやそつとじや千切れやしねえよ」

テゾーロが黄金に輝くロープを渡しクリークは受け取ると数回引つ張り満足そうに頷くと

「ギーン！シグマ！カフウ！コットン！集合しろ!!」

森の方にそう大声をかけるとボートを引き上げるクリーク。

戻つてきたメンバーに報告を聞き、コットンの報告にあつた池にフゴフゴと鳴き声を上げるマガツノを担ぎ上げ迅速に運んで叩き込む。

実はこの闘魚、海水でも淡水でも生きていけるらしいのでしばらくはこの池で留守番してもらおう。

いくら闘魚が強いとはいえこの島の生物にそう簡単に勝てるとは思えないから生態系を壊す心配もないしな。

殆どの荷物は頂上に置いてきたのでボートを担ぎ上げたクリーク以外の一行は身軽に山の麓まで移動する。

麓まで到着したおり

「・・・本当に大丈夫かこれ？」

ボートにシグマとテゾーロを乗せ黄金のロープでグルグルに巻きつけると方が一にも落ちないようにそれを背中と左腕に括り付けるクリークにテゾーロはそう尋ねれば

「心配するな大丈夫だ・・・多分」

最後だけぼそりと言って右腕にギンを括り付けた上で脇に抱え込み

「おい、今多分って言ったか!？」

ボートに括り付けられた状態でジタバタするテゾーロがそう反論するも

「よし、カフウとコットンはそのまま先行して休憩できそうなくぼみなどがあつたら知らせしてくれ」

「わかつたれす、でもこの山を登るれすか?かなり高いれすよ?」

「大丈夫だ、重いのを考慮しても数時間あれば登り終える」

そう言つて背中には亀のようにシグマとテゾーロ、ボートを背負い右腕にはギンを抱えたクリークは再び月歩にて飛び上がるのだった。

## いざ空島 ドンクリークさん

メンバーを薄い空気に慣れさせつつマリージョアで航海士チームに予測してもらった気象予定通り積帝雲がこちらに来るのを確認しつつ

「もう直ぐ雲に入るぞ！予想通り高さが足りないから雲の海に突入する！各員準備はいいか!？」

その声にボンベを背負い色々荷物を持った状態で応と返すメンバーを横目に（テゾーロとカフウは防水スーツを着せて）やがて天届く峰は雲に突入する。

「……こりやすごいな」

そう溢すのはテゾーロ。

ボートが浮かんではいるもののその海は真っ白であり上からは燦々と陽が降り注ぎそのままだと目が痛くなりそうである。

白海の海面までクリークが全員を引っ張り上げボートを海面に投げ出し全員をその上に乗せるとギンやコットンも物珍しそうに周囲を見回す。

「全員問題無いか？」

「ボス、月歩のままだと疲れないか？ボートまだ空いてるぞ？」

その言葉にありがたくボートに乗ればミシリと嫌な音がしてボートが沈み出したので

「ストップストップ!!クリーク！お前は月歩で飛んでろ！ボートが沈む!!」

とテゾーロの悲鳴のような声に慌てて空中に身を翻す。

「ごほん、とりあえず全員これつけておけ。」

あつちに滝？みたいなのが見えるからそっちに向かうか……

全員にサングラスを渡し、自身も装着するとボートにロープを繋ぎ、それを腰に括り付けると月歩で猛然と確認できた滝らしきものに向かう。

真っ直ぐ行けるかと思いきや道中所々に島のような雲がありそれを避けつつ現れたのは轟々と遙か上空から流れ落ちる白い雲の滝。



「で、この滝を登れってか？」

そんなテゾーロの言葉に原作では入国管理所があつた筈だがなあ？と疑問を覚えつつ

「流石にそのまま登るのは面倒そうだな、ちよつと待っててくれ」

と白い海に飛び込む。

視界が悪い中目的の物を見つけ適当に小突き回してボートに戻れば

「随分と大きいエビれすね・・・闘魚よりも大きいれす」

「ボス！何ですかそのデカイエビ!？」

「何だ？腹でも減つたのか？確かに食い手はありそうだが・・・」

「しゃらっぷ！こいつにボートを背負って行かせるんだよ！全員こいつに捕まれ、念のためロープで各自つなぎ合わせておくようにな！

おいエビ、俺たちを上まで連れて行ってくれ、危害は加えねえから安心しろ。」

と捕獲したエビに言つて聞かせれば不承不承ながら大人しくするエビに全員搭乗して

「よし行けっ！いざ空島だっ!!」

「空島か・・・どんなところですかね！」

「噂にや聞いたことあるが・・・まさか俺が行くとは思わなかつたな」

「外の世界は凄いいれすね！まさか空にも海があるとは驚きれすよ！」

「ぐるるー！」

「くるるるっ!!」

白海のエビ・・・特急エビは滝に突入したのだった。

猛スピードで特急エビは滝を昇りクリークは海老の滝登りつてか？などとどうでもいい事を考えつつ、とうとう特急エビは上層部、白々海に到着した。

「へえ、ホントに島があるな。スカイピアって看板が途中にあつたがこここの名前か？」

「島も真っ白ですよ！建物もありますし誰かいるんですかね？」

騒ぐ仲間たちを落ち着かせつつボートに乗せ、ここまで運んできてくれたエビを解放してやるとさつきと来た道に戻る特急エビを見送

りつつ一行は浜辺へ。

「変な植物れすね、ふわふわな地面から生えてるれすよ」

「へえ、なんか美味そうなのがなってるな。」

「・・・かつてえなこれ、おいクリークこれ開けるか？」

「そう言いながらこつちに何かの果物を差し出すテゾーロに

「えらくはしやいでるな・・・そらっ！これで飲めるだろう？」

椰子の実のように硬いソレをクリークは手刀で上半分を切り落と  
しテゾーロに返す。

そしてクリークはおもむろに持ってきた荷物から黒い全身スーツ  
を取り出すと

「よしー危ないかもしれないから全員荷物持って下がってる!!」

「そう声をかけ大きく息を吸い込む。」

この試みいかんによってはこの島の難易度が爆上がりするのでき  
ちんと確認しておかなければならないからな。

「そうして大声で

「エネルのおたんこなすー！！！！」

と叫んだのだった。

## 空の楽園 ドンクリークさん

10秒・・・20秒・・・と経って何も反応が無いのでクリークはようやく緊張を緩める。

いきなり何やら装備して大声を出したクリークを見て仲間たちは呆気にとられたように

「どうしたんですボス、急に大声なんか出したりして・・・」

と尋ねるも

「ああ、いやちよつと気がかりがあつたもんだからな。気にしなくていい」

と答え分厚いゴム製の全身スーツを脱ぎ捨てつつ浜辺へ向かいながら考える。

エネルはまだここに来ていない、クリークはそう結論を出して安堵する。

エネルがここにやってきたのがいつだったか覚えていなかった為ぶつつけ本番になったが運が良かったようだ。

そういうえば入国管理局も無かったがあれはエネルが建てさせたものという事なら話は繋がるな。

あの婆さんとエネル達は繋がってたみたいだし。

「よし、シグマはこの島の人間に見つからないように海の方から周り大きい島を探してくれ、この海は海底が無いから注意してくれよ？」

カフウは上空から偵察を、コットンは・・・ちよつと狭いがポケツトに入ってくれ

ギンとカフウはしばらく何げなくここで遊んでろ、俺は住人を探してくる」

そう指示を出してカフウが上空に、シグマが海に入っていくのを横目の上陸前に見えた建物の方に歩いていけば

「へそ!!」

という少女の声。

年の頃は10歳ほどだろうか？金の髪をお下げに、頭頂部は何やら触覚のような独特の髪型の少女。

そして背中には摩訶不思議な事に一對の小さな翼。それを見てそういう空島特有の挨拶だったか?とさえつつ

「へそ、お嬢ちゃんはこの人間かい?」

と尋ねる。

「私はコニスです!この島に住んでいます!青海からいらしたんですか?」

「ああ、俺はクリーク。色々聞きたい事もあるんだがお父さんかお母さんはいるかい?」

「父上は雲切場に行ってます!もう直ぐ戻ると思いますよ?」

「ああ、だったらそのビーチでしばらく待たせてもらってもいいかな?」

「はい!案内しますね!」

その声に従い歩いていくと

「へそってなんれす?」

とポケットからの小声に

「この挨拶みたいなもんだろ」

と返しておく。

そうしてメンバーがはしゃいでいるビーチに戻るクリークに

「ここはスカイピアのエンジェルビーチです!青海からいらしたのでしたら色々物珍しいかもしれません!何かあれば言ってお下さい!」

「お、嬢ちゃんはこの島の人間か?」

そんなコニスを見てえらく硬かった果物を片手にテゾーロがやってきた。

「貴方も仲間の方ですか?あ、その手に持つてる果物…コナツシユって言うんですけど飲みますか?」

とても硬い果物…コナツシユを見てコニスがそう言うも

「いや、割った方がいいが食いがわかんなくてな…」

反対側に持った真つ二つのコナツシユを手にテゾーロが肩を竦めれば

「え?鉄のように硬いんですけど…えつとこれは裏からこうやって…」

と一瞬疑問を浮かべるもコニスにはコナツシユをひっくり返しナイ  
フで中心を抉るとストローをポンとさして

「こうやって飲むものなんですよ!」

テゾーロに差し出す

「おつ!こりやうめえな!おいクリーク、お前も飲んでみるよ!!」

との声に少し分けてもらったが成る程、常日頃高い物を食ってるテ  
ゾーロが言うだけの事はあるな、と思いつつコニスを見やる。

「嬢ちゃんはこの島の案内を?」

「はい!青海から来る人は珍しいので父上と一緒に色々案内をしてい  
るんです!」

あ・・・、父上も戻ってきたみたいですね!」

とコニスが大きく丘の方に手を振れば

小さな影が階段を降りてくるのが見えた

「コニスさん!へそ!!」

「ええ、へそ!父上!!」

不可解な掛け声をかける二人に

「・・・なあクリーク、ありやなんだ?」

と疑問を抱くも

「ま、この地方の挨拶ってとこだろ。合わせとけ」

よそ様の風習にわざわざ口を突つ込む事もないだろう、と小声でや  
りとりをする。

「父上!この人達青海からいらしたそうですよ!」

「そうですか、それでは戸惑う事も色々とおあるでしょう、すいません。」

「いえいえ、お気になさらず。俺はクリーク、ここへ来たのは・・・観

光みたいなものだ」

「おお、申し遅れました私の名はパガヤと申します、すいません」

パガヤと名乗ったのは口髭が豊かな男性。薄い黒髪に触覚だけが  
伸びており、やはりその背中には一対の羽。

何でいちいち謝るんだろうと思いつつも

「パガヤさん、色々とお話を聞きたいのですがよろしいですか?」

と尋ねれば

「おお、では家においでください！・丁度お昼時ですから昼食をぐっ馳走  
しましように！」

とパガヤは一行を自分の家に案内するのであった。

## 空相違点 ドンクリークさん

コニスの父親・・・パガヤから情報を集めわかった事は  
神様・・・役職名だがこのトップとしてガン・フオールと呼ばれ  
る人物が君臨しているらしい。

別の勢力としてシャンディアと呼ばれる部族がありガン・フオール  
とシャンディアは反目しあっているものの何とか共存しようと話し  
合いを進めているらしく、シャンディアが多く見られるのでアツパー  
ヤード・・・この空島にある大地の事だが、そこには近づかない方が  
いい

、と念押しをされた。  
まあ行くんだけども。

原作の空島編ではゴッド・エネルギーがこの国のトップとして君臨して  
おりガン・フオールは神の座を奪われていた。

シャンディアの者達もエネルギーとは敵対しており原作では麦わらの  
一味、神の軍団、シャンディアの一派と三つ巴の戦いを繰り広げてい  
たが今回はその心配は無さそうだ。

原作を見る限り現在の神であるガン・フオールは穏健派のようだし  
可能性があるのはシャンディアの戦士達とアツパーヤードでかち合  
う可能性があるくらいか。

行動は慎重に行った方がいいな。

「ところでパガヤさん、ダイアルが購入できる場所に心当たりはあり  
ませんか？」

と一行は空島の料理に舌鼓をうちつつクリークが尋ねる。

「おや、青海の方はダイアルについては知らないと思ってました  
が・・・」

「いえ、一部のものは空島の実在を知っていますから。ダイアルもた  
まに青海で出回る事もあるのですよ」

「そうだったのですか、ダイアルは色々種類はありますが何をご希望  
ですか？」

「そうですね、欲を言えばジェット・ダイアルなどが欲しいところです

が・・・」

と、自身の特殊装備にも使われている貝を挙げれば

「ジエツト・ダイヤルは絶滅種なので難しいですね、下位種のプレスダイヤルであれば売っていますが・・・」

「それはどこで買えます?」

「ええ、それでしたら近場にラブリー通りという繁華街がありますのでそちらがいいかと、案内は必要ですか?」

「いや、そこで買い物してから色々見て回ろうと思ってます」

「他にも色々な種類がありますからゆっくり楽しんで行ってください」

「昼食ご馳走さまでした、帰るときにはまた寄らせてもらいますので、じゃあなコニスちゃん」

そう言つて一行は大きく手を振るパガヤ親子に手を振りつつ教えられた方向に向かうのだった。

ラブリー通り。

この島唯一の繁華街と言うだけあつてそこはかなり賑わっていた。

「あの親子もれすけどみんな羽が生えてるれすね」

「頭の触覚?みたいなものがあるのも一緒だな」

「この島の文化ですかね?他の地方がわからないのでなんとも言えないですけど」

早速ダイヤルの買い集めといきたいとこだがここは通貨がベリーではなくエクストル。

ベリーは入国料の記憶もあり割と多めに持ってきたものの金が無いのでまずはとある適当な店主と交渉して軒下を借りると下から持ってきたものを色々広げて

「さー寄つてらっしやい見てらっしやい!とても珍しい青海の品だよ!鉄に木材、ガラスに服に装飾品!今ならお買い得だよ!!」

そう声を張り上げ空島に無さそうな物売り捌く。

物珍しさもあつてか露店は大盛況、品物はどんどん売れていきクリークは纏まった金を入手した。

ある程度まとまった額をひーふーみーと数えているとテゾーロの



「なあ、わざわざこんなことしなくても持つてきたベリーを両替すればよかったんじゃないか？」

との言葉にハツとなり

「・・・あれだ、ちーきじゅーみんとのコミュニケーションとかなんとかそんな感じで」

しどろもどろに答えるクリークに

「まあいいけどさ・・・で、ダイアルとやらを買うんだろ？」

「ああ、それぞれにわかる手分けして色々と集めてきてくれ、俺はあっちから回るからテゾーロは向こうから、ギンは町の人に色々とアツパーヤードについて聞いてきてくれ、子供の方が警戒は薄いだろう。」

「わかった」

「了解だ、ボス」

「よし、じゃあ1時間後を目安にまたここで落ち合おう、では解散！」

その声に3人はそれぞれ別の方向へ歩みを進めるのだった。

## 空上の貝 ドンクリークさん

「ずっと晴れたままなのはありがたいな」

「まあ空の上ですからねー」

「雨と違って降らないのか？ここは」

「まあ空の上だからなー」

そんな会話をしつつ一行は風貝（ブレスダイアル）が搭載された船、ダイアル船でアッパーヤードとここでは聖地と呼ばれる場所に向かっていた。

ダイアル船なので漕ぐ必要なく勝手に動いてくれるが進路は手動でとらないといけないので舵にクリークがつきテゾーロは見張りを、ギンは今回かき集めたダイアルを物珍しげに眺めながら

「しかしボス、こんなにダイアルつての集めて何に使うんですか？」

と灯貝（ランプダイアル）を持ち上げて見せるギンに

「まあメインとしてはダイアルによる装備の改良だな、まあ深くは考えてないが色々と役に立ちそうだと思ってな」

一行は今回の取引で色々とダイアルを手に入れた。

例えばこの船に使われているような風を噴出する風貝（ブレスダイアル）や音声を録音、再生できるカセットのようなダイアルの音貝（トーンダイアル）。

光を蓄え、長時間微弱な光を放つことも可能な灯貝（ランプダイアル）や

灯貝と違いの微弱な光ではなく、ため込んだ光を一気に解放する閃光貝（フラッシュダイアル）。

炎を蓄え料理などの時にコンロ代わりに使われる炎貝（フレイムダイアル）や同じく温めるのに使われる熱貝（ヒートダイアル）、香りのある気体を蓄える事のできる匂貝（フレーバーダイアル）。

映像貝（ビジョンダイアル）と呼ばれる映像を記憶するダイアルや液体を蓄える事ができる水貝（ウォーターダイアル）

残念ながら危険だからか衝撃を溜め込む事ができる衝撃貝（インパ

クトダイアル)は売ってあるのが確認できず、排撃員(リジエクトダイアル)、噴風員(ジエツトダイアル)といったとても欲しかったものは絶滅種なので当然確認出来ず。

これも欲しいと思っていた原作に出てきた斬撃を蓄える事ができる斬撃員(アックスダイアル)。

これはそもそもスカイピアには存在しない種らしくエネルギーの部下の者が手にしていた事から手に入れるのならエネルギーの故郷・・・ビルマ?ビルカ?まで行く必要がある。

まあそれは流石に手間なので今回は諦めるが。

そして最もポピュラーだった雲員(ミルクダイアル)

これは千差万別あらゆる加工雲を蓄える事のできる員でこれがあれば戦闘の手札が大きく広がるのだが残念ながら・・・ひっじょーに残念ながら加工雲自体が空島の環境でなければ力を発揮しないため、青海では使用不可能との事なので残念ながら諦める。

まあ研究用に数個購入したけども。

「料理に使ったりするもので武装を強化するれすか?」

そう言いつつ自分の体よりも大きなヒートダイアルを転がしながらコットンがそう尋ねるも

「便利な物つてのはえてして武器に転用されるもんさ。」

例えばフレイムダイアルは火炎放射器になるし、お前が転がしてるヒートダイアルなんてちよつと槍なんかに仕込めばヒート・ジャベリンになったりする。

「というか危ないから転がすのをやめような?」

とコットンからヒートダイアルを取り上げつつクリークはそう言う。

「むう、くりーくは考える事が物騒れすよ」

と言いつつ不満そうなコットンにテゾーロが口を出し

「コットンの嬢ちゃん、その考えは別にクリークに限った話じゃねえよ。」

嬢ちゃんのところならいざ知らず、外の世界ってのは大体そんな考えがあるもんだよ」

そんなテゾーロの言葉に

「外の世界とは物騒れすね．．ドレスローザとは大違いれす」

まああの国は貧しいながら決して戦争などおこさない平和な国だしそれもそうだよな、と思いつつ前方に森が見えてきたので舵を切る。

「よし、そろそろ島に入るぞ。各自警戒するように」

とクリークは告げるのだった。

## 空の大地 ドンクリークさん

雲でできた川を進みつつ情報を纏める。

パガヤ親子も言っていたしギンが集めた情報でもアツパーヤード行きは勧められてなかった。

アツパーヤード。

基本的にこの空島には島雲と呼ばれる種類の雲を大地としており空島には地面・・・土が存在していない。

故に空島の人間は土・・・”ヴァース”と呼び神聖視しており崇めている。

しかし例外がある。

それが”神の島（アツパーヤード）”

遙か昔、何百年前だったかに青海・・・下の海から突き上げる海流（ノックアツプストリーム）によって島ごと吹き飛ばされたところの島の一部である。

当時の空島の人間はそれを崇め、聖地とすべくそれを奪った。

当時その島に住んでおり、奪われた者達の子孫がシャンディアでありそれ故にシャンディアは故郷を奪われたとして敵対をしていた。

最も今のトップであるガン・フォールはシャンディアのトップと話し合いにて融和策を練っている模様であるが。

それ故にアツパーヤードにはシャンディアの融和策に賛成せず先走った者達・・・特に若者が出沒する事があるのであまり空島の人間はアツパーヤードに近づこうとしない。

とは言え実際アツパーヤードに用事があるので止められたとしても行くのだけでも。

「しかしこうやって見ると本当に下から飛んできたのか？成長具合がおかしいだろ」

明らかに異常な島の外観を見てそう言うのはテゾーロ。

「あれだ、空島にある特有の成分が木々の成長に関与しているのかなんとか」

とりあえず島に入り船を繋いでおき3人で島に……どうするかな船番誰か任せた方がいいかな？

「なあ、船番誰か任せた方がいいか？」

「おれが見ときましようか？」

「とりあえず目的地は何処なんだ？黄金を取りに行くとしたか聞いてないが」

「目的地としては遺跡だな、大体島の中央あたりだな」

そう言つて大雑把だが島のだいたいの形を記した地図を広げ指を指す

「ふむ、現在地がここなら結構距離があるな。メンバーとしてはお前は当然としておれの能力が必要なんだったか？」

「ああ、まあ船盗る奴がそうそう居るとは思わねえが……」

「ボス、やつぱおれが残りますよ。買ったダイアルなんかもある事ですし……」

「すまん、とりあえずさっさと用事を済まして戻ってくるから少し待つてくれ。」

そうだな、カフウとコットンもギンと共にいてくれるか？」

そう言つてギンとコットン、カフウに荷物と船の番を任せクリークとテゾーロは海沿いに向かうのであった。

幸いにも早めに海沿いにてシグマと合流し森の中に周囲を警戒しながら進む。

とりあえず警戒するのは偶に出没するというシャンディアの人間。

次に神兵の面々、まあエネルギー一行が来てない以上今いるのはガン・フォールの部下であるが黄金をパクリに来た以上会わない方が得策だろう。

そして何よりもいの一に警戒するべきなのは原作にも登場した超絶でつかい蛇……又シだつけ？

あれを相手にするのは流石に面倒だしな……

とりあえず計画としてはスニーキングミッションである。

遺跡にあつた筈の黄金を適当にばくつてくるというのが今回の目的であるからあまり戦闘はやりたくない。

「しっかし本当に凄いなこの森は……これ見ろよクリーク、遺跡とか完全に飲み込まれてやがるぞ?」

目的地に向かって歩くシグマの背に乗ったテゾーロが物珍しげに周囲を見回りつつ言うのを聞きつつそんな風景を見て

「うーむ、ロビン連れてきてやりたかったな」

「確かお前が昔保護していたオハラの生き残りだったか?」

「ああ、考古学者志望でな。これを見たら喜びそうだと思ってるな」

「なら写真撮っておけばいいんじゃないか?カメコ(映像電伝虫の一種、写真を撮る事が可能)は持ってきてないのか?」

それがあったなど、思いつつ道中の遺跡を撮影しつつ二人は遺跡へと向かうのであった。

## 空の遺跡 ドンクリークさん

「つかしーな、確か遺跡のところに黄金がある筈なんだが・・・」  
「おいおいここまで来て無駄足か？信頼できる情報じゃなかったのかよ」

森を分け入った一行は目的の場所に到着していた。

島雲に覆われたその遺跡は当初クリークが思い描いていたのと違い全く黄金が見当たらなかったのだ。

「つかしーな、確かにここにある筈なんだが・・・」

たしかにエネルが遺跡から黄金を運び出したのは間違い無かった筈だ。

エネルがまだスカイピアに来てない以上間違いなく黄金はこの遺跡にある筈なんだが・・・

そうして遺跡をぐるぐると周り時には倒れた遺跡を持ち上げたりしてみたが残念ながら黄金の欠片も見つけられなかったのだ。

「見つかんねえって事は別の場所なんじゃねえのか？例の未来予知が記憶違いって可能性があるだろ」

「うむむ仕方ねえ、ちよつとばかしリスクは増えるがプランBに移るか・・・」

「プランB？何か他に黄金がどっかあるってのか？」

「ああ、とりあえず先ずはギン達と一旦合流するか」

そう言つてクリーク達は無駄骨だった遺跡を去り船の場所に戻るのだった。

合流した後

「え？黄金無かつたんですか？」

「ああ、場所が違うのかどうにも見当たらなくてな・・・」

「他に腹案はあるれすか？」

「一応な、当初と予定は違うがジャイアント・ジャック・・・だったか？あの蔓を登るぞー！」

「ジャイアント・ジャックって・・・アレをか？」



テゾーロが言うのも最もである。

ジャイアント・ジャック・・・このアツパーヤードに生えた巨大な蔓である。

その巨大さは驚く程であり途中には神の社・・・ガン・フォール達スカイピアのトップの屋敷・・・というか何というかがある。

そして更にその上には黄金の鐘がある・・・あつた筈、多分。

それから原作では空島の人達が麦わら一味へのお礼として黄金の鐘の柱を一本渡そうとしたしその二年後？ぐらいにはベラミーが空島からその柱を持って帰ってきてたので一本くらいパクつても大丈夫だろ。

というかベラミー・・・ベラミーかあ、どうしたもんか。

原作ではベラミーが初めて出てきたのは麦わら一味が空島に行く直前だった。

まあその時のゴタゴタは割愛するが気にしてるのはベラミーはドフラミンゴに憧れて海賊になっていたという点である。

「おい、どうした？何か懸念でも？」

突如沈黙したので何かあったと思ったのかテゾーロが聞いてきたことでクリークは現実に戻される

「ああ悪い悪い、あの蔓の途中に確か今代の神の屋敷というか何と云うかがあるから上手く誤魔化すか正面から行くか考えてたんだが・・・」

まあベラミーの事は後でもいいか、そこまで重要な事でも無いし。

「バレル危険性が増えるってなら最初から許可貰つといた方がいいんじゃないです？」

「まあギンの言う通りだな、とりあえずガン・フォールに話を通してジャイアント・ジャックでも登らせてもらうかー」

・・・とりあえずガン・フォール相手には王族を相手にするのと同じ対応でいいのか？非加盟国だからあんま関係ないかな？

「で、話を通すにしてもどうやってだ？」

「・・・そうだな、どうやってコンタクトをとったもんか」

いつもであれば少将の身分って事でスムーズに通るが今は休暇中

だしな・・・

「くりーく、一旦えんじえる島に帰るれすよ。」

そして島の人達に話を通したらいいんじゃないれすか?」

「それもそうだな、嬢ちゃんの言う通りそっちがいいんじゃないか? いい方法も思いつかねえしな」

「んー・・・遺跡が空振りに終わったのは残念だが一旦戻るか。」

そう言っつてくりーく一行は借り受けたダイアル船に乗りエンジン島に引き返すのだった。

空振りだと思っていた遺跡の足元に目も眩むような程の絢爛な黄金都市がある事に全く気づかないまま・・・

## 風の小舟 ドンクリークさん

エンジェル島に一度戻りエンジェルビーチへ。

ウェイバー・・・一人乗りのダイアル船を整備していたパガヤにクリークは声をかけガン・フォールと話し合いを持ってないかと尋ねれば「神さまに用事ですか?・・・そうですね、用件はなんですか? すいません」

いや別に謝らなくていいんだが・・・

「ちよつとあの巨大豆蔓を上まで登りたくてな、社が途中にあるらしいから許可をとっておいた方がいいと思っただけ」

「そうですね。ええと、あなた方は海賊ですか?」

「いや、海賊じゃないが・・・」

「まあ神さまは十数年前に海賊と友誼を結んでるので問題ないとは思いますが・・・すいません」

海賊と友誼・・・誰だ、有名な奴か?

(ガン・フォールはかつて空島に来たロジャー達と友誼を結んでいま)

「・・・まあ話し合いの場を持つてくれるか許可をもらえればそれでいいんだが」

「わかりました、そう言う事であればこちらも伝手を辿ってみましょう、はい。」

「そういうウェイバーだったか? その一人乗りボート」

「そう言えば見るのは初めてでしたか? まあ青海では馴染みが薄いでしょうが。」

おっしゃる通りこれはウェイバーと呼ばれる乗り物です、はい。

ブレスダイアルを動力としているので風も波もなく進めるのですよ。

実は私はダイアル船の整備技師として時折メンテナンスをしながらしてね、すいません。」

「ふむ、このウェイバーってのはどっかで手に入れる事ができるのか?」

「・・・買い受けるとなるとかなり高いですね、すみません」

絶対エクストルだよな・・・換金できりゃいいんだが。

「因みにパガヤさん、ベリーからエクストルへの換金って出来ますか？」

「確か1ベリーは1万エクストルの筈でしたか、はい。」

「因みにベリーでいくくら程ですか？」

「まあ念のために100万ベリー程は持つて来たが・・・」

「・・・となると100億エクストルですか、残念ながらそれだけ高額になると換金できるような場所はないですかね、すみません。」

ふむ、まあ波も風も無く進めるのならマガツノいるしまあいいか・・・

ダイアルも手に入った事だしウェイバーみたいなものなら作れるかもしれないな。

「いや、こちらこそ無理言つて済みません。」

じゃあパガヤさん、例の件はよろしくお願いします」

そうパガヤにお願いして数日後、コニスと浜辺で遊んでやっている空島の本をパガヤの家で読んでいたテゾーロが

「おーい、クリーク。パガヤさんが呼んでるぞ?」

と声をかけてきたのでボール遊びを中断しそちらに向かう。

「神さまが登つても構わないとおっしゃっておりますよ、何かあればこの手紙を見せればいいとの事でした」

そう言つて一通の書状を差し出しそれを受け取る。

「ありがとうなパガヤさん、後で礼した方がいいかな?」

「せっかくなら帰りに話をしに来ないか?とも仰つてましたので是非登つた後にでも社に寄つたら良いと思いますよ?」

そんなやり取りの後荷物の殆ど預けてクリーク一行は再びアツパードに向かうのだった。

「さて・・・これを登るとなると結構大変だが全員大丈夫か?」

「いや、人数は絞つた方がいいんじゃないか?スピード優先なんだろう?」

「ふーむ、となるとシグマは留守番かな?」

俺達と比べると若干速さが落ちるシグマは留守番してもらおうと思つてそう提案するが

「ぐるっ!？」

「折角ですしみんなで行くれすよ、しぐまも行きたくそうにしてるれすし」

コットンのその提案に結局皆で行く事になり月歩を使えるギンと空を飛べるコットン&カフウに先行してもらおう。

テゾーロは能力はだいぶ使いこなしているものの六式が使えるわけでは無いのでシグマに乗ってもらいつつ進む。

「とかどんだけデカいんだこの蔓は・・・」

「この前説明しただろ、空島特有の成分で植物が異常成長するつて」

「そうは聞いたがなあ・・・見てみるあの葉っぱ、おれ達が乗ってきたボートくらいあるぞ?」

テゾーロが指差す方をみれば確かにデカい葉っぱである。

「ん?空島特有の成分か・・・」

クリークは何かを思いついたのか背負っていたリュックから試験管を取り出すと豆蔓の一部を切り取り試験管に入れる。

ついでに帰りにここの土も採取しようと考えつつ荷物を背負い直すときと真つ直ぐ上に向かうのだった。

## 金鐘在処 ドンクリークさん

「おいクリーク、黄金の鐘とやらがあるんじゃないやなかったのか？」

「あつれー!?何で？確かジャイアント・ジャックの上にあつた筈じゃなかったか!？」

一行はジャイアント・ジャックを頂上まで登り切った。

そして黄金の鐘を目にする・・・筈だったのだが残念ながら実は黄金の鐘があるのは頂上では無く弾き飛ばされ近くの島雲に乗っているのだ。

原作ではエネルギーがマクシム・・・空飛ぶ船に乗って頂上に向かったし、ルファイも頂上に向かったのでそれ故の記憶違いであろう。

「どうしますボス？目的の物が無いんじゃないや態々来た意味が・・・」

「ぐぬぬ・・・よしコットン！カフウ！この辺り一帯を確認してきてくれ！」

「まあ、クリークが言うなら見てくるれすが・・・」

そう言つてカフウに搭乗したコットンは上空に躍り出る。

あつてくれよー？とりあえずこれが無けりや最終手段のヌシの腹の中というあまりやりたくない手になるんだから・・・

クリークはこの空島に来るにあつてダイアルの収集と黄金の収集という目的があつた。

ダイアルに関しては既に複数種類、複数個づつ手に入れる事ができた。

これは購入さえすればいい話だと考えていたので問題は無かつた。

まあ希少な物は手に入らなかったが。

そして黄金の入手に関しては遺跡から全部とは言わないが半分くらいパクれば良いと考えていたが残念ながら肝心要のその遺跡が見つからなかったのだ。

その為B案の黄金の鐘の柱をパクリに来たのだが今のところあると思つてた場所には無かつた。

この為黄金の鐘が見つからなければC案・・・麦わらの一味が手に入れた黄金という事になるのだが・・・

「できればその手段は取りたくないよなあ・・・」  
とクリークは嘆息する。

麦わら一味が手に入れた黄金は又シ・・・巨大な蛇の腹の中にあり危険性が高いというのもあるが何よりあの黄金はとても重要な存在なのだ。

額にして3億ベリ一分、それらは盗まれたものの彼らの新しい船の素材として必要不可欠だろう。

空島に冒険に来てお宝が無いというのも悲しいだろうし。

クリークがそう考えていると

「くりーく！向こうにあったれす！キンキラに輝く鐘があつたれすよ！！」

周囲一帯を確認してきたコットンのその声にクリークは拳を握りしめたのだった。

「・・・どうするよこれ」

コットンが持ってきた情報は少し離れた所にぶかぶかと浮いている島雲に黄金の鐘があるというものだった。

が、場所が悪かった。

蔓の頂上は島雲からは距離がありしかもぶかぶかと浮いており歩いていくというわけにはいかない、一般人ならどうしようもないだろう。

まあそうは言ってもここにいるのは一般人とはかけ離れた者達である。

トリトリの実モデルイーグルを食したガトリングガン、カフウ。

それに跨るのは世界の常識を教える代わりにクリークの協力者となっている小人種、トンタツタ族の偵察部隊を務めていたコットン。

天届く秘境”メルヴィユ”を故郷とし、その島の固有種であり三式を習得した本部二等兵である異形の熊・・・熊？であるシグマ。

そして本部大尉であり超人体技”六式”を習得している副官のギン。

そしてクリークの協力者でありゴルゴルの実の能力者であるテゾーロ。

そして六式を習得した上に高い戦闘能力を持ち本部少将を務めるクリーク。

この面子にとって空を飛ぶのなどお茶の子さいさい……

「あ、テゾーロは空飛べねえな」

考えてみればテゾーロがどうするんだと言うのも納得である。

彼は確かにゴルゴルの実の能力を持つ優れた能力者でありクリークとも長い付き合いではあるが空を飛ぶ手段は持っていないのだ。

「仕方ねえ……ほれ」

そう言つて屈んで背中を見せるクリークにテゾーロは

「おい、おぶされてのか？」

そう反論するも

「仕方ねえだろ、お前が来ないと話にならんだろ」

「……わかったよ」

と渋々クリークの背中におぶさるテゾーロ。

コットンにはカフウに搭乗し飛び立ち、シグマとギン、クリークはその類稀なる脚力で空を跳ぶ事ができる体技、月歩にて、そしてテゾーロはクリークに背負われた状態で空へと躍り出た。

「……おれも空飛ぶ手段手に入れるか」

とぼやいたので

「おおそりやいいや、後で月歩でも教えてやろうか？」

「いやいや、やってたまるかあんなの。六式つてあれだろ？めっちゃくちゃ習得するのは大変なんだろ？」

まあ、何かしらゴルゴルの実で上手くやるさ」

「まあそれならいいが……コットン、場所はこつちで合ってるか？」

「ええこのまま真っ直ぐれす、あと少しで見える筈れすよ」

コットンのその言葉通りしばらくすれば探し求めていた黄金の鐘が見えた。

浮かぶ島雲に降り立ち一行は大口を開けてその鐘に見惚れていた。

「こりやまた見事な……」

「ボス、これ全部黄金ですか？」

「作るの大変だったんじゃないれすか？」



「ぐるる」

### 黄金の鐘

空島にこの大地が吹き飛ばされた時に鳴ったという天上の歌声。

原作では空島に行く時に麦わら一味への協力者となっていたモンブラン・クリケット。

彼が探し求めていたものでもある。

「しかしこりゃ見つけきれないのも納得だな・・・」

黄金の鐘があった島雲は他の小さな島雲に隠れるように浮いていたのだ。

## 黄金の金 ドンクリークさん

「さて、とりあえず柱をもらつとくかな。やれ、テゾーロ」

「え、いいんですかボス？かなり貴重なものなんじゃ？」

「構わん、遺跡が見つからなかった以上は仕方ない。」

とりあえずお供え物しとこう。」

そう言つてクリークは背負つてきたリュックから酒や保存食等を取り出して黄金の鐘の前に立つ。

「シャンディアの灯火・・・だったか？本当に見事な大鐘楼だな。」

・・・目的のために勝手に黄金もらいますけど堪忍してください」

そう言つてパンつと手を合わせると頭を下げる。

そして中央のポーネグリフの前に並べていく。

「ほお、これが歴史の本文・・・ポーネグリフとやらか、実物は初めて見たな。」

そこにあつたのはポーネグリフ。

破壊不能の、空白の100年と呼ばれる歴史の標。

「あ？見るの初めてだったか？」

「まあな、ところでこれって結局なんなんだ？」

「まあ俺も詳しく知らんが・・・えーと、古代兵器の在り方が書いてあつたり何たりとかだったか？」

「うわ、物騒だなおい」

「くりーくはこのへんてこな文字読めるれすか？」

ふとした疑問をクリークにぶつけるコットンに

「・・・読めると思うか？というか読めるなら海軍にはいらねえよ、良くてこうだな」

とクリークはそう言つて手刀で首をトントンと叩いて見せた。

「物騒れすね・・・」

クリークの姿を見て察したのかそう呟くコットンにまああの島ではそんな事無かつたらうしな、と思いつつ

「外の世界じゃ珍しくねえよ、その辺りもちゃんと学んでもらうさ」

そう言つてコットンの小さな頭をつつく。

「ん？おいクリークこの文字もポーネグリフと同じじゃねえか？」

「あ、ホントですね。追記みたいなものですかね？」

「ああ、これが例の・・・」

ポーネグリフの横に書いてある古代文字。

原作でも少し出てきてたがこれは過去にかの海賊王、ゴールド・ロジャーが残したものである。

・・・なんて書いてあるんだったか？

「とりあえずカメコで写真でも撮っとくか、テゾーロはその間に柱を回収してきてくれ」

「おう、しかしちよつと勿体無い気もするがな」

そう言つてテゾーロは両側の飾り柱の方へ。

まあ原作では折れてたし構わないだろう、クリークはそう考えつつ柱がまだある状態の写真をカメコで撮影するとあちこちを撮影するのであった。

「くりーくー！貝殻があつたれすよ!!」

ある程度撮影が終わつてぐねぐねと黄金の形を変えさせるテゾーロを眺めながら待っていると、島雲の周りをぐるぐると飛んでいたコットンがその小さな手に貝殻を持って戻ってきた。

「ほおー何かのダイアルか!？」

そんなコットンの姿にクリークはしゃがんで貝殻を受け取るとあちこちを確認する。

「それはわからないですが・・・」

「破損も無いみたいだな、帰りにパガヤさんにでも見てもらおう」

まあおかしな話では無い、アッパーヤードが下から飛んできた以上途中で引つかかったのだろう。

可能性としては絶滅危惧種な可能性もある、アッパーヤードが飛んできたのは800年前？だったしな。

「おーい、こっちは完了したぞー」

とテゾーロがこちらへ戻ってきたので話を中断、コットンから受け取った貝殻をリュックに仕舞い込むと立ち上がる。

「・・・なあこれ鳴らしたら面白いんじゃないやねえか？」

そこでふと思いつきそう眩くと

「馬鹿！何考えてんだ!!絶対大事になるだろ！」

「いやボス、辞めといた方が・・・空島の人達はここにこれがあるって知らないんですよ？」

「まあどつちでもいいれすが音は綺麗そうれすよね」

と約1名を除き猛反対されたので

「・・・んー、天上の歌声という鐘の音、聞きたかった気もするがな」

そう言いつつクリークはゴールド・ロジャーの残したと思わしき文の下に

”D・クリーク参上!!”と塗料で落書きをする。

「何やってるれすか!？」

慌ててコットンが懐から布をとりだしてゴシゴシとこするが

「な!?!おちねーれすよ!何で書いたれすか!?!」

全く落ちずに怒鳴るコットン。

「ふははははは！技術班特性の特殊塗料だ！特殊な薬剤じゃないと落とせないぞ?本来は道標に使ったりするものだがな！」

「おいおい、不味いんじゃないか？」

そう苦言を呈するテゾーロにクリークは

「はっ、すでに落書きさされてんだから変わらねえさ。」

それより行くぞ、神の社とやらにも寄らなきやいけないんだから  
な」

そう言つて”すでに落書き・・・?”と頭を捻るテゾーロの襟首をがしりと掴むとジャイアント・ジャックへと飛び立つのだった。

## 神の友誼 ドンクreekさん

ジャイアント・ジャックの天辺から降りていき中程にある神の社へ。

流石にシグマは大きいので外でカフウと共に待つてもらいコツトンはポケットに。

「おお！君たちが聞いていた青海からの観光客か！吾が輩の名はガン・フォール！」

神・・・と言つても役職のようなものだがこのトップを勤めておる！」

そこにいたのは初老の男性だった。

白く長い髪と髭を持ち品の良い姿をしていたその男性は喜ばしそうに立ち上がった。

「初めましてガン・フォール殿、俺はクreek、こっちは友人のテゾーロ、それからギン・・・は息子みたいなもんですかね？」

そう言つてクreekもガン・フォールの元まで歩み右手を差し出す。

ん？何でギンは驚いたような表情してるんだ？

両者はしかと握手を交わすと

「さて、クreek殿と言ったか。どうだった？ジャイアント・ジャックの頂上は」

「いやあ、流石にあの巨大さだけあって白々海が一望できました。

それだけでも登った甲斐があつたつてもんですよ」

「という事は何か別に目的が？」

それだけでも、という言葉にひっかかったのかそう尋ねるガン・フォールに

「ええ、元々空島っていうのはいつか行つてみたいというのがありましたがダイアルの噂を耳にしましてね、是非とも手に入れたいなというのがあります」

と目的をぼかしつつ答える。

「そうかそうか、今回は是非珍しい青海からの客に青海の話を知りたい

いと思つてな」

「おお、そうでしたか。俺も是非空島の話を知りたいと思つてました」  
「まあ硬い話は抜きだ、まずは食事でもどうかね？このかぼちやのジュースなど、吾が輩のお気に入りだな」

そう言つてガン・フォールはコップを渡しクリークはそれを飲むと  
「これは美味しいですね！青海のものと違い滋養が豊富というか随分と味が濃い……」

「ほう、そんなに違うものなのか。」

「ええ、空島の空気には植物の成長を促進させる成分が含まれてるらしいのでそのせいでしょう」

「ふむ……空島にはそんな成分があるのか。」

「ええ、アップパーヤードの植物達が良い例ですね。」

青海と違い大きさが異常でしたからね」

「まあとりあえずクリーク殿達も腰掛けるが良い、料理は今運ばせておるでな」

食事を楽しみながら談笑しその話題はガン・フォールからの質問で始まった。

「ときにクリーク殿、ゴール・D・ロジャーという男を知っておるか？海賊をやっていたのだが……」

「？ええ……彼は有名ですからね、彼がどうかしましたか？」

「うむ、十数年ほど前になるかの。彼ら海賊団がここに来た時に友誼を結んでの。」

それから殆ど話を聞かぬ故どうしているかと思つてな」

うつわあ……昔友誼を結んだのつてゴールド・ロジャーだったのか、この質問は答え難いが……

「……実は彼は数年程前に処刑されてしまいました」

誤魔化しても仕方ないので正直に答えておく。

「な！処刑だと？何があつたのだ!？」

思わず椅子を立ち上がるガン・フォールにそう驚くのも無理は無いと考える。

青海と空島は隔てられておりニュースも届かないからな……

「海賊王」と呼ばれる青海で得られる称号がありました。．．．それにより彼はその称号を手にした事により世界政府．．．青海の統治機関のトップが快く思わずにこう．．．」

と首に手刀を当てて見せるクリーク。

「．．．そうか、彼は亡くなったか」

そう言つて深く息を吐き椅子に腰掛けるガン・フォールに

「海賊王の名前は重いんですよ、称賛するものは多けれどそれと同じくらい危険視するものもいます。」

最果ての島．．．ラフテルと呼ばれる島に到達した事で手にできる呼び名ですが、それには”知ってはならない事を知ってしまった”という世界政府の懸念もあったのでしよう。

彼は自首したにも関わらずあえなく処刑されてしまったのですよ．．．

そして彼の処刑により大きく青海は変わりました、今や彼が死に際に残した言葉により、青海は大海賊時代と呼ばれる程に海賊が跋扈する時代になりました。」

「そうか．．．亡くなったのは残念だ．．．。」

しかし青海はそんな事になっておるのか、となるとこの空島にやってくる海賊は増えるかろう？」

「．．．正直言つてそれは難しいかもしれませんね。」

残念ながら青海では空島の存在を知る者は限られており、御伽話の存在と思われていますからね．．．」

「むうそれは残念だ．．．未来でロジャーのような気持ちの良い海賊が来れば歓迎するのも悪く無いと思つたのだが．．．」

「まあいつかは来ますよ、貴方が思うような海賊が．．．」

原作ではルフィに親近感を覚えてたしな

「ふむ、まあそれをゆつくり待つとしようかの。」

そういえばクリーク殿達はダイアルを探しに来たと言つておつたな」

「ええ、残念ながら手に入らないものもありましたが．．．」

「ならば．．．おい、何個かダイアルを持ってきてくれぬか？」

ガン・フォールはそう側に控えていた部下にそう告げる。

「いいんですか？まあ確かに渡りに船ですが……」

「いいんじゃないよ、この老いぼれの話に付き合ってくれた礼じやよ」

そう言うど机の上に先程の部下がどきり、と袋を乗せる。

「ダイアル各種を数個づつですが用意しました」

「うむ、ご苦労。どうじゃクリーク殿、受けとつてくれるかの？」

笑みを浮かべるガン・フォールにクリークは礼を言いつつダイアルを受け取る。

正直言えば購入できたダイアルは少なかつたのでありがたく受け取つたのであつた。



## 先住の民 ドンクリークさん

歓待してくれたガン・フォールと彼の部下達に別れを告げ一行は再びジャイアント・ジャックを下へ下へと降りていく。

テゾーロ達は船の準備の為に先行させてクリークは一人、黄金も手に入ったしダイアルも追加で手に入ったのでホクホクした顔をしつつ歩いていく。

そして途中でアップパーヤードの土を採取するのを思い出し、クリークが屈んでリュックから手持ちの試験管を取り出す。

「・・・というかエネルギー対策用の武装置いてくりや良かったなあ」

リュックには雑多に色々が入っており対エネルギー用のスーツや特殊弾や武器、保存食や水、そして今回取り出した試験管等のキット等が色々が入っていた。

そしてそれはクリークは取り出した試験管に土を入れようとした時の事である。

「おい、その見かけねえ奴・・・ここで何してやがる」

年の頃はまだ10代だろう、黒髪の若いその少年は背中に翼、上半身裸で勝ち気な表情を浮かべ、一本の槍を片手に頭上からこちらを睨んでいた。

「げ、まさかシャンディアか？いかにもそれっぽい格好してるしそうなんだろうなーと思いつつ」

「やあ少年、君こそこんなどこで迷子かい？」

と尋ねる。

シャンディア・・・彼等はこのアップパーヤードが空島に飛んできた時に住んでいた先住民を祖先に持つ人々である。

彼等はアップパーヤードが空島に飛んできた時に当代の神に追い出されて以来この島を取り戻そうとしているのだ。

元々は青海の人間の筈だが長い間に空島の人々と血が混ざったのだろうか？青海の者達と違いその背中には小さな翼。

最も見た目は似ているが空島の人々とは敵対しているが。

最も今の神・・・ガン・フォールはシャンディアと融和策を練って

おりシャンディアの上層部は話し合いを続けている。

最も若い世代は反感を持っており融和策には反対している模様だが。

「質問してんのはおれだ、てめえその手元のはなんだ・・・」

と、更に目つきを鋭くするその少年。

その目は土を採取しようとしていたクリークの手元に注がれていた。

「いや、これは研究用に少し拝借しようかと・・・」

そうクリークが言った側に槍がかすめ木に突き刺さる。

「拝借だあ？おれ達の大切なヴァースを盗むつもりか!!」

槍を投げた体勢のまま更にこちらを睨む少年に

「誤解だ誤解、ほら飴あげるから落ち着けよ少年」

そう言つてクリークはサイドポーチからキャンディーを取り出し少年に向けて見せるが

「そんなもんでおれが懐柔されると思つてんのか盗つ人が!!」

その声と共に投石が飛んできたので慌てて飴をポーチにしまい直す。

惜しくも石はカンツという音と共に弾かれ

「落ち着いてくれ、俺は青海から来たただの観光客だ。」

別にヴァース・・・だったか？土を盗むわけじゃねえよ、下じゃ珍しくも何とも無えんだから」

「・・・だったらそのヴァースをどうするつもりだ」

「下と違うらしいから少し調べたいだけだ、代わりと言つちやなんだがほらこれやるから堪忍してくれないか？」

と、クリークは背負っていたリュックをゴソゴソと漁り

「ほら、これは空島じゃ採れない鉄っていう鉱石で出来てんだ。」

どうだ？これと引き換えで勘弁してくれないか？」

そんなクリークに警戒したようにジリジリと少年はクリークが手に持つ短刀をパツと取ろうとして

「なっ！」

少年の腕はガクリと下がる。

「あ、重たいから気を付けろよ?」

「なんだこれ!? 鉄つてのはこんなに着てえのか!」

「ああ、そうだ。どうだ? 今は重たいかもしれないが君はまだ若い、いつかは十全に振るえるようになるさ」

まあ特注の短刀っていうのもあるがな。

「ちっ・・・礼は言わねえぞ? これはあくまでも見逃す代わりだ、そこんどこ勘違いすんなよ?」

そう言っつて少年は短刀を片手に投げた槍を引き抜くと

「とりあえずさつさとこの島を出て行くこつたな、いつまた襲われてもおかしくねえんだからな、この島は」

そう言っつて少年は森の中にかけていくのだった。

「ご忠告感謝・・・っつてもう聞こえてないか」

そんな少年を見てクリークはリュックを背負い直しテゾー口達と合流すべく歩き出すのだった。

## 熊の帰還　ドンクリークさん

ガン・フオールとの会合から二日程、クリークはマリンプォードへと帰還していた。

途中色々あった。

例えば空島から降りる時にタコから落ちたり、バトラー伯爵などと名乗る一党が襲ってきたので適当に叩きのめしたりである。

危うく上空六千メートルから落下死するところだったが幸いにもこの頑丈な体と、下が海面という事もあり助かったがな。

襲撃者に関してはこちらが私服であり、少数と侮ったのか

「その珍しい熊を置いてけ!!」

などと喚き斧を片手に襲いかかってきたがその程度の相手に今更遅れはとらない。

叩きのめしたバトラー何某は部下二人に懸賞金がかかっていたので叩けばホコリが出るだろう、と纏めて近くの支部に移送した。

途中、メルヴィユにマガツノを迎えに行きシャボンデイにてテゾーロと別れギンとシグマにはパールの様子を見に行かせクリークは一人技術部の区画に来ていた。

”ミリタリスト計画”

海軍にはそう呼ばれる計画がある。

主に技術班主導で行われており最近では科学班の”パシフィスタ計画”の対となる存在として上層部では噂されている。

この計画はパシフィスタ計画が人体に直接手を加える人造人間を研究しているのに対し”如何に能力が無い者が能力者相手に戦える装備を作るか”というものに重きを置いている。

そしてこの計画の被検体がクリーク自身であり、この計画の主要メンバーが長年彼の専属として武装を開発してきたメンバーである。

クリークの専用武装を作る傍ら、ミリタリスト計画と呼ばれる武器、兵器の設計や製造を行う部署だ。

「あれ？少将殿、ナイフが一本足りないっすよ？」

ほら、空島にいるかもしれない能力者相手用について……」

空島から戻ってきたクリークは対エネルギー用に持っていた武装を返却し、新たに手に入れたダイアルを持ち込んでいた。

「あああれだったらちよつとどうしても必要でな、ちよつと交換に使ってしまっただ」

「ええ……まあ特注のナイフにグリップをゴム製にただけなんですから高価なものでもないっすけど」

「なら固い事言わないでくれ。代わりと言っちゃ何だがほら、ダイアルを手に入れてきたぞ？」

そう言っただクリークはラブリー通りで買い漁ったダイアルとガン・フォールから貰ったダイアル、それから黄金の鐘のところで拾ったダイアルを机の上にゴソリと乗せた。

「はー、また随分と大量に……」

ダイアルって確か複数種類があるんでしたっけ？」

「ああ、ランプダイアルやらフレイバーダイアル、フレイムダイアルとかウォーターダイアルとか色々があるが目玉はこいつだ、何と絶滅種のジェットダイアルだ！運良く手に入ったんだぞ？」

そう言っただ黄金の鐘のところで拾った大きめの貝殻をぽんと叩いてみせる。

パガヤさんに確認してもらったが、あれがジェットダイアルなのは運がかなり良かった。

他にもガン・フォールからもらったダイアルの中にはインパクト・ダイアルなんかも混ざっておりこれで殆どの種類のダイアルは手に入った。

唯一斬撃を溜め込むというアックスダイアルが手に入らなかったのは残念だ。流石に遠く離れたビルカ……だったか？の固有種なので諦めるが。

「ジェットダイアル……確か二つほど手に入っていましたね。

ブーツに組み込んでいましたがどうします？」

ブーツの強化に使うかという意見に対し別にした方がいいだろうと考える

「いや、それとは別の装備に回してくれ、何かしら使いようはあるだろうからな。」

とりあえずダイアルに関しては紙に一覧として纏めてある、後で目を通しておいてくれ。」

と返しておく。

「了解つす、とりあえずこれは持って行きますね？とりあえずこちらで上手い感じに設計しますので。」

後日、設計図はお持ちしますがしばらくはこちらに？」

「ああ、ダイアルに関してはそちらに任せる。」

設計図に関してはちよつと出かけなきやならん用事があるから帰ってきてから確認するがそれでいいか？」

「ええ、それで構わないつす。因みにどちらまで？」

「造船の町、ウォーターセブンだ。」

とクリークは次なる目的地を告げるのだった。

## 造船の島 ドンクリーク

ウォーターセブン。

言わずと知れた造船の町である。

偉大なる航路の島であるため、周囲の島との連絡がつきにくく数年前までは大海賊時代の煽りも受け荒廃しているものの、海列車の開通によつてサン・ファルドやセント・ポプラ、プッチやエニエス・ロビーとの間に定期便が開通。

物資も豊かになり、次第に風光明媚な造船都市・観光都市へと復活した島である。

今はまだ造船会社がひしめき合い切磋琢磨しているようだが、原作で麦わらの一味が訪れた頃には統合されガレーラ・カンパニーという巨大造船会社ができていたな。

とりあえず止めるべきは政府の秘密機関“サイファーポール”の暗躍阻止であろう。

Spanien・・・ダ？だったかSpanダの暗躍によりあわれ海列車の開発者である船大工のトムは処刑され、フランキーはそれを止める為に大怪我を負い、そしてサイボーグとなってしまうていた。

Spanダの目的はトムが持っていると思しき古代兵器 プルトンの設計図だ。

古代兵器のプルトンに関しては原作でも少し語られていたがなんでも”戦艦”との事だった。

太古の時代、この島で古代兵器である”プルトン”が造られたが、当時製造に当たった船大工たちは万が一他の古代兵器が復活した場合の対抗手段としてプルトンの設計図を代々最高の船大工に伝承させることにした。

そして当代最高の船大工としてトムがその設計図を所持しておりSpanダ達はこれを狙っていた。

最もその計画はお粗末なものであったものの最終的に船大工のト

ムは護送され、プルトンの設計図はフランキーことカティ・フラムの手に渡っていた。

今回の目的は船大工、トム救出である。

表向きの目的は”ミリタリスト計画”のメンバー勧誘としセンゴク元帥に許可をとり部下を率いて習熟航海ついでに新造船”フイーネ・イゼツタ号”で出航する。

数日ほどでウォーターセブンへ到着、当初は見た事の無い海軍の船、という事で騒ぎになったものの運が良い事に船を見に来た群衆の中心対象を発見、早速話しかけに行く。

「その特徴的な姿、アンタが船大工のトムで間違いないか？」

「いかにもわしが船大工のトムじゃ、アンタは見た所海軍の人間じゃろ？・・・だったか？裁判の件か？」

そこにいたのは大柄な男、額には双角、黄色い肌を持った・・・何の魚人だったつけ？（コンゴウフグの魚人）

ウォーター・セブンで最も腕が良いとされ、トムズ・ワーカーズを率いて海列車を完成させた男だ。

「いや、裁判についての話は聞いているが今回は別件だ。」

裁判という言葉通り今回この男はとある罪により判決を受ける事になっている。

その罪はかの海賊王”ゴールド・ロジャー”の船を作ったという罪。

本来であれば船大工が誰に船を作ろうとも罪には問われない。

だが、海賊王に関しては特例とされ彼の海賊行為に少しでも肩入れしたと見做される者は全てが危険人物、故に死刑。

というのが当初の判決であった。

しかし死刑判決を受けたトムは胸を張って海列車の構想を語り、それ故に10年の執行猶予が受けたのだ。

そしてそれが10年程前、五日後には再び司法船が来てトムに判決を言い渡すだろう。

「となると一体何事じゃ？」

「その前にあの船を見てくれ、どう思う？」



そう言つて停泊したフィーネ・イゼツタ号を指して見せれば

「ふむ・・・ドンとしたいいい船じゃな。あのタイプの船にしては喫水が少し深いのが原因で重さもあるじやろ。

ところどころ見慣れん艤装があるが、ありやあ・・・なるほど自動化で人が操作する部分を抑えておるのか、良く考えたもんじやわい。

んん？海中でよう見えんが船底になにやらついとるの、ありや何じや？」

「あれは政府で研究している新しい推進機関だ、それより俺の目に狂いは無かつたな。

船大工のトム、今回俺はアンタのスカウトをしに来た。

自己紹介が遅れたな。海軍本部少将、海軍独立遊撃隊を率いらせてもらっているクリークだ宜しく頼む」

そう言つてクリークはトムの横で目を見開く少年たちを横目に右手を差し出すのだった。

## 船舶大工 ドンクリーク

「たっはっはっ！スカウトか！わしはゴールド・ロジャーの船を作った男だぞ？」

ガツシリと握手を交わせばそう尋ねるトム

「何を言ってる、その罪ならアンタが海列車を作った事により無罪はほぼ確定だろう。」

俺が言ってるのは無罪の判決が出た後の話だよ」

まあ嘘ではない、まあ彼の事だからこちらにはなびかないとは思うが。

「たっはっ・・・！買ってくれるのは嬉しいが海軍のあんちゃん・・・クリークじゃったか！気が早いってもんじゃ！」

「そうか？アンタの腕はみすみす見逃すのは惜しいと思うが。」

まあ、考えておいて欲しい。俺達は暫くこの島に滞在するから何か困った事があれば言ってくれ」

とクリークが提案すればその話に食いついたのはトムの横にいた男だった。

「丁度いいな。海兵さん、ここから少し行った所に廃船島という所があるんだが・・・」

「ん？失礼だがお前達は？」

「ああ、おれはアイスバーグ。トムさんの元で働いている。あっちのバカそうなのがフランキーだ」

「なるほど、トムの仲間達だったか。それで廃船島とやらがなんだって？」

「ああ、廃船島・・・廃船となった船が打ち捨てられた島なんだがそこに色々と武装した船が打ち捨てられているんだ、あれを何とかしてくれないか？」

「なっ！！バカバグ!?何言ってるやがんだ!!」

年の頃は20代だろうか？黒いバンダナを巻いた男と額にゴーグルをはめた男が掴み合い喧嘩を始める。

「武装した船・・・？それは海賊達が乗り捨てた船という認識でいいの

か？」

「な、何でもねえよ海兵さんよ。」

慌てて両手を前に何でもないと押し止めるフランキーに

「なっ、バカンキー！お前はまだあれだけの凶器を作ったまま放置するつもりか！」

激昂した様子で問い詰めるアイスバーグ

「海王類を仕留める為の船なんだからいいだろ！別に人間相手に向けるわけじゃねえんだから」

再び争い始めた二人を手で制し質問をする。

「まあ落ち着け二人とも。とりあえず話を聞く限り武装した船はそっちのフランキー・・・だったか？が作ったもので間違いないか？」

「・・・そうだよ、海王類を仕留める為のもんだし別に法には触れてねえだろ！」

クリークの質問にぶつきらぼうに答えるフランキー。

海パンに素肌シャツを羽織ったその男。

海王類を己の力で仕留める為に色々と小型戦艦を作ってる男は将来麦わらの一味に加入する事になる。

原作ではその戦艦を利用して司法船襲撃という罪を被せられたがその腕は確かである。

まあ法を司る司法船の襲撃とあっては海軍としてもさせる訳にはいかないのでは何とかするつもりだが。

「海王類を仕留める為何かは別にいい！おれはあれらの凶器を放置するお前の神経を疑ってんだ!!」

そう言つてフランキーの肩を掴む男アイスバーグ。

数年後にこの島の造船会社を纏め上げガレーラカンパニーという

一大企業を作り上げる男。

原作では色々騒ぎに巻き込まれていたが・・・

「とりあえず一度その廃船島とやらを確認させてもらおう、案内をしてもらえるか？」

「たっはっは！そりゃ構わんがスカウトに関しちゃうしは領けんな！」

・・・やっぱりな。

「別に構わない、とりあえず3人とも俺の船に乗ってくれ。」

そう言えば

「えー乗っていいのかあの船に!!」

突如としてアイスバーグとの言い合いを止め食いついてきたのは目を輝かせるフランキー

「ま、まあ構わんがあまりうろろしないでくれよ?」

「・・・ちっ、確かにあの船はよく見る海軍の船とはどれとも違うし見たいのはわかるが」

そう言つて後頭部に手を当てるアイスバーグ

「あの船は我々海軍独立遊撃隊の船で建造されたばかりの最新鋭艦さ。」

その名は“ファイネ・イゼツタ号”。機密に関する範囲以外なら見てもらつて構わん」

「たっはっはー! わしもあの船には興味がある、ゆっくり見せてもらいたいもんじゃな!」

大口を開けて笑うトム

「あれは他の一般的な海軍船と違い、海軍が独自で作つたもんさ。」

ま、アンタほどの船大工に興味を持ってもらえたんなら光栄だ、いい土産話になりそうだ」

そう言つてクリークは3人を連れ再びファイネ・イゼツタ号へと乗り込むのだった。

## 廃船の島 ドンクリーク

新しい船で色々見ながらはしゃぐ二人に対しギンに案内を任せクリークはトムに話しかける。

「トムさんよ、もし世界政府が暗躍していると言ったらどうする?」

「暗躍? 何の事じゃ?」

「プルトン」

首を傾げるトムにクリークはその名前を口にする。

「ああ、確か昔にウォーターセブンで作られたちゅう戦艦か。」

それがどうしたんじゃ?」

「……ま、別にアンタが知らないってんなら深くは追及しないさ。」

「たつは……! わしが知つとるのは船の事だけじゃわい」

「……世界政府でスパンダとか何とかいう人間が動いている、身の回りには十分気をつけてくれ」

「……お前さん、何のつもりじゃ?」

薄々察したのだろう、こちらが何かを知っていると。

「別に、俺は政府のやり方が気に食わないってだけさ。あ、これはオフレコで頼む」

「たつはっ……! 海軍の人間がそれを言うか」

「事実だしな。海賊王の船、オーロジャクソン号……数多の海を越え、かの海賊王をラフテルまで導いたというその船を造ったアンタは凄いいもんさ。」

例え特例として海賊王に加担した者が全て悪だとしても俺はアンタの腕に感服するよ」

「たつはっはっ! 褒められて悪い気はせんな!

おお、あれが廃船島じゃ。あまり島に近づきすぎん事じゃ、見えにくいが沈んだ船に座礁するでな」

「全員接岸準備! 座礁に気を付けろ!!」

人払いをしていたので大声で操舵手に指示を出す。

クリーク、トム、フランキー、アイスバーグが降り立ったその島は

なるほどその名の通りあちこちに廃船が打ち捨てられていた。

そしてその中の一角にそれぞれにBFというマークと番号が施された武装した小型戦艦が鎮座していた。

「これか、例の小型戦艦は」

「ああ、おれはこんなもんを放置するつてのが許せねえんだ」

「だからこれは海王類を仕留める為のもんだって言ってんだろ！」

再び取っ組み合いを始めた二人を横目にクリークは辺りを見回す

「ひいふうみい……武装した船は全部で34……あれは作りかけみただいな。」

フランキーと言ったか、これは全部お前さんが？」

「ああ！おれはいつか自分の手で海王類を仕留める為にこの船を作ってたんだ!!」

取っ組み合いを止めこちらの質問に答えるフランキー

特に疑問に思っていないなさそうなフランキーに対し、クリークは顎に手をあて思索する。

このフランキーが作った戦艦群は原作では司法船襲撃に利用されていた。

フランキーが自身の船を壊したくないという気持ちはわかるが、こ  
うも無造作に放置されているのは流石に見逃せない。

となると荒療治が必要だろう。

そう考えたクリークは比較的新しそうな船に近づき武装を操作

「おつ、おい！勝手に動かしたら……」

フランキーの声は一步遅かった。

クリークが適当に操作した武装から大砲が発射され真っ直ぐにフ  
ランキーの元へ。

「フランキー!!」

アイスバーグの悲鳴をよそに思わず両腕を前に出し目をつむるフ  
ランキーだったが砲弾はそれよりも前で爆発をおこした。

「な……何が……」

おそるおそる目を開けたフランキーの視界に映ったのは筋骨隆々

とした背を向けて煙を纏うクリーク。

そしてクリークはこう尋ねた。

「さてフランキー。」

例えばこの廃船島に廃材をとりに来た人間達がいたとしよう。

そこでたまたまお前のこの戦艦達を見つけ、誤った操作をしたとする。

運悪く大砲が発射され、その射線上には同じく廃材をとりに来た仲間が運悪く立っていた。

哀れ、射線上にいた男は砲弾の爆発で死んでしまい、誤って操作をした人間は仲間を殺してしまった事で嘆き悲しんだ。

さて、誰に責任がある？」

クリークのやった事は簡単だ。

誰でも使おうと思えば使える武装を動かし、その攻撃から庇った。それだけの事だ。

しかしクリークの話聞き、そしてそれを体感した事で言いたい事が分かったのだろう。

「お……おれ、別にそんなつもりじゃ……」

顔を悪くするフランキーに

「なあバカンキー……壊せとは言わないがせめて武装を使えなくするとか撤去するとかはしてくれないか？」

別に船を作るなど言ってるわけじゃねえんだ、この海兵の人が言いたい事はわかるだろ？頼む……」

そう言っただけアイスバーグがフランキーの両肩に手を置く。

「……わかった」

そう言っただけすっかり意気消沈した様に頷くフランキーに

「ま、流石に誰でも使える状態で海王類を仕留めるような武装が放置されているというのはあまり良い事では無いからな。

ではまた何かあったら声をかけてくれ」

そう言っただけクリークは三人に背を向け来た道に戻るのだった。

## 蠢く策謀　ドンクリーク

それから二日後、クリークの元にとある報告がもたらされた。世界政府の役人が船大工のトムに接触したというものである。

部下を使って秘密裏に調べさせたがやってきた男の名前はスパンダム。

スパンダじやなかったかと思いつつ報告書に目を通す。

CP5長官スパンダム。

現CP9長官のスパンダインを父親に持ちあまり良い噂は聞かない男だ。

その性格は身勝手にして自己中心的、身の丈に合わぬ野心を持ち今回の件も自身の出世の為なのだろう。

原作ではCP9長官として出てきており、戦闘力も低く小物ながらもその権力を使って捕まったロビンを救おうとした麦わら一味の前に立ち塞がっていた。

とりあえず彼から目を離さないように指示を出しクリークは考える。

例のバトルフランキーと呼ばれる戦艦群に対しての処置はフランキーが沈んだ表情をしながらも終えた、という報告をアイスバーグから受け取っている。

最も最近は何か吹っ切れたようにBF-35と名付けた船を完成させてとうとう海王類を仕留めたそうだが。

しかし原作で使われた船が武装が使えないとなれば彼がどう動くかだ。

原作では放置されていた小型戦艦で司法船に対して襲撃が行われた。

考えられるものとしては船を使うものの襲撃自体は手持ちの武器で行うというものだがこれはいくらなんでも無いだろう。

スパンダムもそこまでバカじゃないだろうし。

となると次の手は別の犯罪をおこしそれをトムに被せるというも



のがある。

被せる犯罪は別に重罪じゃなくとも良い、トムの身柄さえ確保してしまえば後はどうとでも彼の権力でできるだろう。

他の手であれば直接トムを誘拐という手もある。

まあトムは人間の10倍の怪力を持つ魚人だしそれは難しいだろうが。

他にはトムの身柄を抑える事は諦め直接設計図を探すという可能性もある。

後で秘密裏に事務所に護衛をつけておいた方が良さだろう。

となれば話は早い、それぞれに指示を出しクリークは立ち上がり部屋を出たのだった。

そして3日後・・・途中部下とは接触していたスパンダムだが行動を起こさない事に諦めたか？と考えていた頃司法船の来訪の報せがもたらされた。

クリークは直ぐ様マガツノに乗って司法船に向かい裁判長に接触、軽い談笑をしつつ襲撃があるかもしれない、という事を伝えておく。

まさか本気であるの船で襲撃しないとは思うが流石にここまで動きが無いと本気でそれをやるかもしれないな・・・

実際スパンダムが大砲の砲撃に当たったという報告は受けているので絶対に無いとは言い切れない。

そして無事に司法船は港に入港、杞憂だったかとクリークが考えているところにその船は現れた。

船体や帆には”BATTLE FLANKY”やら”BF”の文字。

それが何であるかを察したクリークは直ぐ様マガツノに飛び乗ると戦艦群へ。

船からは銃弾が発射されそれらが司法船を襲うもののクリークの「小断乱舞！」

との手刀による飛ぶ斬撃で簡単に撃ち落とされ、そしてその戦艦群にマガツノが騎乗したクリークごと突っ込む。

いくら小型の戦艦と言えどマガツノは巨体である。

そしてその巨体相応の筋力を有し、その自慢の角でマガツノは戦艦群を次々に航行不能としていく。

そうなる後は戦艦を操作していた人間達は慌てて逃げ出そうとする。

いくつも長銃を背負った全身黒い防水スーツに身を包んだ男達。

ホントにこの手を取ってくると思わなかったのもその策の稚拙さに頭を抑えつつ逃げ出そうとした男達を次々に気絶させる。

纏めてふんじばって船に連行しクリークは再び司法船の元へ。

クリークが船に戻るまでにスパンダムが動いたのであろう、広場には手錠こそされてないものの政府の役人達に銃を突きつけられたトム達3人の姿があった。

おおよそ検討はつく、誰かがあの戦艦群はフランキーが作った物だと言ったのだろう。

それは実際事実な故に彼らはこうして大人しく従ったのだと考える。

そして役人達の中にはいやらしそうに笑う男が一人。

特徴的な鼻に仕立てだけは良い服装の政府の役人スパンダム、彼は疑って無いのだろう、自身の計画が上手く行った事を。

## 稚拙策謀 ドンクリーク

CP5長官スパンダムは心の中でほくそ笑んでいた。

多少の誤算はあったものの自分に砲撃を食らわした小僧が作った船で上手く司法船に襲撃をかけさせる事が出来た。

直ぐに確かめに来るだろう、という考えのもと廃船島で待っていていればそこには自分の船が襲撃に使われたのを見ただろう、のこのこと3人がやって来たので直ぐ様包围、司法船襲撃の容疑がかかっているとえば大人しく連行されてくれた。

いくら魚人と言えど世界政府の役人に敵対するほどバカでも無かったのだろう、普通にこちらと敵対してくれりや早い話だったのだが・・・と思いつつ司法船の前まで戻ってきたスパンダムだった。

そしてその場で裁判が始まる。

裁判長の司法船襲撃に対する質問がトムに問いかけられるとそれらをトムは一切否認、段々と苛々しだしたスパンダムは

「裁判長！こいつらは自分の船で司法船の襲撃を行なったのは明らか！さっさと捕らえるべきだ！」

「なっ！司法船の襲撃はおれ達じゃねえ！犯人はてめえだろうが!!」

そんなフランキーの声が集まった民衆の嘲笑によって遮られる。

「ワハハハ!!カティ・フラムと言ったか？あの船は君たちの会社で作られたのだろうか？それに我々は君たちが廃船島にいた時に捕らえた、よってその罪は明白!!」

そう嘲笑うように言うスパンダムだったがそこに一人の男の声。

「裁判長、一ついいだろうか？」

難しい顔をしていた裁判長に声をかけたのはクリーク。

犯人達を船に連行し戻ってきたので少し時間がかかったがまだ判決は出ていなかった事に安堵しつつ問いかける。

「む？クリーク殿か、いち早く襲撃に気付いてこの船を守ってくれた事に礼を言わせてくれ。」

「ところでどうしたのじゃ？」

裁判長からの問いかけにクリークは

「いえ、素朴な疑問なのですが、あの小型戦艦群に乗っていたものは捕縛して私の船に連行したのですが何故その3人が犯人に？」

と、爆弾を落としたのだった。

「何!? 襲撃犯を捕縛したじゃと!? ではトム達は何故？」

自身の部下が捕らえられた事に焦りつつもスパンダムは考える。

確かに襲撃犯が捕らえられたのは痛い、が捕らえたのは海軍だし上手く言い逃れはできるだろう。

そう考えスパンダムは口を開く。

「ワハハ！きつと誰か人を雇ったのでしよう!! その海兵、よくやった！」

後は”世界政府のCP5の長官であるわたし”と裁判長で話し合うので帰ってくれたまえ」

と自分は世界政府の人間だぞ、という意味を言外に込めて言うも

「いえ、そうは言っても捕らえたのは我々なのでそうも言えないでしょう」

「うるせえ！たかだか海軍風情が引つ込んでろって言ってるんだよ!!」

「そう言いますがスパンダム殿・・・でしたか？我々は犯人を捕らえたので無辜の民がその罪を被せられるのを見過ごすわけには・・・」

尚も言い募るクリークにスパンダムは苛々しつつも流石にこの状態でトムに対し旗色が悪いと感じたのか

「ちっ、その海兵！捕らえた襲撃犯の身柄はこちらに寄越してもらうぞ!!」

そう言つて別の策をとろうと足早に去ろうとしたところで

「ふむ、スパンダム殿。ではトム達は今回の襲撃の犯人では無いという事ですか？」

裁判長のその問いかけに

「襲撃犯に関して”我々が”尋問しますので少し待つて頂きたい!!」

乱暴に返すと逃げるようにその場を去るのだった。

後はとんとん拍子であった、今回の司法船襲撃未遂は別の犯人である可能性がある為一時保留。

海賊王の船を造った罪に関してはこれまでの功績により不問、無罪とされ3人は無邪気に喜ぶのだった。

それを見て苛立たしげな表情をしながらもコートの懐から小電伝虫を取り出し

「おい、そっちはどうなった設計図は見つかったか？」

と別の策として用意していた部下に問えば

「すつ、すみません！事務所に恐ろしく腕の立つ奴がいました!!」

「はあ!?そんなのひっ捕らえて構わん! さっさと設計図を手に入れてきやがれ!!」

「ですが! 相手は顔を隠してるものの我々では歯が立ちませ・・・ぐわっ!!」

その声と共に電伝虫は沈黙、何もかも上手くいかない事にスパンダムは地団駄を踏むのだった。

## 警告鈍熊 ドンクリーク

「スパンダム殿、少し宜しいですか？」

スパンダムが物陰で地団駄を踏んでいるとそこに一人の男の声がかかる

「ああ？・・・何ださっきの海兵か、何の用だ？」

そこにいたのは先程自身の邪魔をしてくれやがった海兵だった。

「いえ、捕縛した犯人を尋問することのでしたので身柄はどうしようかと」

コートを着ているので将校だろう、今更ながらムカムカしつつ

「・・・つち、てめえのせいでおれの計画がおじやんになっちゃまったじゃねえか!!」

と激昂して詰め寄るも

「計画？何かトムに恨みでも？」

そう返されたので言葉に詰まる。

しかし自身も五老星から任務を受けている身

「・・・違えっ!!いいか？おれは五老星から・・・世界政府のトップである五老星からこの任務を受けてるんだぞ！この意味がわかるか!？」

そう反論する。

まあ、実際の所任務を指示されたのでは無くまあできるんならやってみろという五老星のスタンスだったがそこら辺をスパンダムは理解していなかった。

「ほお・・・因みにどんな任務で？」

流星にそれを言うわけにはいかない、と理性が働いたのだろう

「つ・・・それは極秘だ」

と流星にプルトンの件は伏せておく。

「要するに今回の司法船襲撃は貴方がおこした事で間違い無いと？そしてトムに襲撃の罪を被せようとした・・・と」

「ふん、それがどうした。おれの出世の礎になるんなら別にいいだろ。

とりあえずさっさと貴様が捕縛したおれの部下を返してもらおうぞ」

こっちは世界政府の人間だ、さっさと言う通りにしろという意味を

言外に込めて言えば

「ああ、それでしたら船の方に連行しましたよあちら側の港に停泊していますか・・・」

その言葉に従いクリークはスパンダムをトムの無罪に沸き上がる港から少し離れた棧橋へ案内するのだった。

「なっ・・・赤い海軍旗!? てめえ赤カモメの人間かっ!!」

「おや? コートで気づいてなかったの? 自己紹介が遅れましたな。海軍独立遊撃隊司令、本部少将のクリークです。」

流石に相手が本部少将だとは考えておらずべらべら喋った事を悔やんでいるのか

「・・・っち、とりあえず襲撃犯の身柄はこちらに引き渡してもらおうぞ!」

今更部下を襲撃犯と言い直すスパンダムに

「・・・ところでスパンダム殿、最近面白い物を手に入れましたな」

と、クリークは懐から貝殻を取り出して見せる。

一見すれば何の変哲もない巻貝であった。

スパンダムもそう考えたのか

「何だそれは?」

と首をひねる。

「実はこの貝殻、音を溜め込む事ができてましてね・・・」

そう言ってクリークが貝殻の頭頂部をカチリと押せば

『ああ?・・・何ださっきの海兵か・・・』

といった会話がはじまりすっかりとスパンダムがやろうとしていた計画のことまで録音されていた。

「なっ! てめえっ!! まさかおれを嵌めるつもりか!!」

「いえいえいえ、まさかそんな。」

実はトムのスカウトを考えてましてね、今更つまらない事で捕縛されるのは望ましくありませんよねえ?

俺の言いたい事がわかりますか? 五老星から受けた任務・・・でしたか?

とは言え海軍の人間として騒ぎを起こされるのは望ましくくないん

ですよ。

まあ今後彼に関わらないのであればこれはお渡ししますが・・・」

「つつ・・・わかったからとつとつとそれを寄越しやがれ!!」

「まあいいでしょう、貴方の部下は後で解放するように指示しておきましよう」

「つつ・・・後で覚えてやがれっ!!」

「あれれー?そんな事言っていないんですかー?今すぐにこの録音データ公表して貴方を逮捕する事もできるんですけどー?」

その言葉にスパンダムも騒ぎになるのは避けるべきだと考えたのだろう、怒鳴りそうになる気持ちを何とか抑えてクリークの手から音を溜め込むダイヤル・・・トーンダイヤルを取り上げると苛々しながらその場を去るのだった。

「・・・まあトーンダイヤルが一つとは言っていないんだがな。」

スパンダムが見えなくなったところでクリークは懐からトーンダイヤルを取り出すとさて、どう使うべきかな?と考えるのだった。



## 一時避難 ドンクreekさん

部下に今回の襲撃犯を解放するように指示

そしてその日の夜、トムが代表を務める造船会社”トムズ・ワーカーズ”の社屋にクreekの姿はあった。

「トムさん、時間をとってもらってすまん」

船の設計図やらなんやら色々雑多に広げられた部屋の中にはクreekとトムの二人が机を挟んで向かい合っていた。

「たっはっは！男が細かい事気にするな！何か話があるんじゃない？」

昼の件から察したのだろう、話を促すトムに対して

「ええ、実は・・・」

そう言っただけクreekはトムに対して今回の顛末を裏の事情・・・スパンダムに関して話す。

「トムさん、あんたが例のアレを持つてるのは承知してる。

勿論口外するつもりは無い、アレが表に出るのは個人的には望ましく無いからな」

と、自身の正直な意見をトムに告げるクreekに

「ふーむ・・・まあお前さんには今更隠しても無駄なようじゃな

いかにも、わしはお前さんの想像している物を所持しておる。」

覚悟を決めたのか毅然とした目で顔を上げるトム。

やはり原作と同じく今はまだトムが所持していたか・・・と思いつつもクreekは顔には出さずに

「因みにスパンダムと同じく政府には嗅ぎつけている者もいるがソレをどうするつもりだ？」

と尋ねる。

原作では次代に託したが生き残った事によりこれから先もトムが所持したままの可能性もある。

「むう・・・とりあえずバレンように次代に託そうと考えておるが・・・」

確か最初アイスバーグに託してアイスバーグがフランキーに預けて体内に保管していたんだっただけか？

まあそれでもあわや例の設計図はスパンダムの手落ちるとこであつたが。

「・・・まあくれぐれもバレないように頼む。で、本題に入るがこれらを見てほしい」

そう言つてクリークが机の上に広げたのは数枚の紙。

「なんじゃ？・・・ふむ、島の名前と大まかな説明・・・随分と雑多じやがこれは何じゃ？」

「率直に言えばアンタには少し身を隠してもらいたい。

今回の事件の主犯、スパンダムだが奴はまた手出しして来る可能性がかなり高い、だから暫しアンタには身を隠してもらいたいんだが・・・」

クリークの考えはしばらくほとぼりが冷めるまでトムに身を隠してもらおうという算段である。

「ふーむ、身を隠せと言われても・・・ジョイフル島にサイゼ島、メカ島にココス島・・・ほほう、ゾッセーン島とは造船の島か、うちとはまた違う感じの島かの？」

用意した紙はそれぞれの島の情報、いざという時の潜伏先として調べてあつた島々である。

「ああ、ここにリストアップしたのは俺の判断で目立ちにくいと考えた島だ。

で、考えてもらえないだろうか？何、別に身柄を拘束するとかそういう話じゃない、そもそもアンタは晴れて無罪になったんだからな」  
「たつはつは！それもそうじゃな！ふむ・・・じゃが話については少し考えさせてもらえんか？わしもこの島では名が知れとる、色々しながらみっちゅうもんもあつてな・・・」

まあそう言われても直ぐに判断できないよな、と思いつつ

「わかった、まあ俺達もしばらくはまだ居るから決断してくれたら教えてくれ。

それから別件なんだがアンタが作った海列車なんだが・・・」

そう言つて別件を切り出すクリーク

「うん？わしの海列車がどうかしたのか？」

何かあるのか？と疑問を顔に浮かべるトム

「実は海軍でもパドルシップについて研究していてな、一応は蒸気で動く機関部を作ったんだがいかんせん大きさがな・・・」

「ははあ、海列車も一応パドルシップじゃし参考にしようつつう肚か」  
「ああ、とてもじゃないが実用的とは言えなくてなアレだとかかなり大型の船にしか搭載できん」

「たっはっはーわしにドンと任せい!!・・・と言いたいところじゃが海列車のパドル機関もまだまだでな、確かにアレの外輪は小型じゃし機関も小型じゃ。」

じゃがあれはそれ相応の出力しか持たん、とてもじゃないが今のままじゃと単独で船を動かす程のパワーは無いからのう・・・」

「そう簡単にはいかんか・・・まあ一般でも研究はされてるし大人しく技術習熟を積むしかないな」

と新たな推進機関について二人は議論をかわすのだった。

## 造船達人 ドンクリーク

後日、トムは話を受け入れて避難を承諾してくれた。

そしてそれに着いて来ると言い出したのがフランキーことカティ・フラムだった。

廃船島での一件や、自身の船が襲撃に使われた事により最近の色々もやもやと悩んでいるようであった。

今回その悩みを打ち払うためにトムに同行する事を申し出たのだ。

何故なら避難すると決めた島はここ”ウォーター・セブン”とは違う造船を生業とする島”ゾツセーン島”であるからだ。

フランキーも造船技師の端くれ、ここと違う環境ならば・・・と考えたらしい。

まあ少し増えるくらいなら問題無いと承諾した。フランキー以外の面子だがアイスバーグはウォーター・セブンに残るらしい。

海列車の整備や他の造船業者との兼ね合いもありトムズ・ワーカーズの代表としてアイスバーグが、海列車の運行もありココロが残るとの事だった。

因みに巨大なカエル・・・ヨコヅナはトム、フランキーに同行するらしい。

クリークはトム、フランキー、ヨコヅナをゾツセーン島まで送り届ける過程でトムと外輪機関の話し合いを行い改良点なんかを教えてもらった。その傍ら、フランキーはフィーネ・イゼツタ号をあちこち見回りつつ新たな船の設計図を、ヨコヅナは何やらマガツノやシグマと取っ組み合いをしていたようだ。

ウォーター・セブンを出て数日程、一行はようやくゾツセーン島へ到着した。

「いやあ！色々と骨を折ってもらってすまんの！」

「いやいや、アレの策謀は色々と望ましくないのでな・・・これくらいでCPの目を誤魔化せるんならそれに越した事は無い」

「おい、スゲエゼトムさん！アレなんか超大型のパドルシップだ！おおっ！！ありや最新のカルヴァリン砲じゃねえか?!」

クリークとトムが話し合う側でフランキーは色々と新しい環境に大はしやぎしていた。

「とりあえず話はつけてある。紹介状を認めてあるからそれをこの地獄の場所に持って行くといい。」

一、二年程して落ち着いた頃を見計らってまた迎えに来るので暫くはここにいてもらいたい」

「たっはっはっ……！ドンとわしに任せい！この島でもドンとした船を作ってやるでな！」

「……あまりやり過ぎ無いように頼むぞ？スパンダムの奴が嗅ぎつけたらまたここで同じ事やるだろうしな」

「安心してくれよ海兵さん！トムさんはそこら辺無頓着だがおれに任せといてくれ！そのスパンダとかいうおれの船をいらん事に使ったのがきたら今度こそぶっ飛ばしてやる!!」

「いや、ぶっ飛ばすのは最終手段でな？とりあえずそこら辺はくれぐれも頼んだぞ？」

とりあえず諸々をトムにお願いしたクリークはこうして無事にトム、フランキー、ヨコヅナを送り届け、マリنفォードへと帰還するのであった。

「おお何じゃクリーク、おんしも戻ったのか」

マリنفォードに到着したクリークに声をかけたのは同じく船から降りるところだった赤犬こと海軍三大将の一人、サカズキであった。

クリークの同期でもあり希少なロギア系、マグマグの実の能力者でもある。

「お前も戻ってたのか、珍しいな顔を合わせるのには」

そう、以前は定期的に会合を設けていたがサカズキ、クザン、ボルサリーノが大将となり、またクリーク自身も最近は色々と忙しく、前とは違いなかなか四人で集まる席を設けられないでいた。

「ほうじゃ、後で夕飯でも食わんか？色々と話し合いたい件もあるき」

「まあ俺は構わんぞ？とりあえずセンゴク元帥に諸々報告してきて技術班に顔出してからになるが……」

それで構わない、とサカズキは了承しクリークはセンゴクの元へ

「おお、どうだったウォーター・セブンは。

ミリタリスト計画へのスカウトという事だったが上手くいったのか？」

センゴクのその言葉にスカウトという名目で向かった事を今更ながらに思い出したクリークであった。

## 赤色鈍色 ドンクリークさん

セングク元帥への報告を終えての夕刻、クリークは赤犬との食事の為にとあるレストランに来ていた。

主に海軍の将官が利用するレストランで個室なんかも完備している。

「どうじゃった、新世界の方に行っておったんじやろ？」

そしてそれらの個室の一室にクリークとサカズキの姿はあった。

「ああ、元帥が言ってたのは赤髪の新世界入りに合わせて三大海賊：白ひげとかビッグマム、カイドウなんか動くんじや無いかって話だっただが・・・」

白身魚のムニエルをナイフとフォークで切り分けつつ舌鼓をうちながら答えるクリークに

「おんしの口ぶりじやと問題無かったようじやの」

サカズキも顔に似合わずナイフとフォークで丁寧に切り分けつつ口に運ぶ。

「ああ、他の海賊がざわついたくらいで特に問題は無かったな」

「そういや聞いたぞ？空島にいったんちゆうんは本当か？」

思い出したようにそう聞くサカズキに

「ああ、つってもほぼ観光みたいなもんだぞ？」

と空島に行った時の感じを教えてやる。

まあ実際敵がいたわけでもなし、平和なもんだったがな。

「なんじや、海軍の手も入つたらんどこじやし何か厄介なもんでも潜んどるかと思うたが・・・」

・・・俺が行った時はエネルギーがなかったが厄介と言えばエネルギーが厄介だろう。

「ま、今のところは特に問題無しだな。先がどうなるかがわからんが・・・」

エネルギーがいつ来るかは分からんが暫くは空島に行く事もないだろう、主人公である麦わらが上手くやってくれる事を願おう。

「そうじゃ、おんしに聞いておきたかったんじゃがセンゴクさんが”ミリタリスト計画” っちゅうんをやつとると聞いたんじゃが・・・」  
「ああ、それか。一応俺も計画メンバーに入ってるんだが詳細は聞いてないのか？」

「ああ、わしもあちこち回つとったもんでな、何でも海兵の装備による戦力の底上げっちゅう話じゃったが、それはどれくらいの効果が見込めるんじゃ？」

「うーむ・・・まずは俺が使ってる武装”試作兵装群” は知ってるよな？」

「おんしの本気装備じゃったか・・・色々承認はいるっちゅう話は聞いたるわい」

「ああ、んでそれらで作られた装備の数々を簡略化して汎用兵装として海兵に装備させようって計画だ。」

「全体的に少し底上げするっちゅう肚か、どんなもんがある？」

「そうだな、今配備が始まつてる分だと・・・鉄網を仕込んだ”黒色弾”とか催涙ガスを封じ込めた”赤色弾”、信号弾やスモーク弾なんかを撃てる特殊銃、軽さと耐久性に優れた折りたたみ式のロッド辺りか」

「・・・たしかおんしの部隊がっこうちよつたやつかの？」

「ああ、その辺りなら信頼性は高いからな。」

他にも色々あるがあくまで俺専用に作られた装備だからな、ブラッシユアップに時間がかかってな・・・」

「ま、あれらの装備じゃつたらそうなるじゃろうな。」

いつじやつたか技術班に見せてもろうたが何じゃあの鎧は、ようあんな馬鹿げた重さで動けるのう」

「あれだ、そこら辺は特訓の賜物って事で。」

「今更おんしの馬鹿げた身体能力については言わん、んでそれらの装備はうちにも回ってくるんか？」

「まあ順次配備していく予定さ、今研究中なのは主に特殊な手投げ爆弾だ。」

麻痺ガスや催眠ガス、閃光弾なんかを計画している、最終的には能



力者相手に無能力者でも戦闘が可能になるようにする、というのが”ミリタリスト計画”の最終目的さ」

「ほう、確かにわしのようなロギアっちゅうても閃光弾何かは効くじやろうし、パラミシアにしても大体は原形を保つ能力じゃ。」

麻痺なんかは効くじやろう、ゾオンにいたっては幻獣種を除いて身体能力以外は人間と変わらんしのう」

「まあ特殊効果が効きにくいロギア自体が希少だからな、今確認されてるだけでもお前とボルサリーノ、クザンの他は・・・七武海のクロコダイル辺りと他に誰かいたか？」

「たしか海軍に新しゅう入った若いのにモクモクの実の能力者がおつたの、他じやと政府で何やら研究しとるっちゅう科学者にガスガスの実の能力者がおつた筈じゃ」

モクモクの実って言うത്とスモーカーか、もう海軍に入ってたか。

ガスガスと言えばシーザーか・・・というか既に何やら研究してるのか、後で居場所でも探っておくか・・・

「噂によれば他にも火や雷、沼なんかもあるって言う話だがな」

まあ俺の手元には雪を隠してるんだがな、どうしたもんかなあれ。

「火なんかはわかりやすいし何とか海軍で確保したいもんじゃな、雷なんかも能力者としてはかなり破格じやろ。」

「というか沼っちゅうんはヌマヌマの実っちゅうところか、どうやって使うんじゃ？」

その言葉に仮にもロギアなのに原作では扱いが可愛そうなヌマヌマの実の能力者、コリブーを思い出す。

・・・カリブーだっけ？そいつの能力の使い方を思い出しつつ

「例えばその能力で身体の中に色々武器を溜め込んだりしてそれを使って戦ったり、相手に絡みついたり窒息させたり・・・ってのを噂に聞いたな」

「ほう、それがおつたら物資の補給なんかには困らなさそうじやの。」  
「まあ見つかってないもんはどうしようもないがな」

未だ見つかってないので原作で出てきたのは炎のメラメラの実、雷のゴロゴロの実、沼のヌマヌマの実、闇のヤミヤミの実といった辺

りか。

このまま行けばそれぞれ順当にエース、エネル、コリブーだったかカリブーだったかの奴、ティーチと行ったところか。

エースがメラメラの実を手に入れた場所でもわかりやあなあ．．．  
そうして色々と気になる点を話し合いつつ夜は更けていったのであつた。

## 医者之道 ドンクリークさん

サカズキとの会合から数日、クリークの姿はほぼ己の拠点と化しているファウス島へ戻って来ていた。

幸いにも白鉛病の患者達は治療が完了し今は半数ほどがテゾーロとの話し合いでステラ・プロダクションの社員として。

他は身寄りがあるものはその島まで送り届けたり、中にはファウス島の治療施設で働きたいという者もいた為手伝ってもらっている。

最近では病床が多く空いた事から海軍から怪我人や病人が運び込まれるようになっていた。

腕のいい医者が揃っており、白鉛病の治療過程で設備などもかなり整っているのでそこにセンゴク元帥が目をつけ、海軍の一大医療拠点として使用するテストらしい。

白鉛病に侵されながらも完治したトラファルガー夫妻は新たにセンゴク元帥から直々の要請を受け故国、フレバンスの件について若干の蟠りがありながらも”ファウス島海軍病院”の院長と副院長として就任。

医者としてはかなり優れているものの、海軍に関してはからきしなので補佐として医療班の多くが本部から赴任。

クリークとの裏取引を行ったDr. インディゴは薬学医として引き続きこの島に居る事となり、ピュアゴールドを作り出したアシエ博士に関しては”スリムゴールド”の件もありその権利をテゾーロに渡した上で娘のオルガと共にステラ・プロダクションへと異動。

ドクトル・ホグバックに関してはステラ・プロダクションで女優兼コーチとして働くビクトリア・シンドリートのファンという事で再びステラ・プロダクションの専属医師として就職した。

残念ながらコラソンことドンキホーテ・ロシナンテは未だに昏睡状態から目覚めておらず、未だに眠ったままである。

そしてモネとシユガーに関してだが

「ふむ、ドラム王国か・・・」

モネがそう提案してきたのはその日の夜の事だった。

「はい、ルーク先生やホグバックさんからお墨付きはもらいましたしインディゴさんからも薬学は教わりました。

で、折角なので医療大国として名高いドラムに色々勉強しに行きたいと思つて……」

聞けば昨日まではここでルークやレモ達の手伝いをしてこの病院にて働いていたもののクリークがここに来たと聞いて折角なので相談してみよう、と思つたとの事。

モネの医術の腕に関してはルークやホグバック、インディゴから話は聞いている。

流石にホグバックやルークらには及ばないもののなかなかの腕をもち、この島に来た時からの長年の優れた医師達からの教育により応急処置から治療に手術と色々となせるマルチドクターとなつたらしい。

彼女も既に20歳だしドラムに行くくらい問題無いだろう。

因みにその涼しげな美貌と白衣効果も相まってか彼女に熱を上げる海軍の男どもは意外と多いという噂も聞いている。

しかし彼女一人ならいいが

「うーむ、しかしシユガーはどうするんだ？」

彼女には妹がいる。

まだ12歳なので流石に同行させるのも大変だろうしと考えれば

「ええ、それについてはレモさんをお願いして面倒も見てもらう事になつてます。

娘さんのラミちゃん含むフレバンスの身寄りが無くなつた子供達と一緒に勉強をしてもらう予定です」

と、予めこの質問を予想していたのかきちんと答えるモネ

まあロビンも17歳くらいで独り立ちしたし問題無いとは思うが行先は多くの海賊が跳梁跋扈するグランドライン。

カモメの水兵団による海域を問わない活躍により、一時期よりは数を減らしたものの未だ一般人にとっては脅威となる存在もいる。

「よし、中庭にいくか。

お前がどの程度戦えるのか知りたい、流石にドラムまで一人となると最低でも自身の身を守るくらいのは出来てもらわんな

体力づくりの一環として指導していた事をサボらず守っていれば最低限は動けるだろう。

そう考えつつ提案すれば

「あら、これでもクリークさんの言いつけはしっかりと守ってるんですよ?」

あ、でも戦うとなると少し準備が必要だから少し待っててくださいるかしら?」

そう言っつてモネは微笑んで見せるのだった。

## 緑と雪と ドンクリークさん

中庭にてクリークとモネの両者は対峙。

クリークは海軍コートを脱ぎ捨てコンバットパンツとタンクトップに、モネはゆつたりとした袖の服。

「流石に倒せとは言わん、一撃くらい当てて見せろ。」

その言葉にモネは

「あら・・・じゃあ精々クリークさんを驚かせて見せましょうかね！」

その言葉と共に大きく腕を振るえば袖の中から三本の針。

咄嗟に避けると避けた先の顔面に向かって再び針が飛んでくる。

その隙にモネは後ろに回ると両腕にアイスピックを持ちクリークの脚目掛けて踏み込む。

「なるほど、最初の投擲で動きを誘導しそこに追加の投擲・・・それで仕留められない可能性を鑑みて足に向かって攻撃、動きを止めようという事か。」

それにこりや麻痺毒か？ Dr. インディゴあたりから学んだやつか？」

とクリークは口で飛んできた針を咥えつつ見えないままにアイスピックを二指で挟んで止めていた。

モネは直ぐ様アイスピックを手放すと後ろに下がり

「・・・流石に麻痺毒を口に入れるのはどうかと思うのだけど」

と呆れたような表情を見せる。

その言葉にクリークは針を吐き捨てると

「ちよつと前にジェルマで毒食らってな、反省として弱性の毒で体は慣らしてある。」

しかし針とは考えたな。投擲の腕もなかなかのもんだ、練習したのか？」

「ええ、いつだったかロビンと話した時に直接戦闘となると身体能力に不安があるだろうからって」

そう言って再び袖を振ると両手の指の間には三本の針。

それらを腕の一振りですげそれと共に踏み込むモネに対しクリークは投擲された針を回避し右腕で掴みかかろうとすればその腕を素早い足捌きで足の間を潜り抜けつつ

「縫合」

と呟く。

それに対してクリークは振り向こうとしたところで

「ぬおっ！なんだこりや!!」

バランスを崩しそうになったところで踏み止まる。

見ればいつものまにか裾同士が縫い合わされそれに気づかず方向転換しようとした為バランスを崩したのだ。

「糸・・・しかも鋼糸か！こんなもんどつから持ってきたんだ!」

「若い海兵さんからプレゼントされたの、丈夫で切れにくいし折角だから活用させてもらってるわ」

「確かに衣服さえ縫い止められれば動きはかなり制限されるからな。

とりあえずは合格だな、それからその若い海兵さんとやらが誰なのか教えてくれ」

「あら、クリークさんたら嫉妬？でもまだクリークさんに一撃は加えられて無いと思うのだけど・・・」

「まあこの程度の戦闘力があれば大体の敵はどうかなるだろ。

とりあえず武器は見たところ複数種の針・・・見たところ普通のと見えにくいように艶消しを塗ったものか？

それから鋼糸にアイスピックといったところか？」

「ええ、それから護身用にピストルを一丁融通してもらったわ」

その言葉と共に腰に手を回せばその手には短銃。

「撃ち方はわかるのか？」

「何度か練習したわ、それなりに的には当てれるわよ？」

「まあ扱い方がわかってるならいい、それより針とかは全て袖の中に仕込んであるのか？」

「レモさんが裁縫上手かったから教えてもらって数十本ほど仕込んであるわ」

「ふむ、とりあえず装備はすこし見繕ってもらおうか。」

それから・・・そうだな、ちよつと待ってろ」

そう言つてクリークは自室に戻り床板を引き剥がすと一つの木箱を取り出す。

中身を確認しそれを脇に抱え込むと再び中庭に戻る。

「ほら、これを持ってくといいい。」

モネが木箱を開けるとその中には唐草模様の白い果実。

「これって・・・まさか悪魔の実!?!いやいや、こんな高いの流石に受け取れないわよ!」

そう言つて木箱ごとつ返そうとするモネに

「いいから受け取っておけ、独り立ちの祝いみたいなものだ」

「でも・・・」

と尚も言い募るモネに対し何とか説き伏せ受け取らせる。

さて、世にも珍しい悪魔の実。

その中でも更に希少なロギア系”ユキユキの実”。原作と同じ者の手に渡つたが彼女がどう育つのか楽しみだな。

そんな事を思いつき顔をしかめて悪魔の実を完食するモネを見ながら考えるのだった。



## 鈍色授業　ドンクリークさん

モネの独り立ちという事で技術班に連絡をいれ何点か装備を作ってもらおう。

出来上がり次第ファウス島へ届けてくれるようお願いし、その傍らでユキユキの実の能力者となったモネの能力慣熟訓練を行う。

「いいか？モネ、お前が食べたのはロギア系ユキユキの実だ。」

黒板にカツカツカツと書きつけ机に座るモネを見やる。

「ロギアってかなり希少じゃなかった!?下手すれば数十億するんじゃないの!？」

クリークの言葉に驚愕し”クリークさんの言ったことと言え、何で食べちゃったんだろう・・・”と頭を抱えるモネをよそに更に説明を続ける。

「いいか？ほぼ全ての物理攻撃が無効となるロギア系の能力は一見して無敵に思えるが”ロギアは無敵では無い”」

「まあ食べちゃったもんは仕方ないか・・・海楼石を使うのと弱点をつく・・・くらいかしら？」

気持ちを切り替えてクリークの座学をノートの前でペン片手に前を向く。

「そうだな、ロギアを相手にできる方法は3通りほどある。

まずお前が言った海楼石を使う方法だ。

能力者は海に嫌われる、それ故に海のエネルギーが固形化した海楼石に触れると力が入らなくなる。

次に弱点をつくこと。

例えば海に落したり、お前が雪ならば熱や火が天敵となるだろう。

そして3つ目。

これは覇気と呼ばれるエネルギーを使う方法だ。」

「・・・ハキって確か海軍が使う特殊技術だったかしら？

まあ詳しくは知らないけども・・・」

まあそう思うのは無理も無かろう、覇気に関してはそこまでメジャーな技術では無いしな。

その言葉にモネの元まで歩き指に覇気を纏わせその額に軽くデコピンをする。

「いったあつ!!」

「覇気は別に海軍が使う特殊技術というわけでは無い。

まあ覇気には何種類かあるが一つを除いては類い稀な修練にて発現する。」

「クリークさんはその三種類あるハキつていうのを全て使えるの?」

赤くなつた額をさすりつつ涙目になつたモネにすこし強くやりすぎたか、と思いつつ

「残念ながら二つしか使えない。

悪魔の実の能力者に有効な武装色の覇気、自身の感覚を広げる見聞色の覇気。

そして俺は使えないが相手を威圧する霸王色の覇気というものがある。

これに関しては生まれつきの素質が必要とか王たるものの資質がいるとか言われていて詳しい事はわかっていない。」

と本当の事を言う、実際やり方分からないしとてもじゃないが自分が霸王色が使えろとは思えないしな。

「生まれつきの才能ってことかしら?なんとも残酷な事ね」

「ま、持っていないもんは仕方ない。」

話は戻るが自然系の能力者にとって有効な攻撃となるのは武装色の覇気を含めて3つ、それ故にロギア系は無敵では無いという事だ。」

「世間一般では無敵と言われるのに弱点多いわね」

「そしてユキユキの実に関してだがぶつちやけ言えばそこまで強く無い、クザン・・・青雫大将のヒエヒエの実の下位互換だな」

「むう・・・」

「とは言え戦い方次第だ、弱点を突かれなければ物理攻撃はほぼ無効。

そして雪という特性のもと雪を押し固めた氷も一応は使えるだろう。

他にも雪というのは綺麗だが時々恐ろしい面を見せる。

吹雪や雪崩などが代表的だな、まあ使い方に関しては俺がどうこう指示するより自身で考えた方がいいだろう。

今の所は自身の身を守るものと考えればいい、そしてそれから戦闘手段として利用するんだ。」

「わかったわ、とりあえずクリークさんが言う通りにある程度この能力を使えるようになってからドラムには行くわ、それでいい?」

「ああ、数日はここに居るからその間は見てやれる。」

幸いにも戦闘技術に関しては下地はできているからな、その間に俺が特別授業をしてやろう」

「・・・お手柔らかにお願いね?」

苦笑しつつそう言うモネに対してクリークの座学と実技を交えた特別授業は本部からモネの装備が届くまでの10日間続いたのであった。

## 一味過去 ドンクリークさん

モネをシャーロット・アンジェ号でシャボンディまで送り届け、モネは商船を経由して無事にドラムへと旅立ちクリークは自身の部屋で原作について思い出していた。

原作で麦わらの一味なのはまず麦わらのルフィ。

彼に関してはシャンクスとの別れの件の時の事もあり何らかのフォローが必要だろう。

彼の義兄弟のエースとサボに関してはサボは既にドラゴンに拾われ革命軍に入ったのは確認している。

エースに関してはいつメラメラの実を手に入れるか不明だが海賊になるのはほぼ確定だろう。(海に出た後、東の海シクシスの島にて入手)

彼に関しては将来頂上戦争とも呼ばれる件で大騒ぎになる事からなんらかの対処は必要だろう。

次に海賊狩りのゾロ。

この件に関してはくいなの事をすっかり忘れてた事により時すでに遅く彼女は既に事故にあつた後であつた。

その為未だに彼に関しては全く関わっていない。

次に泥棒猫のナミ。

彼女に関しては育ての親のベルメールは原作よりも高い戦闘能力を持っているし、いかにアローンが相手と言えど早々敗れる事は無いだろう。

次は狙撃の王そげキングことウソップ

彼は特に関わるべき事は無いだろう、父親のヤソップは赤髪ことシャンクスの海賊団に、母親は既に病死していると調べはついていない。

クラハドールこと百計のクロに関しては今のところ海賊の旗揚げすらしていないので手の出しようが無いので今の所はスルーだな。

次に黒足のサンジ。

彼はジェルマにいた時に少し交流を持ったがその後直ぐにジェルマを出奔、嵐の夜に遭難したゼフと共に救助され海上レストランを作ったのは把握している。

そのうち顔を出しに行くのはありかもしれないな。

わたあめのチョッパーに関してはこちらからは特に関わる必要は無いだろう。

モネがドラムに医者勉強に行つて原作が変わる可能性はあるがまあ許容範囲だな。

一時的だが一味に加入していたビビに関しては特には無い。

・・・アラバスタに指導役として残した海兵から若干気になる報告はあるもののまあ大丈夫だろう。

そしてビビがアラバスタで降りた後に加入したロビンだが彼女については特に問題は無いだろう。

原作より遥かに高い戦闘能力を誇る彼女なら早々誰かに敗れる事も無いだろう。

次に鉄人ことフランキー。

彼に関しては大きく変わる可能性がある。

トムがエニエスロビーに連行されず、彼がそれを止める為に海列車に轢かれて無い以上自身の改造を行なつてないので彼は未だ生身のままである。

今はゾッセーン島にトムと一緒にいるがそつちに出向いて能力の底上げを行うのはありかもしれないな。

えーと、それから・・・ブルックか。

彼に関しては・・・まあ既に死人扱いで懸賞金は解除されてるがゲッコウ・モリアの一味がああ海にいる以上原作通りになる可能性は高いだろう。

・・・まあホグバックがシンドリ嬢をおいかけてステラ・プロダクションに所属している以上原作よりモリア一味の脅威度は下がっていると思うが。

そういう結局ジンベエに関してはどうなったんだ？

原作知識がビッグマム編・・・ワノ国に行こうとしてたところで止まっ

てるから結局わかんないんだよなあ……（その後無事にジンベエは麦わらの一味に操舵手として加入）

麦わらの一味に関してはこんなところか。

後は彼らに関わるものとして海軍側から白猫のスモーカー。

彼に関しては海軍に入隊した事はサカズキからの情報もあり直ぐに調べて裏付けは取れている。

ロギアの能力者という事でメキメキと腕を上げており今やそんなじよそこらの海賊は相手にならないとの事である。

海賊側からは死の外科医ことトラファルガー・ロー。

海賊として旗揚げしたという情報は掴んでいるのでそのうち接触するべきだろう。

彼の父親であるルークに報告した所頭を抱えていたが”元気であるのなら何よりです”との事だったが……

そう考えながらクリークは更に深く思索にふけるのだった。

300話記念　もしも彼が手っ取り早く強くなるう  
としたら

朝起きたら少年になっていた。

俗に言う転生・・・憑依？とも言うべきか。

まあそれは良い、いや良くないけれども。

問題はこの世界があんのワンスの世界という事である。

割と死亡フラグが多いこの世界、対策しなければ死ぬ・・・

となれば早急に強くなる必要がある・・・となれば悪魔の実を手に入れる、と言いたいとこだが問題はこの場所である。

「東の海に悪魔の実が流れてくる可能性はひつくいよなあ・・・」

周りの情報を集めここが東の海という情報は仕入れた。

あーだこーだ言ってくるうるさいおっさんを尻目に適当に頷きつつ考える。

悪魔の実が難しいとなると手っ取り早く強くなるのは海軍に入るべきだろう。

そしてゆくゆくは・・・

そうと決まれば早速行動！

「おい！何処行きやがる!!」

そんなおっさんの声に

「やかましい！俺は死にたくないんでな！あばよ!!」

そう言い捨てて昼に目処をつけていた海軍船に忍び込む。

当然見つかって摘み出されそうになるがそこは土下座して頼み込み何とか海軍に入隊させてもらえた。

それからの数年、彼・・・鏡を見て自身の正体を悟ったクリークは医学や科学技術を猛勉強、そしてその熱意と深い見識を持って海軍本部科学部隊を前身として海軍本部科学技術局を設立、見事にその初代局長へと君臨した。

そして時は流れここはシャボンディ諸島。

色々な事件で世間を賑わせる麦わらの一味が今度は天竜人を殴つたとあつて海軍本部は大騒ぎになつていた。

「ほお、とうとうやって来たか麦わらのルフィ……」

おおわらわで出航準備を進める軍艦を眼下にクリークは無精髭を擦りつつ溢す。

「なんだ？知ってんのか」鉄熊”のオジキい」

そんな彼に声をかけるのは海軍本部科学技術局戦闘班長を務める”戦桃丸”

「まあ奴は”色々”有名だからな。」

「まあな、じゃあわいはもう行くぜ？」

「俺も行かせてもらうぞ？」

「はあつ？いやいやいや！なんでオジキが出るんだよ！」

「俺達科学技術局で手がけたパシフィスタのデータをとるチャンスだろ？」

それに……」

「それに？」

「俺がどの程度強くなつたか確かめればいいチャンスだと思つてな」

そう言いつつクリークは金属で出来た両手の指をガシヤガシヤと鳴らすのだった。

そしてシャボンデイに着いた科学技術局は直ぐ様パシフィスタを投入、億越えも含む多くの賞金首を相手に圧倒的優位に進めていた。

更にダメ押しに海軍大将”黄猿”が戦線に加わり戦闘はいよいよ決着がつくかと思われていた。

そんな中麦わらの一味は必死に海軍本部科学技術局で開発された人間兵器パシフィスタを相手に戦っていた。

何とかパシフィスタを退けるも更に追撃として二体目のパシフィスタと科学技術局戦闘班長、戦桃丸が現れ満身創痍の麦わら一味に追撃をかける。

一味はこの状況では流石に戦闘は不可能としてバラバラに逃走を図るも更に黄猿大将が戦闘に参入、一味は絶対絶命の危機を迎えていた。



「移動もさせない・・・ムダだよオ、今死ぬよオ!!」

そんな中黄猿の攻撃が海賊狩りにトドメを刺そうとした折そこに邪魔が入る。

「慌てんなよボルサリーノ、それよりもちよいとこっち手伝えや」

倒れたゾロと今まさにトドメを刺そうとしていた黄猿の足の間に差し込まれたのは金属製で子供の身長と同じくらいの馬鹿げた大きさを持つ手。

「おお？何でわっしの邪魔するかなア・・・なあ？本部中将、鉄熊のクリーク」

「なっ!!大将に加えて中将まで出て来やがった!やべえぞルフィ!!」

「と言うかあの攻撃どうやって止めやがった!?!」

更に海軍中将が出て来たとおつて一味は即座に逃げようとし、トドメを刺すのを邪魔された黄猿は文句を言うが

「いや、流石に一人でアレの相手はしたくない・・・」

その言葉に黄猿はクリークが走って来た方向を見れば

「・・・アンタの出る幕かい、”冥王”レイリー!」

後ろから迫ってくる人影を確認してそう溢す黄猿。

伝説の海賊王ゴールド・ロジャー、かつて彼が率いたロジャー海賊団の副船長を務めた男”冥王”シルバーズ・レイリー。

「若い芽を摘むのは頂けないねえ・・・、これから彼等の時代が始まるつてのに・・・」

黄猿と冥王が会話を重ねる間に麦わらの一味は船長である麦わらのルフィの判断により即座に撤退を選択、一味はバラバラに逃げ出す傍らでレイリーに対してボルサリーノ、クリークが立ち向かう。

「戦桃丸!お前もこっち手伝え!麦わら一味はパシフィスタに任せとけ!」

「わかったぜ!鉄熊のオジキイ!」

その言葉で更に戦況は混沌と、しかしいくら冥王と言え海軍本部大將、中将、そして階級無しとは言え覇気まで操る程の高い戦闘力を持つ三人相手では分が悪く徐々に押されていく。

そんな時だった、クリークの耳に電伝虫の鳴き声が響いたのは。

「何だ！こっちは戦闘中だ！手短かに頼む!!」

直ぐ様腕のパネルを開き喉に手を当てて応答すれば

『麦わらの一味を全員逃しました！更に他の億越えも続々と逃亡！直ぐに指示をお願いします!!』

そんな悲鳴のような海兵の声。

それを受けクリークは体内に移植した電伝虫の回路を繋げたまま

「ボルサリーノ！標的に逃げられた！これ以上レイリーに関わってる場合じゃねえぞ!!」

「パシフィスタは何やってるのかなア〜？勝負はお預けだねエ〜」

ボルサリーノはクリークの言葉と共に文句を言って直ぐ様戦線を離脱、戦桃丸、クリークもそれに続くが

「おっと、もうちよつとこの老いぼれに付き合ってもらおうか？」

「鉄熊のオジキっ!!」

なおもクリークを追撃するレイリーに戦桃丸は戻ろうとするも

「お前はボルサリーノを追いかけろ！こっちはこっちで何とかする!!」

そんなクリークの命令に逡巡するもその言葉に従い戦線を離脱、クリークとレイリーの一騎打ちとなる。

「さて、クリークくんだったね。

どうしてさつきから本気で戦おうとしないのかな？」

相対する二人だったがレイリーのそんな言葉にクリークは動きを止める。

「・・・何の事だ？」

レイリーの言葉に素知らぬフリをするクリークだったが

「いやいや、鉄熊と言えば島一つ灰塵に変える事ができる人間兵器だという噂は聞いてるよ？」

それなのにルフィくん達を救うような素振りは見えるし私相手にもどこか手加減が見える、何故かな？」

レイリーのその言葉に

「ああ、実際手加減はしてるさ。

彼等には世界を救ってもらわなきゃならんのでね、俺が死なない為

にもな！」

クリークは事実を認め両手を打ち付ける。

「世界を救ってもらうとは随分と大仰だね、しかも死なない為とはどう言う意味だい？」

「さあな！お喋りはここまでだ！」

それと共に両腕をレイリーに叩きつければ

「ふむ、その巨大な両手は海楼石かな？」

確かに能力者相手には有効だろう、だが私にはあまり意味は無いのではないかな？」

ロギア相手だろうと問答無用で叩き潰すその攻撃は剣の一振りですり止められる。

「どうか！スマッシュ・・・ブラスター!!!」

ならば、と両手に内蔵したボルサリーノの能力を科学的に再現したビームを圧縮、その膨大なエネルギーは一条の巨大なビームとなってレイリーに襲いかかる。

「おお、怖いねえ。黄猿君の能力も使えるのか。」

「まだまだあつ!!」

おどけるように言うレイリーにクリークは両腕の義手からマシンガンのようにビームを発射しながら背中がガパリと開かせて暴風を放出、宙に浮かび上がると両脚膝からブレードを出現させると空中からレイリーに襲いかかる。

「いやいや武装義肢に胴体までもか、随分と引き出しが多いね。

それに随分と硬いね、流石噂に名高い改造人間だ。

この分だと他にもあちこち仕込んでそうだ、これは油断できないね」

そう言いながらもクリークの攻撃を剣でいなすレイリーは1対1になった事で随分と余裕を取り戻したように見える。

すれ違い様に口から毒針を連続して吐けば見聞色によるものなのか不明だがスイスイと避けて見せ、ならばとスマッシュと呼ばれる大型戦闘義手のロケットブースターを点火させ発射したロケットパンチは剣によりワイヤーを断ち切られあらぬ方向へ。

膝からの迫撃砲は爆発を切って捨てられ、とっておきとして膝に仕込んでいたパイルバンカーは剣の切っ先で止められる。

「・・・己の身体を改造し続けて十数年、億越えも多く仕留めてきた！何故だ！何故未だに俺は勝てない!!!」

腕も切り捨てられ、体内の武装も多くを消費させられ満身創痕のクリークはそう叫ぶ。

戦闘力が必要だった、手っ取り早く強くなる必要があった。

だからこそパシフィスタ計画を自身の手で立ち上げそれを強化した上で自身の身を実験台とした。

「確かにクリーク君、君は強い。」

だが今の君は一流には勝てるかもしれないが超一流には勝てないよ、今のままではね」

トドメを刺す気は無いのか満身創痕のクリークを放置して剣を鞘に納めるレイリー。

「確かに君のその武装は強力だ、だが戦ってわかった、君には圧倒的にルフィくんなんかと違い心構えが足りない。」

それではいくら億越えを屠ろうと、いくら島を灰塵に帰そうとも到底彼には及ばないよ。」

「っ・・・!!」

「確かに君は強い、だが壁を知るといい・・・」

その言葉と共にクリークの意識はレイリーの鞞打ちによりブラックアウトさせられたのだった。

## 麦藁航路 ドンクリークさん

さて次は現段階で俺の工作により改変がなされた件についてだ。  
まずフーシヤ村。

ルフィとシャンクスのイベントに介入した事によりシャンクスが  
隻腕にならずに五体満足である事。

更に過去に渡した剣を今も腰に吊っておりグリフォンとの二刀流  
を使う事がある。

次にモーガンvsルフィのシエルズタウンに関しては介入無し、今  
はまだ別の大佐が支部長を務めているしな。

ここで仲間になるゾロに関しても介入は無し。

次がバギーvsルフィのオレンジの町、そしてクロvsルフィのシ  
ロップ村。

これらも介入無し。

そしてクリークvsルフィの海上レストランバラティエ・・・

どうしたもんかなこれは・・・

サンジには過去に一度ジェルマで会った時に嵐脚や月歩を見せた  
だけだしな。

この件に関しては何らかの対策をせねばならんだろう、これでサン  
ジが麦わらの一味に加入しなくなれば目も当てられない事態にな  
る。

次にアロンvsルフィのココヤシ村。

これに関しては先日コナミ諸島海軍派出所のベルメール本部大尉  
に連絡を取って確認したが散発的に襲撃をかけてきているらしい。

とは言え毎回ベルメールがウーツ鋼製の長銃片手に追い返してお  
り今のところは問題ないとの事。

まあアロンも敬愛するフィッツシャー・タイガーが死んでいないの  
で少しは丸くなったのだろう、卑怯な手をとらず正面からベルメール  
を倒す事に拘ってるらしい。

・・・これでナミが麦わら一味に入らなかつたらどうしよう。

さて次がスモーカーvsルフィのローグタウン。

未だスモーカーは赴任してないもののあの島はリバース・マウンテンに最も近い要所として東方方面軍の重点警戒地域となっている。

・・・ちゃんと逃げれるよな？

さて次はリヴァース・マウンテン。

クロッカスについては一度顔を合わせているものの特に交流は無い。

次のウイスキーピークについては少し気になる報告が来ている。

特に特徴が無いあの島に賞金稼ぎが増えているとの報告だった。

これはクロコダイルのバロック・ワークスの設立の前準備と見るべきだろう、そろそろ誰か潜り込ませた方がいいかもしれんな。

次にリトルガーデンだがこれに関しては精々リトルガーデンからでないという条件でドリーとブロギーの懸賞金を取り消している程度だ。

まだ生きているとあって取り消しには中々骨が折れたが最終的にとある条件を飲む事によってカタはついた。

次にドラム王国、ワポルvsルフィだがここはモネがどう動くかによって話は変わってくるだろう。

場合によってはチョッパーの麦わら一味勧誘の為に何らかの手をうつ必要があるかもしれんな。

そしてアラバスタ、クロコダイルvsルフィだがここは少し厄介かもしれない。

まずビビに関してだが幼少の折にクロコダイルに助けられた事により彼をアラバスタの戦力に加えようとしているふしがある。

ビビの護衛及び教官としてアラバスタに常駐している部下からの報告では女王だてらにそこら辺の海賊なら全く相手にならない戦闘力を持つらしい。

クロコダイル、ひいては海賊の危険性について口を酸っぱくして教えた事によりあまり海賊に対して良い印象を抱いて無いとの事だったが・・・

大丈夫かコレ？場合によっては何らかのフォローが必要かもしれ

ん。

コブラ王についてもクロコダイルの危険性については少し報告したがあまり効果は無いかもしれんな。

そしてロビンがここで加入。

ロビンに関しては過去から介入した事により原作と大きく状況が違う。

まず8歳では無く10歳の頃にオハラのアスタールが行われている。

8歳から10歳の二年間オルビアと一緒に過ごしているしその後16歳まではクリークが責任持って面倒を見た上に指導した。

外面はともかく内面は大きく違うだろう。

今は違法海賊から違法海賊に渡り歩いておりこちらに情報を流している為、彼女がいた違法海賊はもれなく壊滅しているが。

西の海にいるが彼女もそろそろグランドラインに入ってくるだろう。

そして次がエネルギー vs ルフィの空島だがこれに関しては特筆すべき事は無いだろう。

せいぜい黄金の鐘の柱をパクったくらいだが。

そしてロングリングランドのフォクシー vs ルフィだがこれに関しても特筆する事は無い。

フォクシー海賊団の旗揚げは確認したが特に関わる事も無いだろう。

・・・まあ場合によっては少し働いてもらうかもしれないがな。

ウォーターセブン及びエネルギー・ロビンのルッチ vs ルフィだが・・・

こちら辺がどうなるか未知数なんだよなあ・・・

まずトムは連れ去られて無いしフランキーもサイボーグ化していない。

エネルギー・ロビンに関してもロビンがどう動くか未知数だ。

CP9に関して最近掴んだ情報により白ひげ海賊団にて狼のゾオンが名を上げているとの報告を受けている。

間違い無く世界政府の画策でC P 9のジャブラが潜入しているのだろう、なーにがロビンの兄だ、鏡見てから言えつての。

次にモリアvsルフィのスリラーバーク。

これはモリア一味が弱体化しているのが大きいだろう。

ホグバツクが居ないので影を入れたゾンビ達・・・没人形が強化されていない。

それによりスヶスケの実の能力者であるアブサロムがどうなるかも未知数だな。

そして次はシャボンディ及び頂上戦争か。

これに関しては秘策がある、それが上手く嵌ってくればいいのだが・・・



## 新世航路 ドンクリークさん

麦わら一味は頂上戦争の後、二年間の修行を経て再びシャボンディに再集合。

そしてホーディvsルフィの魚人島へと向かった。

ホーディに関してはオトヒメ王妃暗殺の過程でフィッシャー・タイガーが秘密裏に救助した。前もって彼を送り込んだ事により暗殺は阻止したがその後の行方が杳として知れない。

恐らくほとぼりを覚ますために姿を消しているのだと思うが再び現れる可能性が無いとは言い切れない。

次にシーザーvsルフィのパンクハザード。

秘密裏に調べたが政府の下でシーザーはベガパンクと共にこの島で研究を行っているという裏付けはとれている。

衝突はあるものの決別はまだしていない、しかしそれも時間の問題だろう。

まあドフラミンゴが捕縛されている以上人造悪魔の実の元となるガスの開発はしないだろう。

パンクハザードと言えば桃の介と錦右衛門が出てくるがこの二人のバックボーンがわからないんだよねあ・・・

恐らくワノ国の関係だと思いが原作知識がそれより前までしかないので何とも言えない。

確か大名の息子と家臣だったか？

もう一人の仲間を探しているとか何とかだった筈だ。

次にドフラミンゴvsルフィのドレスローザ。

錦右衛門のもう一人の仲間、勘十郎がいた筈だ。

しかし既にドフラミンゴがインペルダウンに投獄されている以上ドレスローザは問題無いだろう。

その関係で現在の七武海は一人欠けた状態になっているが追々誰かしら用意しなければならぬ。

次がトットランド、ビッグマムvsルフィだがこちら辺は特に関

わった事柄は無いだろう。

強いて言えばアシエ博士の開発したスリムゴールドの三割近くがトットランドに流れているという情報があるくらいだ。

そして次に麦わら一味が向かったのがワノ国・・・の筈なんだが彼がここで何を行い、何を為したのかさっぱりである。

現在わかっているのは現在七武海であるゲッコー・モリアと三大海賊の一角、カイドウがワノ国にて抗争、そして勝ち残ったカイドウはワノ国のトップである将軍、黒炭オロチという男と手を組みワノ国を掌握、独裁を強いているということぐらいだ。

これらをもとに考えると桃の介は恐らく黒炭オロチより前の将軍の関係者といった所か？

多分カイドウとオロチという男をルフィがぶつ飛ばして桃の介が将軍になるとかそんな感じのストーリーだろう。

そしてそこから先は予想がつかない、エルバフに行くという可能性があるのみだな。

さて麦わら一味の旅路に関しての介入点はこのくらいか。

他の介入点としては公認海賊と呼ばれる制度の設立。

町や海岸への攻撃を行わない事を条件に探索や宝探しをメインとする海賊に青十字の旗を掲げさせた。

これによりそれまでより海軍が捕まえるべき海賊がハッキリとしそちらに手を回せるようになった。

本部と支部という形態から海軍本部、東方方面軍、西方方面軍、南方方面軍、北方方面軍という風に分割。

それにより支部を統廃合、海軍道場を復活させ戦力の均一化を図った。

他には装備により能力者相手にも戦えるようにするプラン”ミリタリスト”計画。

フィッシャー・タイガーがおこした聖地マリージョアの襲撃に関しては秘密裏に介入、ケスチアやグリーン・ダフトなどを掛け合わせた特殊病疫”グリーン・ギフト”をばら撒き実に半数以上の天竜人が死亡、残りも多くが未だ病疫により苦しんでいる。

お陰で天竜人は無事なのはたった二割程。それにより天上金と呼ばれる上納金は減額。おかげで一時期手が回らなかつた護衛を厚くする事が出来たので天上金を狙う輩もグンと減った。

フレバンスの虐殺の阻止によりローの家族を含め多くの国民はファウス島での治療により完治。

劇場版の敵であったテゾーロはステラを救う事で初期から協力関係を構築。

別の劇場版でルフイと戦ったゼットこと自身の師でもあるゼファーに関してはアスカ島の海軍道場へ向かつてもらったので敵対する事は無いだろう。

金獅子のシキに関しては脱獄したところを再度捕縛、インペルダウに投獄したので問題は無し。

子飼の戦力としてはギンは海軍本部大尉に、パールはカチカチの実の能力者となり海軍に入隊。

他には原作ではドンキホーテ・ファミリーに所属していたモネが医者としてドラムに勉強に、妹のシユガーはファウス島海軍病院にてアシエ博士の娘であるオルガや他の子供達と勉強をしている。

とりあえず暫くは何も起こらないだろう。

この先おこる大きい事件はエネルのスカイピアへの襲来、ドラムの医者のお放ぐらいか？

そうならば別に動く必要は無い。

それなら先に劇場版の敵を片付けるべきかもしれないな。

## 祭りの島 ドンクリークさん

「ん？エターナルポースが流れてきただと？」

ファウス島を出て数ヶ月、クリークの姿はグランドライン前半部にあった。

食事の後クリークがフィーネ・イゼッタ号の自室にて航海日誌を書いているとギンからそんな報告が。

「どれ、見せてみる」

と、流れ着いたというエターナルポースを受け取ってしげしげと眺めれば

「くりーく、それって確か島の方向を指し示すコンパスだったれすよね？何処の島れすか？」

と机の上で武器を手入れする手を止めて尋ねるコットン。

「ああ、オマツリ島とあるが・・・聞いた事無い島だな」

「一緒に手紙のようなものもありましたがこの文言が引つかかって・・・」

そう言ってギンが差し出した紙を受け取ればそれには地図と一緒に記された一文

「貴方がもし、海賊の中の海賊の中の海賊の中の海賊ならば、信頼する仲間を連れてこの島を訪れると良い・・・」

海賊を誘き寄せて何しようってんだ？」

海賊万博の方は十年以上前から開催してないし、例の数年に一度の馬鹿騒ぎもまだ時期じゃ無い筈だ。

となると賞金稼ぎの罫か若しくは本当に海賊向けの施設という可能性か。

リゾートスパに世界の美女との琥珀色の夜、満漢全席に旨い酒・・・海賊なら簡単に引つかかりそうな文言があるのも気になる。

「で、どうします？ポース」

「公認であれ非合法であれ海賊が集まってる可能性がある以上は見過ごせんな。」

ブリッジに伝える、進路変更、オマツリ島とやらの舵をとれ」

了解、とギンはエターナルポースを手にブリッジに、クリークは”お祭り島れすかー、きつとお祭りをいっぱいやってる島れすね！面白そうれす!!”と、これから行く島に夢を馳せるコットンの言葉をBGMに何か引っかかりを覚えながら航海日誌の続きを記すのだった。

そして数日程するとエターナルポースが指し示した島に到着、だがその島は宣伝文句とは裏腹に

「お祭りやってないれす・・・」

しょぼんとしたコットンと鬱蒼としたジャングルが生い茂るなんの変哲もない島だった。

「航海士チーム！間違い無くこの島か!？」

「はい！ギン大尉、エターナルポースは間違いなくこの島を差し示しています！」

ギンの質問に断言する航海士チーム。

まあ彼等も長くこの部隊にいるのだから今更間違えるとは思えんしな。

「ギン、何人が連れて先行してこい。」

流石にこうもジャングルが生い茂っていると外観だけじゃわからん。

何かあれば電伝虫に連絡を超越してくれ。

あまり大人数で行くと誰かいた場合警戒される恐れもあるな、この島に來ているのは先行メンバーだけという事にしておけ。」

ギンはその言葉に頷くと10名程を選抜、準備を行うとジャングルに分け入って行くのであった。

一時間ほどすれば先行させたギン達に戻ってきた。

「すいません、海軍だからと追い返されました・・・」

まあ海賊集めてるところに海軍が正面から行っても追い返されるわな

「で、どうだった。首謀者は？奥はどうなっていた？」

「おれ達を出迎えたのはオマツリ男爵と名乗る男でした。」

森の奥は多くの建物がまるで隠すかのように立ち並んでおり、住民はオマツリ男爵という男以外全て特徴的な頭部をしていました」

「特徴的な頭部？というかオマツリ男爵・・・？」

「まるで植物のようなものが頭に生えていました、因果関係は不明ですが。」

「オマツリ島にオマツリ男爵……どっかで聞いたような……あ」  
あつたな、劇場版でそんなのが。

とは言え細かい事は覚えて無い、麦わら一味が拾うんだったか届くんだったかで手紙とエターナルポースを手に入れたんだったか？

そして着いた先で様々な試練を与えられ、オマツリ男爵の策謀で不協和音を与えられ仲違いさせられていた筈だ。

えーと、山頂にあつた変なの……確かそれが男爵の力の源泉だった筈。

その力がかつて死んだ仲間達を蘇らせていたな。

そしてその代償として生贄が必要で強い海賊を集めていたんだったか。

ふーむ、となると手は二つ。

海賊のフリをして潜入し試練とやらを受けて情報を探るか、秘密裏に潜入しさつさと親玉を捕縛するか。

とりあえず情報が必要だな、大義名分があれば部隊で踏み込む事も可能な筈だ。

そう考えクリークは一旦計画を立てる為に全員でフィーネ・イゼツタ号に戻るのであつた。

## 祭り強襲　ドンクリークさん

「レッド・アローズ・・・懸賞金一千万ベリーか。

死亡と判断されて取り消されていたが生きてるんなら話は別だ、直ぐに再手配しろ」

ギンにオマツリ男爵とやらの人相を聞いて今までの手配書と照らし合わせるとしばらくして一枚の手配書が浮かびあがった。

死亡と判断され取り消されていたもののこの島で公認海賊も行方不明になっている以上罪に問う事が出来るので直ぐ様再手配。急ぎこちらに送ってもらうように指示。

部隊の出撃準備を整え手配書が届くと万全の態勢で島の奥へと踏み込んでいく。

十数分程でギンの言った通り多くの建物が立ち並び煌びやかな通りに出た。

そして出迎えの人混み、情報通りその頭にはなんらかの植物が。

そして正門から現れる象とその上に乗った数人の人間。

「海賊よーグランドラインをかける勇敢な海賊諸君！よくぞこの島に来た！そしてわしはこの島でお前らももてなすオマツリ男爵！」

まるで椰子の木のような髪型に天を向く髭、そして肩には揺れる花。

「ああ、演説中悪いが見ての通りこっちは海賊じゃなくて海軍だが？」

「・・・海軍がこのわしに何の用じゃ、まさか海賊をもてなす事が罪だと言うつもりか？」

海軍だと名乗ると途端にこちらを見下したような目つきになりそう言う男爵に対して一枚の手配書を見せる。

「レッド・アローズ海賊団船長オマツリ男爵・・・でいいのかな？」

ここら辺で頻発している公認海賊行方不明の件で話が聞きたい、少し同行してもらおうぞ？」

その言葉と共にスツと右手を上げると部隊の者達がそれぞれ銃を構える。

「ちっ、海軍如きが・・・やれ！ムチゴロウ!!」

「任せてくれ！男爵様！」

オマツリ男爵がそう溢すと直ぐに周りが変化、クリーク達の足場を残してまるで浮島の如く周りが水に満たされたのだ。

それと共に池から飛び上がる巨大な赤い魚。

まるで鎧でも纏っているかのようなその魚はまるで海王類と同じくらいの大きさを誇りその魚が

「やれ！ロザリオちゃん!!」

というムチゴロウとやらの言葉と共にこちらに襲いかかってきた。駆け出そうとするギンを制して

「お前はあっちの男を、デカブツは俺がやる」

ムチゴロウとやらをギンに任せクリークはロザリオとやらの巨大魚類に月歩で向かう。

腕を何度かグルグルと振り回して勢いをつけると

「熊殴りっ!!」

そのまま巨大魚類を殴りつけた。

哀れロザリオちゃんやんとやらは赤い鱗を撒き散らしながら水面に落下、ギンも軽くムチゴロウとやらを取り押さえ捕縛していた。

「よし、敵対したと判断する。各員敵対勢力に対処せよ。オマツリ男爵とやらはこちらで対処する」

その言葉と共に部隊が小隊単位で四方八方に散開。逃げ惑うこの島の民衆を他所にクリークはオマツリ男爵へと真っ直ぐに向かえば

「ちいっ・・・!!」

背中から弓を取り出し矢をこちらに射掛ける男爵。

「その程度!!」

ガントレットで軽く矢を弾き叩き折ると猛然と男爵の元へ

「くっ！コテツ!!」

男爵がそう声をかければ両手に鉄ゴテを持った巨漢が立ち塞がるも

「邪魔だっ!!」

「がっ・・・はっ・・・」



ガントレットに仕込んだインパクトダイアルを起動、コテツとやらは一瞬で意識を刈り取られ地に沈められた。

インパクトダイアルの反動は殆ど肘のリジエクトダイアルに吸い込まれたことでほぼゼロの為無視。そのまま追いつがるもその足は爆発と共に止められる。

「行かせないっふよー！」

まるで皿のような物を手にこちらに襲いかかってきた男がこちらにその皿らしき物を更に投げつけてくれば、次々に爆発が起き辺りは煙に包まれた。

「面倒だな・・・」

そう感じたクリークは直ぐ様ブーツに仕込んだジェットダイアルと浮遊装置を起動。上空から一気に相手に近づくと同様の加速装置を起動させ相手に空中からの回し蹴りを叩き込む。

あまりの衝撃の為かカツパのような髪型の男は地面に倒れ伏すも

「ちっ、逃したか・・・各自そのまま聞け！これより俺は掃討に入る！各自それぞれの小隊長に従い行動しろ!!」

コテツとやらとカツパみたいな男の相手をしている間に男爵は忽然と姿を消しており、クリークは足を止める。

確か山頂になんかデカイのがあってそれがこの島の、ひいては男爵の力の源だったな。

そう考えてクリークは山頂へと踏み出すのだった。

## 生死の花 ドンクリークさん

月歩で山頂へ向かうクリーク。

オマツリ男爵自身は見つかって無いもののさつさと素を絶つてしまえば早い話だ。

山頂にはまるで一本の毛のように生えた奇妙な物体。

「・・・リリー・カーネーションだったか？とてもじゃないが花には見えんな」

とりあえず上空から一発殴りつけてみる。

が、衝撃によつて柔軟にウネウネとするだけでまるでバネのように元の形状に戻るのみ。

「ふむ…斬るか」

腰の剣をスラリと抜き放つクリークはリリー・カーネーションの根本に切つ先を向けると

「極大斬撃…嵐・一閃!!」

それと共にリリー・カーネーションに一文字の斬撃が走る。

今まではこの技を放てばクリークの力に耐えきれず剣が折れるのが常だったが、流石に破壊不能という伝承がある七星剣、全力で放つたにも関わらずその刀身には欠けも歪みも見受けられない。

それを確かめ満足しつつさて戻ろうかとした所で

「貴様っ!!やっつけてくれたなっ!!」

右手に弓を携えたオマツリ男爵。

しかし先ほどとは大きく違つてる点があった。

「うわ、キツモ」

「どこまでコケにするかあっ!!」

その言葉と共に男爵の手から矢が生成されこちらへ放たれる。

思わず素が出てしまったが男爵の肩に咲いていた小さな花がまるで化け物のように成長していたからである。

なるほど、あつちが本体だったかと思いつつ飛んできた矢をスイと避ければニヤリとした顔の男爵。

「かかったな！この矢は当たるまで標的を追うぞ!!」

その言葉に矢が飛んで行った方を見ればこちらに向かってくる先程の矢。

避ければ途中で停止、矢尻をこちらに向けて再び飛んでくる。

「火力が足りないな、こんなの撃ち落としてくれと言ってるようなもんだぞ?」

そう言っつて棍を抜き放つと飛んでくる矢に振るい粉碎、それならばとばかりに数本の矢が飛んでくる。

棍で振り払おうとした所で着弾、爆発。

「なるほど、爆発する矢か。面白いもの持つてるじゃないか」

「なっ！直撃した筈だぞ!!ならばこれでどうだ!!」

その言葉と共に男爵の手に十本程の矢が生成され上空に向けて放てば真っ直ぐにクリークに目掛けて降り注ぐ。

「だから火力が足りないと言っているだろう!!」

頭上で棍を軽く回転させれば矢は軽く打ち払われてしまいいよいよ追い詰められた男爵は

「フッフハハ：火力不足か、ならばこれで死ねええええっ!!」

その言葉と共に先程までであった巨大な花：花？のリリース・カーネーションを指差す。

何事だ?と思い振り返れば切り倒したりりー・カーネーションが姿を変えて矢になっていた。

桁違いなのはその数。

百本、千本どころの騒ぎじゃなく下手すれば10万以上あるのでは無かるうか。

その切っ先がクリークに向けてズラリと並んでいた。

「色々とよくも騒ぎを起こしてくれたな、最後に名前くらいは聞いといてやろう。」

圧倒的な数を手元にもう勝った気であるのかそんな事を言う男爵に

「そうか名乗っていなかったな、海軍本部少将のクリークだ。

お前を海賊失踪事件に関与するものとして捕縛する」

と名乗っておく。

「フフフハハハ!!この数を前にまだそんな口が叩けるか!!貴様はここで死ぬのだよ!」

それと共に振り降ろされる男爵の手。

それと共に10万を優に超える矢が一斉に向かつて飛んでくる。

この数が当たれば常人ならば一溜りも無いだろう。

普通の鉄塊でも流石にこの数となれば途中で衝撃を殺しきれなくなり途中で射抜かれるだろう。

だがここにいる男は十数年の年月を肉体鍛錬に費やし異常な程の耐久性を獲得した海軍の無能力者のハイエンドモデル。

その男の鉄塊はそんな簡単に崩せるようなものではない。

百、千、万。

その全ての矢ははまるで金属に阻まれるかのように甲高い音を立てて弾かれ更に飛んでくる矢もどんと弾かれていく。

「なっ!貴様っ!!能力者か!!」

その言葉と共に慌てて弓に矢を番える男爵だったが

「生憎能力者だった覚えは無いな、それよりいいのか?肩にそんなデカイ弱点をつけたままで」

クリークが腰から大型拳銃を取り出して言ったその言葉に躊躇、踵を返そうとするが一步遅かった。

クリークが撃った弾は狙い変わらず男爵の肩から生えた不気味な化け物に着弾、爆発した。

それを驚愕の表情で見つめる男爵に刺と呼ばれる高速歩法にて接近、首筋を手刀で叩きつけると男爵は意識を失って崩れ落ちたのだった。

## 後の祭り ドンクリークさん

当たってよかった・・・

そう考えつつ大型拳銃“ベアコング・改”を腰に仕舞うクリーク。かつて海軍に入って数病程経った時に初めて相手にした能力者の敵であるベアキング。

そんな彼から貰い（パクリ）技術班によって改造されたこの大型拳銃はクリークのお気に入りとなっており常に腰の後ろに着けて持ち歩いている。

パツと見はコートに隠されているので咎められる事もないが問題は射撃の腕が人並み・・・というかそれよりも下手くそな点であるが。そんな事を考えつつ気絶したオマツリ男爵をロープで縛っているとぶるぶるぶる、と懐の電伝虫が鳴く声。

「どうした、とりあえず首謀者は捕らえたぞ？」

『あ、ボス。何かこの住民が全員植物に変わってしまったのですが何か心当たりはありますか？』

と、町で掃討にあたっていたギンからの報告だった。

恐らくリリー・カーネーションの力で”人間のようなもの”になっていたがその大元が死んだ為だろう、住民は全てただの植物へと戻ってしまったようだ。

「恐らく男爵の何らかの能力だったのだろう、生きてる人間がいないか調べてこの島を引き上げるぞ」

『了解です、建物等はそのままでもいいですか？』

「構わん、態々壊すようなものでも無いだろう、じゃあまた後でな」

そう言つて電伝虫を切るとクリークは捕縛したオマツリ男爵を小脇に抱え月歩でフィーネ・イゼツタ号へと飛び立つのであった。

なおクリーク達が立ち去った後。

あの島には男爵の策略によって殺された公認海賊の生き残りが地下に潜んでいたらしく、その彼が気づいた頃には仇は討ち果たされ全てが終わった後で茫然としていた、という事をクリーク達は知る由も

無かった。

近くの支部へオマツリ男爵を引き渡し航海は順調に進んでいた。

途中海賊に襲い掛かれたり、アラバスタに寄ったり、リトルガーデンに寄ったりしつつ数ヶ月後にはフィーネ・イゼツタ号の姿は東の海にあった。

・・・襲ってきた海賊の中で変わったのもいたな。

バイアン海賊団と名乗る一団で合唱によって相手を操るという技術は恐れ入った。

この世界って割と悪魔の実無しでも特異な技術を使う人つて多いよな。

そしてクリーク達が東の海にきた理由は見舞いである。

一番最初の公認海賊にして公認海賊筆頭・黄金のウーナンが病床に伏せたと聞いたからだ。

世界中の黄金の三分の一を支配したと噂が立つくらいに黄金を手に入れ、強きを挫き弱きを助く、善人には施しを悪党には容赦をせず。

そんな彼を慕うものは多く彼に憧れ公認海賊になりたいという若者もいるくらいだ。

なのでそれ程のネームバリューを持つ彼がここで戦線離脱となるとちよつとばかし良くない。

なので今回は病状を見て、場合によっては設備が整ったファウス島海軍病院か天才医師として名高く、現在はステラ・プロダクションのお抱え医師をやっているホグバックに診てもらおうと考えたのだ。

自身の船団の旗艦であるゴールド・トレジャー号の一室でウーナンは伏せていた。

側には長らく仲違いしていたという幼馴染みが控えておりその表情から察するにあまり良い状態とは言えないようだ。

全く動けないという事は無いもののグランドラインから帰ってきた数年前と比べると明らかに体調が悪そうだったので病院への入院か、知り合いの医者にかからないか?と尋ねたが

「いや、オレはここまでだろう。心残りだった事も果たせしもう未練はねえよ。」

「アンタにや世話になったな、公認海賊の件は礼を言わせてくれ。」  
と半ばこのまま朽ちるつもりなのかそう返すウーナン。

何か切っ掛けが無いとこの意思は変わらないと判断、移動するつもりが無いなら医者を連れてくればいい、と考えてその日はウーナンとその幼馴染み・・・ガンゾウという男に別れを告げその場を離れる。

因みに帰り際におでん屋を営んでいるガンゾウから分けて貰ったおでんはめちやくちや美味かったとだけ書いておく。

## 海の大虚 ドンクリークさん

ウーナンの見舞いを終えて数日後、クリークの姿は東の海のとある一角にあった。

目の前には海に空いた穴という不可思議な現象。

似た現象は見た事はある、司法の島とも呼ばれる不夜島、エニエス・ロビーも規模が違うとは言えそんな感じだった。

海に穴。

どういう原理で、どういう現象なのかさっぱりだがこの世界は色々な現象が多い、慣れるべきだろう。

さて、いつもであれば変な現象もあるもんだな、と思いながらもスルーする所だが今回はそうもいかない状況となった。

切っ掛けはカフウに乗って船の周りを飛んでいたコットンが持ってきた一つのボトル・メツセージ。

封の仕方が稚拙な所為か、水が入っており文字は滲んで読めなかったがそれが穴底からの風に乗って飛んできたとなると誰かしらいるのだろう。

「遭難者の可能性も高い、この海の穴は近づかなければ見えないし船ごと落ちたという可能性もある。」

「メンバーはどうします?」

「とりあえず確認せん事には話にならん、遭難者が少数なら俺一人で十分だしな。」

そう言つてギンや部下達と話し合いとりあえずはクリークが一人で先行する事になった。

とりあえず穴の事を「海の大虚(うみのうろ)」と呼ぶ事にして虚の手前にフィーネ・イゼツタ号は錨を下ろしクリークは一人先行。

念の為に海賊がいる可能性を考え無用な刺激をしないようにと考え、海軍コートなどの海軍としての身分を示す物などは置いていく。

タンクトップにコンバットズボンとブーツ。

背中に白尾棍と腰には七星剣とベアコングを装備し上空から飛び込み穴の奥底に着地すればそこはとても広い空洞となっていた。



日の光はあるものの海水のベールのせいかわ暗く海の中にある空間の湿度は高く霧に囲まれておりうず高く積み上げられたのは朽ちた難破船の山。

十重二十重と積み上がられた船は古いものから新しいものまで大量にありそのどれもが折れたり穴が開いていたり”まるで何かに襲撃されたような”有様だった。

真上を見てあの高さから落ちれば無理もないかと考え、この状況なら確かに遭難者がいてもおかしく無いなど考え

「おーい!!誰かいるかー!!」

と大声で呼ぶもその声は広い伽藍堂に響くばかりで反応は無い。

尚も呼びかけているとクリークの耳がその音を捉えた。

重々しく引き摺るようなその後直ぐに人じゃないと判断し白尾棍を抜き放ち警戒態勢に。

程なくして現れたのはとても巨大なタコであった、緑色で凶悪な面をしているのがタコと言うならであるが。

タコの化け物は敵意に満ちておりその目はまるで”まるで意思を持たぬかのように”不気味な輝きを放っていた。

軽く棍で二、三度ぶつ叩くも軟体生物のせいかダメージはあまり見られない。

「…やっぱ打撃よりも斬撃か」

いつだったかメルヴィユでシキ捕縛の後に戦ったタコを思い出しつつ七星剣を抜き放つ。

三度ほど振るえばタコの化け物は不気味な輝きを目から消して沈黙。

「…新手の海王類か？」

そう口にしつつ疑問を浮かべるクリークに

「ぬあーはははははーやるじゃねえかあんちゃん!!」

あの化け物を一人でやっちゃまうなんて大したもんじゃねえか!!」

そんな声がかかる。

声の方向を向くも人の姿は無い、そこにいたのは一匹の蝙蝠。

人の顔ほどで片耳に金色のピアスをした蝙蝠がそこにおりこちら

に向けて喋っていたのだった。

「む、蝙蝠系の能力者？ここで何を？」

「ぬあはは！違うなあっ！そんな事よりあんちゃん、あんちゃんの強さを見込んで頼みがあんだよー」

「お前がボトル・メッセージを書いた：ってわけじゃなさそうだな」

「ん、何の話だ？それよりもあんちゃん、秘宝に興味はねえか？」

「秘宝？」

「なんだ、あんちゃんは知らずにここに来たのか？」

「ここには『夢叶う秘宝』ってのがあるんだよ！興味あるんなら案内するぜえ？」

とその蝙蝠は薄ら笑いを浮かべつつクリークにそう提案するのだった。

## 海底寒村 ドンクリークさん

うっさんくせえ：

正直言えばそんな感想を抱いたクリークであるが一応は情報源なので顔には出さない。

「夢叶う秘宝ねえ。」

所でお前は何かもんだ？ゾオン系の能力者じゃないってんなら喋る蝙蝠なんて珍しい存在がそうそう居るとは思えんが」

「お：おう！アレだ！おれは宝への案内人さ！精霊みたいなもんさ！」

うっわ、自称精霊とか更に胡散臭え事この上ないな。

「まあ何でもいいがその夢叶う秘宝だったか？それって何だ？」

「ヌアハハハハ！名前の通りそれは人の願いを叶える秘宝さ！

命を落とした者も数知れず：数多の海賊がソレを求め！奪い合い！そして番人である神の獣に阻まれた！

そんな番人の一匹をアンタは倒しちまったんだよ！はっ！ザマアみろってんだ!!」

成る程、多分この喋る蝙蝠は多分その願い叶う秘宝とやらを探しにきた海賊なのだろう。

んで何らかの事情により蝙蝠になったとかそんな所か？

まあ本人が話さない以上憶測でしかないが喋り方的に多分間違いないだろう。

「まあだから云々は置いておくがこの辺りに人はいるか？」

しかしここに来た目的がボトル・メッセージが発端な以上遭難者が居る可能性があるのでそう聞くと

「んあ？人っていうか集落があるが何もねえぞ？」

との答えが返ってきた。

「こんな所に集落？海水が無いとはいえこんな海底に？」

ジメジメと湿気も多く碌に作物も育たなそうな環境に特殊な立地によって外界と遮断されたこんな場所に村？

「ヌアハハ、なんでも秘宝の守人とか何とかって話さ！」

そんな疑問に答える蝙蝠に成る程、と納得がいく。

「ふむ…先に少しその村とやらに行くぞ蝙蝠。」

宝の番人か若しくは伝承を知る者がいるというなら納得だ。

恐らくその一族的なものが先祖伝来で住んでいるのだろう。

「げ…お、おれは先に秘宝がある遺跡の入り口に行ってるぜ！あんちゃんが秘宝を探す気になったらあの山の上に来てくれ!!」

そう言っつて蝙蝠はここからうつつすらと見える山を翼で指し示した。

「あの山をわざわざ登れっつて？」

「神の山っつて言われる場所さ！守人以外は入っちゃいけないらしいけどな!!」

あー、何となくわかった。

七星剣と同じく民間伝承みたいなもんか。

七星剣には触れたら呪われるだのなんだのいう伝承もあつたしそれもあつて島民も排他的だった。

となるとその守人の村とやらも排他的な可能性がある、それがあつからこの蝙蝠も行きたくないのだろう。

そしてそういう夢叶うやら何やら伝承があるんなら何かしらのもがある筈だ、七星剣がそうだったしな。

となると危険なものであればその守人とやらと話し合つて海軍で回収するのも視野に入れておこう。

そうとなればまずは村に向かうか、そう考えて蝙蝠の方を向けばいつの間にもやら蝙蝠はいなくなつておりクリークは首を傾げつつ村があるという山の麓の方へ歩か始めるのだった。

暫く歩けば蝙蝠の言つていた通りの村が見えた。

一本の通りがあり右手側には何軒かの建物、左側には海があつた。

ん？海の底の更に海？と少し悩むもこの空間が海の一番底だとは誰も言つてなかつたな、と思ひ直す。

恐らくこの海のようなものは一段とこの陸地より深くなつておりそれで海水が溜まつているのだろう。

しかし立ち並ぶ家はどこも窓が板で塞がれ全体的に何だか寂れた村だなど思いつつ一軒の家の戸をトントンと叩く。

「…どちら様？」

少しだけ戸を開けて顔を出したのは一人の少女。

「すまない、お父さんかお母さんはいるかな？旅の者だが少し話を聞かせて貰いたいのだが…」

「どっちもない、とりあえず家に入りなよ。アイツがやってくる前にね。」

そう言つて急かす少女に疑問を覚えつつクリークは身を屈めて民家に入るのだった。

## 少年の心 ドンクリークさん

「何も無くてゴメンね、アタシはメロイ。こっちは弟のハムウよ」  
そう言つて水の入った碗をテーブルの上に置くメロイと名乗った黒髪の少女。

ハムウと言う髪を頭の上で括った少年は姉の後ろでこちらを怯えたように見ている。

…まあ顔で怖がられるのは慣れているがな。

「お父さんかお母さんはいないのか？」

「さつきも言つてたけどいないよ、…もう死んでるわ」

「すまん、言いにくい事を聞いたな。」

ところで少し話を聞きたいんだが良いか？」

「気にしてない、弟はまだ引きずってるみたいだけどね。」

所で旅人って言つてたけどどうしてこんな何も無い所に？」

「ああ、夢叶う秘宝つてのを知つて…」

「まさか!!アンタそれが目的で!?!ひよつとして旅人って言つてたけど…アンタまさか海賊じゃないでしょうね!!」

話の途中で突如激昂してテーブルを叩くメロイ。

「落ち着いてくれ、旅人と言つたのは嘘だが海賊では無い。」

大きな声では言わんがおじさんは海軍の人間だ、今回ここに来たのはこんなもんが海に漂つていてな。

状況的にここらのどこから飛ばされた物だと思うがどうだ？」

そう言つてボトル・メツセージを机の上に置けば

「あ、それぼくが書いた…ひよつとしておじさんはぼく達を助けに来てくれたの!?!」

と反応をするハムウ。

「あんた!まさかまだそんな物飛ばしてたの!もし奴に見つかったらどうするつもりなのよ!!」

そんなハムウにメロイは詰め寄るも

「すまん、この手紙は封が稚拙で中に水が入つてしまっていたので読めないが、少し事情を聞かせてもらつて良いかな？」

その言葉にポツリポツリと話し出すメロイ。

この村は神の山と呼ばれる場所を守る村だそうだ。

神の山にはなんでも願いを叶える秘宝と呼ばれる物があるらしくメロイとハムウの母親がその守人だったそうだ。

不便な立地ながらも住民はそれぞれ助け合い生きてきたがそれが崩れたのが2年前の事。

どこからかその宝の噂を海賊が聞きつけたらしい。

麓のこの村で戦闘となりメロイ達の父親を含め多くが命を落とすたとの事。

ひとしきり掠奪を行い満足したのか海賊達はいよいよ本命とばかりに神の山に向かって行ったのだと言う。

そして守人でありこの村の村長であるメロイ達の母親は一人武器を手に海賊を追いかけて山へ向かって行ったらしい。

そして海賊達は宝の封印を解き、そして番人である神の獣達が解き放たれた。

そして神の獣達は辺りを徘徊しつつ人を見れば襲いかかってくるので残された十数人の村人は息を潜めて怯えながら生きているようだ。

「今でも頭に響くんだ、アイツの…あの海賊の高笑いだ」

「2年前か、となると生存は絶望的だな」

「そんな事ねえ！母さんは生きてるに決まってる！」

まだ母親の死を受け入れていないのだろう、強くクリークの言葉を否定するハムウ。

無理もない、まだこの年ならば受け入れられなくて当然だろう。

…しかし

「なあハムウよ、今から少しキツイ事を言うぞ。

母親が生きていると言うのならどうして戻ってこない？」

「そ、それは…きつと化け物を止める為に戦ってるんだよ！」

「この2年間ずっとか？食事は？水は？人間は休みなく戦えるものじゃないぞ？」

「っ…そんな事ない！母さんは凄いな！何もできない、何もしてな

いぼくなんかと違って母さんは凄いな!!」

そう言つてドアから走つて出て行くハムウ

「ハムウ！ゴメンなさい、本当だったらアタシが言つて聞かせなきゃならなかつただけけど…」

「それよりいいのか？外にはまだ化け物がうろついているんだろ？」

その言葉にしまった、という顔をするメロイは慌てて扉から出て行きクリークもソレを追いかけるのだった。

さもすれば少年の悲鳴。

悲鳴の響いた方向、村の外れ、神の山とやらに続く道に向かえばそこにはへたり込むハムウと巨大なザリガニ…ロブスター？

「タコの次はエビか！」

そう考えつつ踏み込みハムウの眼前へ。

猛然と降り下ろしてくる巨大なハサミを腕の一振りで弾き飛ばし逆の腕で打ち上げられたハサミを殴れば頑丈そうな甲殻は大きくヒビ割れその巨体は仰反る。

そこに更に追撃とばかりに白尾棍の一振りがロブスターの頭部を捉えその巨体は地面に倒れ伏した。

「嘘…倒したの？」

口に手を当て驚愕するメロイを尻目にハムウの様子を見る。

「おい少年、大丈夫か？」

「っ…ありがとう」

「ハムウ！何考えてるの！いきなり飛び出してもコイツらがいるってのはあなたも知ってるでしょ!!」

驚愕から立ち直つたのか無謀な行動をした弟にメロイは怒鳴るもそれを手で制して聞く。

「どうしていきなり飛び出した？何故ここに？」

その言葉にハムウは沈黙を返す。

「…母親を探しに行こうとしたのか？」

「っ!!悪いかよ！母さんは死んでなんかない！おれなんかと違って母さんは凄いなだよ！

おじさんの言う事なんて信じられるか!!」



「ふむ…なら俺は今からあの山に向かうが一緒に来るか？」

そう言つて少し思案して神の山とやらを指し示せば驚愕を見せる  
姉弟

「どの道海軍の人間としては一般市民への脅威は排除せざるを得まい、一度確認する事は大事だしな」

「危険よ！あの山にはまだコイツらの仲間がいるのよ!?!ひよつとしたらあの海賊だつて…」

まあ海賊とやらについては薄々感づいている、あの偶に高笑いをする蝙蝠、奴は警戒すべきだろう。

「任せろこれでも俺は海軍少将…で通じるのか？とにかく海軍でもまあまあ強い方だ」

「連れてつてくれ！おれもあの山に連れていってくれ！」  
「でも…」

尚も言い募るメロイに

「弟くんがやる気見せたんだ姉なら少し信じてやれ。

約束するさ、君の弟は俺が無事に連れ帰るから少し待っていてくれ」  
「必ず無事に連れ帰って、…そしてお母さんの最期を看取ってきて」

メロイの方は察しているのか弟の護衛に加え自身の母の事を見てきて欲しいと頼んだのだった。

## 神の御山 ドンクリークさん

メロイに送り出されクリークはハムウに頭陀袋に入ってもらおうとそれを背負う。

あの蝙蝠が物凄く怪しい以上警戒するに越しておく事は無いだろう、ハムウにも海軍という事は伏せておくように伝える。

道中は山をぐるりと螺旋状に道が作られ所々に遺跡のような門があった。

ロビンがいれば色々分かるのだろうか、と考えながら頂上を目指し走り続ける。

暫くすれば頂上に、薄暗い洞窟とその横には金色のピアスをつけたあの胡散臭い蝙蝠。

「ヌアーハハハ！来たかあんちゃん！宝はこの奥だせ!!」

「…村の方にも巨大な甲殻類が来たがそれも宝の番人とやらか?」

「そうだ！おれも感じてたがやっぱりおれが見込んだ通りだな！

だがこつから先はそう簡単に行くかな?」

「何が出ようと押し通る、少し気になる件もあるしな」

そう言ってポーチから小型のランタンを取り出すと火を点ける。

入り口に入り足元には石板、何かしら複雑な紋様と文字のようなものが書いてあるがその手の勉強はしていないのでさっぱり読めないが。

「ふーむ、古代文字とは違うが読めんな。

ロビンでも連れて来てれば話は別だったんだが…」

そう考えつつ頼もしい娘のような存在に思いを馳せていると何か硬いものが連続で叩きつけられるような音が耳に響く。

音がした方を向けばそこには火花を立てつつ迫ってくる物体。

「今度はウニか!!」

素早く周囲を見ればあの蝙蝠は姿を消しており背中ハムウにあまり負担をかけるわけにもいかないのでとにかく広い場所に移動するべきだろうと考えそのまま奥へ。

「ちっ、迷路になってんのか!!」

あちこちに分かれ道があり直感的に進み続ければやがて行き止まりに、迷路になつてゐるのならそこまで壁は薄くないだろう、と叩き壊そうとしたところで思い留まる。

遺跡を壊すのは良くない、そう考え見聞色の覇気を使い集中すれば追いかけてくるウニの位置を把握、そしてゴールと思しき迷路の中央にある広間も見つけた。

そこに向かいハムウを懐に抱えウニの真横を通り抜ける。

そしてクリークは隙間は狭かったがウニの針を何本か折りながら通り抜けると見つけた広間の方に走り抜けたのだった。

「ヌアーハハハ！ヌアーハハハハハ！あんちゃん！後一匹だけだぜ！」

不気味な赤い光が満ちた広間には蝙蝠の高笑い。

中央には高くなつた祭壇に頂上には噴水がありその中にある何かしらが不気味な光を放つていた。

「おい蝙蝠、アレが願いを叶える秘宝とやらか？」

「その通りだあんちゃん！おおつと最後の一匹を倒さねえと願いは叶えられねえぜ？」

蝙蝠のその言葉に本当の所はどうなんだろうな、と考えつつハムウが入った袋を壁際に、離れざまに小声で

「あの蝙蝠が怪しい動きをするか何か異常があれば大声で知らせてくれ」

「…わかった、あとあの高笑いは間違いなくあの海賊だ。」

2年前に村を襲つた奴で間違いない」

その声にやはり、と思いつつ七星剣を抜き放ちつつ段々と近づいてくる音を待ち構える。

そして入り口を塞ぐように現れたのは先ほどの巨大なウニ。

不気味なひかりを目に宿したそのウニはそのままこちらに猛然と転がってくる。

「さてウニ、あまり振るってなかったから少し試させてもらうぞー！」

そのまま七星剣を叩きつけければ殆ど抵抗がなくトゲはスパッと斬れた。

なるほど少々硬かろうが問題無いようだな、と考えそのまま振るう。

握る場所を変えたり両手持ちにしたりして色々試しつつ斬ればある程度の所でウニは完全に沈黙、その不気味な目の光も消えていた。

そして

「おじさん!!後ろ!!」

そんなハムウの声に振り返ればそこには銃口を8つ持った八連装の大型拳銃を構えた頭部の無い骸骨。

「ヌアーハハハハハハ!!助かったぜあんちゃん!!お陰でおれはこうして身体を取り戻した!!」

ま、頭はねえがわざわざおれの為にご苦労だったな!」

そして肩に止まった蝙蝠が勝ち誇ったように高笑いをする。

「なるほど、やはりお前は過去にこの宝を奪いに来た海賊だったか。

大方何かしらの呪いで身体を奪われたってところか?」

「ヌアハハハハ!その通りだ!そしてそのガキ!お前確か村の奴だったな!」

お前の母親がどうしたか知ってるか?ノコノコと一人でやって来たところをこのおれが撃ってやったのさ!

守人だか何だか知らねえが一人でおれ達に勝てると思ってたのか!?!」

「おれ達と言うにはお前一人みたいだがな」

「そうだ!アイツら直前になっておれを裏切りやがったんだ!!」

ああ...今でも思い出すぜえ?背中から複数の剣で刺される痛みって奴をよお!!」

その言葉と共に苛立たしげに元仲間のものであろう、足元の頭骨を踏み砕く蝙蝠と骸骨。

「ふむ、まあそれは置いておくが忠告しておこう。

それを撃ったが最後、お前にチャンスは無いぞ?」

今はまだハムウに危害が及ぶ可能性があるので無闇に刺激したくない。

あのタイプは一度撃つたら再装填せねばならないタイプだろう。

「ヌアハハハ！強がつてんなよあんちゃん！おれはキャプテン・ジヨーク!!おれはこの秘宝で更なる力を手に入れやがてこの海を制する男だ！死際に覚えておけ!!」

「じゃあなあんちゃん！そのガキも直ぐに同じところに送ってやるよ!!」

その言葉と共に骸骨の指が引き金を引き八発の炸薬弾はクリークへ真っ直ぐと飛ぶのだった。

## 動白骨体 ドンクリークさん

「はあっ!？」

キャプテン・ジョークの間抜けな声が響く。

無理もないだろう、確実に命を奪うべく放たれた8発は狙い違わずクリークへと向かい、そして着弾、爆発するも金属音を残して何の痛痒も与えられなかったからである。

間抜けな声を出して動きが止まったキャプテン・ジョークにクリークは“剃”と呼ばれる高速歩法にて接近、肩に乗っていた蝙蝠をガシリと掴むと動く白骨死体の膝に対して一撃を加え立たないようにする。

掴まれたキャプテン・ジョークはジタバタしながら

「てめえっ！悪魔の実の能力者だったか!!」

と足掻くもその拘束は解ける素振りは無かった。

そんな彼を尻目にクリークはハムウに

「おい少年、こいつが昔お前達の村を襲った海賊らしいがどうする」と尋ねれば

「…ねえおじさん、その男は死んでるの？それとも生きてるの？」

という質問。

ぶつちやけ判断に困るところである。

頭蓋骨は無く白骨死体、しかも連動しているのか蝙蝠もセットと来た。

動く骸骨というだけならブルツクの例もあるがあくまであれはヨミヨミの実という悪魔の実の能力なので今回の件には当てはまらない。

「…生きていても死んでいても言えんな、殺して欲しいのなら今すぐ粉にしてやるが？」

と膝から下が無くジタバタとする白骨死体を指差す。

「ねえ、おじさんは海軍の人なんですよ？海軍は悪い海賊を捕まえるのが仕事なんだよね？」

「なっ！てめえ海軍の人間だったのか!!」

「ああ、自己紹介が遅れたな、海軍本部少将のクリークだ。以降よろしく。」

そして海軍の仕事は確かに悪い海賊を捕まえるのが仕事だな」

「なあ海賊、お前は村を襲って…そして母さんを殺したって言ってたな」

黙りをするキャプテン・ジョークをキュツと手に力を込めれば

「ああ、そうだよ。確かにおれは村を襲った。そしてお前の母親も殺した。」

とハムウを見つめるキャプテン・ジョーク。

「仲間に背中から刺されたってのもさつき言ってたよな」

そしてそれを後退りしそうになりながらもしつかり見つめ返し質問を続けるハムウ。

「ああ、そうさ。この宝を見つけて、そして仲間に裏切られ呪いでこんな姿にされたのさ」

「…ねえおじさん、その海賊を何処か見えない所に連れて行って欲しいんだ。」

「それだけでいいのか？」

「本当の事言うと今にもおかあさんを殺した報いを受けさせてやりたいんだ。」

でもその海賊は生きてるか死んでるかもわからないし、何よりも姉さんに心配かけるから…」

確かに母親が亡くなったとわかった以上ハムウにとってメロイは唯一の肉親だしな…

「わかった、この男の身柄はこちらで預かせてもらおう。」

所で少年、あの赤い光が例の夢叶う秘宝とか言うやつか？」

「…わかんない、そんな物があるって聞いただけだし」

「おい蝙蝠…お前は何か知ってるか？」

「いや、知らねえよ！おれが知ってるのはそんな名前の宝があるって聞いた情報だけさ！おれを刺した後部下達が近づいたらあの三匹の獣が天井から降ってきやがったんだよ！」

その言葉に天井を見上げれば天井は高くそしてそこに三つの洞穴

が口を開けていた。

成る程、あそこにはいたのかと思いつつとりあえず見てみないと話にならないのでハムウには危ないので下がってるように言つて白骨死体を頭陀袋に詰め込んで口を縛り、蝙蝠の方は縄でグルグル巻きにして白尾棍の先にぶら下げておく。

「おい蝙蝠、もし何か不審な動きをしてみろ。そんな時はお前でドリブルしてやるからな。」

と脅しも付け加え祭壇を登っていく。

そして一番高くなつた中央には噴水、そして水のボールに包まれた赤い光の玉。

「願いを叶えるねえ？何とも胡散臭いが…」

そう言つて回りをぐるりと見るも種も仕掛けも無く中央には赤い光の玉が浮いているだけ。

「願いが叶うってんならさっさとウーナンの病気でも治して欲しいとこだが…」

クリークがそう言つた直後であつた、赤い光は一層輝きを強くすると…突然消えた。

「はっ?」

思わず間抜けな声が出て瞬きを繰り返すも状況は変わらず。

先程まで不気味な光を放つていた赤い光は忽然と消え失せていた。

「おじさん!何かあつたの!」

というハムウの声に

「すまん!何かわからんが突然秘宝が消え失せたんだ!そつちは何も起こつてないか!」

と聞くも特に何も変な事は起こつて無いとの返事。

一つの可能性を思いつきながらも胸に仕舞つつクリークはハムウと共に広間を軽く探索、やがて何も見つけられ無かつたのであまり遅くなくてメロイに心配かけるのも良くなかろうと、遺跡を出て山を降りるのだった。



## 骨の海賊 ドンクリークさん

キャプテン・ジョークの身柄はこちらで預かる事となりハムウをメロイの元へ。

メロイは帰ってきたハムウをひしと抱きしめると怪我は無いかとあちこちを確認して事情を聞く。

そこでメロイに対して今回の件を説明、事の顛末を聞かせた。

メロイもハムウの意見に同意しキャプテン・ジョークはやはり遠くへ行つてもらう事になった。

そして警備としてこの場所を海軍の巡回範囲に入れる事を約束しクリークはキャプテン・ジョークを連行し引き上げるのだった。

停泊したフィーネ・イゼツタ号に戻るとギンが何やら古めかしい宝箱を持って来たので何事かと聞けば中を開けて見せる。

中には一つの頭蓋骨。

バンダナが巻いてあり顎には無精髭、後頭部には銃弾でも当たったのか穴が一つ。

「おお！おれの頭じゃねえか！なああんちゃん！悪い事しないからそれ返してくれ！頼む！」

と、にわかには喚き出したのは白尾棍にぶら下げた蝙蝠：キャプテン・ジョークの本体である。

因みに武器は回収し、コートを来た骸骨の体部分は頭陀袋に突っ込んで嚴重に封をしているので問題無いだろう。

その言葉に少し考える。

「…とりあえずお前の処遇だがあの姉弟の願いでグランドラインに連れて行く。」

本当だつたらインペルダウンにでも送り込みたいとこだが…」

その言葉に蝙蝠が慌てたように暴れるがそれを無視して考える。

軽く漁ったがキャプテン・ジョークは昔は懸賞金がかかっていたものの既に死亡と判断されており手配は取り消されていた。

一応インペルダウンも政府の施設なので手続きは必要となるが…

そう考えてハタと思いつく。

「おい蝙蝠、この頭蓋骨を返して欲しいか？」

そう言いつつ片手で頭蓋骨を放り上げキャッチしつつ聞けば

「…ああ！後生だから返してくれ！頼む！」

と暴れるのを止める蝙蝠。

「よし、だったらお前には海軍に協力してもらおう。勿論異存は無いな？」

「ぐ…、一応おれは海賊なんだが…」

「ぶっちゃけて言えばお前の処遇は悩んでるんだよ、インペルダウンにぶち込むかそのままそこら辺に放置するか。

若しくは全身砕いて海に撒いてもいいがお前の身体を動かしてる不思議パワーで復活する可能性も無いとは言い切れん。

それならばいっそこちらの管理下に置いておいた方がいいと判断した。

流星に色々と働いて貰うがそれで問題無いならこの頭蓋骨は返してやる」

「くそっ！わかったよ！で、おれに何をしろってんだ!!」

「なに、仮初とは言え不死の体。

しかも悪魔の実の能力でも無いとなると色々と有用そうだと思うてな？」

そう考えつつクリークはこの男の処遇を決める。

悪魔の実によらない不思議な力。

先程確認したところ外した膝はいつの間にか繋がっており多分試していないが全身バラバラにしても繋がるだろう。

後で海水に漬けてみたり海楼石の手錠を嵌めてみたりしてみよう。生身で無いのなら多少の無茶は効くだろう、色々やれそうだと

クリークは考えるのだった。

一方その頃海軍本部、海軍会議室にて上級将官達が話し合いを行っていた。

「既に彼も34歳ですし功績も十分、本人はまだ大丈夫と言ってましたがそろそろ頃合いでは？」

「ああ、各海域にての海賊の捕縛にミリタリスト計画においての功績、

フアウス島海軍病院の設立も彼の尽力があつたと聞いています。

他にも功績は数知れず、そんな彼が未だに少将のままでは格好もつきません。」

「しかし昇進させるとしてどうする？どこかの支部でも任せるか？」  
「准将の頃に数年ほどナバロンを管理してましたがどうしましょうか……」

「ぼどる理論やきやたびら理論を提唱したのも彼ですしミリタリスト計画との兼ね合いもありますし技術部に置きますか？」

「いや、彼の発案により昔より海軍の手が空いたとは言えあの戦力を遊ばせて置くのは惜しい、是非ともあのまま独立遊撃隊を率いて欲しいところだが……」

「そもそも彼を別の部署に配属させるとして遊撃隊の長になり得る人間がいるか？」

「いや、それならば遊撃隊を縮小する方向でどうだろうか？」

彼の提唱する”四海制覇計画”の当初は各海の方面軍の補助という名目で遊撃隊は動いていたがそれも大分落ち着いている。

それならば遊撃隊の規模を縮小しグランドライン前半部、後半部を担当して貰う事にしてはどうだろうか？」

「成る程、確かに懸念だった北の海も含めて東西南北の海は各少将の尽力により落ち着いている。

今であれば多少の事なら各方面軍で対処できるだろう。」

「よし、では彼の昇進は確定としてそれ以降についてはいつでも本部に呼び戻せるように遊撃隊は縮小、若しくは解体後の再編成を行い遊撃範囲をグランドラインに限定する。

浮いた人員はかなりのベテラン揃いだし各方面軍司令に補佐として赴いてもらおう。

それと共にミリタリスト計画を含めた彼が提唱した各理論についても実証試験を行なってもらおう。

何か意見のある者は？……いないようだな、ではこの方向でセンゴク元帥には報告する。

それから彼の子供達と呼ばれる海兵達だが……」

そうして彼等の話し合いは続くのだった。

## 造船の島 ドンクリークさん

念の為に、とウーナンの船であるゴールド・トレジャー号に赴けば、そこには病床に伏せていた筈のウーナンが元気に甲板で素振りを行っていた。

本人に聞けば突然身体に気力が満ち溢れ船医にも診て貰ったが病巣が徐々に縮小、さもすれば健康体になるだろうと診断されたそうだ。

船長の突然の復活に船団は湧き上がり健康体となったウーナンは鈍った身体を元に戻すべくこうして鍛錬を行なっているらしい。

…まあ治ったんなら何よりだがまさかあの秘宝本物か？

となると割とマズい代物だな、早急に何らかの手を打つべきだろう。

ともあれ公認海賊筆頭であるウーナンが復活したとなれば問題も無くなったであろう。

東の海に來た理由であるウーナンの件が解決した以上特に東の海にいる理由は無くなった。

そうしてクリーク達を乗せたフィーネ・イゼッタ号は船底にキャプテン・ジョークの骨を括り付けて海中実験を行いつつグランドラインへと戻るのだった。

東の海から出て数週間ほど、その報告が來たのはクリークが喚く蝙蝠をつつきながら八連装榴弾拳銃をバラしていた時の事だった。

「ボス！船大工のトム達を避難させていたゾッセーン島が!!」

ギンが持ってきた報告はトムとフランキーを避難させていた造船の島、ゾッセーン島が襲撃されたという報告だった。

直ちにクリークは襲撃に関しての情報を集めれば出てきたのは一人の海賊の名前。

將軍”ガスパーデ”

元海軍本部准将にして自身の乗艦ごと海軍から離反、海賊に身を落とすとした男だ。

確か離反したのは数年前だったな、元海軍だったからか巧みにこち

らの間隙を突き手が薄い所に襲撃を行なっていたので追撃を行なっている部隊は手を焼いていた模様であったが。

今回ガスパーデの海賊団はゾツセーン島を襲撃、掠奪を行った後に島に大きな被害を出した上でかの島でドッグに入れて総力を上げて修理していた超大型パドルシップ”サラマンダー号”を奪って逃走したとの事。

直ぐ様フイーネ・イゼツタ号は進路を変更しゾツセーン島へ向かう。

島は酷い有様だった。

火付けでも行われたのか未だケムリが燻る建物を部隊を分けて尻目に即座に住民の救助、治療にあたらせクリークはトム達が世話になっっている造船所に向かえばそこにはトムの姿があった。

「おお！確かクリーク殿じゃったか！フランキーが襲撃をかけたきた海賊を自分で作ったバトルフランキーに乗って追いかけて行ったんじゃない!!」

「なっ!!相手は一億近い賞金首だぞ?!無謀すぎる!!」

「わしが止める暇も無く出て行ってしまったわい…、頼む海兵さん！あのバカを連れ戻してくれんか!？」

色々世話になっとなる身でこれ以上頼むんは気がひけるがどうか頼む！」

と額を地面に擦り付けるトムをとりあえず落ち着かせると詳しい話を聞く。

ガスパーデ達の襲撃はいきなりだったそうだ。

造船を行なっているドッグ街に火を放ち、混乱している所に襲撃をかけてきたとの事。

ある程度掠奪を行うとドッグで修理が行われていた大型の蒸気式パドルシップを奪い逃走したそうだ。

そして逃走するガスパーデ達を追いかけてトム達が止める暇も無くフランキーが自身の造っていたバトルフランキー37号にて一人で追いかけて行ったとの事。

流星に無茶だと言えないだろう。

片や元海軍准将にして悪魔の実の能力者、片や武装船に乗って喧嘩慣れしているとは言え一般人。

これは流石に不味い、と直ぐ様出航準備を整え後を追った。

尚、出港時にオレも連れて行ってくれ！とある少年がフィーネ・イゼツタ号に乗り込んで来たが何とか落ち着かせて直ぐ様フランキーの後を追う。

だがガスパーデ達が奪ったサラマンダー号は残念ながら発見出来ず後を追ったフランキーはバトルフランキー37号に倒れた状態で海を漂っている所を発見された。

直ぐ様船に乗せてゾツセーン島へとんぼ帰り、道中で軍医に診てもらったがフランキーはあちこちに大きな怪我を負っており、しかもそれを自身で治療したと思しき痕があるそうだ。

しかも薬や包帯などが無かったせいか治療というより自身の体を改造する事で生きながらえたのだろうと言うのが軍医の見立てだった。

…ここで原作通りになるとはな。

密かに原作の通りになった事に脅威を覚えつつフランキーが無事…無事？だった事に安堵してトムに報告を終える。

それを聞いてトムは大きく溜息を吐くと

「…つたく、心配かけさせやおつて。」

とポツリと溢した。

「とりあえずまだ目は覚まして無いが命に別状は無いそうだ、襲撃をかけてきた一味に関しては海軍で追うので任せておけ。」

村の復興についても近くの支部から人を寄越すように指示を出しておく、だが此処が襲撃を受けた以上その内別の島に移動してもらおうと思うが…」

クリークが説明を終え今後について告げれば

「重ね重ねすまんの、しかし奴等は何故この島を？まさか政府がわしの身柄に目をつけたのか？」

との質問。

「…いや、偶々だろう。」

奴は元海軍の人間だけあって支部の巡回が最も遠くにいる時期を見計らって豊かそうな島に襲撃をかけたのだと判断した。

しかし政府が裏から手を回して襲撃を唆したと言う可能性も捨てきれないがな」

「…お前さんの言う通り暫く身を隠した方がいいかもしれんおう、フランキーにも話しておくべきじゃろうなあ」

そうしてトムとクリークはフランキーが起きるのを待つて話し合いを続けるのだった。



## 裏切の将 ドンクリークさん

フィーネ・イゼツタ号の自室、そこで劇場版で出てきてたな…とふとクリークは思い出す。

数年単位で行われている馬鹿騒ぎ…海賊達の行なっているレースに麦わら一味が参戦、そのボスとして出てきたのが裏切りの将、”将軍”ガスパーデだった筈だ。

そう言えば家族の仇を討つべく錆色の髪の青年が出てきてたな…名前は何だったろう？

錆色の髪と言えば…とガスパーデを追って行ったフランキーを追いかけてようとしていた時にフィーネ・イゼツタ号に乗り込んで来た少年を思い出す。

家族の仇を討たせてくれ！と懇願していたしひよつとしたら彼がその青年か、と思いつつ近隣の支部からの情報を纏める。

ガスパーデは狡猾だ

再編成した支部の情報を得ており、それらによって巡回艦隊の動きを把握。

それらの間隙を巧みに突いて明らかに間に合わないタイミングで手薄な場所に襲撃を繰り返すという事を行なっていた。

しかも常時は上手く隠れているのか優先度、危険度どちらも高レベルにも関わらず足取りが掴めて無いようだ。

そんなことを考えている時であった、ドアがノックされたのは。

此処の一番偉い人に会わせてくれ、と昼間に船に乗り込んで来た少年がまた来たそうだ。

ちゃんと話し合いをした方が良さだろうと判断しクリークは立ち上がると甲板に向かう。

「頼む！おれに仇を討たせてくれ！」

そこには頭を地に擦り付ける錆色の髪の少年。

「落ち着け少年、まずは事情を聞かせてくれないか？」

クリークがしゃがんで少年の肩に手を置くと少年は事情を話してくれた。

少年は妹と共に超大型蒸気船“サラマンダー号”の見物に来ていたそう。

そこに襲撃をかけてきたのがガスパーデ率いる海賊団だったそう。

妹とは騒乱の中ではぐれそして巨大な鉤爪を持った男に背中を斬りつけられ、その時に妹とはぐれ、そしてその傷か、もしくは疲れによるものか気を失い倒れてしまったそう。

気づいた時には全て終わった後だった。生まれ育った街は破壊され、船大工の父は殺され、家にいた母や友人達も殺されたそう。

一瞬にして故郷を焼かれ、家族を失った仇を自分が討ちたい。

その為にも自分を連れて行って欲しいのだと。

「少年、身寄りはないのか？」

「誰もない、おれはもう一人だ。」

父さんも母さんも：アデルも殺された、おれには家族の仇を討つ事しか残って無いんだ！頼む!!」

「そうか：そう言えば名前を聞いてなかったな」

「：シュライヤ、シュライヤ・バスクードです。」

この島では普通と違って名前と姓が逆なのでシュライヤが名前です、どうかお願いします！おれも連れて行って下さい!!」

シュライヤ：やつぱ錆色の髪といい劇場版に出てきた青年だろう。

劇場版で出て来た時は“海賊処刑人”の異名をとる賞金稼ぎであり、戦闘時は身の回りにある様々な物を武器として使っていた。

ガスパーデの副官と戦っていた時はスコップを使っていたのが印象に残っている。

しかし：彼の妹は確か生き残っていたな。

蒸気船の技術者を行なっていた爺さんに助けられて一緒に船に乗っていた筈だ。

となると連れて行った方が良さだろう。

しかし：

「少年：いやシュライヤだったか、君はまだ幼い。」

戦う力も無いだろう？そんな君を危険な場所に連れて行くわけに

は…」

「っ…どうか！どうかお願いします!!出来る事は何でもやります!」

「仕方無い、身寄りも無いとあっては生活にも困るだろう。」

…仇を討ちたいとなれば少し…いや、かなり厳しくなるがそれでもいいのなら付いてこい」

「ありがとうございます!」

「ギン…この少年に色々教えてやれ、大佐!これからについて話を纏めるぞ!」

こうして錆色の髪の少年、シュライヤが家族の仇を討つべく配下へ加わるのだった。

それからガスパーデの足取りがようやくやく掴めたのは数ヶ月後の事だった。

「平時は商船に偽装していたのか…盲点だったな。」

ガスパーデ達は普段は自身達の船を商船などに偽装しており、その為に海軍の監視網をすり抜けられていたようだった。

今回はサラマンダー号の特徴を元に探し出す事が出来た。

発見時には出来るだけ疑われぬようにその場ではスルーして後から潜伏場所を発見、海軍にて包囲網を敷く手筈になっている。

そして間の悪い事にあれから日々鍛錬を行っていたシュライヤがそのことを聞きつけ再び直談判をしてきたのだ。

流石に蔑ろにするのもな…と考えギンを呼び出して鍛錬の成果を聞けば筋は良いとの事。

そこで詳しい事を話し合いギンには賞金稼ぎとしてガスパーデの一味に侵入させ、海軍が包囲網を敷く為の時間稼ぎを行なって貰うことにした。

準備を整えば船内で何かしらの騒ぎをおこしてもらい、そこに海軍が襲撃をかける予定だ。

上手く潜入して相手の不意を突ければ良し、無理でも上手く時間を稼げれば問題無い。

仇討ちに取り憑かれたシュライヤには本人の強い希望でギンと共

に潜入してもらおう事になった。

大丈夫かな本当に、暴走してもギンがついているなら大丈夫だと思うが…

流石に杞憂だと判断し計画を進める。決行は明後日。

ギンとシュライヤには先行してもらい、念のためシグマとカフウ、コットンにも着いて行ってもらおう。

これでギンとシュライヤは万が一にも大丈夫だろ。クリークはそう考えを纏めるのだった。

## 潜入銀色 ドンクリークさん

グランドラインのとある島にその船は隠されるように停泊していた。

黄金のドラゴンを船首に持つその巨大な外輪式の蒸気船は数ヶ月前に造船の街を襲撃し手に入れた新しい船である。

サラマンダー号の甲板にてガスパーデはその事に満足しつつ気分良く酒を飲んでいるとそれに水を差すように怒号や戦闘音が耳に入ってきた。

そしてボロボロになりながら自身の元まで駆けつけたのは一人の男。

「おいテメエ…さつきから随分と騒がしいじゃねえか…」

折角の気分にも水を刺されたガスパーデが何事かの報告を告げにきた男に文句を言えば

「す、すいませんガスパーデ様！襲撃者です！賞金稼ぎかと思われます！」

と、申し訳なきさそうに今回の事態の報告を行うのだった。

「ああ？賞金稼ぎだあ？そんなもんテメエらだけで何とでもなるだろう

が…」

「そ、それがまだガキみたいなんですけどえらく手強くて！」

あまり顔は覚えて無いが海軍マークに剣でクロスを描いたマークを目の下に入れていているという事は自身の部下なのだろう。

尚も喚く部下を見てガスパーデは大きく溜息を吐くと尋ねる。

「何でこのオレ様が！お前如きの為に動かなきゃならねえんだよ…なあ？」

その言葉と共にガスパーデの腕がドロリと溶ける。

その液体状になった腕で報告に来た男の首をガシリと掴むとそのまま持ち上げる。

「がつ！ガスパーデ様！やめてくだ…」

「へえ、それが例の能力か？」

そのままガスパーデが叩きつけようとしたところでまだ若い声が響く。

そこにいたのは一人の少年…年の頃は声の感じから10代後半だろうか？両手にはハンドルのついた棒状の武器、割とマイナーな武器でトンファーとか言ったか、とガスパーデは海軍で習った事を思い出す。

灰色の上下に深くフードを被っておりその人相は何い知れない。

そしてその傍には背中に荷物を背負ったまだ10代前半であろう少年。

「…てめえが賞金稼ぎか？ホントにまだガキじゃねえか。

で？オレの首でも獲りに来たって言うのか？」

ぎゃあぎゃああと喚くので名の知れた賞金稼ぎでも乗り込んできかと思えば何て事は無い、自身の部下が弱かっただけのようだ。

「アンタがガスパーデか、オレは賞金稼ぎをやってるシルバって言うんだがアンタの首を獲りに来たと言ったらどうする？」

シルバと名乗った少年は右手のトンファーをビシリとガスパーデに突きつければ何を気に入ったのか

「グハハハハ！威勢がいいじゃあねえか!!随分と暴れてくれたようだがどうだ？このオレ様の下で働く気はねえか？」

大声で笑いをあげるとそう提案した。

「はっ、何を言ってやがる。おれは賞金稼ぎだぜ？」

「腕と度胸がありやそれでいいんだよ、このオレ様だって元は海兵だ、強いやつは嫌いじゃねえからな。

そこのニードルスだつてそうだぜ？オレ様の命を狙ってやがる」  
そう言つて傍に控えていた青白い肌の男に顎をしゃくるガスパー

デ

「へえ、随分と寛大な事だな。いいぜ、アンタの話に乗つてやる。

流星にその能力相手に戦うのは難しそうだな。

だが別に諦めたわけじゃねえぜ？狙える時にはその首狙わせてもらうぞ？」

と、シルバは挑発しそれに対してガスパーデは楽しそうにニヤリと

笑うのだった。

「で、テメエが連れてるそのガキは何だ？」

「ああ、コイツはオレの弟子みたいなもんさ。小間使いや荷物持ちをさせたりしてる。」

くれぐれも危害は加えないで欲しいもんだな？」

「フン、テメエの身ぐらいテメエで守らせろや。話は以上だ、ニードルス！そいつらを案内してやれ！」

「いかテメエら！このオレ様の部下に弱卒は必要ねえ！無様を晒すようなら今すぐ死んでもらうぞ！いいなっ!!」

そう言つてシルバにやられたであろう部下を怒鳴りつけるとガスパーデは再び酒を飲み始め、そうしてシユライヤを連れ深くフードを被つたギンは無事にガスパーデの一味に潜入したのだった。

その日の夜、シユライヤが寝てる事を確認してシルバことギンは船内のあちこちを見て周る。

そしてボイラー室にてゾツセーン島から働かされている男を発見。ビエラと名乗つたその初老の男はこの船でボイラーの点検をしていたところ一味に襲撃を受けそのまま腕を買われて生かされているようだ。

ギンは正体を打ち明け段取りを確認、クリークが艦隊を率いて包囲する予定の明朝にボイラーを停止させる事を約束し与えられた自室に戻る。

そして次の日の朝、ギンは武装を整え、クリークからもしもの時に与えられた切り札をシユライヤに渡す。

そして二人が甲板に向かえばそこには甲板に腰かけて酒を飲むガスパーデ、そして横にはニードルス。

かなりの側近のようだし離れてくれないか…と考えつつ

「なあガスパーデ、流石に何の手合わせも無しにっつのはツマラねえしここは一つ手合わせしてくれないか？」

と軽い調子で問えば

「グハハハハ、いい度胸じゃねえか…だがオレ様に相手して欲しいのならせめてニードルスに勝つてから言つて見せな」

その言葉に側に控えていたニードルスが進み出る。

全身に刺青を入れた青白い肌の男：“鉄爪”のニードルス、懸賞金額4200万ベリー

と、潜入する際にクリークから与えられた情報を思い出す。

そしてギンは両手に仕込みトンファーを構え深く身を沈めるとニードルスに向かって一気に踏み込むのだった。



## 飴の悪魔 ドンクリークさん

戦闘は熾烈を極めた。

恵まれた体格から繰り出されるニードルスの鉄爪は高い威力を持ちギンは俊敏さを持ってそれを避けていく。

ガスパーデの「あんまり船を壊してんじやねえぞー！」と言葉を耳に入れつつギンは自身のトンファアでニードルスの鉤爪を打け止めると仕込み鉤を起動、爪を絡め取ると全力を込めて捻る。

あまり上質な素材では無かったのかギンの力が上回ったのかはわからないが、ニードルスの異名ともなっていた鉤爪はあっけなく折れ大きく体勢を崩し、そこに回転して威力がついた鋼鉄のレギンスによるギンの蹴りを首裏に打ち込まれるとニードルスはそのまま甲板に叩きつけられ気を失うのだった。

「グハハハハ、まさかニードルスをやっちまうとはなあ…

いいぜ、約束通りオレ様が相手してやろうじやねえか」

そう言いながらガスパーデが立ち上がった時の事だった。

「うおおおおー！家族の！友達の仇だあっ!!」

離れたところで戦闘を見ていたシュライヤがいきなりギンから切り札として預かっていた短銃を片手に走り出すと

「…下らねえなあ、力のねえ奴は引っ込んでろ!!」

そのまま変質した腕で殴られで小柄な体を大きく吹き飛ばされるとその身を壁に打ち付けられ意識を失った。

「ガスパーデ！約束が違うぞー！」

思わずギンが怒鳴るも

「うるせえよ、最初からこのガキの目つきが気になってたが案の定じやねえか。

このガキの目つきは憎い者を見る目だったからなあ。

大方不意をつけてオレ様を殺す気だったのかも知れんが残念だったなあ、賞金稼ぎいっ!!

テメエらっ!!こいつを囲んで逃げられないようにしやがれっ!!」

ガスパーデのその指示と共に船員が甲板に次々に上がってくとガスパーデとギンを中心に取り囲む。

流石にこの人数に合わせて悪魔の实の能力者が相手となると厄介だと判断したギンは腰から信号拳銃を抜き放ち掲げるとそのまま発射、赤色の信号弾が打ち上げられる。

続け様に

「シグマー・コットンさん！カフウ！周りは任せた!!」

と言い放ち猛然とガスパーデに襲いかかるのだった。

そしてギンの呼びかけに答え海面にて様子を伺っていたシグマがその長い腕を使って一気に飛び上がり甲板へ。

そしてマストに止まっていたカフウとその背中に騎乗していたコットンは上空に身を羽ばたかせるとカフウが半鳥形態にその身を変化させその嘴を銃身に変形させると銃弾を船員達に向かって次々に吐き出したのだった。

シグマとカフウによる襲撃を受けた船員達は直ちに反撃しようとするも手の届かない上空からの銃撃と、その巨大な体格に見合った怪力と、それに見合わぬ俊敏さを持って鋭い爪を持った長い両腕を振り回し次々に倒されていく。

「グハハハハ!!伏兵を潜ませてたか！やるじゃねえか!!油断しないその賢さは気に入ったぜ！」

…だが少々オイタが過ぎてるんじゃないやねえか？」

その言葉と共にギンの横を巨大な刃が掠めた。

その刃はガスパーデの腕から巨大な緑色の物体へと変形させてから伸びていた。

アメアメの实、その能力を前にギンは思わず躊躇うも剃を使って踏み込むとそのガラ空きの胴体に向かって振るうも

「グハハハハハハ、無駄だっ！」

「ちっ！やっぱり効かねえか」

自身のボスであるクリークから受けていたレクチャーの内容を思いつく。

パラミシアでありながらロギアに匹敵する防御力を持ち、その体に

斬撃や打撃などの物理攻撃は無効。

体を飴に変化させ自在にその体を変形、パラミアにしては規格外の能力である。

「ちっ、話には聞いていたがアメアメの実とは厄介だな！」

ギンは厄介だな、と感じクリークから渡された小袋をガスパーデに向かつて投げつけるも、何かを察知したのかガスパーデはそれを手近に倒れていた自身の部下を放り投げて受け止めさせると

「グハハ！弱点は探ってるようだなあっ!!だがその程度でこのオレ様を殺せると思ってるのかっ!!」

と宙に舞った白い粉でその小袋の正体を悟る。

アメアメの実の体を水飴に変化させる能力でその弱点は小麦粉である。

それによって物理攻撃が当たるようになるのだが流石に元海軍准将、そうそう簡単に事は運ばないようだ。

ならばいつも通り戦うだけだ、とギンは大きく踏み込みガスパーデに走り寄る。

例えばロギアに近いパラミアだろうがその首をはねられれば直ぐには動けないだろうと判断し顔に向かって大きく飛び上がるとトンファアの仕込み刃を起動、ブレードトンファアと化したその武器で斬首しようとするも

「グハハハハ、オレが食べた悪魔の実はアメアメの実。

身体を水飴のように変化させる能力でな、打撃も斬撃もこのオレ様には効かねえっ!!

…そして水飴は物体を絡めとるんだぜえ？」

「くっ！ロギアに匹敵するとは本当に厄介だな！」

ギンのブレードトンファアは太い首の途中で止まり、そして引き抜こうとするも悪魔の実による特性か動く気配は無い。

慌てて武器を手放し離れようとするが

「さて、ショータイムだ…」

ガスパーデの唸る拳がギンの胴体を捉える、が拳に感じた違和感にガスパーデは動きを止めると

「てめえ…鋼鉄のような身体にさつきも見せた歩法。

まさか六式使い…と言う事は海軍の人間か？」

もうバレたか、とギンは舌打ちするもまあ元海軍の、しかも将校なら六式ぐらい知っていてもおかしく無いだろうと判断し

「さあな、何の事だかさっぱりだ。」

と誤魔化せば

「ちいつ、とうとう海軍がここに目をつけやがったか！

テメエら！いつまでグダグダやってやがる！さつきとそいつ等を仕留めろ！直ぐにこの島を離れるぞ!!」

と大声で部下達に怒鳴りつけるが

「で、ですがこいつ等手強くてがっ…」

周りの部下達はカフウの銃撃によって次々と撃たれ、シグマを相手とした船員達は鎧袖一触とばかりにシグマの鉄塊をかけられた巨大な腕で薙ぎ払われていく。

「ちっ…どいつもこいつも使えねえ奴ばかりだなっ！ならばシルバとやら！テメエを捕らえて人質にさせてもらおうぞ!!」

その言葉と共にガスパーデは首に刺さったブレードトンファアを投げ捨てギンに襲いかかるのだった。

## 少年奮起 ドンクリークさん

クリークの副官であるギンは海軍本部大尉である。

本部大尉となればエリートであり、高い実力を誇る。

佐官クラスには及ばないものの多くの高額賞金首を相手にする尉官ではあるが戦闘力に関してはギンは一般の本部大尉を大きく超える。

これも一重に海軍入隊当初に元海軍大将であり現在は教導部門のトップを務めるゼファーに指導を受け、そしてクリークの副官としてカモメの水兵団に所属、その実力に磨きをかけてきたおかげである。

戦闘力と言えば佐官クラスの実力があるが、本人の希望によりこれ以上の昇進を断っているのが現状である。

但し佐官クラスの戦闘力を持つとは言い相手は一億近くの賞金首であり、ロギアに匹敵する防御力を持つ悪魔の実能力者。

そして元々は本部准将という地位にいただけあつて武装硬化出来るほどの技量では無いが覇気も使えるという、そのまま海軍にいれば順当に昇進していたであろう実力者。

ギンが得意とする得物にトンファーを使い、生来の俊敏さを発揮して月歩や剃を主に使った高速機動戦闘と物理が無効となるガスパーデは相性が悪かった。

とはいえ戦いは一進一退、ギンはガスパーデに有効な攻撃を与えず、ガスパーデは徒手空拳、偶に悪魔の実の能力を使いギンを捕らえようとするがその素早さから捕らえられずにいた。

流石にこのままでは埒があかないと考えたギンは直接攻撃による相手の捕縛から、搦手を使つての時間稼ぎをするべく懐の内側から複数の物体を取り出しピンを抜くとガスパーデに投げつける。

「オレには効かないと言っているだろう！」

タダの投擲と判断したのかガスパーデは自身を飴化して受け流そうとしたが

「効くとは思ってねえよ!!」

ギンがそう言うと同時にガスパーデへと着弾。複数の物体は爆発を起こし飛んできた破片をギンは鉄塊にて受けるが何の策も無く受けたガスパーデは飴状になっていたとは言えその身を大きく吹き飛ばされる。

ギンが投げつけた物はミリタリストア計画の一環で海兵に配備され始めた手投げ式の榴弾である。

たかが爆発とは言えたただの物理攻撃と考え油断していたのか、身体を液化化させていたガスパーデはその身を大きく飛び散らせる事となった。

更に追撃とばかりにギンはガントレットの仕込み武装を動かすと飛び散らせた身体を集めて元に戻りかけていたガスパーデに対して麻痺ガスを吹き付ける。

因みに悪魔の実の能力者に対して一部は除くが状態異常は有効である。

インペルダウンに所属するドクドクの実の能力者である毒人間のマゼランが良い例である。

直接投与では無いので効果は一時的な物であるがガスパーデは一時的にその動きを止めた。

「ぐっ…随分と変わった武装を色々と使いやがる！いけすかねえあの野郎を彷彿とさせるなあっ!!」

まだ少年であるギンにいいようにされたのが苛ついたのか麻痺の効果も切れると同時にガスパーデはギンに対して掴みかかろうとするが

「ガアスパアアアデエツ!!」

最初に吹き飛ばされたシュライヤが小型の拳銃を構え大きく怒鳴る。

戦闘に水をさされたのが引き金になったのか激昂していたガスパーデは冷静になると

「おいおい、それはガキのおもちやじゃねえぞ?」

と馬鹿にしたように吐き捨てる。

「うるせえ!!お前が街を襲って!父さんも母さんも!アデルも殺した!!」

確かにオレはガキかもしれないねえがテメエに一矢報いる事が出来るなら命はいらねえ!!」

そう啖呵をきるシュライヤに

「テメエは馬鹿かよ...このオレに銃弾は効かねえって言うてんだろーうが!!」

そうしてガスパーデは腕を鋭利に変化させ銃を構えたシュライヤに襲いかかる。しかしシュライヤは一步も動かずにガスパーデを見据えて発砲、その銃弾は真っ直ぐに向かい、そしてガスパーデはそのまま膝をついた。

「がっ...はっ...テメエ何しやがった!!」

クリークがギンに、そしてギンがシュライヤに預けた切り札は海楼石製の弾丸である。

その高価さと加工の難しき、扱いの難しきから量産される事は無いが万が一の切り札としてクリークがあらゆる伝手を使つて取り寄せてもらったものだ。

普通であれば避けられて終わりだが能力者は油断しやすい。

特に不定形の能力を持つ者には油断を突きやすい。不意を突かれたガスパーデはその能力故か痛みに慣れていないのだろう、膝をつき脇腹を抑えると大きく肩を上下させる。

更にそこに好機と見て

「シュライヤ!下がってろ!!」

とギンは催涙ガス弾を投げつける、これには堪らずガスパーデは大きく咳き込みつつ涙で見えないのかその場でガムシヤラに暴れだすが更にそこに

「ガ、ガスパーデ様っ!!海軍です!海軍が周りを囲んでます!それに

...赤カモメの船がいます!!」

「くそっ!赤カモメまで出張ってきやがったか!何としても人質にとつてやる!」

と、涙が溢れる両眼を拭つて自身の能力を使ってギンを捕らえよう

とするが

「おっと、大事な部下を人質に取られるわけにはいかんのでな」

その言葉と共に大柄な男が空から甲板に降ってきてギンに伸ばそうとしたガスパーデの腕を棍で抑えつけた。

カモメの水兵団を率いる海軍本部少将、鈍熊のクリークの参戦である。



## 飴の確執 ドンクリークさん

「クツソ！やっぱりテメエか！鈍熊あつ!!」

赤い海軍マークを掲げた船と聞いて察していたのだろう、ガスパーデは自身の手を押さえた棍を振り払い大きく距離をとる。

「ギン！シユライヤー！下がっている！…しかし俺を知っている…のも当然か、なあガスパーデ元准将？」

「ちつ、何が賞金稼ぎだ。鉄塊を使いやがったから海軍の手の者かと思っただが。」

「こんな見え見えな罠に嵌るとはこのオレもヤキが回ったもんだ…」  
そう言つて自身の腕を鋭利に尖らせるガスパーデ。

「なあガスパーデ元准将、なんで海軍を裏切つて海賊になった？」

ガスパーデの自身に対する態度が少し気になったのかクリークが  
そう質問すれば

「はっ！テメエのせいだよ！オレはこのままいけば少将に、更に言えば大将にまでなつて権力を手に入れた筈なんだよ！」

クリークの質問に怒鳴り返すガスパーデ

「…大将と言うのは言い過ぎかも知れんが、悪魔の実の能力者にして覇気も使えるんなら出世はしてただろうな。」

実際間違ひでは無い、戦闘力だけでいえばかなりの有望株だったからだ。

「ソレをテメエが！何が将官試験だ！何が四海制覇だ！お陰でオレは准将でずつと燻ったまま！それなら今まで以上の権力を手に入れるんなら海賊になるしかねえだろうが!!」

堰を切つたように言うガスパーデにクリークは確かにどつちも推進というか提案したのは俺だが…と考えるも

「まあ俺のせいと言うよりアンタのやり方が不味いんだよ。」

軽く調べたがアンタのやり方は過激過ぎるんだよ、海賊と見れば大体は殲滅、まるでどつかの大将みたいにな。

ついでに言えば公認海賊に対しても偶に騒ぎを起こしていただろ

うが、他にもその横暴さから一般市民との衝突もあったと聞いている、それなのに准将の地位にいたのはその強さがあつたからだぞ？

その性格を治してきちんとルールを守っていれば少なくとも昇進は間違い無かつたと思うが……」

ときちんとした理由を話すか

「アホくせえ、何で海賊なんぞにオレが気い向けなきやいけねえんだ。

海賊なんざクズさ！未知の冒険？隠された秘宝？頼れる仲間？バツカじゃねえのか、海賊なんざ手段に過ぎねえ！権力を手に入れる為のなあつ!!」

自身の考えを宣言するガスパーデにこれは言つてもダメだろうなと判断し

「……アンタの主張もわからないでは無いが海軍の人間ならルールくらいは守つてくれと言うのが本音だが。

まあ何は共あれここで捕縛させて貰うぞ？お前が起こした数々の襲撃事件、流石に厳しい処分は免れないだろうな。」

スツと白尾棍を構える。

「……上等だ！……これでも元本部准将、たかだか一つ上の少将だろうが！やつてやるよ!!」

その声と共に鋭く尖らせた五指を銃弾をくらつた傷口に差し込み海楼石製の銃弾を周囲の肉ごと掴み取ると投げ捨て

「へえ、海賊になったと言え根性はあるみたいじゃねえか。

だが手加減はしねえぞ？アンタはどうにも少しやり過ぎだからな。」

その言葉と共に大きく棍を振り下ろすクリークに対し今まで体の一部を鋭利にした腕の形を変えるだけだったガスパーデは背中から飴でできた腕を生やして四腕で殴りかかる。

棍を飴の両腕で受け止めて殴りかかるガスパーデであつたが

「ちいっ！やはり鉄塊は面倒だな！だが攻略の仕方はあるんだよ！」

その言葉と共に顔面に殴りかかるうとした腕を飴に変化させクリークの頭部を覆う。

流石に不味いと思つたのかギンが駆け寄ろうとしたがクリークは

それを手で制すと何事も無かったかのよう白尾棍を構え直す。

鉄塊により物理が余り効果は無いと判断し、呼吸を奪おうとしたのだろうがその策は不発に終わる。

数分経つても何の影響も見られない事にガスパーデは効果は無いと判断し頭部を包んでいた飴を解除

「ん？もういいのか？」

「テメエ…まさか呼吸が必要無いとは言わねえだろうな？」

「まさか、これでも一応人間だぞ？ただ五分程の無呼吸が可能と言うだけだ。」

まあ目の付け所は悪く無かったな、大規模な形態変化を使えるようになった点も良かったが、さて…そろそろ決着をつけるとするか。」

「くっ…まだだ！まだ終わってたまるかあっ!!」

背中から生やしていた腕を更に鋭く、両腕も鋭利に変化させ身体中に棘を生やすとクリークに体当たりを仕掛けるも

「その心意気は買うが…まだ足りないな！剛崩・拳砲っ!!」

それと共に大きく踏み込んだクリークの拳はガスパーデの腹部を捕らえると棘を粉碎、覇気を纏ったその拳は見事にガスパーデを艦橋に吹き飛ばしいくつかの壁を粉碎しつつ衝突、やがて沈黙したのだった。

捕縛は部下に任せてクリークはギン達から詳しい報告を聞く。

そこでシュライヤは自身の妹であるアデルが生きてる事を知り、慌てて船底へと向かいギンはそれを追う。

そして泣きながら抱き合う兄妹を見てクリークは安堵、本部に対して今回の顛末について報告を入れるのだった。

そしてそこでクリークは自身の中将への昇進が内定しているとの情報を知るのであった。

## 海軍中将 ドンクリークさん

「…お断りしても?」

『全く、いつもそれだな。だが今回はいい加減に昇進してもらおうぞ、お前が今までに積んだ功績は少将になってからであつてもかなり多い。年数もそれなりだしいい加減昇進させろとせつつかれているからな。』

ぶつちやけ中将になつても面倒も増えて責任も増えると思わないし中将になるメリットを感じないんだがなあ

「中将になるとしても拘束期間はどれくらいで?」

『数ヶ月は本部にて教育を受けてもらう、そして遊撃隊は一度解体して再編予定だ。』

「え、うちの部隊解散ですか?」

『再編だと言つておるだろう、お前の部隊は各方面軍のフォローという形で動いてもらつていたが、各方面軍も順当に動いているようだからな。』

そこで遊撃隊は規模を縮小、シャーロット・アンジェ号及びフィネ・イゼツタ号でグランドライン前半部と後半部を巡回してもらう方向で考えている。

若しくはどこかの支部を受け持つてもらおうという話もあるがどうする?』

「支部ですか…准将の時にG8支部…ナバロン要塞で支部長を勤めましたが堅つ苦しくて性に合わなかつたんですよ…」

『ああ、確か初期メンバーのジョンサン准将が赴任しているところか。あの場所は海軍の支部ではかなり大規模だから、必然的にやる事も多くなる。』

しかし堅苦しいというならお前にはやはり海を回つての方がいいかもしれないな、とは言え中将になるのなら必然仕事は増えるぞ?』

「…やっぱり書類仕事とかですか?」

『ああ、一応中将に昇進という事で“海軍特殊兵装開発研究部”の部

長として就任してもらおうぞ?』

「海軍特殊兵装開発研究部：初耳ですが新設の部署ですか?」

『数ヶ月前の話になるが科学部と技術部を統合、海軍本部科学技術部として再編、その一環でミリタリストタ計画の中核となっていたメンバーと科学技術部から選抜したのが海軍特殊兵装開発研究部：長いな”特装研”でいいか。』

「因みに特装研の仕事はミリタリストタ計画をそのままという感じですか?」

『うむ、それに加えてお前の提唱している”すくりゆう理論”や”きやたぴら理論”、などの実証等も行ってもらおう予定だ。』

「わかりました、では数週間後にはそちらに到着すると思いますので詳しい話はその時に。」

先に報告したガスパーデに関しては近隣の支部に任せますので対応お願いします」

『わかった、後はこちらで引き継ごう。では戻ってきたら一度わたしのところに顔を出してくれ』

「了解しました、それでは失礼します」

センゴク元帥との通信を終えるとクリークは今度は近隣の支部に連絡をとりゾツセーン島に護送船を派遣してもらおう。

ガスパーデに関してはエニエスロビーにて裁判を受けた後インペルダウンに収監される事になるであろう。

部下に関しては殆どが懸賞金はかかってないので軽い尋問の後問題が無ければ開放、問題があるようなら何処かしらの監獄に収監となる。

にしても中将か：話が上がるたびに断ってきたが流石にそういう訳には行かなくなったか。

まあ無理もない、少将に昇進してから既に7年近く。

自分で言うのもなんだが少将になってからも色々功績は重ねてきたつもりだ。

バスターコールへの参加を筆頭に中将となると色々拘束されそうだが上手く引き続きの哨戒任務になって良かった、まあ仕事は増える

みたいだが。

そう言えばシュライヤはどうしたもんか、ガスパーデは捕縛され妹のアデルが見つかった以上海軍にいる意味は無いだろうしなあ。

身寄りが無いというのも問題だし、ゾツセーン島はガスパーデの襲撃で造船街がかなりの打撃を受けている。

結局トムはそれに心を痛めたのか、自身が危険だとしても残って島を再建すると言い出したし、そうなれば駐留部隊の名目で護衛の部隊を置く必要も出てくるだろう。

：さっぱりしたことだし船舶部に問い合わせて大規模な海軍の造船施設でも作るか？

ウォーターセブンは未来では世界政府御用達となっていたしゾツセーン島もゆくゆくは海軍御用達とするのはありかも知れんな、とりあえず戻ったら街の代表やトム、センゴク元帥達と相談してみよう。

シュライヤに関してはトムに預ける形に：いや、一応本人の希望を聞いてみるか。

そう考えを纏めるとクリークは徐に立ち上がり妹というであろうシュライヤの元へと向かうのだった。

シュライヤはアデル、ビエラと共に何やらサラマンダー号のボイラー室にて作業を行なっていた。

「シュライヤ、少しいいか？」

と声をかけると

「隊長！今回は色々ありがとうございます！」

と頭を深く下げるシュライヤ。

アデルはこちらの事が怖いのか兄の後ろに隠れてこちらを伺っている。

：子供に怖がられるのは慣れたから別にいいがな。

「おお！アンタが今回ガスパーデを捕まえたっていう海兵さんか！助けてくれて感謝するわい！」

ビエラもこちらに対して頭を深く下げる、まあここで助け出さなければずつとこの船に囚われてたかもしれないんだしな。

「海軍として当然の事をしたまでだ、所でシュライヤに聞きたい事が

あるんだが少しいいか？」

「どうかしましたか？」

「ガスパーデは捕縛、無事に妹とも再会できたわけだが今後はどうするつもりだ？」

「…図々しいお願いかもしれませんがおれを強くしてください！」

銃の撃ち方も教えてくれたギンさんや隊長のお陰でガスパーデには一矢報いる事は出来ました、こうして妹にも再会できました。

でもまたこんな事が無いとは言い切れませんが、だからせめて妹を守るだけの強さを下さい!!」

そう言つて頭を下げるシュライヤと

「お兄ちゃん…」

と心配そうに言うアデル。

「海軍に入るつもりは？」

「う…出来れば父さんみたいに立派な船大工になりたいなって…」

船大工か…それに加えて強さが必要となると…

「よしシュライヤ、お前には一時的に海軍に入ってもらおう。

ここから少し離れた場所にアスカ島と呼ばれる海軍の鍛錬施設があるからそこで数年程戦闘技術を鍛えてもらいその後除隊、そして信頼できる船大工がいるからそこで船大工の修行をしてもらうというのはどうだ？」

「…少し妹と相談してみます」

「まあお前の将来に関する事だ、しっかり妹と話し合つてじっくり考えてくれ。」

爺さん、アンタはどうする？」

「わしやこの船の窯番さ、この船と共にいるわい。」

「そうか、とりあえずこの船はゾッセン島に戻っている、それまでに決めて俺に声をかけてくれ」

クリークはそう告げると海賊の捕縛を確認するべく甲板に上がるのであった。

## 鈍熊中将 ドンクリーク

シユライヤはアデルと話し合ったのだろう、こちらの提案を聞き入れたので彼をアスカ島のゼファアの元へ。

アデルもそんな兄に着いていきたい、と言ったので海軍道場の施設管理の手伝いをしてもらうよう手を回す事になった。

ゾッセーン島は被害が大きかった為センゴク元帥、船舶部部長のシップネー中将、トム、ゾッセーン島の市長であるゾッセーン・ボットー氏と話し合いを持ち海軍でテコ入れ、新たに造船施設を建造する事に決定、海軍本部病院以来の大規模な事業となる見通しだ。

そしてこれはかなりの事業になると目をつけたのだろう、テゾーロが一枚噛ませろと連絡を取ってきたので快く承諾、現在は人集めに奔走しているらしい。

上手く行った事ばかりでは無かった。

ガスパーデを護送していた護送船とそれに付き添っていた海軍艦二隻が沈められるといった事件が発生した。

ニードルスは死体が見つかったもののガスパーデの生死は不明、そして犯人は目撃情報などを元に詳しく調べれば三大海賊が一角、”ビッグマム”ことシャーロット・リンリンの一味の仕業であった。

勿論ビッグマム本人が出張って来たわけでは無いが、何でわざわざ新世界の海賊がこちら側にちよっかいをかけてきたのかイマイチ不明であり一時期は緊張状態が続いていた。

最もそれ以降は表立って動く事は無かったので次第に忘れ去られていったが。

フランキーは自身の身体を改造後トムの元で何年か修行をした後にウオーター・セブンへと帰還、そして同時にその頃アイスバーグが7大造船会社を統合、ガレーラ・カンパニーを設立した。

それに合わせて旧ゾッセーン島も新しく前へ進む為に島の名前を”ネオヴェネツィアへと変更、ボットー氏を社長として造船会社”アクアリア”を設立した。



トムや修行から戻ってきたシユライヤ、他にも噂を聞きつけてやってきた優秀な船大工達が日夜鑄を削っている。

他にもクリーク提唱のきやたびら理論やすくりゆう理論の実証のためあちこちから人が集められその中には夢は世界征服だと自身で言つて憚らないラチエツトなども含まれていた。

最もクリーク自身は噂を聞きつけて直接スカウトに言つただけであり劇場版の内容などさっぱり覚えていない有様であったが。

他の大きな事件としてはドラム島の医師追放は原作通りに実施された。

直ぐ様クリークは手を回して大半の医者や海軍本部病院にて雇い、そしてそれと同時に”ドラムには雪女が住んでいる”という都市伝説も流れ出した、多分ドラムに住んでいるモネの事であろうが何をやったのか少し気になる所ではある。

他にはロビンが西の海からグランドラインへ、そしてクロコダイルは彼女に接触、秘密犯罪組織”バロック・ワークス”が設立されたとの情報を掴んでいる。

直ぐ様足がつかないように秘密裏に部下を手配、各々それぞれの海で賞金稼ぎとして働いてもらう。

中でもパールは名の知れた賞金稼ぎとしてグランドラインで名を上げ”鉄壁”の異名を呼ばれる程となりバロック・ワークスからの接触もあつたようだ。

勿論父親のポールには海軍の潜入捜査の一環であると伝え他言無用をお願いしている。

他にもシャンクスが大海賊と目されるようになり、かつての三大海賊から四大海賊へと移行、白ひげ、ビッグマム、カイドウ、シャンクスの四人で”四皇”と称されるようになるなどなった。

気になるのは白ひげの所で大きく名を挙げている狼のゾオン、ジャブラという名前からして十中八九あのCP9に所属しているジャブラだろう、恐らく世界政府の指示で四皇の一角に潜入したのだと思われる。

他にも気がかりはある。

ドレスローザで元ドンキホーテファミリーの面々が要職についているのだ。

流石に見逃せないが懸賞金は掛かってないので一般市民という扱いです。なので事情聴取としてクリークが直々に面談を行うも誰も彼も”心を入れ替えて一生懸命働いている、今までの事についてはきちんと反省している”と泣きながら言うばかり。

流石に現在は犯罪行為を行っていないので何の罪も無いのに連行というわけにはいかず要注意リストには入れておく。

リク王もリク王でドフラミンゴの脅威を知らない為か元海賊であろうとも心を入れ替えて働くのならば問題は無い、というスタンスだったので王国軍護衛隊長にはそれとなく一味の事やドフラミンゴの脅威を伝えておく。

コットンも数年程クリーク達と一緒に世界を見て周り人間社会の裏表、良い所も悪い所もすっかり学ばせた。

お陰で一時期はかなり落ち込んでいたが踏ん切りがついたのかトントッタ族は自身がいなきやダメだと奮起、色んな知識を猛勉強しドレスローザ、グリーンビツト島へと帰還、トントッタ族の中で辣腕を奮っているらしい。

そしてクリーク自身は中將へと昇進、赤い海軍マークを掲げた海軍独立遊撃隊を率いて傍らで特装研の仕事もこなし世間でもかなり名の知れた海兵となった。

そしてそんな彼だからこそ世界政府は四皇に脅威を覚え、七武海の残る一角について早急に人員を埋めるべく指示、海軍上層部にて話し合いが持たれ数名の海賊の名が挙げられた。

そしてその中で候補を絞りクリーク自ら勧誘すべく詳しい者を連れてシャボンディ諸島へと向かうのであった。

## 炎の海賊 ドンクリーク

”ポルトガス・D・エース”

”火拳”の異名を持ち、希少なロギア系である”メラメラの実”の能力者。

スピード海賊団の船長であり、そして現在の懸賞金額”一億五千万ベリー”とかなりの高額賞金首である。

原作では長らく空席であった白ひげ海賊団二番隊隊長に就任しておりその懸賞金額は”五億五千万ベリー”

現在の主な罪状は”海賊旗の掲揚”、”海軍への被害”、”食い逃げ”などである、他にも襲われた、と称する商人や一般民衆などの報告もあるがこれはかなり怪しい報告であるが。

まあ海軍への被害という点は置いておくが、それだけであれば特に懸賞金額は億越えとまではいかなかっただろう。

しかし炎のロギアという事で世界政府は危険視、よって懸賞金はかなりの高額になっていた。

そしてエースは原作の主人公である”モンキー・D・ルフィ”の義兄弟にしてかの大海賊”ゴールド・ロジャー”の實の息子でもある。

本来であれば海賊王の血縁という事で処刑は免れなかったであろうが彼の母親は本来十月十日で産む所をその精神力だけで実に20月の間胎内にエースを隠し続けたのだ。

最もこの事実を知っているのはごく少数、海軍元帥であるセンゴクや海軍中将でありかの海賊王とも交流があった”モンキー・D・ガープ”などである。

最初に原作で出てきたのはアラバスタ編、そこで麦わらの一味の逃亡を助けたり、バロック・ワークスの下部組織を纏めて倒したりという活躍を見せた。

単に弟に会いに来たというのものもあるが、彼が新世界の白ひげ海賊団を離れて前半部に来ていたのは白ひげの船にて仲間殺しを行った部下の黒ひげこと”マーシャル・D・ティーチ”を追っていたからであ

る。

白ひげ本人からは止められたもののケジメはつけるべきだと強く主張しティーチを探し回っていたのだった。

そしてそれより後でバナロ島にてエースとティーチの一騎打ちが行われエースは敗北、そして原作でも重要なファクターとなっていた”頂上戦争編”へと続いたのであった。

頂上戦争編では海軍も、そして白ひげという抑止力を無くした為に海賊が暴れ、一般の民衆も大きな打撃を受けた。

ならば将来の災いを断つ為には根本的にやる必要があるだろう、その為の今回の策である。

エースの七武海勧誘については口を濁していたができればこの勧誘に乗って欲しいと思っているのだろう、なんの後ろ盾も無い海賊であるより地位があつた方が有用だからだろう。

ま、二人の詳しい心境はわからないがここで勧誘が成功すれば大きく原作を変える事が出来るので是非成功させたい所だ。

最もこの世界では誰かさんのホラのせいでティーチが可哀想な事になっている為エースの勧誘が失敗したとて原作通りになるとは限らないが。

「クリーク中将、アイツ本当に勧誘に乗りますかね？」

「何だ、反対か？イスカ少佐」

「いや、別に反対ってわけじゃないですよ？アイツがグランドラインに入ってからずっと追いかけてますが悪人とは思えないですし…」

そう言うのは腰に帯剣して赤い海軍マークの入ったコートを羽織った赤髪の女性。

”釘打ち”の異名を持ち、海軍本部少佐の肩書を持つイスカと言う名を持つその女性は数年前にクリークが火災から助けた少女だ。

イスカはアスカ島にて鍛錬を完遂した後に海軍本部独立遊撃隊に所属、主にグランドライン前半部にて巡回を行っていたが希少な口ギア系の海賊として要注意するべきと進言、エースの専任としてずっと彼を追いかけ回していたのだった。

そんな時にこのエースに対する七武海勧誘、これ以上の人材は無い

だろうと判断しイスカにそれを伝えれば彼女は大喜びで是非とも勧誘すべき！とこちらを急かしてきた。

「ならば勧誘するだけでもありだろう、奴がこの話を受けるにしろ受けないうしろな」

とは言え公認海賊への申請もしていないし、そうそう人の言う事を聞くタマでも無いから簡単にはいかないだろうと考え予めシャボンデイ諸島に遊撃隊で包囲網を敷いてある。

幸いにもエースの行方は騒ぎを辿ればだいたい行き着く、現在コーティング作業を行なっている”ピース・オブ・スパデイル号”も秘密裏に探り把握してある。

そしてエース以外の”マスクド・デユース”や”スカル”、”ミハール”といったスピード海賊団のメインメンバーの所在も常に見張りをつけて把握している。

いざとなればこの話を受けるまで完全包囲でシャボンデイから出さないようにしてやる…

## 火拳勧誘　ドンクリーク

「げ…、またお前かよ…」

エースは自分の元に来た一人の海兵を見てそう溢した。

イスカ、釘打ちの異名を持ち海軍コートを羽織った彼女は、グラウンドラインに入ってしばらくした頃からこちらを追いかけ回して来るようになった女性だ。

そんな彼女は腕を組んで得意げな顔をしており、横にはいつも連れていた部下達では無く一人の男。

「喜べ火拳！いい話を持って来てやったぞ！」

イスカが目を輝かせてそう言うが横にいたデユースがエースに「気を付けるエース、あの横の男将官だぞ」

イスカの横にいた男は巨漢と呼ぶに相応しい大男、薄紫の髪を短く刈り上げその目つきは鋭く海兵というよりまるで海賊のような顔立ち、そしてその背中には一本の棍、腰には長剣を挿していた。

両手にはゴツイ鈍色の腕鎧と胴鎧、その上に羽織ったコートには赤い海軍マーク、間違いなく強者であろう。

「ああ、この人はわたしの恩人でクリーク中将だ」

「げっ!?!クリークと言えば赤カモメの親玉じゃねえか!!」

「ん?それはそうだろう、わたしの上司だからな。」

そう言っただけに誇らしげに自身の赤い海軍マークが入ったコートを見せるイスカに

「そういえばお前もカモメの水兵団だったな…」

「さて火拳のエース、俺は海軍本部中将のクリークだ。」

今回はお前に話がある、まずはこれを読んで欲しい」

クリークと名乗る男はそう言っただけから一通の手紙を取り出しこちらに渡して来た。

「なっ！エースを七武海に推薦だと!?!」

手紙に書いてあったのは火拳のエースを七武海に推薦するという内容であった。

王下七武海と言えばグランドラインにおいて知らぬ者のいない一大勢力、海賊でありながらその存在を政府に認められた強者たちである。

似たようなもので海軍が”公認海賊”という制度を設立しているがその実態は大きく違う。

公認海賊は宝探しや冒険などの為に海に出た海賊達が海賊旗を掲げる為に必要な制度だ。

海賊旗の掲揚は違法となつていたので何ら瑕疵が無い者は自身の海賊旗を持つて海軍支部に訪れ申請を行う。

そして審査と面談が行われ、これに合格すれば”公認海賊証”としてシリアルナンバーが入つた青十字の旗を発行される制度だ。

勿論公認海賊になつてから掠奪などの違法行為を行った場合本部大佐クラスの海兵が飛んでくるのだが。

それ故に所属する海賊は強さも知名度も幅広い、下はソロの旅をメインとする海賊から上は大海賊として名を知られる者もいる。

公認海賊である”黄金海賊”が良い例だろう、数千人の部下を抱え未知の冒険を追い求める様は憧れる者も多い。

一時期は東の海に戻っていたらしいが数年前から再びグランドラインに戻つてきて今は新世界にいと聞いている。

しかし王下七武海は別だ。

世界政府に所属し、求められるものは強さと知名度。

その強さは一騎当千とも言われそこら辺の海賊なら鎧袖一触、桁外れの強さを持つ者達だ。

”鷹の目”や”砂漠の王”、”海俠”なんかが有名所だろう、そんな七武海の一角にエースが推薦されているというのだ。

「どうだ！いい話だろう？これなら海賊を辞めなくて済むぞ！」  
「で、返事はどうだ？火拳のエース」

エースがこの話を受けると思っているのだろう、目を輝かせるイスカと返事を聞くクリークにエースは

「…七武海か、ゴメンだな。」

と、即決でその勧誘を断るのだった。

「なっ…何故だ!?!この提案を受け入れれば海軍にも追われなくて済むんだぞ?！」

と何故エースがこの話を断ったのか理解が出来ないように取り乱すイスカに

「落ち着けイスカ少佐、公認海賊にもなろうとしない海賊がそうそう領くわけもないのはわかってただろう」

「しかしクリーク中将!!」

「因みに火拳のエース、断った理由を聞いても?」

「悪いがそもそも七武海って制度がどうにも気に入らねえんでな」

「…因みにこの話を断ると言う事は俺がお前を捕らえてもおおかしくないという事はわかるか?」

「なっ!クリーク中将、それはそれであんまりでは!?!」

反論するイスカを宥めそう言うクリークにエースとデュースは素早く身構える。

「因みにこのシャボンディには俺達の部隊で包囲網が敷かれている、お前の船も場所は掴んでいる。」

俺が合図を出せば一齐に動く形になるが…果たしてそれでもこの話を断るか?」

「…上等だよ、おれ達の船出を邪魔するってんなら押し通るまでさ」

その言葉と共にエースとデュースは覚悟を決めたようにこちらを見据える。

「ふむ…、まあ言うてはみたがこちらとしては事を荒立てるつもりは無い。とりあえず火拳のエース、お前と一対一で話をさせてくれ。」

場合によつては部隊を引かせるがどうだろう?」

「おいエース、乗るなよ?」

「だが相手は赤カモメだろ?流石に本隊が相手となるとおれ達でもきついぞ?」

エースとデュースはゴソゴソと話し合いを行い

「わかった、だが話し合いの場所はこちらで指定させてもらおうぞ?」

因みにその棍と剣も無しでいいか?それなら話し合いに応じる、それが飲めないんならひと暴れさせてもらおうぞ?」



そう言いながらエースは両腕を炎に変化させるのだった。

## 火熊密談 ドンクリーク

暫く時間を空けて数時間後の事

「んで？話つてのは何だ？」

クリークとエースはスピード海賊団の船であるピース・オブ・スパ  
デイル号、その一室にて向かいあっていた。

イスカやエースの仲間達は少し離れた所で何か有れば飛び込める  
ように万全の態勢で準備を整えており、話を聞かれるわけにはいかな  
いのでくれぐれも近づかないようにとは言い聞かせてあるが。

「…誰も聞いてないよな？」

念の為に聞けば

「んあ？アンタがそう言ったからな、何もなければ近づかないように  
言つてある、何もなければ、な」

と意味ありげに言うエース、恐らく大声を出すなり何なり合図を出  
せば踏み込んでくるのだろう。

「さて、じゃあ本題に入らせて貰うが火拳のエース、俺は是非お前に七  
武海に入ってもらいたいと思つている」

「だからその話は断らせてもらつて言つただろうが…」

「まあ先ずはこつちの話を聞いてくれ、七武海は政府への上納金を納  
めねばならん。」

まあ、それに関してお前に期待はしてないので暫くはお前にスポ  
ンサーとしてつく会社から出してもらおう。

そして次に七武海には武力が必要となる。メラメラの実は確かに  
強力だ、だが俺が見たところお前はまだ完璧には使いこなせてないよ  
うだし覇気もまだ身に着けていないだろう？」

「だから話は受けねえつて。覇気つてあれだろ？何か悪魔の身の能力  
者にも触れられるつていう」

何処かで情報は得たのだろう、辛うじてあつている事柄を話すエー  
ス

「ああ、それが覇気だ。」

そして七武海に入れば懸賞金は解除され恩赦としてお前の部下にかかっている懸賞金も解除される」

と七武海のメリットについて話すが

「だからしつつけえっての!!おれは七武海には入らねえって…」

と聞く耳を持たないエース、まあそんな簡単に話に乗ってくれるんなら苦労しないからな。

「ポートガス・D・エース」

「…何だよ」

「俺が独自に掴んだ情報でな、かの海賊王ゴールド・ロジャーには子供がいたらしい。

そしてその子供は今も生きているとな」

「!!…そりやおかしな話だな、海賊王の血筋は徹底的に海軍が調べて全員処刑したと聞いているが」

「その筈なんだけどな、何かの奇跡か幸運か知らんがな」

「…で、それが何だってんだよ」

「さあな? 因みに海賊王の血筋がいた場合本人だけでなく故郷の…例えば義兄弟なんかも処刑されるかもな」

「つてめえ!!」

思わずクリークの胸ぐらをつかむエースだったが

「おいエース! 何かあったのか!!」

「クリーク中将!! 何かありましたか!?!」

とデユースとイスカの声が響いた事でその手を離す。

「落ち着け、俺は例え話をしただけだがどうかしたのか?」

「少し折り合いがつかなかったただけだデユース、問題ねえ」

「問題無いイスカ少佐、引き続き周囲の警戒を」

その言葉に詳しい話は聞けないと判断したのか殴りかかりそうになる腕を抑えエースは再び椅子に座る。

「…っ……続きは何だ」

「んで、例えばその海賊王の子供が王下七武海となって政府の後ろ盾があるのと、そのまま海賊になるのとどちらが有効だと思う?」

「…そりや後ろ盾があった方がいいとは思うがな」

「さて次の話しだ、お前の義兄弟の居場所を知りたくないか？」

「随分と念入りに調べてるな、だがルフイならフーシヤ村にいるぜ？」

「そつちじゃなくてもう一人の方だ」

「馬鹿言え、アイツは死んだ…天竜人に殺されたんだ！」

サボが海に出て、そして目の前で砲撃された事を思い出したのだから、思わず立ち上がる。

「だから落ち着けと。」

死体は確認したのか？辛うじて一命をとりとめて、そして誰かに助けられたとしたら？」

「…確かに確認はしてないが」

「まあとりあえず生きているぞ？最もこれ以上は教えられんがな」

「くつそ！何なんだよさつきから！思わせぶりな事ばかり話しやがって！！

いい加減にしろ！言いたい事があるならはつきり言えよ！」

思わせぶりに言いききたのだろう、元々あまりこういう話は苦手なのか強い口調で言うエース

「なら単刀直入に言わせてもらおう、お前には是非とも何があるとも七武海に入ってもらおう。」

海賊王の遺児、これが生きておりしかも海賊になっているとあれば世界政府はどうあつてもお前の処刑を行うだろう」

「…別におれが殺されてもアンタにや何の関係も無いだろう」

「お前一人の命で済むんならこうも関わらんさ。だが俺は海軍の人間でな、海賊王の遺児がいると知れた場合どれだけの火種になると思う？もし何かあれば火種は爆発、一般人に危害が及ぶ可能性が高いとあつては動くほか無いだろう」

「ちつ、ホントの狙いが何だか知らねえが…いいだろう、てめえの話に乗ってやる。」

但しおれと勝負しやがれ、おれが勝ったんならおれの血筋について口外しない事、サボの居場所を教える事、そして今後おれに…おれ達に関わらない事、これでどうだ？」

「へえ…そりや何とも渡に船だがもしお前が負けた時は？」

「はあ？誰が勝負の前から負けた時の事考えるってんだよ。

そうだな、もしおれが負けたんなら七武海でも何でもなつてやろうじゃねえか」

それと共に両腕を炎化させるエース

「随分と自信ありげだな？まあ本部大佐も退けたという情報は得ているが：少し本部中將を舐めすぎではないか？」

それに対してぞわり、と覇気を漂わせ立ち上がるのだった。

## 鈍熊火拳 ドンクリーク

場所を移してピース・オブ・スパディル号の甲板、そこでクリークとエースは相對していた。

エースはいつもと変わらぬ格好、クリークは武器と防具を外しコートをイスカに預ける。

「一対一で武器は無し、先に相手に有効打を入れた方が勝ちでいいか？」

「ああ、問題無いぜ？」

「気を付けろ火拳！中将は海軍でも上位に位置する強者だぞ！」

六式を得意としており体術に強い適性を持つ！気を付けろ！」

「エース！相手は本部中将だ！気を抜くなよ！」

そして周りには二人を取り囲むようにイスカとスペード海賊団の面々が並んでおり口々にエースを応援している。

「どうかイスカ少佐はどっちを応援したいんだ？」

「おれが勝つたらこっちはもう関わらない、アイツの場所を教える、おれについて他言無用って事でいいな？」

「ああ、俺が勝つたら七武海に加入してもらおうぞ？このコインが地面に落ちるのが合図でどうだ？」

「いいぜ？おいお前ら、もうちょっと距離をとってろよ？巻き込まねえ自信は無えからなあっ！」

「イスカ少佐は流れ弾が周りに行かないように警戒を頼む、じゃあ行くぞ？」

クリークはその言葉と同時に500ベリー硬貨を上空に放り投げ、そして地面に跳ねると同時に

「火拳!!」

エースの異名ともなっている攻撃がクリークを襲う、が

「ふむ、練度はなかなか流石にここまで来ただけの事はあるな」

と身を沈めてそれを避けると剃を用いてエースに接近、右腕を振り上げる

「なっ！早えっ!?!」

想像を超えたスピードにエースは一瞬驚くも直ぐに身体を炎化させその攻撃を避ける。

「ほら、次行くぞー！嵐脚・辻風！」

それと共にクリークの脚から十字状のとぶ斬撃、攻撃を避け体勢を崩したエースはそれを受けるも

「うおおっー！ビビった…火銃（ヒガン）!!」

辻風はエースの身体を通り抜けお返しとばかりにエースの指から火の弾丸が発射された。

「飛指銃（とびしがん）！からの紙絵・桜舞（かみえ・おうぶ）！」

最初の火銃を飛ぶ指銃にて相殺、それと共に特殊な歩法を用いて両手から連続して発射される炎の弾丸を、クリークは緩急をつけた動きでスイスイと避けるとエースに接近、手刀をその首に叩きつける。

紙絵・桜舞は回避を司る六式の一つ、紙絵と剃を合わせまるで風に舞う桜の花びらの如く敵を翻弄する無音移動術である。

しかしいくら鉄をも切り裂くクリークの手刀と言えど、炎となつてゐるエースに通常の攻撃は効かない。

慌ててエースは距離をとつたのでクリークは一旦てを止めると

「なあ火拳のエース、覇気という代物があるのは知ってるよな？」

「何だいきなり、それがどうしたってんだよ」

「一応俺は本部中將を名乗らせて貰ってるが、そんな俺が覇気を使えないと思うか？」

「テメエ…手え抜いてやがったってか？」

「まあ誤解を恐れずに言えばな、ああ勘違いして欲しく無いんだが前が弱いというわけでは無いぞ？イスカ少佐を退け続けていると言うのも聞いている。」

そもそも本気なら最初の時点で勝負はついてるからな、こんな風じゃない！」

その言葉と共にクリークはエースに接近、鉄塊と覇気を纏わせた指をエースの肩に突き入れる

「ぐっ…、流石に本部中將ってか。舐められてんのは気に入らねえが舐められっぱなしは我慢がならねえっ！螢火（ほたるびつ）!!」

その言葉と共にエースの周りにボボボつと火の玉が現れ

「火達磨（ひだるまつ）!!」

それと共に火の玉がクリークに殺到するも

「嵐脚・纏（らんきやく・まとい）」

両の手足に纏わせた風により散らされた。

「これも食らわねえか…ならっ十字火（じゅうじかつ）!!」

それと共に両指を交差させそこから熱線が飛び出るもそれも両腕を交差させたクリークに受け止められる。

「流石になかなか…、だが俺に勝つにはまだ足りねえなあっ！拳砲つ!!」

それと共にエースの腹をクリークの拳が捉えエースは膝をつくのであつた。

それからエースの回復を待ち七武海入りを確約させその後の細かい部分を詰める。

そしてシャボンディの逗留を伸ばしてもらいテゾーロと引き合わせておく、テゾーロにはスポンサーというか協力者としてエースのバックに付いてもらう予定だからだ。

流石にこの近辺ではテゾーロの名は轟いているからかエースは微妙に気後れしつつも何とか話は纏まった。

そしてできれば一騎打ちの時に覇気を目覚めさせたかったがそれが叶わなかったので手を打っておく。

「は？わたしが火拳と共にですか？」

「ああ、そのついでにエースの修行を頼みたいお前なら信頼できるし相手もよく知っているだろう？」

そのついでに七武海に海兵をつけるテストケースになつてもらいたいだろうか？」

「…命令となると仕方ないですね、連絡役という認識でいいんですか？」

「ああ、頼んだぞ？未だに七武海は海賊にも、海軍にさえ一部は受け入れられていない。

確かに元海賊とあつて毛嫌いするのはわかるが全くの手綱をつけ



ないより七武海として置いておいた方がいいからな」

「わかりました、その任務受けさせてもらいます。」

多少厳しく鍛えても問題無いですよね？」

「ああ、強くなるのは好ましい事だからな、頼んだぞ？イスカ少佐」

そしてイスカはエース達と共にシヤボンデイを発ち暫くはイスカとテゾーロの監修の元修行がてらにグランドライン前半部にてスレード海賊団全員で修行に励んでもらうのであった。

## 火拳顛末 ドンクリーク

新たに王下七武海として火拳のエースが就任した事は瞬く間にニュースとして広がった。

世間では新たな七武海の就任に対して肯定的な者も否定的な者もいるが概ね大きな騒ぎにはなっていない模様である。

そしてクリークはマリンスフォードの海軍本部、元帥執務室においてセンゴク元帥、ガープ中将に対し報告を行っていた。

「上手くやったもんじゃな、てつきりわしは断るもんじゃと思つottaが」

煎餅をボリボリと食べつつエースの七武海就任について言うガープ

「おいガープ！食べカスを飛ばすな！

まあ上手く行ったのならそれで良い、赤髪を含め白ひげ、ビッグマム、カイドウ含めて四皇と呼ばれ出してはや一年、対抗戦力となる王下七武海に空席があるのは望ましく無いからな」

とガープに文句を言いつつ至極真つ当な事を言うセンゴク

「確かに海軍本部、王下七武海、四皇が三大勢力として均衡を保っている以上、どこか一箇所の戦力が落ちているのは望ましく無いですからね」

元々王下七武海とは海軍や海賊と世界の均衡を保つ為の制度だ、三大海賊から四皇へと移行したとなれば空席は早急に埋めるべきだと政府は判断したのだろう。

「ところでどういう手を使ったんじゃ？普通に言っても首を縦には振らんじやつたらう？」

自分が知っているエースであれば拒否すると判断していたのだろう、そう聞くガープに

「ええ、普通に勧誘しても拒否したので話し合いの場を設けてこちらが勝つたら七武海就任という事で一对一の決闘に持ち込みました。」

まあ確かにガープの知っているエースなら七武海なんてまっぴら

「ごめんだろうな、と考え簡単に経緯を説明する。」

「ほう、相手が勝つたらどうするつもりだったのだ？並の対案じゃ受けなかっただろう」

「まあ勝敗はわかりきっていたので色々の特権をつけました、詳細はプライベートに関わるので伏せますが」

まあ詳しい話は伏せておく、二人はエースの血筋を知ってはいるがこちらが知っていると言う事を知られるのは望ましくないだろうしな。

「…何じゃ、随分と意味深じゃな？」

しかし一対一となると相手が悪いじゃろ、いくらロギア系といえクリーク相手じゃのう…」

「お前が中將になったとは言え戦力だけなら大將にも迫るんだ、いくら火拳がロギアであり、多くの戦いを越えてシャボンディまで来たとは言えな…」

「そうは言っても武器と防具は無しでの決闘ですよ？」

「馬鹿言え、おぬしの真価は表向きでこそ数多の武器を用いた戦闘となっているが本来はその肉体ポテンシャルを引き出しての六式での戦闘じゃ、弱い者いじめにしかならんじゃろ」

「まあ七武海の七席が埋まったんならそれでいい、所で海兵を一人つけたと報告を受けているが？」

「ええ、連絡役としてイスカ少佐を派遣しています。」

因みに現在は火拳と戦闘訓練を行なっているようです、相手がロギアともならば得られる経験も多いでしょうからね」

まあ本当の所はエースの戦力強化としてこちらが指示した事なんだがな。

「ふむ、それからお主の発案で火拳にはスポンサーが付くという話じゃったがそれについての詳細を聞きたいんじゃが」

「ええ、名の知れた海賊として気になってたようですのでステラ・プロダクションのオーナーであるテゾーロ氏が自ら名乗りを上げました。」

主に新世界にて彼の興行に関与させようという心積りのようです「テゾーロと言えばギルド・テゾーロだったか、火拳の七武海就任に対

する上納金に対しては奴が肩代わりすると聞いている」

「ええ、いくら知名度があるとは言え彼のやり方はピースメイン、公認海賊に近いですしそこまでの収入は無いでしょう。」

しかし火のログアだけあってその知名度と戦闘力は高いですから七武海には持つてこいですからね」

実際そんなに毎回政府に対して上納金を支払える程裕福じゃないだろうしな。

「そう言えばそのテゾーロが新世界で近々新たな興行船が就航させると聞いているが？」

「はい、普通に今まで行っていた舞台を含めカジノや宿泊施設、レストランなども含めた一大興行船として就航予定です」

世界政府や海軍も承認し建造された一大エンターテイメントシップ、これの就役をもってかの船は完全な中立地帯として扱われる。

最もこれは映画の内容を覚えており、その詳細をテゾーロと話し合って世界政府や海軍、その話し合いの元ようやく完了した事柄である。

「かなり儲かっているだろうにまだ稼ぐか、お前とも交流があると聞いているが世界政府が目をつけているらしい、お前からも気をつけるように言っておけ」

まあこれだけ派手にやれば流石に目をつけられるよなあ…

「世界の富の一割を所有する”黄金帝”か、まあこれで世界政府も少しは落ち着くじやろう、ただでさえ色々海賊が騒がしいんじゃない」

「ああ、スピード海賊団を含めた新世代の海賊達ですか。」

北の海のハートの海賊団やホーキンス海賊団、西の海のファイアタング海賊団やグランドラインのオンエア海賊団。

誰も彼も一筋縄ではいかないメンツばかりですね」

「ああ、特にハートの海賊団の船長は例の実を含めて色々とデリケートだからな、近々お前自ら北の海に出向くと聞いているが？」

「ええ、彼とは”色々”話し合う必要がありますので…」

「その辺りについては委細全てお前にまかせる。」

ロシナンテ中佐についても未だ目覚めないと聞いている、あの時何

があつたかわたしも知りたいからな」  
そんなセンゴク元帥に頷きつつクリークはガープ中将に一礼し部屋を出るのであつた。

## 理論実装 ドンクリーグ

センゴク、ガープへの報告を終えてクリーグの姿は海軍本部科学技術部にあった。

「ほう、これが第三世代戦車か」

「ええ、中將のきやたぴら理論を元に試作機を作り上げてはや数年、ようやく海軍でもまともに使えそうなのが出来上がりましたよ……」

目の前にあつたのは大きな鉄の塊、軽く叩いてみると鈍い音が返ってきて重厚さを感じさせる。

重厚な鋼鉄の車体にキヤタピラ、車体には一門のガトリングと上部には連装式の砲塔。

アニメや写真で見慣れた姿の戦車っぽいものがそこにあった。

前世にあつた戦車の理論を少しづつこちらに持ち込んで完成させたワンピース世界の戦車とでも呼ぶべき代物である。

原作ではフランキーが作ったものやファイアタンク海賊団の水陸両用船などもあるので不可能ではないとは思ってたが思ったより時間がかかってしまった。

しかしここまでくるのに長かった、本当に長かった。

原作でもあつたんだから簡単に出来るだろうと思つていた過去の自分をぶん殴りたい。

まずはキヤタピラを実用化する所から始まり、それが完成したら色々と話し合つて大まかな方針を決めて、それなら最初は試作機だろうという事で車体から作つてみたが最初に作つたものは機関が大きすぎて車体自体が巨大で砲塔どころの話じゃなかった。

試作二号機は機関の小型化には成功したものの馬力が足りないのかきやたぴらが地面を噛めずに進まず。

三号機はなにをもち狂つたのか研究者がロケット噴進式の車輪型の機体を作り出してきやたぴら理論研究チームから総スカンを喰らっていた、人が乗れるパンジヤンドラムとか絶対に乗りたくねえぞ  
：

因みにその有人式パンジヤンドラムでも言うべき代物は当然操

作など出来ず壁に大穴を開けて動かなくなり、勿論これの開発は凍結され技術者は嚴重注意を受けた。

四号機はようやく形になり機関の大きさや車体なども釣り合いがとれた物が完成。

そして試作四号機を基として第一世代の蒸気機関戦車”チトユーリ”が作られたのだった。

車体と砲塔は一体型となっており、しかも陸上でしか行動出来ず馬力も低く火力も一般海兵より高いとは言え尉官クラスには及ばなかったので当然量産は見送られ生産は極少数に限られた。

そしてそれらの反省点を元に作られたのが第二世代型”ネウロイ”である。

最も砲塔は固定型でチトユーリ型より馬力は上昇、車体の安定性も増し高火力の武器も搭載可能となった為活躍の場所は増えた。

馬力が増えた分を装甲に回しその防御力は高かったもののその所為でスピードがかなり遅くそれなら走った方がまだ早いという結論に。

しかし動く壁としての需要は少しはあり主に施設警備などに回されているが、やはり陸上でしか動けないというのがネックになっており少数の生産のみで量産には繋がらず。

そして満を辞して開発されたのが今日の前にある第三世代型戦車”ヴァルクユリア”である。

何と原作であったファイアタンク海賊団の船のようにキャタピラにパドルの機能も持たせて水陸両用で走れるようにするという画期的な仕組みであり、当然機関も順当に習熟を重ね順当に強化、小型化が進んでいるので当然ネウロイ型よりも火力の向上が認められた。

最も水陸両用となると水に浮くために軽量化としてネウロイ型より装甲は薄くなっているが、速力は段違いで早くなっているので活躍の場は大きいと見込めるだろう。

「…なるほど、水陸両用の為に防御を犠牲に軽量化、その代わりとしてネウロイ型に比べるとかなりの快速を誇るか。

しかし案を出しておいてなんだがよく水陸両用に実用化できたな」

「はい、そちらのラチェット博士の理論を元に実用化に漕ぎ着ける事ができました、安定性を取る為にネウロイ型と然程変わらない大きさとなつてしまいました…」

「しかし小型船ほどの大きさがありながら乗員人数が6人というのはいささか少なくないか？」

「…やはり機関が蒸気機関式ですのでそれなりにスペースは必要です。て。」

現在研究中の電気機関式であればだいぶマシになるのですがこれにも難航してまして…」

「まあそう簡単にはいかないだろうからな、まあ水陸両用になつたから活躍の場所は見込めるだろうな。」

武装も中型連装式回転砲塔と手持ち式のガトリングを一門と火力も向上、確かに大尉くらいなら簡単に対抗できるだろうが一般の海賊相手ならかなりの戦力足りうるだろう」

「ええ、とりあえず完成の後にはそちらの特装研にお任せしますので詳細は後で書類にしておきます。」

まあ水陸両用なのは置いといて小型艇としてとなれば中將の乗艦…乗騎であるマガツノ殿…の方が強力なのですがね」

「いや、流石に闘魚を飼い慣らすのは不可能だろう、確かに飼い慣らす事ができればかなりの戦力になるんだろうがな」

この世界は色々とおかしな生物が多いしな、…カフウの運用方法を拡大して大型鳥類を飼い慣らすのは面白そうだけどな。

とりあえずそんな事を考えつつ科学技術部の研究員に礼を言つてその場を離れるのだった、とりあえず中將ともなるとやる事がたくさんあるからな…



## 心海賊団 ドンクリーク

北の海にてカザミドリ部隊にローの搜索をさせてはや数日、目的の海賊団はなかなか見つからずにいた。

北の海で結成され、そしてフレバンスの生き残りであるトラファルガー・ローが船長を務めている”ハートの海賊団”

トラファルガー・ロー

原作では最終的に五億ベリーの賞金がかけられ、その異名は”死の外科医”。

そして世にも珍しいオペオペの実の能力者であり、その異名に違わず船医でもあり麦わらのルフィと共に最悪の世代の一人に数えられ、そして新世界編では王下七武海となっており麦わらの一味と同盟を組んで原作に大きく関わることになった青年である。

そしてファウス島海軍病院で院長を勤めるルークの息子であり、フレバンスの騒乱で逸れた少年である。

一度は先のドフラミンゴとの騒乱により保護するチャンスはあった筈だがちよつとした勘違いにより保護できなかった。

そして数年後、ローは密かに逃れて辿り着いたスワロー島にてハートの海賊団を結成、公認海賊の申請をしてきた事ようやくその存在がはつきりしたのだ。

発覚した時は大変だった。

父親のルークは頭を抱え、母親のレモはやつと見つかったと思っただけ息子が海賊になっていた事に驚いたのか倒れる有様。

妹のラミはオルガと一緒に自由に海を渡れるのを羨ましいと言い、シスターは見つかった事によりとても安堵していた。

とりあえず北の海にいろのがわかった以上事情の説明も合わせて一度話をしに行くべきだろうと結論を出し、そしてセンゴク元帥に事情を話し、北の海行きを承認してもらったのである。

実際センゴク元帥もロシナンテ中佐の件で気になっていたのだろ

う、許可はあつさりにとれたのでこれ幸いとルーク院長から手紙を預かりシャーロット・アンジェ号に乗って北の海にやってきた。

しかし話し合いをしようにも相手の船が潜水艦の為か不明だが、中々居場所が掴めずにいた。

カフウの活躍で配下にしたカモメやウミネコといった鳥類の偵察部隊であるカザミドリ部隊や近隣の方面軍司令部にもお願いしてポラー・タング号の場所が掴めたのはその数日後の事だった。

情報を元に月歩で暫く飛んでいるとその船は大海原に浮かんでいた。

黄色い船体に黒い帆、赤で描かれた特徴的な海賊マークがその船をハートの海賊団の船”ポラー・タング号”だと示している。

そのまま甲板に降り立てばポラー・タング号は一度大きく沈み込み突然の出来事にハートの海賊団は大騒ぎに、見張りをしていたのであろうオレンジ色のつなぎを着た熊のミンク族：名前何だったっけ？ペぽだったっけ？彼が”キャプテン！空から敵がー!!”と騒いでいる。

「そのミンク族、俺は海軍の者だが船長はいるか？」

あわあわとするミンク族にそう聞けば

「えっ？えっ？キャ、キャプテンならいるけど捕まえにきたんならやっっちゃうぞー！」

こちらが海軍とあつてか警戒モード。

「落ち着け、何故海軍が公認海賊を捕らえる必要がある？何か違法行為でもやったのか？」

「いや！それは違うけど…」

「おいベポ！敵襲か!？」

そう言いながら甲板に出てきたのは特徴的な帽子に隈のできた目元、長い刀を手にコートを着た青年。

「よおトラファルガー・ロー、俺は海軍中將のクリークだ、独立遊撃隊を率いらせてもらっている」

そう言つてコートに描かれた赤い海軍マークを見せれば…

その効果は劇的だった、直ぐにローのオペオペの実に能力による領

域が球体状に張られ、ローは自身の刀を引き抜くところらに突き付ける。

「デメエ…、よくもココノコとおれの前に出て来たもんだなあ…」

フレバンスの事、忘れたとは言わせねえぞ!!父さまと母さまの…ラミの仇が良くも顔を出せたもんだなあつ!!

コラさんの事だつてそうだ!あの時から一度足りとも忘れた事はねえぞ!」

いきなりの臨戦態勢にクリークは

「まあ先ずは武器を仕舞つて欲しい、こちらは話し合いをしに来ただけなんだぞ?」

…何か誤解が無いか?とりあえず先ずはこの手紙を読んで欲しい」とこちらとあちらで何らかの食い違いがあると考えルークからの手紙を渡せばそれをローは警戒しながら受け取るとその手紙を開く。

「なつ…父さまからの手紙?!…そう言えばコラさんもあの時生きてるかもしれないって…」

そう呟きながらローは手紙を読み進め…そして力が抜けたようにその場に座り込んだ。

「誤解は解けたようだなによりだ、一体何を誤解していたんだ?」

「おれはアンタ達赤カモメがおれ達を殺しに来たんだと思つてたんだよ…、そしてあの時父さまも母さまも、そしてラミも死んだんだと思つてたんだよ」

何とまあ、最初に助けに来たと言つた筈だがどこで誤解があつたんだ?と考えつつ

「まあとりあえず落ち着いたんなら少し話をしたいんだが…、とりあえず食事でもどうだ?うちの船には腕利きが揃っているからな」

と、こちらに近づいてくるシャーロット・アンジェ号を見ながらそう聞けば

「…色々と聞かせてもらうぞ?こっちは知りたい事がたくさんあるんだからな」

そう言つてローはベポの手を借りつつ立ち上がるのだった。

## 心熊会合 ドンクリーク

「さて、とりあえずお互いの認識のすり合わせを行うか。

先ず何が合ってお前は俺を仇と認識していた？顔を合わせたのはフレバンス脱出の時に助けに来たと言った筈だったと思うが…」

シャーロット・アンジェ号にてクリークとロー達は話を終え、今は一対一で話し合いを持つべく切り出した。

ハートの海賊団のメンバーはペポを含め旨い食事に舌鼓を打ち、ギンやシグマに相手してもらい甲板で待たせている。

「…先ずアンタ達赤カモメが助けに来た後、おれはどうしてもラミが心配で途中で馬車から降りたんだ。

そして病院まで走って戻って来た時、病院は煌々と燃えていた。病院まで来る途中で銃を持った人間も、その人間に撃たれる人も、

そしてフレバンスの国王が逃げ出したのも聞いていた。だから海軍は王様を逃すために、そしておれ達を殺すために来たんだと思ってたんだよ…」

と、当時を思い出しながら話すロー。

「なるほど、それは近隣王国の兵士だろうな。

トーナ王国カリノ王国かいずれの手の者か知らんがフレバンス国王は脱出間際で自身の国を周辺諸国に売り飛ばしたからな。

因みに確におれ達がフレバンスに来たのは国王脱出の手助けがある程度の裁量権はあったからな、そこで国民を脱出させるべく動いたというわけだ」

と、簡単にフレバンスの事を話せば

「ちっ、今も原因となったフレバンス王はのうのと生きてるってわけか。気にいらぬな…」

と、正直な感想を述べるロー、まああの国王は確かに酷かったからな。

「朗報か知らんが元フレバンス国王のアクドイなら政府から預けられた筈の国を勝手に私利私欲の為に売り渡したという事で追放処分

「になったぞ?」

「そりや朗報だな、今頃どつかで野垂れ死んでくれてりや最高だな」

「その後フレバンス国民は施設の整った場所に移送、治療の為に色々動き回ったわけだ」

「だが珀鉛病は簡単に治らない筈だ、おれでもオペオペの実があつて初めて完治したんだぞ?」

「医者として当然の観点だろう、そんな疑問を浮かべるローに

「心配ご無用、数年前に全員完治させる事に成功した。」

「お前の親であり優秀な医者であるトラファルガー夫妻や天才外科医と名高いホグバツク氏、他にも何人が加えて色々と研究をな」

「ホグバツク:天才と名高いドクトル・ホグバツクか!!因みに後学の為に治療手段を聞いても?」

「:割とかなり機密だからな、まあ他言無用で父親にでも聞いてくれ」  
「まあピュアゴールドやら一応海賊であるドクターインディゴの事は言えないので適当に濁しておく。」

「どう様やかあ様、ラミ達は今何処に?」

「数年前にファウス島海軍病院と呼ばれる大規模病院が作られた。」

「お前の父親はそこで院長を、母親は副院長を勤めており、ラミはフレバンスの一部の元国民達と共に病院の手伝いをしている」

「:そうか、元気ならいいんだ」  
「因みにシスターは勝手に抜け出して失踪したお前に怒っていたがな」

「力が抜けたように言うローに追加情報を与えておく。シスターは無事な事に安堵していたがその後家族や友達に心配をかけた事に対して怒っていたからな。」

「げ:、あの時はどうしてもラミが心配だったし、海軍は敵だと思つてたんだ。仕方ないだろ?」

「引きつった顔のローにそう言えば、と疑問に思っていた事があつたのだ。」

「因みに海軍は敵だと思つてたのにどうして公認海賊に?公認海賊は一応海軍で発足した制度だぞ?」

「逆だ、とう様達の仇を討つ為に海軍に目をつけられるわけにはいかなかったんだよ。」

「アンタも知ってる通り海賊旗掲揚は違法になっている、だからこそ力を蓄え、アンタの元に辿り着くまでは公認海賊の方がいいだろうと判断したまでだ」

「ならさつき俺がお前の船に来た時に奇襲をかければ討ちとれたかもしれないぞ?」

「ぬかせ、まずは話をして時間を稼ごうとしたんだよ。」

「アンタは仇だと思ってたから色々調べさせてもらったからな。」

海軍本部中将の中でも大将にも迫る高い戦闘力を誇り、大量の武器を用いての戦闘を得意とする…というのは間違いでは無いが見せかけであり、実は海軍体術である六式をメインとした徒手空拳を得意としている…だったか?」

「へえ?武器頼りの中将だと思われてると考えていたが」

「実際海賊の中ではそう思っているのが多数だろう。酷いのだと能力者と思ってる奴もいるくらいだしな。」

「確かに海賊にとっちゃそんな認識だ。元々中将なんてそこら辺の海賊にとっちゃ出会う事すら無い人間だからな。」

「だが方面軍支部や駐留艦隊から集めた情報だとアンタが徒手空拳の方が強いというのは聞こえてくる」

「…まあ確かに、海軍では特に隠して無いからな。」

「まあ兎に角それは置いておくか、そしてフレバンスを出た後は?」

「おれはフレバンスから運び出される死体に紛れて国外に脱出した。」

「その後何箇所か放浪しつつ拾われたのがドンキホーテ・ファミリアだ。」

「そこでおれは拳闘術や剣術、砲術や戦略など色々と教えられた。」

「流れて来る悪魔の実を希望に生き延びれる道を探し、そして奴はおれを十年後の右腕として鍛えるつもりだったと言ってたな」

「そしてここでコラソンことロシナンテ中佐に出会ったわけか?」

「そして話はドンキホーテ・ファミリアに関して移り変わるのだった。」

## 鈍熊心医 ドンクリーク

「ドンキホーテ・ファミリーか、とりあえず順を追って話してくれ。

北の海で猛威を奮っていたかの一味にお前がいたというのは掴んでいたんだが、ミニオン島での事件の時に保護する予定が狂ってしまってたな」

「なんだ、あの一味にいたのを掴んでたのか？」

「ああ、上がってきた情報に” 珀鉛病に侵された少年がいる” というのがあってだな」

最も” 珀鉛病の少年” という情報だけでは断定できなかつたがこつちには原作知識というものがあつたからな。

「だがコラさんの能力によりおれが補足できなかったというわけか…」

ナギナギの実際の事だろう、確かコラソンが別れ際にローに能力を行使、ローはどんなに音を立てようが声を上げようが一切無音になるというものだったか、隠密等にはめっちゃくちや有用そうなんだよなあ：「それもあるかもしれんが少年が保護されたという情報を受け取っていてな、結局別人だったんだがな」

保護された少年：バレルズの息子であるドレーク

ロギアより希少なゾン系古代種の能力者であり、保護されて海軍に入隊してからは順当に昇進を重ね近々少将への昇進が確定している。

### 閑話休題

「成る程な、とりあえず順番に話すとなるとドフラミンゴの一味に入ってしばらくした頃の話だ。

” とある事情” でコラさんがおれに接触してくるようになったんだ。

そして暫くした頃におれの病気を治す為にコラさんはおれを連れて一味を一時的に離脱した」

ある事情：Dの忌み名か。

…というかすっかり忘れてたがローがDの名を持つてるんなら父親か母親もどっちかDの名を持つてるんじゃない？

いや、まあDというのが何なのかわからないしどうしようもないんだが…

「ああ、長身の男が珀鉛病の少年を連れ回しているという情報はあつたしな、珀鉛病に対する誤解は未だ根強い、大変だっただろう」

「別に、今はもう気にしてねえよ。コラさんが俺のためにあちこち回って頑張ってくれたんだ。

そして暫くした頃にコラさんにドフラミンゴからの連絡があつた。

そしてそこで聞いた計画がドフラミンゴが世界政府と海賊で交わされる取引でオペオペの実を横から搔つ攫うというものだったんだ。

ならドフラミンゴが搔つ攫う前にこつちで奪つてやろう、そう計画を立て、当日はコラさんが取引相手のところに向かったんだ」

基本的には原作の通りか…

「バレルズとの取引か、こちらはその情報を元にバレルズ一味、及びドンキホーテ・ファミリーの捕縛に動いた。

後はお前も知つての通りだろう、こちらより先行して踏み込んだ口シナンテ中佐がオペオペの実を強奪、そしてお前に食べさせたという事であつてるか？」

「ああ、だが逃げてる途中に撃たれたのかその後コラさんは倒れた。

そしておれはコラさんを助ける為に仇である…仇だと思つてた海軍に助けを求めた、四人組のな。

そしてその時にいたのがヴェルゴだ、おれは何も知らずにドフラミンゴの手の人間をコラさんのところに案内しちゃったんだ…

ヴェルゴ以外の海兵が戦つて、その隙におれ達はその場を離れたんだがコラさんはおれを隠した上で能力を使った。

そしてドフラミンゴとコラさんは話をして…撃たれた。

その後でおれは騒乱の隙について脱出、なんとかスワロー島に逃げ延びた。

そしてそこでベポやシャチ、ペンギン達と出会い色々あつて旗揚げしたんだよ」



「…そうか、因みにドンキホーテ・ドラミンゴはインペルダウンに収監されている。」

しかもセンゴク元帥の手回しや世界政府の希望により最下層だ、もう二度と目の目を見る事は無いだろう」

まあ黒ひげがどう動くかが懸念と言えば懸念なんだが…

「できればコラさんの仇はおれがとりたかったんだがな…」

ん？ああ、そうか生きてる事は知らないのか。

「あー、因みにコラソン…ロシナンテ中佐は生きてるぞ？」

「…はあ!?あそこから助かったのか?!いや、それよりも今何処に!!」

「ロシナンテ中佐ならファウス島海軍病院に入院している。」

ロシナンテ中佐は一命は取り留めたもののあの時以降意識が戻っておらず、あちこちから名医を呼び寄せたものの全員お手上げ、肉体は生きているものの脳にダメージがあったのか全員お手上げ状態だ」  
「ならーならおれを連れて行ってくれ!!腕なら自信がある!」

「そうは言っても場所は新世界だしなあ。」

できればきちんと北の海で経験を積み、リヴァースマウンテンから入ってグランドライン前半部で順当に来て欲しいんだが…

何しろ新世界は魑魅魍魎の跳梁跋扈、悪の花道…じゃなかった海賊でも四皇をはじめかなりの強者達が屯している。

確かにお前の能力は格上殺し足りうるだろうが…それでも相手が悪い。

悪い事は言わん、家族や恩人に会いたいのなら力をつけてからにしろ」

「だが…!」

頭では理解しているのだろう、しかし死んだと思っていた家族や恩人がいるとわかったのだ。

早く駆けつけないのは当然の事だろう。

「ふむ…なら先ずはお前がどのくらい戦えるのかを俺に見せてくれ。」

それによっては考えてやらん事も無い」

「本当か!?頼む!おれと手合わせをしてくれ!!」

「しかし俺がダメだと判断したらその時は諦めてもらうぞ、順当に力

をつけて自力で向かう事だな」

「…わかった、それでいい」

「ならば丁度近くに島がある、そこで手合わせといこうか」

例え結果がどうなろうと恨みっこなし、そうして二人の手合わせが決定したのだった。

## 熊心激突 ドンクリーク

「キャプティーン！がんばれー！！というかお前さつきからくつつくな！  
離れるよー！」

「ぐるぐるぐるぐる」

船の甲板からローを応援するハートの海賊団。

「どうか何故シグマはベポにくつついてるんだ？同じ熊だし気に入ったのか？」

「さて恨みっこ無しだ、先手は譲ってやるよ」

色々とゴテゴテとした胴鎧の上にはマント、ガントレットとアーマーブーツを装着して腰には長剣と拳銃、背中には白尾棍。

フル装備をしたクリークに対する白い紋様が入った黒塗りの鞆、鏢には白い毛皮のような装飾がある大太刀を手にしたロー。

「へえ、お優しい事だな。後悔するなよ」ROOM!!」

その言葉とともに半球状の空間が張られローとクリークを飲み込み、ローは刀：”妖刀・鬼哭”を振り上げ、それをクリークは白尾棍で受け止めようとしたが

「げっ!!元々の硬さは無視か!」

まるで熱したナイフでバターを切るかのように複数の合金を重ね合わせ、類い稀なる頑丈さを持ったクリーク愛用の棍はあっさりと言つ二つに切断された。

クリークはオペオペの能力に対して勘違いをしていた、元が切断出来ないほど硬ければ斬られる事は無いと思っていたのである。

しかし悪魔の実は常識を覆す摂理を持つ、オペオペの実で作った領域内で例え海楼石であろうともローの斬撃に斬れないものは無い。

いわば防御無視の攻撃であり防ぐには回避を用いなければならぬい。

だからこそローは続けざまに鬼哭を振るい、クリークはブーツを起動させ空中に踊り上がる。

”タクト”」

ローのその言葉と共に周辺にあった岩が持ち上がり空中のクリー

クに殺到、自身に対して飛んでくる岩を打ち砕くクリークだったが  
「ッシャンブルズ」

その言葉と共にクリークの背後にあった砕かれた岩とローの位置  
が交換されクリークの背中にローが刀を振りかぶった状態で出現。

そして空中移動の要となっている片足を切り飛ばした。

「っ…!! やりにくいな!! ちゃんと後でくっつけろよ!!」

足の感覚はあるし一応は動かせるのか…」

うねうねと動く切り飛ばされた片足を見つつ、バランスを崩したク  
リークは文句を言いながらマントを脱ぎ捨てると胴鎧の背中部分  
がバカリと開き、そしてそこから圧縮された風が吹き出した。

「おいおいおい、六式って空中で空気を踏みしめるもんじゃ無いのか  
?なんだその背中のは」

「ダイアルを使った特注品だ! 無限に起動させられるわけではないが  
な!」

その言葉と共に両腕をローに向けると手首の仕込みが起動、ガトリ  
ングの銃撃がローに向かって襲い掛かる。

「ッシャンブルズ」

が、ローに放たれた銃撃は少し離れた位置にあった流木とロー自身  
の場所が入れ替えられた事により不発、哀れ流木は多数の穴を開けら  
れ地面に墜落。

「ちっ、遠距離は無駄そうだな」

その言葉と共にクリークは腰に帯びていた長剣を抜き放つ。

そして鬼哭と同じくらいの長さを持つ長剣はクリークが持つ柄か  
らジワジワと黒く染まっついていきそして漆黒の刀身がローに向けられ  
た。

「ようやくか…それが一部の海兵が使うハキってやつか?」

「ああ、流石に対抗手段が思いつかないのでな」大断小断(おおだちこ  
だち)!!」

その言葉と共に二連続の飛ぶ斬撃、牽制の目的で放たれたソレは  
「タクト!!」

突如として地下から隆起した岩によって防がれる。

しかし防がれるか避けられるのは折り込み済みであり、背中部分に仕込まれたジェットダイアルの出力を上げると刀を前方に構えて一直線にローの元へ。

しかしその攻撃はローが刀を縦に構え

”スキャン”!!」

クリークの身体をかざすかのように動かすと

「なっ！身につけたものまでもか!!」

クリークが身につけていた胴鎧が離れた所へ移動、そのまま何処かに飛んでいった。

当然、推進力を無くしたクリークは勢いを無くすも片足で空気を踏み抜く事により体制を立て直す。

「いやいや、流石オペオペの実というかそれを扱えるお前が凄いのか…やりにくい事この上無いな…」

「相性の問題だろ、この能力の特性上武器を持つもの相手にはやり易いからな。続けて行くぞ！」

ローが指を動かすと同時にクリークの懐へと移動

「なっ！物体を入れ替えるだけでなく転移も出来るのか!？」

今までの移動は物体とロー自身を入れ替える動きだったので意表を突かれたクリークは距離を取ろうとするも

「遅い”メス”!!」

ローが更に指を動かす毎に距離を詰められ、そしてローの素手での一突きにより心臓がくり抜かれたのだった。

それと共に二人は地面に降り立つとローの手にくり抜かれた心臓が移動。

まるで何かに閉じ込められたかのように血を流さずにいる心臓をローはクリークに突きつけると

「さて、アンタの心臓はおれの手にあるわけだが勝負有りって事でいいか？

しかし随分と肥大化した心臓だな…」

と尋ねれば

「ああ、覇気を刀にしか使わなかった俺が言うのもなんだがここまで

やるとは思わなかった。

だがロー、それでも少し海軍中將を舐めているんじゃないか？」

その言葉と共にクリークはローに対して足を踏み出しローはもうひと押し必要か、と心臓を握りしめようとするが

「なっ！何だこの心臓!？」

思わぬ感触に意表を突かれるのだった。

## 心熊決着 ドンクreek

「何だこりゃー！何か仕込んでやがったのか!!」

軽く握って痛みを与えるつもりだったローは手に帰ってきた思わぬ感触、その硬さにクreekに問う。

「んー、まあお前も医者ならわかると思うが生命帰還、バイオフィードバックという理論を知っているか？」

「…ああ、身体全てを己の知覚下に置いて自身の身体全てを自在に操ると言う…まさか！自身の肉体を改造したのか！」

いや、ありえない！内臓まで知覚下においたのか!?負担は相当なものなの筈だ！」

「有り得ないなんて有り得ないさ、色々と苦労したぜ？」

身体に走る激痛を乗り越えながら身体中の筋繊維を細く、空いた場所に更に筋繊維を増やし高密度に。

勿論筋肉だけ高密度にしても駄目だ、骨も密度を増やし血管も内臓も丈夫に作り替えた。

そして更に海軍には鉄塊と呼ぶ体術がある、これは体内の筋肉を収縮化して鉄の硬さを持たせるというものだが…

それらの成果がその心臓にも現れているだろうか？

オペオペの実斬ったものの感覚は繋がったままだという事が盲点だった模様だな」

クreekのその説明にローは両手で心臓を押し込もうとするがその硬さはローの腕力ではビクともしない様子だった。

「…そんな馬鹿げた人間がいるのか、いや実際に目の前で見せられれば納得するしかないが」

その言葉と共に呆れたような顔で言うローに戦意は見られない。

「さて、続きをやるか？その能力は厄介だしここからは少し本気でいかせてもらうか？」

その言葉と共にクreekの両腕が黒く染まりゆつくりと構えれば「…いや、ここで有効な攻撃をできなかったおれの負けだな」

そう言ってローは心臓をクreekに放り投げ、更に指を動かすとク

リークの目の前に切り飛ばされた足が現れた。

「お？家族の事はいいのか？ロシナンテ中佐も診るんじゃないのか？」

「おお、これがパーツが戻る感覚か…」

「心臓や足を元の状態へと合わせそう聞けば」

「新世界にはアンタみたいのがうじゃうじゃしてんだろ？それなのに中将って…」

「今の腕じゃ簡単に全滅するのがオチだ、精々腕を磨き直して順当に向かうさ。」

「まあ俺もそこまで厳しくは言わん、手紙くらいなら預かるし向こうの手紙はこちらの伝手を使って届けよう」

「本当か!?少し待っててくれ、直ぐに手紙を書く！」

「あ、因みにモノは相談だが後でその身体ちよつと診させてもらえな  
いか？流石にバイオフィードバックを完全に使いこなしている人間  
なんて初めて見たぞ…」

「医者として興味があるのだろう、そう聞くローに」

「…まあ減るもんじやないから別にいいが」

「とクリークは了承するのだった。」

そして二人はレベルの高い戦いに興奮する遊撃隊やハートの海賊  
団の面々を尻目に船に戻り、ローから家族への手紙を預かると甲板で  
ローによる診察を受ける。

「うげ…本当に同じ人間か？わかるかこの切断面…皮膚の厚さもだ  
が、アンタが言つてた筋肉の尋常な密度もそうだし骨も並の人間より  
更に太い。」

「骨格もだな、あちこちが変形している…いや、変形させたのか？」

「筋肉の密度は高いが単純に硬いだけでは無く柔軟性も高い。」

「血管も並の人間と比べると厚くなってるな…げ!!内臓も全体的に  
大きいし位置も全体的におかしいぞ!!」

「いや、理屈はわからないでも無いが…よくここまでバイオフィード  
バックで改造したもんだ…」

「まあ外科手術の後等は見られないから本当に自力で改造したんだ」



ろうが。

しかしなるほど、頑丈なフレームにそれに見合った筋肉量…まるで巨人族だな、まあ密度に関しちや巨人族より上だろうがな。

まあ何はともあれ色々異常な箇所はあるが身体は健康そうだ、その肉体を維持するには大量のエネルギーが必要だろうが…今の所はそれに対する手段は無いがな」

ローはROOMを展開するとクリークの身体をスパスパと切り裂くとあちこちを確認しひとしきり満足したようですら結論づけた。

本当にあんだだけ斬られて大丈夫か？とクリークはくつついた腕をさすりつつ

「ああ、そうだった。

新世界には入った後だがドレスローザに気を付けろ、ドンキホーテファミリーの残党が国の中枢に入り込んでいる、何か企んでいる可能性がある。

お前は顔を知られているだろうから忠告だけしておく」

思い出したように告げ別れたのだった。

「そんなにあの熊のミンクが気に入ったのか？」

「ぐるるー!!ぐるるるるー!!」

雄叫びを上げながら長い手を大きく遠くになっていくハートの海賊団の船に手を振るシグマを見て眩くクリーク。

ローからの手紙を懐にいれると事の顛末を報告すべく通信室へ

『そうか…苦勞…そういう経緯でロシナンテはあの状態になったのか…』

「ええ、ミニオン島での顛末はそういう事だったようです」

『しかしトラファルガー・ローにロシナンテを診させても良かったのでは？』

あのオペオペの实の能力であれば或いは…』

「それは悪手ですよ元帥、オペオペの实の能力者が十分な力が無い状態で新世界に入ればそれこそ争奪戦になりかねません」

『お前を含む遊撃隊の面々がついていけば問題無いだろう？』

「いくら私がいると言っても流石に数には勝てないですよ、一対一な

らまだしも四皇を始め新世界は魑魅魍魎の巣窟です、どんな化学反応があるかわかりませんよ?」

『…確かに、それでローが殺されてオペオペの実が他所の勢力に渡ろうものなら目もあてられんな。』

「どうだった? 奴の強さは、流石に新世界ではまだ厳しいか?」

「…彼なら類い稀なる才覚とその能力のせいもあってか北の海なら全く問題は無いでしょう。」

グランドライン前半部もあの強さなら問題無いでしょう、しかし新世界は及びもつかない化け物共がウジャウジャいますし、搦手を使つて来る者もいるでしょう」

『…そうか、ならばお前の判断を信じるとしよう』

そうして諸々の報告を行うとクリークは通信を終了するのだった。

## 髑髏の影 ドンクリーク

ローとの話し合いを終えてクリークはファウス島へ。

ファウス島海軍病院で院長を勤めるルークにローからの手紙を渡し事の次第を報告する。

するとルークは「あの子が無事で、元気にやっているのならこれほど喜ばしい事はない、ここに訪れるのがいつになるかは分かりませんが再会の時を楽しみにしておきます」という事であった。

補給等をファウス島で終えクリークはテゾーロと話し合いをすべく新しく就航した一大興行船「グラン・テゾーロ」へと向かっていたそしてその道中、シャーロット・アンジェ号は深夜に沖で停泊していた時の事である。

クリークが自室にて航海日誌を纏めていると船室の窓にコツコツと何か当たる音。

何の音だ？と窓から海面を見下ろすとそこには海面から顔を出して顔を上げる鉄仮面の姿が。

その姿を確認したクリークは甲板に向かうと

「ようMr. スカル、何事だ？」

と声をかける。

Mr. スカル：世間では死んだという事になっている奴隷解放の英雄「フィツシャー・タイガー」の偽名である。

フルルシャウト島にて海軍の騙し討ちに遭い、そして生死の境を彷徨っていた時にたまたま近海にいたテゾーロの船にて深海の歌姫ことマリア・ナボレの輸血で一命を取り留めた。

その後事の大きさに困ったテゾーロはこちらに相談、生きていると知らればそれこそまた問題になるとして世間的には死んだ事に、そしてそれ以降は四億の首であるドクロマスクとして奴隷の救助などを行なってもらっている。

因みに世界政府からは目の敵にされているが民衆からの人気は高くドクロマスクを称える者もいるようだ。

まあ手配書が覆面を被った姿と言うこともあり偽物も割と出てくるんだがな…

「ようクリーク、中將に出世したんだって？そのうち大將も夢じゃねえんじやねえかもな」

顔を知られるわけにはいかないので鉄仮面を被ったまま言うスカルに

「いやいや、あんなロギアお化けと一緒にするなよ…」

それよりどうした？こんな所で…奴等の動向でもこの辺りで掴んだか？」

何かあったのか？と尋ねれば

「いや、スポンサーに挨拶でもしに行こうかと思っただけな。」

因みに奴等ならリュウグウ近海で元気に海賊やってるぜ？しかしいいのか？捕らえなくても」

との言葉に納得する、なるほど目的は同じか。

「そちらにはきちんと手は回してる、奴等の思想から何をやるかは想像できるし抑えとして魚人達を人攫いから守る名目で海兵を駐屯させているし、ウィリー達にも声はかけてある」

「ああ、確かに奴等はアーロンに対しちや畏敬の念を持ってたらしいしウィリーなら丁度いいな。」

…しっかしアンタの手はどこまで長いんだ？」

「ま、海軍中將なら色々やらなきやいけない事があるんでな。」

それでどんどんと手を広げざるを得ないんだよ」

「そっぴや聞いたぞ？一部海兵に過激な考えが広まってるんだろ？大丈夫なのか？」

「ああ、”ブルーマリナー”の事か。」

公認海賊も七武海も不要、海賊は須らく殲滅すべきなんて言ってるがこっちの戦力も考えてくれって話さ。

世界政府にも賛同するものが一部いる有様だが…ま、こちらの手の者も入り込んでるしコントロールもしてある、別に戦意旺盛なのは悪い事では無いしな」

「…それなら良いが、くれぐれも気をつけてくれよ？」

そう言つてMr. スカルは再び海中へと去るのだった。

そして数日後、シャーロット・アンジェ号はオープンを控えた超大型興行船「グラン・テゾーロ」の船内港にあった。

「なんとまあ……こりやだいがかつたんじゃないか？」

あまりの豪華絢爛さにクリークを含めギンや部下達は惚けたように周りを見回す。

周囲はとても明るく、船内に作られたとは思えないようなとても広い空間。

ともあれ港に船を停泊させ降り立てばクリーク達を出迎えたのは一人の女性。

褐色の肌に赤い髪、メリハリのきいた身体その女性は

「初めましてクリーク中将、わたくし社長秘書のバカラと申します。

この度は我が社にお越しいただきありがとうございます、お話しは伺っています社長がお待ちしていますのでこちらへどうぞ」

そう話す女性を見てそういやいな、と思ひ出す。

「バカラ……だったか、そういや能力者を複数部下として迎えたと言っていたな。お前も能力者か？」

「ええ、わたしもテゾーロ社長にスカウトされた能力者ですわ、よろしくお願いいたします」

そう言つてオーバーなアクションで手を差し出すバカラにクリークは

「ああ、では早速案内を頼む」

と黒い手袋を嵌めたバカラの手を握り返して後ろに続くのだった。「ボス、まるで一つの街ですね……」

建物が立ち並ぶ道中、船の中とは思えないような風景にクリーク達は辺りを見回す。

「資産の半分を注ぎ込んだとは聞いていたが……こりや凄まじいな」

予想を遥かに超える状態にクリークは

「ええ、この辺りはメインストリートで食事や買い物が可能ですわ。

他にもゴルフ場やレース場などのアトラクション、そしてあらゆるゲームを集めたカジノがございます。

そして！あれに見えてきましたのが世界最高峰の七つ星ホテル”ザ・レオーロ”でございます！」  
と、バカラは巨大なタワーを指し示すのだった。

## 黄金の王 ドンクリーク

「ここから先は警備主任を務めるタナカさんが案内します」

七つ星ホテル”ザ・レオーロ”に案内されたクリークとギンは直通エレベーターで上層部に。

そこで現れたのは一人の男。

「スルルルル…初めまして、警備主任を勤めさせて頂いております。タナカと申します。

先ずはお手をどうぞ、ここからはワタシの力で無いと入れませんので…」

そう言つてタナカはクリーク達の手を取ると扉がないエレベーターをまるで壁を無視するかのように通り抜けた。

「ほう、アンタも能力者か。」

「ええ、ワタクシはヌケヌケの実の能力者でございます。

この力があればどんな壁でも床でも自由自在、その力でセキュリティが高い場所への案内を行います」

そう言つてタナカさんは胸に手を当てぺこりと頭を下げる。

しかしでつかい頭だな、本当に人間か？…いや角が生えてたりする人間もいるから今更か。

「社長はあちらの部屋でございます、ではワタクシはこれにて失礼いたします、スルルルル…」

その言葉と共に床に沈んでいくタナカさん、便利そうだな…と思いつながら言われた扉を開く。

「よおクリーク、久しいな。

エルドラゴ、おれはクリークと二人で話がある部屋の外で見張つてろ」

白いスーツをビシリと着込んでいたテゾーロは傍にいた長身で褐色の男に告げる

「ギン、お前もその男と共に表で見張りを頼む」

その言葉に軽く頷くとギンは表へ。

「態々来てもらつてすまん、明日にはミヨスガルド聖も見えられる

予定だ」

「随分と部下が増えたようだな、エルドラゴだったか？あの男確か手配書で見たぞ？」

「ああ、黄金が大好きらしくてな。一時期は黄金海賊に付き纏っていたらしいがこつちに狙いを変えやがったところを確保した。」

「ゴエゴエの実の能力者でおれの護衛という形で置いている」

「あのバカラという女やタナカさんという男もか？」

「ああ、バカラはラキラキの実の能力者でな、相手の運気を吸い取り自分のものとする事が可能だ。噂を聞きつけてスカウトしにな。」

そしてタナカさんは一時期シャボンディを騒がしてた窃盗犯でな、うちの事務所に入り込んだところを確保した。」

他にも地下闘技場のチャンピオンや、諜報員としてトロトロの実の能力者も迎えた。」

これでグラン・テゾーロは万全の体制になった、これでお前のいう”例の知識”とやらに近付いたんじゃないか？」

「よくやってくれたなテゾーロ、しかし随分とクセの強そうなメンツだな…」

「まあ使いようだろうさ、この施設は政府や海軍にも話は通してある。オーブン以降は政府関係者、海賊、海軍問わずの中立地帯として扱われる予定だ。」

まあ問題を起こした者はこうだがな」

そう言って親指で首を掻き斬る仕草をとるテゾーロ

「物騒なこつたな、しかしギガントタートルなんてよく見つけてきたな」

「これだけの大きさの船となるとそれくらいしか動力が思いつかなくてな、噂では前半部にもいるという伝説が残ってるらしいが…」

「ああ、その伝説なら事実だぞ？甲羅が島になっていてな、今は眠りについており海軍が領主から管理を引き継いでいる。」

まあそんな話は置いておくが四皇からは何と？」

「白ひげ、赤髪は利用する事無いしカイドウはワノ国から出る事無いし好きにしろとの事だ、そしてビッグマムは利用を条件に設立を認め



た。

四皇からも言質をとった以上組織立ってこつちに対抗する動きは無いだろう」

「そうは言うが気を付けろ？」ブルーマリナー」は知ってるか？」

”蒼き清浄なる海の為に”だったか？海賊をすべからく殲滅つたつて首輪つけておいた方がいいに決まってるだろうが」

「こちらでコントロールはしている筈だが暴発する可能性もある、その場合中立地帯となる此処は狙われる可能性もあるからな」

「忠告感謝する、確かに狙われる可能性はあるかも知れんな警備は強化しておこう」

そうして次の日クリーク達はミョズガルド聖を迎えて話し合いを行う。

「さて君達の尽力で魚人達との溝は大分マシになった、感謝させてくれ」

「いえいえ、頭を上げてくださいミョスガルド聖。

貴方がテゾーロのバックについたからこそその話ですよ、そのおかげでここも中立地帯として認められたわけですよ」

「そうですねよミョスガルド聖、貴方がいなければあちこちに手を回す為にも時間がかかったでしょうからね」

「そう言ってくれて感謝するよ、しかしあの時オトヒメ王妃の説教が無ければわたしもここには居なかったろうな、それを考えるとオトヒメ王妃にも本当に感謝すべきだな」

「そう言えば頼んでいた件はどうになりました？」

「ああ、それだったらこのリストに纏めてある。

聖地の襲撃から時間は経ったものの未だにあの病は完治の目処は立っていない。

それなのに生き残った健康な天竜人は未だに自身を省みる事なく奴隷を求めている。

わたしも何度か言ったのだが聞く耳を全く持とうとしなくてな…」

「…まあそう簡単には変わるとは思っていませんよ。

というか急に変わったら変わったで何か裏があるんじゃないかと

「疑いますけどね」

「いやはや耳が痛い話だな、兎に角一週間後の式典にはわたしも参加は出来るだろう、それまではこちらに滞在させてもらうが問題無いかな？」

「海軍からも警備を出そうか？」

「…そうだな、万が一があつては目も当てられないしな」

そうして話し合いをしつつその日の夜は更けていくのだった。

## 赤熊秘信　ドンクリーク

ミヨズガルド聖を筆頭に世界政府の役人や海軍のお偉方、一部の有力な海賊や公認海賊なんかのゲストを迎え盛大にオープン式典をやったその日、初日とあってか物珍しさからグラン・テゾーロは多くの人間を迎えた。

対応する人員は元・奴隸で助けられたが行き場所が無かったものや元・フレバンスの一部国民、噂を聞きつけテゾーロ自らスカウトしに行った人間の他、採用に対して多くの門戸を開き、厳しい試験と厳正な審査を経て採用された者達…

初日とあってか少しばかりあちこちで騒ぎはあったもののすぐ様警備部隊や手隙の海兵達を向かわせ迅速に鎮圧、ゲストがゲストなだけに気が抜けない一日であった。

そしてその日の夜、食事を終えてクリークは”ザ・レオーロ”の一室にあった。

流星は世界最高峰の七つ星ホテル、その看板に偽りは無くその食事でも満足いくものであった。

なおクリークの食事を見ていた者は最初はその珍しさに感嘆したような顔をしていたが、次々と減っていく料理に顔が引きつる者も多く、最終的には多くの客が見てるだけで胸焼けしそうという表情をしていたとテゾーロから教えられた。

材料なんかも一流所を使ってるんだから加減しろ馬鹿、との事であった。

そして食事を終えクリークが戻ってきたこの部屋はテゾーロの好意でワンフロア丸々クリークに与えられた場所である。

”色々と”こだわって建設されたそのフロアは侵入者向けの罠や隠し通路、隠し部屋や防音設備に通信設備などのあらゆる設備が整っている。

そしてそのフロアの一室、完全防音が施されたその部屋でクリークは電伝虫を取り出し、盗聴防止用の希少な白電伝虫を更に接続しある

人物に繋げる。

「こちらクリーク、応答願う」

『なんじゃ、おんしか。中立地帯つちゆう船は上手くいったんか?』

クリークが通信を繋いだのは赤犬大将ことサカズキであった。

一応は同期であり、そしてクリークの影響か不明だが表向きはともかく実際は原作ほどの苛烈さは無くなっていてる。

穏健派である青雉大将ことクザンとは”対立している事になっている”為か、海賊に対して厳しい過激派と呼ばれる人間が赤犬陣営は多い。

そしてそれを纏める赤犬こそ最も海賊に対して過激…だと思われるている。

実際のところは清濁合わせ飲む事ができてるんだがな…

「どうだ、ブルーマリナーの動きは」

『おう、おんしが考えた”蒼き清浄なる海の為に”つちゆうフレーズが良かったのか過激派の面々には広まっちよるわい。

わしには誘いが回ってこんと思うちよつたら、どうやら発端はわしじやと思われとるようじやき』

そう、七武海や公認海賊などを快く思わず、海賊殲滅主義を掲げるブルーマリナーと呼ばれる思想はクリークの仕込みである。

「なんなら盟主になってくれないぞ?その方がコントロールはしやすいからな」

クリーク、サカズキ、クザン、ボルサリーノの四者で話し合いの元に作られた物で命名はクリークである、前世で覚えていたものをそれっぽく流用したようだ。

『気は進まんが暴発しても困るけえのお…まあ過激派を放置しておくよりは首輪をつけてある程度コントロールするつちゆう話し合いには賛成じゃけどな…』

自分のキャラじゃ無いとでも思ってるのかあまり気は進まなさそうなサカズキだったが原作を知っている身としては随分と丸くなったなあ…という思いが大きい。

「それだけじゃない、悪行の証拠が無い公認海賊なんかは過激派の暴

発という事で処理してもらおう事も考えているし、穏健派が広がりすぎて無気力な海軍になっても泣きを見るのは一般民衆だ」

別に過激派を纏めるだけが目的じゃないという事は伝えておく、使いは色々とあるからな

『まあおんしの言いたい事はわかるけえ今更そこは議論せんわい。』

ブルーマリナーに関しては元帥が苦い顔しちよるつちゆう話を聞いたが問題ないか?』

「ああ、別に騒動を起こした訳でもなし、逆にこっちの計画が知られる方が厄介だからな」

因みにセンゴク元帥やガープ中将は基本的にこちらの行った事は殆ど報告していない。

海兵だけで無く上層部にもクザンとサカズキは穏健派と過激派で対立しており、ボルサリーノは中立であると思われるからだ。

対立してる人間が裏ではしっかり手を結んでいるというのは知られない方がいいだろうからな。

『そう言や新しく七武海に就任した小僧はおんしがスカウトに言ったと聞いたが炎のロギアじゃったか、どうじゃった使えそうか?』

新しい七武海という事で気になっていたのか火拳のエースを聞いてきたサカズキに対して

「ああ、公認海賊では無かったとは言えその本質は冒険をメインとする公認海賊に近い考え方だった。

海賊王になる、という夢はそれなりにあったようだがあの力で新世界に入っても潰されるのがオチだったろうな。

今はどっかの島で覇気を習得するべく特訓をさせているが…一度あつておくか?」

とその人となり伝えておく、原作みたいになつたら何もかもパーだしな。

『いや、行かん方が賢明じゃろう。』

一応わしは七武海や公認海賊を快く思つちよらんブルーマリナーじゃと思われとるけえの』

「まあどっかで顔を合わせる事もあるかもしれんが…くれぐれも焼き

尽くしたりするなよ？」

ふと原作を思い出してそう言えば

『おんしはわしを何じやと思うちよるんじや、確かにメラメラはマグ  
マグの下位互換じやという噂は聞いちよるが態々手を出す理由が無  
いじやろ』

と冗談だと思っっているのだろう、そう返事をするサカズキにまあこ  
れなら原作通りにはならないだろうとクリークは考えるのだった。

## 原作突入 ドンクリークさん

「一年ほどの休暇を下さい！」

とある情報を受け取ったクリークは早速とばかりにセンゴク元帥の元へやって来て直談判を行っていた。

「一年？そんなに長い期間どうするつもりだ？というか何かあったのか？」

と仮にも海軍中将の地位にあるものが長く休暇をとるのは気が進まないのだろう、そう疑問を呈するセンゴクであったが

「つい先日の事です。が東方面軍E53支部にて支部長のモーガン大佐が破られました」

と東方面軍に潜り込ませている部下からあつた報告をセンゴクに告げる。

「ふむ、相手は海賊か？最近は大いぶマシになってきたと思っていたが…」

「はい、打ち破った者の名前は”モンキー・D・ルフィ”ご存知ですね？」

「…ガープの孫か」

と言いつつ頭を押さえるセンゴクに

「因みに東の海で名を馳せている賞金稼ぎ、”海賊狩りのゾロ”を仲間に加え海賊として旗揚げを行いました」

更に頭痛がしそうな報告をすれば

「…それで？お前の休暇はどういうわけだ？」

「Dの名を持ち、ガープ中将の孫でもあり、そして赤髪に憧れる彼が海賊になったのですよ？何も無いと思いませんか？」

「…その通りだ、考えすぎとはとても言えん。

それにお前の発案で推進している”例の計画”に関しても大詰めだぞ？そんな中今お前が本部を外しては…それに仕事はどうするつもりだ？」

「あの計画に関しては殆ど準備は整ってますし大丈夫でしょう、特装研に関しては優秀な部下がいるので大丈夫でしょう、幸い一年前に作

られた第四世代型の戦車も好調ですし他の武装に関しても量産を行っており、急ぎの件はありません。

グランドラインの哨戒任務に關しても最近は比較的落ち着いた情勢ですし私が居なくとも問題無いでしょう。

E88支部で不穏な動きもあるということなのでそれも確認しておきたいですし、何かあれば直ぐにこちらに戻って来る予定ですので東の海とグランドラインにて一年ほどの休暇を是非とも…」

と頭を下げて頼み込む。

「数日待て、わたしの一存では決められんからな。

まあ、今は昔と比べると情勢は落ち着いてるし、他の将官と話し合ってから決めるがそれで良いか？」

「はい！ではよろしくお願いします！」

そう言つてクリークは元帥執務室を出て早速とばかりに準備をす  
に行く。

予め三大将や他の将官には根回しをしておいたし、東の海への哨戒任務としてカモメの水兵団旗艦のフィーネ・イゼッタ号を擁する一番隊も派遣は申請済み。

カモフラージュとして使う船もゾッセーン島改めネオヴェネツィアのアクアリア社で改修を終えたサラマンダー号改めベアトリーチエ号も手配済みだし積み込みも現在急ピッチで行っている。

人員も選抜き休暇申請を上げていりしこれで後は出発するだけだ。

ああ、楽しみだ。

既に原作は始まっているものの流石に何も事件が起こつてないのに長期休暇とはいかないからな、それを待っていたので若干出遅れた感はあるがいよいよ麦わらのルフィと、その一味達の冒険を横から見るのだ。

船長である麦わらのルフィは数年前に一度だけシャンクスの件で会ったきりだ。

剣士である海賊狩りのゾロとは会った事無いが是非数々の技を生で見たい所である。

航海士のナミは原作と変わらず海賊相手に泥棒行為を行なつてい



るらしい、とは言えベルメールは存命らしいしアーロンとの関わりはどうなったのだろうか？

狙撃手のウソツプは関わっていない、だがその類い稀なる狙撃の腕と数々の発明は是非とも色々作ってくれたりしないだろうか？

コックのサンジに関しては慎重に行かねばならないだろう、なんとなく原作でサンジが一味に加わる発端となったクリークが今はいないんだからな。

一時的に仲間に加わるビビ王女は現在失踪中らしい、バロツクワークスに潜入しているこちらの人間からは原作通りフロンティア・エージェントとしての地位についてるらしいが、過去の勉強会の影響か海賊が好きでは無いと聞いている、大丈夫だろうか？

船医のチョッパーもモネの影響で何か変わってたりするかもしれないし何らかのフォローがいるかもしれないな。

クロコダイルの元にいるロビンは元気だろうか？過去に助けて色々と教え込んだしそんじよそこらの人間じゃ相手にならないだろうが怪しまれてなければいいが…

船大工のフランキーはウォーターセブンで趣味で船を作りながら解体工をやっているらしい、やはり潜入済みのCP9も騒ぎをおこすのだろうか？

音楽家のブルックは関わっていないが既に死んだものとして懸賞金は取り消しになっている、是非とも同じ生きた骸骨であるジョークと面会させてやりたいもんだ。

ああ、本当に楽しみだな。

麦わらの一味は世界を変えていく、誘った所で決して公認海賊にはなろうとはしないだろう。

そういう意味では赤髪のシャンクスと同じと言えるだろうな。

色々過去に介入した事により原作より少し変わるかもしれないが後悔は無い。

劇場版などの事件はこちらが介入した事もあり起こらないだろう、場合によっては戦力の底上げなんかをするのも良いかもしれないな。

今頃はきつと海賊王になるべく青い広い海を航海している事だろ

う、ああ楽しみだ本当に楽しみだ。

そうして数日後、センゴク元帥からの色々と条件が付けられた上で休暇を許されたクリークは早速とばかりにベアトリーチエ号に乗り込み東の海へと出発するのだった。

## 原作開始 麦藁の海賊

「んー？コーニン海賊？どっかの海賊か？」

「だ・か・ら！！公認海賊！！なんで海賊やってるくせに公認海賊を知らないのよ！！」

羊を象った船首に麦わら帽子をかぶったドクロをもつキャラベル  
：高い操作性を持つ小型の帆船の甲板にて一組の男女が言い争いを  
していた。

彼等はい先日旗揚げしたばかりの新米海賊である。

少年の名前は”モンキー・D・ルフィ”、この船の船長であり、世  
にも珍しい悪魔の実の能力者、そして最近”海賊王になる”という夢  
の為に故郷を船出した少年である。

そして少女の名前はナミ、自称海賊専門の泥棒であり同じ海賊の方  
が対象に潜り込みやすいと判断してルフィ達と一時的に手を組んだ  
優れた腕を持つ航海士だ。

「そうは言ってもなー、ぶっ飛ばしたらいいのか？」

「だから海賊の名前じゃなくて制度の名前なの！あーもう、何であた  
しこの船に乗っちゃったんだろ…」

言い争いをしているというのは語弊があつた、どうやら黒髪で麦わ  
ら帽子をかぶったルフィに橙色の髪を持つナミが何やら必死に説明  
している模様だ。

「おいルフィ、おれが海賊旗作つた時に説明しただろ？このまま掲げ  
れば海軍から追われる事になるかもしれないって。

どうだ、今からでもこのおれに船長を変わらないか？そうさおれこ  
そキャプテン・ウソ…」

「ウソップちよつと黙ってて」

横から口を出した鼻の長い少年はウソップ、つい先日この一味に加  
わった少年で色々嘘をつくのが玉に瑕だがその狙撃の腕はとても  
優れた狙撃手だ。

そんなウソツプの言葉をナミに途中で止められたが。

「いい？公認海賊と言うのは海賊をやっていく上で必要な海賊旗を掲げるのに必要な制度なの。」

海賊旗を掲げるだけで一律10万ベリーの罰金になる事は知っているわよね？」

公認海賊について一から説明しようとはまず大前提を話すナミだったが

「知らん！」

と、この船の船長でもあるルフィ言葉に頭を抱える。

「ちよつとーゾロ！アンタもなんとかこの分からず屋の船長に言っやってよ!!」

ナミは説得の援軍とすべく名前を呼んだ青年は我関せずとばかりにイビキをかきながら寝ているのみ。

ゾロと言う名のこの青年は最初にルフィと手を組んだ人間で、元は名の知れた賞金稼ぎという過去を持つ凄腕の剣士である。

「おいおい落ち着けよナミ、うちの船長はちゃんと説明しなきゃ理解しないって、あと小難しく説明してもわかんないだろ？」

それもそうだと、とナミは気を取り直してルフィに説明を続ける。

「あーもー…説明を続けるわよ？公認海賊というのは海賊旗を掲げても海軍に追われない制度の事よ。」

勿論街や商船を襲ったりすれば違法海賊として海軍に追われる事になるけど普通に冒険や宝探しするだけなら海軍に追われる事はないわ。

アンタがこの前戦ったキャプテン・クロも公認海賊を隠蓑にしてたけど商船の襲撃がバレて賞金首になったらしいわ。」

前回戦ったキャプテンクロを例に説明すれば

「公認海賊を隠蓑に襲撃行為って怖いもの知らずだな…なあナミ、確か公認海賊で違法行為やると大佐クラスが出張ってくるって噂じゃなかったか？」

とウソツプの質問、なんでも公認海賊でありながら商船や一般の街の襲撃などを行うと本部大佐クラスが派遣されてくるという噂を小

耳に挟んだ事があるからだ。

「さあ？あたしも詳しくは知らないけどその前にクロは海軍に捕まったらしいわ。」

…最もそれは偽物で本物は捕まったフリをしてあのお嬢様のもとに転がり込んでたわけだけど」

「あいつは仲間を大切にしない奴だ、おれはキライだ」

前回の戦った相手を思い出したのだろう、ルフィは敵味方問わず無差別に攻撃する男を思い出して慥然とした表情。

「ルフィ、とりあえずそれは置いて説明を続けるわよ？」

公認海賊になるには最寄りの支部に言っただけで申請すれば審査と面談の上でなれるわ、はつきり言っただけのまま海賊を続けるんなら絶対に公認海賊になるべきよ？」

「最寄りの支部って言ってもその支部で何かエラソーなやつぶっ飛ばしたぞ？」

そのルフィの言葉にナミは

「そうだった…東方方面軍の支部で暴れたってこの前言ったわね…。」

…ホントなんであたしこんなのに協力関係とりつけたのかしら」

自分がルフィとゾロに出会う前の話を聞いた時に言っていた事を思い出し協力関係を組んだ事に若干の後悔をするナミ。

「にしし、気にすんなナミ！おれは航海士がお前で良かったと思ってるぞ！！」

ナミがいなきや目的地に着く事すらできなかつたしな！」

そんなナミの事は気にせず朗らかに笑いながら言うルフィ。

「黙らっしゃい！何で海に出る人間が航海術の一つも持ってないのよ！！」

とにかく！申請する場所についてはこのあたしにアテがあるわ。

だからルフィ、公認海賊になりなさい。公認海賊になれば海軍や賞金稼ぎに追われる事も無くなるわ、道中の安全は確保できるわよ？」

と、公認海賊になるメリットを説明するナミであったが

「んー…なあナミ、それってやっぱ本当の海賊じゃねえよ。」

人様から自由を保証されて海賊をやるってのは何か違うんだよな、  
シャンクスも絶対そう言うと思うんだよ」

と昔に想いを馳せながら言うルフィ。

「シャンクスって確かアンタにその帽子をくれたっていう人？かなり有名らしいけど…」

「ああ！おれはいつかシャンクスにあつてこの帽子を返さなきゃなんねえんだ。」

あの時おれは何も出来なかつた所をシャンクスに助けられた、だからおれは立派な海賊になつてシャンクスに会いに行くんだ！

その為にはそのコーニン海賊つてやつになるわけにはいかねえ、海賊は自由なんだ、そのコーニン海賊つてのは自由とはおれには思えねえ」

と、強い決意で断言するルフィ

「ねえルフィ、別にずっと公認海賊でいろつてわけじゃないのよ？もうちよつと準備を整えて戦力が整ったら公認海賊を脱退するつて形でも…」

「ヤダ」

「おいナミ…多分言つてもムダだぜ？多分テコでも動かないぞこの船長」

尚も言い募るナミであつたがルフィの否定と、ウソツプのその言葉を聞き説得は無理そうかな…と思いつつ

「はあ…どうか、どうか道中で襲われませんように…」

と名前も知れぬ神か誰かに祈るナミであつたが

「にししし！大丈夫だつてナミ！襲ってくる奴がいてもおれ達がぶっ飛ばしてやる!!」

そう言いつつ握り拳を作り”任せろ!”とでも言わんばかりに両手を打ちつけるルフィ。

「確かに腕は立つのよね、腕は…」

と戦う所を見てきたのでその戦闘力は認めているのだろう、頭を押さえながらそう言うナミであつた。

## 鉄拳の大尉

賞金稼ぎユニット”ヨサクとジョニー”

剣士であるゾロを兄貴分と慕う彼等からの情報により麦わら一味は航路を少し北へと向け海上レストランを目指していた。

そして数日後、彼等は海に浮かぶレストラン”バラティエ”へと到着していた、丁度運悪くそこには海軍の船。

「げ、海軍の船じゃねえか…」

「撃…撃ってこないよな？おれ達は海賊じゃねえぞ？」

恐々として見守っていると甲板に出てきたのは一人の男

「見かけない海賊旗だな…おれは海軍本部大尉”鉄拳のフルボディ”、船長はどいつだ？名乗ってみろ」

「本部大尉!?なんでこんな東の海に!？」

「なんでと言っても東方方面軍に出向に来てただけだが…まあいい、取り敢えず今は休暇中だ」

短髪にスーツ、コートなどは纏っておらずおおよそ海軍の人間には見えないが、その手には似つかわしくない鉄製のメリケンサックを嵌めている事から彼が戦闘を生業としている事が察せられる。

ヨサクとジョニーを相手に優位を保ちつつ下して見せた事からもそれは間違い無いだろう。

「本部の人間…しかも大尉ってベルメールさんクラス…終わった」

何事か小声でいいつつ落ち込む姿を見せるナミだったが

「さて海賊共、おれは今日は休業中だね…運が良かったなと言いたいところだが流石に見逃すわけにはいかねえんだ。

まったく、海賊將軍なんて名乗る馬鹿ものが片付いてようやくとれた休みだったのに…

とりあえず一昨日海賊旗を作ったばかりと言うのなら海賊旗の無断掲揚という事で罰金刑になるからこの書類に記入をしろ」

そう言いながら部下から受け取ったバインダーに何事か記すところらに向けるフルボディ

成る程、問答無用で捕まえる訳ではないと悟ったのかその文面にナ

ミは目をこらすと

「罰金10万ベリーって…払えるわけないでしょ!?ウチは今カツカツなのよ!」

思わず反論の声をあげる。

「分割は不可だからな、無理なら持つてる財産に対して強制執行という事になるが…その剣士、三本も持つてるんなら一本くらいいいだろう?」

「なっ!おれの刀は渡さねえぞ!!」

慌てて三本の腰の刀を庇うゾロに

「まあ無理にとは言わないがこの女、何か金目の物は無いのか?」

罰金が払えないならここで捕まって勾留か、若しくは労役刑となるが…」

とフルボデイは別の案を出す。

「ルフイ、働いて罰金を払う気は…無いわよね。

…そうだ!その海軍の人!ちよつと待ってて!」

そう言つてナミは船内に戻ると何やら袋を持って再び甲板に

「バギーから奪った宝があるわ!これで何とかならないかしら!」

「えー、こんなのぶつ飛ばしやいいじゃねえかよナミー」

「しやらつぶ!お金でカタがつくんならいいじゃない!あたしのだけどあたしのじゃないし!」

「…まあぶつ飛ばす気ならこつちも相手させてもらうが」

そう言いつつ小型軍艦から麦わら一味の船へひらりと飛び移ったフルボデイはナミの持つてきた袋を覗くと

「これで払えるかしら?」

「へえ上物だな、バギーから奪ったと言っていたが懸賞金1500万ベリーの道化のバギーから?どうやって?」

「どうやってって言つてもうちの船長がぶつ飛ばしただけよ、空高くぶつ飛ばしたからどこに飛んで行ったか知らないけど…」

「…まあいい、これだけのお宝ならこれとこれと…あとこれで10万ベリーくらいにはなるか?後は返してやる。」

しかし道化のバギーを破ったんなら腕はたつようだな、とりあえず



罰金は支払ったと判断するからその船長、この書類にサインをしろ」

「なんだお前、偉そうだな」

「いいからルファイ！きつさとサインしなさい！」

相手が海軍だからか敵愾心を見せるルファイだったがナミに頭をはたかれてしぶしぶ書類にサインすると

「モンキー・D・ルファイ…まさかな、とりあえず数日以内には海賊旗を下ろすなり公認海賊の申請をするなりしておけよ？とりあえず支払い証明は渡しておくがまた無断掲揚があるようだと罰金を支払う羽目になるからな？」

そう言つて書類の一部をナミに渡したフルボデイはそれだけ告げると自分の船に戻り悠々とバラティエに向かうのだった。

「おいナミ、あんな奴ぶつ飛ばしちやえばいいじゃないかよー」

「馬鹿ね、相手は本部大尉よ？本部大尉って言えばあたしも馴染みが深いから知ってるけどそんじやそこらの海賊は相手にならない筈…よね？」

それにもしやつつけたとして本部のそれこそ佐官クラスとかが出てきたらどうするつもりよ、あたしは安全を買ったの、罰金で片付くのなら安い物よ」

「なんだナミ、お前海兵の知り合いでもいるのか？」

ナミのそんな言葉に今まで蚊帳の外だったウソツプがそう聞けば「うん、あたしの世話になってる人が海兵なのよ。」

そりやもう強いなの…ひよつとしたらルファイでも敵わないかもね」

「げっ…どんな化け物だよそいつ…」

「と…に…か…く…海兵は片付いたしきつさとコックをスカウトしに行くわよ！」

ナミの決定により話は纏まり麦わらの一行はバラティエへと再度向かうのであった。

一方その頃海上レストランバラティエ船内でフルボデイは彼女と食事を楽しんでいた。

全ておまかせで予約していたがウェイター…自称副料理長の男には色々と言いたい事はあったが、中々の味で満足いく食事であり食後に二人でワインを楽しんでいると

「お嬢さん、こちらは当店からのサービスでございます。」

しかしお美しい、どうですお嬢さんよろしければ後でワインでも…」

再びくだんの副料理長が自身の彼女にサービスとしてフルーツの盛り合わせを提供、流れるように口説き始める。

当然フルボデイは面白くなく

「おい、いい加減にしろよコック。おれ達は二人で食事を楽しんでるのがわからないのか？」

と思わず立ち上がる。

「いやいや、いい女を独り占めつてのは世界の損失だろ、この美しい女性がおれとアンタどちらを選ぶかは本人の決める事だと思うが？」  
そのコック…サンジの言葉にフルボデイは思わず胸倉を掴みあげようとしたがそれはサンジの高く挙げられた脚に受け止められ

それを見た護衛として来ていた海兵二人が思わず銃をサンジに向けてと

「テメエら!!手を出すな…これはコイツとおれの問題だ」

フルボデイが静止するのと

「へえー…ここが海上レストランか!!うんまそーな匂いがするぞ!!」

「へえ、もつとこじんまりとした所かと思ってたけど中々の広さじゃない」

「別に飯と酒がありや文句をねえよ、それより鷹の目の噂をだな…」

「げっ、さっきの海兵!なんだなんだ喧嘩か?」

とガヤガヤと入ってくる四人の集団。

それに対して離れた所からフードを深く被った二人組が、離れた所からそれらの様子を

『なんか原作とだいぶ違う事になってるなあ?』

と感想を抱くのだった。

## 海のコック

「おいコック、サシで勝負つけようじゃないか」

その言葉と共に拳をサンジに突き付けるフルボデイ

「そんな！やめてあげてフルボデイさん！」

「悪いなムーデイ、自分の女に手を出されて黙ってられる程おれも温厚じゃなくてね…」

「へえ、いいぜ？男同士、サシの勝負だ」

「おい！誰かサンジさんを止めろ！」

「副料理長！やめて下さい！！」

「お？何だケンカか？それよりもメシ！メシ食わせてくれ！」

「ちよつとルファイ！そんな空気じゃないでしょ!？」

「そうだぜルファイ！巻き込まれねえうちにサツサと出ようぜ!？」

「へえ、あの金髪野郎、腕は立ちそうじゃねえか…」

にわかに混沌とし始めた店内であつたが

「またテメエかサンジ！何回騒ぎをおこしやあ気が済むんだ!!しかもその人は海軍大尉じゃねえか!!」

ねじり鉢巻をした一人の厳つい顔をした男の一括で落ち着きを取り戻す。

「何だお前か、くそコック。」

「くそコックにくそコックと呼ばれる筋合いはねえよ！取り敢えずどういう状況だ!!」

手近にいたコックにそう聞く男：パティは”サンジがフルボデイの女を口説き始め、それに対してフルボデイが決闘を申し込んだ”という事を聞けば

「また女か！何度女で問題を起こす気だテメエは!!」

「うるせえ、相手が決闘申し込んで来たんだから別にいいだろ?」

と、言い争いを始めた二人のコックであつたが

「好きにさせてやれ、それよりも客を待たせてんじやねえぞバカ共！さっさと仕事しねえか!!」

「オーナー!？」

「くそじじい…」

年嵩で髭を三つ編みにした義足の男の一喝で中断される

「それからサンジ!やるんなら外でやれ!また調度品を壊されても敵わん!!」

「申し訳ないオーナー殿、料理は美味かったですけどどうにもこの男が気に入らなくてですね…」

「好きにしろ、いつそ一回ボコボコにしてくれても構わん」

その決闘相手の上司としてはあまりな言い様にフルボデイは頬をひきつらせるのだった。

ようやく店内は落ち着きを取り戻しサンジとフルボデイは表に、野次馬達もそれに続いて出て行く。

「先に有効打を入れた方が勝ちって事でどうだ？」

「構わん、どつからでもかかってこい。おい!お前は審判を頼む」

フルボデイは部下の海兵に審判を頼み半身になって構える

「では僭越ながら審判を務めさせていただきます、双方…始めっ!!」

その言葉と共に先手をとったのはフルボデイ、鍛え上げられた左腕が唸りを上げて拳をサンジに叩きつけんとするが

「なかなかの威力だが…あめえよ!!」

その拳はサンジの右足によって受け止められると、今度はフルボデイに対して左足が襲いかかる。

しゃがんでそれを躲し距離をとるフルボデイは

「成る程、さつきもそうだったがお前足技使いか、ポケットに手を入れてたままって事は足技オンリーの体術だな?」

「ああ料理人にとっちゃ手は命なんでね、戦闘で傷つけるわけにはいかねえんだ。

アンタもこの足で仕留めてやるよ。」

「言ってくるじゃねえか…こちとら海賊相手に日夜命を張ってんだよ、そう簡単に言われちゃあなあ!!」

その言葉と共に右拳だけでなく左拳にもナックルダスターを嵌めるフルボデイ。

そんな緊迫した空気を他所に

「なあルフィ、ナミどっちが勝つと思う？」

二階からそれを見る野次馬達の中にルフィ達の姿はあった。

「あたしが知ってる本部大尉と同等の実力ならあのコックの人が負けると思うけど…というかルフィ、アンタその料理どつから持って来たのよー！」

「なんかフードの人間のところにいっぱいあったぞ!!」

「お前他のお客さんの料理かっぱらったのかよ!…まあ置いておくがルフィはどっちが勝つと思う?」

「どっちが勝つかわかんねえけど…欲しいなあのコック」

眼下で戦う二人を尻目にそう言い合う三人だったが

「コックにしてはやるな…」

「アンタもなかなかやるじゃねえか、悪かったな彼女に手を出して…だがこつからはちよつと本気で行かせてもらおうぞ!!」

その言葉と共にまるでサンジが消えたかのように身を動かすと

「なっ!はや…グっ!!」

一瞬のうちに距離があつた筈のフルボデイの真横に出現、左足を大きく振り抜く。

「へえ、今のが見切れたのか。流石本部大尉つか?」

「ちつ…まさか元・海兵か!?その歩法は”剃”じゃねえか!」

「残念ながらおれはタダのコックさ、海兵だった覚えなんてねえなっ!」

それと共に再び消えたかのように移動すると今度はフルボデイの頭上に現れ

「コリエ…スライス!!」

それを何とか首を捻る事によって回避するフルボデイだったがその感触に首の部分に手を当てると

「嵐脚…じゃねえが斬撃を纏った蹴りか、ほんと何者だお前…」

そこには薄皮一枚切り裂かれて血を流す小さな傷。

「昔…まだおれがガキの頃に親切なおっさんが教えてくれたんだよ、まあまだ使えねえ技もあるがな」

「ちつ、何処のバカだ自力で覚えたならまだしも外部に六式を漏らすなんて…」

その言葉と共に大きく身を屈めて両の拳でラツシュを繰り出すのだった。

「ぶあつくしよい!!ええいこんちきしよう…」

「どうしましたボス?風邪ですか?」

「んにや、大丈夫だ…にしても随分と予想と違う方向に行ってるな…」

「大丈夫ですかね?鷹の目も目撃情報がありますし…」

「まあ何らかのフォローは必要だろうな、流石に相手が悪いだろうしな」

「しかし何でボスはあの麦わらを気にしてるんですか?しかも半年も休暇扱いまでしてもらって、バギーの搜索やクロの捕縛など裏からフォローするような形で色々と動いてるようすし…」

「ガープ中将の孫で、赤髪からも目をかけられて、そして”あの男”の息子でもあるんだぜ?

それにあの性格、どっかの誰かを思い起こさせるし絶対何かやらかすぞ?」

「まあ道中で潜水艦から偵察していた様子ではそれは否定できませんが…」

「兎に角、何かおおごとをおこした時に直ぐにフォローできるようにしといた方が絶対にマシだと判断したんだよ、嫌だぜ?あの血筋が表に出てくるのは…」

と、こちらに運ばれた食事をパクっていったその顔を思い出しながらクリークはため息を吐くのだった。

## 海軍の乱入

海軍大尉のフルボデイとバラティエのコックである決闘の決着はしばらくするとお互い中々にやるな、と友情でも芽生えたのかお互いに謝罪し合う事で決着はついた。

「数日中に海賊旗はおろしておけよ、じゃないとまた罰金とられるぞ？」

と忠告するフルボデイを他所にルフィを見てないところで舌を出してフルボデイ達は去って行った。

そしてサンジとフルボデイの戦闘を見ていたルフィはスカウトするターゲットを定めたのか早速とばかりに声をかけに行く。

そしてその後更にサンジの料理を食べた一行は腕も確かという事でサンジに対して連日、猛攻勢をかける。

サンジはナミからの攻勢にデレデレしつつも流石に自分の事情から海賊になる気は無い為それを断っていた。

「…オーナーを勤めるゼフからは、いい機会だから海賊になっちゃまえ」などと言われる始末。

とは言えサンジもそう簡単に肯けず事態が動いたのはそれから3日後、バラティエは開店準備を、麦わらの一味は停泊していたゴーング・メリー号にいた時の方である。

それは乗せてもらっているという事で見張りを行なっていたジョニーの声で始まった。

「あ…あの赤い海軍マーク！カモメの水兵団の船じゃねえか!!」

ルフィの兄貴!!直ぐに海賊旗を下ろしてください!!赤カモメの船がこつちに来てますよ!!」

とジョニーは悲鳴のような声を上げるが

「んー?赤カモメ?何だそれ?」

とルフィは気のない返事に、ゾロはまた壁によりかかりイビキをかいている。

「バカっ!!あんた何で海賊になるって言うてくるくせにカモメの水兵団

を知らないのよ!!」

「カモメの水兵団って言ったら確か海軍のベテラン部隊だったか？」

ウソツプのその言葉に

「ああ、アンタもその程度しか知らないのね…」

いい？カモメの水兵団は主にグランドラインを中心にたまに東西南北の海を巡回しているわ。

しかも本部の海兵達、その中でもスゴ腕揃いで構成されているから一般の海兵よりかなり強いわ。

だからあの”赤い海軍マーク”！アレを見たら全力で逃げるのが海賊の間では常識なのよ!!」

「…赤い海軍マーク？」

ナミのその言葉と共にあまり気にして無かったルフィがその船を見れば目に写るのは”過去に見た記憶のある”真紅に染まる海軍のマークを見て顔色を変えた。

「おいルフィどうした？」

雰囲気の変化に気付いたのかウソツプがそう尋ねるも

「…いや、何でもねえ。それよりもナミ、やっぱ見つかると不味いか？」

「当たり前でしょ!?!アイツらは今までにも沢山の海賊を捕まえてきたのよ!?!」

「ゾロ、おきろ！ウソツプも手伝ってオールを漕いで船をレストランの裏に回してくれ、帆をあげてないならまだこっちが海賊とはばれてねえ筈だ」

直ぐ様指示を出すルフィにナミは意外な物を見るような目で

「…アンタがその選択をするなんて意外ね、やっぱカモメの水兵団に何かあるの?」

と聞く。

「…昔ちよつとな、でも周りに海賊は見当たらねえし何しに来たんだアイツ等」

とゴーイング・メリー号をバラティエの影に隠しつつ話し合うナミとルフィ。



「…とりあえずバラティエに様子を見に行くわよ。」

ウソツプとそこの賞金稼ぎコンビは船を見張ってて！ゾロとルフィはあたしと一緒に来て、奴らの狙いが何なのか確認するわよ！…流石に食事をしに来ただけなんて事は…無いわよね？」

そしてナミのその推理は正しかった。

開店準備を行なっていたバラティエに踏み込んできたのは背中に赤い海軍マークを持つ部隊。

代表者らしき海兵が何事か、と出てきたオーナー含めたコック達に「私は海軍独立遊撃隊のユキムラだ、少将を務めさせてもらっている。今回はこの海上レストランのオーナーである男に少し話があつて来たのだが…貴方がこのオーナーでよろしいか？」

長い茶色のくせつ毛を持ち、腰には日本刀。

そして背中に赤い海軍マークのコートを羽織ったその男は自らを少将だと告げオーナーであるゼフと話をしに来たと告げる。

「…オーナーはおれだが何の用だ？」

赤い海軍マークで察したのだろう、ユキムラの言葉にゼフは警戒しつつも答えれば

「貴方が数年前に海難事故で亡くなった”赫脚のゼフ”というのは事実ですか？」

と直球での質問。

流星に何の確証も無くここまで来たとは考えづらい為ゼフ「…だったらどうした、今更捕まえに来たのか？」

そして

「場合によっては…貴方を連行をさせて頂く」

と腰の刀に手をかけるユキムラ。

それを窓の外から見ていたナミは

「赫脚のゼフ…数年前に亡くなった筈の海賊ね。」

ここのオーナーが元海賊でカモメの水兵団はそれを知って事情聴取に来たってどこかしら？」

と側にいたルフィに教える。

「なるほど、なら今のところは大丈夫だな」

ナミのその言葉にルフィは安堵した様子だったが

「カモメの水兵団のユキムラ…まさか”千人斬り”のユキムラか!?”

ゾロは少将であるユキムラという名を知っていたのか驚いたように目を見開く。

「しっ！もうちよつと様子を見るわよ…」

ナミのその言葉と共にそつと窓から中の様子を伺う三人であった。そして

「いきなり何だよテメエら！クソじじいは連れて行かせねえぞ!!」

その言葉と共に一人の男がユキムラのオーナー・ゼフの間に立ち塞がった。

片目を隠した金髪に黒いスーツのその男は敵意を見せる目でユキムラ達カモメの水兵団を睨みつけるのだった。

## 最強の剣士

バラティエ内ではコック達と海兵達による緊迫した空気が漂っていた。

一方ルフィ達は窓からそれを見ながら、状況を把握しようとしていた時の事である。

「少将・奴が…」鷹の目”が追って来ました！」

若い海兵が息を切らせながらユキムラに対してその報告を行った。

「まだ諦めてなかったのかあの男は!!東の海までは追って来ないだろうと思ってたがしつこいな!？」

各自警戒態勢!赫脚については後回しだ!!」

その言葉と共に海兵達は外へ、そして自身が探していた”鷹の目”という言葉聞いたゾロもナミの制止も聞かずそちらへと駆け出した。

そしてそこにいたのはまるで十字架のような帆柱に棺桶のような形の小さな船。

そしてそこに腰掛けていたのは一人の男。

「アイツが…アイツが鷹の目…」

黒の帽子に黒のロングコート、そして背中には巨大な剣と”まるで鷹であるかの様に”鋭い目つきの男。

そして警戒態勢をとる海兵達と

「いつまで追って来るつもりだ!前も言ったが我々海軍と七武海が争う理由は無い筈だ!!いい加減諦めたらどうなんだ!!」

その先頭に出てきたユキムラは大音声で叫ぶ。

ユキムラとしてはミホークとやり合うつもりは無い。

自身が剣術に優れた腕前を持つという自負はあるが、相手が相手だしわざわざ本部少将と七武海がやり合っても喜ぶのは違法海賊だけであるからだ。

というか新世界から出て来たのをなんで知ってるんだ…と思いつつもこれは一戦交えねば仕方ないか?と思いつつ腰の刀に手をかける。

そんなユキムラの考えを他所に

「ぶあつくしよい!!ええい、またか!!」

「ボス、ホントに風邪じゃないんですか? 一回医者にみてもらいます?」

と遠くから望遠鏡でバラティエを見守るフード姿の二人組がいたがこれは一旦置いておく。

「…笑止、おれはやりたいようやるだけだ。」

”千人斬り”の噂は聞いている、貴様がいるのが新世界だった故に今迄は戦う気はなかったが…

貴様がこつちに出て来たとなれば話は別、是非その名高き剣技を見せてもらおう」

そう言ってミホークは立ち上がり、ユキムラへと相對しようとした時の事だった。

「おい鷹の目、その前にこつちの相手をしてくれよ…」

そう言って一人の青年が前に進み出ると刀を取り出してその内の一本を口に咥える。

「三刀流…まさかお前は”海賊狩り”か!!」

それを見てこの海での情報を頭に入れていたのかユキムラがそう叫び

「哀れなり、弱き者よ…お主も剣士なら剣を交えぬともおれとおまえの力の差くらい見えるだろう。何故おれに刃をつきつける?」

ミホークはその鋭い目をユキムラから前に出てきた男、海賊狩りのゾロに目を向けた。

「おのれの野望故、そして親友との約束の為だ」

「野望か、はたまた蛮勇か。お主は何を目指す?」

「最強…しかしまさかこんなに早く会えるたあ正直思わなかったぜ?」

「…無益」

そしてその言葉と共にミホークは首に下げた小さな剣を構える。

「…テメエ、なんのつもりだ？」

明らかに手を抜いたミホークにゾロは激昂しそうになるも

「おれはウサギを倒すのに全力を出す馬鹿なケモノとは違う…、多少名を上げた剣士がいた所でここは最もアベレージバウンティの低い最弱の海。

生憎これ以下の刃物は持ち合わせていないのでな」

世界最強の剣士という自負故か本気でやるつもりは無い、と言外に宣言するミホーク。

「っ…死んで後悔すんじゃないぞっ!!」

その言葉と共にゾロはミホークに向かって猛然と進み

「井の中の吠えし蛙よ…せめて世の広さを知るが良い」

そして繰り出されたゾロの三刀をミホークは小剣の一突きで受け止めたのだった。

「なっ!?いくら最強の剣士とて刀三本によるあの猛威を一点で受け止めるか!!」

っ…いや、流石に相手が悪いか…」

その光景を見ていたユキムラは驚いたように叫ぶも直ぐに考え直す。

相手が最弱の海の剣士とは言え”海賊狩り”の名は優れた剣士であるユキムラの耳にも届いている。

見たところ先程の技は三刀の衝撃を一点に集中させ相手を吹き飛ばす技だろう。

しかし相手は世界最強の剣士、その名は海軍にも大きく轟いている。

そして三刀を軽く受け止められたゾロは、それを認めたく無いかの如く叫びながら三刀を操り猛然と立ち向かうも

「あのゾロの攻撃を簡単にあしらうなんて…ルフィー!ゾロを助けないと!!」

いつの間に来ていたのだろうか?横には見慣れぬ男女姿

「っ…駄目だ!アレはゾロの鬪いだから手を出しちやいけねえっ!!」

今にも動き出そうとする自身の身体を抑え歯を食いしぼる少年の姿に

「…ルフィ」

と少女は言葉を無くし、その言葉にユキムラは察する。

おそらく海賊狩りの仲間なのだろう少年は今にも動き出そうとする体を必死で抑え、少女もそれを察したのだろう。

「成る程、君たちは海賊狩りの仲間か」

「少将の人！何なのあの剣士！ずっとゾロが探してた鷹の目の男ってのは知ってるけどゾロの攻撃をああも簡単に捌くなんて…」

少女のその言葉にユキムラは

「…あの男の名は”ジュラキユール・ミホーク”、王下七武海の一角にして”鷹の目”の異名を持つ最強の剣士だ。

海賊狩りの名はわたしの耳にも届いているが…流石に相手が悪い。」

と答えれば少女はその言葉に

「最強の剣士…だからゾロはあんなに必死に…」

猛然と刀を振るうゾロを見ながら少女が口からもらせばその視線の先でゾロがミホークの小剣に胸を突き刺された。

その衝撃的な光景に少年少女は海賊狩りの名前を叫ぶもゾロはそこから下がろうとせず

「…何故退かぬ、このまま心臓を貫かれないのか？」

とミホークはそのままの態勢でゾロに問う。

「…さあな、ここで下がっちゃうまえば今までの誓いとか約束とか…そんな大事なモンがへし折れて、そして二度とこの場所に帰ってこれねえって気がすんだよ」

と小剣を胸に刺されたまま返すゾロ。

「そう、それが敗北だ」

とミホークは鋭い目でゾロと目を合わせそう告げる。

「…じゃあ尚更ひけねえな」

「例え命を落とそうともか？」

「へっ…死んだ方がマシさ」

そんなゾロのその言葉と目つきにミホークは感心しつつ

「…小僧名乗ってみよ」

そのまま深く刺せば決着がついたであろう小剣を引き抜きつつ問う。

「ロロノア・ゾロ」

「覚えておこう、久しく見ぬ強き者よ。」

そして剣士たる礼儀を持って世界最強たるこの黒刀によって沈めてやろう」

と背中に背負った巨大な刀を引き抜き、それに対してゾロも傷を堪えつつ三刀をゆっくりと構える。

そして息を大きく吸い込むと

「三刀流奥義…三・千・世・界!!」

両手の刀を回転させその遠心力から今までとは比べ物にならない破壊力を伴う斬撃を繰り出すも

「っ!!」

「ゾロおっ!!」

ミホークの一閃により両の刀は砕かれ、そしてミホークに背を向けたゾロは残った一本を鞘に納めるとクルリと向き直る。

「何を…」

自ら弱点を晒すその姿にミホークは思わず疑問を漏らすも

「背中の傷は剣士の恥だ」

そう言ってニヤリと笑ったその姿に

「見事!!」

とだけ応えて”夜”を振り下ろした。

両者の戦いを見ていたサンジは理解できない者をみる様子で

「っ…何でだ…簡単だろ…野望を捨てるくらい!!」

とまるで自身に言うかの如く拳を握りしめ

「ゾロおおおっ!!うわあああああっ!!」

ルフィはその腕を大きく伸ばしてミホークの元に。

そしてショックを受けたかのように両手で口元を抑えるナミを他所に

「成る程、あの少年は能力者か：各員！倒れた海賊狩りを救出せよ！！  
そして海兵であるなら先程の戦いをしかと目に焼き付けておけ！！」  
その横で見えていたユキムラが指示を出し数人の海兵が海に飛び込む。

そして自身の元に飛んできたルフィにミホークは

「若き剣士の仲間か：貴様もよく見届けた」

軽くその突進を避けるとルフィが衝突した側まで移動すると

「安心しろ、あの男はまだ生かしてある」

と告げる。

その言葉と共にルフィがミホークの指差す方向を見れば

「君っ!!しつかりしなさい!!」

「早く安静な場所に運べ!!それから医療班を手配しろ!!」

そんな海兵達の言葉と共に大きく咳き込むゾロの姿。

そしてそんなゾロにミホークは息を吸うと

「我が名はジュラキュール・ミホーク!!」

貴様が死ぬにはまだ早い、己を知り！世界を知り！そして強くなれ

！ロロノア!!

おれは先、幾年月でもこの最強の座にて貴様を待つ！

猛る己が心力を挿してこの剣を越えてみよ!!

このおれを越えてみよロロノア!!!」

そう大音声にて叫ぶのだった。



## 剣士の誓い

決着がつき、ミホークがゾロに対して宣言を行った。

「…あの鷹の目にあそこまで言わせるとは、これはわたしもうかうかしてられんな」

自らも剣士である故か鷹の目と海賊狩りの戦いに何かの感銘を受けたのだろう、次の世代が育ってきていると感じるユキムラ。

「あの鷹の目って男…多分ベルメールさんよりも…じゃなかった！ゾロ！大丈夫なの!？」

自分の敬愛する保護者を思い出しつつも中断し、慌てて自分の仲間の元に向かうナミ。

「どうして…どうして自分の夢にあそこまで愚直になれるんだ…」

何かを気に入らないかのように見下ろすサンジ。

そして決闘を見て鷹の目の言葉に驚くゼフや騒ぐウソップ、自身の兄貴分を心配してして駆け出そうとするヨサクとジヨニー。

そしてミホークに相対したルフィは

「小僧、貴様は何を目指す？」

というミホークの問いに

「海賊王」

とだけ返し、それを聞いたミホークはクツクツと小さく笑う。

「タダならぬ険しき道ぞ？…このおれを超える事よりな…」

「知らねえよ！これからなるんだからな!!」ってゾロ！ゾロは大丈夫か!!

とミホークに対して舌を出し、直後そんな事やってる場合じゃないと胴を袈裟斬りにされたゾロを心配するルフィ。

そのタイミングで横になったゾロが残った一本の刀…”和道一文”を天へ突きつけた。

「ル…ルフィ…聞こえるか？」

「ああ！聞こえてる！無理すんじゃないやねえ！」

「不安にさせたかよ…おれが世界一の…剣豪に”くらい”ならねえと

お前が困るんだよな…!!…ガフツ!

「君!あまり喋るな!!重要な臓器は無事とは言え重症なんだ!!」

「あまり喋ると身体に響く!医療班を急がせろ!!」

喋るゾロを嗜める海兵達であったがそれでもゾロは大事な事を言うべく力を振り絞る。

「おれは!もう…二度と負けねえから!!」

あいつに勝って大剣豪になる日まで…絶対にもう!おれは負けねえ!!

文句あるか!海賊王つ!!」

そんなゾロの叫びにルフィは

「しししっ!ないっ!!」

と返すのだった。

「いいチームだ…また会いたいものだなお前たちとは…」

千人斬りのユキムラ!おれは今回満足した!貴様の剣技はまた次の機会に見せてもらうとしよう!」

ミホークはゾロの言葉にニヤリとしつつ大音声で告げ去ろうとするが

「鷹の目のミホーク!今回わたしを追ってきて攻撃しようとした件は政府に報告させてもらうぞ!!」

とうか違法海賊も公認海賊も、そして海軍まで一緒くたに腕の立つ剣士がいれば勝負をふっかけるのをやめる気は無いのか!!」

ユキムラのその言葉にミホークはフツと笑うと背中に背負う最上大業物12工が一振り、”夜”を引き抜くと大きく海に斬りつけた。

それにより起こった海煙に目を瞑り、一同が再び目を開けた時にはミホークの姿は小船もろとも居なくなっていたのだった。

そしてゾロは直ぐにユキムラ達が乗って来た船であるシャーロット・アンジエ号へと運び込まれ治療を受ける。

無事に治療は終わったものの、数日は安静にした方がいいだろうという軍医の見立てによりまた暫く麦わらの一味はこの辺りに滞在する事が決定したのだった。

「所で君、先ほどあの少年が海賊王云々と言っていたが君たちは海賊

なのかな？」

「ギック!!あは…あはははは…」

「…どうもあのキャラベルタイプの船が君達の船みたいだが髑髏に麦藁の海賊旗が掲げてあるな」

「あはははは…罰金ならこの前ちゃんとお払いしましたよ？」

笑って誤魔化そうとしたが海賊旗を掲げている以上言い逃れはできないだろう、船は裏手に隠したまま来ればいいのになんでウソツプもヨサクとジヨニーもノコノコと出てくるのかしら…とゴーイング・メリー号の甲板で右往左往する三人を尻目に後でとっちめてやる、と握り拳を作るナミに

「罰金の領収控えは…ああ、ちゃんと持っているな。」

という事は公認海賊でも無いのか、髑髏に麦わら…特に報告は上がっていないな」

「そりゃあそうよ、海賊旗作ってまだ一週間も経ってないんだから」

部下から渡されたファイルをめくりつつ確認するユキムラに胸を張って答えるナミ、というカルファイ達が方面軍支部で暴れた件については旗を掲げていなかったからだろうか、犯人だとはバレてはいないのだろう。

そんな年齢不相応な胸を張るオレンジ色の髪の少女にユキムラは少し思案して

「ならこれを渡しておこう」

と懐から一枚の紙を取り出してナミに渡す。

「…これは？」

名前や年齢、性別等の個人の欄の他に船の種類や外観、旗のイラストなどを書く欄が見てとれる。

「公認海賊の申請用紙だ、代表者がこれを書いてこの先どこかの支部で提出して審査と面談を受けなさい。」

合格すればシリアルナンバー入りの公認海賊旗を発行してもらえらるから海賊旗を掲げる時には必ず公認海賊旗を掲げるんだ、いいね？」

と、ユキムラは念を押す。

「公認海賊旗…ああ、青十字の旗の事ね。…因みに急に捕まえたりしないわよね？」

書類を受け取りジリジリと後退しつつ言う少女だったが、その姿にユキムラは軽いイタズラ心で

「何だ？何か違法行為でもやっているのか？そうであれば遠慮なく我らカモメの水兵団が君たちを捕らえさせてもらうが…」

と軽く脅してみる。

「いえー何もやってないですよ!?!じゃあ少将さんもお仕事頑張ってくださいねー？あははははー！」

スザツと後退り早口でそれだけ言うたダツシユで逃げていく少女にユキムラは”少し脅しが効きすぎたか？”などと考えるのであった。

最もナミがその時思っていたのは

”方面軍支部でルフイ達が暴れたのは秘密にしておこう”、というものと

”カモメの水兵団が襲ってくるなんて冗談じゃ無いわ！確かベルメールさんの古巣の筈、要するに化け物だらけて事じゃない!”、という二つの事柄であった。

## 剣聖遭遇 ドンクリーク

麦わら一味がバラテイエにてわちやわちやしている頃バラテイエから少し離れた場所に一隻の小型艇が海にプカリと浮かんでいた。「げっ！こつち来やがった!!ギン！潜航しろ潜航っ！あんな剣お化けとマトモにやってられっか!!」

こちらに向かつてくる船影にクリークは慌ててギンに指示を出すも

「ボス！間に合いませんよ！相手の方が早いです!!」

相手の方が速いようでもこちらが潜航するより前にミホークは立ち上がり、背中の”夜”を引き抜きまだ距離はあるものこちらへと振り下ろした。

「あんの辻斬りお化けがっ!!嵐脚っ・大辻旋風っ（おおつじつむじ!!）直ぐ様潜航を中断させハッチを開けると甲板に出て十字状の斬撃を重ねて繰り出す。

ミホークも本気では無かったのだろうか、十分に力が籠ってない嵐脚であったが飛翔した斬撃はぶつかり合い霧散した。

「ほう、やはりクリーク貴様だったか。

コソコソとネズミが覗いていると思えば探したら覚えのある気配だったものでな」

「だからって普通いきなり斬りかかるか!?そんなんだから海軍で辻斬り扱いされるんだよ!」

「ふん、貴様ならこの程度問題無いだろう。

で?わざわざ千人斬りが東の海に行く事をそれとなく情報を広め、そしてこつちを覗いていた理由を聞かせてもらおうか?」

その言葉と共にミホークは夜を構える。

「だから剣で会話しようとするなっ!その剣を仕舞えっ!そして対話をしろっ!!」

と剣馬鹿に言えば

「…ふむ、ここで貴様とやり合うのもいいと思ったが。

まあいい今おれは先程の戦いで満足している、で？コソコソとしていた理由は？」

そう言つて夜を背中に仕舞い直すミホークにクリークは安堵の息をつくと

「ギン、”イカルガ”をベアトリーチェ号へ。ミホーク、詳しくは船で話してやる：なんならこつち乗るか？二人乗りだから狭いかもしれんが：」

「：いや、おれはこの棺船があるからいい」

そう言つてクリークとギンは小型潜水艇で、ミホークは棺船にてベアトリーチェ号へ向かうのだった。

そしてイルカ型の小型潜水艇、”イカルガ”をベアトリーチェ号の船内に格納するとミホークと連れ立ち食堂へ

「おかえりなさいクリークさん！そつちのおひげの人はお客さん？」

「ああ、アデルちゃんすまないがコーヒーと：何かつまめる物を二人分お願いしてもいいかな？」

「はい！ちよつと待つてて下さいね？お客さんはコーヒーでも大丈夫ですか？」

「：ああ」

そこにいたのはシュライヤの妹であるアデル、彼女はこの船に給仕として乗り込んでいた。

この船、ベアトリーチェ号には緊急時の船大工としてシュライヤ、蒸気窯の技師としてビエラが乗り込んでいる。

元々この船はサラマンダー号を改修した物である、シュライヤは改修に大きく関わっているしビエラも元々この船のボイラーマンである。

餅は餅屋という事をお願いしたところ二人は快諾、そしてアクアリア社の食堂にて手伝いをしていたアデルと一緒にいきたいと言う事で同行をせがんで来た為彼女も搭乗していたのだ。

ぱたぱたと駆けていくアデルを見ながら

「：相変わらず子供には優しいようだな」

「子供は守るべき者だろう、未来の宝だぞ？」

「ふつ、その顔でそれを言うか、聞いたぞ？子供に怖がられる事も多いとな」

「ちっ、おれの顔についてちゃ自分の方がよく知ってるよ。」

まあいい、それは置いておくとして本題だがおれがわざわざ遠くから伺った理由だがあの麦わらに関してだ。

何か知ってるか？」

アデルが置いていったコーヒーを片手にミホークに聞けば

「…昔、赤髪に聞いた事がある、ある小さな村の、面白いガキの話…あの麦わら帽子は赤髪のものだろうか？」

まあ貴様が注目している理由にしては弱いと思うが…」

そう言いながらこちらにもコーヒーをゆっくりと飲むミホーク

「そう、赤髪のシャンクスから帽子を受け継いだあの少年。奴の名はモンキー・D・ルフィ」

「モンキー・D…拳骨のガープの縁者か？」

「ああ、ガープ中将の孫だ。」

そして奴の性質はかつてこの大海賊時代の始まりを作った男にとっても良く似ている、言いたい事はわかるか？」

「…そういう事か。貴様、奴を育てるつもりだな？」

「…まあな、流石に海軍でも手を出せない部分は多くてな…例えば砂の国や雪の国とかな？」

「クハハハハッ!!海兵の貴様が海賊を育てるか!!勿論上には言っていないのだろうか？」

「当たり前だろ、バレたら俺の首がこうだよこう」

そう言って自身の親指で首を搔っ切る仕草をするクリークに

「だろうな、海軍が国の運営に介入するのは内政干渉にあたるだろうしな、世界政府の者共が認める筈もなからう？」

「だからこうして回りくどい真似をしてんだろ？」

まあ原作知識云々は言えないからな、麦わら達にはこれから行く先々で大立ち回りをしてもらおう必要があるからな。

ビッグマム編以降はよく知らないが彼は世界を変えるだろう、年長者として世界の先行きを若者の双肩に乗せるのは気が進まんがな。

「成る程、貴様が裏で動いていた理由に得心がいった」

「覚悟しておけよミホーク、これから奴は嵐を巻き起こすぞ？世界の全てを巻き込むような大嵐がな！」

その言葉と共にクリークはニヤリとミホークに対して笑うのだった。



## コックと剣士

サンジは麦わら帽子をかぶった黒髪の少年…ルフィの攻勢の前にたじたじとしつつも自分の夢である”オールブルー”などを話したり聞かせつつもモヤモヤとしたものを心に持っていた。

今回はそれを払拭すべくバラティエの船内にて治療中のあの剣士の元へ向かう。

「おい、ちよつといいか…って何やってんだ？大人しく寝てねえと治るもんも治らねえぞ？」

そこでは寝ている筈の青年…ゾロが床で腕立て伏せを行っている姿。

「何だ、ルフィの仲間になる決意でもしたのか？」

突然の来客に立ち上がりつつベッドに腰掛けるゾロに

「いや、テメエに少し聞きたい事があつてな…鷹の目とやり合った時、胸を刺された時だ。」

何故あそこで退かなかつた？あのまま続けてりや死ぬとは思わなかつたのか？」

サンジはここに来た目的を軽い口調で話す。

「…簡単だ、あの時あの場所で後ろに退がればそこで何か色んなものが折れちまう気がしたんだよ」

「折れちまう…か。そんなん命あつてのもんだろ、あそこで死んでたらどうする気だったんだ？」

「違え、例え死んだとしてもあの時あの場で退くんなら死んだ方がマシだ」

「…分からねえ、テメエの夢は世界一の剣豪になる、だったか。あの麦わら帽子が言つてたぜ？」

夢の為なら例え命を落としてもいいって事か？そんななれるかどうかかわかんねえものの為に？」

「少し違えな。なれるかどうかじゃねえなると決めたんだよ。」

なあコック、テメエには成し遂げたい夢はねえのか？」

ゾロは自身の気持ちを話しつつサンジにそう尋ねる。

「…無いわけじゃねえ」

「だったらその夢を…」

「そんなん二の次だ、おれは昔からくそジジイに命を救われた、そして何もかも奪っちまった。

だからおれはここでジジイに恩を返さなくちやなんねえ、悪いが仲間を他をあたつてくれ」

と、”あの時”の事を思い出しつつそう言うサンジ。

「そう言うがそれを俺に言われてもな…後ついでにうちの船長が諦めると思えねえがな」

そんな事を言うゾロにサンジは頭の中にあの麦わら帽子を思い浮かべつつ軽いため息を吐くのだった。

「なあ！おれと海賊やろうぜ！！」

「だからしつこいっての！おれは海賊にならねえって言ってるだろ！！」

フロアに戻って来ればこれである。

「でもあのオールブルーってやつ気になんだろ？一緒に海賊になつて見つけに行こうぜ！」

オールブルーの事を話したのは失敗だったか…と思いつつ

「だからおれはここを離れるつもりは…」

と拒否しようとした所で

「いいじゃねえか、海賊にでもなんでもなつちまえ。

客とはすぐ面倒を起こすし女とみりや直ぐ鼻の穴を膨らます、ろくな料理も作れねえしテメエはこの店にとってお荷物だと言ってるんだ」「くそジジイ…テメエ！他の何を置いてもおれの料理を貶すとは何事だっ！！」

思わずゼフの胸倉を掴むサンジだったが

「オーナーの胸倉を掴むとは何事だボケナス！！」

ゼフのその言葉と共にサンジは投げられ地面に叩きつけられる。

「ちっ、おれはなあ！何と言われても船を降りねえぞ！それこそテメエが死ぬまでなっ！！」

「ふん、おれが死んだら船を降りるのか？」

「っ…知るか!!」

「…おいボケナス、てめえまだあん時の事を気にしてんのか？」  
強情なサンジの目の前にゼフが座り込みそう尋ねる。

「…悪いかよ」

そっぽを向きつつ答えるサンジにゼフは

「おれはな、テメエに守られる程落ちぶれちやあいねえつもりだ」

「だけど！おれはあの時テメエから何もかも…力も夢も奪っちゃまったんだぞ！あん時アンタはおれを見捨ててりや良かったんだ!!」

そうすればアンタの足は…アンタの”赫足”は残ってたんだ！ならおれはそれに対して命をかけてでも返すしかねえだろうが!!」

今までの心のモヤモヤを拭い去るかのようにそう叫ぶサンジだったが

「成る程な…おいボケナス、あんまりおれを舐めてんじやねえぞ？」

その言葉と共にゼフの脚が高速でサンジに突き出される。

「なっ!!グッー!」

直ぐ様反応して防ごうとするサンジだったが片足を無くしたとは言え流石に大海賊に数えられた一人であったからか、その蹴りはブランクなど感じさせぬかのようにサンジを大きく吹き飛ばすと壁にぶつけた。

「っ…テメエ！何しやがるんだ!!」

いきなりの攻撃にサンジは怒鳴るも

「いい機会だクソガキ、おれがテメエをこの店から叩き出してやる」

その言葉と共にゼフは”鋼鉄製”の義足をカツンつと床に叩きつけて言った言葉に一瞬固まる

「っ…おれを追い出すつもりか!!馬鹿にしてんじやねえぞ!」

ゼフの言葉にサンジは激昂し直ぐ様反撃するべく近づき右膝での蹴りを相手に打ち込もうとするも

「だから舐めるなと言ってるだろうがあっ!!」

その言葉と共にゼフの脚が唸りサンジの身体を吹き飛ばす。

今度は壁にぶつかるところか壁を砕いてサンジの体は外へと投げ出された。

「おいおっさん！いきなり何やってんだよ!？」

いきなりの、しかも仲間同士の荒事にルフィは驚いた様子で立ち上がると

「黙って見てろ麦わらの小僧、あのバカは一回叩きのめしでもしなきやわかんねえんだよ。」

：「まったくいつまでも自分の心を押さえて何が恩返しだ」

ゼフのその言葉にルフィは何かを悟ったのだろうか、それ以上は反論する事は無かったのだった。

## 赫脚の矜恃

壁を突き抜けて放り出されたサンジを追ってゼフはそのまま外へ。それを追ってルフィもナミと共に二人の戦いを見届けるべく外に出て、そこで見たのはゼフの攻撃に対して防戦一方のサンジの姿。

「くっ…：テメエくそジジイ！本気でおれを叩き出すつもりか！何と言ってもおれはここに居座るからな!!」

「しやらくせえぞボケナス！おれへの同情のつもりなら舐めるなど言ってる!!」

そんな二人の姿に

「なあナミ、あの髭のおっさんかなり強いよな？」

「ええ、海兵の人が来た時に”赫脚のゼフ”って言ってたけどあたしの記憶が確かなら数年前に亡くなった筈の海賊よ」

「あのおっさん元・海賊か？」

「タダの海賊じゃないわ、彼が率いたクック海賊団はグランドラインを1年間航海して、そして無傷での生還を果たした大海賊よ。

コックにして船長を務めた無類の海賊、戦闘において一切両手を使わなかったことで蹴脚術の達人として有名で、その強靱な脚力と鋭い蹴りは岩をも砕き、鋼鉄にすら足形を残すと聞いた事があるわ。

一時期はグランドラインから戻ってきた時に東方方面軍中では警戒態勢が引かれていたけど…」

「という事はかなり強いのかあのおっさん、…うちのコックボロボコにされそうだけど」

「まだうちのコックになると決まったわけじゃないでしょ？…でも数年前に死んだと情報があつてそれが欺瞞だったとしてもブランクが殆ど感じられないわね…」

そんな外野を他所にサンジもようやく覚悟を決めたのだろう。

「くそジジイ！テメエが本気でおれを追い出すってんならおれも本気でアンタを叩きのめしてでもこの店にいるからな!!」キューイソー・スライス」

その言葉と共にサンジが繰り出すのはかつて実家にいた頃に大柄な海兵から教えられた技の未完成版、斬撃を纏った蹴りがゼフの右太腿へと向かうも

「あめえぞボケナス!!」

それは引き上げられたゼフの義足により受け止められそのままいなされると、バランスを崩したサンジの腹部に鋼鉄の一撃が入り込む。

「がっ…ぐ…ほっ…ぐ…ほっ!!…相変わらず面倒くせえ義足だな…」

「ふん、どこの誰からの贈り物か知らんが感謝するべきかもしれんな。

それよりお前の覚悟はその程度かサンジいつ!!」

追撃とばかりにゼフの鋼鉄の脚が襲いかかるも

「っ！舐めんなよくそジジイっ!!”ミルファイ・シュートっ!!」

それと共にサンジは特殊な歩法でまるで消えるかのように移動しながら残像を幾重にも重ね、その残像は一斉にゼフに襲いかかるも

「ふん、こんな見かけだけの技…子供騙しじゃねえんだぞ!!”斬撃(タリアトリーチエ)!!」

一閃

四方八方から襲いかかるその残像はゼフの鋼鉄の脚による一振りから繰り出された”空を飛ぶ斬撃”によって消されたのだった。

「おいナミ！あのコック分身したぞ!?!」

「ええ、でもあのおじいさんもかなり手強いわね…でもひよつとしてあの技…」

厳密には違うが分身したサンジに大はしやぎのルフィとゼフの繰り出した技に思い当たる節があるナミ。

そんな二人であったが

「じじい！テメエその技まさか!!」

「ふん、確かにおれは蹴りと料理をお前に伝授した。だがおれは全部をお前に教えたとは言ってねえぞ?」

それよりも続けていくぞ！せいぜい保つようにしっかり耐える事だなボケナス!!”圧き力(ペントラ・ア・プレッシオーネ)!!」

その宣言通りゼフの右脚による連続した蹴りがサンジに襲いかか

る。

一見ゼフは左脚を地面にしっかり止めて、右脚だけで連続した蹴りを放っており、簡単に避けてしまえそうではあるが

「くっ！鬱陶しいな！避ける方向を防いできやがって!!」

「ふん！避けれるもんなら避けてみやがれ!!」

サンジが避けようとした場所はそれを見とってかそこに唸る義足が叩き込まれ、回避できるスペースが無くなっていく。

「ちっ！この程度全部防いでやるよ!!」

そうなると必然防御をせざるを得なくなり高速で繰り出される連続の蹴りを、同じく何とか蹴りで防ごうとする。

そして状況は徐々に攻撃するゼフと防御するサンジで膠着状態になりかけていた時に

「蜂の…一刺し(ヴェスパ・アゴ)!!」

連綿と続く攻防の中、防御しているからこそ意識下から外れ孤立している箇所を孤塁と呼ぶ。

ゼフのこの技は相手に防御を取らざるを得ない程の圧力で攻撃を連続して行い、徐々に浮き出てきた孤塁に対して全脚力を注ぎ込み、この孤塁をぶち抜く蹴り技である。

雀蜂の針を冠するこの技は防御に集中していたサンジの脇腹を捕らえるとその身を空へと大きく吹き飛ばし、サンジはバラティエのマトへと強く叩きつけられその衝撃は船が大きく揺れる程のものだった。

「おいおっさん!!やり過ぎじゃねえのか!?!」

「ふん、あの程度でくたばるような修行はさせとらん。

それよりも小僧…あのチビナスと一緒に連れてやっちやあくれねえか…」

グランドラインはあいつの夢なんだよ…」

と先ほどの戦闘とはうってかわって真摯にルフィへと頼むゼフの姿に

「おっさんも人が悪いな…あいつを追い出す為にわざわざこんな事したのか?」

「ふん、あのチビナスが素直に言うわけないだろ？アイツは今までずっとここで過去の事に囚われてたんだ、いい加減素直になつてもいいとは思うがな」

「…だが断る!!」

ゼフの頼みにルフィはそう断言するも

「ちよつとルフィ!?アンタあの仲間にする気だつたんでしょ!」

そう言つてルフィの襟首を掴みガクガクと揺らすナミと

「小僧…貴様船にコックが欲しいんじゃないのか？アイツじゃ不服か？」

おれが言うのも何だが戦闘力は高いし料理も中々の腕だぞ?…まあおれには及ばんかもしれないが…」

と、ルフィの答えに驚くゼフ。

「不服じゃねえよ…おれだつてアイツと一緒にきて欲しいけどアイツはここでコックを続けたいって言ってるんだ。」

おっさんにそう言われても連れていくわけにはいかねえよ」

と本人の意向を無視するつもりは無い、というルフィの言葉にゼフやナミは納得しつつ

「アイツの口から直接聞くまでは納得できねえってか…だがあのチビナスが素直に言えるかどうか…」

そう悩むゼフであったがしたたかに叩きつけられたサンジはその会話を

「ちっ…全部聞こえてんだよ…」

と小声で言いつつ意識を失つたのだった。



## コツクの決意

サンジが船内の一室で意識を取り戻した時、側にはゼフの姿があった。

「ふん、ようやく起きたか」

「…勝負はおれの負け、アンタはおれを追い出すか？」

右脚を無くし、そしてブランクを感じさせない戦闘力を思い出しつつサンジはそうゼフに問いかける。

「言っただろう、テメエみたいなお荷物はこの船にいらねえと」

「…なあくそジジイ、アンタは昔言ったよな。」

” 時期が来たらグランドラインを目指せ、おれはそこでオールブルーの可能性を見た” …だったか？」

とサンジは昔、自身の脚を犠牲にしてまでゼフが自身を救ってくれた事を思い出す。

「そんな昔の事をよく覚えていたな…それがどうした、回復したんなら荷物を纏めてさっさと出てくこったな」

「アンタはおれにオールブルーを見つけて欲しいのか？」

その言葉に部屋から出て行こうとしたゼフの足が止まる、そしてゼフは数秒考えて

「…おいチビナス、テメエの夢は何だ？」

とだけ告げると再び足を進め部屋を出て行ったのだった。

ゼフの言葉にサンジはしばらく考え込む。

「…それもありなのか？だがまだ恩返しが出来たとは…でもオールブルーはくそジジイの夢でもあるんだし…」

そして一日ほど考えに考え抜いてサンジはようやく決断を下し話をすべく部屋を出て、目的の人物は程なくして見つけられた。

「おい麦わらー！」

バラティエの裏手、そこには麦わら一味のゴーイングメリー号が停泊されており麦わら帽子をかぶったルフィが海面に釣り糸を垂らしている所だった。

「おお！おっさんに蹴り飛ばされたのは大丈夫だったのか？」

あの激戦を見ていたルフィがそう尋ねれば

「…まあな、それよりも聞きたい。お前はグランドラインを目指すのか？」

「ああ！おれの夢は海賊王だからな！！準備を整えたらグランドラインに入るつもりだ！！」

と力強くルフィは宣言する。

そしてその言葉にサンジは覚悟を決め

「そうか…なら頼む！おれをお前の船に乗せてくれ！！」

とルフィに対して頭を下げればルフィは驚いたように

「おお？いいのか!?こっちとしちや願ったり叶ったりだが…」

「ああ、付き合ってやろうじゃねえか”海賊王への航路”…」

馬鹿げた夢だがなに、おれもおれの為にテメエの船に乗ってやるんだからお互い様さ。

それとも何かい？おれじゃ不満か？」

とそう言うサンジに

「いやったー!!おいナミ！ウソツプ!!コックが仲間になるってよ!!」

ルフィは船内へ大声で叫べばドタバタという足音も共にオレンジの髪の少女と長鼻の少年が出て来た。

「おれはサンジ！道中の飯についてちやあ心配するな!!テメエらの船のコックはおれが受け持った!!」

そんな宣言に大騒ぎして喜ぶ三人を尻目にサンジは

「ふん、ほんとに騒がしい奴らだな…」

と独り言を溢しつつもだが悪い気はしないな、と軽く口角を上げて自身の決断を告げるべく船内へ戻るのだった。

そしてそこでゼフや他の料理人達が見守る中

「おれはこの船を降りる事にしたよ」

と告げれば若干場がザワつき出す。

「ふん、今度は何企んでやがる。」

蹴り飛ばされた時に頭でも打ったか？テメエは料理長の座を狙ってたんじゃないのかよ」

と厳つい顔をした男…パティのその言葉に

「料理長なんて座に興味ねえよ、そりやくそジジイの席だ」

その言葉に再び場はざわめく、無理もない料理人達の多くが副料理長であるサンジはこのレストランにおいては最も古株であり、料理長の座を狙っていた為にオーナーとは仲が悪くもこの船に居座っていると思っていたからだ。

「…覚悟は決まったのか？」

そんなざわめく料理人達を尻目にゼフはそう問いかける。

「ああ、アンタの夢も力もおれが奪っちまったんだ。

だからおれはそれに対してアンタの宝であるこの船を守るつもりだったんだが…」

「余計なお世話だチビナス、テメエに守られる程おれあ落ちぶれちやあいねえよ」

その言葉と共に鋼鉄の義足をカツンと地面に叩きつけて鳴らすゼフ。

「…なあおれはアンタの夢であり、おれの夢でもあるオールブルーを見つけて帰ってくる、そんな時はまたこの船で働かせてくれるか？」

そう問いかけるサンジにゼフは一度鼻を鳴らして

「ふん、好きにしろ。ホントにそんな御伽話が見つかるか知らんがな」と自室に戻るのだった。

料理人達はゼフとサンジの話を理解できない様子で

「おいサンジ！オーナーから力も夢も奪ったってどういう事だよ!？」

「そうだぜー！この船を守るって…テメエはこの船のオーナーになってえんじやなかったのか？」

とこちらに詰め寄って来る自身の同僚に

あんのくそジジイ、こうなると分かってて逃げやがったな…？と思いつつ

「…しようがねえ、その疑問についてちや答えてやるよ。

ありやおれがまだかなり小さい時の話しさ、おれはとある客船でコック見習いをやっていた…」

と切り出して自分の船を赫脚のゼフ率いるクック海賊団が襲った

事。

船が難破しゼフとサンジは絶海の孤島に打ち上げられた事。

分け与えられた食料が実は打ち上げられた食料の全てだった事。

ゼフは食料の大半を奪ったように見せながら、その実自分の足を自分で切り飛ばして食べて生き延びた事。

そしてその事を知った時に朦朧としながらも2人で海の上にレストランを作ろう、と決意した事。

そして海上レストランを開くにあたって打ち上げられた持ち主不明の財宝をオークションにかけて所、予想以上の：異常な程の高額で買い取った富豪がおり、彼の協力で海上レストランが造られた事。

「：というわけで今に至るわけさ。」

くそジジイはあんな性格してるから絶対に言わねえがくそジジイにとつてこのレストランは宝なんだよ。

だからこそおれは恩返しの意味も含めこの船を守ろうと誓ったんだ。

：ま、余計なお世話だったみたいだがな」

そう言つてサンジは未だに痛みが残る脇腹をさすりつつそう言うのだった。

## 赤色のカモメ

自分達のオーナーと仲が悪いと”思っていた”サンジの2人の間にそんな過去があつたなんて!!

と初耳だつたコック達は

「泣かせてくれるじゃねえか…まさかお前とオーナーの間にそんなお涙頂戴な過去があつたなんて…グスツ」

「ばっかやろう!何でもつと早く言ってくれねえんだ!!おれたちやてつきり…ヒクツ」

涙と鼻水を垂らしながらおいおいと泣き、サンジの肩に手を置きながら涙を流しつつ言うパティとカルネに

「ええい!鬱陶しいぞこそコック共!!」

とにかく!だ、おれはこの船を降りるがこの船を頼んだぞ?おれが戻つて来た時に店が無いなんてのはやめてくれよ?」

と2人を引き剥がしつつ尚も感動するコック達に向かつて怒鳴りつける。

その言葉に対して”留守の間は任せてくれ!!”との力強い返事にサンジは満足しつつ

「さあ!そろそろ店を開ける準備をしろ!!それが終わったら表に出て船で待つてるさっきの海兵を案内してやれ!」

と、怒鳴りつける。

海兵がやつて来たり、鷹の目が襲来したり、自身の師匠にボコられたり…と濃ゆい数時間であつたがそれでもこの店は開ける必要がある。

ゼフに用があつて来たという海兵についてが心配だが…まあそこまで気にする事でもないだろう、あのくそジジイなら少将が相手でも海に叩きこんじまいそうだ…などと考え開店準備を進めるのだった。

そしてバラティエ・オーナーにして元・海賊であるゼフと海軍本部少将であるユキムラの話し合いはコック達と海兵達が緊張する中行われた。

とは言えユキムラ達がここに来た理由は死んだとされていたクック海賊団の身柄確認であり、ゼフが海賊に戻るつもりは一切無く、もし復活した場合は昔の行為と併せて厳しく罰せられる事になるだろうというものだった。

今更捕らえに来たというわけでは無い事にコック達は安堵しつつ話し合いの後にコック達は自慢の腕を振るい海兵達に食事を振る舞うと大絶賛であった。

そしてその食事の席にはちやつかり麦わら帽子をかぶった少年やオレンジの髪の少女、長鼻の少年や

「おいおいおい、出歩いていいのか？キズは大丈夫なのかよ…」

「はっ、問題ねえよ。それよりも美味そうな匂いがしたんでな、おちおち寝てられねえんだよ、このままじゃうちのバカが一人で食い尽くしてしまいそうだからな」

上半身が包帯でグルグルにまかれた青年の姿にサンジは料理を運ぶのを中断して聞けば確かに納得出来そうな答えが返って来た。

サンジの目線の先には料理を貪りつつ、目の前の食事が無くなれば腕を伸ばして近くの料理を掴む姿。

「あれが悪魔の実の能力か…随分と便利そうだな」

「それでもねえぞ？色々と弱点はあるらしい…なんせゴムだからな」

そこでサンジは目の前の青年も自身の仲間になる事を思い出し

「成る程…っと言ってなかったな、アンタあの麦わらの仲間なんだろう？新しく船にコックとして加わるサンジだ、宜しくな？」

「へえ、あの強引な勧誘に良くも納得したもんだ…剣士のゾロだ、せいぜい美味しい飯を頼むぜ？」

「任せとけ、とりあえず何か消化に優しいもん作ってやるからちよつと待ってろ」

船長のところに追加で料理持つてくからその辺りに座つててくれ」

と2人は握手を交わし、かたや厨房へ、かたやテーブルへと向かった。

一方その頃、まだ食べたりないながらも「いい加減にしなさい!!」と怒られルフィは頭を叩いたナミに気になる事を聞いていた。

「なあナミ、あの赤い海軍マークってなんだ？」

その疑問にナミが答える前にウソップが

「おいおい、知らねえのかルフィ？アイツらは”カモメの水兵団”…  
”赤カモメ”って呼ばれ方もする海軍の精鋭部隊さ。」

まあ？いくら相手が精鋭と言えど？このおれにかかれば指先一つ  
でちよちよいのちよいのちよいちよいだがな？」

と言いながらファイティングポーズをとるウソップ、悪戯を思いつ  
いたかのようにニヤリとするナミ。

「へえ…だつたらあたしの知り合いがカモメの水兵団にいるんだけど  
…指先一つで片付けてもらおうかしら？」

と自身満々のウソップにナミが言えは

「うう…急に戦ってはいけない病が…、悪いなルフィおれの勇姿は見  
せられそうにねえ…」東の海の怪力王”と呼ばれたおれの实力を見  
せられなくて残念だ…」

「その異名もカモメの水兵団のボスがこっちにいた頃の異名でしよ  
うが」

とウソップの言葉はナミにバツサリと切られた、するとルフィが

「…とにかく赤カモメってつえーやつらって事でいいのか？」

とあまりにも簡単すぎる理解をしていたのでナミはため息をつき  
つつ

「一度ちゃんと教えておいた方がいいわね…というか海賊になるのに  
何で公認海賊もカモメの水兵団も知らないのかしら…」

と頭を抱えるナミだったが

「お？何の話だ？」

と言いながら席に座る乱入者に

「ゾロおつ！治ったのか！良かったあ!!」

「ルフィ！そんな簡単にあの傷が治るわけないでしょ!!ちよつとゾロ  
!?!アンタ傷は大丈夫なの?」

「キズは深かったんだろ?まだ寝てなくていいのかよ!?!」

三者三様の言葉に

「ああ、医者腕が良かったのか動いても問題ねえよ、痛み止めもどう

やら効いてるらしい。

で何の話だ？赤カモメの事がチラツと聞こえたが…」

と席に座るゾロに”まあ本人が言うなら問題ないか…本当に大丈夫なのかしら？”と思いつつも説明を再開する

「いい？まず海軍はいくつかの組織に別れるわ。

それがグランドラインを守護する”海軍本部”と東西南北それぞれの海に存在する各方面軍…ここは東の海だからここだと”東方面軍”ね。

カモメの水兵団は海軍本部直轄の部隊で主にグランドラインを哨戒しているわ。」

「でも何でそのグランドラインの部隊が東の海に？」

「あのおじいさんに話を聞きに来たって言ってたじゃない。」

元々カモメの水兵団は今でこそグランドラインをメインとしているけど方面軍が設立された当初は全ての海を股にかけて動いていたそうよ？」

「一つの部隊でそれだけ広い海を回ってたってか…成る程かなり腕がありそうだな？」

ゾロのその言葉にウソップは

「ん？どう言う事だ？広い海を回ってたのと強さに何か関係あんのか？」

と疑問を抱く。

「ゾロが正解よ、ようするにそれだけ多くの海賊を相手にして来ているって事よ。」

経験だけなら海軍の部隊の中でもかなり高い部類に入るんじゃないかしら？

加えてその戦闘力の高さも折り紙つきよ、半端な海賊じゃあの赤い海軍マークを見ただけで逃げていくくらいだよ？」

ナミのその説明に

「うへえ…なんともおっかない部隊だな」

「はっ、そのおっかない部隊が今周りにひしめいてるんだがな？」

とは言えそこまで多くなさそうだし数で押されりや直ぐに瓦解し



「そうなもんだが…」

とのゾロの言葉にウソツプは周囲を見渡しつつその身を縮こませる。

「別にここにいる人間が全てじゃないわよ？多分ここにいるのはカモメの水兵団でも一部よ」

そして黙って聞いていたルフィが

「なあナミ、赤カモメってやっぱこの東の海に来たこともあんのか？」  
と過去に自身の目に焼き付いた風景を思い出しつつ尋ねる。

「そりやそうよ、さつきも言ったじゃない。」

「ならさ、赤い海軍マークのコートを着た人間ってどんな奴だ？」

「うーん…海兵だったら佐官以上の人間がコートを着てるし…まあ指揮官クラスなのは間違いないでしょうね」

との疑問を浮かべながらも答えるナミの姿にルフィは

「そっか…」

と返しつつも深く考え込む。

その姿に他のメンバーはルフィが考え込む何て珍しい事もあるもんだ…と思いつつ見ていれば

「おいおい？何か暗いじゃねえかよ船長。」

ほれ追加の料理だ、そっちの剣士には粥を持ってきてやったぞ？」  
とそこにやって来たのは追加の料理を持った新たな仲間であるサンジ

それによりルフィは考えるのを中断し直ぐに料理へと手を伸ばしたのだった。

## コックの船出

美味しい食事を終えて海兵達は引き上げサンジは色々と思出しつつ出発の準備を済ましていく。

バラティエを作った時の事、料理や蹴脚術を教えてもらった時の事、他にもバラティエの噂を聞きつけて他所でクビになった荒くれ者のコック達がやって来るようになった事：パティとカルネが来たのはその時だったな：

料理が不味いとゼフに蹴られた事は数知れず、どこで聞きつけたのかゼフを落ちぶれ海賊とバカにした客と喧嘩になった事もあった。

海上レストランという特性上海賊が襲ってくる事もあった、その度に撃退を重ねて”海上レストランバラティエ”の名は広く知られるようになった。

「…そしてそんな日々も今日から一旦休業だな」

荷物を準備し、身支度を整えたサンジは思い出に耽りながら煙草を一息吸うと外へと向かう、そこにはコック達が立ち並びサンジはその間を歩いていく。

「出かける前に今までの怨みだあつ!!」

「長旅になるだろうからいっちょ気合入れてやるよ!」

そう叫びながらパティとカルネが武器を片手に後ろから襲い掛かるも

「いくらオーナーとやり合ったつてもお前らじゃ勝てねえつて…」

地面に沈み込むパティとカルネに他のコックが呆れながら言う側でサンジはそのままゴーイングメリー号に乗り込もうとして

「おいサンジ：風邪、ひくなよ?」

二階から見守っていたゼフのその一言にサンジは思わず涙腺を緩ませると

「つ…オーナーゼフ!長い間くそお世話になりました!!この御恩は…一生忘れません!!」

膝について深く頭をゼフに下げるサンジ、その瞳からは涙が溢れて

過去の日々が次々と脳裏に思い浮かぶ。

サンジだけでなく、パティやカルネを含めたコック達も別れを惜しんで大声で泣き喚く。

「バカ野郎共が…、男は黙って別れるもんだぜ…」

かく言うゼフも目元を押さえて涙を溢しており

「じゃあな！旅を終えて戻ってくるまで！店の事は任せたぞっ!!また会おうぜくそ野郎共!!」

騒々しく別れを告げコックは己の、そして恩人の夢を目指すべく麦わら一味のコックとして加わり一行の船は大きく帆を張り次の島へ。

海図とコンパスを確認しつつ次の進路はコノミ諸島へと向かう、そしてそこでは今までで最も強大な相手が待ち受けている事を一行は知らず、今はただ新しく加わった仲間と楽しそうに騒ぐのだった。

そしてそんな姿を離れたところで見守る人影。

「ふむふむ…おれがいなくても流れで何とかなるもんだなあ…」

小型のイルカ型潜水艇“イカルガ”から望遠鏡でそんな光景を見つつフードを深く被った男…クリークは結果に安堵しつつそう溢す。

原作でサンジ加入の大きな要因となった自身がいない為結果がどうなるか不安だったが上手く言ってくれて何よりだ、と思いつつそのまま船内に戻る。

勿論サンジを加入させるにあたってただ座して見ていたと言うわけではない。

テゾーロの伝手を使ってゼフ達が持っていた財宝を高額で買い上げさせ、原作ではギンに折られていたので万が一を考えて開店祝いに鋼鉄製の義足を送り、カモメの水兵団東海派遣艦隊にはゼフの情報を伝え確認の為という事で任務を作り、更にはゼフ宛に秘密裏に”とある情報や懸念を書いた”手紙を渡してもらった。

また、東海派遣艦隊のリーダーを普段は新世界から出てこない優れた剣士であるユキムラに任命し、その情報をそれとなくミホークに流したりと出来るだけ原作通りになるように調整したが…

「何とかなつたようだな…」

「何か言いましたか？ボス」

「いや、何でもない。ところであの船は次に何処に向かうか割り出せるか？」

疑問を抱くギンに何でもない、と言いつつ麦わら達が次に向かう場所を確認すべく聞けばギンはコンパスと海図を取り出し

「…この方向だと…この辺りですかね？」

そう言つてギンが指さしたのはコノミ諸島

成る程、原作通りか…と思いつつもベルメールからアーロンに対して特に報告が上がってきてないがどうなってるんだろ？と疑問を抱く。

原作ではナミはベルメールをアーロンに殺され、そして一億ベリで村を買い戻す為に海賊相手の泥棒をしていたのだが…

そして本来ならこのバラティエで一味の船と宝を奪い去り自身の故郷へと向かった。

そしてそこで追いかけて来たルフイ達がナミを助ける為にアーロン一味と激突、と言う流れだったが現在はルフイ、ゾロ、ナミ、ウソップ、サンジの5人揃った状態で、尚且つゴーイング・メリー号に乗った状態でコノミ諸島へと向かっている。

…後ろにヨサクとジョニーの小舟も着いて来ているがそれは一旦置いておく。

しかしそうなるとナミは何らかの目的があつて一味の船に乗っていると推察できる。

「事情が不明だしこりゃ先回りすべきかな…」

ベルメールはいくら相手が元グランドラインで暴れていたと言えどそう簡単にやられる程ヤワな鍛え方はされていない。

それにココヤシ村には東方方面軍派出所としてベルメールを筆頭に人員を2人程置いてある、原作であつたような襲撃があれば連絡がある筈だし…

アーロンもアーロンで原作では2000万ベリーの賞金首となつており、その類い稀なる力によってコノミ諸島を支配していたがこつちではアーロンが東の海に入ったと言う情報以降殆ど噂は聞こえてこない。

：一回ちゃんと調べておけば良かったな、と思いつつ

「先回りするぞ、イカルガをベアトリーチエ号へ。」

収容後はコノミ諸島へ向かうぞ、少し気になる事があるからな」

その言葉にギンは了解、と返すとベアトリーチエ号へと進路をとるのだった。

## 赤鷗大尉 ドンクリークさん

「なあなあナミ！次は何処いくんだ？」

新たな仲間を加えた麦わら一味は一路南西へと向かっていた。

船長であるルフィは航海に関してはさっぱりなので基本的に進路は優れた航海術を持つナミに任せていた。

「次に向かうのはコノミ諸島よ」

「このみ諸島…何かあんのか？」

聞き覚えがない地名に頭を傾げるルフィだったが

「…あたしの故郷よ、グランドラインに入るにしろあたしが海賊を続けるにしろ一度行く必要があるのよねえ、他に航海士を見つけてるっていう事なら別だけどね？」

「…おれはナミが航海士じゃねえとやだぞ？」

「だったら説得する必要がある人がいるのよねえ…」

そう言いながらどう説得したものか、と思案するナミだったが

「なあナミ、その説得する必要がある人ってどんな奴だ？まあ？このおれがパパッと説得してやってもいいんだぜ？」

「へえ？因みにその人赤いカモメを背中に背負ってるんだけど…」

「げえっ!?…ちよーつと急にお腹が痛くなってきたな…と言うわけで説得は皆に任せるぜ！」

ナミのその言葉にウソップは尻込みし、ルフィは

「ナミ！それって本当か!？」

と驚いたように聞く。

「？、ええ、あたしの保護者代わりの人で所属としては東方方面軍なんだけどカモメの水兵団に所属する本部大尉よ？」

そんなルフィに自身の親変わりであるベルメールの事を教えると

「…赤カモメの人間ならかなり強いんだよな？」

「本部大尉って言うバラティエに来てた鉄拳のなんちゃらって奴と同じか…」

ウソップのその言葉に

「…強さだけならベルメールさんの方が上だと思っただけどなあ？」

と新たに仲間に加わったサンジとあの本部大尉の戦いを見ていたナミは疑問を覚えるも

「任せておいてくれよナミさん！ナミさんは自分の夢の為にグラウンドラインに入りたいんだろ？ならおれが説得を成功させてみせるさ！」サンジのその言葉に”簡単に説得できればいいんだけど…”と疑問を覚えつつ自身の故郷のある方向を見つづため息をつくのだった。

一方その頃クリーク達を乗せたベアトリーチェ号は麦わら一味に先んじてコノミ諸島、ココヤシ村へと到着していた。

ベアトリーチェ号は蒸気機関船であり風と海流を掴んで走る帆船と違いその航行速度は雲泥の差であり、その速度を持ってして麦わら一味より先回りして現状を把握する為にやって来ていたのだった。

ギン達には留守番を任せクリークは一人で目的の人物を探していた。

勿論休暇でありお忍びのためクリークはサンダルに長ズボン、半袖のシャツとシンプルな格好、勿論武器は持ってきていない。

目的の施設…東方面軍海軍独立遊撃隊コノミ諸島派出所にてベルメールに会うべくやって来たが

「ああ？大尉がお前みたいない怪しいヤツに会うわけないだろう？」

と派出所にいた男のすげない返事。

「いやだからちよつと話をしたいだけなんだが…」

「チチチチチ…まあどうしてもって言うならそれなりの誠意を見せてもらおうかね」

と怪しい笑みを浮かべつつそう言う海兵であったが

「こーらネズミ中尉、小遣い稼ぎは程々にしときなさいってわたし言わなかった？」

その声の中尉の階級章をつけた男はビシリと固まる。

…とかこいつネズミか、とクリークは原作では支部大佐だった悪徳海兵を思い出す。

「べ、ベルメール所長…ですが怪しい奴をそう簡単に通しては海軍の沽券に関わるのでは…」

「この人はわたしのお客よ、応接室に通して頂戴」

「…わかりました」

そう答えたベルメールの言葉にネズミ中尉は渋々応接室へクリークを通すのだった。

「久しぶりねクリーク：随分とラフな格好だけとお忍び？」

「まあな、しかしあの中尉大丈夫か？小遣い稼ぎって言ってたが」

「ああ、ネズミ中尉の事？ああ見えて情報の扱いに優れてるのよ。」

まあ加減はわかってるみたいだし、あんまり過ぎるようならわたしの拳骨がうなるから大丈夫よ」

「…まあお前がそう言うなら大丈夫だろう、少し確認したい事があつて来たんだが時間は大丈夫か？」

「ええ、急ぎの件も入って無いし大丈夫よ。で、確認したい事って何？」

赤色の髪をソフトモヒカンのロングヘアーに纏め、赤い海軍マークが入った海軍コート。

そして背中に黄金に輝く長銃を背負った女性はベルメール、本部大尉の階級を持つベテランの海兵である。

ナミとその義理の姉であるノジコの育ての親である、原作ではアローンの襲来によりナミ達の目の前で殺されたが…

「まあ動向を掴んでいなかったこっちにも問題があるんだが：数年前に魚人海賊団のアローロンが東海入りしたのは知ってるよな？」

その後の動向がこっちに入ってきてなくてな、こっちに來てからこの近辺にいるという情報は掴んだんだがこの辺りならお前が詳しいだろ？」

その言葉にベルメールは合点がいった様子で

「ああアイツの事ね、まあアイツに関しての情報はネズミ中尉が抑えているからね…」

グランドラインで名の知れた人間がこんな東の海にいるなんて知れたらどんなものを引き寄せるかわかったもんじゃ無いからね」

「ああ、それでこっちに情報が入ってこなかったのか…まあ確かにアローロンはジンベエの七武海入りに関して解放されたとは言え余計な物を誘き寄せるといふのは納得だな」



「ま、暴れてるならまだしも特に報告するような事は無かったからね」  
成る程、そういう理由でか…

「そういやそれまだ使ってるのか、いい加減別の銃使ってもいいんじゃないか？」

とベルメールが背中に背負った黄金長銃を指差して言えば

「あー、別れ際にもらったからもう十数年になるんだっけ？」

でも使い慣れてるし何より頑丈だから今更別のに変えるのもなあ

…

魚人でさえ噛み砕けなかったんだし今更多少性能が上がったとは言え普通の銃使うのもねえ…」

…ひよつとしてアーロンは東海入りの後に暴れてベルメールに鎮圧されたのか？若しくは暴れなくてもベルメールと一戦交えたという事だろうか…俄然今のアーロンがどうしてるか気になってきたぞ？

「因みにアーロンは今何処に？普段は何してるんだ？」

「アイツならココヤシ村から少し離れたところに拠点構えてるわよ、普段はこのコノミ諸島を中心に傭兵的な仕事をしてるわよ」

…原作と全く違うじゃねえか、と思いつつおくびにも出さず

「そうか、ならちよつとそつちにも話を聞きに行く必要があるな」

「あら行くの？ならわたしも一緒に行くわ、報酬に関して少し話す必要があるからね」

「報酬？」

「ああ、言っただけだったわね。アイツらの雇主はこのわたしよ？」

そう言っただけで自身の胸を叩くベルメールにクリークは「ホント原作とかなり違うなあ…」と思いつつベルメールの先導でアーロンの元へ向かうのだった。

## 黄金銃の海兵

ゴーイングメリー号に乗った麦わらの一味(ついでにヨサクとジョニー)はココヤシ村へと到着した

「うーん！一年ぶりくらいになるわね！さて、早速行きましようか！」  
「行くって何処にだ？」

「アンタ話聞いてたの!?あたしがグランドライン入りするには説得するべき人がいるって…」

首を傾げるルフイにナミは襟首を掴んで言い聞かせる。

「なあなあナミ、その説得するべき人って…ひよっとしてあそこに立ってる海兵か？」

ウソツプのその言葉に”へ?”とウソツプが指差す方向を一行が見るとそこには一人の女性海兵。

「はあい？ナミ、全く一年以上もみんなに心配かけて何処をほつつき歩いてたのかしら？」

「げ…ベルメールさん…」

「で、そこにいるのがナミのお仲間？はじめまして、わたしはベルメールよ宜しくね？」

「おお！貴方がナミさんの！はじめまして、おれはサンジです貴方の娘さんの仲間ですて…いやはやそれにしてもお美しい、もしよろしければこの後食事でも…」

「あつはつは！わたしみたいなおバさんに何言ってるのよ!!」  
「うおっ!？」

そう言っつてサンジの背中を大きくバシバシと叩くベルメールだったがあまりの威力にサンジは大きくつんのめる。

「アナタが頭かしら？はじめましてわたしはベルメールよ？」

そしてそう言いながらルフイに手を差し出すベルメールに

「何だ、ナミがあんだけいうからコエー奴かと思ってたけどそれでも無さそ…うおっ!？」

その手を握り返したルフイだったがその言葉は襟首を掴まれ投げられそうになった事で中断される。

「へえ…悪魔の实の能力者なんだ、パラミシア系かしら?」

握手と見せかけて背負い投げをしようとしたベルメールだったがその行動はルフィの腕が伸びた事により、地面に叩きつけられる事は無かった。

「何だよ!いきなり!?まあゴムだから大丈夫だけどよお…」

「あはは!悪いわね、少し試させてもらったわ!!」

そう言いながらバシバシとルフィの背中を叩くベルメールに

「ところでベルメールさん、ちよつと話があるんだけど…」

ナミは自身の目的を切り出すべくそう話しかけるも

「うん?自分の目で見た世界中の海図を描く”為にグランドラインに入りたい…かしら?」

ベルメールの言葉に驚く。

「ベルメールさん、知ってたの!?!」

「まあね、でも…グランドラインはこことは比べ物にならない化け物がうじゃうじゃいるのよ?」

そんなところに簡単に行つていいよ、なんて言える程わたしは薄情じゃないつもりよ?」

そう言いながら背中の中長銃を手に地面に突き立てるベルメール、それを見たウソップは

「げえつ!!黄金に輝く長銃!まさかアンタ”黄金銃の海兵”か!!」

「あらそつちの子はわたしを知ってるのかしら、何処かで会った?」

「なあなあナミ!やべえつて!!黄金銃の海兵つて言やあ一時期この東の海で大きく名を上げたエースだぞ!!おれもガキの頃は”そんな嘘ばかり言つてると黄金銃を持った海兵が攫いに来る”つて脅されたもんさ!」

自身の過去に言われた話を思い出しつつそう忠告するウソップだったが

「何よ、人を化け物みたいに…言つとくけどグランドラインにはわたし及びもつかないような化け物がいるのよ?」

とベルメールは無然とした顔。

「それが何だ!おれはグランドラインに行くつて決めたんだ!そして

ナミも仲間だからみんなでグランドラインに行くんだよ!」

それでも…どんな敵が待ち受けていようとも自身の道を通すと決めたルフィはベルメールにそう断言する。

「うーん…その心意気は買うんだけどね…、ちよつとグランドラインという海域を甘く見てるんじゃない?」

その言葉と共にベルメールはルフィの足を払い地面に引き倒すとその胴体に足を乗せて体重をかけ

「ぐえっ!」

「っ…こいつかなりやるぞ…」

刀を抜こうとした状態で銃を突きつけられたゾロはその場で動きを止める。

「こんな簡単に制圧されるようじゃ…とてもじゃないけどグランドライン行きは承諾できないわねえ?」

「ぬー! ゴムだから効かんぞっ! やるってんならやってやるぞ!!」

その言葉と共に胸に乗せられたベルメールの脚を掴んでどけると素早く後ろに下がり大きく腕を引いてその拳をベルメールに叩きつけようとすも

「へえ…、ゴムなら球形弾丸は効かないわよね?」

その言葉と共にベルメールは長銃をルフィに向けて発砲、続け様に装填し連続で発砲する。

「ぐっ…ゴムだから効かんぞっ!!」

身に受けた弾丸をゴムの特性を持って跳ね返せば

「その程度はわかってたわよ!」

その言葉と共にベルメールが特殊な歩法で接近

「っ!! この前の鉄拳何ちゃらと同じやつか!!」

つい先日の見覚えのある動き方にルフィはとっさに避けようとするも

「ゴムって事にかまけてないかしら?」

その言葉と共にベルメールは長銃に特殊な弾頭を装填し銃口を向けられるも、自分なら弾丸は効かない! と真っ直ぐに突っ込むルフィだったが

「なっ!!何だコレ!?くそっ!とれねえっ!!」

長銃から発射されたのは弾丸では無く鉄製の網:そう簡単に千切れないそれはルフィにしかと巻きつくとその動きを封じた。

「つたく、グランドラインに入るって言ってる割には手応え無いわね…」

「ぐ:まだだあっ!!ゴムゴムの:銃乱打っ(ガトリング)!!」

その言葉と共にルフィは自身の全力を込めて手と足を網の隙間から突き出すと両腕を大きく引いてからの乱打を繰り返すも

「ふーん、でも狙いが甘いんじゃないかしら?」

その乱打をベルメールはするり、するりと躲すベルメールに

「くそっ!ヒラヒラと紙みたい避けやがって!なら、ゴムゴムの:バズーカっ!!」

「ちよつと痛いから覚悟しなさいよ?指銃・一点鐘(いつてんししよう)!!」

その言葉と共にベルメールの指が唸りを上げてルフィの胴に突きつけられるとその身を大きく吹き飛ばされるのだった。

## 魚人との遭遇

指銃・一点鐘は貫通力より衝撃力の大きい指銃である。

それによりその身を大きく吹き飛ばされたルフィは

「くっそ、こんにやろっ!!」

吹き飛ばされながらもその腕を大きく伸ばす。

「なるほど、これも効かないかあ…ならこれでどう?」

自分に飛んでくる拳をヒラリと避け黄金銃にとある弾を装填すると自身に走ってくるルフィに向かって発砲。

「ぬあーっ！ゲホッゴホッ!!目が！鼻があっ!!」

その弾は着弾と同時に刺激物などを含んだ赤い煙を撒き散らし、マトモにその煙を浴びたルフィは涙と鼻水を流しながら大きく咳き込む。

更に追撃として別の弾を装填、発砲を連続して繰り返せば出来上がったのは

「さて、これでいい加減動けなくなったかしら?」

首から下をとりもちに覆われて身動き出来なくなったルフィの姿。

「くっそーなんだこのモチ!!とれねえっ!!」

「さて、決着かしら?ルフィあんたの負けよ、ひよつとしたらいけるかと思っただけどなあ…」

「すげえなああの銃、複数の種類の弾が撃てんのか…」

「ルフィをあも簡単にあしらうたあ…あの女海兵かなり手強いな」

「美しいだけで無くあんなに強いなんて!!流石んナミさんのお母様あっ!!」

あれだけ強いと思ってたルフィを簡単にあしらわれた様を見て一味のものは三者三様の感想を漏らす。

「さて、とりあえず今のままじゃグラウンドライン行きは承諾出来ないけど…そうねえどうしようかしら?」

指を顎に当てながらそう考えるベルメールであったが

「おおおおい!!ナミが戻って来たつてのは本当かあっ!!」

こちらの方に土煙をあげながら大声で走ってくる人影に名案を思

いついたようにニヤリと笑う。

「そうね、アンタ達がアイツらに勝てるんなら認めるってのはどう？」  
そう言いながら親指でそちらを指し示すのだった。

ドストロスと足音をたてながらこちらに来たのは一人の大男。

「…アーロン、あんたまた説教しに来たの？」

「はっ!!弱つちい人間がいつまでもフラフラとしてるからだ!いい加減この村で大人しくするつもりはねえのか!!」

アーロンと呼ばれたその男…青い肌に鋭く尖った鼻、そして背中に背鰭を持った巨漢はナミにそう怒鳴るも

「弱つちい人間って…アンタ人間のベルメールさんにずっと負け通しじゃないの」

ジト目でそう言うナミにアーロンは言葉に詰まりつつも

「ぐっ…前も言ったが偶々調子が悪かったただけだ!!」

「アンタ何回ソレ言えばいいのよ…と言うわけでこっちの大男がアーロンよ、アンタにはこいつとその仲間に戦ってもらうわ」

「おい!話が見えねえぞ!どう言うこった!!」

その言葉に合わせてナミが

「ちよつとグランドラインまで散歩に行ってくるだけよ、まあその為に実力を見せろって話」

「なんだとおっ!!まさか海賊にでもなるつもりかナミイっ!そんなの許さねえぞ!」

とアーロンはナミに怒鳴るもそれはベルメールに押し留められ

「はいはいそこまで、そう言うんならアンタが勝てばいい話じゃないの」

「上等だあっ!!相手はどいつだっ!下等な人間風情がこのおれに勝てると思っでんじゃねえぞ!!」

ギリギリと鋭く尖った歯を鳴らしながら言うアーロンに

「おれが相手だサメ男っ!!」

こいつに勝たなきゃいけない、と名乗りを上げるルフイだったが

「…テメエ人間か?なんと言うか…えらく奇抜な格好だが」

首から下がとりもちに包まれうごうごと芋虫のように蠢くルフイ

にアーロンは怪訝な顔。

「あはははは！悪かったわね、その特殊弾は水で落とせるわよ。というわけでアーロン、アンタの仲間を集めなさい、こいつらの相手をしてもらうわ。」

勝負は：そうね明日の昼からにしようか、場所は：アンタの拠点だと麦わらのボーヤ達が不利な気もするけど：まあいつか、そのくらいは乗り越えてもらわないとね」

「おお、それでいいぜ？精々首を洗って待つてるこつたな」

「こつちもそれで問題ねえ！このサメ男に勝てばナミはグランドラインに行けるんだな！」

「ええ、二言は無いわ。なんならこの旗印に誓ってもいいわよ？」

そう言つてベルメールはコート赤い鷗を見せるのであった。

そしてその日の夜麦わらの一味は作戦会議という事で夕食の後に集まっていた。

ナミの姉であるノジコをサンジが口説こうとしたり、トリモチから解放されたルフィがみかんを食べようとしてベルメールに黄金銃で吹っ飛ばされたりしたがそれは割愛する。

「さて、話を纏めるわよ？」

あたしがグランドラインに入るにはベルメールさんの説得が必要なの、これがまず一番の理由ね。

そしてベルメールさんから出された条件がアーロンの撃破、ここまではわかるわよね？」

「おうー！」

「で、あのサカナ野郎は強えのか？」

大きく頷くルフィと質問をするゾロにナミは

「ゾロの懸念はわかるわ、ハッキリ言つてアーロンは強いわよ、そこらの海賊が束になつても敵わないくらいにね」

「げえ：そんなのに挑まなきゃなんないのかよ、大変だなルフィは：」

「何言つてるのウソップ、アンタも戦うのよ？」

「はあっ!?何でおれも戦う事になつてんだ!？」

「おいおいウソップ、ナミさんのお母様が言つてただろ？あのサメ野



郎に仲間を集めろって…ウチの船長一人に相手させるつもりか？」  
「サンジ君の言う通りね、多分アーロンと…幹部は出てくるでしょうね。」

ひよつとしたら総出でくるかもしれないけど…ま、アンタらなら幹部以外は大丈夫でしょ」

「仕方ねえ…」 援護」なららせておけ！」

「しかしナミさん、確か噂に聞いたけど魚人つてのはグランドラインに住んでるんじゃないのか？何でこんなところに？」

「ああ、その辺りも説明しとこうかしら、アンタ達魚人を見るのは初めてだと思うけど…アンタ達」 七武海」 って知ってるかしら？」

「シチブカイ？なんだそれ、食えんのか？」

「…前にも言ったけどよくそれで海賊になろうなんて言えたわね。」

ルフィのその返事にナミは頭を抱えるのだった。

## 東海の人

「いい？順立てて説明するわよ？アンタ達はなんでグランドラインが海賊の墓場って呼ばれてるか知ってる？」

ナミのその言葉に

「ん？そんな名前なのかー」

「へえ、海賊の墓場か…面白そうじゃねえか」

「うえ、何だよその物騒な名前…」

「問題無いですよナミすあん！おれが守ってみせますよ!!」

と喚き出す男共にそこから、と考え

「グランドラインは一部では海賊の墓場と言われているわ。」

あたしも詳しくは知らないけど多分そこにいる勢力によるものだと考えてる」

「グランドラインにいる勢力？」

「ええ、主に三つ、一つは海軍本部、そして四皇と呼ばれる海賊勢力、そして残りの一つが七武海…正式には王下七武海と呼ばれる”政府公認”の七人の海賊の事よ」

「ちよつとまってくれナミさん、政府が海賊を認めてるってのはおかしな気もするが…」

「あれだろ！ナミがこの前言ったコーニン海賊ってやつだろ!!」

「ルフィの答えは外れ、公認海賊なら面談と審査の上で誰でもなれるわ。」

けれど王下七武海は別よ、求められるものは強さと知名度。月々の上納金を政府に納める代わりに略奪を許された七人の化け物達…裏では政府の狗なんて言われているわ。

あたしも全員は知らないんだけど…ゾロ、アンタが戦った凄腕の剣士も七武海の一角らしいわよ?」

ナミのその言葉にウソップは大きく震えながら

「あ…あんな化け物が後六人もいるのか…」

とあの時の事を思い出すも

「関係ねえ！何が待ってようと全部ぶつとばしておれは海賊王になる

からな!!」

とルフィの力強い宣言によってその震えは治まった。

「…話を戻すわよ、その政府公認の七武海の一角にいるのが魚人海賊団のトップ、”海俠”のジンベエ。」

ジンベエが七武海に入った事による恩赦として解放されたのがアロンよ。

解放された後に流れに流れてこの東の海に辿り着いたらしいわ、これで魚人がこんな東の海にいた理由がわかったかしら?」

「成る程な、ところでナミ、アイツらつえーんだろ? ルフィだけで何とかなりそうか?」

ゾロのその言葉にナミは少し考えるような素振りを見せるも

「無理ね、幹部くらいなら何とかなるかもしれないけどルフィ一人で全員を相手にするのは厳しい…いえ不可能でしょうね。」

ルフィ一人を突っ込ませて一般構成員を片付けて…運良く幹部を全員片付けたとしてもまだアロンが残ってるわ。

だからこそ全員でかかる必要があるわ、ベルメールさんの事だから今更条件を変える何て事はしないだろうし、あたし達はどうかあってもアロンを倒す必要がある、というわけで作戦なんだけど…」

麦わらの一味がそんな作戦会議をしてる一方、クリークは一人である時の事を思い出しながらクツクツと笑っていた。

「いやあ、まさかアロンがあんなに変わっているとは…」

麦わら一味に先回りしてベルメールに会いに行った後、クリークはアロンの元へとベルメールと共に向かった。

そこで見たものは

『おい…今日こそおれがテメエをぶっ潰す!!』

両手を鋭く構え牙を剥き出しにするアロンと

『あら、やれるもんならやって見たら? またその後立派な歯を叩き割ってあげるわよ?』

肩に担いだ黄金銃をブオン、ブオンと振りかぶるベルメールの姿。

興奮するアロンを押し留めベルメールに事情を聞けば何の事は無い、東の海に流れてきたアロンが、付き纏ってくる海軍の小型船

にちよつと痛い目を見せてやろう、としたのがベルメール達の独立遊撃隊”東海”派出所の船だったらしい。

哀れ余計な手は必要ねえ、と一人で先んじて乗り込んだアローンは相手は所詮人間と見下していた所、一撃目で甲板に押し倒され二撃目で口腔内に長銃を突っ込まれ、三撃目で自慢の歯を砕かれ…と、異変を察知してアローンの仲間達が来た時にはアローンの頭はベルメールの両脚に挟まれた状態で地面に叩きつけられる寸前であつたらしい。

その後双方の事情をすり合わせ納得した所でアローンが劣等種に負けたままでいられるか…とコノミ諸島を拠点に定め、なら生活に必要なお金を対価にコノミ諸島近辺で傭兵をしてもらう契約をアローン達とベルメールは結んだとの事だ。

それ以降暇を見てはアローンはベルメールの元へと勝負を挑みに行き、今のところはアローンの全戦全敗ながらも諦める気配は全く無いらしい。

どうやらその過程でナミヤノジコと交流があつたらしく17にもなつて海賊相手の泥棒なんて危険な事をしてるナミにさつきとノジコみたいにココヤシ村に落ち着いてくれと考えているらしい。

最も本人はそんな事絶対と言おうとはしないがな。

ナミが戻つて来るかも、というこちらの情報に”今度こそ言い聞かせてやる…”と両手を鳴らしていたのが印象的だった。

しかし”あの”アローンがここまで変わるとは…

クリークがやった事と言えばベルメールの強化と表向きは死亡となつているがフィツシャータイガーの救出くらいである。

その二つの事柄だけで東の海で暴虐の限りを尽くしたアローンがこうも綺麗になるとは…と、クリークはこれから先の麦わら一味の冒険に戦々恐々とするのだった。

## 魚人との激突

「シャハハハハッ！待ってたぞナミいっ！！そして麦わらの小僧共おっ！」

明けて次の日、ココヤシ村から少し離れたアローン率いる”魚人傭兵団”の拠点、アローンパークに麦わら一味の姿はあった、ついでにヨサクとジヨニーも、

そして一味に相對するのは傭兵団を率いるアローンの他に十数名の魚人達。

「うげ…どいつもこいつも強そうだな…」

相對する魚人達を實際目にするとうソツプはその迫力に後ずさるも

「はいはい、じゃあアローン達が勝ったらナミのグランドライン行きはまだ承諾はできないわ。

まあ逆にアンタらが勝ったらグランドラインに入る實力はあると判断して認めてあげる、双方それでいいかしら？」

「おう！問題ねえ!!」

「シャハハッ、上等だ！」

「アローン、ちゃんと手加減してよね？…まさかアンタが見下してる人間相手に本気出したりしないわよねえ？」

ナミのジト目にアローンは言葉に詰まるも

「っ…いいぜ？たかだかこのイーストブルーで海賊になろうって輩におれが本気なんて出すわけねえだろ…」

「へえ…まあアローンが本気出さないのはいいとして、勝負形式はどうする？」

一対一でもいいし、一対多数とかもしくは乱戦でもいいけど？」

「ふん！全員ぶっ飛ばしやいいんだろうが！」

そう言っつて両手を打ち付けるルフィに

「面白そうじゃねえか、…で、おれの相手はどうだ？」

獰猛な笑みを見せながら刀の柄に手をかけるゾロ、サンジも無言でつま先で二度ほど地面を叩き

「ぐ…よおーし！やっちまえお前ら！！援護なら任せとけ！援護ならな！！」

「いい？昨日も言ったけど今までの相手と同じに考えちゃダメよ？」  
いつでも放てるように愛用の銀河パチンコを構え、ナミも太腿に分割して装着した棍を引き抜き構える。

そんな臨戦態勢の麦わら一味にアーロンは  
「シャハハハツ、焦るなよ海賊見習いの小僧共…まずはこいつが相手  
でどうだ？」

その言葉と共に中央のプールからザパリ、と姿を見せる巨大な影。  
「うおー！！化け物お！！逃げるー！全員退避ー！！」

「海牛のモーム…まあ海獣の一種でな、こんな東の海にいたりや見るのは初めてだろうが…グランドラインにやこいつみたいなのがウジャウジャいるんだぜ？」

まあグランドラインに入るってんだ、こいつくらいサツサと片付けれるよなあ？」

と、凜猛な笑みを浮かべるアーロンに対してサンジが一步前に進む。

「任せろナミさん、きなよデカブツ…ここはおれが相手してやるぜー」  
「ブモーっ！！」

言葉を理解しているのだろうか、その挑発に乗るかのように牙を剥き出しにしてモームは鋭い牙を剥き出しに襲いかかるも

「ふん、随分と遅いな…オラアっ！！」

それをサンジは蹴り上げるだけでその口を閉じさせる。それに対してモームはさらに怒ったようサンジを押し潰すべく大きく飛び上がるもそれに合わせて大きく飛び上がると

「首肉（コリエ）…シュートおっ！！おいルフィ！吹っ飛ばせ！」

「任せろ！ゴムゴムの…バズーカっ！！」

首を蹴り上げられ空中に大きく躍り出るモーム、更にそこにルフィの双掌打が腹部に突き刺さり

「ブモオーっ!?!」

哀れその巨体は大きく吹き飛ばされアーロンパークの扉を越える

と海に吹き飛ばされた。

それにアーロンは感嘆した様子で

「ほお…テメエ能力者だったか、パラミシアか？」

そう呟く。

「おうっ！おれはゴムゴムの実を食ったゴム人間だ！」

「なるほどゴムか…なら、おいハチいっ！次はテメエが相手してやれ!!」

その言葉と共に別の魚人…六本の腕を持つ桃色の肌の魚人、ハチと呼ばれた男が進み出る。

「任せろアーロンさんっ！次は魚人島で一人を除けばNO. 1の劍豪！このおれが相手してやるっ！」

その言葉と共にルフィも自信満々で前に進もうとするが

「へえ…劍豪か、おいルフィあいつの相手はおれがやるテメエは後ろでどっしり構えてやがれ」

それはゾロの唯一残った…”和道一文字”によって押し留められる。

「ゾロ、アイツはタコの魚人である六本の腕全てに劍を持って戦うわ、後口から墨を吐く事もあるから不意打ちに気をつけて」

ナミのそんなアドバイスを受けつつ

「六刀流か…おれより多いつてのは初めて見るな」

「ニューー！お前は人間の劍士か！ナミを拐って行くなっておれが許さんぞー!!」

「人聞きが悪いな…おいヨサク！ジョニー！テメエらの刀も寄越しやがれ!!」

一本じや流石に不利だと考えヨサクとジョニーに声をかける。

「頑張つて下さい兄貴!!」

「おれ達の魂、兄貴に預けるつすよ!!」

二人の声援と共に飛んできた二つの刀を受け取るとゾロは唯一残った自身の刀を口に咥えて構える、その姿に

「三刀流…テメエまさか海賊狩りか！刀一本しか持ってねえから気付かなかったが…ハチいっ！そいつあ名の知れた賞金稼ぎだっ！そこ

ら辺の海賊と同レベルに考えてると痛い目みるぞ!!」

「任せてくれよアールンさん!三刀流だか何だか知らないがおれは六刀流のハチ!刀三本がどうした!おれの方が多いぞ!」

その言葉と共にスラリと六本のカトラスを引き抜き構えるハチにゾロは勢い良く踏み込むと真っ直ぐにハチへと駆け抜けるのだった。



## 三刀流と六刀流

真っ直ぐに自分へと向かって来るゾロに対してハチが行ったのは「くらえっ！たこはちブラーツク!!」

その言葉と共にハチが口から蛸墨を吐き出せば

「ナミが言ってた通りだな！」

その言葉と共にゾロはそれを左手に持ったジョニーの刀をハチへと振るう。

「何のおっ！」

しかしそれはハチの剣によつて振り払われる、その一合でゾロは何かを察したのか

「…見た目と違い随分と重い、これが魚人の腕力つてやつか？」

「にゅー！我が剣は一本300キログラムの特注品！お前等人間の剣では相手にならないと思え!!」

「剣の重さが全てじゃねえだろうに…いいぜ？やってやろうじゃねえか…」

その言葉と共にゾロはしゅるり、と手拭いを頭に巻きつけ強く結ぶ。

「行くぞっ!!蛸八撃（たこやうち）!!」

ハチはその声と共に六刀のうちの二本で八連撃を繰り出し猛然と襲い掛かるも

「手加減してくれるのか？ありがてえなあっ!!」

それは激しい音と共に弾かれる、続け様に交差した二刀よる峰打ちがハチを襲うも

「にゅー！たこはちブラーツク!!」

一瞬のスキをついてゾロの攻撃をハチは回避、更に蛸墨をゾロにぶち撒けた。

「くそっ！一回じゃねえのかよ!!」

不意の目潰しに思わずその手を止めるゾロ、ハチは追撃とばかりに豪腕で地面を抉り出し

「オン・ザ・ロック!!」

岩塊をゾロに叩きつけ…ようとしたところで

「ちっ！三連火薬星っ!!」

ウソツプの火薬玉が爆発、その岩塊を吹き飛ばした。

「ナイスウソツプ！ちよつとハチ！やり過ぎよ!!」

「にゅー…そうは言ってもナミ、アイツ手強いぞ!」

「だからって叩き潰す事無いでしょ!というかアタシはアンタ達に負けて欲しいんだけど!」

小さい頃から面倒を見ていた相手のあんまりと言えばあんまりな言葉にハチは泣きそうになるも”これもナミの安全の為…”とかぶりを振って思い直す。

「邪魔が入ったが…行くぞ海賊狩りいっ！我が六刀を受けてみろっ!!」  
蛸・足・奇・剣!!」

ゾロの一刀を同じく自身の一刀で弾き、続け様に六刀を連続して振りかざす。

流石にゾロと言えど

「ち、多けりやいいってもんでもないが…やり辛えな!!」

六刀の斬撃は猛攻をもつてゾロに襲い掛かるもゾロはそれを三刀で捌き続ける。

「六本の腕と軟体の身体があつてこそ初めて可能となる六刀流! たつた三本でおれの乱舞を受けてみろおっ!!」

「すげえ…流石兄貴、三本であの猛攻をしのいでる…」

「へえ、やるじゃない、ハチの剣をあも凌ぎ続けるなんて…」

「シャハハッ！流石だな、海賊狩りと名が知られているだけはあるか」

ゾロの腕に周囲が感嘆する中

「まあ厄介といえど厄介だが…おれも学習してね、面白いもんを見せてやるよ!」刀狼流し（とうろうながし）!!」

その言葉と共にゾロは六刀の乱舞を弾くのでは無く受け流し、そして二刀の峰がハチの腹を打ち据えた。

「にゅー！先程と打って変わって柔剣を使うか!」

「ついこの前すげえものを見させて貰ってなあ、おれも今のままじゃやっていけねえってな!!」

それにちよつとウカウカしてらんねえ事情もあるからな！さつさと片付けてやるよ!!」

と、先程からいやな感触がしている二刀を握り直しながらゾロは鷹の目とやり合った時の事を思い出しながら言う。

「にゅー！まだまだあつ!!六刀流・蛸壺の構え!!」

その言葉と共にハチは六刀の鋒を合わせ突撃の構えをとり真っ直ぐゾロに突っ込めば

「新・春・蛸上げ!!」

ゾロはハチの突撃に対して二刀でそれをいなそうとするもハチの構えは突撃点から大きくゾロの刀を弾き飛ばす。

「なっ!!しまっ!!」

「体・壊(たいかい)!!」

防御しようとした刀が弾き飛ばされたゾロはハチの突撃を大きくその身体にくらい吹き飛ばされ、腹に巻かれた包帯にジワリと血が滲む。

「ゾロおっ!!」

「ヤベエ！ありやモロに傷口に入ったぞ!!」

「ぐっ！面倒な技を…!!仕方ねえ、九体満足は諦めろ！腕の一本くらいは諦めて貰うぞ!!」

元来手加減とは戦闘力に差がある場合で成立するものだ、流石にこゝも実力が伯仲してる相手だと手を抜いて勝てる相手では無い、とゾロは判断し言い放つと二刀を交差させそれを空中からハチへと大きく振り下ろす。

「にゅっ!!ならば！我が六刀流の奥義を受けてみよ!!六刀の円舞曲(ワルツ)!!」

その言葉と共に六刀を回転させるとまるでその刃はミキサーのように全てを斬り刻もうとし

「その程度！アイツに比べればあつ！鬼・斬りいっ!!」

三刀の斬撃はハチが繰り出した六刀の奥義を打ち砕いた。

「にゅー!!おれの剣があつ!!一本300キロの特注品だぞっ!!」

「知るかよそんなん、いくら剣自体に重さがあるうがそれが差になる

と思うなよ?」

六刀を砕いたゾロは地面に着地様に反転し更に追撃をかける。

「剣が無くなってもおつ!たこ焼きパーンチ!!」

「剣士たる者、剣は大事にしてな!虎…狩りいっ!!」

「にゅー?!?!」

六刀を砕かれるも自慢の人間の10倍という腕力を持ってしてゾロを叩き潰そうとするもゾロの三刀がその身を大きく弾き飛ばした。

「安心しな…この剣じゃそこまで深手にやならねえよ…」

その言葉と共にヨサクとジョニーの刀は刀身の中程からバキリ、と折れたのだった。

## 蜜柑の航海士

「悪いな、ヨサク、ジヨニーいつもと同じように使ってたが…ちよつと保たなかったみてえだ」

刀身が折れた剣を両手にヨサクとジヨニーに詫びるゾロだったが「いえーゾロの兄貴が勝てたんなら何よりですよー」

「そうですね兄貴！剣は…また買い直すんで心配しないで下さい!!」

二人はそんな事は気にしなくていい、と慌てて首を振る。

「よくやったじゃないゾロ！所で傷は大丈夫なの？」

ハチを打ち破ったゾロにナミが近づいて来てそう言えば

「…悪いな、ちよつと寝る。ああそれからウソップ、援護助かったぜ」

まああんだけの衝撃を受ければ傷も開いて当然か、と思いつつ腹をさすりながらあの時岩を壊してくれたウソップに礼を言う。

「はーっはっはっは！援護は任せとけって言っただろ？」

一方魚人側は

「にゅー…すまねえアーロンさん」

「ふん、まあ相手が海賊狩りつてのものもあるかもしれねえが…」

「アーロンさん、次はおれが行こう」

申し訳なさそうにするハチにアーロンは流石に名が知られているだけあるか…と考えているとエイの魚人…クロオビが前に出る。

「ふーん？ハチの次はクロオビ…」

「ナミさん、次はおれが出ようか？」

考え込むナミにサンジが自分の出番か、と前に進み出ようとした所で

「待ちなさいサンジくん、次はあたしが出るわ」

その言葉と共に襟首をガシリと掴まれる。

「え!?!ナミが自分から戦うとかマジか!?!」

「おいおいおい、明日は雪でも降るんじゃないか？」

普段は戦闘を他に任せる自分たちの優秀な航海士が自ら戦う選択をした事に一味は驚きを見せるも

「しゃらっぷ男共！あたしだって戦いたく無いわよ、でもこれはあたし達がグランドラインで通用するか否かのテストよ？あたしだけ後ろに下がってるわけにはいかないじゃない…」

と、自分の考えを話すナミ。

「むー、全員おれがぶっ飛ばしやいいんじやねえのか？」

ナミの考えを聞き不満そうにいうルフィだったが

「だからアンタはアーロンを舐めすぎだって言ってるでしょ、アーロン以外はあたし達で何とかするから船長は船長らしくどっしり構えてなさい」

その言葉にルフィは暫く考え込むと

「…わかった！じゃあみんなを信じるぞ！」

とその場にドカリ、と腰を落とすのだった。

「というわけでウソップ、援護は任せるわよ？」

「ああ、昨日のやつも実用化したからな！タイミングはそっちで言ってくれ。」

所であの魚人はどういうやつだ？遠距離攻撃とかしてくるのか？」

親指を立てながらそう聞くウソップに

「…クロオビはエイの魚人よ、戦闘方法は主に魚人空手を用いた接近戦、そして…一応あたしの師でもあるわ」

そう言いながらナミは素早く棍を組み立てるとクロオビに向かって真っ直ぐに向かうのだった。

「ふん！正面から向かってくるとはその心意気は良し!!」

だが何の策も無く真っ直ぐ突っ込んでくるとは少し舐め過ぎだ!!」

真っ直ぐに突っ込んでくるナミにクロオビは呆れながら手早く終わらせるべく迎え打とうした所で

「煙星っ!!」

ウソップが煙玉を放ち着弾地点から白い濃い煙が撒き散らされる。

「ぐぬっ！小癩なあっ！」

「ごめんねクロオビ、流石にあたしも正面からアンタに勝てる程強くないから色々和小細工使うと思うけど許してね？」

煙の中から聞こえてきたその声にクロオビは

「そこかあっ!!」

と鍛えられた拳による正拳を突き出すもそこにはナミの姿は無く背中に衝撃、直ぐに向き直るも今度は別の方向から衝撃が走り更に別の方向から…と明らかに相手が一人では無いと感じ

「成る程、煙幕を姿を隠しつつお前と長つ鼻による波状攻撃か…だが…その程度の小細工でおれを倒せると思うなあっ!!百枚瓦正拳!!」

その言葉と共にクロオビの拳が地面に叩きつけられ、まるで爆発でもしたかのような衝撃が辺りに広がる。

勿論ただの煙がそのままである筈も無くその衝撃によって散らされるそこには

「しまったー煙が晴らされるなんて!!」

棍を今まさにクロオビに振り下ろそうとするナミの姿。

「ふふふ、まああのまま続けてもあの程度の小細工でおれは倒せなかつただろうが…まあ力不足なりによく考えたと褒めてやろう」

そう言いながら振り下ろされた棍を掴み、余裕そうな表情を見せるクロオビだったが

「必殺！タバスコ星っ!!」

その言葉と共にウソップが放った玉が狙い違わずクロオビの顔面に着弾、その玉はタバスコ他複数の刺激物を掛け合わせた特殊な溶液を撒き散らすものである。

先日、黄金銃の海兵が使っていた複数種の特殊弾を参考にして作った物である、勿論そんなものが顔面にぶちまけられればタダで済む筈も無く

「ぐおおおっ!!目があっ!!!」

「よし！今よウソップ！全力で攻撃するのよ!!」

「ああー任せろー鉛星!!」

思わずナミの棍を手放すと目を抑え膝をつくクロオビ、そしてチャンスとばかりにナミが動けないクロオビの頭部に棍を振り抜き、更にウソップも援護として鉛玉をクロオビに向かって撃ち込む。

哀れクロオビは自身の真価を発揮する事無く、当たりどころが悪かったのかナミのフルスイングによって地面に倒れ伏したのだった。

「クロオビ…おいナミ、ちよつと小細工が過ぎるんじゃないか？」

あんまりと言えばあんまりの戦いにアローンは思わず苦言を呈すも

「ふん、誰もがアンタみたいな実力を持つてるわけじゃ無いのよ？」

弱いなら弱いなりに小細工を使つてでも勝つ、その何が悪いのかしら？」

ナミのその正論に”むう…確かに正論かもしれんが…”と黙り込む。

「チュツ、どうするよアローンさん幹部も残りはおれだけだぜ？」

そんなアローンに幹部の一人であるキスの魚人：チュウが声をかければ

「…舐めていたのはこつちだったかもしれないな、チュウ次はお前が出る」

「チュツ、任せといてくれよアローンさんおれ一人で片付けて…」

”全員”でかかれ、残った全員でアイツらにかかれ、いいな？」

自身満々に言おうとしたチュウだったがアローンのその言葉に暫し固まるのだった。



## 受継がれた蹴り

「よし、じゃあ次はおれが出るぜ」

アーロン達魚人傭兵団のやりとりを見つつサンジが一步前へ進み出る。

「サンジくん、全員相手に一人でいける？」

とナミが心配するも

「任せてくれナミさん、あの程度くそジジイに比べたら物の数じゃ無いさ」

そう言いながら爪先で地面をコツコツと打ち付ける。

「チュツ、悪く思うなよスーツのあんちゃん。アーロンさんからの指示だし全員で掛からせてもらうぜ？」

「いいぜ？かかって来いよ三下共、これもうちの船長のオーダーなんぞでな、ナミさんは連れて行くぜ？」

「チュツ！上等だ！！テメエらやつちまえ！！」

チュウのその言葉と共に残った魚人達が一斉に襲いかかる。

しかしサンジもさるもの、四方八方から襲いかかる攻撃を全て蹴りでいなし、弾き、そして素早く正確に相手の頭部を蹴り飛ばし確実に昏倒させて行く。

暫くすれば十数名はいた魚人傭兵団のメンバーは全て地に伏せており残りはチュウだけとなっていた。

「チュツ…やるじゃねえか、身体能力にあれだけの差があるのに全員気絶させるとは…」

「へっ、いくら数を揃えた所で負けるかっての」

「じゃあこれでどうだ？水鉄砲！！」

その言葉と共にサンジにチュウの口から吐き出された水弾が襲いかかる。

とは言え単発の、しかも直線的な攻撃。

サンジは容易く見切ると回避して

「へえ、水の弾丸たあ面白えな。」

と珍しい物を見たかのように軽く言ってみせた。

「チュウッ！この程度で満足しないでくれよ？百発水鉄砲!!」

その言葉と共にガトリングを撃つかのように連続して水弾がサンジに向かって襲いかかり

「ぬおっ！そんなんも出来るのか!!随分と芸達者だな!!」

驚いたようにサンジは声を上げるも言葉とは裏腹にかつて教えられた歩法でスイスイと避けていく。

「…まあ避けるか、ならこれでどうだっ!!水大砲っ!!」

それと共にチュウは中央のプールから水を吸い上げこれまでとは比べ物にならない大きさの水弾を放った。

流石にこの大きさは避けれないと判断し

「ちっ、ぶつつけ本番とは面倒だが…タリアトリーチェ・シユートっ!!」

あの勝負の後にゼフから教えられた言葉

『いいかボケナス、てめえが斬撃を飛ばせねえのはただただ蹴りを振り抜く威力が足りねえんだ。』

とは言え一朝一夕でそうそう上げれるもんでもねえし精々地道にやるこつたな。

基礎は出来てんだ、そのうち放てるようになるだろうさ。』

その言葉を思い出しながら、なら勢いを増やせばいいんだろう、と蹴りを放つ前に一度回転し、その遠心力で勢いのままに蹴りを振り抜いた。

そしてその脚から繰り出された”斬撃”は巨大な水弾を真つ二つ叩き斬ってみせ、水弾はただの水と化してあたりに撒き散らされた。

「デメエ…まさかおれの水大砲を…」

「へえ、まだまだ未熟みたいだけど嵐脚じゃない。一体何処で覚えたのかしら？」

まさか避けるならまだしも正面から潰されるとは思わなかったのだろう、それを目にして驚いたかのように動きが固まるチュウ。

そして本来であれば海兵にのみ伝わる”六式”と呼ばれる六つの体術うちの一つ、蹴撃によって斬撃を飛ばす技”嵐脚”を海兵には見

えないサンジが使った事に少し驚いた様子を見せるベルメール。

「悪いな、続けて行くぞ!!」

「チュウッ!早えなっ!!」

その言葉と共にこれまた六式のうちの一つ、高速歩法である”剃”を用いてチュウウに急接近、連続した蹴りを繰り返すサンジにチュウウは何とかガードを行うも

「食らえ!!ジジイ直伝!蜂の…一撃っ(ヴェスパ・アゴ)!!!」

次々と襲いくる攻撃に対し、防御に集中したチュウウの意識の薄い所をサンジの鋭い蹴りが撃ち抜き、チュウウは堪えきれず地面へと倒れ伏すのだった。

「シャハハハハハッ、やるじゃねえか!同胞達やハチにクロオビ、チュウウといった幹部達まで下すとは…海賊見習いなどと侮って悪かったな!!」

「さて、あとはアロンあんただけよ?あんた一人であたし達全員を相手にできるかしら?」

ナミは少しでも勝率を上げるべくアロンにそう挑発を加えるも「シャハハあまり粹がるな、いくら同胞達を下そうがお前らは所詮は下等種。」

人間である限り魚人であるこのおれには勝てないと知れっ!!」

と、歯を剥き出しに構えるアロンだったが

「えー?でもお前ナミのかーちゃんにずっと負けてんだろ?」

とルフィが素朴な疑問を口にする。

「うるせえクソゴム!!…まあいい誰が相手だ?」

核心を突かれた事により一瞬取り乱すもアロンも例え魚人であれ勝てない人間がいる事は百も承知しているので直ぐにかぶりを振って落ち着くと両手を構える。

「よし!次こそおれの出番だな!!」

それに対してルフィが一步前に出ようとすも

「待ちなさいルフィ、ここは全員でいくわよ」

とナミはそれを押し留めた。

「えー、さつきから見ればつかでおれ全然戦ってねえんだけど…」

「だから言ってるでしょ？アーロンはかなり強いって。

いくらアンタでも一対一じゃ分が悪いわ、ここは全員でかかるべきよ？」

そう言って聞かせるも不満そうなるルファイに

「シヤハハ、何人相手でも構わねえぜ？こつちもそのスーツ野郎相手に全員で掛からせたんだ、卑怯だ何だと喚くつもりはねえよ」

アーロンのその言葉に

「悪いなルファイ、早い物勝ちだ！」

「待ってて下さいナミさん！あのサメ男はこのおれが華麗に片付けて見せますので!!」

サンジとゾロが先を争うようにアーロンへと向かい

「よーし！援護は任せておけ!!」

ウソップは少し離れた場所で愛用のパチンコを構えた所で

「馬鹿っ!!そんな不用意に近づいたらっ…!!」

ナミの忠告は一步遅く

「…真っ直ぐ策も無く向かって来るとは、自信の現れか舐められているのか…その勘違い少し正しておいてやる」

その言葉と共にアーロンは片手でプールの水をそつと掬うと自身に走って来る二人に向けて大きく腕を振り抜いたのだった。

## 魚人の猛威

「ほー、色々違う点はあるが戦力としては及第点か？」

しかしサンジが刺に加えて未熟ながらも嵐脚まで使えるようになるとは…

まあ他の面々に関しては終わった後をベルメールに任せてあるしどうとでもなるだろう、ここが終われば次はローグタウンか果たしてどんな騒ぎになるやら…」

アーロンパーク：魚人傭兵团拠点の高い建物の一番上からフードを目深に被った男が見ているなど梅雨知らず

アーロンが掌に乗せて振りかぶった水は高速の衝撃弾となって我先にと争うように向かって来ていたゾロとサンジの二人を大きく吹き飛ばした。

「ぐっ！ただの水を弾丸に!？」

「なっ!!さっきの野郎みたいなのか!」

「だから言ったでしょ!さっきまでと同じに考えないで、アーロンはノコギリザメ：サメの魚人よ!魚人の中でも別格、今までの相手なんて本当に前座に過ぎないんだから!!」

前座扱いに少し落ち込む魚人達を尻目に

「魚人空手に”撃水(うちみず)”って技があつてな…最も、おれは我流だからこりや似てるだけの技だが、このおれにとって少量の水がありや充分にお前ら人間を…殺す事すら出来るんだぜ?」

それと共にもう一度手に掬った水を大きく腕を振り抜いて投げつける。

「うおおっ!!こっちかよ!？」

援護を任せろ!と少し離れた塀の近くにいたウソツプは慌ててしゃがむとその上を水弾が通過、塀に大穴を空けた。

「…まるで散弾銃ね、ちよつとアーロン!手加減するんじゃないの!？」

高い威力にナミはそんな感想を抱きつつアーロンに聞けば

「おいおいナミ、こんなただの水かけ遊びだぜ？グランドラインに入ろうって輩がこの程度でくたばるわけねえよなあ？」

その言葉と共にアーロンがもう一度腕を振りかぶり、ゾロとサンジがそれに対応しようとした所で

「ゾロ・サンジ！やっぱおれがやる!!」

二人の肩に手が置かれた。

ゾロとサンジがそちらを見れば自身の肩には長く伸びた自分達の船長の手。

「馬鹿っ！そんな体勢で掴んだら!!」

「おい…てめえ、まさか!!」

二人の嫌な予感の間違っておらず伸ばされた腕はその特性を持つてして大きく縮み、肩を掴まれたゾロとサンジは後方に吹き飛ばされ、ルフィは反対に大きく前へと飛び出す。

そして続け様に

「ゴムゴムの…鐘えっ！と鞭いっ!!ついでに”銃弾(ブレット)”それから”銃乱打(ガトリング)”!!」

ゴムの反動を使つての頭突きとミドルキック、そして正拳にラッシュ。

怒涛の連続攻撃を叩き込まれたアーロンはその身を大きく吹き飛ばされると拠点に打ち付けられさま、その瓦礫に埋もれ周囲はこれならいけるか!?!と考えるもただ一人ナミは厳しい目。

「…今、何かしたか？」

瓦礫の中から立ち上がったアーロンは首の骨を鳴らしながら立ち上がり、その姿にさしたるダメージは無さそうだな、とルフィも指の骨を鳴らしつつ

「ああ、準備運動だ」

「…ほう、ならばおれも準備運動をさせてもらおう…かつ!!」

その言葉と共にアーロンは掬い上げた水を先程までと同じく今度はルフィに向かって投げつけると

「っ！いってえな!!」

自分はゴムだから、と油断していたのか海水で出来た水弾に対しマ

トモに当たったルフィにアーロンはにやりとすると

「シャハハ、いくらゴムでも能力者ってことは海水は効くのか」

そう言いつつ今度は両手で水を掬うと再びルフィに向かって振り抜いた。

「ぐっ！近づけねえっ!!」

断続的に飛ばされる海水の衝撃にルフィは攻めあぐねるもこいつに勝たなきゃナミがグランドラインに行けねえ！と覚悟を決めたのか大きく飛び上がると

「ゴムゴムの…戦斧っ（オノ）!!」

眼下のアーロンに向かって高い威力を持つ蹴りで大きく上から蹴りつける。

「ふん！下等種風情がいい気になるなあっ!!」

想定より重い蹴りに一瞬崩されそうになるもアーロンもさるもの、伸びた足を掴んでそのまま振り回せば床や壁、柱といったあちこちにルフィの身体はぶつけられ最終的に石柱に叩きつけられた。

「ゴムだからきかねえぞっ!!」

通常の間人だったら大ダメージだったであろう一連の攻撃を、能力の特性ゆえに何のダメージも無かったルフィは殆どダメージが無い状態で言えば

「だったらこれならどうだっ!!」

大口を開けて鋭く並んだ牙を見せて真っ直ぐルフィへと突っ込むアーロン。

「やっば!!ルフィ！絶対にそれは避けなさい!!」

アーロンが噛みつきこうとした所でナミの忠告が耳に届いたルフィは危ういところを何とか避ければアーロンは石柱を噛みつく羽目になった。

「よしっ！自爆しやがったぜ!!アイツの牙はこれで折れたな!!」

「…だから魚人を舐め過ぎよウソップ、しかもアーロンはサメの魚人よ？石柱の一つや二つ…ほらね？」

とナミが指差す方向をウソップが見ればそこには歯が折れるどころか石柱を噛み砕くアーロンの姿。

「おいおいおい、石柱を噛み砕きやがった…あの牙どんだけかてえんだ？」

「牙だけじゃ無いわ、魚人ゆえに身体能力は高く咬合力…噛む力も例外じゃない、その二つが揃った結果がアレよ、アイツは普通のサーベル程度なら噛み砕くわよ？」

「うげ…ほんと魚人ってのは別格だな…」

ナミの言葉にウソツプは、多分おれが魚人と一対一だったら勝てなかっただろうな…」と思うのだった。

「すげえなお前！剣も噛み砕くのか!!」

ナミの説明が聞こえたのだろう、ルフィが何度かステップを踏みながら断続的に攻撃を加えつつ聞けば

「シャハハ！人間は哀れだなそんな事すらできねえとは！…くれぐれも真似するんじゃないやねえぞ、魚人の噛む力あつての事だからな」

それらの攻撃を捌きつつ歯を打ち鳴らすアーロン

「しししっ！、お前がグランドラインについて来るんなら心強いんだけどな！」

ルフィのその言葉にナミは嫌そうな顔をし、アーロンは

「シャハハハッ!!馬鹿言え、グランドラインからここに落ち延びて来たとは言え人間如きの下につくほど落ちぶれちゃあいねえつもりだ!!」

変なものでも見たように大笑いしつつもどこか哀愁が漂うかのようだったのだった。



## 魚人との決着

「…さて、そろそろ決着をつけようか」

「おう、くるなら来い！」

「シャハハ！いい度胸だ！」

それと共にアーロンは中央のプールに飛び込むとナミの

「ルフィー！気をつけなさい！！水中から来るわよ！！」

慌てたような叫びにルフィーは警戒態勢、見ればプールを泳いでいた背鰭がトポンと消えると

「SHARK・ON・DARTS!!」

程なく海中で急加速したアーロンがまるで魚雷のようにルフィーに向かつて真つ直ぐに飛んできた。

「うおっ！あつぶね!!」

かろうじて避けるもその勢いは止む事は無くアーロンは壁にぶつかるとそのまま大穴を開けた。

「ほう…よく避けたな。海中で加速したおれを避けるとはやるな、だが避ければ避ける程地獄は続くぞ?」SHARK・ON・DARTS!!」

再び飛んできたアーロンの攻撃を再び変なステップでかろうじて避けるとそこには地面に突き刺さったアーロンの姿。

「なっ！なんちゆう鼻してんだあの野郎!!鼻だけが地面に突き刺さってやがる!」

「当たり前でしょ、アーロンはノコギリザメの魚人よ?ノコギリザメっていうのはあの部分は骨で出来てるんだからあの程度アイツにとっては朝飯前でしょうね」

ウソツプの驚愕にナミが補足を付け加えれば成る程、とゾロやサンジは納得しつつ固唾を飲んで二人の勝負を見守る。

「SHARK・ON・DARTS!!」

再び飛んできたアーロンにルフィーは

「くっそーもうちよつとだと思っただけだなあ…」

再びかろうじて避ける。

「何がもうちよつとか知らねえが…次で終わりだ!!」

そう言いながら再び海に飛び込むアロン、今度は先ほどよりも長く距離をとり加速を上昇させるとその勢いのままにルフィに刺さろうとしたが

「へえ…道理でさっきから変なステップを踏んでたわけだ…」

ベルメールがポツリと溢した理由は今まさにアロンの突撃が突き刺さろうとした所でルフィの姿がまるで消えたかのように移動したからだ。

「まさか…テメエ!!」

「鉄拳なんちやらとかさ、サンジとかナミのかーちゃんが消えるように動く時、一瞬のうちに10回以上地面を蹴ってるのがかろうじて見えたんだけだ。」

何とか真似できないかと思って試してたんだけど…サンキューなアロン、これでコツは掴めた」

「ツ…」 SHARK・ON・DARTS!!」

ルフィのその言葉にアロンは今度こそ手足の一本くらい串刺しにしてやろうと真つ直ぐに飛んで行くも

「もうあたんねえ!!」ゴムゴムの銃弾っ (ブレット)!!」

再び消えるかのように移動したルフィはアロンの真横に現れその胴体を殴り飛ばした。

「おしっ! やったカルフィ!!」

アロンはそのまま大きく吹き飛ばされ建物に大穴を空けるとウソップがこっちの勝ちだ、と拳を握りしめるも束の間

「シャハハ…シャハハハハハ!! まさかテメエらみたいな下等種にこれを使う事になるなあ思わなかったぜ!!」

建物に空いた大穴から出てきたアロンはその手に特殊な形状の武器を握っていた。

「なんだあのバカデケエノコギリは!?!」

「ギリバチー! ちょっとアロン!! 手加減するんじゃないの!?!」

その武器いつもベルメールさん相手にする時の武器でしょ!!」

「ぐ…いや!…こりゃ昔使ってたやつの方だから充分手加減だ!! いくぞ麦わらあつ!!」

「ふん！そんなバカみてえなノコギリへし折ってやる!!」

それと共に歯が荒い巨大なノコギリが唐竹、袈裟斬り、薙ぎとルフィに向かつて縦横無尽に振るわれるも、たまにかすりこそすれ有効打にはならずならば、とアーロンはキリバチを海中に浸すと引き上げそのまま海水が滴るキリバチを大きく振るった。

効果は劇的、先程手で救い上げた水がまるでショットガンでも撃ったかのような威力を発揮していたが今度飛んで来たのは言ってしまう、海水を纏った飛ぶ斬撃。

意表を突かれたそれに一瞬回避が遅れた為に赤い鮮血が飛び散る。

「ルフィ!!」

「大丈夫だっ！ゴムゴムの…銃乱打っ（ガトリング）!!」

「ほう、まだやるか…」

太腿に走る痛みを堪えてルフィは乱打をアーロンに浴びせる。

アーロンはその程度、と余裕を持ってキリバチを盾にその乱打を防ぐも

「まだまだあつ!!ここで退いてたまるかああつ!!」

なおもその乱打は止む事は無く、アーロンが盾としたキリバチにバキリ、と嫌な音が走り

「なっ！テメエこれが狙い…」

アーロンのその言葉はキリバチが半ばから折られ、身体にルフィのパンチが突き刺ささる事によって途切れ

「うおおおおおお!!」

そのまま数十発の拳がアーロンの身に余す事なく突き刺さり大きくその巨体を吹き飛ばされたのだった。

「よっしゃー!!勝ったぞー!!!」

勝鬨を上げるルフィに

「っ…クソっ、まだ終わってねえぞー！」

ボロボロになりつつも再び立ち上がるとうとしたアーロンだったが

「はいそれまで、まあ私はグラウンドラインに入る実力はあると思うけど…まさかここまでできて反対なんて言わないわよね？その力は十分に示したと思うけど？」

「ちっ、好きにしがれっ!!おいテメエら!いつまで寝てるつもりだっ!!」

自身もその実力はあると判断したのだろう不機嫌そうに吐き捨てると倒れた自身の部下達を叩き起こすのだった。

そしてそんな姿を最上階から見守るマントとフードの男は

「成る程成る程、騙し討ちのクリークとの戦闘経験が無くてあれか…

多分ベルメールかサンジの剣を見て覚えたかな?

とは言え入りと抜きが甘いし完璧に使いこなせているわけじゃ無さそうだな。

実力は十分、となれば少し死線でも潜り抜けて貰おうか…」

そう言いながらフードの男はニヤリと笑いつつマントの下の装備を起動させるのであった。

## 試練執行 ドンクリーク

フードの男は変声機のスイッチを入れ頭部を完全に覆うヘルメットを装着、そして上からは再びフードを被って地上5階からそのまま地面に降り立った。

まるで爆発でもしたかのような衝撃と共に降り立った乱入者は騒ぐ周りを他所に土煙が晴れるのを待ちルフィの方を向くと

「モンキー・D・ルフィ、貴様を排除する」

まるで抑揚の無い不気味な声で告げるとそちらに進もうとする。

「なんだテメェっ!!」

咄嗟に対応しようとしたアロンだったが直ぐ様首裏に手刀を入れられた事により沈黙

続いてはベルメールが剣を用いて高速接近、黄金銃をこちらに向けて発砲した。

「ルフィ!何アイツ知り合い!?!」

「いや!あんな不気味な奴知らん!!」

ナミがルフィに聞いている間にもベルメールと乱入者の争いは激しさを増し

「アンタ達!ちよつと逃げてなさい!!こいつ、かなり強いわよ!!」

簡単に銃弾が弾かれた上に戦闘が長引いているからだろう、ナミを含めた麦わら達にそう叫ぶ。

「逃亡は推奨しない」

「ぐっ…きやあああっ!!」

その言葉と共に先程までと違い乱入者の腕がまるでかき消えたかの如く動きベルメールはその小柄な身体を大きく吹き飛ばされた。

「ジェット・パンチ…モンキー・D・ルフィ、貴様を排除する」

邪魔者は消えたとばかりに再びルフィに向かう乱入者だったが

「必殺・三連火炎星!!今のうちにナミのかーちゃんとサメ男を!!」

「わかった!ヨサクとジョニーも倒れた魚人達を頼んだ!」

ウソップが時間を稼ぐべく放った特殊な弾によりマントとフード

が炎上、その隙をついてナミはベルメールの元に、ルフィはアローンの元に、ついでにヨサクとジヨニーは一味が破った魚人達を大慌てで移動させる。

そしてゾロとサンジはそれぞれ乱入者に対応出来る様に、と相対しながら

「燃え尽きたか？」

「いや、そう簡単にやいかねえだろ」

ゾロの懸念通り火勢が衰えてきた中に動く影、一言で言えば赤い全身鎧の男。

「脅威対象と判断、排除する」

そして乱入者は手のひらをウソツプの方へ向けると何をやる気だ？と訝しむゾロとサンジを他所に、その手のひらからは”光線”が発射されたのだった。

「なっ！ウソツプ!!大丈夫か!？」

「ビームだ?!?!こいつ、能力者か!!」

予想外の攻撃に驚きつつもウソツプを心配し早急に乱入者を片付けるべきだと判断したサンジは胴体に向け全力で蹴りを放つも

「ぐっ!?!こいつの鎧、タダの鉄なんかじゃねえ!馬鹿みてえにかてえぞ!!」

と、大した痛痒すら与えられず

「なら関節を狙えばいいだろう!!」

ゾロは防御が薄いと思われる膝の裏に向かって刀を振るうも金属音と共にその斬撃は途中で止まり、そしてお返しとばかりに乱入者は宙に浮かびゾロとサンジに両手を向けると

「なっ！今度は浮いただと!？」

「くそっ！またビームか!!」

今度はビームでは無く手首を折り曲げる事によって現れた銃口、そこから銃弾の雨が降り注いだ。

「メタルレイン」

「こんなもので!!」

「くっそ！浮かんでるのが厄介だな!？」

何とか乱入者を攻撃しようとするゾロとサンジだったが相手が宙に飛んでいる上に時折銃弾の雨が降ってくるのとあつて攻めあぐねていた。

「ゾロ！サンジくん!!大丈夫!?!」

「ゾロ！サンジ！なんださっきのビーム!!」

そんな折に戻ってきたのはナミとルフィの姿

「ナミさん！お母様は大丈夫でしたか!?!それからルフィ、あのビームはおれも知らん!」

「大丈夫、気を失ってただけよ。それよりもアイツ何なの!?!」

ナミのその言葉にゾロとサンジは

「わかんねえ、少なくともあの鎧みたいなのはちよつとやそつとじや壊せそうにねえな」

「それから見ての通り宙を飛んでる上にビームを掌から発射したり銃弾を撃ってきたりするんだ、多分何かの能力者だと思っぜ?」

「ビーム発射したり空飛んだらするんだろ!?!ならアイツはぜつてーロボだつて!...所でウソップは?」

「ああ、アイツならさつきから建物の影で動けなくなってる、多分ビームがあるから出るに出てこれねえんだろ」

飛び回る乱入者の姿をナミはじつと見て

「...足の裏と背中から何らかの推進力が発せられてるみたいね、どのくらい硬いの?」

飛行が能力によるものでは無いと見抜き何とか地上に落とせないか、と確認をするも

「おれが全力で蹴ってもビクともしなかつたぜ?たかだか鎧一つと思っただが...」

「蹴りがあめえんだろ、後関節も駄目だな、何らかの対策をしてやがる」

との無情な答え、トゲのあるゾロの言葉にサンジは蹴り掛かろうとするも

「はいストップ、でルフィを排除するとか言ってたけど本当に知らないのね?」

「おう、見るのも初めてだぞ！」

そこらの瓦礫の影に隠れながら四人が相談をしていると

「対象発見、排除する」

宙を飛んでいた乱入者がこちらに両手を向け今度は手のひらからでは無く親指以外の八本の指からレーザーを射出、細かに分かれて飛んでくるそれにそれぞれがダメージを負いつつも何とか退避しようとしたところで

「脅威対象、ロロノア・ゾロを排除する」

それと共に空を飛ぶ勢いを増し、乱入者は両の拳を前に突き出し血が滲んだゾロの胸部をまともに打ち抜いた。

「ゾロおっ!!」

「不味いわ！さつきもハチのバカに攻撃されたのに!!」

元々ハチに攻撃を受け傷が開きかけていたところに今回の攻撃、包帯への血の滲みが加速度的に速くなりゾロは膝をつく。

「バカ剣士！下がってろ!!」

更に追撃をかけようとした乱入者にサンジは蹴り砕けないまでも動きを逸らすくらいならできる筈、ということでは先ほどナミが言っていた推進力：脚に向かって蹴りを放つのも

「障害を排除する」

こちらから蹴ると同時に蹴り返された事によりバランスを崩し、更に足を掴まれ地面に叩きつけられた上に

「ぐあああああっ!!」

脛を踏み抜かれた事により長年かけて頑丈に鍛えてきた筈の骨が折れるという重症。

更についでとばかりに乱入者は扉に向かって両手からビームを放つと

「ぎゃあああああ!!」

その悲鳴にルフィがそちらを見ると吹き飛ばされるウソップの姿

「こんにやろよくも!!ゴムゴムの銃弾っ(ブレット)!!」

続け様に倒されたゾロ、サンジ、ウソップの姿にルフィは絶対にぶっ倒す、と考えつつ乱入者に殴りかかり



「ルフィー！ゾロ達は任せて！」

ナミは咄嗟にそう声をかけると気を失ったゾロや痛みには呻くサンジの元へと駆け寄るのだった。

## 赤き脅威 ドンクリーク

「くっそ、ゴムゴムのお…ピストルうっ!!」

倒れた仲間を庇いつつルフィは少しでも時間を稼ぐべく自身の能力を用いて乱入者に攻撃を仕掛ける。

「モンキー・D・ルフィ、排除する」

「うおっ!」

乱入者は自身に伸びてきたルフィの腕を掴むとそのまま振り回して叩きつける。

「攻撃を継続する」

「ゴムだから痛くねえぞっ、ゴムゴムの…バズーカっ!!」

かなりのスピードで建物に叩きつけられたルフィ、普通の人間なら重症は免れなかったであろうが流石は能力者、パラミシアは千差万別だが場合によっては打撃や斬撃を無効化する能力もある、例えばバラバラの実の能力者やアマミの実の能力者などだ。

ルフィのゴムゴムの実も同様で彼に関してはゴム故に打撃攻撃を無効化するという特性がある。

パンチやキックという単純な攻撃だけで無く球形の弾丸や鈍器、更には関節技や投げ技も無効とその分野の戦闘に関してはかなりの有用さを誇る。

「有効な攻撃へと変更する」

とは言え打撃系以外は普通にダメージを受けるので乱入者もそれに対応すべく両腕を振るうと手の甲から三本つつ鋭い爪が飛び出した。

「さっきからロボみてえな喋り方しやがって!」

自在に振るわれるその爪を避けつつルフィは一度大きく距離を取る。

「追撃する」

そしてそこに追撃をかけようとした乱入者相手に覚えたばかりの剃を用いて距離を詰めさせず、両足を伸ばして乱入者を挟み込むとその場で横に回転、伸びた足を捻れさせるとその勢いのままに乱入者は

大きく弧を描きかなりの衝撃で地面に叩きつけられた。

回転により威力を高められた攻撃でこれならいけるか！と思いなから警戒は解かずに地面に半ば埋まった乱入者に構える。

「…高威力の攻撃と認識」

しかし乱入者は特にダメージを受けた様子も無くその場で立ち上がった。

「頑丈だな！これでも壊れねえのか!!」

「無駄だ、その程度で破壊は不可能」

それと共に再びガシヤリ、と構え直す乱入者。

「だったらこれでどうだあつゴムゴムの…銃乱打っ（ガトリング）!!」

それと共にまるで腕が分裂したかのように見えるほどの速さでラツシユを繰り出す。

まるで壁が立ち上がったかのような攻撃だからか不明だが乱入者は両腕を交差しそれらの攻撃をしかと受け止める。

「うおおおおお!!うりやああああつ!!」

ルフィも先程アローンのキリバチを叩き折った時より更に苛烈に攻撃を加えるも

「メタルクロー」

乱入者は交差していた両腕を一気に広げルフィを弾き飛ばすと更に追撃として鉤爪から斬撃を放ち

「飛ぶ斬撃!?サンジの蹴りみたいなやつか!!」

ルフィは強敵だったアロンを打ち破った攻撃でもさしたるダメージを与えられなかった事に歯がみしつつも咄嗟にしゃがむ事でそれを避けた。

再び構え直す乱入者に

「くそっ何なんだよお前っ！おれを排除するとか言いながらいきなり出てきやがって！それにゾロとかサンジ、ウソップにまで攻撃しやがって!!狙いはおれじゃねえのかよ!!」

「…我等は”緋色の鳥”、脅威となる者を排除する」

「ひいろのとり…?」

「貴様が知る必要は無い、排除を続行する…コネクト・マキシムKZR

レーザー」

それと共に両腕を手の内側を合わせた状態でその手に光が迸ると

「うげーこりややつべえっ!!」

なにか、かなりヤバいと本能的に悟ったルフィはその場を大きく飛び退くと手の平からはまるで丸太ほどの太さの光線が発射され、それは進行方向にある物を全て吹き飛ばし建物を一直線に打ち抜いたのだった。

その破壊力にルフィは半ば啞然としつつも乱入者のその腕にスパークが走っているのを目敏く見つけた。

「砲身の破損により戦力低下、戦闘続行可能、戦闘を継続する」

「やっぱテメエロボだろ!!」

かなりの威力にドン引きしつつもやはりロボットじゃ無いのかと思いつつ再び腕を大きく引き、拳を叩き込もうとしたところで連続した銃声が響き渡り

「麦わらくん！私が時間を稼ぐからここは退きなさい!!ナミも含めてキミの仲間達なら村に運んだわ!!」

「ナミのかーちゃん!?お前大丈夫なのか!」

「おっと、これでも本部大尉よ！海賊初心者に心配される程安穩として来たつもりは無いわよ!!」

そう言いながら再び数発の弾丸を指の間に挟みつつ黄金銃に装填再び連続して発砲する。

続け様に放たれる弾丸は的確に乱入者の額を撃ち抜き続け、弾丸の特性なのだろう乱入者は大きく仰反るも態勢を立て直し

「戦闘継続に障害発生、これ以上の排除行動は困難と判断し退却する」  
高い戦力を持つベルメールの出現が理由だろう、ベルメールの出現と共に乱入者は足裏と背中 of 装備を起動させ浮かび上がり

「っ!!テメエ逃げんのかっ!!」

「…モンキー・D・ルフィ、今回は撤退する。が忘れるな我等”緋色の鳥”はいつもお前を見ているぞ」

それと共に乱入者は一気に飛び上がると空気を切り裂きながらあっという間に彼方まで飛び去っていったのだった。

「あー、くっそー！何なんだよアイツ!!疲れたあ…

そうだ！みんなは!?あのロボにやられてたけどみんなは大丈夫なのか!？」

相手が退いた事で一気に疲れが出たのだろう、その場にどきりと腰を落とすと助けてくれたベルメールにゾロ達の事を聞くルフィに

「安心しなさい、剣士くんは傷が開いてたし金髪くんは足の骨を骨折、二人共医者に診てもらってるわ。」

長鼻くんは飛んできた瓦礫によるものかしら？全身の打ち身があるけど命に別状は無いわ、ナミも貴方のお陰で上手く逃げれたわよ」

ベルメールのその言葉にルフィはようやく安堵しゆっくりと立ち上がり仲間達の元へと戻るのだった。

## 緋鳥正体 ドンククリーク

数キロ程を飛んで停泊していた船の甲板に乱入者は着地、ガシャガシャと大仰な足音を立てながら適当な木箱に腰掛けた。

「ボス！お疲れさまです！！どうでした？最終試験型の調子は」

そんな姿に工具箱と何やら大きな袋を持って駆け寄るギン、まあギンの呼び方からも分かるが”緋色の鳥”と名乗った乱入者はお察しの通りクリークである。

レンチで複数箇所の留め金を外してその下には額に汗をかいたクリーク。

「…とりあえず何か食べ物と飲み物をくれ、自分で外せないだけあつてかなり窮屈に感じるな、まあ火力は十分、防御力もかなり高いし問題無いだろう。」

「とりあえずすぐにつまめる物を持って来てます、飲み物はこっちにありますので腕から外しますね？」

ギンのその言葉にクリークは鎧で覆われた腕を上げつつ

「自分で外せないのはやはり不便かもしれないな、それに何より呼吸する為の隙間はあるとは言え中が蒸し風呂になるのは頂けないな…」

「まあ確かにいざと言う時自分で外せないのは問題かもしれませんが…、一般海兵が装着した場合パワーアシストが壊れると自身で脱げないので動けなくなる可能性がありますしね」

クリークが纏っていた鎧はパシフィスタ計画の対となっており、一般海兵でも能力者相手に戦える武装の開発を目指すミリタリスト計画、その成果だ。

ミリタリスト計画のフラッグシップとなつているこの計画はパシフィスタ同様に黄猿の能力であるピカピカの実の能力を搭載、他にも銃火器や近接武装を搭載しており、更にはクリークの棍と同じく、ウーツ鋼など複数種の金属を用いた合金を素材としている為頑丈さはトップクラスである。

最もその分重量が嵩み、一般の海兵は内部に仕込んだパワーアシス

トが無ければ動く事すら出来ないという欠点があるが。

しかもこの機械鎧、全身を”ほぼ”隙間なく覆っており装着及び解除には別の人間が工具を使って着脱する必要があるのだ。

よって戦闘中にパワーアシストが何らかの理由によって切れた場合ただの置物となる危険もある。

更に言えば鎧の中に熱が籠りやすいという欠点もあるし、何より値段がパシフィスタ並み…とはいかないまでもかなり高価だという欠点もある。

今回クリークが装着しているものは色々と試作を重ね最終的に作られた最終試験機…機？だ。

フルで装備し実際に使ってみての性能や欠点などの把握を目的としてクリークが長を務める海軍特殊装備研究部…通称・特装研の先導で行われた実地試験としてある。

東の海なら邪魔も入らないだろうし、実地試験も出来るし、正体も隠せるし、実力をセーブできるし一石二鳥どころか四鳥だと考えクリークが立候補したのだった。

「あ…パワーアシストがダメになってますね、想定以上の負荷がかかったっぽいですけど無理に動かしたりしました？」

脚と背中のブレイズダイアルは問題無さそうですね。

：レーザーシステムもダメになってますね、ひよつとしてリミッター外したりしました？」

手早く工具を使って装備を解除しつつ言うギンに”無理矢理動かしたつもりは無いんだがな…”と思いつつ無然とした顔をするのだった。

一方その頃、乱入された麦わらの一味は傷が開いたゾロや足の骨にヒビが入ったサンジの療養の為数日程ココヤシ村に滞在する事になった。

ルフィは持ち前の気やすさですると人の懐に入り込み、海賊旗を掲げていたとあって敬遠していた村人達と直ぐに仲良くなり、今もナミがグラウンドライン入りすると聞いて飛んで来たココヤシ村駐在のゲンゾウが怒鳴るのを他所に大きく満面の笑みを浮かべていた。

「ひいろのとり」：ねえ、ベルメールさんは聞いた事ある？」

「いや、ないわねえ。麦わらクン曰く」われ等”って事は複数人を指していると思うんだけど…この東の海であれだけの技術力がある勢力なんて思い浮かばないわ。

ひよつとして麦わらクンってどつかの御曹司だったりする？それならグランドライン辺りの秘密結社なり海賊なりが彼を狙って来たって事で説明がつくんだけだ」

一方ナミとベルメールは先程の襲撃者の事をルフィから聞いた情報を元に話し合っていた。

”ぜってーロボだっ!”というルフィの戯言は置いておくとしてもあの技術力はこの東の海にはそぐわない、外部の…それこそグランドライン辺りの勢力では無いのか、というのが二人の見解である。

「まさか、そんな話聞いてないわよ？気がかりなのはあの乱入者が諦めたわけでは無さそうってところなのよね。

グランドラインの勢力なら下手したらまた狙われる可能性はあると思うんだけど…」

「同感ね、確かに貴女の仲間達はみんな筋は悪くないしグランドラインでも通用すると思うわ。

でもあの鎧男が再び襲ってくる可能性があるとなると…ちよつと心許ないわね」

「ベルメールさんから見ても結構手強い？ベルメールさんが出た事で逃げたってルフィは言ってたけど」

「少なくとも大佐クラス…下手すれば将官クラスに匹敵すると思うわ…よし、決めた。

ちよつと全員怪我が治ったら私が見てあげるわ、ついでにアーロンも巻き込んでやろうかしら」

ベルメールのその言葉にナミは首を傾げる。

「見る…って何を？」

「何って戦い方を教えるのよ、少なくともあの鎧男が襲撃かけて来ても全員無事に逃れるくらいにはね。

あ、ナミ貴女もよ？今回ばかりはサボるのは禁止だからね？」



「…はあい、あたしは戦闘員じゃないんだけどなあ」

ベルメールの言葉にナミは仕方ないか…と思いつつやる気なさげに返事すれば

「戦えないのと戦わないのは別よ？いざと言う時逃げるのに必要な戦闘力は持つておきなさい」

ベルメールのその言葉に不満そうな顔をしつつもベルメールの提案を自身の船長に告げに言くのだった。

## 軍艦姿島　ドンクリーク

「さて……これより本艦は東方方面軍第八支部への調査に赴く。

第八支部支部長のネルソン准将が艦隊を私物化、私利私欲で動かし、  
ているとの内部通報を元に調査に当たる。

証拠隠滅などの可能性がある為こちらの正体は確定的な証拠が掴  
めるまでは秘密裏にするものとして行動にあたれ、以上だ」

ミリタリスト計画最終試験機の実地試験（建前）を終えたクリーク  
は報告のあった東方方面軍の不祥事についての調査に取り掛かる事  
となった。

船のメンバーに通達を行いE8支部に最寄りの島である軍艦島へ  
と船は進路をとり数日ほどで到着。

船が：しかも蒸気船が珍しいのか人々が集まって来たが見た所こ  
この島民は特徴的な帽子を被っているくらいで誰も彼も朴訥な村人  
といった感じであった。

話を伺ったところこの島には村が一つあるだけで自給自足で完結  
しており外との交流は殆ど無いらしい。

数日程軒先を貸してもらえないか？と交渉してみればこの村の村  
長を勤めるボクデンと名乗る老人が名乗りを上げたので念の為に船  
には多くの人員を残しクリークとギンは二人だけで世話になる事に。

そして最初は世間話から始まったもののその後は長い長い話が始  
まった。

なんでもこの島は千年を生きる竜の伝説が伝わっており俗に千年  
竜伝説と呼ばれているそうだ。

ボクデンの話は千年の間の国や王の話を事細かに一から延々と話  
しており最初は真面目に聞いていたものの流石にそれが数時間以上  
続けば疲れが見え始め、更に数時間もすると完全に飽きた様子でト  
ンダイアルでしつかり録音だけしつとも別の考え事をしていた。

そんな時である。

「ただいま！あれ、お客さん？」

そんな声を上げながら部屋に入って来たのは一人の少女。

他の島民達と同じく先の尖った帽子にくすんだ金の三つ編みと緑のリボン、まだ十代前半であろう少女は自身より見上げる程に大きい巨体に一瞬後ずさるも

「初めましてお嬢ちゃん、我々は旅のもので村長のご好意にて暫く滞在させて貰うことになった。

そうだな、これはお近付きの印だ後で食べるといい」

そう言いつつ腰のポーチが飴を取り出して手に乗せてくれた男に警戒をしつつも

「…ありがとう、おじさん」

警戒がそう簡単に解けそうにない事を感じつつも…もう42だしそうなるよな、と思いつつ

「ああ、よろしく。所でお嬢ちゃん、最近何か変わった事は無いかい？例えば海軍の噂とか…」

まあこんなへんぴな村のただの少女が何か知ってるとは思わないが…

「!…特に変わった事なんてないよ！ホントだよ!？」

明らかに狼狽した少女にここは見ぬフリで

「そうか…何か変わった事があれば教えてくれ、数日はここでお世話になるからな」

その言葉に

「わかったわ、じっちゃん！わたしちよつと用事があるからまた出かけるね？」

「アピスや、暗くなる前に戻ってくるんじよぞ？」

それだけ告げると再び颯爽と部屋を飛び出していきボクデンはその姿に後ろから声をかける。

これは何かあるな、と感じたクリークはギンに指示を出し秘密裏に後をつけさせるのだった。

そして数時間の間、ボクデンからの話を聞き流しつつ受けた報告は「何！まかれただ?!？」

「すいません、何処で察知されたのかわかりませんがまるでこちらを見ているかのように的確に森の中を抜けて結局見失ってしまいました

て…」

自身の信頼している部下であるギンの尾行失敗の報告だった。

「ただの少女だと思っていたが…お前の隠行を見抜くとは。

間違い無く此方の事を見抜いていたのか？念入りに回り道をしていたとかでは無く？」

「はい、あの動きは間違い無く追跡者がいると判断しての動き方でした。

匂いは消していましたし距離も十分とっていたのでそう簡単にバレるようなヘマはしていなかったのですが…」

「うーむ、カンが鋭いのか気配察知に長けているか…しかしこんな平和の村の少女が戦闘に長けているとは考えづらいしな…」

「何か他の要因があるのかもしれない、とりあえず行動から察するに彼女はこの島の中央、あの山を目指していたらしいです」

そう言つて窓から見える山を指差すギン。

幾重にも地盤が重ねられたような不思議な地形の、そしてこの島の名前の大きな要因ともなった山。

島の大地と何枚も大地が重なったかのようなその山は遠くから見るとまるで数枚の帆を張った軍艦を正面から見た姿をのよう。

故に”軍艦島”

誰が呼び出したのかはわからないが遠くから見た時は成る程言い得て妙だとクリーク達は思っていた。

そしてアピスが向かったのはどうもこの山らしい。

という事はこの山に何かあるのか？と考えるも流石に大きすぎるので人海戦術なりなんなりで手分けして探すか？と考えていると

「ただいまじっちゃん！お客さんがいるのに騒がしくしたら悪いからわたしはもう部屋に戻るね！」

「おおアピスや、ご飯は肉まんを蒸しているでな、ちゃんと食べるんじゃぞ。さてお客人話の続きじゃが…」

そう言つて再びこの島の過去の話を…というかこの話所々ループしてるじゃねえか、と思いつつもどうやらあの少女には何故か警戒されている様子だと察せられた。

∴明日になったらちゃんと話してみるか、子供に怖がられるのは慣れてるがどうもこちらを怖がってるというより何らかの要因でこちらを警戒しているみたいだな。

## 不明の少女 ドンクリーク

明けて次の日、一度ちゃんと話をしようとかすんだ金の少女…アピスの姿を探すもどうも見当たらない。

村長であるボクデンも

「おおーうい、アピスやーい」

と探し回ってる様子で何処に行ったのか、まさかまた山の方に？などと考えていると

「村長ーっ!!大変だべ村長!」

と飛び込んできたのは一人の男、先の尖った帽子という事は村の住民なのだろう

「おおトンガ、そんな慌ててどうしたのじゃ、まずは息を整えい。

ああ、それからアピスをみなかったかのう?」

トンガと呼ばれた男は余程急いで来たのだろう、荒い息を一度落ち着けると

「大変だべ村長!アピスさ…アピスさ海軍に連れて行かれちゃったべさ!!」

その言葉にボクデンは

「なんと!アピスは海軍さんに何かしたのか?」

「わがanne、珍しく海軍の軍艦さやって来たもんだからみんなで見てください。」

そしたらアピスさ飛び出してって海兵に何か聞いたらそのまま軍艦なかに引つ張られていったべさ!」

その言葉と共にクリークは慌てて島に唯一ある港に向かうもそこに件の軍艦の姿は無くクリークは入江に隠した自分たちの船、ベアトリーチエ号に向かうと船尾に設えた水槽を開放する。

「さて、ずつとこつちに来てから暇だったろうが今日は広い海で泳げるぞ」

「フゴオオオオツ!!」

そうして元気よく鳴き声を上げて出て来たのは闘魚…かつてグリンビットで捕らえクリークの個人的なペットとなった”マガツ

ノ”である。

待機するマガツノに手早く鞍や手綱を取り付けると

「カフウ！上空から見てこの島から離れる海軍艦を探してくれ!!」

「くるるっ!!」

そう叫びながらマガツノと共に海へ飛び込むと一度港に向かうのだった。

港には丁度走って来たのであろう村長のボクデンがいたので

「村長！お嬢さんは俺が見て来ますので村長はここにいて下さい！ひよつとしたらなんかの誤解があっただけでひよつこり戻ってくるかもしれませんし！」

その言葉にボクデンが片手を上げて答えるのと、偵察に赴かせたカフウが肩に降り立つのを同時だった。

「くるるっ！くっっ！」

「成る程、南西か」

カフウがくちばしで指し示す方向を方位磁石で確認してマガツノの手綱を引き真っ直ぐに向かう。

暫くすれば見えて来たのは一隻の海軍艦、成る程あれがか…と思いつつこのままでは存在がバレるので手綱を引くと海中に潜り込む。

そのまま接近し海面から顔だけ出して船を一周ぐるりと見て回れば

「…良かった、この船であってたか」

そこには最も採用数が多いスタンダードモデルの海軍の軍艦。

そしてその船尾楼の窓に不安そうな表情のアピスの姿が確認できた。

確か一般的な軍艦だとあの場所は客室だったな…そう考えつつ、カフウにとりあえずアピスを発見したとの村長への手紙を持たせて自身はマガツノと共に軍艦にバレないようにぴったりくっついて泳ぐ。そして十数時間が経過したところでようやくクリークは動き出した。

まずは海面から船の側舷をバレないようによじ登りあつという間にアピスの姿が見えた船尾楼の窓へ。

素早く窓の外から中を確認し寝台に眠るアピス以外の姿が無い事を確認して腰のポーチから複数の道具を取り出すとガラスを割り貫き、そして器具を突っ込んでしばらくするとカチャリ、という音がして鍵が外れた。

そしていざ窓を開けてなかに侵入しようとした所で自身の身体じやどう足掻いても通れない事に気づいた。

窓の大きさは精々直径30センチ程度のもの、普通の人間なら何とか頑張れば通り抜けられるかもしれないがとてもじゃ無いが普通の人間を大きく逸脱した自身の身体が通り抜ける事は出来ないだろう。

とは言え眠るアピスも手が届く範囲からは遠くどうしたもんか、と悩みしばらく考えると上空に待機していたカフウにハンドサインで合図を出す。

そして海面のマガツノにもハンドサインで指示を出してしばらくすると大きな衝撃音と共に大きく船が揺れる。

続いて甲板の方からは連続した銃声、マガツノが上手く舵を叩き折りカフウが上手く人を惹きつけたみたいだな。

先程の衝突によってベッドから跳ね飛ばされたアピスは

「あたたたた…まったく何なのよもう!!もうちよつと安全に運転しなさいよ!!」

思いつきり床にお尻を打ち付けたらしくそこを抑えて文句を言っている。

「お嬢ちゃん、お嬢ちゃん」

そんな姿に声がかかりアピスが声の方を見ればそこには開いた窓があるも声の主を居らず

「…誰かいるの?」

恐る恐る窓に近づきつつそう尋ねる。

「安心してくれ、村長から依頼を受けて来た。

君がここにいるのは自身の意思でか、若しくは無理に捕らえられたのか教えて欲しい、場合によってはこちらはお嬢ちゃんを救出する手段がある」

窓から姿を見せたのは大きな手、その手が落ち着けとでも言うよう



にジェスチャーをとり質問をして来た。

そしてその質問にアピスは少し考えると

「…ちよつと質問しただけだったんだけどなあ、海軍は今信用できないかも。」

お爺ちゃんの知り合いってのは本当？お爺ちゃんの得意料理は？」

完全に警戒をといたわけでは無いのだろう、そんな質問に

「豚まんだ、ただアレは時間がかかるんだよな…しかもその間の昔話の長い事長い事…」

クリークは昨日のそれこそ肉まんが出来上がるまでの間、昔話をしてくれるというのに軽く頷いた結果の出来事を思い出しながらそう語るのだった。

「本当みたいね、所でどうやって逃げる計画？」

「現在仲間が騒ぎを起こしている、嬢ちゃんはこの窓から海に飛び込んでくれ、おれもすぐに後を追う。」

そして仲間に拾ってもらって後は軍艦島に帰るだけだ」

と計画と呼ぶほどでも無いがその行動を話せば

「げっ…わたし泳げないんだけど…」

嫌そうな顔で言うアピスに

「なんだ、カナツチか…仕方ないおれが小脇に抱えて行こう」

「…できるだけ海には近づきたく無いんだけどなあ」

その言葉にクリークはふと疑問を覚えるもカフウにいつまでもおとりをさせるわけにはいかないのでアピスを急かし窓から出てもらうのだった。

## 声聞く子 ドンクリーク

アピスを小脇に：お姫様抱っこならぬ通称・お米様抱っこと呼ばれる抱え方で窓を飛び出ると

「マガツノおっ！あわせろ!!」

と叫べば直ぐにマガツノが水を切って着地点に、素早く衝撃を殺して着地。

騒がしい軍艦の方を見るもまあ舵を壊しただけで穴は開けて無いので勘弁してくれ、と思いつつ鞍に跨り手綱をとる。

指笛を鳴らしてカフウにも撤退を促しその場から早急に脱出しつつ小脇に抱えていたアピスを鞍に座らせる。

「しつかり捕まつてろよ？マガツノは尋常じゃない程のスピードを出せるからな」

「あなた：うちに来てた旅人さんよね？」

ようやく落ち着いたと感じたのかアピスがそんな質問をしてきたので

「ああ、少し話をしたいと思ってたんだがお嬢ちゃんが海軍に連れ去られたと聞いてな」

「それでわざわざ海軍に喧嘩吹っつけたの？ひよつとしておじさんは海賊？」

「ハツハツハ！まさか！俺は海賊じゃないよ、まあ荒事には慣れてるがな」

そう言いつつ自身の腕をパシリと叩くクリークに

「ふーん？でもおじさんどこから来たの？この子もそつちの子もそうだけど初めて見る子だわ」

そう言つてアピスが撫でるのはマガツノとカフウ、まあ言つても問題無いだろうと思いつつ

「ああ、俺はグランドラインから来たんだ」

「えっ！グランドラインから!?道理で見たことない子なわけだ…」

そう言いつつカフウの首元を撫でるアピスだったが

「くっ！くるくるくっ！」

「ん？もうちよつと下って事かな？」

そう言つて撫でる手を少し下に下ろすアピス

「くるるるるっ」

”よきにはからえ…”何かこの子聞き取りにくいなあ？”

まるで会話でもしているかのようなその様子にクリークは

「アピス：お前カフウの言葉がわかるのか？」

「あー…まあ言つてもいつか、昔ね変な果物を食べたんだ。

見たこともないすごく不味い果物でね、それからわたしは動物達の言葉が聞こえるようになったんだ。

最初は凄く驚いたし何故か凄く怖かった、それまでまったく気にしなかつた鳥達や動物達の声が聞こえ出したんだもん。

村に來た商船の人が教えてくれたわ、わたしが食べたのは悪魔の糞つていう不思議な食べ物でそれを食べた人間は海に嫌われてカナヅチとなる代わりにひとつだけ能力が宿るんだって。

それを知つて、そして実際にちゃんと向き合つてある時を境にわたしはこの能力を受け入れた、わたしに宿つたのは動物や鳥さん、魚さん達の声が聞こえる能力、”ヒソヒソの糞”の能力だよ」

成る程だからギンの隠行を見抜く事ができ、カナヅチで海もあまり近づきたくないワケか。

最初はこちらを警戒していたのも肯ける話だ、力の無い能力者が拐われて売り物にされるなんて話も決して無いわけじゃ無いしな。

「ブモオツ！ブモオツ!!」

「え？”我の言葉を伝えろ”？」

「ブモモツ！ブモオオオツ！」

”逃げぬからもつと泳がせろ”…？だつて、おじさん」

「む、それはマガツノが言つてるのか？」

「ブモモオツ！ブモツ！」

”待遇の改善を要求する!!”だつて、おじさんこの子に酷い扱いしてるの？」

「いや、まさかそんな…しかし成る程な、使い方によつてはかなり有用だろう、それで最初はこちらを警戒していたわけか。」

「まあそれが全部ってわけじゃ無いんだけどね、ところで自信満々に言っておいてなんだけどこっちの子の声はちよつと聞き取りにくいんだけどね」

大きな鷺であるカフウの羽を撫でながら言うアピスに

「ああ：そりゃカフウは純粋な鳥じゃ無いからその事が影響してるのかもしれんな」

「純粋な鳥じゃ無い：？普通に鳥さんに見えるけど」

「カフウは悪魔の実を食べた武器だ、その鳥の姿は悪魔の実によって得られたものだからだろう、その声とやらが聞こえにくいというのは」

「悪魔の実：：それってわたしのヒソヒソの実みたいなの？」

「ああ、カフウはトリトリの実を食べた。」

以来鳥の姿を得て鳥にも武器にもなる存在として生きている。

純粋な鳥じゃ無いから、だというのはかなり理由になると思うが？」

そう言ってクリークがカフウを撫でれば甘えるように頭を擦り付ける姿に

「悪い人：：ってわけじゃなさそうね、色々と警戒はしてたんだけど：」

「やっぱりか、そしてその為に海軍の人間にこちらの監視なりなんなりお願いしようよと：いや、それだと何故お嬢ちゃんが拐われたのかわからんな：」

と自身の推論を披露しようとしたところでそう言えば何故アピスの身柄が海軍に確保されたのかわからんな：と気づく

「あはははは、それは別件だよ」

「別件？海軍船沈めたり海兵殴り飛ばしたりとかしたのか？」

「ちがうわよ！？おじさんはわたしを何だと思ってるのよ！！」

ちよつとどうしても知りたい事があつてその解決の為に海兵の人に聞きたい事があつて話しかけたんだけど：」

「何らかの不都合か海軍がお嬢ちゃんの力なり情報なりを目当てに捕らえたって事か：あの船はE8支部のマークがあつたって事はやっぱりそつち関係か：」

「…助けてもらったのにいつまでも警戒してばかりじゃ悪いかね。  
わたしはね、友達を助けたいの。その為に知りたい事があつてね、  
それで海軍の人なら何か知ってるんじゃないかって思ったんだ」  
と強い、何かを決意した目でアピスは言うのだった。

## 千年の竜 ドンクリーク

「さて、友達を助けたい、だったか？詳しく話を聞かせてもらおうか」  
無事にアピスを連れ帰りボクデン達に引き合わせてその日の夜、ク  
リークは詳しい話を聞くべくアピスと向かい合っていた。

「…おじさんは千年竜って知ってる？」

「千年竜…ドラゴンか。生で見た事は今のところないな…」

ん？そういやあの老人が話していた中であつたな、ロストアイラン  
ドだったか？

かつてロストアイランドで崇められていた存在で、この島民はその  
ロストアイランドの末裔…だったか？」

「それでわたしはそのロストアイランドを友達のために探してるん  
だ、伝説だけじゃ何の手掛かりも無いし、だから偶々この島に立ち  
寄った海軍の人達に聞いてみたの。」

…でもそれが間違いだった、あの人達は竜骨を探してたんだ」

「…千年竜の骨、不老不死の妙薬になるだったか？そんな伝説に踊ら  
されているのな、アホくさ。」

しかしロストアイランドは太古の昔に沈んだんじやなかったか？

昔話でちらと言ってたぞ？」

「…そうなんだけど友達が言うには島は再び浮上するんだって、そろ  
そろの筈だけどその場所がわかんないんだ」

「…少し疑問に思ってたんだがお嬢ちゃん」

「一応アピスって名前があるんだけど…」

無然とした面持ちのアピスに流星にお嬢ちゃん呼びは良くなかつ  
たか、と思いつつ

「んじやアピス、アピスの能力は動物の声が理解できる、だったか？」

「んー、あの時はわかりやすく説明したからそう言ったけど正確には  
”動物達の心がわかる”かな？」

鳴き声で何を言ってるかはわかるけど別に鳴き声は無くても聞こ  
える、それがヒソヒソの実際の能力だよ」

「ほう、心を聞くか。因みにそれは人間の心は聞こえたりするのか？」

クリークの質問にかぶりをふるアピスは

「ううん、人の心はわからないわ。わかるのは動物達や鳥さん魚さん達かな？」

「という事は動物と友達になってもおかしく無いわけだが…その助けたい友達とやらは何者だ？まさかと思うが今までの話から推察するに…」

「…そうだよ、竜じい…わたしが助けたい友達は千年竜よ。」

年老いて、空を飛ぶ力も無くして、それでも故郷に帰りたいつてずっと悲しんでるんだ。

だからわたしは竜じいを故郷に返してあげたい、その為にロストアイランドの手がかりを探してたの」

「成る程、島が再び浮上するというのはその千年竜の言った言葉か…となると一概には否定できんな。」

しかし…手がかりが少なすぎる、場所が分からんとあつてはな…

アピス、その竜じいとやらと話す事はできるか？この島にいるのだろうか？ひよつとして山の方か？」

「どうして場所を…あつ！ひよつとして昨日わたしを追いかけたのっておじさん!？」

「いや俺では無いが俺の他にもう一人いただろ？ギンって言って今も表で見張りを行っている。」

あの時は子供が一人で飛び出していったから念の為に追いかけてもらったんだが…」

「誰かが追いかけて来てるって鳥さん達が言ってたから相手の場所を教えて貰いながら上手くまいたと思ってたんだけどなあ…」

「ああ、それでギンの隠行を見破れたのか…」

「誰か知らないけど怖かったんだからね？竜じいと話をしたいというのはわかったわ。」

…今日はもう遅いし明日竜じいのところに案内してあげる、そして…良かったら手伝って欲しいの、竜じいを故郷に送り返すのを」

アピスの言葉にクリークは

「任せておけ、子供のお願いを聞いてやるのも大人の務めだ」

と言つて胸を叩くのだった。

「…そう言えばおじさんの名前聞いてなかったや」

「…そーういや名乗っていなかつたか。」

では改めまして俺はクリーク、竜じいとやらを故郷に戻す、それまでしばらくの間だがよろしく頼む」

そう言つて手を差し出せば

「うん！よろしくね、クリークおじさん！」

自身の倍以上の大きな手を握り返すのだった。

…明けて次の日、クリークとアピス、ギンが出発の準備をしていると

「ボクデンさん！ボクデンさんとアピスはいるかい！！」

とドンドンと叩かれる戸板。

「はいはい、待つとくれ…なんじやリボーか。どうしたそんなに慌てて」

「港に海軍の艦隊が来てんだよ、何かアピスを探してるんだが…アピス、お前何かやったのか？」

戸惑つたように聞くこの島の島民だろう青年が聞けば

「だから違つて言つてんでしょ！全くみんなはわたしをなんだと思つてるのさ！」

「…とにかくアピスを探してるみたいだから港の方は危ねえ、ここもいつ探しに来るか」

「…わかつたわ、わたしはしばらく身を隠すから村の人たちは知らないフリをしてね？」

「だがお前一人で大丈夫か？」

アピスが身を隠すと聞いて心配する青年に  
「彼女の事ならこちらに任せてくれ」

とクリークが進み出る。

「…アンタは？」

怪訝そうな青年にクリークは

「村長の家で厄介になつてる旅人さ、流石に子供一人というのは放つておけないし、それに一宿一飯の恩を返すとも思つてくれればい



い」

「…そうか、アピスの事をくれぐれも頼んだぜ」

青年はその言葉に納得したのか一度大きく頷くとそう言って再び村の方に戻るのだった。

「クリーク殿…本当じゃったらわしが着いていければ良かったんじやが見ての通りもう年じや、アピスをお頼み申すじや」

「村長、貴方は村の代表ですからここは俺に任せて下さい。」

場合によっては多少手荒な事になるかもしれないかもしれませんが決してこの村に災禍が行くような事にはさせませんのでご安心を」

そう言ってクリークはアピスを小脇に抱え、ギンと共に村長の家を飛び出したのだった。

## 竜の願い ドンクリーク

「…間違いないE8支部の艦隊だな」

小高い丘から港の方を確認しつつアピスを小脇に抱えて森に入る。  
「まさか海軍の艦隊まで出てくるなんて…あつそつち右ね」

山道を進み、崖を越え…しばらく進んだあたりで山の裏手に出るとそこにあつたのは一つの洞窟。

「…ギン、表で見張つてくれ。もしE8支部の海兵が来たら多少手荒にやっても構わん」

「了解です、ボス」

万が一の為に見張りをギンに任せてアピスとクリークは洞窟の中へ。

しばらく進めば

「竜じいー！大丈夫ー？」

「こりやまた…いや信じて無かつたわけではないがなんともデカいな…」

そこにいたのは緑色の羽毛を持ちくちばし？を持つ巨大な体…

「こつちはクリークおじさんだよ、海軍がね竜じいを狙つてるみたいなの。」

うん、そう。んでこつちのクリークおじさんが竜じいを故郷に返してくれる手伝いをしてくれるって!!」

成る程心が聞こえるというのはこういう事か、鳴き声が無くても相手と喋れるのか…

「随分と年老いているようだな…弱っているのか？」

「…竜じい、いつも言つてたんだ。故郷に戻ればきつと元気になるつて。」

今は飛べなくなるほど弱ってるけど故郷に…ロストアイランドに帰ればきつと元気になるわ！」

アピスのその言葉にクリークはいくら千年竜と言えど寿命はありそうだが…と思いつつも

「わかった、しかしロストアイランドか…情報が少なすぎるな。

島を探すにしてもここから竜じいを連れ出さしにやならんだろう、…  
さてどうしたものかな」

と、具体的な手段を考えていると洞窟の外から争う音が聞こえてきた。

「ギン！海兵か!!」

直ぐ様表に出るとそこには銃を構えた複数の海兵、そして中心には海軍コートを羽織った男性とその横には細身にグレーのスーツに細いサングラスをかけた男。

「見つけたぞ！まだ仲間がいたとはな。その少女をこちらに渡せ大男！」

海軍コートの男性…ありや少佐クラスか、と考えつつそつとアピスを後ろに庇い

「おーおー、正義の海軍サマがこんないたいけな女の子一人を大勢で追い回して…」事情は知らん”がこの少女が一体何したってんだ？」

と洞窟から注意を逸らす意味も込めて挑発すれば

「黙れ！我々が探しているものをその少女が手がかりを持つてる可能性があるのだ！一般人は引っ込んでいろ！」

成る程一般人か…、一般人と確信していながら武器を向けるとはな

…  
「へえ…その為に艦隊まで引つ張り出して、守るべき市民に銃を向けるね…」

貴様それでも海軍の…しかも佐官か？聞いて呆れるただの海賊と一緒にやねえか！」

「なっ…我々が海賊だと！訂正しろ!!」

「事実を言ったまでだ、海賊じゃないってんならさつさと帰って海賊でも捕まえてろ！守るべき市民に武器を突きつけるとは何事だつ!!」

「フン、下らない…」

少佐、娘は見つかったのだいつまでもこんな奴らに構っているべきでは無い、さつさと撃て」

クリークと少佐が言い争っているところに入る一つの声。

「お前は？海軍の人間じゃないようだが…」

「ああ、ワタシは旋風のエリック。ネルソン・ロイヤル准将に雇われている傭兵だ。」

「今ならまだ見逃してやるからその少女をこちらに渡せ、これは最終通告だ、少佐奴らが断ったら撃て」

「っ…だが」

「ネルソン准将の命令に背くつもりか？指揮はワタシに一任されている筈だぞ？」

成る程、やはりE8支部自体がネルソンの命令に従ってるようだな、しかも外様の傭兵まで雇って更に指揮権を傭兵に渡してるだあ？ふざけてるのか？

「っ…総員構えっ！」

「さて、返事はどうだ？」

「…断らせてもらおう、とてもじゃないが信用できないからな。」

しかし残念だよ少佐、間違った事は正せる人間だと思っただけだな」

「そうか…ならばここで死ねえっ！」

「っ…総員、撃てえっ!!」

クリークの言葉に一瞬躊躇するも、少佐は発砲を指示、それに答えて十数丁はある長銃が一齐に火を噴き、そして金属同士の衝突音が響いたのだった。

「きかないねえ…鉄だから？」

一度は真似したかったセリフを言えて満足なクリークを他所に

「っ…能力者か!!」

「ほう…さしずめテツテツの実とでもいったところか…、鉄と云えど畳みかければそのうちボロが出る、全員でかかれ!!」

エリックのその指示に多くの海兵が駆け寄るも

「やれ、ギン」

「了解、ボス」

その言葉だけでギンが腰から仕込みトンファーを取り出し前に、瞬く間に多くの海兵達を地に沈める。

無理もない。いくら支部と本部の格差が縮まったと言えど東方面指令軍の海兵の多くは戦闘経験が少ない。

とは言え一応海賊と戦闘経験が無いわけではないが、一方ギンは一応海軍本部大佐、地位だけなら支部一つ若しくは艦隊一つ任せられていてもおかしくない実力なのだ、相手が弱卒だと決めつけるのは少し酷というものだろう。

「ブン…海軍が聞いて呆れる、あのような人間一人倒せぬとはな…」

エリックのその言葉に少佐は拳を握りしめ歯を食いしばる、そしてエリックはそう言つて前へ進み、丁度怖気抱いて後ろに下がった海兵を「邪魔だ」と腕を振るう事で切り捨てた。

## 旋風之力 ドンクリークさん

「む…仕込み武器？いや、そんなもんじゃないな…」

「フッフ、正解だ…さて、我々は貴様ら何ぞに用は無い。

我々が用があるのはこの小娘だけだ、邪魔するならワタシのカマカマの鎌鼬の餌食になるぞ？」

「カマカマで鎌鼬…ねえ、何とも理解しやすい能力だ事」

「貴様も人の事言えないだろう、テツテツなどとわかりやすい名前にも程がある」

…俺が言ったわけじゃ無いんだがなあと思いつつも

「…まあ何でもいいが俺は少女をはいそうですか、と貴様らに渡すつもりは無いし、大人しく立ち退くつもりもない。

さっさと帰って飼い主に伝える、竜骨は手に入りませんでした諦めてくださいとな」

「ほう、そこまで掴んでいたか。

だったら後悔するなよ？カマカマの…旋風えっ（つむじかせ）!!」  
それと共にエリックが右手を大きく振り下ろせばクリークの服に

5本筋の切れ込みが走る。

とは言えいくら服に効果があればその鍛え上げられた肉体にその攻撃が及ぶ事は無かったが。

「成る程、ホントに名前の通りカマイタチだな、5本の斬撃という事は指から出てるって事か？」

「フッフッフ正解だ、オレの作り出す風は名刀並みに鋭いのさ。

貴様がどんなに鍛えていようとオレの能力があれば八つ裂きにするのは簡単なのさ、フッフッフッフッフ…ハッハッハッハッ！」

「はあ…確かにカマイタチを起こせる能力、わかりやすいし使いやすい能力だろうが…

そんなもん簡単にできるだろ、飛ぶ斬撃を見た事ないのか？」

「何だと貴様！」

「こういう事だよ、”小断（こだち）”!!」

それと共にクリークは手刀に構えると手首のスナップで嵐脚の変形型、小断にて斬撃を繰り出せば

「何だどっ!! 貴様テツテツの実際の能力者では…カマカマの旋風っ!!」

一瞬驚くもすぐさま両手でカマイタチを放ち斬撃を相殺するエリックに

「誰も俺がテツテツの実だと言っていないだろう…ったく人の話聞かないのか?」

「くっ…鉄の硬度を持つ肉体に斬撃を飛ばすだと…そう言えば何処かで…」

まさか! まさか貴様”殺し屋ダズ”! 西の海からいつこつちに来たのだ!!」

成る程そう来たか…

「おじさん殺し屋だったの…?」

思わず、と一歩下がるアピスに

「違えよ!? おいエリックとやら!! 何を言ってるやがる!!」

「フッフ、謙遜はよせ殺し屋ダズよ、どんな攻撃も効かず斬撃を自在に操る…噂通り実に見事だと言っておこう。

ものは相談だが我々…いや、ネルソン提督に雇われるつもりはないか? 貴様ほど高名な殺し屋ならあの男も高く買うだろう」

「だから何を勘違いしてるか知らんが…まあいい、さっさとこつから帰ってきてくれないか? んで竜骨は諦めろや」

「フッフまあいい殺し屋ダズよ、幾ら貴様が斬撃に長けるとは言えこのワタシもこの能力で名を上げた男…くらってどちらが上か思い知れっ!!」

その言葉と共に再びエリックの片腕を大きく振るうと事で高威力の斬撃を繰り出す。

「だからその程度…」大断っ (おおだち) ”!!」

その言葉とともに今度はクリークの膝から先が振るわれると少断より大きな斬撃が飛ぶ。

「くっ! 流石は殺し屋ダズ! 斬撃に長けるといっなのは噂だけじゃなかったようだな!!」

「だから違うっての…ならこれでどうだ?」鎌威断つ(かまいたち)!!」  
今度は肩から先を大きく振るう事で更に大きな斬撃がエリックに向かい

「さっきから試すようにやりやがって…やむを得ん、まだ練習中だが…」カマカマの…大鎌颯いっ(おおかまいたち)!!」

その言葉と共にエリックが今度は腕では無く脚を大きく振るう事により大きな斬撃波が放たれるとクリークの斬撃と衝突し相殺

「ほう…腕だけじゃなかったか」

「フッフッフ、ワタシにこの技を使わせた事を後悔しろ。」

本来人間は腕の筋力に対して脚の筋力が数倍するというのは知っているだろう。

ならば腕で振るうよりも脚で振るう方が威力が高いのは自明の理、ワタシの勝ちだ死ねえっ!!」

それと共にエリックは地面に両手をつくると今度は両足を高く上げ

「…切り札はそれか」

クリークがつまらなさそうに言えば

「フハハハハッ!!今更後悔しても遅いわあっ!死ねえいっ!!」

その言葉と共にエリックの両足が振り下ろされ十字状の斬撃が真っ直ぐにクリークへと飛んでいく。

「はあ…嵐脚・辻風(つじかぜ)」

その言葉と共にクリークは飛び上がると両足で十字状の斬撃波を放てばエリックの斬撃は消し飛ばされ

「なっ!!貴様!脚でも斬撃をっ!?!」

「悪いな、飛ぶ斬撃はお前の専売特許じゃねえんだわ。飛拳砲っ!!」

それと共に今度はクリークの拳が放たれ衝撃波が飛んでいくとエリックを大きく吹き飛ばした。

「なっ!エリック!!くそっ、貴様海軍に逆らう気かっ!!」

少佐は戦力としてはかなり高いと思っていたエリックが破れた事に思わず狼狽し

「さてと、いい加減退いてくれねえかな?んで飼い主に伝えろ、竜骨は諦めろと」



「黙れっ!!総員構えっ!!」

片手を上げてこちらに銃撃するべく指示を出すも

「おせえよ、少佐さん」

ギンのその言葉に少佐が周りを見ればそこには倒れ伏す多くの海兵達。

「なっ…!くっ総員撤退!!船まで後退しろ!!近くの怪我人も運べっ!!」

その言葉と共に戦力不足と判断したのかようやく海軍は退いていったのだった。

## 用兵巧者 ドンクリーク

「何じやおつ?!もう一度言うでおじやるよ!!」

男は自身の目の前にいる巨漢から怒鳴られていた。

何を隠そう目の前の巨漢は縦にも横にも大きい、端的に言って贅肉の塊のような男だ。

日がな1日動く事すらせず運ばれてきた食事を食べるだけ、面倒な事は全て部下に押し付け気に入らない事が有ればすぐに癩癩を起す。

ただそれだけの事を許される権力を目の前の上司は持っているのだ。

海軍東方面軍准将ネルソン・ロイヤル、それが上司の名前だ。

半ば艦隊を私物化し、毎度ながら傍若無人に好き勝手やり直ぐに激昂する。

今回もそうだ。

機嫌が悪くなりそうな報告を誰が持っていくか揉めた拳句伍長である自分が押しつけられた。

ああ、貧乏くじだなと思いつつも

「で、ですから千年竜の情報を知ってると思しき少女の捕獲に軍艦島に向かった人員が失敗したと…」

先程軍艦島に向かった部隊からの報告を告げれば

「全く役立たず共でおじやるな!!軍艦5隻を引き連れて小娘一人捕らえられんとは何事でおじやるか!!」

とネルソンから手に持った扇子を投げつけられ、扇子は見事にこめかみに当たり鈍い痛みを訴えるも

「それが邪魔が入って撃退されたという報告が…」

とそれをこらえつつ追加の報告をする。

「エリックはどうしたでおじやる!!奴からの報告は無いでおじやるか!!」

と自身が雇った傭兵の事を口に出すネルソン、勿論いけすかないあ

の傭兵についても報告は上がってきてるがこれ言ったらまたキレるんだらうなと思いつながら

「そ、それが…」

と一瞬躊躇うも

「何でおじやるか！さっさと言うでおじやるよ!!」

その言葉に

「それがエリック殿は敵対勢力に敗退したとの報告です！現状未だ目は覚めておらず、他の海兵も多くが負傷しているという報告です!!」

事実を報告する。

「何じゃと!? エリックがやられたでおじやるか!？」

自分も報告を聞いた時は驚いた、いけすかない奴だが悪魔の実の能力者でもあり、ネルソン准将自らスカウトしただけあつてその強さは本物だった筈だ。

「未だエリック殿は意識が戻ってない模様、海兵も多くが負傷しています、一旦体制を立て直す為に退却すべきかと…」

これは言うべきか迷ったものの先遣部隊で一番戦力のあるエリックが敵わなかった以上一度体制を立て直すべきだと考えて告げれば

「馬鹿を言うでない!! 竜骨の…不老不死の手がかりがすぐそこにあるんじゃ!!」

何が不老不死だ馬鹿馬鹿しいと思いつつも顔には決して出さずに

「しかし被害は甚大です！相手が何者かわからない以上まずは情報を…」

「ええい！黙るでおじやる!!…本艦は只今より軍艦島に向かうでおじやる、全艦出撃準備!!」

一瞬激昂するも、それを押し殺しすぐに指示を出すネルソンに

「なっ!? 准将自ら!？」

と、つい驚いたように言えば

「何か文句があるのでおじやるか？さっさと持ち場に着くでおじやるよ!!」

そう叱咤されたからにはまた怒鳴られるのは御免なのでさっさとその場を離れる。

しかし准将自ら艦隊を率いて出陣か…普段は食う事しか能が無いデブだがあの男は海に出れば生まれ変わる。

”東の海一の用兵家”

海に出たネルソンは生まれ変わり巷ではそう呼ばれる優れた用兵家へと変貌する。

それ故についたあだ名は”提督”

「たかが提督…されど提督という事か？」

そうこぼした男の呟きは誰にも聞かれず風に消えていくのだった。

一方その頃、軍艦島で海軍を撃退したクリークはまずは竜じいを運び出さないといけないだろう、とギンを使いに出し手空きの者達を船から呼んでこさせる。

そうして集まったのはギン、シグマ、ジョークのみ…

「おい、これだけか？」

「ヌアハハハ、仕方ねえだろ。」

海軍とぶつかる可能性がある以上全員で来るわけにはいかねえさ。

船の機関が温まるのも時間がかかるしアンタがいれば問題無いだろうというのが話し合いの結果でな」

そう告げるのはクリークの配下に下った元海賊、ジョーク。

骨をカタカタ鳴らしながら喋るその姿に

「が…骸骨が喋ってる…お化け…」

アピスは顔を青ざめさせ後ずさるも

「ヌアハハハッハッハ！失礼な嬢ちゃんだな！こちとらちゃんと人間だぜえ？」

ジョークは何が楽しいのか更に骨をカタカタ言わせながらアピスにゆっくり近づき

「いやーっ!?来ないでえっ!!」

「そこら辺にしとけ、足の骨叩き折るぞ。」

アピスこいつは別におぼけじゃねえよ、ちよつと見た目は変わってるが問題無い」

ジョークはクリークの静止により渋々その場に止まり、アピスは「全身骸骨の人間に見た目がちよつと変わってるは無いですわよク

リークおじさん?」

「まあ気にするな、グランドラインにや変な見た目の人間はうじやうじやいるんだ、それこそ動く骸骨人間もコイツ以外にいるしな。」

それからこっちはシグマだ、コイツもグランドラインの生物でな。シグマ、こっちはアピスだ。

何でもお前の言ってる事が理解出来るそうだぞ?何か欲しいものがあれば手配してやる、お前にや長く世話になってるし折角だから言ってみろ」

「ぐる!?ぐるるる!ぐるるるぐるる!!」

”えっ!?旦那!わらわの旦那!!…だって」

「ん?旦那?番が欲しいって事か?」

「ぐるる!ぐるるるぐるるぐるるぐるる…ぐる!ぐるぐるる!!」

”そうじゃ!あの若くて喋れるあの雄熊…あのイケグマが所望じゃ!!…だって、どの子の事を言ってるか知らないけど…」

「うん?お前と交流があつてしかも若くて喋れる雄の熊…?」

あつ!ベポか!!あの時かなり気に入ってたっぽいし何だベポが番に欲しいのか?」

「ぐるる!ぐるるるぐるるぐるるぐるるっ!」

”そうじゃ!わらわはあの雄が欲しい!!…だって、クリークおじさんの部下つてずいぶん変わった人多いわね…」

それは自覚してる、と思いつつも

「あー、それは俺の一存じゃ無理だな。」

その内会う事もあるだろうから頑張つてアタックしてくれ、応援はしてやる。

さて、とりあえずさっさとこの千年竜を船まで運ぶぞ、俺とお前で抱え上げればいけるだろう。

ジョークは前方の警戒を、ギンはアピスについてやってくれ。

さっさとしねえとまた海軍が追ってくる事が無いとは言い切れねえからな」

そう言つてクリーク達は再び洞窟に入りギンやジョークがその巨体に驚くのは数秒後の話である。

## 鈍熊一行 ドンクリーク

ベアトリス号を動かしてもらい無事に竜じいを抱えて合流。

カフウには再び手紙を持たせてボクデンの元へ向かわせ竜じいを甲板に運ぶ。

竜じいは巨大だがこのベアトリーチェ号もかなりの大きさを誇る、甲板に竜じい乗った所で動けないほど邪魔になるわけじゃ無いしな。「すごい大きさの船…これクリークおじさんの船なの？」

「まあな、海軍が来たとしても多少の攻撃じゃビクともしないさ」

「へえ…こんなおつきなお船持つてるって事はクリークおじさんお金持ちなんだね」

まあ正確には船のオーナーはテゾーロだけだな、と思いつつも

「とりあえず先ずは行き先を決めないと…ロストアイランドとやらが何処にあるかわからん以上迂闊に動くわけにはいかんし…」

ギン地図を用意してくれ、軍艦島近辺と東の海の全体図だ。

あとジョークは食堂に食事を用意するように伝えてくれ、その後は後方の見張りを頼む」

「ちよつと人使い…いや、骨づかいが荒いんじゃないか？まあ折られなく無いからやるけどよお…」

「貴様のやらかした事に対したら普段は自由にさせてるだけ温情だろう」

その言葉に下手な事言つて更に自分の不利になりたく無いのかギンとジョークは一旦船内に入り少ししてギンが地図を手に戻ってくる。

「あの骸骨の人何かやったの？」

「まあ色々とな…さて、今俺たちがいるのはこの軍艦島だが…ロストアイランドなんて名前の島は東の海にないんだよなあ…」

かつて海の底に沈んだという話だし…アピス何か手がかりは無いのか？」

「ううん、わたしも島の場所はわかんないんだ…竜じい、竜じいは何か

わからない?」

アピスの言葉に竜じいは閉じていた目を半分開くもしばらくしてまた目を閉じる。

「…やっぱり思い出せないって」

「…そうか、しかしアテも無く海を彷徨うわけにはいかんし」

その後も推論を入れつつアピスやギンと意見を交わすも断定的な答えは出てこず考えが煮詰まっているとガンガンガンという金属音。

音をした方を見ればそこにはフライパンとお玉を持ったアデルの姿。

「クリークさん! ご飯出来たわよ!! 料理長が早く食べないと冷めるって言ってるわ!!」

「え? 女の子? クリークおじさんあの子は? おじさんの仲間?」

「ん? ああ、アデルはこの船に乗ってる造船技師の妹でな、普段は食堂の手伝いをしてもらってる。

11歳だから…アピスの2つ下になるのか?」

「うそ…わたしより小さいのに立派だなあ…」

「早くしないとご飯が冷めちゃう…きやあつ! 何このでつかいの!」

千年竜については聞いてない…というか言ってなかったからだろう、その巨体を見て驚くアデルに

「ああ、言ってなかったな。

この竜を故郷に送り届ける事になってな、んでこっちはお客さんだ。

しばらく船に乗る事になるかも知れないから女の子同士仲良くしてやってくれ」

とアピスを紹介する。

「あら、女の子だわ。初めましてあたしはアデル、あなたは?」

「わたしはアピスよ、ちよつとの間この船に乗せてもらおうと思うわよろしくね?」

アデルもこの船に乗ってから女の子一人とあって心細い思いをしていたかもしれないし友達が出来るのならいい事だ、と思いつつ他の面々と共に船内へ。

この船はテゾーロが持ち主であり、この船の乗組員の多くはテゾーロプロダクションのメンバーが多く乗り込んでおり料理長もその一人である。

彼は元フレバンスの民であり、ファウス島にて治療を受けた者の一人であり、クリークを命の恩人としており今回もこの話を聞いて立候補した男である。

彼の作った料理に舌鼓を打ちつつ食事をするメンバーを見渡す。

先ずはギン。

この中では最も付き合いが長い男で今や海軍本部大佐の地位を持ち周囲からは有望株と見られている青年だ。

次にジョーク。

元・海賊であり、そして呪いを受けた為に死にながらに生きている白骨死体である。

そしてシユライヤ。

ガスパーデに殺された父親の意思を継ぎ造船技師として名を馳せる男だ、船大工としての腕だけで無く周囲の物を使って身軽に戦う事も可能、と戦闘でも腕はたつ。

そしてシユライヤの妹のアデル。

ガスパーデに拐われ、クリークに救われた後は造船技師として頑張る兄を応援しつつ、自身は少しでも役に立とうと食堂の手伝いをしていた。

二人は今回思い入れのあるサラマンダー号の改装船“ベアトリーチェ号”が改装後初めての長距離航海をすると聞き立候補してきたのだ。

ベアトリーチェ号のボイラーを管理するビエラは機関室からあまり出てこないし、カフウは村長に手紙を届けて今戻ってきている頃だろう。

14代目イシズミは船のどっかに潜んでいるだろうし、シグマは竜じいの護衛を兼ねて甲板で餌を食べている。

マガツノも少し自由にさせてみたが逃げる様子は無かったので船の周りを自由に泳がせている。



後は殆どがステラ・プロダクションの面々であり数名の”海軍独立遊撃隊”の面々が乗ってるだけだ…とそうだった。

「牢の”アイツ”には食事はくわせてるか?」

そう料理長に尋ねれば

「はい、きちんと出された食事は食べているようです」

「なるほど、まあ簡単に出すわけにはいかないから引き続き頼む」

と料理長に頼んで再び食事に戻ろうとしたところ

「ちゅうじよ…船長、前方に大型船発見。

かなり改造されている…というかほぼ別物ですが帆にE8支部のマークがあるのでかの支部からの増援と思われるます」

伝声管からのその報告に

「総員戦闘配置、こっちも直ぐに上にあがる。

シユライヤはアデルやアピスを守ってやってくれ、ジョークはボーラー室へビエラの手伝いを、ギンは着いてこい」

と指示を出して急いで指令室へ向かうのだった。

## 戦術と力 ドンクリーク

「なんだあの船…改造艦どころか新造船だな、設計母体自体が海軍の船じゃねえぞ？」

船首には鬼瓦みてえなモンついてるしあれじゃ抵抗がでかいだろうに…いや？あえて移動要塞としての運用か？それならばあの大砲の数も説明がつかない…」

クリークが報告のあった方角を見ればそこにいたのは一隻の海軍艦。

だが普通の海軍艦では無く、まず大きさが通常の数倍する大きさをもち、その大きさ故か帆柱も左右に一直列つつ。

そして艦橋はまるで建物の如くそびえ、極め付けにあちこちに尋常じゃない数の大砲がついていたのだ。

とまあ馬鹿げた帆船だがクリーク達も人の事を言えない、何故なら「ふーむ？なんじゃあこれは、煙が上がってるが火事でおじやるか？」「いえ！あれは蒸気船かと思われまます！」

「ふむ…確か風が無くても進めるといふ珍妙な船だったでおじやるな」

「はっ！船の両側面の外輪で水をかく事で前進するらしいであります！」

ですが機関も外輪も重量が嵩む上に高水準な動力で無ければその速度は普通の帆船を大きく下回るとの報告があります！」

「風が無くても進めるのは便利かもしれないでおじやるが…帆船より足が遅いとなると使えんでおじやる。」

まあ良い、さっさと攻撃するでおじやる、何処の者か知らんがわしの前に立ち塞がるのはいい度胸でおじやるな」

ネルソンがそう言って攻撃を仕掛けようとしたところ

「報告します!!あの、前方の船の甲板に…」

何か情報はないかと双眼鏡を覗いていた部下の悲鳴のような声。

「なんじゃ！騒々しいでおじやる!!」

「ぜ…前方の船の甲板に不明生物発見…恐らく例の竜では無いかと

…」

その報告に

「何じゃとおっ!!ええいつ!それを貸さぬか!!」

そう言つて双眼鏡をひつたくり慌てて甲板を確認するネルソンは

「ふふふふふ…ふはははは!!あれこそまさに伝説に聞く千年竜に相違無いでおじやる!!」

のこのこのわしの前に現れてくれるとは何という僥倖!!

総員!あの船の足を止めよ!!速度はこちらが上でおじやる!!

双翼を展開!鶴翼の陣を!右十五番と左十五番はあの船を追い込むでおじやる!!

そして獲物が中に入り込み次第砲撃用意するでおじやる!決して竜にあてるで無いぞ!

その声と共にクリーク達は丁度旗艦で隠れていなかった為に見えていなかったが一行15隻の戦列が二つ、一斉に右翼と左翼に広がりに総計30隻の軍艦がベアトリーチェ号を囲うかのように広がったのだった。

一方それを見ていたクリークは

「な…どれだけの艦を保有してやがる!?明らかに一支部が持つてるような戦力じゃねえぞ!?まさかその辺りまで誤魔化してやがったとは…」

思わぬ数の出現に少し驚きを受けるも

「ボス、左右から一隻づつこちらに向かつて来てます、中央に誘い込む気かと…」

ギンのその声に

「…まあいい、見たところ特異なのはあの旗艦だけだろう。」

あの中央にいるのがネルソン准将だな、相手がただの軍艦ならいくら包囲網を作ろうが強引に間を潜り抜ければいい話だ」

ならば相手の思惑に乗ってやろう、とクリークは機関室のピエラに蒸気圧を上げるように指示、綿密に計算されて部品の一つ一つにまでこだわった技術の粋を結集して作られたその蒸気機関は見事にそれに答えベアトリーチェ号は並の蒸気船より高速で一気に突っ込もう

としたのだ。

勿論それに慌てたのはネルソン提督達である。

想定以上のスピードで、しかも船首には鋭い衝角まで見えている。

あの船がそのままこっちに突っ込んできたらどうなるかは子供でもわかるだろう。

慌てて指示を出せば左右両翼全ての船と船の間に鋼鉄の鎖が張り巡らせられたのだった。

「ふ…ふふふふ、多少驚いたが所詮それまででおじやるよ。

今までも多くの海賊を屠ってきたわが”連環の計”は破れぬでおじやるよ」

一方クリークは

「右外輪減速させる！右に回頭しつつ再び敵旗艦の正面に陣取れ!!

鋼鉄の鎖…しかもかなり太い上に三重に張り巡らせてやがる…面倒だが手がないわけじゃねえ…」

クリークがそう考えていると

「竜じい!!竜じいは大丈夫なの!?!」

とよつぽど自身の友達が心配だったのだろう、艦橋の方からアピスの声。

「なっ！危ないから下がっているように言っただろう！」

「でも悪い海軍の人たちが来てるんでしょ!?!あの人達竜骨を狙ってるんだよ…このままじゃ竜じいが殺されちゃう!!」

「その為に俺たちがいるんだろう！」

「いくらおじさんが強くてもあの数の相手の相手の軍艦に敵うわけ無いじゃない!!」

…ああ、確かに相手は大艦隊でこちらは一隻。

そしてアピスは俺が戦っているところを見ていたが流石に常識が壊れるような事にはなつてなかったらしい。

要するにこのままじゃ自分のせいでみんなが巻き込まれる、と凄く真つ当な事を思ったのだろう。

「アピス…まあ何だ、お前は真面目に言ってるんだろうがただか軍艦の30隻…旗艦を含めても31隻でこっちをどうにかできると思

うな。

竜じいとアピス、お前の安全はこの俺が請け負ったんだぞ？ 請け負ったからには…完遂して見せるさっ”拳砲変式・一点砲っ（けんぽうへんしき・いつてんほう）!!”

その言葉と共におおきく両の拳を突き出せばそれは一点に集中した衝撃波と化しこちらに迫ってきていた軍艦のマストをへし折ったのだった。

## 無双鈍熊 ドンクリーク

自分達の艦隊の一隻が簡単に航行不能になった事により他のE8支部の艦隊は慌てて砲撃を始めた。

次々に飛んでくる砲弾を飛び拳砲や嵐脚で破壊しつつ

「総員！防備を固めろ！！俺は直接艦隊に乗り込み障害の排除にあたる！！

それからシグマ！マガツノ！お前らは敵軍艦を航行不能にしてこい！後が面倒だから沈めるなよ！

カフウは相手の武装の破壊を、ギンはアピスの護衛を頼んだ。

アピスは竜じいについててやれ、俺はちよつとあいつらを吹っ飛ばしてくる、それこそ二度と竜じいを…竜骨を手に入れようと思わないようにな」

「…本当に大丈夫なの？確かにクリークおじさん強いみたいだけど…」

確かにアピスの心配は道理だ、だが

「まあ見てろ、あの程度ものの数じゃ無いさ」

そう言つて甲板から素早く飛び立ち月歩にて手近の軍艦に降り立つ。

するとわらわらと出てくる海兵達、それらを纏めて吹き飛ばしつつ考える。

まあ一隻に100人と考えて大雑把にそのうちの半数…五十人が非戦闘員としてもそれが右翼、左翼合わせて30隻。

そうなると戦えるものは1500人、それに加えて30隻の大艦隊からは砲撃を放っている。

だがそれがどうした、確かに数で攻めるのは間違いでは無い。

しかしそれが通用するのは相手が並の強者であった場合の事、こっちはこれでも魑魅魍魎の跋扈するグランドラインでもそれなりに戦ってきた男だぞ？

そうこう考えているうちに船の中から増援が出てくる様子は無く

なったものの今度は鎖を伝って隣の船から増援が。

ううむ、先に鎖をぶった切っておいた方が良かったか…と思いつつ隣の船からくる増援を吹き飛ばしつつ腰から一本の長剣を引き抜き鎖の方へと前進。

「ひ、怯むな!!相手は所詮一人、数はこちらが上だ!!」

明らかに尋常では無い雰囲気を持つ長剣に海兵達は一瞬躊躇するも恐らく上官であろう海兵の指示に意を決して襲いかかってきた。

まあ付き合う道理は無いので剣腹で衝撃波を放ちつつ相手を次々に叩きのめしていく。

「くっ…、敵を包围しろっ!!手足からの衝撃波…恐らくエリック殿と同系統の能力者だ!!」

やがて相手はこちらを囲うように陣形をとるが、悪いな別に能力者じゃないんでね、と思いつつひと抱えはあるだろう鋼鉄の鎖にスツと剣を上段に構える。

「馬鹿めっ!その鎖は鋼鉄製だ!たかだか剣で斬れぬものと知れえいっ!!」

煩い外野を他所に七星剣を一閃、鋼鉄製の鎖は殆ど抵抗無く切り落とされた。

続け様に2本目、3本目と切り落とし再び包围網へと向き直れば

「なっ!馬鹿な!!鋼鉄製の鎖を易々と…ま、まさかあの剣はかの伝説に謳われる”最上大業物”なのか!」

残念ながらそれも外れだ、確かに一部では宝剣扱いされていたが最上大業物では無いんだよな…

「さて、このまま続けるつもりなら命まではとらないまでも手足の一本や十本くらい覚悟してもらおうが…」

そう言っつて剣を指揮官と思しき海兵に向けるも

「ぐっ!!人間の手足は十本もついていないっ!!銃士隊構ええっ!!てえっ!!」

その言葉と共に予め囲いの外に配置していたのだろう、その指示と共に一斉に銃撃が放たれるも

「全員合わせりゃ十本もどころか百本でも二百本でもありそうだがな

…」

その銃撃は金属音を立てて簡単に弾かれると

「衝撃波だけじゃ無く身体の硬質化だと…!?くそっ一体何の能力者だっ!？」

エリックの戦いは伝わってないのか?というか仮にも海兵なんだから六式くらい知っておけよ…と考えるもここが東の海だった事を思い出す。

まあ主に使ってるのは本部海兵の上位クラスだけだしな…

「まあ兎に角しばらく大人しくしてくれ、こっちは他にも相手にしなきゃいけないのがあるんでなっ!!」

それと共に剃で踏み込み指揮官の眼前へ、その腹を打ち抜けば

「少尉!?くっ、准尉に指揮系統の移譲を!」

「馬鹿っ!!その前に相手の排除をっ!!」

「か…勝てるかっ!あんな化け物!!」

この船の指揮官がやられたからだろうか、一気に混乱する部隊だったが今度は軍艦が大きく揺れ更に混乱は大きくなる。

「む、マガツノが舵をやったか?じゃあこの船はもう問題ないな」

と、ダメ押しに船首の三連装砲を蹴り飛ばして次の船へ。

似たような事を繰り返しながらどんどんと船を渡り歩くクリーク。

マガツノは軍艦の舵を自慢の角で吹き飛ばし、シグマは長い腕で帆柱に抱きつくと俗に鯖折りと呼ばれる技のようにへし折っていた上で、更にダメ押しとばかりに半鳥形態へと変化したカフウがその口から火線を各艦の大砲へ連続して吐き出していく。

そして次々に生み出されるのは舵が壊され、帆を叩き折られ航行不能となった上に軍艦の大砲は次々と沈黙させられ更に主立った戦闘員達はたった一人の人間に次々に叩きのめされた上で頑丈な筈の鋼鉄製の鎖は叩き斬られ…と、ネルソン自慢の”連環の計”は次々に、そして丁寧に破られていくのだった。

流星にそれを見ていたネルソン准将も平静ではいられず、扇を両手で握りしめるとまるで折るかの如く力をいれる。

「ぐぬぬ、ぐぬぬぬぬ!何をやっておじやるかあっ!!ワシの連環の計



の為に支配下に置いたE6支部もE7支部も全く使えぬでおじやるなあっ!!

「だいたい何じゃあれは!!奴がエリックを倒したというのか!次々に...次々にわしの連環の計を破りおつてえっ!!」

「ネルソン・ロイヤル准将!こちらの被害は甚大です!!各艦から救援要請と襲撃者の情報が次々に!」

「襲撃者は何者でおじやるかっ!!」

「はっ!不明でありますが手足からの衝撃波を発しつつ身体を硬質化させる能力者だという報告であります!!」

「ええいつ!!ならば超巨大砲用意!軍艦ごとで構わん!!奴も能力者でおじやる!!海に叩き落とせばこちらの勝利でおじやるっ!!」

「先ずはあの化け物を止めるのじゃ!あの千年竜の乗った船はそれから構わんでおじやる!!」

「ネルソン准将のその言葉と共にE8支部旗艦:海上移動要塞の艦橋の奥から普通の大砲とは比べ物にならない大きさの大砲がせり出したのだった。」

## 准将真価 ドンクリーク

「げ…まだあんな隠し球持ってたか…」

艦橋に迫り上がってきた超大型の大砲を見て脅威を覚えるクリーク。

普通の大砲なら10発だろうが20発、30発ぐらい何の問題も無いだろうが、あの大型砲がベアトリーチエ号に向かって連続して撃たれればいくらギンが本部大佐とは言え不味いかも知れないと考えすぐ様対処に動く。

包囲網は航行不能、武装も使えずと大混乱なのでこちらはもう大丈夫だと考え再び月歩でE8支部旗艦の海上移動要塞へ。

「撃てえっ！撃ち落とすでおじやる!!」

と、散発的に飛んでくる銃弾や砲弾を意にも介さず超巨大砲の真上まで移動するとその場で縦に回転

「金剛体術…斧鉞同舟っ（ふえっどうしゆう）!!」

回転で威力を高められた上に鉄塊をかけられたままの両脚での力カト落としが着弾、満を辞して登場した超巨大砲は轟音を上げて中程からへし折られ爆発、沈黙するという無残な結果に。

爆発の衝撃か周囲には爆風が吹き荒れ自力では殆ど動けない故に輿に乗っていたネルソンはひっくり返る。

「な…なっ！何が起きたあっ!!」

「はっ！敵の攻撃により超巨大砲が爆発、機能を停止したとの事！直ぐに修復にあたらせますが短時間での補修は不可能かと!!」

「ぐぬぬ！連環の計だけで無くわしの超巨大砲までもおっ!!さっさと起こすでおじやる!!」

そんなやり取りを冷めた目で見つつ

「さて…E8支部支部長、ネルソン・ロイヤル准将。

竜骨を諦めるつもりは無いか？今ならそれに対してとやかく言うつもりはない」

まあ他にも叩けば埃は出るだろうからどのみち更迭はする事になると思うがな。

と思いつつ尋ねれば

「ふん！不老不死の妙薬、竜骨はわしのものじゃあつ!!」

「満足に動けもしないそんな身体でよくもまあ不老不死なんて馬鹿げた伝説を…」

いや、オペオペの実の不老手術とかハートゴールドによる不老不死とか、さらに言えば海のへソにある願い叶う秘宝とかヨミヨミの実による蘇りとかあるが…

あれ？意外とあるな、と言うことは、あながち馬鹿げた伝説ってわけでも無いのか？

「おのれ！わしを虚仮にするかあつ!!お主らおつ!!撃てえつ撃てえいっ!!あの不埒物をさっさと処分するでおじやる!!」

その言葉と共に一斉に銃撃が加えられるも今更その程度何の問題も無いとばかりに一步一步ネルソンへ近づき

「さて…話は後でゆっくりするとして、とりあえず今は大人しくしてくれ、拳砲!!」

それと共にクリークの拳がネルソンの腹部に突き刺さる。

「ぐっ!!」

「自らの身体に海軍のマークを彫るという事は昔は立派な海兵だったんだらう…だがこうなってしまうては最早…」

「な・め・る・なあつ!!たかだか拳一発！竜骨はわしの物でおじやる!!何処の馬の骨とも知れぬ輩が邪魔するで無いわあつ!!」

これで終わり、とばかりに撃ち抜いたクリークの拳だったが殆どダメージが見られずネルソンはこちらに掴みかかってきたのだ。

「なっ!!?本気では無いとは言えかなり強めに撃ち抜いたはずだぞ!!拳砲っ!!」

もう一発、とばかりに再びクリークが最も使いやすい指銃の容量で撃ち出す正拳突き”拳砲”を放つも

「それがどうしたでおじやるっ!!わしの身体に拳法は通用せんっ!!」

波紋を立てて揺れる脂肪、その波紋が広がるも殆どダメージは見られない。

「っ…そういう事かっ!!」

海に出れば生まれ変わる東の海一の用兵家…通称”提督”と呼ばれる男。

そしてこの男にはもう一つの異名がある。

その度重なる暴食により蓄えられた脂肪による、打撃攻撃を減衰させる肉の鎧…E8支部の海兵達に呼ばれている通称は”拳法殺し”

クリークの主導によって行われた東西南北各支部の戦力の底上げはしっかりと効果を表していたのだ。

「わしに拳法は通じぬでおじやるっ!!」

「脂肪の鎧とはまた珍妙な…まあ斬撃は効くんだろうが…」

その言葉と共にクリークは七星剣を鞘ごと取り外すと甲板に刺すと再び両の拳を構える。

「ほう！自ら勝機を捨てるでおじやるかつ！面白い、かかってくるでおじやるっ!!」

「まあ拳法家と名乗ってるわけじゃ無いが…ちよつとこつちにも意地があるんでな!拳砲変式・一点砲”!!」

それと共に再びネルソンの腹にクリークの拳が突き刺さるも

「ぐっ…この程度でおじやるっ!!」

再び全身の脂肪が震え拳の威力は大きく減衰される。

「…全く効かないわけでは無いみたいだな、まあ確かに普通の…この東の海何かでは通用するだろう。

だが所詮それまで、完全に無効化するわけでも受け流せるわけでも無いみたいだしいい加減大人しくしている…」剛崩・襲拳砲っ（ごうほう・かさねけんぽう）!!」

その言葉と共にクリークは大きく踏み込むと腕から手首に捻りを加えつつ絶大な衝撃をその脂肪の鎧に対して放つのがあった。

「がっ…はっ、わしの…わしの夢が…後一步だったでおじやるのに…」  
内部に衝撃を浸透させるその攻撃に流石のネルソンの肉体と云えど耐え切れるものではなく、その巨体は大きな音を立て倒れ込んだのがあった。

## 鎌鼬に剣 ドンクリーク

さて…無事に頭は仕留めたが…

「さて…まだやると言うのならそれなりに痛い目を見てもらうが…」

それと共に指をゴキゴキと鳴らせば残った海兵達は武器を構えつつも後退りする。

もう一押し必要か…と何人か吹っ飛ばそうかとしたところで

「なっ!!ネルソン准将がやられているだ!!」

「ふふふふっ!!ネルソンを片付けてくれるとは好都合!これで竜骨はワタシのものだ!!」

そう言いながら海上要塞に乗り込んできたのは軍艦島で相手をした少佐とエリック…今更何しにやって来たんだ?

「貴様っ!?准将の救出が目的では無かったのか!!貴様はネルソン准将に雇われた傭兵だろう!!」

「はっ!あんなはした金程度で…とつくにその分の働きはしたのだ!これ以上あんなブタに従っていられるか!!」

ブタとは言え流石に権力だけは持っているからな!こうしてお前が厄介な戦力を片付けてくれたお陰でワタシが竜骨を手に入れる事が出来るのだっ!!」

は、最初っから横取りする気だったかこいつ。

まあ邪魔な相手を敵対者に片付けさせるといふのは良い手かもしれないが…その敵対者の始末はどうするんだろうな?

「くっ…ネルソン准将の代わりに私が指揮権を引き継ぐっ!!」

先ずはネルソン准将を後退させろ!!それから航行不能とされたE6支部、E7支部の艦隊の救助を!!」

「ハーデイ少佐っ!!千年竜は如何されますかっ!!」

「はあ!?まだあんな御伽話を本気にしているのか!何が不老不死だ馬鹿らしい!!作戦が失敗した以上これ以上あんな眉唾物にかかわって暇は無い!総員直ちに作業にかかれっ!!」

またエリックと海兵達を相手にする事になるかと思えば意外や意外、海兵達は少佐…ハーデイ少佐の指示に従い撤退準備を始めた。

「ふん！怖気づいたか！まあいいこれで竜骨の独占はワタシのものだな…」

「あー、エリックだったか。お前もいい加減諦めたらどうだ？」

「黙れえっ!!ワタシは…ワタシこそが竜骨を手に入れて不老不死となり完璧な存在となるのだ!!」

「いや、軍艦島でやり合った時にわかったろ？お前じゃ俺に勝てないぞ？」

「ぐっ…ぐっほん、さてここに来る前に情報は集めたぞ、身体は鋼鉄のように硬く、手足から衝撃波を放ち、更には空をも飛ぶという規格外の能力者…」

更には鋼鉄をも切り裂く最上大業物を所持し、それを以ってあのブタ自慢の連環を切り裂いた…成る程成る程、確かに貴様は強いだろう。

いくらワタシが鎌鼬を発生させるカマカマの実の能力者で、その斬れ味は名刀に匹敵するといえど最上大業物の斬れ味には及ばないだろう、だが…これでどうだあっ!!」

それと共にずつとスキを伺っていたのだろう、鎌鼬を発生させ甲板にあった七星剣を吹き飛ばすとジャンプしてキャッチ。

「どうか刀のランクと斬れ味がごっちゃになってないか？最上大業物だから斬れ味が最上と思ってる節があるようだが…というか七星剣は最上大業物では無いが。」

「なっ!!おいバカやめろ!!」

「ふははははっ!!これでワタシの鎌鼬は最上大業物の切れ味を放てるようになった!!」

後悔してももう遅いわあっ!!」

それと共に柄に手をかけ一気に抜き放つエリックだったが

「ぐっ!!なっなんだこれは!!ワタシの中に何かがある…ぐっ!ぐわあああっ!!」

と叫んでしばらくすると脱力したかのように七星剣片手に腕をだらりとさせた。

「だから止めろと言っただろうがっ!!素手で触るからだバカ!」

そう言いつつさつさと手放させようと近づくもエリックはだらりと下げていた腕を一気に振るい

「ぬおっ!!マジか!」

その斬撃は空気を切り裂き、更には避けたクリークの背後にあった艦橋を真つ二つにして見せたのだった。

「フッフ、フハハハハッ!!馴染む!馴染むぞおっ!!」

「馬鹿な事言つて無いでさつさとその剣を離せ!!」

「馬鹿な事言つてるのは貴様だっ!!この剣と竜骨さえあればワタシは真に完璧な存在になるのだ!!妖火斬(ようかざん)!!」

その言葉と共にエリックが振るう七星剣から放たれるのは緑の妖しく燃え上がる炎

「なっ?!?伝承にはあったがその機能使えたのかよ!!」

流星に迂闊に得体の知れない炎に当たるわけにはいかなないので大きく距離を取れば

「ふははははっ!!これで竜骨はワタシの物だっ!!」

エリックは再び斬撃を今度はベアトリーチェ号へと放ち、”あろう事か”斬撃に乗って飛んでいくという離れ技を見せたのだった。

「いや流星におかしいだろう!まさか七星剣が悪魔の実の能力を底上げしている…?いや!!七星剣がああのを乗っ取りかけてるのか!!」

直ぐ様追撃、途中で嵐脚や飛び拳砲を放つもエリックは意に介さず真つ直ぐにベアトリーチェ号へ

自身に向かって来る脅威を感じたのか顔を青ざめさせたアピスト、険しい目つきのギン、二人の表情が見えた所でようやくエリックに追いついたクリークは

「いい加減諦めろっ!!金剛体術・拳々破つ(けんけんぱ)!!」

それと共に頭上からエリックを殴りつけるとエリックはまさに夢に手が届かんとした所で海へと叩き落とされた。

「ふー…まさかこの東の海で冷や汗かく自体になるとは思わなかったな…」

つと!さつさと引き上げないと溺れかねん!今度から七星剣もしっかり離さないようにしないとな」

とクリークはエリックを慌ててベアトリーチエ号へと引き上げ、念のため持って来ておいた海楼石の手錠を嵌めると気絶したエリックをがんじがらめに縛って牢に放り込む。

そして途中で手放したのかエリックを引き上げた時にその手に持ってなかった七星剣を回収すべく再び海に飛び込むのだった。



## 消失楽土 ドンクリーク

途中で手放したと思われる七星剣を回収しに海に飛び込んだクリークはどんどんと深く、更に深く潜っていけばやがて海底が見えて来た。

む？軍艦島から沖に出てる筈だが…海底にしては随分浅いな？などと疑問に思いつつ息を止めたまま周囲を見渡すクリークはそれを見つけたのだった。

直ぐ様この事実を伝えるべく海上へ、そのまま飛び出る勢いでベアトリーチェ号の甲板に飛び乗ればそこには驚いた顔のアピスと即座に構えをとるギン。

「…ボスでしたか、驚かさないで下さい」

「おじさん、そんなに慌ててどうしたの？」

アピスの質問に

「そうだった!!おいアピス!ロストア일랜드が見つかったぞ!!」

クリークはアピスの肩を掴みそう言うのだった。

「えー!ロストア일랜드が!?!でもそんなの何処に…」

「ああ、実はだな…」

クリークがアピスに説明しようとした時の事、突如轟音と共に海面が大きく揺れる。

「なっ!地震か!?!海全体が揺れてる…ボス、海底火山かも知れません!!」

断続的に揺れるその現象をギンは海底火山による地震と推察するが

「落ち着け、海図を見た時に確認しているがこの辺りに海底火山は無い。」

そしてロストア일랜드はココにある」

そう言つて真下を指差すクリークに首を傾げるアピス、そして龍じいも揺れを感じたのか今までの無気力さなど無かったかのように首を持ち上げると

「グオオオオオオン!!グオオオオオオオン!!」

と大きく天高く鳴き声を上げ始めた。

「りゅう爺!どうしたの!?!…え?時が来た?…一体何を…」

龍じいの言葉に首を傾げるアピスに対しクリークは空を指差すと

「あつちを見るアピス」

「あれは…まさか龍じいの仲間!?!」

遠方からこちらに飛んできていたのは緑の体毛を持ち、翼をはためかせて飛んでくる巨大な生物達、その数は100以上はいるだろう。

そして揺れはいよいよ激しくなりドオン!!と一度の大きな揺れと共に海面のあちこちから突如として岩が突き出し始め…そしてそのまま海面に地表が現れたのだ。

「いやはやロストアイランドなんてよく言ったもんさ。」

俺が海底で見たのは巨大な化石、それも一つや二つどころじゃ無い。

千年竜の呼び名はその寿命から来たわけじゃない、その習性から来てるんだ」

「…習性?」

「ああ、千年竜は渡りの習性を持っていたんだ。

そして千年に一度この島は海面へと浮上、そしてそれに合わせて世界中に散らばった千年竜達はここに集まるんだ。

前回の浮上は千年前…誰も覚えてる訳がないさ、唯一お伽話として伝わっていたようだがな」

と自身の見たものと状況を推察して話すクリークの言葉にアピスを大きく目を見開く。

「まさか…ロストアイランドは…竜の巣はここだったの!?!」

龍じい!!じゃあ龍じいは故郷に、竜の巣に戻ってこれたんだね!!」

なおも天に向かって吠えていた龍じいだったがアピスのその言葉にアピスを見て大きく頷く。

そして完全に浮上したロストアイランドに向かって次々に降り立つ千年竜達、それを見て龍じいも何度か羽ばたき始めた。

長年飛んでいなかったからだろうその動きはぎこちなかったもの

のやがて竜じいの巨体はフワリと持ち上がり空へと舞い上がると仲間達の元へ。

「さて、竜じいも無事に故郷に戻れたか…アピス、行きたいなら行つて来い。」

ギンはアピスについてつてやれ、俺はちよつとあつちを片付けて来る」

とクリークが親指で指した先には大混乱の海軍艦隊、ギンの返事と共にクリークはロストアイランドに降り立ち、途中で七星剣もすっかり回収して海軍艦の方へ。

騒ぐ艦隊達を尻目にネルソン准将が座乗していた海上移動要塞まで来ると脚に力を入れ一気に甲板に飛び上がった。

「くっ！被害報告!!」

「浮上の衝撃によりあちこちに亀裂！またこの島が沈めば浸水する恐れも!!」

「幸い突如現れた千年竜と思しき巨大生物達は大人しくしています！早急に撤退すべきかと!!」

思った通り要塞は大混乱だった。

あちこちで海兵が右往左往し、ハーディとかいった少佐が指示を出しているもその混乱は治りそうにない。

無理もないだろう、頭がやられた上で撤退準備中にこの異常事態、いくら荒事になれてる海兵と言えそう簡単に対応出来るものではないだろう。

「ぐははっ！ぐはははははっ!!千年竜が！竜骨があんなにあるでおじやる!!貴様ら！さつさとあいつらを仕留めるでおじやる!!」

あ、復活してたのか。

「黙っててくれネルソン准将…いや、ネルソン！今回の事は流石に本部に報告させて頂く!!」

「なっ!!ハーディっ!!貴様もわしを裏切ると言うのか!!」

「ふん！元々気に入らなかつたんだ!!アンタは昔は高潔だった！その類稀なる指揮能力で瞬く間に上に上り詰めた!!憧れだったさき!!」

だが今のアンタは何だ!!東方方面軍准将に上り詰め、そして毎日贅

の限りを尽くした生活で食ってばかり…自身の欲望の為に艦隊を私物化し…影で民が苦しんでいる事が何故分らないっ!!」

「貴様…おい!お前ら!…この裏切り者を拘束するでおじやるっ!!」

ネルソン准将の指示に海兵達は顔を見合わせるも、さてそろそろこつちもこつちの仕事を済ませるか…と右往左往する海兵達に

「総員つ傾注!!」

と大声で一喝するのだった。

## 鈍熊鉄拳 ドンクリーク

ビリビリと響くような大声に海兵達は耳を押さえてその場で膝をつく。

「E8支部准将、ネルソン・ロイヤル!!」

「うるさいでおじやるぞ!海賊風情がなんでおじやるかつ!!」

耳を塞いだままいきなりの大声に怒鳴り返すネルソン。

「俺が海賊風情か、ブーメランって知ってるか?今回の騒動だけでも民間人の誘拐未遂に、艦隊:ひいては支部の私物化。

守るべき筈の民間人に銃を向けるとは何事だ貴様あつ!!それでも海軍の、しかも将官かつ恥を知れつ!!」

「ふん!なーにを偉そうに言ってるのじゃ?海賊風情がどう喚こうがわしには関係ないでおじやる」

「ほう、反省が見られないようだな:; 鉄拳指導(てっけんしどう)!!」

それと共に大きく右手をパーにした状態でネルソンの頬に向けて大きく振り抜く。

「つつつつつ!!な!何をするでおじやるかつ!!」

いくら衝撃を減衰しようが皮膚全体に痛みを与えるのなら問題無いだろうと思つたが案の定。

左頬を真つ赤に腫れさせ文句を言いながら抑えるネルソン。

「反省してないようだったからな、さて続けるが:;素性の知れぬ者を傭兵として個人的に雇つたのはまあいいだろう、だがその個人で雇つた傭兵に部隊の指揮権を渡すとは何事かつ!!佐官教育で習つた事を忘れたのかつ!!」

それと共にハーデイ少佐はこれ幸いとハンドサインで何やら部下に指示を出していた、何をするつもりだ?

「それがどうしたのじゃ!わしの雇つた傭兵でわしの命令権を一時的に貸した:;何の問題があるのじゃ!!」

「問題だらけだ!支部最高指揮権を何だと考えている!!鉄拳指導!!」

それと共に今度は左腕が大きく振り抜かれ再びもんどりうつネルソン。

本来なら拳でやるからこんなもんじゃ済まないんだがな。

「に、二回もわしを叩きおつてえっ!!」

「…更にはE6支部とE7支部も巻き込んでこのような騒ぎ、何の為に各方面指令軍が設立され、各海50支部に統廃合した上で戦力を均一化したと考えているっ!!」

「そんなの知らんでおじやるっ!!だいたい何じやさつきから!何故貴様なんぞにそんな事を言われなはいけないでおじやるっ!!」

「それぞれエリアごとに分かれた上で隙間なく海域を守る為だよ!貴様が他の支部から戦力を引き抜いたらその分民が苦しむと思えっ!鉄拳指導っ!!」

全く反省の意図が見られないのもう一発ぶっ叩いておく。

「わっ、わしは准将でおじやるぞっ!わしは偉いのでおじやるぞっ!!何処の馬の骨とも知れん海賊に好き勝手言われる謂れは無いでおじやるっ!!」

そのネルソンの言葉に無言で平手を構えれば悲鳴を短くあげると頬を抑えて後退りするネルソンに

「たつた三回の平手打ちでもう折れたか…と思いつつも懐の電伝虫に手を伸ばそうとしたところで

「総員構えっ!!」

「何やらコソコソしていたハーデイ少佐の命令と共に一斉に銃口がこちらに円を書いて突きつけられた。

「ふ、ふははははは…そうじゃ!わしを馬鹿にするからそのような目に合うのでおじやる!」

「さあさつさと撃つでおじやる!そいつを始末するでおじやるよ!!」  
もう一発くらわしてやろうかと思いつながら

「…ハーデイ少佐だったか?まだこの男に従うのか?」

とあれだけ啖呵を切ったのに従うのか、と思いつつ聞けば

「何の事だ海賊、このプレゼントはわたしがかつて敬愛した上司宛だ。」

それと共にハーデイは銃口をネルソンに向け、包囲網の銃口もネルソンに向かう。

「なっ！何をやっておるのじゃ!!相手が違うでおじやるっ！さつさとその海賊を撃つでおじやるっ!!」

「…もう黙っててくれネルソン・ロイヤル。」

アンタは昔は凄い海兵だったさ、アンタがこれ以上無様を見せる前に…ここで死んでくれ。

E8支部総司令にして東方方面軍准将ネルソン・ロイヤル、海賊と戦闘になり、自身の部下達を逃す為に単身残って戦い続け敵にダメージを与えるも多勢に無勢、最後には一斉の銃撃によって死亡。

部下を逃す為に単身残って海賊を食い止めたとなれば名譽の一つくらいにはなるでしょう…私利私欲に塗れていたとは言えその用兵で多くの海賊を仕留めてきたのは事実、今までお疲れ様でした…と、ハーデイはネルソンに深く頭を下げたのだった。

「何処の馬の骨…か。だそうですが如何いたしますかセンゴク元帥？」

クリークがそれを見てそう言うと同時に懐から小電伝虫を取り出した。

『ネルソン・ロイヤル准将、報告は、色々と』受けている。

罪を受け入れて大人しくしている事だ、沙汰は追って下す』

「なっ!!?センゴク元帥じゃと!!…いや！小電伝で本部まで電波が届く筈無いでおじやるっ!!」

皆騙されるな！アレは偽物でおじやるっ!!」

「決めつけてるとこ悪いがこれは中継してるだけだ、通信自体はあつちの船で繋げてるから真正銘センゴク元帥に繋がってるが？」

「ぐっ…何故でおじやるっ!!何故強いとは言えたかだか海賊風情がセンゴク元帥と連絡を取れるでおじやるっ！」

そんな訳が無いでおじやるう！どういう試みか知らんが口だけでわしを騙そうというのじゃ!!そうに決まってるでおじやるっ!!」

『…後は任せるぞクリーク、近くの支部に引き渡すなりなんなりした後はこちらに報告だけよこしてくれ』

その言葉を聞いていたハーデイ少佐は顔色を変えたのだった。

## 竜騷顛末 ドンクリーク

「わしを処分するだど!! 巫山戯るな! 何故わしが殺されなければならぬ! なぜわしが引き渡されねばならぬ!

エリック! エリックは何処でおじやる!! ここにいるものを排除するでおじやる!!」

再び喚き出したネルソンにこのままでは話が進まないと思いつつ後ろから首をキュツとすればあれだけ騒いでいたネルソンは沈黙。

「…という事だハーデイ少佐。

一応海軍も組織なんで私刑は勘弁してくれ、周りに示しがつかんからな」

センゴクとの通話を終わらせたクリークはネルソンを排除しようとしたハーデイにそう言えば

「…今の通話の相手がセンゴク元帥だったとしてだ、クリークと元帥はお前を呼んだな。

貴様…まさか”東の海の怪力王”か?」

クリークという名前に心当たりがあったのだろう、そう聞くハーデイ。

「お、その異名まだ知ってる奴いたのか、かれこれ十数年は経つと思うんだが…」

「十数年前に東の海にあらわれた赤い海軍旗の一団。

瞬く間に多くの海賊を掃討し、東の海が最も平和と言われる一因であり、”どんな障害も押し通る、其は東海一の剛力無双”だったか。

ある程度暴れた後海軍本部に戻り中将にまで登り詰めたと聞いていたが…何故こんな東の海にいる! 海軍本部中将っ!!」

ハーデイは信じられないものを見るような目でこちらを見て大声で叫ぶ。

まあ確かに海軍本部の、しかも中将がこんな田舎とも言える東の海にいるなんて普通じゃないだろう。

「ただの休暇なんだがなあ…其の矢先に? どっかの誰かさんが? アホ



な事やってたから?」

と、ハーデイ少佐とエリックに初めて遭遇した時の事を強調しつつ言えば

「っ…」

ハーデイは言葉に詰まったので

「とまあそれは冗談だとして元々報告は来てたんだよ、東方方面軍第八支部が何やら良からぬ事をやっている、とな。

んで今回の休暇に合わせておれがやって来たわけだ」

と本当の事を話しておく。

「それも見越して軍艦島に潜んでいたというわけか…」

「ん? いや軍艦島にいたのは偶然だ、第八支部のエリア近くだから拠点に動こうとしていただけだが?」

「…どの道お前のような戦力が動くまいとネルソンの計画は失敗していただろう。

本部に我ら第八の動向が知られていたとなると遅かれ早かれネルソンは更迭されていただろうからな。

…クリーク中将、頼みがある」

そしてそれと共に居住まいを正して神妙な顔をするハーデイ。

「…聞こうじや無いか」

「ネルソンとおれの首で勘弁して欲しい、部下はネルソンやおれの命令を聞いてただけだ」

「…さて、どうしたもんか。」

E8の汚職がどこまで関与しているかわからんし、何処までが命令でやっていたのかわからんしなあ?」

「頼むっ! 尋問でも何でも答えよう! なんだったらこの首を落としても構わん!!」

「海兵のくせに海軍を何だと思つてやがる…まあいいや、この件に関する事は一任されているしな。

ハーデイ少佐、貴様を臨時に中佐に昇進させてやる。

直ぐにこの艦隊を纏め上げてE8支部に帰還し運営の健全化を図れ。

何かあれば本部宛でも俺宛でも構わん連絡を寄越した上で報告は常に海軍本部に提出するように。

今回の件は東方方面軍司令のメイナード少将にこちらから伝えておく、彼を通して報告は行え。

…そして罪の意識を感じるなら”人を助ける”。

今まで貴様らが迷惑をかけて来た以上に苦しむ人々を助ける。

この東の海は平和とは言うが未だ海賊は現れ、罪もない命が散ってゆくのが常だ。

我等は海兵だ！海の守護者にして人々の心の拠り所となるべき存在！天網恢々疎にして漏らさず！強きを挫き弱きを助ける者になれ！いいな！！

「…はっ！！」

大声で一気に言えばそれに返して手本のように綺麗な敬礼をとるハーデイ。

話を聞いていた周囲もハーデイに倣い敬礼を行い、クリークはそれを見ながら満足そうに頷くと気絶したネルソンの足首を掴み要塞から飛び降りるのだった。

そしてクリークは道中で断続的に聞こえる呻き声を無視して進んでいると

「おじさーん！クリークおじさーん！！」

と近づいてくる声。

「おー、どうした？とりあえず落ち着いて深呼吸しろ。竜じいに何かあったのか？」

こつちの姿を見て走って来たのだろう、息を切らせるアピスを落착かせる。

「今は大丈夫だよ！おじさんにお礼が言いたくて…なんでおじさんは人間を足首持つて引きずつてるの？それにこんなに傷だらけに…」

「ああ、こいつが竜骨…というか竜じいを狙ってた犯人だ。殴るなり蹴るなり好きにして構わんぞ？」

「やらないよ!?…と言う事はこの人向こうのでっかい軍艦からずっと地面引き摺られてるの!?!」

「お仕置きだよお仕置き、所でホントにいいのか？今なら被害者って事で色々と処分に口出してもいいぞ？」

「処分って一体何するのよ…別にいいわよ、竜じいはおじさんのおかげで故郷に戻れたみたいだし。」

「犯人も酷い目にあってるみたいだしね…おじさんって本当は何者なの？旅人って嘘でしょ？」

「さてそれはどうかな。」

「とりあえず俺はこいつを運ぶからアピスも満足したらベアトリーチエ号に戻ってこい、少し話があるからな」

「うん、わかった!!」

「そう元気よく答えるとアピスは再び竜じいの元へ…千年竜が多く集まっている場所にかけていくのだった。」

「さて、と歩みを再会したクリークは程なくベアトリーチエ号の元へ、そのまま踏み込みで甲板へと飛び上がる。」

「それと共に大きく船が揺れジョークやシユライヤが飛び出して来たので」

「ほら、新しい罪人だ。ふんじばって牢にぶち込んで」

と放り投げる。

「うわすげえ傷だな…クリークさん、こいつ誰だ？」

「ん？ああ、そいつ元海軍支部准将。引きずったら擦り下ろされて軽くなりや良かったんだが…」

「ああ…元って事はなんかやったんだな、今回の首謀者ってトコか？」

「ナーハツハツハ！人間がそう野菜みたいになるかよ！なあシユライヤ!!」

「まあジョークさんを岩肌に擦りつけければ骨粉になりそうかも…」

「骨粉は植物の成長を促進すると言うが…どうなんだろうな？」

「おい、冗談だろ？」

「骸骨なのになんとなく表情がコロコロ変わったように感じるの面白いな、と考えつつ三人は協力してネルソンの巨体を縛り上げるのだった。」

## 声と鈍熊 ドンクリーク

ネルソンを苦勞して牢屋に押し込めれば残り二人の囚人：今回捕まえたエリックと、バラティエに行く前に偶然遭遇したクロネコ海賊団船長”百計のクロ”は不快を露わにする。

「ちっ、結局この豚もダメだったか。役に立たん男だ」

「…何だこの醜い豚は、見るに耐えんな」

「こいつは元・海軍准将のネルソンだ、今回更迭する事になったからしばらく世話してやれ」

文句を言う二人に我慢しろ、と言外に込めつつそう言う。

「海軍准将のネルソン…ちっ”提督”か、海戦に優れると聞いているが…」

心当たりがあったのだろうクロがそう言えば

「む、更迭だど？キサマ、何の権限があつてそんな事ができる。

…まさか貴様、海軍と繋がっているのか？」

エリックはまだこちらの正体を勘違いしているのかそう疑問を抱く。

「なんだ、お前は知らずに捕まっているのか？」

その男は海軍に繋がりがあるところじゃない、こいつこそが海兵だ。

海軍本部中將”鈍熊” クリークとはこの男の事だ」

そう言いつつ特徴的な動きで眼鏡を上げるクロにエリックはフリーズ、しばらくして正気を取り戻すも

「なっ…海軍本部中將だど!?何故そんな化け物がココにいる!!」

ここは東の海だぞ！グランドラインの…しかもトップクラスの化け物がココにいるなんぞどういうインチキだ！巫山戯るな！」

と大声で捲し立てたのだった。

「ちっ…少し黙れ、貴様の鍛錬が足りないだけだ。

その男然り、”黄金の大海賊” ウーナン然り、”海軍の英雄”

ガープ然り…そしてかの海賊王ゴールド・ロジャー、彼奴ら全ては東

の海出身でありながら化け物クラスの實力を持っている。

それに勝てないのなら貴様が弱いだけだ、吠えるな耳障りだ」

エリックの言葉を煩く感じたのだろう、クロは壁に背中を預けたまま見下すような目つきでそう言うクロ。

「キツ…キサマ!!ワタシを誰だと思ってる!!カマカマの實の能力者にして”旋風のエリック”とはワタシの事だぞ!!」

「フツ、知らんな。だいたいそんなイモムシのような姿で言われてもな?」

と、エリックは激昂するも全身グルグル巻きのエリックを見て口角を上げて小馬鹿にしたように笑うクロ。

それが更に気に障ったのかなおもジタバタと地面でのたうつエリックに

「はいはいとりあえず落ち着けエリックとやら、模範的ならそっちの男と同じく拘束は外してやる。

この船はそこまで牢にスペースをとってないんだ、本来は五人は収監できるんだが今は三人だし問題無いだろ?」

「…この豚の質量を考えろっ!!」

「あーあー聞こえない」

そんなクロの怒鳴り声にクリークは耳を押さえて聞こえないフリをしつつ足早に去って行くのだった。

食事をしながらしばらく待っているとアピスが戻ってきたようなので前々から考えていた事を話すべくアピスと呼ぶ。

「さてアピス…まずは俺の正体というか何というか…」

「うーん…旅人っていうのは嘘だとして…やっぱ殺し屋なの?」

クリークの言葉にエリックの言っていた事を思い出したのだろう、首を傾げながら言うアピスだったが

「いや、違うからな?あれはあの男が勘違いしてただけだからな?

ゴホン、さて俺の本職は…実は俺は海兵をやらせて貰っている」

クリークはそれを否定しつつ自分の正体を伝えた。

「うっそお!?てつきり本当は海賊なのかなって思ってたのに!海賊みたいな顔してるの!?!」

「ぐっ…、確かにそれは良く言われるがこれでも海軍の末席にいる本部海兵だ。」

さて話というのはアピス、お前の今後について何だが…グランドラインに入る気は無いか？」

と、前々から考えていた事を伝えるクリーク。

「え？わたしが？…でもわたし強くないよ？というか戦え無いよ？」

「ああ、まあ戦闘手段を身につけるのは追々やるとして…俺はお前の身柄を危惧している」

「わたしの？何で？わたしただの田舎娘だよ？」

「ただの田舎娘が動物の言葉を理解出来るわけないだろう。」

ちゃんと理由はある、鳥や動物、魚の声を聞けるのなら風を読んだり波を読んだり、更には諜報や道案内など出来る事は幅広いだろう。

お前が来てくれるのなら是非その分野で活躍して欲しいと考えている」

とアピスのスカウト理由を聞かせるクリークにアピスは

「うーん、確かにその辺りなら出来るけど…」

「まあそれよりも何よりも…アピスは海王類という存在を知っているか？」

と危惧している事を、本題について話す。

「かいおうるい…海獣とは別なの？」

「ああ、って事は存在自体知らないか。」

まあとりあえず海の王と書いて海王類、時折現れるヤベー生き物だ。

今はまだ不可能だとしても将来お前がどういう成長を見せるか不明だ、それこそ海王類の心も読めるようになったとしたら…」

「…なったとしたら？」

「お前は良くて幽閉…悪けりやこうなるかもしれん」

と手刀を自分の首にトントン、と当てて見せるクリークにアピスは血の気がひく。

「え…なんで？そんなにヤバいの？」

「まあな、タダでさえ色々やれそうな能力なのにそれが可能になれば

世界政府は存在自体を危険視、アピス自身が何もやってなくても下手すりや指名手配されるなんて可能性もある。

だからこそだ、だからこそ早期にお前と協力体制を作り、どんな相手でも出来るだけ逃げ延びれる戦闘力を身につけ、見聞を広めてもらいたいと思ってる。

それに俺は海軍でも少しは偉い方だ、だからこそお前の将来はそんな風になって欲しく無いと言うことだ……どうだろう？この話を受けてもらえないだろうか？」

と、アピスに提案したのだった。

……かつてその類稀なる才覚故に世界政府に狙われるのを阻止できなかった少女を思い出しながら。

## 東方将軍 ドンクリーク

しばらく考えさせて欲しい、それがアピスの答えだった。

まあ確かにこんな話いきなりされても困るだけだろう、答えは急がなくていいと伝えてその場を離れて東海海軍のトップに連絡をとる。

『はいこちら東方方面軍総司令部』

繋いだのはこの東の海の全ての海軍を統括する東方方面軍司令部だ。

「MC00919、海軍本部所属のクリークだ」

『少々お待ち下さい：海軍本部所属のクリーク中将ですね、今回はどうされました？』

「メイナード少将に繋いでくれ」

『了解しました、メイナード司令に繋がります』

メイナード支部少将：海軍東方方面軍のトップにしてそれと共に本部少将と同程度の実力を持つている。

戦闘も指揮も事務もそつなくこなす万能型の少将だ。

暫くすると

『こちらメイナード、どうした？クリーク中将』

との声に

「久々だなメイナード少将、センゴク元帥から報告は受けているか？」

とネルソン及びそれに連なる事件の事を確認する。

『ああ、E8支部の汚職についてだろうか？お前が動いたと聞いているが…』

「ああ、派手にネルソンが動いたんでな。んで俺が関わった経緯だが…」

と軍艦島での出来事を話して聞かせる。

『…不老不死など馬鹿な事を、それが真実ならとつくに天竜人が手に入れてるだろう。』

よくそんな眉唾物をネルソンは信じたな？』

と至極マトモな事を言うメイナードに

「ま、確かにそうだろうな。」



だが千年というのは色々と未知の領域だ、手段の一つや二つあつてもおかしくないと思つたんじゃないか？」

まあ不老不死の可能性に盲目になつていたという可能性もあるがな、と思いつつそう告げた。

『…確かに空白の歴史よりも前だしな。』

しかし休暇の所すまん、本来ならこつちが動くべきだつたんだらうが』

と本来なら東方方面軍司令の自分が解決すべき事柄だと思つてゐるのだから、そう謝罪するメイナード

「別にいいさ、結局三ヶ月程の休暇になつちまつたが割とゆつくりさせてもらつてるんでな。」

それにネルソン：…というかハーデイ少佐は聡そうだつたからなお前が動いたとなれば直ぐに察知されたらう」

ハーデイ少佐：指揮能力はあるようだったし、何かあれば察知していただろう。

下手したら隠蔽若しくはネルソンを逃す可能性もあつた、上官の命令はよつぽどじゃなければ従つてたみたいだしな。

『しかし三ヶ月という長期間よくとれたな、例の作戦が近いと聞いているが？』

「最初は一年くらいとるつもりだつたんだが…結局半年になり更に三ヶ月になつたがな」

そうなのだ、当初は一年ほどで提案したが他との兼ね合いで流石に一年は無理だから、と半年になり更にとある大規模計画の準備が手間取つている様子なので更に半分に休暇は短縮されたのだ。

『で、E8支部はどうなつた？ネルソンが派手に動いたつて事はお前も派手に…かなり派手にやつたんじゃないか？』

「…ネルソンはこちらの独断で拘束、支部の取り纏めとしてハーデイ少佐を一時的に中佐に昇進させた上でE8司令の代行に充てている」  
『ふむ…となるとこちらからも人員を送り立て直しにあたるとう。』

ところで…E8支部の被害について聞かせてもらおうか？』

…やっぱ聞かれるか、と思いつつも

「はっはっは、最初に言っておくが…」

E 8 支部どころか E 6 支部、E 7 支部の艦隊も一部ネルソンお得意の連環の陣に組み込まれてたようだな…」

と前提を伝えれば

『…う…おいまやか？』

それで察したのだろうか、E 8 支部どころか E 6 支部、E 7 支部にもネルソンへの協力者…若しくは手が及んでいるという可能性に。

「んー、凄く言いづらいんだが海軍軍艦 30 隻…いやそれ以上になるか？それぞれが大なり小なりダメージを受けている筈だ。

因みに E 8 支部の海上移動要塞も同様だ、海兵もまあ殺してはいないが数が多かったからなあ…骨の一本や二本は折れてるかもしれないな」

それと共に大きな溜息が受話器から聞こえて来る。

『なんてこった！…よりによって隣接支部か…しかも 30 隻の艦隊を相手にしただと!』

となると E 9 支部と…仕方ない E 0 から回すか、まったく頭が痛い事だこの海は最も平和な海じゃなかったのか?』

立て直しの手段を考えているのだろうか、30 隻以上の海軍艦がダメージを受けているとなると哨戒網にも穴が空く可能性もある。

その隙について海賊が悪さをすれば一般市民にも被害が及ぶ可能性もあるだろうからな。

「平和だからこそ、だメイナード少将。

平和だからこそ腐敗は発生しうる可能性がある、発生すれば広がるのは当然の理だ」

『争いがあれば腐敗は発生しないと?それも一概には言えんだろう。』

闘争を発生させる事で腐敗を防ぐとでも言うつもりか?』

「…それもいいかも知れんな」

『いやいやいや、物騒な事言うな、それにその為に今回の件は見せしめにするんだろう?』

「ああ、俺が動いた事は伏せつつも何かやれば本部が動く、とな」

『まあ大なり小なりと海軍にも何かしらの腐敗はあるだろうからな。

ところでネルソン元准将の身柄だが…』

「とりあえず最寄りの支部に引き渡そうと考えている、こっからならE1支部か？」

『…ローグタウンか、無用な心配だと思いが気を付けろ』

ローグタウンか、麦わらはどうしてるかな？グランドラインにはもう入ったかな？

そう考えつつもメイナード少将の忠告が引つ掛かったので

「ん？何かあったのか」

と聞けば

『ローグタウンでルーキーが暴れたらしい、スモーカー本部大佐が艦隊を率いて追撃に出た』

「ん？本部大佐自ら動くような大物か？」

「いや、詳しい報告はまだ届いてないが懸賞金もかかってないようなルーキーだそうだ。

何でも処刑台広場で暴れたとかなんとか…』

あれ？それって麦わらじゃないか？いや、スモーカー別に艦隊率いて追いかけた訳じゃないよな？と思いつつも

「本部大佐のお膝元で暴れるなんて度胸あるな…」

しかしそうなるとE2支部辺りに護送するか、こちらら休暇だしE1支部で騒ぎに巻き込まれても面倒だ」

『E2支部か…それよりもガープ中将がグランドラインから出てきている、身柄を引き渡すならそちらがいいだろう』

「ガープ中将が？俺が言うのもなんだが何で本部中将が東の海に？」

『さあ？モーガン元大佐の更迭にガープ中将が立候補したらしい』

そういやあったなモーガン大佐をガープが引き取りに来る場面。

成る程任務のついでに孫の顔でも見に来たか？と思いつつメイナードにガープの居場所を送ってくれるよう頼むのだった。

## 東海の番犬

流石にこの話は一人では決められない、とアピスはクリークと共に一度軍艦島へ向かった。

そして時は少しそれから遡る。

リヴァースマウンテンと呼ばれる東の海からグランドラインへの唯一の入り口、その近くに一つの街がある。

かつて海賊王が生まれ、そして処刑された事から始まりと終わりの街とも呼ばれるその島の名は“ローグタウン”

この島は立地の関係から海流や時節の風などに恵まれこの島には多くの人や物が集まる。

まず集まったのは商人。

海賊がグランドラインに入るのに必ずこの島の近くを通りかかる事に目をつけ一部の怖いもの知らずの商人達が水や食料、武器や防具を売り出し、海賊達も事前に準備ができるのを有り難いと思ったのだろう、品物は飛ぶように売れていった。

そうなれば他の怖気付いていた商人達も一人、また一人と集まりどんどんと町は発展していく。

そうなれば良からぬ事を企む海賊も出てくるわけだが当然海賊を取り締まる者達：海軍もただ座して見ている訳では無い。

島に支部を置き騒ぎをおこす海賊を捕縛する。

一応の安全を得た商人は活発に動き時にはグランドラインや他の海域の物も手に入れるようになり、噂を聞きつけ海賊だけでは無く他の船乗りや観光客も徐々に増えていく。

そしてこの島が爆発的に成長したのは海賊王の処刑：海賊王の最期の言葉でグランドラインに入ろうとする海賊が一気に増加、当然物も人も金もどんどんと回り、それらを食べて街は成長、そしてとある中將の主導によって導入された“四海制覇”計画。

これによりローグタウンにあった支部も強化され、安全だとわかれば人も更に増えていく。

伝説にあやかり多くの荒くれ者が集い、それを取り締まるために多

くの海兵が所属し、それなら安心だとばかりに商人は活発に動き、珍しい品物目当てに遠方からも人が集まり…と通りには人々の喧騒が響き、夜になれどその明かりは消える事の無いまさに東海一の大都市へと変貌していったのだ。

…とは言え”とある一人の男により” 最近は専ら脛に傷を持つ海賊はここを通過してグランドラインへ行く事は無くなっていったが。

このローグタウンにある東方方面軍第一支部、通称E1海軍基地で一人の男が報告書に目を通しており、その側にはもう一人隻腕の男。短髪の白い髪に鋭い目つき、葉巻を口に加えたまま書類に目を通してその男の名はスモーカー。

”白猫”…そして”東海の番犬”とも呼ばれる凄腕の海兵である。グランドラインを守護する海軍本部所属の大佐であり、ここに就任してからはグランドラインへ入らんとしてここにやって来た違法な海賊達を”全て”捕らえて来た男だ。

本来なら支部大佐なり支部准将なりが統括するがこの街の立地は海軍も重点的に目をつけているので特別に本部所属の大佐を置いているのである。

命令違反が偶にあるのが欠点だがゆくゆくはメイナードの跡を継ぎ、東方方面軍総司令に就任するのでは無いか？と噂される若手のホープだ。

「…モーガン大佐、いや元大佐が更迭か。

しかもガープ中將がわざわざ来るだど？あのジジイ何考えてやる…E8がどうにもきなくせえしそつち関係か？

んでこつちは…新たな海賊か。

海賊旗の無断掲揚五回…リミットだな、公認海賊の申請も出てねえし次に掲揚が確認されたらマニュアル通り懸賞金をかけろ」

と、スモーカーが側に控えていた隻腕の男に指示を出せば

「了解しましたスモーカー大佐、情報によれば道化のバギーを下した上に、かの”海賊狩り”が同乗しているとの噂もあります…」

との忠告が為されたのでスモーカーは暫く考えるも

「バギーをか…東の海のルーキーにしちや腕はあるようだな。

…いや、一般市民からの被害は報告されていないから何か騒ぎを起こさなければそのまま100万で申請しろ。

…そういう海賊狩りには因縁があるんだったか?」

と指示を出してついでに昔聞いた話を思い出しそう聞けば

「因縁と言うわけでも無いですよ、昔交流があっただけです」

と返す隻腕の男。

「まあいい、海賊に交流があろうが無かろうがテメエが海兵の本分を全うするなら文句はねえさ。」

ところでたしぎは何処行つた、姿を見かけねえが…」

「ああ、隊長でしたら朝から出かけています。訓練には参加するとは聞いてますが…」

「つたく何処行つてやがる…聞きてえ事があるからちよつと探してこい」

「了解、直ぐに探してきます」

そう言つて隻腕の男は部屋を出て行きスモーカーは

「何やら上もきなくせえし何だつてんだ…」

と街の喧騒を眼下に大きく葉巻を吸うのだった。

そのタイミングで勢い良く部屋のドアが開かれ

「大佐っ!海賊です!港に海賊が現れたとの報告が!!」

息を切らせて走つて来たその海兵に

「うるせえぞ!そんなに大声出すな、…で、何だつて?」

と聞き返す。

「すみません!海賊です!北の港に海賊が!旗印は三日月に髑髏、深禍月(みかづき)のギャレンです!!」

「ギャレン…700万だったか?」

「はい、直ぐに部隊を集結させますので指揮をお願いします!」

「いらねえよ」

直ぐに対応するべく部隊を集結させようとした海兵にスモーカーはそう一言だけ返す。

「は?しかし相手は700万ですよ?数多くの掠奪を繰り返したあのギャレンですよ!」

「うるせえなあ…俺がこの街にきたクズ共を一人でも逃した事があるか？おれに指図するな！」

「もつ、申し訳ありませんスモーカー大佐!!」

「北の港だったな、直ぐに出る。」

テメエはたしぎが戻って来たらこつちに連絡しろ、それから東西南北の港は見張りを増員、いいいな？」

「部隊を集結させますか？」

「いらねえって言うてるだろ、わかんねえ奴だな…」

「でしたら何故…」

海兵のその言葉に

「どうにもきなくせえ匂いがしやがる…あくまで念の為だ、ギャレン程度には必要ねえよ」

自身の勘を元にそう告げるのだった。

「…了解しました」

そう言いつつ報告をしに来た海兵は慌てて部屋を出ていくのだった。

それと共にスモーカーは一人北の港へ向かうのだった。

一方その頃麦わらのルフィ率いる海賊団は無事にベルメール＆アーロンの特訓を潜り抜け今度こそグラウンドラインに入るべく準備を整えるためにこのローグタウンへ上陸。

当然色々と準備を整えるべくゾロは武器屋に、サンジはとある理由で料理会場でコンテストに出場、ウソップは装備を整えに、ナミは自身の服を買うついでに海図と、そして”情報”を仕入れに…そしてルフィは一人、かつて海賊王が処刑された処刑台を見に広場へと向かったのだった。

## 海賊王の弔い酒

スモーカーが単身出撃、途中ちよつとしたトラブルはあったものの北の港に現れたギャレン一味を難なく捕縛。

途中で処刑台広場に行くのに迷子になっていた麦わら帽子を被った少年に道を聞かれたので葉巻の煙を燻らせて”煙の行った方だ”と教えてやった。

その足で考え事をしつつ行きつけの酒場に向かう、海賊旗の暖簾を潜り地下への階段を進んでいく。

客足も殆ど途絶え寂れた古い酒場の名は”ゴールド・ロジャー”  
かつてスモーカーが着任する前はその伝説にあやかろうと合法違法問わず多くの海賊で賑わったもののそれは過去の話。

今や違法海賊はローグタウンに近づかず、公認海賊もスモーカーがここに来るのを知ってわざわざ首を突っ込みたく無いのかとんと姿を見せなくなった。

だいぶガタが来ているのだろう、ギイイイと長く鳴く扉を開けば「チツてめえか…」

とスモーカーの顔を見た老人が吐き捨てる。

「おいおい、随分な挨拶じゃねえか常連に向かつてよ…」

スモーカーは老人…この酒場の店主に慣れているのかそんな軽口を叩く。

「ふんつ、この酒場を潰そうとする奴が良く言うわい、冗談をぬかすな」

「おいおいおれを恨むのはお門違いだぜ？今日びの海賊が腰抜け揃いなのが悪いんだよ、別に公認海賊が来るのはとやかく言うつもりはねえぜ？」

そう言いながらカウンターに座るスモーカーは周囲を見渡す。

薄暗い店内には店主とスモーカーの二人だけ、他の客はおらず店内の様子から殆ど人も来てない事が窺われる。

「けっ、何が公認海賊だ馬鹿らしい。」



「どいつも海賊のかの字も持たねえ腰抜け揃いじゃねえか、お前が来ると知って及び腰になるような奴あ海賊でも何でもないわい」

「そう言うなよ、公認海賊筆頭、黄金の大海賊、なんかはどうなる、ありや中々だと思おうが？」

「…ウーナンか、ありや気風のいい海賊だったな。」

「だがそんなのはごく一部、現にお前さんがこの店に来るようになってから客足は遠のくばかり、こっちは商売上がったりじゃわい」

「それこそこっちに言われてもな…うん？珍しい、客が来てたのか？」  
そこでカウンターに乗った二つの空のグラスにスモーカーは気付いてそう聞くと店主の老人は無言でガチャガチャと洗い物をするのみ。

「まあいい、ラムを一杯くれ」

「貴様に飲ます酒はねえよ」

「そう邪険にするんじゃないやねえよ、…今日は特別な日じゃねえか、そうだろう？」

「そう言いつつ腕を変化させつつ遠くの酒棚からラムの瓶をとるスモーカーに店主はチラリとスモーカーを見る。」

ラムの瓶から直接飲むスモーカーは一気に飲むと

「ああうめえ…あの日の事は今でも良く覚えている…ロジャーの最期の姿をな…」

「あの日も今日みてえな蒸し暑い日だった、処刑台のある広場に手枷を嵌められてるってのにまるで凱旋した將軍のように歩いていた…」

スモーカーは目を瞑り、あの時の事を脳裏に思い出す。

スモーカーはこのローグタウンで生まれ育った、それ故に二十二年前の今日、海賊王の処刑も見ていたのだ。

そしてその堂々とした姿にスモーカーは全身に震えが走っていた。  
「…富、名声、力…この世の全てを手に入れた男ゴールド・ロジャー、死に向かって歩いてるといふのにその姿はまるで王のように堂々としていた」

そして野次馬の一人の問いかけに応えた言葉が

「俺の財宝か？欲しけりやくれてやる、探せ！この世の全てをそこに

置いて来た!!…じやったか、わしも二十二年前の今日あの場所にいたからな。

あの言葉で全員火が着いた、広場は歓声にわき…」

「ああ、それからだそれから始まったんだ、俗に言う大海賊時代が…腕っ節に自信のある奴はみんな海賊として名乗りを上げた、まあ海軍も座して見ていたわけじゃないがな…」

「ふん、そのせいでこっちは商売上がったりになったんなら世話ないわい。」

「さあ！用が済んだなら帰った帰った！うちの酒もタダじゃねえんだよ!!」

「…かてえ事言うなよ、海賊王の吊い酒さ」

そう言つて再びラムの瓶に口をつけるスモーカー、それを見て店主は

「ふんっ、金はきちんと払つてくこつたな！」

と吐き捨て自身も洗い物を中断しグラスにラム酒を注ぐのだった。

…一方その頃武器屋に向かつていたゾロは往来で騒ぎをおこした海賊と海兵の騒ぎに巻き込まれていた。

まあ騒ぎと言つても大した事は無い、どうやら鬱憤ばらしらしく、女一人に大柄な海賊二人が襲い掛かろうとしていたので助太刀しようとしたところその女は見事な刀捌きで瞬く間に大男二人を下したのだ。

そしてゾロは彼女が落とした眼鏡を拾い上げ渡そうとしたところ

過去に亡くした幼馴染みと瓜二つのその姿に大きく動揺、思わず手に持った眼鏡を握り潰してしまったのだった。

当然彼女は怒り弁償を請求、とは言えゾロの見た目の格好で曰くありげと判断したのだろう、黙つてついて来て欲しいとの言葉にゾロも眼鏡を壊した手前強くは出れず渋々その言葉に従う。

「まったく何処まで行くんだ？弁償なら何とか…するって言つてんだろ？」

「いえ、貴方にお金があるようには見えませんいかにも曰くありげです」

「確かに金はねえが…」

「その眉間のシワ、何日も食べてないようなその飢えた目つき…お母さんが病気なんじゃないですか？奥さんに逃げられたのでは？まだ幼い子供を筆頭に五人の乳飲み子がいるのでは？」

その言葉にゾロが反論しようとするも

「いえ深くは聞きません、兎に角一緒に!!」

と勘違いか暴走か不明だが自身の思い込みである“海賊狩り”を連れて来たのは

「はあ?!海軍だと!!」

ローグタウンでも大きな部類に入る建物…海軍E1支部であった。

## 海賊狩と女剣士

「はい！ではこれどうぞ!!」

海軍基地に連れてこられたゾロは恐々としていると目の前の女剣士から手渡されたのはモツプと水の入ったバケツ。

「おい、何だこれ」

思わず口をひくつかせつつ聞き返せば

「いえ、丁度掃除のおじさんが辞めてしまったんですよ、ですので貴方はまずそこからやってもらおうかと。

安心して下さい海軍で働けばもうお金に困る事ありません、美味しいものを食べて、暖かい布団で寝て…そんな生活が出来るんですよ！」

と熱弁を奮う女剣士にゾロは辟易しつつも

「はっ！誰が海軍なんかで…」

と渡されたバケツとモツプを突っ返した。

それを見たたしぎは

「逃げるんですか!」

「なっ!」

と一言、当然ゾロもそれには反論しようとするも

「人の親切を馬鹿にするんですね! 貴方の場合お金が無いことよりも心の貧しさが問題なのでは!」

との言葉に深く溜息をつく。

「あのなあ…」

「少尉、殿! 調練のお時間です!!」

「じゃ、頑張ってくださいね?」

そしてゾロが説明しようとしたところで海兵の声、どうやら目の前の女剣士を呼びに来たようだ。

「少尉?... 薄々思ってたがやっぱ海兵か…」

最後に一声だけエールを寄越し去っていくその背中をゾロはモツプとバケツを持ったまま見送るのだった。

暫くすればそこにはぶつくさ文句を言いつつもモツプがけをする

ゾロの姿。

「つたく…何でおれがこんな…くっそ、ラチがあかねえ!!」

おもむろに手に持っていた一本を口に咥えて両手にモップを持つと猛然と通路を走り

「うおおおおおつ!!てりやあああああつ!!」

と素早い手捌きで往復し瞬く間に廊下のモップがけを終わらせてしまう。

「ふうっ、やっぱブラシも三本だな…ん?ありやさっきの女か…」

一息つきふと窓の外を見ると先程の女剣士が複数の海兵と木刀で打ち合っている姿。

「そういや調練の時間だと言っていたなと思いつつも見ていれば次々と相手の海兵を打ち伏せていく姿に

「…周りの海兵もやり手だがあの女も強いな」

剣を振るうその姿にかつて誓いをたてた幼馴染をゾロが幻視している

「貴様!ここで何をしている!!」

「何処からこの海軍基地に潜入した!不審者め!!」

と二人の海兵が現れた。

「げっ…あれだ。新しい掃除夫だ、気にすんな」

と事実を言うも

「掃除夫が刀をぶら下げているわけないだろう!拔剣!!」

「貴様を拘束する!拔剣!!」

聞く耳持たぬとばかりに二人は抜刀、ゾロも仕方ない、とばかりにモップを振るうも二人の海兵はその一撃を防ぎつつ逆に斬り返してきた。

「ちっ!ただの海兵じゃねえのかよ!!」

「我らは”海軍剣客隊”!!舐めてると痛い目を見るぞ!!」

「どうした!腰の物は抜かんのか!!」

数合を交わしつつ

「くそっ、すまんが暫く寝てろ!!」

それと共に二人の斬撃を受け流して両のモップでそれぞれの首筋

に一撃づつ、そのいきなり早くなった刀捌き…いや、モップ捌きに二人は対応出来ずに意識を落とされたのだった。

「早いところズラからねえと…」

そう思つて数枚の紙幣と書き置きを意識を失つた海兵の横に残してゾロは海軍支部から逃げ出したのだった。

「何事ですか!!」

「何者かにやられたようです、犯人の姿は影も形も…」

一方女剣士…本部少尉のたしぎは騒ぎを聞きつけ現場に、残された手紙に気づき

「…眼鏡代?…襲われそうになって逃げ出したのかしら?」

と首を捻っていた。

一方その頃、犯人であるゾロは当初の目的を果たすべく武器屋へと向かつていた。

「びびった…ありや似すぎだぜ、くいなに…しかもよりによって刀使いの剣士…」

そんなゾロが思い出すのは故郷で亡くした幼馴染みとそっくりの女剣士。

「いるもんだな世の中には…でももう会う事もねえだろ…」

世の中には三人のそっくりさんがいるという噂話を思い出しつつもゾロは所詮海賊と海兵、会う事はないだろうと颯爽と武器屋の暖簾を潜る。

それがフラグだったのか創業200年の老舗である武器屋の店主、一本松がゾロの腰の物を名刀と看破し何とか騙して買い叩くべく交渉をしていると

「こんにちは!磨きに出してた時雨、出来てます?」

「げっ!!」

そこにその件の女剣士が現れたのだった。目敏くゾロを見つけると「良かった!無事だったんですね、さつき海軍支部で何者かが暴れていったんです。」

貴方まで居なくなつたから心配してました。でも無事ここにいるという事は…貴方、やっぱり人の親切を嘲笑つて逃げ出したんですね

？」

「あ、あれは…だな…」

「やっぱりこのお金返します。薄情者からお金なんて受け取れません!!」

と固まるゾロの手に眼鏡代として置いてあつた紙幣を握らせる。

口元がひきつりつつもどうやらこの店に自分の刀を磨きに出しており、それを受け取りに来たのだと推察。二度と会う事も無いだろうと思つていただけに渋面を作る。

「ほら、眼鏡も新しく買い直しましたし、ほら！」

そう言つて赤い縁の眼鏡をかける女剣士…たしぎはその視界に映る一本の刀に気付く。

店主の一本松が持ったその刀を見て

「わあっ!!この刀もしかして”和道一文字”!和道一文字じゃないですか!!」

そう言つて店主の手から刀を奪い取る。

「和道…?」

刀の名前なんて知らなかったのだろう、そう呟くゾロを他所にたしぎは刀を引き抜くとマジマジと見る。

「綺麗な直刃…確か大業物21工が一振り!ほらこれを見て下さい、確か1000万ベリー以上はする代物ですよ!!」

普段から持ち歩いているのかポケットから小さな手帳を取り出しパラパラとめくる。そこには鞘や拵、鏢や刃紋など多くの刀の情報が凶解つきで描かれていた。

「このおっ!全部喋つちまいやがつて!!営業妨害で訴えるぞ!!」

「えっ!営業妨害?!わたし何かやっちゃいましたか!」

「お前はこの時雨を取りに来たんだろうが!!磨き終わってるよ!サツサと持つてけ!!」

店主の一本松はみすばらしい格好で、しかも10万ベリーで刀が二本が鈍でもいい、間に合わせていいから欲しいというゾロを金なしの素人だと考え、そして腰の和道一文字に気づき上手いことだまくらかして手に入れようとしていたのだった。

最もそれはたしぎが全部喋ったので未遂に終わった上に、ゾロは何があろうとも刀を手放す気は無かったので店主の無駄骨であったが。



## 海賊狩と妖刀

入り口近くの樽を指差して”全部一本五万だからそこから勝手に選べ!!”と言う一本松に何で怒ってるんだ?とゾロは首を傾げつつ刀を選び始める。

「貴方、刀お好きなんですね!三本揃えるなんてまるでどっかの賞金稼ぎみたい」

と”時雨”を手にしたたしぎが話しかけてくる。

「賞金稼ぎ…ねえ」

ま、今は海賊になっちまったがなと思いつつ刀をどんどん見ていく。

「有名ですよ?ロロノアって男です」

”名前は”よく聞く」

「ええ、東の海じゃ知れ渡った剣士の名ですよ?悪名”ですけど…」

刀をお金稼ぎの道具にするなんて…許せません!名のある剣豪は多くが海賊だったり、賞金稼ぎだったり…」

「海軍にも強いのはいるだろ、ユキムラとか」

「確かに海軍にも強い剣士は居ます、モモンガ中将とかストロベリー中将とかクリーク中将は…剣士と言うわけじゃないかなあ?」

「へえそいつら全員強え剣士なのか?あの鷹の目ともやり合えるのか?」

「え?ええ、仮にも海軍本部の中将ですし、何も出来ずに負けるなんて事は無いと思いますけど…」

「へえ、そりや楽しみだ…」

「何か言いました?兎に角海軍にも剣士はいるといつても多くの名刀は海賊や賞金稼ぎが持つてるんですよ?刀が泣いています」

その言葉にゾロは口角を上げ

「ふっ、まあ色々事情があんじやねえのか?職種には時代に合ったニーズってもんがあるからな」

「とにかく!わたしはこの時雨でもっと腕を磨いて、いずれ世界中の

悪党共から名刀を集めて回るんです！

最上大業物12工、大業物21工、良業物50工…命をかけて！」

その言葉にゾロは刀を選別していた手を止めたしぎに向き直ると

「この刀も奪うのか？確か…和道一文字だったか？」

と腰の大業物を少し引き抜いて見せれば

「えっ…いや！わたしは別に名刀が欲しいわけじゃなくて悪党の手に渡るのが嫌だつて言ったんです！」

と慌てて弁解するたしぎに

「集めたとして…刀はコレクションじゃねえんだが…ん？」

小声で言うのと再び刀を物色し出した所で一本の刀を掴んだ時に何かを感じ取る。

赤漆の鞘に四つ銀杏の金鏝、その刀を見るとたしぎは顔色を変えて「その刀確か…」三代鬼徹…三代鬼徹ですよ！！先代の二代鬼徹は大業物、初代鬼徹に至っては最上大業物に位列しています！！」

と手元の手帳をパラパラとめくり目的のものを見つけたのか早口でそうまくし立てるたしぎにゾロは辟易しつつも鞘から引き抜いて軽く翳しながら刀身を確認する。

「おじさん…この刀本当に5万ベリーなんですか!？」

「う…あ、ああ…」

何か言いたそうだが言えないとばかりにそう返事を返す店主に

「凄い！歴とした業物ですよ!!それ、それにすべきですよ!!普通買えば100万ベリーはしますよ!？」

その言葉を聞きつつもゾロは刀を前方に構えて微動だにせず、そこで店主の

「いや…駄目だ！そいつは売れねえ!!」

との言葉にたしぎはこの刀にこの額は流石に安すぎるからと判断したが店主はそれを否定した。

そこで何回か軽く振ったゾロはこの刀を妖刀と看破、思わず知っていたのか？と確認する店主に帰ってきたのは

「いや、わかる」

との一言でゾロはそのまま厳しい目つきで大乱れの刃紋を持つ三

代鬼徹を眺める。

そこからはゾロが看破した通りだった、店主が語るには初代を始め  
”鬼徹一派”は優れていたが尽く妖刀だったとの事。

名だたる剣士が手にして、そして非業の死を遂げていった事から今  
では鬼徹を腰に差しているものは誰もいないらしい。

例え知らずに使っているてもその命を落としてしまうかららしいと  
の事であった。

店主もサツサと処分したいから五万ベリ―均一の樽に突っ込んで  
いたが流石に持ち主を殺すとあつてはギリギリ残っていた良心が許  
さなかったのだろう、それを止めたのだ。

「す、すみません！そんな恐ろしい刀だったなんて知らずにでしや  
ばっちやつて!!」

「ふん！ちよつとかじつた程度のひよつこが知つたような口を聞きや  
がつて…」

謝罪するたしぎとそれを皮肉るいっぽんマツを他所にゾロは何度  
か三代鬼徹を振り

「氣に入った、これをもろう」

と琴線に触れたらしい三代鬼徹を掲げて言うその姿にいっぽんマ  
ツは全力で止めようとすもゾロは取り合わずに”ならおれの運と  
コイツの呪い…どつちが強いか試してみようか”と言いつ出したのだ。

そして軽く放り投げ、縦に回転しながら落ちてくる三代鬼徹に対し  
ゾロは自身の左腕を差し出せば

「なっ!!バカなやめろー！斬れ味は本物だ、腕が飛ぶぞ!!」

いっぽんマツの制止とこの後の惨劇を予想したのだろう、目を見開  
いて口元を押さえるたしぎを他所にゾロはスツと目を閉じる。

そして回転しながら落ちてくる鬼徹は刃を届かせそうになりなが  
らも、差し出された腕には刀の峰が当たり刀は床にストン、という軽  
い音と共に突き刺さった。

…無事に腕は繋がったままだった。

どうやら三代鬼徹は呪いを届かせる事が出来なかったらしい。

「貫つていく」

目を開いてそう言うゾロにいつぽんマツは腰が抜けたかのように倒れ込む。

斬れ味は本物と言っていたな、と思いつつはばき近くまで床に刺さった三代鬼徹を引き抜きながらたしぎにもう一本選んでくれるように頼みこむといっぽんマツは

「ちよつと待ってろ!!」

との一言を残して階上に、そして降りてきたいつぽんマツの手には布のかかった刀架台、いつぽんマツはカウンターの上に乗せると

「造りは黒漆太刀拵、刃は乱れ刃小丁字…良業物”雪走”! 斬れ味はおれが保証する。」

…ウチはたいした店じゃねえがこれがおれの店最高の刀だ」

そう説明されてもゾロは困るので

「はは…でも買えねえよ、言っただろ? 金がねえって」

と正直に言えば

「金はいい! 貰ってやってくれ…勿論鬼徹の代金もいらねえ、さつきは騙そうとして済まなかつたな、久しぶりにいい剣士の目を見た。」

刀は剣士を選ぶという、お前さんの幸運を祈る!」

とドケチと知れるいつぽんマツにしては珍しくゾロに刀を渡したのだった。

そしてたしぎはその光景を見ながら

「どうやら只者じゃ無いみたい…後で少し調べてみようかしら?」

とその光景に驚きつつも時雨を腰に差すのだった。

## 一周年記念 クリークさんのあれやこれ

クリークさんの誕生日は9月19日。

現在は海軍本部中将の地位に就いており自ら創設した海軍独立遊撃隊：通称”カモメの水兵団”を率いるトップである。

カモメの水兵団はカモメの水兵さんをモチーフとしており他にはイルカ旅団（ORCA旅団）、海燕隊（海援隊）などの案もありました。海賊からは赤カモメの名で恐れられる東西南北の海を股にかけ、海軍でも最も戦闘経験が多い部隊だとしてその筋では有名。

原作では海賊艦隊提督や騙し討ちのクリークの異名をとって懸賞金も1700万、と東の海ではなかなかの高額懸賞金でしたがこちらでは何の因果が海兵に。

主な使用武器は片方の先端に海楼石と仕込み針が内蔵された棍（白尾棍、オリジナル）とベアキングが使っていた大型の連射式ピストルの改良品であるベアコング・改（映画 ねじまき島の冒険より）それからアスカ島にて祀られていた破壊不能という伝承を持つロングソードの七星剣（映画 呪われた聖剣より）

後述の理由により身体能力が魚人の比では無い化け物クラスなので普通の剣などでは振ったら剣が保たないという状態だったので武器に求めるのは知名度や斬れ味などではなくとにかく頑丈さと信頼性。

戦闘スタイルは原作のクリークのように超火力のあちこちに搭載した武装を用いての対集団戦：と思わせつつその実鎧を脱げば白兵戦の方が得意という初見殺しのスタイル。

白兵戦が得意な反面銃、弓、投擲といった遠距離武器は苦手としておりガトリングガンなどばら撒く系の武器であれば問題無いが普通の銃などでは当てるのに苦労する模様、最も最近は見聞色の覇気と併用する事で10m以内ならしっかり当てれるようになった。

覇気については原作では5000人の部下という事で多少の力リスマはあった模様ですが、グランドラインレベルで見ると特別でもなんでも無いので生まれに由来する霸王色の覇気は使えません。（とい

うか霸王色持ち多すぎない?)

一番得意なのは武装色の覇気でそれなりに時間はかかりましたが武装色の覇気を武器に纏わせる事もできるがその反面、見聞色は苦手としての数十年の特訓により静止状態なら半径数キロを、戦闘中でも中距離ならある程度は使いこなせるようになった模様。

とは言え見聞色の覇気の極地である未来予知などは使え無いためその点に関しては他の覇気使用者には劣る模様。

身体能力がおかしな事になってる理由は全身の筋肉を持久力と瞬発力を持つ桃筋に置き換えた上に(史上最強の弟子ケンイチ 秋雨より)更に怪力を伸ばすにはどうしたら良いか、と考えた結果原作で出てきた生命帰還へと着目し筋繊維の一本から骨や血管、内臓といった所にまで手を伸ばし文字通り自身の身体を改造、その結果出来上がったのがフィジカルの化け物です。

要するに筋繊維の一本一本を細く圧縮し空いた空間に更に筋肉を搭載した人工的に作り出したヒュペリオン体質(金剛番長、白雪宮拳(めつちや可愛い)より)

丁度大将を退いたゼファアの指導の元、同期であるサカズキやボルサリーノとの手合わせでメキメキと実力を上げその傍でフィジカルだけで相手にできない敵(特に能力者)もいると悟った彼はやがて原作クリークを踏襲し武装面にも力を入れるようになり、最初は一抱え程もある鉄柱(大きくて重い、でもただの鉄柱)を使ってきましたが赤犬には溶かされ、黄猿にはビームで穴を開けられ、青雫には凍らされ:と酷使した結果これじゃもう保たないとして新たに使い出したのが棍である。(鋼鉄を超圧縮、かたくて超おもい)

更に海軍の技術部に頼み込んで原作クリークと同じような武装を多く作ってもらい(すごくおもい)これが後のミリタリスト計画の雛形となっています。

そしてそれでも武装が全て壊されれば自身の素の実力が必須になると考えゼファアの指導の元で六式を鍛え、これらを完全に習得し変形型も含めて多彩な手札を手に入れました。

因みに肉体は生命帰還で超圧縮された筋肉(その他)の効果により

物凄く頑丈な上に原作ではジャブラが習得していた鉄塊拳法を習得、それによりその身体は鋼鉄など比じゃない程の硬さを手に入れる事が出来ました。

因みに筋力の超圧縮による効果はメインの目的がパワーの上昇、嬉しい誤算として上記の防御力の上昇に加え、スピードの上昇といった面もあります。

ですので通常はあちこちに高い火力を持つ武器を仕込んだ超頑丈な鎧を纏っており、それをパーズすれば鎧以上の頑丈さを持つ肉体が姿を現し、鎧も超重量なので鎧を外せば身軽になるのでスピードも上昇というクソゲー仕様、勿論覇気も昔はともかく今は問題なく使える模様。

経歴に關してですがクリークさんの出身は東の海です。

父親と母親は海賊で二人は彼を出産しましたが邪魔だと言う事であるとある港町に捨てていきました。

そこで浮浪者に拾われますがその男も別に親切からでは無く手駒が欲しかっただけなのである程度するとスリや物盗りの技術を教え込み彼が覚えると自分の代わりに彼に仕事をさせ、その上前をはねるという事を行っていました。

因みにクリークの出生やらなんやらは完全な捏造です、辿れる足跡が既に海賊をやつてて捕まった所からです…

そしてある時特に自分の意思というものを持たずに生きてきた彼に転機が訪れました。

神の悪戯か悪魔の奇跡か上位存在の思いつきかは分かりませんが中の方がインストール、数日程寝込んで齡10歳のクリークと中の人記憶は入り混じりそして完璧な融合を果たしました。

そして生まれたのが新生クリークさんです。

そしてクリークさんは海軍のマークを見て自分のいる世界がワンピースの世界だと気づき、割とモブの命は軽い世界だと考えたのでこのままでは死ぬ可能性があると感じた為に一芝居打ち海軍への入隊を希望、見事に海兵見習いとして採用されました。

この時に初めてクリークさんは自身がドン・クリークである事に気

づきます。

一方シヨタクリークの寢床などを提供していた浮浪者の男は最初は逃げたか？と思いつつ数日経っても戻らなかつたので情報を集めれば海軍の船に乗って行つたと聞き恩知らずめ、と罵りながらも少し落ち込んだ模様。(手駒としていたが少しの情はあつた模様)

そしてゼファーや他の人間のもと鍛え続けて初めて表舞台に出てきたのがクリークさんが丁度20歳、中佐に昇進してしばらくしたからです。

海軍本部に突如襲撃をかけた伝説の海賊とも恐れられる”金獅子のシキ”に死ぬ気で食らいついて、なんと彼の片足を斬り飛ばすという大殊勲を成し遂げて見せた事により名前が海軍以外にも知れるようになりました。

最もシキと戦つた後は重症で意識を失っていた為に海賊王の処刑は見逃しています。

その後、その功績を持つてして大佐へと昇進し原作に介入する為に自らの部隊を創設、それを使つて”助けられるようなら助ける”というスタンスで原作介入を始めました。

オハラを始めフレバンスやマリージョア、リュウグウ王国にアラバスタ、ドンキホーテの件やドレスローザ、空島やウォーターセブンなどあちこちに首を突っ込んでいます。

その為に知り合いは割と多い模様、麦わら一味だけでも幼少の頃と言えどルフィ、ナミ、サンジ、ロビン、フランキーとは顔を合わせています。

まあルフィとナミは流石に幼少時なのでおぼろげなようですが。

中でもロビンとクリークの付き合いはかなり長くクリークはロビンをオルビアに託されたとして娘…のようなものとして扱っています。

まあロビンがクリークをどう思つてるかはわかりませんが、ここでは書きませんが。

オハラの惨劇から救い、手ずから鍛え上げたのでその強さは原作より上昇しています、その結果がどういう事態を引き起こすのか楽しみ



ですね。(フラグ)

そして色々介入した結果原作と所々：あちこちに影響が出てきます。

今はまだ大きな狂いはありませんがそのうち：特に後半は大荒れになるのでは無いかと思います。

それもこれも中の人の知識はワノ国より前で止まっていますから仕方ないね！

因みに原作でクリークの部下だったギンとパールはこちらの世界でもクリークの部下になっています。

ギンはトンファア使いだっただけで仕込みトンファアを使わせてみました(REBONE、雲雀恭弥より)裏設定として原作異名の鬼人繋がりでサイレントキリングを得意としている模様(NARUTO、再不斬より)

パールはクリークがジャングルに隠していたカチカチの実を食べ能力者に、身体を鋼鉄のように硬くするという能力だが過去の時点で赤熱化まで使っていた模様、再登場時にどこまで成長しているかが楽しみです。

さてあまり長々と書いてもアレですのでここら辺で止めておきます、読者の皆様には感謝を、これからも頑張っ続けていきたいと思えます。

## 狙撃手と少女

一方その頃、麦わら一味の狙撃手であるウソツプは決闘騒ぎに巻き込まれていた。

事の発端はウソツプがとある商店で見つけたゴーグル、北の海最新製のスナイパーゴーグルでこれに一目惚れしたウソツプは即座に買おうとしたものの財布が直ぐに見当たらず、山のように買い物した荷物の中から探す羽目に。

そこにやって来たのは一人の少女、フリルがふんだんに使われたフリツプリの薄緑のドレスに金色の縦ロールと青い瞳…まるでどこかのお嬢様とでも言わんばかりの少女は

「このゴーグル下さい!!」

と可愛らしい声でウソツプが目をつけていたゴーグルを指さした。

「あーら!可愛いお嬢ちゃん、運が良かったわねこのゴーグルはこの街に一つしか無いわよ?」

あつという間に取引はなされてしまいウソツプは呆気にとられるもすぐに我を取り戻し

「ちよつと待て!そのゴーグルはおれが…」

と反論しようとしたところで足早に少女がウソツプの元へやって来ると

「すつこんでな…おっさん!」

ドスの効いた声でそう言った少女にウソツプは驚き思わず固まってしまいその間に少女はさつきと出口に。

鼻歌を歌いながらスナイパーゴーグルを手にスキップして表通りを行く少女にウソツプは慌てて追いつくと

「ま、待ちたまえ君いつ!!いいかい?ハッキリさせておこう、おれはおっさんじゃ無くてお兄さんだいいかい?」

と少女の前に出てその足を止めさせる。

「ああん?なんだあおっさんのクセに!」

可憐な見た目と裏腹にあまりの口の悪さにウソツプはドン引きす

るもこのままではラチがあかないのでここは自分が大人になるべきだと考えたのだろう、思わず感情のままになりそうな心を落ち着けて「いいか？そのゴーグルはおれが先に買おうとしたんだ、お金を払おうとした時に君が割り込んで来たんだ、わかるか？」

と冷静に冷静に…と心を落ち着けてそう言うも

「ああ!?文句があるってか? ああん!? つべこべ抜かしてると海兵呼ぶぞゴルア!!」

全く取り合う気配は無い。

「はっ!海兵がどうした!!おれは海賊だぜ?海兵の1人や2人、10人や100人なんて目じゃねえさ、何故ならこのおれこそキャプテンウソツプ…」

「はん!適当なウソ並べてんじやねえぞ!テメエみたいなおっさんがケムリのおじちゃんに敵うわけ無いじゃない!!」

「ケムリのおじちゃん?」

「そ、アタシこの街の海軍大佐と知り合いなの、えーと…スモーカーおじちゃんだったっけ?」

その少女の言葉にウソツプはココヤシ村での事を思い出す。

あれは出発直前の事、ベルメール and アーロンの修行を終え疲れ果てたルフイにベルメールが

「多分次にアンタ達はグランドラインに入る前にローグタウンに寄ると思うんだけど…今ローグタウンを仕切っているのは人呼んで”白猫”のスモーカー、海軍本部大佐が常駐しているわ。

スモーカー大佐も能力者よ、それに今の君じゃ敵わないから絶対にローグタウンで騒ぎを起こしたり彼に喧嘩を売るような事はしちやダメよ?」

下手したらグランドラインに入る前にそこでキミ達の旅は終わりになるからね?」

と告げていたのを思い出す。

「白猫…ふ、ふんだ!騙されねえぞ!!お前みたいになちみつ子が本部大佐と知り合いな訳ないだろ!さあ!大人しくそのゴーグルを渡すこつたな!!」

と首を振って考え直し少女の言葉をハツタリだと判断してそう言うウソソップだったが少女はまったく聞いておらず

「あつ、ぱぱあーっ!!」

「何でおれがお前にパパって呼ばれにやならん…げえっ!」

いつの間に来ていたのか2人の後ろには1人の男。

「はいぱぱっ!これだーい好きなぱぱにらプレゼント!お誕生日おめでどう!」

そう言いつつ少女が件のスナイパーゴーグルを差し出したのは、少女とは反対に薄汚れたマントを身に纏い、豊かな髭を持つ男。

少女のその言葉に男は思わず涙ぐみながら

「キャロル…なんて優しい天使のような子なんだろうか、愛してるよキャロルちゅわん!」

と親バカ丸出しな姿にウソソップは「なんなんだこの親子…」と思いつつも男の只者じゃ無い気配にウソソップは警戒する。

そして男は少女…キャロルの言葉に感激していたものの直ぐ様キャロルの

「でもね?でもね?そこのおっさんがプレゼントぶんどろうとしてるの!」

と言う言葉に

「(こ)こら、ぶんどるなんて言葉使っちゃだめだめ、お行儀が悪いでしよっ…」

…アンタかい?おれの可愛い可愛いキャロルを虐めるのは」

口調を注意しつつも先ほどの親バカな様子から一変、目つきを変えウソソップを睨む。

その鋭い目つきにウソソップが一步後退った所で更にキャロルが

「それにねえ、あのおっさんどうやら海賊みたいなの!」

と、自身の父親が興味を持ちそうな情報を教えれば

「ほう、お前海賊なのか…懸賞金はかかっているのか?」

と、男は興味を持った様子。警戒しつつもその言葉に一瞬詰まるウソソップだったが

「そんなもんかかってねえさ、ま?おれの事だから?直ぐに3000

万くらいつくだろうがな！」

と無駄に胸を張って高らかに言うウソツプだったが

「ほう、それは興味深いな…ならここで摘んでおいた方がいいか？」

明らかに只者じゃ無さそうな雰囲気一気に警戒度を上げる。

「ぐっ…アンタひよつとして賞金稼ぎか？まだ懸賞金もかかってない一般人相手に何しようってんだろうな？」

男の言葉にウソツプは勝機を見たり、とそう言うも

「自分で海賊だと言っただろう、どうやら公認海賊でも無さそうだし一般人に被害が出る前に仕留めておくのは悪くないだろう？」

おれにも伝手はあるからな、懸賞金がかかってないとは言え海賊の一人や二人どうとでも出来るのさ」

と、銃を引き抜く男に

「おうおうおう！このおれに手を出したらあの”黄金銃の海兵”が黙ってねえぞ！」

おれは奴の一番弟子だからなあ？お前も知ってるだろ？あの泣く子も黙る赤カモメのエース様だぞ！！」

とウソツプは虎の威を借る事にした模様、一番弟子というのは全くの大嘘だが麦わら一味全員纏めて鍛えさせられたので全くのウソでは無いが。

「ほうほうほう、お前はベルメールの弟子だったのか…にしては銃も持って無いしとてもじゃ無いがそんな風には見えないなあ？」

と明らかに知り合いであるかのような言い方で全く信じてないダイに

「げ…あのーひよつとしてお知り合いだったり？」

と恐る恐る聞けば

「ふんっ！そのおうぐんじゅーが何だか知んないけどばばは昔は凄腕の海兵だったんだからね！」

「よせよせキャロル、おれが赤いカモメを背負っていたのは昔の話さ…」

と、男のその言葉にウソツプは大きく顔色を変えたのだった。

## 子連れのだげい

”赤カモメを背負っていた”

その言葉が意味するのはただ一つ。目の前の男は元海兵、しかも海軍最強の部隊と恐れられる”カモメの水兵団”のメンバーだったのだろう。

思わず転身して逃げそうになるもここで逃げたらナミのカーチャんに申し訳がたたねえ!と思い震える足を押さえつつ

「へ…へえ、あんた元は赤カモメにいたのか。因みになんて名前だ? ひよつとしたら師匠から聞いてるかもしれないな—」

勝手にベルメールを師匠呼ばわりし少しでも情報を集めようと名前を聞けば

「そうか小僧、まだ名乗っていなかったな。

おれはだげい、だげいマスターソンだ。そしてこっちの天使のように可愛い子は娘のキャロルだ」

「だ…だげい・マスターソン!? あんたまさか”子連れのだげい”か!!」  
「いかにも、でどうする? 話が纏まらないならこいつでやり合うか?」

そう言ってマントをばさりと翻した中には三十丁の拳銃。

とんでもないビッグネームが出てきた上に尋常じゃないその数にウソツプの余裕は全て吹っ飛んで

思わず叫んでしまうがまあ無理も無いだろう。

”子連れのだげい”

元は海軍きつての狙撃手と呼ばれていた凄腕のスナイパーであり、現在は銃使い最強の賞金稼ぎとも呼ばれている凄腕である。

数年前を境に突然海軍を辞めて賞金稼ぎになったのは風の噂で知っていたがまさかここで会ってしまうとは…とウソツプは苦い顔をする。

「…最近はお小物狙いに切り替えたって噂だったんじゃないのか?」

「攫千金なんぞ狙うよりチマチマとお小物を狩っていた方が効率はいいいからな」

「はっ、海軍一の狙撃手が聞いて呆れるぜ。赤カモメは市民の味方じゃねえのかよ?」

「無論市民に迷惑をかけるような人間は放ってはおかん、」一般人を守るのは海兵の仕事」とかつての上司の教えがあるからな。

小僧も海賊なのだろう?しかも直ぐに高額の賞金首になると豪語している:ならここで仕留めておいて問題無いな?」

その言葉と共にいつ抜いたのだろうか、拳銃をウソップに向けるダディだったが

「ま、待てよ!まあ落ち着いてこっちの話聞いてくれよ」

とウソップのその言葉に少し考え

「ふむ:まあいい話してみろ」

と頷いたのでウソップはここぞとばかりに先程の出来事を説明、商品は自分が買おうとしていた所に横入りされた事と、どうしてもそのゴーグルが必要な事、渡してくればきちんとお金は払うということも合わせて伝えればダディは少し考え込む様子。

「なっ?頼むからそのゴーグルを譲ってくれ!!それはこのおれが勇敢なる海の戦士:キャプテン:ウソップになる為に必要なんだ!!」

と頭を下げた頼み込めばダディは

「ふむ:ん?ウソップ?小僧:貴様赤髪海賊団のヤソップの縁者か?」

考え込んでいる途中で何かに気づいたように顔を上げてそう聞いた。

何故急に親父の話に?と疑問に思いつつもダディのその質問にウソップは正直にヤソップは自分の父親だと告げればダディは

「くくくくくつ、そうか小僧!貴様はヤソップの息子か!!くくくくつはははははっ!!」

最初は小さく、そして高らかに笑い始めたのだった

「お、おいどうしたダディのおっさん?」

「ば:ば:ば、どうしちゃったの?」

急に笑い始めたのその様子にウソップとキャロルは驚くも

「くくくくくつ、お前が真摯に頼み込むもんだからせつかくの可愛い

娘のプレゼントだが仕方ないと思っていたが…貴様がヤソップの息子なら別だ、これは簡単には渡せんな」

そう言つてスナイパーゴーグルをマントの下に仕舞うダディ  
「なっ…どういう事だよ!!」

「小僧！おれと決闘してもらおうか、もし貴様が勝つたらゴーグルは渡してやろう。だがもし貴様が負けたら…」

言葉を溜めるダディにウソップはごくりと唾を飲み込みつつ

「…負けたら？」

と聞くのが怖い気がするも聞いとかなない訳にはいかないよなと思えば

「…そうだな、おれの弟子になつてもらおうか？」

ダディは少し考え込んだ後にそう告げたのだった。

一方その頃麦わら一味の航海士であるナミは多くの洋服が入った袋を両手にぶらぶらと街中を歩いていて

にわかには辺りが騒がしくなり聞き耳を立てればどうやら”あの”子連れのダディが決闘を行うらしい。

「あの子連れのダディと決闘なんて…どんな馬鹿かしら！顔だけでも見とかなくちゃね!!」

と意気揚々と人の流れを読んで高台まで来てみればそこにはすでに十数人の野次馬が集まつており、その囲いの中にはマントを羽織り深く帽子を被つた髭の男と長い鼻に茶色のオーバーオールを着た年若い青年と緑のドレスの少女。

「…どんな顔かと思えば知った顔じゃない、なんだつまんないの。

ちよつとウソップ！なんでアンタが決闘なんかしてんのよ!!いつの間に賞金首にでもなつてたのー?」

と、ナミはこりや死んだかな?と思いつつそう聞けば

「し、知らねえよ!!このおっさんがいきなり決闘をふっかけて来たんだよ!!」

「はははははっ！小僧!!貴様の父親とおれは少し因縁があつてだな…だからあの男の息子とわかつた以上は対等に相手させて貰うぞ?」

何がそんなに楽しいのか最初に見た寡黙さなど見当たらず、今はた



だ強い眼差しで目の前の勝負を見据えるダデイの姿に”自分の父親は一体この男に何をしたのだろうか”とウソツプは自身の父親を呪いつつ、キャロルはキャロルで”ぱ…ぱが昔のぱぱに戻っちゃった…”と少し引いている様子。

そしてダデイは徐に一丁の短銃をウソツプに投げ渡すと

「ほらこいつを使え、ルールは簡単だ10数えて振り向いて相手を撃つ、それだけだ。」

そうだなそこの嬢ちゃん、小僧の知り合いだろ？すまんが10数えちやくれねえか？」

と丁度野次馬として来ていたナミに頼んだのだった。

## 狙撃の名手

「ちよ…ちよつと待ったー!!異議あり!!」

ナミが頷こうとした所突如ウソップがビシリと手を挙げ異議を申し立てた。

「む?小僧、決闘を受けるのではなかったのから」

ウソップの言葉に不満そうに言うダディだったが

「いや決闘は受けるって言ったけどよお、勝負が不公平すぎるぜ!!ア  
ンタの言う方法だとおれに勝ち目ねえじゃねえか!!」

その言葉に少し考える。

「むう…奴の息子なら射撃が得意だと思ったのだが…違うのか?」

全く考えてもいなかったとばかりに首を傾げるダディだったが

「確かにおれの親父もアリの眉間でも撃てると豪語するがアンの言  
うやり方だと早撃ち勝負だろ!おれがそれで勝てるわけないだろ!!」

そのウソップの言葉にナミは成る程、とばかりに頷く。

会ったばかりのウソップならそのまま流されて早撃ち勝負をさせ  
られていたかもしれない、そして相手がダディなら良くて逃走、悪く  
てそのまま撃ち殺されてたかもしれないと。

ちゃんと冷静になって周りを見れるようになったのは大きな進歩  
でこの点はベルメールさんに感謝しなければと思いつながら下手に口  
出しはせずに見守っていれば

「そうか小僧、貴様は早撃ちは不得手となると…そうだな、小僧お前の  
得意な武器は何だ?」

とのダディの質問にウソップはがま口のショルダーバックからパ  
チンコを取り出して見せれば

「へ?そんなもんでぱとやろうっての!?!」

キャロルは信じられない物を見る目で驚いたように言うも

「ほう…では狙撃で勝負といこうか距離を延ばして行って先に外した  
方が負け…それでどうだ?」

と提案、それならば勝ちの目はあると考えたウソップは

「おう…それならいいぜー!」

と快く快諾するも

「だが忘れるなよ？外したらお前はおれの弟子になってもらうぞ、キャロルちゃんもお前を気に入ってるようだしな。ああ、勿論海賊も辞めてもらうぞ？」

「ちよつとぱぱり！わたしそんな事言ってないわよ！」

とキャロルが騒ぐ中でダデイは念を押すように言う。

「ちよつとウソツプ！海賊を辞めるなんて初耳よそんな話！相手は狙撃で名の知れた元海軍本部少佐…勝てると思ってるの!？」

とその条件は考慮してなかったのだろう、驚いたように言うナミに對して

「悪いなナミ、でもここは譲れねえんだ。しかも相手があの”子連れのだデイ”となりや尚更だ、おれを鍛えてくれたナミのかーちゃんにも申し訳がたたねえつてもんさ」

と何かを決意したように言うウソツプに

「…勝てるの？」

と聞けば

「いつも通り…そう、いつも通りやれば済む話しだろ？さて、先ずは何から狙えばいい？」

そう言っつて愛用のパチンコを構えたのだった。

そしてウソツプはパチンコで、ダデイは拳銃を構え先ずは十メートル程から進めていき2人とも難なく目標に当ててその距離はどんどん延びていく。

「すげえ…流石は子連れのだデイ、百発百中じゃねえか…」

「いや、相手の長鼻のあんちゃんも凄いぜ、あのダデイに遜色無く当てに来てやがる…」

「まさか子連れのダデイに匹敵する狙撃手がいるとは…」

固唾を飲む周囲のギャラリーを他所にウソツプとダデイは一切外す事なく狙撃を成功させその距離は既に100メートルを越え500メートルに迫っていた。

そしてまたウソツプがパチンコで、ダデイが拳銃で同じ目標を撃ち抜いた所で再びドロ―

「ふむ、このままではラチが空かないな…どうだ小僧一気に距離を延ばすか？」

一息ついてそう提案するダディにウソップは

「なんだ、もう疲れたのか？まあその提案には賛成だがな、このままじゃ日が暮れちゃうからな」

そう賛成し何か丁度いいものは無いかと辺りをぐるりと見渡せば

「…そうだな、あの風見鶏でどうだ？」

と提案、王冠を被った鯨の風見鶏を見つつ

「…かなり遠いなーキロつてどこか？」

とポケットから鉛玉を取り出しパチンコを構える。

風向き、目標の高さ、現在地などをゆっくり確認して息を深く吸い込み、そしてそのまま止める目標に狙いをつけギリギリと引き延ばした弦を離せば鉛玉が空を切り裂き…そして狙いは変わらず風見鶏に着弾した。

「っし…さて次はあんたの番だぜ？」

止めていた息を大きく吐き出したウソップはダディにそう言えばダディも拳銃を目標に向けて構え…そして発砲。

しかし弾丸は僅かに目標からズレて空を切った。

「…流石にこの銃じゃこれが限界か」

残念そうに目標を見るダディの姿に周囲の野次馬はある者は目を細めて、ある者は双眼鏡でかなり遠くにある風見鶏を見るもそこにはダディが狙撃をあてた痕跡は無く

「嘘っ!?ぱぱが外したの!?!」

「すげえ!!あの長鼻の小僧ダディに勝っちゃまいやがった!!」

「やるじゃねえかあんちゃん!!いいもん見させてもらったぜ!」

目を見開いて驚くキャロルを他所に観衆は勝負の結末を理解したのだろう、若き挑戦者を口々に褒める。

その様子にウソップも理解したのだろう、この勝負で銃使い最強と呼ばれるあのダディに勝ったのだと。

口々に先程の出来事を話しながら散っていく観衆にウソップは何とか勝つ事ができた…と安堵しつつ

「あんたと腕を競う事が出来て光栄だったぜダデイ、…当然隠し球もあるんだろぅがな」

そう言っつて右手を差し出すウソツプに

「ふっ、別に隠し球と言うほどのものでも無いさ」

と同じく右手を差し出し2人は固く握手を交わしたのだった。

## 赤い狙撃手

「そうだ小僧、貴様は海賊だと言ったが公認海賊にならないのか？」

惜しくも外してしまったがその姿に動揺は見られずダディは使用した拳銃に弾を装填しながらそう聞けば

「あー、そりやうちの船長が反対してんだよなんか」そんなん自由じゃない”つてさ」

「ほう…まるで赤髪みたいなことを言うのだな、なんて名だ？」

「おう、名前はモンキー・D・ルフィ、おれ達麦わら海賊団の船長さ」

「ちよつとウソツプ、なんでアンタが威張ってんのよ」

「モンキー・D・ルフィ…いや、まさかな。そっちの嬢ちゃんも仲間か？」

「ええ、航海士をさせてもらってるわ。」

所で子連れのだディ、貴方が海軍の事情に色々詳しいと見込んでちよつと質問があるんだけど…」

「む？なんだ？」

「赤い海軍マークの入ったコートを着ていて、十数年前に東の海に来た事があり、棒のようなものを武器に使い、そしてその当時にあの赤髪のシャンクスと互角に戦える戦闘力を持つ人間に心当たりは無いかしら？」

ナミがダディに聞いたのはその昔ルフィが遭遇し、今も心に影を落とす存在だった。

ルフィ本人はそこまで気にしていないという風になっているができれば憂いは取り除いておきたいと考えナミは独自に調べていたのだった。

ベルメールにも聞いてみたがベルメールも本隊に所属していたわけでは無いらしいのでちゃんとした情報は持っていなかったが。

「ふむ…海軍のコートを纏っていたのなら少尉以上、海軍将校と呼ばれるものだろうな。」

そして十数年前となると赤髪はまだ四皇と呼ばれていないが…その戦闘力はかなり高かった筈だ、となると少なくとも本部大佐クラス

若しくはそれより上の将官クラスかもしれん。

そして東の海にいたという事だがおれ達の部隊は基本的に定期的に何処の海にでも出現するからな…

そして棒のようなものを武器に…あ！」

「何か思い出したの!？」

それと共にダデイは思い出す、自身もあの時あの場にいたのだから当然だろう。

しかしこれは教えてもいいのか少し迷う、相手は本部中将でしかも対個人の戦闘力だけなら大将にも匹敵すると言う男である。

これでもし若い芽が摘まれたら目も当てられないと考え…

「あ、ああ棒のようなものを武器に使っていると言ったがおれ達の部隊は基本的にどんな武器でも使えるように訓練させられるからな…一概に誰であるとは決められんな」

咄嗟に誤魔化す事にしてナミはその答えに残念そうな顔をする。

「そーいやダデイのおっさん、あんた親父と因縁があるって言ったんだが何かあったのか?」

何か考え込むナミを他所にウソツプはふと思い出したようにダデイに聞けば

「…そうだな、奴の息子であるお前になら話してもいいか。

あれは…あれはそう、この街のように暑く乾いた港街で、おれがまだ本部少佐だった時の事だった…」

そう言ってダデイが語ったのは数年前の話だった。

「おれの所属する海軍独立遊撃隊…お前達には赤カモメの方が通りはいいか、いつものようにグラントラインを巡回してとある港街に停泊していた所赤髪海賊団の船と遭遇したんだ。

海賊相手となれば直ぐ様出動する赤カモメだが自身の上司である中将と赤髪海賊団船長の判断で双方共に戦闘はしないと取り決めそれぞれば不干渉にて作業を進めていた…」

「え?赤カモメって海賊とみれば直ぐに捕まえるイメージだったんだけど…赤髪海賊団って懸賞金かかっているんじゃないの?」

ナミが少し疑問に思っってそう聞けば

「ふつ、海賊を全て片っ端から捕縛してればいくら手があっても足りん。

実際大海賊時代の当初がそうだったからな、片っ端から海賊を捕らえ一罰百戒の体制で後続の出現を抑えようという目論見だったが……」  
「ま、そんなんで海賊が減れば苦労しないだろうな。憧れは止められねえってな」

ダデイの言葉にウソップはうんうんと頷く。

「その為に作られたのが公認海賊だ、だからさつき聞いたんだぞ？公認海賊にはならないのかって」

「ま、おれはどっちでもいいんだけどさ。やっぱメリットとかデメリットとかあんのか？」

「メリットか…そうだな、海賊旗を掲げていても罰金を払う必要は無いし少なくとも海軍から追われる事は無いな。

あと緊急招集が有れば集まってもらうがこれは強制では無い、特に罰は無いし集まってくれたのなら謝礼は払うというぐらいか」

「海軍に追われないで済むのか…なあナミい、今からでもルフイ説得して公認海賊の申請出させようぜ？」

ダデイの言葉に魅力を感じたのかウソップはナミにそう言うもナミは

「馬鹿ね、今更アイツが自分の決定を翻すわけないでしょ？諦めなさい。

それにアンタは海軍きつての狙撃手に勝ったんでしょ？ちよつとは自信持ったらどうなの？」

「いやありゃ辛勝だつて、それにダデイのおっさんまだ隠し球あるって認めたじゃねえかよ」

見事な狙撃を見せておきながら未だに怯えるウソップにダデイはあの男とは全く違うな、と苦笑いしつつ

「さて、話がそれたな。

情報交換をすべくこちらとあちらから数名づつ集まった時にあの男がいたんだ、そうお前の父親だ。

目敏くおれの事を気づいたのだろう、自分の船長とこつちの上司に



確認をとりあれよあれよという間におれとあの男は決闘をする事になった。

：勝負はおれの負けだった、最初にお前に提案した早撃ち勝負さ、奴に手傷は与えたもののおれの方が倒れた。

殺せ、決闘に負けた以上命乞いはしない、というおれに奴はこう言った”おれ達海賊は生かそうが殺そうが自由なんだよ”とき。

その後だよ、おれに娘がいると知った奴は自分の息子の事を話してくれたのさ、自分は父親としてはダメだったと、だが愛してなかったわけじゃない海賊旗が自身を呼んでいたとな。

それからだ、おれは色々と考えさせられた。”赤い狙撃手”なんて煽てられちゃいたがこんな稼業だいつ娘一人残して死んでもおかしくは無い。

そして当時の上司からの勧めもありおれは海軍を辞めて賞金稼ぎになったと言うわけさ」

「そんな…ぱぱが負けちゃったの？海賊に？」

「なるほど海軍きつてのエリートが賞金稼ぎに身を落としたのにはそんな訳があったんだ…でも凄いいじゃないアンタの父親、子連れのダディに決闘で勝ったんでしょ？」

「ああ、親父が強いとは聞いていたが…」

「ふっ、おれもあの時のままでは無いさ」

そう言いつつダディは両腕を振ると袖から何らかの部品が、そしてそれを手早く組み合わせると瞬く間に随分とゴツイ一丁の長銃が出る。

手早く構えると発砲、大きな銃声が轟き勝負に使われた風見鶏のウソップが撃ち抜いた場所を寸分違わずに撃ち抜いて見せて

「次にやればおれが勝つ、娘の手前海賊に負けたままではいられんからな」

そう言つて未だ煙たなびかせる長銃を手にダディはニヤリと笑つて見せるのだった。

## 道化の蠢動

一度当たった弾痕に寸分の狂いなく当てるといふ変態的絶技にウソップやナミがドン引きする中でダディは笑いながら

「さて、もし貴様らが一般市民に危害を加えるようならこの銃弾はお前達に向かう事になるからな？」

そう言つてそのまま去つて行つた。

「おいおっさん、かつこよかつたぜ！ま、ぱぱには敵わないけどね！じゃあばよ!!」

キャロルも件のゴーグルをウソップに手渡すとそう言つてダディの元へ。

そんな姿を

「あんまり会いたくないわね…というか見た目はお嬢さまみたいなのに凄く口悪いわねあの子」

「ああ、最初からあんな感じだったぜ？しかしダディのおっさんの隠し球つてあれか…多分あの銃弾だったら倍はいけそうだぞ？」

「寝てる途中に見えない位置から狙撃されたりして」

「おいおいコエーこと言うなよ！あのおっさん多分そんなくらい出来るぞ!!」

「ま、そこは子連れのダディに”一応”勝利したアンタに期待しておくわ。さてじゃあさつさとやる事済ませてグランドラインに入るわよ!!」

そう言つてナミはさつさと歩き出しウソップは

「おいナミ！ちよつ待てよ！」

と慌てて後を追いかけるのだった。

そして2人はそこで料理コンテストに参加している新たな仲間となった凄腕のコック、サンジの姿を見つけたのだった。

…一方その頃彼等の船長である麦わらのルフィは端的に言つて迷子となつていた。

元々この街は度重なる発展によりかなり入り組んでいる、そう原作以上にである、ゾロが武器屋に辿り着いたのも奇跡…若しくは刀に呼ばれたのかも知れないが。

それはさて置き寂れた酒場でかの海賊王の昔の話を聞いてワクワクするルフィは道中あちこち見ながら、時に怪しいフード姿の男に処刑場への道を教えてもらいつつ着々と処刑上に近づいていた。

そしてもう一人…

「あ？道化のバギーだと？」

「はい、海軍独立遊撃隊のユキムラ少将からの連絡です。

何でも情報を元に進路を確認した所このローグタウンに向かったのではないかとの報告です、日数から換算するに既にこのローグタウンに潜伏している可能性は高いとの事です…どうされますか？」

「確かにミットを超えた海賊…モンキー・D・ルフィだったか？奴に敗れたという報告じゃなかったか？」

しかしガープ中將に加え海軍独立遊撃隊まで出張って来てやがるとは…何考えてやがる？」

「…恐らく復活したのでは無いかと、別の海賊旗…金棒のアルビダの旗も確認されています。

それに遊撃隊はよくこちらにも来ますし偶々被っただけではないのですか？」

「だったらいいんだが…しかし奴は執念深い、となるとそのモンキー何某に仕返しをする可能性は充分に考えられるな」

「そう言えば報告が遅れていましたが件のモンキー・D・ルフィの顔写真が届いています」

そう言つて海兵が一枚の写真を渡せば

「何かあると踏んでいたが…あの麦わらの小僧だったか…」

このモンキー・D・ルフィは既にこの島に上陸している、リミットを超えたとは言えまだそれだけだし懸賞金も懸かってないなら扱いは一般人だ、海賊から守らんわけにやあいかなだろう。

この男は処刑台広場に向かった筈だ直ちに数人送れ、それから第一中隊第二中隊は出撃準備、第三第四部隊は四小隊にわけ東西南北の港

に向かわせる、奴等の船があれば拿捕しておけ。

たしぎはどうした？とつくに戻ってるのか？」

「あつはい、先ほどサガ曹長から報告がありました」

「ならあいつの部隊にも準備させておけ、…おれの予感が正しけりやちよつと騒がしくなるかも知れん」

そんなスモーカーの言葉に

「やめて下さいよ大佐…冗談に聞こえないのですが…」

「いいからさっさと動け！報告があり次第出るぞ!!」

そして何の因果か悪戯か、ローグタウンに一筋の風が舞いルフィの麦わら帽子を吹き飛ばした。

ふわりふわりと飛んでいく、大切な帽子なので慌てて追いかければやがて帽子はパサリと地面に落ちルフィがそれを拾ってかぶり頭を上げると

「おお！処刑台じゃねえか!!」

早速とばかりに処刑台の足元まで来るとゆっくりと登り出せば広場を見張っていた海兵は目敏く見つけ直ぐに報告、報告を聞いたスモーカーは

「なにい？処刑台を登ってるだど!?直ちに部隊を隠密的に包囲させる、バギーが麦わらにつられて出てくりや後は捕縛するだけだ。

…しつかし何考えてやがる麦わらの小僧、…この町のシンボルにもなってる処刑台に何かしてみろそんな時や地獄の果てまで追っかけてやる…」

あの男の死に場所でもかもこのローグタウンの観光名所となっている場所を思い出しながら言った所ではたと気づく。

「…まさか!!そうか奴は自身に何者かの手が及んでいる事を察してわざとわかりやすいあの場所に出てきたのか!?

…となると頭は回るようだな、バギーの捕縛にあたってなんとかコインタクトがとれりやいいんだが」

スモーカーが準備をしつつそこまで考えが及んだ所で

「すいませんスモーカーさん！遅くなりました!」

「おせえぞたしぎいっ!!それより”剣客隊”は動けるんだらうな!」

「はいっ！サガさんに言って出撃準備を整えてもらってます！」

「グズグズしてんなよ、事は一刻を争うんだ隊長のお前がしっかりしろよ？」

さて…全員聞けえっ!!一般人の救出及び海賊であるバギー、アルビダの両名の捕縛が任務となる！

奴らの狙いとおもわれる男は現在処刑台広場にいるらしい、いつでも援護に入れる態勢を作りつつ目標の出現を待ち、目標の出現と同時に一般人を退避させると同時に目標に強襲をかける！以上だ！総員任務開始!!」

スモーカーのその号令に海兵達は続々と動き出し

「目標が無事に現れればいいのですが…しかし風が強くなってきましたね」

「…ああ、こりや少しばかり荒れるかもしれねえな」

たしぎのその言葉にスモーカーは空を見ながらそう返すのだった。

## 伝説の始まり

料理コンテストに参加した自身達の仲間であるサンジが凄腕の女の“コック”炎のカルメン”を決勝戦にて見事に破り賞品である幻の魚”エレファントホンマグロ”を手に入れたのを見届けてナミ、サンジ、ウソツプの3人は港へ向かっていた。

そしてそのタイミングでナミは天性の感覚によるものか異常な気圧の低下を敏感に感じ取り直ぐに仲間を急かして早急にこの島を出るように指示。

一方その頃彼らの船長であるルフィは

「うっはーっっっ!!これが海賊王の見た景色!そして死んだのか!!」

広場中央にある処刑台に昇り辺りをぐるりと見渡していたが勿論ローグタウンでは特別警戒区域となっている場所でそんな事をすれば

「こらーっ!君っ今すぐそこから降りなさいっ!!」

勿論警邏の人間がすっ飛んでくる。

「何で?」

その言葉にどつと湧く周りを苦々しく思いながらも

「何でも何もそこは世界政府の管理下にある特殊死刑台だからだ!!今すぐ降りてこないとしよびくぞ!!」

「えーそんな硬いこと言うなよおっさん…」

ルフィが笑いながらそう言った所で突如広場のあちこちから煙が上がり始めた、広場を襲うのは次々と放たれる刺激臭を持つ煙幕弾、煙は瞬く間に広場を覆いつくし

「うおっ!なんだなんだあっ!?!いきなり煙が…なーんも見えねえぞ?」

突然の出来事にルフィが抱いていた感動はその騒動で吹き飛び煙の中を覗き込もうとすれば

「かかったなあっ!!やれっカバジいっ!!」

「うおっ!なんだ!?!」

突如として煙の中から声、そしてルフィの両手と首に枷が嵌められ

身動きを封じたのだった。

「くくくくくつ、こうなつてしまえばいくらテメエがゴムでも抜け出せねえだろ!!」

「ふふふつ、アタシが見定めた男もこうなつちやお終いかい：アンタならと思つただけどねえ：」

それと共に一組の男女がガスマスクとマントを脱ぎ捨て目の前に姿を表した。

道化のような化粧を顔に施した男に素晴らしいプロポーションを持つ絶世の美女、珍妙な取り合わせにたまたまその場にいた民衆達は状況が掴めずにいた。

「：なんだバギーか、でそつちの女誰だ？」

「よーし!!巫山戯んな！相変わらぬいい度胸だなこのスットンキョーが!!」

「あら？まさかこのアタシの顔を忘れなわけじゃないだろうねえ？」

「何だお前？知らん!!」

「へえ：これで思い出せないかい？」

そう言つて金棒を地面に叩きつける女性だったが

「ギャハハハハ！このクソゴムは人の名前なんて覚えてねえさ！麗しのレディーアルビダよ!!」

「アルビダ!?アルビダがどこにいるつてんだよ!!」

「アタシがそうだつてんだろこの鈍感!!」

そう言つたアルビダは自身が悪魔の実を食べて美しさは対して変わらなかつたがそばがすが消えたからルフィもわからなかつたのだと宣うも当然そんな事は無く悪魔の実：スベスベの実の力で体格も骨格も何もかも変わつてるので初見では見聞色に優れているとかではない限り見抜けないだろう。

そして何ともないように言うルフィだったが広場にいる民衆は違ふ、現・東の海最高金額の突然の出現に瞬く間に騒ぎになり

「民衆共おっ！派手にそこを動くんじゃねえ!!これからこのおれ様の恐怖を見せつけてやる!!」

それと共にあちこちに紛れていたバギーの部下達が拳銃を四方八

方に突きつけ人質とした。

「これからテメエの”公開処刑”を始める!!せんちよ…げふん、かの海賊王と同じ死に場所だ!光栄に思えっ!!」

多少のやり取りをするもバギーはルフィを逃すつもりは全く無く

「さて折角大勢の見物人がいるんだ、最期に何か言い残したい事は?」

その言葉に慥然とした顔つきで沈黙するルフィ、それを見てバギーは

「まーいいさ、言う事があるうがなからうが誰も興味など…」

と返事がなかった事に呆気なさを感じながらカトラスをすらりと抜き放ち大上段に構えれば少年は大きく息を吸い込んで

「おれは…海賊王になる男だあっ!!」

と叫んだのだった。

絶体絶命の状況でのその宣言に

「な…海賊王だと…!」

「ぷっ!なんて大それた事を」

「よりによつてこの街で…」

「!?!?…な、なんて凄いお人だべか!!…決めた!おれあ海賊になるっぺさ!…あの人を助けるんだべ!!」

「なっ!!何言つてんだよてめえ!海賊になるって馬鹿じゃないのかい!?!」

「止めんじやないっぺさデイザア!おれああの人のために生きるんだっぺ!!」

「ちよつとバルトロメオ!メイナード少将に何て言うのさ!あ、おい聞いてんのか!!」

一部例外を除き民衆達は馬鹿にしたように笑い、カトラスを大きく振りかぶったバギーは

「ギャハハハ!!言いたい事は…それだけだなクソゴム!!」

それと同時に剣を振り下ろそうとすれば

「その死刑待った!!」

その声と同時に眼下で死刑台に向かって走ってくる男達の姿に「ゾロ!サンジ!!助けてくれっ!!」



「来たなゾロ！だが一足遅かったようだな!!」

一縷の希望を見つけたかのように目を輝かせるもバギーは問題ないと言わんばかりに相手を見下ろす。

「やっちまいなアンタ達っ!!」

アルビダの指示によりバギー一味の戦闘員達がゾロとサンジの両名に襲いかかり二人はその人数により大幅に歩みを抑えられ

「ギャハハハハ！そこでじっくり見物してやがれっ!! テメエらの船長はここで終了だ!!」

それと同時に”獲物が油断するのは他の獲物を仕留めようとする寸前だ”というかつての指導役の人間に教えられた事を忠実に実行したスモーカーが自身を煙へと変化させ空から猛然とバギーに強襲をかけようとしたところで

「ゾロ！サンジ！ウソップ！ナミ！…わりい、おれ死んだ！」

そう言って処刑台に捕らえられた麦わらの少年は笑みを浮かべた。

そして手枷首枷を付けられたその男に道化の剣が振り下ろされようとしたまさにその時、天から降った一筋の雷。

そしてその雷は道化が麦わらの首を落とそうとした剣に、そのまま処刑台は燃え上がりあまりの衝撃にかつて伝説の男が処刑された死に場所はゆっくりと倒れていく。

「なははは、やっぱ生きてた！もうけっ!!」

バギーは雷撃を受けそのまま口から煙を吐き出しながら白目を剥いて倒れ

「笑った…だと、…全員あの麦わらを捕らえろおっ!! 奴はここで捕らえておかなければならん!!」

そしてスモーカーは煙になっていたからか雷の衝撃で散らされるも直前で見た死刑台で笑う姿をかつて憧れた男に重ねたのか危険だと判断し直ぐに標的と定め

「うわああああ!! 逃げろ！」

「海賊達が暴れだすぞっ!! 巻き込まれるぞおっ!!」

「うおおおおお！やっぱあの人はすげえっぺ!! あoの状況で生き残ったぺさ!! 奇跡…これは奇跡だっぺ!!」

「おい！聞いてんのかバルトロメオっ！！あんた海兵だろうが！アタシらを拾ってくれたメイナード少将に何て言うんだいっ！！」

「うおおおおおっ！！こうしちやいられないっペー！まずは海賊旗と船だべさ！！」

「あつ！おいテメエっ！！」

一部を除き民衆達はこれ以上騒ぎに巻き込まれるのは御免だとばかりに統制を無くして逃げ出そうと動き出した。

「なあ…お前、神を信じるか？」

「馬鹿言つてねえでさっさとこの街出るぞ、もうひと騒動ありそうだ」  
サンジとゾロは信じられないものを見るような目で自身達の船長を見つめるもいつまでもこんな所でグズグズしてられないと船へと走り出し

「来たっ逃げろおっ！！」

ルフィも自分の海賊船に…自身の目標に向かって走り出したのだった。

「奴らはどつちに逃げた！！」

「はっ！西の港であります！！」

「バギーの船を探させてた奴らがいるな、そいつらに先回りさせろ！！」

「了解しました！！」

「…雑魚には構ってらんねえ、”ホワイト・アウトっ”」

その言葉と共にスモーカーは自身の能力…自身を煙にする能力を使い元気に追いかけてようとしていたバギー、アルビダの連合海賊を即座に捕らえた。

「あ、あれがモクモクの実の力…すげえ！！」

「流石大佐、あれがロギアかあの道化のバギー達をいとも簡単に…」

「お喋りは後だっ！！ビローアバイクを出せ！奴らを追撃する！！」

「はっ！…しかし大佐、彼らにまだ懸賞金がかかっていませんが…」

「特殊施設破壊の現行犯だっ！この街の名所だぞ！！後で指名手配でも何でもしてやる…急げっ！！」

「剣客隊も直ちにわたしに続いてください、…海賊狩りを追います！！」  
バギー達を難なく捕らえたスモーカーは自身の能力で駆動する三

輪バイクで、親しく話していた男の正体が”あの”海賊狩りだと知ったたしぎは走って西の港へ

「総員聞いたな、目標は海賊狩りのゾロ、おれの”腕”は？」

「はっー！こちらです曹長！」

隻腕の男：サガは海兵から何やら包みを受けとり今まさに青の力モメが新たなる伝説を獲物と定めた動き出したのだった。

一方騒ぎを起こしたバギー、アルビダ兩名による海賊連合は

「くっそ！何だいこのうっとおしい網は！！妙なもん撃ちやがって…」

「…秘匿呼称”黒色弾”、おれたち対能力者用に開発されたって噂の特殊弾だ、大抵の悪党はこの通りよ。

…他にも能力者相手の武装はあるって話だ、どれもこれまであのにつつき赤力モメのやろう共が最初に使って来やがったのがな…

くっそ、綿密に計画を立てたっていうのに…今日はダメだったが見てやがれあのクソゴム!!今度こそ本気で仕留めてくれるわあっ!!」

黒い細かい鉄製の網に捕らえられたアルビダが文句を言えば何らかの事情に詳しいのだろう、バギーは面白くなさそうに呟いて悔しそうにそう叫んだのだった。

## 騒動顛末 ドンクリーク

グランドライン、マリージョアに存在する海軍本部。

その一室で多くの将官が集まる中、上座ではアフロにサングラスの男：ブランニュー少佐が資料を片手に議会の進行を行っていた。

「えー、次はモンキー・D・ルフィ。旗印は髑髏に麦わら帽子です…まず海賊旗の無断掲揚が5回を超えた事による通常処理にて懸賞金を100万ベリーから始めます。

無断掲揚の罰金はきちんと払っていましたが流石に規則ですので…報告によると…詳細は不明ですがローグタウンにある特別管理の処刑台を倒壊させたそうです。

ですので今回はいつも以上の階級の人間にも集まってもらったのですが…」

「ぶあっはっはっは！流石わしの孫じゃ！やる事が派手じゃな!!」

「言っている場合か!!一応あれを目的に観光に来るものも多いんだぞ！もし処刑台を守れなかった事に対する疑念が海軍に向いたらどうするつもりだ!!」

センゴクは頭を押さえながら笑うガープに文句を言い、そんな姿にブランニューは大丈夫かな、この会議、なんて事を考えていた。

「…なんと、ガープ中将のお孫さんですか。

何とか説得して服役させる事は…出来たらとつくにやっていますよね、何でもありません。

えー続けます、情報によればモーガン支部大佐…失礼、元支部大佐を破り、更に道化のバギーを奴が牛耳っていた島から排除しているとの事なので戦闘力は高いものと推察します」

「少し質問してもいいだろうか?」

「はい、何でしょうモモンガ中将」

「ローグタウンにはスモーカー本部大佐がいた筈だが捕縛はどうした、出来なかったのか?」

その言葉にブランニューは少し詰まるも言わないわけにはいかな

「実は…あの街で”ドラゴン”に遭遇したとの報告をスモーカー大佐本人が送ってきています」

その言葉にガープやセンゴクなどは眉一つ動かさずに、しかし周りの将官は一気にざわつき始める。

「あんだ達、会議の途中なんだから静かにおし」

そんな中をよく通る声で紡がれたその言葉に辺りは徐々に落ち着きを取り戻した。

「まったく…大の男が何人も情け無いねえ、いつかは捕らえないといけない相手さね、シャキツとしたらどうなんだい」

そう言つて周囲を鎮めたのはドラゴンの名前にも眉一つ動かさなかった1人の老女、海軍本部中將にして”大参謀”の異名を持つ超ベテランの海兵であつた。

「し…しかしおつるさん、奴がローグタウンで確認されたのなら何か企んでいる可能性も…」

との問いかけにも

「だからシャキツとしないかい。アンタ達はこれまで座していただけかい？クリークを筆頭に色々とやれる事はやってきた筈だよ？そんなアンタ達が今更革命軍の1人や2人怖がつてどうするんだい…」  
つるは静かに相手を諭して再び席に着く。

「えー…報告を続けます。それにより惜しくもモンキー・D・ルフィを取り逃がしたとの事です。」

因みにスモーカー大佐は艦隊を率いてリヴァースマウンテン付近まで追いかけたものの、嵐に阻まれその間に逃げられたそうです。嵐の中をスイスイと進んでいた事から余程腕のいい航海士か操舵者がいるのではないかとの推察です」

「ふーむ、じゃあわしの孫はグランドラインに入ったという事じゃない！会うのが楽しみじゃわい!!」

「あのガープ中將、言ってる場合では…」

ストロベリー中將が冷や汗を流しつつ言うもガープは横で怒気を漂わせるセンゴクに全く気づいていない様子。

会議の邪魔ばかりするバカ者を部屋から追い出したセンゴクは

「さて、話を戻すか…モンキー・D・ルフィの仲間に関しての情報は出てきているか？」

「はっ、一番ネームバリューがある者であればロロノア・ゾロ…三刀使いの賞金稼ぎです。異名である“海賊狩り”の方が通りが良いかと」  
「ほう…その異名なら耳にしたな。何でも東の海ではかなり名の通った剣士だったか？」

「そうですストロベリー中将、そしてユキムラ少将からの報告ですが…王下七武海”鷹の目”のミホークと決闘を行い生き残りました」

その言葉にはストロベリーだけでなく周囲の者も目を見開く

「その上にローグタウンにて試験運用中であつた”海軍剣客隊”が奴一人に敗れたとの報告もあります」

「なっ！馬鹿なっ！！あの部隊はそれぞれが各支部から選抜した腕利きの剣士達だぞ！！そこら辺の海賊に敗れるわけないだろうっ！！」

その言葉にモモンガがおもわず立ち上がり反論するも

「相手の腕がこちらを超えていたのでしょう…他にも仲間は数名いるものと思われませんが現在の所、詳細は不明です」

ブランニューのその言葉にモモンガは気が抜けたように椅子に座り込む。無理もないだろう、アドバイスを受けたとは言え、自身が推進していた計画がたった一人に破れたのだから。

「…剣客隊はどうしている」

「スモーカー大佐から専任追討の申請が来ていますので、それが受理されれば彼の艦隊に同行してグランドライン入りするのでは無いかと。」

ああ、忘れるとこでしたモンキー・D・ルフィの仲間についてユキムラ少将から報告が他にもあります、オレンジ髪の少女と長鼻の少年、そしてあの赫足の薫陶を受けたと思しき金髪の青年と海賊狩りが仲間だと思われまます。

オレンジ髪の少女と長鼻の少年は漠然としすぎて不明ですが金髪の青年の名はサンジ、という名前らしいです」

「ほう、よく調べたな…しかしあの赫足の元にいたのか…戦闘力は？」  
「まあ、彼はコックとして有名であつた為ニユースクーにも取り上げ

られていましたので：フルボデイ本部大尉から報告が来ています。ちよつとした縁で戦ったものの戦闘力はかなり高いものと思われるとの事でした」

「ふーむ…：1700万の賞金首を撃ち破っており支部大佐も撃破…：少なくとも本部少佐クラスの実力はあるだろう、下手したらそれ以上。

更に処刑台を倒壊させたというのは…：まあ偶然にせよ何にせよ世界政府がまたぞろ煩いだろうからな、そして本部大佐からも逃げ切れる程度の実力はある、なおかつ仲間もタダものじゃないと来た…：どうするブランニュー？」

説明を受けた事柄を纏めながら考えてブランニューにそう問いかけるセンゴクの目は”お前が決める”と言っていた。

「…彼の人は柄は不明ですが、かと言って情報の通りであればマニユアル通りなんてやってられません!!」

故にわたしは極めて異例ですが、このモンキー・D・ルフィに彼が打ち破った道化のバギーの倍となる3400万ベリーを！そして次に脅威と思われるロロノア・ゾロには道化のバギーと同じく1700万のベリーを懸賞金として指名手配しようと考えます！初頭手配としてはかなりの高額となりますが如何でしょうか！賛成の方は拍手をお願いします!!」

ブランニューの決定は大勢の拍手によって決定され

「では次の議題です、道化のバギーの懸賞金見直しについてですが…：」  
そして決定と同時に即座に多くの人間が動き、迅速に手配書が発行されあちこちにばら撒かれたのだった。

## 指名手配 ドンクリークさん

「ははあはははっ!!そうか、そう来たか!!」

ベアトリーチェ号甲板に設えられた大きな椅子に座って新聞を手に笑い声を上げるクリークに

「…どうしたのクリークおじさん?何かあった?」

と聞く少女…ヒソヒソの実際の能力を持つ彼女と彼女の親代わりであるボクデン、そしてクリークの間では根強い話し合いが行われた。

最終的にこのままでは世界政府に襲われる可能性もある、という言葉に納得しアピスはクリーク達の船に搭乗、その能力を鍛え、人脈を作り、最低でも相手が強者だろうが逃げ延びられる戦闘力をつける事を目標としている。

そしてクリークが笑っていたのは新聞…先程海鳥が持ってきた世界経済新聞に挟まれた三枚の手配書を見たからであった。

軍艦島での騒動以来クリーク達は途中でモーガンを護送していた艦隊にクロ、エリック、ネルソンを預けて彼等も麦わらたちに続きグランドラインへと入っていた。

勿論生きるか死ぬかのリヴァースマウンテン越えなどする意味も無いしする必要も無い、有事の際には海軍艦としての役割も果たすべくこの船…ベアトリーチェ号には本部海軍艦艇と同等以上の装備を持っており、その為に船底に敷かれた海棲石によってベアトリーチェ号は海王類に察知される事は無くカームベルトを航行できるのだ。

まあ海王類の一匹や二匹程度本部中将なら難なく撃退できるが流石に場所も悪いし、新たに仲間となった少女にトラウマを与えるわけにもいかないのだから慎重に行動しようやくグランドラインに入ったのだった。

そしてやっと一息ついていた時に飛んできたのがニュース・クー…この海のあちこちで新聞配達を行う海鳥達であり、情報を得る為に500ベリー硬貨を渡して新聞を受け取って、そして目に入ったのが  
モンキー・D・ルフィ 3400万ベリー、ロロノア・ゾロ 1  
700万ベリー…その二人の手配書だったのだ。



金額もタイミングも変わったか、何やらかしたんだろうなーなど考えながらクリークは直ちに情報集めに動く、幸いこちらは仮にも本部中将なので割りかし顔は広いのだ。

求めていた情報はすぐ集まった、どうやらローグタウンでおこしたゴタゴタにより原作以上に上層部に危険視されたようだ、他の人間の身元はまだ不明なのか？と思って調べてみるも特に情報は出て来なかった。ナミ、ウソップ、サンジの身柄は割れていないのだろう。

：ウソップとゾロには面識は無いが他の面々と最後に会ったのは10年以上前か、：まあ三人ともこちらの事はもう覚えていないだろうがな。

そして麦わら一味に対すべく本人の強い希望によりスモーカー大佐が専任追討の任につく事になったらしい。

この制度は数年ほど前から海軍に取り入れられた制度であり”危険度があると判断され、尚且つ監視が必要だとされる違法海賊”に対して専任の将校を追撃にあたらせる制度である。

各支部がバラバラに一つの海賊を狙うのでは無く専任の将校となった者にそれらの情報を集め、その指示の元に各艦隊が有機的に連携して動く制度である。

専任追討の幅は広く、一艦で海賊を追っているものから相手が大海賊：例えば四皇などになると基地一つが専任となってる事もある、エースに対するイスカの部隊やビッグマムに対するG-F支部などだ、かくいう自身も覆面髑髏ティーチの専任を買って出ているので奴の情報は休暇中とは言えこちらに入ってくるがな。

そう言えばそれで思い出したが白ひげの専任となっているガープ中将から面白い話を聞いた、何でもかの白ひげ海賊団で四番隊隊長であるサッチが殺されたというものらしい。

そしてその犯人はマーシャル・D・ティーチ、サッチの仲間だった筈の男である。

そして四番隊副隊長であり”狼犬(ろうけん)”の異名を轟かせていたジャブラという男が敵討ちという事で単身追撃にあたっているとの事だった。

…そろそろ潜入も不必要になっていい機会だから抜け出したのだろう、覆面髑髏の自称ティーチの正体はマーシャル・D・ティーチでは無いか？という推察の元送り込まれたのだろうが目標がないので有ればバレるリスクを冒してまで留まっている必要は無いだろからな。

それはさて置き麦わらについてだ。彼等がグランドラインに入ったのなら、原作のルート通りならウイスキーピークへと向ったのだろう。ビビ王女がバロックワークスに潜入しているのはこちらの手の者からの情報で掴んでいるし、特に変わらなければビビ王女も麦わら一味と接触しているだろう。

…まあそれが元で麦わら達は一国を転覆させるような大事件に巻き込まれるわけだが。

先ずは情報集めだな、確かリヴァースマウンテンの後にウイスキーピーク、そしてその後がリトルガーデン、ドラムを挟んでアラバスタだったか？

「ギン！この海賊の情報を集めてくれ、それからアラバスタに関してクロコダイルの情報についてもだ！」

手早く考えギンに手配書を渡して指示を出し、急に大声を出した事に目を丸くして驚くアピスに

「よし、アピス！じゃあ昨日の続きからだ、少なくとも一月以内にはその能力を使い物になるように鍛えるぞ!!」

「えー…あれ頭痛くなるからいやなんだけどお…」

眉をハの字にして顔を曇らせるアピスだったが戦えるように、あるいは逃げれるようになるのに必須なので

「泣き言は後で聞いてやる！因みに頑張ったら海軍秘伝のカレー饅を食べさせてやろう」

その言葉にアピスは表情を一転

「わかった！その代わり前みたいに一個だけってのは無しだからね！あの時はわたしが疲れて食欲無かったのにおじさんが殆ど食べちゃったんだから!!」

そう言っつて頬を膨らませるアピスに対して了承しつつクリークは

修行を始めたアピスを見守るのだった。

## 歓迎の裏側に

酒造と音楽の町” ウイスキーピーク”

その町にて麦わらの一味は大量の酒に美味しい食事、美しい女達…と  
いった風に町の住民達に大歓待を受けていた。

まあこんな大海賊時代なんて御時世にそんなものが本当にあるわけもなくその正体は住民全てが賞金稼ぎである”賞金稼ぎの町”である。

大量の酒で酔い潰した麦わらの一味に対して対応を話し合っていると突如として声をかけたのは三本の刀を腰にした一人の剣士…

「つまりこういう事だろう…ここは”賞金稼ぎの巣”、意気揚々とグランドラインにやってきた海賊を出鼻からかもろうってわけだ」

「っ…ロロノア・ゾロ、1700万の賞金首…」

それを見て自身を町長だと言っていたイガラツポイ…Mr. 8はゾロを睨みつけ

「…ざっと100人つてとこか、相手になるぜ”バロックワークス”」  
「なっ!! 貴様どこで我が社の名を!!」

動揺するMr. 9に対してゾロは

「昔おれも似たような事をやってた時にお前らの会社からスカウトされた事がある、当然ケツたけどな。」

社員達は社内でも互いの素性を知らせずコードネームで呼び合う…  
勿論ボスの居場所も素性も社員にすら謎、ただ忠実に指令を遂行する  
犯罪集団”バロックワークス”…悪りいな秘密だったか?」

とかつての賞金稼ぎ時代の事を話すゾロにMr. 8は

「…こりや驚いた、そこまで我々の秘密を知っているなら消すしかあるまい」

額に冷や汗を垂らしつつも排除を決意、そしてミスウエンスデーは  
「へえ…知ってるなら使えるかしら?」

ボソリと呟いたのだった。

「殺せっ!!」

その言葉に武器を構えた賞金稼ぎ達は一斉にゾロに対して殺到し

ようとするが既にその姿はなく探し回る賞金稼ぎを他所にゾロは囲いの中央に飛び込み軽口を叩く。

勿論賞金稼ぎ達も直ぐに対応すべく銃撃を加えれば円状に囲んで銃を撃ち、中央の相手がいなければどうなるかは自明の理、多くの賞金稼ぎ達が味方からの銃撃で倒れ、その混乱の最中にゾロはMr. 8に軽く脅しを入れておく。

最もMr. 8もさるもの、サックスに偽装したショットガンを使つて仕留めようとするも既にその姿は無く

「これは我々として心してかかる必要があるな…」

Mr. 9の言葉にMr. 8は

「…どこへ消えたロロノア・ゾロ、たった一人で我々全員と本気で相手どれるつもり…?」

と周囲を警戒しつつも解せない、と周囲を見渡す。

「…とてもじゃ無いけどわたし達をバロックワークスと認識した上での発言とは思えないわね」

ミスウエンズデーも周囲を警戒しつつ四人の後ろには続々とこの町に住む賞金稼ぎが集まって来る。

一方賞金稼ぎ100人から追われるゾロはローグタウンで購入した刀達のいい実践テストだと考えつつ

「さて、新入り達を試すいい機会だな…存分に暴れさせてもらおうか」と刀に手をかけたところで頭上からの銃撃に慌てて建物内に退避、そして賞金稼ぎ達は待つてましたと言わんばかりに建物の窓や扉から銃撃を、しかも1発や2発どころでは無く連続して聞こえる銃声、テーブルを盾にやり過ごしながら

「まずは…雪走!」

銃声が無くなったタイミングを見計らい盾にしていたテーブルを真つ二つに切り裂くと一步を踏み込み入り口付近に陣取っていた賞金稼ぎ4、5人を一気に斬る。

「軽い…いい刀だ…」

ローグタウンでこの刀を譲ってくれた武器屋の主人に心の中で感謝していると先ほどの銃声で気づかれたのか賞金稼ぎ達が仲間を呼

ぶ声にゾロは慌ててその場から離れる。

建物の上へと向かえば先ずは砲弾のお出迎え、バズーカーの弾を仰け反って避けると追撃に飛んでくるのは向かいからミスマンデーが投げつけた酒樽。

一抱えはあるそれが当たればダメージは大きかったであろうが三代鬼徹を抜き放ち二刀にて四分割、それぞれが襲ってきた四人の賞金稼ぎに打ち当たり

「あーあ、折角の酒なのに勿体ねえ…」

と軽口を叩くもの後ろからの攻撃に咄嗟に刀を振るえば

「なっ！石斧が斬れた!?…なんて斬れ味だ三代鬼徹…主人の斬りてえ時だけ斬れるのが名刀つてもんだがなるほどコイツは問題児だな…」

「そういやあの時も床にはばき近くまで刺さっていたなと思いつつ冷や汗を流す。

「そうして多くの賞金稼ぎを相手にしつつも全くその戦闘力は鬩りを見せる事なく次々に対処、見かねたミスマンデー…フロンティアエージェントである彼女が迎撃に出るも

「ぎゃあああああ!!」

ゾロを遥かに上回る巨体を持つ彼女はナックルダスターを装着、自身の信頼する肉体から放たれるパンチをゾロを床に押さえつけた上で直撃させるも

「どうした力自慢?力比べが望みじゃねえのか?」

「あ…ああ…!!」

俗に言うアイアンクロウ、自身の額を掴まれギリギリと締め上げられる事により最終的に泡を吹きながら地面に倒れ伏した。

「う、うわあああ!ミスマンデーが力で負けた!」

「う、嘘だろ!ありえねえ!!」

騒ぐ賞金稼ぎを見ながら

「さて…続けようか」バロックワークス?喧嘩は洒落じゃないんだぜ?」

額から少し血を流しつつ言うその言葉に

「っ…そうかわかったぞ、手配書は海軍のミスだな!」

Mr. 8は確信を抱いてそう言えば

「…そうかー！700万にしては手強すぎると思ったが海軍が間違えたのなら納得だ！」

Mr. 9はようやくやく合点がいったと、目の前の男に警戒度をあげる。

「…だったらそのつもりで戦わなきゃね、…まあ使えそうなら生かしておこうかしら？」

後半だけボソリと呟きミスウエンズデーは銃を両手に構えるのだった。

## 海賊狩りの受難

海軍がその手の間違いを犯すとは考えづらいなだけどな…

とミスウエンズデーことビビは考えるも確かに目の前の剣士、ロロノア・ゾロは手強い。100人以上はいた賞金稼ぎも殆どが地に伏せ、残った少数も散り散りに逃げていったのだろう。

残るは自身とその相方であるMr. 9、そして上司”という事になつている”Mr. 8の三人だけ、まあ相手は所詮海賊だしいくらでもやりようはある筈、と考えつつMr. 9に指示を出そうとすれば「このおれのアクロバットについてこれるか!!」

と、一番手とばかりに得意とするアクロバティックで突っ込んでいったのを見て頭を抱える。

「いやまあ刀相手に金属バットなら大丈夫よね？へまでもしなければ…」

そう思つて気を取り直して自身も戦いに参加しようとするれば今度は相手の挑発にでも乗せられたのか、Mr. 9がそのまま足場が無い場所で後方宙返りで自爆するのを見て

「はああああああ…アクロバットやるなら周囲は見てつてあれだけ言つたのに…」

大きいため息をつく、しかも相手には「もっとマシな奴はいねえのか?」と言われる始末。

「…じゃあミスターロロノア！わたしが相手してあげるわ!!」

それと共に両手に持った拳銃を乱射

「うおっ!!」

相手は咄嗟に飛び退き回避、そのまま銃相手に不利と考えたのか建物物の影に

「Mr. 8！Mr. 9を回収して挟み込むわよ!!」

「わがりま…マーマーマー♪了解したっ!!」

Mr. 8ことイガラムが行つたとしても油断は出来ない、確かにイガラムはそこそこ戦えるし武器もショットガン、剣士相手にはやり辛いだろう。



しかし相手は百人近くの賞金稼ぎ相手に易々と勝利して見せた男だ、油断は出来ない。

「やっぱり保険はあった方がいいわよね…」

そう考えて指を口に加えて指笛を鳴らせば

「クエーッ!!」

勇ましい声と共に離れた場所で右手：右翼を差し出す自身のもう一人の相棒に

「お手じゃ無いわよ！さっさと来なさい、鴨鍋にするわよ!!」

と怒鳴る。：カルー、超カルガモである彼は豹をも凌ぐ脚力を持ち更には”色々な”修行を経てかなりの力を発揮するのだが少し抜けているのか偶に指示と違う事をやったりするのだ。

カルーに指示を出し走っていくカルーを見ながら、自身は相手が入ったと思しき建物内に慎重に踏み込む。

ビビはそつと建物内を見渡すが相手の姿は見えず、そして中に踏み込んだ瞬間扉の影から襲いくる斬撃に咄嗟に銃を盾にする事で受け止めた。

「へえ…タダの間抜けかと思ってたが…やるじゃねえか」

「褒めてもらって光栄だね、貴方こそ航海中は寝てる姿しか見せて無かったけど擬態だったのかしら？とてもじゃ無いけど1700万の首とは思えないわね？」

軽いやり取りをするも今は戦闘中、ビビは銃諸共斬り捨てようとする相手の踏み込みに合わせて、そのまま銃を手放す事によってバランスを崩させると相手の腹に潜り込みそのまま膝をかちあげると

「うおっ!?マジか!!」

自身の勢いを利用された為ゾロの身体は宙に放り出され、更に追撃としてビビは手放した銃を拾い上げ撃とうとするも

「故障!?こんな時に!!」

引き金を引くも銃は沈黙、当然であろう本来銃：しかも連射できるものであれば精密な物である、それで相手の剣撃を受けでもすれば故障の一つや二つや十や二十は当たり前だ。

「やっぱり量産品はダメね…」

そう言つて銃を投げ捨てて今度はそこらに倒れていた賞金稼ぎが手にしていたカトラスと刀を拾い上げたビビはそれらを両手に持ち相手に突きつける。

ゾロはそれを見て面白そうに

「へえ…おれと剣でやり合おうつてか？」

と言つて構えるも

「貴方…かなり腕はたつみたいね、その身のこなしからしてかなり名のある剣士なのは間違いないでしょ？」

「それがわかっているのにおれの土俵でやり合おうつてか？鯨の時と違つていい度胸してるじゃねえか」

「まさか！貴方と剣でやり合うほどバカじゃ無いわ！これは…こうするのよ!!」

それと共にゾロに投げつけられる刀、ゾロは難なく弾くもその隙にビビは反転、扉へと駆け抜け勿論それをゾロは追いかけるも扉を抜けた瞬間ゾクリとして咄嗟に前方へ転がり込めば

「イガラツパ!!」

丁度扉の真上に陣取つていたMr. 8のショットガンによる銃撃が放たれたのだった。

「あつぶね!!計算づくかあの女!!」

冷や汗をかくゾロに更に追撃と言わんばかりに

「やつてくれたなロロノア・ゾロ！かつ飛ばせ！仕込みバット!!」

頭から血を流すMr. 9が自身の金属バットに仕込まれた鎖を起動、咄嗟に腕を盾にしたゾロの腕に鎖が巻きつき

「よくやったMr. 9！そのまま流すなよ!!」

「わかつたMr. 8！今のうちにやつちまえ!!」

Mr. 9は逃がさないとしても言わんばかりに反対側を自身の腕に巻き付ける。

更にはMr. 8が

「砲撃用ー意!!」

と一言、自身の豊かな髪に仕込まれた仕込み武装を襟のリボンタイを引つ張る事によつて起動、巻き髪の間から砲身が現れゾロに狙いを

つける。

「なっ!! うっそだろおい!？」

「さてミスターロロノア、仲間の命が惜しかったら降伏して欲しいんだけど…」

そしてビビはカルーに連れてこさせたルフィにカトラスを突きつけて降伏を勧告するも

「あの野郎…せめて起きてから人質になりやがれ…、因みに降伏は断らせてもらう!!」

それに対してゾロは苦虫を噛み潰したかのような顔で自身の船長に文句を言うも降伏をキツパリと断り

「ならば死ねえっ!! イガラツパツパ!!」

8つの砲身から一斉に小型砲弾が身動きの取れないゾロに向かって発射されたのだった。

## 更なる受難

「おもちゃかよあいつは!!」

ゾロは自身に放たれた8つの砲弾の前にツツコミを入れつつも腕に巻き付いた鎖を勢いよく引けば

「うおおおっ!?!」

急な力が加わった事で大きく体勢を崩すMr. 9、更にゾロが勢いよく鎖を引けばそれと共に自ら腕に巻いた為に直ぐに外せないMr. 9はまるで一本釣りでもされたかのように空中に踊り出しそのまま自身とMr. 8の射線へと移動させるとそのまま盾として8つの砲弾がMr. 9を直撃。

「きやあつ!!」

更についでと言わんばかりに鎖を反対側に引き気絶したMr. 9をミスウエンズデーにぶん投げた。

ミスウエンズデーも咄嗟にカトラスの腹で受け取るもそのまま巻き込まれ吹き飛ばされ

「おのれーイガラツパツパ!!」

更にもう一度砲撃をかけてきたMr. 8の攻撃を避けると

「ルファイ、腹借りるぜ!!」

と食べ過ぎによるものかまるで風船のように膨らんだ自身の船長に飛び乗るとその反動で飛び上がり、そして一閃Mr. 8を一太刀で斬り伏せると

「うっし、終わり!!」

と刀を仕舞うのだった。

そのまま物言わぬMr. 8とミスマンデーを放り投げるとやっと静かになったな、と思いつつ酒瓶を傾けようとした所で

「ん?あの女どこ消えやがった?」

Mr. 9の衝突に巻き込まれた筈のミスウエンズデーの姿が消えていたのだった。

「まさかMr. 8の砲撃で仕留められないなんて：所詮海賊風情だと

思ってたけど貴方本当に1700万？少なくとも見積もっても倍以上はあると思うんだけど…」

そして後ろから声がかかるのは同時、咄嗟に雪走を引き抜くもそこには恐らく倒れた賞金稼ぎのものを奪ったのだろう、バズーカを腰に構え、更に拳銃を左手で持つミスウエンズデーの姿。

「ちっ、仕留め損なったか…そんな物騒なもんは仕舞ってくれるとありがたいんだがな」

「ま、貴方がこっちのお願いを聞いてくれるんなら下ろしてあげる、Mr. ロロノア？」

流石にこの状態では咄嗟に避けれると思うほどゾロも自信過剰では無いので

「…お願いってのは何だ？」

と聞けばミスウエンズデーは一言

「わたしを貴方達の船に乗せなさい」

とバズーカと銃をゾロに突きつけ言うのだった。

「…そういうのはお願いじゃなくて脅迫って言うんじゃないか？だいたいそれをおれに言われてもな、交渉ならうちの船長としてくれ、そこで寝てるだろうが」

とゾロは相手を半眼で見つつ路上の方を指差す。

「ええ…見ててわかったけどあの船長さん絶対話を通じないタイプでしょ？その場のノリで生きてるといっつか何とか…絶対に自分が気に入らない事は反対するタイプなんじゃない？」

よく見てやがるな…と思いつつも顔には出さない。

「だったら諦めるこつたな、何が狙いかは知らねえがおれが女を斬れないとでも？」

そうして凶暴そうな笑みを浮かべるゾロだったが突如として町中で響いた爆発音にそれは中断される。

「引っ掛かったわね、…となると船での指示を見た所あの航海士さんかしら？彼女の援護があれば何とか首を縦に振ってくれるかしら？」

「…やめとけやめとけ、あの女に関わったらケツの毛まで引っこ抜かれるぞ？」

と親切心から忠告するゾロだったが

「あら下品、それにお金にがめついなら報酬くらいなら払うわよ？」

ミスウエンズデーはクスリと笑うとそう言ったのだった、そして金の匂いがしたのなら当然彼女も黙ってはいない。

「へえ？ だったら10億ベリでどうかしら？」

扉の影から聞いていたのだろう、そう言いながらナミは拳銃をミスウエンズデーに突きつけつつそう声をかける。

「交渉に武器は無粋なんじゃないかしら？」

「交渉じゃなくて脅しならアリだと思おうわよ？ そっちがそのバズーカーと拳銃を下ろしてくれたらこっちも下ろしてあげる、勿論安全は保証してあげるわよ？ 折角のチャンスが目の前にあるんだからね」

「へえ…少なくとも」 交渉が終わるまでは「わたしの身の安全は守ってくれるのかしら？」

「ええ勿論、少なくとも大金が絡むかもしれないんだから見逃す手は無いわ」

ナミのその言葉にミスウエンズデーは心の中でニヤリとしつつ

「…だったら今さつき爆発音が聞こえたと思うのだけれど多分あれわたしを追ってきてる人達なのよね、ちよつと一人で相手にするのは無理だから何とかして欲しいんだけど？」

その言葉に一瞬ナミは固まり…そしてため息をつく。

「はあー、わかってて強調したのね。いいわやってあげる、でも勿論交渉の手札として使わせて貰うわよ？」

「構わないわ、でももしわたしが追手に捕まったら交渉は無しよ？」

「わかったわよ、じゃあ…行きなさいゾロ！」

その言葉に蚊帳の外となっていたゾロは目を見開き

「はあっ!? 行くか馬鹿っ！ なんておれがテメエの金稼ぎに付き合わなきゃならねえんだ!!」

と、当然反対するもナミはローグタウンでの事を持ち出し半ば強制的に言う事を聞かせると

「てめえ！ ろくな死に方しねえぞ!!」

「ええそうね、わたしは地獄に落ちるの」

と捨て台詞を吐くゾロにナミは笑いながら返すのだった。

「あ、ミスターロロノア船長さんも起こして連れて行った方がいいわよ？ 相手はあの爆発音を聴く限り能力者、しかも二人ね。」

恐らくボムボムの実の能力を持つMr. 5とそのペアのキロキロの实の能力者、ミスバレンタインよ、気をつけてね？」

と背中に声をかけるミスウエンズデーに

「そういう事は最初に言いやがれ!!」

とゾロは叫んでルフィの元に駆け寄るのだった。

「ふーん？ 追手の情報は掴んでるのね」

「まあ危ない橋を渡ったしそろそろだと思ってたわ、それに情報は大事だしね。」

イガラム！ 貴方も止血をしたのなら一旦隠れていなさい！ その傷では戦いは難しい筈よ！」

と投げ飛ばされたMr. 8：自身の護衛であるイガラムに声をかけると

「さて改めて自己紹介させて貰うわ、わたしはアラバスタ王国王位継承権第一位、アラバスタ王国王女のネフェルタリ・ビビよ」

「あら王女様だったなんて驚きね、あたしはナミ航海士をさせてもらってるわ、さてじゃあ交渉を始めましょうか？」

そう言つてナミとビビは握手を交わしたのだった。

## 王女の策謀

「さて…それじゃ交渉を始めましょうか？」

口火を切ったのは麦わらの一味の航海士であるナミ、彼女は航海士としての腕もかなり高く、そして知恵もまわる為一味のご意見番としての側面を持つ。

「いいわ、でどこまで聞いてたのかしら？」

「勿論最初からよ？…ここは賞金稼ぎの巣で貴方達バロックなんちやらがあたし達を酔い潰して賞金を手に入れようとしてたところからかしら？」

何でもないようにそう言うナミにビビは

「あら、と言う事は潰れたフリ？…まあ確かに怪しすぎるわよねえ…今までの大部分は何の疑いも無く歓待されてくれただけだなあ？」

「そこら辺の海賊と一緒にして欲しくないわね、酒造と音楽の町で歓迎がこの町の生業だなんて怪しすぎるわよ。

…とは言え気付いてたのはあたしと、ついでにゾロくらいで他の男どもは何の疑問も持ってなかったみたいだけど…」

そして断続的に上がる爆発音に

「あら始まったみたいね、とりあえずこちらの望みは貴方達の船に乗せて欲しいって事、そしてアラバスタまで向かって欲しいのよ」

「ふーん？…まあやってあげてもいいけど10億でどうかしら？」

「流石に10億はがめついんじゃないの？…そうね、三千と四百万つてどこでどうかしら？」

「それは安すぎるわ、それにその端数は何よ、仮にも一国の王女なんですよ？…わかった半分の五億でどう？」

「五億ねえ…アラバスタと言う国をご存知？五千と百万」

「その端数が妙に怖いわね…因みにアラバスタについては初耳ね二億五千」

「グラントラインでも有数の文明大国と称され平和な国”だった”わ、七千万」

「だったってまた意味深ね…二億、これならどうかしら？」



「一億、流石にこれ以上は無理ね今国では革命の気運が高まつてるわ、そしてその裏にいたのが”バロックワークス”」

「一億かあ…流石に十億は高望みしすぎたと思つてたけど一億かあ…まあいいわ一億でも十分に大金だしね、でバロックワークスつてのは何？」

「そうね、そこら辺から説明しておこうかしら…あら終わったみたいね」

交渉を続けている間断続的に響いていた爆発音がいつの間にか鳴り止んでおり

「くっそ、めんどくせえ奴らだったぜ…」

「だからゾロ！親切に飯食わしてくれた奴らが敵つてどう言う事だよ！」

「いやだからあいづらおれ達の首を狙つてたんだつて！」

迎撃に出た二人が言い争いをしながら戻ってくる所だった。

「ルフィー！アంతアの言う親切な人とやらは全員賞金稼ぎよ、あたし達が酔い潰れてるところを捕まえる算段だったらしいわよ！」

疑問を呈するルフィーにナミがそう声をかければ

「なっはっはっはっは！なんだそういう事か！てつきり好物が無かつたから怒つて斬つちまつたのかと思つたぞ!!」

「テメエと一緒にすんな!!」

そんな二人にビビは

「へえ…Mr. 5とミスバレンタインの二人を相手にして目立ったダメージは無し…これはいい拾い物だったわね」

と呟いたのだった。

そしてルフィー、ナミ、ゾロとビビの四人で話し合いが続けられる。

「で、話の続きだけどバロックワークスというのは秘密犯罪結社、その仕事は諜報、暗殺、盗み、賞金稼ぎと多岐に渡るわ」

「へえ、賞金稼ぎやつてるだけじゃねえのか…」

「賞金稼ぎはあくまで結社の資金集めの為の一部門に過ぎないわ、社訓は”謎”、社員達は全て素性は隠されており全員がコードネームで呼び合うわ。」

ボスであるMr. 0を筆頭にMr. 5までそれぞれのパートナーを含めオフィサーエージェント、そしてMr. 6からMr. 9までそのパートナーを含むフロントティアエージェント、わたしやイガラム・Mr. 8の事だけどそれはこっちに含まれるわ」

「ああ、あのちくわのおっさんか」

「ちくわ：あのおっさんテメエのいうちくわから大砲ぶつ放してきやがったぞ?」

「はいはい、横道にそれるから黙って聞いてて、で何であなたは追われてたのかしら?」

ゾロの言葉に目を輝かせるルフィをナミは嗜めて話の続きを促す。

「わたしが狙われたのはその謎を犯したからよ、ボスであるMr. 0を含めた幹部達の情報なんかを探ったからそれに対して狙われたんでしようね」

「でもおかしな話ね、そんな正体もわからないようなボスの話をどうして聞くのよ?革命機運が高まってるって言ったのと関係が?」

「…聞きたい?」

「う：乗り掛かった船だし別にいいわよ」

「バロックワークスの最終目的は国の乗っ取り：理想国家の建国”その土地として選ばれたのがわたしの国であるアラバスタ王国よ。」

そして今手柄を立てて数字が上に行けば上に行くほど後の建国時に高い地位が約束されているわ、その為に社員は少しでも地位を上げるべく命令には忠実ってわけよ」

「何とも壮大な話ね：ってちよつと待って、その革命が成功したら報酬はどうなるの!?あたしの一億ベリーは?」

「うーん：そうならたら払うのも難しくなるわね…」

と思わず立ち上がるナミだったがそこでルフィが

「なあなあ、お前何か隠してんだろ?」

と何かに察したのかルフィがビビに対して疑問を呈すれば

「それは…まあわたしも一国の王女だし隠し事の一つや二つや十や百あるけど…何が知りたいのかしら?ボスの正体?具体的な方法?革命の止め方?」

「そのボスって誰なんだ？おまえ潜入して正体掴んだんだろう？」  
「ちよつとルフィ！相手は一国の乗っ取りを企んでる奴なのよ！絶対ヤバイ奴に決まってるでしょ！」  
「そうね、それは聞かない方がいいわよ？貴方達も狙われる事になるかもしれないわ。ボスの正体が王下七武海の一角”サー・クロコダイ”なんて事はね…あ」  
そして爆弾を落としてビビはわざとらしく口を抑えるのだった。

## 砂漠の姫とその臣下

「…言ってるんじゃないかよ」

呆れたような、そんなゾロの呟きが静寂に響く。

ビビはいかにもという感じで口元を抑え、ナミはヤバすぎる名前に目を見開いてフリーズ、ルフィは楽しそうな表情。

そしてふと全員がなんらかの気配を感じてそちらを見ればそこには人の手の入った装飾を持つハゲワシとラッコ…

「ちよつと何なのよあの鳥とラッコ!!あたし達が秘密を知った事を報告に行ったんじゃないの!?!」

あまりの事実にビビの襟首を掴んでがつくんがつくん揺らすナミだったが

「いやー、ごめんなさいつい口が…あ、因みにさっきのはアンラッキーズのMr. 13とミスフライデー、伝令役兼お仕置き役ね」

とビビは全く応えていない様子

「ついで済む問題かー!!何であたし達まで道連れにされなきや何ないのでよー!!」

ああ…何でグラウンドラインに入って早々七武海に狙われなきやいけないのよ」

ひとしきりビビを揺らした後にナミはこの先を悲観して落ち込むも

「はっはっはー！七ブカイだってよ!!」

「ああ、早速会えるとは運がいいな」

「黙れそこ!!あー、短い間ですがお世話になりました!」

能天気な仲間たちに怒鳴ってその場を立ち去ろうとするも

「おい何処行くんだナミー?」

「まだ顔はバレてないもん!あたしは逃げさせてもらおうわ!!」

先程飛んで行ったアンラッキーズの片割れ、Mr. 13が何やらスケッチブックにシャツシヤツと鉛筆を走らせナミに見せたそこにはとても上手に描かれたルフィ、ゾロ、ナミの似顔絵。

「あはははは、わあうまい…これで逃げ場も無くなったってわけね

!!

「おもしろいなーあいつ」

「だいたい何処に逃げる気だったんだよ…」

「まあきちんとわたしを送り届けてくれれば報酬は払うわよ、まあその過程で”色々”あるかもしれないけど約束は守るわ?」

「待った!まだ契約を受けるとは言ってないわ!!だいたい一億の報酬って言っても空手形じゃない!!」

「あら、どの道バロックワークスの抹殺リストには入ってると思うのだけれど…」

突如として契約はまだ成立していない、と話を断ろうとするナミだったが

「ん?何の話だ?」

「ああ、こいつをうちまで送ってくんだったよ」

「何だそんな事か、いいぞ?」

ルフィの…船長の言葉にがっかりと落ち込むナミそんなナミに心の中で謝罪しつつもビビは

「さて…イガラム、傷はどうかしら?」

そう言って立ち上がり自身の護衛役であるイガラムを呼んだのだった。

「は、動ける程度には回復しております。

しかし姫様、如何なされますか?やはりわたくしがおとりとしてアラバスタに向かいますでしょうか?」

とイガラムは尋ねるも

「恐らくバロックワークスの情報網からして追手はすぐにかかるでしょうね…船の用意は?」

「はっ、いつでも出せます」

「Mr. 5とミスブレレンタインは?」

「仰せの通り縛り上げて船の対能力者用の海水樽に浸しています…どうなされるおつもりで?」

「…イガラムごめんなさい、貴方には死んでもらうわ」

「かしこまりました、我が命がビビさまの…アラバスタ王国の役に立

てるなら本望です。」

「…イガラム、ミスバレンタインをわたしに変装させなさい。そして船を速やかにこの方達の海賊船に偽装、そのまま直通航路でアラバスタへ、例え上手く行ったとしてもその道中は厳しいものになると思うわ」

「お、おいちくわのおっさん！死ぬってどう言うことだよ!!」

そんなやり取りにルフィは驚いたように聞くも

「言葉の通りだ、バロックワークスからの追手はすぐにもかかるだろう、それまでわたしが時間を稼ぐのだ」

とイガラムは何やら作業をしつつルフィに返す。

「だからって何もちくわの人が死ぬ事ないじゃない！この人あなたの小さい頃からの護衛役なんでしょ！あなたはそれでいいの!?!」

ナミはそれを聞いてビビに詰め寄るも

「…死んでもらうとは言ったけど別に絶対に死ぬと決まったわけじゃないわ。」

イガラムにはおとりとなってもらいあなた達の船とは逆方向に逃げてもらって上手く敵の目を欺いて欲しいの、やれるかしら?」

「そんなの詭弁じゃない!どうせ敵が狙ってきたらおとりと知っても知らなくても船ごと沈められるわ!その方が早いしね!」

「…姫様が亡くなればアラバスタは終わりだ、姫様を守るのなら護衛役としては本望例えわたしが命を落としたとてアラバスタの礎となり、姫様を守るのなら悔いは無い!!」

「…ちくわのおっさん」

「でも!」

なおも言い募ろうとしたナミだったがビビの

「…また祖国で無事に会える事を願ってるわ」

「ええ、お互い無事に祖国で会いましょう」

二人のその言葉に強い信頼関係を悟ったのかぐつと口を閉じたのだった。

「ああ姫様、アラバスタへのエターナルポースをこちらに」

「そうだったわね」

とビビからイガラムに渡されるのは何らかの方位磁針：疑問を持つナミにイガラムはその特性等を説明する。

「なるほどね、島自体の磁気を覚えさせて何処からでも目的の島を指し示す」永久指針（エターナルポース）”か：ログポースもそうだけどグランドラインには変わったものが多いわね」

「ええ、グランドラインですもの。」

さて航海士さん、出発するにあたってお金になるかもしれないし賞金稼ぎ達の武器を積み込んでいくのはどうかしら？食料なんかも迷惑料してもらっていくのもいいと思うんだけど…」

「それはいいけど…流石に全部は乗せれないわよ？こっちの船だってそこまで大きいわけじゃないんだからね？」

「肉！肉たくさん乗せて行こうぜ!!」

「あー、お肉はあんまり無いかも、タダでさえカツカツだったのにあなたがコックを三人倒れさせる程食べたじゃない？」

その言葉にショックを受けるルフイだったが食っちゃまったものは仕方ないと気を取り直して

「なあなお、そういやそのボスって強いのか？」

と正体を知ってるビビに聞けば

「…彼の事は小さい頃から調べていたわ、最強とも名高いロギア系の能力者でスナスナの能力使い。」

秘密犯罪結社バロックワークスの社長にしてアラバスタでは英雄と呼ばれるサー・クロコダイル、その異名は能力の事もあり砂漠の王と呼ばれてるわ。

彼が王下七武海に任じられたのは24年前、元懸賞金は8000万ベリーだけど実際はそれを大きく超えていると言うのがわたしの見解ね。

出身はグランドライン、誕生日は9月5日で乙女座の44歳、身長は253cm、血液型はS型、好きな食べ物はワニ肉とトマト、反面嫌いな食べ物はケチャップ、普段はカジノの町であるレインディナーズに籠っており…」

「ちよっ！早いし長い！もうちよっと簡潔に言ってくれよ！」

ルフィの質問にまくし立てるように答えるビビだったが、流石に覚えきれないと言う事もありルフィは早口で言うビビを落ち着かせるのだった。



## 妖艶なる花

Mr. 8ことイガラムはビビからエターナルポースを受け取るとMr. 5、ミスバレンタイン、それからビビが潜入している間に作り出したシンパを乗せアラバスタへ。

「へえー、能力者を顔だけ出して海水を詰めた樽に…確かにアリと言えばアリね、樽に入れるのが大変そうだけど」

無事に出航したイガラム達を見送ってナミは自分達の準備をしつつ出発前に見た方法を思い出す。

「確かに相手は力が入らなくて動けなくなるから有用なんだけど、相手が気絶なり何なりして無防備な時にしか使えないんだけどね」

そう言いつつ肩を竦めるビビにナミはそれもそうか、と考え直す。

ここで能力者が海に嫌われる、という定義について話しておこう。悪魔の実を食べるデメリットに”海に嫌われる”というものがある、これは別に教訓めいた話してなどではなく海の悪魔の化身とされている悪魔の実を口にした者は海に嫌われ、一生カナヅチになるというものだ。

能力者は海に入ると体から力が抜け、能動的に能力を使うことができなくなり沈んでしまう。とは言え全身ではなく体の一部分だけが浸かっている場合…半身浴以下であれば症状は軽く能力も行使できるのだが。

この場合の海とは、川や風呂なども含めた水が溜まっている場所全てを指す為、今回ビビが編み出した方法である”能力者を海水を入れた樽に詰め、呼吸出来るよう顔だけ出して閉じ込める”というのは確かに有用だろう。何せ首から下は全身海水に浸かっており能力で脱出しようにも自身の意志では使えず、身体能力を用いて脱出しようにも全身の力が抜けて動けないのだから。

状況を掴めてないウソップとサンジを叩き起こし有用そうな物をどんだんと船に詰め込みビビの

「舵を川上へ、少し上がれば支流があるわ。それで少しでも早く航路

に乗れる筈よ」

との言葉にナミは頷き指示を出し、ウソップやサンジは未だ文句を言いつつもナミの後で説明してあげるから!と言う言葉に一先ずは納得しつつも忙しく働く。

「ビビ、追手が来るとしたらどれくらい?あのイガラムって人はどれくらい時間を稼げるかしら?」

「…そうね、バロックワークスの社員は約二千人、そしてそのうち二百人はオフィサーエージェント:Mr. 5から上の幹部達の部下でビリオンズと呼ばれているわ。」

そして残りの1800人程がミリオンズと呼ばれるフロンティアエージェント:Mr. 5から下のナンバー持ちの部下というふうに大別されるわ。

そしてそのミリオンズは半数近くが資金集めの為に賞金稼ぎとしてウイスキーピークのように網を張っているの、そしてこの近辺にもその巢はいくつかあるらしいわ。

…それを考えると追っ手は100や200は超えるでしょうね、下手すれば千人押し寄せてきても不思議じゃ無いわ」

その言葉を聞いてナミは何でこんな目に…と悲観するも乗り掛かった船だし一億ベリーの為だと思いつく。

「でも今のところ問題無さそうね…」

「ええ、追手から上手く逃げられて良かったわね」

「本当ね、賞金稼ぎは襲ってくるし、王女様が転がり込んでくるし、拳の果てには七武海に狙われるなんて波乱万丈だったけど…」

「気を抜いて船を岩場にぶつけないように気をつけてね?」

「あはははは、今さらあたしの腕を疑うっていうの?…って誰!」

何の疑問を抱かずに返事を返していたナミだったがその声の持ち主に全く心当たりが無いことに思い至りバツと振り返ればそこには船の欄干に腰掛ける妙齡の美しい女性。

褐色の肌に艶やかな黒髪は肩で切り揃えられ、そして黒の上下に黒いハット:…そしてその豊かな胸の間には金色のモノクルペンダントが唯一の装飾品として存在を主張していた。

「いい船ね、きつきそこでMr. 8に会ったわよ?」

突然の乱入者にゾロは刀に手をかけそしてビビはその言葉で

「まさか…まさか貴女イガラムを!!なんで貴女がここにいるのよ、ミスオールサンデー!!」

おとりを買って出たイガラムを排除したのだろうと悟ったビビは拳銃を構えた。

「さてどうかしら?でもおとりなんて…ばかね、そんなの船ごと吹き飛ばして仕舞えばいいだけよ」

そう言つて握り拳をパツと開いて見せるミスオールサンデー。

「ちよつとビビ!今度はMr. 何番のパートナーなの!」

自身が幼い頃から共にいた護衛が殺されたからか叫ぶビビだったがナミのその声に

「この女は…Mr. 0、クロコダイルのパートナーよ!!ボスの正体を知っているのはこいつだけ!そしてわたし達はこいつを尾行する事でボスの正体がクロコダイルだという事を確信したわ!」

「まあ正確には尾行させてあげただけだね?」

「何だ、いいやつじゃねえか」

「知つてたわよそれくらい!!そしてボスに告げ口したのもどうせアンタなんでしょ!!」

「さあどうかしら?」

「何だ、やっぱ悪いやつじゃねえか」

「…一体何が狙いなノ!アンタの目的は一体何なのよ!!」

「さあ?まあ、しいて言えば…バロックワークスを敵に回して国を救おうとしている王女サマがあまりにも健気だったからじゃないかしら?」

「…っ!馬鹿にして!!」

そう言つて再び拳銃を構え直すビビに刀を抜き放つゾロ、ナミも仕込み棍を構えルフィも拳を構える、そしてウソップはパチンコをサンジは拳銃をミスオールサンデーに向け半包围するも

「…あまり物騒なものを向けないでもらえるかしら?」

それと共に不可思議な能力でウソップとサンジは欄干からひとり

でに投げ出され、ほかの面々の武器は何らかの力にはたき落とされた。

「なっ!!」

「悪魔の実の能力者!？」

「ふふふっ、そう焦らないでよ別に私は何の指令も受けてないわよ、この辺りに来たのはただの散歩よ、貴方達と争う理由は無いわよ」

それと共に今度は不可思議な力でルフィの麦わら帽子がポンとミスオールサンデーに向かって投げられる。

「なっ!てめっ!!帽子返せこんやろ!!喧嘩売ってんのか!勝手におれ達の船に乗ってそれに帽子まで!おれはお前を敵だと見切ったぞ!出て行けコラア!!」

「:貴方が麦わらの船長、モンキー:”D”・ルフィね。」

不運ね、バロックワークスに命を狙われる女王様を拾った貴方達も、少数の海賊に守られるお姫様も:いくら船長さんがおじさまのお気に入りとは言え:なによりも不運なのは:この船の進路:」

「:おじさま?いや、それよりもこの船の進路が何だつてのよ!!」

「その進路の先は”リトルガーデン”、このままであれば貴女達はアラバスタにたどり着けず、そしてクロコダイルの姿さえ見る事なく命を落とすでしょう」

そのミスオールサンデーの断定するかなのような口調にビビは息を飲むのだった。

## 花の提案と忠告

ミスオールサンデーの言葉にゴクリと唾を飲み込むビビだったが「するかこんにやるー！帽子返せー!! あほーこのやるー!」

「ガキか…」

自身の大切な帽子が取られて頭に血が登ってるのか文句が幼児退行しているルフィにゾロのツツコミが入り

「遠吠えは結構、虚勢を張る事なんて誰にでも出来るわ。困難を知って突っ込んでいく何てスマートじゃないわよね?」

その言葉と共に麦わら帽子がルフィの頭に、そしてビビには

「エターナルポース?」

一つのエターナルポースが投げ渡された。

「それで困難を乗り越えられるわ、そのエターナルポースが指し示すのはアラバスタの一つ手前の”何も無い島”、うちの社員達も知らない航路だから追っ手もこない」

「な、なんでそんなものをわたしに!!」

「え、あいついい奴なの?」

その様子にナミはそう言うも

「ふん、どうせ罠だろ…」

とゾロは警戒を解かず未だいつでも抜刀できる体勢を維持している。

「さて、どうかしら?」

ミスオールサンデーの言葉にビビは葛藤する。

相手はボスのパートナーで、こちらを助けるような事をしつつもこちらを陥れてくる何を考えているのかわからない女…そして”Mr. 8”に会ったという事は恐らく自身の護衛役であったイガラムも手にかけてのだろう。

しかしあの女の言う事が本当だとしたら? この船に乗せてもらっている以上安全な航路をとるべきでは無いのか?!

そう考え込んでいるとビビの手からエターナルポースが奪われ

「ふんっ！」

ルフィの手によって握り潰された。

「アホかお前っ!!」

「ぶふっ！」

直ぐにナミの蹴りがルフィに減り込むもルフィは

「この船の進路をお前が決めんよ!!」

「…そう、本当にただの善意だったんだけど残念」

絶句するビビとまだ文句を言うナミにルフィは勝手に船に乗ったり帽子取ったりそれにちくわのおっさん殺したっぽいからミスオールサンデー嫌いだという事であつたらしい。

「…私は威勢のいい人は嫌いじゃないわ、そうね生きてたらまた会いましょう」

「ヤダ」

簡潔にそう返すルフィにミスオールサンデーは微笑みつつも

「そうね、ならば一つ忠告を” 蠟燭” と” 鋼鉄” に気をつけなさい、ねえミスウエズデー? 貴女なら言ってる意味がわかるわよね?」

その言葉に怪訝な顔をするビビだったが思い当たった事があるのか

「…まさか!!」

と驚愕を露わにする。

「さて…じゃあ精々足掻いて見せる事ね、行くわよバンチ」

そんな声と共にミスオールサンデーは一人がけのソファアを誂えられた巨大な亀に乗り込み去っていったのだった。

そしてなんだかんだと騒ぐ麦わら一味を他所にミスオールサンデー…ニコ・ロビンは

「さて、おじさまの暗号によるともうそろそろだと思っただけれど…」  
麦わらの一味の船からは遠く離れ何かを探すように周囲を見渡し  
ていたがその目がある一点で止まる。

「あら、あれかしら…船影がひいふうみい…外れね、しかも海軍艦隊  
じゃない…」

触らぬ神に祟り無しとでも言わんばかりにさっさと離れるも海軍

艦隊側もその姿を捉えていた。

「…ありやなんだ？」

「…確かハマキガメでは無かったかと、水陸どちらにも適応している西の海の種だったと思いますか」

サガの報告を受けて双眼鏡を覗いたスモーカーの目線の先にいたのは巨大な亀とそれに乗る一人の女性。

「なんで西の海の生き物がこんなグランドラインの前半に？」

そのまますいすいと泳いで離れる姿にスモーカーは疑問を抱くも双眼鏡を下ろす。

「まあ今は珍しくも無いでしょう、グランドラインに入った海賊達の影響で固有種が他所に出ている事は多いですからね」

「しかしあの女…どっかで見た気がするんだが…まあいい、麦わらの情報はどうか？」

「あつはい、どうやら他の船などからのすれ違っただの見かけた等の情報を統合するにウイスキーピークに向かったと思われるが」

「…ウイスキーピーク、ああ臆病者達の巣か。狩られていると思うか？」

「まさか、そう簡単にやられているのならこちらも苦労しません。それより良かったのですか？本当にE1支部支部長を断って…」

「ちゃんと申請もしたしルールは守ってたんだ、別に文句ねえだろうが」  
「…とは言え後でメイナード少将に詫びを入れておいた方がいいかと、例のE8支部の件で本部が動きましたのでそれでタダでさえ人が足りないのに今回の件ですから」

「ちつ…後で埋め合わせはするさ。所でサガ、てめえ”815”って何のことか知らねえか？」

「はちいち…いえ、寡聞にして知りませんが何かの暗号で？隊長の方がその手の事には詳しいのでは？」

「はっ、あの刀バカに聞いても知らないだよ。…昨年末から海軍上層部で囁かれてる数字だ、何かしらの符丁か暗号だと思うんだが見当がつかねえ」

「確かに気になりますね、何かの作戦名でしょうか？」

「わからん、が一つだけ分かってるのはどうもその中心にあの男がいるって事だよ」

「あの男とは？」

誰の事を言いたいのかさっぱりわからないスモーカーの言葉にサガが聞き返せば

「本部中将、鈍熊のクリークだ」

ああ、そういや苦手としてたんだな…とサガはスモーカーの言葉にその事を思い出したのだった。



## 煙の勘繰 ドンクリークさん

海軍本部中将” 鈍熊のクリーク”

大量の武器を隠し持ち一対多数において圧倒的殲滅力を誇る男である。

海軍独立遊撃隊の設立者にして四海制覇計画の立役者、何故そんな彼を苦手にしているのか聞いてみれば

「何か隠してやがる…それもかなりでかい事だ、それにあの七武海とも繋がりがある上に公認海賊も制度設立に奴の影が見えやがるし黄金帝とも交流があるというじゃねえか。

いきなり休暇を取って行き先も告げず姿を消してやがるし何かやるつもりじゃねえかと思うんだが…」

「とは言え公認海賊ができたからこそ我々は違法海賊に手を割く事ができるようになったのでは？」

それに休暇の行き先は直属の上司が知ってるでしょうから問題無いのでは？そういう制度ですし」

「…それは…そうだが、まあ兎に角奴が何かデカい事を隠してるってのはおれの勘だ、別に確証があるわけじゃねえよ」

「はあ…まあ兎に角今は麦わらに専念すべきでしょう、我ら剣客隊の借りも返さなければいけませんからね」

「ああ、ロロノアか…たしぎはだいたいぶ持ち直したようだな」

「ええ、今も甲板で剣をふるっていますよ、おれも次こそは…」

丁寧な口調が崩れる自身の部下にスモーカーは口角を上げて薄く笑うのだった。

一方その頃

「ぶえつくしよん！ぶえつくしよん！ええいこんこんちきがあ!!」

「大丈夫です？ボス、誰か噂でもしてるんですかねえ」

クリーク一行を乗せたベアトリーチェ号はカームベルトをショートカットしてグランドラインへと突入、そして麦わらの一味がいると思われるウイスキーピークを目指していた。

「おい旦那ー！前方に船だ！黒煙が上がってやがる、ありややべえぞ！！」

マストに登っていたジョークの報告にそちらを注視すれば何やら船の上で爆発そして一瞬見える男の姿。

「あのアフロ頭…なんでMr. 5がこんなところに？」

と疑問を抱くクリーク、まだウイスキーピークで一味と戦う前か？となるここで介入していいものか考えるも見た以上放っておくわけにもいかなのでギンに告げ月歩の剣の複合技である”黄道里（おうどうり）”を用いて単身件の船へ、そしてクリークが見たものは「なっ！イガラムが何故ここに!？」

かつてアラバスタを訪れた時に知り合ったその姿に攻撃を加えているのは

「はっ！よくも何日もあんな樽に閉じ込めやがって!!ミスバレンティンが樽を壊してくれなかったと思うとゾツとするぜ、この借りはしっかり返させてもらうぜ！テメエの命でなあっ!!」

「キヤハハハハッ、やつちやいなよMr. 5!!そしてあの王女様とアタシ達を舐めたあの海賊達もぶちのめしちやおうよ!!」

何やらキレているMr. 5とトレードマークはどうしたのか髪を水色に染めた…恐らくミスバレンティンが船で暴れまわっていた。

「くっ…かくなる上はこの船ごと爆破させてめて二人を道連れにするまで!!…申し訳ありませんビビ様、約束は果たせそうにありません」

おいおいおい！腹マイトとか正気か!?しかもあの量だこの船くらいなら木っ端微塵だぞ!?!とりあえず放っておくわけにはいかないので膝をつき肩で息をするイガラムの前に降り立ち導火線に火をつけようとしたその手を掴む。

「!!なっ…何故貴方がここに!？」

「しっ、話は後だ何があった」

一瞬文句を言おうとするとかつて見た顔だと思ひ出すイガラム。

あの赤い海軍コートは羽織っておらず服装は私服で武装も長剣のみ…恐らく海軍として来ているのでは無いのだろうと悟ったイガラムはアラバスタの状況やそれを裏から煽る組織の存在、そしてビビと

二人で潜入していたがバレて追われる羽目になり、自身は敵の幹部を捕縛しておとりを買って出たという事を話した。

それに対してクリークはどうか、ロビンはイガラムの船を爆破しなかったのか…と悟る、何故Mr. 5とミスバレンタインが捕まっていたのかが謎だが原作では空の彼方へ吹っ飛ばされてそのあとリトルガーデンで出て来てたんだがな?と思うも

「なんだてめえ!怪我したくなけりや下がってろ!!」

「そーだよおっさん!ま、見られた以上は消えてもらおうけどね!!」

Mr. 5とミスバレンタインの声にそちらを振り返りため息をつく。

「…はあ今更お前らの相手か…ギンを連れて来ておけばよかった能力者二人相手ならいい鍛錬になっただろうに」

明らかに馬鹿にしたような表情にタダでさえ不機嫌だったMr. 5は一気に頭に血が上る。

「そうかい!じゃあ死になっ!!鼻空想砲(ノーズファンシーキャノン)!!」

「鼻糞なんて飛ばしてんじゃねえよばっちいだろ!飛拳砲っ!!」

狙いは変わらず衝撃波となった拳はMr. 5のボムボムの実の力によつて爆発物となった鼻糞に衝突、爆発をおこし、それならば、とミスバレンタインが爆風によつてふわりと浮かび上がる。

「爆発する鼻糞に爆風に乗る女…ね」

「よくおれの能力に気付いたな!おれは全身起爆人間!!おれの身体は全てが爆弾さ!髪も、汗も、息でさえもな!!」

「キャハハ!そしてアタシは自分の体重を一キロから1万キロまで変えられるのよ!風に乗る今のアタシの体重は一キロ!そしてアンタの真上に来たタイミングで…経験の無い重さをくらいなさい!1万キロプレス!!」

一度はあの麦わらを地面にめりこませたボディプレスが棒立ちで動こうとしないクリークを襲うのだった。

## 鈍熊の力 ドンクリークさん

「一万キロねえ…せめてその10倍は持ってこいっ！ほらったかいたかーい!!」

空から降ってきて落下速度も含めると10t以上はあるであろうミスバレンタインの腰を鷲掴みにそっと受け止めるとそのままもう一度上空に投げ飛ばす。

「えっ?!きやあああああっ!!」

まさか受け止められるなどと思わなかったのだろう、一瞬驚いたあと悲鳴を残してそのまま上空に。

「というか船の上でやるな、避けたらそのまま沈んでたんじゃ無いか?」

何でもなさそうに言う乱入者にMr. 5は

「ミスバレンタイン!てめえ、まさか能力者か!!鼻空想二連砲っ(ノーズファンシーダブルキャノン)!!」

「だから鼻糞飛ばすなって言っただろ!!連装飛拳砲!!」

自身のパートナーが簡単にあしらわれた事により先程よりも多く爆弾と化した鼻糞を飛ばすもそれも再び中空で撃破され

「ならば…これでどうだっ!!足爆っ(キッキーボム)!!」

直接爆発させれば、と考え右足でハイキックを繰り出せばそれはがしりと受け止められ、そして爆発するも

「馬鹿がっ!触れたら爆発する…ん…頑丈だなおっさん!!」

そこには爆発する蹴りを受け止めても全くダメージが見られない姿に自身満々に言うMr. 5の声は尻すぼみに消えていき

「…まあ能力頼りの弊害か格闘は不得手のようだな、もう少し身体を動かすようにした方がいい」

そう言っただ足をそのまま上空にぶん投げる。

「ぐうっ!!」

「Mr. 5!!二人でやるわよ!少しあのおっさんは厄介よ!」

吹き飛ばされるMr. 5に体重を軽くしたのだろう、ふわふわと降

りてくるミスバレンタインが合流、Mr. 5もミスバレンタインの提案に頷き真つ直ぐにクリークに向かって落下。

「イガラム！海に飛び込んでろっ!!」

何かデカイ攻撃が来ると察したクリークはイガラムにそう声をかけて迎え打とうとすれば

「死ねええっ!!全・身・起・爆!!」

それと共にクリークの首に抱きつき全身を爆発させるMr. 5と「そのまま離さないでよねMr. 5!!」1万キロピアス!!脳天カチ割れなさい!!」

Mr. 5の大爆発によりほぼ半壊した船はミスバレンタインの爪先一点に集中した大質量がクリークの脳天を直撃した事によりほぼ全壊。

「…船の上でやってんじゃねえよ」

渾身の攻撃で相討ちには持ち込んだと思っているのか満足そうな顔で沈んでいくMr. 5とミスバレンタインを見ながら、目立ったダメージは見られないクリークは二人をとりあえず引き上げる。

「イガラム隊長さんよ、無事かい？」

「ああ、貴殿の忠告で何とか…しかし驚いた、あのオフィサーエージェントをこうもたやすく片付けるとは…」

「こいつら二人とも能力に頼りすぎだ、しかも船の上なんて場所が悪すぎるだろうからな」

そう言いつつローブで気絶した二人をグルグル巻きに縛り上げる。

「しかし何とお礼を言つて良いか…貴殿がいなければわたしはここで命を落としビビ様との約束も守れなかったでしょう」

「いやこちらもたまたまだ、でこれからどうするんだい隊長さん、一応この二人の身柄はこちらで確保させてもらうが…」

「…一応おとりとなつているので何処かで船を探し当初の予定通りアラバスタへと向かいます」

あー、こりや意思はかわらなさそうだなと考えつつ流石にベアトリーチエ号じゃおとりにすらならんからなあ…と考え込む。

「よし…最寄りの支部で小型艦艇を偽装しアラバスタまで行けるよう

に手配しよう、ビビちゃんの身に何かあればアラバスタがかなりやばい事になるだろうしな」

「それは…助かりますが良いのですか？内政干渉にあたるのでは？」

こちらの言葉に驚いたように言うイガラムだったが別に民間人を送り届けるだけの話しだ、内政干渉でも何でもないと告げればなるほど…と頷くのだった。

直ぐに他の乗員なども救出してMr. 5とミスバレンタインを牢に放り込みベアトリーチエ号にて最寄りの海軍支部へ、小型の艦艇を用意させ海軍艦と悟られぬように偽装を行わせてイガラムに分かれを告げる。

まあ乗組員は本部の人間だし例え追手が来ようが問題無いだろう。

そして残ったMr. 5とミスバレンタインの始末だが…どうしたもんか。

とりあえず会ってみないと話も進まないのので牢に入れた二人の様子を見に行けば二人は動けないながらも

「なっ!!テメエおれの全身起爆をくらって置いて…」

「うそっ?!確実に仕留めた筈よ!一点集中した一万キロを脳天に直撃させた筈よ!!」

幽霊でも見たかのように騒ぎ出す二人に

「おいおい、あんなのでおれが倒せるとでも?なあ国境の”ジエム”に運び屋”ミキータ”」

「テメエ!まさかおれの事を」

「なんで知ってるの…」

こちらが名前を出せば驚愕する二人、甘くみないで欲しい、こちららバロックワークス設立前からきっちり調べ込んだのであるんだ。

原作知識もあるとは言えこちらのネットワークをフルに使って情報集めている、名前だけでなく出身地や能力など過去のデータもだ。

「…さて自己紹介が遅れてすまないな、おれはクリーク。海軍本部中將”鈍熊”のクリークだ。以降よろしく」

そう言って自身の正体を告げれば二人あんど口を開けたまま

フリーズするのだった、…さてこれでどうであるかな？

## 鈍熊と花 ドンクリークさん

「何で中将なんて奴がこんなグラウンドラインの端に……」

「……!!鈍熊って赤カモメのボスじゃん!何てインチキ!!」

こちらの事を知ったからか二人は猛然と捲し立てるも

「はいはい、おれは休暇中でたまたま諍いを見つけたから介入しただけだ。しかしお前らの身柄をどうしたもんか……インペルダウンにも行くか?」

その言葉に顔を青くする二人、恐ろしさは色々と噂として聞いているのだろう。

だが何かを思い付いたかのようにMr. 5はニヤリと笑い

「……はっ!別に懸賞金もかかってない一般市民を攻撃してこうして牢に閉じ込めた上にインペルダウン送りだど?」

Mr. 5の言葉にミスバレンタインも合点がいったのか

「キャハハその通りよ、アタシ達は一般市民よ?そりやあちよつと諍いはあったけど何の罪もない人間を捕まえるなんて……そうねえ、世界経済新聞あたりに投書しようかしらあ?」

とこちらを煽るように見る二人に

「バロツクワークス」

と一言言えば調子良く喋っていた二人はぎしりと固まる。

「……一般市民ねえ、Mr. 5、ミスバレンタイン、オフィサーエーエージェント、アラバスタ、理想国家の建国……さてこのくらいか、まだ必要か?」

まさかそこまでとは思っていなかったのだろう、このままでは本当にインペルダウン送りになるかもしれないと震える二人であったが流石のクリークもここまで怯えられては話が進まないの

「ま、とりあえずは大人しくしておく事だな。逃げたりしたら本当にインペルダウン送りになるかもしれないぞ?」

と、軽く脅しもこめてそう言えば二人は何度もコクコクと首を縦に振って了承するのだった。



「しかし…という事はリトルガーデンは誰が？Mr. 5ペアがこちらにいるのならひよつとしてMr. 3ペアのみか？」

自室に戻り二人について考え込んでいると

「リトルガーデンにはMr. 3のペアとMr. 6のペアが召集されたわ」

誰もいない筈の部屋に響く声、クリークがそちらを見れば

「ロビン！数年ぶりか、元気にしていたか!!」

「久しぶりおじさま！おじさまこそ元気にしてたかしら？」

そこにはどうやって侵入したのかかつてクリークが救い育て上げた存在、ニコ・ロビンの姿があった。

久々の再会にロビンはクリークに抱きつくも

「軽いな、ちゃんと飯食ってるのか？まさかクロコダイルからいじめられてねえだろうな？」

流星に体格差がありすぎるので昔のように肩に乗せると進捗の確認も併せて聞けば

「それは心配しすぎよおじさま、別に疑われてる事も無いし食事もちゃんと摂ってるわ、それにおじさまに比べたら誰だって軽いわよ」

「ならいいが…どうだアラバスタは、お前の希望は叶いそうか？」

「残念ながら葬祭殿にあるという事は掴んだのだけれどそれ以上が手詰まりなのよ…恐らく隠し部屋なり隠し通路なりあると思うのだけれど…」

流星にこうも歳月が経つと原作の詳しいところまで覚えてないの  
で

「まあ存在するのなら王族だけが知っているとかはありそうだな…可能性としては現国王あたりか？」

確か決戦の舞台でコブラ王がいたんだっけか？

「でしようね、まあ焦ってはいないから大丈夫よ。それよりもおじさまのお気に入り見てきたわよ？」

丁度王女様とリトルガーデンに向かったわ、あの分ならMr. 3に勝てるかもしれないわね、Mr. 6がどう動くのかは知らないけれど」

「パールなら問題ない、もし麦わららに会ったら多少本気を出しても構わないとは伝えている。」

ペアのミスマザーズデイもテゾーロの奴が情報収集を目的として送り込んだ以上深入りはしないだろう、防御力だけならロギアに匹敵すると言えどな」

「ああ、そう言えば彼女はそうだったわね」

「…ところでクロコダイルの計画の方はどうなっている?」

「ええ、順調よ今のところは。この分ならあと一月もしないうちに全てが完了して動き出すかもしれないわね」

「…となるとグズグズしてられんか、とりあえず潜入は継続してくれ、くれぐれもバレないように気をつけてくれよ?もしお前に危害が加えられれば俺はオリヴィアに合わせる顔が無いからな…具体的には七武海の一角が海軍の手で落ちかねん」

「あら、心配してくれるのね。とは言えバレるようなヘマはしないわ、誰が私に色々教えてくれたと思っっているのかしら?」

うふふ、と笑いながら言うロビンに

「うーむそうか?まあそれでもだ、世の中にやどこからバレるかわかったもんじゃ無いからな。特にロビン、お前は幼少時に指名手配されているんだからな?」

「もう、いつまで経っても子供扱い…因みに前も言ったけど今はミスオールサンデーよ。とりあえず具体的な計画その他はこっちの資料に纏めてあるわ」

頬を膨らせるもののロビンはそう言って古びた皮の鞆から何やら書類の束を渡すとクリークに渡しクリークは礼を言って受け取ると素早く目を通し確認していく。

「…成る程、とは言えこのままではこの計画通りにはいかんだろう、麦わらを追ってスモーカーもくつついてきているしこのままだと七武海、海賊、海軍の三巴にもなりかねんだろうな」

クリークはそう考えながらロビンに書類を返したのだった。

## 得体の知れぬ密林

一方その頃、麦わら一味はウイスキーピークを中航し、追手に戦々恐々としつつも無事にリトルガーデンへと到着していた。

未知の植物が生茂る密林に見た事の無い蜥蜴でも混ざったかのような鳥、大きく響く得体の知れない音に、そして血塗れで倒れる虎：密林の王者である筈の動物の倒れ伏す姿にナミはこの島の危険さを悟りすぐ様上陸は無しとするも約1名が目目を輝かせていた。

「しししっ！冒険の匂いがする!!」

「ちよ、ちよつとルフィどこいくつもりよ!!」

「冒険っ!!しししししっ、来るか?」

止めようとするナミであったがこれはちよつとやそつとでは止まらない、ルフィの目は明らかにそう言っていたがそこに救いの船。

「まってルフィさん、ミスオールサンデーの言つてた事を思い出して?」

「ん?どうしたビビちゃん?」

ルフィの催促に厨房に行こうとしていたサンジの足が止まる。

「みんなも聞いて欲しいの、ミスオールサンデーは別れ際に蠟燭と鋼鉄に気をつけてと言っていたわ」

「それが何だつてんだ?案外おれたちを罠にはめる言葉かもしれないぜ?」

ゾロはあの得体の知れない女の姿を思い出しそう言うも

「:それでも何も情報がない以上いると思つて動いた方がいいわ」

「いるつて:何、いや誰が?」

ビビは自身が集めた情報を元にミスオールサンデーの言葉に一致するとして

「バロックワークスオフィサーエージェントMr. 3のペアとフロンティアエージェントMr. 6のペアよ」

とそう断言したのだつた。

「えー、別に敵だつたらぶつ飛ばしやあいんだろ?ちよつと冒険に

いくくらいだって」

折角の冒険だと思ってたのに雲行きが怪しくなってきた事で文句を言うルフィだったが

「ストロップよルフィ、あんたが冒険に行ってもしも分断されたりしたらどうするのよ、あたし達はビビをアラバスタまで送り届けるっていう目的があるのよ？」

でビビ、蠟燭と鋼鉄っていうのは何かの暗喩かしら？」

「ええ、Mr. 3はドルドルの実を操るキャンドル人間、身体から蠟燭を生み出し操る…攻撃の多様性はロギア並みともいう話よ？そしてそのペアであるミスゴールデンウィーク、彼女はかなりの多様性を持つ催眠術を使うらしいわ、二人ともバロックワークスキッテの頭脳派コンビと呼ばれている程よ」

「はあ？おいおいビビ、ただか身体から蠟燭が出せるからってどう戦うんだよ？こっちだって色々と修羅場はくぐり抜けて来てるんだぜ？」

待ち伏せと聞いてびびっていたウソップだったが相手の能力を聞いて途端に立ち直るも

「甘く見ないで、彼はかつてその能力で5000万の首を見事に仕留めているのよ、少なくともそれぐらいの実力はあると考えておいて」  
そんなビビの言葉にぎしりと固まるウソップ。

「催眠術か…うちにはひとり効果抜群なバカがいるのよね…しかも頭脳派相手となると一人じゃ荷が重いかしら？」

「ん？どした？冒険行つていいのか？」

「良くないわよ、せめて行動するにしても対策を立てた上で動かないとあのミスオールサンデーとやらが言つてた事態になりかねないわ。で、ビビもう一つのペアの方はどうなの？」

「…Mr. 6はフロンティアエージェントのトップとして君臨しているわ。二枚の盾を手にどんな攻撃も通さない鉄壁の男…鋼鉄というのはそんな彼に社内でつけられた異名よ。」

そしてその相方であるミスマザーズデー。彼女の情報は少ないわ、噂によるとロギア系の能力者かもしれないって話だけど…」

「ちよつと！ローグタウンに続いてまたロギア!?希少なんじゃないやなかったの?」

「あくまでも噂よ、わたしも直接彼女と会ったわけじゃないからわからないのよ、妙に情報も少なくてあまり調べれなかったのよね…」

「でも六番目って事はあの爆発人間達より弱いんだろ?だったらどうとでも…」

Mr. 6の方なら自分でもいけるかも知れない、そう思つてウソツプが聞けば

「…難しいとこね、Mr. 6が本気で戦う姿はわたしも見えた事が無いわ。

フロンティアエージェントは主にグランドライン前半部で網を張っているわ、でもそれに属さず単身賞金稼ぎ稼業を行いバロックワークスの稼ぎ頭となっていたのがMr. 6ペア、その実力はMr. 5を超える可能性は十分にあるとわたしは睨んでるわ」

そんなビビの言葉に一同は難しい顔をしたり目を輝かせたりガタガタと震えたり嬉しそうに刀の柄に手をかけたり、と三者三様。

「なあなあ話終わったか?冒険行つていいか?」

とりあえず話だけは聞いておこうと大人しくしていたルフィだったが芳しい冒険の匂いに我慢できないのかそう急かしてくる自身の船長に

「ちよつと話聞いてたの?ミスオールサンデーとやらが言つてた話が本当ならこの島にはやばい奴らがいるかも知れないのよ?」

リトルガーデン…なんて恐ろしいとこなのかしら、どの辺がリトルなのかしら…ん?リトルガーデン?...ちよつと待つてて、ルフィ!アంత大人しくしててよね!!」

そう言つて慌てて自身の部屋に戻りあれでもない、これでもないの本棚の本を片っ端からパラパラとめくり

「あつた!!…でもこれって、と言う事はあの大きく響いてる音は!!」

本の内容通りならこの島はとんでもない場所だと思いいたりナミは慌てて本を片手に甲板へと駆け出すのだった。

## 巨人との出会い

あの島の住民達にとってこの島はまるで小さな庭のようだ。” 巨人島 リトルガーデン” この島をそう呼ぶ事にしよう…

外海では”ほら話”と噂されている一冊の本、”Brugmen (嘘つき達)”と呼ばれる一冊の本、グランドラインの冒険を書いたとされているこの本をナミはグランドラインに入ると決まった時、ローグタウンでこの本を買い求めていた。

ほら話と言えそこには色々な摩訶不思議な、そして信じられないような現象などが書いてあり外海では娯楽本として親しまれる故にたくさんの人に読まれていた。

ナミもご多分に漏れず何かの役に立つ程度、として買い求めていたがなかなか良く出来た話だな、などと考えつつ毎夜寝る前に少しずつ読むのが習慣となっていた故に思い出したのだった。

そこに書かれた記述を読んで顔色をサツと青褪めさせると慌てて本を掴んだまま甲板へ、そしてそこには呆然とする一味(約1名は顔を輝かせていたが)ともう一人…

身の丈は20メートル以上はあるだろうか？二本角の鉄兜に皮の鎧と青色の古びたマント、メリー号より遥かな巨体を持ったその人物は

「だから酒だ、酒を持ってるかと聞いたんだ」

身を低くしてメリー号に乗った者達に問いかけていたのだった。

「で…でけえ…」

「うほー！でっけー人間だなあ？スツゲーな!!」

「終わった…このおれの勇敢な冒険物語もここで終わるんだ…」

驚いたり喜んだり絶望したりと忙しい一味だったが

「…お酒ならあるわ、幸い前の島で積み込んだから、まあ貴方達巨人族にとっては少ないかも知れないけど」

「そうか！持ってるか。ぬわあっ!!」

酒を持ってる事に安堵してニカツと笑みを浮かべる巨人だったが

突如叫びを上げ背後を見れば大型爬虫類…

「…この島恐竜までいるのね」

「いや！おかしいだろ！！恐竜って昔の生き物だろ！？絶滅したって話じゃなかったのか!?」

半分気が遠くなるナミにウソツプがパチンコを巨人に向けながら聞けば

「…ウソツプさん、ここは太古の島という事よ」

「どういう事だビビ?」

「グランドラインはその海の航海の困難さ故に島と島の交流も無く独自に文明を築き上げてるの。」

飛び抜けて発達した文明を持つ島もあれば何千、何万年と進歩せず当時の姿を残す島だってある！グランドラインの出鱈目な気候がそれを可能にしているのよ…だからこの島はまさに恐竜達の時代、いわば恐竜達の時代がこの島に閉じ込められているのよ!!」

ビビの言葉に一同は成る程と合点がいき

「で、ビビなんでそんな文明の無い島に巨人がいるの?」

と噛み付いてきた恐竜の首を叩き斬って首を掲げる巨人を指さしてナミが聞けば

「…それはあの巨人さんに聞いて欲しいわよ」

との答え、無理もないだろう喧嘩のためだけにこの島に百年以上滞在してるなんて本人達以外誰も知りようが無いのだから。

「…とりあえず情報が無いと話にならないわね、その巨人の人!!貴方お酒が欲しいの!?!」

そう大声で呼び掛ければ

「うむ！肉も手に入ったし持て成すぞ客人よ!!」

と狩ったばかりの獲物を手に言う巨人だったが

「だったらお酒はわけてあげるから情報を頂戴!!アタシ達はこの環境で生きていけるようなアンタとは違ってか弱い人間なんだから!」

「えー、おれこの島でも生きていけるぞ?昔じいちゃんに放り込まれたジャングルに似てるし」

「放り込まれたって…いいから今は黙ってなさい、こつちには情報が

必要なの。

で、どうかしら？色々を知りたい事ごあるんだけどー！」

一瞬ツツコミを入れそうになる船長の言葉にナミは自制心を働かせてそう尋ねれば

「ガババババ!!活きのいい人間共だな！何が知りたい！」

「そうね、まずは…」

「なあおっさん！おっさん人間か？スツゲーでかいな!!」

「ガババババ!!我こそはエルバフ最強の戦士ブロギーだ!!」

「ちよつと黙ってなさい!!」

ナミの言葉を遮って質問した船長はその口を強制的に閉じさせられ気を取り直してナミが

「ブロギーさん…でいいのかしら？この島のログが溜まるのにどれくらいかかるかしら？あたし達は急ぎの用があるから早めに次の島に進みたいんだけど…」

出来るだけさっさとこの島から出たい…古代の島に巨人の存在、そしてヤバそうな追手もいるとなればさっさと離れたいのでそう聞けば

「ああ、一年だ！」

そのブロギーの言葉にナミは膝から崩れ落ちる。

「一年!?そんな時間待ってたら国が…アラバスタが!!」

「その前におれ達が死ぬのが先かもな…そこら辺に人骨がさつきからちらほら見えんのに気付いてるか？」

「ああ、そのクソ剣士の言う事に同感だ。慣れない環境に猛獣…とどうか恐竜だな、一年この島で生き延びるのは至難の技だろうよ」

「ガババババ!その通りだチビ人間共!まあおれ達に攻撃を仕掛けたから死んだ人間もいるがな!!」

ゾロとサンジの言葉にブロギーは笑いながらそう言うのだった。

「一年…流石にそんな余裕は無いわ、ねえブロギーさん何とかならない?」

ビビの事もあるし先程自身の仲間が言っていた事もあり何とかならないかと上目遣いで聞くも



「…エターナルポースなら一つある、だが行き先はおれ達の故郷エルバフだ、力づくで奪ってみるか？ 巨人”二人”を相手に…」

その言葉にぎしりと固まるナミは本に書かれた記述を思い出した。

あの島の”住人達”にとってはこの島はまるで小さな庭のようだ

…

「…つまりブロギーさん以外にも巨人が？」

恐る恐るナミがそう聞けば

「ゲギャギャギャ!! ブロギーの笑いが聞こえたから何事かと思えば!! 久々の人間だな！ 歓迎するぞ客人よ!!」

今度は反対側からも重量感のある足音と声が響いたのだった。

## 小さな庭での悪巧み

「おおドリー！お前も来たか!!喜べ、この客人達は酒を持っているらしいぞ!!」

「ゲギャギャギャー！そりやあい！こつちにも分けてくれ!!」

新たに現れたのはまたしても巨人、体格はブロギーと同じくらいはあるだろう、鉄兜に長い髭と鋌打ちの革鎧。

「増えた…終わった、おれ達ここで死ぬんだ…」

悲観するウソツプだったが

「うっほー！スゲースゲー！もうひとりいたのか！おっさんもでっけえなあ!!」

「ゲギャギャギャー！活きがいいチビ人間だな!!それよりこつちにも酒を分けてくれ！久々に飲みたいもんでな!!」

「おー、丁度こつちのおっさんとも言ってたんだけど、それならナミに聞いてくれ！」

二人目の登場に一瞬意識がフワツとなりかけたナミだったが自身の船長の言葉に我を取り戻し

「へっ!?こつちに丸投げするの!?!」

と驚愕の表情、まあ無理もない。ブロギーと酒を餌に交渉を進めていたのは彼女だし、ルフィもナミの邪魔をする気は無い。船のみんなの為を思っただけ交渉しているのだから、というのがルフィの判断だったからだ。

そんな全権を持たされ、ナミが巨人二人を相手に少しでも情報を集めているその一方で、同じくリトルガーデンのジャングルの中にその奇妙な一軒家はあった。

白い、まるで蠟燭の蝋でできたかのような建物に当然この島の生物達は心当たりはない。

今も一匹の恐竜が不審に思い噛みつくも、骨まで噛み砕くその自慢の牙が砕けるといふ有様、予想外の出来事に混乱する恐竜だったが

「ああ、その恐竜くん少しどいて欲しいのだからいいかな？」

「あらあ、これがあのMr. 3の能力ねえ？」

後ろから聞こえてきた声に振り向けばそこにいたのは一組の男女。  
二メートル以上の身長はあるだろうか？黒いオールバックの髪に筋骨隆々とした鍛え上げられた肉体、上半身は何も羽織っておらず特異なのは両手に持つタワーシールドとも呼ばれる類の大型の盾を持った男にこちらは男よりは小柄、170程の身長に金のショートツインテールの女性。

すぐさま外敵と判断して襲い掛かる恐竜だったがその突進は男の「鉄壁っ!!」

と地面に並べられた二枚の盾に止められた上に

「オイタはダメよ?」

とふわりと浮いた女性が恐竜の目に人差し指をピツと伸ばし腕を振り抜くとびくりと一度震えた恐竜は首がずり落ちると地面に倒れ伏した。

二人が建物の扉を開ければ

「やあ、君らがフロンティアエージェントのトップであるMr. 6とミスマザーズデーカネ?」

椅子に座り、紅茶を飲んでいた男が本から目を上げる。

「初めましてだねMr. 3。Mr. 5がやられたと聞いたが本当かな?」

両手に盾を持った男、Mr. 6がそう聞けば

「ああ、この任務に成功すれば君達の昇進は間違い無いだろう。君達は私の指示通り動いてくれればいいガネ」

「へえ…それにしても凄い能力ねえ、密林の中に一軒家。これが噂のドルドルの实の力なのかしらあ?」

「…君がミスマザーズデーカネ。君はロギア系だと聞いているがどうなんだガネ?君もだガネMr. 6、たった二枚の大楯で大砲すら弾いて見せる…悪魔の实の能力者かもしれないと聞いているガネ?」

「いまいち情報の少ない彼女の情報を得るのにいい機会だとMr. 3は考えてそう聞く。」

Mr. 3にとっては同じバロックワークスの社員として自身の地位を上げる上でライバルになり得る存在だ、フロンティアエージェント

の中でも唯一の能力者ペアという噂だし、Mr. 5がやられた以上彼等が上に来るのは確定事項だろう。

「ふははははっ！流石は頭脳派と名高いMr. 3、お察しの通りおれは『能力者で』、『体を硬くする事ができるだけ』の能力だ！大して役に立つものでもないさ！」

「ちよつとお、ロギアだなんて化け物と一緒にしないでくれるかしらあ？わたしは』体を柔らかくする事が出来るだけ』よお？」

その二人の言葉にMr. 3は考える、体を硬くするMr. 6と体を柔らかくするミスマザーズデー、恐らく隠してる事はあるだろうが相性はいいのだろう、フロンティアエージェントでありながら単独で動いていると言う事からも察せられる。

「…まあいいガネ、さてボスからの命令はボスの秘密を知った者の排除。

現在失踪中とされていたアラバスタ王国王女であるネフェルタリ・ビビとその護衛となっている3名の海賊…3400万のモンキー・D・ルフィに1700万のロロノア・ゾロ、後は小娘1人だけだ。大した仕事ではないガネ、本来なら」

「思わせぶりだねえMr. 3？何か障害になりうるものが？」

その言葉にMr. 3は一枚の手配書をテーブルに乗せると

「君達は巨兵海賊団を知っているカネ？」

「…百年程前かしらあ？世界中の海という海を荒らし回り、多くの町を焼いた、巨人族のみで構成された海賊団がいた筈よお？」

「ほう、博識だな、ミスマザーズデー。その通り。そしてその海賊団を率いていたのが通称『青鬼のドリー』と『赤鬼のブロギー』。残念ながら懸賞金は解除されているが我々の任務にこの2人の邪魔が少々面倒だ。故にこれらを排除するか、上手い具合に戦わせるか、秘密裏に動くか…3つに一つどうするガネ？」

そうやってMr. 3はニヤリと口端を上げるのだった。

## 不穏なる影達

どうしても冒険に行きたいと駄々をこねるルフイを他所に、ナミは巨人達から情報を集めていると中央の火山が噴火、それを合図に今までは笑いながら冗談を飛ばしていたドリーとブロギーの雰囲気は緊迫したものに切り替わった。

両者はそのまま山の方へ向かい、そして…いきなり殴り合いを始めたのだった。

突然の事態についていけない麦わらの一同を他所に殴り合い…とは言え手加減無しの本気ではあるが続けられやがて両者は同時に倒れるという相打ちに。

再び戻ってきた両者に話を聞けばこの百年、ちよつとした変更はあったもののずつとこうして決闘を続けてきたらしい。

この決闘に勝った方がこの島にたった一つあるエルバフへのエターナルポースを手に入れる事が出来る、その為に100年間ずつと中央の火山の噴火を合図として決闘を続けてきたそうだ。

いくら巨人が人間より長く生きるとは言えその長い間続く喧嘩の理由も忘れていくというあまりのスケールの大きさに一同は驚くもの、呆れるもの、感嘆するもの、と様々でそして話が一通り落ち着いた所で一味は漸く方針を決定、ナミの指示のもとそれぞれが動きだす。

先ずは冒険…ではなく、この島に潜んでいると思われる追手を見つける為に一味の最高戦力であり追手に顔が割れているルフイ、そして護衛対象であり最優先抹殺対象として追われているビビ、そして酒を餌に手伝ってくれる事になった巨人の1人ドリー。

次にこの島で志半ばで倒れたもの達の遺留品集め…ひよつとしたらエターナルポースやログポースがあるかもという希望的観測の二元、ナミとサンジ、ウソップ、そして同じく酒を餌に交渉したもう1人の巨人であるブロギー。

そしてゾロは追手が船を狙う可能性もあるし、恐竜達が船を壊す可能性もあった為、船で留守番という方針に決定した。

3チームそれぞれが信号弾を込めた拳銃を持ち何か有ればそれを空に打ち上げる手筈になっている為これならば分散しても大丈夫だろうという判断である。

ナミは追手もこの島に潜んでいると考えていたため、巨人が現れた時にはどうなるかと思つたがウイスキーピークにあつたものを大量に積んで来て良かったと心の底から思つたのだった、特に酒。

お陰で最初は脅威の対象であつた巨人族が味方についてくれたのであるからこれなら例えここが恐竜の蔓延る太古のジャングルでバロックワークスから一筋縄では行かなそうな追手が来ても楽勝だと安心していられたのだつた。

…だが事態はナミの想像を越えて動き出す。

先ず最初にその男に遭遇したのはドリーの掌の上に乗つて冒険を楽しんでいた：ゲフン、バロックワークスから来たと思われる追手を探していたルフイ達のチームだった。

「やあそこの巨人くん、少し止まってくれないかな？」

「はあい？3400万のモンキー・D・ルフイくんアラバスタ王国王女のネフェルタリ・ビビちゃん？」

両手に大型の盾を持つ筋骨隆々とした上半身を惜しげも無く晒す大男と黒いショートパンツにキャミソール、対照的に白い毛皮のコートを羽織つた女性。

「…まさかバロックワークスの追手!!本当に潜んでいたのね！」

「おー、何か凄そうな盾だな！めっちゃ重そうだけどおめーそれ持てるのか？」

「ゲギャギャギャ、また活きの良さそうなチビ人間共か、今日は客人が多いな!!」

そして船で留守番をしていたゾロが眉をぴくりと動かし刀の柄に手をかければ

「ほう…私に気付くカネ、1700万程度とはいえなかなかやるようだガネ…」

「テメエ…バロックワークスからの追手だな？何番だ？」

獯猛な笑みを浮かべてゾロがそう問い掛ければ

「おつと自己紹介が遅れたガネ、私はMr. 3。ああ覚えなくていい、直ぐに意味が無くなるのだガネ」

そう言つて得意な髪型をした頭頂部にボウつと火が灯りMr. 3がゆつくりと両手を構えるのだった。

そしてMr. 3の相手であるミスゴールデンウィーク、彼女は残つたひとチームの元に：ではなく

「スウ…スウ…」

未だにMr. 3の作つた簡易拠点で寝息を立てていたのだった。

どれもこれもMr. 3の立てた計画である。

ボスの秘密を知つたという小物達は1人づつ消していけばいい、それがMr. 3の方針である。

Mr. 3からの命令で一味を見張っていたミスマザーズデーは一味が三つに分かれた事を確認し拠点に戻りMr. 3に報告、詳しい内訳を聞いたMr. 3は先ず仕留めるのは1700万の首である口口ノア・ゾロと決定した。

ついでに万が一にも島の外に逃れられぬ様に船を自身の能力で行動不能にしてしまおうという算段である。

そしてボスの秘密を知つたというモンキー・D・ルフィ、そして最優先抹殺対象であるネフェルタリ・ビビだがどういふ魔法を使ったのかあの青鬼のドリーと行動を共にしている為、その能力の特性から足止めは可能だろうと判断しMr. 6ペアに向かつてもらい、そして口口ノア・ゾロを仕留めたMr. 3がその隙をついてドリーを捕縛、速やかに対象を殺害する手筈だ。

ブロギーに関しては一且放置、下手につついて巨人2人を相手にするのはいくら一度捕らえれば巨人族とて逃れえぬと豪語するMr. 3とて難しいと判断、せめて気づかれる前にドリーを捕縛した後ゆつくり相手してやろうと考えていたのだった。

## 鉄壁と液体

「っ！貴方達がMr. 6とミス・マザーズデーね！わたしを狙って来たのかしら？」

「ああ、そうだよお嬢ちゃん？Mr. 0からの命令で君と、秘密を知った人間の排除を命令されてねえ…」

「因みに逃亡は推奨しないわよお？」

現れた一組の男女：バロックワークスからの刺客であるMr. 6とミス・マザーズデーの出現に拳銃を構えるビビ

「よし！ビビを狙ってきたんならぶっ飛ばしやいいんだな！ゴムゴムのおピストルっ!!」

一方ルフィは相手を敵と断定、先手必勝とばかりに自身の能力を使つてまずはMr. 6に攻撃を仕掛ける。

「はははははっ！緩い!!その程度でこの鉄壁を打ち破れるものか!!」  
が、その攻撃はあえなく大楯により阻まれ

「おい小僧、助太刀はいるか？」

「いや！大丈夫だ、おっさんはそこで大人しく見ててくれ!!ゴムゴムのガトリングッ!!」

ドリーが助太刀を聞くもルフィはそれを断り、今度は二つの大楯に向かい、アーロンの防御さえ打ち崩した猛攻をかけるも

「甘いっ、甘すぎる！我が盾は鉄壁！故に無敵!!我が防御、撃ち破れるものなら撃ち破つて見せるがいい!!」

とその攻撃はMr. 6本人にはなんの痛痒も与えられていない様子、その隙についてビビは動き

「ミス・マザーズデー！手足の一本は覚悟してよね!!」

それと共にミス・マザーズデーに向かつて両手の銃を連射、弾切れになった銃を投げ捨てると胸部に仕込んでいた暗器…涙滴型のブレードが付いたワイヤーを取り出すと回転させながらそのままミス・マザーズデーに接近、左足を大きく斬りつけるも

「あらあ？王女様という割には随分と乱暴ねえ？」

そこには十数発に及ぶ銃弾も、自身の武器である孔雀スラッシャー



の斬撃もまるで意に介さないように振り向くミス・マザーズデー

「……本当だとは思ってなかったけど、どうやらロギア系だという噂は本当だったようね……」

銃弾が当たった場所と斬撃を与えた場所は何やら粘液のように蠢いており、ビビはそれをロギア系の能力にある”物理攻撃の無効化”と判断するも

「ごあんねえん……アタシはロギア系なんかじゃないわ、アタシはトロトロの実の能力者……液状人間ってところかしらあ？アタシに物理は”ほとんど”効かないわよお？」

ミス・マザーズデーの言葉にビビは

「……なんて出鱈目な、いえ考えようによってはロギアのように馬鹿げた範囲攻撃を持たないというのは温情かしら？……何かダメージを与える方法が……ってなんで服脱いでるのよ貴女!!」

何か方法はあるはずだと考えているとミス・マザーズデーがいそいそと服を脱ぎ出していたのだった。

「えー？だってこの服オーナーがくれたものだし、洋服まで液状化できないんだものお」

瞬く間に服を脱ぎ、畳んで端に避けた彼女は全裸に。

「あ、貴女恥じらいってものが無いのかしら!？」

「あらあ？アタシは見られる為にこの肉体を美しく磨き上げてるのよお？例え乳房を晒しても恥なんてものは無いわよお？」

全く考慮さえしていなかった精神攻撃にビビはたじたじになるも、ここにサンジさんがいなくて良かった！と心の底から安堵していた。

因みにルフィの方に目をやればミス・マザーズデーが全裸でも全く眼中に無い様子、そしてドリーも人種の違いからか何のリアクションも無く気にしてる自分がバカみたいな気もしてきたので

「ふー……まあいいわ！やってやろうじゃないの!!」

そう言って再び孔雀スラッシャーを両手人差し指に嵌めて回転させるのだった。

「じゃあ今度はこっちからいかせてもらおうわよお？ウィップ！」

それと共に振り下ろされるミス・マザーズデーの右腕、それは振り

下ろされると同時に大きく伸びてビビを狙うも

「不定形ってのは面倒ね!」

横に飛び退き、また別の銃をミス・マザーズデーに向かって発砲するもそれは液体となった彼女の体を散らすのみでダメージは見られない。

横で戦うルフィも似たようなものでMr. 6が攻撃をしてこないのをいい事にルフィが片っ端から技を放つもその全てが二枚の大楯に阻まれてダメージを与えられていない。

「くっそおー!あの盾めちやくちやかてえなあっ!!…だったら上からどうだあっ!!ゴムゴムの…戦斧おっ!!」

それと共にルフィの右足が大きく天に伸び、そして勢いよく振り下ろされMr. 6の頭上から急襲をかけるも

「はっはっは!これはなかなか!!ただこの鉄壁を打ち破る程では…っ!まさか!」

両手の大楯をガシリと合わせた状態でそれは受け止められると同時に一瞬間こえるイヤな音。

「…ふう、鉄壁だったっけ?無敵じゃなかったみてえだな」

「…まさか我が鉄壁にヒビを入れるとは…流星はボスが目をつけるだけの事はあるみたいだね、だがここからは少し真面目に行かせてもらうとしようかな?覚悟はいいかい、ルフィくん?」

その言葉と共にMr. 6は二枚の大楯を重ね合わせるとガシヤンガシヤンガシヨン!!と盾のあちこちが留め金によって連結され先程より分厚くなった大楯を片手にMr. 6は構えるのだった。

「上等っ!今度こそその盾ぶっ壊してやるっ!!ゴムゴムのバズーカッ!!」

そして再び大楯に向かってルフィの攻撃が放たれたのだった。

## 蠟燭の猛威

一方その頃、麦わらの一味の船であるゴーイング・メリー号、その停泊地点では金属同士がぶつかる音が響いていた。

「ちいっ！蠟燭が鉄と同じくらい硬いとかホント何でもありだな能力者ってのは!!」

「はははははっ！私の芸術が気に入らないようだな！まだまだいくぞ！ドルドルアーツ・剣！」

それと共に再びMr. 3の腕が変質、明らかに身体以上の質量を持つ蠟が迸り巨大な両手剣を作り出し、そのままゾロへと向かって投擲される。

「ああもう面倒くせえ!!二刀流・鷹波!!」

自身に飛んでくる剣を弾き更にそこから広範囲に広がる斬撃を放つも

「キャンドルウォール!!」

「くっそ！またか!!」

その攻撃はMr. 3が蠟の壁を出現させた事によりあえなく霧散する。

「はははっ無駄だガネ!!私のキャンドルは鉄と同等の硬さを誇る、鉄が刀で斬れるカネ?いい加減諦めるガネ」

「誰が諦めるかよっ！三刀流…虎狩り!!」

刀二本を背に構えた状態から振り下ろすも

「無駄だガネっ！ドルドルアーツ・盾!!」

その攻撃も途中で阻まれるという始末

「くっそ！相性が悪すぎんぞ!!」

ゾロとて別に最初から手をこまねいているわけではない、相手の出現に先手必勝とも言わんばかりに斬りかかったがMr. 3も初手でゾロを逃がさないように周囲を蠟の壁で囲いこんだのだった。

鉄と同等と嘯くだけはありその硬さはゾロの斬撃ではびくともせず、精々が三代鬼徹が少し食い込む程度、と未だ本人にダメージを与える事が出来ないでいた。

「ほははっ！だいぶ動きが鈍ってきたようだガネ!!そらっ！倒れても  
いいように加勢してやろう！」

それと共に再び蠟が蠢くと今度はゾロの足元に  
「しまっ!？」

考慮してなかった攻撃により足を滑らせバランスを崩した状態を  
当然Mr. 3が見逃す事は無く

「今だっ！食らうガネ、キャンドルロック!!」

腕を一閃、蠟の塊がゾロを捕らえんと飛んでくるも咄嗟に刀で弾こ  
うとするもそれは刀に纏わりついたのだった。

「くそっ！雪走がっ!!…いやこれはチャンスか？」

Mr. 3の技の一つ”キャンドルロック”、これは本来なら瞬時に  
固まる蠟で相手の手や足に浴びせ、そのまま固めて捕縛する技だ。

固まった蠟はその硬度もあつて加熱する以外に簡単には外せない  
が、ゾロは刀に纏わり付いたそれを意にも介さずMr. 3へ向かつて  
振り下ろす。

「無駄だガネっ！キャンドルウォール!!」

当然先ほどまでと同じく自身の能力を使って蠟の壁を作り上げる  
も響くは金属同士がぶつかり、そして碎け散る音。

「なっ！貴様私のキャンドルロックを利用するカネっ!？」

「おー、やっぱこれならいけるか？」

ゾロがやった事は簡単だ、キャンドルウォールをキャンドルロック  
が纏わり付いた雪走で思いつきりぶん殴り、それによりどちらも碎け  
散るもこれで初めてゾロがMr. 3の防御を抜いたのだった。

「元々鉄の硬度相手に斬撃で挑むつてのは分が悪いか…だったらぶん  
殴ればいい話だよなあ？」

それと共に口に啞えた和道一文字を鞘に仕舞い三代鬼徹と雪走を  
持ち代えるゾロ

「刀はそうやって使うものじゃないんじゃないカネ!?!ドルドルアー  
ツ・槌!!」

あんまりといえばあんまりな方法にMr. 3が驚くもそこはMr.  
3とて修羅場を潜り抜けてきている人間だ、直ぐに気を取り直し相手

を叩き潰すべくドルドルの能力でハンマーを作り出しそれを振り下ろすも

「二刀流・峰落としっ!!」

逆にゾロの振り下ろした二刀の峰打ちに大きく弾かれたのだった。

「くっ! たかだか1700万と舐めてかかったカネ…」

「ちっ、蠟がついてねえせいか叩き壊すまではいかねえか…」

「やはり遠距離から仕留めるべきだったガネ…まあいい! 貴様は我がサービセットに特別に案内してやろう!! 食らうがいいガネ!! キヤンドルウエーブ!! 特別に大盤振る舞いだガネ!!」

それと共にMr. 3は大きく飛び退き己が能力で身体からあらゆる蠟を繰り出すと、それは蠟の大波となってようやく勝機を見つけたゾロに襲い掛かったのだった。

「なっ!! テメエ! そりやいくらなんでも出鱈目すぎんだろ!!」

「知ったこっちゃ無いガネ! 最初から貴様が大人しく捕まれば良かった話だガネ!!」

それと共に蠟の大波はゾロどころかメリー号、果ては周囲一帯の地面さえ飲み込み先ほどの戦闘音が嘘のように辺りを静寂が包むのだった。

程なくして

「ふはあっ!!…この技は生き埋めになるし力業だから、とても頭脳的では無いから嫌いだガネ…」

蠟の一部が盛り上がりMr. 3の姿が

「くっそ!! 動けねえっ!! おい蠟燭野郎! こっから出しやがれっ!!」

そしてゾロはと言えば顔を除き全身が蠟で固められ身動き一つとれない姿。

「…身動き一つ出来ないカネ? いくら貴様が馬鹿力でも私特製のキャンドルジャケットで全身を固められればご覧の通りだガネ。」

全くまだ1人目でこの調子では先が思いやられるガネ、Mr. 6達は上手く足止めが出来るといいのだガネ…」

尚も喚くゾロをMr. 3は重そうに引っ張りながら次の獲物であるネフェルタリ・ビビ、モンキー・D・ルフィの元へと向かうのだっ

た。

## 鉄壁の砲撃

「っ！なんて硬さ!! 流石は鉄壁と呼ばれるだけの事はあるみたいね!!」

ビビはミス・マザーズデーに対応しつつ相手があまり本気では無いと見抜き合間合間にMr. 6とルフィの戦いの様子を確認しながら戦っていた。

片方の盾にヒビが入ったようだがすぐさま立て直され今度はかなり威力はあるはずと見込んだ攻撃も塞がれており単純に盾が分厚くなっただけとは思わない方がいいかも知れないと思いつつミス・マザーズデーの攻撃を捌いていく。

「まあ元々は名の知れた賞金稼ぎだし? 鎖使いの能力者を仕留めた事もあるわよお?」

…それにあの状態になったMr. 6は守るばかりじゃないわよお?」

それと共に二枚の大楯を合体させ右手が空いたMr. 6が大きく腕を引き…

「んんっ! 豪腕砲 (アームストロングキャノン)!!」

轟っ!! そんな音と共に吹き飛ばされるルフィの身体に

「なっ?! ルフィさん!!」

ビビは慌てて牽制としてミス・マザーズデーに二連続で両足を斬りつけると大きく後ろに下がりルフィの元へ

「うひー、攻撃が無いと思ってたから油断してた! しっかしなんだ今の? 拳は当たってねえのに拳が当たる感触…?」

「ルフィさん! 大丈夫!」

不可解な攻撃に頭を捻るルフィだったがビビのそんな声に

「おう! ゴムだから痛くねえぞ!! でもさっきの攻撃何だったんだ? ビビならわかるか?」

「…いいえ、わたしも見ていたのだけどMr. 6が拳を振り抜いたと同時にルフィさんが吹き飛ばされたくらいしか確認できなかったわ… ひよっとして何かの能力者?」

ひよつとして、と思いきや言葉にするも

「んー、残念ながら外れよお？」

「ミス・マザーズデーの言う通りだお嬢ちゃん、おれの豪腕砲は拳を振り抜くだけさ、思いつきりな？」

ビビの予想は外れMr. 6とミス・マザーズデーはそう言いながら薄く笑う。

「でも盾のおっさんが腕振った時に殴られた感触あったぞ!？」

「言っただろう？ 思いつきり振り抜くと…つまりこう言う事だ！ 豪腕砲っ!!」

それと共に天性の勘によるものかルフィが咄嗟にしゃがむと大きな音が響き渡りルフィとビビの2人がそちらを振り向けばメキメキと音を立てて折れゆく樹木、そしてそこにははつきりと刻まれた拳の跡。

「な…まさか、まさか拳を振って衝撃波を飛ばしたって事!？」

「その通りだお嬢ちゃん、タネは簡単だろう？」

「確かにタネは分かっただけど…ルフィさん気をつけて！ Mr. 6は拳撃を飛ばしてくるわ！ 拳に触れて無くとも拳に当たる、それも不可視だから厄介だわ！」

直ぐにその技の有用性を悟ったビビはルフィに忠告するも

「んー…よくわかんねえけど当たって無くても吹っ飛ばされる不思議パンチだな！ 分かった!!」

あんまりと言えばあんまりなその回答にビビはガクツとするも

「さて…じゃあ次行ってみよう！ 豪腕砲！」

「なんの！ お返しだ、ゴムゴムのピストルっ!!」

今度はルフィはMr. 6の攻撃を食らいつつもその場で踏ん張って今度は反撃を返すも左手の重ね大楯に弾かれる。

「やっぱその盾面倒だな！」

自身の攻撃を全て防ぐ大楯にルフィは文句を言い

「堅牢な防御に遠距離からの大砲…まるで噂に聞く戦車ね…」

ビビは噂には聞いているある兵器を思い出す。

「ん？ センシャってなんだ？」



「後で説明してあげるわ!!でもこれならどうかしら!!」

ルフィの素朴な疑問にそう返しつつビビは念の為に背負ってきた切り札、バズーカを素早く構えて撃つも

「ぎあんねえん、届かせないわよお?」

その身体を液体へと変化させたミス・マザーズデーが素早く射線に躍り出ると

「なっ!弾を止めたですって!」

「例えバズーカでもお、こんなただの球形弾なら直ぐに速度は減衰するものよお?特に抵抗がある状態だとねえ?」

ゴトリ、とMr. 6に届く前に地面に落ちる鉄球に

「おいおいミス・マザーズデー、その程度の攻撃でおれの鉄壁が破れないのは承知してるだろう?」

「あらMr. 6、相手の強さを知ると知らないでは大違いよお?戦力を正しく把握させる事は大事だと思うけどお?」

ルフィとビビは目の前の相手が一筋縄ではいきそうも無いと改めて気合を入れ直し、そしてそんな折に

「ゲギャギャギャ!やっぱ苦戦してるじゃねえか!どれ、おれがひとつ加勢してやるとするか!!」

そう言っただけではルフィの言葉で大人しく観戦していたドリーが立ち上がった。

「おいおっさん!こいつらおれ達を狙ってきてんだからおれが戦うんだぞ?」

「ゲギャギャ、言うじゃねえか小僧。だがおれも目の前で戦いを見ているとウズウズして仕方ねえんだよ、なに旨い酒の礼だ!」

それと共に巨大な拳をMr. 6に向かって振り下ろすドリー、大きな衝撃と共に先程までMr. 6がいた場所に大きくめり込むドリーの拳

「や…やったの?」

「ぶー、おれが戦うって言ったのに…」

あまりの衝撃に直視はしていなかったがいくらMr. 6が鉄壁と呼ばれる大楯を持っていてもこの攻撃は防げないだろう、とビビは考

える。

「なんたつて相手は巨人である、頑丈な骨とそれに見合った筋肉量：ひよつとすればその振り下ろした拳の威力はあのミス・バレンタインの最大攻撃に匹敵するかも知れない…：そう思いつつミス・マザーズデーに向き直る。」

「さて、貴方の相方は残念だけど手加減はしないわ。ルフイさん！気を取り直してミス・マザーズデーもなんとかするわよ！」

「…相方がやられたというのに薄く笑みを浮かべるミス・マザーズデーに。」

## 蠟燭の策謀

「ぶー、おれの相手だったのに…巨人のおっさん、次は手え出すなよ？」

拳をMr. 6に振り下ろしたドリーにルフィは文句を言うもドリーは何か違和感でも感じたのか首を傾げているところにミス・マザーズデーの軽い笑いが響く。

「あらミス・マザーズデー、相方がやられたというのに随分余裕じゃない？確かに貴女能力は厄介かもしれないわ、でも同時に2人を相手にできるかしら？」

そうミス・マザーズデーにビビは銃口を向けつつ言うも

「別にいい？そういうことを言いたいわけじゃないのよお。なんで彼が鉄壁と呼ばれるか知ってるかしらあ？」

「巨大な盾で全ての攻撃を防ぐんでしよう？まあいくら盾が頑丈でも巨人族相手ならこんなものでしょ？」

「そういう考えじゃいつか足元を掬われるわよお？ねえ、Mr. 6もそう思わないかしらあ？」

そのミス・マザーズデーの言葉にバツとドリーが拳を打ち付けた場所を見れば

「ああ、全くだね。敵の姿が確認できないうちに撃破と判断するのは少し性急なんじゃないかい？」

いやあしかしやはり巨人というものは強いな、鋼鉄製の大楯がこうもたやすく壊されてしまうとは…」

そこには両手でドリーの拳を持ち上げたMr. 6の姿。

生きていたのかと思うと同時に彼の体には土埃などの汚れは見られるものの怪我などのダメージは一切見られない。

「うへー、頑丈だな盾のおっさん！」

それと共に再び拳を大きく伸ばし振り抜くルフィにMr. 6は微動だにせずに受け止める。

「ふっ、なかなかの拳だなルフィくん！次はこちらから行かせてもらおう！豪腕砲っ!!」

ほとんどダメージが無いと見て畳み掛けるルフィと応戦するMr. 6そんな姿を見つつビビは考える。

「いくらなんでもただの人間が巨人の拳をくらってにおいて五体満足ですって…?」

やっぱりMr. 6も能力者ね!?拳を飛ばしたのが能力じゃ無いとしてもドリーさんの攻撃を受けて無傷というのは流石にそれ以外あり得ないわ!」

とようやく正解にたどり着いたビビにミス・マザーズデーはぱちぱちと拍手をする

「せえかぁーい、彼もアタシも能力者よお?だからこそこうしてフロンティアエージェントのトップなんて地位にいるんだしい?」

「それこそおかしな話じゃない!何でそんな実力がありながらその地位に甘んじてるの?貴方達のペアならもつと上の地位に登れた筈よ!まさかこれ程の戦闘力とは予想外よ!」

潜入しつつ調べた自身の情報に漏れがあったのだ、思わず unnecessary 文句を言いながら頭を抱えるビビに

「別にい?能力者だって事は吹聴してないしい?それに理想国家の建国後の地位なんてどうでもいいものお」

人差し指を顎に首を傾げて見せるミス・マザーズデー。

「だったら貴女はどうしてあの男の!Mr. 0:クロコダイルの元にいるのよ!」

「そうねえ、今の貴女には関係ないけどお:強いて言えば暇つぶししかしらあ?」

ビビの言葉はミス・マザーズデーに何の感慨も抱かせずビビはミス・マザーズデーの言葉に

「っ!馬鹿にしてっ!!孔雀スラッシャー二連!!」

それと共に両腕の仕込み暗器を振るうもミス・マザーズデーの身体は液体と化すだけでダメージは与えられない:そしてそんな2人に声がかけられたのもそのタイミングだった。

「やあやあMr. 6にミスマザーズデー、時間稼ぎご苦労だガネ。

面白い話が聞こえたが、んー:小娘、我々のボスが”あの”クロコ

「ダイヤルというのは本当カネ？」

森の中から現れたのは特徴的な髪型に眼鏡をかけた細身の男は手に持ったものをどきりと投げ捨てる。

「なっ！Mr. ロロノア!? 船で留守番をしてた筈じゃ!？」

「げっ！ゾロが捕まってる!? というか何だおっさん！変な頭をしてんな！」

そこには口元まで蟬に覆われて身動きどころか喋ることすら出来ないゾロの姿、これには流石にビビもルフィも驚くも

「ふん、とても正面から勝ったとは言えんガネ…全く何故この私が美学に反して相手にせねばならんのか…それよりも小娘答えるガネ、Mr. 0…バロツクワークスのボスは本当にあのクロコダイルなのかネ？」

ぶつくさ文句は言いつつも流石に名前も顔も知らないボスの正体とあつては無視はできないのだろう。

「本当の話よ…でもここでMr. 3まで出てくるなんて少し困ったわね」

ビビの言葉にMr. 3は俯いて考える。

確かに”理想国家の建国”なんて考え、これほど巨大な組織を作る輩がタダの凡人なわけは無し、むしろ王下七武海ともなればこれくらいこの事はやつてもおかしくない、という確信はある。

「懸念はあるがメリットは大きい…という事カネ、まあいい今は任務をこなすだけだガネ、この任務さえ終わらせればあのクロコダイルの元で栄達が約束されている、これは好機じゃないカネ？あの王下七武海の一角に参入できれば私の芸術も更に昇華されるというものだガネ!! キャンドルロック!!」

それと共にMr. 3はビビを拘束すべくキャンドルロックを放ち、いきなりの奇襲にビビは対応出来ず捕らえられたのだった。

「なっ！Mr. 3!! 貴方ボスの正体を知ってもまだ彼の為に働くというの!？」

「やかましい小娘だガネ…確かに驚いたがそれがどうかしたカネ？別に私は誰かの為にこの組織にいるわけじゃない、自分の為にいるのだ

ガネ、逆にボスの正体が誰も知らないような小物じゃなくてありがたいくらいだガネ」

「っ…!!ぶめんなさいナミさん、ちよつと危険に巻き込んだじゃうわ!」

そう言いつつ、出来れば使うまいと思っていた腰の後ろにつけていた信号弾を打ち上げたのだった。

## 風雲急を告げる

「これは…ダメね壊れてるわ」

「なかなかないもんだなー、使えるログポース」

「そりゃそうだろ、結構繊細なんだろうしこの環境なら雨晒し野晒しならそうそう持つもんでもないだろうからなあ」

ナミ、ウソツプ、サンジの一行はこの島で志半ばで倒れた者達の遺留品集め…あわよくばログポースやエターナルポースが手に入れないかと密林を彷徨っていた。

「ブロギーの師匠ー！船とか見えますかー？」

あの巨人同士の決闘で何らかの感銘を受けたのだろう、ウソツプは目標としているブロギーに声をかければ

「おーう、島の端に一隻見えるな…割と状態は良さそうだな」

「よし、ならばそっちに向かいましょう。状態がいいのだったら食料なんかも残ってるかもしれないわね！」

そうしてナミ達は意気揚々と船を遠目に確認したブロギーの案内で島の外縁に向かえばそこには小型の帆船、大きさとしてはメリー号より少し小さいくらいだろうか。

成る程確かにブロギーが言ってたように状態はかなりいい、問題は船の横に書かれた文字であった。

「…なあナミさんこれって」

「…言わないでサンジくん、あたし達は何か使える物がないか探しに来た、そして偶々使えるような物がありそうな海賊船を見つけた、それでいいのよ」

「…はー、なるほどなひよつとしたらエターナルポースもあつたりするかもな」

そこにあつた小型帆船は、翼にレイピアを持つ髑髏、そして船の横にはデカデカとMr. 3の文字…Mr. 3の船、智略天然丸がそこには停泊していたのだった。

「んん？よくわからんが知り合いの船なのか？」

「まさか、あたし達にとつての敵よ。公認海賊のリストに旗印も無し、という事は違法海賊の船だし積荷をパクっても問題ないのよ。」

「さあ！ウソツプ、サンジくん！使えそうなものを片っ端から持ち出すわよ！」

「そうして天然智略丸から食料や水、武器などを運び出すも」

「：流石にログポースやエターナルポースは置いてないか」

「本人が持つてゐるって事か：しっかし留守番の1人もいないとは随分と不用心なこつた」

「まあ楽勝で良かったじゃねえかよ！なあナミ、どうする？追手を探すか？」

「そうね：物資や船の品物を確認したところ多分この船に乗っていたのは2人、恐らくMr. 3とそのペア：とにかく一旦船に戻りましょう、これだけ荷物が多いと身動きが取れないわ、幸い信号弾はまだ上がって無いし：」

ナミがそう言った直後だった、空を切り裂く音と共に登る一本の赤い光：何かあつた時に打ち上げると決めていた信号弾が放たれたのだった。

「ありや：追手を見つけたって事か？」

「：まさかビビちゃんに何か!?ナミさん！」

「ドリーさんがいるし大丈夫だと思っけど：ウソツプ！アンタはブロギーさんと一緒に荷物を船に、サンジくんはあたしと一緒に来て！」

「お、おう！1人だったら絶対断つてたけどな！ブロギー師匠がいるなら安心だ！」

「クソ剣士と合流したらあいつも：来る途中で道に迷うのがオチか？」

「兎に角お願いね！ホントだったらもう一組の船も探したかったところだけど：」

「そうやってナミとサンジは信号弾が上がった方に、ウソツプとブロギーはゴーイングメリー号を停泊させている地点へと向かったのだった。」



一方信号弾を打ち上げたビビ達は

「ゲギャギャギャー！やるじゃねえか能力者！巨人のパンチを正面から防ぐか!!」

「つたくーなんて馬鹿力だガネ!!私はお前なんぞに割いてる時間は無いのだガネ!!」

流星に能力者三人相手には不利だと悟ったのかビビの強い進言によりルフィはドリリーの参戦を渋々承諾、ドリリーがMr. 3に躍りかかったのだった。

Mr. 3も能力者とは言え流星に巨人を正面から相手にする程強い訳でも無いがそこは自身もファイサーエージェントだという矜持の元何とかドリリーの拳を受け止めて捌いていく。

「そらあつーこれは耐えられるか能力者!!」

と両の拳を組み振り下ろすドリリーにMr. 3はこれは不味いと感じたのか

「つ!!Mr. 6!ミス・マザーズデー!こつちを手伝うガネ!!」

と思わず叫ぶも

「えー?本当は火山が噴火したタイミングで2人を捕らえるって言うてたじゃないのお?このタイミングで現れるから巨人に攻撃されるのよお、自業自得なんじゃないのお?」

ロロノア・ゾロは身動き一つとれず、最優先目標のネフェルタリ・ビビも足を拘束されているので出番がないミス・マザーズデーはいつの間にか服を着て自身の爪の手入れを

「はっはっはっ!頑張ってくれMr. 3!!我々は所詮フロンティアエージェントだからね!流星に巨人を相手に出来る程じゃない!」

何が楽しいのかルフィの拳撃を正面から受けつつも飛ぶ拳撃を撃ち放つMr. 6

「っ!使えない奴等だガネ!!キャンドルウォール・ミルフィーユ!!」

加勢しようとしてない2人に苛立ちつつもただの分厚い蠟の壁では無く何層にも重ねた蠟の壁で自身を覆う空間を作り出しそこにドリリーの両拳が着弾、凄まじい轟音と共に土煙があがる。

「流星巨人つてどこかしらあ?これはオーナーにも伝えとくべき

ねえ、少なくともビッグ・ママはこれ以上って事だし…」

とミス・マザーズデーはごく偶に自身の本拠地にやってくるあの”  
歳の割には随分と若々しい”姿を思い出す。

そして土煙が晴れた頃には半壊したMr. 3のキャンドルウォールとドルドルの能力で作りに出したのだろう大楯でドリーの拳を受け止めるMr. 3の姿

「くっ、どちらかが無ければ潰されてたガネ…Mr. 6！ミス・マザーズデー！一度退くガネ！剣士と王女は任せたガネ!!」

流石にこのまま巨人とやり合うのは得策では無いと判断したのだろうMr. 3は袖から煙幕筒をばら撒き即座に森の中へ、それに続いて

「じゃあねえ、麦わらくんに巨人さん？また後で会いましょう？」

「さらばドルファイくん！この続きはまた後で!!」

Mr. 6とミス・マザーズデーも身動きの取れないビビとゾロを連れてその場を退いたのだった。

「なっ！待てえっ！ビビとゾロを返せっ!!」

ルフィの叫びは虚しく三人はゾロとビビを連れ煙の中に姿を消したのだった。

## 鉄壁と蜜液と蠟燭と

「ちよつと何これ…ビビー！ルフィー！無事ー!?無事なら返事しなさいー!!」

ナミとサンジが信号弾の上がった地点についた時、率直に言えばそこは荒地であった。

元は木々植物が生い茂るジャングルだったのだろうが、あちこちに土が剥き出しのクレーターが作られた上に、周囲の木々も叩き折られたり根元から捲れ上がって倒れていたりと、更には所々に白い固形物：恐らく敵の能力であろう物体があちこちにあるという酷い有様。

「ナミー！大変だ!!ビビとゾロが連れて行かれちゃった!!」

ナミの声を聞いて急いで戻ってきたルフィーは慌てて簡潔に説明する。

「なっ!?クソ剣士はどうでもいいけどビビちゃんが連れて行かれただとおっ!?何があった!!」

「盾のおっさんと裸の女と頭が3のおっさんが出て来たんだよ!!最初にゾロ捕まえて、んでビビも連れて行っちゃったんだよおっ!!どうしようナミいっ!!」

ルフィーの説明とも言えない説明にナミは一瞬頭を押さえるも

「兎に角一旦落ち着きなさい。連れて行っちゃったって事は直ぐに殺すわけでもないでしょ…ドリーさん、何があったか状況を教えてもらえるかしら?」

とりあえず現状の確認が優先だと考え、まだマトモに話が聞けそうならドリーに質問すれば

「最初は男と女の二人組みだったな、麦わらの小僧が男に、青髪の嬢ちゃんが女と戦ってたがそこに拘束した緑髪の男を連れた能力者が出てきてな、おれも手を出したが奴等途中で煙玉投げて逃げやがった、あのままいけば仕留め切れてたと思うんだがな…」

そう言っつて拳を手のひらに打ち付けるドリーにナミは

「二組のペアのうち三人がこつちに来るとはね…それにゾロが捕まえられたって事は先にそつちがやられたって事かしら…しまった!ウ

ソップを船に向かわせたんだったわ！」

幾らブロギーがついているとは言え相手は能力者。辺りを探してやろうというドリーに礼を言いつつナミは慌てて他の二人を引張ってゴイーング・メリー号の停泊地点へと向かったのだった。

そして一方その頃、色々と手に入れた戦利品を背負いメリー号に向かっていたウソップは驚くべき光景を見て慌てて隠れる。

「…まさかゾロが捕まってるとは、しかもビビも捕まってるじゃねえか、ルフィはどうしたんだ？まさかやられちまったのか？」

そこにはゾロとビビが上半身裸の男の肩に背負われて運ばれる姿：そしてその側には特異な髪型をした男と白い毛皮のコートの女：間違い無くバロツクワークスの追手だろう。

ウソップはどうするべきかと考える。一番いいのはビビ達の元に向かったナミ達に合流すべきだろう、何せ相手は能力者と思われる三人組：、しかもゾロとビビを捕らえているときた、きっと並の相手では無いだろう。

しかし今はただ見かけたただけだ。咄嗟の事だったしブロギーには静かにしてもらっているものいつバレるとも知れない。

二人を運んでいるという事は直ぐに始末するつもりは無いのだろう。となれば何処に行くかを突き止めておくだけでもかなり違うよな？ナミ達との合流はそれからでも遅く無い筈だ：そう考えてウソップはブロギーに伝言をお願いして荷物を渡すと自身は単身目標を静かに追跡し始めるのだった。

そんな事は露知らず、Mr. 3は標的のうち二人を手中に収めたとてその気は晴れなかった。

「全く、どうしてあの時私を助けなかったガネ!?生き残ったからいいようなものをもしもあの時私が行われてはこうするつもりだったガネ!!」

「だってえ、アナタ自分で言ってたじゃないのお巨人は相手にするつもりは無いって：それなのにノコノコと巨人の前に出てきたもんだからってつきり何かの作戦だと思ったんだけどお？」

「そうだMr. 3、それにおれ達二人が加勢したところで巨人に勝て

るわけでも無いだろうに、せいぜい連携が取れずに三人まとめて押し潰されていたのが関の山だろうさ」

Mr. 6のその言葉にMr. 3は眉をピクリと動かす。

「ほう…よくもヌケヌケと言うもんだガネ、Mr. 6お前が巨人の一撃を受け止めていたのは見ていたガネ、隠し札だろうから深くは聞かないでやろうと思っていたがそれはどう説明するガネ？」

それにミス・マザーズデー、私でさえ予想してなかったボスの正体に全く驚いて無いように見受けられたが…貴様、もしやボスの正体を知っていたのでは無いカネ？」

Mr. 3の疑うようなその目つきにMr. 6とミス・マザーズデーは「どうする？ 処す？」、”まだ早計じゃないのお？”と素早くアイコンタクトをとり

「それは誤解よおMr. 3、アタシは薄々予想してただけよお…貴方が言ったじゃない、これだけの組織を作って国盗りを企んでるなんてかなりの大物だって…場所からして当然候補の一人だったからそこまで驚かなかつただけよお？」

「そうだMr. 3、確かにおれの身体は巨人の一撃に耐え得る事ができるがそれも大楯に殆どの衝撃が食われたからこそだ、おれ一人なら盾無しでもなんとかなるだろうが流石にMr. 3を庇ってモンキー・D・ルフィの追撃を受けつつ受け止めろつてのは無茶が過ぎやしないかい？」

と二人の言葉にMr. 3は暫く考えると

「…どこまで本当か知らんがそれもそうだガネ、兎に角今はミス・ゴードレンウィークと合流するガネ。」

火山が噴火すればあの猪共は決闘を始めるだろうからその隙をついて残り二人…モンキー・D・ルフィとオレンジ色の髪の小娘を私のサービス・セットに招待してやるガネ…なあに、こっちは既に二人捕らえているのだから後は簡単、餌を使って一人づつ誘き出せばすむ話だガネ…」

そう言いつつ一行は残る一人と合流すべく密林の中に作り上げた簡易拠点へと向かうのだった。

全て聞かれているとMr. 3”は全く知らぬままに…

## 迅速なる奇襲

「ってわけだ！どーだおれってばかなりの活躍だろ？これで文字通り海の戦士と言っても過言じゃ無いな!!」

文字通り鼻高々と胸を張り言うウソップにナミは

「はいはい、わかったから静かにしていなさい」

と呆れたように言う。

ルフィと合流したナミとサンジはゾロが捕らえられていたと知り慌ててゴーイング・メリー号の元まで戻れば、そこには蠟で釘付けにされたメリー号の姿。

船室からは恐らく閉じ込められたのだろう、ビビの愛鳥であるクルーの鳴き声もあり後から加わったブロギーと一緒に何とか蠟を剥がすべく奮闘しているところに戻ってきたのがウソップ であり、彼はこっそりと相手を追跡し掴んだ情報をこちらに自慢気に教えてくれたのだった。

「ふっふっふっ、いやあ激戦だったぜ…もしあのおれの類稀なる隠密が見破られていたらと思うと武者震いが止まんねえなあ…」

尚も自分を褒めるウソップを放って置いてナミは考える。

どうやら敵はボスの正体を知った人間…ビビとゾロは捕らえられたから残るは自身とルフィを捕らえて何かを企んでいるらしい。

そのサービスセットと言うのが何だかわからないがろくなものじゃないのは確かだろう、しかし幸いにも次に敵が来るのは火山が噴火した後というのはわかっている、しかも何らかの手を使って一人ずつ捕らえる予定ときた。

「…ブロギーさん、次に火山が噴火するタイミングってわかるかしら？」

ブロギーはその言葉に少し顎に手を当て思案すると

「うーむ、そうは言ってもなあ…今日はさっき一回噴火したし…1日に2回噴火する事も無いでは無いが下手すれば明日明後日になるかも知れんな…」

と自身の過去の体験を元に話してくれた。

「…1日に二回噴火する可能性があるならウカウカしてられないか、ウソツプ奴等の隠れ家の場所はもう一度いける?」

「へっ! 抜かりはねえさ! バツチり覚えてるからな!!」

「よし、なら強襲をかけるわよ! 相手はこつちが気づいてるとは知らないわ: 隠れ家で合流した後一人を加えて相手は四人、こつちは三人だけドウソツプ、あんたの攻撃が鍵よ特にMr. 3とか言うやつの手相手ならね」

それと共に”綺麗に溶け落ちた周囲の蟻”を見渡しつつ言えば

「へっ! 弱点が分かかってるなら楽勝さ! …それよりも他の奴らがコエーとこなんだが…」

「そこはサンジくんとルフィに何とかしてもらおうわよ、んであたしがその隙をついてビビとゾロを救出するわ: ブロギーさん、もう少し頼つてもいいかしら?」

「ガバババ!! 乗り掛かった船だ! 今更はいお終いとは言わんさ!! …最も火山が噴火しなければだがな! ガバババババ!!」

「よし: サンジくん! ルフィ御所望の海賊弁当は出来たかしら!? ルフィもサツサとしなさい! いつまで食べてるのよ!!」

ならば後は動くだけ、とナミは厨房のサンジと両手に骨付き肉を持って頬張るルフィにそう声をかけるのだった。

そして四人十一匹でココソコと移動、やがて目に捉えたのは珍妙な建物

「何だアレ? 変な形の家だな!」

「ちよつとルフィ大声出さないの! …まずは準備を済ませてしまおうわよ、くれぐれもバレないようにね?」

そう言つて一同は行動を開始、予め立てていた計画通りに行動、途中Mr. 6やミス・マザーズデーが建物から出てきて周囲を見渡していたものの何とかバレなかった事に安堵しつつ準備を終え再び集まる。

「さて、頼んだわよウソツプ! ビビとゾロにはちよつと我慢してもらつて先ずは景気づけに1発、相手は油断してる筈よ!」

「お? やっぱ建物の中にいたのか?」



ナミのその言葉にパチンコを建物に構えつつウソップ がそう聞  
けば

「ええ、窓からそつと覗いた時にね。二人とも身動き一つ取れない状  
態で蟻に囚われてたから上手くいけばこれで脱出出来るかも知れな  
いわね」

ナミはそう断言するも

「なあなあ、別にチマチマやんなくても正面からぶっ飛ばしやあいい  
じゃねーかよー」

自身の船長の言葉に振り返るとビシリと指を突きつける。

「あのねルフィ、奇襲つてのは大事なの。あたし達の目的は何かしら  
？」

「盾のおっさんをぶっ飛ばす!!」

「違うわよーゾロとビビの救出が最優先、そして敵の足止めをしつつ  
あわよくばログポースなりエターナルポースを奪う事よ！

しかも相手は能力者なんだし今までと同様に上手くいく保証なん  
て全く無いのよ？そう考えると今は揃ってる情報が多いし奇襲をか  
けるには絶好のチャンスなの、わかる？」

「むー…確かにそうだけどさあ…」

「兎に角お願いね？あんたは船長なんだから仲間を信じて！大丈夫、  
上手くやるから」

「おう、任せとけルフィ！おれの活躍を目に刻んどけよ？」

「おいウソップ、ビビちゃんに何かあったらおれがお前を三枚に卸  
してやるからな？」

「ヒエ…まあいいや必殺・大火炎星!!」

それと共に火薬と油を大量に含んだ弾がパチンコから放たれMr.  
3の作りあげた隠れ家に着弾、大きな火柱をあげると同時に蟻ででき  
た隠れ家はいとも容易く融解したのであった。

## 小さな庭での激突

Mr. 3はゆっくりと紅茶を味わっていた。

「グランドラインでもかなりの高級品とされる“ローズ・ステラ”の香りを楽しみつつこの任務を終えて、今後の展望について期待を膨らませているところに突如として膨大な熱。

「な、何事だガネ?!?!」

「敵の攻撃だな! いやはや奇襲を仕掛けてくるとは!」

咄嗟に頭を抱えて丸くなるもMr. 3の声に自身の相方であるミス・ゴールドデンウィークとミス・マザーズデーを庇うMr. 6が応える。

「くっ! この火勢では…王女と剣士はどうし…」

「孔雀スラツシャー!!」

「一刀流! 峰駆!!」

「ぐっ! キヤンドルウォール!! ちいつ! 時間稼ぎにしかならんガネ!」

Mr. 3は捕らえた標的について確認しようとするればそこに蠟で身動き一つ取れなくしていたゾロとビビの攻撃により途中で途切れ慌てて蠟の壁を作り出すも普段と違い普通の蠟のように破壊される自身の能力に歯噛みする。

「ビビ! ゾロ! 早くこっちに!!」

そんな二人にかかるナミの声

「ケホツケホツ! ナミさんがこんな力業で来るなんて意外だったわ…」

「まあいいじゃねえかこうして動けるようになったんだからよ」

若干衣服が焦げているものの他には問題無さそうな二人はその声に従いMr. 3達の元を離れる。

ナミの作戦は単純、相手が蠟を使う能力者でその能力によって拠点を構えてるなら拠点を燃やせばいいじゃない、というものである。

まず拠点の周囲に炎や油を用いた罫をあちこちに仕掛けておき、そ

して拠点に対してウソツプの火炎星を強化した大火炎星を撃ち込み奇襲を、そしてその隙についてビビとゾロを救出する算段であった。

今回は最初の攻撃によりビビとゾロの拘束まで溶けるといふ嬉しい誤算もあり後は四人を拘束するなり追い払いれば良いだけだ。

幸いにもMr. 3には有効な属性がある事がわかっている、となれば問題はMr. 6とミス・マザーズデー、そしてイマイチ情報が不明なミス・ゴールデンウィークだけだが今回は一味勢揃い、しかもこちらにはブロギーが、かつて世界を混乱の渦に陥れた伝説の巨兵海賊団の片割れ、”赤鬼のブロギー”がいるのだ。

その戦闘力は今と昔で懸賞金のシステムも違う可能性はあるが、かつては1億というんでもない額がかかっていただけあり破格。ドリーがMr. 3相手に時間があれば勝っていたと豪語しているのは聞いているしまあ何とかなるでしょ、と考えていたナミだったが「うおおおお！勝負だ盾のおっさん!!」

一人単独で突っ込んでいく自身の船長を見て天を仰ぎため息をつく

「…まあ薄々そんな予感はしてたわ。ビビ、少しでも情報が欲しいわ。あいつらと戦った時の情報を教えてくれないかしら？」

ルフィやドリーの情報だけでは不明瞭な点もあり、その場にいたビビなら大丈夫だろうと聞いてみれば

「ええ、ナミさん。Mr. 3は蠟を体から生み出し自在に操ってくるわ：武器にしたり盾にしたり、蠟で相手の拘束をしてくる事もあったから要注意ね。」

次にMr. 6だけど彼の耐久は化け物よ、その身一つでドリーさんの拳を防いだ事から硬化系の能力者だと思う。

それからミス・マザーズデーだけど彼女によればロギア系では無いそうよ、ただ体を液体へと変化させるから物理は無効ね、因みに洋服に能力は及ばないらしくて全裸になるからサンジさんを近づけるのはやめておいた方がいいと思うわ？」

思った以上の答えにナミは満足しつつ矢継ぎ早に指示を出す。

「…となるとMr. 6はルファイが行ったしサンジくん！ウソツプと一緒にMr. 3を、罨の場所は覚えてるわね？」

Mr. 3：キャンドル人間相手には近接打撃系のサンジと、弱点をつくためのフォロー要員としてウソツプを

「へっ！弱点が分かかってるんならこっちのもんさ！」

「任せてくれナミさん！あの蝋燭野郎なんざさっさと片付けて見せるさ！」

「ゾロ！アンタは有効な攻撃が分かるまでミス・マザーズデーの足止めを！物理無効だから気をつけなさい！」

厄介な相手にはルファイに次いで高い戦闘力を持つゾロを

「はあ!?何でそんな相手をおれ一人で？剣術が効かない相手にどうしろってんだおい!?!」

「うっさいわね！あんたの好きなシュギョーよシュギョー、刀を燃やすなり何なりやってみれば？」

当然文句が飛んでくるもナミはどこ吹く風とばかりに無視。

「ちっ、まあいいさ敵は能力者：相手にとつて不足はねえ！」

「ビビ、あなたはミス・ゴールデンウィークをお願い、催眠系なら絶対にルファイに近づけさせちゃ駄目よ？ルファイは単純だからまず間違い無く催眠にかかっちゃうからね？」

ビビには詳細は不明だが催眠術を使うという少女の相手をお願いする、見たところ戦闘に心得がありそうには見えないが油断は禁物、かつてシロップ村で催眠術士相手にルファイがいいように操られた事を思い出し苦虫を噛むも最初からわかっていたら問題は無い、と考え直す。

「わかったわ、ナミさんはどうするの？」

「あたしはサポートにまわるわよ、ルファイが話も聞かずに突っ込んでいったからそっちのフォローもしなきゃいけないしね」

そう言いながらナミは自身の太腿に装着していた隠し棍を組み立てるとよし、と気合を入れ直すのだった。

## 蠟燭の脅威

「ぎーて、ビビちゃんを拐ってくれた落とし前はきっちりつけてもらおうぜ！」

それと共にサンジの蹴脚がようやく体勢を立て直したMr. 3を襲う。

「くっ！キャンドルウォール!!」

「へえ、それがお前の悪魔の实の能力ってやつか、鉄の硬度つてのもあながち嘘じゃねえって事か」

幸いにも火勢はだいぶ衰えており自身の能力がいつも通り使える事に安堵しつつ目の前の男を見るMr. 3

「…キサマは抹殺リストには載っていないなかったな、たかだか数名の少数海賊団が我々に勝てると思ってるのかネ？」

「それはどうかな！コリエ・シュートツ!!」

「無駄だと言っている！ドルドルアーツ・盾!!」

サンジが素早く横に移動しMr. 3の肩に蹴りを打ち上げようとするも、Mr. 3も当然それを自身の能力にて防ぐ、流星にこの状況なら自身の蠟も万全の状態だなどMr. 3はほくそ笑みつつ、サンジは足に感じたその蠟の硬さに苦虫を噛みつつ

「ふー、確かに厄介な能力だな…だが陰険メガネ、てめえは一つ忘れちゃいねえか？」

あわよくば一人でさっさと決着をつけてしまおうと考えていたが成る程これは無理だなと考え後ろに控えているウソップに合図を出す。

「ふん、今更負け惜しみカネ？貴様らは我らバロックワークスに逆らったのだ命乞いくらいなら聞いてやらん事も無いガネ？」

一方Mr. 3は自信を取り戻したのか再び相手を見下したかのようにならぬように言うも

「はっ、誰がそんな事するかよ。蠟つてのは溶けるんだろ？何の対策もなく能力者と戦うと思っただのか？」

その表情はサンジの言葉に一瞬で曇り怪訝そうな顔に

「なっ！貴様まさか！」

それと共に飛んでくるのは複数の瓶、それらはMr. 3の頭上にて破壊されガラスと一緒に当然Mr. 3に降り注ぐ。

「うし！完璧！」

瓶を放り投げ、間髪入れずに鉛星で瓶を砕いたウソップ はガッツポーズをとり

「これは…酒？猪口才なマネを…こんなもので私を倒せると思ってるのカネ!？」

突然酒をぶっかけられ、割れた瓶の破片を身に浴びたMr. 3はこめかみをひくつかせながら言うも

「ああ、悪いな陰険メガネ…だが知ってるか？酒って燃えるんだぜ？」

そのサンジの言葉にMr. 3の顔がひきつり

「その通りっ！サンジが料理に使うやつだから引火性は高いぞ！必殺・火炎星!!」

それと共に火薬と油を詰めたウソップ 謹製の特殊弾がMr. 3に着弾、先に身に浴びた酒の影響もあり大きく燃え上がる。

「なあっ！熱いっ！だ、誰か助けるガネっ!!」

「いかせねえよ… 首肉（コリエ）！肩肉（エポール）！背肉（コートレット）！鞍下肉（セル）！胸肉（ポワトリーヌ）！もも肉（ジゴ）！からの…羊肉（ムートン）ショットっ!!」

突然猛火に包まれ自身の能力も満足に使えない状態のMr. 3にその連続攻撃を避けれる筈も無く最後の一際強力な後ろ蹴りによって白目を剥いて倒れたのだった。

「よーし！おれ様の計画通りだな!!」

「ま、いくら能力者って言っても弱点がわかってりゃこんなもんか…」  
サンジとウソップ の二人は倒れたMr. 3に土をかけて鎮火、予め用意していた海水が入った樽にぶち込むというビビ直伝の拘束方法でMr. 3を見事に捕らえたのだった。

「よし、こっちは終わったしどうする？」

「そうだな、ウソップ お前はここでこいつを見張ってる、おれはナミ

さんかビビちゃんの手伝いに行ってくる…ああ、麗しのミス・マザーズデーに会いに行ってもいいかもなあ、とてもセクシーだったし是非ともお近づきになりたいもんだぜ」

だらしない笑みを浮かべて鼻の下を延ばすサンジに

「おいおい、程々にしとけよ？えーと、ビビはMr. 3の相方の女のとこでナミはルフィのとこだったか？ミス・マザーズデーって奴はゾロが相手にしてるんだったか？」

「なっ！あのクソ剣士！ミス・マザーズデーに手を出したらぶっ殺す！！待っててくれミス・マザーズデー！」

それと共にその場から駆け出しあつという間に遠くなるサンジの背中を見ながら

「ああ、行っちゃまった…まあ相手はロギア並って事だけどゾロとサンジの二人なら何とかなんだろう」

自分で言っておいてなんだがとてもあの二人が仲良く協力して敵を倒す、何て事は考えづらいなと思いつつも大人しくMr. 3の見張りを続けるのだった。

そして一方ビビはミス・ゴールドデンウィークを捕らえる為に彼女の元まで来ていたが何故か今はシートを広げた上で二人ゆっくりとお茶をしていた。

「…はっ!?!どうしてわたしはミス・ゴールドデンウィークとお茶なんか!?!」

「あら、もう切れちゃったんだ…まあいいじゃないミス・ウエンズデー、Mr. 3がやられちゃったからあたしとしてはあんまり戦いたくないんだけどなあ？」

ミス・ゴールドデンウィークの言葉にビビは彼女の情報を思い出す。

見た目は三つ編みおさげにりんごほっぺ、今見ているゆっくりとお茶を飲む姿からしてもなんて事は無い普通の少女だが、その実態は感情の色すら絵の具でリアルに表現できる「写実画家」であり、彼女は人の感情すら操るといふ催眠術のような技を使うと聞いている。

「…そういうわけにもいかないのよ、貴方の能力は厄介そうだしね！」  
それと共に腰の拳銃を引き抜こうとしたビビだったが

「まあまあ落ち着いて…カラース・トラップ” 友達の黄緑” …わたし達は友達でしょ？今別に争わなくてもいいじゃない」

ミス・ゴールデンウィークが手に持った筆を一闪、その言葉と共にビビは毒気を抜かれたように、何か大切な事があつた筈だけど…と思ひながらも

「ごめんなさい、ちよつと気が立ってたみたいね」

とその場に座り直すのだった。



## 液体と剣士

ゾロとミス・マザーズデーの戦闘は膠着状態にあった。

「ちつ、能力者って言えばバギーを相手にしたが厄介さはそれ以上だな!!」

そう悪態をつきつつも刀を振るうゾロだったが

「あらあ？アタシの能力が気に入らないのかしらあ？…まあ相性は良くないものねえ？」

雪走、三代鬼徹、和道一文字といった名刀達はミス・マザーズデーに何の痛痒すら与える事が出来ずただすり抜けるだけ。

「くそつ、三刀流・竜巻いつ!!」

相手が液体なら撒き散らせば何とかかなるかと考えても

「ぎあんねえん、その程度で勝てる程グランドラインは甘くないわあ？」

「ああくつそ！せめてあの蠟燭野郎みたく実態があるならまだしも…」

「ごめんなさいねえ？アタシのトロトロの実は、身体を液体に変える”…物理は効かないから貴方みたいな剣士は嫌うでしょうねえ？」

このままじゃ罅が明かないと感じたゾロは一旦攻撃の手を休めると

「はっ、ナミから聞いたがああ煙野郎みたくまるでロギア系の能力者だな」

と話をしつつ考える、自身の剣は全く有効な攻撃を与える事が出来ず、なおかつ今のところは他の攻撃手段も無し…

「ちよつとお…ロギアなんて化け物と一緒にしないで欲しいわあ？それにロギアってのは希少なよお？貴方の言った煙野郎…スモーカー大佐にかの名高き海軍三大将、空島にもいるとオーナーが言ってたわねえ、他にはドラムの雪女に我が社の社長であるMr. 0…そうそう、貴方達の船長のお兄さんもロギアだったわねえ？」

「なっ!?アイツ兄貴がいたのか?」

思ってもみなかった言葉に考えは中断される。

「あらあ？知らなかったのかしらあ？となるとここで色々いうのは無粋よねえ…まあ本人に聞いてみたらいいんじゃないかしらあ？」

「ちつ、気にはなるが今は置いといてやる…因みにだが剣が効かねえ能力者ってどうやって斬ればいいのか知ってたか？」

流石にその質問にはミス・マザーズデーは目を見開き

「貴方…普通ソレをアタシに聞かかしらあ？」

呆れたように言うもそれはゾロの

「まあいいじゃねえかよ、テメエも本気じゃ無いみたいだしいくらなんでも勝負がこれじゃしまらねえからな」

との言葉に少し手を抜きすぎたかしらあ？と考えつつも納得する。

「…まあ敵に教えを乞うなんて怖いもの知らずの貴方に免じて少しレクチャーしてあげるわあ。

まあグラウンドライン初心者なんだし当然知らないでしょうけど刀で斬れないっていうのにも何種類があるわねえ。

一つはアタシみたいな流動性の身体を持ち物理を無効とするタイプ、次に何らかのルールが働いており攻撃そのものを無効化するタイプ、そして次に刀で斬れない程の頑丈さを持つタイプ…ここまではいいかしらあ？」

「お、おう問題ねえ…ていうか戦わねえなら服着ろよ!!」

思ったよりしつかり教えてくれるらしくきちんと手順を踏んで教えるミス・マザーズデーにゾロは都合の良さを感じつつもしつかりと聞いておく。

「二応戦闘中なんだけどお？」

と文句を言いつつとりあえず毛皮のコートだけを羽織るミス・マザーズデーだったが裸体にコートとある意味全裸よりも不健全な格好に見えるが服を着た事に間違いは無いのでこれ以上の藪蛇は勘弁、とばかりに沈黙も保つ。

「さて続けるわよお？とりあえず三つに共通する方法なら一番手っ取り早いのは海に突き落としてしまえば早いわよお？」

「いきなりえげつねえな!？」

「だってえ、その方が早いんだものお…他には海楼石を使うというの

もあるわねえ?」

「そのカイロウセキ…ってのは何だ?」

「んー、平たく言えば海のエネルギーを持つ鉱石ってところかしらあ? 能力者に触れると海に浸かった時と同じく力が抜けるって代物よお?」

「へえ、そんなもんが…ということはそのカイロウセキとやらで打った刀がありや解決だな!」

「ざあんねえん、そうそう美味しい話は無いわよお?

まず海楼石はとても希少なこともあるしい、何より厄介なのはその硬さ…大雑把な加工はともかく武器を作ったりなんてのはとてもじや無いけど無理な話ねえ…」

「成る程なあ、とは言え能力者にはかなり有効なんだな…どつかで手に入らねえか? ナミならなんか知ってるかもしれないねえな…」

「後は覇気を使うって方法もあるけど…流石にこれは早すぎるわね、下手に知識を持ってても良いとは言えないし…さて! 次はそれぞれの対応方法よお?」

考え込むゾロに対してミス・マザーズデーは前半を小声でボソリと言うと次の方法について話し出すとゾロは聞き逃すまいと耳を傾ける、そして丁度その時であった。

森の奥から何者かの叫び声…だんだん大きくなるその声は

「…ズデー! 麗しのミス・マザーズデー!!」

大声でミス・マザーズデーの名前を呼ぶ声にゾロは頭を抱えるとそこにはよほど急いで走ってきたのか急制動をかけて止まるサンジの姿

「おお! 麗しのミス・マザーズデー!! 貴女のサンジがやって来ましたよ!!」

ミス・マザーズデーの前に跪くとその手を取り口付けをするサンジに

「あらあ? ありがとう…確かコックさんだったかしらあ?」

とミス・マザーズデーは妖艶な笑みを浮かべ、サンジがそれに応えるべく目線を上げれば

「はい！コックをしていま…うほっ！なんちゆうセクシーな格好!!」  
走って来た時には見えてなかったのか素肌にコートを羽織っただけというあられもない格好に目をハートに鼻血を垂らすサンジ。

「おいクソコック！テメエ何しに来やがった!! 蠟燭野郎は片付けたのかよ!!」

「ああ？クソ剣士、テメエがミス・マザーズデーにひでえ事してないか確認しに来たんだよ！

因みにあの陰険眼鏡なら片付けたぜ？お前が苦戦したあの陰険眼鏡はな!!」

ゾロが苦戦したという部分を強調して言うサンジにこめかみをひくつかせつつ

「…言うじゃねえか、なんだったらテメエから斬ってやろうか？」  
と刀を抜こうとするも

「あらあらあ？そうねえ、二人ともこれみて落ち着きなさあい？”ハニー・トラップ”」

そう言いながら諸肌をはだけさせたミス・マザーズデーに  
「ぶほおっ！ありがとうございます!!」

サンジは鼻血を出しながら倒れ  
「テメエほんとに何しに来たんだよ!？」

あんまりと言えばあんまりな仲間の姿にゾロは頭を抱えるのだった。

## 鉄壁への一矢

ルフィとMr. 6の戦いは土煙が立ち、周囲の木々はへし折られ、と激戦の様相を見せていた。

…とは言え実際にはゴムの身体を持つルフィに鋼鉄の身体を持つMr. 6、物理…特に徒手空拳が効かないだけあり、お互いに激しく殴り合うものの二人とも全くのノーダメージ。

「くっそお、やっぱかってえなあ…盾のおっさん！お前、何の能力者だ!?!」

「はっはっは！おれはカチカチの実を食べた能力者さ、身体を鋼鉄のように変化出来ると言えば納得かい？」

「面倒くせえ能力だなあ…、でもおれもゴムだからな！こっちの攻撃は効かねえけどお前の攻撃も効かねえぞ！ゴムゴムのガトリングっ！」

それと共に再び拳を繰り出すルフィだったが

「ふむ！いい啖呵だ！…だがそれは少し慢心し過ぎだね！熱拳砲（ヒート・カノン）!!」

それと共に赤熱化したMr. 6の拳がルフィに突き刺さり、想定していなかった攻撃に

「あ…あっちい!?!くそっ!!何だそのパンチ！お前の能力硬くなるってやつじゃねえのか!?!」

「はっはっは!!空気との摩擦によって拳は炎を纏うのさ!!」

「なんだと!?!すげえなソレ！おれも出来るか!?!」

「とまあ冗談は置いておいて…」

「冗談かよ！おれも出来るかと思っちゃまったじゃねえか!!」

「実際そういう技術があるのは確かだよ、特に君なんかゴムの特性もあるから習得出来そうな気もするけどね！」

「ふ、ふーん?そういうんならちよつと試してもいいかなー?…じゃなくてじゃあさっきのお前のパンチなんだよー！」

「はっはっは！言ったじゃないかルフィくん、おれは身体を鋼鉄のように変化できる…すなわち溶けた鋼鉄のようにも出来るって事さ！

熱拳砲!!」

「うおお!!」

何とか赤熱化した拳を躲すルフィだったがこれで戦いの天秤はMr. 6に傾いた。

「さて、これでこちらの攻撃は君に有効になったわけだが…どうするかい？止めるかい？」

それまでは互いの攻撃が効かない故に膠着状態だったが、流石にルフィの身体がゴムで打撃を無効化するとは言え、熱は別…今までと違い迂闊に拳を受けるわけにはいなくなつたルフィは咄嗟に距離をとると

「こんにやろお、ゴムゴムのお…バズーカっ!!」

自身の攻撃の中でも高い威力を持つ、両手を大きく伸ばしての掌打で相手を弾き飛ばそうとするも

「ふむ、いい拳だね!だがおれを吹き飛ばすには少し威力不足だね!”豪腕砲!!”」

「ぐっ、これでもダメか!?だったら…ゴムゴムのお…キャノン!!」

飛んでくる拳圧を受けつつもルフィはガトリングでもバズーカでもダメなら…と両方合わせればいとばかりに繰り出した両拳はMr. 6へと向かい、その威力を察したのか寸前に両腕を上げるも

「ぐうっ!!」

あまりの威力にガードを超えてダメージを受けるMr. 6。

「おしっ、通った!!どうだ、見たかこんにやろ!!」

「はっはっは…まさかおれの鉄壁を破るとは…もつと分厚くしてもよかったかな?」

「ししっ、これでもうやられてばっかりじゃねえぞ!」

「熱拳砲がよっほど気に入らないようだね…しかし驚いた、砲弾を跳ね返す程度の厚さなら問題にならないようだね」

「もう一発行くぞおっ!!ゴムゴムのお…キャノン!!」

それと共に再びMr. 6を襲うルフィの拳…それを見て成る程、とMr. 6は考える。

ゴムゴムのガトリングと呼んでいたゴムの反動を使った乱打とゴ

ムゴムのバズーカと呼んでいた双掌打：どちらもゴムの反動を使っているがこのキャノンはガトリングという技の反動をバズーカに繋げる事で一点に集めたものだろう…

かつてゼファーに教えられた防衛術によってその両拳を打ち払いつつ前進、技を放った後でガラ空きとなった胴体に拳を当て

「零距离：剛腕砲っ!!」

と相手の体を吹き飛ばした。確かに先程の技は強力だろう、戦艦の砲撃程度なら弾き返す厚さの鋼鉄：Level. 3程度の硬度にしていたとは言え、その防御力を超える攻撃だ。

だが攻撃を加えるまでの溜めが必要だったり、攻撃を放った後も隙が大きい…とは言えそれを言うのも酷だろう、何しろこの技は初めて放ったもの、その辺りは自ずと洗練されていくだろう…だがまあこれで戦力の底上げというオーダーは果たしたしMr. 3も敗れたようだし、この任務は失敗だしさっさと撤退するべきか…と考えていたが「うおおおおおっ!!ゴムゴムのおっ…HEAT・ブレットおっ!!」「なっ!?この短時間で…しかもモノにするとは驚いたな!!」

ルフィの腕から放たれたのは高熱を纏った拳、流石に炎を纏うとはいかなしいものの腕をいつもより限界以上に伸ばし、更に高速で引き戻す事により熱を纏わせたのだ。

雑談で話した程度の事に対して思った以上の吸収力の良さにMr. 6は目を瞠る。

Mr. 6：本名はパール、カチカチの実の能力者にしてバロックワークスフロンティア・エージェントのトップ。

バロックワークスに入る前はグランドライン前半にて賞金稼ぎを行なっており、そこをスカウトされた…となっているがその実態は全く違う。

海軍本部海軍独立遊撃隊所属の本部少佐にしてバロックワークスに潜入しているスパイ…そんな彼は自身の本当のボスから一つの指令を受けていた。

”モンキー・D・ルフィの戦闘力の底上げ”

そしてそれは上手く行き、そして思った以上の伸び代にパールは思

わず笑みを浮かべるのだった。



## 黒幕との会談

「お茶してるとごめんねっ!!」

それと共に組み立て式の棍を無防備なミス・ゴールドデンウィークの頸筋目掛けて振り下ろすナミ。

全く予期していなかったのだろう、ミス・ゴールドデンウィークは煎餅を持ったままあつさり意識を手放し、それに対してビビは友人をいきなり気絶させたナミに文句を言おうとするも

「…ってあれ？何でわたしゆっくりお茶なんか？」

「あら正気に戻ったみたいね。あなた、そのちみっ子の催眠術にかかってたのよ？」

その言葉にハツとなるビビ。

「油断してたわ…こうも簡単に催眠にかかるだなんて…」

「まあ、見た感じ一定時間毎に掛け直してたみたいだし仕方ないんじゃない？これがルフイだったら催眠にかかりっぱなしなのが目に浮かぶわよ」

そう言っって肩を竦めてみせるナミにビビは

「そう言えばルフイさんは？Mr. 6と戦ってるんでしょ？」

「そうなのよ。あのバカ話も聞かずに一人で突っ込んでいっちゃうんだもん。追いかけたはいいけど…とてもじゃないけど近づきたく無いわね。あたしっって自分から危険に突っ込んでいくほど愚かじゃないつもりだし」

そう言っってナミが指差す方向をビビが見ればそこには断続的に上がる土煙と時折聞こえる轟音。

「…成る程、言いたい事はわかったわ。でも、どうしてここに？」

「簡単よ、ルフイは諦めてどっちかと合流しようと思っってね。丁度良く目に入ったのはいいけど敵とお茶してるんだもん、びっくりしたわよ？」

「う…ごめんなさい。普通に彼女のことを”友達”だと思っって何の疑問も持っって無かったわ…」

「で、催眠術士がいるって話は聞いてたからなにかあると思って様子を伺ってたのよ、それからタイミングを測って後ろからこっそり近づいて気絶させたってわけ」

「助かったわ。そう言えばMr. 3がやられたって聞いたけど?」

「ええ、それは本当よ?ここに来る前にウソップと一回会ってるわ。」

Mr. 3は海水樽に捕縛済み。ミス・ゴールデンウィークもこの通りっ!だし、後はMr. 6のペアね」

そう言いながらナミが気絶したミス・ゴールデンウィークを縛り上げていた時だった。

ぷるぷるぷる、ぷるぷるぷる、ぷるぷるぷる…

「電伝虫の泣き声…?」

突如聞こえてきたその声に辺りを見渡せば端のコゲたバスケット。その中に一匹の電伝虫が鳴いていた。

「…はい?」

警戒しながら恐る恐る電伝虫の受話器を取ったナミの耳には

『少し報告が遅すぎるんじゃないかねえか?…Mr. 3はどうした、ミス・ゴールデンウィーク』

低い男性の声、咄嗟にナミは「あ、これヤバイやつだ…なんで迂闊に電話に出ちゃったんだろう…?」と思いつつも怪しまれない様子にすっ

「Mr. 3なら戦闘中、ところで誰?」

薄々察しながらもそう聞けば

『おれだ、”Mr. 0”だ…』

予想通りといえば予想通りの言葉にナミは頭を抱えなくなるも、息を飲むビビの口元を慌てて抑えて黙らせる。

そのままナミは考える、Mr. 0…?という事はこの電話の向こうにいるのは王下七武海の一人、サー…クロコダイル…

『おれが指令を出して随分と日が経つが…一体どうなってる?』

その言葉に違和感を覚えるナミ、Mr. 3達が襲ってきたのは今日になってから…?という事は指令自体はウイスキーピークのすぐ後くらいには出てたって事かしら?となるとMr. 3はわざわざこの島

で網を張っていた…て事かしら？

『何を黙りこくっているミス・ゴールドデンウィーク、王女ビビと麦わらの一味抹殺の任務はどうなっている？と聞いているんだ…』

その言葉に少し考える、ここで任務は完了だと言えば追手は来ないだろう、だがMr. 3が戦闘中だと言ってしまった以上まだ任務は完了とはなっていないのは察しているだろう。

かと言って下手な事を言えば更なる追手が来る可能性もあるし…しかしいつまでも考え込んでいられないので

「Mr. 3がいま麦わら帽子の奴と戦ってる。ロロノア・ゾロとMr. 6も戦闘中。王女ビビとオレンジ髪の女は始末した」

とりあえず自分たちは死んだ事にしておこうと考え、そう言えば

『…何故Mr. 6が？まあいい、Mr. 6もいるのならこれ以上の戦力は必要ないだろう。』

Mr. 3に伝えておけ、今アンラッキーズがそちらへ向かっていてる。任務完了の確認と、ある届け物を持ってな…』

「…届け物？」

『ああ、アラバスタ王国へのエターナルポースだ。お前たちは任務が完了次第アラバスタへ向かえ。時期が来た…おれ達にとって最も重要な作戦に着手する。詳細はアラバスタに着いてからの指示を待てる…』

Mr. 0の話を作る程、と聞くナミだったが口を抑えられたビビが呻きながら上空を指差すので何事かと見れば

「なっ!?あの時の…」

と思わず声を出して慌てて抑える。

上空にいたのはかつて自分たちの話を聞いて、ついでに似顔絵を書いたラッコとハゲタカ…ビビがアンラッキーズと呼んでいた者達…という事はいいつらを帰したらこの小芝居がバレるじゃない！と考えたナミはビビにわかってるわね？と目配せすればビビも拳銃を両手にコクリと頷く。

『おい…どうした…』

「ちよーつと騒がしくなるけど待ってて！」

そう言つて受話器を伏せると両手に刃がついた貝殻を持ち、猛然とこちらに飛びかかってくるラッコにナミは愛用の折り畳み棍で振り上げ、横薙ぎ、袈裟掛けと乱撃を加え、武器を弾き飛ばされ耐性を崩したMr・13に大上段からの振り下ろしが脳天に叩きつけられあえなく撃沈。

そして機関銃を背負つたハゲタカ：ミス・フライデーに対してビビは素早く拳銃を撃ち尽くしそのまま大きく弧を描いたミス・フライデーにニヤリとしつつ右足を大きくミス・フライデーに振り抜けばビビの足からは銀閃が翻りミス・フライデーの羽に数個の投げナイフが突き刺さり、哀れ痛みによりバランスを崩したミス・フライデーは地面へと墜落したのだった。

そのままビビはナミに向かつて頷くと自身はミス・フライデーの元へ、そしてナミが再び受話器を耳に当てれば

『随分と騒がしい…何事だ?』

「この島には巨人がいるのよ。時々こつちを襲ってくるのよ。だから電伝虫を抱えてその場を逃げただけよ」

戦闘があつた事などおくびにも出さずにそう言つてのけたのだった。

## 小さな庭での戦闘決着

「さて、そろそろか…」

「くっそ！お前さつきより避けるの早くなってるじゃないか!？」

当初とは見違えるようになったルフィの拳を避けつつ Mr. 6 は一人そう零すと

「さて、残念だがルフィくん！そろそろ時間切れみたいだ!!おれ達は撤退させてもらう、この勝負は君達の勝ちだよ！」

と自身に飛んできた拳を掴みつつ言う。

「げっ!?!離せこんちくしょう!!」

「はっはっは！お望み通り離してあげるよ、では達者でね！また会おう!!」

そして Mr. 6 はルフィの腕を掴んだまま大きく上体を動かすと

「へっ!?!うおおおおお!!」

「そらっ！空の旅を楽しみましたまえっ!!」

そのまま大きく投げ飛ばす。

「くっそおおお！覚えてろよおおおっ!!」

そのまま叫びがこだましつつ飛んでいくルフィを尻目に Mr. 6 はうんうん、と頷くと己の相方であるミス・マザーズデーの元に向かうのであった。

そして一方その頃

「成る程、でルールがある悪魔の実は法則を見つけなきや本体にダメージが通らなねえって事か…」

「そうよお？例えばダメージを他の人間に移したり、あなた達の船長さんなんかがいい例ねえ、彼はゴムだから打撃系は効かないでしょう？」

「流石ミス・マザーズデー！君は物知りだね!!」

「ちよっと黙ってるクソコック！で後は防御力が高い場合の能力者だか…」

もう既に戦闘という雰囲気では無いミス・マザーズデーと相對するゾロとサンジだったが

「おや、楽しそうだなミス・マザーズデー」

「あらMr. 6、時間かしら？」

そこに現れたのはMr. 6、ルフィと戦っていた筈の相手の出現にゾロとサンジは直ぐに警戒するも

「ああ、落ち着いてくれこっちはこれ以上戦うつもりは無いよ」

と両腕を上げてアピールするMr. 6に二人は顔を見合わせる。

「…てめえ、ルフィと戦ってたんじゃないかよ。何でここにいやがる？あいつはどうした？」

とは言え相手の言う事を鵜呑みにするわけにもいかないのでもう聞けば

「ん？彼なら船の方じゃ無いか？方向なら合ってると思うが…こっちにはもう今は戦う理由が無いからね、そろそろ撤退させてもらおうよ」

「はあ？何企んでやがる…？テメエMr. 0とやらの命令を受けておれ達を殺しに来たんじゃねえのかよ？」

「はっはっは！おれ達を呼び寄せたのはMr. 3だからね！彼がやられた以上こちらでも争う理由が無い、命令が出てるわけでも無いしね！それではさらばだ！またどこかで会おう!!」

それと共に素早くその場を去るMr. 6、それと共にミス・マザーズデーも

「と言うわけだからアタシもそろそろお暇するわあ？あ、防御力が高い能力者相手ならとりあえず斬ればいいんじゃない？」

「おい、いきなり適当になったな…」

「そうねえ、”斬鉄”でも出来るくらい研ぎ澄ませばいいんじゃないかしらあ？」

そう言い残しミス・マザーズデーはドロリ、と自身の身体を変化させると地面に溶けるように姿を消したのだった。

「な！ミス・マザーデー!!まだ君に愛を囁き足りないのに!!」

「うるせえクソコック！…鉄を斬れてんな無茶な。」

まあいい、相手が退いたってんならとにかく今はルフィ達と合流するぞ、相手の言葉を鵜呑みにするのは癪だな…」

「はっ、苦戦してた割にはよく言うじゃねえかマリモ剣士」

「うるせえ、兎に角ルフィなりナミなりきつさと合流するぞ、本当に敵が退いたかどうかわかんねえしな、こつちを放ってビビのどこに行った可能性もある」

「そうだ！ナミさんとビビちゃんが危ない!!」

ゾロがそう言えばサンジはその言葉にハツとしたように単身その場を離脱、あつという間に遠くなる背中に

「…あの野郎、マジで女の事しか頭にねえのか？」

ゾロの呟きがポツリと溢れたのだった。

そしてゴーイング・メリー号の停泊地点で頭から地面にめり込んだルフィをウソップとカルーが引き抜いているとそこにゾロとサンジが到着、更にその場にナミとビビがいないと知ったサンジが再び森の中に駆け出そうとしたところで

「あら、本当にみんな集まってるわね？と言う事はあの盾男の言っていたのは本当だったみたいね」

「Mr. 6…何を考えてるか得体が知れないわね、クロコダイルの指令は受けて無いつて言ってたけど…」

小脇にミス・ゴールデンウィークを抱えたナミとビビが到着、数時間ぶりに一味全員が最集合したのだった。

なお巨人族であるドリーとブロギーは真ん中の火山が噴火したので元気に殴り合いをしているが。

「さて…じゃあ男共、それぞれ何が有ったかを全部話しなさい？言っとくけどちやんと話してよ？変に略したりしたら計画が立てられないんだからね？」

そうしてナミの主導の元それぞれの戦闘において何が合ったのが話し合われるのだった。

そして少しだけ時間を遡りアラバスターのカジノ街…レイン・ディナースにて一人の男が電伝虫を切ると

「…ミス・オールサンデー、Mr. 6達は何をしています？」

自身の協力者である女性に問いかけた。

「あら、エターナルポースは渡したからこつちに向かっている筈よ？貴

方がそう指示したんじゃない」

その言葉に確かに、と顎に手を当て考える。

「…となるとMr. 3の独断か？確かにフロンティア・エージェントとは言えカチカチの実の能力者とトロトロの実の能力者、戦力としては別格だしMr. 3が呼び寄せたのも話はわかるが…」

「別に急いで来るように言っただけじゃないし寄り道くらい仕方ないんじゃない？誰か確認にでも送ろうかしら？」

その言葉に少し考えるも

「…いや不要だ、どの道既にアンラッキーズが向かっている。

あの任務の達成に執念を燃やすMr. 3に加えMr. 6ペアも行ってるのなら問題は無いだろう、人手は足りているとは言え無駄なところに戦力を割く気は無い…」

「貴方がそう言うのならいいわ、そうそうMr. 2が先ほど到着したらしいわ、任務でも与える？」

「とりあえず待機させておけ、いつ動いてもらうとも知れんからな」

その言葉にミス・オールサンデーは頷きつつMr. 2への連絡のためその場を離れるのだった、7:3で疑念があるくらいかしら？…と考えながら。



## 鉄壁鈍熊 ドンクリークさん

「…何か船足が遅いわね、風のせいかしら」

疲れか、何かの病気かは不明だがリトルガーデンを離れた後で一味の航海士であるナミは高熱を出しながらも進路を指示していた。

そこにルフィがやはり心配なのか片手をナミの額に当てると

「あっちい!? あっちいぞお前、やっぱ船止めて医者んトコ行こうぜ?」

その言葉と共に慌てて手を離す。

「余計な事しないで! これがあたしの平熱よ、バカやってないでさつさとロープを引きなさい!」

「ナミさん、ビビちゃんの為だったのあわかるけどよ、あんまり無理したら元も子も…」

「平気だつて言ってるでしょ!!」

自身の不調を押し除けてそう言うナミであったがやはり無理がたたったのかクラリとして倒れそうになる所を

「ナミさん、わたしの事を…アラバスタの事を心配してくれるのはありがたいわ…け・れ・ど!! だからってナミさんが苦しんでどうするの!」

元々国王軍60万と反乱軍40万だった所を40万が寝返った?

それでも! そんな事でわたしの国は倒れはしないわ!!

だから貴女がやるべき事は病を押し除けてでも一刻も早くアラバスタに到着することじゃあないわ! 一刻も早く医者にかかって万全の状態でアラバスタを目指す事よ! 違う?」

いつもと裏腹に怒涛の勢いで言うビビにナミはたじたじとなりつつも

「でも20万対80万よ!? どうするのよ! それを何とかする為にアラバスタに向かわなければいけないんじゃないの!」

「…ナミさん、わたしだつて最初から血の一滴も流れないだなんて思っただけ、そして何より…わたしの国民を舐めないで、この程度でクロコダイルにしてやられるのならアラバスタなんかとつくに亡

国になってたでしょうね」

「…本当に問題無いのね？」

「言ったでしょ？みんな！直ぐに医者のある島を探すわよ！ナミさんの病気を治して一刻も早くアラバスタへ！！勿論文句は無いわよね？」

そのビビの言葉にルフィはにっと笑うと

「おお！それがこの船の最大船速だからな！」

と答えたのだった。

そして一方、リトルガーデンから少し離れた海域に一艘の船が停泊していた。

黄金の吠える熊を船首にグランドラインの入り口辺りでは珍しい外輪を持つ蒸気船…言わずと知れたクリークの搭乗する偽装戦艦”ベアトリーチエ号”である。

そしてその甲板に据え付けられた巨大な椅子に、いかつい顔の電伝虫とそれに繋がれた白いむすつとした顔の電伝虫を横にクリークは腰掛け通話を行っていた。

「ふむ、航海士が倒れたか…原因は？」

『ああ、聞き取れた内容によればかなりの高熱みたいで…ひよつとしたらこの海に入ったのは初めてだろうし、そっち関係かもしれないっすね。』

兎に角その治療の為にアラバスタの前に寄り道という事で今は南に向かっているっす』

「了解した、南…となると…方向的にドラムにぶち当たるかもしれない…」

『あれ？ボスは確かドラムに向かってたんじゃ…？』

「ああ古い馴染みを迎えにな、しかしドラムか丁度いいし一旦そっちで合流するか、今後の予定についても話したいしな」

『了解したっす、兎に角おれ等はそのままくつついてそちらに向かいますので』

「バレてはないか？」

『ええ、航海士のお嬢ちゃんが少し違和感を覚えたみたいですが気のせいだと判断したみたいっすね、まあこの船自体かなりの軽量化施し

てますし、そうそう気付かれるようなへまはしませんよ」

「ならば良いが：最初からエターナルポースを渡しておけば良かったな」

『今更言ってもしょうがないですよ、：本当だったら彼等に拾ってもらう為に隠れ家に残しといたのに最初の奇襲で壊れちゃいましたからね：』

「まあその辺も後で合流時に聞かせてもらおうさ、では切るぞ？心配無いはと思うが海軍に気取られても敵わんからな」

了解しましたつす、との返事と共に電伝虫を切るとクリークは「なるほど、今の所大筋は変わらずか：とは言え変えようが無いだろうけどな。」

しかし40万が反乱軍に寝返っただど？どうなつてやがる：何かイレギュラーか？」

ニユース・クーから買った新聞を手に首を捻るクリーク、原作でそんなに差があつたつけ？と考えるも既に記憶は遙か遠く、覚えているのは王国軍と反乱軍で数が逆転したという所だけである。

考え込むも答えは出ず、そうこうしていると

「旦那あ、前方の島から船が来てるぜ！海賊船だ！」

マストに登って見張りをしていたジョークからの報せ、とりあえず考えを中断して海賊船？リトルガーデンから？と思いつつも

「旗印はなんだ！」

「翼を持った髑髏に交差するレイピア！縞模様の帆に小型の帆船です！」

ジョークの言葉に少し考えてん？翼とレイピアの髑髏？とハツと思いついて慌てて過去に書いた手帳をパラパラとめくっていけば

「：バロックワークスか、パールは麦わら一味について行ってるし：Mr. 3か？麦わら一味に捕らえられたとパールは言ってたが、置いていったのか？」

クリークが答えに至ると同時に風を切る音と共に飛んでくる白い砲丸、難なく受け止めるも続け様に聞こえてきたのは

「その船！：大人しくそのまま止まるガネ！船を沈められなくなけれ

ば全員両手を上げて大人しくしていることだ！沈められてもいいな  
ら話は別だガネ？」

と大声で叫ぶ特徴的な髪型をした男の声だった。

## 蠟燭交渉　ドンクリークさん

実はMr. 3とミス・ゴールデンウィーク。

この二人は麦わら一味に倒された後気絶した状態で船に放り込まれそのまま錨と帆をあげられそのまま波に流されていたのだった。

気絶したミス・ゴールデンウィークは取り敢えず目覚めてからMr. 3の拘束を解いた後、兎に角何か食事でも摂ろうと痛む首筋をさすりながら船倉に向かったのであった。

そしてMr. 3が目を覚ましたのとミス・ゴールデンウィークが部屋に戻ってくるのは同時、彼女は開口一番

「Mr. 3、起きたのはいいんだけどこの船食糧も水も財宝も全く無くなってるわ、どうするの?」

との言葉に固まり

「:~:~:~:という事だガネ? 私は火をつけられた後拘束されていたと思うのだが:~:~:~:ここは私の智略天然丸カネ?」

「停泊してた場所から流されてたから帆は畳んで錨は下ろしたけど:~:~:~:因みに海水入りの樽に入ってたから出したんだけど:~:~:~:出さない方が良かった? 海水浴かしら?」

「そんな訳ないガネ!?! それより食糧も水も財宝も無いとはどういう事だガネ? 麦わら一味はどうしたカネ?」

「わたしも女王様を捕らえてただけどころ、後ろからゴつと:~:~:~:」

と自身のうなじに手を当てるミス・ゴールデンウィークに

「:~:~:~:となると我々はやられた後に船に放り込まれて流されたと言うことカネ? そうか! 食糧や水、財宝を持っていったのはアイツらカネ!?!」

合点がいったと伝えるMr. 3に頷き

「多分:~:~:~:まあ一応海賊だからね、どうする? 島はまだ見えるし戻る? 食糧も水も無いけど:~:~:~:」

「Mr. 6に連絡はとれるカネ?」

「電伝虫も無くなってる、それにログポースも無くなってる念の入れ

ようだわ」

「…任務に失敗したとなればどうなるかわからんガネ、Mr. 6が首尾良くやってくれていれば良いのだがガネ…兎に角一旦リトルガーデンに戻るガネ！幸い島影は見えているのだからまだ間に合うガネ！ミス・ゴールデンウィーク、錨を上げたまえ私は帆を張るガネ！」

そして慌ただしく二人は島に向かう準備を始め、そしてミス・ゴールデンウィークの船が見えるとの言葉に少し考える。

見たところかなりの大型船、だが帆や旗印に特徴的なマークは無く商船か？と考えるMr. 3

「…ミス・ゴールデンウィーク、先にあの船と交渉するガネ。

あの島は巨人族しか住んで無いし食料や水が安定して手に入る訳でも無いガネ…それにログポース、若しくはエターナルポースが手に入る可能性もあるガネ」

「…蒸気船なんてここら辺では珍しいわね、パツと見武装は無いけど…商船かしら？腕利きの護衛がいる可能性もあるけど？」

「ふん、ミス・ゴールデンウィーク…私を誰だと思っているのかネ？私はドルドルの実の能力者、そんな護衛なんぞ鎧袖一触だガネ！」

「…麦わらの仲間に倒されたけどね」

「細かい事は置いておくガネ！兎に角進路を一旦あの船に向けるガネ！！ドルドルアーツ…投石機！」

それと共にMr. 3は甲板に自身から溢れさせた蠟で小型の投石機を作り出すと船を商船に向けて走り出す、そして続け様に蠟の砲丸を二つ発射すると

「その船！！大人しくそのまま止まるガネ！船を沈められたくなければ全員両手を上げて大人しくしていることだ！沈められてもいいなら話は別だガネ？」

と大声で言うのだった。

乗り込んだ船の甲板には青年と大男、恐らくこの二人が護衛だと判断しMr. 3は口火を切る。

「さて、先ほども言った通りこの船の水と食料をこちらに分けるガネ、船長はどうだガネ」

「そうだな、一応船長はおれという事になるが…」

その言葉に意外に思いつつも

「ほう、てつきり護衛だと思っていたガネ?…まあいい、大人しく食料と水を寄越すガネ、あああとアラバスタへのエターナルポース若しくはログポースもあればそれらも寄越すガネ」

「へえ?食糧や水をだけでなく船乗りにとつて命綱となる指針を寄越せと?随分と高く出たな?」

「ふん、貴様らは船を沈められなければ言う通りにするガネ」

「…因みにこの船はステラ財団の所属だ、こう言えばわかるか?新世界の怪物に喧嘩を売る気か?」

その言葉に一瞬Mr. 3は硬直するも例えあの財団に所属してようが沈めてしまえばいい話、もし何かあっても自身のボスがクロコダイルだと言うあの小娘の話が本当なら海難事故なり何なり処理して貰えばいいだろうと考える。

「御託はいいガネ…言っておくが私は悪魔の実の能力者…こんな船を沈めるなんて造作も無い事だガネ!!」

そう言つて体から蠟をドロリと溢れさせるMr. 3に

「なるほど、ではこちらも精々足掻いてみせようか?食料と水を分けただけならまだしもログポースは渡せんからなあ?…なあ”閻金”のギャルディーノ?」

側にいた青年を後ろに下がらせゆっくりと構える大柄な男。

「なっ!?貴様どこでその名を!!」

「知ってるぜ?サウスブルーで高利貸しとして知られており金融詐欺をしたとして表舞台から姿を消していたな。」

パラミシア系、ドルドルの実の能力者であり…そしてかの犯罪秘密結社のエージェントMr. 3?」

「…そこまで知っているのなら消すしかあるまい!!ドルドルアーツ・大槌!!」

それと共にMr. 3は蠟で作り出した大槌を手に目の前の男に振り下ろすのだった。

## 蠟燭激突　ドンクリークさん

Mr. 3 かあ…原作ではリトルガーデン編にて智略によりドリーを罫に嵌め、ブロギーを拘束した上にビビ王女とナミ、ゾロを捕らえたバロックワークスのオフィサーエージェント…そして汎用性に富む蠟を操る能力者だった。

その後海軍に捕縛されたんだっけ？そしてインペルダウンに投獄、インペルダウン編では蠟が毒や菌に強い防毒性を持つ事からあのマゼランの攻撃さえ防いだ程である。

確かに固まれば鉄の硬度を發揮するというのは強いんだが…如何せん鉄程度の硬さではなあ、まあ相手は正体バレしている事もありこちらを殺す気だろうがこっちは少し手を抜いてやるかとクリークは考えつつまずは振り下ろされたハンマーを軽々と片手で受け止めた。

「む、片手でこれを受けるか…どうやら怪力が自慢カネ？」

「さあな？しかしドルドルの実か、随分と汎用性に富んでいるらしいな」

「ふん！その身で味わうがいいガネ！キャンドルロック!!」

それと共に拘束すべく放つたれる蠟をクリークは危うげ無く回避、それと共に接近してそのまま拳にて殴りかかる。

「キャンドルウォール!!その程度の拳で打ち破れると思わない事だガネ！」

「ほう、蠟と言う割には随分と頑丈みたいだな？」

「ふつ、私が生み出す蠟は固まれば鉄の硬度を持つガネ！そらっキャンドルロック!!」

そうして飛んでくる蠟を今度は敢えて右腕に受けて纏わせるとそのままMr. 3に向けて大きく振り下ろせばMr. 3は再び蠟の壁を生み出し防ぼうとして

「なっ…ぶへえっ!」

ピキピキと嫌な音と共に右腕に纏っていた蠟と壁にしていた蠟が同時に壊れ、そしてそのまま拳がMr. 3の顔面に突き刺さった。

「ふむ…こんなものか、いくら鉄の硬さを持ってようが同じ硬さをそ



れなりの速さで叩きつければ問題無いようだな…」

「なっ！貴様!!わ、私の能力を!!」

「ああ、有効利用させてもらったとも。…しかしこんなもんか？ギャルディーノ、かつて四千万だか五千万だかの首を仕留めたって聞いたがただの噂か？」

「っ…!!舐めないで欲しいガネ!!ならばお望み通り絶望を味わえ!!出撃・キャンドルチャンピオン!!」

掛け声と共に体から大きく蠟を溢れ出させたMr. 3の胴に、脚に、腕に白い蠟が巻きついていく。

そして程なくして完全に人型を取るとそれは拳を打ち鳴らしこちらに向き直り

「ミス・ゴールドデンウィークの美術的塗装が無いのが残念だが…まあ良かったかだかパワー馬鹿が一人この私の最高美術で叩き潰してやるガネ!!先程までは体格差もあつたがこれで互角カネ?」

「へえ、鉄の硬度を持つ蠟を全身に纏いパワードスーツのように扱うか…コンセプトとしては面白いな」

「その通りっ！鉄の硬度を持つドルドルの蠟でまろやかに体を包み込んだこの鎧に死角は無い!!そして食らえ!!」チャンプファイト・おらが畑!!」

それと共に高速で、まるで畑でも耕すかのように連続して振り下ろされる拳に対して

「おいおいおい、この甲板の表面は木製なんだから気をつけてくれよ?」

しかと受け止めるとそのまま放り投げる、幸いこの船の甲板は広いので海に落ちる事は無かったものの

「くっパワー馬鹿め、こつても簡単に受け止めるとは…だがこれならどうだガネ!!おらがべこ!!」

それと共に今度は暴れ牛の如く爆発的な加速で両手を前に突き出した状態でこちらに突っ込んでくるMr. 3

「触れる物は全て弾き飛ばす!!いつまで避けれるか見物だガネ!!」

まあ避けてもいいが…背後には艦橋、流石に突っ込まれると表面の

木板が壊されるのでそのままどっしりと腰を下ろし両腕を前に

「さて、誰が避けると言ったかな？」

「馬鹿めっ!!そのまま弾き飛ばされるがいいガネっ!!」

そして響く凄まじい衝突音、そして両者共にかっつりと手四つの状態で組み合っていた。

「なるほど、言うだけあって中々のもんだ、武器無し鎧無し鉄塊無しでここまでやるとはな？」

「む？何の話をしているガネ？まあいい、止められると思っていなかったが迂闊に受け止めたのが貴様の運の尽き!!キャンドルジャケット!!」

Mr. 3のその言葉と共に次々に自身で自慢げに言っていた鎧が砕け、そしてその下から白い蠟が溢れ出すと瞬く間に組み合っていたクリークの身体を飲み込み顔以外を覆ったのだであった。

「ふ、フハハハハっ！見たか!!これがここを使って戦うと言うことだガネ!!」

その言葉と共に自身の額をトントンと叩いて見せるMr. 3にクリークは関心したように

「へえー、鎧をそういう風を使うか…まあ実際には違うんだろうが炸裂装甲みたいなもんだな、そしてそのまま相手を拘束する…成る程上手い手だ」

と相手を褒める、しかしMr. 3は何か気に入らなかったのか

「貴様…危機感が足りないのでは無いカネ？いくら貴様がパワー馬鹿でも私のキャンドルジャケットは鉄の硬度を持つ。」

あの巨人族さえ一度捕われれば抜け出せぬと自負している代物だガネ？

それに全身を覆われた状態では指一本すら動かせ無いであろう！最早貴様に来る事は息をする事ぐらいだガネ!!」

「ほうーあの巨人族を!それは凄い…おや？息をするだけでなく声も出せるようだが？ああ、表情も変えられるな」

「貴様…まあいい、これで貴様は煮るも焼くも私の自由だガネ」

「へえ？火を使っているのか？蠟なのには？」

「…口の減らない男だガネ、いつもであれば芸術活動に勤しむ所だが今は何より時間が惜しいガネ…おい、その男！さつさと食料と水、ログポーズを持つてくるガネ!!」

と少し離れた場所で戦闘を見ていたギンにMr. 3は高圧的に言うのだった。

## 蠟燭誤算 ドンクリークさん

ピキリという音が響く。

その音にMr. 3が素早く振り向くがそこにはあいも変わらず堅牢なドルドルの蠟で包まれた大男の姿。

気のせいかな?と思いつつ向き直ろうとした所で

「なあMr. 3…少しいいか?」

という男の声に再びそちらを見る。

「なんだ?恨むのなら我らの情報を知った上で私の前に現れた自分自身を恨むことだガネ」

「別に恨み言じやねえんだが…アンタは確かに強いだろうさ、まあ肉弾戦は苦手だろうがそのドルドルの実の力を上手く使いこなせているようだ。

放出した時は不定形である故にどんな形にも変化させる事が出来る汎用性、一度に生み出す蠟の量も中々だ、訓練してない能力者ならこうはいかないだろう。

そして何より固まれば鉄に匹敵する硬さを持つという特性、成る程これだけでもこちら辺なら一角の強者として君臨出来るだろう」

「褒めてくれるのはいいが何の狙いカネ?おだてても私の正体を知っている以上消えてもらうガネ?」

「…出来るもんならやってみな?ああ確かにアンタは強い…だが世の中には自身の力量ではどうしようも無い理不尽つてもんがあるんだぜ?」

その言葉と共に先程は気のせいと考えた音が加速度的に音を増していく

「なっ?!貴様まさかっ!!ええいドルドルジャケットおっ!!」

「大海を知る事だなMr. 3、拳砲っ!!」

それと共に鉄の硬さを持つはずの拘束は粉々に、そして続け様に放たれた拳が飛んでくる蠟を迎撃、当たった側から弾き飛ばす。

「ばっ、化け物かね貴様はっ?!巨人族さえ拘束出来る筈の枷を…しか

も身動き一つ取れない状態でどうやって!」

「んー：簡単な話だがMr. 3、お前は”パンプアップ”という言葉を知ってるか?」

「筋肉の一时的な肥大化だろう、それがどうしたカネ?」

「その通りだ、簡単に言おう”自身の筋肉を爆発的に肥大化させた”、それだけの話さ」

「馬鹿を言うんじゃないか!」そんな事で全身を覆う私の蛹が壊れるものか!!」

ドルドルアーツ・剣!!言う気が無いなら言わなくていい!拘束が壊されたなら更なる手で拘束するまでだカネ!!」

それと共にMr. 3が生み出した巨大な剣がクリークを刺し貫こうとし：そしてガキンっ!!という音と共に止められた。

「：どうした、剣と言った割には随分となまくらだな?薄皮一枚すら貫けないのか?」

「なっ!貴様まさか能力者カネ!」

「いい加減その勘違いも慣れたなあ：残念ながら生まれてこの方能力者だった覚えはねえぞ?」

「だったら私のドルドルジャケットを破った事といい先程の事といいどう説明をつけるガネ!!」

「言っただろう、大海を知れと：世の中にやあ例え能力者じゃ無くとも理不尽ってのは存在するんだよ!飛拳砲っ!!」

それと共に不可視の拳撃がMr. 3へと向かい

「私を井戸のカエルと馬鹿にするカネっ!!キャンドルウォール・ミルフィーユっ!!」

そして見えずとも察したのかMr. 3は自身の信頼する己の力によつて何層にも重なった蛹の壁を生み出すもの

耳障りな音と共に鉄の硬さを持つ筈の壁はあっさりと壊されMr. 3に不可視の拳撃が突き刺さると大きくその身を吹き飛ばしそれと共に意識も飛ばされたのか沈黙。

「：ふうっ、ちとやりすぎたか?ギンとりあえず手錠をかけてMr. 5と一緒の牢に入れておけ。」

ああ、後相方が下の船にいる筈だからジョークか誰かやって捕らえてこい。：船は後部格納庫に収容しておいてやるか、何かに使う事もあるだろうし」

そしてクリークは拳を突き出した姿勢からゆっくりと構えを解き傍で見守っていたギンにそう指示を出したのだった。

そして指示通り動いたギンとジョークはミス・ゴールデンウィークが戦闘云々の前にいきなり現れた動く骸骨に悲鳴を上げて卒倒するという一幕はあったものの手早く二人を拘束、ベアトリーチェ号の牢に入れたのだった。

そして暫く時間が経ちMr. 3は目を覚ます。

「む、ここは…?」

「起きたかMr. 3? アンタまで奴に倒されるとはな…」

痛む腹をさすろうとして自身が後ろ手に拘束されている事を悟り舌打ちをして目の前の男を見るMr. 3。

黒の癖毛にサングラス、長いコートには数字の5をあしらったマーク。

「貴様は? 私の事を知っているのかネ?」

「奴が親切に教えてくれたさ。こうして会うのは初めましてになるか? おれはMr. 5と名乗らせてもらってる」

「そうか貴様が…」

「ま、この檻の中じゃあんまり関係無い話だな?」

「貴様が間抜けにもビビ王女の暗殺に失敗した上にたかだか三千万の海賊小僧に阻まれて任務を失敗したという…」

「あ? ひでえブーマランだな、アンタもここにいるってことは同じ穴の貉だろ」

本物かどうかは知らないが、と思いつつもMr. 3はMr. 5の言葉を聞き流しながらこの拘束を解こうとするも

「なっ! 能力が!」

今まで問題無く発動出来ていた能力が発動しなかったのだ。

「大人しくしといた方が無難だぜ? Mr. 3。」

おれ達につけられた手錠は海楼石製だとよ、いくら能力を使おうと

したところで無駄さ」

その言葉に先程から全身に広がっている倦怠感はそのせいか…と  
考えつつ

「Mr. 5、貴様は何故ここに？ 奴にやられたのカネ？ 奴は何者だス  
テラ財団の所属と言っていたガネ…」

「何だそりゃ？ まあいい聞いて驚けMr. 3、奴こそ海軍本部で最も  
大将に近いと言われている男…奴こそ海軍本部中將、鈍熊、のク  
リークだよ。」

ま、あの馬鹿げた戦闘力をみるかぎり偽物って事はねえだろ」

「なっ！ 鈍熊だっ！？ 本部中將、しかも赤カモメの頭が何故こんなグ  
ランドラインの辺境にいるのカネ！？」

「本人曰く休暇だよ、大人しくしておけば危害は加えないそうだぜ  
？」

Mr. 3はその言葉も聞こえておらず

「終わった…、これでもしボスが作戦を成功させても裏にいる事は海  
軍にバレているガネ…」

流石にあのクロコダイルが負けるとは思わんが七武海と本部中將  
がやり合ってお咎め無しとは行くまい…下手すりやインペルダウン  
…私が今まで必死に任務をこなして来たのは何の為だったガネ…」

ガツクリと頭を垂れてこれから先の絶望的な想像を頭に描き項垂  
れたのだった。

## 鋼蜜隠遁 ドンクリークさん

「Mr. パールう、前方に潜水艦よお？」

「潜水艦？こんなところに珍しい：まあおれ達が言うのもなんだがな」

麦わら一味の船ゴイングメリー号…の船底に不可解なものがあった。

船底に張り付いたそれはまるでコバンザメのようにメリー号にくっついておりナミが気のせいと判断した船足の遅さはこれのせいであろう。

いくら小型とは言え動力も休止させた余計な物がくっついていてのだ、いつもより遅くなるのは当然であろう。

何を隠そうかれらの正体はMr. 6及びミス・マザーズデーが搭乗する二人乗りの小型潜水艇”ピタット・シャーク号”だ、彼等は麦わら一味の目の前から消えた後直ぐに話し合い、最終的に麦わらの一味に便乗してアラバスタへ向かう事にしたのだ。

そして時折盗聴しつつ状況を把握、そうしてリトルガーデンから出航した後数日した頃に見張りを担当していたミス・ハニーの報告にパールは怪訝そうに眉をひそめる。

大きな球体型の潜水艦…頂点部が丁度海面に出ている形であり上からの声を聞く限りどうやら人が乗っているらしい。

「どうするう？先制して魚雷でも撃ち込もうかしらあ？」

「一先ず様子を見るか…お、浮上したな」

耐圧ガラスを通した目の前で球体の潜水艦が浮上、どうも上の言葉を聞く限りどうやら相手は海賊らしい。

「ブリキング…聞かない名だな、ミス・ハニーは？」

「聞かないわねえ…最近台頭して来た海賊かしらあ？」

「ふむ…潜水が可能ならそのアドバンテージは大きい、少しは名が知れていても良さそうなものだが…」

メリー号の騒ぎを盗聴していた二人は

「あら、戦闘になったみたいね…にしても相手もドラムに行きたいみ



たいねえ」

「ワポル…ワポル…どつかで聞いたような気がするんだがなあ？」

「ワポル…ドラム…ああ思い出したわあ、確かドラムの国王の名前じゃなかったかしらあ？」

「ああ、そういやそんな名前だったか…しかし何でまた国王が海賊に？」

「その辺りはわからないわねえ、ドラムには貴方のボスの知り合いがいるんでしょお？行って見たらわかるんじゃないかしらあ」

「おや、決着がついたみたいだな…」

「どうするう？追撃するかしらあ？」

自身らの船長が吹き飛ばされたからだろうか？急速に離脱する船影に

「いや、下手に動いて上の麦わら一味にバレたくは無いな。ここは一先ず様子見だな」

そうしてMr. 6とミス・マザーズデーは再び一味の足元に静かに潜むのだった。

そんな二人を他所にドラムに到着した麦わら一味を待っていたのは緊張した雰囲気醸し出す一団。

少しの問答の後何とか上陸許可を得た一行は民間護衛団を纏めているというドルトンと共に雪降る村”ビッグホーン”に向かいそこで詳しい話を聞けば

「道中でも言ったが…この島に医者二人しかいない、”魔女”と”雪女”だけだ」

「何でもいいから医者がいるんだよ！魔女でも雪女でもいいからそいつらは何処にいるんだ？」

「そうだな…窓の外に山が見えるだろうか？」

「ああ、あのやけに高い…」

ドルトンの言葉にサンジが窓の外を見ればそこにはルフィとウソップが作り上げた雪像…

仲良くしばかれつつ雪像を壊された二人は正座させられていたが

全く堪えてていない模様であるが、それはさて置き一番高い山の天辺にある城に”魔女”と呼ばれる医者が住んでいるらしい。

しかも連絡手段は無く気まぐれに山から降りて来ては患者を探して処置を施しては報酬を持っていくという事を繰り返しているので急患を見てもらうには彼女が山から降りて来るのを待つか、山を登って直接城まで行くかの二つに一つとの事だった。

流石にそれは病気のナミには負担が大きいと考えたのか

「ならーその”魔女”とやらは兎も角もう一人医者がいるんだろ!? それは何処に住んでるんだよ!!」

「…濟まない、彼女が何処に住んでるのは誰も知らないのだ。彼女もふらりと現れては処置だけして去っていくという気質で言ってみればまだ”雪女”よりも”魔女”の方が確実だろう」

その言葉を聞いてルフィは決断したのか意識も朦朧としてベッドに横たわるナミに頬を軽くペチペチと叩いて

「おいーおいナミー聞こえるか?」

「…ん」

「お、起きた。あのな山登んねえと医者いねえんだ、山登るぞ」

告げれば勿論猛反対する仲間達、だがナミも早く自身の病気を治さないといけないと考えたのだろう、弱々しい声ながらも片手を上げて

「…よろしくっ」

との言葉にルフィも片手を打ち付け

「そういかなきゃなー! 任しとけっ!!」

と答えそんな二人に仲間たちは呆れつつも仕方ないとため息をつく。

そうして病気のナミをルフィが背負い、更に護衛としてサンジが、ビビとウソップは自分がいれば足手まといになるだろうからと辞退。

そうしてナミの病気を一刻も早く治すために雪深き森の中に、断崖絶壁の山へ登頂する為にルフィ達は奥へと分け入っていくのだあった。

「…Dr. くれはは兎も角として森の中なら”雪女”に会う確率も少しはあるだろう…彼等の行ったルートはラパーンの生息地、無事にた

どりに着いてくれれば良いのだが……」  
ドルトンはそう言って心配そうに森の奥に続く足跡を見るのだった。

## 雪閉ざされし国

「昔はね…ちゃんといたんだよ…」

ドルトンのそのポツリとした言葉に

「え?」

と返すビビ。

「医者さ、訳あって全員居なくなっちゃったんだ。

…十年以上前になるかな?ある一人の医者見習いが医療大国と名高かったこの島にやって来た。

”彼女”は貪欲に学び次々と知識を吸収、それに引っ張られるようにこの国の医者達も外様に負けてられないとどんどん成長していった…それが良くなかったのだろう」

「医療技術の発展は良い事じゃないの?何が良くなかったのかしら?」

と、何が問題なのか分からずに首を傾げるビビ。

「…数年前に先代の後を継いで国王に就任した男、ワポールと言う男なんだが」

「ん?ワポール?」

「思い出した!!何処かで見た顔だと思ったのよ、あのバケツ顎!!」

ドルトンの言葉に、襲撃を受けた時にいた海賊の姿を思い出し思わず叫ぶ二人に

「君達!ワポールを知っているのか!」

とドルトンは驚いたような聞けば

「ああ、知ってるも何も俺たちの船を襲って来やがった海賊だ。まー、おれが追っ払ってやったがな」

「ええ、間違い無いわ。昔、父に連れて行かれた用事で彼と会ったわ…あの時は面子もあったから水に流してあげたけど…」

「でもよおっさん、そのワポールってのはアンタの話が確かなら王様なんだろ?なんで王様が海賊やってるんだ?」

その時の事を軽く話し、新たに出る疑問を聞けば

「まだ生きていたか…先ずはそこからだな。この国は数ヶ月前に一度滅びかけた…いや滅びたと言つてもいいのかもしれない。この島にあった国はかつての名をドラム王国、そして王の名をワポルと言う」  
「国が!？」

ドルトンの言葉にウソツプはあんまり聞きたくなかつたと思ひ  
「…それでわたし達にもあんな過敏に」

ビビは合点がいったように頷く。

「ああ、その通りだ。未だに皆海賊という言葉にはね…たつた五人の海賊団だつた。」

船長は黒ひげと名乗つており圧倒的な力で街や村を滅ぼしたのさ。  
この島の南側なんか酷いもんさ、生きてる人間なぞ誰もいない…」

「たつた五人の海賊が…? 本当ならこんなところにおいていい実力じゃないわ!」

「黒ひげ…なんかヤバそうだな…」

「だが、この国にとってはそれで良かったという者もいる…犠牲者には申し訳ないとは思ふが」

「なっ!?! 国が潰れていい訳ないじゃない!!」

「そうだ! そんなバカな話があるか!!」

流石にドルトンの話は飛躍し過ぎだと考えたのだろう。確かに一般的な感性ならそう思うだろうが事情は大きく違うらしい。

「…先程の話に戻るがワポルが国王に就任して最初に行った事は何だと思ふ?」

「そうね…セオリー通り行くのだつたら王位継承にあつたつての一年間の減税や恩赦といったところかしら? まあダメな王であれば増税という所かしら?」

「おいビビ、なんで王様が就任してそうそう増税なんかするんだよ?」  
「世の中にはそういう人間もいるつて事よ。で、どうなのドルトンさん」

「…ワポルが最初に出した命令は、医者 の 追放」、国に多く存在する医者たちを全て国外追放処分としたのさ!」

ドルトンのその言葉に

「なっ!？」

「はあっ!？」

二人は絶句する。それだけ思いもよらない事だったからだ。

「数年前の話さ、奴は優れた二十人の医者を招聘し城に招いた…それにより国民は医者にかかりたければ奴に平伏すしか無い!!」

…このドラムは今でも医療大国の名で知られている。だが誰が思う? 本当に優れているのはワポルの元にいた20人のみ。これではまるで国中の病人を人質に取った犯罪ではないか!!」

ギリっ…と歯を噛みしめ怒気のせい一回り身体が大きくなったように見える姿に

「ドルトンさん…」

とビビが心配そうに声をかければ

「済まない…つい怒りが…」

と先程までの怒気を霧散させるドルトン。

「おいビビ、今おれの目にはおっさんに角が生えたように見えただが気のせいか?」

「気のせいなんじゃないの? でもそのワポルがどうして海賊に?」

「海賊がこの国に来たといっただろう?」

「…敵わなかったのか…それで海に追い出されたって事だろ? おっさん」

まあ確かに国一つ滅ぼすような化け物には一国の軍隊と言え敵わないよなあ、とうんうんと頷くウソップに

「…待ってウソップさん、医者 of 追放なんて馬鹿げたマネをする人間が災害クラスの化け物と戦うかしら…ねえドルトンさん、ひよつとしてワポルは逃げたの?」

ビビはそれまでの話から察したのだろう、ドルトンにそう聞けば

「…奴等は事もあろうに海賊の強さを知った途端、あつさり国を捨て”誰よりも早く”逃げ出したのだ!!」

あれには国中の誰もが失望した! 窮地ならば王として責任を果たす物だと誰もが思ったさ!! あれが! あれが! あれが! 一国の王か…」

「っ…それでも王か!! 民あってこそその王よ! 王が民より先に逃げ出す

ですって!?!あのバケツ顎巫山戯てるんじゃないの!?!」

ドルトンの答えにいつもの大人しきはどこに行つたのか、怒髪天を衝きそうな勢いで怒鳴るビビの剣幕に

「お、おいビビ…」

ウソップがちよつとひきつつ、その声をかければ

「…ごめんなさいウソップさん、つい熱くなっちゃったわ。」

まあ王なんて大半がそんなものよね。どうせ医者 of 追放以外にも色々馬鹿な真似をしたんじゃないの?そして逃げ出した王様は優雅に海賊ごっこでバカンス…ここに帰る為に海を彷徨つてるって事ね」

先程の事が嘘かのように冷静に戻るビビ。

「ああ、その通りだろう…だが兎に角ワポルの悪政はもう終わったのだ。」

この島は残つた国民達のものだ、生き残つた町村の復興も進んでいるし…今は団結して新しい国を作ろうとしている。

…だから今我々が最も恐れている事はワポルの帰還…”王政の復古”だ、人々が不安な今それだけは避けねばならない。

…この島に新しく平和な国を築く為にも…!!」

とドルトンは強い眼差しでそう言うのだった。

そしてウソップは決してビビを怒らせないようにしようと固く誓うのだった。

## 元・守備隊長の後悔

医者が：D r．くればが隣町のココアヴィードにいると聞いた一団はすぐ様そちらへ向かった。

そしてそこで伝えられたのは既にD r．くればは更に北のギヤスタに向かったという事、そして：ワポル帰還の報告だった。

見張りはいつものように監視をしていた所見慣れない船を発見、海賊旗を確認しすぐさま銃を突きつけ止まるように言ったものの、代わりに返されたのは銃弾の雨、そして命からがら逃げ出した男は必死でドルトンに報告したのだった。

その報告を聞いたドルトンは猛然とビッグホーンへ、そしてビビとウソツプの二人がD r．くればと合流する為にギヤスタへと向かったのだった。

ビッグホーンへと到着したドルトンはすぐ様家を焼いて食べていたワポルに斬りかかるも流石医療大国と名高いドラム、喚くワポルだったがすぐ様王城お抱えの医療部隊”イツシー20”の処置により復活。

そしてドルトンの糾弾をワポルはどこ吹く風とでも言わんばかりに聞き流すその姿にドルトンはようやく無駄だと悟った、仮にも自身が世話になった先代国王の息子：いつの日かきつと目を覚ましてくれると希望を抱いていたがここに来てようやく無駄だと悟ったのだ。

それと共にドルトンの姿が変化を始める、一回り大きくなった体に側頭部から生える二本の角：ウシウシの実”モデル野牛（バイソン）”、元王国守備隊長にして王国代官のクロマリーモ、王国参謀のチエスと共に三幹部と呼ばれた男が本気を出したのだった。

一方ナミを抱えて城に向かうルフィとサンジは苦戦していた。

ラパーン：ドラムに住む固有種であり雪上での戦いを得意とする肉食獣、一応は兎の一種ということになっているがその実態は大きく違う。

鋭い牙と鋭い爪を持ち、そして兎のような俊敏さと熊のような体格



を持ち集団で襲いかかってくる生物でそのラパーンが先を急ぐ二人の前に現れたのだった。

相手は慣れた深い雪の上、一方ルフィはナミを背負っており攻撃にしろ防御にしろ衝撃が伝わる可能性がある以上戦えず、かと言ってサンジはサンジで雪の上という立地が悪くいつものように戦えず、その数の多さもあり何とか逃げるべく山の方へと向かっていた。

「何やってんだあいつら…?」

「おれ達を追っかけてくんのを辞めたと思ったら…上の方で何か始めやがった…?」

サンジの言葉通りあれほどまでに執拗に二人を追いかけてきたラパーン達は突如としてその足を止めると山の上程でボフィン、ボフィンと大きくその場でジャンプをし始めたのだった。

その風景にサンジは何かひっかかりを覚えやがて脳裏に一つの事象が思い浮かぶ。

「い…いや、ちよつと待て…まさかアイツら!」

一方ワポルの帰還という報は瞬く間に村や町に広がり、戦えるものは今度こそ国を自分達の手で守るんだ!と武器を手にビッグホーンへ、そして民衆とワポル達の軍が激突、その寸前

「この野郎…生意気な口ばかり叩きやがって…」

「貴様と我らは互角の”三幹部”、我ら二人が相手では勝機は無いぞ?」

「何より…付き合いが長い、それが不運!お前の弱点など熟知している…」

それと共に弓を得意とするチェスが三本の矢を番え引き絞る、そしてそのまま照準をドルトンに…では無くこちらに殺到する武器を持った民衆に向けたのだった。

優しいが故に己の身を挺しても民衆を守ろうとその射線に飛び出るドルトン、そしてそれより早く射線に飛び出す影…耳障りな音と共に弾かれる矢。

「むっ、何奴!」

「き、君は…」

民衆に向けて撃てば当然ドルトンは己の身を顧みず盾になるだろうからそうすれば労せずして打ち倒せると考えたチェスと危うく貫かれ命を落とす所であったドルトンは同時に乱入者に問えば

「そうだな……ここはMr. アイアンとでも名乗っておこうか！」

そこにはドルトンと同じくらいの体格の男：雪国故か分厚いマントを羽織っているのはまだいい、だがその顔を覆った仮面が怪しさを爆発させていた。

「ちっ、何者か知らんが：お前達、諸共で構わん！逆らう者は全員容赦するな!!」

クロマリーモのその指示に兵士達が一齐に銃を構え、チェスは弓をクロマリーモは拳を構え、そしてドルトンも大剣を、民衆達も武器を構え一触即発となりかけた所

「ん？何だ、地震か……」

揺れ出した地面に足を止める一同、ゴゴゴゴゴ：と山揺れの音と共に一同がそちらを見れば

「な：雪崩だあっ!!」

「みんな村から離れろおっ!!」

「かなりデカい!!村まで届きそうだっ！」

誰かが言った言葉にあっという間に恐慌状態になるビッグホーンの村、流石にこのままでは自身達も巻き込まれると考えたのか

「ちっ！逃げるぞ、乗れチェス！クロマリーモ！ロブソン、本気モード!!」

「ワ、ワポール様我々も乗せて下さい!!」

「やかましい!!己で逃げきれ!!」

イツシー20や兵士達を置いて直ぐにその場から逃げ出そうとし「来るぞっ！勢いが止まらないっ!!」

「信じられねえ、この村も飲み込まれちゃうぞ!!」

「とにかく全員逃げろーっ!!この村も飲み込まれるぞおっ!!」

「な、何という大きさ!?全員直ぐに高台か海岸線まで逃げるんだっ!!このままだと飲み込まれるぞっ、急げっ!!」

右往左往する民衆にドルトンはすぐ様指示を出し

「おいおい冗談きついんじや無いか？初めての雪国でこれはあんまりじゃないかなあっ!？」

Mr. アイアンと名乗った男：麦わら達にくつついてこの島に来たMr. 6ことパールは全速力で近くの建物に飛び込むのだった。

## 雪崩の猛威

「あの兎共絶対許さねえぞ畜生お!!」

「どうしたらいい!? どうしたらいいんだサンジ!!」

時を前後してルフイ達は直ぐ後ろから迫る雪崩から逃げるべく全速力で走っていた。

「知るかよーとにかく1にナミさん2にナミさん! 3にナミさん4にナミさん5にナミさんだわかったか!! 死んでも守れ!!」

「わかった!! だけどどうやって!!」

ラパーン達が起こした振動は山肌を震えさせあつという間にその振動は連鎖、大規模な雪崩を起こしたのだ。それは多少の段差などものともせずルフイ達は高台に逃げるもあつさりと飲み込まれ、そしてその牙は麓の村にまで及びドルトンや村人達、そして対峙していた兵士達にお抱え医者 of イツシー20、そしてさっさと逃げ出そうとしていたワポール達をもあつさり飲み込むと辺りをシンっ…と静寂が包むのだった。

暫くして突如として雪原に開く穴、それと共に

「ぺっーお前らか、マズいシロップかと思っただぜ」

「うあおおっ!?!」

「ゲホツゴホッ!」

ワポールが口からチェスとクロマーリモ、自身の乗カバであるロブソンを吐き出し

「アイツらに決まってる!!」

と何かを考えたのか強い口調で断定するワポールに参謀であるチェスが

「はっ…と申されますと?」

とイマイチ意図が掴めなかつたのだろう、そう聞くと

「あの麦わらの一味は今城への山を登ってるって言っていたな!! ならばこうだっ!」

” 奴らはおれ達との一件を酷く根に持っており、おれ達に仕返しする為にあの雪山で待ち構えていたのだっ!”

ワポルの自信満々に言うその言葉にチェスとクロマリーモは

「なるほどーそういう事か!!」

「するてえっとこの雪崩も奴の仕業か!!」

と納得したかよように何度も頷く。

「チェス！城へのロープウェイが一本も無くなったというのは本当か!!」

「は！村の者が申しおりましたっ!!」

「ちっ、ならば雪山を追うぞ!!雪上での戦闘つてもんを見せてくれる!!」

それと共に三人はロブソンに騎乗、深い雪上を高速で雪崩をおこしたと思しき麦わら一味を犯人と定め追いかけるのであった。

一方ルフィ達も満身創痍であった、ナミは病気でほぼ動けず護衛としてついてきていたサンジはナミとルフィを庇って大きな怪我を：ナミを背負い直しサンジを小脇に抱えるとルフィは再び山の頂上を目指して歩き始めたのだった。

そしてそれを見つめる一対の瞳：先の雪崩の成果で雪深くから起こされた彼女は目を閉じて”雪”を感じとれば

「全く乱暴な兎さんたち：暫くしつけてないうちにこうも大事をおこすなんて：

東側の村はほぼ吞まれたみたいだし：やつば多くの人が雪の中にいるみたいね：はあ無理やり起こして働かせるなんて雪崩の件も併せてしつけ直さなきゃ：はあ、眠い：」

白いブーツとニーソックスにこれまた白いショートパンツ、白いタンクトップ、とうてい雪山での服装と思えない格好で、所々から覗く肌は真っ白で豊かな緑色の髪を持った美しい”彼女”は大きく欠伸をすると気怠そうに雪に両手を当てる。

”弾き雪(はじきゆき)”

そんな彼女の言葉と共にあちこちの村や山中で雪崩に飲み込まれていた人間や動物達がまるで拒絶でもされたかのように雪の中からぽんつと雪上に弾き出された。

そして続け様に

”流し雪（ながしゆき）”

とな言葉と共に飲み込まれた村々の雪達が一人でにまるで生き物かの如く轟々と蠢くとあつという間に飲み込まれた家々が姿を現したのだった。

そしてそんな人智を超えたそんな景色を目にした村人達の誰かがポツリと言った。

「ゆ…雪女だ…」

その言葉と共にざわめき出す人々であったが

「救国の乙女！Dr. モネが助けてくれたんだ!!」

「兎に角今は皆の治療をつ!!雪の女王が助けてくれたとて暫く雪の中にいたんだ!!怪我したものを…そうだっ!ドルトンさんを早く助けないとっ!!」

そんな暇は無いとばかりに村人達が動き出し、そしてそれを阻止しようとした兵士達だったがこの常に雪が吹き荒ぶ国ではあり得ない突如として感じる熱気にそちらを見れば全身からもうもうと白い煙を上げる男：Mr. アイアンと名乗りドルトンを庇った仮面の青年に言いしれようの無い迫力を感じて後退りする。

「さて…あれだけ見栄をきって出てきたのにあっさり雪崩に飲み込まれてどうなるかと思ったが…これは例の彼女の仕業かな?」

しかしダメだなあ兵士諸君、人命救助の邪魔はいけない、虎の威を借りて…この場合はカバかな?それで好き勝手やっていると終いには誰も助けてくれないよ?」

Mr. アイアン：パールのその言葉に一人の男が

「うるせえ!おれ達は国王ワポルの家来だぞ!!おれ達に逆らうという事はワポール様に逆らうという事だ!何の虚仮威しか知らんが全員撃てっ!!先ずはこいつから血祭りに上げてやれっ!!」

と怒鳴りつけそれと共に兵士達は銃をパールにそのまま発砲、複数の銃声が響き突如として起こる惨劇に村人達は目を背けるも

「やれやれ、事前警告も無しとは…軍隊としてのレベルが知れるねえ」

それと共にボタリ、と落ちる” 赤熱した鉛玉” …よくよく見てみればパールの周囲に漂う白い煙は周りの雪や吹き荒ぶ吹雪が溶けた水

蒸気であり鉛玉をも当たる側から溶かしていたのだった。

「なっ！き、貴様ワポル様と同じ能力者…」

「さて、いきなりの発砲とは驚いたが勿論やり返されても文句は言えないよな？」熱拳砲っ（ヒートカノン）!!」

それと共にパールの拳が男に突き刺さり男は声もなく崩れ落ちたのだった。

## 雪原に響く声

「見てください！いましたよワポル様っ!!」

「ブチ殺してくれるっ!!」

遠方からの微かな声にルファイが振り向くと雪煙を上げてこちらにかけてくる一団、そして雪上であれど凄まじい踏破性能を持つホワイトウォーキーに乗った一団はそのままルファイの前方へ、進路を塞ぐように立ちはだかった。

「待あてえい…小僧よくもこのおれに数々の無礼を働いてくれたなあ…?」

「どけよ!!邪魔だ!!」

急に現れた男達に不審な目を向けそう言うも

「まははははっ!カバじゃなーい?どくわけ無かろうが!!…その背負ってんのと手に持ってるのは死にかけのようだな!!」

その言葉にルファイは少し考えるも時間の無駄だと判断しそのままむしして前進、そこに更に呼び止める声が響き挙句の果てには

「おおそうだ新しい法律を思いついたぞ?チエス、書き留めろ」

「はっ!」

「”王を無視した人惨殺”…一番無視してるその病人と怪我人から殺してやれ!お前たちっ!!」

「何だどっ!」

ワポルの言葉と共にチエスとクロマーリモがルファイ達に踊りかかる、いきなりの攻撃に苛々しつつも鋭いトゲの付いた拳を何とか仰反る事で回避、咄嗟に反撃をしようとした所でサンジの言葉を思い出しぐつと堪えると

「くそお!!覚えてろよおっ!!」

「フンっ!無駄だ腰抜けめっ!!」

その場から離脱すべく走り出す、追撃として放たれる矢も何とかジャンプをして躲す。

いつもであれば全く問題無く相手を倒せたのだろう、この程度なら



近づいてぶん殴ってしまえば終わりだ。

が何しろ今はタイミングが悪い、病人であるナミを背負い怪我人であるサンジを片手に抱え二人を庇いながら、しかも攻撃をしても防御をしてもその衝撃が背中の人を伝わるというオマケつき、だからこそれルフィは回避に専念、何とかしてその場を離れようとしていたのだ。

「あれ…誰もいねえ？」

そして何とか逃げ切ろうと後ろを振り返ったルフィはあれだけしつこく追って来ていた三人の姿がいつの間にか消えている事に気づき足を止めないまま

「何だ…？もう諦めたかな？」

そう呟くと同時、進行方向にまるでルフィを飲み込もうもするかのような大口が開きそして寸前で察知、大きく飛び退く。

「まははははっ！見たか、これぞ雪国名物”雪化粧”!!」

「雪国の戦闘における白い隠れ蓑！雪上での戦闘を思い知れっ!!」

「そんだけ弱つてりや即死だなっ!!さてチェックメイトだ!!」

「なっ!!やめろおっ!!」

続け様に突如としてルフィの両側に現れるチェスとクロマリーモ、それぞれの拳と弓がそれぞれナミとサンジに向かおうとした所で

「はあ…」 雪柱（ゆばしら）

気怠そうに響く女の声と共にルフィの周りに白い雪の柱が生えたと攻撃を止めたのだった。

「な、何だあっ!!」

急な出来事に驚くルフィと

「この声…まさかモネ、貴様か！何処にいやがるっ!!」

その声に思い当たりがあったのだろう、周囲を見渡すワポル。

「なっ…ここで我々の邪魔をするか雪女っ!!」

「いくらワポル様の教育係とて邪魔立てすれば容赦せぬぞ!!」

「…まだ王様気分なのね、あなた達がワポルを甘やかすからまだまだ子供なのよ、気に入らなければ直ぐに暴力だなんて…野蛮ね」

「なっ！それを貴様が言うかっ!!事あるごとにおれに暴力を振るつた

のは誰だあっ!!」

なおも怒鳴るワポルの声は虚しく吹雪の中に響き

「あら、ただのしつけじゃない。先代国王様からちやんと許可はもらっていたわ?」

声の主人の姿は何処にも見えない、そしてキヨロキヨロと探すルフィの耳元で

「行きなさい麦わらの少年、怪我人の応急処置と病人に鎮静剤は打つておいたわ」

思わずバツと耳元に手を当て周囲を見るもそこには誰もおらず、そして言葉の意味に気づきそちらを見れば腕に抱えていたサンジにはいつのまにか当て木と包帯が、背負っていたナミも先程までより息が安定していたのだった。

「誰だか知んねーけどありがとうっ!!」

それと共に再び山の方に向かって駆け出すルフィの姿に

「なっ!待てい小僧っ!!」

ワポルは言い争いを中断して直ぐ様追撃しようとするも

「少し反省してなさい、”端檻雪(はおりゆき)”」

それと共に再び雪中から飛び出す雪の柱、瞬く間にワポル、チェス、クロマリーモの三人とついでにロブソンを取り囲むとそれぞれが結びつき雪の檻と化したのだった。

直ぐ様そのから飛び出そうと大口を開けて檻に噛みつくワポルだったが

「ぬっ!前より頑丈になってるだど!」

たかだか雪の柱だというのにその硬さに驚く。

「ふふふ、あなたたつてわたしの雪すら食べちゃうからね…特別製よ?」

「ええい小癩なっ!だが所詮は雪!チェス、やれっ!!」

「ファイア・アロウっ!!」

それと共にチェスの矢から火矢が放たれると檻に突き刺さり徐々に溶かし出したが

「…ええいっ!!まだ溶けんのかっ!!」

「申し訳ありませんワポル様っ!!どうやらこの雪普通のものでは無い

ようです！ファイア・アロウっ!!ファイア・アロウっ!!」

連続して火矢を撃つも檻として構成された雪は遅々として溶けず火矢を持ち出された時にはちよつと不安になった”彼女”はそれを冷めたような目で見つつ

「…兎に角そこで暫く反省してなさい”襲檻雪・千倉圀(かさねおりゆき・ちぐらがこい)”」

それと共に檻の周囲の雪が隆起すると檻ごと覆い尽くしあつという間に巨大な雪山が出来上がったのだった。

「圧縮した雪の檻に幾重にも重なったカマクラ…まあ出れる頃には少しは頭も冷えてるでしょう…ふあああ…眠い…」

そう言えば麦わらの子、あんな格好で凍傷にならなければいいんだけど…」

と彼女は大きく欠伸をしつつ山を登って行った少年の行った方向を見るのだった。

## フアンキーな女医

ナミは何かを置く音や混ぜるような音、そしてツンと鼻に感じる野草の香りに未だに意識は朦朧げながら目を覚ました。

「…誰？」

布団から起き上がり音の主にそう問い掛ければよほど驚いたのだろう、手にした薬皿を放り投げ壁まで後ずさる…何とか不思議な生物。

体型はかなり小型、おそらく子供程度の大きさの身体は茶色い毛に覆われておりその頭には桃色の帽子と二本の角、手には薬皿…あの音は薬関係かしら？狸…にしては違うし…と思いつつ入り口からそつと顔を覗かせる動物？に

「隠れきれてないし…何なのあんた？」

まあ動物相手に聞いても仕方ないがそう聞けば

「う…うるせえ人間！それとお前熱大丈夫か？」

「喋った!?!」

「ぎやあああつ!!」

返事をした事に驚き思わず大声でそう聞けば悲鳴を上げて逃げる不可思議な動物、それに対して

「うるさいよチョッパ―っ!!ヒツヒツヒ、熱あ多少引いたようだね小娘!!ハツピーかい!？」

そう言い放つ女性。恐らくかなりの老齢だろう白い長い髪に顔には深く刻まれたシワ、だがそんなものなどともせずしかと伸びた背、ごく普通のスラックスに丈の短いTシャツ、そこから出た腹にはへそピアスというとてもフアンキーな女性がいた。

「…?あなたは?」

「ふうん…三十八度二分つてどこかい、まずまずだねあたしや医者さDrくれは”さ、ドクトリーヌと呼びな!」

そのまま左手に持つ酒瓶に直接口をつけぐいっとあおる彼女はそのまま右手の人差し指をナミの額に当てると正確な体温を測り、その言葉にナミは

「医者…じゃあここは…」

とドルトンの家でのルフイの言葉を思い出した、山の上に行かないや医者いないって言ってたな、と思いつながら周りを見回す。

石造りの大きな部屋だ、壁には武器や植物剥製など色んな物が雑多に飾られ、寝台の横には大きく作られた窓、外はかなりの吹雪であるが、部屋の中央には大きな暖炉が炊かれいる為か寒さは殆ど感じない。

「若さの秘訣かい？」

「うん、聞いてないわ」

ドクトリーヌの言葉をすぐさま否定する、少し気になったのは秘密だ。

「そう、ここは山の天辺にある城さね」

「だったらあたしの他に二人いなかった？」

「あああいつらなら隣の部屋で寝てるよ、ぐっすりだね。全くタフな奴らだよ」

ドクトリーヌのその言葉にホッと安堵するナミだったが突如ドクトリーヌがナミの上着を捲り上げると

「見な、こいつが原因だよ」

「え…!?何これ…!!」

そこにあつたのはまるで内出血でもしたかのような紫色の痣のようなもの…どうやら昔流行った病で一度感染すれば宿主を5日で死に至らしめるダニによる感染症だったらしい。

とは言え既に百年前に絶滅しているらしく

「緑斑病の研究もあつてね、ケスチアの抗生剤を持っておいで良かったよ」

「りよくはんびょう？何それ、ケスチアってのとまた違うの？」

「…驚いたそれも知らないのかい、まあケスチアみたく5日で死ぬ病では無いよ。」

まあ恐ろしさはケスチア以上だがね、しかし何処から来たんだいア  
ンタ達…太古の密林を腹でも出して散歩したのかい？ヒツヒツヒ、まさかそんな訳が…」

と軽く冗談を言えばとても心当たりがあるナミは

「あ…」

とリトルガーデンでの事を思い出す。

「心当たりがあるのかい…呆れた娘だね、モネに感謝する事だね、あの子の鎮静剤のお陰で少しは楽になってた筈だよ？」

とは言えナミはその名前に心当たりが無いので素直に聞けば

「んん？おかしいねあたしの見立てが間違ったかね？とは言え小僧の応急処置も投与されてた鎮静剤もあの娘のモンだと思ったが…」

その言葉にふとナミが思い出す、ベッドに横になつていた時に臙げながらも聞いていたこの国の医者はず「二人」しかないという話だ。

そして道中、それまで熱で意識も朦朧としていたのが途中で少し楽になつた事も併せて思い出す。

「ひよつとして…もう一人の医者の人？ほとんど覚えてないけど運ばれてくる途中で少し楽になつた気がするけど…」

「そうさ、あたしだけでなく国中の医者知識を瞬く間に飲み込んだ化け物さ。

…しかし道中かい、あの娘の事だから見破つた上でこつちに寄越したね…後で麦わら小僧に聞いてみるさ。

とりあえずあんたは寝といで、まだ完璧に治療は済んでいないんだ」

それと共にまだあまり力が入らないのだろう、半身を起こしたナミをドクトリーヌがポンと押せば再びベッドに倒れるナミ。

「どうもありがとう、熱さえ下がればもういいわ。後はあつという間に治るんでしよう？」

流石に医者としてその言葉は聞き逃せなかったのか

「甘いね！お前は病気を舐めている、本来は治療を始めて完治まで十日はかかる病気さね。

…またあの苦しみを繰り返して死んじまいたいなら話は別だがね、あたしの薬でも3日は大人しくしてもらおうよ？」

三日という言葉にナミは慌てて起き上がり

「三日なんてとんでもない！あたし達先を急いで…」

ビビがああ言っていたとはいえ急ぐに越した事は無い、そう反論しようとしたナミだったが直後ドクトリーヌに押し倒され

「あたしの前から患者が消えるのはね…ヒツヒツヒ”治る”か”死ぬか”だ、逃がしやしないよ…？」

「そんな…」

その気迫と首元に突きつけられた銀色に光るメスに反論出来ないのであった。

## かつての支配者

ヒトヒトの実を食べて二足歩行して喋るトナカイ…既にその段階で大いにルフィの琴線に触れた動物…ドクトリーヌの弟子であるチョッパーは全力で逃げ回っていた。

最初はタダの動物と勘違いしたのか腹が減っていたのかこちらをただの動物だと判断したのだろう、肉呼ばわりしながら追いかけてくる二人、何とか撒いたと思えばどこから出てくるのか再び追いかけてくる二人。

そして暫くすれば今度はその二人が化け物呼ばわりしながら仲間になれと、そしてそれに対して再び逃げる、そんなチョッパーの鼻が”とある匂い”を捕らえた。

「あれ…？このにおい…まさかワポル!？」

一方感づかれたとは知る由もなくワポル、クロマーリモ、チェスの三人はロブソンに乗ってほぼ垂直とも言えるドラムロックを登頂していた。

「くそ、麦わらもモネも…どいつもこいつも王であるおれに逆らいおって!!」

「厄介ですなああの女…かつて19歳という若さで王国従医長なっただけの傑物ですが何よりもあの能力…」

「たかだか雪をおれが噛み砕けないだど…？王であるおれに地面を掘らせるとはモネめえ…」

「そもそも雪のロギアなどという化け物を飼おうというのが間違い、いくら医者として腕が優れていようとやはり表立って叛意を見せたあの時に処刑すべきだったのだ!!」

「まあいい、先ずは王であるおれを無視した麦わらの小僧から血祭りあげてやる、どうせこの上にいるのだろうからな」

ルフィでさえ登るのに苦勞し、挙げ句の果てには全身凍傷になるような切り立った山をロブソンは流石雪山に適応特化しただけの事はあるのかまるで足の裏に吸盤でも付いているかの如くスイスイと登っていく。



…まあ適応しすぎて普段歩く事も手を抜いてるといふなめつぷりだがそこは置いておこう。

そして三人と一匹は何の苦も無く頂上へ、数ヶ月ぶりに見る王城の雄大なる姿に

「まーはっはっはっ!!見ろ!何もかもが元のままだ!!ドラム王国の復活だあっ!!」

両手を広げて歓喜するワポルとそれに跪くクロマーリモとチェス、しかしチェスが城の天辺の違和感に気づく。

「む、お待ち下さいワポル様…城の天辺に妙な旗が…」

その言葉にワポルがそちらを見ればそこには桜の花弁をあしらった髑髏の海賊旗。

「何だあの髑髏の旗は…ドラム王国の国旗はどうしたあっ!!」

「ひーっひっひっひっ、燃やしちまったよそんなモンは…」

自身の城になんてものを、と激昂するワポルに対してその答えは直ぐに返された。

「ぬっ!出えたなDr. くれは!医者狩りの生き残り!この死に損ないめがあっ!!」

ワポルの襲来を察知して真っ先に報告したのだろう、そこにいたのはドクトリーヌとチョッパ。

「はっ!この城はねヒルルクの墓にしたんだ、お前たちみたいな腐ったガキの来るような所じゃ無いよ!

出ていきなこの国から!!…ドラムはもう滅んだんだよ!!」

「墓!?!あのバカ医者墓だ?!まっはっはっ!!笑わせるな!!」

ドクトリーヌの言葉に馬鹿にしたように大笑いするワポルだったがチョッパーを追いかけて表まで出て来たのだろう、ワポルに気付いたルフィは

「うおおおお!お前らさつきはよくもやってくれたなあ!!」

「ん?」

「ワ、ワポル様!麦わらですっ!!」

そのまま拳を握りしめ自身の能力で大きく腕を引くと

「ゴムゴムのおっ!ブレットおおおっ!!」

そのまま渾身の力で咄嗟に防御しようとしたのか中途半端に腕を持ち上げたワポルの顔面に拳を叩き込んだのだった。

「なっ!？」

「あの小僧、能力者だったのかい…」

「お、あいつらは…何でここに?」

チョップパーとドクトリーヌはルファイが能力者だったのに驚いたのだろう、そしてサンジは海賊としてメリー号を襲って来た見覚えのある顔に疑問を覚える。

「あ、危ねえ…」

「ワポル様!お気を確かに!」

初手から顔面を思いつきり殴り飛ばされたワポルは大きく吹き飛ばされ、白目を剥きながら高度5000メートルという高さから真つ逆さまに落ちる寸前をチェスとクロマーリモにより何とか助けられ「お前ら…さつきはよくもやってくれたなあ?しっしっし、もう我慢しなくていいんだ!」

殴った張本人はよっぽどあの時の事にストレスが溜まっていたのだろう、嬉しそうに満面の笑みを浮かべて拳を構える。

「ぬうっ!貴様ついきなりドラム王国の国王であらせられるワポル様に向かつて何たる狼藉をっ!!」

「そうだぞっ!国王様だぞっ!!この島中の国民達を支配されておいで遊ばされていらっしやる一国の王に向かつて貴様は…!!」

いきなりの、しかも国王という国の最高権力者への暴力にチェスとクロマーリモが怒鳴るも

「王?知るか、お前ムカつくんだ」

と舌を出して見せるルファイ。

「若僧っ、お前あいつらを知ってんのかい?」

「知ってるさ」邪魔口”だ海賊”邪魔口”。邪魔ばつかしするんだよ、船食うしな!もう許さねえぞおれは!!」

ドクトリーヌの質問にそう答えると共に拳を打ち付けるルファイ…しかしその姿は膝丈のズボンにノースリーブの上着…率直に言って雪山をなめているとしか思えない格好にサンジのツツコミが入れば

ようやく寒さを感じたのだろう今の気温はマイナス50度だという  
ドクトリーヌの言葉に慌てて城の中に戻っていくルフィ

…まあその気温でヘソだしTシャツに皮のジャケットというドク  
トリーヌも大概だが彼女は雪国生まれの雪国育ち、寒さへの耐性が強  
いのだろう。

そうして旧き支配者と無法の海賊が激闘したのであった。

## 雪山の化け物

先制はクロマーリモ、不可思議な技で己のアフロをドクトリーヌに向けて飛ばすとそれは易々とサンジが掲げた足によって止められた。が、どうやら静電気を纏っているらしくなんと剥がそうとしているところにさらに三つ四つと飛んでくるアフロは次々に手足胴体にくっついていく。

そして続け様に放たれるのはチエスの火矢、アフロに着弾した火矢は激しく燃え盛り何とか雪で消火するサンジをおとりにチョツパーは人型形態のその豪腕でチエスに殴りかかろうとしたものそこにチエスを押し除けて出てきた大口：ワポルがチョツパーを食ったのだ。

しかしそこに運良くあまりの寒さに服を取りに行っていたルファイが到着、ルファイとサンジの連携により高速で飛来するルファイがチョツパーを飲み込みかけていたワポルの腹に凄まじい衝撃と共に着弾。

ワポルは口の中のチョツパーを吹き出すと同時にその身を大きく飛ばされると、後ろでポケットとしていたロボソンにぶち当たり、ロボソンは大きく空の彼方へ：となる前に大きな、それこそまるで巨人のような生き物が中空に飛ばされたロボソンを掴むとそつと地面に戻す。

思わず全員の動きが止まると共に少し激しくなる吹雪

「ば…ばけもの…！」

「落ち着きなチョツパー、こりやあ多分…！」

呆然とするチョツパーと何かを察したのか冷静に言うドクトリーヌ

「なっ！我がドラムにこんなものが生存するなんてのは寡聞にして聞いていないぞ!!」

「まさかこれが噂に聞く雪男?!」

「なんと！数年前に村人が言っていた化け物とはこいつか!!」

初めて見る生物に騒ぐワポル等

「なおなあサンジ、あれなんだ？」

「…いや、まるでリトルガーデンで見た巨人くらいの大きさはあるが」  
「そつちじゃねえよ、あつちの山だ」

「あん？何の話を…何だありやあ？」

そして最初は驚いたものの何かに気づいたルフィの言葉にサンジがそちらに目をやると”向こうの山からこちらの山へ真っ直ぐに橋が伸びてきていた”のだった。

このドラム王国…正式には元ドラム王国には五つの高い山が聳えている。

それぞれの山は”ドラム・ロッキー”と呼ばれており絶壁となっておりその中で中央にあり、一番高いのが王城の聳えるドラムロックである。

そしてそのドラムロックへと周りに聳える山の一つから伸びる不可思議な橋、全員が見ている前でドラムロックへ到達すると変化は劇的であった。

何の装飾も無く伸びてきた橋に雪の巨人が倒れ込むように融合すると一人でにどんと組み上がっていき瞬く間に真っ白で絢爛な橋が組み上がったのだった。

そして徐々に近づくズシン、ズシンと言う重い足音…そして吹雪の中から姿を現したのは一頭のマンモス…しかもただのマンモスでは無い。

長く伸びた茶色の体毛にあちこちに傷が刻まれた巨大な牙、そして何と言ってもその大きさが異常でありまるで小山程の大きさのそれは簡単にルフィ等を踏み潰す事が出来るだろう。

「なっ！なんだ！さっきの化け物に続いてまた化け物!？」

「うるさいよチョッパー、落ち着かないかい…まったく派手な登場だね、何企んでるんだいあの娘は…」

先程の巨人に続いておかしな橋、そして巨大なマンモスという出来事に脳の許容量を超えたのか騒ぐチョッパーを他所に犯人なら心当たりがあるのだろう、探るような目つきのドクトリーヌ

「なんだこいつは！見た事ない生物だがあの象牙はかなりデカいな！  
…チェス！クロマーリモ！あれ程巨大ならこのおれに相応しいと思

わなないか？」

「ええ！その通りですワポル様！」

「毛に覆われた象のような生物…昔何かの本で見たような…」

そして一方何かを思い出すようなチエスを他所に、巨大な象牙というわかりやすいものに真っ先に目がいくワポルとクロマーリモ

「うはー!!でっけーなー！巨人のおっさんくらいあるんじゃないか？」

「こりや…マンモスって昔に絶滅したんじゃないのか？いや、リトルガーデンにや恐竜がいたんだしこの島が雪に閉ざされてたんならそこまで不思議じゃねえのか？」

その大きさに目をキラキラさせるルフィと昔本で読んだ事を思い出し、別にグランドラインだから生き残ってても不思議じゃないという結論を出すサンジ。

因みに余談であるがこのマンモス、その種を”マンモスデンス”と呼ばれる生物であり長い体毛に覆われて分かりにくいが六本の足を持ち高い踏破性を持つマンモスである。

別に太古の生き残りでも何でも無く”とある者の手によつて”この島に来た外来種であり気候があつていたのでだろう、瞬く間にこの島に適合した外来種である。

とまあそんな話は置いておくがそんな大騒ぎする一団に対して「騒がしくて眠れないのだけど…少し静かにしてもらえないかしら？」

響きわたる女性の声、その声に聞き覚えがあつたのか真っ先に反応したのはルフィ。

「その声！雪山でサンジとナミを治した奴か！何処だ!!」

「何処って…ここにいるわよ？」

そう言つて巨大なマンモスの上に立ち上がったのは一人の女性。

この雪山で正気とは思えない白いショートパンツにこれまた白いタンクトップに真っ白な肌、そしてその白一色と裏腹に緑色の長いくせのある髪を持つ女性

「うおっ!?!なんちゅー美人!!」

それと共に目をハートにするサンジだったが

「やれやれ、やっぱリアンタかい…何の用だい？こっちは色々忙し  
いんだけどね？」

腰に手をやり呆れたように言うドクトリーヌに知り合いかと思  
いそちらを見る。

「久しぶりねDr. くれは、騒がしくて眠れなかったついでに気まぐ  
れで手を出した患者の様子を見に來ただけよ…なんで閉じ込めたワ  
ポルがここに居るかは知らないけれどね？」

そう言つて緑の髪の女性…”雪女”とも呼ばれる最後に残つた医  
者のうちの一人、モネが気怠そうにワポルを見下ろしていたのだつ  
た。

## 鉄壁の不審者

一方その頃雪崩に飲み込まれた村のうちの一つ、”ビッグホーン”では無事な者が他の者等の治療にあたっていた。

何しろ雪女ことモネによつて雪中から弾き出されたとてあの大量の雪崩を受けたのだ、それによるものか骨折をしていたり、ある者は極寒の雪の中に閉じ込められていたからだろうか凍傷にかかつていたり、またある者は雪崩のあまりの恐ろしさに雪から弾き出された後も恐怖で錯乱していたりと様々であった。

一悶着あつたものの同じく雪崩に飲み込まれた後に弾き出されたワポルお抱えの医者集団”イツシー20”も協力してドルトンの指揮の元、村人も医者達も一丸となつて事態の收拾にあたっていた。

原作ではドルトンがチェスの矢を受けた上に雪崩に吞まれ、更に兵士の邪魔により心停止までするという事態になつていたがこちらでは謎の仮面男に邪魔された事により矢は弾かれたので大きな怪我も無く、そしてウソップとビビはその過程でいつの間にか謎の男とワポル旗下の兵士達との乱闘に紛れ込みコートを奪つていたゾロの姿を見つけ、そしてドルトンを救つた謎の男と相對していたのだった。

「貴方：ドルトンさんに聞いたけど村の人じゃ無いみたいね、戦闘を見る限り恐らく能力者、熱を操る感じの能力かしら？しかもかなり腕がたつみたいけど：何者なの？」

それと共に相手が能力者だったからであろうか？追手の可能性を考えて腰の後ろに隠しているナイフにそつと手を当てるビビ。

「おやおや随分と物騒なお嬢ちゃんだね、おれはただの旅人さミスター・アイアンとでも呼んでくれ！」

警戒を見とつたのかスツと目を細めつつも務めて明るく言うミスター・アイアン

「旅人ねえ：じゃあなんでドルトンさんがアンタの事知らないんだ？」

首をすくめるミスター・アイアンに旅人という事を疑いつつ半眼を向けるウソップには



「この村には先程着いたばかりなんだ、その直後だよ雪崩に飲み込まれたのは。」

それまではロベールの町にいたからね、彼がこちらを知らなくても不思議では無いだろう?」

「確かにスジは通つちやいるが…どうするビビ、確かにお前の言う通り怪しいかもしれねーけどやっぱ考えすぎじゃねえか? バロックワークスの追手かもしれないって…」

と小声で話しているがミスター・アイアン…パールの耳にはバツチリ聞こえている。

「確かにバロックワークスに熱を操る能力者がいるなんて聞いてないし、もし能力者なら少なくともエージェントクラスの筈だからわたしは知らないって事もない筈…」

「別口なんじゃねえか? ここはグランドラインだぜ? 確かにおれのいた東の海でなら珍しいかもしんねーけどグランドラインなら能力者はうじやうじやいるって聞いてるからな」

「はっ、なんでもいいじゃねえかよ、おい仮面野郎てめーかなりツエえんだろ? 良かったらおれと遊ばねえか?」

悩むビビを他所に兵士達と戦っていた姿を見ていたゾロは相手かなりの腕を持つと判断して刀の柄に手をかけている。

恐らく相手が追手であれなんであれ少し戦ってみれば相手の手の内や思惑がわかるという判断なのだろう、…相手が強そうだから戦ってみたいという好戦的な判断では無いと思いたい。

「はっはっは、おれは平和主義者だからね! やり合う理由が無いから断らせてもらうよ!」

そんなゾロの言葉に笑って躲すパール

「おいどーすんだよビビ。兎に角おれ達もワポルつてのを追うべきか? 確かにルフィとサンジもついてるから問題ねえとは思うが…」

「…確かにあの雪崩が心配ね、ドルトンさんは問題無いし兎に角ナミさんの病気を治さない事にはアラバスタには行きようも無いしね」

「国の崩壊という悲劇の中でやつと得られた好機じゃないか!! いま這い上がらなければ永遠にこの国は腐ってしまうぞ!!」

そうウソツプとビビが話し合っていたがそこに響く大声、そちらを見れば大剣に加えて銃を両手や背中に背負うドルトンの姿。

「だがドルトンさん、あんた一人じゃ！しかもロープウェイは無いんだ！どうやって城まで行くつもりだい！」

「歩いて登ればいいだけの話だ！それに私がケリをつけて見せる！！例え刺し違えようとも…どんな卑怯な手を使っても！！」

止める村人達に対して放ったドルトンの言葉に何かしらの感銘を受けたのかウソツプも共に向かうと言い出した上にゾロも戦い応えのありそうな相手がいるからか同調するゾロ。

そんな姿に村人達も止められないと感じたのか

「…待ってくれ！！そこまでして行くというのなら30分！30分だけ待ってくれ！！」

その時間を貰えれば城へのロープウェイを一本は修理できる、そいつに乗って行った方が断然早い！」

そう提案する村人。

「馬鹿な…城へのロープはもう一本も張られて無い筈では？」

「それがあるんだ、誰かが白いロープを一本張り直している、ギヤスタの外れの大木から城に…村の若いモンがたまたま見つけたんだ」

「ギヤスタって…」

「あー、確かDr. くれはって医者が最後に向かったっていう…」

そうして村人達の言葉にドルトンも納得したのだろう、ロープウェイの修理を待って城へと向かう事になったのだった。

## 医者 の 覚悟

「さて…もう少しお仕置が必要かしら？」

そう言つてモネがワポルをちらと見やると周囲の雪が持ち上がりワポルの周りに円周状の壁を作り出し

「おいっ…こいつはおれの獲物だぞ!!」

周囲を一気に囲おうとした所で麦わら帽子を被った少年…ルフィに止められた。

「あら、あなた達はこの馬鹿達を相手に戦えるの?…馬鹿そうな見た目だけど強さはそれなりよ?」

「そんなん知るか!おれはこいつをぶっ飛ばす!そう決めたんだからな!!」

「…そう、じゃあ戦闘が終わるまでは手を出さないでにおいてあげる」

そうしてまるで自分を見下したかの如く交わされる話にワポルは吹き飛ばされた事もあり怒りは頂点に。

「どいつもこいつも舐めくさりおつて…見せてやるぞ…バクバクの真の力…!バクバクショック!!」

バクバクの実の能力者ワポル。

この男の能力は口を巨大化させ、ありとあらゆるものを食べる事が出来るいわば”雑食人間”となる能力だ。

普通の食べ物から樹木や草、更には強靱な顎で石や鉄といった無機物すら噛み砕き、拳句の果てには建物や砲弾、大砲に人間と言ったものすら丸呑みにしてしまう。

…果たしてこれを雑食と呼んでいいのか甚だ疑問であるが。

とりあえず一旦それは置いておくがその能力の相性上物質を生み出し、形作る能力者に優位を取る。

例えばドルドルの実なんかが良い例だろう、例え鉄の硬さであろうと能力で作りに出した構造物を食べられてしまうからだ、ワポルvs

Mr. 3なんか見てみたい気もするが。

しかしバクバクの実の真骨頂はそんなものでは無い。

己の食べた物を己の肉体に反映させるといふ”食べた力を我がも

のに、食べた分だけ我がものに”を地で行く破格の能力を持っているのだ。

食後という最良の状態に変化したワポルの姿は体は家に、そして両手は大砲にという異形の姿となっていた、これはワポルが船内で大砲や砲弾、火薬に更に麓の村で家を一軒食べていたからこそであり、もしも軍艦なんかを纏めて食べていたらその戦力はかなり驚異的なものとなっていただろう。

そして更に二人の臣下、チェスとクロマーリモに食らいつくと丸呑みしそしてしばらくすると体内から現れたのはまるで肩車でもしたかの如く合体した人間。

医者狩りの生き残りに自身を舐めた海賊、気に入らない獣、そして拳句の果てにいつまで経っても自身を見下す雪の化け物。

自身の殺したいリストに並ぶ相手達を前にワポルの両手の大砲が火を噴いた。

とは言え今更そんなものが通用するわけもなく砲弾は弾かれ、砕かれ、投げ返され、掴まれ…と情けない結果であったがワポルはニヤリと笑い標的を変える。

大砲と化した腕が向けられたのは城の天辺に掲げられた桜をあしらった髑髏の海賊旗、自身の城を穢すその旗を吹き飛ばし上機嫌に笑うワポルであったがその笑みは凍りつく、自身と戦っていた筈のルフィが旗の元まで移動、再び旗を掲げなおしたからだ。

再び折ってやろうと砲撃をするワポルだったが大砲の砲撃をまともにくらいつつも側を決して離さずに掲げ続けるルフィの気迫に逆にびびる始末。

その姿を見て密かに海賊に憧れていたチョツパーは感銘を受けつつ、モネは呆れたものを見るかのような目でルフィを見ていたがルフィはそんな視線など意にも介さず

「おいトナカイ！おれは今からこいつをブツ飛ばすけどお前はどうかする!!」

と大砲の爆発によるダメージなど無いかのように言つてのけたのだった。

「おれは…?」

「このカバ野郎めが！そんなに旗を守りたきやずつとそこで守つてろ！！」

その態度に苛立ったのか再び砲撃をしようと大砲と化した腕を海賊旗に、そしてそこにサンジが蹴りを入れようとしたところで不吉な音がサンジの腰から響きドクトリーヌの蹴りがサンジに入るのとサンジとワポルの間に雪の壁が持ち上がるのは同時だった。

「おや、見てるんじゃないのかい？」

「医者としてそれ以上は無理させられないわ、下手したら歩けなくなるかもしれないわよ?…まあその程度ならちよつと手間だけど貴女もわたしも外科手術で何とか出来るでしょうけど面倒なものね」

ドクトリーヌが聞けばモネはそう答え、白目を剥いたサンジはドクトリーヌに足を掴まれ引きずられていき、そこに代わりというわけでは無いだろうがチョッパーがワポルへと殴りかかる。

惜しくもチェスとクロマリーモの合体人間、チェスマリーモに阻まれたがルフィはそれを楽しそうに見ると城の頂上から地面に激突、心配するチョッパーを他所に笑いつつも自身も世間では一般的に化け物と呼ばれる悪魔の实の能力者であるゴム人間だと返して見せる。

「おいトナカイ、お前あいつを仕留められるか？」

「…なんてことねえ！あんな奴!!」

「じゃあ決まりだな、おれの相手は邪魔口だ！」

そう言っ指をパキパキと鳴らしつつワポルに構えるルフィ

「おのれ麦わらめ…びゅんびゅんと飛び回りおつて…」

「もう迷わないぞ…!」

先程の戦闘で殴らずに相手を追い返そうとして砲撃をくらった事もあり今度は迷わない、と意気込むチョッパーに対して

「お前がおれを倒せるつて?ええ！化け物つ!!」

チェスマリーモが馬鹿にしたように笑うのだった。

## 雪国の守護者

七段変形というゾオン系の能力者としては異常な変身を見せた  
チョツパーの多彩な攻撃にチエスマーリモはどうとう倒れた。

勿論ただやられたわけではない、四本の腕を使い二つの弓を放ち、  
その怪力で四つの大槌を縦横無尽に振るい、そして大槌が破壊された  
と見るや取り出したるは鋼鉄の鋭い四本の斧。

鋭い四本の斧を怒涛の勢いで振るうも相手が悪かった、本来ゾオン  
系の能力者は三段階の変身能力を持つ。

すなわち人型、獣人型、獣型の三種類でありゾオン系のどんな能力  
者でもこれは変わらない。

チエスマーリモもかつての同僚にゾオン系の能力者がいたのでそ  
れについてはしつかり理解していた。

だがチョツパーは特殊な丸薬で波長を狂わせると従来の3形態に  
加えて角の強化、脚力の強化、腕の強化、そして体毛の強化という4  
形態、合計7形態を使いこなして戦闘前に宣言した通りきっかり3分  
でチエスマーリモを下して見せたのだった。

仲間候補のおもしろトナカイが七段変形という技を見せて目を輝  
かせるルフィだった気が取り直して正面のワポルに向き直るも

「あれ!? あいつどこいった!!」  
「…あそこで雪だるまになってるぞ」

サンジが指差す方向には身体を丸ごと雪玉に閉じ込められ、更には  
口元まで雪で覆われたワポル。

「なっ! 一つの間!! おい! 手え出すなって言っただろうが!!」

「あら、ここから逃げ出そうとしてたから捕まえてあげたのに随分な  
言い様ね?」

「くそー、いつの間に…」

「てめえが変形に見惚れてる間にだよ!!」

「…確かに珍しいのは認めるけどそれで敵から目を離すのは頂けない  
わね。」

んー…このままだと一方的な気もするし…、ねえ麦わらくんわたし

を誰だか知ってる?」

「知らん!...あつ!医者だったか!もう一人の!」

「あら、それだけ?Dr.くれはから話は?」

「その前にワポルが登って来たんだよ、アンタについても話を聞こうと思つてたんだがね」

モネの質問に横からそう答えるドクトリーヌ。

「ふうん...?まあいいわ。知つての通りわたしは医者で名前をモネ」

「モネちゃん!何て素敵な名前なんだ!!」

「:腰は大丈夫なの?まあいいけど巷では”雪女”なんて呼ばれている医者狩りの生き残りがあつたしよ」

「アタシと一緒に医者狩りの生き残りというのは語弊があるんじゃないかい?何しろあんたは王国従医長:まあワポルの指示に従わずに人々を治療していたとはいえね」

「従う義理がないもの、先代国王にはお世話になったから最低限はこの国を見てあげたけど自分で国を捨てた以上もう見守る義務は無いものね」

「何の話だ?とりあえずおれは邪魔口をブツ飛ばすんだからそいつ離せよ」

「せっかちは嫌われるわよ?わたしが言いたいのはこの後よ、あなたがワポルをブツ飛ばしてはい終わりつてわけにはいかないの。」

「この国は仮にも世界政府加盟国、そしてワポルは逃げ出したとは言えまだその権利は剥奪されていない:わかる?」

「そんなの知るか!!これはおれのケンカだ!王様だの何だの関係ねえ!邪魔するつてんなら全員ぶつ飛ばしてやる!!」

それと共に両の拳を構えるルフィにモネは

「:貴方、そんなんじゃないつか仲間を殺すわよ?

まあいいわ、世の中にはどうしようも無い理不尽つてもものがあるのよ:わたしは昔恩人からとある悪魔の実をもらいそれを食べたわ:その実の名前は”ユキユキ”の実:このドラムでわたしの相手をするのなら四方三里は全て敵と思いなさい?」

それと共にゾワゾワと騒めく周囲の雪、それらが持ち上がると鋭く

成型されルフイにきつさきをピタツと突きつける、ご丁寧に身体を雪で拘束した上でだ。

「なっ…はええ…」

何か来ると感じている素早く拳を放とうとしたルフイだったが攻撃は直前に雪で押さえ込まれた。

「…勘はいいのね、まあ本気でやっても結果は見えてるからこうするんだけどね」

そう言つて雪の槍と雪の拘束がバサリと崩れ落ちる、まるであの頑丈さは何だったのかと言うほどの呆気なさだ。

「何を…？」

それと共に城の方から何か巨大な物が放り投げられ、更に拘束されたワポルが雪の巨人によつて持ち上げられ大きく口を開かせられる。

「さて、餌の時間よ？ 貴方が無理を言つて取り寄せた」とつておき」

…今こそ使いどころじゃないの？」

それと共に大きく目を見開き涙を流すワポル、そして何かを言おうとするも大きく開かれた口は言葉が出ずそこに飛び込む鋼鉄の塊。

「…なんだありやあ？」

「…正気かい!? 馬鹿に刃物を与えてどうすんだいあの娘は!!」

「なあ婆さん、あの鉄の塊なんだ？」

「知らないのかい!! まあ無理も無いだろうね、あれはワポルがどこからか横流しで手に入れてきた海軍の兵器だよ。

食べる為かと思いきや毎日磨き上げて眺めてはご満悦だったと聞いているが…だがその破壊力は恐ろしいもんだった、国王の仇討ち…そう言つてあの兵器と共にワポルは山に入つて行き、そして帰つてきたワポルが引きずっていたのは幾頭ものラパーンの死骸、あの雪山の狩人達をそれだけ相手にしてワポル達には怪我一つ見られなかった。

無理も無いさね、ありや旧式とは言えグランドラインで海賊達を追い回してる”戦車”ってシロモノさ、あれ一つで戦況をひっくり返す事もあると聞いているよ」

「センシャ…ビビが前に言つてたやつか！」

「後はこれをこうして…恩人からの指示だから悪く思わないでね？」



そう言いながらとても細く鋭い針をワポルに向かつて投げると見事に頭に、そして”あらかじめ開けてあつた穴を通して”頭蓋を無視してサクリと刺さつた針にモネは薄く笑うのだった。

## 鋼鉄への憧憬

ワポルが運命の出会いを果たしたのは8年前の”世界会議（レヴェリー）”でのことであった。

文句をつけられたと思ひ込み気に入らなかつたネフェルタリ・コブラ王の娘をたまたま見つけたので偶然を装って蹴り飛ばし、一瞬ゾワつとしたので周囲をキョロキョロと見渡した時にその姿が目に入ったのだ。

どんなものでも貫けなさそうな鋼鉄の鎧、しっかりと地を踏みしめる変わった車輪、そして長く突き出た砲はとても力強く自分こそは兵器の王だと主張しているかのようにであった。

その威容に一目惚れしたワポルは直ぐに近くにいた政府の役人を呼び寄せて詳しい話を聞けばなんでもそれは”戦車”という代物らしく、海軍主導の元で開発されている兵器らしい。

直ぐに何とか手に入れようとすも”アレ”は政府が各国に力を見せつけるべく無理言つて借りている物だから無理だとすげなく断られた。

諦めきれないワポルは今度は直接戦車とやらの周りにいる部隊の元に出向きその指揮官と交渉するも

”これはまだ先行試作機であり一台しか存在しない貴重な物だ、どうしても欲しいのであれば量産後に代金を支払って買えばいいだろう”

とつれなく返された。

かと言って強奪するわけにもいかずその日は諦めてすごすごと自身の家であるドラムに帰つたのだつた。

そしてあの日みた姿に想いを馳せつつ数年程した時について待ち望んだ報告がワポルの元に訪れた。

第二世代型戦車が政府に納入されたとの報告である。

直ぐ様世界政府に購入を打診すれば用途を聞かれたので国防の為だと答えておく、そして提示されたのは莫大な金額。

ワポルは悩んだ、確かに払えない事もない：しかし既に限界まで民から税を搾り取ってる以上、これを払うとしばらくは今までのような生活は難しいだろう。

買うなら今即決で、とせっつく政府の役人の前でワポルは悩んだ末に決断、そして数ヶ月が経ち今か今かと落ち着かないワポルに世界政府の船が来たという報告が、慌ててそちらに向かえばそこには何度も夢にまで見たピカピカの戦車の姿。

そして対価としてずっと貯めていた金銀財宝を差し出せばこれには護衛として着いて来ていたドルトンが仰天、なんでもいきなり質素な生活を始めた自分に今までの生き方を反省し真面目に生きるようになったと思つたらしい。

”国の財産は貴方の玩具を買う為では無い!!”と煩い自身の部下にこれは兵器でありこれから先の国防を見据えて買った物であり国民の為だと熱弁をふるえばあっさりとな得、意気揚々と戦車を城まで運んでもらったのだった。(断崖絶壁の上上げる為に気に入らない自身の教育係に頭を下げて頼み込む事になったが)

ネウロイ型戦車と呼ばれるソレを城内に運び込ませると早速操縦やら何やらについてきていた海兵から教わる、あまりの複雑さにキレそうになるもここで諦めてはこれを操縦出来ないと考え何とか心を落ち着かせる。

習得には数ヶ月かかるも晴れて動かせるようになり自身の日課には毎日夜寝る前にネウロイ型戦車改め”ロイヤルブリキング号”と名付けたソレを磨き上げる時間が追加された。

そしてしばらく経ち戦車を買った事で傾いた国庫も回復してきた所で名のある技術者を招聘しロイヤルブリキング号の改修にあたらせた、機関の強化に装甲の強化、火力の向上に操縦性の簡易化などやる事はいくらかでもある。

再び流出する国家の財産にまたドルトンが文句をつけてくるもこれを強化する事で国民の安全に繋がると説得、渋々納得するドルトンにやはりカバだなど思いつつもようやく改修が完了したロイヤルブリキング号を試運転とばかりに麓の森に入り込んだ。

：戦果は凄まじい物であった、このドラムで一番凶暴だと言われる肉食獣、兎の機敏さに熊の体格を併せ持つラパーンを相手に傷一つなく狩る事が出来た。

相手の攻撃は一切こちらの装甲を貫く事が出来ず、逆にこちらの攻撃は増設した速射機関銃によりあっさりとその肉体を貫く。

後は一方的であった、最初は仲間の敵討ちとばかりに襲ってきたが結局大半が殺され、一部は無理だと判断して逃げ延びたらしい、まあ絶滅はさせる気は無かったのでどうでもいいが。

そして再び城に戻り（今回の試運転でまた気に入らない教育係に頭を下げる羽目になった）そして大事に磨く。

装甲の隙間まで丁寧に、そして上機嫌で鼻歌を歌いながら、そんなワポルに場内の人々はヒソヒソと噂するもワポルには知る由も無い、彼はただあの日見た威容を、一目惚れしたあの時の気持ちを、ただただカッコいい！欲しい！という純粋な気持ちを胸に戦車を磨くのだった。

：そしてそんな大事な宝物であるロイヤルブリッキング号が大口を開けた自分の方向に飛んでくる。

口を開かせるモネにそれだけはやめろと目で訴えるも効果は無し。余談ではあるがバクバクの実は食べたものを反映させる能力だ。

だが一度反映させたものは再び反映させる事は出来ない、すなはち今これを食べさせられるともう戻せないのだ。

どんどん近づいてくる愛車を前にこれは食べたく無いと涙を流して顔を背けようとするもワポルを掴んだ雪はそんな事を許さず：そしてワポルの大事な戦車”ロイヤルブリッキング号”がワポルの大口に飛び込むと同時に雪の腕がワポルの口を強制的に閉じさせた。

そしてモネが極細の針を数本投げるとワポルが沈黙、そこにモネの「さてワポル：バクバクショック、目の前の敵と戦いなさい」

そんな言葉と共にワポルが俯いていた顔を上げると無言で己の体を異形へと変化させるのであった。

## 鋼鉄牙城の陥落

圧倒的であった。

第二世代型とは言え今現在グラントラインにて圧倒的な威力を誇る海軍自慢の兵器：戦車、そしてそれをワポルが独自に改造したロイヤルブリキング号はワポルの能力により融合。

分厚い鋼鉄の装甲による圧倒的な防御力、その前にルフィの攻撃は尽く弾き返され、そして改造により搭載された主砲となる”ロイヤルドラムクラウン七連ショットキャノン”：長いのでショットキャノンとしておくがこれによる絶え間ない砲撃、更にはワポルが独自に搭載した機関銃と化した両手による絶え間ない弾幕。

いくら弾丸によるダメージは無いとは言えその圧倒的な火力の弾幕になかなか近づく事も出来ずルフィは攻めあぐねていた。

「ちつくしよー、近づけねえ!!」

「未だくそゴムは生存、そのまま攻撃する…」

そして周りは固唾を飲んで見守っていたが

「…なんかさつきと全然違わねえか？口調も何か変だぜ？」

未だ腰を痛めている為うつ伏せのままであるが、そう疑問を覚えるサンジ

「…えげつない事するね、あの娘」

そしていきなり変わったワポルとモネを見て察したドクトリーヌ

「な、なあドクトリーヌ、あの女何をやったんだ？」

何かやったのはわかるが、何をやったのかわからないチョッパーがそう聞けば

「… simplicity、あの時何か投げたのは見えたかい？あれは極細の針だよ。

ソレを相手の脳に打ち込んだのさ。知ってるかいチョッパー、人間の脳つてのは単純でね、特定の部位に針を2、3本刺されりやあつという間に意識を絶たれて相手の言いなりになる。

…まあ本来で有りやその程度の針頭蓋骨に阻まれて刺さらないんだろうが、どうやら事前に手術か何かやったみたいだね。

チョッパー、くれぐれも真似しちやいけないよ？治療ならまだい

い、けれど人間の脳味噌いじくり回して自由に操ろうなんざ医者の領分を大きく超えた所業さ：アタシらは神じゃないんだよ」

「…わかった」

何があつたか察したドクトリーヌは質問してきたチョツパーに答えを教えれば神妙な顔で納得するチョツパー。

そしてそんな外野を他所にルフィは

「くっそー！でもかてえ相手なら前も戦つたんだよ！ゴムゴムの…キヤノン!!」

それと共にかつて鋼鉄人間を相手した時にもダメージを与えた自身の技：ゴムゴムのガトリングの威力をまるでバズーカのような一点に集中させた技をワポルに正面から打ち込んだのだった。

その衝撃は凄まじく、いくら鋼鉄の分厚い装甲を持つ戦車ワポルと言え大きく弾き飛ばされて城に激突：崩れる瓦礫ともうもうと上がる雪煙、そしてまるでダメージが無いかのように立ち上がるワポル。「…くそゴムが生意気な、だがよくやった！これであの女の呪縛は取れたぞ!!よくもやつてくれたなモネえっ!!おれの…ううっ、おれの口イヤルブリキング号をよくも…よくもおっ!!」

それと共に洗脳状態にしていた針が抜けたのだろう、ワポルは先程まで戦っていたルフィを無視、巨大なマンモスの上から見下ろすモネに巨大化し背中から生えた七連ショットキヤノンを連続して放つも「…流石の攻撃力ね、ネウロイ型の装甲を打ち破つたのなら現行のヴアルキュリア型の装甲で凌ぐのは不可能、装甲強化型でなんとかつてどこかしら？」

七連続で射出された散弾砲を見向きもせず指をくいっと上げるだけで雪の壁を出現させ全て防いだのだった。

「おい邪魔口！相手はおれだろうが!!」

自分と戦つてたワポルがいきなりこちらの戦いを中断してモネに攻撃したワポルに文句を言うも

「やかましい!!…まあいい先に貴様から片付けてやる！我がロイヤルブリキング号の威力を知るがいい!!」

怒鳴り返すと同時に両手の機関銃を連射するワポルに

「へっ、もうくらわねえ!!…ようやく慣れてきたぞー!」

今までと打って変わってサンジやベルメールの動きを見て、そして密かにずつと練習していた特殊な歩法を用いて接近、正直今までは雪という足場のせいで踏み込みが上手いはず苦戦していたがここに来てようやく踏み込みの加減を掴んだのだ。

「ぐぬっ!早い!」

そして更に

「これならどうだっ!ゴムゴムの…HEAT・バズーカ!!」

それと共にルフィの両腕が通常の倍以上まで伸びるとそのまま反動で急加速、真つ赤に赤熱化した両腕がワポルに突き刺さる。

「ぐっ…ぎやあああ!あちいつ!!くっせー!」

あまりの威力と想定外の熱さに悶え苦しむワポル

「見たか!お前が王様だろうと神様だろうと関係ねえ!!誰が偉くつたって偉くなかったって関係ねえ!!おれは…海賊だからな!」

それと共にワポルの顔面を鷲掴みにするルフィ

「ぐっ、だがこれは世界的大犯罪だぞ!!それをわかってるのか!!」

「へっ、せかいせーふがどーとかこーとか…これはおれのケンカだ!

そんなの関係ねーよ!!」

「ならば!噛み砕いてやる!!」

それと共にこのまま飲み込んでやろうと大口を開けるワポルだったが顔面を鷲掴みにされておりうまく開けず、そしてならばと舌を大砲に変化させ砲撃。だが”剃”を用いたルフィは素早く避けて見せるとそのまま

「ゴムゴムの…ボーガン!!」

ワポルの背中にとりつき自身を回転させるとその反動でワポルを上空に、そのまま片足を大きく振り上げる。

「くっ、まつ待て麦わら!」

「覚悟のねえ奴が人のドクロに手エ出してんじゃねえよ!!ゴムゴムのお…んんっ!HEAT・アックス!!」

天高く伸びたルフィの脚がワポルに衝突、そのまま凄まじい加速と共にワポルは地面に叩きつけられ、その衝撃はドラム・ロックに大き

な揺れをもたらしワポルとチエス達はそのまま山の下に落ちていったのだった。



## 雪島騒乱の終わり

「…で、次はお前がやんのか?」

ワポルを粉碎したルフィは腕や脚に走る軽い痛みを無視して自身のケンカに余計な手を出したモネに向き直る。

「そうね…この国でわたしと戦おうという気概は買うけれど…」

それと共に大きく欠伸をしてフツと手を動かせば瞬く間にルフィに纏わりつく雪

「ぐっ…また雪か!!」

「それがわたしたちのもの、まあわたしとしてはこれ以上戦う気も無いし…

先ずはその火傷を治した方がいいんじゃない? そうね、折角だしこれをあげるわ」

それと共に雪で拘束されたルフィの前に手のひらサイズのケースを投げるモネ

「…なんだこれ?」

「火傷によく効く軟膏よ。ふああ眠い…」

「お?なんだお前、実はいい奴なのか?」

「そこら辺は貴方が考える事ね、…でもその技って高い威力を持つ理由に摩擦熱を使ってるんでしようけど使うたびに火傷するというのはマイナスじゃない?」

「知るかつ! そうでもしねえと攻撃が効かねえんだからしようがねえだろ?」

「そうねえ、言いたい事はわかるわ。貴方は東の海では十分に通用する実力を持つてるわ。」

…でもこのグランドラインは魔境、そしてそれは進めば進むほど貴方に牙を剥くわ、今は問題無くてもこの先は…いえ、ここでわたしが口を出してもしょうがないわね。

さてDr.くれは、わたしはそろそろこの国を去るわ」

「おや、てつきりこの国に腰を落ち着けるもんだと思ってたけどねえ」  
「逆に長くこの国に落ち着きすぎたのかもしれないわね、雪女…言い

得て妙ね、雪女であるわたしにこの国は居心地が良すぎたものね。

：ワポル達はわたしが一緒に連れていくわ、勿論この国には戻って来れないでしょうけどそれでいいかしら？」

「…そうかい、更に医者が減るとなるとアタシが苦勞する羽目になるんだがねえ」

「あら、そこは安心していいわよ？わたしにも伝手があるのよ、イツシー20はこの国に戻る予定だしファウス海軍病院から賛同者がこの国に来る予定よ？」

「あの最高峰の医療機関からかい…？」

モネ、あんた何者だい？数年前にこの国にふらりとやって来たのは知ってるがそれまで何をしていたのか、何処にいたのか…：そういえば聞いてなかったね」

「ふふっDr. くれは、美しさの秘訣を知っている？”秘密は女を美しくする”のよ？」

「ヒツヒツヒ！成る程、そりやいいねえ!!」

「さて、じゃあね麦わらくんまた会う日までご機嫌よう」

それと共にモネは宙に踊り出し吹雪の中をまるでほどけるように消えていったのだった。

今度こそワポルを、と意気込んで来たドルトン達が城についた時には全て終わった後であった。

何があったのかを聞けばそこで発覚する数々の出来事、意気込みは空振りに終わったものの、かつて黒ひげをこの国から何とか追い払った救国の乙女がワポルを連れ去った事によりかの独裁者は二度と戻ってこないだろうというDr. くれはの言葉に多くの者が喜び、そして彼女がいなくなる事にとても残念な気持ちを抱いていた。

そしてビビ、ウソップ、ゾロは雪だるまと化したルフィとうつ伏せの状態から立ち上がれないサンジを見て余程の強敵だったのだらうと考えるも

「くっそー！まんまと逃げやがって！次はぶっ飛ばすからな雪女！」

「おイルファイ！モネちゃん殴ったりしたらおれがためえを三枚に卸してやるからな！」

二人の言葉に疑問を覚える。

何はともあれ当初の目的であったナミの病気は治療中、それに加えサンジが腰をやったのでその治療と両手足に火傷を負ったルフィの治療という事であと少しの滞在が決定。

こうして麦わら一味達のドラム騒乱はようやく集結したのであった。

そして一方姿を消したモネはドラムロックの下に再び出現すると白目を剥くワポル、チエス、クロマリーモを手早く拘束、しばらく待てば

「緑の髪の美女…君が”スノー・クイーン”かな？」

「ああ貴方が彼女の言っていたMr. 6…いえパールね？この後の事は？」

「聞いているとも、ミス・ハニーがそろそろ武器庫の鍵を破壊して戻ってくるからその後ロベールに移動、ボスの船が到着している筈だ」

「そうねわたしは荷物はもう纏めて準備しているし後は移動するだけね、でもクリークさんがあの麦わらくんに目をつけるのがなんとなくわかる気がするわ、危なっかしいんだもの」

「成る程、しかし彼の戦闘に対する才覚は本物だよ。」

データによれば剃を見て数日ほどで初めて使つて見せたとの事だし、拳で破壊できないと見るや摩擦熱を利用して攻撃するという応用性も見せた」

「ああ、それは確かにわかるわね。この環境だと入りと抜きが難しいでしょうにワポルとやってた時は途中から見違えるように動き出したもの」

「…アラバスタではかのサー・クロコダイルと戦うつもりらしいが勝てると思うかい？」

「…サー・クロコダイル、噂はかねがね。王国乗っ取りを画策してるんでしょ？気持ちはわからないでもないわね。」

ロギア系スナスの実の能力者にして王下七武海の一角…でも彼が砂漠の国と呼ばれるアラバスタを欲しくなるのは少しわかるわね、わたしもドラムに長くいたから尚更。

…少し本気でわたしが相手してあげた方が良かったかしら？」

「…この雪の国で本気の君とは絶対に戦いたくないな」

「あら失礼ね、まるで人を化け物みたいに…」

「ふっ、我々能力者は大体が化け物扱いさ。その中でもロギアは別格ってだけさ」

「確かにその通り…とは言えわたし達なんかとは比べものにならない化け物がこの海にはごまんといえるんだけれどね…」

そう言っつてモネは頂上にある城の方を見るのであった、麦わらの一味がこれから辿るであろう道のりを思い浮かべるのだった。

## 雪月花景 ドンクリークさん

ライトアップされた幻想的な風景…

あの激戦から二日程が経ち、麦わらの一味達は治療を終えた後逃げるようにドラムから旅立ちを果たした。

そこでDr.くれはの計らいによりヒルルクが残した最後の研究成果がライトアップされ吹雪の吹き荒ぶ島に鮮やかな桜が咲き誇り、ライトアップされた雪と桜、そして満月のコントラストは誰もが呼吸すら忘れ感嘆していた。

恩人の最後の研究に大声で涙を流すチョッパー、その幻想的な風景に一味は見惚れる。

原理は簡単である、大砲で上空にとある物質を打ち上げそれが雪に付着すれば鮮やかなピンク色の雪を降らせるといふものだ。

だが言うは易し、行方は難し。雪に付着させるのは簡単では無くヒルルクは長年の試行錯誤の末に命を落とす直前にこの研究を成功させたのだった。

”何故か”壊されていた武器庫から大砲を運び出し城の周りにズラリと並べ、唯一人の弟子を見送るべくヒルルクの研究成果を託されたドクトリーヌはそれを示して見せたのだった。

そして見惚れる一同を他所に島の反対側では

「ドラム島のお〜ふ〜ゆざあ〜くうらあ〜♪」

幻想的な桜をバックに緑の髪の女性が歌を歌い終え

「…はいカットおっ!!撮影完了ですー!」

それと共に映像電伝虫での録画が終了される。

艦橋の一番上に作られた特設舞台でワノクニ風の装いに身を包まれた緑の髪の女性がバタバタとはためく髪を抑えてゆつくりとマイクを下ろす。

年の頃は20代程だろうか?スレンダーな体付きに歌を歌っていた時とはうってかわって半眼の眠そうな目つき、だがそれを差し引いても整った顔立ちで一般的には美女と呼ばれるに値する女性だろう。

ゆつくりとマイクを下ろす彼女のその周りでは多くのスタッフ達

が椅子を用意したり、再度メイクの準備をしたり、風で乱れたヘアスタイルや衣装を整え直したり、とバタバタと走り回っていた。

「…他は無い？無いならもう戻るよ？」

「お疲れ様ですシュガーさん！とりあえずミュージックムービーの撮影はこれで完了です。」

後は軽いインタビュー映像を撮影するので少し待って下さい」

「ん、飲み物もってきて」

「了解しました、それからプロデューサーからの伝言ですがもう一隻もそろそろ合流するとの事です」

「そ、じゃあ準備ができたら呼んで、あっちの船が来たらさきにそっち行くから」

そう言つてワノクニの装いに身を包んだ美女：シュガーは艦橋に作られた控え室に移動するのだった。

そんな後ろ姿を見て作業をしていたメンバーは

「いやーシュガーさん美人だよなー、流石世間でもトップアイドルなだけの事はあるよなあ」

「歌も上手いし、美人だし：まあオンとオフの時の差は凄いいけどな、オフだとあんまり喋らないし偶に言葉のナイフが出てくるからなあ…」

「おいおい、そのギャップがいいんじゃないか」

などと話をしていたとこでこれまたシュガーに負けず劣らず美人な女性が怒鳴るのだった。

「そこっ!!無駄話はいいからさっさと片付けるだわさ！グズグズしていると船から叩き落とすさね！」

「うつへ、マネージャーのオルガさん美人だけとおっかねえんだよなあ」

「馬鹿、また喋つてるとどやされつぞ？さっさと仕事終わらすぞ」

そう言つて再び作業に戻る一団はテゾーロ財団芸能部門”ステラ・プロダクション”の所属社員である。

彼らはその専用船となる”ステラ・オブ・ゴールド”とオーナーの妻の反対を他所に名付けられた随所に黄金の意匠を持つこの船はオーナーの指示のもとドラム島をバックに新作のミュージックムービー

ビーを撮影に来ていたのだ。

幻想的な、通常ではまず見ることの無い風景に社員達は見とれつつもきつちり仕事をこなし映像を撮り上げ、後は確認と編集を残すのみである。

「後方に船！警備部門” ヴオイテク” のベアトリーチェ号です!!」

そこに響く見張りの声、そしてそれを聞くや否や金の長い癖毛をポニーに纏めた褐色の肌の美女：ステラプロダクションアイドル部門専属マネージャーのオルガは

「総員少し休憩だわさ！そのアンタはシュガーを呼んでくるさね」

「あ、シュガーさんなら既に甲板の方に…」

「…相変わらずだわさ、どうせ蹴りでも入れに行ったんだろうさね。

プロデューサーに撮影完了の報告は？」

「あ、まだしていません」

「じゃあこっちでしておくさね、アタシとシュガーは少し向こうの船に用事があるさね、各員休憩の後撤収準備、1時間程で戻って来るからそれまでに出航出来るよう準備しておくさね」

「了解しました、接舷しますか？それともボートでも…」

その言葉と共にオルガはその場で準備体操をすると

「不要さね、さて…鈍ってないといいだわさ、せっ!!」

それと共に軽やかに空中に躍り出ると

「おお！オルガさんの空中浮遊だ！」

「とっ、とっ…やっぱ反復が大事さね、踏み込みをミスるところだったわさ。」

じゃあ後は任せるだわさ、さっきの映像の編集も出来るだけ進めておいて欲しいさね、戻って来たらチェックするきに！」

「了解です！」

その声と共にオルガは月歩でベアトリーチェ号へ、甲板に出てきたシュガーはふっと息を一つ吐くと身をかがめ一気に目を見開けばその腕がメキメキとまるで蝙蝠のような翼へ、そして真っ赤に染まった目でベアトリーチェ号を見定めるとバサリと翼をはためかせ上空に上がり、まるで一つの矢のように目標に突っ込むのだった。

## 吸血変種 ドンクリーク

満月を背に真っ直ぐにこちらに向かって来る姿。

蝙蝠のような翼には月光を受けてキラリと光る鋭い鉤爪。あの速度で引つかかられれば普通の人間など一撃で命を落とすだろう。

：彼女がたまたま拾った悪魔の実を食べてからはや数年、姉と同じく自身の見聞を広める為に旅に出た先の事だった。

基本的な戦闘は可能であり、旅の仕方やサバイバル術、船の動かし方やその他旅に必要な知識はしっかり修め、恩人からもこれなら一人で旅をしても大丈夫だろう、と判を押されていたがそれはあくまで普通に旅をしていればであった。

日の光には弱く、正体を知った者からは化け物と恐れられ、旅の間にシュガーはどんどん心をすり減らしそしてグランドライン海軍支部から直通の連絡がクリークにあった時には激しく憔悴していた。

自身が何の悪魔の実を食べたのかも知らず、情報を集めようにも日中ではまともに活動出来ず、すっぱりフードをかぶっていけば怪しい奴だと誰何され：そのうち”夜に彷徨い歩く化け物”という噂まで立ち始めシュガーは過去を懐かしみながらも何とかグランドラインに入るべく：自身の友人や仲間、そして恩人がいるグランドラインに向かって懸命に旅路を進んだのだった。

すぐにクリークは迎えに行くの特急でファウス島に連れ帰り数週間程の療養を経て悪魔の実の正体とそれに対する訓練を行った。

シュガーが食べたのは”バットバットの实・モデル吸血鬼”。

そんなの原作にあったか？と考えつつも吸血鬼について自身が知っている事を教えそれをどんどん手合わせしながら習得させていく。

曰く”怪異の王”にして”夜を愛する者”。

曰く霧や蝙蝠など己の身を色々と自在に変化する事が出来る。

曰く並の人間には不可能な凄まじい怪力を持つ。

曰く日光や十字架、銀などを弱点とする。

：曰く、人の血を吸う化け物である。



それらを一つ一つ書き出して、この世界の伝承と付き合わせそしてシュガーは吸血鬼：前世でいう吸血鬼では無くただ一人のこの世界での”ヴァンパイア”が誕生したのだった。

…そしてここに来てクリークの知識が偏っていた事が問題となった。

本来であれば原作…（ゲームであるが）でこの能力を持っていたパトリック・レッドフィールドはこの力で老いを与え若さを奪うという恐るべき力を使っていた。

が、クリークは当然そんなもの知る由も無く前世の伝承のような知識を書き出し、例えばキリスト教はこの世界に無いので十字架は効かないだろうとそれを教えず、流水が弱点という事や招かれなければ部屋に入れないという事は知る由も無く、そして出来上がったのは純粋な吸血鬼では無くなんちゃって吸血鬼…

日光に当たれば皮膚がピリピリと痛み（吸血鬼の真祖ってやつ太陽の下歩けたよなあ？）、凄まじい怪力を誇り（確かめちやくちや力強かった筈、ロードローラー片手で持ち上げるくらいあつたつけ）、心臓に白木の杭を刺されると命を落とすし、霧や蝙蝠や植物など様々な姿に変身が出来て、ニンニクの匂いが嫌いであり、鏡に映らず、血の代わりに赤ワインや生肉を好み、血を吸う事によってパワーアップする…弱点はある程度持っているものの怪力無双・変幻自在・神出鬼没のフイメール・ヴァンパイアの出来上がりである。

そして彼女はクリークと実践を交えつつ組み手を行いながらやがてどんどんとその力をモノにしていった。彼女は自身が本気を出しても決して超えられないと知っているからこそこれは甘えてるんじゃない、実践的な訓練と普段は抑えてる戦闘衝動の発散なんだと考えながら真つ直ぐに突っ込んで行ったのだ。

とは言えクリークも慣れたもの。自身に向けて矢のように飛んできたシュガーを右手でいなしつつ左手でその襟首を掴みぶら下げる。

「…遅い」

「いや、休暇をとるとは言っていただろう…というかい加減本気で突っ込んでくるの辞めないか？俺だからいいようなものの他の人間

「だったら首がポーンだぞ?」

「や、それより離して、近い、あっち行け」

「断る。お前が襲って来るのを辞めると言うまでは離さんぞ」

「ぷい」

それと共にクリークの手からふつと重さが消えるとシュガーの姿が霧となつてかき消え少し離れた場所に再び身体を形作る。

「…ちゃんと使い熟せているみたいだな。数年でここまで仕上げるとは驚きだ」

その滑らかな変身にクリークが感嘆していると

「シュガー!一人できつきと行くんじゃないさね!アンタ看板アイドルだつていう自覚はないのかい!?!」

甲板に降り立つ金の髪に褐色の肌を持つオルガ。彼女は順当に見聞を広める旅を終えファウス島に帰還、そしてクリークの伝手によりテゾーロ財団に所属しており自らの友人でもあるシュガーが芸能部門からデビューするにあたり助けとなるべく立候補、マネージャー兼護衛となり以来シュガーと共に行動している。

「久しいなオルガ、元気にしていたか?」

「久しぶりだわさクリーク。担当アイドルのヤンチャっぷりに手を焼いているとこさね」

「…ギンなら厨房にいる筈だぞ?」

「なっ!別にアイツに会いに来たわけじゃないさね!!」

「…会長からの伝言さね、”順次手筈通り、護衛を含め数日中にはアラバスタに到着予定”だそうだわさ」

「了解した、後でこちらからも連絡を入れとこう。PVの撮影は上手くいったか?」

「バツチリさね、こんなとこまで来させて何かと思つてたけどアレが見ただけでもやつて来た甲斐はあつたさね。

「…しかし良く知つてたもんだわさ、こんなもんが出来るなんて」

「…ま、こっちも色々情報があんのさ」

そうしてクリークは時折飛んでくるシュガーからの攻撃を捌きつつオルガと情報を交換したのだった。

## 傲慢喰王 ドンクリーク

とりあえず久しぶりに皆で食事でもと思い食堂に移動しようとするればそこに牢に入れたワポルが暴れているとのジョークからの報告。モネとパール、ハニーが捕らえて来た三人組はとりあえず拘束して牢に放り込んでいたのだがワポルは自分は国王だぞ?!ここから出さるか!!と煩く喚んでいるらしい。

片手の爪を鋭く伸ばし船倉にある牢へ向かおうとするシユガーを押しとどめ自ら向かう、丁度伝えたい事もあったしな。

「貴様!おれを誰だと思ってる!!さっさとこの拘束を解け!ここからさっさと出しやがれこのカバが!!」

「おーおー元気なこった、他の囚人は大人しくしてるというのにえらく元気だな?」

そうして周りを見渡せばMr. 5ことジェムとMr. 3ことギャルディーノ、ミス・バレンタインことミキータ、ミス・ゴールデンウィークことマリアンヌ、それぞれいる牢は静かなもので逆にワポル、チエス、クロモーリモが入っている牢を煩いから静かにしてくれと言わんばかりに睨みつけている。

「貴様!この方は歴としたドラム王国の正統な王だぞ!!貴様が何者か知らんがドラム王国は世界政府加盟国!!こんな事をしてただで済むと思ってるのか!!」

参謀を勤めるチエスがそう言うも

「ああ、悪いがドラム王国は海賊の襲撃により亡国という扱いになっているぞ?」

世界政府から預けられた国を見捨てて逃げ出したドラム王族は信に足りないとして追放、世界政府は様子を見つつ国民の自主性に任せ国が作られるようであれば新たに世界政府加盟国として認める方針だ。

だから今更ドラム王国がどうの自分が王だの言われてもアンタはタダの一般人なんだが…」

前々から手回ししていた事…世界政府への報告と(テゾーロによ

る) 根回しの成果を告げれば

「なっ!? 認めんぞそんなもの!! だいたい貴様は何だ!! につくきモネがおれを捕まえたと思ったらこんな所に閉じ込めおつて:まさか貴様! このおれの権力に嫉妬しておれを拐ったのか!

ふん、どうせ海賊と言った所か野蛮な顔つきだな、モネめ国を海賊に売り渡すとはどういうつもりだ!! このおれ直々に叩きのめさないといかんようだな!!

そうか、読めたぞ!! 下らん嘘八百を並べ立てておれの心を折ろうという算段か! まはははは、馬鹿め! その手には乗らんぞ! 何故ならおれは医療大国ドラムの正統なる王だぞ! 貴様のような下賤な海賊なぞわがバクバクの実の力で叩きのめしてくれるわ!!」

全く信じる様子は無かった。

「:よく回る口だな、というか海楼石の手錠を嵌められてよくもそんな元気でいられるもんだな」

「ぐ、やはり海楼石か:だがその程度でこのおれを止められると思うなよ!」

「その状態で言われてもな、ああ成る程身体に力が入らないからその分口が回ってるのか、成る程な。」

「というかその海賊如きに負けたのは誰だよ、というか何でこっちが海賊つて事になってるんだ?」

「納得できないならちゃん和世界政府から拝領した書類もあるぞ? 今さつき仲間が持ってきてくれたものだ、これを見てもまだ嘘だと思っ?」

ベラベラと喋るワポルは海楼石の手錠を嵌められ、その上からロップでぐるぐる巻きにされて床にうつ伏せになっているものの顔だけこちらに向けて捲し立てていた。

「ふん! そんなもの偽物に決まっているだろうが!」

が、先程オルガから届いた一通の書類を見せられチェスの顔色が変わる。

「なっ!? :ワポル様、あの書式に印字:間違いなく政府から正式に発行されたものでは!」

「はあ？何を訳のわからん事を…偽物だと言っているであろう！」

「そーいや参謀だったか？ま、アンタの言う通りこれは正式に作られたものだ、異論があるなら直接マリージョアに赴いて異議申し立てでもする事だな」

「ぐ…認めん、認めんぞそんなもの!!ならば直接マリージョアに向かえ!そこでおれこそが正当な王だと認めさせてやる!おれを追放するだど!?王あつてこそその国だろうが!!」

「違うな、国あつてこそその指導者だろ。」

因みにマリージョア行きについては断らせてもらうぞ、なんでアンタの言う事を聞かなきやなんないんだ？」

「おれは王様だぞ！偉いんだぞ！なら従うのが道理だろうが!!」

全く進まない話にだんだん面倒くさくなってきた所で

「遅い」

牢の並ぶ階層に響く透き通った声。そちらを見ればジト目でこちらを見るシュガーの姿、食堂で待っていた筈だが恐らく俺がいつまで経っても戻つてこないの直接呼びに来たのだろう。

「すまん、ちよつと話が纏まらなくてな…」

「ん、黙らせたらいい？」

それと共に片手の爪を鋭く変化させたシュガーがその腕を素早く振るえばそれは不可視の衝撃となつて未だに喚くワポルにぶち当たると当たりどころが良かったのか悪かったのかワポルは白目を剥いて沈黙。

「ワポル様!?!」

「シュガー…」

「ん？」

「やり過ぎだ、海軍が捕虜に手を出すのはあまり褒められた事じゃ無いぞ?」

「知らない、わたし海軍じゃないもん」

どうしてこんな風に育つたんだろう…と軽く頭を抑える。

昔はこうも直ぐに手を出すような娘じゃなかったが…やはり一人で旅をした時に周りが信用できなくなったのだろう、先手必勝…確か

にわからなくない話では無いが：

ある意味たくましく育ったシユガーを見て書類を牢の中に投げ込むとこれ以上シユガーが機嫌を損ねないうちに食堂へ共に向かうのだった。

## 黄金火拳 ドンクリーグ

ドラム島を出て数日、アラバスタの沖合に三隻の船が集まっていた。

テゾーロ財団警備部門” ヴォイテク” 所有船舶” ベアトリーチェ”

テゾーロ財団芸能部門” ステラ・プロダクション” 所有船舶” ステラ・オブ・ゴールド”

そしてテゾーロ財団会長専用船舶” グラン・ステラ” : 新世界で名を轟かせるテゾーロ財団の” 黒地に黄金の星” をシンボルに掲げた三隻は夜の帳が降りた後に集結、これはとある人物達による秘密裏の会議が行われる為だった。

グラン・ステラ内に作られた幹部専用食堂で一人の男がテーブルに着いていた。

緑の髪に鋭い目つき、身に纏う桃色を主体とし白いラインが入ったスーツは所々に黄金があしらわれており、明らかに一般人では手に入れないような服を纏ったその男は足を交差してそれがまるで当然とばかりに腰掛けていた。

「なあテゾーロのオッサン、さっさと食おうぜ？ 飯が冷めちゃうぞ…」  
そしてその横の席には黒に白いラインが入ったスーツを着た男。

黒い癖っ毛を何かの整髪料で後ろに撫で付けているが所々跳ねている髪型、顔にはソバカスがあり人懐っこそうな顔立ちを待つ青年だ。

明らかに着慣れていないだろう、所どころが着崩してあり彼が普段からそのような物を着る人間では無いのだという事が察せられる。

「馬鹿野郎、相手を待つのは一応礼儀だろうが。」

お前がもし誰かに食事に呼ばれて自身がついた時には殆ど食い物が無かったらどうする？」

「そりゃぶっ飛ばすさ、それが普通だろ？」

「…お前の普通には一言言いたいがお前が先に飯を食うとあいつの食う分が残らねえだろ。」

「というか何だその着こなしは！権力者たるもの身嗜みから整えろと何遍も言っただろうが!!」

「つつてもよお、普段からこんなもん着ねえしデューズも他の奴らも手伝つてくれねえんだもんよ」

「海軍との連絡役の中佐が常駐してる筈だろうが」

「いやー…イスカは口うるせえからなあ…あいつがおれの着付けすると窮屈なんだぜ？」

「まったく…権威つてのは服の上から着るもんだぜ？みすぼらしい格好だとそれだけで舐められるんだよ、あの魑魅魍魎跋扈する伏魔殿ではな」

「マリージョアなんていかねえからなあ、しかも今回会うのアイツだろ？別にいいじゃねえか」

「まったく…」

広いテーブルに並べられたたくさん料理、それを前にじっと待ってる事が苦手なのだろうさっさと食べようと言う青年の名は”ポートガス・D・エース”

三年前に七武海に就任したロギア系メラメラの実の能力者であり”ピース・オブ・スパニール号”を所有するスピード海賊団の船長でもある青年だ。

なぜ彼がここにいるかと言うとそれは緑髪の男”ギルド・テゾーロ”の護衛としてである。

テゾーロ自身は連れて来る気は無かったが盟友の頼みであり何らかの意図があつての事だろうと判断して連れて来たのだった。

ちなみにエースとテゾーロの関係はいわば後見人のようなものだ、エースの七武海就任にあたってはまずはテゾーロが王下七武海に推薦し、そしてその前に済ませていた手回しにより世界政府のトップである五老星にまで話が行くように仕向けた。

そして真意を確かめに呼ばれたマリージョアにて表向きは商売の為に一刻も早い海の安寧だの何だのと述べ、就任の暁にはその見返りとして莫大な額の献金を約束。

そして世界政府から正式に海軍に勧誘をするように指令が届き一



悶着あつたものの無事にエースは七武海に就任したのであつた。

だが知つての通り七武海は数々の特権を持つ代償として幾らかの資金を納める必要があるがそれを肩代わりしているのもテゾーロである。

何故なら七武海は政府に掠奪を許されているからこそこの献金は掠奪した金品の数割を納めるとなっている。

だがエース率いるスピード海賊団は町や村など襲撃して金品を奪つたりする気はさらさら無く主に敵対する海賊の財宝を奪つたり、賞金首をとつ捕まえたりと七武海にしては地味な手段で、割とカツカツで運営されているからだ。

その為大半をテゾーロが肩代わりしているがその戦力は高い、何しろ希少なロギア系、しかも火という分かりやすさにそこら辺の海賊なら尻尾を巻いて逃げていく程である。

ロギア的能力が無くても海軍との連絡役であり、自身の信頼する人間であるイスカから指導を受け、更にはテゾーロやその旗下の曲者達との手合わせによりメキメキと実力をつけており少なくとも一般の中将クラスなら相手に出来るであろう実力を身につけている。

とは言えテゾーロ自身も優れたゴルゴルの実の能力者で戦闘力はかなり高い。

本来なら護衛などいらなしいついたとしてもそれこそ警備部門の人間で十分だが今回は盟友の頼み…今まさに食堂に身を屈めて入つて来た男の頼みであつたからだ。

「よう、待たせたな…というか入り口くらいもうちよつとデカく作れよ」

「馬鹿言え、アンタに合わせてたら資材の無駄だ。それよりもさつさと座つたらどうだ？折角の料理が冷めちまうぜ？」

食堂に入つて来たのは身の丈三メートル以上…四メートルには届かないが大柄な男だつた。

縦に長いが横にも長い、とは言え別にただ太ってる訳ではない。

その身を覆うのはまるで巖の如き筋肉、ごく普通の人間が見れば恐怖で怯えそうな程のオーラを纏う筋肉のかたまりである。

腕はまるで丸太のように太く、そして脚はそれに輪をかけて太く一般人の胴体くらいの太さはあるのでは無いだろうか？

そしてそのわがままボディを窮屈そうに押し込めている姿ぱっぱつではちきれんばかりのスーツに丈の短い寸足らずな裾や袖、テゾーロは当然、人の事は言えないエースも思わず吹き出しそうになるのだった。

## 鈍銀金火 ドンクリーク

短く刈られた紫の髪に鋭い目つき、厚い唇と強面の顔の男の名はクリーク。

そしてその後ろにもう一人、こちらは化け物みたいな体格のクリークと違いごく一般的な身長で彼の名はギン。

クリークはごく普通の一般人が見れば裸足で逃げ出すか泣いて命乞をするか、二つに一つとまでは言わないがあまり関わり合いになりにくくなさそうな悪人面、事実その顔だけで海賊と勘違いされた事も一度や二度では無い。

対照的にギンは物静かな、しかし戦うもの独特の雰囲気を持つ青年である。

しかし彼らは海賊では無くむしろその逆、クリークは幼い頃から海軍に所属する超ベテラン、叩き上げて海軍本部しかも本部中將の役職を待つ歴とした将官であり、ギンは幼い頃にクリークに拾われそして手ずから指導を受けメキメキと頭角を現した本部大佐の役職を持つ男である。

しかも二人ともその戦闘力は一騎当千、そこら辺の海賊など鎧袖一触：そしてそんな彼らが何故ここにいるのかと言うと

「久しいなテゾーロ、そしてエース：ってなんだその笑いを堪えるよ  
うな顔は」

「いやだつてなあ…」

「なんだそのぱつぱつのスーツは、スーツの1着くらいまともに作つたらどうなんだ？」

「仕方ねえだろ、俺の正装つてのは基本海軍服だから昔作つたのしか  
無えんだよ」

「まあいい、オーダーメイドで一着用意するから後で採寸する時間を  
もらうぞ？」

「ついでにそつちのテメエの副官にも用意してやるよ、まあ詳しい話  
は後だ飯が冷めてしまうからな」

「そうだぜ？アンタを待つてたんだからな、もう腹が減つて仕方ねえ

んだよ、わかるか？こんだけ旨そうな飯を前にお預けされる気持ちだよお」

「悪いな、シュガーの奴が自分も行くと思つてな…しかしホントに旨そうだな」

「ああ腕利きに作らせた、アンタにや色々助言のお陰でかなり助けられてるからな

あちこちから集めた珍しい食材ばっかだぜ？これなんか空島でとれる空魚って種だ、エースも食うのは初めてだろ？」

「へえこの扁平な魚のソテー空魚っていうのか、空島かあ…一度は行つてみてえ気もするが…」

「エースは空島行つた事ねえのか、まあかく言う俺達も一回しか行つた事ねえけどな」

「あの時はいよいよボスも死んだかと思いましたがよ…上空六千メートルからボスが落ちた時は冷や汗かきましたから…」

「前々から思つてたがアンタどういう身体してんだよ…」  
と、他愛も無い話をしつつ食事をする手を止めない。

流石に上流階級の人間であるテゾーロはナイフとフォークを使つて上品に、そしてクリークはワの国の発祥と言われる”ハシ”と呼ばれる道具を使つて、ギンはナイフとフォークで丁寧な、そしてエースは次から次に料理に手を伸ばしてガツガツと

「テーブルマナー教えただらうが!!」  
そんなエースはテゾーロにはたかれつつも

「面倒くせえなあ…正式な場所じゃねえんだから硬い事言うなよ」  
「だとしてもだ、横でそんなめちやくちやな食い方されると飯の味がわかんねえだらうが」

「へいへい、まあアンタにや世話になつてるしなあ…」

そう言つてエースは用意してあつたナイフとフォークを順手に持つとあの先程までの食べ方が嘘のように丁寧に食事をするのだった。  
「さて…じゃあ本題に入るがクリークよ、アラバスタでデカイ騒ぎがあるとおれは聞いてないんだが…しかも七武海であるエースも連れて来いつてのは何事だ？」

あの国にや同じ七武海であるクロコダイルも居るだろうが、余計な火種になるんじゃないか？」

「王下七武海、砂漠の王、サー・クロコダイルねえ…アラバスタの英雄にしてスナスナの実のロギア…その英雄様が裏でよからぬ事を考えてるとしたらどうする？」

「はあ？何の確証があつて…いや聞くだけ無駄か、てめえの知識つてとこだろ」

クリークの言葉にテゾーロは眉をひそめるが何かを納得したように思い直す。

「正解だ…さて、順序立てて話そうか。」

クロコダイルは世界政府に逆らう事無く、従順な七武海として知られている…がそりや表向きだ、奴の狙いはアラバスタ王国の乗っ取り、そしてその為に数年以上前から動いている。バロックワークスつて知ってるか？」

「情報は上がって来てたな、グランドライン前半にて賞金稼ぎを行ってる組織だろ？」

「あー…まあお前にや遙か離れた場所の出来事だろうからなあ…」

「ひっかかる言い方だな、それ以外にも何かやってんのか？」

「まあな、バロックワークスつてのは、秘密犯罪結社、表立って動けないクロコダイルが国盗りをする為の組織だ。」

能力者を含め一癖も二癖もある奴ばかりだぞ？」

「そんなもんが動いてたとはな…まあアンタがそう言うんなら既に何らかの手は打つてあるのか？」

「まあな、一般構成員は殆ど手をつけちゃいねえが幹部は何人か捕らえている、まあお前への手土産さ上手くお前の下で使つて見せろ」

「ほお？どんな奴らだ？」

「まずボムボムの実の能力者である爆発人間、キロキロの実の能力者である体重自在人間、そしてドルドルの実の能力者である蠟燭人間と催眠術を使う奴だな。」

ああ、後元ドラム国王でバクバクの実の能力者もいるが…」

「…元国王だあ？アンタがこの数ヶ月で何をしてたのか気になるよこ

ろだな」

「ま、王族といえ国を捨てて逃げ出して世界政府から追放処分になつてゐるからな。」

因みにそいつあワポルって言うんだがそいつは新元素を作れる可能性がある、言いたい事わかるか？」

「ほう、先にあげた奴らも気になるが新元素か：至急アシエ博士に協力を取り付けるべきだろう、かなりの金になるぞ？」

「ああだろうな、まあ詳しい特性はアシエ博士に見てもらうが：話を戻すがそのバロックワークスには数人幹部が残っておりそいつらがアラバスタに集結しているという情報を掴んだ：実行の時間が近いって事だよ」

クリークはそう言つて箸を置くと両手を組みテーブルに乗せるのだった。

## 砂国策謀 ドンクリーク

「王下七武海のクロコダイルか：確かに奴の噂は聞いている。

元の懸賞金こそ他の七武海と比べて低かったがそりゃ奴が名を上げるのを好まなかったからだ。

そこらの海賊なら名前を上げようと躍起になるが奴は頭がいい、名を上げれば海軍や他の海賊、賞金稼ぎにも狙われるのが目に見えているからこそ細心の注意を払い他の海賊の仕業に見せかけたり、襲撃そのものを証拠を残さずにやってきたからだ。

まあ世界政府はそれを危惧したからこそ奴を七武海に仕立て上げたんだろうが：確かにその男がアラバスタに移って大人しくしていたのも国を手に入れる為という事なら納得できるな」

顎に手を当てそう推論を述べるテゾーロにクリークはうなづきつつ

「ああ、今回の国盗りと周到に計画を立ててたみたいだが：こつちにも伝手があつてな、ネフェルタリ・ビビを知っているか？」

「ネフェルタリ：ああ、アラバスタ王族関係か？確か王女が行方不明になつているとは聞いているがその辺りか？」

「正解だ、数年前前に面倒を見ていた時期があつてな。

教育の賜物かクロコダイルとバロックワークスの繋がりを確定させる為に王女自ら潜入していたらしい、そしてその王女様がもう直ぐアラバスタに到着する」

「へえ？でもおれと同じ七武海が動いてるつたっておれにやあんま関係ねえ話じゃねーのか？」

食事の手を止めぬままにそう言うエースだったが

「ああ、勿論お前に来てもらったのは理由があるさ。

王女様は”とある海賊”の手を借りてアラバスタに向かっているんだが：聞いて驚け、三千四百万ベリーの賞金首”モンキー・D・ルフィ”率いる麦わらの一味と一緒にだ」

「は？何でまたルフィがそんな事に？というかなんだ？弟に会わせて

やろうってそれだけじゃねえだろうな？」

「…ま、メインはそれだがテゾーロの手伝いをしてもらうってところ？」

クリークがそう言う

「ふむ何故火拳を連れて来いと言ったかは分かったが…とりあえずお前の最終目的はどちらだ？まあ話を聞く限りクロコダイルの計画を止める側だと考えていいのか？」

テゾーロはクリークがエースを呼んだ理由に納得する。

「ああ、最終目的はネフェルタリ王家の手助け…まあ秘密裏にだがな。そしてバロックワークスの壊滅、そしてそれに対して人員の確保…うまく行けば幹部連中をこちらに取り込みたいとこだな」

「へえ、面白そうじゃねえか。」

おれはテゾーロの旦那を手伝えばいいんだろ？何をすればいいんだ？」

「まあ機に臨みて変に応ずというか何というか…麦わら達がどう動くかでこちらにも動きが変わるだろうからなあ…何しろあのガープの孫だし破天荒だから動きが読めねえ。」

まあ普通に行けばビビちゃんやんが反乱軍を止める為にそのトップと直に話し合うってとこだろうな、小さい頃には交流があったみたいだしな」

「しかし王国軍20万に対して反乱軍80万だろ？ニユースで読んだぞそんな簡単に止められるようなもんか？」

「…簡単じゃねえだろうな、何か策があるならまだしも考えられるものとしてはクロコダイルの策謀の暴露、そして反乱軍のリーダーとの話し合い…それくらいか？後はクロコダイルを直接どうにかするって手もあるが…正直これを俺たちがやるのはリスクが高い、仮にもクロコダイルは政府によって認められている海賊だからな。」

…理想を言えば”どっかの非合法の海賊”辺りがクロコダイルをぶっ飛ばしてくれりや早い話し合いだな」

「おいクリーク、てめえまさかおれの可愛い弟分にそれやらそうってんじやねえだろうな？」



それと共に手のひらにボウツと火を灯すエース

「おいおい、落ち着けよエース。確かにクリークの言うのは手っ取り早い相手はあのクロコダイルだぞ？お前と同じロギアにして七武海の一角、更に場所は砂漠の国アラバスタ：勝てる道理が無いのにわざわざぶつける必要があるか？」

「う…確かにそりやそうだろうがよお…」

「その通りだエース、勝てない戦いをする程麦わらの達の仲間もバカじゃ無いだろ。」

兎に角アラバスタに到着後は臨機応変に動く事になると思うが：訪問目的は何になってる？」

「ああ、テゾーロ財団の来国目的は医療大国ドラムに訪れる為の補給としてある、エースはその護衛だな」

クリークはそれを聞いて頷きつつテーブルの上の料理をどけるとアラバスタ王国：サンディ島への地図を広げる。

「そうか、ならば麦わら達の入国に前後して入港という事でもいいだろう。」

恐らく麦わら達の航路から考えて入港はここ港町のナノハナ、そして反乱軍はここからサンドラ川を挟んで砂漠を越えた先にあるユバというオアシスにいるという情報がある。

恐らくナノハナで物資なり何なりを補給し、ユバの最寄りのエルマル辺りに上陸、それからユバに向かうだろうな」

「エルマル？ありや王国との貿易の中継地点だろ？んなどこに上陸するか？」

「かつてはそうだったかも知れんが反乱軍のおこった経緯は知ってるだろ？」

早魃によりとつくにエルマルは廃墟だよ、反乱軍が拠点に移ったっていう情報もあるがそつちは情報待ちだ」

「反乱の起こった経緯ね：詳しい話は知らねえが禁止されている薬剤を使ったとかなんとか…」

「ああ、”ダンスパウダー”だ」

「ああ、あれか」

「ダンスパウダー？何だそりや」

「簡単に言えば雨を降らせる粉さ、とは言え周りの雨さえ奪つちまうがな」

「そんなもんを王さまが使ったってか？そりや反乱の一つや二つ起こるだろうよ。」

「しかも砂漠の国、雨の降るかどうかは死活問題だろ？」

「エース、結論を急くな、そのダンスパウダーはクロコダイルの仕業だろ、違うか？クリーク」

「その通りだ、そしてそれを境に反乱軍が結成され多くの人間を吸収して王家打倒の為に動いている」

「そう言っただけでクリークは地図上のユバとアラバスタにコマを置くのだった。」

## 砂国方針 ドンクリーク

そのまま続けてレインベースとアルバーナにも駒を置き

「レインベースにはクロコダイル、そしてアルバーナには反乱軍の最終目的となるネフェルタリ王がいるが：ユバから行くとなるとサンドラ川を越える必要があるし数日はかかるだろう。」

それからサンデイ島の沖合には先行してるパール達からバロツクワークスの船が集結しているという情報も入っているしこの船も入る時は警戒しておいた方が良いでしょうな」

その言葉と共に地図の外に何個か駒を並べる。

「しかしよくもまあ周到に準備したもんだな、世界政府のジジイ共も気づいちゃいねえんだろ?」

「ああ政府の命令には従順だったからな、まさか裏ではそんな事を企んでるなんて思ってもないだろう」

「だがよおクリーク、その国盗りが成功したとしても政府がそれを認めるか?」

テゾーロの旦那みたいに超高額の献金をして中立地帯を持つんなら前例があるが七武海とは言え海賊に国を持たせるか?」

「ああ、それはおれも気になってたが：何かあるんだな? クロコダイルの隠し球みたいなものか」

「二人の言う通りだな、こっからは機密性が高い話になるなら他言無用だぞ?」

「もしも漏れていたら：わかるよな?」

それと共に指をバキバキと鳴らすクリークに

「わかってる、アンタはステラを救いおれを拾ってくれた恩人だ、今更そんなマネしねえよ」

「はっ、別に誰にも話しやしねえよ、ヤベー秘密を持ってんのはお互い様だしな」

「：ならいい、奴はアラバスタ王家に伝わるポーネグリフを元に古代兵器を復活させるつもりだ」

「なっ!?!」

「それを使うつもりか!!」

それと共に思わず立ち上がるテゾーロとエース、そしてギンは我関せずとばかりに静かに紅茶を飲んでいゝる。

…というか話を聞くばかりで全く発言が無いが…まあいいか。

「落ち着けよ、まあ復活させてもそう使うつもりはねえだろ。」

ああいうもんはな、使つて見せるよりも抑止力…見せ札としての効果の方が高いからな」

「そうか、いくらポーネグリフがあつても読めなければ意味がねえよな…」

「一海賊に古代兵器が渡るなんて世界のバランスが狂つてしまうからな…確かに読める奴がいなきや意味ねえな」

それと共に椅子に座り直す二人に

「いや、居るぞ?」

と言えば二人は一瞬固まり

「は?」

「まさか…」

「いや、だから古代文字を読める奴がクロコダイルの部下に…正確に言えばバロックワークスの副社長にゝるぞ?」

それと共に頭を抱える二人。

「どーするんだクリーク!そんなのがゝるとは聞いて無いぞ!!」

「そーだぜ!今にも古代兵器が復活するつてことだろうが!!どれもこれもかなりヤベーつて聞いているぞ!」

「だから落ち着けと言つに…クロコダイルは確かにアラバスタ王家に伝わるポーネグリフを狙つてゝる…が、未だその在り処を見つけてゝないというのが一つ。」

それからもう一つ、バロックワークス副社長にして古代文字を解読可能なミス・オールサンデー…その正体はかつて10歳で三千九百万の懸賞金をかけられた”ニコ・ロビン”はこちらの手の者である…と言えぱ納得したか?」

それと共に息をつく二人

「焦らせんなよ…そう言えぱ敵にこつちの手の人間が潜り込んでゝる

とか言ってたな」

「…しかしよく政府に捕まらなかつたな、10歳だつたんだろ？古代文字が読めるなんてそんな奴政府が放っておかないだろう、もつと高額でもおかしくないくらいだ」

「古代文字が読める子供”では無く”古代文字が読めるかもしれない子供”だ、懸賞金を決める手配班はこちらが設立させたからな。口は出させてもらったさ。」

因みに少女はこちらで保護、みっちりと指導して独り立ちしたからな。彼女からの連絡でクロコダイルの計画が発覚した（事にしていく）んだよ」

「成る程…なら暫くの猶予はあるって事だな」

「ああ、取り敢えず食事も無くなつたし今日はこの辺りにしておこう。今日は大まかな概要などを合わせたかっただけだしこれからはそれぞれサンデイ島に上陸、連絡を密に取りながら連携していく事になると思う。」

方針としては出来るだけ穏便にバレないように王権打倒の阻止、そして絶対に阻止しなければいけないのが古代兵器が奴の手に渡る事だ。

いくら読める者がこちらの人間でも無理に読ませる方法はあるだろうからな、出来ればクロコダイルがポーネグリフを見つけるのを阻止するのが妥当か。

もしうちのロビンに手を出そうもんならおれが直接出るがな」

その言葉にエースとテゾーロは顔を見合わせて首を傾げつつも了承してクリークとギンは食堂を出ると

「ボス…昔から思っていましたけどボスって結構過保護じゃないですか？」

ギンの言葉にクリークの足がはたと止まる。

「…そうか？」

「ええ、ロビンの姉御なら一人でなんとでも対応しそうですし七武海相手に海軍本部中將が手を出したなんて上に知られたら大変ですよ？」

「いや…それはほら試作機の鎧を使えば…」

「確かに正体は隠せますけど直ぐに正式採用機にたどり着いて正体発覚しますよ…」

「ぐ…なら髑髏仮面の出番か？」

「黒ひげティーチと髑髏仮面を同一人物と誤解させておきたいなら悪手でしようね。」

ドラムや近隣の島で奴の目撃情報があります、アラバスタにいない以上目撃情報が同時期に二つあるのはあまり良くないかと」

ギンの理路整然とした対応にクリークはぐぬぬ…と考え込むのだった。

## 策謀への牙

「なんだと？それは本当か？」

ミス・オールサンデーからの報告にMr. Oことサー・クロコダイルは眉を吊り上げる。

「ええ、港にいたビリオンズからの報告よ。」

ビリオンズ総勢20隻200名のうち10隻程が船を襲ったところ返り討ちに遭い半数が全滅：大事な計画の前だっというのに何やってるのかしらね」

その報告はエージェントの部下たち、グランドライン前半で賞金稼ぎをやっているミリオンズの上位組織であるビリオンズが半教程壊滅したとの報告だった。

「使えねえ雑魚共だな…相手はどこのだいつだ？この辺にそれを出来るような海賊はいねえ筈だが…」

舌打ちをしつつ苛立たしげに葉巻の火を消すクロコダイル。

「大物よ、テゾーロ財団”グラン・テゾーロ”のオーナーギルド・テゾーロ」

ミス・オールサンデーからの報告にクロコダイルは眉を潜める。

「黄金帝だど？ちつ、なんで新世界の大物がこんなとこにいやがる…やり辛えな…」

「黄金帝と言えば新世界に中立地帯を持つ大物よ？…つてまあ知ってるわよね」

「当然だろ…まあ不思議じゃあねえか。奴はこの前半にも客船を回している」

「それから更に貴方と同じ王下七武海の一角である”火拳のエース”の姿も確認されているわ」

続いて出てきたビッグネームに更にクロコダイルは眉間のシワを深くする。

「…なんだそりゃ、長年かけたおれの計画が漏れてるのか？」

いや、テゾーロといやあ火拳のエースの推薦人にしてスポンサー

だったか…」

ミス・オールサンデーの言葉に少し考え込むと火拳の七武海就任時の事を思い出し納得するクロコダイル。

「目的は補給と王家にいるビリオンズから情報があがっているわ。ドラムに向かうと聞いているわよ？」

多分火拳は黄金の護衛という所でしょうね、あの二人はがっちり手を組んでるみたいだし」

「はっ、こんなところに火拳を護衛として連れて来るたあな、過剰戦力だろうに御苦労なこった」

それと共に呆れたように息を吐き出すクロコダイル。

まあ彼が言うのも無理は無い。黄金帝であるテゾーロは自身もかなりの戦力だという噂は知られているし、それに火拳は希少なロギア系にしてメラメラの實の能力者…しかも船で来ているとなればその戦力はこのグランドライン前半を蠢く海賊相手には過剰もいところである。

「あとついでに海軍本部のスモーカー大佐もナノハナで目撃情報が来ているわ。今のところ目的は不明だけれどね？」

それと共に瞑目し考えこむクロコダイル。

「白猫だど…確か奴あ麦わらの専任だった筈。リトルガーデンで始末されてるが見失ってこっちまで来たか？」

ちっ、情報が少なえし不確定要素が多い…折角の作戦前だって言うのにどうしたもんか」

それを見てミス・オールサンデーは

「どうする？実行を遅らせるかしら？」

と提案するも

「…エージェント達の集合状況は？」

「既に大半が集まっているわ。Mr. 1は指令を実行中でMr. 3のペアはまだ来ていないわ」

「うん？Mr. 3のペアはまだなのか？Mr. 6のペアは着いたと報告があったのだろうか？」

「ええ、王女の護衛についた海賊を捕縛した後Mr. 3に先に行けと



言われたとか何とかで先行して来たらしいわよ?」

「…まあいい、エージェント達は集結して来ているし、反乱軍共をこれ以上抑えとくのもな。下手に暴発したら目も当てられねえからな…作戦は予定通り決行する」

結論として当初の予定通りに実行を決断したクロコダイル。

「あら、だったらいいのだけど…」

「アンラツキーズはもう帰って来ているのか?」

伝達として重要な役割を持つ二人…二匹の帰還を確認すれば

「残念ながらまだね。伝達には今まで通り代わりとして”エリマキランナーズ”を使っているわ。アンラツキーズの帰りを待っていては手遅れになるものね」

それに深く頷くクロコダイル。

「そりやそうだな…ビリオンズから数名づつ選んで黄金帝と火拳、それから白猫につけとけ。」

…ミリオンズより上の組織とは言え一般人に毛が生えた程度の奴等だ。くれぐれも気取られるような真似はしねえように徹底させておけよ?」

「あら、貴方が作った組織なのに随分と信頼してないのね?」

「はっ、所詮空手形の役職に惹かれて集まった雑魚共さ。」

どうせそこら辺で燻ってたゴロツキ共だ。信頼なんてあるわけねえだろ?」

馬鹿にしているかのようにミス・オールサンデーも少し考えて納得する。

「…それもそうね。でも国が欲しいのなら王女様を貰ったら良かったんじゃない?」時期話は来てたと聞いているわよ?」

「おいおい、このおれにあんな小便くせえ小娘を抱けと?」

「あら、あの子きつと美人になるわよ?」

「はっ、冗談じゃねえな。いくら将来美人になろうが抱くのなら今美人の女だな。品性が良く、騒がしくなく頭が良けりや尚いい」

「随分と注文が多いわね。作戦の事は了解したわ。決行日は?」

「少し考える。白猫の情報が集まってねえし黄金帝がどう動くかもわ

からねえからな。

Mr. 3とアンラツキーズが帰還したら直ぐに報告しろ。それから黄金帝、火拳、白狐の動向も早急に上げるように言っておけ。作戦決行はそれから決める」

そう言つてクロコダイルは再び葉巻に火をつけ、部屋を出て行くミス・オールサンデーの背中を見ながら煙を燻らすのだった。

## 砂の動乱の始まり

港町ナノハナ

アラバスタ王国でも最大の港町であるこの町は国が反乱騒ぎとなつているにも関わらず活気がある表情を見せていた。

「…随分と活気があるな、反乱がおこつてるんじゃないのか？」

背中に正義を背負つたジャケツトを直接肌の上に羽織り葉巻を啜えた男がそう呟けば

「その筈ですけど…まあここは昔からアラバスタ最大の港町ですし、アラバスタ王国以外の者も多くいますしねえ…」

傍らの額に眼鏡を寄せ、腰に一本の刀を佩いた女性が答える。

海軍本部大佐であるスモーカーとその部下であるたしぎは自分達の艦隊と共に専任対象である麦わらこと”モンキー・D・ルフィ”を追いかけてアラバスタまでやって来ていた。

とは言え肝心の情報はリトルガーデンで途切れていたのでスモーカーの勘でここアラバスタに来ていたのだった。

「…それにしても随分と騒がしいな、こんなものか？あの船関係か？ん？あの旗どつかで…」

「おつきい船ですよねえ…しかもパドル蒸気船なんて珍しい…」

港の方に騒がしく走る人々を見ながらスモーカーとたしぎがそう言っている

「大佐…！大変です!!とんでもない奴らがこの国に！」

それと共に片腕に黒金の義腕を持つ剣を佩いた男が大声を上げながら走ってきた。

「騒がしいぞサガ！で、どこのどいつが来てるって？」

「新世界の怪物！テゾーロ財団を率いる”黄金帝”ギルド・テゾーロと王下七武海に所属する”火拳”のエースです!!」

部下からのその言葉にスモーカーは少し思案して

「…どつかで見た旗印だと思つたらギルド・テゾーロか、裏では政府に金を貢いでいると聞いているが何故この国に？」

過去に海軍本部で要注意リストに載っていた黄金の星の旗印を思い出す。

「火拳ってクロコダイルと一緒に王下七武海じゃないですか！何でこんなところに!?まさか二人して何か策謀を!?!」

突然のビッグネームにたしぎは考えを巡らせるも

「いやあ、何でもこの国には補給の為とか言う噂でして、火拳は護衛とか何とか…」

サガが港で聞いた話を告げる。

「そういやギルド・テゾーロの推薦で七武海に就任したんだっただか?」

王下七武海か：クロコダイルといい火拳といい海賊が政府の戦力たあ気に入らねえな。

：だがクロコダイルか、暴君と同じく政府に従順な海賊、何か企んでるに決まってやがる。

少し調べたがどうもきなくせえな、元は優れた王として名高いネフェルタリ王が世界政府に禁止されてたダンスパウダーを所持、使用した?

いつ何処でどうやって手に入れた? 仮にも世界政府の加盟国の王族、そんな伝手があるとは思えねえ…多分裏でクロコダイルが何かやってやがると思うが…何が狙いだ?」

「スモーカー大佐、それ政府に聞かれたら怒られますよ? 仮にも政府に認められた七武海の一角ですよ?」

「…少し探ってみるか。たしぎ、サガ、麦わらの情報集めに並行してクロコダイルを探るぞ。」

確か奴はレインベースに拠点を構えていた筈だ、おれは海兵として動くがそうだな、お前らは賞金稼ぎか旅人という事にしておけ」

その言葉に了解、と敬礼を返す二人に対しスモーカーは煙を吐き出すのだった。

「無理…暑い…こっから出たくない…」

「陽射し強い…この国無理…しぬ…」

「…こりや二人とも留守番だな、まあ確かに相性が悪すぎるわな」

一方どこかの雪女と吸血鬼が完全にダウンしているのを他所に

「うひよー！人がいっぱいだなー!!」

「へえ蒸気船とは珍しい、流石でけえ港なだけあるな」

「で、ルフィの奴どこ行きやがった？飯屋って言って直ぐ走って行きやがって…」

ナノハナから少し離れた岩陰に船を止めた麦わらの一味はアラバスタの大地に降り立った。

「ま、あの馬鹿の事だから騒がしいとこ探せばいるわよ。

で、どーするのビビ。反乱を止めるのに何か手はあるんでしようね？」

「…でも本当にいいのナミさん？ここから先は本当に無関係じゃいられないわよ？」

本当はこのアラバスタに送り届けてくれただけでも十分なのだけれど…勿論ここで別れてもそのうち報酬は払うわよ？」

ナミの質問にビビはそう言うが

「はあく…あのね、もうとつくに巻き込まれてるし今更相手がこちらを見逃すとは思えないんだけど？」

それならあなたに協力して事態を解決、後顧の憂い無く片付けた方がいいに決まってるでしょ？」

「ナミさん…本当にいいのね？みんなも本当に良く考えてよ？」

「はっ、今更だぜ？相手は七武海だぜ？どんな奴が出てくるか楽しみってもんだ」

「そうだぜビビ、今更だぜ？まあ援護なら任せとけ！」

「まあ任せとけてビビちゃん、反乱なんておれたちの手できっちり止めてやるよ」

「そうだぞ！おれは仲間に入ったばっかだけど仲間の為に頑張るぞ！」

「ほら、こいつらもこう言ってるんだし今更よ」

そう告げる仲間たちは強い目でこくりと頷くと

「…わかったわ、先ずはルフィさんと早急に合流してここナノハナの隠れ家に向かうわ。」

わたしの手の者が情報を集めているから合流して今後の方針を組

「みましよう」

強い決意と共に毅然とした面持ちで歩き出したのだった。

## ゴムと煙の鬼ごっこ

一方その頃、上陸して直ぐ様飯屋へ向かったルファイが食事屋にて美味しい食事をバクバクと食べていると

「よう麦わら…：ローグタウン以来だな？」

そこに声をかける一人の海兵。

「やはりこの国に来やがったか…：ログが溜まるのに一年以上かかるリトルガーデン以降どうしてたか知らねえが…：ここで捕らえさせてもらうぞ!!」

ルファイは見覚えのあるような無いような相手に首を捻りながらも食事をする手は休まず動き

「食うのを止めろ!!」

そしてようやく思い出したのか

「げっ! あん時のケムリのおっさん!? 何でこんなところに!?!」

口から食べかすを撒き散らしながら驚いたように叫び食事を口の中に詰め込むとそのまま逃走する。

「野郎…：軍曹! 海兵を緊急招集しろ! 一味がどっかに潜んでる筈だ!! おれは麦わらを追いかける!!」

顔面に撒き散らされた食べかすを拭いながら手近の部下に指示を出しそのまま店を出て行ったルファイを追いかけようとするスモーカー

「あ! お客さん! 食事代!! 知り合いならさっきの麦わらの人のを頼むよ!!」

そこに店主の声がかかり無視するわけにもいかないの

「知り合いじゃねえ! ちっ、いくらだ!!」

「えーとドリンクとフードで…：しめて8632ベリーだよ」

「くそっ食い過ぎだ麦わらめ! 釣りはいらねえ!!」

財布から一万ベリー札を取り出しカウンターに叩きつけ今度こそ麦わらを追いかける。

そして逃走するルファイは

「まいったなー、あいつおれのゴムゴムの技どれも効かないからなー、取り敢えず逃げるしかねえやー!」

まるでハムスターの頬袋のように食事を詰め込んだルフィはとにかく相手がこっちを見失ってくれないかと有り余る体力にものを言わせナノハナを駆け回る。

平時であれば戦う選択をしていただろうが相手は過去にローグタウンにて戦った相手だ。

あの時は自身の技全てが全く効果を出さず驚いたものだが何とか逃れて、色々と詳しそうな自身の航海士に聞いたところ悪魔の実の能力の一種でロギア系と呼ばれ分類される”自身を自然エネルギーへと変化させる能力”があるらしかった。

相手は自然エネルギーだから物理は無効、海楼石というものを使えばダメージは与えられるらしいがそんな物は手元に無いのでここはひたすら逃げの一手である。

「おっ、でっけー船!とりあえずこれに隠れさせてもらうか!」

口の中のものをゴクンと飲み込みむと腕を伸ばして一気に巨大な船の甲板に乗り込むと周囲に誰もいないのを確認しようやく一息つく。

そしてスモーカーは

「すみません奴を見失いました! 棧橋の辺りに逃げたのは確認できたのですがそれ以降が…」

「ちっ、棧橋の先は海だろうが!どっかの船に紛れ込んでる可能性が高い!直ぐに包囲網を敷け!停泊している船を一隻づつしらみつぶしで探すぞ!」

部下からの報告に指示を出して緊急の臨検を行うも大概の船の臨検が終わ残り残り三隻というところで

「そう言われても困るだわさ、いきなりの臨検でそれに協力しろと言われても…どんな難癖つけられるかわかったもんじゃ無いさね!」

「だから凶悪な指名手配犯の搜索だと言っているだろう!」

「はんっ、アンタみたいなたつ端じゃ話にならないねえ、指揮官を出しな!」



何やら軍曹と褐色に金髪の美女が船の前で言い争いをしていた。

「どうした軍曹、麦わらは見つかったか？」

スモーカーがその声をかければ

「いえ、こちらのご婦人が臨検など断ると…」

「アンタが指揮官かい…ふうん、本部大佐かい。」

せめてうちのオーナーに許可をとることだわさ、じやなきやうちの船には一歩足りと踏み入らせないさね」

その言葉にスモーカーが居並ぶ三隻の船を確認すればそのどれにも黒地に金の星。

「ちつ、グラン・テゾーロの所属船か…嬢ちゃん、おれは海賊を追っていてな、この船に隠れ潜んでる可能性もあるんだ。

凶悪な海賊が船の中でいきなり暴れちゃ嬢ちゃんも困るだろう？おれ達海軍は海賊を探してるだけだ、それ以上は何もしやしねえから船を搜索させてくれないか？」

世界政府公認を受ける旗印に苦い顔をしつつも説得しようとするば

「ヒツヒツヒ！アタシを嬢ちゃん扱いかい？少なくともグラン・テゾーロ幹部との交渉にしては随分と下に見過ぎだわさ。

それにたかだか海賊が隠れ潜んでいたとしてもこの船で暴れる事が出来るわけないわさ、言っちゃ悪いかも知れないが三隻のうち一隻はうちの警備部門の船さね、もしそんなのがいたらさくつと鎮圧してお終いだわさ」

その言葉には今度はスモーカーが驚く。

まだ20代前半に見えるが彼女が自身を幹部だと言ったからだ、そうなる嬢ちゃん扱いは悪手だったな…と自身の言葉に齒がみするも

「逃がっているのは麦わらのルフィ、3700万の凶悪な海賊だぞ？」

そう言って手配書を見せるスモーカーだったが

「…手配書にしちゃ満面の笑顔だねえ？」

さつきも言ったがオーナーの許可を得る事さね、海軍にはこちらを好ましく思っていない勢力がある事は承知してるさね、変な因縁でもつ

けられたら堪ったもんじやないだわさ」

これ以上目の前の女に言っても無駄だろうなと考え

「…オーナーは、ギルド・テゾーロは何処にいる？」

「さてねえ、レインベースかアルバーナじやないかい？ 詳しいスケジュールは把握してないさね」

そう言つて片手を上げて金の髪を揺らして去つていく女性を見ながら

「大佐…いいんですか？ あと調べてないのはこの三隻だけですが…」

「相手は世界政府公認だ…所属船も本船のグラン・テゾーロと同じで一種の治外法権になつてる。」

これ以上粘つても無駄だ、臨検するんならオーナーであるギルド・テゾーロの他に海軍の上や世界政府のお伺いを立てる必要がある、奴の献金は政府、海軍共に莫大な額だからな…」

「許可をとつて臨検しますか？」

「無駄だ、機嫌を損ねたくないだろうから許可はおりねえだろうし、それにそんなことでやつてる間に麦わらの奴はとつくに逃げてるだろう。」

ちつ、世界政府公認とは言え一つの勢力がここまで力を持つてる現状はな…」

それと共にスモーカーは苦々しげに黒地に黄金の星を持つ風に翻る旗を見るのだった。

## 金色と麦わらと

棧橋から町のほうに去っていく正義を背負った背中を見ながらオ  
ルガは

「さて…もう行っただわさ、出て来ていいさね」

と物陰に声をかければ

「ふいー助かったー…何処の誰だか知んねーけどありがとなー」

と言いながらぐそぐそと這い出てくる麦わら帽子の少年。

「別にいいさね、それよりもアンタ海賊かい？さっき本部の海兵が手  
配書を見せてくれたけど…3700万とは随分とやんちゃしてるみ  
たいさね」

「おう！おれはモンキー・D・ルフィ、海賊王になる男だ!!」

その宣言にオルガはキョトンとしややあつて

「…海賊王ねえ、海賊王になるって言う奴はごまんと見てきたがアン  
タもその口かい？」

「ん？その口ってどの口だ？なあなあそれよりもこの船なんだ？お前  
も海賊なのか？」

全く応えないルフィにオルガは半眼を向けるも

「この船は横の二隻を含めてウチの会社の船さね、テゾーロ財団つて  
名を聞いたことは？」

「何だそれ？食いもんか？」

オルガの質問に首を振るルフィに

「…ま、この辺りに居たんじや知らないのも無理は無いさね」

「しっかしこのでっけー船三隻全部お前のものなのかー、すげえな!!」  
「いや、別にアタシの船ってわけじゃないさね。

立場的にこの”ステラ・オブ・ゴールド”の船長を任されてるだけ  
さね、これでも会社の幹部だわさ」

「へー、おっとそれどころじゃ無かった、さっさとゾロ達に合流しねえ  
と」

「あんたの仲間かい？」

「おう！おれの仲間だ!!」

「まあ焦るんじゃないだわさ、助けたお礼としてちよつとアタシの話に付き合ってもらおうさね」

「えー…さっさと合流してビビの為に反乱止めねえといけねえんだけど…」

「ビビ…ねえ、アラバスタ王女”ネフェルタリ・ビビ”が関係あったりするのかい?」

「はっ!?し、知らないぞー!ビビがおれ達の仲間でこの国の女王だなんて誰も言っていないぞ!!」

「語るに落ちるとはこの事かねえ…まあいいさね、隠れる為とは言えうちの船に忍び込んだんだ、事情聴取くらいはさせてもらおうさね」

「むー…確かに黙って乗り込んだけどよお…」

「すぐ済むさね、アンタはこの国に何をしに来たさね?」

「クロコダイルをぶっ飛ばしに」

早速のその答えにオルガは一瞬頭を抱える。

「…クロコダイルってのは王下七武海のサー・クロコダイルかい?どうしてまたそんな大物を?」

「そりゃあビビの国を乗っ取ろうとしてるわりー奴だからだ!」

その言葉にオルガは驚いた風を装い

「砂漠の英雄と呼ばれるクロコダイルがこの国を?そんな冗談信じられないだわさ」

「む!本当だぞ!蠟燭のやつとか爆発する奴とか集めてバロック何とかって会社作ってビビの国を乗っ取ろうとしてんだ!!」

「…まあいいさね、跳ねっ返りがクロコダイルを倒して名を上げようとしているって考えておくさね。」

付き合ってくれた礼さね、これでも受け取るだわさ」

そう言っただけで投げられたのは何かのカード、ルフィは咄嗟に受け取ると

「何だこれ?食いもんじゃねえのか…」

「随分な言い様だねえ、今世間で最も有名なアイドル、歌って踊れるあのベアチルド・シユガーのファンクラブの特別会員証さね。」

何処をどう見たら食べ物に見えるんだわさ、欲しがる奴はごまんと

いるさね」

「へー、まあそのシュガーってのが誰か知んねえけど貰えるもんは貰つとく！あんがとな!!」

「…そういやお前名前なんて言うんだ？」

「そういや名乗ってなかっただわさ、アタシはオルガ：グラン・テゾーロ芸能部門”ステラ・プロダクション”代表のキナミス・オルガさね」  
ルフィはそれを聞くと

「オルガか！色々にあんがとな！また今度どこかで会おうぜ！」

そう言つて自身の腕を伸ばすと帆柱を掴んで一気に上空へ、そしてぐるりと周囲を見渡し目的の誰かを見つけたのだろう、そのまま腕を伸ばして飛んで行ったのだった。

「…噂に聞くより随分と元氣な奴だわさ、しかしこれで大体の所は分かったさね、クリークには伝えておいた方がいいだわさ。」

一足先にボスとアルバーナに向かったから後で連絡しておくとして：王女の居場所と麦わらの位置の把握が先かね？」

勿論オルガはクリークから今回のアラバスタ来訪についてある程度話は聞いており、そしてこの国の王女であるビビがクロコダイルの陰謀に巻き込まれており、その手助けとして麦わらの一味が協力しているのも聞いている。

昨日着いた時には騒ぎは無かったので恐らく今日この島に来たのだろう、後で沿岸部を搜索するとして…

「騒ぎと言えば昨日は驚いただわさ、いきなり10隻の船から襲われるとは思わなかったさね…」

やはり船の随所にあつた黄金が余計なのを呼び寄せたのかいきなり翼にレイピアの髑髏を持つ艦隊に包囲された時には肝が冷えたものの、自身の上司や恩人が腕を一振りする度に沈んでいく船達を見て考えるだけ無駄だと悟つたが。

オルガとてまだ若年ながらテゾーロ財団の幹部をはる身、ついでに今をときめくトップアイドルであるシュガーのマナージャー兼ボデイガードと言う手前、戦闘力には幼い頃からの特訓により割と自信はある。

だがそれは対個人に限った話で、やろうと思えば色んな手を使えば不可能では無いだろうが、流石に腕の一振りで大形の船を沈めれるほど人間を辞めてはいない。

「…あたしの周りは化け物ばかり、まあ妹分のタメだしこれも恩人の為さね」

そう言つて大きく伸びをするオルガだったが彼女は知らない、戦闘（主にシュガー相手によからぬ事を企む者達）では一対一で確実に敵を倒していき、そして見ることもすら叶わぬその速さ故に倒された敵の目に写るのは豊かに波打つとても綺麗な金色の髪のみ。

故に”金色の影”、”金の足跡”などと呼ばれ”シュガーには手を出すな、アレにや何かか憑いている”と噂されている事を…

## 砂の国での方針を

「カトレアに？ユバじゃ無かったの!？」

「ええ、姫様が黒幕の正体を探るべくこの国を出て行った後にコーザが”この町はもうダメだ”と放棄を決意、その後まだ影響の少ないカトレアに拠点を移しました」

なんとかルフィとも合流し、一行はビビの案内でナノハナの奥まった場所にある建物に来ていた。

中には十数人ほどの人間が忙しげに立ち回っていたり地図を囲んで何らかの話し合いをしていたがビビを見ると深く頭を下げ口々にその帰還を喜んでいた。

ビビが言うには彼等は直属の武装親衛隊の一部であり、ビビが裏で動くためにあちこちに分散して情報を探らせておりここもその一部という事であった。

成る程言われてみれば格好こそそこらを行き交う庶民の格好だが男も女もしつかりした身体つきをしておりなかなか強そうだとナミは納得してビビと共にこの国の情報について聞く。

「ねえビビ、反乱軍はユバってオアシスにいるって言って無かった?」「ええ…わたしがこの国を出る前はユバを拠点にしてただけど…」

「実は前々から砂嵐がユバを襲ってまして…ユバはもう死んだも同然です、僅か数名が残ったものの多くの住民が散り散りに、そして反乱軍も利便性を考えてカトレアに拠点を移したみたいです」

「…雨が降らない所為で砂嵐も頻発しているのね、あのユバが枯れるだなんて…」

「…一概に日照りの所為と言えないかもしれません」

「どういう事?何か要因が?」

「我々親衛隊でも調べたのですがどの砂嵐もユバの北、レインベースの方角から発生し、そしてどれもユバとエルマルを通り南下しているのです。」

「確認はありませんが意図的なものを感じます、敵が砂のロギアである以上あり得ない話では無いかと…」

「…個人の力で砂嵐をおこすなんてロギア系の能力者ってほんと化け物ね」

気象に深い知識を持つナミだからこそ理解する、砂嵐はこの国では天災となり得るものである。

だからこそ人為的にソレを発生させる事ができれば自身の手を汚さず、しかも証拠も残さず町一つを衰退させる事が出来るのだ。

「ご友人どの、まだ奴の仕業だと決まったわけじゃ無いです、可能性が高いと言うだけの話ですよ」

「…いえ、ナミさんの言う通り相手に可能性があるのならそれに対して備えなきゃいけないわ。

戦力を低く見積もって有事に備えないのは愚か者のする事よ、砂のロギアなら砂嵐くらい起こしても不思議じゃ無いものね」

「なーなー、ナミいビビいまだかかるのかー?」

ビビ、ナミ、それとここナノハナの部隊長を務める男が地図を前に話し合っていると最初は大人しく話を聞いていたもののやがて飽きたのかある者は退屈そうに、ある者はいびきをかいたりする中でルフィが椅子に逆向きに腰掛け背もたれに顎を乗せつつ退屈そうに言えば

「…姫様、本当に彼らが役に?」

「普段はこんなだけどやる時にはやってくれるのよ、もうちよつと待っててねルフィさん、今この後の方針について計画を立てているところだから」

「むー、早くクロコダイルぶっ飛ばそうぜ?」

ビビの言葉にルフィがそう言えば

「ルフィ、目的忘れてるでしょ。」

あたし達はクロコダイルをぶっ飛ばしに来たんじゃなくて反乱軍を止めに来たの、わかる?」

ナミが拳を握って笑顔でルフィに迫る。

相手は王下七武海に名を連ね、しかも世にも希少なロギア系の化け物。

そんなのを相手にするだなんてとてもじゃ無いがやってられない



と思ってるのだろう、下手すればこの国で全滅する恐れもあるのだ。  
「むー…ぜってークロコダイルぶっ飛ばした方が早いんだけどなあ」  
「まあまあルフィさん、反乱軍と話し合うのは前段階だしサー・クロコダイルに会うにも順番って物があるのよ」

と、意図的にルフィとクロコダイルを合わせないようにしているかの口ぶりのビビ…と言うか今まであまり気にしてなかったがビビもビビで少し様子がおかしい気もする、二面性とでも言うのだろうかアラバスタに来てからはそれが強くなってる気もする。

「…とにかく反乱軍がエルマルにいるのなら秘密裏に接触、幸いにも反乱軍のリーダーであるコーザとは面識があるわ」

「では反乱軍に潜入している親衛隊の者に情報を伝えておきます、少なくとも明日までには話し合いの場を設けて見せましょう」

「ええよろしくね、それよりもルフィさん曰く海軍が来ていると聞いたのだけど…政府はクロコダイルを信用して海軍なんて送って来ない筈よね?」

「ああ、専任追討で上陸していると聞いています。

上手くいけばクロコダイル捕縛に役立つかもしれませんが…それよりももつとんでもない奴らがこの国に来ています」

「とんでもない奴等?」

「はい、報告が遅れましたがテゾーロ財団の頭であるグラン・テゾーロとクロコダイルと同じく七武海の一角であるポートガス・D・エースが上陸しています」

「え…?」

「なっ…!」

その言葉にビビとナミは固まるも

「!!おいおっちゃん!今エースって言ったか!」

二人よりも劇的に反応したのは今まで退屈そうにしていたルフィであった。

## 牙を研ぐ砂の姫

「ル、ルフィさんどうしたの？ポートガス・D・エースを知ってるの？」  
エースの名前を口に出した部隊長の襟首を掴んでがっくんがっくん揺らすルフィを宥めながらビビがそう聞けば

「兄ちゃんなんだよー！」

「…へ？」

「エースはおれの兄ちゃんなんだよ!!」

その言葉に暫し固まる一同、そしてしばらくして

「ルフィさんにお兄さんいたんですか!？」

「ちよつと！聞いてないわよルフィ!?!しかもクロコダイルと同じ七武海ですつて!?!」

「…驚きました、あの火拳に兄弟がいたとは。」

因みに火拳はギルド・テゾーロの護衛として同行しているようです」

「…ちよつと整理させてね。」

えーとルフィ、あなたのお兄さんが七武海というのは置いといて…」

「そうだ！おっさん!!エースが七ブカイってどういう事だ!?!あれって海賊じゃない海賊なんだろ!?!」

「お・い・と・い・い・て!!」

「…お、おう」

青筋を立てたナミの剣幕にルフィが怯めば

「…なんで政府の直轄である七武海がその…ギルド・テゾーロだったかしら？」

その護衛を？テゾーロ財団って言うのは聞いた事があるわね、何者？」

「ナミさん、ギルド・テゾーロはざっくり言ってしまうえば大商人よ。」

しかもそんなじよそこらの大商人とは別格、世界政府とも取引があるわ。その権力は絶大、世界の富の数%を個人で保有し彼の組織においては世界の通貨の三割を握ってるという噂よ」

「…何よその超大金持ちは」

「七武海の火拳はテゾーロの推薦で…三年前だったかしら？それで就任した最も新しい七武海ね。」

「確か元・懸賞金額は…確か1億5000万だったかしら？」

「一億!?クロコダイルよりも上じやないの!!」

「まじか!?流石エース!…でもなんでシチブ海に？」

「んー、ルフィさんのお兄さんが何で七武海に所属しているかは知らないけれど…」

「…おれの知ってるエースなら七武海なんて断りそうだけどなあ？」

ビビの説明にルフィが首を傾げるも

「なるほど、そのテゾーロって奴とルフィのお兄さんの関係はわかったわ。」

「ねえルフィ、あんたのお兄さんに助力を頼む事とか出来ないの？ほら相手は七武海なんだしこっちも七武海がいれば心強いなーなんて…」

「関係ねえエースを巻き込むのもなあ…エースにもエースの冒険があるんだし…」

「まあまあナミさんそれは一旦置いておきましょう、ルフィさんのお兄さんがこの国に来ているとしても居場所もわからないんだし…」

「そう言って何らかの手振りをすると側にいた男が軽く頷いて扉から外に出て行き」

「…ビビ、今の人は？」

「ちよつとお使いをね、それよりも反乱軍に潜んでいるこちらの手作者と連絡がとれ次第カトレアに向かうわ。」

ルフィさんに動いてもらうとしたらその後だから今はしっかりと食べてしっかりと休んで頂戴？」

「おう！飯食わしてくれるのか！肉あるか？」

「ええ、ここナノハナでは香辛料をふんだんに使用した料理が有名なの、きつとルフィさんも気に入るわ。」

「誰か、彼に食事を…くれぐれも彼の正体がバレないように気をつけてね？」

扉から去って行くルフィにそう軽く笑みを浮かべて言うビビに

「…ビビ、あたしてつきり身一つで反乱軍に会いに行くもんだと思っ  
てただけど…結構周到に用意してるのね、この隠れ家もそうだし  
反乱軍にもビビの親衛隊が潜り込んでるんでしょ？」

他にどんな札を持つてるか知っておきたいんだけど…隠してる事  
とか無いかしら？」

「備えられる時に備えておくのは王族の務めよナミさん。」

因みに一番最初にも言ったけど隠してる事の10や20はあるけ  
れど…ごめんなさいナミさん、貴方達は信頼できる人達だけれどまだ  
明かせない事が多いの」

「…まあいいわ、乗り掛かった船だしあんたを送り届けるのは船長の  
決定だもんね。」

その代わりちゃんと報酬は払ってよ？これで革命が成功して国が  
倒れちゃったら何の意味もないんだからね？しつかりこの国を救い  
なさいよ王女さま？」

「もお、ナミさんまで…任せてナミさん、わたしは”どんな犠牲を払っ  
ても”この国を生かすわ。」

その為にはまずは反乱軍との話し合いね、そしてその後は…場合に  
よってはバロックワークスとぶつかる可能性があるわね」

「そう言えばバロックワークスについての情報をすり合わせてなかつ  
たわね。ビビあんたは来ると思う？」

「…八割って所ね、リトルガーデンでこちらを邪魔してきたMr. 6  
ペアがどう動いてるかわからないのよねえ」

「因み他の幹部の情報はあるの？潜入して情報とか集めてたんでしょ  
？」

「そうね、そこら辺もすり合わせておかないとね。」

Mr. 0とその相方であるミス・オールサンデーは置いておくとし  
てMr. 1は戦闘に特化した能力者だと聞いているわ、相方のミス・  
ダブルフィンガーは能力、容姿共に不明ね」

「…戦闘特化、まさかそいつもロギア系なんて事は無いわよね？」

「まさか、ロギア系の能力は貴重なのよ？多くは海軍が握ってるし他

だとサー・クロコダイルとか火拳とかの有名どころよ?」

「…ダメね、ドラムにいたしちよつと立て続けに出てきたから感覚が麻痺してるわね」

「ドラムのお医者さんだったかしら?」

話を戻すわ、Mr. 2はペアを持たない単独のエージェントで大柄のオカマらしいわ、オカマ口調で白鳥のコートを愛用し、背中には大きくオカマ道と書かれてるらしいわ」

「何それ、そんな目立つ人間一発で分かりそうじゃ無いの」

「不確かな情報なのだけれど彼は変装の達人だという噂もあるわ、それだけ特徴的なのにわたしの部隊が全く尻尾を掴めて無いのよねえ…」

「成る程、特徴的だからこそそれが無いと逆に正体が分からないって事ね?」

「Mr. 3ペアはリトルガーデンで撃破済み、Mr. 4ペアはわたしも会った事があるから後で絵姿を用意させるわ。」

Mr. 5ペアはウイスキーピークでイガラムに預けたけれど…恐らくミス・オールサンデーの手で救出されたか、任務失敗で始末されたかのどちらかでしょうね」

とビビとナミはこれからの敵の情報をすり合わせつつ今後の方針を話し合うのだった。

## 反乱軍の戦士

「まさか英雄との呼び声も高いクロコダイルが…」

じゃあおれは集まった反乱軍に真実を話して解散させたら良いんだな？」

そう言ったのはがっしりとした体つきに日にやけた肌、そして左目に大きな傷を持つ男。

そして対するは水色の長い綺麗な髪を一つに結えた少女。

明けて次の日ビビは一人でカトレアへと向かい、夜の帳が下りてから秘密裏に反乱軍リーダーであるコーザに会いに来ていた。

因みに麦わらの一味達はビビが一人で向かう事に懸念を申ししたが大人数で行っては潜入が難しくなると言う事に渋々納得し一部がカトレア郊外で、残りはナノハナに残っていた。

そしてそこで自身が調べた事など今回の顛末を話せばコーザは軽く領き反乱軍を解散させるかと聞けばビビは軽くかぶりを振り

「反乱軍解散の必要は無いわ、真実を話したとして一般の民衆が英雄であるサー・クロコダイルが本当はこの国を狙っていたと信じるかしら？」

元々お父様を本当に信じてる人間は殆ど反乱軍に参加していないわ、この反乱軍に真実を話したとて国王と英雄どちらを信じるのかは未知数よ？」

それに国を救う為に立ち上がった反乱軍と言えば聞こえはいいけど町が砂に呑まれた食い詰め者や勝ち馬に乗ろうとしてるゴロツキ、サー・クロコダイルの手の者なんかも入り込んでる寄せ集めなもの。

まあ、貴方や裏切った国王軍みたいに本当に国の事を考えお父様を信じてる人達の方が多いとは思っているけれどね？」

「…耳が痛い話だな、だが多くは故郷の町を無くしたただの民達だ。

行き場の無い者を受け入れるというのも大事だろう？それが上に立つ者としての務めじゃ無いのか？」

「コーザ…確かにユバの次期領主であった貴方の言う事はわかるわ。

だからと言ってそこで武力による革命を選ぶのは二流よ、まあ貴方

の事だからアルバーナのお父様と話はしたとは思うけれど…」

「…ダンスパウダーを使ってくれないかと上訴しに行っただがな」

「まあ国と民を思うお父様なら領く咎も無いでしょうね、”密かに使われて”アルバーナだけ例年より多く降っていたのだから今更他の場所でも使っても…かしら？」

「ああ、ダンスパウダーがクロコダイルの仕業だとしても一度使われたのならそれこそ砂に呑まれたユバやエルマルにメリアス、他の町でも使っていいんじゃないか？」

「…果たして少量ならまだしも、国民の渇水を潤す量の雨を降らすのにどれだけの量の雨が必要かしらね？そしてその量の雨を降らせたとして未来にどれ程の負債を残す事になるかしら？少量の使用でもう3年も雨が降ってないのよ？」

ビビの言葉に無言になるコーザ、その表情は頭では理解しているのだろうが目の前に雨を熱望する者達を見てきたからこそ感情が納得しないのだろう。

「…まあ納得しろとは言わないわ、反乱を起こすのも必要があったからでしょうし。」

それは置いておくとし反乱軍60万…じゃなかったわね、反乱軍80万でレインベースに攻め込んだとしてクロコダイルに勝つ事は可能？」

「…まだ全員に武器が行き渡ってねえんだ、クワや鎌を持ち出して武器が棒切れって奴もいる。」

王国軍20万相手に今まで手をこまねいてたんだ、いくら数は多いとは言えとてもじゃねえがああクロコダイルの相手が出来るとは思えねえ」

コーザの言葉にビビは軽く頷くと

「まあ通常の攻撃はサー・クロコダイルには無効なものね、変なこと聞いて悪かったわ。」

兎に角今はまだ解散の必要も無いしクロコダイルに攻撃しに行かなくてもいいわよ？わたしの予想が正しければバロックワークス…クロコダイルの手の人間が何か騒動を起こすかもしれないけれどく

れぐれも早計には動かないように。

都合が良い事が次々におこったなら裏に誰かの何かしらの思惑があると考えてよ？」

「…わかった、だがおれ達は何をすればいい？この国を雨を奪った奴がいるのに何も出来ないなんて」

「反乱軍にも多くのスパイが紛れ込んでるのよ、サー・クロコダイルに貴方がこの国の真実を知っていると知られるとあまり良くないのよね。

まあ出番はあるかもしれないし今まで通り行き場の無い者の受け入れや武器集めを頑張つて欲しいわ…あ、手が空いていればサー・クロコダイルに壊されたエルマルの運河の修復なんかしてくれるとありがたいわね」

「…運河の破壊も奴の仕業だったのか、王国軍兵士が壊したと聞いているぞ？」

「それも詭道ね、敵の仕業に見せかけての破壊工作は第三勢力においては常套手段よ、おおかた変装したバロックワークスの仕業でしょうね。

エルマルにメリアス、ユバもだったかしら？多くの村や町が砂に呑み込まれている現状反乱軍の数はまだ増えるでしょうね。

ここカトレアやナノハナ、アルバーナやレインベース他に無事な所は？」

「そうだな、それ以外ならイドやバッドランドなんかを含めまだ無事な所は何箇所かあるな」

「砂賊や盗賊の動きはどう？ここ数年で活発化してるんじゃない？」

「…察しの通り町や村を捨てた者達が合流してる、何たって水や食い物が無いなら奪うのが一番手っ取り早いからな。

最大勢力のバルバロッサの砂賊は国王を信じてるみてーだが盗賊共はそんなの関係ねーとばかりに生き残った村を襲ったりしてやがる」

「…勿論対策はしてるんでしょうね？」

「お、おお勿論生き残ってる村にはそれぞれ数名の反乱軍を常駐させ



てるぜ？

いかに盗賊共と言えど反乱軍の名は怖いみてえでな、それからイドの他に何個かの村の奴等はくれぐれも穏便に、と訴えがあったぜ？信頼されてるな国王は」

「ふっ、それもそうね。それはお父様が今まで民の為の政治を行なってきたからよ」

「国王にはクロコダイルが黒幕だと伝えたのか？」

「…伝えたらそれこそ残る20万を総動員してレインベースに突っ込みかねないわね」

「…かもな、王宮を空っぽにしても突っ込みそうだ」

そう言って数年以上会っていなかったビビとコーザはそれを思わせないように軽く笑い合うのだった。

## 砂の姫の計画

カトレアでコーザとビビが話し合いを終えてビビと一味はナノハナに集まっていた。

「さて、反乱軍との話し合いは無事に終わったわ！」

「おっ！じゃあ反乱は止まるんだな！良かったーこれでビビの国は救われるのかー！」

「…まあウソツプさんが喜んでる所悪いんだけど、反乱軍はまだ解散してないわ」

「へ？ビビあんた反乱軍のリーダーと話し合いに行つて反乱を止めさせたんじゃないの!？」

ナミのその言葉にビビは頷きつつ

「止めるというか真実を教えてきただけよ、それと忠告をね。」

今反乱軍が解散した所でそのまま難民と化してしまうのよねえ…  
ついでに言うのと反乱軍を止めた所でサー・クロコダイルがこの国盗りを諦めると思う?」

「なるほどーじゃーやっぱりクロコダイルをぶっ飛ばしやあいんだな!!」

ビビの言葉に一味は確かに…と納得しルフィはそれを聞いて意気揚々と拳を握り

「まったく…あんたほんとクロコダイルをぶっ飛ばす事しか頭に無いのね!？」

ルフィの言葉にナミは呆れたように溜息をつく。

「まあまあナミさん、どのみち最終的にはクロコダイル率いるバロツクワークスとの激突は避けられないと思うのよねえ…その相手がわたし達にしる国王軍にしるね」

「…ねえビビ、あんたの狙いは？反乱を止めるんなら反乱軍を止めれば事足りたんじゃ無いの?」

「そうね、話しておこうかしら…わたしの目的はサー・クロコダイルの心を折る事よ」

「心を折るって…また随分と抽象的な事を言うわね」

「まあね、相手は世界政府直轄の王下七武海が一角」サー・クロコダイ  
ル”

彼はここ十数年ずっと名実共にこのアラバスタの……砂漠の王”  
となる為に周到に用意してきていたわ。

ダンスパウダーを使用し雨を奪い、それを王家の仕業としてこの国  
に疑心暗鬼を蔓延らせ、そして裏では王国軍の仕業に見せかけ各地で  
破壊活動を行い……そして自身は国を襲う海賊を始末する事によって  
この国で英雄として確固とした立場を築き上げる事によって……最終  
的に国王の身柄を抑えるか、反乱軍が王国軍に勝利した所を出張って  
この国の指導者としての地位に就くのでしょうかね」

「……ちよつと待って。ねえビビ、アラバスタって世界政府加盟国よね  
？いくら七武海とは言えクロコダイルは海賊よ？海賊に国の王権を  
認めるの？」

「……その為のアラバスタでもあるわ。とある筋からの情報でね、この  
国の何処かに古代兵器のありかを示す石碑があると言われているわ。

古代兵器と言うのは島一つ消してしまうようなそんな兵器でね、政  
府はひた隠しにしているけれどそんなものがサー・クロコダイルの手  
に渡ればどうなると思う？その方向が世界政府に向けられて交渉が  
為されればどうなるかしら？」

「なるほどねえ、確かにそんなものが有ればビビちゃんの言う通りに  
なってもおかしく無いわな」

「サー・クロコダイルはそれを持ってしてアラバスタに君臨するつも  
りでしょうけど……その前にその長年かけて準備してきた計画を王国  
側であり、しかもまだ年端もいかない小娘の手で叩き潰す事によつて  
この国を諦めさせようと思っっているわ。

これが今回の反乱騒動の終結のさせ方ね、その後はまあ色々考えて  
るけどまあ今はとらぬ狸の皮算用って事で言わぬが花ね」

「なんとまあ……あんたもクロコダイルも周到な事ね……」

で、この後はどうするの？あんたのお家……アルバーナだったかしら  
？そつちに向かうの？」

「いえ、このまま一旦船でエルマルに向かうわ」

そのまま机の上に地図を広げるビビ、一同はそれを覗き込みビビの指を追いかける。

「ここナノハナから行くには大河であるサンドラ河を越える必要があるの。」

だから予め対岸のエルマルに船で向かいそちらに上陸、そこから砂漠を越えて北上し向かうのはここよ」

そう言っつてビビの指が一つの場所を指す。

「ここは？」

「レインベース、反乱とは無縁なギャンブルの街にしてサー・クロコダイルのいるオアシスよ」

「へえ、いよいよ七武海とご対面か？」

「ゾロ：あんたまで：何でうちの男共っつてこう好戦的なのかしら：」

「よーし！だっつたらさっさとそのレインなんちゃらに行っつてクロコダイルをぶっ飛ばせばいいんだな！」

「クロコダイルはわたし達がまだこの国にいる事は察知していない可能性がある以上秘密裏に動く必要があるわ。」

そしてバロツクワークスのエージェント達も出張っつて来るでしようね」

「ビビ、あなたのお父さんにクロコダイルの事伝えなくていいの？」

「それはカルーに行っつてもらおうわ、取り敢えずわたしが調べた事と個人的な忠告を書いてこの後出発っつてもらおうわ。」

いいわね？カルー、あなたの仕事はここから砂漠を越えてそのままアルバーナの宮殿にいる父の元へ行っつて頂戴」

「クワツ！！」

「わたし達はナノハナで必要な物資を調達その後に出航するわ、それからルフィさんのお兄さんだけれど：：どうやらアルバーナに向かっつたらしいわよ？」

最悪を予想するつすれば：サー・クロコダイルとギルド・テゾーロが手を組む事ね：七武海を抱え込んでる以上無いとは言い切れないわ、まあ無いとは思っつけれど：：」

「おいビビ！エースがクロコダイルの仲間だつてのわか！？」

「そうは言っていないわよルフィさん、あくまで可能性の話よ。」

あのギルド：「テゾーロが補給のため”だけ”にこの国に立ち寄ったとは考え辛いのよ。」

そうなる狙いが読めないのよねえ：あーもう何でこんなタイミングで来るのかしら！この時期でさえなければ余計な事考えなくていいのに!!」

「お…おいビビ大丈夫か?」

最後だけ自身の額を抑えて強い語気で言うビビにウソツプ が恐る恐る聞けば

「あぁごめんなさい、最悪を考えるに越した事は無いと思っただけよ。」

移動手段は伝手があるからそっちにお願いするとは言え砂漠を超えるとなると水に食料、それから服も変えなくちゃいけないわね。

必要となる物資はこちらで用意させるわ、それからあなたはアゴトギと彼の小隊を呼んで頂戴、連絡役として連れて行くわ」

ビビの言葉に了解しましたと言って出て行く部下の背中を見ながら

「さて…じゃあ目標はレインベース、出発は明日明朝、それまでみんなは十分に休養を、移動手段は確保する予定だけど厳しい旅になるわしっかり英気を養って頂戴」

と、ビビのその言葉に一同は頷くのだった。

## 周到なる砂漠の王

明けて次の日、まだ朝日も出ないうちからナノハナの一角ではとある一団がゴソゴソと何やら大荷物と共に動いていた。

「えー…ビビオジョーサマ、お久しぶりですゴザイマス…」

「久しいわねアゴトギ、貴方の部下達も元気そうね」

「え、ええ…オカゲサマで…」

そう言つてビビにぎこちなく頭を下げる長身で赤髪の男。

「荷物の準備は？」

「ハイ、準備は出来てるでござーやす」

「ねえビビ、この人は？」

ビビ相手に恐縮する男の事をナミが聞けば

「昔ちよつとした縁があつてね、今はわたしの個人的な部下をやつてもらつてるわ。」

”アゴトギ砂商団” っていう組織を率いていてね、砂賊や盗賊達にも繋がりがある男で”色々”世話になつてるのよ」

「あー…要するにそつちにパイプを持つてる人間つて事ね。」

しかし意外だわ、王女様である貴方にそんな人脈があるなんてね？」

「あら？今のわたしは海賊とも繋がりがあるのだけれど？」

「…それもそうだったわね」

「さて、じゃあ出るわよ…という事でルフィさん、事後承諾になつて悪いのだけれど彼らも船に乗せてもらえるかしら？」

ビビが頭を下げてそう言うトルフィは快く

「おう、いいぞー」

と胸を叩きビビはそれを聞いて

「じゃあ船に荷を運んで頂戴」

とアゴトギと彼の部下に命令を下し、早速荷物を運び出す部下達を他所にアゴトギは

「そう言えばオジョーサマ、ところで例の協力者からこんなものが…」  
とビビに旅行用にしては小さめな革張りのトランクを見せればビ

ビはそれを受け取り

「あら、ダイヤル錠なんて嚴重ね…あらあらこれはこれは、ひよつとしたら無理だと思つてたけれど…やってくれたわねゴリラさん、事が成つた暁には何かお礼をしなきゃね」

軽く錠を操作して中を見れば唇を軽く上げてそのまま閉めると再び鍵をかけた。

「ビビ、何それお宝？」

意味深なビビにナミが目をお宝マークに変えて聞けば

「いいえナミさん、お宝では無いけれど今のわたしにとっては宝石より価値のあるものね」

そう言つてトランクを荷物の中に仕舞うビビ。

「よーしーじゃあさつさとレインベースつてところに行つてクロコダイルをぶつとばすぞ!!」

そう言つてルフィは意気揚々と郊外に停泊したゴーイングメリー号へ向かおうとして

「あ、ルフィさん海軍がいるみたいだし、砂漠越えもあるからこつちの服装に変えてもらえるかしら？」

ビビのその言葉に立ち止まるのであった。

一方その頃、ルフィ一行が目的地としているギャンブルの町レインベース。

その中央にある一際大きなカジノ“レインダイナース”にて王下七武海の一角、バロックワークスのボスであるMr. 0ことクロコダイルは葉巻を燻らせていた。

「エージェントの集結はどうなつてる？」

「Mr. 3ペアからはまだ連絡は無いわね、Mr. 5ペアも行方が杳として知れないわ…アンラツキーズも戻らないし全く何処にいるのかしら？」

それに答えるのは黒髪の美女…バロックワークスの副社長にしてクロコダイルの右腕であるミス・オールサンデー

「…ちつ、どつかでくたばりやがったか？伝令役のアンラツキーズが戻らないのは痛いな」

「今はエリマキランナーズで対処させているわ、エージェント達に集合の伝令はかけてあるわよ?」

「:Mr. 6とミス・マザーズデーにも集合をかけておけ」

「あら?彼らはオフィサーエージェントでは無いけれど?」

「Mr. 3もMr. 5もいねえんだ、まあMr. 6ペアには昇進の先払いつて事にしておいてやれ。」

まあ戦力はたけえんだ、何かしらの役には立つだろ」

「で?計画通りにやるのかしら?」

「ああ、大幅な変更は無え。」

厄介なビビはMr. 3が仕留めた筈だ:いや待て、まさかMr. 3が返り討ちに?」

いや、奴の任務達成への執念深さはかなり高い:しかもMr. 6ペアが途中までは協力していたと聞いている。

:王女には海賊が護衛としてついていると言っていたな?」

「ええ、モンキー・D・ルフィ:3400万にロロノア・ゾロ:1700万と少女が一人とアンラツキーズからは報告が来ていたわね」

「:奴等は東の海から来たんだったな?船は小型とは言えキャラベル型だったか?::となるとまず三人で動かすとなるとかなり難しい筈だ。」

となると最低でも後一人くらいは居てもおかしくねえ筈だ:しかも専任追討のスモーカーがまだ元気に動いてやがる:Mr. 3め、しくじりやがったか!」

「いくらなんでも考えすぎじゃ無いかしら?」

「備えておくに越した事はねえだろ:だがビビと麦わらの海賊が生きてるなら簡単だ、幸いにもエージェント共はまだ本番まで時間がある。」

奴らが生きてるとして何処に向かうと思う?」

「そうね:普通に考えるならアルバーナかしら?現国王のネフェルタリ・コブラに直訴、その後王国軍をもってここレインベースへつてどこかしら?」

「:その可能性もあるが反乱軍リーダーのコーザとビビは旧知の仲と



聞いている、先に反乱軍に接触されちゃあ計画が狂うぞ！あいつらはカトレアにいやがる、上陸するとしたら隣のナノハナだ！」

「あらユバじゃない？王女様達が反乱軍説得の為に向かうなら」

「ユバ？あんな枯れさせたオアシスに何が…そうか、ビビが行方不明になってうちに入り込んだ時はまだユバを拠点にしていたな反乱軍は…」

「なら話は簡単じゃない？ビリオンズで部隊を作り早急にユバで監視をさせるわ」

「…さつき言ったエージェントの集合は取り消しだ、Mr. 6ペアとMr. 4ペアもビリオンズと共にユバに向かわせろ」

「…いくら何でも過剰戦力じゃないかしら？それに王女様達が本当に生きているとは限らないでしょ？Mr. 3ペアも任務には成功して何か事情があつてアラバスタに戻つて来られないのかもしれないわよ？」

「杞憂ならそれに越した事はねえんだが…ギルド・テゾーロとポートガス・D・エースなんて特大の不確定要素がある以上ここで手を抜く訳にはいかねえ」

「…わかつたわ、エリマキランナーズを使いに出しておくわ。」

ビリオンズは何人くらい送るのかしら？相手は王女一人に少数海賊、Mr. 6ペアとMr. 4のペアが行くなら10人くらいかしら？それでも多いくらいだけだ」

「いやその5倍だ、出し惜しみはしねえさ」

「…随分と警戒するのね？相手はたかが小娘じゃなかったの？」

「はっ、たかが小娘さ。蟻の一穴で全てが瓦解してユートピア作戦が失敗しましたじゃ話にならねえ、そうだろ？」

なに、Mr. 3が任務に成功していたなら良し、任務に失敗してたならユバで王女達を再殺すりゃあ済む話さ」

そう言つてクロコダイルはニヤリと口角を上げるのだった。

## 砂賊の娘砂の姫

「さてバルバロッサ船長？このお話受けてくれないかしら？」

「断る、王族の命令だか何だか知らねえがおれ達砂賊は何か縛られるつもりはねえ」

「対価はきちんと払うわ、噂は色々聞いてるわ、水も食糧にも困っているのでしょ？」

「…痛い所を、だがおれの船には王族を嫌う奴もいる。」

おれは国王陛下を信じてるがそうじゃない奴もいる、この国に雨が降らなくなって三年、枯れるオアシスや砂に呑まれた町は数知れねえ、ここエルマルにユバ、メリアスやスイレンなんかもそうだ。

だからこそ救ってくれなかった王族を恨む者はいる、反乱軍に加わった奴もいるさ、なぜ助けてくれなかったのか、何故きてくれなかったのだとな…今までコブラ王が善政を敷いていただけにな。

…そいつらを説得できたのなら考えてやる、まずはそれからだ」

かつてサンドラ河から敷設された運河の恩恵により豊かな緑を誇り”緑の町”と呼ばれていたエルマル。

今は運河は破壊され、砂に呑まれた廃墟となった村でビビは巨漢の男と向かい合っていた。

ビビ一行はナノハナをゴーイング・メリー号に乗って出航するとそのまま沿岸部を回りサンドラ河を遡りここエルマルに錨を下ろした。

その後ビビの指示でアゴトギが郊外に出かけて行くと巨漢の男を引き連れて戻り、そしてビビはレインベースまでの足を確保せんと話し合いを行っていたのだ。

巨漢の男：バルバル団団長は砂賊の頭である。

元々は砂ゾリと呼ばれる乗り物で盗賊行為を行う小規模な盗賊だったがバルバロッサが他にいくつもあつた似たような組織を時には話し合い、時には拳で語り合いそう言った勢力をどんどん吸収して出来上がったのがサンディ島最大の砂賊、”砂の波濤を超える者達”の異名を誇るのが”バルバル団”だ。

彼らは砂の流れと風を操り、まるで海を征くかのように砂漠を航海する。

そして彼らの乗る船は大型の帆船と同様でありそれ故にビビは前々からこのバルバル団には目をつけていたのだった、砂漠の船での航行：今でこそ砂と風の両方を読み操る者は少数だが、これが体系化できれば交通も輸送も格段に利便性を増す事だろう、今回それを思い出した為にこうやってレインベースまでの交通手段として利用させてもらおうと考えたのだ。

何しろ砂漠を歩いて渡るといふ事はそれすなわちとてつもない苦難の道だからだ。

ビビも自分一人なら余裕綽綽で越えただろうが、アゴトギ含むその部下達はこの国生まれ故に砂漠に慣れているとしても協力者である麦わらの一味達は誰も砂漠は未経験、下手に砂漠を共に横断すれば一味がバラバラに逸れかねないと危惧して今回の話し合いとなったわけである。

「…いいでしょう、その王族に不満を持っている人達を集めてもらえないかしら？」

「ふん、せいぜいそのお手並みを見せてもらおうか、一時間後くらいにまた来る」

そしてきっかり一時間ほど後にバルバロッサと共に現れたのは10人ほどの集団だった。

それと共にビビに回転しながら飛んでくる複数の刃のついたナイフ。

半歩ずれる事で避けると

「…随分なご挨拶ね？」

とナイフの飛んできた方向に向かって言う。

ナイフを投げたと思しきは先頭に立つ女性、鋭い目つきで砂賊の証として黒の艶やかな髪に日傘の簪を指した彼女はビビの足元に刺さったナイフを引き抜き腰に納めると口火を切った。

「わたしはメリアルの出だけど…随分と昔に見たツラだね」

「メリアルメリアル…ああ、思い出したわ。」

父と一緒にこの国を巡った時だったかしら？砂ゾリの一大生産地であるメリアルで貴方わたしに花飾りをくれなかったかしら？」

「へえ、覚えてたんだ…でもそれなのに来てくれなかったのね？」

「砂に呑まれた時の事？まあきつとあの優しいお父様の事だから”何かあつたらすぐ駆けつける”くらいの事は言ったのでしょーうね？」

「わかってるなら…わかってるなら何故あの時来なかった!!わたしは待った!雨が降らなくなった時も!砂嵐の時も、泉が枯れた時も!町のみんなが徐々に減り出しても!そしてわたし以外誰も居なくなつても!!」

「ずっと!ずっと!!わたしは待ってたんだぞ!!どうして…どうしてあの時来てくれなかったんだ!!」

慟哭するような深い悲しみを湛えたかのような黒髪の女性のその言葉に傍に立っていた男が

「ラサ…大丈夫か？」

と、心配そうに聞くものの

「付き合わせちまって悪いねザバ」

と落ち着いたのか静かに返すラサ、それを見ながらビビは少し考えると

「…そうね、言い訳にしかならないと思うけどあの時は枯れていたのがメリアスのオアシスだけじゃなくあちこちで同じような事が起こっていてね」

「っ!言い訳じゃない!!何が”すぐ駆けつける”だ!!信じて待っていたのに、そんなのただの嘘吐きじゃないか!!」

「またもや激昂するラサにビビは言葉選びを間違えたか…と考えるつ

「わたしにそれを言われてもねえ…約束したのはお父様よ？」

「アンタは何も出来なかったの!?アンタだつてこの国の姫なんでしょ!アンタが来てくれるだけでも村は救われてたかも知れないじゃない!!」

「…たかが小娘に随分と過大な評価じゃないかしら?こんな貧乏王国のそれも小娘にそんな権力があるとでも?一人で勝手にほいほいと

メリアルなんて遠方に出かけられるとでも」

「っ！言いたい事はそれだけか!!」

それと共に先程投げたナイフを再び引き抜こうとしたラサに

「お、おい！それは不味いだろ！」

ザバは慌ててその腕を掴んで止めてそれをビビはまるで

” どう料理してやろう ” とでも言うかのような目で交渉の術を考  
えていたのだった。

### 350 話記念 もしも彼が剣の道に進んでいたら？

「ふはは！いくら貴様とておれの背車刀は読めなかつたらう!!」

「くそっ… 刀を背後に廻し、こちらに見えないように持ち変えたのか…曲芸剣とは良く言つたもんだな」

「よしカバジ！後はこっちに任せろ!!」

海賊狩り…ロロノア・ゾロは窮地に陥っていた。

新しく自身の船長となつたルフィと共にこの町に巢食う道化のバギーを打ち倒す為に殴り込みに来ていた。

そしてその尖兵として出てきた男は剣士であつた為にゾロが対応そして数合を交わしそして相手が使う剣術を知つていた故にバギー海賊団剣士のカバジの刃が戦う前から出来ていた傷を刺し貫いたのだ。

「待つて下さい船長、おれも彼も」 剣帝協会 の所属…決着は一對一で着けさせて頂きたい」

「…」 剣士の矜持” っつてやつか、まあ好きにしろおれはゴムの小僧をぶちのめしてくる」

「ありがとうございます…さてロロノア、続けるか？傷は深い…立ち上がると思えんがな」

「っ…へっ、こんなの屁でもねえよ！」

そう言つて脇腹の傷を押さえながら立ち上がるゾロにカバジは感心したように

「ほう…その傷でもまだ立ち上がるか、流石のタフネスだな…檻ごと運んだあの怪力といい流石” 東方十傑” に数えられるだけある」

「はっ、所詮最弱なんて言われる東の海でしかも第十席なんてミソツカスだぜ？」

「ふっ、改めて名乗ろう…バギー海賊団副船長及び剣帝協会” 東方十傑” 第八席” 曲芸剣のカバジ”」

それと共に刀を再び構えるカバジ

「自分で名乗つた覚えはねえが…剣帝協会” 東方十傑” 第十席” 海賊狩りロロノア・ゾロ」

「剣帝協会盟約に基づきいざ尋常に…勝負!!」

そして踏み込みは同時、ゾロの三刀とカバジの一刀が互いに高い剣戟音を響かせながら

「ふっ！流石だな、その傷でまだこれだけ動けるか!!」

「おれはこの先剣士と名乗る奴に負ける訳にはいかないでねっ!!」

それと共にゾロは右の刀を振り下ろすと同時に左の刀で左の刀を横薙ぎに振り抜き

「くっ何と重い剣か！成る程未だ動けるのは強い志の為せる技か…っせいー！」

カバジはそれを受け止めると共に返す刀で足元を薙ぎ払う。

「流石は第八席…今までのとは違えってか？…だがそろそろこの痛みにも慣れてきたぜ？」

「ふっ…これでも最初から”曲技”など捨てて本気でやってるんだがな…なら我が一刀を受けてみる！極技・一の太刀いいいいっ!!」

それと共にカバジは大上段に刀を構えるとそのままゾロに向かつて一閃

「へっ、一刀に全てを託したか！だが…三刀流鬼…斬りいつ!!」

それと同時にゾロの交差した三刀がカバジへと向かい全霊を込めて振り下ろされた一刀を打ち砕き

「ぐっ…み、見事…」

それと共にカバジの身体に殺到、大きくその身を吹き飛ばしそしてカバジはそう言いながら倒れ伏したのだった。

「…ふうっ、流石にしんどい…寝る…」

そしてそれと共にゾロも血が足りないのかその場で腰を下ろしてゴロリと横になったのだった。

その後無事にルフィがバギーを撃破、町人達の勘違いによりルフィとゾロ、それから一時的に手を組むことになったナミは這々の体で町を脱出したのであった。

そして暫く時は経ちここはローグタウン、ゾロはローグタウンの”とある場所”に来ていた。

「へえ…これが剣帝協会の東方支部か…」

翼を持つ剣の紋章を持つ扉を前にゾロは感心したように言う。

ゾロは剣帝協会”十傑主席”：そして協会の代名詞である剣帝の異名でも呼ばれる王下七武海の一角”鷹の目のミホーク”の戦いで破壊された二刀を手に入れる為にここローグタウンにある剣帝協会東方支部に来ていた。

剣帝協会は十数年ほど前に設立された組織で鷹の目のミホークを筆頭に名だたる剣士達が海賊、海軍問わず所属。

中央本部と東西南北の四つの支部を持ち政府や海軍、海賊のスポンサーを持つ特殊な組織でそこに所属する恩恵は様々である。

少しでも組織内での地位を上げ、その恩恵を受ける為に所属する剣士達は鎬を削っており剣帝協会が定めた”イーストブルーで腕のたつ剣士10名”の中に数えられているゾロも腕試しの為かここに来るまでに多くの剣士にダース単位で挑まれてその全てを撃破していた。

とまあ閑話休題、東方十傑となるとかなりの便宜が図られており今回ゾロはその為にこの支部に来ていたのだった。

受付の人間に事情を説明し、そのまましばらく待っているとある武器屋への紹介状を渡されて共に貰った地図を頼りに何とか辿り着いた場所は一軒の武器屋：紹介状を渡された店主のイッポンマツは「ああ！はいはい剣帝協会の紹介状：という事はあんた東方十傑の人かい！」

「ああ第十席って事になってるが…」

「十番目：という事はあんた海賊狩りかい!!いやー有名な賞金稼ぎじゃないかい!!」

「へっ、今は海賊だがな…刀の点検とそれから刀が二本欲しい、頼めるか?」

「はー、あの海賊狩りが海賊に転身かい。まあいい刀を寄越しな刀はそっちの台と…あとその樽にも突っ込んであるがそっちは10万ベリーの安物だまあ見てもいいが期待はすんな?」

「ああ、助かるじゃあ刀は頼むぜ?」

そう言つてゾロは残った一本の刀を店主に渡せばイッポンマツは



白鞘のその刀をスラリと引き抜き

「…ほう、拵を見た時にも思ったがこりやあ”和道一文字”じゃねえか」

「和道…？」

「おいおい！アンタ知らないで使ってるのか!？」

「つても親友の形見だからな…刀の謂れには興味無かったんでな」

「この和道一文字は大業物21工の一本で買えば1000万ベリーはくだらねえ代物だぞ？」

む…割と力任せに使ってねえか？目釘がズレてやがる…ふむ、刀身に歪みは無し、欠けも見られねえな。

この分なら拵を締め直す程度だ、ほれ手入れはやつとくからさつさと武器を選びな」

そうしてイツポンマツは刀を手に作業台に、そしてゾロはまずは樽の方から見てみるか…と入り口に向かおうとしたところで

「おじさん！わたしの刀仕上がってますか!!」

入り口の扉が大きく開かれるとそう言いながら入って来たのは一人の女性。

「あれ？お客さんがいたんですね！」

「おやおや、第三席のお出ましかい。十傑が同じタイミングで二人も来るとは…あんたの刀なら仕上がってるぜちよいと待ちな」

「へ？…と言う事は貴方も十傑なんですか!?!わあ！第何席ですか!?!わたし以外の東方十傑に会うのは久々です！」

とても見覚えのある姿にゾロは少しフリーズするもかぶりを振り考え直すと

「アンタも十傑…しかも三番目たあやるじゃねえか。

おれは10番目だ、しかし三番目って事はそうとうデキるんだな？」

「へえ…確か第十席と言えば海賊狩りのロロノアでしたか？いいですね何なら今ここでやり合いますか？」

と、突如火花を散らし出した二人に

「おいおいおい！何で剣帝協会の剣士ってこうも喧嘩っ早いんだ！ほ

れさっさと代刀を寄越しな！」

「あー…ごめんなさい、少し熱くなってきました」

「十席のアンタもさっさと刀を選びな、なに料金はとらねえよその分  
剣帝協会からたんまり貰ってるからな」

「すまん、相手が剣士…しかも腕がたつとなるとついな…」

なあアンタ、良かったら刀選ぶの手伝ってくれや、他の二本が鷹の  
目にやられちゃってな」

「へ!?あの”剣帝”とやり合ったんですか!?よく生き残りましたね  
…」

「…まあ死にかけたがな」

「と、刀選びでしたか。海賊狩りの口口ノアと言えば三刀流で有名で  
すからね。」

あ、紹介が遅れましたね”逆刃のたしぎ”…東方十傑第三席を拜命  
しています」

「逆刃…確か剣帝通信で見たぞ? 剣帝協会本部の序列番外にして鍛冶  
師の異名を持つ”鉄人”のクリークが鍛えた刀を持つてるんだろ!  
一度見たいと思ってたんだ! アンタが持つてるなら是非見せてくれ  
!!」

「近い! 近いですから!!…まあ”全刃刀”に”連刃刀”、”薄刃の太  
刀”や”絶刀”に”薄刀”や”賊刀”…鉄人の刀は珍しいから言い  
たい事はわかりますけど…はい、どうぞ」

と、詰め寄るゾロを両手を伸ばして押し留めると仕上がったばかり  
の刀をゾロに渡すたしぎ。

「へえ、本当に峰と刃が逆になってるんだな…言っちゃあ何だが随分  
と使いにくそうだが…」

「慣れればそうでも無いですよ? 耐久性は大業物に勝るとも劣らない  
ですし何よりわたしは海軍少佐ですからね、海軍としては海賊の捕縛  
がやりやすいんですよね」

「げ…アンタ海軍の人間かよ…」

「それがどうかしました? あ、これなんかどうです?」

そう言ったたしぎの手に握られていたのは一本の刀…そうしてゾ

ロは新たな刀”鬼徹”と…それから更にその”鬼徹”を持つ為の運  
試してイツボンマツに気に入られた事により”雪走”を手に入れた  
のである。

その後”海賊狩り” ロロノア・ゾロと”逆刃”のたしぎはいつか手  
合わせをする事を約束し店の前で別れ…これが後に長きに渡って綴  
られる二人の縁の始まりであつた…

## 砂賊の娘の慟哭

マンベレ式投げナイフ……だったかしら？ラサが手に持つ複数の刃を持ったナイフを見てビビは考える。

複雑な形状をした、複数の刃を持つ主に砂漠の民が狩りや戦闘に使うナイフだったか。

複雑ながらも重量のバランスがとれた形状をしており、投げるとブーメランのように回転しながら飛んでいき相手を切り裂くナイフであり、投げナイフと銘打たれてはいるが接近戦でも威力を発揮し、複雑な形状の刃が相手に食い込んで重傷を与える。

因みになぜこのような変な形になったかといえば、鳥の頭に似せたとも、装備者のステータスとして用いるため真似が難しい形になったとも言われているんだっけ？

などどうでも良い事を思い出しつつここまで感情的なら怒らせの方がやりやすいかしら？と考え口を開く。

「貴女は何が望みななの？お父様からの謝罪かしら？それともメリアスの復興？それとも今までの賠償とこれからの保障？」

「っ!!お金なんかいらない!それにメリアスはもう死んだのよ!!今更復興なんてできるもんか!!」

「じゃあ何が望みかしら、なんなら王族に復讐でもしてみる？勿論わたしも抵抗させてもらうけど？」

それと共に腰の後ろに手をやるビビ、勿論ここでやり合うつもりは無い。

制圧は簡単だがここで砂賊との間に遺恨を残すのは悪手だからだ。「……望みなんて……望みなんてわかるわけないじゃ無い。」

メリアスが砂に呑まれて……そして何度も日が昇り、同じ数だけ日は落ちた。

灼熱の昼も極寒の夜も何度も何度も乗り越えたよ、水も食料もほとんど少なくなつて……そしてそれでもずっと待ち続けた頃あたしの身体が暑さも寒さを感じなくなつて、団長に拾われた頃には分からなくなつたよ。

あたしが国を恨んでいるのか、何のためにメリアスにいたのか…」  
「…同情はするわ、何の慰めにもならないかもしれないけどこのわたし、アラバスタ王国女王ネフェルタリ・ビビの名においてメリアスの復興は約束するわ」

「…今更ね、でもいいわメリアスが復興すれば団長の…仲間たちの助けになる。」

拾われた恩は忘れて無い…メリアス復興が本当にあたしの望みかどうかは知らないけどね」

そう言つてナイフを仕舞うラサにビビも手をかけていたナイフの柄から手を離す。

「それから貴女にはお父様にも直接会わせてあげる、まあ貴女が何を言つてもわたしからは何も言わないわ……というか言えないものね」

「…あんだけ言つておいて今更？みんなもいいかしら…あたしはこいつらがこの船に納得したつて事にするよ」

そう言つて後ろにいた仲間たちを見回すラサに男達は話し合い

「…ラサが納得するんならおれたちはそれでいい、何しろお前が一番王族には隔意があつたらうかなら」

代表してラサの隣にいたザバがそう答えると

「そう…団長、あたしらは納得したつて事にしとくよ。後は団長が決めてくれればいい」

ラサは黙つて話を聞いていたバルバル団団長のバルバロツサに言いそれにバルバロツサは頷くと

「よし、全員が納得したんなら乗せると言つたしな…よし！姫さま、あなた達のレインデイナーズ行きこのおれバルバル団団長！バルバロツサが受け持った!!」

そう言つてバルバロツサは自身の胸をドンと叩き、こうしてビビ一行はレインデイナーズへと砂漠越えの足を確保したのであった。

「うっひょー!!船が砂の上を走ってる！どうなってるんだ!!」

「原理としては帆船と一緒に、流砂の動きと風の動きを読んで船を走らせるのよ」

帆船の舳先に立ってそう叫ぶルフィにビビは簡単な原理を説明す

るビビ。

「へえー、ならナミもゴーイングメリー号を砂の上で走らせれるのか？」

「ちよつと…無茶言わないでよね？風は確かに読めるかもしれないけど砂の動きなんて読めるわけないでしょ？海を読むのとわけが違うんだからね？」

無茶を言う自身の船長にナミは呆れたように言うがそれも無理はない、砂漠に接している事が多いココアラバスタの国民からまだしもナミは全く別。

元々航海術に深い知識を持つナミも時間をかけて経験を積んでいくならまだしもいきなり砂を読めなどと言われてもはつきりと無理だと断言した。

「ま、これで後はクロコダイルのどこまで一直線だろ？へっ、腕が鳴るな」

「後はバロックワークスが…クロコダイルがMr. 6から伝わった情報でこちらに兵力を送り込むかもしれないという懸念はあるけどね？」

刀に手を乗せウズウズしたようなゾロにビビがそう言えば

「任せておいてくれよビビちゃん！バロックワークスなんざおれ達がサクつと叩きのめしてビビちゃんを守るさ！あ、勿論ナミさんも守るぜ！」

「…またこれか」

「おう、何か言ったかクソ剣士？」

「うるせえぐるぐる眉毛」

そうしてまたつまらない事で喧嘩を始めたゾロとサンジを他所に

「それにしても熱いな、おれ毛皮のせいで熱がこもって…」

「おうチョッパー砂漠でそんなもん着てっからだぜ？さっさと脱げばいいじゃねえか」

「そうだな、何でこんな暑い中こんな着てるんだ…ってこれは毛皮だから脱げねえよ!!」

「はいはいウソップもチョッパーも馬鹿な事やってないの」

「トニー君、まだ船に乗ってるからマシな方よ？最初は歩いて砂漠越えする予定もあったからそうなってたらトニー君は動けなくなってたかもしれないわね」

そう言っただけは騒がしいメンツを見て軽く笑みを見せるのだった。

## 砂漠鈍熊 ドンクリークさん

日が傾いて暑さが和らいだ頃ユバの町長、トトは日課である砂堀を行っていた。

この国に雨が降らなくなつてはや三年、日照りが続き砂が完全に乾燥しきっている為か頻繁な砂嵐がこの町を襲うようになり、交通の要所として栄えたこのユバも少しづつ砂に蝕まれ他の町、エルマルやメリアスのようにすっかり砂に呑み込まれてしまったのだ。

だがトトは諦めなかった、ここは自分が国王から預かった大切な土地：ユバ・オアシスは決して砂なんかには負けやしない、その一心の元でふくよかだった体が痩せこけ顔に深いシワが刻まれても決して休む事なく何度も地面を掘り返していた。

そしてザクザクと地面を掘り返す音を聞くだけだったトトの耳に何か重いものを引きずるかのような別の音、トトが手を止めてそちらを見るとマントに深いフードを被った人間の姿、そして後ろには巨大な覆いが被さった荷物が見て取れた。

「やあ旅の人かね…砂漠の旅は疲れただろう、すまんがこの町は今少し枯れていてね…歓待はできないがゆつくりしていくといい。

なあに宿ならいくらでもある、それがこの町の自慢でね」  
久しぶりの客人に弱つてる姿を悟らせない為に明るく言えば

「では幾日か宿を借りたい、支払いは金でいいが…水や食料の方がいいか？見た所満足に食事ができているとは思えねえが…」

マントにフードの人間…体格や声からして男だろうがその申し出にトトは

「ありがたい、金があつても食料や水を手に入れる術が無くてねえ…今はまだ残された食料があるがそれもいつまで持つか…」

と素直に感謝する、水も食料もまだ残りはあるし、消費するのは自分一人だが先の事も考え切り詰めていたのでこの申し出はありがたかった。

「…しかし酷えもんだなこの町は、とても元がオアシスだったとは思



えないぞ?」

男はそう言いながら砂に吞まれている建物や枯れかけているヤシなど周囲を見渡せば

「砂嵐のせいだね…砂で地層が上がり徐々に泉が砂に吞まれてね…完全に呑み込まれた後は直ぐだったよ。」

水と言う生命線を亡くしたオアシスはただ砂漠に呑み込まれるのを待つばかり、住民達も立ち行かなくなったこの町を諦めて一人、また一人と他の場所に移っていったよ…」

トトはそう思うのも無理は無い、と事情を説明する。

「…アンタはこんなところに一人で何を?」

「…ユバ・オアシスはまだ生きている、ユバは砂になんか負けやしない、ここに残っているのは息を吹き返す為の手伝いをしているんだよ」

そう言つてトトはスコップを片手に再び砂を掘り返す作業に戻り、その姿を大男…クリークはしばらくじっと見つめて手近な建物へと移動したのであつた。

そして一方レインベースからユバに向けて砂煙を上げて急行する一団があつた。

「全く…少しゆっくり出来るかと思えばユバに向かえつて…人使いが荒いんだよウチのボスは!人荒だよ!ひあだよ!」

「まあまあミス・メリークリスマス?きつとボスにも何か考えがあるんじゃないかしら?」

「そんならいわかつてるよミス・マザーズデー! Mr. 4! さつさとしないかい!! アンタがノロマだからこんな遅いんだよ! この”バツ!!”」

「ご~~~~め~~~~ん~~~~ね~~~~」

「そのトロい喋り方も何とかならないのかい!! 全く時は有限、人生万事最短最速! アンタのトロさは腰に来るよ!」

「本対称的なコンビだね Mr. 4 にミス・メリークリスマス」

「ふん! Mr. 6 あんた Mr. 5 に上がるって噂なんだし、繰り上がったらウチのノロマと交代しないかい?」

「ちよつとお、うちの相方取られても困るのだけどお？」

騒がしく先頭を歩く四人：横にも広いのんびりとした巨漢の男と強い癖毛にサングラスをかけた女性、そして諸肌の筋骨隆々とした男に毛皮のコートを羽織った金髪の美女。

バロックワークスオフィサーエージェントのMr. 4、ミス・メリークリスマス。

そしてフロンティア・エージェントであるが内々でオフィサー・エージェントへの昇格が確定しているMr. 6とミス・マザーズデー。

そしてその後ろにフロンティア・エージェント候補であるビリオンズと呼ばれるバロックワークス幹部候補達が50名程付き従い一同はレインベースから真っ直ぐに南下しかつてアラバスタ西の流通のハブとなっていたユバに向かつていた。

確かこの長い異常気候のせいで枯れたと聞いていたがそんなところにわざわざ行ってこいという指令には文句の一つも出そうだったが幹部が2ペアにビリオンズ50名という戦力に誰しもただ事では無いのだろうと察していた。

彼らが受けた命令は一つ

”ユバにて数日間潜伏、アラバスタ王女にしてバロックワークスの裏切り者”ミス・ウエンズデー”こと”ネフェルタリ・ビビ”とその協力者と思われる人間を確殺せよ”

である、そんな指令を受けたビリオンズの男は足は動かしつつ頭の中で考える。

場所が遠いとは言えこちらは幹部が四人にバロックワークスの中でも精鋭であるビリオンズが50人、情報では4、5人で多くても10人以下の集団だし負ける道理が無いと考えていた。

心配なのは裏切り者のミス・ウエンズデーはフロンティアエージェントだったという事で自分達ビリオンズより少し強いかもしれないが、こちらは幹部が四人と心強い味方がいるのだからこの指令は楽勝だなと考えながら先頭を走る四人の後に続くのだった。

## 不意邂逅　ドンクリークさん

「おや、また旅人かい？しかも随分と大勢だね…なあに宿はいくらでも空いている、それがこのユバの自慢だからね」

アラバスタ王国西部における交通の交差点として自負をトトは日課の砂堀を中断して笑いながら言う

「おいおっさん、この町にある水と食料をいまずぐ寄越しな。」

こつちは砂漠越えてきてへトへトなんだよ、もし断ったら…どうなるかわかってんだろうな？」

そう言つてカトラスをスラリと引き抜く男…ビリオンズの構成員は脅すも

「む…貴様ら盗賊の類か？食料なら少し分けてやれるが水は無理だ、欲しいなら自分達で掘る事だよ」

そう言つて再び砂堀りに戻るトトだったが

「はあ？…こんな枯れたオアシスを掘つて何になるつてんだ？いいから黙つて水と食料を持つて来やがれ!!」

それと共にカトラスを持った男はトトに斬りかかろうとするものの凶刃はガキン！と言う音と共に阻まれた。

「おいおい何をやってるんだい？それは指令の範囲に含まれるのかい？違うだろう？」

トトの前に飛び出し大楯でカトラスを受け止めた男、Mr. 6が諭すように言うが

「でも標的がいつ来るかわからないなら水も食料も多い方がいいに決まってるじゃねえか！」

とカトラスを振つた男は文句を言う。

「確かにその通りかも知れないね、が必要な情報源を自らの手で消してどうするんだい？」

「ちっ…」

それと共に男はカトラスを収めると肩をいからせながら集団に戻りMr. 6はそれを見ながら

「やれやれ…エリートが聞いて呆れる、本当にそこら辺のゴロツキと

変わらないな」

と肩を竦めさせた。

「…アンタは何者だね？」

「ああすまないなご老人、我々は人を探していてね…この顔の四人をどこかで見てないかい？情報に寄ればここに来る”らしい”と言う事で迎えにきたんだが…」

そう言いながらMr. 6が一枚の写真と三枚の似顔絵を見せればトトの顔色が変わる…が

「…すまないが見ていないね、他をあたってくれ」

「そうかい…邪魔をして悪かったね、とりあえずそこら辺の建物は借りさせてもらうよ、構わないかね？」

「好きにしたらいい、宿だけはいくらでも空いている」

そう言つてトトは再び砂堀りに戻るのだった。

「やれやれ…頑強なご老人だね、まあいい全員とりあえず休息だ！Mr. 4とミス・メリークリスマスもそれでいいかい？」

「はーやれやれ、やつと休めるよ！Mr. 4！アンタがノロマだからわたしが余計に疲れちまったよ！よけつかだよ！このヴァッ！」

「ご~~~~め~~~~ん~~~~よ~~~~」

「まあまあミス・メリークリスマスう、とりあえず休みましょうよお砂漠越えて砂まみれに汗まみれ…お風呂でも入りたいわあ」

「ミス・マザーズデー、風呂は期待しないでくれそこまでの量の水は持つてきていないんだからね？」

そうエージェント達が言つていた時の事であった、突如として辺りに轟音が響き少し離れた町の一角に上がる砂埃

「なんだいなんだい何事だい!!」

ミス・メリークリスマスがいきなりの轟音にびっくりしてそう言うが

「…ご老人、ここには他に人がいるのかい？」

Mr. 6は冷静に砂を掘る手を止めて轟音がした方を見るトトに聞けば

「…昨日の夜から旅人が一人いるだけだ。まったく、騒ぎは勘弁して

欲しいもんだがね」

トトの言葉にMr. 6は

「あの方向はビリオンズが行った方向か…大方その旅人とやらと小競り合いになったかな？」

とりあえずビリオンズは何名か向こうに行つて様子の確認を、場合によつては動くかも知れないが、おれ達は拠点の設営を行なつておこう」

その言葉に10人ほどのビリオンズが轟音のあつた方向へと向かい、エージェントと残りのビリオンズはそれぞれラクダから荷を下ろしたり火を起こしたりと準備を始めてしばらくした頃

「さーて…こいつらはお前らの仲間か？」

そう言つて十数人をずるずると引きずつてきてどさりと投げ捨てたフードを目深に被つた大男、いきなりのその出現にバロックワークスの面々は一気に臨戦態勢に、四十名程の武器を構えたビリオンズを静止して

「…随分なご挨拶だね、君がご老人の言つていた旅人かい？」

「ほう？心外な言い方だな、元はと言えばいきなり俺が使っている宿に入つてきた上に剣を突きつけて表にある荷物と水と食料を寄越せと言つてきたのはそつちだと記憶してるが？」

「…それについては謝罪しよう、だがこうしていきなり部下をやられてこちらが納得するとも？」

「まあ納得は出来ないだろうな、いいぜ？相手になつてやるよ…」バロック・ワークス？」

それと共にざわりとざわめく面々

「なっ！なんだいアンター！何故その名前を知つてるんだい！！」

そしてミス・メリークリスマスも言うが

「賞金稼ぎに暗殺課報、顔も名前も不明なボスの指令の元忠実に動く犯罪秘密結社…おつと秘密だったか？」

大男はそう言つて腰にさしていた剣を引き抜くと

「…総員戦闘用意、そこまで知つているなら消さねばならないね？総員かかれえっ！！」

そう言つてMr. 6は片手を上げるとその手を目の前の男に向けて振り下ろすのだった。

その体格に声、そして見覚えのある拵をした武器に薄々とその正体を察してこりや無理だな…と軽く諦めつつではあつたが。

## 四番真価 ドンクリークさん

圧倒的であった。

困むビリオンズは50人近く、しかも手には剣にナイフ、斧に銃と選り取り見取りで一人の男に襲い掛かるが：

「ぐはっ!？」

「なっ!かてえっ!」

「がはっ!」

「こいつ…やりやがる!全員でかかるぞ!!」

襲い掛かる男達は次々に倒れていき焦った男が全員で掛かるように言うも

「…一人の人間に一度に襲い掛かれるのは前後左右から多くても四人という話があるが、例えば5人10人でもその程度で俺を倒そうとは随分舐められたものだな?」

それと共に男の両腕がぶれて一斉に武器を手に襲いかかった男たちは地に倒れ伏したのだった。

「ちっ!相手は一人!!多少できるようだが近づかなければいい話だ!銃を持つ奴で一斉に撃てえっ!!」

近接戦では分が悪いと見たのか銃にて仕留めようと一斉に撃つもその十数に及ぶ銃撃は

「はあ!?!間違いなく当たったぞ!?!」

「ウソだろ!まさか下に鎧かなんか着てやがるのか!?!」

「ぬるい…ぬるいなあっ!!」

鉄が当たる音と共に虚しく弾かれいきなり距離を詰めたフードの男は両腕で一人づつ掴むとそれと共に振り回し

「ぎゃあああんっ!」

「あつがああああいつ!」

「な!なんて奴だ!人間を片手で軽々とぐっふう!?!」

困んでいた50名に及ぶビリオンズ達は最終的に全員倒されたのであった。

「…なんて奴だ、Mr. 4少し本気で行くよ?」

「わくわくかあくくたくく」

「ミス・メリークリスマス、おれ達がいこうか？」

「黙ってみてなMr. 6、少しは本気出しておかないと鈍っちゃまうからねえ？」

それと共にMr. 4が背中に背負っていた大砲を下ろすと

「へっへっ…バウン！」

その大砲が鳴き声を上げると共にその口からボールが吐き出され…そしてボールが爆発した。

「…随分と物騒なくしゃみだな？」

「おや、あんまり驚かないのかい？こりや悪魔の実を食べた銃でね：グランドラインの新技术、物にも悪魔の実を食べさせる事ができるんだよ！やりにラッスー！」

それと共に再びクシャミと共に吐き出される爆弾、当然フードの男は軽く避けると後ろで響くカキンという快音。

そして咄嗟にしゃがんだ男の上を爆弾が通り過ぎ建物の一つにぶつかると再び爆発した事によりフードの男が後ろを見ればそこには金属製のバットを大きく振り抜いたMr. 4の姿。

「…建物に当たって爆発、だがバットに当たっても爆発しないって事は接触では無く時限式か？ならその前に受け止めればいい話だな」

「ふん！やれる物ならやってみな!!」

それと共に再び、そして今度はフードの男目掛けて放たれる爆弾、男は軽く片手で受け止めようとして

「む？成る程な、自信を持つわけか」

「はっはっは！ラッスーの爆弾は鉄球と同等の重さがあるんだよ！速さもあって早々受け止めれるもんかい！そらいったよMr. 4！」

「ふおくくふおくくふおくく」

飛んできた爆弾に再びバットを振るいカキンという快音。

「そしてそれを軽々と打ち返す腕力も異常って事か？だが…俺も腕力に多少自信があつてなあっ!!」

それと共に両足を地面にしつかり構えると剣を振りかぶり、そして上半身を捻ると勢いよく振り抜き爆発寸前の爆弾は剣の腹で打ち返



されると矢のようにMr. 4へ、そのまま目を見開いて驚くMr. 4の胴体に当たる寸前に爆発。

「…Mr. 4と同等の怪力かい、だが当たる寸前の爆発ならダメージは殆ど無いよ！」

まあいい、少し舐めていたのは謝るさ…アンタにやあたしのテリトリーに入ってもらおうよ？テリトリーの名前は“モグラ塚4番街”：せいぜい楽しんで行く事だね！」

それと共に変化するミス・メリークリスマス姿に

「ほう…ゾオン系、ペンギンか？」

「違あうっ!!あたしやモグモグの実の能力者だよ！」

「モグラか…地面に潜られると厄介そうだな？」

「はっはっは！それはアンタの身で味わってみる事だねえっ!!」

それと共にまるで殆ど抵抗無く地面に潜るミス・メリークリスマス、すぐさま追いかけるも地面の下に逃げ回りどんと穴を増やして、そして気づけばMr. 4とラッスーも穴の中へ

「モグラと言うだけあつて凄まじいスピードの穴掘りだな…だが逃げるばかりじゃ俺は倒せないぞ？」

「ふん！あたしのテリトリーに入っているんだから時間の問題だよ！」

それと共に再びラッスーが爆弾を吐き今度はフードの男はしつかりとキャッチして見せた事により

「なっ!?掴めるような重さじゃ無い筈だよ！」

「ああ、さつきは普通のボールと同じに考えてたからな、重さが違うと分かってりや問題ねえよ。」

で、時限式ならまだ爆発しないんだろっ!!とおっ！」

それと共に身体を仰け反らせ、キャッチしたボール型の爆弾を持った腕を大きく振り抜き爆弾はMr. 4へ、勿論Mr. 4も驚いた顔をするがそこは流石に四番バッターなどと渾名されるMr. 4、直ぐに構え直しストレートで投げられたボールを打ち返そうとしたが

「…打者ならデッドボールは知ってるよな？」

金属製のバットに当たる直前でボールがクンッと斜め下に落ちた

為そのバットは空を切り、そしてMr. 4に”十トンを軽々と振り回す腕力で投げられたボール”がMr. 4に着弾、そして爆発。

「ストライイク、いやデッドボールなら一塁進出か？まあどっちにするバッターアウトだな」

そう言つてフードの男は今度はミス・メリークリスマスへと向き直るのであった。

## 土竜強襲 ドンクリークさん

「…ボールを受け止めた上でMr. 4をぶっ飛ばすなんて…アンタなにもんだい！」

普通の人間ならまず受け止めきれずに吹っ飛ばされるだろう重量のボールをMr. 4のバットに当たる前に横から搔っさらい、そしてそのままMr. 4に、しかも変化球で投げつけるといふ離れ技を行なって見せたフードの男にミス・メリークリスマスは思わず尋ねるも「ふっ、俺はただの旅人さ…それよりいいのか？そんな無防備に顔を出してて」

それと共にミス・メリークリスマスに飛んでくるのはMr. 4の巨体。

慌てて穴に引っ込むと

「バッ…このバッ!!人間を投げるんじゃないよ!!しかもバッターを真っ先にのしてどうするんだい!ゲームが盛り上がらないじゃ無いか!!」

再び別の穴から顔を出して文句を言う。

「バッターとピッチャーしかないんだからゲームのていをして無いと思うがなっ!!」

それに対して男の返答は高速で近づいてそのまま拳を振り下ろす事だった。

「なっ!!危ないね、油断も隙もありやしない…しかしこうも簡単にやられちゃエージェントの名折れ…アンタにやあたしのテリトリの恐怖をすっかり味わってもらおうよ!!土竜遁方、土竜魚(もぐぎよ)!!」  
それと共に再び地面に潜るミス・メリークリスマスと次はどこから出てくる?と周囲を見渡す男。

そしてそんなキョロキョロする男の後ろからミス・メリークリスマスが出現

「土竜・平手撃ち(もぐら・ばなーな)!!」

巨大な鋭い爪を持った平手が男に襲い掛かった所で男はすつと身をかがめる事で躲すと

「土の下は自由自在って感じか？随分と使い勝手は良さそうだな！」  
「はっ！土の下はあたしにとっちゃプールみたいなものさ!!」

そのまま巨大な平手を拳で迎撃しようとするがミス・メリークリスマスは奇襲が失敗したと見るや直ぐに追撃を諦め再び地面の中に。

「むう、このまま追いかけてこは芸が無いな…」

再び何処から来るかと周囲を見渡しながら一人溢す男だったが

「安心しな！まだまだ行くよ！」土竜塚・ハイウェイ!!」

それと共に地面から生える土竜の両腕が男の両足をガシリと掴むとそのまま高速で進み出す。

「むっ！このままぶつけるつもりか!!」

その進行方向には何軒かの建物、それを見てミス・メリークリスマスの行動を察した男が言うも

「もう舐めやしないよ!!」モグモグ玉砕（インパクト）”!!”モグインパクト  
”!!”モグパクト”!!”モパっ”!!”

ミス・メリークリスマスはそのまま足を離さず男を建物の壁にぶつけ更にそのまま地面の下を高速で移動続け様に何度も、そして執拗に男を立ち並んだ建物の壁にぶつけ続け

「そしてそのまま土の中で朽ちるこったね！」土竜遁方・心中斬首”!!”

そしてぶつける建物が少なくなった所で一気に地面の下へと男の巨体を引きずり込めば

「成る程、これが噂に聞く砂風呂か」

「馬鹿言ってるじゃ無いよ!!…まあいいさ、対象を地面の下に首だけ残して埋める技だよ、身動き一つできやしないんだろう？」

まあ本来は拷問用の技でね、これで後は煮るも焼くもあたし次第でこった」

余裕を崩さない男にミス・メリークリスマスは思わず怒鳴るも何とか落ち着いて男をそう脅して一息つく。

「…まったく面倒な敵だったね、ビリオンズは兎も角まさかMr・4がやられるとは思わなかったよ。」

Mr・6！ミス・マザーズデー!!アンタらこいつがなににもんか確かめておきな!!

あたしは疲れたよ、久々に腰にきちまったから少し休ませてもらうよ！」

と、同じエージェントであり助太刀を断り少し離れて見ていたMr・6のペアに大声で呼びかけるも

「ミス・メリークリスマス!!後ろ!!後ろ!!」

Mr・6のその大声と共にミス・メリークリスマスが何事かと振り返ればその目に映ったのは首だけ残して地面に埋め、動けない筈の男がMr・4のバットを自身に向けて振り下ろそうとする姿であった。

流星にこれは間に合わないと察して咄嗟に獣人形態から完全な獣形態へ、そしてそのまま両腕を交差すると同時に両足で周囲の土を耕し

「っ!土竜遁方(もぐらとんぽー)・土中映魚っ!!ぐっうっ!!」

それと共に自身の相方の武器が振り下ろされ凄まじい重量がその身に襲い掛かる、がミス・メリークリスマスはからくもこれを潜り抜け

「ちっ!ボールを投げ返したから力はあると判断したがまさかMr・4のバットを持てるとはね!一体どういうカラクリだい!!」

「ちっ、衝撃は殆ど地面が持つて行ったか…咄嗟の事とは言え上手く流れたもんだな?」

「…話す気は無いってかい?ラッスー!!バッターがいないのは残念だけど見せてやらな!『百本バンクノック!!』」

それと共にミス・メリークリスマスは痛む両腕を庇いながら再び地面に潜り、ラッスーは言われた通り次から次にくしゃみと共に爆弾を撒き散らし、そして続け様に響く快音。

吐き出されたボールは次から次に打ち取られたり逸れたり、たまに当たったかと思えば殆どダメージは見られずラッスーは焦るもミス・メリークリスマスの言う通りに次々に爆弾を吐き出すもとうとう

「あ、やっべ」

当たりどころが悪かったのか一つの爆弾ボールが打たれると同時に吐き出したラッスーにむかいそのまま直撃、爆発。

「すまん犬、ピッチャーライナーだけどわざとじゃねえからな?」

そのまま泡を吹いて倒れるラッスーに男は片手でスマン、と謝ったのだった。

## 鈍熊土竜 ドンクリークさん

ラッスーをピッチャーライナーで仕留めてしまい謝る男だったがその足を突如としてミス・メリークリスマスの腕が掴む。

「お？またさつきみたいにぶつけるのか？」

「今度は油断しないよ！さつきは途中で離れたが今度はアンタが落ちるまで引っ張ってやるよ！モグラ塚ハイウェイ！」

それと共に再び爆速で男を掴んだまま地中を走るミス・メリークリスマス。

先ほどより早いスピードで男を引き次から次に建物に男をどんどんとぶつけていきユバにあった多くの建物に人型の穴を開け続けてそして最後に一際大きい建物にぶつけた所で建物ごと崩落

「どうだい!!これならいくらアンタが馬鹿力でも抜け出てこれやしないだろう!!」

男の姿は瓦礫に埋まり、ミス・メリークリスマスは地面の下を潜り抜け出てくると荒く息をつきながら勝ち誇ったように言った。

「まあ確かに言うだけの事はあるな…、しかし俺を仕留めるには少し…いや、全然パワーが足りねえなあ!!」

それと共に瓦礫が上空へ吹き飛ばされボロボロになったからかローブは脱ぎ捨てられその下には紫の短く刈り込まれた髪に鋭い目つきの男。

鎧を着込んでいるのだろうと思われていた身体は諸肌で下には厚手のズボンとブーツのみ。

「ちっ、なんちゆう打たれ強さだい！まさか能力者って事は無いだろうね!？」

驚愕するミス・メリークリスマスだったが

「さてどうかな？それよりそろそろ終わらせてもらおうぞ!!」

それと共に再びミス・メリークリスマスの元に踏み込みそれを察したミス・メリークリスマスはMr. 4とラッスーというアタッカーを欠いた状態でこの男をここで仕留めるのは不可能だと判断、直ぐに穴を掘って地面に潜り込むとこの場所からの離脱を図り

「おいおい、ここまでやっついて逃げるのか？ Mr. 0に始末されるぞ？」

男は軽口を叩きながら地面に空いた穴へと近づき、自身が潜るには少し狭いその穴に身を屈めて

「我流土竜遁法…土竜魚（がりゆうもぐらとんぼーもぐぎよ）！！」

それと共にあらかじめ空いた穴にその身を潜り込ませる。

元々ミス・メリークリスマスが作った穴がある故に軽い労力でどんどん掘り進めていく男。

別に砂が掘るのに適しているというわけでは無いが元々通路があるところに男は類い稀なる身体能力と鋼鉄並みの身体でまるで重機とでも言わんが如くどんどんと掘り進めていく。

しかもどんな手品か確実にミス・メリークリスマスの方へと着実に近づきとうとう

「なっ！ Mr. 4よりデカイ身体なのにアタシのテリトリーに入ってきたやがるなんて！！」

「さて、そろそろ決着にしようか！ 連拳砲・重襲（つらねけんぽう・かさねがさね）！！」

それと共に男の拳がミス・メリークリスマスを打ち上げそのまま穴の天井に、更に拳はそこで止まらず拳の連打がミス・メリークリスマスを襲いその身体をどんとどんと上に押し上げていきとうとう二人の姿は地表に

「これにて…襲了っ（しゅうりょう）！」

と、とどめの拳がその身を大きく上空に吹き飛ばし全身を強かに打ち付けられたミス・メリークリスマスは呻き声一つあげる事すら無く地面に叩きつけられたのだった。

「さて…まだ二人残ってるがどうする？ やるか？」

そしてビリオンズ50人とMr. 4ペアとラツスーを叩き潰した男は少し離れて見ていたMr. 6ペアにそう声をかけるが

「冗談きついよボス…本気出してもアンタ相手に勝てるビジョンは…無理だね、勝てないね」

「そうよお？ 貴方自分が海軍本部中将だという事忘れてるんじゃない



のお？

「とうか来るとは聞いてたけど何で一人なのかしらあ、てつきりオーナーと一緒にだと思ってたのだけとお？」

「ま、ちよつとな。」

「所で何でこんなところに？てつきりエージェント達はレインベースかと思っていたが…」

「それと共に男：クリークは自身の部下でありバロックワークスに潜入している海軍本部中佐のパールと同じく潜入中のテゾーロ子飼の諜報員であるハニークイーンに尋ねれば

「ボスからの指令さ、ビビ女王一行と協力者数名がここに来る可能性が高いと判断し、ここで確実に仕留めるようにとの事だね」

「その為にビリオンズ50人とMr. 4のペアとあたし達を送り込まれたんだけどねえ…これは無理ね、貴方に勝てるような戦力がクロコダイルの下にいるなら彼ももつと早く国盗りは終わってたでしようねえ？」

「なるほど、それでこのユバに…因みにお前たちもロビンもクロコダイルに疑われてたりしないか？」

「ああ、任務はしっかりやっているし所詮おれ達はフロンティア・エージェントでこの国にはあまりいなかったからね」

「ミス・オールサンデーも賞金首で入っていた海賊団が次から次に潰れていた事もあって疑われてないみたいよお？」

「ふむ、それは何より…とりあえず今回の指令は失敗って事でクロコダイルには報告しといてくれ。」

「そうだな…理由はどうしたもんか、ビビちゃん達が無事なら彼らに倒されたと言っても直ぐにバレるだろうし…まあ嘘をつく必要も無いか、ビリオンズが先走ったせいで正体不明の輩に潰されたって事にしといてくれ」

「Mr. 4ペアは？」

「そうだな…ミス・メリークリスマスには顔を見られてるし…とりあえずテゾーロに連絡して誰かに回収してもらおうさ」

「…ひよつとして他のエージェントも捕らえてるのかしらあ？Mr.

3からの連絡が無いって小耳に挟んだのだけどお?」

「正解だな、Mr. 5ペアとMr. 3のペアはこちらで身柄を拘束している」

「バロックワークスのエージェントもボスにかかれれば形無しだね：いつその事ボスがMr. 0を潰せば早い話だと思っけどね?」

「ま、おれは海軍の人間だからな。表立って王下七武海の一角を潰すわけにはいかんし、あくまでこれはこの国の問題だから内政干渉にあたる。」

その為にテゾーロに動いてもらったりビビちゃんを裏から秘密裏に支援しているんだからな?

なんの問題も無ければ俺も独立遊撃隊を大隊規模で動かして正面から乗り込んでるさ、まあスモーカー大佐は結構ギリギリな感じでの国に入ってるが：」

そう言っけクリークは肩を竦めさせるのだった。

## 小競合 Ⅱ ドンクリークさん

少し時間は遡る。

クリークはテゾーロの船と共にベアトリーチェ号にてアラバスタ王国に入ると秘密裏にアラバスタの情報：反乱軍やバロックワークス、国の情勢などを探り最終的にテゾーロとエースはアラバスタ国王ネフェルタリ・コブラに謁見しその後王下七武海のクロコダイルと面会という事になった。

そしてベアトリーチェ号の面々だが副官であるギンは連絡役としてテゾーロと共に、ジョークは万が一にも捕虜が暴れても困るので見張りとして船に残しており、そうなるとクリークが動く以上未だに戦力に不安があるアピスは交流を深めさせる良い機会だと考えアデルと共にオルガ達に預けてある。

ビエラ、シユライヤはこれを機会に船のメンテナンスを行うらしく留守番を、モネとついでにシユガーは気候が合わないのかダウンしていた為シユガーは来たがったが大事をとって留守番させた。

という事でクリークは一応上空にカフウがいるものの一人でレインベースに向かう事となりその過程で砂漠越えとなったのであった。因みに周りの面々は誰も砂漠を越えた事が無いとの事で何が必要かわからなかったがとりあえず砂に沈んでも困るので馬鹿げた重量の武器や鎧は置いてきて、日差しが強いだらうと考えフード付きの厚手のマントを、何より水が必要だらうと考えかなり食料と水は多目に、後はどうとでもなるだらうと考えクリークは武器兼サバイバルナイフとして腰に拵えを新たにした七星剣だけ下げると砂漠越えに挑んだのであった。

道中で凶悪な原生生物や砂漠特有の自然現象、昼は煌々と照りつける太陽と裏腹に夜は全ての熱が逃げる極寒の環境と色々であったが遠くまで広がる砂は一見の価値はあったし道中で不幸中の幸いと言うか流砂に呑まれた時に遺跡でポーネグリフを見つけた事も出来た。

：勿論クリークは見つけた時はどういう過程でこんな隠された地下遺跡にポーネグリフがあるのか首を捻っていたが。

そんなこんなで原作では確か一味がユバに来ていた事を思い出し少し手伝ってやるかと考えて進路を少し西に変更し馬鹿げた大きなポーネグリフを急ごしらえのそりに乗せて引きずってきた所バロックワークスの面々と鉢合わせしたのだった。

とは言え相手がいくら能力者に怪力の持ち主と言えど相手は海軍本部中将、しかもその中でも上位に位置する実力の持ち主であるクリークを仕留める事は出来なかったが。

騒ぎによって避難していたトトに詫びを言いつつMr. 4とミス・メリークリスマスはふんじばって宿の一室に放り込んでおく、身柄はどうしようかと考えつつ手早くいつもながら高カロリーの携帯食であるカロリーフレンドを三本ほど纏めて噛み碎くと水で流し込み、その日はさっさと寝るのだった、Mr. 4達にも働いてもらうか…と考えながら。

そして次の日、クリークはユバの外へビリオンスの面々を放り出すと縛ったMr. 4ペアの前に座り込み

「さて…気分はどうだ？Mr. 4にミス・メリークリスマス…いや、”キヤツチャー殺しのベーブ”に”町落としてのドロフィー”？」

その言葉にこちらを睨んでいた二人の顔が驚愕に変わる。

「な…何処でそれを知ったんだい!!我が社の社訓は謎！そんな簡単にバレるようなヘマはしてない筈だよ!!」

「まあ落ち着けやドロフィーさんよ、こつちにはこつちの伝手があったてな”蛇の道は蛇”って言うだろ？」

その言葉に身動きが取れないミス・メリークリスマス…ドロフィーは

「…アンタなにもんだい、昨夜の戦闘力にこの情報力…タダモンじゃないだろう？」

そう言っせてめての抵抗とばかりに睨みつけながら言うも「ふむ…まあいいか。初めましてだな、ベーブにドロフィー。」

おれはクリーク、海軍本部中将の地位を授かっているが…勿論お前たちを捕らえたからと言って文句を言われる筋合いは無いよな？」

思いもせぬビッグネームに二人は驚愕、無理もないだろうクリーク

の名前はクリーク自身が思っている以上に有名だからだ。

曰く、次期大将候補

曰く、赤カモメの頭

曰く、海軍躍進の立役者

海軍本部長、鈍熊の名前はよからぬ事をしている…してきた相手には抜群の効果を發揮するのだ。

「な…なんで本部長が…アタシら何かを…というかそもそも何でこんなところに本部長が…しかも一人でいるんだい!!」

「アタシら何かと言うがなあ…お前らバロックワークスの最終目的は何だった？ほれ、言ってみ？」

「ぐ…」

「ほらそこで言葉に詰まれば何か隠してるって言ってるようなもんだろ？」

まあバロックワークスはMr. O…クロコダイルの指示のもとアラバスタを乗っ取って理想国家の建国を企んでるのは知ってるがな。

それにアンタは”町落とし”の異名に恥じずその能力であちこちの町を地盤沈下させて衰退させてるのは調べがついてるぞ？」

「ちよ、ちよつと待ちな!!アンタ今アタシらのボスがクロコダイルって言ったかい!？」

「ん？なんだ知らなかったのか？”翼にレイピアの髑髏”はかつて奴が使ってたマークだしそれにレインベースで顔合わせ位は済ませていると思ってたが…」

「聞いてないよ！まさかMr. 4は知ってた…その驚いた顔を見る限り知らないようだね…」

「とまあお前らは叩けば幾らでも埃が出てくる身の上だが…さてどうしてくれようか？余罪は色々出てくるだろうから縛り首か？それともどっかの監獄に…インペルダウンもありだな、いやあの島で強制労働もありか？」

そう言っつて顔を青くする二人を他所にクリークは一人考えていた所で

「た、旅人さん!!水が!!水が出て来たよ!!やっぱりユバはまだ死んで  
いなかったんだ!!」

外からトトの嬉しそうに叫ぶ声が聞こえて来たのは同時であった。

## 砂王頭痛 ドンクリークさん

トトの言葉にクリークは少し考えミス・メリークリスマスを見ると「…そうか、それも有りだな」

とぼそりと呟く。

「な、なんだい！アタシをどうしようってんだい!!」

「さて…ドロフィーとついでにベーブ、お前ら縛り首はまあともかく監獄行きは嫌か?」

「やに決まってるだろ！誰が好き好んで監獄なんか行くんだい!!」

「や~~~~~だ~~~~~よ~~~~~」

「なら取り敢えずお前達には働いてもらおうか、何安全は保証してやるぞ?」

「何をさせる気だい！流石に組織の情報は言わないよ！アタシ達も命は惜しいからね」

「既に任務失敗してるのに始末されないって根拠は何かあるのか?」

その言葉に顔色を変える二人、だがクリークは安心させるように

「まあ安心しろ、お前達の身柄はこちらで保証する…まあ無罪放免とはいかないからその後は然るべき人物に身柄を渡すが…」

まあここで拘束されて監獄送りとここで大人しくこちらに従って心証を良くするのとどちらがいいかはわかるよな?」

その言葉にミス・メリークリスマスはMr. 4と共に少しごによごによと会話し

「アタシ達に何をさせるつもりだい?」

「簡単な話だ、まずは手始めにお前らが暴れたせいで瓦礫だらけになったこの町を綺麗にしてもらおうか…別に断ってくれても構わんぞ? 船の牢屋にぶち込んで監獄に連れて行くだけだからな?」

その言葉にMr. 4とミス・メリークリスマスは選択肢はほぼ無いようなものと悟ったのだろう、不承不承に頷くのだった。

モグモグの実の能力者についてに四トンのバットを軽々と振り回せる怪力の持ち主…

「ふむ、拾い物だったな」

トトの指示の元で砂を掘ったり瓦礫を運んだりするMr. 4とミス・メリークリスマス改めドロフィーとベープの働きぶりにクリークは満足したように頷く。

あの後トトには事情をぼかしつつ説明しこの二人がユバの復興を手伝いたいらしいと説明すればトトは水が出た事もあり嬉しそうに承諾、それまでトト一人だった事もあって最初は渋々だったが遅々としていたもののやがて二人はちゃんと作業に取り組み日も暮れる頃には瓦礫は殆ど一か所に集められ、砂に吞まれていた泉もまだ薄くではあるが水が湧き出していたのだった。

「よし、二人ともお疲れさん。この調子で明日からも頼むぞ?」

そうして暫くクリークは監督をしつつユバに留まり、それは代わりの監督役としてギンがユバに到着するまで続いたのだった。

そしてその頃になるとユバで任務失敗の報告はクロコダイルの元にも届いていた。

レインベース最大のカジノレインディナーズの一室にてクロコダイルは報告をして来たロビンに聞き返す。

「あ?もういつペン言ってみろ!」

「ユバに送った人員は全て何者かの手により敗退、王女抹殺どころか姿さえ押めなかつたらしいわよ?」

「ちっ!何処のどいつが相手だ!!任務失敗したんならそれくらい掴んでるんだらうな!!」

「残念ながら相手は不明よ、フードとマントを深くかぶっててその姿はわからなかつたとMr. 6から報告が来ているわ」

「戦闘能力だけならMr. 3にも勝るMr. 4のペアが相手だぞ!?!ついでに言えば能力者のMr. 6のペアと腐ってもエージェント候補のビリオンズが50人だぞ!?!」

あいつらを同時に相手取って退けるたあ…何処のどいつだ?この国にそれ程の戦力を持つ奴はチャカヤペル…だが奴等は王宮にいる筈だし次点のツメゲリ部隊は反乱軍に合流してると聞いている…相手は本当に一人だったのか?」

「ええ、Mr. 6からそう報告を受けているわ」



「…何処ぞの海賊か？まさか黄金帝関連か？ちつ、情報が少なすぎる」  
「それよりも王女様はいいの？このままだとひっくり返される可能性もあるわよ？」

「…とにかくにもかくにも情報だ、情報が足りねえ。Mr. 4ペアとMr. 6ペアはまだ使えそうか？」

「Mr. 6ペアは負わされた怪我により暫く療養させてくれと連絡が来ているわ、Mr. 4ペアは捕らえられたのか残念ながら消息不明よ」

その言葉に頭を抱えるクロコダイル

「ちつ、奴らにはユートピア作戦でコブラ王を拐ってくる任務を任せるともりだったが…計画も練り直さなきゃなんねえ…どいつもこいつも何故指示通りの事が出来ねえんだ！使えねえ奴等だな!!」

「反乱軍と国王軍の衝突もそろそろだけど計画を遅らせるのかしら？」

「…それまでには間に合わせる、何しろ情報もそうだが人手も足りねえ…ナノハナのビリオンズを最低限の人数残してアルバーナに呼び寄せろ、手が空いてるエージェントは？」

「そうねMr. 1ペアとMr. 2、それからMr. 6ペアは療養中としてMr. 7のペア…それ以外は全員捕まってるか消息不明ね」

自身が作った組織のあまりの悲惨さにクロコダイルは頭を抱えたくなる。

「…早急に計画を立て直す、残ったエージェント達を集めておけ計画が決まり次第顔合わせといこうじゃねえか」

「わかったわ、残ったエージェント達にはそう伝えておくわ」とクロコダイルにそう言い残してロビンは部屋を出ると

「…ま、おじさまが来るのならいくらクロコダイルとは言え厳しいでしょうね。」

王女様はカトレアに寄ったらしいし反乱軍は真実を知ったと見ていいわね。

とは言えコブラ王に動きは無し…あの子の事だから余計な動きを父親がしないようにあえて隠している？…可能性は無いとは言いき

れないわね、あの子は頭がきれそうだし真実をコブラ王が知ったらそれこそこのレインベースに王国軍率いてやって来かねないものね」

と、現在の状況を考えつつクロコダイルの計画の失敗を薄々悟るのであった。

## 混沌情勢 ドンクリークさん

「国王様！これは…」

「…うむ、間違いなくビビの筆跡だ」

「ですがここに書かれている内容は…」

「こいつは…少々シヨックが強すぎるな…政府側の人間だと油断していた、まさかクロコダイルがこの国を乗っ取ろうとしていたとは…！」

アラバスタ王国首都、アルバーナの王宮にて国王のネフェルタリ・コブラがかの黄金帝であるギルド・テゾーロと面会した後にこの国の情勢について深く悩んでいた所にビビと共に行方を晦ませていたカールーが戻って来たとの報告。

早急にカールーとチャカ、ペルを呼び寄せ持ってきたビビの手紙を読むとそこにはあまりの予想外の黒幕が書いてありシヨックを受けていた。

「そんな…イガラムさんが…」

「ビビ様とこの国の為に命をかけたんだ…あの人はそれが出来る男さ」

「お前も懸命に戦ったと書いてある、カールーよくやったな」  
「クエー！」

コブラ王と共に手紙を読んだイガラムの代理として護衛隊隊長を務めるチャカと護衛隊副官のペルも予想していなかった人物に愕然としながらも合点が行った様子。

これまでコブラ含む王国首脳は今回の騒ぎには誰か黒幕がいるとわかっていながらも黒幕の正体もわからないのに王国軍と民でぶつかって血を流すのは黒幕が得をするだけとしてコブラは絶対に出陣を許さないでいた。

「…チャカ、敵は知れた！直ちに兵の遠征の準備を!!」

ビビの覚悟とイガラムの死を無駄にはせん!!討って出るぞ、クロコダイルのいる”レインベース”へ!!」

だがこの国の騒乱を裏から操っていた黒幕の正体が知れた以上座

している事は出来ないとはかりに指示を出すも

「し、しかし国王様っ!!手紙には迂闊に動かないでくれと…それにレインベースはここからだと遠すぎます!」

更に言えば相手がクロコダイル…政府に認められた王下七武海の一角である以上、我ら護衛部隊の中でも指折りの”ツメゲリ部隊”を筆頭に多くの兵が反乱軍に合流している現状では戦力に不安が…」

「それに敵を認識しても相手に戦意が無い以上簡単に躲されるだけでは？」

それにクロコダイルは国民を味方につけているんですよ?…お言葉ですが今のあなた以上に!

…今思えば海賊を討伐して国民に”英雄”としてもはやされていたのもこうなるのを見越しての事でしょう…」

「ここで今クロコダイルと敵対すれば反乱軍という火に油を注ぐようなものです!ここで我らがレインベースに攻め入ってる隙に反乱軍にアルバーナを攻められたらこの王宮は反乱軍の手に…」

チャカとペルは理由を述べてコブラの言葉に反論。

「それがなんだ!確かにお前達の言う言葉は事実…だが国民は今苦しんでいるのだ!!」

…言った筈だぞ”国とは人”なのだ!!例え我ら王国軍が減ぼされたとしてもクロコダイルさえ討ち果たせば国民の手によつて国は再生される!!

だがこのまま我々と反乱軍が撃ち合ってみろ!最後に笑うのはクロコダイル、奴一人だ!!」

しかしコブラはチャカとペルの言いたい事は理解しており例えそれでもクロコダイルは討ち果たさねばならぬ、と強い覚悟を持って言えば

「国王様…」

「そこまで…」

チャカとペルはそれを見てコブラの覚悟に納得。

「…方に一つ反乱軍が止まらぬとてクロコダイルを討てればよし。

ペルの言う通り相手は七武海の一角…生半可な強さでは無いだろ

う、だが最早何の犠牲も見ずに終結しうる戦いでもあるまい!!

チャカ!すぐに戦陣会議を行う故に士官達を集めよ!!ペル!お前は先行し敵地の視察を!!

…ビビには悪いが国民が苦しんでいる上に黒幕が知れた以上動かぬわけにはいくまい、確かに苦戦は免れぬ以上ビビの心配する事もわかる…だが座して待つなどこの国の国王としては名折れ!」

それと共に溢れた気迫にチャカとペルは自分たちはまだ国王を見縊っていたのかと感じ

「出陣は明後日の明朝!!レインベースへ全兵力を向けるぞ!!」

「はっ!!」

コブラの言葉に膝をついて了承するのであった。

そしてレインベース強襲の報は国王軍に潜んだ反乱軍のシンパ、バロックワークスのスパイ、ビビの手の者によってそれぞれの勢力によって迅速に届けられた。

反乱軍では国王軍がレインベースに進軍すると聞いてこの際にアルバーナを強襲すべきと言う者と国の英雄たるクロコダイルを助けにレインベースに向かうべきだと言う者の間で真つ二つに分かれた。

「落ち着け!お前ら!!」

「だがコーザ!!」

「これはチャンスだぞ!国王軍はアルバーナにいねえんだ!血を流す事なく王宮を制圧出来る!!」

「何言ってやがる!!今まで海賊から国を守っていたのはサー・クロコダイルじゃねえか!!王国軍が彼を討伐しようってんならおれ達の英雄をおれ達が助けなきやなんねえだろ!!」

反乱軍のリーダーであるコーザは舞台裏を知っているだけに喧々轟々とする反乱軍をなんとか宥めようとするもヒートアップした反乱軍達は下手すれば一触即発とでも言わんばかりに緊張感を高めていく。

無理もないだろう、まずはバロックワークスのスパイが上からの指示がない為に当初の予定通り周りを煽ってアルバーナに向かわせようとし、ビビの手の者もビビからの指示が無いために少しでもクロコ

ダイル討伐の助けになればとレインベースに進軍させようとしており、更に言えば国王を恨む者、砂漠の英雄たるクロコダイルを純粹に助けようとするものなどここに来て勢力が大きくなりすぎた故に目的が割れるという事態になってしまっていた。

そしてバロツクワークス：レインディナーズのクロコダイルは

「クハハハハ、国王自らおれを討伐しに来るだど？」

「どう手を打つのかしら？」

「何もしねえさ、国民に真実を公表する動きも無く短絡におれだけ倒そうたあ…おれが何の為に”英雄”を演じたと思つてやがる？」

「…今のコブラ王よりも民意は貴方の方にあるでしょうね、そうなればここで貴方を討伐しに動くというのは火に油を注ぐようなもの…」

「そうなりや反乱軍は勢いづき国の寿命は短くなるつてもんさ、もうちよつと思慮深い国王かと思つてたが…」

「…悪い人ね」

と結論を出しこちらの事を公表しないのなら、と事態を静観。

そしてバルバル団の船の上で自身の手の者から電伝虫にて連絡を受けたビビは

「出来れば動かないでと手紙には書いていたのに…相手がクロコダイル、砂のログアである以上今の王国軍には彼を倒す術が無い上に”英雄であるクロコダイル”を討伐に動くとなれば反乱軍が黙つていないでしょうね。

コーザがうまく纏めて宥めてくれればいいんだけど…この際爆破も考えていたし王宮が占拠されようと別にいいんだけど…問題は反乱軍が全部レインベースに来た場合ね、下手すれば反乱軍に仕込んであるトリガーを引くとして…まあ最悪の予想にはなつて無いしまだ何とかなるわね」

「ビビー、どうかしたのかー？」

「何でも無いわルフイさん、それよりもレインベースではちよつと大事になるかも知れないけど大丈夫？」

「ししし！任せろクロコダイルはおれがぶつ飛ばす！」

「そう、頼りにしてるわよ船長さん？」

た。そうしてアラバスタ王国の混乱はますます深くなっていくのだっ

## 黄金砂鰐

レインデイナーズの一室にてクロコダイルが今後の計画について練り直していると

「…貴方にお客さんよ?」

ノックと共にロビンのそんな声。

「客だあ? 何処のどいつだ、スモーカーでも噛み付いてきたか?」

クロコダイルは一休みとばかりに葉巻に火を灯し深く吸い込むが

「そっちの方がまだ良かったかもしれないわね?」

「意味深だな? まさかコブラ王がもう着いたのか? いや、それにしちゃ早すぎる…客つてのは誰だ」

ロビンの意味深な言葉にクロコダイルが疑問を覚えれば

「…テゾーロ財団の長、ギルド・テゾーロが貴方に面会を求めているわ。」

しかも貴方と同じ王下七武海の一角であるポートガス・D・エース付きよ?」

「な…何故ここに!…いや、おれがこここのオーナーを務めている事は誰でも知ってやがるから不思議じゃねえか…だが目的が読めねえ、新世界の怪物がおれに何の用だつてんだ?」

「計画が政府に漏れたんじゃないのかしら? その対応として急遽やつて来たという線もあり得るんじゃない?」

「まさか、奴は計算高い男だ…そうそう世界政府に従うタマでもねえしおれの計画が政府に漏れるとは考えづれえ…兎に角VIPルームにでも通しておけ、奴の狙いがわからねえ以上痛くねえ腹を探られるのはゴメンだからな」

「痛くない腹ねえ…」

「何だ言いたい事でもあんのか?…あんまり舐めた口聞いているとテメエから殺すぞ?」

「あら怖い、ポーネグリフが読めなくてもいいのかしら?」

「そつちこそ忘れてねえだろうな? 今は」おれがテメエの存在隠してやってるが」おれがその気になってテメエを政府に引き渡しゃテ



メエは破滅…それは、それこそ20年近く政府から逃げ回っていたテ  
メエが良くわかつてるだろ?」

「…そうね、それが契約だものね。」

テゾーロがいる以上私は顔を出さない方がいいでしょう、何かあつ  
たら子電伝虫で連絡を」

そう言つてロビンはゆつくりとその場を去る、クロコダイルに見え  
ない角度でその口に冷たい笑みを浮かばせたままに。

そしてレインデイナーズVIPルームにて砂漠の王は黄金帝と対  
面を果たしていた。

「初めましてになるなサー・クロコダイル。テゾーロ財団代表のギル  
ド・テゾーロだ。」

「いやあ、砂漠の英雄と名高い王下七武海に会えて光栄だ」

「初めましてだな黄金帝、王下七武海を名乗らせてもらつてるクロコ  
ダイルだ」

人当たりの良さそうな顔で手を差し出すテゾーロにクロコダイル  
は警戒しつつもそれを表情に出さないようにし互いに握手をする。

「んでこっちは護衛を頼んだポートガス・D・エース…同じ七武海だか  
ら知つてるか?」

「へっ、別に王下七武海は仲良しこよしの集団つて訳じゃねえ顔を合  
わせるのは初めてだが…火拳の噂は色々聞いてるぜ?カイドウのと  
この幹部ともやり合ったとか?」

「へっ、古代種なんて変わり種とぶつかるとは思わなかつたがな」

「流星炎のログアつてか?…まあいいさ、でおれに何の用だ?世界政  
府の用事か?別に変な事はやつてねえぜ?今までちやんとこのアラ  
バスタできつちりやつてるだろうが」

「いや世界政府だのなんだのは全く関係ねえよ、エースと同じ七武海  
であり砂漠の王と名高いアンタの顔を見に来たつてのもあるが…」

「…世界政府の用事じゃねえつてんなら心当たりはねえが」

「いやなに…アラバスタに来る時に沖合でちよつと10隻程の船に襲  
われてなあ?」

その船はどれも同じシンボルを掲げていて”翼とレイピアを持つ

た罫體”…まさか心当たりが無いって事はねえよな?”

テゾーロのその言葉にクロコダイルの口が軽くひきつる。

「おれの財団は政府や海賊と取引する事もある…つまり舐められたままにはいかないって事だ。

なあサー・クロコダイル? あんたの事は調べたぜ、自身の襲撃を時には巧妙に隠し、時には他の海賊の仕業に見せかけ、時にはその規模を誤魔化し…懸賞金が高くなるのは余計なリスクを負うものだという考え方だったらしいな。

そしてその時に使ってたシンボルが”翼にレイピアを持つドクロ”…果たしてこりやどろいう事だ?”

テゾーロのその言葉にクロコダイルは表向きは平静を装いつつも心の中ではいい獲物だと先走って襲撃をかましたビリオンズを猛烈に罵倒しながら方法を考える。

誤魔化すのは悪手、共通点が掲げていたシンボルだけなら相手もこゝうも強気には来ないだろう。何かしら他の情報も持つてる筈。

となると部下という事にすればいいが世界政府には”自身が率いる海賊団は無い”と申告している。

部下がいるとなれば必然監視対象になるだろうし、何より下手に情報を明かしてユートピア作戦の事がバレても面倒だ。

僅かな時間でその二点をクロコダイルは考えたとならばその辺りは誤魔化して仕舞えばいい、と結論し口火を切る。

「…何が狙いだ?”

誤魔化すわけでもなく、はつきりと自身の組織の者だとも言わず相手が何を望んでいるかを聞くクロコダイル、それに対してテゾーロは「何、別に怪我人や船に破損が出たわけじゃねえ…が、落とし前つてのは必要だよな?”

そう言つてニヤリと笑うテゾーロにクロコダイルは心の中で余計なものと呼び寄せたビリオンズを罵りながらも嫌な予感がどんどん大きくなっていくのだった。

## 砂鰐焦燥 ドンクリークさん

「…ちよつと統制が甘かったかもしんねえが、まあ賠償つてんならいくらか払うさそれで手打ちって事でいいだろう?」

クロコダイルは金で方がつくんならそれに越した事はないと提案するが

「金ねえ…今更おれが金を必要としているとでも?」

テゾーロは今ひとつ乗り気では無い返事。

「じゃあ何を差し出させてんだ?悪いが他に出せるようなもんは…」

「おれが欲しいのはな…人材だよ人材、ダズ・ボーンズにザラ、ベンサムにギャルディーノ…随分と豊富な人材が揃ってるみたいじゃねえか?」

「なっ!!テメエそれを何処で!!」

テゾーロの口から出てくる名前に立ち上がって驚くクロコダイル。

無理もない、今テゾーロがあげた名前はどれも自身が立ち上げた秘密組織のエージェント達…しかも上位に位置し秘されていたオフィサー・エージェントの名前だったからである。

「ああそうそう、アンタの元にいるニコ・ロビンでもいいぜ?」丁度この国でポーネグリフが発見されて”なあ、折角だし何が書いてあるのか気になったんだが…さて、誰を差し出す?なあサー・クロコダイル?」  
「テメエ…何処まで知ってやがる…」

口を封じるべきかと考えるクロコダイルだったがいくらテゾーロが腕が立つと言う噂はあれど所詮は商人、自身の能力をフルに使えば制圧は問題無いだろうが傍の火拳が厄介だと考え直し躊躇する。

「このくらい調べればわかる事だろう?それに情報つてのは何物にも変えがたい価値があるつてのがおれのポリシーでね、七武海、四皇問わず有力な海賊には大体網を張って構成人材、規模、主要取引などを調べ上げ常に最新の状態にしていな…」

別に何でもないかのように言うテゾーロにクロコダイルは絶句するが確かに考えてみれば相手はグランドライン後半、通称”新世界”と呼ばれる海域にて有力者として君臨する人間だしそれくらいやつ

てのけても不思議ではないと考え直す。

「…この国でポーネグリフが発見されたと言ったな、いつの話だ？そんな話聞いた事もねえぞ？」

「そりやそうだろ、発見されたのはつい先日でサンドラ川西に広がる大砂漠のど真ん中、その地下深くの遺跡にて発見されたんだからな」その言葉にクロコダイルは全く見当違いの場所を探していたかと考え歯噛みするも後の祭り、既に自身が探していたポーネグリフは“黄金帝”ギルド・テゾーロの手の内。

相手を制してこちらの主張を通そうにも護衛についてるのは自身と同じく七武海の一角でさらに言えば炎のロギア：やり合えない事は無いだろうが騒ぎになる：不意を撃って自身の左手に仕込んだ毒で仕留めるか？と考え自身の左手に装着した黄金の鉤爪に触れた所で

「ぷるぷるぷるぷるぷる…」

と鳴き出す懐の小電伝虫に勢いを削がれる。

「つとすまねえ…何だ？今大事な客と対応中だったのはテメエもわかってんだだろうが。」

…なに？…クハハハハそりやいい、間抜けなネズミ共を迎えてやれ」

そう言つて小電伝虫を切ると

「どうしたサー・クロコダイル？随分と悪辣に楽しげな笑みを浮かべて」

「いやなに、長い間の懸念がようやく片付きそうだな…落とし前についてだが少し待つてくれ。」

少し外せない用事が出来てな、勿論踏み倒すつもりはねえぜ？後できちんと場を設けよう、そうだな…食事を運ばせるから一時間ほど待つててくれ」

とクロコダイルは膝を組んで指輪をいじるテゾーロに言えば

「…まあいいさ、別におれも鬼じゃねえから何の準備も無しに今すぐ誰かを寄越せ何て言わないさ」

テゾーロのその言葉を受けてクロコダイルはゆっくりとVIP

ルームを抜け階下に向かうのだった。

そして時を少し遡りビビと麦わらの一味は流砂と風を受けて去っていくバルバル団に別れを告げ車座になってこれからの方針を話し合っていた。

「さて：無事にレインベースについたわけだけど：」

「よーし！クロコダイルをぶっ飛ばーす!!」

「まったく元気な船長だな：だがずっと船の上で飽き飽きしてたんだ、歯応えのある奴がいりゃいいんだが：」

「この戦闘狂共！そんなに喧嘩っ早いと上手く行く作戦も上手く行かないじゃないの!!」

全くもう：でビビ、この後はどうするの？クロコダイルの居場所とかはわかってるのかしら？」

騒ぐルフィとゾロを他所にナミがビビにこれからの行動について尋ねれば

「ええ、カジノの町レインベースで最大規模を誇り町の中央にありシンボルともなっているレインディナース。

そのオーナーがサー・クロコダイルで普段彼はそこにいる事が多いわね。

偶に海賊の出現を聞いて沿岸の町に向かう事もあるみたいだけど今のところ動きは無いみたいね」

「なるほど：正面から乗り込むのは難しそうね、当然警備の人間はいるわけでしようし」

「オーナーとしてトップにサー・クロコダイル、そしてその下に支配人としてミス・オールサンデーがいるわ」

「おーるさんでー？」

「ルフィさん、ウイスキーピークを出る時に船に乗り込んでいた黒髪の女性よ」

「あいつか！帽子とった奴！」

「ちよつとルフィ黙ってなさい」

「話を続けるわ、そして副支配人としてウルトラキングという男がいるわ、ただ彼はバロックワークスについては知らない一般人よ。

それから警備についてだけあの町を根城にしている暴力団の”コアラ組”が担っているわ、荒事は一部を除いて彼らが慣れているもの、表向きはね？」

「…という事は裏向きの警備もあるわけね？」

「…裏向きと言っているのかどうかわからないけれどまずエージェンツ候補のビリオンズが200名…と言っても反乱軍に入り込んだり王国軍に潜入しているでしょうから少なめに見積もって半分の100人はレインベースに潜んでいるでしょうね。」

それから国盗りが大詰めに近いのならエージェンツ達、特にMr. 1のペアからMr. 5のペアまでのオフィサーエージェンツ達が揃っている可能性が高いわ」

「あたし達が会って無いのはMr. 1のペアとMr. 2のペア…Mr. 3のペアはリトルガーデンで海に放逐したからMr. 4のペアも会った事無いわね」

「…Mr. 5のペアはミス・バレンティンをわたしに変装させてイガラムにおとりを頼んだけれど…ミス・オールサンデーが始末をつけた以上イガラムもMr. 5のペアも生存は絶望的ね…」

「Mr. 2ってビビちゃんが言ってた大柄なオカマで変装が得意な奴だっけか？」

「その通りよ、Mr. 1のペアはわたしも会った事無いけどMr. 4のペアは大柄な巨漢で背中に巨大な銃を、ミス・メリークリスマスは中年で貫禄のある女性よゾオンの能力者だから気をつけてね？」

「ところでよ、バロックワークスはおれ達がこの町にいる事は気付いてんのか？」

「…そこが不思議なのよ、この国についてから妨害の一つも無いしつつきりMr. 6かミス・オールサンデー辺りがサー・クロコダイルに報告しているものだと思ってたけれど」

ゾロの言葉に考え込むビビであったが

「まあまあ、楽観的に考えるよりもバレてると思って行動した方がいいわね、とりあえず何か考えはあるんでしょ？」

ナミの言葉に勿論、と軽く口角を上げるのだった。

## 砂鰐の懐へ

「まずバロックワークス…ひいてはサー・クロコダイルにわたし達の事がばれてると考えて行動しましょう。」

更に顔がバレているとして…レインベースに入った途端ビリオンズが襲ってくるという可能性もあるわね。

わたしを含めて四人は確実に顔がバレてるしとりあえずルフィさんはわたしと一緒にレインディナーズに乗り込もうかしら」

「ん？それがどうかしたのか？」

「顔がバレてるならやたらな行動はとれないって事よルフィさん」

ビビのその言葉に首をまだ捻ったままのルフィに

「おいルフィ、町中には何処に奴らが潜んでるかわかんねえんだぞ？」

「そうだな、ウソツプの言う通り…忘れたのか？暗殺はやつらの得意分野だ」

ウソツプとゾロの説明にようやく成る程！と手を打つルフィ。

「ちよつとビビ、二人で大丈夫なの？」

それを聞いてナミも心配になったのだろう、二人で乗り込むと言うビビにそう聞くも

「まあまあナミさん、あまり大人数で行っても数に意味は無いわ。それなら少数精鋭、まずは情報を集めなきゃいけないのよ」

ビビは自分なりの考えを話す。

「…本当に大丈夫なのよね？」

「ええ、”ちよつと騒がしくなる”可能性はあるけどね？」

顔がバレてないかもしれないサンジさん、ウソツプさん、トニーくんは町に入ったらちよつと顔出してその辺を歩いて欲しいわね。

それでビリオンズが食い付けば仕留めて情報を引っ張り出すし、食い付かなければ顔がバレてないという事だし…それによって動きが変わってくるからお願いね？」

前提は大事なのであくまで様子見と言うことで3人に先行してもらう事を告げれば

「ははっ、任せとけビビちゃん！ビビちゃんとナミさんはこのおれが

命に変えても守ってみせるぜ！」

「うへえ、おれたちはおとりかよ……」

「お、おれががんばるんだ、おれだつて海賊なんだし」

三者三様で返事を返す、まあこの3人ならビリオンズにバレても何とか逃げ切るだろうとビビは考え更に

「ナミさんとMr. ロロナアはバックアップを、万が一に備えて電伝虫は繋いだままにしておくわ。」

アゴトギ、貴方達はレインベースへ来てると思われるperl、それから海兵を……できれば偉い人間がいいわね、それらを探して見つけたら報告をお願いね？」

ゾロとナミ、それからアゴトギとその部下達にも指示を出す。

「了解つす、オジョーサマ」

「じゃあまずはサンジさん、ウソップさん、トニーくんお願いね？」

そう言つてビビは両手を合わせて申し訳なさそうに言う一人は任せとけと言わんばかりに、一人は足取り重く、一匹は緊張した面持ちでレインベースの町へと入つて行つたのだった。

そしてしばらく経つと3人が戻つてきて

「ビビちゃん、拍子抜けする程何も無かつたぜ？」

「へっ！実はおれの貫禄に近寄れなかつたのさ！」

「マジかうソップ！すげえな!!」

「はいはい、ウソップさんの冗談は置いておくとしてこれで3人の顔がバレてない可能性は高くなつたわね。」

……となるとサンジさんとトニーくんはカジノに入つてもらおうかしら、勿論わたし達とは別口でお客としてね？

ウソップさんはナミさん達と一緒にバックアップメンバーに入つてもらおうかしら……とこんな感じでどうかしらナミさん？」

自身の考えをナミに言えばナミは一度頷くも

「そうねえ、一部だけど顔がバレてないというのは僥倖ね。とりあえずあたしとゾロは顔を隠して動いたほうが無難かしら。」

とりあえず方針はそんな感じでいいと思うわよ？上手くいけばここでクロコダイルを……ルフィ、ホントに大丈夫なの？相手は王下七武



海よ?」

流石に相手が相手だと懸念を告げれば

「クロコダイルぶっ飛ばす!!」

「アンタは話を聞きなさいっ!!」

告げられたルフィは何のその、きつと頭の中にはクロコダイルをブツ飛ばす事しか頭に無いのだろう頭をスパーンと叩かれるも応えた様子は無い。

「まあまあナミさん、変に緊張してるよりもよっぽどいいわよ。アゴトギ、海兵やペルは見つかつたかしら?」

「へい、巨大な十手を背負つた将校…恐らく佐官クラスを筆頭に十数名規模の海兵の存在を確認してござえます。

それからペルの旦那ですが残念ながら見つけられやせんでした、町中にはあちこちに”翼にレイピアの髑髏”のシンボルを何処かしらに入れた奴が十数名、武器は特殊な物は持つてねーよーです。

…それからご懸念のギルド・テゾーロとポートガス・D・エースの両者がレインディナースに入つて行つたそーですけど…」

アゴトギのその言葉に額に手を上げ天を仰ぐビビ。

「お!!エースがいんのかー!」

そしてはしやぐるフィ

「…何て事、サー・クロコダイルとギルド・テゾーロの繋がりも読めてないのに」

「どうするのビビ?なんかそのテゾーロつてのヤバイんでしょ?」

「…もし彼等が繋がっていたらわたし達は途端に窮地になるわね」

「だいじょーぶだつて!エースがいるんなら問題ねえよ!まあクロコダイルはおれがぶっ飛ばすけどな!」

そう力強く言うルフィにビビは瞑目して深く考え込み

「…分が悪い賭けね、いいわルフィさん。これまでの航海で見てきた貴方の幸運を信じるわよ?」

テゾーロとサー・クロコダイルが繋がつた場合は即座に撤退、逃げ延びさえすれば今は勝ちよ」

「クロコダイルぶっ飛ばす!!」

「ル・ファイ・イ・さ・ん？」

「お、おう…」

「さて、そうと決まればこの服でカジノに入るのはつまみ出されそうね。

アゴトギはわたしの服を…カジノに入れるような物よ？それからルファイさんとサンジさんにも用意して。

あ、系統は別の物にしてね？サンジさんはわたし達とは別口で単独で入ってもらんだからね？そうね…とある国の王子様で大金持ち、そして女好きのプレイボーイで腕も立つって感じで行きましよう」

そう楽しそうに話すビビにアゴトギは頷きサンジは一瞬虚を突かれたように固まるも

「任せとけビビちゃん！いつでもおれが影から守るぜ、プリンスって呼んでくれ!!」

と自身をビシツとさし

「プリンス」

「馬鹿にしてんのかテメエ!!」

と馬鹿にしたように呟いたゾロに言い返したのだった。

鰐顎いらずば何とやら

ルフィはパリツとした上等なスーツを、同じくビビもそのプロポーションを魅せる水色のドレスを纏い正面から堂々とクロコダイルの経営するカジノ”レインデイナーズ”へと踏み込んだ。

別に入り口で止められるような事もなく、カジノの中でビリオンズが待ち受けてるといふ事もなく中には様々な人間がスロットにカード、ルーレットなどの遊戯に騒がしく興じていた。

「なあなあビビ、クロコダイルどこだ？」

「まあ待つてルフィさん、まずはちよつと遊んで行きましょうか」

「えー、さっさとクロコダイルのどこいこうぜー？」

「ここは一般エリア、VIPエリアに行くのに必要なのよ。

なんせ彼が普段いるのはVIPエリアの更に奥だからここから強行突破なんてしようものなら余計なものがワラワラとついてきかねないわ」

「むー…わかった、ビビがそう言うんなら…」

「…いきなり突っ込んでそれで片が着くんならやりやすい相手だったんだけどね」

そう言いながらビビはとあるテーブルに目をつけ席に座ると

「いらつしやいませお客様、遊んでいかれますか？」

「ええお願い、後ろの彼は見学よ」

「かしこまりました、ルールはご存知で？」

「問題無いわ当然の嗜みよ」

軽く会話を挟み正面のディーラーからカードが配られる。

購入時に換金したチップのほとんどをテーブルの上に置くと続けて配られた二枚のカードに目をやるとそこには数字が書かれた札「ヒット」

と告げそれに従いディーラーが六組のトランプを素早くシャッフル、中央に山札として置き一枚のカードをビビに…とはたから見てるルフィは良くわかっていなかったがゲームは順調に進んでいく。

順調に買ったたり負けたりを繰り返すチップのヤマは増えていき、そ

して残りの山札がだいぶ少なくなった所でディーラーに悟られない程の軽い笑みを浮かべると

「ダブルダウン」

と一言告げ賭けていた数と同じ枚数のチップを前に出すビビ。

「…おや、勝負に出てよろしかったので?」

それに対してディーラーは気圧されたのか少し冷や汗を流しつつもカードを一枚ビビに渡すと

「女は度胸って聞いた事無いかしら?…ブラックジャック」

そうしてビビが晒したカードはエースのカード。

「…お若いのに大した腕ですね、こうも鮮やかに勝たれるとディーラーとして自信を無くしてしまいますよ」

「時の運よ時の運、さて続けましょうか?」

眉を下げるディーラーにそう言うビビだったが勿論ビビも運だけを頼りにこの席に着いた訳では無い。

ビビが挑んだのはこの世界のカジノでは割とポピュラーなゲームであり、ビビがやってのけたのは大雑把に言うと、場に出たカードを記憶し

ある程度ゲームが進んで山札の枚数が減ってくると、どういうカードが残っているか…未だ場に出ていないカードが何か導き出しそれが有利になるか不利になるかにあわせて賭け金の額を調節するというテクニクをやつてのけたのだった。

カウンティングと呼ばれるこの技術は別にイカサマでは無い…というかそもそも山札を細かく、しかも全て覚えようなんてのはよっぽど記憶力に自信が無いと無理な話でもある。

そして順調に進んで行く勝負にルフィはルールが分からず退屈そうに、そしてホールスタッフの一人はどんどん積み上がっていくチップの山と集まりだした野次馬を見て慌てて副支配人に連絡。

「なに?イカサマか?」

「いえ、あちこちから見えますがその兆候はありません」

「ならいつも通りだ、VIPフロアに通してとんとんにしてやれ」

報告をしてきた部下に髪が上に向いた奇抜なヘアースタイルの男

…このレインディナーズの副支配人であるウルトラキングはそう指示を出すか

「それが…今勝負をしているのがどうやらアラバスタ王家のネフェルタリ・ビビ王女では無いかと…」

部下の返事に目を見開くウルトラキング。

「行方不明になったと聞いていたが…いつ戻ってきたんだ？しかも反乱騒ぎで国が倒れかねない時にカジノ遊びとは…随分と剛毅な姫さまだ。」

…まあいい王女様自らこのカジノにおいて頂けるとはこのレインディナーズにも箔がつくというもの、ゆくゆくはわたしがこのカジノのオーナーになった時のために繋ぎを作っておくのも悪くないな…

一応支配人のオールサンデーさんにも連絡を…」

ウルトラキングがそう言いかけた所で

「その必要は無いわよ副支配人、彼と彼女はこちらで対応するわ」

現れたのは黒髪の美女、涼しげな目元をした彼女はウルトラキングにそう言うとカツカツと足音を鳴らしながら勝負が白熱しているテーブルへ、丁度また一戦終わったタイミングで

「少しいいかしら王女さま？」

と声をかければ

「…あらミス・オールサンデー、何か用かしら？」

それと共に拳を構えようとしたルフイの腕をそっと抑えて言うビビ。

「この店のオーナーが貴方達を気に入ったので食事でもどうか？とのお誘いよっ…」

ミス・オールサンデーの言葉にビビは「思ったよりも早かったな…

”と考えつつも

「あら、この店のオーナーといえば七武海のサー・クロコダイルかしら？」

「ええ、まあ会うかどうかは貴方達に任せるけど？」

「当たり前だ！おれ達はクロコダイルをぶっ飛ばもがっ!？」

心強いが直情傾向な自身の仲間の口を塞ぎつつ

「ええ喜んで招待に応じさせてもらうわ、こっちの彼も構わないでしよう?」

「ええ…彼だけかしら?他には誰も?」

「そうよ、何か問題でも?」

ビビのその言葉にミス・オールサンデーは少し考え込むも直ぐに切り替えて二人を地下へと案内するのだった。

## 砂鰐と砂姫の邂逅

「ククククツ、ようこそアラバスタの王女ビビ…いや、ミス・ウエンズデー？」

よくぞ我が社の刺客を掻い潜ってここまで来たな、察するにMr. 3もどうにかして片付けたという所か？」

椅子に座った状態で悠然とビビとルフィを迎えるクロコダイル。

「久しいわねサー・クロコダイル、どうせ報告は受けているんでしよう？わたし達が生きているという事は」

「残念ながら勘だ、確実に生きているとは思ってなかったが…」

軽く笑みを浮かべて言うビビにそう返すクロコダイルだったが

「お前がクロコダイルって奴か!!おいお前えっ!おれと勝負しろ!!」

ルフィはいまにも噛みつきそうに言う。

「クハハハハッ!随分と威勢のいい番犬を連れてるじゃねえか!

…しかし正面から来るとはなあ、正面からしっかり話し合えば事態は解決するとも?クハハハハッそうだとしたらとんだお花畑だな、テメエの頭は」

「誠心誠意話し合えば事態は解決する…そうね、そんな道もあったかもしれないわね。」

ルフィさん、折角食事に招待してくれたのだから食べましょう?お肉の料理も沢山あるみたいよ…って早いわね」

ビビがそう言ってる途中でもう食事に食らいつくルフィにビビは呆れたように、だが心強いと感じながら溢す。

「ぽべくいぽべつぽらぶつどぽぷ!!」

「番犬どころかまるで飢えた犬みたいじゃねえか…で、何しに来た?ノコノコと敵陣のど真ん中にやって来て殺されにでも来たか?まさか殺されないとも思ってるのか?」

口に大量に物を詰め込んだルフィは置いといて話始めるクロコダイル

「あら、あなたはそんな甘い人間なのかしらサー・クロコダイル?」

わたしが今回ここに来たのは貴方の真意を見極めたかったからよ

：バロックワークスの人材集めに始まりダンスパウダーの製造に必要な銀を買うための資金集め、滅びかけた町を煽る破壊工作に社員を使った国王軍濫行の演技指導…更には町々への破壊工作に表では英雄と呼ばれるような海賊退治…そこまで苦勞して貴方はこの国の”何”が欲しいの?」

それに対してビビは疑問に思っていた事を率直に問えば

「…ほう?」

クロコダイルは意外そうに一言。

「疑問だったのよ、確かにこの国はグランドライン有数の文明大国よ?でもそれだけ。」

貴方がスナスナの実の能力者だから国土の大半が砂漠であるこの国を欲しがったというのも考えたけどそれだと理由が弱いわ。

だから他にも何か…この国にはわたしも知らない何か、若しくは私たちが気に留めてない何かがあり貴方はそれが欲しいんじゃないかと考えたのだけど…どうかしら?」

ビビはそれに自分の推論を話せば

「クククククツ、たかだか小娘だと思ってたが…で、それを聞いてどうするつもりだ?その”何か”を寄越すからこの国から手を引けとでも?」

まさかそこまで推察していたとは思わなかったのだろう、軽く驚きながら逆に聞き返す。

「あら、この国から手を引いてくれるの?そんな簡単に諦められる計画なのかしら?あれだけの時間とお金を注ぎ込んだ計画を?」

「クククククツその通りだな」

「一つ疑問だったのよサー・クロコダイル…貴方がいくら王下七武海で、世界政府の信頼を得ているとしてもこの国の王に君臨出来ると?」

確かに今の国民から貴方は英雄として崇められているし、反乱を止めたとあればその名声は高まるでしょう…けど世界政府が認めるかしら?王下七武海とて”海賊”である貴方を国の王に認めると?」

…その為の何がこの国にあるんじゃない?」

「クククククツ…クハハハハッ!!そこまでわかっていたか。」



…なら教えてやろう、この国にはなあポーネグリフがあるのさ。世界政府が解説も研究も禁止してる代物がな」

ビビの推論にクロコダイルは言外にそのまま返すつもりは無いという事だろう、自身の真実を話し

「…聞いた覚えがあるわね、古代兵器復活の可能性が…まさか!!」

それに対しビビは少し考えその答えに辿り着いた。

「ククク御明察の通りだ、それさえ有ればおれが事を成した後で世界政府も文句は言えまい…最もそのポーネグリフは黄金帝に先越されたみてえだが」

「…流石にそれは渡せないわね、”使うつもりが無いとしても”」

「わかってるじゃねえか…どんな兵器でも一度使ってしまったら脅しとなりえねえ、もし使ってしまったら世界政府も本腰入れてこつちを潰しに来るだろうな」

そう話しているうちに用意された食事を全て飲み込んだルフィが

「よしビビ…さっさとぶっ飛ばそうぜ!!こいつぶっ飛ばせば国は戻るんだろ!」

と口を拭うと両腕を構える。

「随分と威勢がいいルーキーだな…聞いてるぜ?モンキー・D・ルフィ”。

初頭手配で三千万たあ異例だが…テメエは何の為に戦う?何の為にこの女に協力する?」

それに対してクロコダイルは立ち上がる事すらせずにそう聞けば

「決まってるんだろ、仲間の為だ!」

と強い決意を含んだ声で返す。

「クハハハハ…くだらねえ、くだらねえなあ麦わらのルフィ!救えねえ馬鹿とはテメエの事さ。」

くだらねえ馴れ合いをしたばかりに命を落として行く…おれはそんな奴らをごまんと見てきたぜ?」

「仲間を大切にしねえ奴はクズだ!」

「ククククツそれでてめえが死んでちゃ世話ねえよ、おれは自分以外は誰も信用しねえ…テメエみたいな口だけの奴は何人も見てきた、

グラウンドラインに入って間もねえてめえみたいなルーキーがおれに敵うとでも?」

「やってみなきゃわかんねえだろ! ゴムゴムのピストル!!」

それと共にルフィは拳をぐっと引くと勢いを乗せた拳を眼前のクロコダイルに向けて叩き込んだのだった。

## ゴムと砂鱈の激突

ルフィの振るった拳は真っ直ぐに葉巻を吸っていたクロコダイルの頭に当たるとそのまま椅子の背もたれごと首から上を吹き飛ばした。

「なっ！砂になったぞ?!」

「クハハハハ…この国に住んでる人間は誰でも知ってる事だがまさかそのこのミス・ウエンズデーから聞いてないのか?」

「…ルフィさん、サー・クロコダイルはスナスナの実を食べた砂人間、生半可な相手じゃ無いわよ?」

そのビビの何回か説明した言葉にルフィはローグタウンで会い、ナノハナでも会った海兵を思い出す。

「上等っ！ケムリンみたいな奴って事だろうが!」

「威勢のいい事だ…」3分”くれてやろう、それ以上テメエの相手なんぞしてられねえ…文句でも?」

それと共に懐から砂時計を取り出して机の上に置くクロコダイルと

「いや、いざぞ」

それと共に指を鳴らすルフィ。

そこからの戦いは熾烈を極めた、ゴムという特性を活かして次から次に威力の高い攻撃を放つルフィであったが流石に相手は”砂漠の王”と異名を取るだけありルフィの攻撃は尽く無効になり、出来る事と言えば精々喋るのを邪魔して挑発するくらい。

両者の激しいぶつかり合いにビビは巻き込まれては敵わないと部屋屋の端に、そして戦ってる本人はそんな事考えていないのだろうか当初は好き勝手攻撃させて余裕の表情を見せていたがルフィの軽口にクロコダイルはイライラしつつとうとう

「…もう遊びは、この辺でいいだろう”麦わらのルフィ”」

まだ半分近く砂時計の砂が残ってる状態で言った。

「おれはずっと真面目にやってるぞ!!くそー…しかしまいったな…あいつサラサラしやがって、全然殴れねえぞ?」

「クハハ、随分とおれの能力が気に入らないらしい…：しかしいつまでも遊んでいいのか？」

…何人いるかは知らねえが、お前の仲間もどうせこの町に入り込んでるんだろう？」

「なっ！お前っ！！」

クロコダイルのその言葉に一瞬動きが止まるルフィ

「クハハハハッ！…ここまでテメエとミス・ウエンズデーの二人で来たとは考えづれえ、海賊狩りと…あとオレンジ髪の女の面は割れてんだ。」

それから船を動かすと考えて二、三人つてどこか？いま外ではビリオンズとエーゼント達が厳戒態勢で動き回ってる…：果たしてくだらねえ馴れ合いをしてるテメエの”お仲間”は無事かな？」

「っ！お前えええっ！！」

更に問いかけるクロコダイルの言葉、それと共にルフィの拳がクロコダイルを襲うも

「学習できんのかテメエは…無駄なんだよ！！砂漠の宝刀(デザート・スパーダ)！！」

馬鹿にしたような顔で腕を振るうクロコダイル、距離はあったものの砂と化したその腕は直線上のルフィに真っ直ぐ向かい、そして何とか身を振る事でそれを躲すも

「なっ！床が！！」

「いい見極めだ…：受けてりや痛えじやすまなかつたぜ？最も随分と力は抜いてやってんだ、ここで受けてりや興奮めだったがな。」

水の中に建っているという立地故か本気を出せばこんなもんじや済まないぞ？…と意味を言外に込めて言うも

「殴れねえなら捕まえてしまえばいい話だろ！ゴムゴムの網いっ！！」

「…無駄だと言ってるのがわかんねえのか！！三日月砂丘(バルハン)！！」

ルフィは指を網のように編み込みクロコダイルを閉じ込めようとする、それと共に砂を纏ったクロコダイルのラリアットがルフィの腕を通り抜けるとそこにはスナスナの真骨頂である”水分を奪う”

という攻撃を受けミイラのようになったルフイの腕。

「ぐあああ!!腕が!!腕がミイラに!!」

「クハハハハ砂だからな…お前の腕の水分を吸収したのさ、そうして全身の水分を絞り出して干からびて死ぬのも悪くないだろう?」

「ぐ…冗談じゃねえ…ゴムゴムのムチい!!」

「…懲りねえ奴だな、バルハン!!」

「ぐう…おれの足が…くそっ!」

ならば、とばかりに今度は足を振るうもそれすら無駄に水分を奪われてしまう。

「さて…最初に言ったな?3分だけだと。これ以上お前に付き合ってる暇は無い、大事な商談があるんでな?」

「逃げんのか!!」

「クハハハハッ…小物が粹がるなよ!!デザート・スパード!!」

「なっ!水が!!」

「既にこの秘密地下は必要ねえからな…墓としちや随分と豪勢なもんだろ?」

それと共に流石にこれは面倒そうだとビビはルフイに駆け寄ろうとするも

「おっと動くんじゃねえよミス・ウエンズデー」

砂によつて拘束されそのまま椅子に押し付けられると後手に縛られる。

「反乱軍は既にアルバーナに向かっている…王宮の陥落は時間の問題だな」

「…例えば王宮が陥落しても民達が血を流す訳では無いわ」

「クハハ、因みにこのレインベースには王国軍と砂漠の英雄を助けようと反乱軍の半数が向かっている…さてお前の大事な民達は無事で済むのか?」

「…周到ね、でも周到だからこそわたしみたいな年端もいかない小娘に計画を崩されるのよ」

「クハハハハッ!弱者がよく吠える!!…じきに水が入り込み一時間もありやこの部屋は完全に水に飲み込まれるだろう。」

そうすりやテメエらは二人とも溺れ死んで終わり…一国の王女様もこうなつちや非力なもんだな」

「…たかだか部屋を水没させた程度でわたし達が死ぬと?」

「クハハ、この泉にはバナナワニが生息していてなあ?少なくとも10体はいるんじゃないか?」

じゃあな麦わらのルフィにミス・ウエンスデー…精々おれに楯突いた事を後悔しながら死んでゆけ」

それと共にクロコダイルは二人を背にポーネグリフを確保する為にテゾーロとの話し合いにVIPルームに戻るのだった。

## 秘密の悪巧み

そして丁度クロコダイルとビビが話をしている頃、レインディナーズのVIPルームにてクロコダイルが戻るのを待っているテゾーロは小電伝虫にて何処かに連絡をとっていた。

「食いつくと思うか？」

『食いつくだろう。奴が探してるプルトンはポーネグリフに書いてあり、そのポーネグリフはコブラ王のみ場所を知っておりこのアラバスタのどこかにある…という情報だけだ。』

なら別にわざわざ葬祭殿のやつを持ち出すまでも無い、おれが見つけた野良ポーネグリフを自身の目的のものだと誤認する可能性は高い』

「なら予定通りか？」

『ああ、レインベースの南側郊外にてポーネグリフと一緒に待機している。』

あと建物内にいるなら気付いてるか知らんが町が少し騒がしい：どうやら麦わらのルフィ一行が町に入ったようだ、おれの予想だと麦わらの一味と海兵とビビちゃんがレインベースに突っ込みそうな気もするが…』

「おいおい、いくらなんでも一味全員で正面から乗り込むなんて馬鹿な真似はしないだろ。」

それより反乱についてはどうにかなりそうか？随分と知識と違うと言っていたが…』

『…そこなんだよなあ、俺の知識より王国軍から反乱軍へ合流した人数が増えて80万、更にナノハナでの国王の乱行が無いにも関わらず反乱軍がアルバーナに強襲をかけたに行った、しかも半数はこのレインベースにも向かっているという始末。』

更に言えば王国軍も王国軍でコブラ王の拉致が無かったからか真っ直ぐこのレインベースに向かって来ている…このままじゃこの町で反乱軍40万と王国軍20万が衝突しかねん』

「…アンタの知識よりだいぶスケールダウンしてるな」

『国王拉致を行ったMr. 4のペアは何故か知らんがユバに来たしな、残るエージェントは少ないしそれで計画通りにやる事をクロコダイルは諦めたんだろう』

「確か知識通りならナノハナで国王に化けたエージェントが乱行を行い、港には武器商船が突っ込んだ上で最終的には二十万の反乱軍がアルバーナに攻め込むんだったか？」

『その通りだ、んで最終的には黒幕であるクロコダイルは麦わらのルフィに破れなんとか反乱は中断されるんだが…随分と違う状況なんだよなあ…』

場合によつては最悪を考えておく必要もあるかもしれないな、その場合はお前にも手伝ってもらおうぞ？主に世界政府相手にな』

「何かやるつもりか？危ない橋はあまり渡りたくねえな」

『俺が本部中將として動く。既に念の為を考えて独立遊撃隊はサンドラ島の沖に集結させている、命令一つで待機している10隻の独立遊撃隊が連隊規模で上陸し反乱軍、王国軍をぶん殴って止めその間に俺がクロコダイルを相手する予定だ』

「…個人的にはアンタ曰く重要なファクター…モンキー・D・ルフィがクロコダイルに敵うのか？という疑問なんだが。

相手は七武海でロギアだぞ？しかもこの砂漠という環境で最大の力を発揮する砂の…そんなの相手にいくら初頭手配3400万とは言え覇気も覚えてない小僧が本当に勝てるのか？」

『まあ負けたら負けたでそんな時だ、俺は案外何とかなると思ってるからな…さて、話はここまでだ交渉は上手く頼んだぞ？』

その言葉と共に電伝虫は切られ

「なんだ旦那、また悪巧みか？」

と聞くエースにテゾーロは

「まさか、どつちかかっていうと善い事さ」

そう軽口を叩いてくると足音と共に戻ってくるクロコダイル

「いやあ待たせてすまない、どうしても無視できない客が来ていてな」

「気にするなサー・クロコダイル、ところで落とし前はどうするんだ？」



「…それなんだが少し待っててくれないか？どの人材も予定があつてな…なに、せめて数日という所だ」

「…まあいいだろう、急に寄越せと言っても人間は物じゃねえんだ、本人にも都合があるだろう」

「いやありがたい…ところでポーネグリフを見つけたと言つていたが後学の為にぜひ拝見させてもらいたいんだが？」

「んー…買収取るとかならまだしも見せるのはなあ、あれにや古代文字が書いてあるし…」

「成る程確かに”いくら古代文字が読めないとは言え”記憶力がある奴は文字の形を覚えるくらいはするだろうなあ…だいたい何処にあるんだ？噂ではポーネグリフって代物は重い上にかなりデカイと聞いているが…」

クロコダイルのその言葉にテゾーロは表面には一切出さずに心の中ではがつついてるなー、そんなんじやバレバレだぞ？…と考えつつ

「ん？ポーネグリフならこの町の南の郊外だぞ？うちの護衛と一緒にいるが…それがどうかしたのか？」

「いや、なんでもねえよ…兎に角落とし前については了承した、連絡はどうすれば…」

「ああ、こつちの電伝虫に繋いでくれりやうちのもんが出るから伝えてくれ。」

さて話は終わりだ、精々おれをガツカリさせないでくれよ？王下七武海にして砂漠の王…サー・クロコダイル？」

薄く笑いつつそう言うテゾーロはそのままVIPルームから出て行きクロコダイルはそれを見送った所で

「クハハハハ…何が黄金帝だ、何が新世界の怪物だ。」

大事な情報を自分からペラペラと零してくれて随分と助かったぜ？後はポーネグリフを横から奪つて、それから反乱軍と国王軍が来て乱戦になった所でこつちの事を知っているテゾーロの野郎を背後から仕留めりや終いだ。

腕は立つと聞いているが所詮は商人、砂漠でおれに敵う奴はいねえんだ…護衛の火拳がちと厄介かもしれんが火で砂は燃やせまい。

王女も麦わらも始末した、後はエーゼント共の麦わらの仲間を始末しておれがポーネグリフを手に入れれば…おれの勝ちだ!!」  
「そう言いながら誰もいないVIPルームで高らかに笑うのであった。」

## 謎の女怪盗見参

「くっそー！手足が動けばあんなやつー!!」

一方クロコダイルが去った秘密地下施設にて手足の水分を抜かれミイラ状態になったルフィはその場でジタバタと、ビビはビビで

「…らしくないわねサー・クロコダイル、やはり計画の完遂直前で気が急いでいるのかしら？」

と、そんな場合じゃなかったわね…水がこの部屋に満ちる前にさつさと脱出しないと…鋼鉄製の手錠なんて面倒な…」

と思案顔。

「なあビビー、おれの手足何とかならねーか？このままじゃ動けねえよー…」

「サー・クロコダイルのあの手は水分を奪うだけよ、水さえ飲めれば元に戻るわよ。」

幸にして水は飲むのに困らないほど流れこんで来てるし頑張って飲んでね？」

「水ー！水さつさとこっちまでこーい!!」

と言いつつまるで芋虫のように流れ込んでくる水の方に這っていくルフィを見ながらビビは何か手錠を外そうとするが簡単には外れる気配は無く

「よーし復活！ビビどうすんだ!」

部屋にどんどん流れ込んでくる水をがぶがぶと飲み込みルフィが復活

「ちよつとこの手錠が固くて…ルフィさんなんとか解錠できないかしら？」

手錠に苦戦するビビはなんとか外そうとするも

「う、随分と頑丈だなこの手錠…」

生来細かい事が苦手なルフィは手錠をガチャガチャとするばかりでそうこうしていると今度は窓が割れて水が入り込み部屋には加速度的にどんどんと水が満ちてくる。

「う、力があ…」

そして湖の中という立地故か直ぐに流れ込んでくる水はあつという間に足首から膝、そして腰までできた所で能力者だったルフィがとうとう体に力が入らなくなりその場でぐったりとした所で

「ルフィさん!? ああ能力者だから当然…って何とかこれを外さないとルフィさんが溺れ死んでしまうじゃない!」

更には崩れかけた壁から獰猛な性格のバナナワニが続々と侵入、新たな獲物と見たのか唸り声を上げながら近づいて来た。

「う…これは少し不味いかしら? これはまだ使いたく無かったんだけど…」

頼みの綱のルフィは全身の力が抜けておりダウン、これならばさつさと椅子の方を壊してもらえば良かったと思いつながら奥歯に仕込んだ丸薬を噛み潰そうとした所で

「うふふふ、お困りかしらお姫様?」

突如として階段の上から響く女性の声。

「っ、何者!!」

そこにいたのは一人の女性…と言っても首から下はびつしりと隙間なく覆ったコート、そして唯一肌が覗く首から上は流れる黒髪に目を隠すマスカレイドマスク…

「私は謎の女怪盗クリストファー! 勿論偽名よ!」

「偽名って…それよりクリストファー? 貴方は何者なの?」

「それは秘密よ! 何故ならその方がカッコいいからよ!」

それと共に飛び上がると拘束されたビビの前に降り立つクリストファーはおもむろに力が抜けてへなっているルフィを掴むと放り投げ

「さて、助けが必要かしら? 助けがいらないのならそのままにしておくけど?」

と腰に手を当てる言うクリストファーに訝しむも

「貴方が何者か…それは一先ず置いておきましょう、何が狙いかしら?」

「ただの善意と言って納得するのかしら?」

それと共に手袋に包まれた指を口許に当て軽く笑う女を前にビビ

は躊躇うも水が胸元まで来ており手錠で動けないビビは兎に角この場を切り抜けるのが先かと考える。

「…納得は出来ないわね、いいわ後から報酬を払うわこの手錠外せるかしら?」

「お安い御用よ…とその前に邪魔者を片付けるべきかしら?」

それと共にバナナワニに向き直るクリストファーはビビの目の前から飛び上がると迫って来たバナナワニの頭の上に、そのままバナナワニの頭に

「鈍熊流兵葬術…熊蜂…!」

それと共に拳を当てるとびくりと一度大きく震えその場にどうと倒れ伏すバナナワニ

「なっ!あの巨体を…いえ、まだ後ろから連なって来てるわよ!!」

巨大な身体と分厚い皮膚を持ち、その牙は岩をも砕く故に時には海王類を襲う事もある獯猛なバナナワニを一瞬で沈めた手際にビビは驚くも

「う…流石に能力無しでこの数は面倒ね…でも能力使うとバレるかもしれないし…」

「ゴムゴムのお!HEAT・バズーカあっ!!おいビビ!大丈夫か!」

その数にクリストファーが少し考える間に階段の腕から伸びる赤熱した腕

「ルフィさん!もう身体は大丈夫なの!」

「おう!それよりそいつなにもんだ?全身コートで怪しい奴だな!」

「ふふふ、私は謎の女怪盗クリストファー!義によってお姫様を助けるわ!」

「女怪盗だと!なんでそんなやつがここにいる!」

「そうね、クロコダイルが溜め込んでる資金を目的に侵入したって事にしておきましょうか…と、お姫様はこれで動けるかしら?」

それと共に二本のピックを操作して外した手錠を手にクリストファーは言い

「しておくって…まあいいわ助かったのは事実だし、さてじゃあるフィさん!サー・クロコダイルが戻ってくる前に脱出してナミさん達

と合流しましょう、エージェント達が向かったといっていたし心配だわ」

「お？クロコダイルぶつ飛ばさねえのか？」

「さつき戦ったでしょう？一旦リセットする為にここは退きましよう」

「むう…次は勝つからな！ワニめ！」

とルフィとビビはその場から離脱、そしてクリストファーはその場で

「…耐水性能は問題無し、まあ全身隙間なく覆ってるからか少し動きにくいわね。

防護性能を確認しておきたかったのだけど…バナナワニが思ったより早く片付いちやっとなあ、おじ様の用意した物だから大丈夫だと思っけど…と、そんな場合じゃ無かったわね私もさつきと退散しなきゃ」

少し眩くとその場から離脱、そしてミス・ウエンズデーと麦わらの死に顔でも見てやろうかと考えたクロコダイルが目にしたのは

「っ…なんだとっ!？」

水に沈んだ部屋と気絶したバナナワニの群れ…そして外された手錠や瓦礫だけで溺れ死ぬ筈だった麦わらとミス・ウエンズデーの姿は何処にも無かったのであった。

## 砂の姫の蠢動

「ナミさん！無事!？」

「あ、ビビ…とりあえず何とかなつたわ…何であたしが1番目のパートナーと戦わなきゃいけないのよ…」

「なあ！んナミさん大丈夫!?なんて怪我だ!!何処のどいつだ!」

「おいナミ！他の奴らは!?ゾロとウソップとチョッパーは!？」

レインデイナーズから逃げ出したビビとルフィは遅れて来たサンジと合流し路地裏で荒い息と共に座りこんでいたナミを見つけ声をかける。

顔がバレていたからかレインデイナーズの裏口で待機していたナミとゾロは直ぐに追いかけられる事になった。

更にはMr. 1とミス・ダブルフィンガーも出てくるというおまけ付きでナミとゾロははぐれナミはミス・ダブルフィンガーと闘う羽目に、ウソップから渡された武器で退けたもののダメージは大きく休んでいた。

「一番目のパートナーって…ミス・ダブルフィンガーとやり合ったの!?って酷い怪我じゃ無い！早く治療を…トニー君は?」

「大丈夫よ、応急処置はしたわ。チョッパーなら…」

「おう、お前ら無事だったか?」

ナミがそれを答えようとした所で今度はゾロがチョッパーとウソップと共に合流

「あらゾロ、二人には無事に会えたみたいね。スパスパ男は何かなったの?…って随分とボロボロじゃない」

「へっ、厄介な身体だったが…それより少し血い流しすぎた、少し寝させてくれ」

そう言つてその場で座り込むゾロ

「ナミの言う通りチョッパー連れてつて正解だったぜ?勝ったと思つたらその場で倒れたぞゾロのやつ…」

「なっ！ミスターロロノアも酷い怪我じゃないの!二人ともなんて無茶を…」

「だ、だいじょうぶ治療はしておいたぞ！ほらナミも傷を見せてくれ！」

「ありがとうチョッパ、そっちはクロコダイルは何とかなったの？」

「…流石に王下七武海ってところかしら、ルフィさんがああも簡単にあしらわれるなんてね」

「次はぶっ飛ばす!!」

「うへえ、やっぱ化け物ね…それより次はどうするの？」

「因みに戦ったMr. 1とミス・ダブルフィンガーは？」

「とりあえずふんじばって放置して来たわ、まああの分なら早々目覚めないと思うわよ?」

「おう、あの刃物男も柱にぐるぐる巻きにして来たぜ！」

「残っているサー・クロコダイルの手札はミス・オールサンデーにMr. 2とMr. 4ペア…、ここまで削れたのならサー・クロコダイル本人が動く可能性は高いわね」

「どうする?王国軍に反乱軍もこの町に向かっているんでしよう?」

「…アゴトギ!ペルは見つかったかしら?」

「上空で旋回する巨大な影を確認したんで多分あれがペルの旦那じゃねえかと…」

「王国軍と反乱軍の位置は?」

「まだ見えちゃいませんがおそらく両軍共に後二、三時間つてとこでしようか?このままいきや王国軍が先に到着するかと…」

「…サー・クロコダイルの手札を減らすべきか…でもポーネグリフをギルド・テゾーロが手に入れたというのがネックよねえ…サー・クロコダイルの目的がポーネグリフにある以上そっちを手に入れる可能性もあるしまたエージェントが襲撃をけしかけてくる可能性もあるなら固まって行動した方がいいかもしれないわね…」

よし、ギルド・テゾーロに会いに行きましようか。

彼の掌中にあるポーネグリフをこちらがサー・クロコダイルより先に手に入れば最悪の事態は免れるわ。

アゴトギ、居場所は掴んでるんでしよう?ギルド・テゾーロは何処?」



「レインディナーズから出た後にオジヨーサマが探させていたポートガス・D・エースと共に町の郊外に、南の方です」

「…交渉ってどこかしら、まさか知っていて？いや、護衛が七武海である以上顔合わせって線も…判断材料が少ないわね」

「おいどーすんだビビ？クロコダイルぶっ飛ばすんじゃないか？」

「…ルフィさん、お兄さんに会いに行きたくない？」

「お！エースの場所わかったのか？行こうぜ！」

「決まりね、わたし達は今からサー・クロコダイルに先んじてポーネグリフを手に入れましょう。」

そうね、ミスターロロノアとナミさんは怪我が酷いし…アゴトギ、二人をこの町のアジトに、トニーくんは付き添いをお願い。

わたし達は追撃の可能性を考えてわたしとルフィさんが先行してギルド・テゾーロの後を、そして後ろから顔がバレてないサンジさんとウソツプさんが追ってきてちょうだい、何か有れば小電伝虫で連絡をお願いします。

そしてアゴトギあなたは二人をアジトに連れて行った後で反乱軍と王国軍の監視及びペルと合流して彼に伝言をお願い、何かあれば連絡して頂戴。

そして懸念を取り除き残りのエージェントとビリオンズを排除した上でサー・クロコダイルの打倒というプランでいきましょう。

さて…ここからが大詰めよ、サー・クロコダイルの計画も大詰めでしょうけどこっちもそう簡単に計画を諦めるわけにはいかないのよ…アラバスタは復活する、好き勝手やってきたツケはきっちり払ってもらおうわよ、サー・クロコダイル？」

「…計画？薄々思っていたけど反乱を止めるだけって訳じゃ無さそうね」

そう言っって後半は小声でビビは嫣然と微笑み、ナミはそれを訝しげに見て呟くのだった。

## 終演前の一波乱

「少し良い報告ととても悪い報告があるのだけど……どれから聞かかしらう？」

険しい顔で戻って来たクロコダイルにそう言葉を投げると

「ニコ・ロビン……てめえ何処に行つてやがった」

とクロコダイルの返事、まあ見張りがついていればみすみす麦わらにも王女にも逃げられなかつただろうと言外に言うも

「あら、随分と不機嫌じゃない？ 貴方が他の麦わらの仲間を始末しろと言つたからエージエント達に指令を出してきたんだけど？」

それにその名前では呼ばない約束の筈よ？ 壁に耳あり障子にメアリー……知らないの？」

勿論自身はクロコダイルの命令でその場を離れていたのものでそれで文句を言われても困ると反論。

「誰だそりゃ？ 報告つてのはなんだ、おれは今気が立つてんだ……口には気をつけろ」

「少し良い報告は後二、三時間程で王国軍と反乱軍がこのレインベースに到着するわ、上手くいけば共倒れな上にネフェルタリ・コブラを捕縛できるかもしれないわよ？」

「ああ、その辺は必要無くなった。ギルド・テゾーロの野郎がポーネグリフを手に入れたからな横から搔つ攫つちまえばいい話……国を荒廃させた悪い王様はその後でいいんだよ」

「あら、何処にあつたのかしら？」

その件に関しては初耳だ、と驚くミス・オールサンデーは聞き返すと

「砂漠の地下遺跡だそうだ、ひよつとしたらプルトンもその様に埋没してる可能性もある、悪い報告は？」

その答えに葬祭殿が本命と睨んでただけどなー、まさか二つあるって事？ などと考えながらおくびにも出さず

「……Mr. 1とミス・ダブルフィンガーがやられたわ、ビリオンズが回収したのだけど目覚める気配は無し……これで無事なエージエントは

Mr. 2とMr. 7のペアだけよ、後はビリオンズが数十名つてどこかしら」

と、町中に放っていたビリオンズからの報告と合わせて現在のバロックワークスの実態を説明する。

「なんだと!!ちつ…わざわざ目をかけてやったのに使えねえ奴らだ、相手は?海軍か?」

バロックワークス…十二人の幹部と二千の構成員を持つ長い年月をかけて作り上げられたクロコダイルの手足となる組織は今やほぼ死に体となっていた。

幹部であるオフィサーエージェントのMr. 1ペアは格下である筈の麦わらのルフィの仲間に向け、Mr. 3は王女抹殺任務から戻らず、Mr. 4ペアは王女襲撃の任務の筈が正体不明の輩に襲われ、Mr. 5ペアも連絡がとれず。

そしてその下に位置するフロンティアエージェントにしてもMr. 6ペアが謎の襲撃犯によって怪我により戦線離脱、Mr. 8ペアとMr. 9ペアはこちらを裏切り、Mr. 10ペアは賞金首に返り討ちになつて以降まだ後釜が決まっておらずMr. 11は海軍に捕まりMr. 12も連絡がとれないという始末。

伝令となるMr. 13のペアであるアンラッキーズもリトルガールデンから戻らずその下部組織である200人程を擁するビリオンズも初手の黄金帝襲撃やユバ襲撃などで数を減らす一方であった。

他にミリオンズという1800名の賞金稼ぎによる部隊があるがこれはどう足掻いても間に合わないで置いておく。

「1700万の首、海賊狩りのロロノア・ゾロよ、それから似顔絵が回って来ていたオレンジの髪の子よ」

「麦わらの仲間か…さっきといいこの件と言い…どうやらオイタが過ぎるようだな麦わらのルフィ。」

上等だ、格の違いってやつを教えてやろう…奴らは今何処にいやがる」

それと共に獰猛な笑みを浮かべるクロコダイルに

「この町から逃げるつもりなのか郊外に向かう姿が確認されている

わ、麦わらの彼と王女様の姿がね」

とポーネグリフが見つかった以上ここにいる必要性は薄いかしら？と考えつつ目撃情報を教えると

「Mr. 2を呼び戻せ、それからMr. 7達にや麦わらの仲間を探させて始末しろ、ビリオンズも全員それに当たらせろ。」

ここでポーネグリフを手に入れちまえばこっちの勝ちだ、敵はギルド・テゾーロと火拳のエース、ついでに麦わらのルフィとミス・ウエーンズデー…おれを舐めてくれた代償はきっちりその命で払ってもらおうか」

自身の完璧な計画は崩れたがまだ挽回は効く、そう考えながらテゾーロに通信を繋ぎレインベース郊外南方の”とある場所”を指定して待ち合わせを取り付け、早急にそちらへと向かうのだった。

一方連絡を受けたテゾーロは電伝虫が切れた後直ぐにクリークに連絡

「…という訳だが狙いはなんだと思う？」

『十中八九ポーネグリフの強奪つてとこだろう、何しろ町の郊外は砂漠だ。』

自身のテリトリーとする砂漠であれば相手が新世界の怪物だろうが七武海に属する炎のロギアだろうが勝てるかとふんでの事だろう』

「…実際のところどうだ？」

『…弱点をつかない場合はかなりの強敵だろう、対策さえしてれば問題無いがそれが無い場合俺でも砂漠ではやりあいたかあねえな』

「それ程か？」

『ロギアってのは元来それ程のもんさ、更に最大限その実力が発揮でききる気候とくればな。』

まあ被害を考慮せずにやりやあ水気無し、覇気無し、海楼石無しでもいけるが…』

「…その被害つてのがどのくらいのもんか考えたくねえな、まあいいどうせ合流するんだ詳しい話はその時でいいか」

『おう合流はちと時間がかかるかもしれん、何しろ重くてな…このポーネグリフつてのは』

「まあそんな持ち運びする様なもんでも無いからな……てかそれを運べるアンタが異常だって事自覚しろや」

『人間誰だって努力すりゃあこれくらい出来ると思うんだがな……言っ  
てしまえば俺の身体なんてもんは生命帰還の結果だぜ？』

俺には別に才能なんてもんねえし死ぬ気で努力すりゃ普通の人間でもこんぐらい出来るんだよ』

「……そうは言うがな、まあいいさアンタの自論はいつもの事だしな」

とこれ以上は話が脱線しそうだと感じテゾーロはエースと共に電  
伝虫を切るとクロコダイルの指定した待ち合わせ場所に向かうの  
だった。

## 砂漠の王の真価

「砂漠の向日葵（デザート・ジラソーレ）!!」

「なっ!?!なんだこれ!!」

「初手からこれか！挨拶も無しとは随分と舐めてくれるな!!」

広がる一面の砂漠、遮るものが無い日差しを受けながらテゾーロとエースが指定された場所で待っていると突如として二人の足元が大きく沈み込んだ。

「クハハハハハっ!!流砂を知らんのか火拳のエース、棺桶のいらない便利な墓場さ。」

流砂つてのは地下の水脈に砂が引き摺り込まれる事によって発生するんでな、敵対するかもしれない相手が指定した地点で待つてくれているとは新世界の怪物が聞いて呆れるぜ?」

「成る程なあ、とは言え黙って飲み込まれるつもりは無いがな”黄金殻（ゴオン・シエル）”」

それと共にテゾーロの身体を黄金が流砂を弾きながら包み込み、その塊は半球状に抉れた流砂の壁面に沈み込んでいく。

「ちっ、ロギアに相性のいい気候つてのは面倒だな！おれもそんな感じのが欲しいぜ全く…」

そしてエースも自身は炎ゆえかさほど焦る事も無くその場から飛び立つと姿を表したクロコダイルの前に着地。

「成る程、戦闘力があると言われていたのは悪魔の実の能力者だったからか…まあロギアと言うわけでも無しやはりお前が邪魔だな？火拳のエース…」

「へっ、相手が七武海とは随分と腕が鳴るねえ」

そして二人はしばし睨み合いそして同時に動く。

「墓場が不満なら棺を用意してやろう!」砂漠の枢（デザート・バーラ）”!!”

「うおっ!?!」

それと共に驚愕するエースの足元の砂が腕のように持ち上がり瞬間にエースにまとわりつくとその姿は見えなくなる。

「壊（ヴィシーノ）!!」

それと共にクロコダイルが拳をグツと握り込み、凄まじい圧力が砂の中のエースにかかるもエースも負けておらず

「んにやる…大炎戒・十字火閃!!」

「ちつ、流石にロギアってどこか…空気さえ遮断しちまえばいけるかもしれないねえと思っただが…」

炎の熱を圧縮させた熱線を放ち脱出、流石にその危険さに感づいたのか熱線を素早くよけるクロコダイルに

「おいおい、アンタロギアなんだろ？この程度の攻撃を避けるなんて随分と臆病なこったな」

挑発をこめて軽口を叩くも

「舐めるな、たかだか炎が砂を燃やせるわけねえと思っただが…テメエのそれ、熱を圧縮したな？」

「…理解が早すぎねーか？お察しの通りおれの火閃はアンタを撃ち抜くぜ？さあ…どこまで持つかねえ？」

それと共に再び集中して熱線を作り出し放出するエースに

「…あまり舐めてんじやねえぞ若造があつ!!砂漠の霰つ（デザート・グランディネ）!!」

それと共に飛ぶのは砂の礫。

だがただの砂と侮るなかれ、その数は百、千と増えていき弾となる砂は無尽蔵に周囲に広がっておりその連撃は止む事無くエースに降り注いだ。

そして降り積もる砂は徐々にエースを飲み込み

「おい火拳…テメエは炎だから効かないなんて思ってるかもしれねえが…実体のあるロギアと実体のないロギア、全く別物なんだぜ？」

「ぐっ!?なんで砂に足が!？」

「確かに砂じやあ炎の芯まで消せねえ…だがこの圧縮した砂でありやテメエを捕まえる事くらい出来るんだよ!!砂海影喰（ラピメント）!!」

それと共に先ほど以上の砂が流動しながら波動のように動きエースを包围、目の前で球体状になりエースを捕らえたのだった

「…砂によって生み出された超高压縮の壁を持つ完全なる隔離空間は

テメエを閉じ込めるにや最適だろ？

おれはテメエみたいな能力にかまけたバカと違って能力を研ぎ澄ませてあるんだ…砂さえありや大体の事は出来んだよ、地中にある硬度の高い鉱石を砕いて砂に混ぜ込むなんて事もな、っても聴こえてねえか？精々そこで大人しくしとけ、全部終わったら出してやるよ」それと共にクロコダイルは砂の球体から目を離し集中する。

砂漠は自身のテリトリーでありそれに限定すればどこに何かあるかはだいたい感じ取れる、黄金を纏って自身の流砂から逃れたテゾーロを感じ取ろうと息を落ち着け目を閉じ暫くして

「クハハハハハ…見つけたぞ？…ついでに重いものを引きずってる奴も近くにいるって事はお目当てが来たか？」

獰猛な笑みを浮かべてそちらへと向かうのだった。

そして一方激しい砂塵と吹き上がる火炎が見えたルフィとビビは戦闘を察して直ぐ様向かいその場で球体となった砂を発見

「…何かしら随分と硬いけれど…サー・クロコダイルの策略かしら？」

「おしっ！ぶっ壊せばいいんだな！ゴムゴムの…バズーカ!!」

とりあえず攻撃をルフィが加えるもその球体はビクともせず

「…とんでもない硬さね、まるで何かを守っている？いや…閉じ込めている？」

少し考え正解を察したビビを他所に

「なら、ゴムゴムのお…キャノン!!」

ルフィはこれでどうだとばかりに長い溜めを経ての拳を撃ち込み、それでも球体は大きく揺れるだけで壊れる気配は無い。

「…サー・クロコダイルが閉じ込めたのなら彼にとって邪魔者？ギルド・テゾーロか…若しくはポートガス・D・エース？いえ、決めつけるのは早計かしら」

「くっそー！もう怒ったぞ!!ゴムゴムのお……HEATキャノン!!」

それと共に先ほどより長く伸ばして威力を上げた拳が球体へと突き刺さり僅かにビビが入り

「っあつつう!!あちちち!!」



そこから噴き出す轟々とした炎にルフィは思わず手を引つ込める。

「おー悪い悪い、何処のどなたか存じませんが出してくれて助かったぜ…って、お前ルフィか？」

「エース…？エースじゃねえか!!何やってんだこんなところで？」

ヒビが入った場所から勢いよく炎が噴き出しヒビを拡大、割れた球体の中からエースが礼を言いながら出てくるとその目がルフィを見つげ思わず立ち止まりここに来てようやくエースとルフィは数年ぶりの再会を果たしたのだった。

## 砂熊激突 ドンクリークさん

「見つけたぜ?」砂漠の宝刀(デザート・スパード)!!」

巨大な立方体の物体を運ぶ影、それを見つけると共にクロコダイルは自身の右腕を大きく振り下ろした。

「ちっ、外したか…しかしポーネグリフとやらは随分かてえな…」

相手が運んでいた立方体の影に隠れた事によりクロコダイルの斬撃は砂漠に深い断絶を残したものの途中で止められ、その硬さにクロコダイルは舌打ちする。

「…久々の再会なのに随分なご挨拶だな、しかしここに来たって事はテゾーロとエースを退けたか?」

フードの男の声に眉を顰めて

「てめえ…随分と余裕そうだな?…いや…その声何処かで聞いたぞ?」

「ハハハハハ、流石王下七武海に数えられる砂漠の王と異名をとるだけの事はあるようだ、悪いなクロコダイル…所詮麦わらに倒される程度の海賊だと舐めていたようだ、謝罪しよう」

そしてやがてクロコダイルの脳裏に1人の男が思い当たる。

かつてこの国で戦った男…本部海兵であり最強の中将であり次期大将の呼び声も名高い男…

「テメエ…こんなところで何やってやがる?しかも海兵である筈のお前が何故ポーネグリフを持ってやがる!!ええ!鈍熊のクリークよお!!」

「ハハハハハッ、正解だクロコダイル…しかし覇気も知らないお前がテゾーロはまだしもよくエースを退けたもんだな?」

それと共にフードマントを取り払う男、その下からは諸肌の鍛え上げられた、まるで巖のような肉體。

「ハキだあ?なんのこった、火拳ならこうしてやったのさ」砂漠の柩(デザート・バーラ)!!」

それと共にクリークの足元の砂がぞわりと持ち上がり殺到全身隈なく包み込み

「ぐっ…潰れやがれ!」壊(ヴィシーノ) オツ!!」

力を込めて拳を握り込み砂の圧力を持って押し潰そうとするも砂の繭を突き破って再び現れた体には些かの異常も見られない。

「大した圧力だな…だが俺の身体を潰すのには力不足だな、連装拳砲っ!!」

常人ならば圧殺されペシヤンコになっていただろう圧力だが流石にクリークの肉体にその力は及ばずダメージは皆無

「ちいっ…ここで海軍が関わってくるなんぞ予定外にも程があるぞ!」砂漠の大剣（デザート・グランデ・エスパード）!!」

ならば、とクロコダイルはクリークの放つ左右の拳を受けながら意にも介さず相手の足元から巨大な刃を発生させ胴体から真つ二つにせんと迫るも

「予定外って…」作戦つてのはあらゆるアクシデントを想定するべき”じゃないのか？随分とらしくない、計画の完遂直前で逸ったか？

…しっかしやはりロギアは面倒だな、全くもって昔を思い出す」

鋼鉄くらいなら軽く切り裂く砂の刃はそれを持ってしてクリークにはノーダメージ

「人の事言えるか！だいたいテメエどんな身体してやがる、おれはテメエが能力者だと言われても信じれるぞ！

だいたい物事のアクシデントつてのはなあ限度つてのがあんだよ!!想定出来ないアクシデントも大概にしゃがれ!!砂嵐・重（サーブルス・ペサード）”!!」

「っ、流石に本場の砂嵐だな！」

それと共に凄まじい勢いで砂嵐がクリークを弾き飛ばしそのまま更に追撃として

「火拳も黄金帝もテメエも邪魔なんだよお!!」砂海影喰（ラピメン ト）オツ!!」

それと共に四方八方から持ち上がる大量の砂、クリークを押し潰さんとばかりに押し寄せた砂はエースの時と同じく瞬く間にクリークを十重二十重に囲い込みやがてエースの時より一回り大きな砂の球体が出来上がった。

クリークをなんとか無事に閉じ込められた事に安堵するがクロコダ

イルはそこで少し思案し

「…いや、まだだな” 砂封墓標（レスティ・エテルノ）”!!」

念には念をと考え直すクロコダイルは腕を掲げそれと共に今度は周囲の砂がざわめき球体へと押し寄せるとしばらくして四角錐の形に寄り集まり、クロコダイルが両手を合わせてグツと力を込める事により一回り小さく密集

「クハハハハハ、空気すら入り込む事が出来ねえ超々高密度の封印だ…いくらテメエが馬鹿力でもどうにも出来ねえだろ？」

ソレはおれが意識を手放さない限りそのままだ、いつまでになるかわらんがそこで大人しくしておくこつたな…つても聞こえてねえだろうがよ。

さて…しかし海軍が出張ってくるたあ厄介な…今の今までこいつが網に引つ掛からなかったって事は表立って動いてねえ筈…となると赤カモメの部隊を引き連れてきては無いか…兎に角早いとこポーネグリフをニコ・ロビンに読ませてプルトンを手に入れる事が先決か”

完全に閉じ込めたと安堵したクロコダイルはポーネグリフを前に思案する。

クロコダイルのやった事は簡単だ。

基本的に戦う可能性のある人間は情報を詳細に集め分析して戦術を立てるようになっており、やがて強者とされる多くの人間はえてしてスロースターターや相手の攻撃を受けてノーダメージな姿を見せると言つた手合いが多い事に気づき、ならば相手が強者であれば本気を出される前に猛攻を持ってして先に仕留めてしまえばいいという理論にたどり着いたのだ。

故に強者：クリーク相手であれば様子見などせず初手から高威力の攻撃を繰り出している猛攻、殺気を持って相手に本気を出されないうあえて拘束という手段で仕留めにかかり、その思惑は上手く行った為にクロコダイルの計画における最大のイレギュラーは彼が作り出した”堅牢堅固絶対無敵七転八倒最強封印”によつて排除する事に成功したのだつた。

## 砂王顕現 ドンクリーク

少し思案しニコ・ロビンを呼び寄せようとした所で大きく鳴動する封印に気づき

「なっ!? いや…いくら奴でもこの封印を破れるたあ…」

と考え直すも鳴動はどんどんと大きくなりやがて巨大な音と共に封印が中程から大きく吹き飛んだ。

「我流土竜遁法・土竜魚（もくぎよ）ってな？」

空気すら入り込まない筈の超圧縮された砂を打ち破り現れたクリークはその腕は肥大化、両の爪はまるで獣のように長く鋭く変化していた。

「な、テメエなんだその腕は！というか土竜遁法だと！Mr. 4ペアとMr. 6のペアをやったのはテメエか!!」

「生命帰還・爪合わせ…っても知らねえか、特殊能力みてえなもんさ」「テメエ…やはり能力者、いやゾオンにしちや変化が少ねえ…海軍秘伝の技術つてとこか？」

破られると思っていなかった自身のもちうる最高硬度の封印を破ったクリークにクロコダイルは軽く舌打ちしつつどうするかを考える。

砂封墓標が破られた以上拘束は不可能だろう、となると仕留めるしかないと判断し

「…なら引導を渡してやるよ!」砂漠の宝刀（デザート・スパード）!!」  
それと共にクロコダイルが大きく腕を振り下ろせば再び砂漠に刻まれる断裂

「さて…悪いがちよつとばかり本気を出させてもらうぜ？」

だがその斬撃はクリークの黒く変色した腕に耳障りな音をたてて弾かれ、更にその拳がロギアである筈の自身に突き刺さる。

「グッ! 何故攻撃が当たる!? まさか海楼石か!!」

「残念…ロギア相手に海軍がいつまでも手をこまねいているとでも？」

「…また海軍秘伝の技術とでも言う気か!」砂漠の霰（デザート・グラン

「ディネ!!」

それと共に四方八方から砂の弾丸がまるでガトリングのように襲い掛かり、降り積もる砂はクリークを拘束、阻害せんと寄り集まるも「ハハハハハッ！俺を拘束したきや砂漠ごと動かしてみせな!!」

クリークは意にも介さず前進、今度はクロコダイルの顔をぶん殴る。

「ぐうっ…：恐らくその変色した腕が鍵という事か！だったら…：当たらなければ済む話だろうが!!」

そして今度はクリークの下から打ち上げるような拳がクロコダイルのボディに向かい

「なっ!?おいおいそんなアリか!？」

直前で動いた砂が胴体と拳の間に入り込み防がれた。

「…止める事が出来た、ならその変色した腕は能力者の実体を捉えると言った所か」

「…砂の盾と言った所か、混乱すら殆どせず防ぐとはこの土壇場にきて随分と面倒な」

「砂漠の枢・重（デザート・バーラ・ペサード）!!」

クリークの言葉にクロコダイルは答えず先程とは比べ物にならない量の砂がまるで滝のように襲い掛かる。

さしものクリークもこの量の砂に襲い掛かられては面倒だと感じたのか

「ふう…：」 連拳砲・千襲（つらねけんぽう・ちがさね）!!」

一発一発が大砲以上の威力を持つ拳が衝撃波と共に何発も打ち出され砂を弾き飛ばす。

「砂漠の大剣あつ（デザート・グランデ・エスパード）!!」

更に迎撃に集中しているのなら、とクリークの足元から不意を突いて生えた巨大な砂の刃は

「斬撃には斬撃ってな!纏い嵐脚（まといらんきやく）」

耳障りな音と共に砂の刃と風の刃が相殺、更に隙を突いて拳がクロコダイルに向かうもその拳は再び当たる直前に分厚い砂の盾によって止められる。

「ちっ！厄介な事覚えやがって!!」

「ロギアにも有効な攻撃があると教えてくれた事には礼を言わせて貰うぞー!」

そして再びぶつかろうとした所で

「見つけたぞクロコおっ!!ゴムゴムのピストルっ!!」

「ったく、ロギアを閉じ込めるたあ厄介な技持ってやがるな!火拳っ!!」

ルフィとエースの拳がクロコダイルに向かいその身体は砂となつて弾き飛ばす。

「っ!!火拳に麦わら…次から次にいつ!!」

「黄金爆っ（ゴオンボンバ）!!」

更にはクロコダイルの隙をついて地中から黄金の拳が襲いかかる。

「っ！テメエもかギルド・テゾーロおっ!!」

自身の足を吹き飛ばされながらクロコダイルは自分の下半身を砂嵐へと変じさせ空中に飛び上がる。

「ちっ、覇気を使つてりや仕留めれたか…」

「またハキとやらか…まあいい、全員吹っ飛びやがれ!!極砂嵐（サーブルス・グランデ）!!」

それと共にクロコダイルの両手に砂嵐が発生し二つが融合し巨大な砂嵐へと変化、それがクリーク達へと襲いかかる。

「精々そこで耐えてみせろ!!」

それと共にポーネグリフがトプンと砂漠に沈み込みクロコダイルはその場から離脱、ルフィはそれを見て

「なっ！逃げんのかクロコ!!」

「はっ！目的を達したんならもうテメエに用はねえよ麦わらあっ!!  
精々そこで古い王国の終焉でも見てやがれ!!」

そう叫ぶもクロコダイルは鼻で笑ってレインベースへと向かつていった。

「…砂嵐が邪魔だな、  
????????  
っ!!」

それを見ながらクックは声にならない声と共に常人とは比べものにならない肺活量を用いて大量の空気と共に砂嵐を弾き飛ばし

「クリークよお、手え抜いてやがったか？相手は覇気も覚えてねえ口ギアだろ？」

テゾーロが黄金の纏われた拳を指輪へと戻しつつ言う。

「いやあ、土壇場で厄介な技覚えやがってな…ちとゆつくりしすぎたのは事実かもしれないが…よおエース、弟とは無事に会えたらしいな」

「誰だお前ら！」

見たことの無い相手に咄嗟にファイティングポーズをとるルフィ

「よお麦わらのルフィ…噂はかねがね、会えて光栄だな東の海のルーキー？」

「心配いらねえよルフィ、こいつはおれの知り合いだ。」

と言うかクロコダイルの飛んでった方…あの嬢ちゃんが行った方角じゃねえか!!」

そしてそれを抑えつつ言うエースだったがその言葉に

「なっ…ビビが危ねえ!!」

とそれだけ言い残しルフィはクロコダイルの飛び去って行った方向へ走り出し

「おいエース、麦わらは何を焦ってんだ？」

「いや、それがよおルフィと一緒にいた水色の髪の嬢ちゃんが気になる事があるって言ってここに来るまでに別れてよお」

「なっ…なら早いところ向かわねえと不味いんじゃないのか？その水色の髪の嬢ちゃんってアラバスタの王女サマだろ？」

エースの言葉にテゾーロがそう言えば

「お守り渡してあるしなんとかなると思うがなあ…兎に角ビビちゃんのところ向かうか、はやい事しねえと王国軍と反乱軍がぶつかるとぞ！」

クリークはそう考えながらも全員でルフィの後を追うのだった。



## 砂漠の王と砂漠の姫

護衛である火拳のエースがあのだに閉じ込められていたという事はサー・クロコダイルはポーネグリフを手に入れる可能性がかなり高い。

そして彼が目的としている古代兵器の存在を示すポーネグリフを解読する為にはミス・オールサンデーの力が必要……となればサー・クロコダイルは彼女を呼び寄せるか呼びに行くかどちらかの手段をとる必要がある…

そう考えたビビはアルバーナとルフィ、エースが向かった戦闘音が聞こえていた地点の中間でナイフと銃を手には静かに佇んでいた。

勿論先行したエースとルフィがクロコダイルを止められたのなら上々であるが先行した彼らには悪いがエースは兎も角ルフィではこのフィールドで正面から勝つのは不可能だろう。

広がる砂漠は”砂漠の王”である彼のテリトリー、ポーネグリフを横から搔つ攫うくらい造作も無いだろう。

そして目的を達した以上後顧の憂いを断つより計画完遂へと動き自身が待っている地点をクロコダイル、若しくはミス・オールサンデーが通る確率はかなり高いと踏んで単身で待ち構えていた。

外れたなら外れたで良い、その場合先行したルフィとエースが粘っているという事でありそれこそ自身はアゴトギに伝言を頼んだペルと合流してからそちらに向かえば良い話だ。

そしてそう考えていたビビの目に映る一つの影。

下半身を砂嵐へと変じさせ急速にこちらに向かってくる姿は間違い無く彼自身だろう。

スルーされる可能性も考えたがその姿に向けてビビは大声で

「サー・クロコダイル! アラバスタ王国第一王位継承者、ネフェルタリ・ビビとして命じます! 止まりなさい!!」

そう言うところクロコダイルはポーネグリフを手に入れた事で余裕でも生まれたのかビビの前に降り立つ。

「クハハ、アラバスタの王女サマがこんな所で麦わら帽子のナイトも

連れず一人でどうした？」

「彼は別にわたしにとつてのナイトじゃないわ、それよりもサー・クロコダイル少し話をしない？」

「話だあ？今更何の…後は手に入れたポーネグリフを解読してプルトンを手に入れるだけ、てめえの国はもうお終いだよ」

「まあまあ、そんなに焦らなくてもプルトンとやらは逃げたりしないんじゃないの？わたしは答え合わせをしたいのよ」

「答え合わせだあ？一体何の話を…」

「サー・クロコダイル、貴方の最終目的は自身を王とした理想国家の建国、そしてそれを世界政府に認めさせる為の見せ札としてプルトン。

そしてプルトン、若しくはその場所が書かれたポーネグリフを手に入れる為とアラバスタ王国で自身の君臨に邪魔そうな人間を排除する為のダンスパウダー事件からの一連の騒乱って事でいいのかしら？」

「クハハハハ、その通りだ。おれが王となった暁にやあ旧王国側の人間は邪魔だしな…それに管理するんなら周りに踊らされる能無しの方が管理しやすい、頭が回る奴は邪魔だからな」

「アラバスタに来た当初からこの計画は考えていたのかしら？気候のあつた島を選んだからか古代兵器があるからかどちらの理由でここに来たか結局わからなかったのだけれど…」

「勿論おれにとつて有利な場所を選んだだけの話さ、プルトンについては嬉しい誤算って奴でな、ひよつとして王族なら知ってるかと思つたんだが…」

「残念ながらわたしはプルトンについてもポーネグリフについても聞かされてはいないわ、お父様なら何か知っていたかもしれないわね…まあ最も目的のものは手に入れたのでしょうか？」

「クハハハハ、わかつておれの前に出てきたのか？後は国王軍と反乱軍がぶつかりドサクサに紛れてうちの社員がコブラ王を仕留めりゃこつちの勝ちだ。」

国王軍は20万に対して反乱軍は半数とは言え40万…武器は心許ねえが数の暴力つてのは恐ろしいもんだぜ？そもそも一丁前に武

装してるがテメエみたいな甘ちゃんの小娘が自分の国の民を撃てるのか？」

「さあね、後の事は神のみぞ知るってところじゃないかしら…それよりも聞きたい事があったのよサー・クロコダイル」

「言ってみろ、今から死ぬ奴への手向けだ」

それと共に軽く前傾姿勢に構えるクロコダイル。

そしてビビは

「この国の王になりたかったのなら何故6年前のあの時、わたしとの婚約を断ったのかしら？あの話を受けて婿入りしていれば貴方は何の障害も無くこの国も、プルトンについての秘密も何もかも手に入れることが出来た筈よ？」

と、個人的にずつと納得いって無かった事を問いかける。

あえて困難に挑むのが好きなわけでも無し何故わざわざ面倒な手段を取ったのか…恐らく色々理由はあるのだろうがああも正面から断られるといくら自分でもムツとする。

「何かと思えば…テメエみたいなガキをおれに娶れと？馬鹿も休み休み言え…おれは頭のいい女が好きなんだ、美人なら尚の事いい。

要するにテメエみたいな小娘はお呼びじゃねえんだよ、引っ込んでろ」

「…へえ？ミス・オールサンデーを侍らせているのは貴方の趣味って事かしら？ポーネグリフ関係だと思っていたのだけれど？」

「まさか、奴の名はニコ・ロビン…10歳で3900万の懸賞金をかけられたオハラの子残りだ」

その言葉にビビはやはり、と集めた情報が間違ってた事にならずに安堵する。

「…まあ一旦置いておきましょう。ねえサー・クロコダイル…わたしには一つの計画があったのよ」

「計画だあ？反乱を止める計画ってか？」

「そんなまさか、反乱を止めるのに計画なんて必要無いわ」

「そりやどういいう…」

「サー・クロコダイル…貴方が余計な事を企まなければ…このまま国

盗りを諦めて砂漠の英雄として君臨する気は無い？

正直許容範囲を大きく超えてるけど”今ならまだ”許してあげしわたしの伝手を使って何とかしてあげる、今ならまだ…ね”

「クハハハハ…クハハハハッ!!笑わせてくれるな!”許してあげる”?

クハハハハ! テメエみたいな小娘に許される謂れなんざねえんだよ! 伝手を使って何とかしてあげる? テメエみたいなガキにどんな伝手があるってんだ!”

「…そう、残念だわ本当に残念だわサー・クロコダイル…いいえ”クロコダイル”」。

今から貴方はわたしの敵よ、王国騒乱の元凶として貴方を拘束させてもらおうわ”

そう言つてナイフと拳銃を構えるビビ

「クハハハハ…クハハハハッ!!身の程知らずもここまで来ると笑えるなあっ!!なら望み通りにここで死んでもらうぞ!!”

それに対しクロコダイルは大声で馬鹿にしたように笑いながら悠然と腕を組んで相手を見下すのだった。

## 砂漠の姫の最上計画

「そうらー！いつまで生き残れるか見ものだな！」

先手はクロコダイル、馬鹿にしたように軽く腕を振ればそれに合わせて砂で出来た礫が飛んでいく。

「様子見なんて有り難い事ね…」

とビビは眩きながらもきちんとして見えているらしく一歩軽く踏み込んで身を屈める事によつて回避するとそのまま拳銃を二発、当然相手はロギアであり何の痛痒も与える事が出来ず

「クハハハハ！無駄なんだよ!!おれはスナスナの実の能力者!!銃なんざ無意味なんだよ!!」

「それくらい知ってるわよ！ちよつとした小手調べよ！」

「ならこれはどうだ？砂漠の宝刀（デザート・スパード）!!」

「っ！やはりロギアって厄介ね!!」

そう言いながらも横つ飛びで回避そして懐から海軍でも使われている音響閃光手榴弾を投げ目を閉じ耳を塞ぐと同時に奥歯に仕込んだ丸薬を噛み潰し嚙下した。

「ぐっ！何を投げたあっ!!」

当然クロコダイルは何が来ても問題ないと思っていたのかその閃光と甲高い音により視力と平衡感覚を失い、更にそこに身体に”まるで縞のようなアザが浮かんだ”ビビは無言でとても非力な姫とは思えないような踏み込みでクロコダイルの懐に入り込み拳銃を手放すと代わりに視力の回復を終えていないクロコダイルの顔に対し、香水の瓶を右手にナイフの柄で瓶を打ち割る。

当然ナノハナ名産の香り豊かな香水は強い匂いと共にクロコダイルの顔面にぶちまけられ更にそこにナイフで目元を斬りつけられ「ぐうっ!? テメエ!!」

やっと閃光から回復しかけていた目に香水で砂を固められた事により物理的に傷をつけられ痛みに呻く。

更にビビによるクロコダイルの目を狙った攻撃は終わらずべろり、と口の中に溜めていた唾液で右手の人差し指と中指を舐めると

「ぐあああああつ!! テメエエエエつ!! おれの目をおつ!!」

クロコダイルの両の眼窩にたつぷりの唾液に塗れたその細くたおやかな指を突き込むとそのまま眼底に指をかけて引き倒し、更にナノハナで受け取ったクリークにお願いをしていたお守り：小さな単発式のダブルバレルハンドガンを引き抜くと左右の膝に向けて一発づつ。

そして素早く距離をとり荒い息をつきながらも油断なく拳銃を構える。

「クソツおれの目を：それに力が：砂にもならねえ！何をしやがったネフェルタリ・ビビいつ!!」

それに対してようやくビビは大きく息をつく。

「ふう：何とかなつて良かった：流石に舐めてたつもりは無いけれどここで仕留めれて良かったわ」

それと共に構えを解くと小さなハンドガンを装填、腰に指すとスタスタとクロコダイルに近づき近くに落ちたハンドガンを拾いあげ倒れたまま起き上がらないクロコダイルの両肘に発砲

「ぐうつ!?! テメエ何をしやがったあつ!!」

狙い通り常ならば軽く無効となる銃撃で痛みを受けた事で原因は目の前の小娘だと断定し激しく吠えるクロコダイル。

それに対してビビは目、両膝、両肘の痛みに苦しみながらも吠えるクロコダイルを見下ろしながら

「ねえクロコダイル、海楼石と言うものをどこ存知かしら?」

と言つてのける。

「ぐつ：まさかテメエ！おれに撃ちこんだのは!」

「ええ、お察しの通り能力者の実体を捉え、なおかつ触れている間は全身が脱力状態となるいわば海の鉱石：運良く手に入つて良かったわ」

「くそつ！海楼石如きでこんな小娘にいつ!! だいたい運良くだあ？海楼石の加工は容易じゃねえ!! そんなもん精々新世界でごく少数が海軍で用いられるくらいのもんだらうが!!」

「その通り：でもこんなもの新世界にたむろしている強者には当たる筈もないわ。」

でも自分の能力を過信し、油断する能力者には絶大な武器となり得る…伝手を使って少数だけ手に入れる事が出来たのよ、ギリギリになっちゃったけど間に合って良かったわ」

「っ…こんなもんさえなけりゃ…だいたいテメエ！今まで牙を隠してやがったな！何だあの身体能力は！」

「ああ、これの事？」

そう言っただけで身体に浮かんだ縞模様のアザを撫でて見せるビビ。

「王宮に豪水って呼ばれ伝わるものがあるのよ…別名命を削る水、飲んだ者の身体能力を爆発的に上昇させる物よ。」

まあわたしが飲んだものは改良品だけれどね、レインディナーズでは使わず終いだっただけけれど奥歯に仕込んでおいたの、これで疑問は解決したかしら？」

「っ…体さえ動けばテメエみたいな小娘なんざあ!!」

「…まあこの程度では心を折る事は難しいみたいね。」

ねえクロコダイル、わたしはね一つの計画があったのよ…”天竜人”ってものを知ってるかしら？」

「…あの身勝手なクス共がなんだってんだ」

「知ってるなら話は早いわね。13年前、天竜人達が住まうマリージョアにおいておきたマリージョア襲撃事件、それとその時期に発生した病疫で多くの天竜人が命を落とし、その数を激減させたわ。」

そして事態を重く見た世界政府は天竜人の血縁者を辿り増やそうとした…その一環で”始まりの20王家”である我がネフェルタリ家にも世界政府から使者が来たわ”そちらが望むのであれば天竜人にしてやってもいい”とね」

「テメエ…まさか…」

「お察しの通りよクロコダイル、勿論お父様は断ったわ。」

でもわたしは違う、国を守るには力が必要な…ただの武力ではダメ、ならばそれ相応の権力が必要よ。

わたしは個人的な伝手で現天竜人であるミョズガルド聖の後見を手に入れたわ、わたしが20になればわたしは天竜人としてマリージョアへ向かうのよ、そして今回貴方の野望を食い止め、アラバスタ

の内乱を終結させる事によりその功績を持つてしてアラバスタを直轄地にしようと思つていたのよ」

その話を聞いたクロコダイルは

「…今までののは全部芝居だったつてか？ テメエは反乱で国の人間が死んで行くのを見てただけだったのか!!」

「…一つ教えておくわクロコダイル、” 目標に犠牲はつきもの ” …何かを為すには相応の犠牲はやむを得ないものよ。

さて…残るエージェントはミス・オールサンデーと Mr. 2、Mr. 7ペアの情報ね、勿論喋つてくれるわよね？」

そう言つてビビは嫣然と笑つて見せると再び銃を、今度はクロコダイルの額に向けるのだった



## 騒動の幕引き

ルフィ、エース、テゾーロ、クリークが到着した時にはその勝負はカタがついた後だった。

倒れたまま動かぬクロコダイルとそこに銃を突きつけるビビというわかりやすい結果にルフィは目を見開く。

そんなルフィを他所に

「…いやはや、アラバスタ王国の姫が王下七武海の一角であるクロコダイルを倒す程の手練れとは知らなかったな」

拍手をしつつそう言いながら近づいていくテゾーロにビビは

「貴方が黄金帝ね？お噂はかねがね…この国には観光かしら？」

「ギルド・テゾーロだ、初めましてアラバスタの女王様？」

テゾーロが差し出した右手を握ろうと腕をあげようとして

「つゝゝゝ!!いったあつ!!」

その動作だけで全身に走る痛みにより奇妙な体勢で固まる。

「…どうしたんだ？」

これにはテゾーロも思わずギョツとして尋ねるも

「…少し切り札を使ったからこのザマよ、申し訳ないけれど握手は勘弁して欲しいわ。と、挨拶が遅れたわねネフェルタリ・ビビよ」

足をこちらに踏み出そうとした状態で腕を中途半端に上げた奇妙な状態でそう言うビビにテゾーロはちよつとヒキつつも

「切り札ね…あのクロコダイルを倒すくらいだから相応の代償があるもんなんだろうが…少し興味が」

と詳細を聞こうとした所で

「おいビビーお前クロコに勝ったのか!？」

とルフィがビビに近づくと両肩を掴んでユサユサと揺らす。

「いつ…たあつ?!ルフィさん!痛いから!今筋肉痛がやばいから動かさないで!!」

「お…おう、悪い…」

当然本来は飲めば必ず死ぬと言われるドーピングアイテムである豪水、改良したとは言え副作用は重く数分で効果が切れた後はまず全

身を無理に使った反動で筋肉痛が、しばらくすれば異常な程の倦怠感が襲い暫くは動けなくなる。

そしてこの全身の強力な筋肉痛が襲っている状態の時に身体を思いつき揺さぶられてはたまったものでは無いので慌てて言えば

ルフィはびっくりしつつも一步下り素直に謝る。

「クロコダイルは一応無効化したわ、後はMr. 2とMr. 7ペアだけれど…」

「お？他の奴らは？」

「Mr. 3とアンラツキーズはリトルガーデンから戻らず行方不明に、不明だったMr. 4ペアとMr. 6ペアは何者かにユバで襲撃されたそうよ。」

Mr. 5のペアも戻らなかったという事はきつとミス・ダブルフィンガーに処分されたという所かしら」

そんな折に鳴き出した電伝虫に

「お！みんなからか？」

「ええきつとナミさん達ね、もしもし？」

『あ、ビビ？郊外で砂山や砂嵐が出来たり凄い音がしてたんだけどそっちは決着が付いたのかしら？』

「こっちは一応決着がついたわ、そっちはどう？怪我は問題無い？」

『ええ、あたしもゾロもしっかり治療を受けたから大丈夫よ…まあ流石にオフィサーエージェントにこのアジトが見つかった時には血の気が引いたけれどね？』

「うーん、そんな簡単にわかるようにはなつて無いんだけどな…でも襲撃つて大丈夫だったの？」

『ええ大柄なオカマをサンジくんが、変な銃使いのペアをウソツプとチョップパーが片付けてくれたわ』

「となるとこれでバロックワークスはミス・オールサンデーを残すのみね、色々と助かったわナミさん」

『という事はそっちはルフィがクロコダイルをぶっ飛ばしたのね、…砂のロギアなんて相手に良く勝てたものね』

「えーと…まあうん、色々あったけどクロコダイルは撃破したわ。」

後は王国軍と反乱軍がこちらに向かっているからそれを何とかしたらそちらにルフィさんと一緒に合流するわ、積もる話もあるものね」  
『ええ、勿論報酬は忘れないでよね？なんだったら上乘せしてくれてもいいわよ？』

「ふふふつ、考えておくわ」

そう言つてビビは電伝虫を切ると同時にその場にドサリと倒れ込んだ。

「おい！ビビ!?どーしたんだよ!!」

当然周りは驚きルフィも慌てて起こそうとするも

「いったあ!?だからルフィさん揺らさないでつてば!!」

ちよつと切り札を使ったから全身筋肉痛な上にまったく動けないだけよ、暫くしたら動けるくらいには回復するからそのままにしておいてちょうだい?」

「お…おう、ビビがそう言うんなら…」

とうつ伏せの状態で顔も動かさずに喋るビビにルフィはビビって本当はクロコダイルぶつ飛ばせるくらい強かったんだなあ…などと埒外の事を考えていると上空から目の前に降ってくる一つの影。

「ビビ様!…まさか豪水の薬を使ったのですか!?無茶はあれほどおやめ下さいと!!」

「うおー!!お前何だ!鳥か!?人間か!」

そしてルフィは初めて見る鳥のゾオンに驚き、ペルは目敏くうつ伏せになって倒れているビビを見つけるや否や凄じい剣幕で言うも

「…その声はペルね、無茶のしどころつてのはあるものよ、必要なら使えるものは何でも使うわ」

ビビはうつ伏せの状態ながら聞き覚えのある声にそう返す。

「貴女はいつもそうです！王宮の火薬庫で手投げ爆弾を作ろうとした時もそうでしたが何の為に我々がいるのですか!!」

「ペル、それは国の為…確かに貴方達を信頼はしているわ。

でも王族たるもの自身が先頭に立ってこそそのものじゃないかしら?」

「ビビ様…」

「なあ、ビビも鳥のおっさんもなんか真面目な話してんのはわかるけどその状態だと威厳もなんもねえと思うんだけどなあ……」

そして真面目な話をしていた主従はルフィのあんまりと言えぱあんまりな言葉に

「仕方ないじゃ無い！言つとくけどこうなりたくてこの状態じゃないんだからね!?!あいたたた……大声出したら身体に響く……」

「ビビ様!?!おい君！君が何者かは知らないがあまりビビ様に無茶をさせるな！」

凄い剣幕で言えばルフィはそれに対して

「ええ……おれのせいかな？まあいいや、さっさとみんなのそこ戻ろーぜ？」

と答えつつ立ち上がり迫ってくる砂埃を見つけて首を傾げたのだった。

## 衝突する反乱軍と王国軍

「お、おい！クロコダイルさんが倒れてるぞ!!」

「おい、ペル様だぞ！という事はまさか王国軍が…」

「おのれ国王軍！よくもおれ達の英雄を!!」

「あつちに倒れてるのは…ひよつとして顔は見えないがまさか姫様じゃ!？」

「おい！誰か後続の国王様と指揮官のチャカ様に伝令を!!」

ルフィが目にした砂埃…前方と左側から迫るそれは瞬く間に距離を詰めあつという間に目の前に到着した。

片や揃ってスケイルタイプの鎧を装備し手には刃が扇状に広がった槍を持つ一団…王国軍、そして片や半数近くの間人が鎧も無くまともな武器も持たず武器を持つてるのは王国軍を裏切り反乱軍に与した者や一部銃や剣を持った者達…反乱軍

反乱軍は援護目標であるクロコダイルが目の前で倒れている事に激昂し銃を構え、王国軍もそれを見て武器を構えて一触即発の体制に。

当然テゾーロやクリーク、エースはこの状況でこの衝突を止める術は無くビビはペルの手を借りて何とか立ち上がろうと、そしてルフィは

「お、おいお前ら…クロコはビビがぶっ飛ばしたからもう終わったつて！悪いのはクロコだったんだよ！」

ビビが止めようとした内乱がまさに起ころうとしていた故に自身も止めようとしたが

「なにもんだアンター…ビビ様がクロコダイルさんをぶっ飛ばしただと！嘘つくんじゃないじゃねえ！ビビ様が英雄であるクロコダイルさんにそんな事する訳ないだろ!!」

「大方横にいるペル様がやったんだ！あの人は王国軍最強の戦士なんだしあの人以外あり得ねえ！みんな！クロコダイルさんを…おれ達の英雄をおれ達の手で助けるんだ!!」

「くっ！チャカ様と国王様はまだ来られないのか！」

「現在単騎で向かっております！しかしこの状況では応戦もやむなしかと！」

その時であった。

ぶわりと王国軍と反乱軍が睨み合う眼前で風が逆巻き、砂を巻き上げて突如として発生する視界の通らぬ砂塵旋風。

それを見てそれぞれ銃を構えるのは王国軍、反乱軍共に入り込んだ身体はどこかしらに”翼とレイピアを持つドクロ”の意匠が施された者達。

彼等は情報を流したり工作をする傍らでいざという時には実行部隊となる者達で受けている指令の一つ”王国軍と反乱軍の戦端を開け”、その言葉通り見えないのをいい事に砂塵旋風に向けて両軍から発砲

「なっ！反乱軍の奴ら撃つてきやがった！」

「くっ！なんだこの砂嵐！があっ！？ちくしょう！撃たれた！！王国軍の奴ら撃つてきやがった！！」

当然銃撃を受けた者は”反乱軍、若しくは国王軍が攻撃を加えてきた”と思いい反撃をするべく各々武器を構える。

当然そんな都合よく砂塵旋風が発生する訳も無くビビヤルフィ達はクロコダイルが倒れていた方を見やれば

「クハハ…ざまあ見やがれ…王国軍と反乱軍はぶつかる、反乱は止められねえんだよ、二十万と四十万ちと反乱軍が多いがこれで共倒れだ…その後ゆつくりテメエらを始末してやる…」

いつもはキツチリ整えているヘアスタイルは崩れ荒く息をつきながらもビビ達を睨みつけながら言うクロコダイルに

「なっ！海楼石の弾丸を食らっただけで動けるなんて!？」

「舐めてんじやねえぞ小娘…海楼石の弾丸なんて代物をどっから持ち出して来たか知らねえがなあ、切っちゃまえば関係ねえんだよ!!」

それと共にクロコダイルは鉤爪からナイフへと変わっていた左手を振り上げ立ちあがろうとしていたビビに迫り

「まさか！貴方一度自分で両脚を切り落としたの!？確かに道理にはかかってるけど海楼石が入ってた以上痛みは普通の人間と変わらな

「い筈よ!!」

「つービビ様っお下がりに下さい!!」

ペルは剣を引き抜き驚愕するビビを何とか庇う。

「…ネフェルタリ・ビビ、ああ認めてやろう…擬態し慎重によく動いたもんさ。」

「だがな、あまりおれを甘く見てんじやねえぞ! 砂漠の樞”デザート・バーラ”!!」

クロコダイルもさるもので攻撃をしつつペルの動きを封じようとしてくる。

だがそこに

「黄金爆(ゴオン・ボンバ)!!」

「拳砲っ!」

「火拳っ!!」

「ゴムゴムのピストルっ!!」

テゾーロ、クリーク、エース、ルフィの四人の攻撃が叩き込まれた。

「…ちっ、まだテメエらがいやがったか。」

だが遅えんだよ! もう全てが手遅れ、反乱軍と王国軍はぶつかつた! 四十万対二十万、止めれるものなら止めてみな! ネフェルタリ・ビビっ!!」

当然自身の知らない、ロギアにダメージを与える可能性のある相手と死闘をする気はさらさら無いのでそのまま下半身を砂嵐に変化させると上空に飛び立つ。

「おいビビ! どーすんだよ! 反乱始まつちやつたぞ!!」

「…仕方ないわね、アルバーナまでとつときたかったけどそんな訳にはいかないとわよね…」

反乱軍に与した王国軍に告げる!! 再び我が旗に集いなさい! 既に反乱軍である必要は無くなったわ!!」

小鹿のようにプルプルする足で何とか立ち上がり大声で言うビビに反乱軍や国王軍は戦いながらも首を傾げ、バロックワークスのスパイ達もこれ幸いと銃口をビビに向ける。

「敵は”レイピアと翼の意匠を持つドクロ”!!、王国軍にも反乱軍にも

たっぷりと入り込んでゐるわ!!」

「へっ！何をごちゃごちゃと…新たなる国家の為だ悪く思うなよ!!」

そう言いながら反乱軍に紛れたバロックワークスの男が発砲しようとしたところで

「あの方に銃を向けたのなら貴様は敵だな？」

突如として後ろからの攻撃に倒れ、それを見た反乱軍の男は

「なっ!?!ヒョータさん!?!何でいきなり仲間を!?!」

大剣を持った大柄な無精髭の男に驚いたように言う。

「…王国武装親衛隊!!現在を持って”潜入任務”を終了する!!これより我らは姫殿下の旗へと戻ろうぞ!!」

大柄な男は気にもせずと言うと剣を掲げる。

それと左手に長剣を持った長身痩躯の男、長い前髪で両目が隠れた両手に長斧を持った男、両手に斧を持った肥満の男が合流、そしてその後ろには反乱軍に合流した筈の王国兵士が続々と続く。

「なっ！ツメゲリ部隊!?!アンタら裏切ったのか!?!」

「我ら王国武装親衛隊は王族の為にある!!好き好んで国を裏切ると本当に思ってたか!!」

反乱軍四十万対王国軍二十万、その戦場は戦端が開かれると共に急速にその様相を変えようとしていた。



## 激突する両軍

ツメゲリ部隊：アラバスタ王国軍の中でも手練れのエリート達が集い主に王族の近衛を担当する武装親衛隊の中でもエリート達が揃う小隊である。

高い戦力と忠誠心を持つ故に彼等が王国を裏切つて反乱軍についたとした時は上へ下への大騒ぎとなった。

王国側は何かの間違いじゃ無いか、義は反乱軍側にあるのか？、この国はもう終わりなのか？などと、反乱軍側は勢いづき最強の部隊と名高いツメゲリ部隊が合流してくれるのならとても心強い、やはりツメゲリ部隊とは言え今の王国に忠誠は誓えないのだろうかとうと盛り上がった。

ツメゲリ部隊を筆頭に王国武装親衛隊10万、それと共に王国軍30万が反乱軍側に合流した事により反乱軍は士気旺盛となっていた。

しかしそれは全て王族であるネフェルタリ・ビビの指示でありツメゲリ部隊を含む武装親衛隊10万に命じられたのは

”反乱軍に合流して情報を集める事、ここ一番の時に再びこちらに戻る事で反乱軍の士気を挫く事”であった。

故にツメゲリ部隊含む武装親衛隊はレインベースに王国軍が向かう事を知り王城に詳しいとして、アルバーナ攻略軍に組み込まれる所を断りレインベース攻略軍に参戦。

元々の反乱軍10万、元・王国軍20万、武装親衛隊10万の構成でレインベース郊外にて始まった内乱であったが早々に後詰として控えていた武装親衛隊が反乱軍に後ろから突撃した事により反乱軍は分断、更に王国軍と合流した武装親衛隊はツメゲリ部隊の指示によりあつという間に反乱軍を包囲、数の上には30万と30万と互角であったがここに来てろくな武器も持っておらず、戦闘の経験も殆ど無かった反乱軍が足を引つ張った。

まごつくばかりの反乱軍の指揮官でアルバーナに向かったコーザの代わりに指揮をするケビは想定外の事態に何とか立て直そうとするも武装親衛隊が反乱軍に合流したのなら、と反乱軍に与した王国軍

の多くがどちらにつくべきか躊躇、王国軍相手なら反乱軍をぶつけるより同じ王国軍が多い方が戦力的にいいだろうという判断が裏目に出た。

「反乱軍！それに反乱軍に与した王国軍よ!!わたしはアラバスタ王国王女”ネフェルタリ・ビビ!!貴方達は完全に包囲されています!!」

貴方達が不満を持った理由も、武器をとった理由も良く分かっています!!

でもそれはただ一人の男が仕組んだ事！王下七武海にして砂漠の英雄サー・クロコダイル！彼がこの国を手に入れる為に全て裏から操っていたのです!!」

あつという間に包囲網を完成させ、士気を挫いた上でのビビの言葉に反乱軍達は手を止める。

それから語られるクロコダイルの裏の顔に反乱軍は呆然とし手に持った槍やクワを取り落とすも

「まさか！クロコダイルさんがそんな事するわけないだろう！」

「そうだそうだ！おれ達の英雄だぞ!!海賊からおれ達を救ってくれたのはクロコダイルさんじゃないか！」

「その通りだ！王国軍は何も動いてない！実際に海賊を討伐したのはサー・クロコダイルだ！そんな人が実は裏切っていたなんてそんな事あるわけ無いだろう!!」

「…貴方達がそう思うのも無理はありません、しかし全ては事実…今もクロコダイルの手の者がわたしだけでも殺そうとしています…こんな風にいつ?!いたたたた…」

「ぐっ!!」

それと共に腕を振るビビの袖から飛び出す涙滴型のナイフ刃が真っ直ぐに今まさに銃を撃とうとしていた男の手に刺さり

「レイピアと翼を持つドクロ、クロコダイルが昔使っていた旗印…今銃を撃とうとしていた彼の腕にも同じものがあるけどこれは偶然かしらっ…」

その言葉に反論を言っていた反乱軍の者達は

「っ…どうなんですかクロコダイルさん！本当に貴方がおれ達を裏

切ってたんですか!？」

一縷の望みを持って上空にいたクロコダイルに呼びかけるも

「ちっ…小娘一人も満足に殺せねえのか!使えねえ雑魚共だ!!」

その言葉に手に持った武器を取り落とす男を横目にビビは再び海楼石の弾丸が込められた銃を取り出すと

「…わかったでしょう?クロコダイル!貴方の計画はここまでよ!大人しく捕縛されるのならわたしの名において命は保証します!投降しなさい!」

クロコダイルに突きつける。

「クハハ…クハハハハ!やれるもんならやってみろネフェルタリ・ビビっ!」

「そう…残念だわ、ひよつとしたら手を取り合える未来もあると思っ  
ていたんだけどね」

そしてクロコダイルに真っ直ぐに飛ぶ弾丸、クロコダイルはそれを見て顔色一つ変える事もなく右手を持ち上げると

「海楼石の弾丸?確かに能力者には有効だろうさ…だがわかってりや  
そんなものは無意味なんだよおっ!!」

砂漠から砂の壁が持ち上がると弾丸を防ぐ壁となって持ち上がり、  
分厚い砂の盾とも呼ぶべきもので海楼石の弾丸は途中で止められ  
た。

「なっ?!海楼石は能力者の能力を無効化する筈じゃ!？」

「…」つ正しておいてやろう、海楼石は能力者の実体を捉える。

確かに事実だがおれみたいにエネルギーでは無く物質であるロギ  
アはなあ…こういう風に自身の能力を操る事ができるんだよ!!」

それと共に鳴動する地面、ビビヤルファイ達、反乱軍や包囲していた  
王国軍は何事かと周囲を見渡せば

「なっ?!砂の波…いや砂の津波が!？」

「なんてデタラメっ?!クロコダイル!貴方全て無かった事にでもする  
つもり!？」

「クハハハハ!その通りだよネフェルタリビビっ!!絶望を知れ!ここ  
にいる人間を全て殺せばおれの勝ちだっ!」絶砂海嘯(ティスペラ・

ツイオーネ)!!」

「なんて事…ロギアがここまで出鱈目な能力だなんて…」

レインベースの全てを取り囲む分厚い砂の津波とも呼ぶべき壁、迫るそれをよそに

「クハハハハっ！おれを止めたきや砂漠を全部動かしてみろだあ!?!上等だ！レインベースもろともお前らを砂の海に沈めてやろうじやねえかつ!!」

クロコダイルは高笑いをしつつ右往左往する者達を見下すのだった。

## 砂漠の王の終演

途端に騒めく王国軍と反乱軍。

無理も無い、クロコダイルは目撃者を町ごと一切合切砂に吞ませて消してしまおうという腹なのだ。

騒然とする周囲を他所に真つ先にルファイが

「ゴムゴムのおっ…キャノンっ!!」

と鋼鉄の分厚い盾を打ち破る威力の拳を滞空するクロコダイルに叩きつけるも

「クハハハハッ！麦わらあつ、テメエじゃ力不足なんだよ!!その程度の拳がこのおれに効くわけねえだろうが!!砂漠の宝刀（デザート・スパード）!!」

「うおおっ!?!」

と、お返しとばかりに飛んできた斬撃を飛び退って避けるルファイ。勿論エースやテゾーロ、クリークも人を逃すよりクロコダイルを叩き潰した方が早いか、と直ぐに加勢をしようとするが

「エースとおっさん達は手を出すな！これはおれの喧嘩だ!!」

と加勢を拒否する。

「おいルファイ！んな事言ってる場合じゃー!」

「ふっ、海賊ならあれくらい我が強くていいだろうさ、特にあの麦わら小僧はクロコダイルをぶっ飛ばすというのがこの国に来た目的だろうしな」

「なあに、麦わらのルファイが敗れそうになったら手を出させてもらうさ…最も五分以内に決めてもらおうがな」

「五分って何が…ああ確かにアレに吞まれりやおれ達ならまだしも王国軍と反乱軍は無事じゃねえな。」

おーいルファイ!!五分以内に片あつけろよー!それ過ぎたらこっちのおっさん達が動くからなあー!!」

クリークの言葉にエースは砂の津波を見て納得しルファイに呼び掛ければ

「おう!!五分と言わずもつと早くぶっ飛ばしてやる!!ゴムゴムのガト

リング!!それからオノっ!!」

エースの言葉に頷きつつ両拳でのラッシュからのかつてワポルを叩き潰した踵落としに似たストンピングがクロコダイルを襲う。

だがそんな攻撃など無意味とばかりに避けようとすらせず

「無駄だったのがわからねえのか!!砂漠の枢(デザート・バーラ)!!」  
豊富にある砂漠の砂を操りルフィを砂に飲み込ませようと巻き付かせるも

「その技はエースから聞いたぞっ!!ゴムゴムのおっ…風船!!」

息を大きく吸って巨大化したルフィに弾き飛ばされた。

「なっ!?そんな馬鹿みてえな技で!テメエのような口だけのルーキーがおれに勝てるわけねえだろう!!」

「あたんねえならこうだ!ゴムゴムのバズーカっ!!からのバクバクっ!!」

ロギア相手に攻撃が当たらない、ならば閉じ込めてしまえばいいとばかりにルフィは攻撃を地面に当てた反動で空を飛び大口を開けるとクロコダイルの身体を半分以上食いちぎり閉じ込めようとするも「…ふざけてやがんのかテメエはっ!!どこまでおれをおちよくるつもりだ!!」

もういい麦わら…:テメエはここで死ぬ”砂漠の金剛宝刀(デザート・ラスパーダ)!!」

瞬く間に口元を押さえるルフィの手を無視し必殺の意思を持ち迫る超圧縮したいくつの砂の刃。

「まだだあっ!!ゴムゴムのおっ…回転弾(ライフル)!!」

「いくらやろうが無駄なんだよっ!麦わらあああっ!!」

自身に迫る砂の刃を見据え大きく後ろに伸ばした腕に大きく捻りを加えてクロコダイルに当てようとすることも当然いくら威力が高かろうとロギア相手には無意味、流石にこのままだと死ぬ可能性もある以上見てられないとクリークが腕を黒く変化させ助太刀に入ろうとした所でクロコダイルの肩から人間の両手が生えると何処からか飛んできた小瓶を受け取りクロコダイルに叩きつけた。

「なっ!水だど!?何処から!!」

「クロコダイルううっ!!」

不意打ちを受けながらも咄嗟に砂の盾を持ち上げるもルフィの回転を加えた拳は砂の盾を撃ち破り水を被ったクロコダイルに真っ直ぐ向かい

「がっ…この程度の…ルーキーにおれが…」

水に濡れてしまった故に砂に変化出来なかったクロコダイルの顔を真っ直ぐに撃ち抜くとそのままクロコダイルはその場に倒れ伏したのだった。

「うしー終わり!!」

周囲は無言、そしてややあつて周囲から歓声上がる。

迫っていた砂の津波は術者であるクロコダイルが倒れたからであろう、途中で止まりレインベースを円状に囲む砂丘となり、そしてビビは真っ直ぐにルフィの元へ向かうと

「…ありがとうルフィさん、まさかクロコダイルがあそこまでやるとは思わなかったわ。

貴方がいなければわたし達は町ごと砂に吞まれて道半ばで潰えていたかも知れないわ。

…アラバスタ王国の者として貴方に敬意と感謝を」

「しししっ！気にすんなよビビ、おれ達仲間だろ！」

深々と頭を下げるもルフィは笑いながら仲間なんだから当然だと返す。

そのルフィの言葉にビビは目をしばしばさせつつややあつて

「仲間…ね、わたしはあなたの仲間でいいの？言つとくけど結構色々隠してたり貴方を利用してたのよ？」

「何言つてんだよ、なんか隠してた事くらいわかってたつて！何か言いたく無い事があつたんだろ？人間誰しも隠したい事はあるもんな！」

自分は本当はそんな仲間と認められるような人間では無いと言外に諭すもそんなのは関係無いとばかりに言うルフィ。

「やったじゃねえかルフィ！まさか七武海の一人を倒しちゃうなんてな!!」

「いやはや、三千万クラスのルーキーにしちや上出来だ…あの砂漠の王に砂漠で勝つ何てな…」

「麦わらの少年よ…礼を言わせてくれ。ビビ様を我らを助けてくれて感謝する」

そして集まってくる火拳のエースや黄金帝テゾーロ、ペルに加えて自身の父親であるネフェルタリ・コブラやチャカを見て

「…ルフィさん、貴方に人が集まる理由が少しわかる気がするわ」

そう言いながらビビはクスリと年相応に軽く可愛らしい笑みを見せるのだった。



## 砂国騒乱の終結

「そういうえばあのクロコダイルに生えた腕は一体……」

ルフィが皆に囲まれて騒がれるのを他所に、ビビはクロコダイルに攻撃を当てる直前に見た不可解な現象を考えていると

「おめでとうミス・ウエンズデー？これで最大の脅威は片付いたという事かしら？」

突如後ろから聞こえる女性の声。

「誰!!」

すぐさまナイフを手に後ろを振り返るもそこには誰の姿もなく

「あら、そうも警戒されると傷ついてしまうわね。折角助けてあげたのに……しかも2回も」

「2回……?という事は顔を合わせた事があるのかしら？」

再び後ろから聞こえる声にそつと後ろに視線をやるもやはり誰の姿もない。

不可解な存在にビビは警戒を解かないままに姿の無い声にそう聞けば

「そうねレインディナーズで一回、さつきで一回……かなりいい仕事をしたと思うのだけれど？」

その答えにビビはレインディナーズの秘密施設にて自身を戒めから解放した容姿不詳の怪しい女を思い出す。

「……謎の女怪盗クリストファーだったかしら？手助けには感謝するわ。」

でも姿を見せないのはどういうつもり？レインディナーズでも顔を隠していたけれどよっぽど見られたら困る人間なの？」

「まあ少なくとも今ここで姿を見せるわけにはいかない事情があるのよ」

「……レインディナーズでもそうだったけど貴女の狙いは何かしら？サー・クロコダイルとは敵対関係だったの？」

「まだ秘密、それより一つだけ伝えておきたい事があるの」「伝えたい事？」

「Mr. 8なら生きてるわよ、今頃ナノハナに到着したくらいじゃないかしら?」

「…まさかあなた! ひよつとしてミス・オールサもがつ!」

その言葉にて察したのだろう、ビビは予想外とばかりにその名前を呼ぼうとするも突如として自身の体から生えた腕によつてビビは口を塞がれ

「ふふつ、さてどうかしら? 因みに今この場でわたしの名前は出さないでね?」

声はそう言つて消えると同時に口を塞いだ腕もビビの後頭部についていた口もふわりと花びらになつて消えたのだった。

そしてビビは声が消えた後少し思案し色々と納得いかないながらもまずはこの状況を片付けるべく

「王国軍! それから反乱軍の者も騒ぎはお終い!! チャカ、反乱軍と王国軍の半数は速やかにアルバーナへ戻り今回の真実を今頃城を占拠した反乱軍に伝えなさい! お父様を頼んだわよ!」

ペルはレインベースにいる海軍を呼んで来て頂戴、流石に世界政府が任命した王下七武海を倒した以上この国だけで収めるわけにもいかないし巻き込むなら勢力は多い方がいいでしょう。

ツメゲリ部隊! 残る半数を率いてわたしと共にレインベースへ! サー・クロコダイルが裏で動いていたという証拠を集めるわよ!!

ルフィさん、わたしはとりあえずレインベースの皆と合流しようと思うのだけれどルフィさんはどうする? 折角お兄さんと会つたんなら色々と積もる話もあるんじゃない?」

ビビは王国軍、反乱軍に素早く指示を出しルフィにも声をかけた。「おつ! そうだった、エース! おれにも仲間が出来たんだ! みんなを紹介するから来いよ!」

「へえ、そーいや海賊狩りのロロノア・ゾロが仲間になつたんだっか? 手配書で見たぜ?」

「おう! 他にもナミとかサンジとかウソップとか! チョップ! って奴なんかトナカイなのに船医なんだぜ!」

「トナカイって…動物系のゾオンか?」

「しししっ！みりゃわかるって！」

そんな自分の弟の仲間に興味を示すエースを見てテゾーロは「そうだな…とりあえずおれの護衛は必要ねえよ、久々に弟とあったんなら積もる話もあるだろうし後で合流するか。」

まあなんだ、おれも少しは関わった身だしコブラ王の手助けでもしてやるさ、クロコダイルを護送する以上戦力があるに越した事は無えだろう」

「感謝するわギルド・テゾーロ、貴方には民間協力者として便宜を凶らせてもらうわ。」

それと”誰だか知らないけれど”そちらの人は貴方の仲間かしら？」

意図的に自身の知る者では無いと強調するビビにクリークは少し思案し

「ああ、初めましてアラバスタの姫さま。俺はテゾーロの友人でな、俺の事は気にしなくていい」

「あらそう？ならば今は気にしないわ」、アルバーナに戻るまでは色々忙しいものね」

言外にアルバーナに戻ったら話を聞かせろ、というビビの言葉にクリークは遅しく育ったなあ…と苦笑しつつ軽く頷き、こうして砂漠の王国で蠢いていた策謀は終結したのであった。

一方スモーカー達はクロコダイル捕縛を王国軍の副官だと言う男から聞きつけ全ての手勢を連れて合流地点へ

そこには行方不明になっていた筈のアラバスタ王国の姫とその父親であるコブラ王、そして黄金帝ギルド・テゾーロとその傍らにはフードを目深にかぶった男。

「初めましてかしら？会えて光栄だわ、噂に名高い白猫のスモーカーにね？」

そして世界政府と海軍でしか使われて無い筈の海楼石の手錠をはめられた状態で倒れ伏すクロコダイルと

「うげーケムリン!?なんでこんなところ!!」

自身が専任となってまで追い求めていた麦わら帽子をかぶった少

年がそこにいたのだった。

## 砂漠の姫と白猫の海兵

「…行方不明だったアラバスタの姫さんが見つかったのはいいが、なんで麦わらと一緒にいやがる？ 狙いはなんだ麦わらあつ！」

それと共に大十手をルフィにつきつけるスモーカー

「お、なんだやんのか！ 今度は負けねえぞ!!」

ルフィもそれを見て両手を構えるが

「ルフィさん、今はそんな場合じゃ無いんじゃないの？ スモーカー大佐もそこまでにしていただけじゃないかしら？」

確かに貴方は海軍で、しかも専任追討の任にあるのは理解しているわ。でも今はそれより優先すべき事があるのでは？」

ビビは血気盛んな二人を見てため息をつく。まあ、海賊と海軍である以上仕方ないかもしれないが話が進まないの二人を嗜めると

「…王下七武海であるクロコダイルが世界政府に従順な裏側でアラバスタ王国転覆を企てていた。確かに海賊はどこまでいっても海賊…何を企んでも不思議じゃあねえが…それでも目の前の海賊を逃してもいい理由にやなんねえんじゃないのか？」

スモーカーは自身が海兵である以上は、と納得しない様子。

「あら、海軍が上手く動いていればどこまで大事にならなかつたのだから？」

「…基本的に海軍は国の政治には干渉出来ない。内政不干渉だから、例えクロコダイルが何を企んでも手は出せねえんだよ」

ちくりとしたビビのイヤミにスモーカーは苦虫を噛み潰したような顔をする。

基本的には世界政府加盟国の政治に海軍は口出しできない。何故ならそれは世界政府が選んだ王の政治が間違っていると自ら言うようなものである。

海軍も世界政府の下部組織である以上、世界政府の意向に真っ向から逆らうわけにもいかず圧政に苦しむ民を見ているしかなかった。

とは言え一方では流石に王権打倒とはいかないもの”身勝手な正義”を掲げ裏からココソコと動いて決して世界政府にバレないよ

うに動いている者や、”力無き者の味方”とも名高い髑髏仮面の  
テイーチなどの尽力により昔よりはだいぶマシになっている。

「へえ？モンキー・D・ルフィ含む麦わらの一味は国難の危機を救った  
英雄だから国賓として迎えているのだけれど？」

内政不干渉を口に出したスモーカーにビビは嫣然とした笑みで海  
軍が内政干渉するのかしら？と言えは

「っ…屁理屈だな。その気になりや全員しよっぴく事も出来るんだが  
？」

分が悪いと察したのか少し強引でも仕方ないと思いつつ腕に力を  
込めるスモーカーだったが

「それをわたしの前で？天竜人候補であるわたしに言うのかしら？」

ビビの”天竜人候補”という言葉に驚愕を露わにする。

「なっ!?世界政府のその計画はまだ動いてやがったのか！天竜人が  
減ったなら何の不都合がある！」

「さあ？世界政府の思惑なんて知らないわ。わたしはわたしの為に世  
界政府からの話に乗っただけ…貴方がこれ以上ルフィさんを捕らえ  
るといふのなら、わたしにも考えがあるのだけれど…例えば後見人  
であるミョズガルズ聖に話を通す事もできるのだけれど？」

怒気を露わに言うスモーカーにどこ吹く風の涼しい顔で答えるビ  
ビ。

「脅しでもいうつもりか？」

「まさか、海兵として職務に忠実なのはいい事だと思うけれど…でも  
大局を見極めるのも上に行くのなら必須じゃないかしら？」

「…何が言いたい」

「国を乗っ取ろうとしていた賊を討伐した、民達にとっての新たな英  
雄をここで捕らえたとして、このわたし達王族を含めて国の民はどう  
思うかしら？」

「っ…いいだろう今この場は見逃してやる。で、おれ達に何をしろと  
？クロコダイルを捕縛したとしか聞いてねえが？上に報告しろとで  
も？」

流石にこの状況で麦わらのルフィを捕らえればアラバスタ王国に

おける海軍への不信感が一気に増すとスモーカーは考え仕方なくビビの話聞く。

「世界政府にはこちらから報告させてもらうわ。勿論海軍にも政府から話がいくでしょうけれど、わたし達だけで片付けては海軍のメンツを潰す形になってしまうもの」

「…なんとも有り難くて涙が出るな」

「クロコダイルの身柄を今からアルバーナへと連行します。あなた方海軍には護送に協力してもらおうわ。」

それから彼の率いていた犯罪秘密結社”バロック・ワークス”の所有していた人工降雨船も拿捕しているからそちらも宜しくね？ダンSPAウダーを積んでいるのだから慎重にね？」

「…随分と手回しがいい事だな、いいだろう。世界政府直下海軍本部の名の下にクロコダイルの”敵船拿捕許可状”及び政府における一切の称号と権利を剥奪する…これでいいのか？」

ビビの言葉にスモーカーはため息をつきつつ自身の所属する海軍本部の名の下に宣言。

「ええ、これで彼は何の権力もないただの海賊になったわ…それこそ煮ようが焼こうがこちらの自由…」

この宣言により今この場でクロコダイルは数多の特権を廃されただの海賊に、ビビはそれを考え少し口角を上げるも

「クロコダイルをどうするつもりだ、アラバスタの姫さんよ」

「予定であれば戦力としたかった所だけど…認めてあげるわ。今回は心を折る事の出来なかったわたしの負け…身柄は海軍に預かってもらいます」

スモーカーの言葉にかぶりを振って考え直すと残念そうに言うビビ。

「…いいだろう、サガはヒナに連絡をとれ。確かこの辺りの海域を管轄だった筈だ。」

たしぎ、てめえは剣客隊を率いて人工降雨船とやらに向かえ。残りはおれと共にクロコダイルを王都まで一度護送する」

そしてスモーカーは引き連れてきた部下達に素早く指示を出して

ルフィを睨みつけながらクロコダイルの元に向かうのだった。



## 砂漠の姫と砂漠の王

海軍陣営に協力を取り付けビビとルフイ、王国軍は一旦レインベースに戻り、レインディナーズに強権を持つて踏み込むと強制捜査についてクロコダイルの財産を接收。勿論ダンスパウダーの材料となる銀の取引記録や、おそらくプルトンについて調べていたのだろう古代兵器についての資料も嚴重に金庫に保管されていたが麦わら一味のナミの協力をとりつけ無事に手に入れた。

その後一行はアルバーナの王国宮殿へ、睨み合う王国軍と反乱軍の只中にビビはコブラ王と共に赴き今回の真実を告げる。

あらかじめ聞かされていたコーザはともかく、他の反乱軍のメンバーは踊らされたとは言え取り返しのかない事をしてしまった、と悔やむものも多くいたがコブラ王の言葉により前に進む事を決意する反乱軍。

ビビはそれを見て「流石にこっち系統の手腕は自分より優れている」と感心しつつも王宮の関係者に指示を出しクロコダイルを王宮の地下牢獄へ。ルフイ達はダメージが大きかった為に直ぐに治療院へと運ぶ。

「さて、サー・クロコダイル、気分はどうかしら？」

「…ああ、クソツタレな気分だな。丁重な扱いに心から感謝してやるさ」

そしてその日の夜、治療を受けて眠る麦わら一味を他所にビビの姿はツメゲリ部隊の隊長であるヒョータと共に王国の地下牢獄にあった。

海楼石の手錠を嵌められたクロコダイルはチラリとビビを見て憮然とした面持ちで言うだけで懸念された実力行使で牢を出ようとする動きは無かった。

「あら、そんな口が叩けるのならそこまで落ち込んでるわけでは無いかしら？」

「二国の王女がどこでそんだけの戦闘技術をつけたのかとか、あの馬鹿げた身体能力は何だとか色々聞いてえ事はあるが…海楼石の銃

弾、何処で手に入れやがった？

「こう見えても色々事情通ではあるつもりだが：あんな欠陥品殆ど使われてねえ筈だ、てめえは伝手があると言ったな？」

海軍、若しくは政府の何処のどいつだ？少なくともスモーカーの野郎は何も知らされてねえ、表立った協力者じゃねえ：おれが政府に疑われてたとは考えづれえ：誰の指示で動いた？恐らく七武海勢力を快く思わない海軍上層部辺りか？」

今回の件をクロコダイルなりに考えてビビに聞けば

「んー：途中までは正解、でも指示を受けてるわけじゃ無いわ。」

協力者が誰かは聡明な貴方なら察しているんじゃないかしら？アラバスタに訪れた事のある海兵でしかもある程度上の方にある人間……」

「ちつ、あの野郎：警戒してる様子は見せなかったが、おれの会社に潜入して正体を掴んだ所を報告したって所か？」

その正体を察したのだろう、脳裏に浮かぶ巨漢の姿にクロコダイルは舌打ちをする。

「残念、最初からよ、サー・クロコダイル：ダンスパウダーが王宮で見つかる前からね？」

「：おれもヤキが回ったもんだな、テメエみたいな小娘に疑われるたあ：何処でおれの事を怪しいと？」

「多少の例外はあれど海賊は何処までいっても海賊：世界政府に疑われていなくても、例えアラバスタ王国の国民から英雄として崇められていても、貴方は何かしら狙いがあつてこの国にいる。だからこそその狙いを知るために行動していたのよ。潜入したのは会社のエージエント達の情報を知るためね」

「：周到なこつた。だがおれが怪しいと知っていたのなら海軍なり王国軍なり動かさせたんじゃないのか？」

「まず王国軍では王国軍最強と呼ばれるペルでもロギアである貴方に勝つのは難しいでしょう。」

そして海軍に表立って協力を頼もうにも海軍は世界政府の下部組織であり世界政府の直轄である以上は難しい：ならば政府にも海軍

にも属しない組織の人間がクロコダイルを勝手にやっつけたというのがシナリオだったのだけれど……本当に倒してくれるというのはいい意味で予想外だったのだけれど」

最終的には発見していた人工降雨船を使ってでもクロコダイルを王国軍およびチャカヤペルの手を借りて袋叩きにするつもりだっただけに今回ダンスパウダーを使わないで済んだのは僥倖だったと考えるビビ。

「……何もかも掌の上とでも？」

「まさか、質問には答えたのだからこちらの質問にも答えてもらおうわ。

ミス・オールサンデーは何処？オハラ生き残りと言っていたかしら。貴方の切り札たりうる情報を持つ人間……当然何かあった時の集会所なり何なりは決めてあるのでしょうか？ダズ・ボーンズやザラも姿を消していたし、何処かに潜んでいるのが妥当だと思うのだけれど？」

あの時、クロコダイル打倒の後にあった懸念事項を潰す為にビビは質問に答えた代わりとして聞くも

「……おれは誰も信用してねえ。そんな何かあった時の為に場所を決めているとでも？」

クロコダイルのその言葉に軽く嘆息をして

「……そう、まあいいわ。本当は貴方の心を折ってわたしの懐刀にでもするつもりだったのだけれど……今回はわたしの負けよ。貴方は良くてもインペルダウンに投獄、悪ければ処刑もありうるけれど……貴方なら乗り越えるのを期待しているわ。」

でも忘れないで、サー・クロコダイル。わたしはいつか貴方を手に入れて見せるわ。11年前のあの時……貴方はわたしにとっての紛う事無き英雄だったのだから」

優しげな瞳でそう言うのとビビのその言葉にクロコダイルは獰猛に笑うと

「はっ、やれるもんならやってみろネフェルタリ・ビビ……今回は諦めてやるがいつかおれは返り咲いて見せる。それまではゆっくり首でも洗って待つてやがれ」

「そう、まあ期待して待つておくわ…いくわよヒョータ、勿論ここであつた事は…」

「他言無用ですね、我らが姫」

そう言つてビビとヒョータはその場から去るのだった。

## 砂漠の姫と秘密会合

明けて次の日、ビビはナノハナから無事に合流したイガラムや自身の父も交えて電伝虫にて海軍本部の上層部や世界政府と喧々轟々のやり取りをして最終的に世界政府側もスモーカーの追認としてサー・クロコダイルの王下七武海からの除名を認めた。

世界政府としても王下七武海の中でも政府に従順だったサー・クロコダイルが裏切っているとは寝耳に水だったのだろう、さんざんこちらを疑った後事実を知り、中でもサー・クロコダイルが古代兵器を復活させようとしていた事を報告した時の反応は凄まじく

” 偶々アラバスタに来ていたギルド・テゾーロの部下が見つけれ、クロコダイルが手に入れようとしていた” ポーネグリフはよっぽど政府にとって都合なのか、後日世界政府が回収する事になり一部王国軍を派遣して砂漠から掘り出させている。

因みに大々的にクロコダイルの策謀を見破れなかった世界政府としては” 国盗りを企んだ七武海が海賊に倒された” では都合が悪かったのか今回の件の立役者である麦わらのルフィ含む麦わらの一味やビビを筆頭にアラバスター王国の者を一切表に出さず

” クロコダイルの事を怪しんだ世界政府が海軍本部から海兵を派遣し調査、討伐”

という流れにしたかったようだがそこで海軍本部から強い否定が入りアラバスタ王国側からも否定が出た為

” クロコダイルの策謀を掴んだアラバスタ王国側が海軍とその他協力者の手を借りてクロコダイルを討伐”

という風に流石に海賊が討伐したとは言えないので軽く匂わせるくらいにする事で決着、全ての話し合いが終わる頃には陽が落ちる時間になっていた。

その後ビビとコブラ王はギルド・テゾーロや火拳のエースを交えて会食、今後について色々と思いを交わし和やかな雰囲気での会食を終えるとビビは自室に戻りバルコニーに出たところで

「…さて、そろそろいいかしらゴリラさん？色々答え合わせといき

ましよう?」

と柱の影に声をかける。

「特に気配を隠してるつもりはなかったが…随分と成長したなビビちゃん?」

すると柱の影からビビの声に応えたのは一人の男…会食の時にもいたがフードを目深に被り初対面を装っていたクリークであった。

最も身体が大柄な為柱だけで姿を隠せていなかったが周囲の気配を軽くではあるが感じ取れる程になったビビを軽く褒めつつクリークは月明かりにその姿を晒す。

「訓練の賜物…と言いたいけれどその巨体が柱の影に隠れるのは不可能じゃないかしら?」

それより海樓石製の弾丸と専用拳銃の手配なんて無理を言っておめんなさい、結構大変だったんじゃない?」

「ま、うちの部署で作ったはいいが倉庫で埃を被ってたもんだから気にしないでくれ。」

元々海樓石製の弾丸なんて素材故に加工は難しく大量生産は不可能だし、ライフリングを潰しちゃうから距離は飛ばせない上に確実に命中させる必要があるしで欠陥品みたいなもんだ。

運用しようにも油断した奴ならもまだしもそうそう簡単に当たるもんじゃあ無いからな、その点ビビちゃんは確実に動きを止めて相手に当たると中々堅実にやってたみたいだな」

暗に気にするなと言いつつそれよりも、とばかりにビビの戦闘技術の向上について誉めれば

「そりゃあ虎の子だもの、外したら目も当てられないし何の策も無く発砲する程愚かじゃないつもりよ?」

と、謙遜するビビに”戦闘技術だけならこのグランドラインでも割といいところいくと思うんだがなあ…”とクリークは考えつつも心配だった件について話を聞く。

「それもそうか…しかし改良したとは言え豪水薬を使ったみたいだが身体は平気なのか?」

いくらクロコダイルを相手にするとは言えあまり無茶を重ねるの

は褒められたもんじゃないぞ?」

「まだ少し筋肉痛が残ってて…まあそのうちとれると思うわよ。」

でも最初にゴリラさんがこの国に来た時に豪水を欲しがった時にはお父様も何に使うのか訝しんでいたわよ?まさか人間が耐え得るレベルのドーピング薬に作り替えるとは思わなかったけど…お陰で今回は役にたったのだけれどね?」

豪水は飲んだら莫大な力を宿し必ず死ぬ、と原作の知識を覚えていたクリークが何かに使えないか…または必ず飲んだものを殺す猛毒薬として使えないかと考え採取、Dr. インディゴやドクトル・ホグバック、ルーク医師などの力を借りて見事に飲めば凄まじいパワーアップをするが死ぬ事は無いものの反動がかなり強い身体増強薬として完成させたのだった。

「副作用が完全に消せば良かったんだが…如何せんドクター達の技術を持ってしてもそれが精一杯、というか元々の豪水がヤバいんだよなあ…」飲んだら凄まじいパワーを手に入れるが数分後に必ず死ぬ”って湧水の原理が不可思議すぎる」

「ゴリラさんのとこの研究者曰く血流の加速と筋細胞の強化だったかしら?元々のだと効果が強すぎて心臓の破裂による死亡とか何とか…」

「ま、死亡する事は無くなったと言え管理と使う時は十分注意してくれ…というかあまり過信はしないようにな?」

グランドラインの不可思議アイテムは今に始まった事では無いがくれぐれも使用には気をつけるように告げると

「わかってるわ、流石に効果が高いとは言えあれ程の副作用は使い勝手がね…」

と、話が逸れたわ。ゴリラさんは色々と裏で動いていたみたいだけれど…ひよっとして姿を見せなかったエージェント達はそつちで片付けたのかしら?」

ビビは頷きつつ気になっていた事を聞いてみると

「ああ順番で言えばMr. 5ペアはイガラム隊長と戦つてるところを助太刀したし、Mr. 3のペアはそちらが流刑にした後こつちの船に襲

撃してきた。

Mr. 6のペアはこちら側のスパイだしMr. 4ペアならユバに奇襲をかけてきてな、今頃ギンの見張りでユバの町を復興させるべく砂堀をやらせている」

「…まさかMr. 6ペアがスパイだったとはね、流石海軍本部のスパイと言うべきか、見抜けなかったわたしの落ち度とするか…」

Mr. 4の相手はモグラ人間だったかしら？減刑を餌にアラバスタの復興に協力させるのはありね、お父様にも確認をとって数日中にはユバに向かうとしましょう。

それにギルド・テゾーロと一緒にいたと言う事は彼もゴリラさんの協力者つてどこかしらね…」

クリークの暴露に額を抑えて顎に手を当てると考え込むビビに

「ついでにビビちゃんに紹介しておくが…」

「一昨日ぶりね、アラバスタのお姫様？」

「ミス・オールサンデー!?何故ここに!」

柱から生えてきた見覚えのある女性の姿にビビは目を見開いて驚いたのだった。



## 海軍事情 ドンクリークさん

『その場にいなながら何故止めれんかったあ!!』

「いや、何故も何も…あの時点では海兵が表立って七武海を討伐するわけにはいかんでしょ、かと言って七武海を庇って王族…しかも天竜人候補とぶつかるのもまずいかと思ったのですが…」

窓の外から聞こえてくるビビちゃん演説を聞きながらクリークは怒鳴る電伝虫に返事を返した。

ロビンとビビを引き合わせて色々ネタばらしをして更に軽い忠告をしてから二日、麦わらの一味は先日目覚めて一日休養をとった後で今朝王宮を出立した。

そしてクリークには今回の件についてセンゴク元帥自ら通信が飛んできた、恐らくモンキー・D・ルフィを見に行くと言っていたのを思い出したのだろう。

開口一番「何処にいる?」という言葉の後にアラバスタにいる事を伝えれば今回の件について何故この事態になったのか、もつと上手く抑える方法は無かったのかと一通りくどくどと言われ最終的には

『はあ…兎に角早急に七武海を除名処分となったクロコダイルの後任を決める必要がある、誰か良さそうな海賊はいないか?』

大きなため息と共にセンゴクは言った。

確か今の七武海はドフラミンゴがインペルダウンに収監された事によりエースが七武海に入っててそれ以外は同じだったか…原作ではクロコダイルの後任にマーシャル・D・ティーチだったなど頭の中で考えつつ

「いっそモンキー・D・ルフィでも推薦しましょうか? 血筋は優秀ですよ? 何せガープ中將の孫ですし」

革命軍リーダー、ドラゴンの息子でもあるけどなどは言わず冗談めいて言う

『…冗談も程々にしておけ、七武海を破ったとは言え世間的には知名度も強さも中途半端なルーキーを七武海に推薦できるとでも?』

「とは言え他に…覆面髑髏とかどうですか?」

『それこそ冗談だろう？オハラやマリージョアの件含め世界政府が認めるわけないだろう』

「マリンフォードに乗り込んで自薦でもしてきたら面白いんですけどねー」

『そんな馬鹿な事ある筈なからう、他に誰か推薦は無いのか？』

「だったら海軍内部で動きはないんですか？それこそ方面軍はおいておくとしても各支部から報告は上がっているでしょう？クロコダイルの七武海除名は既に通達済みですし自薦してくるものもいるのでは？」

クリークがそう聞けば

『そうだな…候補としては3000万ベリーと低額賞金ながらもその行動観点から”銀狐のフォクシー”やルーキーでありながら二億と他と比べ圧倒的な高額賞金首である”悪童キッド”などが上がっている』

「”海賊潰し”に”鋼鉄喰らい”ですか、他の海賊への威嚇としては十分でしょうが…」

『因みに一部ではギルド・テゾーロを七武海に推薦する動きやこれを機に七武海制度そのものを撤廃しようとする動きもある。』

ギルド・テゾーロはまだしもサカズキ達ブルーマリナーが強硬手段に出らんとも限らん…お前もそれとなく注意して見ておけ。

それから休暇は終わりだ、お前は一旦帰ってこい』

その言葉にしばし固まるクリークだったが

「…一年から半年に、出発前には更に3ヶ月まで減らされたのに更に減らすと？」

気を取り直して文句を言う、これから空島にロングランド、ウォータージェンにスリラーバーク、シャボンディとまだまだ旅は長いんだと思いいながら言い返すも

『例の作戦』の発案はお前だろうが…そろそろ作戦の最終準備に入る、何せ”四皇の一角を墜とす”と言うのだから準備はしっかりしておくに越した事は無いだろう？』

「…その為に前倒して色々やっただけです」

『各支部との連携、要塞の操作の勉強、秘密裏な海上封鎖及び漸減作戦の実施、欺瞞情報の拡散とやる事はいくらでもある、特にお前は発案者なのだから、空中要塞司令のアイザック中将とも詳細をつめる必要があるだろう?』

センゴクのその言葉にクリークは口をへの字に曲げて

「…了解しました、これより海軍本部中将としての任務に戻るであります」

『それでいい、何だったら麦わらを捕らえてきてもいいぞ?』

渋々言うクリークにセンゴクは冗談めかして言えば

「麦わらと義兄弟のエースとぶつかる気ですか?それに今麦わらのルフィはスモーカー大佐とヒナ大佐とムーア大佐の三艦隊に追撃を受けてますから時間の問題…」

と苦言を呈した所でいきなりドアが開くと

「ボス!スモーカー大佐とヒナ大佐とムーア大佐が麦わらの船を取り逃したと!!…すいません通信中でしたか、失礼します!」

「…だそうですが?」

それだけ言ってギンは素早く扉を閉めて去っていったのでそう聞くと

『少なくとも8隻以上の艦隊で小型帆船一つ捕まえれんとは…奴らの進路はどうなっている?』

「…このままいけば何個か小さい島を経由してルルカ島といった辺りじゃないかと」

『ふむ…あの辺りはパスクア大佐の管轄か…、まあお前の副官を昔は務めていた男だ、彼なら上手くやるだろう。』

兎に角お前は至急マリノフォードに、その後ファウス島に向かってもらう…ナバロン要塞で建造中のガルガンチュアは動かせるか?』

「いやあ流石に後艀装だけとはいえ数ヶ月はかかるかと…とてもじや無いですが今回の作戦には間に合わないでしょう」

そう言っただけクリークは全ての帆船を過去へと変える最強の船を脳裏に思い出すのだった。

## 砂国顛末 ドンクリークさん

ルファイ達麦わらの一味はビビから当初の約束通りという事で報酬として一億ベリー（現物として銀塊を含む）を受け取ると名残惜しげながらも泣く泣くビビと別れた。

そして別れを経たと思えばいつの間にかゴーイング・メリー号に乗り込んでいたつい先日倒した敵の右腕、考古学者を名乗る鷲を連れ的美女である3900万の賞金首“ニコ・ロビン”

彼女を暫定的に仲間に加えると一味は気持ち切り替え次の島へと向けて進路をとり、それぞれランブルボールを作ったり海図を書いたり海軍本部所属のコックにカレーの作り方を教えたり、海軍の大艦隊に追跡されたり親子三代の花火師一家と花火を作ったりしているその頃クリークは憮然とした面持ちでマリリンフォードへと進路をとっていた。

無理もないだろう、自身の手ずから育て上げたロビンも合流し更にはモネやパールといった頼りになる面々も合流してさあこれからという時に休暇の切り上げを告げられたのである。

ベラミー撃破のシーン（因みにドフラミンゴは投獄されています）や2回目の空島旅行、あわよくばエネルを捕縛して飛空船のマクシム入手を考えていただけに落胆もひとしおであった。

「…まあいい仕事だし気持ちを切り替えよう。ギン、例の作戦に際して海賊達の動きは？」

「今のところ大きな動きはないですね、ただ現在行なっている漸減作戦により海軍が大規模な作戦をやるのではという話が実しやかに囁かれてるみたいです」

「内部での作戦秘匿はどうだ？ どうせスパイが入り込んでるんだろうから慎重にいききたい、例えば同じ海兵といえどな」

「そうですね、作戦全容を知っているのはボスのみですし概要はセンゴク元帥と三大将が知ってるのみ…ただし本部海兵には”815”の数字が広まっています、一部海兵の間ではなにか上層部がよからぬ事を企んでいるのでは訝しみ情報を探る動きもありますね」

「815?…ああ、そういう事か音だけだとそう聞こえてもおかしくないしな。因みに作戦内容を探っているのは?」

「やはり多いのはブルーマリナーの一派ですね、盟主という事になっているサカズキ大将が統制してるとは言え新造戦艦を探る動きもあるようで…」

「青き正常なる海ねえ…作ったおれが言うのもなんだがよくそんな曖昧なもので団結できるもんだな。」

「知ってるかギン? あいつら七武海制度の撤廃も考えてるらしいぜ?」

「いや、今この状況で七武海制度の撤廃なんて四皇、七武海、海軍本部の均衡を自ら崩すようなものでは? それからどうも世界政府が嗅ぎまわってる所々から痕跡が窺えますね」

「世界政府か、恐らくはサイファーポールってどこか? 奴らなら隠された情報に辿り着けるだろ。ブルーマリナー的には恐らくパシフィスタの量産にて一気に戦力を上昇させ海軍と四皇の二大勢力での均衡を考えてるんじゃないかと思うぞ?」

「更には現七武海のバーソロミュー・くまも最後の改造を終えれば七武海の退任が決定している、これにより七武海はクロコダイルも含めて欠員が二人、新たに任命するよりも…と考えた可能性が高いだろう」

「成る程…まあ隠された情報が本当の事だとは言ってませんが、作戦内容を公表しますか?」

「いや後数ヶ月は準備にかかるだろうし、相手が相手だから万が一を考えてもギリギリまで作戦は伏せておきたい所だな…」

「この作戦が成功にしろ失敗にしろこの海は大きく動く、クロコダイルの後任もバーソロミューの後任も直ぐには決まらないだろう。」

「一応数日後にマリージョアにて七武海を招集した集会が設けられる、そこで何か動きがあれば…」

「そうしてクリークは集会に乱入してくるであろう存在と自身が騙ってきた存在を脳裏に描きニヤリと笑うのだった。」

「一方その頃麦わらの一味を取り逃したスモーカー、ヒナ、ムーア達」

本部大佐はクロコダイル護送の任を受けその情報のすり合わせの為に集まっていた。

「…おれは麦わらを追いかけてねえといけねえんだが？」

開口一番専任追討として麦わらを追いかけると言い出すスモーカーにヒナは頭をおさえて

「ちよつとスモーカー君？協調性は大事にしろつて入隊当初に言われたの覚えてないの？」

と言えば赤鼻のムーアも

「海兵たるもの任務はきっちりやるべきだスモーカー大佐、特に元・七武海ともなれば残党が取り返しにくる事もありえるし、その能力を目当てに別の海賊団が襲撃してくる可能性もある。

アクアリアに襲撃をかけてきて捕縛されたガスパーデ元・准将がビッグマムの手の物に連れ去られたのを忘れたか？もしまたクロコダイルの身柄を奪われてみる、笑い物もいいところだぞ？」

と実例を出してスモーカーに言う。

「…しかしムーア大佐、麦わらの追討はおいておくとしてもアラバスタの姫さまが確保してた人工降雨船をどの道本部に運ばにやならねえ。人員はどうわかるんだ？個人的にはヒナに任せりやいいと思うんだが…」

「ちよつとスモーカー君？勝手に決めないでくれるかしら？だいたいクロコダイルはどうするのよ」

「落ち着けヒナ大佐、どの道人工降雨船もクロコダイルもついでに言えばクロコダイルが見つけたポーネグリフも一度本部で世界政府の判断を仰ぐ必要がある。

とは言え誰かにアラバスタ王国で内偵をしてもらう必要があるが…勿論海軍という事は伏せてもらうぞ？」

「ならそつちをヒナがやりやあい、おれはそんな窮屈なのごめんだな」

「ちよつと…なに勝手な事を…だいたい内偵って何の話かしらムーア大佐？」

「なに、アラバスタ王国女王ネフェルタリ・ビビと麦わら一味の関連

性、それから恐らくクロコダイルとつるんでいたのだらうニコ・ロビンの目撃情報もあり政府は彼女が古代文字、ひいては古代兵器についてどこまで調べていたのか知りたいようだ。

ポーネグリフが解読されていて姿を消したニコ・ロビンが古代兵器を復活させる事を懸念しているらしい」

「ニコ・ロビン：3900万のオハラの生き残りだったわね」

「兎に角おれは内偵なんて窮屈なのはゴメンだ、おれはやる事があるんでね、それならまだ本部まで船を運ぶ方がマシってもんさ」

そう言つてスモーカーは更新された二枚の手配書を手の甲で叩いて見せるのだった。

## 不穩先触　ドンクリークさん

麦わらのルフィに殴り飛ばされ、何とか意識を取り戻したベラミーが仲間の制止も聞かず麦わらの一味にやり返してやろう、とメリー号にこっそり忍び込んでいる頃、マリージョアにおいては五老星：世界政府のトップである五人の老人達が話し合いをしていた。

「クロコダイル後任の状況はどうなっている？」

「一応その為に七武海を集会として召集してある、だが所詮海賊……」

「身勝手な奴らが何人集まるかな、なるべく急がねばいかん……穴一つとて甘く見るな」

「三大勢力の均衡崩壊は世界に直接ヒビを入れる事になりかねんからな」

「まったく……バーソロミューの後任もまだ正式に決定してないこの時に……厄介な事をしてくれたものだなクロコダイルは」

「それにクロコダイルを真に討ち取った男……こいつも野放しにはしておかんだろう」

「モンキー・D・ルフィ……D」を持つ者か」

「しかしなんだこの懸賞金は、クロコダイルを討ち取るほどの危険度なのだぞ？……一億や二億にしてもおかしくないだろう」

「海軍によれば元懸賞金8200万であるクロコダイルを倒した戦闘能力は高いものの、今回の件は天竜人候補であるネフェルタリ・ビビの指示で世界政府や海軍に含むものはないという理由だそうだ」

「それから」一億の壁は「はまだ超えてないとの判断でな……」

「本部佐官クラスを退ける実力」、  
「非合法海賊である」、  
「過去に一般市民に対し損害を与えている」、  
「海軍若しくは政府に対して重大な損害を出している」……ふん、どれに当てはまるか知らんが全部揃ってると思うがな」

「四項目目の」重大な損害に当てはまらないそうだ。個人的には七武海を討ち取ったのは損害だと思いがな」

「甘すぎる！海軍本部手配班か……全く鈍熊め、厄介なものを設立してくれたものだ」



「本人の過去や思想、詳細な情報や本部内の意見を纏めて適正な懸賞金額を算出…字面にしてみればいい事かもしれないが、我々にとつては厄介だな…」

「まあいい、情報などこちらの手でいくらでも操作できる。それこそサイファールでも動かせば済む話だ…しかし七武海か、集まれば良いが協調性は期待できまい」

五老星がそう話し合つて翌日、マリソロには続々と会議参加者が集結していた。

海軍本部元帥” 仏のセンゴク”、本部中将” 大参謀つる”、加えて複数名の本部中将。

実はクリークの発案で本部大将も参加させるつもりだったのだが、三大将は予定が付かず参加不可の為、今回のメンバーに。それに加えて

「うはー、このご時世に全身鎧兜の護衛とか時代錯誤じゃねーか？」

「あまり甘く見るなエース、あれらは時に天竜人の護衛としても動く腕利き達の天竜騎士団だぞ？」

七武海が一角” 火拳” ポートガス・D・エースと

「…騒がしい事だ」

同じく七武海が一角” 暴君” バーソロミュー・くまが到着していた。

そして一同は聖地マリージョアの一角に設けられた円卓へと集い

「…よく来たな、これ以上待っても誰も来んだろう…まあ六人中二人なら上等か」

集まった二人は問題児が勢揃いの七武海の中でも割とまともな二人だけにセンゴクは密かに安堵する。

「よお、センゴクのおっさん。来る気はなかったんだけどさあ、イスカが煩くてよお」

「当たり前だ！お前は七武海だと言う自覚をちゃんと持て！お前が持つ数々の特権は七武海であつてこそそのものなんだぞ？義務はきちん」と果たさないか！」

と気楽に挨拶するエースに横から怒鳴る朱色の髪の女性にセンゴ

クは

「そーいや担当官として君がついていたな…どうだ新世界の方は、イスカ中佐？」

と腰に細剣を携えた赤い海軍マークのコートを羽織った女性に声をかける。

「グランドラインにおいて前半と後半の難易度が段違いですね。前半から来た海賊が前半を楽園だと呼ぶのも納得です…」

海軍本部中佐”釘打ち”イスカ…かつてクリークに助けられた孤児達の異名である”熊の子供達”の一人であり、現在は本部海兵として専任追討だった事で多少の縁があり、火拳のエースの専属担当及び連絡役となっていた。

「随分と和やかな声が聞こえるな…来る場所を間違えたか？」

そこに更に現れたのは

「げ！鷹の目!？」

「随分と意外な男が来たな…どう言う風の吹き回しだ？」

王下七武海が一角、”鷹の目”のミホークの到着にエースは驚き、センゴクも普段はこのような集会など参加しない男が来るのは珍しいと思いつつ聞けば

「フン…なに、おれはただの傍観希望者だ…今回の議題に関わる海賊達に少々興味があつてな…それだけだ」

鋭い目つきをそのままにいうミホーク。

「ふむ…まあいい傍観希望とは言え三人も集まったのなら上々…」

ミホークの言葉にそう言えば、と麦わらの一味にいる海賊狩りやり合つたという報告を思い出し納得してそう口火を切った所で

「ならば私も傍観希望という事でよろしいか？」

突如として響く声にすぐさま目線をそちらに、中将達も咄嗟に刀の柄に手をかけたり拳を構えたりと戦闘態勢に入る。

「…いえ、傍観というのも少し違いますか。しかし流石に錚々たる顔ぶれですな」

「貴様、何者だ？恐らく窓から入り込んだのだろうか、下には天竜騎士団が警備にあたっていた筈だが？」

突如として乱入してきた得体の知れない細身の男にセンゴクは警戒しつつ

「いやはや、あわよくば…ぜひこの集会に参加させて頂きたく参上致しました。」

この度のクロコダイル氏の称号剥奪において後継者をお探しでは無いか…とね？」

細身の男…ラフィットはそう言ってステッキをくるりと回し、芝居がかった様子でシルクハットに触れながら挨拶したのであった。

## 黒髭誤算 ドンクリークさん

「お前…ラフィットだね？」

「おや？わたしの名などご存知で？これは恐縮千万」

乱入してきたシルクハットにステツキの細身の男にそう声をかけるおつる。

大参謀の異名をとる彼女の元には各方面軍やグランドラインの支部から毎日色々な情報が届く為、乱入してきた男についても知っていたおつるは

「誰だい？おつるさん」

「元・保安官さ、西の海で名の通ったね…まあ、度を越えた暴力による悪名だがね。」

バスティーユからグランドラインに潜り込んだようだと言報告は来ていたが、一体何の用だい？」

周りの中将達が警戒する中ラフィットは飄々とした雰囲気で

「ホホ…今回はある男を七武海に推薦したく…」

と話を切り出す

「ほう？推薦人として来たと…勿論、五老星に話は通してこちらに来たのだろうか？」

センゴクの明らかな難題に少し固まり

「いえいえ、まずはこちらに話を通すべきかと…」

選択を誤ったかと考えつつ話を続けようとする。

「まあいいだろう、言ってみろ。何処の誰を推薦すると？」

「ええ、推薦するのは我ら黒ひげ海賊団船長、マーシャル・D・ティーチいっ！いきなり何を！」

ティーチの名前が出た時点でセンゴクがサツと腕を上げそれに応えた本部中将達がラフィットを半円状に取り囲む。

「…すまんが聞き間違えかもしれないが、もう一度貴様らの船長の名前を聞いても良いか？」

焦るラフィットに対しセンゴクは腕を組んでそう尋ねれば

「で、ですからマーシャル・D・ティーチと…」

「捕らえろ」

冷や汗を垂らすラフィットにセンゴクの指令が無慈悲に襲う。

「なっ!? わたしは今回は話をしに来ただけで!」

「マーシャル・D・ティーチ：元・白ひげ海賊団2番隊にして4番隊長であるサッチの殺害犯。」

そして”覆面髑髏”ティーチの最有力候補：向こうから情報が飛び込んで来るとは思わなかったぞ?」

ラフィット、ひいてティーチは一つ思い違いをしていた。

確かに自分の名前はティーチで、同名の賞金首が居るとは言え自身にはアリバイがあり、海軍がこちらに接触しに来た時も別に不備は無く、その後こちらを捕らえようとする動きも表立って見られなかった為、犯人候補からはとつくに外れていると思っていたのだ。

しかしそれは甘い考えと言わざるを得ない。

何故ならアリバイの証言は所属する海賊船である白ひげ海賊団の証言のみであり、海軍が直接接触しての尋問も報告者の思惑によりグレーと判断されていたのだ。

そして白ひげ海賊団に所属していた時に追手がかからなかったのは四皇との衝突を懸念しての事であり、サッチ殺害後、白ひげ海賊団を出奔してからは大型作戦の決行が近かった為に見逃されていたのだ。

センゴクの言葉にラフィットは驚いて

「は!? ち、違います!! 私達の船長はティーチですが決して覆面髑髏のティーチでは!!」

と弁解しようとするがセンゴクは聞く耳を持たず、向こうからやって来たのなら捕らえて同じ海賊団の船員なら何かしら情報を持っているのだろうと考え

「…話は後でゆっくり聞いてやろう。総員捕らえよ」

センゴクの号令が下り、中将達が一齐に襲い掛かる。

流星に多勢に無勢、このままでは仕事も果たせずみすみす捕まってしまうだけだと考えラフィットは窓から宙に飛び出るとバサリ、と自身の腕を翼に変化させて一気に飛び立つ。

「衛兵!! 侵入者だあつ! 空を飛んでいるぞ!! 覆面髑髏」の関係者の可能性が高いっ!!」

一方窓から飛び出し翼を羽ばたかせたラフィットを見てセンゴクはそういう事か、と考えつつ下で巡回をしている天竜騎士団達に叫べば逃げる姿を捉えた鎧兜の騎士達は投槍を手に次から次に風を切る音を立てて超高速で投げつけていき、一般の海兵達も銃を上空に向けて次から次に発砲。

更には追撃として数名の中将が月歩にて窓から飛び出し追跡、下から飛んでくる鋼鉄の槍や銃弾、そして後ろから迫ってくる中将達を撒く頃には日はとっぷり落ち、ラフィットはあちこちに小さな傷を負い、疲労困憊の有様。

「まさか…まさかこれほどまで我らが船長が疑われるとは…これは計画を大きく変更する必要があるようですね…」

兎に角今は体力を回復させるのが優先だと考えその場でじっと息を潜めて隠れるのだった。

一方センゴクは撒かれたとの報告を受け

「まあいい、この程度で捕らえられるとは思ってない。

しかし七武海に自薦か…随分と思いつた事をするな、マーシャル・D・ティーチ。

奴が本当に覆面髑髏だとしたらネームバリューは十分、七武海に入る狙いは特権が目当てといったところか?…まああれだけの事件を起こした者を世界政府が認めるとは思えん…

しかし覆面髑髏とは別人だとして懸賞金は0…それではネームバリューも無く強さも不明…自薦するくらいなら何かしらの根拠があるのか?

…まあいい、何を企んでいるか知らないが白ひげにも狙われている状況で事を起こすとは考え辛い。念の為に搜索を強化しておけば問題無いだろう…今は目の前の事を片付けねばな。まったくガープの孫め、厄介な事をしてくれたものだ。あの一族は破天荒な者しかいないな、全く…」

昼間の出来事について考えセンゴクは自身の執務室にてそう結論

を出すと目の前の手元の懸賞金リストにあるモンキー・D・ルフィ”  
9400万ベリー”、ロロノア・ゾロ”6700万ベリー”の二人の  
名前を見てそう考えるのだった。

## 黒髭考察 ドンクリークさん

「ちっ…海軍の奴らめ、そこまでこっちを疑ってやがるとは…」

「ホホ…全くです、私もあそこまで強硬に来られるとは思ってませんでしたよ…」

グランドライン、ジャヤにある”嘲りの町”モックタウン。

そこで元・白ひげ海賊団2番隊に所属し、4番隊隊長であるサッチを殺して悪魔の実を奪い取った男”マーシャル・D・ティーチ”が自身の海賊団の参謀的存在でありあちこちに細かい傷を負ったラフィットと話し合っていた。

「しかしこの分だと七武海に入れる可能性はかなり低いな…海軍でその状況なら政府は言うまでもねえか」

「名前が同じ、顔は覆面…故に疑われたのならいつそ名前を捨てると言うのは？」

「何処の馬の骨とも知らねえ奴の為に何故おれが名前を捨てなきゃなんねえ！つたく何処のどいつだか知んねえが余計な事しやがって…」

ティーチは苛立っていた。

ずっと目立たず白ひげの影に潜み、ようやく自身の悲願である”ヤマミの実”を手に入れたと思っただらこのザマである。

覆面の男が自身と同じ名前を名乗っているせいで全く関係ないのに警戒…どころか捕縛しようとしてくる奴等はわんさかおり、自身の名前をティーチだと知った賞金首や海賊、それに白ひげ海賊団からはサッチと同じく4番隊に所属しその部下であった”牙狼のジャブラ”が追手としてかかっていると聞く上に世界政府もきな臭い、それに海軍からも追手がかかれば今より更に動きにくい事になるのは目に見えていた。

「しかしこのままでは計画の達成は不可能では？七武海に加入しインペルダウンにて戦力を集める…確かに成功すればかなり強力な戦力足り得ますが…ホホ、前段階でこの状況だとは作戦を根本から見直す必要がありますね。」

我々は人数で言えば五人、これで白ひげ海賊団や海軍の相手をする



のは難しいと言わざるを得ませんねえ?」

ラフィットの芝居がかった言い方にティーチは瞑目して考える。

ティーチとて別に愚かでは無い、今のままでは自身を上回る戦力に押し潰されて終わりだという事はわかっている。

「…仕方ねえ、仕方ねえが背に腹はかえられねえ。」

ラフィット、至急リストアップした奴等に繋ぎをつける。恐らく現状のままじゃ七武海入りは難しいと言わざるをえねえだろうが…どの道腰掛けだ、戦力すら揃えば問題ねえ…違うか?」

「何を…ホホ、そういう事ですか。確かに”彼ら”なら話に乗るかもしませんねえ」

「よし、とりあえず足を見つくる…」

ティーチとラフィットがそう結論を出していざ行動を起こそうとすれば

「船長、沖に赤いカモメがいるぞ?」

屋根の上からの声に慌ててティーチは望遠鏡を覗き込むと微かだが帆に赤い海軍マークを掲げた帆船が数隻。

「…進路はこのジャヤに向いてんな。どう思う?」

「…赤いカモメが我らを知って来たのならこれもまた巡り合わせ」

「ちっ!今はまだやり合う時じゃねえんだ!!テメエらズラかるぞ!!」

そう言つてティーチはモックタウンで暴れていたバージェスや屋根の上で見張りをしていたオーガー、道で寝そべっていたドクQを回収すると大慌てでカモメの水兵団が来るのとは反対側に舳先を向けると出港するのであった。

一方アラバスタ沖に停泊していた艦隊を引き上げついでとばかりに搭乗したクリーク達は情報集めの為に適当にそこら辺の海賊をどつき回して

「は?姿を見ないってそりやまたどうして…アンタらの船長なんじやねえのか?」

ようやく当たりにたどり着いたらしく眼鏡の優男は

「ベラミーは麦わらを追うって出ていっちまったよ!くそっ、強いから従つてやつてりやあのザマだ。全くもって見込み違いだったよ!」

相手が海軍と知って少しでも己の有利に立ち回ろうとするも

「…ふむ、まあいい所でお前は悪い海賊か？」

「ひっ！」

クリークの雰囲気顔を引き攣らせその場から逃げ出そうとし背中から衝撃を受けて吹き飛ばされると建物に突っ込んだのだった。

「飛指銃…サーキース、リリー、ミュレ、エデイ、ロス、リヴァース、ヒューイットにマニ…とづくに調べはついてんだよ。」

懸賞金こそかかってねえが恐喝に強盗、過剰暴力に盗み…随分と手広くやってたみてえだな？典型的なチンピラモーガニアを黙って見逃すほど甘くねえぞ？」

クリークがそう言うが否や海軍独立遊撃隊が連隊規模で一斉に行動を開始、勿論こんな所で屯している海賊達が誰よりも海賊達と戦つて来た生え抜きの海兵に叶うわけもなく、偶にいた”処刑人ロシオ”や”十字傷のスタンパー”、”爆弾魔のバリス”といった多少戦闘に手慣れた面々も先頭に立つ本部大佐であるギンが率先して二本のトンファーで地に伏せさせていく。

「ベラミーが麦わらを追っていっただと？黒ひげの姿もねえし黒ひげは確かノックアップストリームに吹っ飛ばされたんだったか？」

そう言いながら集めた情報を整理しながらクリークは道中で見つけた籠に入った林檎を袖に擦り付けて拭うとそのまま大口を開けて齧り付くと大爆発。

凄まじい音と共に人一人くらい所か周りにいる人間すら殺傷する程の爆発がおきると目を瞬かせると

「…爆発する林檎か、やらしいトラップを…ってこれあの医者をやつか、という事はここに最近までいたのは確定か？船は吹っ飛ばされた筈…さては隠れてやがるか？」

そうして徐々に海軍の制圧範囲は広がっていき、そして後に”モツクタウンの大掃除”と呼ばれたこの件は、大小様々な犯罪者を纏めて検挙した近年稀に見る大捕物として終わったのであった、当初の目標は果たせぬままに。

## 発条誤算 ドンクリークさん

グランドライン上空、白々海

そこに羊の顔の船首を持つ一隻の船が浮かんでいた。

「まさか…ありえねえ、これは夢、いや幻覚だ!!」

「なあー、いい加減にしるよバネ男。空島はあるって言ったじゃねえかよー」

「うるせえ麦わら野郎！人をこんな得体のしれねえ所に連れて来やがって!!」

「おいおい、人様の船に勝手に乗り込んで密航した癖にガタガタ抜かすな」

「テメエもうるせえよ海賊狩り！空島なんて御伽噺に決まってるんだろ!!」

「強情な奴だなー、いい加減目の前の現実を認めりやいいのに…」

ノックアップストリームと呼ばれる天に突き上げる化け物海流に乗って空の上の島…空島へとやって来た麦わらの一味は密かに、しかも勝手にゴーイング・メリー号に乗り込んでいた密航者の扱いを決めあぐねていた。

ジャヤ島、モックタウンに滞在し空島へ行く為に麦わらの一味達に協力していたサルベージ専門の公認海賊団であるクリケット一味。

彼らを襲撃し黄金を奪った”ハイエナのベラミー”は自分が一撃でのされた麦わらのルフィへの仕返しとして密かに停泊するゴーイング・メリー号に乗り込み、全員が油断した頃を見計らって襲撃をかけるつもりであった。

…が、激しい揺れや怒号、揺れが安定したと思ったら聞こえた戦闘音に疑問を覚えながらもそろそろいいか、と油断を捨てて初手から能力を発動した状態で

「おらあー！麦わらの野郎!!さっきは油断したがあれで勝ったと思ってんじゃ…ねえ…何だこりやあつ!!」

壁を蹴破って甲板に躍り出てそう啖呵をきると同時に目の前の景色、真っ白な大海原が目に入りその言葉は驚愕に変わる。

気づいていたが放置していた二人は兎も角、他のメンバーは当初は驚いたもののルフィが得意げに説明。

説明を受けたベラミーはあまりの予想外の事にキャパシティをオーバーしたのかその場でぶっ倒れてしまい、船医であるチョッパが介抱しつつ船は微妙に見える白い島のようなものに向かいやがて意識を取り戻したベラミーが目の前景色を認められずにいた所で冒頭に戻る。

ありえねえ、とルフィに掴みかかるベラミーだったが無理もないだろう。

ベラミーにとって空島というのは御伽噺、大昔の船乗りがノックアップストリームに夢を描く為に作った空想上の話であるからだ、仲間の静止を振り切ってまで忍び込んだのに予想外の光景が待っていた事で

「くっそ…何なんだよこれは、夢なら覚めてくれ…」

両手を地に伏せその場で項垂れた事によりいよいよ周囲は

「…ちよつとルフィ、どうすんのよアレ」

「んー、今からジャヤに戻せるのか？」

親指でくいつと甲板で項垂れるベラミーをナミが指すとルフィは考え込み

「流石に無理に決まってるじゃない、普通の海と違うのよ？」

「斬るか？」

「どっかに縛って閉じ込めておこうぜ？こいつおっさんの金塊奪ってった奴らだろ？」

流石に戻すのは却下され物騒な事を言うゾロとウソップが閉じ込めておく事を提案するが

「いや、下手に閉じ込めておくよりルフィと一緒に置いといた方が安全だろ、ナミさんやロビンちゃんに危害を加える事も考えられる。

忘れるなよウソップ？こいつは5500万の賞金首、ルフィやクソマリモより懸賞金は高いんだぞ？」

サンジのその言葉に

「う…よ、よーしルフィー！そいつはお前が拾って来たんだからお前が

責任持つて面倒みるよ！」

ウソツプは慌ててサンジの後ろに隠れ、更にその後ろではチョツパーが

「ルフィより懸賞金が高い奴がいるのか…、海って広いんだなあ…」

と一度は介抱していたのに何故か恐々と隠れる始末。

そんな甲板のドタバタを見ながらロビンは

「…一応おじ様に報告しておいた方がいいかしら？」

と思案し” 麦わら一味の詳細な情報、及びこれまでの旅路が詳細に書かれた本” をパタリと閉じると上空にて旋回する鷲を呼び筆をとるのだった。

そして高速で飛んだ伝書鳩ならぬ伝書カフウからロビンの書いた手紙をクリークが受け取り首を傾げる。

「んー？なんで”あの”ベラミーが空島に？」

典型的なモーガニアにして利益主義・リアリスト… ”一繋ぎの大秘宝” などの伝説・夢・ロマンには一切興味はないために夢を語る者・追い求める者を毛嫌いし嘲笑する。

海賊王なんかは鼻で笑い、気に入らない相手に暴行するなどの素行も非常に悪く、極悪非道そのもの…故に空島なんて絵空事だと思ってる彼が何故そんな所に？と頭を捻るも”自身をのした相手に襲撃する為に密航” ・というロビンの文に成る程、と納得して手紙を読み進める。

ロビンからの手紙によればジャヤ島を出航後、”何事も無く” ノックアップストリームに乗り空島に、一人あたま10万ベリーはとられたものの更に上まで登り”白々海” と呼ばれる空の海へ到着したそうである。

そこで現れた自身達よりも高い懸賞金を持つ賞金首に対し扱いを決めかねているようで手紙の末尾には何か良い案が無いかと書かれていた。

「むう…ベラミーもそうだが入国料を払える余裕があったのか？いや、ビビちゃん報酬を出したと言っていたな…クロコダイルのアジトから接收した銀も含めてかなりの金額らしいしそれくらい有れば

払えるか。

ん？黒ひげが追いかけていないなら自身らの懸賞金を知らないのか？…仕方ない手配書も同封しといてやろう。

ベラミーは…まあ麦わらのルフィに任せとけばなんとかしてくれるだろう、新世界でのベラミーはちつとはマトモになってみたいだしな」

少し考えてそう決めたクリークは文を認めると”麦わらのルフィ”、”海賊狩りのゾロ”二人の手配書を一緒に同封するとカフウの足につけた筒に入れて

「すまん、ちと大変かもしれないがまたロビンの元まで頼む」

そう声をかけるとカフウはくるるっ!!と一声鳴くとバサリと翼をはためかせ空へと踊り出たのだった。

## 黒髭動向 ドンクリークさん

とりあえずベラミーは常にルフィと一緒に行動させる事に決定し、連れ去られた仲間達を取り戻すべくルフィがサンジと、ウソップ、ベラミーらと共にコニスの案内でラブリー通りに向かつてる頃、クリークは艦隊旗艦フィーネ・イゼッタ号の艦橋にて通信を受けていた。

「は…？七武海候補の状況視察ですか？」

『うむ、あくまでも七武海候補ではあるが情報を詳細に把握しておくに越した事は無いだろう。』

今回はどうにも不作でな、場合によっては公認海賊から推薦するという動きもある、兎に角お前の海域付近には候補として元・公認海賊である”銀狐のフォクシー”がいる、まあ艦隊で行くと不要な刺激をしかねんし単艦で行く事を推奨するがな』

「了解しました、しかし上もよく候補に決めましたね…懸賞金だけならもつと上の者もいると思いますが？」

『奴が候補になった最大の理由はその海賊団の行動理念だ。』

”デービーバックファイト”…それをメインとする故に多くの海賊を壊滅の憂き目に合わせ、更には自身と同じ公認海賊にまでその牙を向けた故に違法海賊へと転じた…。

確かにこの時勢に多くの海賊から構成員を奪い取り壊滅させるという手段は有用、ゲッコウ・モリアと同じく一定の効力があるとしての候補、その懸賞金故に扱い安いと上は判断したのだろう』

「そうですね、兎に角一度接触してみて…まあその人となりや戦闘能力を纏めて報告させて頂きます」

センゴクからの通信を切ってクリークはふむ、と考える。

黒ひげ海賊団から海軍上層部への接触に関しては報告は受けている…故に黒ひげの目的である七武海への就任、ひいては黒ひげの真の企みであるインペルダウンへの強襲は頓挫したと考えていいだろう。

原作では白ひげ海賊団4番隊サッチを殺害、ヤミヤミの実を手に入れた更なる追撃として出た2番隊隊長エースを返り討ちにして捕縛、それ

を手土産に七武海に就任、その権限を持ってインペルダウンに強襲：

監獄所長であるマゼランに阻まれたものの悪運のなせるものか豪運のなせるものか不明だが何らかのシンパシーを感じた看守長であるシリユウの手助けにより最も凶悪とされる最下層フロアの囚人達を解放、自身の海賊団の戦力とすると更に返す刀でマリントードでおこっている海軍本部vs白ひげ海賊団の頂上戦争へと乱入。

どんな手を使ったか不明だが仁王立ちにて往生した白ひげから彼の能力であるグラグラの実の能力を手に入れ、更にその後圧倒的速度で白ひげの元：ナワバリを次々に制圧、これには怒り心頭となった元・白ひげ海賊団との戦争：通称“落とし前戦争”にて勝利し名実ともに白ひげの代わりに新世界に君臨する四人海賊達、四皇としての地位に着いていた男だが：

クリークの影響によりエースは七武海に所属、それ故に白ひげ海賊団と火拳のエースの間には何の関わりもなく、本物か偽物かは置いておくがその鳴り響く悪名故に黒ひげが七武海に就任するとは考えづらい。

「…黒ひげの動きが読めないな、だからこそジャヤで捕らえておきたかったのだが」

原作を側で見たい、そう考えていたクリークではあるが過去から色々やらかした蝶の羽ばたきにより”時が進めば進むほど”原作から剥離していく状況故に、確定で黒ひげが来ると思われる島で捕縛を考えるのは自明の理であった。

「エースとぶつかったのはバナナ島だったか？なんか似た感じの名前の島で補足できれば良いが：4番隊に所属していたジャブラという男が黒ひげを追ってるらしいが：どう考えてもこいつCP9のジャブラだよな？やっぱ覆面髑髏関係で政府が潜入させたか？」

そう呟きながら考えるクリークの手元には一枚の手配書、恐らく潜入任務もして本腰を入れているのだろうがそこにはナマズ髭に太い三つ編み、吊り目の中華風の男：”狼牙（おおかみきば）のジャブラ”懸賞金一億五千万ベリー。



流石の手配班も政府の直接の命令を断れなかったか、巧妙な情報を掴まされたかジャブラの手配書は本物であり、誰も彼が政府の諜報員とは考えないだろう。

「…待てよ。バナナ島に黒ひげが現れる可能性が高いならジャブラと黒ひげがぶつかる可能性があるのか？」

そうなるともし黒ひげが勝ったとしたら政府との対立は避けられないだろうし、もしも黒ひげが負けたら負けたで覆面髑髏の疑いがかけられている以上懸賞金が0だとしても取り調べを受け、また無事に娑婆に出てくるとは考え辛い。

「可哀想にマーシャル・D・ティーチ。

原作では白ひげという巨大な存在の影に隠れて牙を研ぎ、ルフィと同じく一気に成り上がり悪魔の実の能力を二つ持ち、誰よりも”海賊らしい海賊”となっていたラスボス候補。

あくまでも俺の中ではだがな…まあこの世界ではそう簡単には上手く行かないぞ？精々足掻いてみる。

まあ直接の怨みがあるわけじゃ無いが…原作と同じく暴虐を振るうようなら”身勝手な正義”の下に俺の正義を執行してやろう」

クリークはそう考えつつとりあえずはセンゴクからの指令である七武海候補であるフォクシー海賊団の動向を探るべく近くの島へと進路を向けさせるのだった。

## 銀狐海賊 ドンクリークさん

「おやびんーおやびん大変だ!!赤カモメが艦隊でこっちに来た!!」

自身の信頼する部下、側近のハンバーグの叫ぶような声におやびん：銀狐のフォクシーは驚き慌てて甲板にあがる。

ザワザワとざわめく一様に黒いマスクをつけた部下たちを尻目に双眼鏡を受け取り覗いてみると

「赤い海軍マーク：海軍最強の部隊が一体何の用だ？」

「ねえおやびん、アイツらおやびんを捕まえに来たのかしらあ？」

訝しむフォクシーを他所にもう一人の側近であるポルチェが心配そうに言えばそう言えば4000万ベリーの懸賞金が自身の首にはかかっていたのを思い出し顔を青ざめさせる。

「ま：まさか、四千万程度であの赤カモメが動くわけが：」

「おやびん、やっぱ公認海賊に手出したのが良くなかったんだってば元々それで懸賞金がかかったんだし：」

「ぐ：うるさい！受けると判断したのはあっちの船長だろ！お陰でこっちは公認海賊許可を消された上に懸賞金までかかっちゃまってよお：」

ハンバーグの言葉にその時の事を思い出す。

相手方は公認海賊で、デービーバックファイトにおいて名高いフォクシー海賊団の噂を聞きつけよほど自信があったのだろう、わざわざ探して勝負を挑んで来たのだ。

接戦でありながらも勝負には勝ったがその後にはこれはいい、と考えたフォクシー自身がターゲットを公認海賊に変えた辺りから雲行きは怪しくなってきた。

まずは海軍各支部、ひいては制度設立に大きく関わるクリークの所に苦情が入るようになり、当初は双方の合意意思によるものだと静観していたクリークだったがこうも大きく騒ぎ立てられれば重い腰を上げざるを得ず銀狐のフォクシーは公認海賊許可を取り消し。

更に再三の警告に関わらずそれでも海賊旗を掲げるのを辞めなかったので違法海賊として懸賞金まで懸かり、その上略奪こそないと

は言え公認海賊、違法海賊問わずにデービーバックファイトを仕掛けていくスタイルは変わらず当初は100万ベリーからスタートした懸賞金は4000万ベリーまで膨れ上がっていたのだった。

「だが勝負から逃げるなんてなあ！漢が廃るってえもんだろ！」

「…それはいいがどうするんだ、銀狐のフォクシー。」

相手は噂に名高い赤カモメ、下手したら将官クラスが乗っているぞ？」

そんな気炎を上げるフォクシーに声をかけるのは一人の男。

三つ揃えのスーツにオールバックに撫で付けた髪、そしてフォクシー海賊団の印として目元にマスク、そしてその上から眼鏡

「ええい！船長若しくはオヤビンと呼べと言っているだろう!!デービーバックファイトのルールの一つ！敵船の船長に素早く忠誠を誓う…忘れたのか！」

「断る、船長の合意も何も、おれ達」の船は所詮寄せ集め…そんなザマでデービーバックファイトに勝ったの言ってもな。

まあここは隠れ蓑に丁度いい、それにまあ拾ってくれた事には感謝してやる、あのデブと狭い船でいつまでも一緒にゴメンだったからな」

「ちつ、生意気な奴だな…テメエもテメエの仲間もどうして癖がこんなに強えんだ？」

「別に仲間じゃない、言っただろう」寄せ集め」だと。

まあ気をつけることだな、相手は赤カモメ…しかも艦隊となると億クラスを想定している可能性もある、精々生き残れるように足掻く事だ」

そう言つて艦橋に去っていく男にポルチェエは

「むーねえおやびん、アイツちよつと生意気よお。ちよつとこらしめてあげちやおうかしら？」

頬をぶすーつと膨らませて見せるも

「…辞めとけポルチェエ、確かに生意気だが奴はそれを許される程強い…ポルチェエちゃんじゃアイツに勝つのは難しいだろう。」

奴だけじゃない、奴と一緒にこつちの下についた奴らはどいつもこ

いつもクセは強いが腕はたつ：今はこつちに従ってるのにわざわざ藪をつつく必要はあるめえ」

まあ何かあつたら自身が命を引き換えにしても子分どもは守ってやる：と考えながら赤い海軍マークを掲げた艦隊に対し毅然とした目つきを向けるのだった。

一方クリークはフォクシー海賊団の船を目視で視認した所で艦隊を停止、艦隊旗艦であるフィーネ・イゼッタ号のみを前進させると単身でフォクシー海賊団の船”セクシーフォクシー号”の甲板に降り立った。

フォクシー海賊団の特徴的な帽子とアイマスクの集団が固唾を飲んで警戒する中クリークは周囲を見渡し、その中に特徴的な髪型の男を見つけるとニヤリと笑い

「パーレイ」

と一言。フォクシー海賊団の船員が謎の言葉に首を傾げる中言われた本人、銀狐のフォクシーは

「フェーフエフェエ！驚いたぜ！そんな古臭いもんを持ち出してくるとはな」

「おやびん、いきなり笑い出してどうしたのさ？」

「そうよオヤビン！笑ってる場合じゃないわよお、ぱーれいつて何なのよお！」

いきなり笑い出し困惑する周囲を他所にフォクシーは落ち着いたのでか

「悪いなハンバーグにポルチエ、子分共も落ち着け！今から戦闘は無しだ！絶対に手え出すんじゃねえよ!!」

と指示、海軍相手に何の警戒も無くていいのかと困惑する周囲を他所に

「さつきとしろ!!海賊としての誇りを自分たちで汚すつもりか？」

フォクシーのその指示に渋々納得、先程までの緊迫した状態は多少マシになったのであった。

## 猫視眈々 ドンクリークさん

手を出すな、そう言ったフォクシーにクリークは満足げに

「ふむ…知っていたようで何より」

と言え

「ふえふえふえふえ、随分と古いしきたりを持ち出して来たもんだな。そんな掟とつくの昔に忘れ去られているぜ？まあおれじやなきやわかんねえだろうがな」

薄く笑いながら自慢げに腕を組むフォクシー。

「デービーバックファイトなんて古いゲームを今も信奉してるアンタならわかると思ってたさ」

そんな二人にポルチエやハンバーグは意味がよくわからなかったのだろう

「おやびーん、さつきアイツが言った”ぱーれい”って何なのお？」

「いきなりそんな事言われてしかも手出し無用って言われてもわからないよ」

そんな質問に周囲は頷きフォクシーは

「ふっ、テメエらが知らないのも無理はねえ…その昔、今とは違い海賊には掟つてのがあったのさ。」

そのうちの一つが”パーレイ”、古い言葉で交渉を意味する。

これの宣言以降交渉中の攻撃は決して許されず、仮に決裂してもお互いの船長が船に戻り、体制を整えてからでなければ戦闘の再開は行われない。

これを破れば海賊としての誇りなく自身は欲望のままに力を振るう外道であると言ってるようなもんさ。

…まあとつくの昔に使われなくなつて久しいがな、知ってる奴もほとんどのいないだろう」

と得意げに説明すれば周囲は成る程と納得し、流石自分達の船長だと囃し立てた。

「…で、そんな古い掟まで持ち出しておれに何の用だ赤いカモメの海兵さんよ。」

見たところアンタ将官クラスだな？おれを捕まえにでも来たか？」  
そう言つて油断なくこちらを見据えるフォクシーにクリークは

「紹介が遅れたな、海軍本部中将のクリークだ。

今回は少しばかり話し合いの場を設けたくてな、もちろん了承はしてくれるよな」

「本部中将：しかもクリークと言やあ赤カモメのトップじゃねえか！！」

ニヤリと笑えばフォクシーは相手の正体に愕然とするも今はパレーイを宣言された後だと思ひ出し冷静になる。

「：銀狐のフォクシー、貴様に対して今から軽い面談を行う。

結果如何によつてはお前は七武海に任命される可能性もあるからちやんと考えろよ？」

だがその冷静さとクリークの口から放たれた言葉に一気に吹き飛んだ。

「なあっ!?七武海だと！何でおれなんかが、おれより強いのはいくらでもいるだろう!!」

「落ち着け、あくまでも七武海候補だ：昨今の情勢については勿論知っているよな？」

「：そう言えばニユースクーで見たな、七武海の一部であるサー・クロコダイルの陥落、その後釜を探してるといわけか。

ふえふえふえ、それならわかるが何故おれなのかが解せんな」

「デービーバックファイトを用いた人取り合戦：海賊達にとつては絶対のこのゲームでお前達が潰してきた海賊は数多い：公認海賊も違法海賊も一緒にターゲットにしているのがアレだが：その行動にある程度の抑止力があると政府は考えたようだ。

「アンタも自分の異名くらい把握してるんだらう？なあ”海賊潰し”よお」

海賊潰し：原作と比べてこの世界では海軍が強化された：されてしまった。

それにより海賊とも呼ばれる勢力は違法海賊と認可を受けた公認海賊に別れ、そして主に海軍の捕縛対象である違法海賊は数こそ原作

と比べて少なくなつたもののその分強化された海兵達と争ううちに実力の底上げがなされていた。

当然そんな輩を相手にして無敗のフォクシー海賊団が弱いわけが無く、巷ではデービーバックファイトにより人員を、最後にはシンボルすら奪い瓦解させる事からその異名で広く知れ渡っていたのだ。

「ふえふえふえ、その名で呼んでくれるな。」

おれ達やあくまでゲームを楽しんでやってんだからな、そんなイカつい名前じゃ相手が逃げちまう。

大方懸賞金額が低いから御しやすいと踏んだか？ふえふえふえバカめ、狐つてのはなあ…可愛いだけの生き物じゃあねえんだぜ？」

ニヤリと笑ってそう言うフォクシーにクリークは真顔になると

「狐が可愛い面も獰猛な面もあるのは理解する…だがお前は可愛く無いがな？」

と思わず言つてしまい流石にフォクシーもこれには無理があると思つたのか

「ぐ…まあいい、何が聞きたい？別に勧誘では無いのだろう？」

崩れそうになる膝を伸ばしてそう聞くのだった。

一方甲板で話し合う二人を尻目に艦橋では

「…ちつ、よりによつてあの鈍熊が出て来るとはな」

先程フォクシーと話していたオールバックの男

「む、あの男は!!今こそわがカマイタチで…」

フォクシーマスクの上にサングラスをかけた細身の男

「おいおい…辞めとけよ傭兵野郎、パーレイを知らねえのか？」

それにおれ達を巻き込むんじゃないやねえ、やるなら一人でやってそんで死んでこい、ついでにあの豚も道連れにしてくれりゃ文句無しだ」

そしてフォクシーマスクに加えて顎に鋼鉄のギプスを嵌めて右手を布でぐるぐる巻きにしたがっしりとした体格の男。

「何がパーレイだ馬鹿馬鹿しい…生憎おれは傭兵だからな海賊の掟なんぞ知つた事か!!」

それにあの男はこのおれを侮辱し拳句の果てには拘束、あやうく監獄に入れられるとこだったのだぞ！その恨み今晴らさずしていつ晴

らすのだ!!」

細身でサングラスの男はそう熱弁するが

「…黙れ傭兵、テメエにかかざらつてる暇なんざねえんだよ。

これ以上ガタガタ抜かすんならまずはおれの爪をお前に向けてもいいんだぞ?」

凄みを効かせたオールバックの男の声に怯むもややあつて

「つ…ふん…いいだろう、今のところはまだ従つてやる。だが精々背中には気をつけることだ、月夜ばかりと思ふなよ?」

と一度手刀を構えるとその場から去つていった。

「…船長も大変だな、心から同情するぜ?」

「…黙れ元海兵、おれ達のような寄せ集めに船長なんて存在しねえよ。

それより赤カモメを見て騒ぎそうなデブはどうした?」

「ああ、あのデブならまたノロくなつてゐるぞ。まあ食うしか能の無いあの男には似合いだな。

それよりいつまでここにゐるつもりだ? テメエは探してる男がいるんだろ?」

「まあ今はまだ大人しくしておくさ、何せここはグランドライン…情報も何もかも足りねえ上に折角安全な住処をわざわざ用意してくれたんだ。

情報が揃うまでは精々従つておくさ、それに銀狐のあの能力はただでさえ厄介な上にあのデブの所為で更に面倒になったからな…

さあ銀狐、テメエはこの海賊達の世界で名を上げるか? 七武海になれば今のまま仲良しこよしの海賊団では居られないぞ?」

そう言いながらオールバックの男は薄く笑いつつ眼下で話し合うフオクシーとクリークを見つめるのだった。



## 空島の序曲

天高く、はるか一万メートル上空…そこから更に高い神（役職名、本物の神様では無い）の社にてエネルは退屈そうに欠伸をした。

今回、青海から来た人間達はきっちり入国料を納めたがだからといって試練を免除する事にはならない。

適当に言いくるめて空島の警察組織であるホワイトベレーを向かわせれば思い通りに手を出したので早速とばかりに超特急エビを向かわせ青海人の一部を船ごと拉致して生贄の祭壇に放置したが…

「これではつまらぬでは無いか…本来祭壇で待つ筈の生贄が勝手に行動しては助けに来るもの達と合流してしまう…

ヤハハハハ、これは罰が必要だな。…シユラ、船に二人残ってるようだからそいつらのどちらかを殺してこい」

「はっ、仰せのままに」

それと共に巨大な鳥に跨り生贄の祭壇へと飛び立つシユラを見ながら

「ルール違反には罰が必要だ…誰かの罪は誰かが死んで詫びる、当然よな青海人？」

エネルはニヤリと嗤うのだった。

そんな中攫われた四人を助ける為にルフイ、ウソップ、サンジ+ベラミーは四神官のうちの一人“森のサトリ”に玉の試練なるものを受けさせられていた。

「ちっ！さつきから面倒くせえんだよ!!全部吹っ飛ばしちまえば関係ねえだろうがあ!!スプリング…跳人（ホッパー）!!」

「おい…馬鹿野郎、そんなに跳ね回ったら!!」

勝手に流れる川を走る船から四人は叩き落とされ、更に船に戻ろうとすれば邪魔するのは一見丸い雲の玉。

しかしその中には武器や火薬が仕込まれ爆発したりする危険なものや何の害もないものなど大量の種類があり、これらを対処する間にも船は勝手に進んでいく。

とりあえず気に入らないながらも行く宛が無いので従っていたベ

ラミーだったが、あまりの相手のねちっこさにキレて自身のバネの力を用いて縦横無尽に飛び回り始める。

能力は聞いていたので慌てて共にいたサンジは止めようとするも時すでに遅く、当然そんな事をすれば玉雲はあっちにぶつかりこっちにぶつかり、触れた本人は一瞬の接触で平気なものの周りは阿鼻叫喚の地獄絵図となっていた。

そして一方本来助けを待つ筈の生贄：ちよつくら神様の顔を拝んでくると言ったゾロ、ロビンのこれだけ古い遺跡ならお宝の一つや二つあるかもという言葉を聞いて目を輝かせたナミの勝手に祭壇から抜け出した二人は森の調査をしつつ進んでおり、更に一方ではロビンは対岸の木々に飲み込まれた遺跡を双眼鏡で覗きつつ手紙に書いてあった内容を思い出す。

オーダーはダイアルの入手、邪魔が入る可能性は雷のロギアとその一党、更にゲリラも存在する事。

残念ながら目の前の遺跡や他の事柄については書いていなかったが、これは自身が考古学者であるから自ら調べるだろうという配慮だろう。

「…でも本当に不思議、どういう情報網なのかしら？」

とほつりとロビンが溢せば

「ん？何か言ったか？」

と、側で乳鉢で何かしらの薬を作っていたチョッパーが顔を上げる。

「いえ、ちよつと遺跡が木々に飲み込まれてるのが不思議だったのよ」  
「…気になるんならお前もナミ達と一緒にに行けば良かったんじゃないのか？」

「あら、そうなるよこの船に船医さん一人になるけれど？」

そんな風に薄く笑うロビンにチョッパーは震えながらも

「お、おれだって海賊なんだ！一人が何だってんだよ!!」

と宣言、まあ彼自身も戦闘能力はあるが仮想敵は空島の人間…ダイアルを使った戦闘を仕掛けてくるのは手紙に書いてあった通り考慮しているし、その場合彼一人だと命を落とす可能性もある…それが口

ピンがこの船に残った理由である。

「そう、じゃあ私はこの船の置かれている祭壇を調べたいのだけれど大丈夫かしら？」

「も、問題ねえ!!」

その言葉にロビンは軽く笑うと欄干を飛び越えそのまま下に着地

「：やはり最初に見た時に思ったけど千年は経ってるわね、対岸に所々見える遺跡も同程度と考えていいわね」

「おい！高さあったけど大丈夫か!!」

「ええ、心配してくれてありがとう船医さん。」

となると不思議なのは木々の成長具合：まるで遺跡が飲み込まれるように：この遺跡を作った人々はこれを想定していなかった？

そう言えば航海士さんが言っていたパイロブロインだったかしら：何処かで聞いたような：」

何処で聞いたのか思い出そうとロビンが目を閉じて集中して過去にDr. インディゴの研究に同席した時に何かを言っていたのを思い出そうとした所でバサリと大きな羽音と共に

「ふん、女が1人：あと1人は何処だ？いや、どっちから死にたい？」

巨大な突撃槍を持ち、大きな鳥に跨った闖入者が現れたのだった。

成る程：この男が敵という事かしら？、と男の言葉からとても友好的とは言えないと判断したロビンは思索の邪魔をされた事もあり

「船医さん敵よ！貴方は船をお願いね！」

速攻とばかりにその場から飛び上がり大きな鳥：三丈鳥と呼ばれる種類の鳥に迫るも

「ちっ！避けるフザあ!!」

その言葉と共に軽やかに後ろに退きロビンの蹴りは空を切った。

「厄介なものね、相手が空を飛んでる地の利というものは：」

そのまま祭壇に着地、そう零すロビンにシユラは

「てめえ、いきなり攻撃をかけてくるとはいい度胸だな女：なら生贄2人が逃げた罪はテメエの犠牲で贖ってもらおう！テメエの命をゴツドに差し出せえっ!!」

いきなりの奇襲を受けたからか、苛立たしげにそう吐き捨てる手

に持った突撃槍をロビンに構えるのであった。

## 空の者との激突

先手はシユラ、騎乗したフザの口から炎が吐き出される。

「っ！空中から乗騎による攻撃なんてまるで海軍の戦鳥騎ね！」

「ふっ！センチョウキがなんだか知らんがフザは口内にフレイムダイアルを仕込んでいる！相手がおれだけと思うなよ!!」

これにはロビンも軽く驚くも余裕を持って避けるがそこに更に追撃とばかりにシユラがランスを構えると高速で襲いかかる。

しかし空を飛ぶ鳥なんていうロビンにとってはまさにネギを背負ったカモ

「三輪咲き（トレス・フルール）：クラッチ!!」

フザの翼から生えた人の腕が翼の付け根、関節部分を無理矢理捻り予想だにしない攻撃にフザは翼を動かす事も出来ず墜落、シユラとフザは生贄の祭壇にしたたかに身を打ちつけた。

しかしシユラもさるもの、なんとか体勢を立て直し相方であるフザを見るがダメーヅが酷いのかもがくばかりで

「女あ!! テメエさっきの腕は何しやがった!!」

怒声を上げるも

「あら、戦闘中にお喋りするとは随分と余裕ね？」

一瞬踏み込んでからの素早い接近に慌ててランスを持ち上げればそこにロビンの掌底が入る。

「…テメエ、随分と不思議な能力を持つてるようだな…だが多少油断しただけだ死ねえっ!!」

それと共に後ろに飛びのきランスを突き出すシユラであったが

「そんなに物騒なもの向けなくてくれるかしら？」

ランスを持った腕から再び生える腕がシユラの手首を掴み情け容赦なく捻り上げる。

「がっ!？」

思わずランスを取り落としそうになるも戦闘を生業とするものとして取り落とす訳にはいかないのだろう、慌てて左手で支えなんとか構える。

「あら、結構強めに捻ったのだけれど…」

「舐めるなよ女あつ!!」

それと共にランスを真っ直ぐにロビンへと突き出すが軽い熱気に気づいたロビンは大きく飛び退く。

「…その槍、ただの槍じゃないわね?」

「ふつ、よく気づいたな…この槍はヒートダイアルを仕込んである、当たれば火傷で済むと思うなあつ!!」

それと共に再びランスを大きく振るうシユラだったが

「まあ当たらなければいい話なのだけれど、六輪咲き（セイスフルー）…ツイストっ!!」

突如自身の体から生える六本の腕、流石にそこまでだと考慮していなかったのか首、腕、足を掴まれるとそのまま大きく折り曲げられる…勿論背中側に。

ゴキリ、と嫌な音と共に崩れ落ちたシユラにロビンはふう、と一息つきつつ

「ダイアルを用いた戦闘…フレイムダイアルにヒートダイアル…恐らく他にも戦闘に流用されているダイアルはあるとして…これは初見殺しとなり得るかしら?これは本腰入れなきやいけないかもしれないわね…」

シユラの戦闘を見てそう考えるロビンであったが

「腹立たしい…ああなんとという腹立たしき女だ…愚か者への怒りの求道思い知れえっ! 紐の試練!!」

何とか立ち上がり何やら宣言すると再び立ち上がり槍を構えるシユラ

「…まだ立ち上がるのね?」

「舐めるなよ女あつ!!我が紐の試練受けてみよ!」

それと共に今度は猛然とランスを振るうシユラ、やはり右手首や身体にダメージはあるのだろう精彩は欠くものの猛然と振るわれる槍にロビンは回避を挟みつつ、手刀足刀を巧みに使いながら受け流していくも

「…何かしたわね、重力か疲労感でも操ってるのかしら?」

徐々に動かしにくくなる身体の違和感に気づき原因を探るべく問いかければ

「ふっ！気づいたか…だがもう遅い！お前は我が紐の試練の術中にある!!その見えぬ糸はどんな貴様の動きを奪っていく！今度こそ…その命をゴツドに差し出せえっ!!」

シユラは好機と見たのか両手でランスを構え真っ直ぐに、ロビンの心臓に向けて突き出す。

「見えない糸…動けば動くほど絡みつくという事かしら？」

が、当たりさえすれば間違いなく命中していたランスの切っ先に差し込まれるロビンの手、そしてその手に握られる貝殻、そして自身の渾身の突きがまるで無かったかのように受け止められたを見て

「貴様っ！何故青海人である貴様がダイアルを持っている!!」

一瞬思考が止まると共に

「さあどうしてかしら…六輪咲き（セイスフルール）・ツイスト!」

それと共に今度はシユラの身体を捻るように腕が動き

「ぶっ!?貴様まさかゴツドと同じ悪魔の実の…」

「さてどうかしら…それじゃあそのゴツドとやらに宜しくね?襲撃者さん?」

それと共にロビンは自身の能力で地面から腕を生やすとシユラの身体を掴みぽいと泉に放り捨てたのだった。

「おい！お前大丈夫か!」

戦闘音が止んだからか恐る恐る顔を出すチョッパーに

「安心してちょうだい船医さん?襲撃者なら追い払ったわよ」

「そ、そうか…あいつ強そうだったぞ?」

「恐らく神様とやらの手の人間でしょうね…それよりも敵はダイアルを戦闘に用いて来るわ…フレームダイアルやヒートダイアルなんかを武器として使っていたわ」

「武器として…?ヒートダイアルとかフレームダイアルって料理に使うやつだろ?」

「そうね…ああ、丁度いいわこれを見てちょうだい船医さん」

そう言つてシユラが取り落としたランスを拾い上げるロビン

「これにダイアルを使ってるのか？」

「ええ、ヒートダイアル：高熱を発生させるランス、言わばヒートランスでも言うべきかしら？どうやら柄を捻るみたいね」

そう言つてロビンがランスの柄を捻れば感じ取られる熱気：徐々に高まつていくそれと共にランスの先が赤熱化していく。

「おい：こんなのメリー号の上で振り回されたら：」

「下手したらこの船は火事、私達は船を失つて空島に取り残されていたかもしれないわね？」

そう言つて微笑んで見せるロビンに

「いやコエー事いうなよ!!」

チョップパーは目を見開いて突っ込むのだった。



## 銀色鈍色　ドンクリークさん

玉の試練を乗り越えてきたルフイ達＋α、この島が自分たちを空島に送る協力をしてくれたモンブラン・クリケットが探していた黄金郷だと発見したナミ達、そして空の者との戦闘を交え対策をしなければと考えたロビン達。

「うそつきノーランドの話が本当だったってのか!?ありえねえ!ありやただの童話だろうが!!」

「もー：アンタも強情ねえ、別に信じなくてもいいわよあたし達は黄金を探しに行くだけよ」

「くうー！黄金かあ！みんなで探そうぜ!!」

「へっ、ゲリラに神官：斬り応えのありそうなやつが結構いるみたいだな…」

「マントラ：…そう言えばあの男も近接攻撃は上手く避けていたわね：まさか見聞色と似た物が？でも能力は捉えきれなかったみたいだし…」

「ふっ、このおれの類い稀なる機転により無事におれたちは玉の試練とやらを乗り越えたってわけさ：まああのベラミーって奴が美味しいところ持っていてただけだな…」

「すげーなウソップ！そーいやこっちにも敵が襲ってきたんだ、アイツがやつつけてくれたんだけど…」

「ロビンちゃん！敵が襲ってきたって本当かい!？」

全員が揃った所で情報をすり合わせ、ロビンの発案によりやはり空島の事は空島の人間に聞くべきだという事でマストに掛けてあった笛を吹き鳴らしている頃

「これがシグマさんの故郷…」

とんがり帽子の少女が空にも届く高い高い山を見上げてポカンと口を開けていた。

天届く秘境”メルヴィユ”

クリーク一行は艦隊の休憩や補給を兼ねて停泊していた。

金獅子のシキを捕らえた島であり、シグマの故郷でもあり、空島に

行く時もここを經由して行った…そんな風に色々とクリークとは縁が深い島である。

クリークはアピスやギン、パールにモネと共にやろうと思えばここからでも空島に行けるな…などと考えながらも頭を振って考え直す。

まあどうせ空島は黄金の柱をパクったくらいだし原作とは変わらないだろう…万が一原作より情勢が悪くなってもロビンがいるし、緊急事態の場合には直ぐに連絡するよう電伝虫も持たせている、いざとなったら月歩で行けば済む話だなと考えながら

「さて…じゃあシグマ、アピスの事頼んだぞ？」

「ぐるー！」

とアピスをシグマの肩に乗せつつ頼めばシグマは元気よく鳴く。

今回アピスにはその能力もあり、ボディガードとしてメルヴィユのアニマルズをつけようという算段だ。

シグマは長年共にいた事もあり実力も高く特例で”海軍本部曹長”としての肩書きも持っている。実力だけならば既に大きく超えるものの流石に動物というのがネックなのかその昇進は遅くクリークが色々な伝手を使って何とか本部曹長の地位につけたのだった。

このメルヴィユの出身でありながら実力を持ってして頂点へと君臨、勝手知つたる庭でもありそんなシグマが護衛についてれば問題無いであろう…そう考えて向き直り一言

「さて、先ずは誰からだ？」

と告げる。

「ではオレから行かせてもらいます」

そう言つてガントレットにレギンス、両手にトンファーとフル装備状態のギンがゆっくりと構え、その隙の無さにクリークは関心しながら随分と成長したもんだと思いつつゆっくりと自身も構える。

鋭い踏み込みからの蹴りに飛来する斬撃を腕で振り払いお返しとばかりに正拳突きを放てば上空へと飛び上がるギン。

原作ではクリーク海賊団戦闘総隊長にして誰よりも命令に忠実に、相手に慈悲を持たず冷酷で鬼人の異名を持ちながら、クリークの身代わりとして海軍に捕まり逃げた先で出会ったのが当時、海上レストラ

ンバラティエにて副料理長を勤めていたサンジである。

彼に対して一食の恩を感じ、忠誠を誓っていた筈のクリークにも彼のターゲットとなったバラティエを見逃してくれるように懇願、それがクリークの逆鱗に触れ、毒ガスを浴び最後には錯乱するクリークを気絶させいつかグランドラインで会いましょう、とルフィ達に言い残し退場していった男だ。

しかしこの世界では幼少時、ストリートチルドレンをしていたギンをクリークが拾い、恩を返すとしてアンタの元で働かせてくれ!!と海軍に入隊、現在は海軍本部大佐にして独立遊撃隊総司令官であるクリークの副官であり六式使いにして覇気使い、長年鍛え上げた優れた体術を持ってして海賊を撃滅、若手のホープとして海軍内でも名高く将官になるのも間違い無いだろうと言われている。

六式を巧みに使いながら攻撃を仕掛けてくるギンにその攻撃を捌きなから

「随分成長したなギン、この分なら四皇に殴り込んでも幹部なら相手に出来そうだな?」

と問いかける。

「まだボスには勝てないですけどね…しかしボスなら四皇でも相手にできるかもしれませんねっ!!」

それと共に捻りを加えた両腕のトンファーがクリークの首を挟み込み、更にそこから身体を回転させての踵落としがクリークの頭部に轟音を立てて打ち込まれた。

「ふむ…なかなかの威力だな、両腕のトンファーで相手の身体に衝撃を打ち込み全身を弛緩させ、そこに頭上からの攻撃で地面とトンファーで両側から叩き潰すといった所か?」

「流石ですね…でもそこまでわかってて効かないとなると流石に自信を無くすんですが…」

微動だにする事なく攻撃を受け切ったクリークにギンは呆れながら言うも

「流石に鍛えている年月が違うからな、お前もかなり強い。自信を無くさず精進しろ…お前ならいつか俺を超えて自身の道を進めるだろ

うき」

「いえ、おれの進む道はボスと一緒にです！かつて命を救われた時からその思いは決して変わりません!!」

その言葉にクリークは苦笑しつつ、原作では誰よりもクリークの為に動いていたそういう所は変わらないのだな…と思いつつ

「ふっ、お前がそう考えるならそれでいいさ…さて次は誰だ？」

と残りの面々に問うのだった。

## 鉄壁雪女 ドンクリークさん

「では次はオレが行かせてもらいますよ？クリークさん」

「ほう、随分と自信ありげだが潜入中も遊んでいたわけでは無いようだな」

「そんな事してたら怖い怖い上司から怒られるじゃないですか…」

海軍本部少佐“パール”：原作では2番隊隊長を務め、鋼鉄の身体のうちここに盾を纏い戦艦の砲撃すら跳ね返すと豪語していたがアツサリとギンの前に崩れ落ちた男である。

この世界では密林にて遭難していたパール親子を助けるという縁があり、そして不注意により隠していた悪魔の実をパールが食べてくれていたのを父親たつての願いで海軍に入る事になった。

厳しい修行を乗り越えある程度の経験も積んだ所で艦隊勤務から当時懸念事項だったバロックワークスの潜入の為に海兵である事を伏せ、同じく潜入の為潜り込もうとしていたグラン・テゾーロの諜報関係を一手に担うハニー・クイーンと共に賞金稼ぎとして活躍し名を上げて無事に潜入、フロンティアエージェントのMr. 6としてここ数年は正体を隠しつつ色々な情報をクリークに流しながら過ごしていたのである。

「さて、じゃあまずは試させてもらおう剛砲・拳砲っ!!」

クリークの捻りを加えた右拳ががっしりと腰を落として構えるパールに突き刺さる…が、微動だにせず受け止めたパールは

「ぐっ…いや、大抵の攻撃は耐えられる自信があるけど試しでその威力はどうかと…一瞬死ぬかと思った…」

「いやいや試しさ、精々全身を武装色の覇気にて硬化した相手を轟沈させるくらいの威力さ」

「流石に限度があるんじゃないかと… とうにか少しダメージはいつてるんですが？」

拳を受けた腹部をさすりつつ言うパールだったが成る程、その部分が少し赤くなっている。

「まあ鋼鉄なら多少の攻撃は大丈夫だろう、俺もゼファアのおっさん

からよくやられたもんさ、さて続けて行くぞ！」

それと共に再びクリークの拳がパールを襲い、耳障りな音と共に受け止められた。

パールが食べた悪魔の実：カチカチの実は身体を鋼鉄のように変化出来る能力である。身体の硬度を増す：字面にすればそれだけが単純故に強力、鉄塊と違い動く事も可能であり攻撃に転用も可能な上にパールは長年の修練の末に鉄塊拳法まで身につけており身体強度だけなら海軍でもトップクラスに位置、最もクリークの拳はそれすら撃ち抜きパールにダメージを与えているが流石にこれは相手が悪いだけでパールも原作から比べるとその実力は大きく逸脱している。

お互いに高い身体硬度を持ち、更に実力で大きく勝るクリークが本気を出さない故かパールは奥の手である赤熱化を出しても打ち崩す事が出来ず、流石にこのままではいつまで経っても終わらないと判断したクリークがパールの実力を確認し終えた所で中断を告げれば早速とばかりに放たれる雪の礫。

「不意打ちが卑怯って言うかしら、クリークさん？」

勿論腕を振り払う事によって弾きつつ

「いや？海賊相手にしていると不意打ちなんぞ日常茶飯事だからな？」

と相手に答える。

元・ドラム王国従医長にして現在は独立遊撃隊における民間の医療協力者”モネ”、原作と同じく自身を自然現象と同じくする希少なロギア系悪魔の実の能力者にして、原作とは大きくその出自を変えた女性である。

原作ではドフラミンゴファミリーの一員であり、パンクハザードにて麦わら一味とぶつかり、そして最後にはとある手違いにより協力していた筈のシーザーに殺された美女であるが、こちらの世界では北の海に任務で来ていたクリークに同行していた当時からクリークの指導を受けていたロビンに物盗りを仕掛けた事でその人生は大きく変わった。

妹のシュガー共々地獄のような環境から掬い上げられ、十分な量の

食事を与えられながら修練と勉強に励み、更には優秀な医者や科学者の教えを受けて一人前と認められた所で医療大国として名高いドラム王国に留学、その医学知識に更に磨きをかけておりその事からクリークには並々ならぬ恩を感じている。

彼女が腕を振るえばそれと共に延長線上に走る雪の刃であるがクリークは避けようともせず今までの攻撃と同じく腕を振り払う事で雪の刃を打ち砕きお返しとばかりに離れた所で拳を放つ。

当然普通ならばただの空振りした拳だが鍛え上げられたその肉体から放たれる拳は拳圧と化してモネにヒット、その身体を大きく吹き飛ばすも相手はロギア。少しの間であつという間に元の姿に戻り今度は兎の形をした十数の雪の礫が大きく口を開き相手を噛み砕こうとクリークに迫れば

「ふむ、能力に関しては全く問題は無いようだな。

雪という他と比べてわかりやすい攻撃力が無い属性だが随分と上手く使えているようで何よりだ」

それと共に足を大きく振り抜いて斬撃を飛ばして十数の雪で出来た牙を？く兎を斬り払えば

「流石にドラムと比べるのはダメかあ…あの環境は戦闘だけで言えばわたしにとつてはテリトリーとも呼べただけだなあ…」

そうぼやくように言うモネ。

無理もない、雪のロギアにとつては万年雪に覆われるドラム王国は自身の実力を100%以上に発揮できる環境であつたからで言わばモネにとつてドラムは砂漠のクロコダイルと同じで周囲全てを扱えるのである。

それによつて何をしに来たかは不明だが急襲して来た黒ひげ相手にワポルが逃げ、混乱している所を圧倒的物量を持ってして黒ひげをドラム王国から追い出すという大金星を上げており、後は能力に関するの地力を上げていけば新世界でも上位に君臨出来るだろう、とクリークは考えながら氷柱のように変化したモネの腕を抱え込むとその懐に入り込み跳ね上げたのだった。

## 聞く少女 ドンクリークさん

クリークがそこらで拾った棒をゆっくりと振り下ろす。

「真上から一直線に振り下ろし」

それと共に一歩横にズレて棒を躲す”目隠しをした”少女、それに対してクリークは今度は左から

「右手側少し下から振り上げ」

それも迷いなく後ろに下がる事で回避、ならばと今度は右手で合図を出して正面から真っ直ぐ棒を突き出せば

「正面から突き」

それと共に身を振るようにして躲してみせると

「それから後ろにギンさんが正面から手刀」

そう言い放った所でまさに手刀を放とうとしていたギンの手がピタリと止まる。

「…ボス、まさか一年も経たずにここまでやられると自信が無くなりそうなんです」

気配を消していた筈のギンはまだ13の少女に見抜かれた事に少しショックを受けるも

「能力と余程相性が良かったのだろう、そう気にする事でも無いさ…アピス、目隠しを外してもいいぞ？」

クリークのその声にアピスは視覚を封じていた真っ黒な布を解くと数回目を瞬かせる。

「どう？おじさん、全部合ってた？それからギンさん、気配を消したらそこに何も無くなるんだもん、消すんじゃないかって誤魔化す方向にしたら読めなくなるんじゃないかなあ？」

「ああ相手の攻撃を読むのに関しては問題無いだろう、回避もそこそこ出来るようだしな」

「気配を消すでは無く誤魔化す…アピス嬢ちゃんも難しい事言うもんですねボス」

「はははっ、精進しろよギン？」

「逆にクリークおじさんは戦闘となると気配が強すぎて他が読みにく



くなるんだよねえ…周囲がおじさんの気配で塗りつぶされると言うか何と言うか…だからすぐに居場所わかっちゃうんだよねあ」

「まあ気配を隠すなんざ性に合わないからな、しかし回避等は問題無いとして後は攻撃力か」

「それはこの子達がいるから大丈夫だよ！ねー、タローボー？」

「ぶもっ!!」

そう言いながら自身の膝丈の高さも無い、人の頭部くらいの大きさのバッファロー的な動物”達”を撫でるアピスにクリークは思い出す。

まだ東の海にて麦わら一味の追っかけをやっていた時にとある縁により知り合った少女”アピス”

アピスはヒソヒソの実という悪魔の実の能力者であり、その能力は”動物の心を聞く事が出来る”という戦闘だけで言えばあまり役立ちそうに無い代物…しかしクリークはその能力の可能性に気づいた。

動物の心を聞く能力、ヒソヒソの実の能力は本人に戦闘能力が無くても代わりに戦うものがいればいい話であり、率直に言えばグラウンドラインに蔓延る海獣達を交渉の元従える事が出来ればそれだけでとつもない脅威と化す…未だに成功してはいないがもし本人の力量が更に上がり海王類の心も聞こえるようになればそれはかの古代兵器”ポセイドン”と同じく絶大なる脅威となり得る故にクリークは諸々の件を片付けた後にすぐさま本人や保護者であるボクデンと交渉、可能性に気づく政府や海賊から自分の身を守る程度になるまで身柄を預かる事となり今に至る。

「しかし凄まじいな、まだ一年も経たずにここまで読めるようになるとは驚いた」

「ケンブンシヨクのハキってやつ？うーん、本音を言えばいつも動物達と同じように声を聞く感じで”今からどこをどう攻撃するぞ”とか”こう近づいて不意打ちをしよう”とかそんな感じで聞こえるんだよねー」

「む？それは人の考えている事がわかるという事か？」

「ううん、そういう事じゃ無いんだけど…なんていうか自分に向けら

れた感情？意思？そんな感じのが臆げにわかるというか何というか  
：感覚的なものだから説明しづらいなよねえ…」

そして最低限自分の身を守るようにここに来るまでの過程で最低限の体力づくりや身体の動かし方など色々教えていたが、その過程でアピスのその能力故かは不明だが彼女は見聞色に凄まじい適正を見せた。

目隠しをしていても周囲の状況が理解できるのは当然として相手が自分に向けた意思を読む事も、攻撃を読み取る事も可能でありこのまま順調にいけば見聞色の覇気使いとして大成するであろう：最も見聞色と違い適性がありなかったのか武装色に対しては不得手としているものの”本人単体ならまだしも”アピス達の戦力はかなり高い。

心聞き、話せると言う絶大なるメリットの元で身近なだけでも六式と覇気を使う”シグマ”、トリトリの実を食べたガトリングガンである”カフウ”、海中で有れば比類なき力を発揮する”マガツノ”という面々が揃っている上に今回のメルヴィユ訪問においても新たに牛？バツファロー？らしき不思議動物を五匹程仲間を迎え、軽く確かめたが五匹の連携は中々のものでありそこら辺の海賊程度なら苦もなく片付ける事が可能だろう。

何はともあれ麾下のメンバー達の成長具合の確認とアピスの新たな友達探しは上々に終わりクリークは満足げに頷くと天高く聳えるメルヴィユの山を見上げて

「さて、向こうは今頃何をやってるのかねえ？」

と呟き、アピスもそれに続いて雲に隠れたメルヴィユを見上げるも何も聞こえなかったのか不思議そうにクリークを見るのだった。

## 空島大騒乱の始まり

実際に戦闘を行ったルフィ達やロビンの話やナミ達が発見したこの島の真実、そして笛で呼び出したガンフォールは”お主らが危険だと思つて慌てて飛んで来たのだが…”と、戦闘では無いのに呼び出した事に呆れつつも色々とその空島の事情やダイアルの事などを教えてくれた。

そうして各々の情報を総合的に纏めて現在いるアツパーヤードがかつて謳われた黄金郷だと断定した一行は黄金を探しに行く事に決定、今日はもう遅いのでしつかり準備を整えて明日から行動開始となった。

明けて次の日、ダメージを受けていたものの何故か直っていたメリー号に騒ぐ一幕があったものの、一味はルフィ、ゾロ、ロビン、チョップとついでにベラミーの黄金探索班とナミ、ウソップ、サンジ、ついでに余裕のあつたベリーを積んでボディガードとして契約を結んだガンフォールのアツパーヤード脱出班の二組に別れると早速出発、自身達の船長より懸賞金の高い（と思つている）ベラミーの扱いは結構揉めたのだが今は大人しくしていても鬼の居ぬ間に…という可能性もあるとしてルフィと同じ探索班に組み込まれた。

とは言え南側の遺跡に向かう筈の探索班は途中で大ウワバミが乱入してバラバラになった後で2人ほど自信満々に周りが迷子だと呆れ南側へ向かうルートから明後日の方向に、1人は大ウワバミからメチャクチャに逃げた為ルートから斜めに逸れ、2人は元のルートに戻つて来たがいつまで経つても周りが戻つて来ない事にひよつとして自分達がルートから逸れたかと首を傾げるも周囲の景色を見渡して、この場所で間違い無い筈だともう暫く待つのだった。

「…あのくそゴム野郎、人をこんなところに連れてきた癖に迷うとかありえねえ」

「あら、逃げ出す絶好のチャンスじゃないかしらハイエナさん？」

暫く待つてみたが全然来ないルフィ、ゾロ、チョップの三人にベラミーはコメカミをひくつかせつつ言えば木の袂に腰をかけて本を

読んでいたロビンがそう返す。

「はっ、こんなおかしい場所に連れてきておいてどこに逃げるってんだよ…おい考古学者、こっからは別行動といくぞ」

「何か上手い手でも思いついたのかしら?」

「違い、おれはあのくそゴムを探しながら遺跡に向かう。だからテメエも他のルートで遺跡に向かえ、そうすりゃ運が良ければ遺跡で集合できんだろ」

いつまで経ってもルートに戻って来ないルフイ達に痺れを切らしたのかそう提案するベラミー。

「あら、わざわざ船長さんを探しに行くなんて律儀なのね?」

ロビンは口には手をあてつつ揶揄うように言えば

「けっ、勘違いすんなよ?おれはあのクソゴムにやり返してえだけだ…3900万如きが巫山戯た事言ってるじゃねえぞ?」

凶暴な目つきでロビンを睨みつけるベラミー、それに対してロビンは

「あら怖い、じゃあ遺跡で合流って事で船長さんの事は宜しくね?南の方角はわかるかしら?」

くすくすと笑いつつ一応確認を行っておく。

「舐めんな、グランドラインの海ならまだしも太陽か星が見えてりや陸の上で方角を見失うわけねえだろ…:というか一船の船長がなんでそれが出来ねえんだ!!」

「船長さんは半ば本能で生きているもの…:それより気をつけてねハイエナさん?今日は朝から”随分と森が騒がしい”わ、敵対者には気をつけてね?」

「気配でも読んでんのか?まあ誰が来ようとこのおれの力の前で立つてられるわけねえがな!!クラウチング…:発条人(スプリント)!!」

その言葉と共にベラミーは足をバネに変化させると凄まじいスピードで森に入り込みあつという間に姿を消したのだった。

一方残されたロビンは

「さて…おじさまからのオーダーはダイアルの入手との事だけけれど…まあ大地を取り戻そうとする先住民の子孫に神様とやらの部下…随

分と相手は多いみたいだしそれを当てにしておこうかしら?」

と考えつつとりあえずは当初の予定通り遺跡に向かって歩き出せば暫くしたところで

「メエー・貴様はゴツドの言っていた青海人だな!!ゴツドの命によりここで死んでもらうぞ!!」

と言いながら目の前に降り立った1人の男。

スキンヘッドでまるで羊のような見た目の男は目の前で掌をこちらに向けて構えたのだった。

「…神様とやらの部下かしら?」

「その通り!我らは神兵:我らがゴツドの尖兵である!」

「…その手のひらに固定しているのはダイアルかしら?」

「ふつ、よくぞ見破った!これは斬撃員(アックスダイアル)!!貴様はこの斬撃の前に命を落とすと知れい!!」

「アックスダイアル:初耳ね、珍しいダイアルなのかしら?」

自身の恩人からの情報にも、昨夜聞いた先代神からの情報にも無かったダイアルにロビンは少し興味を抱きそう聞けば

「ふふふふ、それもそうだろう:何故ならこの斬撃員はスカイピアには存在せず我らがビルカの固有種だからな!!そしてこの斬撃員は斬撃を溜め込み放出する!!」

「へえ、一般的なダイアルと違って随分と物騒なダイアルみたいね?」  
「さて:…そろそろ御託はいいだろう青海人よ、我が斬撃員の前に死ぬがよい!!」

そう言つて宙に飛び上がり右手の掌に固定したダイアルをロビンに当てようとした神兵の男だったが

「色々と情報がありがとう、そのダイアルはもらっていくわね?:…鈍熊流兵葬術・牡丹!!」

それと共に一步左足を下げると右足が弧を斜め上に描きながら強烈な後ろ回し蹴りが襲いかかってきた神兵に向かいその頬をロビンの踵が抉り抜き

「いほおっ?」

そのまま神兵の男は巨大に育った樹の幹に強かに身体を打ち付け

られると

「き…きさま、我らを敵に回してただで済むと…」

「ごめんなさい、でも先にこちらを仕留めに来たのは貴方よ？当然やり返される覚悟はあったのよね？」

そう言いながら痛み故か動けない神兵に近づき手に固定していたダイアルを取り上げるとダイアルの底面を神兵に向け

「ばっ！キサマ何を!？」

「それじゃあね、親切な神兵さん？」

ダイアルの頭頂部を押すと走る数本の斬撃…その攻撃に神兵の男は呻き声をあげる事も出来ずに沈黙したのだった。

## 空にて開く大輪の花

無事にビルカの固有種であるアックスダイアルを手に入れたロビンはそれから道中の遺跡を調べつつ”神兵とやらの上位に位置する神官ならダイアルもいいものを持つてるかしら”と考えながら歩を進めていた。

最初の神兵以降特に襲撃者も無くゆつくりと進んでいたが

「見つけたぞ女あつ!!」

そこに襲いかかる火炎放射、面倒なのが来たわね…と思いつつ軽く回避して襲撃者を見上げればそこにいたのは巨大な鳥、フザに跨ったシユラ…生贄の祭壇で船を襲撃してきた神官であった。

「…また貴方なの?」

「黙れ!昨日の恨み、ここで晴らさせてもらおうぞ!!」

「私は貴方に用は無いのだけれどね?トレスフルール…」

そう言つてロビンが能力で自身の腕を三本、シユラの腕から生やし関節技によつて早々に片をつけようとしたが

「それは昨日見させてもらった!!紐雲っ!!」

その腕は何本もの太い糸によつて動きを止められた。

「あら、そういう使い方も出来るのね?」

「フハハハッ!我が紐雲は雲貝より生成されその太さは我が自在!紐の試練で使う事は無いが我が本領思い知れ!!」

それと共に身体の動きを止めた極細の状態と違いある程度目に見える太さの糸がロビンに真っ直ぐに向かうも見えているのなら読むのは容易いとばかりにヒラリと避けるロビン。

「雲貝ならば下では使えないし奪つても無駄ね…」

「…時に女、おれのフレイムジャベリンはどこにやった?」

糸を生み出すと言うダイアルにロビンは惹かれるもそれが雲貝である事に落胆を隠さず言えばシユラが手を止めて聞けば

「ああ、それなら槍を使う人間に渡したわよ?私の本領でも無いし」

そう軽く言つてその言葉にシユラはコメカミをひくつかせる。

「貴様あ…何処までおれを虚仮にするかあつ!!」

それと共に手に持った細長いランスを振り下ろすシユラ

「あら、既に持つてるからいいじゃ無いの」

「これはタダの予備だ！我がフレイムジャベリンには劣る…まあいい、貴様を殺し我が槍を取り返すまでだ！紐雲!!」

それと共に大きく糸が複数本広がると大きな網となりロビンに襲いかかるもロビンは隠し持っていたナイフを引き抜くと紐雲を切ろうとするが

「っ！思ったより頑丈ね！」

「フハハハッ我が紐雲がその程度の刃物で切れるわけなからう!!フザ！一気に決着をつけるぞ!!」

それと共に上空に大きく飛び立つフザとシユラ、まるで鎌のようにランスを先端に身を小さくし急降下、網に捕らえられたロビンに向かうも

「目立つからあんまり使うつもりは無かったのだけど…そうも言っ  
てられないわね千紫万紅・巨大樹（ミルフルール・ヒガンテスマー  
ノ）!!」

「なっ！なんだそれは!!いや、このまま貫くのみ!!」

それと共に地面から花開くのは千本という腕がより集まり巨大な一本の腕と化したロビンの腕、いきなり出てきた超巨大な腕にシユラは驚くも貫いてしまえばいいとばかりにそのまま真っ直ぐに突っ込むが

「拳砲（ポワンカノン）!!」

巨大な腕は網となって動きを妨げていた紐雲だけで無く周囲に保険としてシユラが張り巡らせていた糸の試練さえブチブチと引き千切りながら天に拳を突き出し

「なっ!?ぐがああっ!!」

”腕だけと言えど鋼鉄の硬度に変化した巨大な腕”に接触したランスは質量の違い故か当たると途端にひしゃげ、シユラとフザはスピードを殺す事も出来ず巨大な拳の衝撃を全身に受けてそのまま殴り飛ばされ

「…やっぱり拳は慣れないわね」



殴り飛ばされそのまま遠くに飛んでいったシユラを見送ったロビンはフツと巨大な腕を消失させてそう零すと軽く腕を振り探索に戻るのだった

千紫万紅・巨大樹拳砲は千本の腕を纏め上げ超巨大な一本の腕を作り上げて、更にクリークから教えを受けた鉄塊を用いての正拳である拳砲を繰り出す技である。

鉄の硬度を持つ巨大な拳ゆえにその破壊力は凄まじく、当たれば一撃必殺となり得る超質量の攻撃ではあるが、その巨大さゆえに目立ち、重く、その単純さ故に酷く読み易い故にロビンは普段は使う事なく専ら少ない腕での関節技と近接格闘を用いて戦っていた。

だが今回は相手が”空を飛ぶ”という特殊な条件に当てはまっており、更に自身は動きを封じられていたのでやむなく使用する事となったが、これがなければ高い高度からの急降下突撃故に大きなダメージは免れなかっただろう。

そして再び歩き出すロビンだったが見聞色の覇気、マントラと自身のロギアの能力でこの空島の全てを神の社にくつつろぎながら見ていたエネルギーは

「ほう…初手から番狂わせか、シユラが落ちたぞ？」

とボソリと誰に言うわけでもなく零す。

「なんとシユラ様が!？」

「ヤハハ、奴もこの空の戦いを甘く見たのだろうか…まったく馬鹿なものだな」

「し、しかしこの6年間不落だった神官が昨日に引き続いて2人も…これは一大事では？」

「ヤハハハハッ! やられたものは仕方が無い、”神の御加護”がなかったのだろうか!!」

そう言いながら今代の神にして雷のロギアである”エネルギー”は言い捨てるのだった。

「しかしシユラをやったあの青海人の女は妙だな…マントラで上手く読めぬな？」

シユラを打ち破ったロビンに対し疑問を少しだけ残して。

## 大いなる絶望と僅かな希望

ロビンから神官長ヤマへの尋問やベラミーとゲンボウの戦闘などがあつた一方で麦わら一味の船長であるモンキー・D・ルフィはシャンディアの戦士”ワイパー”と交戦。

激しく戦闘する両者であつたがとある事情、大ウワバミの胃袋にルフィが飲み込まれ戦線離脱と言う一幕があつた為両者の決着は付かず、更に時間をかけてようやくルフィは”アイサ”という名のシャンディアの少女と脱出した時には状況が更に混沌とした状態となつていた。

「おいゾロ！しっかりしろ!!お前がいてなんでこんな…」

何とか大ウワバミのノラが気絶してる隙に脱出したルフィとアイサは暫くしたところで見つけたのは黒焦げになつた数人

倒れ伏すゾロ、ガンフォール、チョップパーにベラミー

「なっ！バネ男も！しっかりしろ！誰にやられた!?!」

「ワイパー！うわー！ん！ワイパー!!」

そして少し離れた場所にはシャンディアの戦士であるワイパーにアイサが縋り付いて泣いていた。

「あのバズーカの奴まで…強えのに誰が一体こんな…」

「エネルギーだよ！こんな事が出来るのアイツしかないよ!!」

アイサがそう涙声で言えば

「テメエこそゴム…どこで油売ってやがった…」

「バネ男!!大丈夫なのか!?!」

アイサの声で意識を取り戻したのだろう、いつもと比べものにならない程弱った声で何とか絞り出すように言うベラミー

「これが無事に見えるつてののか…ゴホツゴホツ！」

「お、おい！無理すんな！休んでろ！」

「…テメエんとこの航海士連れて行かれたぜ」

「ナミが!?!」

「あとあの雷野郎、この国ごと消す気だぜ」

それからベラミーが息も絶え絶えに語つたのはエネルギーの計画、フェ

アリーヴァースとやらに旅立つ前にこの国ごと全て地に落とす計画であった。

自分たちの村も含まれる事を聞いて絶句するアイサだったが

「…アイサ…か？」

「ワイパー!!気が付いたの!?!」

「バズーカの奴!お前も無理すんな!」

ワイパーのその声に気づき振り返る。

「…奴のどこに行くつもりか？」

「…アイツを、エネルギーを止めなきゃわたし達の村だけじゃ無くスカイピアが落とされるんでしょ!?!黙って見てられるわけないじゃん!!」

「…青海人、テメエらは気にいらねえ…だが今はテメエに頼むしかねえ…何かあつたら死んでもテメエを殺してやるぞ」

「任せとけ、バズーカ男!」

「ぐうっ!!…アイサ、こいつを持ってけ…」

そう言いながら手に持っていた大振りのナイフとナイフケースを渡すワイパーに

「重たっ!?!これ…確か青海人から奪ったっていう…」

それはアイサの手には少し大きい大振りのナイフ、空島には存在しない筈の鉄で作られたナイフは不思議な事にエネルギーを刺した時に雷撃を感じなかった事から何かしらタネがあるとワイパーは睨み少しでも保険になれば、とアイサに渡す。

「理屈はわからねえが…こいつは奴の雷を通さないらしい。ゲホツゲホツ!…これがないや喋るのも無理だっただろう…」

「…わかった、今はしっかり休んでワイパー!ワイパーが大事にしてる宝物、わたしが預かるよ!後の事はあたしとルフィに任せて!」

そう言ってナイフをケースにしまい両手で抱え上げるアイサ

「おう!ナミの奴も取り戻さきやいけねえんだ!お前は大人しくしてろ!」

「…動けるようになったら直ぐに追いかける」

ワイパーはそう言って呼気を少なく、少しでも早く動けるようになろうと静かに、そしてルフィは再び気を失ったベラミーをそつと横た

え、アイサのマントラ：見聞色によりまだ動いている気配二つと酷く読みにくい気配一つを頼りにルフイは強い決意と共にそちらに向かうのであった。

一方エネルギーが先代神の部下を働かせ作らせていた空飛ぶ船”マクシム”

マクシムに驚いたものの油断なく何とかここから逃げ出さなきゃ…と周囲に目を配るナミと悠然と船に乗り込むエネルギー。

そして船内で作業をしていたロビンは人の気配が来るのを察して息を潜める。

「…思ってたより早かったわね、さっさと撤収したかったのだけれど」  
そう言いながらも手は頑丈に固定されたダイアルを静かに丁寧に装置から引き剥がしていた。

何故ロビンがここにいるか：シユラ撃破の後でロビンの元に現れたのは神官長ヤマ、巨大な体格を持つ敵であったが遺跡をなんとも思わずむしろ過剰に破壊した事によりロビンの逆鱗に触れ複数の関節技により撃滅、そして神兵長なんて役職ならば…と拘束して尋問すれば遺跡から黄金運び出した事や、その黄金を集めてエネルギーが巨大な兵器を作っている事など色々と情報を仕入れ、それならば…と場所だけ聞いてヤマを崖下に放り捨てたからである。

予定ではさっさとダイアルだけもらって撤退するつもりだったが頑丈に固定されていた為時間がかかりまだ半数も取り除けていないという状態であり、どうしたものか…と考えているとそこにまた新たに二つの気配

「目抜き咲き（オツホス・フルール）」

甲板に目を咲かせて状況を確認すればそこには神・エネルギーと自身が所属する一団の航海士、反対側には船長と横にいるのは恐らく服装からして先住民の子孫であるシャンディアの子供だろう。

そしてぶつかるエネルギーとルフイに

「…雷のロギア相手にゴム、天敵となり得る能力だから相性は抜群なんだけれど…神が何処まで対応してくるかが問題ね」

ロビンはそう思いながらも観察を続ける。

案の定これまでどんな相手でさえ一撃の元に葬って来たエネルギーの放電や神の裁きといった純粹な雷系の技は一切ルフィに効果を及ぼさず、更にルフィの拳は今までどんな物理攻撃も無効化してきた肉体に当たるといふ結果に混乱するエネルギー。

しかし流石に能力だけで頂点に君臨してる訳ではなく混乱はあったが体術主体に切り替え手に持った棍で喉を突き壁に縫いとめるも打撃無効と知って素早く後退、少し考え手に持った黄金の棍を電熱で矛に変化させる。

流石にそうなれば一方的とは行かず斬撃と電熱の前に攻めあぐねるルフィ、更にエネルギーは隙について方舟”マクシム”を起動し更に状況は加速するのであった。

## 四百話記念　もしも彼が原作に忠実だったら？

小舟に満載された状態で薄目を開けて遠くになっていくメリー号とバラティエを見送り横に目をやればいつまでもバラティエの方に手を振るギン。

そして完全に見えなくなったところで傍に倒れ伏していた大男が起き上がり腕を回し軽く伸びをすれば

「なっ!?目覚めるのが早すぎる!!」

そう言つてトンファーを取り出して気絶でもさせようとしたのか大きく振るうギンに

「落ち着け、今更どうこう言わねえよ…」

凄まじい速度で振われた高い威力の攻撃を男：クリークは事も無げに受け止め”あの冷酷非道な機械みたいな男が変わるもんだ…”と感慨深げに思いながらもトンファーを受け止めた手に力を込めつつその手から取り落とさせた。

「ぐっ…アンタのやり口は良く知ってる、回復した所でまたあの海上レストランを襲おうってハラだろう、なあ”騙し打ちのクリーク!!”」

トンファーを失つても恩人の乗っているあの船には行かせない、と闘志を剥き出しに構えるギンにクリークは嘆息しつつ

「…だから落ち着けと、それとも何だ?グランドラインに行つて奴と再会する前にこの東の海で朽ちるつもりか?」

そう言つてゴキリと指を鳴らして構える。

常人を超えた怪力とウーツ鋼の鎧に大量に仕込んだ武器、それらが首領の強みだと思つていたギンだったが、鎧も武器も全て壊された”何も無い”目の前の男から立ち上がる気迫は尋常なものでは無く覚悟を決めた筈のギンも気圧されたのか一歩下がらせられる。

「ああは言つたが今更…グランドラインになんておれはいけっこないですよ、どつかの誰かさんの毒ガスを浴びたこの身体じゃああと数時間待つとも知れないですしね…」

アンタの使つた毒ガスのせいだろ?と暗に口の端から血を流しながら自嘲めいてそう言うも

「はあ…俺が入念に調査した毒だぞ？テメエの食事には毎回徐々に量を増やしながら毒を混ぜてたんだ、そんなんでくたばる程ヤワな調整はしてねえ筈だが？」

血を吐いてんのは気管の表面が炎症でやられてるからだ、安静にしてりゃそのうち治る…あとこれも飲んでけ」

クリークがブーツの底から取り出した包みを受け取りつつもギンは愕然とし、そう言えば”ドレッドノート・サーベル号”で幹部達の食事は全て首領がいつも手作りしてたな、と思い出しいつもの食事に毒が入っていたと聞き軽く頬を引き攣らせる。

「…昔から読めないお人だったが…首領、アンタ一体何がしたいんだ？」

さっきの戦いもそうだ、違和感はあるがさっきの気迫で確信した…あんた本気で戦ってなかったんじゃないか？」

その言葉にクリークは眉を上げ

「ほお…そこまで読めたか、流石グランドラインで一味に合流するだけあるな、これはグランドラインに行く前に育て甲斐がありそうだと軽く眩くだけ。」

「っ…あの命懸けの戦いを馬鹿にしてるのか首領？本気も出さずに船も奪えず！無様に麦わらに負けて！アンタは一体何をしてえんだよ！」

その態度にギンは猛然と捲し立てる、もし本気で目の前の男が戦っていたら…自身が憧れた男のあんな無様な姿は無かったのではないか？、そう考えてしまったのだ。

「だから落ち着けと…それともなんだ？おれが麦わらとコックを血祭りに上げてあの海上レストランを奪ってしまえば良かったって言うつもりか？」

クリークのその言葉に

「っ…そういうわけじゃないですが」

と言葉に詰まるギン、それを見てクリークは

「なあギン、世の中には必然ってもんがあんのさ。」

”おれが海賊艦隊を作るのも”、”第一回のグランドライン遠征が

失敗するのよ”、”お前があのコックに救われるのよ”、”おれが麦わらに敗れるのよ”、”そしてお前がグランドラインで…まだ出て来てなかった新世界か？まあ、グランドラインで麦わらと再会するのよ” 全ては必然ってわけだ。

全ては必然なんだよ、偶然なんてねえあるのは必然だけだ…これから先あの麦わらの周りでは次々と嵐が起こるだろうさ、そしてお前はそんな男とグランドラインで再会を約束した男…きつとあのコックの窮地を救う事になる筈だ…だからこそお前も今のままでは力不足、しつかり鍛え上げてやる。

途中までしかわからねえ以上それが退場した俺に出来る唯一の事だからな…」

ギンはその姿に”まるで自分を通して他の人間を見ているような” そんな不気味な違和感を覚えるのだった。

”騙し打ちのクリーク”…東の海で最強最大の海賊団と専ら言われており賞金2000万ベリーと東の海にしてはかなりの高額賞金首の海賊である。

彼を総督とする武装集団は”ドレットノート・サーベル号”を旗艦として海賊船75隻、7500人の兵隊を擁する大組織で勿論そんな大人数では海賊稼業だけでやっていける訳もなく東の海では海賊であると共に業界最大手の傭兵団でもあった。

報酬によっては何でもやる…そんな彼らが突如として活動を中止、偉大なる航路に入ると決定した時は賛否両論であったが彼らが海難に遭い旗艦を残してほぼ壊滅したとニュースになった時は多くの者が”やっぱり…”と納得、それ程までに当時はグランドラインと言う場所は恐れられていたのであった。

普通だったらここで折れていたかもしれない…だがこのクリークと言う男は普通では無かった。

首領クリーク、彼には前世の知識があった。

そしてその中であつた架空の冒険活劇、それが好きであり自身がその世界にいると知った時にはとても喜んだ…だが彼は自身が物語の途中で主人公に倒されるいわゆるやられ役だと知った時にそれは深



く、深く悩んだのだった。

わざわざ好き好んで殴られに行きたくはない…だが自身はやられ役ではあるものの”主人公の仲間フラグを立てる”という重要なフアクターとなりうるやられ役…ここで逃げては原作の通りに進まず、これから先の世界を巻き込む主人公のあの大冒険も無くなってしまうかもしれない…それは許容できない。

ならば原作と同じように行動し、原作と同じ結果になるように動けばいい…そう結論を出した男は臆げな記憶を頼りに自分が劇中でどんな行動をしたか、何と言っていたかを必死で思い出した上に無闇矢鱈と命を奪う気も無いので周囲の人間も鍛えつつその名を上げていく。

お陰で原作より少し多くの数の男達が傘下入りを希望、目標があつたクリークは快く承諾し”原作と同じように装備を作り”、そしてそれらを使いこなすべく練習し、更にはイレギュラーがあつても対応できるように知識を元に戦闘力を磨き続ける傍、夜な夜なフル装備をして鏡の前で

「うっとおしいわア…：もうちょつと腕は上か？…うっとうしいわア!!…もうちょいドスの効いた感じか？うっとうしいわア!!…よし、通しでやってみるか…」

と台詞とポーズを原作と同じになるように練習し…そしてとうとう東の海でライバルとしてこちらを敵視しているバギーが討伐されたとの報告にとうとう動き出した。

まずは失敗すると知っていて海賊艦隊75隻を率いてリヴァースマウンテンに向かうことすらせず真っ直ぐにカームベルトに、風も波もないのでオールで漕いで強行突破を図る。

勿論そんな事すれば海王類が黙ってる筈も無くカームベルトを無理矢理抜けてグランドラインに入った時には船は半数近くに減り、更にそこに襲い掛かるのはグランドラインの出鱈目な気候、嵐に雷、雨に雪、尋常ではない気候に翻弄され更に艦隊は数を減らし、そして鷹の目を引きつけながらもカームベルトに再度突入、スピード優先の為海王類は長年の修練による巧みな槍捌きで尾やヒレを切り落とし再

び東の海に舞い戻る。

原作と同じになるように海軍が追ってきた際にはギンに影武者になるように命令して送り出し、そして不安はあったもののその目論見はうまく行き次にギンとクリークが合流した時にはギンはバラティエでサンジに助けられ、そして案内を買って出たのだった。

それからは練習の成果もあり”多少の違いは色々あったものの”概ね事態は原作の通りに進行し絶対に痛いだろうなあ…と思いつつ力を抜いて主人公の攻撃を無防備に受けた所で気絶したフリをする。

そして最後の一芝居…とその時を待ち主人公が助け出された所で口の中に隠していた血糊袋を嘔み潰すと

「俺が最強じゃねえのかア!!」

ゆつくりと立ち上がりそう叫べば余程の重症に見えたのだろう、周囲の部下が何とか抑えようと立ち上がる…その数十人ほど。

「誰も俺に逆らうなア!!今日まで全ての戦闘に勝ってきた!!俺の武力に敵うものはありえねエ…って原作より多いわあっ!!」

「え?」

「と、兎に角首領を抑えろ!!」

「…俺は最強の男だあ!!」

そして無防備にしたその腹をギンが拳で撃ち抜くのを合図に冷や汗をかきながらも再び気絶したフリをして事態はようやく終結。

犯罪者に海賊といった荒くれ者達を纏め上げ、その素行はともかく強さだけなら東の海でも随一と言われ、多くの国家からある程度頼りにされていた”海賊傭兵艦隊”。

そしてその崩壊とそれを纏める首領の突然の凶行に多くの者が驚きそして首を捻った…強さだけなら本部の海兵にも勝る男が何故たかだかルーキーに破れたのか。

色々な憶測が飛んだものの答えは知れずやがてその噂も人々に忘れ去られていた頃、その張本人はとある島で”最大の出番は終わったな、後はギンをグランドラインにいるであろうキッドの所に送り込むだけか…”と考えつつギンに覇気の使い方を指導しつつ考えていたのだった。

そして既にキッドの元にキラールがいる事を知って

「ちよつと待て!?!キラールとギンって別人なのか!?!」

と頭を抱えたり、ギンが新世界で出てくる可能性がある以上引き返すわけにも行かず襲いかかってきた海賊を返り討ちにしどんどんと勢力を拡大して再び”海賊艦隊提督”としての名を取り戻した挙句に最悪の世代に”12人の超新星”として数え上げられて胃が痛くなるのはまた別の話である。

## 激昂する神

「っ…どういう事だっ!!」

エネルギーは激昂していた。

方舟”マクシム”は飛び立ち、邪魔なゴムとやらのパラミシアは船から落としたのでもう再び会う事は無い、コソコソと忍び込んだネズミ三匹と明るい髪 of 青海人の女は逃げたようだがその置き土産…マクシム機関部の破壊、それによつて船は高度を徐々に落としていく。

大きく揺れる船と黒雲を吐き出す煙突の不調、そして時折り響く爆発音に

「おのれネズミ共め…やつてくれるじゃあないか…」

この自分を前にまんまと逃げ出した四人…恐らく甲板に上がつてきた三人が船に細工をしたのだろう、そう考え機関部に向かえば噛み合わせ歯車に火を吹くボイラー、そして所々に走る紫電。

「くっ、手が足りぬ…やはり使い捨てでは無く神兵を乗せておくべきであつたか…」

狂った歯車を嵌め直すがズレた歯車は一つや二つでは無く、いくら動力回路を熟知しているとは言えエネルギー一人で全て正常な状態に戻すのは不可能だつた。

そんなエネルギーの目がある物を捉える、それは”壁から生えた女の腕”。それが歯車の接合部を壊したり、ボイラーを出鱈目に操作しておりそれを見たエネルギーの額にビキリ、と血管が浮き出る。

「貴様…我がマクシムに何をしているうつつっ!!」

それと共に黄金の棍を振り下すも腕は花びらとなりフツと消え棍は無駄に壁を叩く結果に。

一方下では

「あら残念、気づかれちゃったわね」

「どうしたのロビン！早くみんなと合流しなきゃ!!」

という言葉が交わされていたが置いておく。

更には徐々に高度を落としている事にエネルギーはようやく気付き

「馬鹿なっ!!この船には我が故郷ビルカでかき集めた絶滅種”ジェツ

トダイアル”が200は積んであるのだぞ!?例え電力が止まろうとも一時的に船を浮かす事は出来る筈…」

貝殻ゆえに割れない限りは使える筈だがもしやジェットダイアルに何らかの不調か異常があったかと確認すればそこには整然と並んでいた筈の200個のジェットダイアルは僅か半数程しか無くそれに対してエネルギーはどうとうキレた。

「っ…おのれおのれおのれおのれええええっ!!何処までこの神たる私をコケにするかあっ!!!」

更には

「おし!何でかわかんねえけど船が降りて来てるんならこのまま…」

ジャイアントジャックを駆け上っていたルファイが目敏くそれを確認、そしてとうとう

「エネルギーうううっ!!」

「青海の猿がああああっ!!」

モンキー・D・ルフィとゴッド・エネルギーの二人が再び衝突したのであった。

そして一方その頃青海では

「スモーカー」准将!!前方に海軍艦、カモメの水兵団旗艦、フィーネ・イゼツタ”号を確認!!」

一隻の海軍艦がクリークの乗る船と出会っていた。

船の名前は”ホワイト・ビローア”、つい先日准将に昇進したスモーカーの座乗艦であり彼等は補給の為に海軍基地に向かっていたのだ。

「…進路がおれ達と同じって事は遊撃隊の本部か?奴は休暇と聞いていたが…まあいい通信を繋げろ、全く麦わらは見つからねえし鈍熊には会おうし思い通りにいかねえもんだな」

そう言つて机に脚を投げ出し部下に電伝虫で通信を繋げさせ受話器を受け取る。

『こちら海軍独立遊撃隊総司令のクリークだ、何用だスモーカー准将?』

「別に用と言う程の事じゃねえよ、休暇と聞いていたが?」

『休暇は終わりだ、特秘作戦の為に下準備をしるとの上からのお達しでその為に戻るとこさ』

「特秘作戦ねえ…最近噂の”815”と何か関係あるのか？」

自身が気になってた事をズバリと切り込むスモーカーに対して暫し無言の受話器、ややあつて

『ほう…何処でその話を？』

との声にスモーカーはこりや警戒か？それ程までに知られると不味い事か？と机の上に乗せていた脚を避けて座り直す。

「別に、ただ噂になつてただけだ…海軍上層部では何かデカイ事をやるつもりだと言う噂とそれに815という数字が関与しているという話だけだ」

『数字…？ああ、そういう事か。しかし緘口令が敷かれてる筈だが何処で漏れた？まあいい、そちらの進路は？』

「こちらは麦わらの追跡の為に補給を受けにアンタらの本部に向かうとこさ、麦わらについての情報は何かあるか？ジャヤ以降での目撃情報も無く足取りが途絶えていてお手上げ状態でな…島は出たとの情報報は掴んだんだが…」

まあいつまでも噂にかからつてる訳にも行かないので本来の目的を果たすべく何か情報が無いかと尋ねれば

「ああ、奴等なら空にいるぞ、空島にな？」

「なっ！何故空島に！？いや、ハイウエストまではいくつも島がある、まさかメルヴィユから！？…いや、あれは陸路だしどう考えても奴らじゃ登れねえ…どうやってだ!!それは確実な情報か!？」

ど本命の答えが返ってきた為思わず受話器を握りしめ立ち上がる。

『ノックアップストリームを知らないか？奴らアレに乗って空島まで一直線で飛んでいったぞ？』

クリークの言葉に力が抜けたように椅子に座り込むスモーカー。

「…道理でいくら探しても見つからねえ筈だ、今時あの化け物海流に乗って空島まで行くなんざ自殺行為だろ」

『スモーカー准将、”あの”モンキー・D・ルフィだぞ？それが空に島があるのを知り、危険だから諦めると思うか？』

「成る程な…確かにその通りだが、本当に空島に到着してるのか？」

その言葉に納得しつつ、死んでねえだろうな？と思いつけば

『麦わら達が出航した日に積帝雲が通りがかったという情報がある、周辺海域では船の残骸等は発見されていない…まあ問題なく到着したのだろう』

との随分とピンポイントな答えが返ってきてまさか奴も麦わらをも？と考えるスモーカーだったが

『まあ口が堅いと信用し知りたいたい事は教えてやるが電波だと話を拾われる恐れもあるし直接顔を合わせて話した方がいいだろう、目的地は一緒なのだろう？』

続いでという言葉に疑問はまあ一旦置いとくかと考え直し

「了解、以上通信終わり…さて奴らの本拠地”ナバロン要塞”、果たして鬼が出るか蛇が出るか…」

と深く考えながら受話器を返すのだった。

## 空の騒乱の終結

「ぐっ、離せ！離さぬかつ!!我は神なりっ！たかだかパラミシア一匹、我が最強たるロギアの力を持って叩き潰せんわけが!!」

ルフィとエネルの戦闘は苛烈を極めた。

幾らルフィがゴム人間で雷のロギアを無効化するとは言え相手は経験を積んだ人間、周囲に甚大な被害を出しつつもルフィはエネルを自身の特性を用いて拘束

「知るかつ！・テムエが神様とか何とか関係ねえ!!」

「青海の猿如きがあっ!!MAX2億V：ヴァーリー!!」

「だから効かねえってんだろ!!さつきから神様神様うるせえ!!何一つ救わねえ神様がいるか!」

それと共に頭突きがエネルの顔面に。

「ぐっ！よくもこの私に傷を!」

その衝撃に額が切れて血を流すエネル。

「幾らテムエが動きを読めてもなあ…避けなけりや意味がねえだろ!!」

「なっ！ええい貴様!?離せっ！離さぬか!!」

エネルは何とか動く腕で矛を操り突き刺すも

「いつてえ!!でも離さねえぞ!くらええっ!ゴムゴムのお・・・大鐘えっ!!」

走る痛みを堪え仰反るように頭を後ろに伸ばしてキツと前を見据えると高熱を持った額がエネルの顔面にぶち当たり流石に限界だったのだろう

「ぐっ…青海の猿如きにこの私…が…」

白目を剥き崩れ落ちるエネル、そしてルフィはエネルが立ち上がらない事を確認して

「うおおおおおっ!!勝ったぞおおおおあ!!」

そう勝鬨を上げるのだった。

この6年間無敗だったエネルの陥落は瞬く間に広がった。エン



ジェル島の人々、シャンディア、そして青海の海賊達。

強制労働をさせられていた先代の神兵達は解放され、怪我をした者達はチョツパーやエンジェル島の医者達、シャンディアの薬師達が陣営の関係無く総出で治療に当たる傍で話し合いがもたれていた。

ガンフォールの今代神への復帰、シャンディアが大地を求めた理由、そして話し合いの中でもたらされた”黄金の鐘”の情報…

恐らくジャイアント・ジャックの頂上にあるのではないかと推察される黄金の大鐘楼：長らく悲願とされた黄金の鐘を鳴らすべく捜索隊が結成され捜索隊一同はジャイアントジャックを登頂を開始…しかし

「黄金の鐘が無い…どういう事だ青海人！黄金の鐘はここにあるのでは無かったのか!!」

「なあロビン、黄金の鐘おっこちたのかなあ？折角下のおっさん達に鐘の音届けてやりたかったんだけどなあ…」

数時間後ジャイアントジャックの頂上へと到着した一同であったがそこには黄金の鐘は無く、ロビンに詰め寄るワイパーとルフィだったが

「ジャイアントジャックの上にあるというのはあくまで予想よ、恐らく衝撃により弾き飛ばされたと考えられるわ」

「ふむ…となると何処か島雲にでも落ちとるのかもしれない…む？考古学者殿、あれは？」

ガンフォールのその声にロビンは自身のバックから単眼鏡を取り出し彼が指さした方向を見れば

「…ビンゴね。方向的には西にこの蔓を切り倒せば届くかもしれないけど…無闇矢鱈と壊すのは頂けないわね」

「ふむ…なればミルキーダイアルで橋をかけて調査するのでしょうか、お主ら…ここから西側の島雲に橋をかけるぞ！」

と、捜索隊に加わった神兵達に指示を出すも

「見えた！あれだなロビン!!ゴムゴムのお…ロケットおっ!!」

「なっ！抜け駆けなどさせるかっ!!」

待つてられないとばかりに飛び出すルフィと慌てて止めようと飛

びつくワイパーだったがその程度で加速は止められず二人して青空へと飛び立った。

「なっ！ワイパー!？」

「船長さん、また無茶を…」

「何とまあ…まあいい、予定通りこちらはミルキーダイアルで橋を作るとしよう、シャンディアの者達もそれで良いかの？」

突如として飛んでいったワイパーを見て呆気にとられたカマキリ達であったがガンフォールのその声に

「…いや、黄金の鐘はおれ達の悲願でもある。おれ達も手伝わさせてもらうぞ」

頷くカマキリとその周囲を囲むシャンディア達。

そして作業に取り掛かり始めしばらくした所で澄んだ鐘の音色が辺りに響き渡るのだった。

ヴァースに、空島に、そして青海に響き渡る” シャンドラの灯”、”島の歌声”そして400年前に響いた戦いの始まりを告げた鐘の音色があるものは感嘆を、あるものは涙を流し、そしてある者は

「なあ小僧…黄金郷はそこにあったのか?…ありがとうよ」

深い感謝を捧げるのだった。

ミルキーダイアルという空島独自のアイテムにより黄金の鐘のある島雲とジャイアントジャックを結ぶ雲の橋は迅速に作り上げられた。

「何と誇らしげな姿か…」

「横の柱が一本無いな、衝撃で折れたか？」

「おい、ワイパー！大丈夫か!？」

「ちよつとルファイ！何一人で飛んで行ってるのよ!!途中で落ちたらどうするつもりだったのよ!」

鐘の音色はすでに聞いたが実際に見るとその威容に感嘆する捜索隊、そしてロビンは大鐘楼の中心に据え付けられたソレを目にして大きく目を見開く。

「ポーネグリフ…予想はしていたけれど本当にあったのね…お酒に食物…一体誰が？」

黄金の鐘楼の台座にあつた歴史の本文、そこに記された言葉にロビンは深く考え込みその脇にあつたかの海賊王が残した言葉に驚く。

そしてガンフォールから語られた言葉、そして海賊王の残した言葉を噛み砕きロビンは真実に気づく。

すなわち歴史の本文は単体では意味を成さず、情報を持つ石を導いてこそ”リオ・ポーングリフ”であり今は存在しないテキスト、ソレがロビンの求めたものであつた。

「…それはそれとしてDが何かを置いておくとしてもこの落書きの事は話を聞かなきやならないわよね？」

そう言つてロビンはそこに書かれた落書き”D・クリーク参上!!”と書かれた言葉を指でなぞるのだった。

## さらば空島

「おい、バネ男！本当にお前来たのか!？」

「…癪だがテメエには感謝してる、空島の存在…他にももつとあるだろう、おれの常識をもとの見事にぶつ壊してくれた」

「それがどうしたんだよ」

「納得したんだよ、おれは狭い世界で生きてきたって事だろ…見てろ麦わら、おれはいつか再びテメエの前に現れて…その時には正々堂々やらせてもらうぜ?」

「むう…よくわかんねえけどわかった!あ、でも菱形のおっさんを襲ったのはまだ許してねえからな!」

「はっ、甘つちよろい奴だ…おれはハイエナだぜ?奪うのは当たり前…だが心の隅には置いといてやるよ、一度はテメエに負けた事だしな」

「でもお前一人でどうやって下に降りるんだよ?おれ達と一緒に降りようぜ?」

「方法は何とでもなるだろ…下でまた会おうぜ?」

「…わかった!また今度…おれの前に立つんならまたぶつ飛ばしてやるからな!」

黄金の鐘を発見した一同はジャイアントジャックから降り、そしてルフィの主導で垣根を越えた大宴会へ…今は戦いを望むものはいない。全ての人々が黄金の歌声を聞き、大地の偉大さを知り、戦いは終わったのだ。

…そして夜も更けた頃に海賊達が動き出した、空のヌシ…ノラの胃袋に残された黄金の奪取を目論みその作戦は見事に成功、空島の人々が礼を言うべく止めるのも何のそのでひたすら駆けゴーイング・メリー号へ…そこで突如ベラミーが言い出したのだ”おれは船には乗らない”と。

ルフィとベラミーの間で話し合いが行われたもののベラミーの決意は固く、色々と心境の変化があつたのだろうこれ以上世話にはなれないと一人で青海に降りる決意に変わり無く、いつか再び会う事を約

束しベラミーは麦わらの一味と別れたのだった。

その後空島の住人であるコニスとパガヤの親子に先導され空島から一つ下の白海へ向かい、青海へ降りるクラウドエンドへ：高さ700メートルから真つ逆さま、と言う事は無く空島特有の生物であるタコバルーン、気球の特性を持つ蛸がメリー号に絡みつくど風船の役割を果たし一気に減速、メリー号はフワフワと漂いながらゆっくりと青海に降りて行くのだった。

そして聞こえるは天上の歌声、黄金の音色。

去りゆく恩人へ向けて聞こえるように黄金の鐘は鳴らされる、響く音色を届けんと。

ふと見上げると目に写る空

夢か現か雲の上、神の国

遙か上空一万メートル

耳を澄ますと聞こえる鐘の音

今日も鳴る、明日もまた鳴る

空高々に鳴る鐘の音が

彷徨う大地を誇り歌う

一方その頃

「なっ!?四皇の討伐だど!!何を考えてる、正気か!?!」

独立遊撃隊総司令のクリークと独立遊撃隊ナバロン要塞司令のジヨナサン、そして海軍本部准将スモーカーの三者間で話し合いが行われていた。

「正気だともスモーカー君、その為に我々は長い間準備を重ねていた」「しかし王下七武海と四皇、そして海軍本部の三者で均衡が保たれる以上世界政府が認めるとは…」

「スモーカー准将、先に言っておくがこの作戦は海軍過激派が主導として行う”事になっている”」

「どう言う意味だ…?」

「その為に世界政府の意向に背き討伐は行われ、現・海軍元帥であるセンゴク元帥は責任を取って辞任…その後海軍は新体制に移行する」

「何だど!?センゴク元帥はこの話を知っているのか!?!」

「そりや勿論、相手は智将センゴク、これ程の大規模作戦そうそう隠し通せるとでも？」

「そもそも三大均衡なんて言うけど身勝手に振る舞う海賊を一角に加えた均衡なんておかしな話だと思わないかい？尤も良識を持った海賊もいない訳では無いがね？」

話を聞き深く溜息をつくスモーカーに

「…長々と疲れただろう、少し休憩にしようか」

クリークはそう声をかけて立ち上がる。そのタイミングでドアがノックされ

「クリーク中将！先程入港した軍艦に乗っていた民間人が中将の客だと言っているのですが…」

「客だど？誰か予定あったか？」

「はあ、見た目は”海パンにシャツだけ羽織った大柄な男”でしたが…」

「ああ、もう着いたのか…俺が直接会う、応接室に通してくれ」「了解しました！」

「すまんなスモーカー准将、少し外す。ジョナサン中将、後の話は任せる」

「いつてらっしゃーい」

クリークがそう声をかけるとニカツと笑って手を振るジョナサンとあまりに大きな話だったからだろうか、対照的に険しい顔で深く考え込むスモーカーにクリークは苦笑するとその場を去り

「815：蜂一号作戦だったか、センゴク元帥が承知しているとして他は何処まで知っている？」

「うーむ、三大将は全員把握しているね、それから中将も全員知らされている。」

少将も作戦実行に携わるメンバーは詳細は知っており他の少将は概要だけってどこかねえ？」

「…そんな状態で成功するのか？もし失敗してみると、その反動はかつて無い規模で海軍に跳ね返ってくるぞー！」

「はっはっは、結論を急ぐもんじゃ無いよスモーカーくん。作戦は万

全の体制のもとで実行される……この要塞の上に浮かんでいるのもその布石の一つだよ」

「上？何の話を……まさか”空中要塞サンタマリア”を投入するつもりか！アレは海軍の生命線である工廠の番人だぞ！それを動かすのか！？」

ジョナサンの話を聞き一つの存在に思い至り驚愕するスモーカー  
「アイザックくんなら作戦の事は承知しているよ、作戦の詳しい概要はまだ話せないが……この件はくれぐれも内密に頼むよ？」

そう言つてジョナサンは呆然とするスモーカーに対して人差し指を目の前に立てニヤリと笑うのだった。

## 鉄壁要塞 ドンクリークさん

「お？なあなあウソツプ！ウソツプ！」

「どうしたルフィ、ちゃんと見張りしてんのか？」

「さつきあつちにてっけー城が見えたんだよ！」

「はあ？こんな上空にそんなもんあるわけねえだろ…」

「むっ、嘘じゃねーぞ！あつちの雲の影に本当にあつたんだよ！」

「うーん？どれどれ…やっぱなんもねーよ、なんかと見間違えたんだって。」

おれ達は上空七千メートルから降りてるんだぜ？段々青海に近づいてるとは言えその高さに城なんてあるわけねえだろ？」

「ぶー、本当に見たんだよ」

空島の固有種、気球になる事ができるタコバルーンにより麦わらの一味とその船ゴーイングメリー号はゆつくりと下に降りている中でそんな会話が交わされており、ロビンはその会話を聞きながら”空のこの高さに城？…まさかね”と思いつつも口に出さないでおく一方で

「アイザック少将監視塔からの報告です」

「どうした、何か異常でも？」

「はっ、雲の切れ間に一瞬だけ不審な気球が確認されたとの事です」

「ふむ…その不審な気球、何者だ？」

「不鮮明ではありますが撮影が間に合っています、こちらなのですが…」

「…これは恐らく海賊船か、こちらに気づいた可能性はあると思うか？」

「恐らく共に姿を捉えたのは一瞬ですぐさまお互い雲に阻まれて見えなくなっただけだと思いますが…」

「まあいい、クリーク中将に報告しておけ。我々の仕事は別に海賊を捕まえる事では無いしな…あくまで作戦のための打ち合わせと物資搬入、用事が終われば作戦海域に移動するだけの話さ」

「クリーク中将はアイザック少将の恩人だと聞いていますが…ゆっく



り話ぐらいしてもバチは当たらないのでは?」

「馬鹿者、いくら母親を助けてくれた恩人とは言え誰がこの要塞の管理を行うのだ…私事でそんな時間の浪費をするべきでは無いだろう、無駄話はいいからさっさと行け」

「はっ…それでは失礼します!!」

本来は嚴重に秘匿されているジュエル島の海軍工廠に駐留している空中要塞サンタマリアではそんな会話がなされており、不審な気球の情報は迅速にクリークに届けられた。

「ほう…ここに落ちてくるか、原作では何事もなく着水してロングランドに向かったが…やはりこの世界はアニメオリジナルも拾っているのか…」

「どうかしたかいクリーク総司令、アイザックくんから何か通信が来ていたようだけど何か心配事かい?」

「いや失礼ジョナサン中将、時間から考えてどうやら今日の夜ごろに来訪者が来そうだという報告です」

「ほう、来訪者…周辺海域から来れば我々がナバロン要塞砲の餌食となるが一体どこから?」

「空からですよジョナサン中将」

クリークの言葉にジョナサンは少し考え込み

「ふむ…空からねえ?どういうカラクリかな?」

「そこはジョナサン中将の腕の見せ所でしょう、ところでどうでしょうジョナサン中将、ここは一つ来訪者をすぐさま捕まえるのではなく作戦前に気分を一新させる為に大規模な非常訓練を行いたいのですか…」

「ほう?それ程の相手かな?」

「アイザック少将から写真が送られて来たのですが…恐らくアラバスタ騒乱におけるクロコダイル捕縛の立役者、”モンキー・D・ルフィ”率いる麦わらの一味ではないかと」

クリークのその言葉にジョナサンは少し考え

「はっはっは、そうかそうか彼らがここに来るのか…目的はいまいち不明だ…これはしつかりともてなす必要があるだろうねえ?まさか

クリーク総司令、君は動かないよね？君がいるとどんな策を用いても破られるから釣りの醍醐味が台無しなんだが…」

「安心をシヨナサン中将、俺はあくまでも静観させて貰いますよ…まあ”彼女”に対しての手助けはするかもしれませんが、その程度は構いませんよね？」

「ああ、そう言えばあの船に乗ってるという情報があつたね…昔はあんなにちっちゃかったけど随分と成長してるんだらうねえ。

まあわかった、確かに最近は独立遊撃隊という名前の元に少々緩んでいる気配もあるからねえ…作戦前に引き締めておくのも悪くない」

海軍最強とも呼ばれる”海軍独立遊撃隊”、民衆からはカモメの水兵団、海賊からは赤カモメの異名で呼ばれる自分達の巢にして本拠地。

一つの島の周りにリング状の島をもう一つ持ち出入りは北と南の水門のみ、外海へはまるでハリネズミの如く多数の砲台が向けられ、更に”ナバロンの牙”と悪名高いナバロン要塞砲が睨みつける。

内側にも多数の砲台を持ち電波塔などを備える中枢施設である中央の島には陸路では渡れず、西と東それぞれ連絡橋でしか行き来する事は出来ない。

更に五千の海兵達が駐留、海軍で最も戦闘数が多い部隊故に海兵だけで無く整備兵、医者、コック等のスタッフ達まで誰も彼も腕利き揃いであり、軍艦の数も相応に揃っている上に自分の主導で開発された水陸両用である第三世代の”ヴァルクユリア型”戦車も多数。

海賊からは恨まれる独立遊撃隊の本部故に襲撃は数知れず、だがその度に全てを跳ね除けてきた海軍の鉄壁要塞。

更にはダメ押しとばかりに麦わらのルフィを担当とする専任追討任務を持つ本部准将”白狼のスモーカー”、海軍きつての剣士とされるモモンガ中将の主導で導入された”海軍剣客隊”隊長の本部少佐たしぎとその副官である本部大尉のサガ。

更に上空に浮かぶは普段はジュエルアイランドにて駐留しているアイザック少将率いる空中要塞”サンタマリア”、これを前にどう脱出するのか…お前の運を試させてもらおうぞ麦わらのルフィ？

クリークはそう考えてニヤリと笑うのだった。

## 非常事態発令！悪名高き海賊船潜入！

1 day 22:00

最初に見つけたのはこの道数十年のベテランである整備職長、メカオであった。

補修ドックに入渠した船を見ながら最近のモンは船を雑に扱いきる：とボヤいてふと空を見上げると目に入ったのは落下してくる小型帆船。思わず手に持っていた酒瓶を取り落とせば響く瓶が割れる音に注目が集まりメカオが指差す方向には今正に天から落下してくる帆船。

直ちに整備部から司令部に迅速に連絡がいけば

「侵入者はイーストエリア！ 照らせー!!」

「総員戦闘準備いっ！ そらっボヤボヤしてんな!!」

海軍本部が持つ要塞の一つ”ナバロン要塞”は蜂の巣を突いたかのように騒ぎ出したのだった。

突如として自らの懐に現れた海賊船、丁度管制室にいたダニエル少尉の指示の元すぐ様警報が鳴り響き続々と包囲網が動き出し

「どうだ、何かわかったか！」

そう言いながら現れたのは赤色の癖毛に立派なもみあげを持つドレイク中佐、彼はこの要塞の司令官であるジョナサンの副官であり高い権限を持つ。

「はっ！ あの船は海賊船で間違いないかと、旗印は髑髏に麦わら！」

賞金首のモンキー・D・ルフィ率いる麦わらの一味かと！」

「麦わらだと!? …専任追討のスモーカー准将が滞在していたか、誰かスモーカー准将を呼んでこい！ それから誰か司令を見たか？」

「えーっと、釣り竿が無いので恐らく夜釣りでは無いかと…」

「またか！ まったくあの人は…」

「ドレイク中佐！ スモーカー准将を呼んで来ました!!」

「麦わらが出たと言うのは本当か？」

「包囲網は完成しているがどうする？ 我々は今から部隊を編成し船に乗り込む予定だが？」

「…当然だ、奴はおれがこの手で捕まえてやる」

「随分とご執心だな、ダニエル少尉！ 10人ほどで制圧部隊を編成しろ！ それからおれとスモーカー准将で海賊船の制圧を行う！」

「了解しました！」

そして迅速に編成される腕利き揃いの部隊であったが彼らが乗り込んだ時にはついさつきまで人がいた痕跡が残るのみで船はもぬけの殻であり、ドレイク達はあっさり制圧出来た事に拍子抜けするのだった。

そしてそんなメリー号を眼下に見下ろす者達がいた。

「ウェイバーがあつたのは不幸中の幸いだけど…何処を見ても赤い海軍マーク…そしてこの軍艦の数に海兵の数…まさかここって海軍の要塞？ しかもあたし達が落ちてきたのって内陸の湖なの…？」

麦わら一味の航海士にしてご意見番のナミは高台の上からサーチライトに照らされ、包囲されたメリー号を見下ろしながら困惑していた。

もう少しで海面というところでタコの気球が萎み始めたので慌てて全員に何処かに捕まり衝撃に備えるように指示、衝撃が落ち着いて辺りを見渡せば居並ぶ海軍艦に赤いカモメの海軍旗、そして壁面には無数の大砲が並んでおり明らかに尋常では無い雰囲気一旦バラバラに逃げるように全員に言うとう自分は空島で手に入れた水陸両用のウェイバーで一気に崖を駆け上がり暗がりには逃げ込んで様子を伺っていたのだ。

「兎に角情報を集めなきゃ…せめてここが何処かわかるといいんだけど…」

と何かヒントになるようなものがないか周囲をキョロキョロと見渡せば

「…待って、海軍要塞でカモメの水兵団がウヨウヨいる要塞？ …まさかここって!!」

何かに思い当たり顔を青ざめさせるナミだったが他にもその答えに思い至っている者がいた。

「もうダメだあ…おれ達の航海はここで終わっちゃうんだあ…」

麦わら一味の狙撃手である長鼻の少年ウソップは低木の影にしがみ込んで頭を抱えていた。

「あら長鼻君、諦めるのは早いんじゃない？ 船長さんの事だからなんだかねで上手く脱出できるかもよ？」

そう声をかけるのは麦わら一味の考古学者にして妙齢の美女ロビン

「簡単に言うなよお…赤カモメと言えば海軍で最も有名な奴らだぞ？ そんなじよそこらの海賊は裸足で逃げ出すって聞いているぜ？」

東の海でも一回会ったけどよお…絶対タダモンじゃねえな、それからダデイのオッサンとかナミのカーチャンも赤カモメの出って事だからかなり縁があるなあ…まあ嫌な縁だけだな」

「元・カモメの水兵団でダデイ…ひよつとしてダデイ・マスターソン？」

「お、知ってるのか？」

「まあ…少しね」

「兎に角そんなヤベー奴らの本拠地だぞ？ 脱出もそう簡単にいかねえだろうし、そもそもアイツらが自発的に集まる事が出来ると思うか？ 絶対に一筋縄じゃいかねえよ…」

そう言っただけ息をつくウソップに単眼鏡を覗いていたロビンはとある船を見つけ

「兎にも角にも集合するにしろ脱出するにしろ情報を集めなきゃならないわね…長鼻君、ここからは別行動と行きましょう」

「別行動!? 待てよおれ一人になんのか!？」

「情報が肝心と言ったでしょう？ それに二人一緒に行動すれば発覚するリスクは高くなるわ」

「でもおれ一人で…しかもこのナバロン要塞でおれ一人で行動しろと!？」

「しっ、声が大きいわよ長鼻君。見回りの海兵はいるんだから静かに」  
そう言っただけロビンがウソップの肩から腕を生やして口を塞げばウソップはごくごく頷く。

「木を隠すなら森に隠せ…バレないようにするにはこの要塞の一員と

して潜入するのが手っ取り早いと思うの、幸いにもここは独立遊撃隊の本拠地、海兵に整備士、医者にコック、少なくとも2000人近くの人間が生活しているわその中に紛れる事が出来れば……」

「成る程……上手く海兵に成りすましてここの情報やルフィ達的情報を集めろって事か……」

「貴方は手先が器用だし整備士として潜入出来れば疑われる確率が低くなるかもしれないわね、それに船もあのままとは思えないし恐らく何処かのドックに曳航されるでしょうから場所も把握しておく必要があるわ」

「……おれは船大工じゃねえんだがなあ、そうだなメリーも心配だし……よしいつちよやってみるか」

「じゃあ健闘を祈るわ」

そう言つてロビンは身屈めて素早くその場を離れるのであった、単眼鏡を覗いた先、巨大な水門近くの港に係留していたフィーネ・イゼッタ号を目指して。

分かたれた一味！鉄壁のナバロン要塞！

「何処なんだよここは…せめて場所がわかればなあ、ナミさんにロビンちゃんは無事かなあ？」

麦わら一味のコックであるサンジが木の上に隠れながらバラバラになってしまった仲間の事を考えていると突如銃声が響いた。

撃つたのは近くで巡廻任務を行っていた二人組のうちの一人

「どうした？」

「…いや、木の上に何か光る物が見えた気がしてな」

問いかけた男は銃を撃った男が睨む方向を注目するも

「…気のせいだろ、それよりさっさと終わらそうぜ。さつきから腹減って仕方ねえ」

と、特段変なものも見受けられなかったので異常なしと判断して腹をささする。

「…それもそうだな、しかし随分とイーストエリアが騒がしい…警報が鳴ってるが何事だ？」

「まだ情報来てねえよ、戻りや何かしらの話があんだろ」

そう言って二人組の海兵は再びカンテラを掲げながらその場を去って行きサンジはそれを木陰から見送りながら

「…ちっ、おちおち煙草も吸ってられねえ。一先ずどつかに身を隠してナミさんやロビンちゃんを探すとするか…まあ他の奴らはチョッパードウソップが心配だが…あいつらも一端の海賊だし何とかするだろ」

そう結論づけたサンジは再び闇の中にスツと消えるのであった。

そしてそんな心配をされている一味の船医、トニートニー・チョッパードであるが

「何なんだよ…何なんだよここ!!さつきから海兵はいっぱいだしメリー号は囲まれてるしみんなもバラバラになっちゃったし!ひよつとしておれ達海軍の基地に落ちたのか!？」

時折り照らされるサーチライトから身を隠しながらチョッパードは



暗い森の中を走り回っていた。

空島から戻ってきたかと思えばロビンとナミによりよくわからないながらもその時は一刻も早くこの船から離れて身を隠せという指示しか受けなかった為急いでその場から離れたチョッパは一人暗い森の中で心細くなっており仲間達の名前を呼ぶも当然答える声は無し。

「げっ…海兵!!」

進行方向にカンテラの灯りを見つけ慌てて急ブレーキをかけて木の影に隠れるチョッパ。幸いにも気づかれる事は無くチョッパは二人組の後ろ姿を見ながらほっと一息つき

「兎に角みんなと合流するか海兵のいないところに逃げるか…いや、おれはもう海賊なんだ!逃げてばかりじゃないんだ!!」

…よし、そうと決まれば海兵に気をつけながらみんなを探そう、その為にはこの基地の見取り図が有ればいいんだけど…案内板みたいなのが中にあるかなあ?」

そう覚悟を決めたチョッパであったが

「…でも海兵がいっぱいいるんだよなあ、しかも赤い海軍マークなんて初めて見たけど何か特殊な基地なのか?」

と、心に少しの疑問と一抹の不安を抱えながら何とか入り込む手段は無いか忍足でそつとその場を離れるのであった。

そして麦わらの一味の剣士ロロノア・ゾロ、彼はナミとロビンの指示の元直ぐに行動し海に飛び込んだ…が、生来の方向音痴が災いし近い方の岸から真逆に進み拳句の果てには水門近くまでやって来た所為で

「うおっ!?!」

顔を出して周囲を見渡せば自身めがけて進んで来る大型艦に慌てて深く潜り避ける。

「ぶはあっ…こりゃ随分とでけえがこつから船が出入りするんのか?」

そのまま海中を進みゾロが再び顔を出したのはナバロン要塞の出

入り口となる二つの水門の一つ、通称には“南大水門”と呼ばれる分厚い鋼鉄の壁であった。

下からならば抜けられるかと潜ってみるもしっかり閉ざされており、かと言え登ろうにも

「……この高さを登るってのは骨が折れそうだな」

水門だけでも高さは10m近くあり水門の上、鉄橋で繋がる外周の島は更に高く10数メートルの高さはあるだろう、要所要所に大砲が突き出した崖は高さだけでは無く今もランダムに照らすサーチライトがゾロを躊躇わせていた。

「……兎に角上がれそうなトコを探るか、若しくはどつかの船に潜入出来ればいいんだが。いつまでも海ん中にいちや風邪ひきそうだしな」  
そう考えゾロは水門近くの棧橋に向けて再び海中に潜るのであった。

そして麦わらの一味の中で最も問題を起こしそうな船長モンキー・D・ルフィは

「腹減った……みんなもどつか行つたしどうすつか、どう考えても空島から何も食ってねえんだよなあ……」

空きっ腹を抱えて唸っていた。

少しでも食べ物の匂いがしないかと鼻から息を吸い込むも

「……ダメだあチョッパーでもいりやアイツに匂い辿ってもらうんだけどなあ、しつかし何処だ……？何か海兵も一杯いるしみんな捕まっとなきやいいんだが」

食べ物の匂いは感じ取れず周囲を見渡してそんな感想を抱く。

「……兎に角腹が減っては何とやらだし、飯を探すか！くっそ……こんなことになるんならサンジに何か作ってもらったとくんだったなあ」

そう考えてルフィは何かあるだろうと考え自身が着地した中央の島の上部へと駆け出すのだった。

そしてそこには

「ほう……こんな夜更けに何の用だ、モンキー・D・ルフィ？」

傍に両先端が白い棍が置かれ、赤いカモメを背負う海軍コートを羽

織った大男がリクライニングチェアに深く腰掛け脇にあるテーブルの上から料理を摘みながらそう問いかけるのだった。

唸る策謀！要塞司令ジヨナサン！

棧橋に停泊し灯りの落とされた海軍独立遊撃隊旗艦“フィーネ・イゼッタ号”、水兵団の頭であるクリークがいつも乗っていたその船に闇夜に紛れるように一つの影がスルスルと乗り込みそのまま手早く鍵を開けると船内に入り込んだ。

そしてそのまま勝手知ったると言わんばかりに進んで影が立つのは船長室の横、事情を知らぬ者には“開かずの間”とも呼ばれる扉の前で徐に首元から引き出したしつかりとした作りの鍵を差し込み扉を開けると手早く閉める。

「…ふう、問題無しつと。とりあえず灯りが欲しいわね」  
そう考えて”記憶を頼りに”手を動かすロビン。

この部屋はロビンの部屋である、フィーネ・イゼッタ号が新造された時に可能性を考えてクリークが詭えた部屋であり間取りや一般的な家具は”シャールロット・アンジェ号”のロビンが使っていた部屋と同じくしてある、との言葉と鍵をアラバスタで受け取っていたのだ。「本棚にベッド、クローゼットに机…家具はそこまで多くないわね、それからこの手紙は私宛てかしら？」

ランプを点けて机の上にあった一通の手紙、表面にも裏面にも記名は無く白い手紙にロビンは疑問を抱くも机の上にあったペーパーナイフを差し込み開く。

「…成る程、流石おじ様予想済みって事ね。」

そして白猫と言えば若手の中でもそれなりのネームバリューを持つスモーカー大佐…ついこの前クロコダイルの件で昇進したんだっただかしら？」

手紙を読んでそう考えるロビン。手紙には予想だが、と前置きしてあったがロビンがここに来るであろう事やそれにあたって必要そうなものを一式用意してある事、白猫に気をつけるという言葉などが並んでいた。

クローゼットを開けてみればそこには白いシャツや黒いスーツ一式、白い染め粉やサングラス、細々とした武器が並んでおりロビンは

次々とそれらを身につけ、白の染め粉を水で溶いて黒い艶やかな髪の上から撫でるように色を変えていき着ていた服は小さく畳み皮のバッグに仕舞う。

最後にあちこちに仕込んでいるナイフを一本づつ光に当てながら損耗を確認、拳銃も動作確認を済ませて徐にサングラスを装着する。「さて、相手はカミソリジョナサンことジョナおじさん：一筋縄では行かないわね。」

このクラスの要塞なら所属の人間は千人を優に超えるでしょうし軍艦も多く戦車も出て来る可能性もあり、戦鳥騎がいなければ良いのだけれど：あまり期待しないでおきましょう。

何より厄介なのはナバロンが誇る”ナバロン要塞砲”、アレが動けば北と南どちらの水門を抜けても砲撃を受けるし：さて、どうやって船長さん達を脱出させたものかしら：」

黒いスーツにブラウンのロングコート、白い髪は後ろで結ばれ目元には目線が読めないサングラス、そして胸元には要塞関係者である事を証明するかのよう

”情報編纂室外部顧問 ニコラ・オリヴィエ”と書かれた名札がぶら下がりロビンはここを脱出する方法について深く考えるのであった。

一方要塞司令のジョナサンはそろそろ体制も整っただろう、と夜釣りを終えて中央島の司令部へと赴けば腕を組んで待っていたドレイク中佐と壁に寄りかかり瞑目するスモーカー准将。

「司令！ こんな時に何処へ行っていたのですか!!」

ドレイクの怒鳴るような言葉にジョナサンは面倒臭そうに手をひらひらとさせる。

「あー：別に無駄に釣りしてたわけじゃ無いからいいじゃないの、それより警報止めていいよ、もう遅いから鳴らしてる意味も無いでしょ」

「遅い？：：警報止めろ！ して司令、遅いとは一体？」

「恐らくとうに脱出してるでしょ、制圧部隊は空振りに終わったんじゃないの?」

「見ておられたのですか!」

「そんなの見なくてもわかるよ君の性格は良く知ってるからねえ…さて、相手は最近世間を騒がせている麦わらの一味らしいが専任追討であるスモーカーくんの所見はどうかね?」

「奴らはジャヤ以降で目撃情報が途切れていきなりここに現れた、それまで何処にいたのかが鍵だな、空から降って来たらしいが…」

「空から降って来たなど馬鹿な! 目撃者たちも言っていたがそんな事あるわけ…」

スモーカーの推察にドレイク中佐が反論するが

「いや、空から降って来たのは事実だよ」

そこは更にジョナサンが捕捉して付け加える。

「…は?」

「空から降って来たのは事実、わたしが見たんだ間違いはないよ…な? 夜釣りも無駄じゃなかったろう?」

「は…はあ」

そう言ってニツと笑って見せるジョナサンにドレイクはいまいち納得いかなそうに返すのみ。

「さて、では現場を見に行くとしようじゃないか。人員は?」

「はっ! 既に揃えています!」

「ふむ、スモーカーくんも来るかい?」

葉巻に火をつけて吸い始めたスモーカーにジョナサンが聞けば

「いや、おれは外様の間人だしアンタ方に任せの方が良いだろう…その代わり独自に動く権限をくれ、それからこの要塞の見取り図なんかもありやありがたい」

「ふむ…まあいいだろう、ブッシュミルズ軍曹彼にこの要塞の案内を頼む」

「了解しました! ではスモーカー准将、こちらへどうぞ」

その言葉にまだ若い海兵がスモーカーを先導し部屋から出て行く

「やれやれ、どうにもご執心だねえ…どうあっても自分の手で捕まえたたいと見える」

「何か因縁でもあるのでしょうか？」

「さてねえ？ 専任追討にはスモーカーくん自ら志願したと言うが…あまりそればかりに集中すると視野狭窄になるんじゃないかなあ？

さて、では我々も現場を見に行こうじゃないの」

そう言いながらジョナサンは眼下にあるサーチライトで照らされた無人の海賊船を見下ろすのだった。

## 潜入！ナバロン要塞大食堂！

PM 23:00

中央エリア大食堂、その厨房にて大勢が忙しく働いている中

「なあなあ、なんか侵入者いるらしいぜ？」

「げ、おれ達どうなるんだよ」

まだ若い二人の料理人が野菜の下拵えをしながら話しており、それを耳にしたスープの前でアクをとっていた一人の女性が無言で掬っていたアクを喋っていた二人に飛ばす。

「あつつ!？」

「げっ！ジェシカさん…」

「グダグダ話しないで手を動かさな!!」

「いやでもジェシカ料理長、このナバロンに侵入者ですよ？」

「例え侵入者があるうと襲撃者があるうと！アタシ達の仕事は飯を作る事だよ！そこんとこしっかり考えな!!」

女性は話をしていた二人の元にカツカツと近づくとそう言つてのけ二人はコクコクと頷くのみ。

「おう若いのここには強い海兵さん達がゴマンといるんだ、心配しなくてもそのうち賊も捕まるだろうさ」

と思えば今度は恰幅のいい男が焼き場から顔を出してそう言うがジェシカの手を持ったスプーンが振り上げられかけたので慌てて自分の作業に戻る。

「さあ！もうすぐ夜番の子達がお腹を空かせてやってくるよ!!アタシらの作る飯はナバロン要塞2000人の腹を満たさなきゃなんないんだ、ボヤボヤしてる暇は無いよ!!」

と大食堂厨房で全体に聞こえるような声で言うジェシカ、金の髪はコック帽の中に纏められ、コックスートの首元には赤いスカーフ、切れ長の目を持つ冷徹そうな美人…彼女こそがこの厨房の総責任者にして優秀な料理人、そして要塞司令ジョンサンの妻である。

「ほー、この料理長は随分と美人だな…是非ともお近づきになりてえもんだ」



「お？おめえジエシカさんを知らないのか？」

「いやあ、ここに行つて手伝つてこいつて言われただけだから何も知らねえんだよ」

「ふーむ、まあ外部艦隊の人間ならそんなもんか：ジエシカさんは美人だが料理には手を抜かねえ、美味しい料理をしつかり作つてればそのうち気に入られるかもな、メーカーズ副料理長：あの焼き場にいる恰幅のいい奴な、あの人もその腕を買われて副料理長になったんだよ。

ま、ジエシカさんには旦那がいるから甘い話を考えてるんなら諦めとけ」

「くうー、あの美人を嫁にしてるなんて：そんなに幸福なのは何処のどいつだ？この要塞にいるのか？」

「何処のどいつつて：そりやこのナバロン要塞の司令官、ジヨナサン中将だよ」

傍で共に作業していた男の言葉にコックスーツに身を包んだサンジは

「…へえ、ここの司令か」

と、魚を捌く手は止めないままに少し思案するのだった。

時は少し戻る。

メリー号から脱出、闇夜に紛れて外周島の内部に潜入したサンジは想定以上の広さに途方に暮れつつも上手く隠れながら進んでいた所で備品室だろうか、コックスーツ一式があるのを見つけてから幸いと着替えると何食わぬ顔で堂々と歩く。

そして道中で色々な話を聞きつつこのナバロン要塞の中央にある大食堂の話を耳にして”恐らく飯時には人が多く集まるだろうから情報も集まるかもしれない”と考えそちらに向かう。

あまりの広さに迷子になりかけながらも上陸した外周島のイーストエリアからそのままに進み外周島と中央島を結ぶ連絡通路を渡ればそこはナバロン大食堂、ナバロン要塞2000人の食事を支える最前線でありサンジは中をそつと覗き、想像通り大勢の人間が働いている事を確認して何食わぬ顔で厨房に入り込むと一人で魚を捌いていた男に声をかけた。

「なあ、こつち手伝えって言われたんだが何すりやいい？」

「おお、こいらの頭落としてワタ抜きと骨剥ぎを頼む…って見ねえ顔だな？」

「ああ、船の厨房を任せられてたんだが手空きだし要塞の方の厨房でも手伝おうかってな」

「成る程外部艦隊のコックという事か、いやわけえのに勉強熱心なこつた…初心者って事はねえだろうな？」

「へっ馬鹿言え…一流コックの包丁捌きを見せてやるよ」

そう言つて懐から包丁巻きを取り出すと一本の包丁を取り出しサツと水で濡らすと一匹の魚を掴み取る。

瞬く間に、しかも丁寧に次々と卸されていく魚を見て男は

「へえ…言うだけの事はあるじやねえか、こりやおれもこのナバロンの料理人として負けちやあいられねえな！」

自分も包丁を握り直し魚を捌き始めたのだった。

そういう経緯がありサンジはこの場におり今のところ疑われる気配は全く無く、しかも雑談がてらに入ってくる情報でこの施設の大まかな概要は掴む事が出来ていた。

まず今自分がいるのが中央島と呼ばれる島でありその周りをグルリともう一つ島が覆つて上から見ると囲い丸の形で、外周島は大まかに東西南北のエリアに分けられ徒歩で外周島から中央島に来るには東と西の連絡通路しか手段は無く、更にこの島から出るには南北どちらかの水門から出る以外の方法は無いそうだ。

「全く侵入者だか何だか知らねえがこのナバロンから逃げ出せると思つてんのかねえ？」

「そんなにヤベエのかこつこ？」

「おん？あつたり前だろ、まあ要塞が堅牢つてのもあるが…要塞司令のジョナサン中将は頭が切れるからな…知つてつか？”カミソリジョナサン”つてよ」

「鋭いつて事か？」

「ちげえ、切れすぎるからこんなところに引つ込んでるつて噂だぜ？」

脇で魚を捌いていた男のその言葉にサンジは得も知れぬ悪寒を感じ

じるとブルリと身を震わせ

「ナミさん、ロビンちゃん：相手は切れ者らしいけど大丈夫かな？」

「おい、手が止まってんぞ？」

「っと、悪い悪い」

そう言って再び魚を捌き始めたのだった。

冴える推理！要塞司令カミソリジヨナサン！

侵入して来た船の調査を終えたジヨナサンは副官のドレイク中佐及び数名の海兵と共に通路を歩いていった。

「どうやらスモーカー准将の言う通りジャヤに立ち寄ったのは間違い無いようだな」

「何か気付いたのです？」

間違いないと断言したジヨナサンにドレイクが聞けば

「甲板にあつた7つのカップ、あの色と香りはジャヤコーヒーで間違いなからう。」

それからサウスバード、アレはジャヤの密林に生息する鳥だ：知つとるかね？あの辺りには根強く黄金伝説が残つとるんだ、まあ噂はあれど見つかつたらんがな」

「という事は船にあつた黄金はそこから持ち出した物だと？」

「ま、決めるのは早計だがね：最近の幽霊がコーヒーを飲んだり勉強熱心なら幽霊船でいいがな」

「しかし：先程は司令官自ら幽霊船だとおっしゃいましたが…」

そんなジヨナサンの言葉に疑問を覚えた共に歩いていた金髪に髭を蓄えたマツカラン中尉が質問すれば

「ここには新兵や囚人もいるんだぞ？麦わら達の目的がわからない以上侵入を公表してみろ、要塞内が混乱するばかりでは無いか。暫くは”目撃情報通り”幽霊船という事にしておこうじゃ無いか」

「成る程、確かにこの要塞には機密が多く持ち出されてはコトですからなあ」

サングラスをかけたジェムソン中尉がその言葉に納得して頷いた。

「お言葉ですが司令官！すぐさま特別捜索隊を編成し彼奴らを捕まえるべきです！我が部隊にその役目を！」

しかしそれに納得しなかったのかドレイク中佐が気炎を上げる。

「まあ慌てるな」

「しかし！」

「今は守りを固めるのが先決：ジェムソン君は湾岸及び海門周辺の警

備強化を」

「はっ！」

「マツカラン君は弾薬庫、收容施設、中央通路の警備強化に当たってくれ、人事権も与えておく」

「わかりました！」

「不満そうだな中佐」

矢継ぎ早に指示を出しそれに従い離れていくマツカラン少尉とジエムソン少尉、そしてそれをムツとした顔で見るドレイクにジヨナサンはそう声をかける。

「…いえ」

「夜はまだ長い、奴らもそうは動き回れまい…まあこつちも同様だがな。君の部隊は朝を待ち人の集まる所を徹底的に調べろ」

「人の集まる場所…ですか？」

「そうだ、青き虫は青き草むらの中にいるからこそわかりにくい…もし奴らが軍服を着たとすれば…」

「っ!!」

その言葉の持つ意味に気づき、ただでさえ厳しいドレイクの顔つきがますます険しくなる。

「部下達の能力を信じぬ訳では無いが…奴らが軍服を奪取する事も十分考えられる。

まあ海賊なんて輩はいつも野良犬のように腹を空かしているものだ、とりあえず夜が明けたら食堂にでも行ってみる事だな」

「はっ!!」

ドレイクはその背中を見ながら昼行灯で誤魔化しているがいつもアレぐらい動いてくれればもつと素直に尊敬できるのだが…と頭をかきながら

「よし！我々の部隊は朝まで休息させる、そして朝から麦わらの一味の探索任務に就く！ダニエル少尉、各員に連絡を！」

「はっ！」

「くくく、待っている麦わらの一味…我らナバロンの手の中から逃げられると思うなよ？」

そう言いながらドレイクは手のひらに拳を打ち付けるのだった。

一方自室に戻ったジョナサンはテーブルの上には現場検証で撮られた数枚の写真や目撃情報をまとめた書類が積まれておりそれらの情報を元にジョナサンは推論をまとめていく。

「船長であるモンキー・D・ルフィ、海賊狩りのロロノア・ゾロ、そしてあの子…ニコ・ロビン。目撃情報にあった無数の女の手や毛むくじやらの怪物というのも仲間と考えてよかろう。

いずれにしろ甲板にあったカップの数からして奴らは7人、船の中にあつた考古学書は彼女の物として手入れの行き届いた調理道具の数々に難解な医学書…残りの四人の中には腕のいいコックに知識豊富な船医、そして船を動かすのなら航海術士や船大工と言つた所か？

ジャヤで遺跡に眠る黄金を発見したというのなら船内にあつた黄金も納得がいく…が、専任追討であるスモーカー准将がジャヤ以降で彼等の足取りを掴めなかつたのが解せんな…

それに何故空から降つて来たのか…自身も見えていなければ俄には信じられなかつただろうが彼等の船が空から降つて来たのは紛れもない事実。

しかし…わからんのは奴らの目的、一体何の為にここにやつてきた？」

ジョナサンはそこまで考えた所で軽く伸びをして窓から外を見る。

中央島の上部に位置する司令官室からはイーストエリアに落ちて来た麦わらの船が複数のサーチライトで照らされており曳航準備に入っている所だった。

「ま、彼等の目的が何であれ自ら捕まりに来たわけでもあるまい…となればここを脱出するにあたつて情報を集める事、船を取り戻そうとするのは考えられうるな…大事に手入れされたあの船を見る限り軍艦を奪う可能性は低いだろう。

何にせよ我がナバロン要塞…甘く見てくれるなよ？モンキー・D・ルフィ？」

そう言いながらジョナサンはスツとカーテンを閉めて部下を呼ぶのであった。

走れチョツパー！ナバロン決死の鬼ごっこ！！

「やっぱり…どこから見ても陸地に囲まれてる…。まさか出口の無い巨大な湖に落ちた？」

いや、でもここが海軍の要塞なら湖にこんな軍艦がいるのも変な話だしどこか河に繋がってたりするかも…」

メリー号からウェイバーで脱出したナミは外周島中腹の草むらにウェイバーを隠すと一先ず地理を把握する為にサーチライトや見張りを掻い潜りながら外周島の一番上まで上って来ていた。

そして把握したのはここが自分の思った通り海軍の要塞であるっぽい事とメリー号の落ちた場所がぐるりと陸地で囲まれている事の2点、ここからの脱出は至難ね…と考えるナミだったが河と繋がっている可能性を信じ確認の為に移動、そして程なくして

「成る程、陸地に湖じゃなくてここは単に内海だったのね…にしても随分と頑丈そうな水門…二重門扉なんてどうやって脱出したものか」  
外周島の切れ目と対岸、眼下には嚴重そうな分厚い鋼鉄の門扉が内側と外側に設置されており要塞の脱出にはなんとかしてここを通らなきゃいけないわね…とナミは思案する。

そして少し離れた場所に頑丈そうな鉄橋が掛けられているのを見つけて地理の把握を急ぐべく対岸に渡ろうとした所で

「何これ…いえ本で読んだわ、確か軌条…レールだったっけ？重たいものを労力なく運ぶとか何とか…何でこんなものがここに？」

鉄橋に敷かれた2本の大型レール、前にも後ろにもどこまでも続いており当てもなく歩くよりはこのレールに沿って歩いた方がいいかと考え再び歩き出す。

「重いものを運ぶ為のものなら何か施設があるかもしれないしひよつとしたらそこで情報が入るかもしれないし…一番いいのは海兵服なり何なり手に入れば潜入できるんだ…け…ど…何アレ?!?!」

そしてレールに沿って歩いていたナミは“ソレ”を見つけて驚愕を露わにする。

夜という事もあり見えていなかったが丁度月が雲の切れ間に差し



掛かった為に月光に照らされた” 鋼鉄の塊”

「なによこの化け物大砲：待つて待つて、嚴重な海軍要塞にあちこちに見られる赤いカモメ、そしてこの化け物大砲：まさかここの”あ”の”ナバロン要塞!?”」

数々のヒントから答えに辿りついたナミは思わず膝から崩れ落ちる。

「終わった：まさかこんなトコに落ちるなんて…、相手は難攻不落のナバロン要塞、例え二重になった水門を何とかして上手く脱出出来たとしてもこの化け物大砲、”ナバロンの要塞砲”が外を睨んでいる限り射程外に一気に移動でもしない限りは沈められるでしょうね…」

最低限やらなきゃいけないのはみんなとの合流、メリー号の奪取、二重になった水門の破壊、ナバロン要塞砲の破壊…あーもう、こんな時ロビンがいればいい案が出てくるかもしれないのに…よし、うじうじ考えてても仕方無いし行動あるのみよ！何だかんだでルフイ達なら何とかするかもしれないし！」

そう考えてナミは周囲を見渡し人がいないのを確認して何とか出来ないかとそつと複線式の列車砲に恐々と近づくのだった。

そして離れた場所では身を縮こまらせて口元を押さえ、必死に物陰に隠れてるチョッパーの姿、その心の中にあるのはただ一つ、”なんで海軍の基地の中に熊がいるんだよ!!”ただそれだけであった。

事の発端はつい数分前、何とか要塞内に侵入したチョッパーだったが彷徨う内にTの字の廊下で挟み撃ちになりそうなる所を咄嗟の機転で窓から空き缶を落として音を立てる事により挟み撃ちを回避、何とか一息ついた時ソレは廊下の先から現れた。

茶色と白の毛に覆われた巨体、丸い耳につぶらな瞳、そして異彩を放つのはその腕：身長より長いその腕の先には鋭い爪が生えておりソレを見たチョッパーは人獣形態から即座に四足歩行の獣形態に変化するとその場を離脱、しばらく走り続けて一息ついた所にドスドスと言う足音が聞こえ振り返れば

「ぎやあああああ!!熊あああああ!!」

こちらにダツシユで駆けてくる熊：らしき生物の姿がありそれからチョツパーはその熊らしき生物と鬼ごっこ&かくれんぼを繰り返しておりお陰で要塞内では鹿と熊が通路を走り回るといっておかしな事態が発生していたのだった。

そしていくらチョツパーと言えど無尽蔵に体力がある訳ではない為何とか休息を入れるべく倉庫のような場所に隠れ、最もコンパクトな人獣形態に変化し荷物の影で息を整えながら見つからないように祈る。

しかし倉庫の扉が無慈悲に開けられチョツパーがギシリ、と固まりチョツパーをずっと追っていた熊：シグマはその場で立ち止まり瞑目、再び目を開いたときにはまるでチョツパーが見えてるがように真っ直ぐに近づいてくるとその鋭い爪でひよいとチョツパーを掴むと持ち上げた。

「ぎやあああああ！捕まったあああああ!!おれを食べても美味しくねえぞ!!離せ！おれを食ったら腹壊すからな！後悔すんなよ！離すなら今のうちだかん!!」

つままれながらジタバタと暴れ走は叫ぶチョツパーだったがシグマは意にも介さずチョツパーを摘んだままのしのと倉庫を出て自身の友の元に向かうのだった。

敵か味方か！謎の少女アピス！

アピスはヒソヒソの実の能力者である。

”動物の心がわかる”という能力故にまだ13歳と言う若さながら動物に関してはかなり詳しいと自負しており、将来の夢は動物学者という程だ。

しかしそんな彼女をもってしても

「もうダメだ…この熊に食べられておれの冒険は終わるんだ…ごめん  
ドクター、ドクトリーヌ、おれは万能薬になるって決めてたのに…ごめんルフィ、折角おれを海賊に誘ってくれたのに…」

戻ってきたシグマがつまんでいた言葉を喋る丸っこい動物は初めて見る存在であった。

「…初めて見る子、タヌキか何かかな？」

「違う！おれはトナカイ…っおう!」

アピスのタヌキという言葉に反応してトナカイだと訂正すると同時人間形態、筋骨隆々の大柄な身体に変化して反論しようとしたチョッパードだったが、その顔の横を凄まじい勢いで何か”砲弾のように”通り過ぎ、そして背後からした凄まじい音に人間形態となったチョッパーが恐る恐る振り返るとそこには人の頭ほどの穴、そこからサイズは兎も角赤褐色のバツファローが顔を覗かせていた。

「こらっタローボー！壁壊しちゃメツだよ！ジローマル達も臨戦態勢に入らなくていいからね！」

でも大きさを換えられる上に喋るなんて…シグマさん、その子どうしたの？」

「ぐるる、ぐるるる」

「拾った？そう言えば海兵さん達が何か騒いでたみたいだけど…」

その光景を見てチョッパーは驚愕する、目の前の少女は自分の勘違いでなければこの熊の言葉を理解して受け答えをしている、つまり

「お前、動物の言葉がわかるのか!」

「ん？そうだよ、わたしはヒソヒソの実の能力者…動物の心がわかるんだ」

「お前も悪魔の実の能力者なのか…おれ以外に動物の言葉がわかる奴がいるなんてな」

「お前も…って事は貴方も能力者なの？」

「ああ、おれはトナカイだがヒトヒトの実を食ったんだ…トナカイ人間ならぬ人間トナカイだ」

「悪魔の実を食べて人になれるなんて珍しい…わたしはアピス、よろしくねトナカイさん！」

「おれはチョッパ、なあアピス知り合いならこの熊におれを食べないように言ってくれよ」

「ぐるぐるうる」

「え？食べない？変な行動してたから捕まえただけ？」

「そう言えばチョッパは何者？海軍にあなたみたいな変わり種がいるなんておじさんから聞いたことないんだけど…」

「う…やっぱここって海軍の基地なのか…、お前も女の子なのに海兵なのか？」

「わたしは海兵じゃないけどここは海軍の要塞だよ、ナバロン要塞って聞いた事ない？因みにその熊さんはシグマっていう名前だよ」

「うーん…おれは島から出たのが最近だから外の情報なんてよく知らないんだよなあ」

「島から出た事ない…ひよつとして王冠島辺りかな？それともひよつとしてメルヴィユ？どっちも珍獣がたくさんいるんだけど…」

「おれは珍獣じゃねえ！トナカイだって言ってるだろ!!」

「あはは冗談だよ、それはさておきチョッパは何者？海兵さん達が騒いでいるのとか関係あるの？」

それと共に見透かすような目をするアピスにチョッパは少したじろぐも

「…おれは医者だ、ちよつとした事故で迷い込んだだけだ」

「ちよつとした事故ねえ…どこの島にいたの？」

「おれが住んでいたのはドラム王国だ、知ってるとは思わないけど年から年中雪に閉ざされた島だよ」

「ドラム島…どつかで聞き覚えが…ああ！モネさんがいた所だ」

「知ってるのか!？」

「うん、確か医療大国として名高い国だよな?今はサクラ王国って名前を変えてファウス海軍病院にいたドラム出身のお医者さん達の帰還でかつての姿を取り戻しつつあるらしいけど」

「…そんなになつてたのか、モネって確かあの女だよな?ドクトリーヌの知り合いっぽかったけど」

「所で事故とやらの経緯を聞きたいんだけど…これでも海兵さん達のお世話になつてる身だから不審者をそのまま帰すわけにはいかないんだよね」

というアピスの言葉に先程壁に穴を開けた人の頭部ほどの大きさしかないバツファローがチョッパーを取り囲む。

「…何だこいつら、さつき壁に突っ込んだ奴の仲間か?」

「紹介するね、わたしのお友達でそれぞれタローボー、ジローマル、サブロータ、キョーシロー、ゴローザ…逃げるのはお勧めしないよ?この子達の弾丸はどこからでも狙い撃つから」

尋常ではない雰囲気チョッパーは逃げ出すべきかと扉を見るがそこにはシグマという名前だと教えられた手の長い熊が扉の前に陣取っているのを見て軽いため息ついてアピスを見て口を開いた。

「…おれ達は空島から帰って来る時に空から降りてきてただけど丁度落ちた先がここだっただけだよ、別に騒動を起こしたりするつもりはないしみんなが見つかったら直ぐに出て行くつもりだ」

「おれ達…仲間がいるって事だね?んー…流星にわたし一人の判断じゃなあ…ちよつと待っててね、大人の人呼んでくる」

その言葉に驚くチョッパー、少女が海兵達の世話になつてると言った以上連れて来るのは海兵の可能性が高い…なら無理を推してでもここから逃げ出すべきかと考えたチョッパーに

「あ、安心してね?別に海兵さん連れて来るわけじゃ無いから…逃げちゃダメだよ?」

そう言つてアピスは部屋から出ていきチョッパーは扉の前に陣取るシグマ、そして周囲を囲むタローボー達を見て

「…みんな、無事でいてくれよ?」

一人そう考えるのだった。

思わぬ再会！銀腕のサガ！

ロロノア・ゾロは方向音痴である。

自身ではその事を自覚しておらず間違った知識や思い込みから違う方向に進む事が多い。

そしてそれは時にとんでもないハズレを引くこともある。

「…ちっ、なんで軍艦つてのはこんなわかりにくい造りなんだ、メリーを見習えつてんだ」

メリー号が落ちたイーストエリアから泳いで北大水門までやって来たゾロはとりあえず近くの棧橋に停泊していた軍艦に忍び込んだ。

数隻の船があつたがその中でも灯りが完全に落とされ、人が居なさそうな船を狙って侵入しあわよくば飯や酒、情報なんかを手に入れようという魂胆である。

しかし流石に100mクラス的大型艦だけあって広く、ゾロは厨房を探して船の中をうろうろと彷徨いながら次々と扉を開けて中を確認していると暗い廊下の先から微かな足音。

直ぐ様扉の影に隠れ刀の柄に手をかけてそつと見ると燭台を手にした少年、朴訥そうな表情で茶色の髪に顔にはソバカス、海兵帽を頭に乘せているところを見ると海兵見習いかその辺りだろうとアタリをつけ腰に刀をさしているが一人ならのして話を聞けばいいだろうと考え踏み込むと同時に、雪走を抜くと刀を返して峰打ちで相手に振り落とした。

「なにっ!？」

「ちよつとお、いきなり危ないですよ？泥棒だかなんだか知らないけどよりによってこの船に乗り込むなんて随分と怖い物知らずですねえ」

しかし少年の首筋に吸い込まれる筈だった雪走の峰はいつの間にか引き抜かれた少年の手にした刀に止められていたのだった。

「テメエ…何モンだ…」

ゾロは相手の抜刀が見えなかった事に警戒度をかなり上げ油断し

ないままに刀を構えれば

「いやあ何者だと言われましても…んん？腰に三刀に腹巻…それにその顔…手配書で見たのと一緒ですね!!」

と目の前の少年は抜いた刀を再び鞘に仕舞う。

「こつちの正体はお見通しってか…」

これはやりあう必要があるかと考え三代鬼徹を引き抜こうとするゾロだったが

「いやあ会えて光栄ですよ」海賊狩りのロロノア・ゾロさん!!あ、握手して下さい!」

その言葉に毒気を抜かれたようにゾロは唾然とする。

「…いや、お前海兵だろ?おれを捕まえなくていいのか?」

「まあ確かに所属は海兵ですけど…ゾロさんは別ですよ、下手に拘束しようとするれば逃げられる可能性もありますし、隊長や副長も貴方にご執心ですし、更に言えば我々” 剣客隊 ”も是非貴方とはお会いしたかったんですよ」

「剣客隊?なんだそりや」

「あれ?ローグタウンでぶつかって聞いてたんだけどなあ…自己紹介が遅れましたねぼくは” 海軍剣客隊 ”所属のトウマって言います、剣客隊は文字通り剣士の部隊ですよ、海軍の優れた剣士が集っていますので退屈はさせませんよ?」

その言葉と共にトウマは目つきを鋭くすると再び白革の刀の柄に手をかけ、それに対してゾロも和道一文字を引き抜くと口に啞え三代鬼徹を引き抜き構える。

一触即発そのタイミングでトウマと名乗った少年の足元に突き刺さる小刀、柄なにゾロの名が彫られたそれを見てゾロは飛んできた方向をバツと振り返ればそこにいたのは褐色の肌に銀髪、腰の両側に2本の剣を持つ海兵服を着た男、そして何より目を引くのは銀色の右腕。

「船の中で暴れるな、トウマも憧れのゾロに会えて嬉しいのはわかるがあんまはしゃぐんじゃねえよ」

「副長?」



「サガ…てめえなんでここに…」

「そりゃこつちの台詞だ。ローグタウン以来だなゾロ、あんどきやゆつくり話す暇も無かったが元気にしてたか？」

「そう言つて銀の右腕を上げるサガ、ゾロは悲痛そうに銀の腕を見ながら」

「…腕、やつぱ治らなかつたのか？」

「と言うがサガは軽く笑うと」

「…まあな、これでも悩んだんだぜ？動かない右腕を抱えて生きていくか切り落として最新の義手をつけるかな、こいつに助けられた事も一度や二度じゃあねえ、別に後悔はしてねえ」

と左腕で右腕をパシリと叩いて見せる。

「しかしお前も一端の海兵やつてるみたいで安心したぜ、何しろ昔の目標は”正義の剣”を極めるだったか？」

「ははっ、青くせえ事言つたのは自覚してるさ…だがおれはおれにとつての”正義の剣”を指させてもらうさ、しかしこつちもローグタウンの時は驚いたぜ？何しろ海賊狩りが海賊やつてんだからな」

ゾロとサガ、二人の関係はイーストブルー、シモツキ村まで遡る。

彼はゾロの幼馴染で、幼少の頃からゾロと同じく一心道場でコウシロウの教えの元剣術の修業を共にしていた仲であり、ゾロが旅立つ日に彼から貰った”誓いの剣”を今も大切に持ち、そして2回目の再会には彼が武者修行の旅の途中、賞金稼ぎだったゾロと偶然遭遇、二人で海賊船を襲った際に彼はゾロを庇って右腕が不随になり、失意のうちに彷徨っている所をスモーカーに拾われた経歴を持つ。

「はっ、言つてくれる。で？おれは海賊お前は海兵…どうする捕まえるか？」

「さてね…どうしたもんか、というか何でこんなところにいるんだ？ここは赤カモメの巢、ナバロン要塞だぞ？更に言えばこの船はお前の船長”モンキー・D・ルフィ”の専任追討であるスモーカー准将の船だぜ？知つてて忍び込んだのなら大物だつて言いたいところだが…」

「げ…何てところに落ちたんだよ、おれ達空島つてところに行つてたんだけどよ、出港したら空からたまたまここに落ちて来たつてわけさ」

「空島？なんだそりや」

「空の上によ、雲で出来た島と海があんだよ羽生えた奴らとかカミサマとかいたぜ？」

「まあお前が言う事だし嘘じゃねえんだろうけど…とりあえず隊長も准将も居ないし積もる話もあるだろうし…おいトウマ、厨房から酒と適当にツマミかつぱらつてこい！」

「副長！ぼくもご一緒していいですか!?ゾロさんの話色々聞きたいんです！」

「おう、好きにしろ」

それと共にトウマは駆け出して行きサガとゾロは立場はさておき久々の再会に喜ぶのだった。

整備長メカオ！告げられた仲間の危機！

「ちくしょー…メリーはどこ行っちゃったんだあ？」

ロビンと別れたウソップはやってやる、と腹を括って手近のドッグから要塞に潜入、整備服と思われるオレンジ色で背中に海軍のマークが入ったツナギを見つけると素早くそれを身につけてゴーグルやバンドナ、服なんかは鞆に仕舞い髪を後ろで括る。

顔がバレている心配は無いと言えど、印象を変えておくに越した事は無いという判断で、同じ服を着た恐らく整備班の人間達の目を誤魔化しつつその場に入り込んでいた。

そして大勢に紛れて仕事をするフリをしつつふとメリーがあつた場所を見るとゴーイング・メリー号が姿を消しているのに気付き慌てて周囲を見るがその姿は見えず焦ってキョロキョロしている

「おい…おい聞こえないのかそこの長つ鼻!!」

後ろからかけられる声に振り返ればそこには小柄な体格にオレンジのツナギを着た老人

「なんだおっさん、おれは今それ所じゃねえんだ!」

「…見ない顔だな、しかもわしの事を知らんとは…新入りか?所属は?」

「げ…そうだな、あっちの方から来た」

相手の言葉から恐らく整備班のまとめ役辺りかと判断しそう言つてあらゆる方向を指差すウソップ

「ほう、中央エリアのドッグから…手伝いか?見物か?」

「いやあ、海賊船が落ちて来たって話を聞いて是非とも見てみたいと思つて探してたんだよー」

「海賊船だあ?ありや幽霊船だ、人っ子一人いやしねえ」

「なっ!メリーが幽霊船だ?!」

「落ちて来たときには誰も乗つとらんで甲板にはまるでさっきまで誰かおつたみたいに吸いかけの煙草やらまだ暖かいコーヒー…船ん中には古い黄金…乗っていた者達は古い遺跡から持ち出した黄金により呪われて姿を消したつつうのが専らの噂じゃな」

「確かに古い黄金だがよお…メリーを幽霊船扱いはあんまりだろ…」  
「ほお？随分とあの船の事に詳しいらしい、やっぱお前さんこの人間じゃねえな」

ウソツプの言葉にニヤリとして断定する老人

「ぐ…」

「それに中央エリアのドックは色々と機密が多くてな、そうそう簡単に新兵が配属される筈ないんだが？恐らく幽霊船の乗組員と見たが…嘘をつけば警備班に通報するぞ？」

「…何が狙いだおっさん」

「安心せい、別に今すぐ上に連絡するつもりはないわい…それより聞きたい事があってな、お前さんはあの船の乗組員って事でいいんだな？」

「ひ…秘密だ」

「語るに落ちるといふ言葉を知らんのか？…まあいいわい、お前さんらの船を見てきたがお前さんの仲間に船大工はいないのかい？」

「ほう、あの船はメリーと言うのか…知ってるも何も船の検分をしたのはわしだからな。」

修理は荒いが随分と愛情を持って大切にされてるようだ…がやはり本職の仕事じゃねえな」

「修理が荒くて悪かったな！だいたいおれは船大工じゃねえっての！」

「ふむ、お前さん方の仲間に船大工はおらんのか…そうか、それなら気付かんのも無理はないのお」

「…なんか意味深なおっさんだな、メリーがどうかしたってのかよ？」

「…率直に言わせてもらおうがお主達の船…メリーとか言ったか、ありや一年も保たんぞ？」

老人の言葉にウソツプはしばし固まる。

「は、ははっ！何言っただよおっさん!!メリー号が一年も保たない？数ヶ月前に出港したばっかの船だぞ!!だいたいおっさんにメリーの何がわかるってんだよ！」

「舐めるな小僧、わしはこの道50年のベテラン：ドッグ長のメカオたあわしの事だぞ？メリーとやらの事は知らんでも海軍船だろうが海賊船だろうが大抵の船の事ならわかるわい」

「わかった！お前おれ達を騙す気だな？おれ達は海賊、アンタらは海兵：船が沈むなんて嘘をついてメリーを奪おうって肚だな！」

「ふん、わしが信用できんなら丁度民間から船大工がこの前進水したバラクーダ号の見学に来とるわい、その男にでも聞いてみる。

因みにわしは船の事では一切嘘は言つとらんからな？」

老人：メカオそう言つて真つ直ぐな瞳でウソップを見れば

「んな馬鹿な話があるかよ：今日だつて元気に走つてたんだぜ？空島から落つこちた時も船のみんなを守つてくれたんだぞ？」

「それが原因じゃな」

困惑するウソップに更にメカオは言葉を重ねる。

「そ：それって何の話だよ」

「わしはななお前さんらの船が空から落ちてくるのを見ておつたわい：お前さん船大工の真似事をするくらいなら”竜骨”はわかるな？」

「船の大黒柱だろ？それがなんだつてんだよ？」

「そう、船つてのは竜骨を中心に船首材、船尾材、肋根材に肋骨、肘材、甲板梁などを緻密に配置する事によって出来上がる：さてここで問題だ、お前さんら上から落ちて来たな？水面に高い場所から物を落とすとどうなるかわかるか？」

「どうなるって：海水がクッションになるだろうが」

「抵抗が少なければそれでいけるかもしれないが：残念ながらお主らの船は抵抗なく着水とはいかず着水と同時にかなりのダメージが竜骨に行つとる：じゃから後一年も保たんと言つとるんじゃ」

「そんなの：修理すればいいだろ！みんなで話し合つたんだ！手に入れた黄金でメリー号の大修理をするんだ！あれだけの黄金がありやメリーを完璧に直す事だつて：」

「黄金がどれほどの額かは知らんが：アクアリアにいる伝説の船大工でさえあのメリーとやらは元に戻せんよ、これは年寄りからの忠告だ：さつさと新しく船を見つづけるかどうかした方がいいだろう：まだ

少しは保つかもしれんが…少なくとも早急に手を打つ事じゃな」  
メカオのその言葉にウソップは目の前が真っ暗になったかのよう  
にその場で愕然と膝をつくのだった。

立ちほだかる壁！海軍中将”鈍熊のクリーク”!!

ナバロン要塞中央島、高い所なら何かわかるだろう、とその山頂までよじ登って来たルフイは一人の男と対面していた。

「げ…海兵」

「この要塞に侵入しておいて随分な挨拶だなモンキー・D・ルフイ？」  
リクライニングチェアでゆったりと腰掛けていた男は上体を起こしながらもこちらを捕まえようとする様子は無い。

「なんだおっさん、やるのか？」

だからと言って油断できる訳もなく男が立ち上がると同時に拳を構えるルフイだったが

「まあ慌てるな、俺は別に捕まえる気はねえよ」

手をひらひらとさせつつテーブルの上のツマミを口にする目の前の海兵。

「ん？海兵なのに捕まえなくていいのか？」

「俺のモットーはな”身勝手な正義”、相手を捕まえる捕まえないは俺が決めるこった」

「ふーん？んじやいや、でよおっさん、ここどこだ？海兵はうようよいるし軍艦もいっぱいいるけど海軍の基地か何かか？」

とりあえず本当に今は捕まえる気は無いのだろう、少しの警戒を残しつつまずは皆と合流する為に気になっていた事を尋ねる。

「ここは”海軍本部独立遊撃隊本部”、ナバロン要塞って言葉を聞いた事ねえか？」

「知らん！」

「そうか…ここはナバロン要塞、2000人の海兵を擁する海軍の大要塞施設だ、コントロール出来なかつたとは言え空島からこの場所にピンポイントで落ちて来たのは不運と言うべきか…」

「お？おっさんおれ達が空島から来た事知ってんのか？」

「当然…イーストブルーから出てきたルーキーで数ヶ月前にグラウンドライン入り。」

そこからウイスキーピークにリトルガーデン、ドラムと破竹の勢い

で進み、アラバスタ王国ではその姫、ネフェルタリ・ビビと共に王下七武海の一角でありながら王国転覆を画策していた”サー・クロコダイル”の討伐によりその懸賞金は一億に迫る。

：そんな相手の情報を揃えるのは当たり前前だろ？お前の祖父の事やクセのあるメンバーの事も合わせて一部では注目されているぞ？」  
「うっ、じいちゃんを知ってるのか？」

「まあ少しは世話になったからな。で、こんな夜更けに何の用だ？」  
「実は空島からなんも食ってなくてよ、腹減ったからその食い物貰っていいか？」

それと共にリクライニングチェアの横にあつた簡易テーブルを指差すルフィ。

「：好きにすればいいさ、仲間を探してるとかじゃ無いのか？」  
「ありがとな！みんなを探してるってのもあるぞ？たけえ所ならんかわかんだろ」

そう言つて腕を伸ばして簡易テーブルの上にあつた料理を取るとまるで流し込むかのように食べるルフィ。

「お前の仲間達ならそうさな：厨房に医務室、ドックとかにいるんじゃないか？」

「よし、ならさつさと合流すつか：ありがとなおっさん！」  
「別に気にするな、こんな所でお前たちの冒険が終わってしまうのは心苦しいからな」

それと共に強い風が吹きバサリ、と男が羽織った海軍コートが翻り、そしてそこで見えたコートに刻まれた赤い海軍マークがルフィの記憶を刺激する。

「：なあおっさん、どつかで会った事ねえか？」  
先程までの快活さが消えてルフィが静かに、何かを思い出すかのよう  
うに尋ねると

「覚えてる可能性を考慮すべきだったか：かつて数年前に一度だけな？お前は海賊になりたいと言う昔の願いを叶えてなによりだが」  
そして傍の棍を掴んだその姿に対しルフィは”あの時の光景”がフラッシュバックした。



山賊に連れ去られ、船は砲撃で沈み、助けてくれたと思つた男に首を掴まれ吊るしあげられる…海の恐ろしさに自分の無力さ、そしてそこから助けてくれたシャンクスの偉大さ。

赤い海軍マークのコートに棒状の武器…途端にそれまでの呑気さが息を潜めルフィの目が鋭いものになる。

「…フーシャ村にいた時おれはシャンクスから助けられた、相手は赤いカモメのマークにアンタが持つてるような棍を持つてた…でももうあの時のおれじゃねえんだ！ゴムゴムの…HEATピストル!!」

それと共に目の前の海兵に襲い掛かる赤熱した拳、男はさらりと避けると

「やりあう気は無いと言つた筈だが…まあいい、名乗りが遅れたが海軍本中将”鈍熊”のクリークだ」

それと共に再び襲い掛かるルフィの拳だったがクリークは再び身体をズラす事により回避

「くっそー！避けんな!!ゴムゴムの…ガトリング!!」

ならば手数を増やせばいいとばかりに凄まじい勢いのラツシュがクリークに襲いかかるがまるで風にまう紙のように何重もの残像を描く拳を避けていく。

「くっそーさつきから紙みたいにひらひらしやがつて!!」

自身の拳が掠りもせず更に攻撃の密度を上げるルフィであったが「やり合うつもりは無かったが…悪いがしばらく眠っているといい、今の状態では一方的になるだろう」

クリークはそう言いながら右手に握つた棍を真っ直ぐ突き出せば先端が拳を構えたルフィに迫り

「こなくそっ!!」

目の前の棍を打ち払おうとした所で自身の身体に走る脱力感

「っ！海楼石!?!」

「悪いがまだぶつかるとは気がない…だから少し大人しくしてきてくれ”心意六王・熊手拳砲”!!」

そして棍を手放したクリークの黒く染まる腕、風を穿ち振り抜かれたその掌底は力が入らないながらも咄嗟にガードしたルフィの両腕

に着弾するとまるで爆発したかのような威力で衝撃を体に叩き込み大きくその身体を吹き飛ばした。

「ちくしょおっ!!待ってるよ!いつかおれはお前をぶっ飛ばすからな!おれはあの時のお前を乗り越えてシヤンクスの所に行くんだからな!!」

ルフィは両腕と身体に走る痛みを堪えて吹っ飛ばされながらも右腕を振り抜いた体勢の男にそう叫びながら中央島から外周島へと吹っ飛ばされたのだった。

「ま、原作主人公ならいつか俺なんかも超えてしまおうだろうな...しかしここに落ちて来てホントに出て行けるのか?まだ麦わらたちにはイベントがあるんだが...」

”原作”とでも言うべきか、自身の記憶に根強く残る冒険活劇...それを思い出しながらクリークは肩をすくめるのだった。

## 剣士の集い！唸る海軍剣客隊！！

サガの手に持つ木刀が翻り相手の胴を打ち据える。

「次いつ!!」

「はいっ！」

打たれた相手は下がりサガの声にまた一人袴に胴着の男が木刀を持って前へ、数合の打ち合いの後に今度はサガの足払い、剣を捌く事に集中していた男は気づきはしたものの避けきれず体制を崩し眼前に木刀を振り下ろされ

「剣だけに集中するな、必ずしも相手が剣だけしか使わないと言うわけじゃ無いぞ！次っ!!」

「ういつす！」

サガの言葉に頷きつつ下がっていく。

「へえ…立派にやってんじゃねえか…」

そんな姿を見ながらゾロは壁に寄りかかった体勢で軽く呟くのがあった、何故か周りの人間たちと同じく紺の短袴に黒い袖なし胴着を着た状態で。

時間は少し遡る。

”単身ゾロが忍び込んだ船はスモーカーの乗る” ホワイト・ビローア”号であった。

船内探索の折、懐かしい旧友との思わぬ再会に酒とつまみで積もる話をしながらいつのまにか眠ってしまい次にゾロはカランカランという鐘の音により目が覚め、サガに言われるままに渡された服に着替えて同じ胴着を着た100人程の集団と共に朝の光を浴びながら船を出ると到着した場所は一つの道場。

流石にだけえ所は違うなどゾロがキョロキョロしていると中央に立ったサガの”これより稽古を始める”という言葉と共にそれぞれが木刀片手に打ち合いを始めたのであった。

そんな訳でゾロは壁に寄りかかった状態でサガやその周囲で打ち合う海兵達を観察していたのだった。

「…やっぱ全員剣士みてえだな、それもどいつもこいつも腕は立ちそ

うだ」

「そりやそうですよ、ぼくたちはモモンガ中将の肝煎りで設立された“海軍剣客隊”、優れた海軍剣士や剣士の卵が集められたのがこの部隊ですからね。どうですか？ゾロさんも遊んでみますか？」

その言葉に答えたのは傍にいたトウマ、彼も胴着と袴を身につけておりその腰と更に右手に持った木刀をゾロに差し出していた。

「おれあ海賊なんだが…今更ながらこの状況はおかしいだろ」

「別に皆気にしないと思いますよ？それどころか皆さん”海賊狩り”という噂に名高い剣士とやり合いたくてうすうすしてるみたいですよ」

先程からチラチラ見られていたのは物珍しさでは無くそういう理由か…と思いつつもそういう事ならわかりやすいと思いつ

「へっ、どいつもこいつも随分と血の気が多いこった…だったら一本じゃ足りねえ、後2本貸してくれ」

「確かに三刀流が木刀一本じゃ締まらないですよ」

と、トウマが追加で2本の木刀を渡すとゾロは独特の構えで三刀を持つと

「さて、まずは誰からだ？それ共全員か？」

と99人の剣士達に言つてのけたのだった。

「では拙者からいくでござるぞ！三式・風の織月（なぎのせんげつ）！！」

それと共に飛び出した男は腰の木刀を抜刀するに合わせてそのまま手を離すとゾロの眼前に柄頭が迫り

「剣士が刀を飛ばすなんて何考えてやがる…」

軽く跳ね除けようとした所で飛んできていた筈の木刀が振り上げられる。

「甘いでござる…海軍剣術の中には剣を投げる技もあるでござるよ！！」

飛ばした刀で視界を誘導しつつ瞬時に踏み込み刀を掴んでからの振り下ろし、相手の意表をついて一撃の元に落とす技であるが相手はイーストブルーにおいて名の知れた、更にはグランドラインに入ってから着々と経験を積んだ猛者。

海兵が振り下ろした攻撃は交差した木刀に沈むように受け止められ、更に反動とばかりに二刀が相手の木刀を跳ね上がるとガラ空きになった胴体に打ち込まれる木刀。

「振り下ろしのパワーが足りねえ！次っ!!」

「じゃあ次はおれが行こう…」

それと共に踏み出した男は自在な足運びで緩急をつけるように動くところに残像が現れ動きを誤魔化しながらゾロを幻惑する。

「なんだこの動き…動いてるのに動いてねえような…」

「二式歩法・流水の動き…動の動きに慣れた貴様のような剣士には捉えられまいそして動きを捉えれぬまま終わるがいい！一式・回天剣舞（かいてんけんぶ）!!」

それと共に男が逆手に持った木刀が凄まじい勢いで振られるが響くは肉を撃打つ鈍い音で無く木刀がへし折れる嫌な音。

「攻撃に逸ったな！攻撃に移る時に動きが見えたぞ！次っ！」

「ぐはあっ！」

三本の木刀を交差させるように相手の木刀を挟み込むとそのままへし折り蹴り飛ばす。

「一式・片手平突きいっ!!」

そして次に襲い掛かるは腰を落として半身になる独特の体勢から繰り出される突き、当然突き技なら躲せば済むとゾロは半歩横にずれるが、地面と水平に突き出されたその突きは突如として横薙ぎに変化「いい技だ！だが視界が狭くなってるな!!そこを無くせば化けるかもな！次っ！」

爆発的脚力で踏み込んでの突き、という突進に近い技の所為か死角が生じそこに振り下ろされたゾロの木刀に相手は崩れ落ちた。

「ならばこれでどうだ！三式・纏飯綱（まといづな）!!」

それと共に次に出てきた大柄な男は両手で握った木刀を大上段で振り下ろしゾロは木刀で受け止めようとしたが途端にゾワリと肌が泡立ち後ろに飛びすされば道場の床に走る斬撃痕

「なんつー危ねえ技だ！だが振り下ろした後に繋げること考えとけ！次っ!!」

そのまま受けていれば木刀ごと切り裂かれていたかも知れないと  
考えながらも二刀の交差斬撃で木刀を振り下ろした体制の男を吹き  
飛ばす。

そして次から次に出てくる見たことのない技に加えて久々の稽古  
による打ち合いという雰囲気にはゾロは昔を思い出しながら段々楽し  
くなっており次々に出てくる海軍剣士を吹き飛ばしていくのだった。

## 居合の極致、最速剣士トウマ!

ナバロン要塞第七道場、ここでは胴着に木刀を持った剣士達の打ち合いが行われていた。

最初に比べて徐々に手強くなってきたがまた一人ゾロの剛撃の前に沈みまた次の海兵が前に出ようとした所でじつと見ていたサガが手を叩き注目を集める。

「よし一旦そこまで。流石噂に名高い海賊狩りだな、うちの隊員を半数以上も沈めるとは驚きだ」

サガのその言葉に隊員達はバラバラと水分補給をしたり体をほぐしたり、そんな中でゾロはサガの元に。

「ようやく体があつたまつてきたんだがな…しかしどいつもこいつも曲者ばつかな、見た事無い技ばつかなのがどういいう流派だ?一つの流派にしちや随分と多彩だが…」

「ああ、知らないのも無理は無いだろ。うちで使ってるのはあちこちに散らばる各流派の技を統合して体系化した”海軍剣術”って名付けられたモンでな、剛剣術の一式、柔剣術の二式、難剣術の三式と大きく三つに分かれそれぞれ自分の適性に合ったのを身につけていくって感じだな。

ま、剣豪なんて上位であれば上位である程その括りは殆ど無くなるが…例えばお前が身につけるんならやはり一式だろう、相も変わらず力任せな所が目立つしな」

軽い説明と共にそう言うサガにゾロは不満そうな顔をする

「別に剛剣しか振れねえわけじゃねえが…そーいやあのパクリ女はいねえのか?いや、別に会いたいわけじゃねえぞ?アイツがいるとまたややこしくなりそうだからな」

ローグタウンで少しだけ打ち合ったかつて死別した幼馴染に似た海軍剣士の姿をふと思ひ出してそう聞く。

「隊長の事か?たしぎ隊長ならスモーカー准将と一緒にだろ。因みにその呼び方はやめとけ、確かに先生の娘さんに似ているがそれを隊長が聞いたらまたややこしい事態になるぞ?」

当然サガも交流こそ少なかったが同じ道場の仲間であり自身の幼馴染のライバルだったくらいについては当然覚えており、最初に見た時には思わず目を疑った程であったが。

「そういやアイツ隊長だったか…だが解せねえな、海軍の剣士達を集めたこの隊の隊長がなんでアイツなんだ？ローグタウンで去り際に少しやり合ったけど多少出来るってくらいだろ？言っちゃ悪いがそんなのゴマンとみてきたぜ？」

「そこら辺は刀マニアにして剣術マニアであるたしぎ隊長の知識面にモモンガ中將が目をつけたらしい、なんでも新しい組織を作るにあたって上は強さよりも知識を求めた結果だったか…」

ゾロが実際剣を交えた時の感想を交えて疑問を呈するがサガはちやんと理由がある事を伝えて言い淀み

「だったか？」

「だったが化けた、今の隊長をあの時と同じだと思わない方がいいぞ？」

別に隠しても意味は無いだろうと正直に言う。

「そりやどういう…」

「さてな会えばわかるさ、ローグタウン以降どうやらお前にご執心らしいからそのうち飛んでくるかもしれないぞ？さて休憩は終わりだ！次は誰からだ！」

「ぼくやります！噂に名高いゾロさんとはぜひやりたいと思ってたんです!!」

そう言つて元気よく手を挙げるトウマにゾロはサガに言われた言葉を一旦置いて

「よし、どっからでもかかってこい！」

そう言いながら三本の木刀を構えればトウマは腰に木刀を添える前傾の構え。

軽く攻撃を誘つてみるもトウマは釣られずゾロはそれに対して

「へえ居合か？確かにあん時の抜き打ちは速かったが…だが来るとわかってりやこええもんでもねえな!!」

そう言つて踏み込み右手の木刀で上段からの一撃を落とそうとし



た所で再び走るゾワリとした感覚に咄嗟に左手の木刀を持ち上げれば

「秘剣・零閃（ぜろせん）」

木刀に走る凄まじい衝撃にたたらを踏み反撃しようとするればそこには再び木刀を腰だめに構えたトウマの姿。

「っ！なんて隠し球持ってやがる!？」

衝撃故に折れた木刀を投げ捨てそう叫ぶゾロ、確かに船内で気絶させようとした時に剣の軌跡が見えなかった事を思い出し冷や汗を流す。

「いやあ流石ゾロさん、ぼくのコレを防ぐなんて凄いですね!! 自信なくしちゃうなあ…零閃っ!!」

それと共に半歩後ろに下がろうとするもここで退くのは間違いだと自分に言い聞かせながら自身の脚力にものを言わせて飛び上がる事で回避。

「居合は最速だとはよく言うが限度ってもんがあんだろ!?! 抜き手も返し手も見えねえなんてどんな速度だ!!」

二連続の超高速の居合をなんとか退けた所でゾロは多少息を上げつつ言えば

「いやあ、真剣じゃないのでこれでも速度は落ちてるんですよ、ぼく愛用の刹那丸ならもつと速いですよ?」

と人懐っこい笑みを浮かべてそう自慢するトウマ。

「…なんっ！恐ろしい奴だよ、お前みたいな奴が海軍にはゴロゴロいんのか」

「いやいやぼくなんかまだまだですよ? 総括のモモンガ中将は言うまでも無いですし身近な所で先輩達に副長や隊長、それから指導してくれたユキムラ少将に海軍剣術の開発に大きく関与してるクリーク中将。

他にも剣士は海軍にたくさんいますし海軍だけでなく海賊も優れた剣士はゴロゴロいますからね…しかし悔しいなあ、ぼくの居合は”鏢鳴”なんて異名を取るほどだったんですけどねえ、なんでわかったんですか?」

「咄嗟の事だ、勘って奴だな」

実際に攻撃を察知して避けた訳ではなく”何かやばい”という漠然とした感覚で避けただけなので正直に言えば

「へえ…じゃあもうちよつとだけ付き合っして下さいよ、本氣って奴をやってみますので」

そう言っつて再び前傾姿勢になり腰だめに木刀を構え鋭い目つきになるトウマだったが

「そこまでにしとけトウマ、隠し球まで使う気か？」

サガが後ろから小突く事で注意をすれば集中が切れたのか

「ええ、折角楽しくなつて来たところなんですけどねえ？」

と不満そうに言う。

「つたく、なんでうちの奴らはどいつもこいつも血の氣が多いんだ？それよりおれもそろそろゾロと遊びてえんだが？」

「副長だつて人の事言えないじゃないですかあ…いいですよ、久々の再会みたいですしここは副長に譲りますよ」

そう言っつてトウマは周囲で観戦する輪の中に下がりゾロは新しく木刀を借りると

「じゃあどれだけ成長したか見せてもらおうか？」

「言っつてろ、噂に名高い三刀流とやらを見てやるよ」

そう言っつてサガは左手で木刀を持ち右肩に乗せた構え、ゾロはいつも通り両手と口に構え道場の中央で向かい合うのだった。

## 因縁の再会！海軍女剣士たしぎ！

”シルバーハンド”

かつて事故に巻き込まれて不随となり、失意に暮れていたがスモーカーに拾われた後いつその事もう動かないのなら、と生体技術と機械技術を融合させた大々的な手術に、いわゆるサイボーグ化によって再び動いた左手は戦闘においてもその威力を発揮、技の冴えは昔以上になりその頃からサガは”シルバーハンド”の異名で呼ばれるようになっていた。

体術と剣術を自在に織り交ぜながら振られる剣は左腕の怪力もあつてか高い威力を誇り

「蹴撃：刀勢つ（しゅうげきとうせい）！」

今また繰り出された斬り上げと同時に木刀の峰を蹴り上げて威力を倍加させたサガの攻撃をゾロは

「二刀流・犀回つ（さいくる）！！」

二刀による回転で強引に弾きその勢いで横からの攻撃を試みるとそれはサガが直ぐに後転で回避した事により不発に終わる。

「手数が多いってのは…単純に面倒だなっ！」

「ちっ、そっちこそけつたいな剣術使いやがる…そんな技道場では教えて無かったぞ？」

「それを言うなら二刀流だつて道場で教えてねえよ！」

軽口を叩き合うゾロとサガだったが決して手は止めず、周囲で観戦する剣客隊の隊員達は高いレベルでの技の応酬に興奮していた。

かたや”海軍剣客隊”の二番手、かたやあの麦わら海賊団の”海賊狩り”：木刀とは言え二人の技の応酬は剣士にとつてとても得難いものであり、隊員の全てが一挙一動すら見逃すまいと真剣な表情で並んでいた。

「…何をやっているんですか」

しかしそこで道場の扉が開け放たれ響く女性の声。

二刀の上段からの振り下ろしをしようとしたゾロと、右手の掌で木

刀の柄尻を突き込もうとサガはその体勢で固まりそちらを見ればそこにいたのは黒い短袴に白い袖なし胴着、赤いフレームの眼鏡をかけた左手に木刀を持つ女性：海軍本部少佐にして海軍剣客隊隊長である女剣士”たしぎ”がムツとした顔で立ちはだかっていたのだった。

「げ…：パクリ女…」

「またそれですか…事情はサガさんから聞きましたし同情もしますが今度そう呼んだら私の木刀が唸りますからね？」

そう言つて鋭い目つきをするたしぎにゾロはローグタウンで相対した時と別人のような佇まいに瞠目する。

「あ…：隊長、麦わらの捕縛はよろしかったので？スモーカー准将と一緒にだったのでは？」

「ええ、一旦休む事になりました。私はいつも通り皆さんと稽古しようと思つて出て来たのですが、丁度今日の前に情報を話してくれそうな人がいますね」

「いやいや隊長、下手に捕縛しようとしても逃げられるだけですよ？」  
「百人の剣士相手にロロノアがここから逃げきれるとでも？麦わらの一味の狙いがわからない以上情報は集めるべきです」

そう言つて木刀をビシリと突きつけるたしぎにゾロはため息を吐きつつ

「別に狙いも何もねえよ、天国に行つてそつから落ちて来たらここだった…：そんだけの話だ」

「またそんな戯言を…：天国で神様にでも会つたというのですか？」

「ああ、雷の能力者でな…：最後はルフィが吹っ飛ばしておれたちゃタコ風船でフワフワと降りて来たつてわけだ」

ゾロの説明にたしぎは

「何をバカな…：神様なんているわけないじゃないですか？」

眉を下げ怪訝そうな顔をするも

「隊長、話を聞くにゾロ達どうやら空島に行つてたみたいで…」

「何をバカな、空島への航路であるハイウエストはまだまだ先ですしメルヴィユの山頂は近いですがどうやって船で行くと言うんですか？」

ジョナサン司令曰く空から落ちて来たのは事実みたいですし恐らく大型カタパルトなり何なりを使ったのでしようが…ただそうまでしてここに入り込んだ狙いが不明です、一体貴方達の船長は何を企んでいるのですか？ロロノア・ゾロ」

「だから言っただろ女剣士…空から落ちてきたらたまたまここだったってだけの話だ」

「む、次はその呼び方ですか…私の名前はパクリ女でも女剣士でもありません！」

「ぐ…別に名前なんてどうでもいいだろ」

「…まあいいでしょう、海賊である貴方にまともに呼んでもらえると思っただけです」

さてロロノア・ゾロ、貴方には二つの道があります…一つ今すぐここで捕縛されて監獄に送り込まれる、勿論尋問もセットです。二つ司法取引として海軍剣客隊に保護観察として入隊しその噂に名高い剣術を海軍のために振るう、とはいえ一応調べは行いますよ？私たちは貴方達の狙いがわかりませんので。

それとも暴れてここから逃げ出しますか？ここにいる海軍剣客隊100名とこのナバロン要塞の海兵2千人相手をどうにか出来る自信があるのならですが」

そう言っただけで木刀を晴眼…ゾロの眉間に先端を向け構えるたしぎにゾロは少し考えるが

「へえ…ローグタウンの時よりちっとは成長してるみてえだな、随分と自然に構えられるようになったもんだ」

ニヤリと笑って三本の木刀を構える。

「…ま、貴方みたいな豪胆な人がそうそう頷くと思っただけじゃない、ならばここで叩いて従ってもらいます」

「はっ、やれるもんならやってみやがれ」

「噂は聞いています…あの殺し屋ダズを破ったそうですね、貴方も強くなってるみたいですが…いつまでも私がああ時のままだと思わないで下さい」

そうして互いに構え睨み合うゾロとたしぎであったが、そこにけた

たましい音でサイレンが鳴り始めたのだった。

もたらされた情報！脱出を阻む脅威！

時は遡る。

突如として遭遇したかつての敵、海軍本部中将「鈍熊」のクリークの一撃により大きく吹き飛ばされたルフィは

「くっそ…おれゴムなのになんでアイツの攻撃が効いてんだよ…ゴリラの奴め、いつかぶっ飛ばす」

と、一撃を加えられた腹部を押さえつつも暗くて見えづらいが眼下に見えた構造物に手を伸ばしてブレーキ代わりにして着地。

ゴム人間故に単純打撃ならほぼ無効化するというわかりやすいからこそ強力な自身の特性があつたゴリラのような男の一撃には効果を発揮しなかつた事に疑問を抱きつつも周囲を見渡せば

「やつぱ海楼石のせいか？兎に角攻撃を避ける事も考えねえと…つてなんだこれ？大砲か？」

暗がりに目が慣れ自身が掴んだものが目に写りルフィはその大きさに驚いた。

「ウソツプのやつが見たら喜びそうだなー、この大砲撃ったらみんな集まるか？」

ナバロンの悪魔と恐れられる巨大な移動砲台の前で何気に物騒な事を考えながらキョロキョロと見回し、要塞砲の入り口にドアがあるのを発見したルフィは再び腕を伸ばしてドアの前に。

「お邪魔しまーす」

ドアを開けると同時に自分に襲いかかって来た棍の一撃を首を引っ張る事により回避、海兵服を着た相手に反撃を加えようとした所で

「え、ルフィ!?なんであんなこんなトコに!？」

その声に拳を止めればそこにいたのはオレンジの髪を帽子に押し込んだ少女、自分たちの頼れる航海士にしてご意見番であるナミの姿であった。

「なんだナミか、他のみんなは見つかつてねーのか？」

拳を下ろしつつ中をキョロキョロと見渡すルフィ、内部はそこまで

広いわけでは無く備え付けの椅子が二台と設置されたコンソールのあちこちにハンドルやレバー、ボタンなどが所狭しと並んでいるのを見るに恐らくこの大砲の操作室なのだろう。

「よりによつて一番最初に見つかったのがアンタとか…やばい、絶対何か問題起きるわ…」

ナミは大型の移動要塞砲を慎重に調べ回り予備であろうか、海兵服を見つけたのでこれ幸いと着替えて深く帽子をかぶつてこれですぐにはバレないだろうと安心していたが、一番”慎重”とは程遠い自身の船長の出現にナミは頭を抱えるも早い段階で出会えたつて事は状況をコントロール出来るつて事よね…と考え直す。

「そーいやここやっぱ海軍の要塞だつてよ、なばろんとか何とか」

「当たつて欲しくない予想が当たつたわね…」

「そんなヤベーとこなのか？」

「そりやそうよ、ザツと見回つたけど難攻不落と恐れられているのも無理は無いわ。

基本的に外海にはこの化け物砲台と岩壁に並んだ要塞砲が睨みを効かせてるし、急所となりやすい港は北と南二ヶ所の二重水門に閉ざされた内側、所属する海兵は最も戦闘経験が多いつて噂の”海軍独立遊撃隊”…カモメの水兵団の人間よ？」

「ふーん？とりあえずみんなを探して合流しようぜ？んでメリーに乗つてさつさとこんな場所出て行こうぜ、出入り口の場所はわかってんだろ？」

まるで他人事かのようなルフィの態度にナミの額にビキリと青筋が走る。

「そ・れ・が・簡単に来るんなら苦労しないわよ!! 兎に角ルフィアンタは大人しくしててよ？勝手にさせると絶対何か騒ぎおこすでしょ？」

「む、おれをシンヨーしてねーのか？というか何か騒ぎが起きる方に行けばみんないそうな気もするぞ？」

ルフィのその言葉に

「う、確かに否定できない…いやいや、ここが海軍要塞ならみんなも慎



重に動く筈よ」

ナミは脳裏に問題を起こしそうな仲間達の顔が浮かぶもかぶりを振って考え直し

「兎に角アンタも今の格好のままだと捕まえてくれて言ってるようなものよ、それからみんなが何処にいるかと脱出ルートも見つけなきゃなんないわね：兎に角情報が欲しいわ、ルフィアンタ何か知らない？何処で聞いたか知らないけどここがナバロン要塞ってのは誰か話してるのを聞いたのよね？他に何か話してなかった？」

どんな些細な情報でもないよりはあった方がいいと思つてそう聞けば

「えーと…みんなならドックとか医務室とか厨房にいるんじゃないかかって言つてたぞ？」

思つたより詳細な情報にナミは頬をひきつらせるが

「…いえ、こつちの情報を知つてるというよりメリー号を探すためにドック、食料を手に入れる為に厨房…何故医務室が出てきたのかしら、まさかこちらの構成を把握している…？ルフィ、それを話したのは何者なの？海兵？」

「おうちゆうじょーとか言つてたぞ、いつかぜつてーぶつ飛ばす」

そう言つて拳を合わせるルフィにナミは一瞬気が遠くなりそうになりながらも何とか堪えて頭を抱える。

「この要塞で中将って言つたらカミソリジョナサンじゃないのよ…なんでここに来てあんまり経つてないのにそんな大物と遭遇してんのよ！なにかに憑かれてるんじゃないの!？」

「ん？そんな名前じゃなかったぞ？確かどんぐま？とかどんぐり？とか言う名前のゴリラみてーなでっけえおっさんだった」

「あ、無理」

「えっ?!おいナミ！どうしたんだしっかりしろ!!」

ルフィの情報、そして自身の知識から導き出された答え…カモメの水兵団総司令である”最も大将に近い中将”がこの要塞にいるという事実に辿り着いたナミはあまりの難関の高さに今度こそ気が遠くなるのであつた。

## 蠢く策謀、謀略のナバロン要塞！

「と・に・か・く！アンタはここで大人しくしてなさい、何かあったらとりあえず逃げて姿を隠す事、いいわね？」

意識を取り戻したナミは少し考えてとりあえず問題を起こしそうな自身の船長にはここで待機させておいた方がいいかと考えそう言うも

「えー？全部ぶっ飛ばしやあいじゃんかよー」

ルフィは不満そうな顔、確かにルフィは強い…強いのだが

「しゃらっぶ、ここは赤カモメの水兵団の本部よ？この規模なら千人を超える海兵が常駐しててもおかしくないわ、いくらアンタが強くても物量に潰されるのがオチよ」

例え個の戦力が高かった所で集団に押し潰されても不思議では無いだろう、ナミはそう判断して言い聞かせるも

「ぶー、でも何か食いもんくらい探しに行ってもいいだろ？」

ルフィの言葉にナミは少し考え直す。

「…そういうえば厨房とかにサンジくんが潜入してる可能性もあるわね」

「だろ？なら飯食い行くついでにサンジ探そうぜ！」

「待って、いると決まったわけじゃないし上手く潜入してる可能性もあるから下手につつくわけにも…」

「おーしゼンは急げだ！なにやっつてんだよナミ、さっさと行こうぜ！！」  
そう言いすぎるナミだったがとつとくにルフィは話も聞かずに走り出しており

「ちよつと！話くらい聞きなさい!!慎重に行かないといけないのよ!?!って言うかアンタ厨房の場所わかるの!?!」

頭を抑えつつナミは慌てて追いかけるのだった。

そして当然ルフィもナミも厨房の場所を知らず彷徨ってるうちに空が白み始めた頃中央島の司令室では

「なに？入港を求めている船がいるだと？あらかじめ入港申請を出し

「ていた船か？」

『はっ！到着予定が昨夜だったスタンマレー号であります、途中でハリケーンに巻き込まれたらしく怪我人多数、船体もかなりのダメージを受けているそうです！』

「しかしだな…今要塞は侵入者の存在で厳戒態勢なのだ…怪我人には悪いが少し待ってもらうように伝えよう、それから医療班を手配して直ぐに対応できるように…」

大水門からの電伝虫に現在の状況を鑑みてそう答えるドレイクであつたが

「入れてやれ」

「は？しかし要塞内に麦わらの一味が潜んでいる以上スタンマレー号の入港どさくさに紛れる可能性が…」

「入れてやれと言っている、君も海兵ならわかるだろう？海の上でまともに動けず、安心できる場所もない不安というものは」

「はっ…ですが…」

「構わん、それくらいで破られるほど我らのナバロン要塞は甘い存在では無いだろう？」

「…わかりました、スタンマレー号を入港させろ！棧橋に一個中隊を待機、停泊後直ぐに怪我人を運びだせ!!」

『了解しました!!』

そう言つて切られる通信にジョナサンは

「さて…昨夜入港予定のスタンマレー号と言えば本部からの監査官が乗っていると報告があつたな」

と、数日前に届いていた報告書を思い出す。

「本部からの監査官…でありますか？一体このナバロンに何をしに…」

「しかも政府の役人も一緒に来るときた…これは何だかききな臭いと思わないかい？」

「世界政府の役人も一緒…となると到着予定の監査官は過激派の人間でしょう、目的は最新鋭艦であるバラクーダ号、若しくは現在極秘裏に建造中のガルガンチュア号といった所でしょうか？」

「それから穩健派である我々海軍独立遊撃隊の力を削ぐ狙いもあるのやも知れん…難癖をつけてくる可能性もある、対応は慎重にな？」

「了解しました、ではそちらにも注意しつつ我々は食堂に向かいます」「ん？食堂に何しに？」

「司令官がおっしゃったではありませんか…夜が明けたら食堂を探せと…」

「む、そうだったか？まあいいそっちは君に任せるよわたしは監査官とやらを出迎えをに行こうか、下手に動かれても面倒だしな」

「了解しました、必ずや麦わらはこの手で捕まえて見せます！」

ドレイクの熱意溢れる声を聞きながらジョナサンは立ち上がりスタンマレー号が停泊する棧橋へと向かうのだった。

一方スタンマレー号が停泊した棧橋に二人の男の影があった。

「ぶえつくしよい!!…ええいここの司令官は何を考えている！わざわざ本部からブイアイピーであるわたしが来たというのに寒空の下で待たせるとは!!」

一人は神経質そうな顔つきに詰襟の上に羽織った海軍コートが本部将校だという事を表している。

「ンツフッフ…まあまあシェパード殿、それだけつつく要素が増えるというもの、文句は直接ここの司令に言えばいいでは無いですか」

もう一人は高い鼻に右目に走る一本傷髭を蓄えたその男は黒づくめのスーツにこれまた黒いハット、胸に世界政府のマークを持つ事から世界政府の役人だと言うことが推察できた。

「しかしコーギー殿、カモメの水兵団の戦力を削ぐとは言えどういう手段で？」

「なあに、手段はいくらでもあるでしょう…その為に監査官である貴方について来て貰ったのですしスタンダム長官に頼み込んで人員も貸して貰ったのですからね」

「…あの軽い若造ですか、役に立つので？」

「スタンダム長官の役職はご存知でしょう？彼は新入りとは言え”戦

闘の天才”と呼ばれる腕前：勿論諜報技術においても厳しい鍛錬の元選ばれています：まあ長官はケチくさいので一人しか貸してくれませんでしたかねえ」

「くっくくく、それは心強い：しかしえらく基地内が慌ただしいが：おい！その海兵!!」

「はっ！なんでありませんようか将校殿!!」

「基地内がえらく慌ただしいが：何かあったのか？」

「は！昨晚未明この要塞に侵入者が現れたとの事!!現在追跡班が搜索にあたっています!!」

「ふむ：聞いたかなコーギー殿？」

「ええシエパード殿、これなら我々もやり易いというものですな」

そう言つて二人はいかにも悪だくみをしていますという表情で笑うのだった。

謎の船大工！死を待つだけの海賊船！

「おおメリー！無事だったか!!」

「後帆ラティンセイル仕様の船尾中央舵方式キャラベル・レドンド：ちと古いが小型故に沿岸や河まで入れる上に小回りも効き速力もある上に操舵性が極めて優れておる、経済性、速度、操舵性、汎用性といった要素を見てもこの時代の最も優れた帆船のひとつじゃろう」

「おっさんよく知ってんな…で何処が駄目だつてんだ？おれは見るまで信じねえからな！」

メリーの動けなくなる日が近い…メカオのその言葉に当然ウソップは納得できず食つてかかった。

当然であろう、ゴーイングメリー号はウソップにとつてはシロップ村で幼馴染であるカヤから貰った大切な…それこそ命より大切な船である、故障しました修理できません。はいそうですか…とは行かないのだ。

それに空島で手に入れた黄金もありそれでゴーイングメリー号の大修繕を行おうと皆で決めたばかりなのだ、とりあえずいくら目の前の整備兵がベテランでもそう簡単に信じられないという思いの元”見るまでは納得できねえ!!”と言つてのけたがメカオはやれやれ…とばかりにウソップについてこいと言うと要塞内をしばらく歩き連れてこられたのは無人のドック…そしてそこにはドックに引き上げられたゴーイングメリー号の姿があった。

「こつちじゃ若造」

「ちよ、待つてくれよおっさん！」

引き上げ船台に乗せられたメリー号の船底の方にすると降りて行くメカオの呼びかけに慌てて追いかけるウソップ

「小型故に小回りは効くし無茶もさせ易い…がその分大型船なら何箇所かに分散出来る疲労も一点に集中する…その結果がこれじゃわい」  
それと共に竜骨の真ん中、丁度船底の中央に当たる部分をコンコンと叩いて見せるメカオ。

とは言うものの傍目には特に異常は見られず

「別に見た目は普通じゃねえか、まったく驚かせんなよ……」

とウソツプは安堵のため息をつくが

「馬鹿野郎、テメエの目は節穴か!!……と、船大工が本職じゃねえなら見抜けねえのも無理はねえか……こつちとこつちで音が違うのはわかるか?」

それと共に二箇所ほどを手に持った木槌で叩いて見せるメカオ

僅かだが音の違いを捉えたウソツプは自分でもバックから木槌を取り出し軽く叩いてみる。

「こつちの方が音が軽い……どういう事だおっさん!!」

「内部で裂け目が走っておるといふ事じゃわい、このままいけば裂け目は大きく広がり外板も肋骨もズレ、それが更に負担になって竜骨の他の場所にも負担が行く……まだ暫くは持つだろうがわしは乗り換えを進めるぞ」

「っ……それなら新しくメリーを作るまでだ!金ならあるんだ!!」

「……そうは言うがな若造、確かに似た船は作れるじやろうて。」

見たところコイツは色々な修羅場をくぐり抜け、不器用ながらもきちんと修理されながら愛情を注がれて来たい船じゃわい……じやからこその船と同じ船を作ったとしてそれを別物だと一番感じるのはお前さんから自身じゃないのか?」

メカオの諭すような声に俯くウソツプであったがその雰囲気をおち壊すように

「へい兄ちゃん!話は聞かせてもらったぜ!」

伽藍としたドック内に響き渡る男の声にウソツプがそちらを見ればそこには海パンにアロハシャツ、金属質の鼻に尖った顎、サンングラスにリーゼントでキメた水色の髪……

「なっ……こんなとこに海パン一丁とか変態か!?!」

「おうおうおう失礼な兄ちゃんだな?おれはお前が困つてると見て声をかけてやったんだぜ?」

「どうみても不審者じゃねえか!!おっさんの知り合いか?」

この海兵基地でこんな格好の人間となると不審者にしか見えぬメカオにそう聞くウソツプだったが

「うちの新鋭艦を見学に来とる船大工じゃわい、確かウオーターセブンから来たんじゃないか？」

「へっ、おれはフランキー!!ものは相談だが兄ちゃん金はあると言っただな…いくらある？」

「それがどうしたってんだよ、だいたい換金もしてねえんだから幾らあるかなんてわかるわけねえだろ？」

ウソツプの言葉に少し考え込むフランキーだったが

「見たところ随分と船を愛しちまってるらしいが…そんななら今ここで乗り換えろってのも酷な話だろ？」

「別に乗り換えるつもりはねえ!!メリーはここまでおれ達を乗せて走ってきてくれたんだぞ!!あの時だって”もう少しみんなを運んであげる”って…」

「あの時？」

「おん?…何の話だ?」

それと共に空島で過ごした時、ダメージを受けていたメリー号が何者かによつて修理された事を…実はあれはメリー号の化身だったんじゃないかと話すウソツプ。

「別に信じなくてもいいさ…」

涙を流しながら言うウソツプにメカオとフランキーは顔を合わせる。

「そりゃあなあおめえ…」

「若造、お前さん”クラバウターマン”ってのを聞いたことねえか?」

「クラバウ…?」

メカオのその言葉にかぶりを振るウソツプだったが

「兄ちゃん、兄ちゃんが見たのは木槌を持った船乗りのような姿って言ったな?」

「船乗り達に伝わる伝説の一つじゃわい、本当に大切にされた船には妖精が宿り、その姿はレインコートに木槌を待つとるとい話じゃ…余程この船は大切にされたと見える」

「おいおい泣かせるじゃねえか!大切にされたからこそ身を張ってテメエらを次の島へ連れて行くなんて気合の入った船だ!気に



入ったぜ!!」

「わしも見たという話は聞けども実際に見た事無いが：大切にされた船はその分船乗りに感謝するとも言うわい、お主らのように船を大事にしてくれる仲間に会ってこの船も幸せだったじゃろう。」

しかし：そんな話を聞くとお節介をしたくなるのが道理つてもんじゃ、お前もそう思わんか海パンの若造？」

「そんな船の話を聞いて黙ってられるほど船大工つてのは素直じゃねえのよ、おれが兄ちゃん達の脱出を手伝ってやるって言ったらどうする？」

そんなフランキーの言葉にウソツプは訝しげな表情をするのだった。

そして少し離れた場所では

「シャウツ！ちよつとこの要塞広すぎっしよ!!最新鋭艦とやらも見つかんねえし：せめて整備兵でもいりゃあ絞めあげて聞くんだがなあ：」

そんな事を愚痴る整備兵の服を着た男：ウソツプ達に刻一刻と危機が近づいていた。

## 最強の兵器？ネロの戦車講座！

「解せねえな、おっさんが言っただけどアンタ海賊ってわけじゃねえんだろ？別におれ達を助ける義理なんて…」

「バツキャロウ！この船の心意気に打たれたのがわかんねえのか！それに…海賊って言ってもここまで船を大切にしている奴らに悪い奴はいねえだろ」

「海パンの若造の言った通りじゃわい、さしあたってお主の仲間と合流…基地内で騒ぎを起こしてこの船で脱出といった所か…長つ鼻、お主仲間のある場所とかはわからんのか？」

「それがよお、船から脱出した時にバラバラになっちまったからなあ、まあそのうち騒ぎを起こしそうな奴もいるから待つてればそのうち…」

そうウソツプが言った時であった。

「シャウツ！オレンジのツナギって事はアンタら整備兵だな…いやいや丁度よかつたつしよ！」

入り口近くの声にウソツプ、メカオ、フランキーの三人が振り返ればそこには整備兵の証であるオレンジの整備服に海兵のキャップを被った細身の青年、ウソツプは慌てるも自身も今日の前の男と同じくオレンジの整備服を着てる事を思い出し平静を取り戻す。

「んん？見ん顔じゃな、おい若造！ここは一部を除いて立ち入り禁止じゃぞ!!」

「まあまあ硬い事いいつこ無しつしよ、だいたいアンタらはどうなのよ？…ここって立ち入り禁止なんつしよ？」

「わしを知らんか、新入りじゃな？わしはこの船の検分を任されておる上にこつちの長つ鼻は助手じゃわい、海パンの若造は何やら見物に来たらしいが…」

それと共にメカオがメリー号を指せば

「…そーういや麦わらとかいう海賊が潜入してるんだつしよ、そいつらの船か。」

いやー立ち入り禁止なんて聞いてなくて…それよりちよつと頼ま

れ事でこの新しく進水した船のどこに行きたいんだけど場所がわかんないっしょ」

目の前の海賊船を見て小声で呟き少し考えるも本来の目的を遂行すべく青年はそう聞けばメカオは片眉を上げて

「んん？バラクーダ号なら中央島の大型ドックに係留しておるが…それがどうかしたのか」

「その大型ドックとやらへの道を教えるっしょ！いやーこの要塞馬鹿みたいに広くて新入りなもんで迷ったっしょ!!」

青年のその言葉にメカオはやれやれ…とため息をつく

「長つ鼻の若造、お主の仲間探しは少し待て…そうじやお主も来るか？…ついこの前就航したばかりの新鋭艦の見学でもどうだ？」

「いや、そんな暇は…」

そう言いかけるウソツプだったが

「オウー！丁度良かったおれはそいつの見学に来た事になってんのよ!! 兄ちゃん、一見の価値はあるぜ？なんせ多くの新技術を搭載してる上にそうそう見る事もねえんだ、是非一度は見ておくべきだぜ？」

その興味を惹かれる言葉にウソツプの心は揺れ動く、確かに仲間を探するのは大事だが…”情報を集める”とロビンの言葉を思い出し

「…わかった、まあ新技術を使った船つてのは興味あるしな」

ウソツプの言葉にメカオは頷くと

「よし、若造共わしについて…と、新入りお主の名前を聞いてもらなかったな」

「よくぞ聞いてくれたっしょ、おれはネロ！海イタチのネロとはこのおれの事っしょ!!」

「随分と大層な異名じゃな…異名つきと云えば”スモークーハウンド”が滞在してるから注意する事じゃな」

そう言つてドックの出口に歩いていくメカオをウソツプ、フランキー、ネロの三人は慌てて追いかけるのだった。

遠回りで見つかるリスクを犯すよりは…というメカオの判断により一行は東西の空中に作られた連絡通路ではなく海に面した格納庫へ、そこには鋼鉄の塊が並んでおり

「なんだこりゃ！大砲がついて車輪みてえのがついてるがこれ動くのか!？」

「ほおー、流石カモメの水兵団の本拠地、話には聞いたがここまで揃っていると圧巻だなー！」

「シャウツー・こりゃすげえっしょ!!しかも連装砲塔に傾斜装甲って事は一般的に配備されてる第三世代のヴァルクユリア型じゃなくて最新世代のパティエンティア型!!流石戦車の父のお膝元っしょ!!」

三者三様驚きの表情にメカオは得意げに

「そつちの新入りは随分と詳しいようじゃが長っ鼻は見るのは初めてか?」

「お、おう乗り物らしいって事はわかるんだがよ」

「おいおい！戦車を知らないなんてアンタ人生の20割損してるっしょ!!」

「いいか?戦車ってのは文字通り戦闘車両で人間の力では気軽に運用できない火砲と装甲を持つてるっしょ!しかもこの車輪……”きやたぴら” って言うんだがこいつはどんな荒地でも高い走破性能を誇り今のところ”最強の兵器” って呼ばれてるっしょ!!」

「おれの人生勝手に倍損にするなよ……っつかしそんな兵器があるとはな、でもよここは海のと真ん中だぜ?そんなところにこんなもんがあつても役に立たねえだろ」

「シャウツ！戦車を舐めるなっしょ!!」

「落ち着け新入り、お主が戦車を好きなのはわかったが……まあ言うよりも経験した方が早いじゃろ、ほれさっさと乗らんか若造共」

そう言つてメカオは一番手近な戦車に身軽に飛び乗るとハッチを開けて三人を呼びウソップはこわごわと、ネロは目を輝かせて、そしてフランキーは

「……ちよつとハッチが小さいんじゃねえか?」

「お主は身体がでかいんじや、大人しく砲塔の上にでも座つとれ」

「おれが乗れるようなのねーのかよ?」

「どうしても乗りたいなら総司令官に直接頼んで専用車である”セルベアリシア号” を引っ張り出してもらおう事じゃな、専用だけあつて一

等デカい事じゃしお主でも乗れるじやろ、第三世代型じゃがかなり  
チューンされとるからパティエンティア型にも負けんしの」  
「流石にそれは敷居が高いつてもんだろ…確かに知り合いではあるが  
よ」

メカオの言葉にぶちぶち言いつつも仕方なく砲塔の上でどかりと  
アグラをかくのだった。

## 最強の船？海兵王バラクーダ号！

ナバロン要塞の内海を走る一隻の船：ハッチから身を乗り出したウソップは

「はあー…こんな鉄の塊が海の上を走れるとはなあ、改めてグラウンドラインってのがとんでもねえ所だって身に沁みるぜ」  
と心地よい海風を感じながら周囲を見回していた。

「そーいやお主は東の海から来たと言っておったな、車体底面に木材が噛ませてあってなその浮力を使つとる」

「それだけで浮くのか？木材噛ませてるって言ってもどんだけ浮力があるんだよ」

するとウソップの疑問に船大工と名乗ったフランキーの

「ひよつとしてクウイゴスか？」

との質問にメカオは戦車を操作しつつ頷き

「ほう知っておるか、察しの通りクウイゴスを使つとる上で水密処理を施しとるわい」

「船に使われる木材なら大体知ってるさ、おれも戦車を作ろうとしたが海に浮かせる発想は無かったな」

「要するにそのクウイゴスとやらは浮力が強い木材って理解でいいのか？色々面白そうな素材だが…」

「それで合ってるっしょ、クウイゴスと水密処理を施された上で軽量化された車体、そして履帯をパドルに変形させての移動で水陸両用だからこそこの兵器は活躍してるって事っしょ」

メカオとネロの補足にウソップはなるほどと頷きつつ面白い乗り物だと思ふのだった。

そして一行は東部格納庫から中央島のドックへ、海上入り口に戦車を停めると恐らく警備であろう、そこに立っていた海兵に

「見学だそうじゃ、新入り二人に総司令殿の客の船大工じゃわい」

とだけ告げて中に

「あ、お疲れ様ですメカオドック長。見学4名了解しました」

との海兵の言葉を受けながら四人はドックの中へ

「はー広えドックだなあ…で、あれが噂の船か？」

「こんなもんで驚くようじゃまだまだじゃな、この要塞の一番大きいドックは倍以上あるぞ？」

「何だありや…鉄の船か？」

「ビョウっ!!こいつはすげえ!思ってた以上っしょ!!」

驚く三人とメカオの前には一隻の船。

「種別的には、機帆装甲艦」となっており、全長61メートルの最大幅10m、鉄骨木皮に厚さ110mmの鉄板で装甲化した謂わゆる鉄甲船つちゆうやつじゃ、世界広しと言えどこれだけの大きさの鉄甲船はこのバラクーダ号以外は無いじゃろ」

大きく手を広げて説明するメカオに三者三様驚きを見せメカオはそんな彼らに得意げに説明を続ける。

「帆装は2本の機械化マストを持ち横帆をメインとするブラッグスクリーナータイプ、補助動力として木炭蒸気機関を搭載し武装はケースメート式の中央砲郭連装砲を2基と三連装機銃が数門搭載してある、大きさとしちや100m以下になる故に中型艦クラスじゃが防御力と攻撃力で言えばどんな船にも負けんじやろう。

…というか一般的な海賊船相手には過剰防御な気もするんじやがなあ」

とかの計画を持ち出した総司令官を思い出しつつ嘆息するメカオだったが

「こいつはすげえ…こいつが表に出てくりや全ての船が過去のものになるっしょ!!強力な火炮に無敵の防御!正に動く要塞つてのはこいつの事っしょ!!」

「待てよ海イタチとやらよお、言っちゃ悪いが鉄板の厚さそんだけあって気軽に動けるわけねえだろ。

よく見てみやがれ恐らく吃水が普通の船より深めだ…つて事は水深が浅いところは航行できねえだろうし大きさと比べて重いつて事は…大きさは中型艦でも速度は大型艦より遅くなるんじやねえか?爺さんよお」

フランキーのその言葉にメカオは頷くと

「その通りじゃ海パンの若造、だがこいつはまだまだ試作と言つていようなもんじゃ…そのうちお主でも満足できるようなもんが出来上がるかもしれんぞ?」

メカオのその言葉にフランキーはここに来た”本来の目的”を思い出しつつ目の前の老人の言葉も遠い事では無いのだろうと考えるのだった。

一方ネロ…、新入りと自己紹介したこの男であるが実際のところ新入りの整備兵では無く、それどころか海軍の人間ですらない。

「シャウツ！兎に角近くで見させてもらおうっしょ!!」

「おい若造！勝手に動くな!!」

メカオの言葉を背中に受けつつ走り出した海イタチのネロと名乗ったこの青年、実の所彼の所属は世界政府直轄の暗躍諜報機関”サイファール”であり、闇の正義の名の下に一般人の殺しさえ許可されたエージェント…六式と呼ばれる六つの超人的技術を有する彼が同じく世界政府の下部組織である海軍に潜入しに来たのは訳がある。

「こいつぁ長官に報告した方がいいっしょ…こんだけの兵器海軍なんかには勿体ねえ、世界政府が管理してこそつてもんっしょ」

そう考えた彼は船の影に隠れると待たされていた電伝虫を引っ張り出し己の上司に確認を取る。

かなりクズな上司ではあるがここで勝手に動いて責任を被せられてはたまった物ではないので事情を話してみれば当然何とかして奪つてこいと報告にネロは電伝虫を切ると先んじて基地内に入り込んでいる世界政府の役人であるコーギーに連絡をとり人員を動かす許可を、更に許可が取れるとスタンマレー号に乗せておいた子飼いの部下達に場所を報告。

「情報はちゃんと集めてるっしょ…要塞内に侵入した麦わらの一味、正体がわかってるのは麦わらに海賊狩り…隠れて話を聞いてたがあの長っ鼻も一味って事なら巻き込んでやりやいっしょ」

闇の正義はただ静かに暗躍を開始するのであった。



動き出す闇、麦わら一味のネロ！

「シャウツ・コイツの命が惜しけりや全員動くなっしよ!!」

凶行は突然の事であった。

実際にバラクーダ号の甲板に上がりフランキーとウソップに対して色々と説明を行っていたメカオにネロが片手を上げながら近づいてきてメカオが”何処にいつておった新入り”と問いかけると”ちよつと野暮用つしよ!!”との言葉と同時にメカオの首にネロの腕が回されその手には一振りのナイフが現れると同時に冒頭の発言。

「な！新入り：!?!」

「おおっーとそつちの長つ鼻も海パンも動かないでもらうっしよ…このジジイの命が惜しけりや大人しくしてるっしよ」

ネロのその言葉にパチンコを構えようとしたウソップと殴りかかろうとしたフランキーは動きを止める。

「馬鹿な真似はよせ新入り…何が目的か知らんがお主一人いた所ですぐに取り押さえられて仕舞いじゃ」

メカオはナイフを突きつけられたらりと冷や汗を流すも努めて冷静にそう言うが

「シャウツ！それは心配ないっしよ…テメエら！説明した通りにやれ」

ネロのその呼びかけるような言葉に突如としてドックが騒がしくなり、フランキーとウソップが慌ててそちらを見れば黒尽くめで異様な格好をした十数名程の集団がドックで働いていた者やバラクーダ号で作業をしていた者を攻撃しながら手際よく一箇所に集めていく。

「なんだアイツら…」

「チツ、爺さんが人質になってなけりやぶつ飛ばしてやんによ…」

ウソップとフランキーがそれを見てそうこぼすが人質をとられている以上迂闊に手が出せないで、二人はメカオを救出するタイミングを見計らいながら”今のところは”大人しくしている事にした。

「ネロさん、全員船に乗り込ませました…懸念されていた操艦ですがこの人数なら我々で覚えて最低限動かせるかと」

「シャウツ！上等っしょ!!」

顔を含めて全身を覆う真っ黒なスーツに頑丈そうな鋼鉄のガントレットに同じく鋼鉄のブーツという異様な格好をした一人がネロに近づいてきてそう言う

「新入り…お主何者じゃ？」

その姿にメカオは相手が何かしらの組織の人間だと把握したのか少しでも情報を探ろうとそう聞くが

「ん？ああおれは、麦わらの一味」の人間っしょ！アンタらにはおれ達が逃げ出すまでの間少し付き合ってもらおうっしょ!!」

ネロのその言葉にフランキーとメカオは、自身は麦わらの一味だと自白したのも同然のウソツプを見るがウソツプは

「いや誰だよお前！おれ達麦わらの一味にテメエみたいな奴はいねえよ!!」

と慌ててくっつかかるも

「シャウツ…こういうのは言っちゃまったモン勝ち！それにアンタは少しは偽った方がいいっしょ、上手くそんな格好までしてるのにその言い方だと自分が海賊だつて言ってるのと同然っしょ？」

痛みを堪えながらネロのその言葉に思わずつまるウソツプ、そしてこの状況はまずいと考え何とか出来ないかと周囲を見渡せばジリジリと動く入り口で見張りをしていた若い海兵…彼は黒尽くめの男達からジリジリと下がり一気に駆け出してドックの柱へ、そのまま握り拳で緊急用のブザーを押そうとするが

「させないっしょ！嵐脚!!」

ネロと名乗った麦わらの一味を騙る男がナイフはメカオの首から動かさぬまま器用に脚を振り抜けば、距離が離れているにも関わらずブザーに迫っていた若い海兵が吹き飛ばされた。

「なっ！能力者だと!!」

「恐らくパラミシア系か？ちっ…面倒な…」

「シャウツ！目に入るもんだけ信じてたら足元掬われるぜ？長っ鼻に海パン男はどっかに閉じ込めとけ！それから今のうちに出航準備っしょ!!」

「ネロさん、まだ物資とかは積み込まれてませんがどうします?」

「まだ気付かれてないから何か理由をつけて積み込ませるっしょ、バレたとしても二、三人風穴開けて並べりゃいくら赤カモメとは言えこちらの要求を聞き入れざるを得ないっしょ」

「は?それだと不要な禍根を残す事に…」

「それが?何たっておれ達は極悪非道の海賊、懸賞金9400万の首であるモンキー・D・ルフィを船長と仰ぐ麦わらの一味っしょ。

それに忘れてるっしょ…」 おれ」が何処の所属で何の許可を持つてる?ん?」

「っ!失礼しましたっ!!即刻この二人をぶち込んでおきます!!」

「ジジイは色々この船を知ってそうだし洗いざらい吐いてもらうぜ?」

それと共にナイフを首筋に突きつけるネロにメカオは

「…何処の手のモンか知らんがわしから話す事なんざないわい」

「シャウツ!言ってんじゃねえかよ、おれ達は麦わら海賊団の人間っしょ、例えあの長つ鼻がなんか言っても証明手段は無いし精々が仲間割れっつて事で処理されるのがオチっしょ。

それによジジイ…アンタ見た所かなりのベテランだしそれなりの義理人情もあるとみた…ならまだ若い整備兵の腕が使いもんにならなくなるのは見過ごせないっしょ?」

それと共にネロは黒尽くめの男に対して顎でしゃくると目の前にオレンジのつなぎを着た若い男が引き出されネロはその腕を掴むと共に関節と逆向きに力を加えていく。

「なっ!お主何を!!」

「何って素直に話さないジジイの為の見せしめっしょ、あーあどっかの誰かさんが強情だからこんなことする羽目になったっしょ」

「ド…ドック長!バラクーダ号の設備は一級機密です!喋っちゃいけません!!」

ミシミシと言いながら力を加えられるまだ若い整備兵の腕を前にメカオは

「やめんか!整備兵の腕はまだ走りたい船を治してまた走れるように

してやる為の腕だぞ!!」

「だからジジイか早く話せばいいっしょ…きーん、にー、いー…」

ネロの急かすような言葉にメカオは俯き

「わかったわい…何を話せばいい？」

ぽつりとそう言うが同時にけたたましい音でサイレンが鳴りだしたのだった。

## 医者の矜持！チョツパーと海軍医師コバト！

警報が鳴り出した時チョツパーは丁度手術を行なっている時であつた。

チョツパーは要塞内に侵入後シグマに捕まりアピスの元へ、流石に自分一人では判断が出来ないと呼びに行つた大人：モネの姿を見たチョツパーは彼女が”ドラムの雪女”だと言う事に気づき警戒するも

「姉弟子に対して随分と警戒するのね」

といつのままにか手に持っていたメスを持って眼前にしゃがみ込んでいたモネに対応出来ず

「…姉弟子つて事はやっぱお前ドクトリーヌから医学を習つたのか」

といつでも後ろに下がる体勢をとりつつどう切り抜けようかと考える。

「医学を習つたのはDr. くれはだけじゃ無いわ、優れてると思う医者には片っぱしから教えを請いにいった…彼女もその一人ね」

「…それはそうとメスは医術の道具だ、武器じゃねえ」

「それは解釈違いね、わたしは武器として使つてるつもりは無いわよ？あくまで処置の為の道具…それに変わりはないけど、何で麦わら海賊団に入った筈の貴方がこんなところにいるか聞いても？」

モネのその言葉にチョツパーは今すぐ海兵に突き出されるような事は無さそうだと判断し事情を話せばモネは

「…そうね、懸賞金がかかつてるわけじゃないし一応は弟子に当たるんだから匿うのもやぶさかではないわ。

まあ今日の所は休みなさい、もう夜は遅いし少なくとも海軍も貴方の仲間達もそうそう大きくは動けないでしょう…部屋は用意しておくわ、明日からはとりあえず四足形態で過ごさなさいな、熊に牛に鹿が増えた所で特に問題視はされないでしょう」

「鹿じゃねえ！トナカイだ!!」そう言いつつもモネの言葉にドラムでワポルとの戦闘で見た時の冷酷っぷりが嘘のような彼女にチョツパーは少し警戒度を上げつつ素直に礼を言うのだった。

そして夜が明けたタイミングでチョッパーは

「医者時間よ、ついさつき大時化にあつたスタンマレー号が入港したわ。」

軽傷重傷含め怪我人多数、直ぐに処置が必要な患者もいるから手伝つてもらおうわ…なにしろ人手が足りないのよ」

モネのその言葉と共に叩き起こされた。

「人手が足りないって…こんだけでっかいところなら医療チームとか充実してるんじゃないのか？」

チョッパーのその言葉にモネはかぶりを振って

「ここに常駐してる医者はほぼ全員が医師連の会合でいないわ…残ってるのはたまたま研修に来てたこの子だけ…全く専門外の医者に医務室長代理を任せるなんて何考えてるのかしら…」

「ど、どうも…」

その言葉にチョッパーが目を横にやるとそこには紫のショートヘアに眼鏡をかけた気弱そうな女性、白衣を纏い首に聴診器をかけている事から医者と推察できた。

「専門外って…海軍の医者なら内科でも外科でもだいたいオールマイティにこなせるんじゃないかねえのか？」

「ご、ごめんなさい！わたし専門は小児科で！ここには軽い研修だけの筈だったんです!!」

「しかも血を見るのが苦手で自分が倒れる始末、到底手術を任せるなんて事は出来ないわ」

モネのその言葉にチョッパーは考え込む、ここで自分や姉弟子であるモネが処置をするのは簡単だ…しかし目の前にいるのはおどおどして弱気そうとは言えちゃんとした医者である。

だったら医者としての使命をきちんと思い出してもらい彼女にも執刀に当たってもらおうべきだろうと考えチョッパーは渋るコバトの説得を開始、モネは看護婦に指示を出しながらそれを静観し、コバトは「自分に出来るとは…」とか「医療協力者のモネさんがいるし…」となかなか自分がやろうとはしなかったがチョッパーの過去の話…”かつて不治の病に侵されたある男の話”に感銘を受けやがて決

意をした目つきで

「…モネさん、わたしにも手術に協力させて下さい。確かにわたしは血を見るのが苦手ですし足も引つ張るかも知れません。

でもわたしは医者なんです！患者が目の前にいるのならそれを助けるのは医者だと…わたしはそうチョツパーさんに教わりました」

とモネに頭を下げて頼み込めば

「医務室長代理は貴方じゃない、わたしはあくまで民間協力者…貴方のしたいようにすればいいわ」

「！わかりました、では医務室長代理としてモネさんとチョツパーさんには執刀への協力をお願いします」

コバトの要請に同じ医者としてモネとチョツパーは快く頷き手術室へ：スタンマレー号から運び込まれた重傷者達を次々と処置、チョツパーは姉弟子であるモネの素早くて確かな処置に舌をまきつつ血が苦手だと言うコバトを気遣いながら手術を進めていたが

「なんの警報だ!?まさか誰か海兵に見つかつたんじゃ!」

「これは…要塞内の非常警報!どこかで事故が出たのかも!」

「二人とも落ち着いて、今は目の前の患者に集中しなさい…わたしは詳しい報告を受けてくるわ」

それと共にモネはその場をコバトとチョツパーに任せると手術室を出た所で

「む…不審な医者がいると言う事で連絡を受けて来たがモネ殿だったか」

そこにいたのはドレーク中佐であった。

「まあわたしは正式な海兵じゃ無いし顔を知らない人間はいるんじゃない?それよりもこの警報は何?」

恐らくチョツパーの事だろうとモネは考えるも勘違いしているらしいのでこれ幸いと話を合わせておく。

「中央司令室に問い合わせたが警報は中央島の二番ドックから鳴らさされているとの事だ、人員を編成させて向かわせているから報告待ちだ」

「とりあえずスタンマレー号から収容した負傷者は現在処置中よ、何

があつたかは不明だけど医者が必要なら早めに言つて頂戴」

そしてモネとドレークがそう話をしていると海兵が走つてきて

” 麦わらの一味が新鋭艦バラクーダ号を占拠” との報告を二人に告げたのだつた。



緊急事態！バラクーダ号強奪事件発生！！

「…何事かしら？」

無敵要塞と名高いナバロンの詳細な情報を調べながら”これならまだ調べない方が希望はあったわね…”とロビンは考えていた。

「少々お待ち下さい、確認するであります」

情報編纂室外部顧問ニコラ・オリヴィエとして潜入したロビンは資料室で詳細な情報を集めながらそんな風に考えていると鳴り始めた非常警報。

傍に控えていた海兵は資料室に備え付けられた子電伝虫を司令室に繋ぎ確認をとれば

「ニコラ外部顧問殿、どうやら昨夜我らが要塞に侵入した海賊が新鋭艦であるバラクーダ号を乗っ取ったようであります。

恐らく第二ドックで作業していた者達は人質になっているのではないかというのが司令部の見解であります、如何されますか？」

海兵のその言葉にロビンは少し考え込む。

確かに騒ぎを起こす手段としてはかなり大きなものであろう…だが悪手でもあるとロビンは考え

「…司令部に向かうわ、少し気になる事があるの」

「了解であります」

司令部に行く以上ジョン・ナサン中将与会うのは避けられないだろうが背に腹はかえられないか…と思いつながら資料を片付けていくと中央島の司令室へ向かうのだった。

そして軍曹と共に司令室へ向かうロビンは目敏くその男を見つけた…黒の三つ揃えに黒いハット、そしてその胸にある世界政府のマークを持つ男

「っ！世界政府の役人がなぜここに？」

傍には海軍コートを来た神経質そうな男、彼らは連れ立って歩いており方向からして自身と同じく司令部に向かっているのだろう。

「そう言えば今朝スタンマレー号が入港していたわね…恐らくブルーマリナー辺りが世界政府と手を組んでいると考えるのが妥当…世界

政府が動いている以上何か秘密裏に事を起こしている可能性もある：これはおじ様に確認しておいた方がいいかしら？」

とロビンは考え司令室に向けていた足を通信室へと変えるのだった。

帰ってきた返事は

” 麦わらの一味の名を騙って政府筋の人間がバラクーダ号を奪取、目的は新鋭艦を奪い穏健派である自身の戦力を低下させようという狙いだろう”との事であった。

そうなると取るべき道はこの騒ぎに乗じて脱出するかこの騒ぎを鎮圧して恩をうると言う手段も取る事ができる：幸いにしてこの司令官であるジョナサンはロビンも幼少の折に知り合っており割と温厚な人物だし、交渉次第では一回くらいなら見逃してくれるかも知れないと考えるも

「流石にこれは私の一存では判断は出来ないわね：誰か見つければいいのだけど…」

そう考えながらとりあえず騒ぎの原因となっている4中央島第2ドックへ向かっていると

「あら：なんで剣士さんが海兵と一緒にいるのかしら？ 潜入なんて手段はとりそうにないと思つてたけれど…」

同じく第2ドックへ向かうのだろうか？ 帯剣した海兵の集団の中に見知った顔を見つければ恐らく指揮官であろう女性の

「そのの貴女！ 第2ドックはどこちですか！」

との言葉に外部の海兵だと推察

「第2ドックはこの先の連絡通路を抜けて何階か下に降りた所よ、とここで見ない顔だけどここの部隊かしら？」

相手の正体を確認すべく堂々とした態度で問いかける。

「失礼しました海軍剣客隊長のたしぎです、失礼ですが貴女は？」

「海軍独立中隊情報編纂室外部顧問のニコラ・オリヴィエよ、まあ外部の人間ならこの構造が分からなくても無理は無いわね」

と名札を見せながら言うロビンにたしぎは申し訳なきように

「すみません、麦わらの一味が軍艦を奪ったとの報告を受けて慌てて飛び出したのですが場所がわからずに…」

「報告を受けているのは一部ね、現在の状況だけれど昨夜要塞内に侵入した麦わらの一味が中央2番ドックを占拠し新鋭館のバラクーダ号を奪取。」

恐らく連絡が取れない事から2番ドックにいた整備兵や海兵含め十数名ほどが人質になってると思われ現在包囲網を形成中よ、隊長さんは何か麦わらの一味の情報を持っていないのかしら？」

現在の状況をあまり把握してないであろうゾロに対して説明するように言ったロビンの言葉にたしぎは

「我々剣客隊は一味の剣士であるロロノア・ゾロの身柄を確保しています」

と答えロビンは「潜入じゃなくて確保されたか…」と考えるも

「そう、何処かで見た顔だと思ってたけど見間違いじゃなかったのね…それにしても武器こそ持って無いものの拘束もしてないなんてどういう事かしら？」

いつも持っている三本の刀こそ佩いてないが拘束されたにしては縛られずらしい事に違和感を覚えそう尋ねれば

「まあわたし達剣客隊の自信の現れと思っておいて下さい…本当の所は交換条件を持ちかけているので拘束はしてないだけなんですけどね」

たしぎの言葉にロビンはその交換条件とやらが気になったが第2ドックが近づいてきたので話を切り上げ周囲の海兵に状況を確認すれば

「ドック内の人間は全て艦に收容されているようです、最終調整に当たっていた整備兵8名と整備職長のメカオさん、彼が連れていた新入りらしき整備兵と総司令の客人である船大工、それから見張りにあっていた小隊が5名共合わせて16人が人質になっています」

「現場指揮は誰の管轄？」

「ドレイク大佐がこちらに向かっています…実は本部から監査官と世

界政府の役人が来ていまして、ジョナサン司令はその対応に追われており、総司令は”ちよつと出かけてくる”との書き置きの後、杳として足取りが掴めず……」

報告をしてくれたその海兵の言葉に、ロビンはそう言えば手紙には静観すると書いてあったわね……と思ひ出し、まあ本格的にヤバくなったら動くだろうと結論を出し、船を占拠したと言う仲間たちの姿を認すべく移動するのだった。

## 騒乱！奪われたバラクーダ号！！

「ぶえつくしよい！！…しっかしどうしたもんか、まさかCP9の登場とは思わなかったなあ…」

そんな噂をされているとは露知らず、クリークは気配を消して天井の梁からその光景を見ていた。

当初は麦わらの一味の潜入に対して大規模な非常訓練と軽く考えていたがここまで大騒ぎになった以上どうしたものか…と考える。

勿論今すぐ自分が動けば問題なく解決出来るであろう、一応は本部中将だし人質を救出し返す刃で海イタチのネロと黒尽くめの仲間たちを迅速に制圧、ふんじばって牢屋に叩き込めばそれを元に世界政府相手にイチャモンつける事も可能だろう。

しかし折角の機会だしここは最初にジョナサン中将に言った通り自分はこのまま静観でいいか…既に麦わらのルフィを相手にぶつかつた後だしジョナサン中将も切れ物として名高い相手だから黙ってやられるままでもあるまい、あくまで自分はいざと言うときに動けばいい…そう結論を出す。

「ウソップがバラクーダ号で人質に、ロビンとロロノア・ゾロがそこにいてチョッパーがモネのところでサンジは厨房…後はモンキー・D・ルフィとナミか、さてジョナサン中将は何処まで把握出来るかな？捕まえるのが先か脱出が先か…上手くいけばこの騒ぎに乗じて脱出できるかもしれない」

そう思いながらクリークはその場から姿を消し密かにルフィとナミの居場所を把握すべく動き出したのだった。

そして少し時は巻き戻り2番ドックで非常ベルのボタンが押され「よくやった長っ鼻の兄ちゃん！」

「へっ、どんなもんよ！…このおれに任せりゃこんなのお茶の子さいさいってな!!」

ネロが舌打ちしながら振り返ればそこにはパチンコを打ち放つた体勢のウソップとロープを解いたフランキーの姿。

「ちよつとちよつと兄ちゃんら…あんま好き勝手してんじやねえぞ？」

それと共にネロは消えるような速度で踏み込みウソップに急接近、いきなり消えた事に慌てるウソップの胴体に目掛けて繰り出される人差し指での一本貫手をまともに受け崩れ落ちる。

「がふっ…てめえ…」

「おい！長っ鼻!? テメエ何しやがる!!」

慌ててウソップを支えながらも逆の手でネロを殴りつけるもその手にはまるで鋼鉄でも殴ったかのような感触にフランキーは

「テメエ！やっぱ能力者か！」

と確信して言えば

「シャウツ!! 教えてやってもいいが情報は広めたくないんでね…忘れんなよ? テメエやその長っ鼻に整備兵のジジイ…他の面々の命もとろうと思えばいつでもとれるっしょ…命が惜しけりや勝手な事してんじやねえっしょ」

ネロは鼻で笑いつつそう言うのと部下に指示を出しこれ以上暴れても自分以外に余計な被害が出ると悟ったのかフランキーとウソップは大人しく連行されるのだった。

「テメエら何やってんの? みすみす警報鳴らされるなんて弛んでるっしょ!…もう終わった事だから言わないけど次からは気をつけるっしょ」

不機嫌そうなネロに黒尽くめの男達は冷や汗を流しつつ

「すみません!…ところでどうします? 警報を鳴らされた以上包囲される恐れがあります…」

「とりあえずドックから出るっしょ、こんな閉所だと潜まれる恐れもあるし新型連装砲とやらも試してみたい…勿論ちやんと動かせるようにはなってるっしょ…」

「は、問題ありません…ただ弾薬食料等は不安を抱えた状態ですが如何しますか?…」

「それもとりあえずこのドックから出てからっしょ、人質はいるから向こうも簡単に制圧できない…一応人質は分散しておくっしょ」

ネロはそう言い捨てて目的を果たすべく艦の司令室に向かうのであった。

そして一方現場に到着したドレイク大佐はすぐに状況を確認、ドックと内海を繋ぐゲートの封鎖を指示し狙撃部隊を待機させ奇襲による人質奪還の後犯人である麦わらの一味の捕縛という方針でダニエル少尉を含めた小隊長を集めて作戦準備を行っていたら突如としてドック内に響く轟音…見れば内海とドックを隔っていた鋼鉄製のゲートが破壊され海水が流入、黒煙を上げながら動き出したバラクーダ号にドレイクは慌てて

「っ！撃てえ!!おのれこども躊躇なく大砲をぶちかますとは何を考えている麦わらめ!!奴を内海に出すな!あれを内部で撃たれば莫大な被害が出る!!」

ドレイクの言葉にすぐに待機した狙撃班が海軍式ライフルを構えるも船尾に人質を盾にするように黒尽くめの男がカトラスをチラつかせる。

「ダメです!人質を前に出して攻撃させないつもりです!!」

「おのれ麦わらめえ…第三中隊から第五中隊を緊急招集!!犯人からの要求は!!」

「直ぐに集合させます!声明は出ていますが要求については”人質の命が惜しければ手を出すな”以外現在特にありません!!」

「司令官にも報告急げ!総司令は見つかったか!!」

「ジョナサン司令には監査官殿に対応中ですので緊急で伝令を送っています!クリーク総司令は未だ行方不明です、上に行ってるのかもありません!!」

「ならばアイザック少将に繋げ!ついでに戦鳥騎による支援を打診しろ!!それから戦車隊を叩き起こせ!恐らく奴らは近くの北大水門に向かう可能性が高い!西格納庫と東格納庫の戦車を動ける奴だけで構わん!全て投入し挟み撃ちにして包囲網を形成する!補給班!!」

「はい!何でしようっすかドレイク大佐!!」

「バラクーダ号への積み込み状況はどこまでだったかわかるか!」

「補助燃料である木炭は規定量、弾薬については2割ほどですが…先に新型の炸裂弾を積み込んだのが裏目に出たっすね、水に關しては積み込み完了、食料は保存食のみ先に積み込んでるので…恐らくフルの人員で十日分つとこっすね」

「狙撃班！麦わら一味の人数はわかったか!!」

「すいません、攪乱の為か全員同じような格好をしまして何とも…恐らく10名以上はいるのではないかと…」

「少なくとも100に満たないなら保存食だけで一月は持つかもしれないっすよ」

「ぐぬ…それでもバラクーダ号で島の襲撃などされてみる、我々は何の為にあの船を就役させたのだ！砲口は守るべき民に向けるものでは無い!!」

それとともにドレイクはドンと要塞の見取り図が開かれたテーブルを叩き今回の件をしでかした麦わらの一味に対して怒りを募らせるのだった。



激動！牙を剥いたバラクーダ号！

警報が鳴る中おおらかそうな男と神経質そうな男が向かい合って話をしていた。

「えらく騒がしいですなあ司令官殿？」

「いやああ恥ずかしい事にどうにも侵入者があつたようで……」

言わずと知れた海軍本部中将のジョナサンと海軍本部監査官のシエパードである。

「ふっ、いくら海軍最強の部隊とは言え随分と弛んでるようですよなあ？」

言外に”その程度の事も短時間で片付けられないのか？”と籠めるも

「はっはっはなあに皆優秀ですからな、そのうち収まるでしょう……所で監査官殿、このナバロンにはどう言った要件で？」

ジョナサンは飄々としてそう返すだけだった為シエパードは不機嫌そうに

「それは金食い虫であるこの要塞を処分する為……と言いたい所だが事情があるしそれは置いておくとして……コードネーム”815”の大規模作戦が近々行われると聞いた、どうやらエドワード・ニューゲート……かの”白ひげ”に全力を持って攻撃を仕掛けると聞いたのだが……正気か？」

と今回の目的を明かしておく。

「ほう……何処でそれを？」

シエパードのその質問にジョナサンの目つきが細められれば

「ふっ、我々を舐めてもらつては困る……」親しい友人”がそれとなく教えてくれたのだ

やはり当たりだったか？とシエパードはニヤリと口角をあげるも

「親しい友人ですか……しかし我々も噂は聞いてますが実際の所その噂が何処から出てきたか図りかねておりましてな、実際に攻撃が行われた場合三大均衡が崩れてしまい目も当てられませんから我々もその噂については出所を探っていたのですよ」

「そう！その通りだ！！だからこそ世界政府はそれについて危惧しており事実の調査を行うとしてコーギー殿に加えて我々監査部に白羽の矢がたったのだ…勿論協力してくれるでしょうな、ジョナサン司令官殿？」

「ええ勿論ですよシエパード大佐殿」

「では一つだけお聞きしたい…空中要塞サンタマリアがジュエルアイランドを離れましてな…どうやら独立遊撃隊の総司令であるクリーク本部中将名義でここに来ているようですが何の為かご存知ですか？」

「アイザック少将率いるサンタマリアが来ているのは知っていました…なんでも総司令と話し合いがあるとしたか聞いておらず力になれなくてすみませんなあ」

とジョナサンは全てを知ってるにも関わらずいけしやあしやあとそう言つてのけ朗らかに笑つて見せるのだった。

「…まあいいでしょう、我々もそう簡単に情報が掴めるとは思つてませんがね…所で司令官殿、クリーク本部中将はどちらに？彼からも是非とも”話を聞かねばならないのですがねえ？”

この疑惑を機に世界政府は少し目障りとなつてきた鈍熊の勢力を減じる為 ゆっくりとその手を伸ばしていくのだった。

一方外周島の上からどうやって皆と合流するか考えていたナミはルフィの

「ナミ！見てみるよナミ！すつげえ強そうな船がいるぞ！！」さっきのでつけれ音つてあいつがやったんじゃないか？

「そりゃここは海軍基地なんだから強そうな軍艦の一隻や二隻や十隻くらいはいるわよ」

「それどころじゃねえって！いつもの軍艦と違うぞ！鉄かなんか出て来てんじゃないかあの船!？」

ナミはとりあえずロビン辺りと合流できないかと考えながらルフィの言葉を軽く流すも尚も言い纏るルフィに

「何馬鹿な事言つてんの、鉄で船が作れるわけないじゃないの…どう

やって浮かばせるつもりよ…って…え、何あれギャグ?」

と呆れたように言いながらもルフィに付き合っただけを見ればそこには間違いなく金属特有の鈍い輝きを持った船、水より比重が重い金属がどうやって…?と考えるも別に全部鉄で作ってるわけではなく全体に鉄板を取り付けているとかそんなところであろうと考え直す。

「な? やっぱあの船鉄でできてんだって! 多分大砲くらい跳ね返しちゃうって! メリーも折角直すんならあういう風にしようぜ!!」

「何馬鹿な事言ってるのよ、あんなに鉄板貼り付けてたらメリーが重くて動けなくなっちゃうじゃない! メリー号の利点を潰す気?」

「えー…カッコいいと思うんだけどなあ…」

「馬鹿言ってるんでアンタもさっさとみんなと合流する方法考えなさい!…それにしても随分と砲身が長い大砲ねって…なんでこっちに砲口向いてるのかしら?」

ルフィの言葉を流してナミは改めて内海に現れた船を見るが備え付けられた連装砲の砲口がこちらを向くのを見て血の気が引くと

「ルフィ! 伏せて!!」

「うわっ! 何すんだよ!!」

慌ててルフィの首を掴んで地面に叩きつければ直後響く轟音と自分達の背後で響く爆発音。

「っ!! 何で要塞内で軍艦が大砲撃ってるのよ!! ひよっとしてあたし達がバレた!」

「んにやろっよくもやったな! ゴムゴムのお…ロケットおっ!!」

「ちよつとルフィ何処行くの…って行っちゃった…もう! 捕まっても知らないわよ!」

飛んでいくルフィにナミは言うもその言葉は聞こえているかもわからず再び大砲が動くのを見て

「…とりあえずここに居るのはヤバイわね、さっさと離れないと」

ナミがそう考え走り出すと同時に再び轟音が響きナミ達の背後に聳えていたナバロン要塞砲に直撃するのは同時であった。

偽物を止めるろ！ルファイ怒りの鉄拳！！

「シャウツーこりや凄いい威力つしよ！！確かにこいつが広まりやあ鉄甲船も必要になるつてもんだな！」

ドックゲートを破壊した一発と先程撃った二発の威力に感嘆するネロ、この新型の砲弾は従来の球形弾では無く海軍にて開発された新型の弾頭であり”相手の装甲より硬く、そして十分に重い砲弾をぶつけてやれば装甲は破壊できる。さらに矢のように先端を尖らせておけば突き刺さりやすい”というコンセプトで開発され、このバラクーダ号で実用化されたものである。

球形弾に比べコストは高く加工技術も必要になるがその威力は高く、この海に蔓延る木造船であれば易々と貫き破壊する事が可能なソレの威力にネロは満足しつつ

「シャウツー！要塞砲はぶっ壊せたか！！」

「着弾確認！半壊といった所だと思われまます！！」

「後一発打ち込むつしよ！！あの化け物の射程は長えから外海に出た所で狙われるのは嫌つしよ！！」

ネロがそう指示を出していると見張りから報告が飛び込んで来た。

「了解しました…ネロさん！！何か飛んで来ます！！」

「おん？何だ…人？」

「うおおおおお！大砲撃ったのはお前かああああ！！」

ネロは操舵室のハッチを開けて顔を出すと段々と近づいてくるソレを見て手配書の一つに思い当たる。

「総員配置につくつしよ！！監獄弾用意！麦わらのおでまっしよ！！」

それと共に俄に慌ただしくなる船内、数人の黒尽くめの男達とネロが甲板に並ぶのと飛んで来たルファイが着地するのは同時

「おいお前！何でこっちに大砲撃った！」

「ん？ああちよつとした事故つしよ、狙ったのはアンタじゃなくてあつちの化け物大砲、アンタがそこにいたのは知らなかったから勘弁するつしよ」

「ん、なんだ知らなかったのか…ならよし！」

「シャウツ！それでこそ！やつぱ海の男つてのは大海原のような広い心を持つてるもんっしょ!!」

「でも一発ぶん殴る!!」

それと共に拳を構えるルファイ

「はあ…海賊つてのはどうも血の気が多いつしょ、総員構え」

ネロはそれを見てげんなりとため息を吐きつつ片手を上げれば全身黒尽くめの”カゲ”と呼ばれる世界政府の実働部隊が長銃を構える。

「へっ！おれに銃は効かねえよ、ゴムゴムのお…!!」

「そのくらい知らないわけ無いっしょ！監獄弾撃てえっ！」

ルファイが腕を大きく後ろに引いたタイミングでカゲ達の長銃が放たれば銃口から飛び出るのは鉄の網、驚いて避けようとしたものの銃弾は効かないと楽観していたルファイに複数のそれらが一斉に襲いかかり

「なんだこれ!?鉄の網?うう…力があ…」

「おーおー、随分とあつけないっしょ…海軍の開発した”対悪魔の実用”の監獄弾っしょ、海楼石も使うんでコストがかかるけど大抵の悪党はこれで一発…油断した能力者は面白いくらいにかかるもんっしょ。」

お前ら！とりあえずそいつはさっきの長つ鼻と一緒に閉じ込めとけ…いや、折角本物が来たんなら最大限利用するとして…どっからでも見えるように縛っとくっしょ!!相手は一億近くだしくれぐれも逃げられないようにするっしょ」

そうして船のマストにくくりつられるルファイ、当然包囲網を作っていた海兵や剣客隊、そしてゾロやロビンはそれをハッキリと見ており「なんだ、仲間割れか?全く…まあいい、麦わらが縛られてるのなら戦力は大きく減損する筈…今のうちに戦車による包囲網を完成させろ」ドレイクは淡々と指示を出し

「あら…船長さんがああも簡単に捕まるなんて予想外ね…しかし政府も海軍の軍艦を海賊の所為にしてパクろうなんて随分とせせこましい事考えるわね…とりあえず何とかして長鼻くんと船長さんを解放

出来ればいいのだけれど…」

ロビンは双眼鏡で様子を伺いつつ現状や相手の装備などから恐らくこの要塞に来ている世界政府関係辺りだろうとアタリをつけそれを元にだいたい推論を立てる。

「ちっ！何やってんだルフィの奴！全く世話が焼ける!!」

自身の周りを囲む数名の剣客隊剣士を殴り倒し海に飛び込もうとするゾロだったが

「何処へ行く気ですかロロノア・ゾロ…言った筈ですよ、拘束してないのは貴方の腕を買っているからで逃げ出そうとするのなら牢屋に入ってもらいますよ?」

「悪いなゾロ、幼馴染とは言え一応おれも海兵なんでな…見逃すわけにはいかねえんだ」

右側からたしぎの愛刀”時雨金時”が、左側からサガの持つ”花州清水”がゾロの首に添えられる。

「っ…あの麦わらの一味だと名乗ってる奴と黒尽くめの奴は知らねえ奴らだ！騙られた上に仲間を見捨てるなんて出来るわけねえだろ!!」

そう言いながらゾロは自身の愛刀を探すも三本の刀は少し離れた剣客隊剣士がしっかりと持っており手放しそうに無かった為歯噛みする。

「仲間割れじゃ無いんですか…麦わら一味と名乗っているが麦わらの一味では無い…他にも侵入者が?」

「知るか、それよりも刀返せよ剣士なら刀の大事さは分かってんだろうが」

「お断りします、刀返したら貴方あの船に仲間を助けに突っ込んで行くじゃないですか…今はドレイク中佐が動いています、麦わらのルフィが捕まっているというのなら一応賞金首とは言え助けるべき人員ですから貴方がわざわざ行く必要はありません」

「隊長、それを言うならスモーカー准将があれ見たら突っ込んで行きそうな気がしますけど」

「もう！サガさんは黙ってて下さい！兎に角ロロノア・ゾロ…次は叩き伏せますからね」

そう言つてたしぎは時雨を鞘に収めると再び包囲物に加わるべく動き出し

「…随分と滑らかな抜刀になつてんな、腕を上げたと言うのもあながち嘘じゃねえらしい」

ゾロは先程のたしぎの動きに感心しながらもニヤリと笑うのだつた。

## 謎の情報！動き出す海賊料理人！！

「さっきから警報鳴ってるし爆発音とか聞こえてるんだが…やっぱ何かあったんじゃないのか？」

「そうは言ってもよお、おれ達の仕事は飯を作る事だからなあ…今ジェシカさんが司令官のところ行ってるから何か説明あんだろ」

横で交わされる会話を何と無しに聞きながらサンジは無言で玉ねぎの下拵えをしていく。

「色々情報は集まったしそろそろ潮時かねえ…なあ、ちよつといいか？」

「ん？どうした応援コック」

「こんだけ騒がしいとやっぱ船が心配だよ、急で悪いんだがちよつと様子見てくる」

「いや、やめといた方がいいって…今外に出たら戦闘に巻き込まれてもおかしくねえぜ？侵入したっていう海賊が暴れてるかもしれないからよ」

「はっこちとら戦うコックさんやってたんだしそんな屁でもねえよ、じゃあ世話になったな！！」

それと共にサンジは自前の包丁などを手早く洗い巻布に仕舞うとその場から離れる。

「さてさて…どこに行ったもんか、とりあえず騒ぎとやらを確かめるか…」

そう考えながら来た時に通った連絡通路へ向かおうとしていると

「コラー！厨房待機だと言ったろうが…ってアンタ確か外部艦隊の応援だったね、何してんだいこんなところで」

丁度反対側からやって来たのは一人の美女…このナバロン要塞厨房の料理長にして要塞司令であるジョナサンの妻であるジェシカだった。

「ジェシカさん!?いやー、船が心配なんで様子を見に行こうかと思いました…」

「危ないから勝手に行動するんじゃないよ全く…まあそれなら丁度い



いね」

「丁度いい?」

「今回の騒動に対応している海兵達に食事を持って行って欲しいんだよ、朝飯を食いつぶぐれた人間もいるだろうからねえ…すぐに作らせるからちよつと待ってな」

「ちよつと待ってくれジェシカさん、結局何が起こってんだ?」

「侵入したっていう海賊が軍艦を奪って暴れてるそうだ、それに対して包囲網を組んで対応中だよ、ほら!アンタにも手伝ってもらおうよ! とりあえずは握り飯を200人分拵えるからね!」

そうしてナバロン要塞厨房がフル稼働で食事を作り15分も経たないうちにサンジは両手と首に大きな風呂敷を取り付けられた状態で

「じゃ、頼んだよ?とりあえず西格納庫に臨時指揮所が作られてるか  
らそつちに向かってくれ、頼んだよ?」

「任せてくださいジェシカすあん!!では不肖サンジ、ジェシカさんの  
為なら火の中水の中!!例えどんな困難があろうともこの食事を届  
けて見せます!!」

そう言つて走り出す背中にジェシカは慌てて

「ちよつと!無理はするんじゃないわよ!危なかったら逃げるんだよ  
…つて聞いちやいないねあれは…」

と、慌ててその背中に呼びかけてため息をつくのだった。

一方ジェシカと別れたサンジは早速仲間達を探しに行こうとする  
も

「…ま、腹が減ってる奴がいるかもしれねえしちやんと持っていくか」  
と両手と首に大きな風呂敷包みを持った状態で道すがら数人の海  
兵に西側格納庫への道を聞きつつようやく臨時の作戦指揮者に到達。

「ちーつす、厨房の方から食事を持って参りやしたー」

そう声をかけながら奥の方に進めば

「あら、そこに置いといて貰えるかしら」

との女性の声に振り返り

「うはっ!なんちゆう美人さん!!どうも初めまして貴方のサンジです

「…ってお嬢さんどつかで会いました?」

流れるように跪き女性の手を取ってそう言う顔立ちが自分の知る女性に似ていたのでそう言うもの女性は慣れたように手を解きながら

「あら、口が上手いのね…でもそんな言い方だと下手なナンパにしか聞こえないわよ?」

と言ってサンジが持ってきた包みの一つを手取る。

「いやあお嬢さんみたいな美人には声をかけずにいらなくて…と、麦わらの一味が軍艦を乗っ取ったと聞いてますが何があっただんです?」

「麦わらの一味」らしき人間達がドックで作業していた十数名を人質に新鋭艦であるバラクーダ号を占拠、先程バラクーダ号の主砲により外苑へと向けられた要塞砲が完全に沈黙、仲間割れかどうか不明だけど一味の船長である筈の麦わらのルフィがマストに縛られている状態で二番手のロロノア・ゾロは剣客隊により拘束されてるわ。

もう直ぐ戦車隊による包囲が完成すると思うけれど強行突破の後での北大水門の二重隔壁を砲撃にて破壊というのがおおよそのプランじゃ無いかしら?」

その言葉と共に白髪の美女はおにぎりの入った包みを手にテーブルの方に

「おいおい、ルフィが捕まってるってどうなった? しかもクソ剣士も拘束されているって…誰が軍艦を乗っ取った? ルフィとクソ剣士以外でそんな大胆な事やりそうな奴はいねえが…騒ぎをおこして脱出するって算段か?」

そして考え込むサンジに

「そうそう、ロロノア・ゾロの情報によればどうやら船を占拠しているのは麦わらの一味では無いと言う話よ? まあ事実なのか攪乱の為の嘘なのかはわからないけれどね?」

と白髪の女性…ニコラ・オリヴィエからの声がかかり

「…つまり偽物が、おれ達の名前を騙って軍艦を奪った奴らがいるって事か」

そう言つて考えを纏める為にタバコを吸おうとポケットに手を入れるサンジだったがその手になにかクシヤリとした感触。

取り出してみるとそこには”海賊船は外周島18番ドック”とだけ達筆な文字で書かれておりサンジはいつの間にか？と頭を捻りながら道中に会った海兵達を思い出すか思い当たるフシは無くますます頭を捻らせるのだった。

集う仲間達！いざゴーイング・メリー号へ！！

「…ホントにあったぜ、あの手紙誰の仕業だ？」

いつの間にかポケットに入れられていたメモに従い半信半疑ながらも外周島の18番ドックまでやって来たサンジはそこに置かれたゴーイング・メリー号に思わずそう零す。

「見たところ異常は無し、引き上げ式のドックって事はどっかにストッパーを外す装置がある筈だが…手が足りねえ、あと一人くらいは欲しい…っ！」

そう考えながらメリー号の周囲を確認するサンジの耳が話し声を捉えサンジはメリー号の影へ隠れ様子を伺っていれば

「で、その神様って名乗ってた奴をルフィがぶっ飛ばしたんだ！もしルフィが敵わなかったら空島はあのエネルギーで奴に滅ぼされてたかもしんねえ…そのくらい恐ろしい奴だったんだ」

「へえー、まあ雷のロギア系となるとそれだけ人智の及ばない強さを持つもんね…島の一つや二つは滅ぼしてもおかしく無いけどルフィさんは良くそんな相手に勝てたね」

「ルフィはゴム人間だからな、雷は効かないんだってさ」

「ああ、それで雷のダメージを受けずに相手に攻撃を当てる事が出来たんだ…つと着いたよ18番ドック」

「おおメリー号だ！ありがとうアピス!!」

「どういたしまして…とは言えやっぱ仲間の人達は見えないね、やっぱ軍艦を奪ったのは仲間の人達なの？」

「うーん、そこが引つかかるんだよなあ…みんなメリー号を大事にしてるし特にウソップはメリーにかなり思い入れがあるからメリーを置いて軍艦を奪うなんて考え辛いんだ」

サンジが聞こえてくる話し声にそつと顔を覗かせるとそこには獣形態になったチョッパーと歳の頃12、3歳くらいだろうか？白いとんがり帽子を被った少女の姿。

何故こんな所に女の子が？と考えながらも早急な危険は無さそうだと判断し

「ようチョッパ―、他の奴らは誰か見たか？」

と声をかければ

「サンジ！無事だったんだな!!」

と喜ぶチョッパ―と”まるでそこにいる事を知ってたかのように”平然としている少女

「何とかな、所でそっちのお嬢ちゃんは？」

「ああ、何か海軍の世話になってるとか何とか…」

「初めましてお兄さん、わたしは آپス…ただの آپスだよ！ちよつと事情があつて海軍のお世話になってるだけで海兵でも何でも無いから安心してね！」

そう挨拶をする少女… آپスにサンジは

「へえ、おれはサンジ…麦わらの一味のコックをやつてんだ、うちの船医が世話になったみたいだな」

「ううんお世話になったのはこっちの方だよ、コバト先生を奮起させた上に医者だからと言う理由でスタンマレー号の船員達を治療してくれたんだからそのお礼、チョッパ―さんは顔バレしてるわけじゃ無いしここまで連れてくるのはそう難しい事じゃ無かつたもん」

「ありがたいな嬢ちゃん、所でチョッパ―お前他のみんなの場所とか何か知らないか？こっちはルフィとゾロの野郎は見つけたんだが他の面子が見つかつて無くてな…」

「ごめん、おれ最初は逃げ回るのに精一杯だったしその後は医務室にいたからよく知らねえんだ…」

「ふうー、となるとナミさんロビンちゃんに加えて後はウソップか、アイツの事だからメリー号の近くにいるかもしれないって思ってたんだ…しかしナミさんやロビンちゃんが心配だ、危ない目に遭つてないといいんだが…そういやチョッパ―、表の騒ぎは聞いてるか？」

「麦わらの一味が軍艦を奪つたつて…ひよつとしてルフィとゾロが乗つ取つたのか!?確かにあの二人なら十分にあり得そうだけど…」

「恐らく偽物じゃねえかと思うが…因みにルフィは奴らに捕まって軍艦のマストに縛られてる上にクソ剣士も海軍の奴らに囲まれててな…」

「偽物!?おれ達のか?それにルフィとゾロが捕まってんのか!?二人ともあんだけ強いのに!？」

「兎に角おれ達はこの騒ぎに紛れて残りのメンバー三人を見つけるか捕まってる二人を助けるかなんだが…」

「すぐ助けに行こう!仲間が捕まってるんなら見過ごせるわけないじゃ無いか!」

「まあ待てチョッパー…見たところ海兵がウヨウヨいやがる、下手に出て行けばこっちまで捕まっちゃうからな…どうしたもんか」

サンジとチョッパーがそう話し合いをしてる時だった何かを言いかけたアピスを遮り

「サンジくん!チョッパー!無事だったのね…というか広すぎるわよこの要塞!!」

との声にそちらを向けば

「んナミさん!良かった、心配してたよ!!」

「ナミ!!無事だったんだな!!」

海兵服を纏っているものの自分達の仲間だと言うことに安心してそう声をかける。

「ふう、サンジくんもチョッパーも無事で何よりだけど…そっちのお嬢さんは?」

「わたしはアピス、ちよつと訳ありで海軍のお世話になってるんだ。お姉さんはチョッパーさん達の仲間?」

「ええ、わたしはナミよ宜しくねアピス。所で他のみんなは?」

ナミのその言葉にチョッパーとサンジは現在わかってる状況を説明、ナミはそれを聞いて難しい顔で考え込む。

「あたし達の仕業にして軍艦強奪をやった一味…何者かしら?上手くこの騒ぎを利用できればいいんだけどルフィとゾロが捕まってるのが痛いわね」

「ナミさんが見つかったのは僥倖だが…ロビンちゃんとウソップの場所も割れてないしなあ」

「メリー号を動かそうにもこの状態で海に出たってわざわざ捕まりに行くようなもんだよな、どうすんだ?」

三者三様考え込みそしてそんな三人にかけられた

「さつきは遮られたけど…お兄さん達、わたしを人質にする気はない？」

というアピスの言葉に三人は顔を見合わせるのだった。

ナバロン海軍大佐、ドレイク怒りの咆哮！

「ド、ドレイク大佐！海賊船です!!」

「何だ！バラクーダ号が麦わらの海賊旗でも掲げたのか!!」

「違います！羊頭の…8番ドックに係留していた海賊船が動き出してこちらに向かっていきます!!」

「何だとおっ!?どっちだ!!」

「東側からです!!」

部下であるダニエル大尉からの報告にドレイクは慌てて双眼鏡を掴みそちらを見ればそこには中央島の影から徐々に姿を表す小型の帆船。

「おのれえっ!!要塞内で堂々と海賊旗なんぞ掲げおつて…どこまで舐めてるつもりだ!!」

「ドレイク大佐それよりどうするっすか？あの海賊船を動かしてるのが麦わらの一味ならバラクーダ号を占拠したのと別に人員がいるって事になるっすけど」

「っ…全員では無かったか、少数の一味だと考えていたが…砲撃用意！目標小型海賊船、合流される前に叩き潰してくれるわあっ!!」

ドレイクの指示に外周島に設置された大砲の砲口が次々と小型帆船…ゴーイング・メリー号に向けられる。

「っ!?何だとそれは本当か!!…ドレイク大佐！砲撃中止です！人質がいます!!」

しかしドレイクのその指示は子電伝虫で砲兵隊と通信をとっていたダニエル大尉の進言により止められる。

「人質だと!?っ…これだから海賊は、整備兵でも人質に取られたか?」

「それが…民間人が人質に…」

「民間人？はつきりせんか！誰が人質になっている!!」

「アピスお嬢さんが人質になっておりメインマストにくくりつけられています!!横には大柄な男がおり迂闊に狙撃もできません!!」

「何だとおっ!?」

”アピスお嬢さん”



自分達の上司であるジョナサン中将の更の上、独立遊撃隊総司令であるクリーク中将が連れてきた少女である。

クリークの悪癖：任務に行く度に変わった武器や道具、偶に行き場のない子供を拾ってくる癖は海軍でも周知の事実であり当然このナバロン要塞の人間達もそれは知っていたのでいつもの事か、と思いつつ特に気にしていなかった。

どうやら東の海から来たらしく周囲が物珍しいのかいつも元気にチョコチョコ走り回っており、強面が多い海兵にも物怖じせず質問してきたり、最初はどう接すればいいかわからなかった男どももその活発な姿に自身の家族を思い出したり、子供の頃を思い出したら微笑ましいものでも見るようになり僅か数日でこのナバロン要塞内に溶け込んだ皆のアイドルである。

当然海兵では無く、今の扱いは民間人である為扱いは少々特殊ではあるがそのうち他の”熊の子供達”と呼ばれる存在と同じように海軍に入隊する可能性がある：未来の後輩として皆に可愛がられていたがそんな清涼剤が海賊に捕まつてると聞いて

「これだから海賊という奴らは!!総司令との連絡はまだとれないのかっ!!」

「すつ、すいません!!アイザック少将と連絡はとれたのですが未だに所在がつかめていません!!」

「まさか外海に一人で…いや、あの人なら船無しでやりかねん：第八部隊！第十六部隊！第三十二部隊を揃えろ！あの海賊船はバラクーダ号に合流する肚だろう、合流したいのならさせてやる!!その後包囲、交渉の元で両船からの人質奪還を行う！見ていろ麦わらの一味共：我々ナバロンの海兵を舐めてるとどういう事になるか思い知らせてくれる!!」

とドレイクは矢継ぎ早に指示を出す拳を握り締めながら段々とバラクーダ号に近づく小型帆船を睨みつけるのだった。

一方、ネロはドレイクと同じく小型帆船が出現との報告を受けて双眼鏡を覗けばそこには自身でも確認していた麦わら一味の海賊船が

こちらに近づいていた。

「んー？どういうつもりだ？こんだけハッキリ見えるように自分達の船長がくくりつけられてんのに仲間と思ってるわけでもねえっしょ」  
「中甲板に大男が一人、傍のメインマストに少女が一人括り付けられてますね…人質？海兵の家族か何かですかね？」

疑問を覚えるネロにカゲと呼ばれる黒尽くめの男達の一人がそう報告する。

「まあお優しい海兵様に人質つてのはいい選択肢っしょ、これで相手は迂闊には手を出せない…その間にこちらと合流、狙いは奪還？協力？」

「奴らも要塞を脱出したいのでしようし便乗しようという肚なのでは？海賊とて馬鹿ではないでしょうから我々が麦わらの一味と名乗ってる以上それを掴んでいる可能性もあり得ます」

「…確かにその可能性もあるっしょ、よーし本物が来るってんなら上手く使わせてもらうっしょ敵対にしろ協力にしろ向こうの出口を伺う方向で、こっちは船長に加え一味と思しき長つ鼻も捕らえてるし有利に立てる筈…そうだ、長つ鼻をこっちに連れて来とくっしょ」

「了解しました」

そう言つて素早く下がるカゲにネロは満足しつ

「しかし…随分とぬるいっしょ」海軍独立遊撃隊、戦車艇による包囲網に周囲に配置された狙撃部隊、セオリー通りだがそれ故に読み易い…海軍最強の部隊と持て囃されておきながらこの体たらくとか笑えるっしょ…やっぱおれら”闇の正義”に比べたら海軍最強とは言えこんなもんっしょ」

呵呵と笑い声を上げるのだった。

## ゾロとたしぎ！剣士の激闘！！

「あら…動き出したのね」

バラクーダ号に近づいていくゴーイングメリー号を見たロピンはその場から離れると変装を解き、能力を用いて三本の刀を投げ飛ばしゴーイングメリー号に飛び移る。

突如として生えた腕が投げつけた刀をゾロは

「あいつか…まあありがてえがな!!」

そのまま受け取りつつ引き抜き周囲の剣客隊の人間を弾き飛ばしてゴーイングメリー号に向かおうとするが

「言った筈ですよ…次は牢に入ってもらいますと」

「油断してたつもりは無かったが…まあお前が大人しくしてるわけもねえか…」

立ち塞がる二人の剣士、たしぎとサガを前にそう素直に通してはくれねえか…と思いつつ三刀を構える。

「サガさんはさががつて剣客隊の取り纏めをお願いします、ロロノアの相手はわたしがしますので」

「ローグタウンの借りでも返す気で？」

「今更あの時の事を持ち出す気はありません…が、一つ賭けをしましょうロロノア・ゾロ」

「賭けだあ？何を賭けるってんだ」

「わたしとあなたとの一対一…もしもわたしが勝ったのなら貴方の残りの人生を貰います」

「ばっ、お前何言って…」

たしぎのその言葉に慌ててそう言うゾロ、その反応に首を傾げるたしぎだったが

「隊長、それまるでプロポーズのセリフですね」

「なあっ!?違いますからね!勘違いしないでくださいロロノア・ゾロ!!」

コホン…本当であればその和道一文字を頂きたい所ですが事情はサガさんから聞きました、形見を取り上げるほど我々も鬼ではありません

せん。

ですから別の案ですが我々剣客隊は貴方の腕を高く買っています、願わくば海賊なんかでは無くこちら側でその腕を振るって頂きたいところですが早々領いてくれるとは思っていません。

だからこそ言葉は不要…わたし達剣士は言葉以外でも語れますから」

サガの言葉に慌てるも落ち着いてそう言いながらスラリと腰の”時雨金時”を抜き放つたしぎ。

「はっ！おもしれえ…で、おれが勝つたらどうすんだ？」

とゾロは獯猛に笑いながら再び三刀を構えれば

「最初から負ける事を考える程弱気ではない…と言いたいところですがそうですね、クロコダイルの件に関しても借りはありますからこの場は見逃すという事でどうですか？勿論隊の皆には手出しさせません」

「随分な自信だな、じゃあローグタウンからどれ程腕を上げたのか…見せてもらおうじゃねえか!!牛鬼…勇爪っ!!」

「望む所ですロロノア・ゾロ!!」

それと共にたしぎは一步目を踏み込み二歩目でそのまま地面を踏み抜くとずるりとゾロの懐に入り込み右腕を引くとそのまま突き出し、その攻撃はゾロが飛び上がる事により空を斬る。

「いきなりたあな…」

「それが何か？それから峰打ちですから安心してください」

「別に悪いとは言わねえさ、ただローグタウンの時みたいにお行儀のいい剣じゃなくなつたみてえだなと思っただけさ！というか突き技に峰も刃もねえよ！」

それと共に今度はゾロの三刀がたしぎに襲いかかるもぬるりとした手応え、ゾロは嫌な予感を覚えるも三刀による猛攻はたしぎに届く事なく全て受け流され、その勢いもあり体勢を崩したゾロに

「剛の秘剣…覇竹!!」

たしぎの時雨金時が圧倒的速度を持って横薙ぎに振られる、流石に体勢を崩したゾロに避ける術は無いかと思われたが

「っ、なめんなあ!!」

そのまま無理に体勢を立て直すのでは無く地面に倒れ込むと同時にたしぎの踏み込んだ足に向かって雪走を振るう。

「倒れ込むのはいいかもしれませんが悪手ですよロロノア!」

だがたしぎは振われた刀を避けると同時、その位置を見切り踏みつけるとそのまま時雨金時を振り下ろそうとするが

「テメエのが悪手ってんだよ!!おらあっふっ飛べえっ!!」

「なあっ!腕一本で!」

ゾロは類い稀なる馬鹿力にモノを言わせて踏みつけられた雪走りを踏みつけたたしぎごと持ち上げてフルスイング、吹き飛ばされながらもなんとか空中で体勢を立て直し着地するたしぎにゾロは

「随分と妙な手応えだったが…まるで全部を受け流されたみてえな…」

と数合の打ち合いを通して感じた事を言う。

「お察しの通りですよロロノア・ゾロ、海軍剣術二式は柔の剣術…相手の力を受け流す”流”は二式の基礎にして奥義、世の中の剣士は剛剣術を使うものが殆どですから戸惑うのも無理は無いですよ…というか刀の使い方が少し荒いですよ!わたしごと持ち上げるとか無茶な事して刀が泣いていますよ!!」

「ちっ、これでも昔よりはだいぶマシになったんだよ!テメエこそ刀好きとか言っときながら刀踏みつけてんじゃねえか!!」

「貴方が足払いなんて仕掛けてくるからじゃ無いですか!!…コホン、とりあえずローグタウンの時よりは腕を上げたと自負しているのですが満足しましたか?」

「へっ、抜刀の時にも思ったが確かに随分と強くなったらしい…が、別におれもあん時から遊んでたわけじゃねえんだ、面白いモン見せてやるよ」

「面白いモノ?」

それと共に雪走と三代鬼徹を鞘内に納め和道一文字を両手で肩に構えるゾロにたしぎは怪訝な顔をする。

「実は今おれはお前に大砲を向けている…見えねえ大砲をな?」

「何の話を…大砲なんてそんなモノどこにあると言うんですか？」

「飛ぶ斬撃を見た事あるか？」

なおも言い募るたしぎにゾロはニヤリと言いながら刀を振り抜こうとしたが

「ええ…まあ何回か見た事ありますが」

「あるのかよ!？」

思っていないかったたしぎの答えに思わず大声で言ってしまうのだった。

## 鋼鉄牙城、最強の戦艦ガルガンチユア!

一方その頃、モンキー・D・ルフィが現れたとなれば文字通り飛んで来そうなスモーカー大佐は驚愕の中にあつた。

夜の間には麦わらを探し回つたが結局見つからず、朝つぱらから海軍独立遊撃隊総司令であるクリークから話があると呼び出され見せた物があると複数のゲートを移動し連れてこられた先……

「何だこれは……独立遊撃隊は何を作っている!!」

ナバロン要塞中央島に存在する超大型ドック、そこに横たわつていたのは一隻の船、しかしその姿は一般的な軍艦の姿を大きく逸脱していた。

「スモーカー准将は“プルトン”と言う物を知っているか？」

詰め寄るスモーカーにクリークは涼しい顔でそう尋ねる。

「プルトン……いや聞いたことねえな、それよりコレは何だ」

「まあ話を焦るな准将……クロコダイルの件で聞いてないか？ 奴は古代兵器プルトンを復活させ、それをちらつかせて世界政府との交渉の材料にしようとしていたと」

「古代兵器は聞いたが名前までも聞いてねえな、で？ そのプルトンとやらが何だつてんだ」

そう言えば古代兵器云々は報告があつたな、とスモーカーは思い出すも興味を抱いていなかったのであまりしつかり覚えていなかったがクリークの

「プルトンというのは世界政府がひた隠しにしている三つの古代兵器の一つ……曰く“世界最悪の戦艦”、”造船史上において最悪の化け物”、”島一つを跡形も無く消し飛ばす”……それが戦艦“プルトン”だ」

と言う言葉により目の前の戦艦に目を走らせ

「まさか……まさかその化け物がこいつだつてのか!! なんてモンを作つてやがる! もし海賊の手にも渡れば……いや、政府に目でもつけられたらとんでもねえ事になるぞ!!」

何てモノを作つてやがる、と思わず目の前の男の胸ぐらを掴もうと

するがその手は止められ

「落ち着けスモーカー准将、誰もこれがその最悪の化け物などと言つてないだろう…こいつは戦艦“ガルガンチュア”、復活の可能性がある対プルトンを見越して開発、建造が進められてる代物だ」

との説明に早とちりだったかと思いつながら心を落ち着かせるべく葉巻に火をつけ目の前のドックに横たわる船を見回す。

全長にして200メートル程…この時点で既に一般的に超大型船とされている150メートルを大きく上回っており大きさと言うわかりやすい要素で今までの船との違いをハッキリさせている。

しかしそこでスモーカーはある事に気付き

「鉄甲船…にしては木材の部分が見受けられねえ…いや、まさか!!」

とクリークを振り返れば

「正解だスモーカー准将…この艦は鋼鉄製だ、バラクーダ号のような木鉄交造の鉄甲船では無い、それを越える圧倒的なポテンシャルを持つのがこのガルガンチュアだ」

「何てモン作ってやがる…独立遊撃隊が嚴重に隠してやがったのはコレか」

クリークの答えに信じられないモノを見るように再び目の前の船を見る。

鈍く輝く鋼鉄の船体…その姿は力強さと共に恐ろしさを感じさせ、これが表舞台に出ようものならこの世界において混乱は必須、軽く見学をしたバラクーダ号でさえ今までの船を過去の代物にしかねなかつた上にコレが表舞台に出れば世界がひっくり返りかねない…もしコレが海賊や世界政府の手に渡れば、そう危惧するスモーカー。「この存在を知っているのはごく一部、表舞台に出るのはまだ先だかな」

「例の815とやらで使うんじゃないやねえのか？誰にぶつけるのかは結局教えられないとの事だったが四皇にぶつけるなら新世界行きが必須だろう」

例の作戦とやらで使うのか？と考えたが返ってきたのは

「流石に間に合わんな、船体は出来たと言え艦装もまだ終わってない



からな…それよりこれの事はくれぐれも極秘で頼みたい」

との答え、不可解なその言葉にスモーカーは

「…何故これを見せた？極秘と言うくらいなら見せなければいいだろう」

と率直に問えばクリークは少し考える表情を見せる、まあぶつちやけて言えばクリークがスモーカーにこの船を見せたのはただの時間稼ぎである。

ロギアであるスモーカーが麦わらに突っ込んでいつては要塞における非常訓練の意味もへつたくれも無いのでただの時間稼ぎであるがそう答えるわけにもいかないの

「ニコ・ロビン…懸賞金3900万の彼女が准将が執心の麦わらの一味に合流したのは当然掴んでいるだろう？」

「それがどうした、確かに奴は古代文字が読めるらしいが…まさかニコ・ロビンがプルトンとやらを復活させるとでも？」

「別にそうは言っていない…彼女が”復活させる”のでは無い、彼女を使ってプルトンを復活させようと企む勢力がいるのが問題でな…」

「古代兵器を復活させるなんざ何処の海賊が…まあ確かにクロコダイルはニコ・ロビンの力で古代兵器を復活させようとしてたんだっただか？」

「海賊じゃない、あまり声高に言うつもりは無いが…俺達の、海軍の上とでも言えばわかるか？」

「っ！世界…政府…」

「とは言えその一部だがな、自身の出世の為にニコ・ロビンを付け狙ってるらしい。更に言えばそのプルトンは設計図が現存するらしくてな…そっちも手に入れようと画策してるらしい、ウォーターセブンを知ってるか？」

「…確か俺たち海軍の御用達であるアクアリアと双璧を為す世界政府御用達の造船都市だったか」

「設計図とやらはそこにあるらしい…サイファーポールが動いてたぞ？」

「…遊撃隊の情報網はどうなってやがる、どうやってそれを掴んだ」

「いや名前を変えず変装もせずって正体あててくれと言ってるようなもんだろ、それで諜報機関名乗ってるんだから片腹痛いってもんだろ」

クリークがそう言うと同時に、スモーカーが懐に入れた電伝虫が鳴り出し

「何だ、麦わらでも見つかったか？…何だと？奴が捕まってるだあ！何処のどいつにだ!!…もういい、おれが行く！」

何かよっぽどの事なのだろう、電話口に怒鳴りつけるとスモーカーは電伝虫を切ると

「悪いなクリーク中将、少し用事が出来た…まあ詳しい話は後にでも聞かせてもらおうさ」

そう言っただけで出口へと駆け出すのであった。

## 激闘！ルファイ救出作戦！

わーぎゃーとじゃれあう剣士二人を他所にバラクーダ号とゴースト・メリー号：麦わらの一味と一味を騙る者達の間の空気は緊迫していた。

自身達の船長を解放すべくメリー号がバラクーダ号に横付けしナミは恐らくこいつが一番偉いと判断した男に声をかける。

「多分だけど：アンタがリーダーだってどこかしら、どういうつもり？」  
「どういうつもりも何も：見りやわかるっしょ、麦わらの一味が軍艦を奪って逃げ出す：そういう筋書きっしょ」

「あたし達はアンタなんか知らないわよ、何なのあんた？」

それと共に棍を構えるナミだったが

「シャウツ！随分と物騒な嬢ちゃんっしょ：でも忘れて無いか？アンタらの船長はこっちの手にあるっしょ」

そう言つてバラクーダ号のマストの方を見やるネロだったが…

「おいサンジい、まだほどけねえのか？」

「うるせーな、大人しくしてろって：あ、やっべ」

そこにはマストにぐるぐる巻きにされたルファイを解放すべくサンジがロープと格闘しており、視線に気づいたサンジはこれ以上隠密にやる意味も無いかとマストをへし折る勢いで蹴りを繰り出すも流石に機帆船故かマストは多少揺れるものの蹴りの一発で折れる気配は無く

「何やつてるカゲ共おっ！奴を止めるっしょ！！」

ネロは流石に見過ごせず部下達を怒鳴りつければ三人ほどの黒尽くめの男達が無言でサンジを囲む。

「はっ、そっちの方がわかりやすいな！ルファイ、テメエはコイツらを片付けてからだ！！受付（レセプション）！！」

サンジはそれと共に目の前のカゲの頭部に踵を当てるとにそのまま大きく振り抜けば目の前のカゲは地面に顔面から叩きつけられる。

しかし本来なら昏倒してもおかしくないような一撃を受けたカゲであったが

「何っ!?!」

「ふっ、フンっ!その程度の攻撃など効かんわ海賊め!!」

何のダメージも無いかのようになり立ち上がりこちらに鋼鉄の貫手を繰り出してきた事にサンジは屈んで避けながら驚愕する。

「手加減したつもりは無かった…がなあっ!!」

ならば、と今度は腹部に対して直線での蹴りを放つもそこに感じた感触は

「ふはははっ!だから無駄だと言っている!!」

「金属音…何か着込んでやがるな?」

「その通り!我らは服の下に特殊装甲を装備している!」

「そうだ!榴弾すら無効化する特殊合金性のタクティカルアーマーだ!」

「随分と蹴り技に自信があるらしいがその程度で我らの防御を抜けると思うな!」

自分の周りを囲む三人の黒尽くめの男達を眺めながらサンジは考える。

相手は三人、しかも黒いスーツの下には厄介な鎧をつけている上に両手に鋭い爪を持ったガントレットを装備して攻撃してきやがる…ここは当初の目的を果たすべだと考え背後のルフィを振り返り

「ルフィ!当たったらスマン!タリア…トリーチェ!!」

その場で片脚を軸に一回転しその勢いそのまま脚を振り抜けば衝撃波は斬撃と化してルフィを嚴重に縛っていたロープを切り裂いた。

かつて通りすがりの海兵に伝授されながらも斬撃を飛ばせなかったサンジだったが実際に見せてくれたゼフとそのアドバイスにより会得したその技は勢いをつける為の溜めを必要とするものの一部海兵や政府関係者が使う嵐脚と遜色無い代物となっており

「なっ!嵐脚だ?!」

流星にそれは見過ごせなかったのだろうネロは予想だにしない光景に驚く。

「ありがとうサンジ!!後はおれがやるぜゴムゴムのおっピストルっ!!」

解放されると同時、ルフィは片腕を大きく引いてゴムの反動により目の前のカゲに向かつて拳を叩きつけるも

「っ！む、無駄だっ!! 貴様ら海賊の攻撃など効かん!!」

「例え麦わらのルフィが解放されようともそれがどうした!」

「後顧の憂い無くここで仕留めてくれる!」

それと共にカゲ達が五指をルフィに向けると鋭い爪先が分離、真つ直ぐに飛び獲物を貫かんとするも

「あつぶねえなあ!! まあいいや、硬い奴なら何回も相手してきたかな!! ゴムゴムのお：H E A T バズーカっ!!」

それと共にルフィの両手がカゲ達に、そのまま立ち尽くすネロの横を通り吹き飛びカゲ達は甲板に叩きつけられた。

「…やつてくれるっしょ麦わらのルフィ、おいお前は長つ鼻連れてこい…あいつがお仲間なら盾になんだろ」

傍のカゲにそう指示を出してネロは指を鳴らしながらルフィの正面に立つ。

「さつきは変な網で捕まったけどもう油断しねえぞ!!」

ルフィは先程捕まっていた鬱憤もあるのだろう、しっかりと目の前の男に対して拳を構えるが

「まあまあ焦る事も無いっしょ…それよりそっちのスーツの兄ちゃんに聞きたいんだが…その蹴り何処で習った?」

ネロはルフィから視線をずらし後ろにいたサンジに問いかければ「あ? それってどれだ?」

「それってのは…これっしょ! 嵐脚っ!」  
「っ! タリアトリーチェ!!」

首を傾げるサンジに飛ぶ斬撃にサンジも同じように脚を振り抜き返し衝撃波はぶつかり消滅

「その技は嵐脚って呼ばれてるっしょ、何処で身につけた? 海賊なんぞに広まっていい代物じゃないっしょ」

「あつぶねえなあ…ランキヤクねえ、ガキの頃に海兵が教えてくれたっつてのとクソジジイがやって見せたっつてくらいか?」

「…まあいいっしょ、見たところまだ完成してないしここで摘んでし

まあばいい話っしょ」

そう言いながらネロは今までの笑みを消して両手を構えるのだった。

## 超絶体技、サンジVSネロ！

「よし！おれがやる!!」

「まあ待てルフィ…あいつはおれをご指名らしい、かかってきなイタチ野郎」

睨み合うネロとサンジ、そして瞬きと同時にネロの姿が消え現れると

「指銃っ!!」

人差し指を突き出す一本拳を放つがサンジも右足を上げそれを弾くと逆の脚で蹴りを叩き込む。

「硬えな…テメエも下に鎧でも着てるのか？それに消えるようなその歩法は心当たりがあるぜ？」

だが返ってきた感触は人体ではなく鋼鉄でも蹴ったかのような手応え、カゲと呼ばれてた奴らと一緒にかと思いきや聞くが

「残念ながらそれは間違いっしょ…、しかし嵐脚を使えるんなら剃も知っててもおかしく無いっしょっ!!」

それと共に後ろに下がると脚を振り抜くネロ、だがサンジは

「おれがそれを出来ないなんて言ってねえがな！」

一歩踏み込めばその姿が掻き消えるとネロの真横に腕を持ち上げようとしたネロに連続して蹴りを放つも

「シャウツ！無駄っしょ、受けるばかりが能じゃねえんだよ！紙絵!!」

まるで紙のようにヒラヒラとした体捌きにサンジは一度距離を取る。

「…能力者ってわけじゃ…ねえよな？」

「正解っしょ…鍛え上げた肉体は鉄の甲殻にまで硬度を高め、しかも受けるばかりが能じゃねえ、柔軟な肉体は相手の風圧だけで攻撃を避けるっしょ」

「ぎっさきの一本拳や消えたような踏み込み、ランキヤクとかいうのもそれか…」

「その通りっしょ、肉体に鉄の硬度があれば武器なんていらねえ…お

れの指は人体すら撃ち抜き、更には消えたように見える程の爆発的な脚力があれば…嵐脚っ！」

「っ！タリアトリーチェっ!!」

それと共に脚を振り抜くネロ、当然サンジも対応して一回転を挟み脚を振り抜けば衝撃波同士が衝突して消える。

「鎌風を呼び起こすほどの速度で脚を振り抜く事が出来る… テメエのは溜めがいる分未熟っしょ」

「ちっ、耳がいてえな…クソジジイは確かに溜めなんぞ無かったからなあっ!!スライス・シュートっ!!」

自身のタリアトリーチェがゼフと比べて未熟なのはサンジもわかっているのだろう、そう言いながら鎌風を纏った蹴りを振り抜くが「そして嵐脚や剃を可能とする超人的脚力があれば…月歩！」

それと共に飛び上がり空中を踏み抜く事によつて滞空して見せれば流星にそれには見ていた者達は驚く

「なっ！空飛んだぞあいつ!!」

「確かに理屈の上なら可能だろうが限度つてのがあんだろ!!」

「空を蹴り浮く事もできるっしょ！乱嵐脚っ（みだれらんきやく）！」

そして降り注ぐ斬撃の雨、これには流星にサンジと言えど回避するしか選択は無く大きく飛び退く。

「シャウツ！空中という絶対的アドバンテージに加えそこから繰り出される遠距離攻撃！総じて”六式”！厳しい修練を経て身につける超人体技っしょ!!」

「ロクシキねえ、めんどくせえ野郎だな…おいてめえ！怖気付いたか!!」

「はっ！その手にやのらねえ…だがこれでしまいつしょ!!剃ROCK!

」

それと共に空中からサンジへとロックオンしたかの如く一直線になっ…さつきより早…」

当然サンジも対応すべく脚を上げようとしたが

「銃指風（がんしつぷう）!!」



「ぐっ!？」

その前にネロによる刺の勢いを乗せた渾身の一拳がサンジの腹部に突き刺さり

「人体を撃ち抜くのに：弾丸なんか不要っしょ」

ネロはそう言いながら人差し指を抜き血を払う。

「サンジ!! ゴムゴムのおっピストルっ!」

「鉄塊っ! そんなパンチ効かねえっしょ!!」

当然崩れ落ちるサンジを救うべくルフィはネロに仕掛けるも鉄の硬度を持つ肉体を前には威力不足、だがルフィはサンジやベルメールを見て覚えた歩法でサンジの元に、サンジを掴むと大きく後ろに下がる。

「おいサンジ! 大丈夫か!」

「すまねえ、少し油断した：あのイタチ野郎妙な体技使いやがる：」

「後はおれがやる! ゴムゴムのおっガトリングっ!!」

それと共に繰り出される連打であったがネロのヒラヒラとした体捌きを前に空を切るばかり。

「無駄っしょ! それより麦わらのルフィ、ここでちよつと話し合いと行こうじゃねえか：お前さんらもここを脱出したいっしょ?」

「知るか! お前は何か気に入らねえ!! ゴムゴムのおつ：」

「おおつと! あつちを見るっしょ麦わら!! アイツがどうなつてもいいのか?」

ネロの言葉にルフィが目を走らせるとそこには銃を突きつけられ整備兵の服を着たウソツプの姿。

「ウソツプ!?! おい! 人質なんて汚ねえぞ!!」

「シャウツ! 海賊には言われたく無いっしょ!! だいたいお前らもまだ年端もいかねえ子供を人質に取ってんじゃねえか」

そう言いながら指さした方を見ればそこにはメリー号とそのマストに縛られた少女の姿、傍には人型形態に変化したチョッパーの姿があり

「なあっ! チョッパー、おれはお前を見損なつたぞ!!」

「いやルフィ、これには事情が：」

あまりと言えばあまりな言葉にしどろもどろになるチョッパ―  
だったがそこにサンジの助け舟。

「まあ待てルフィ、こつちも色々あつたんだよ…おいイタチ野郎、  
テムエウちの砲撃手を人質に取ろうなんざいい度胸してんじゃねえか」  
人質によつて優位と思つたのかネロは構えを解くとゆつくりウ  
ソツプの方へ歩きながら

「いやあ別に最初からその予定じゃ無かつたつしよ、このままここで  
戦うメリットは無い…ただ戦闘を止める為に使わせてもらつたつ  
しよ、さて騒ぎはお終い…勿論こつちの話聞いてくれるよなあ、麦  
わらのルフィ？」

ぐぬぬという表情をするルフィに向き直りニヤリと笑うのだった。

## 人質と海賊！ナミとアピスの内緒話！！

「おいルフィ！おれはいいからこいつを…いや、やっぱ助けてくれ！」  
いまいち締まらないウソツプを他所にネロはウソツプを人質に要  
塞脱出への協力を要請。

「何の目的か知らねえがアンタらもこっからの脱出は困難っしょ？こ  
こは仲良く協力でどうよ？」

「嫌だ！お前は何か信用できねえ!!」

ルフィにはバツサリと断られたならば

「おーおー、随分と嫌われてるっしょ…そっちの姉ちゃんはどうだい  
？」

とメリー号の方にいたナミに声をかけるネロ

「信用出来ないわね、ウソツプを人質にしてる点もそうだけどその  
船って海軍の新鋭艦って聞いてるわ…そんなもんこっちの脚を引っ  
張るに決まってるじゃない！」

「脚を引っ張るねえ…じゃあこいつの力を見てみるっしょ！目標大  
水門！ぶっ壊してしまおうっしょ!!」

それと共にカゲ達が慌ただしく動き連装砲が回転、分厚く立ちはだ  
かる大水門へと砲口が向けられる。

「おいおいイタチ野郎、いくら壊すって言っても大砲二門くらいであ  
のバカでかい水門が壊せるわけねえだろ」

「それよりウソツプを返せー！」

「シャウツ！発射っしょ!!」

だが外野の言葉など聴こえないとばかりにネロの腕が振り下ろさ  
れれば轟音と共に放たれる砲撃、そして吹き飛んだのは鉄壁と思われ  
ていた巨大な水門。

「なんて威力…まさかあの水門を破るなんて…」

思わずといった感じでナミがそんな風に漏らすも無理はない、自身  
の目で見ただからこそ水門を破壊しての突破は不可能だと判断してい  
たからだ。

しかし巨大な鋼鉄の壁は内海に面した数十センチの鋼鉄で出来た

一枚目も外海に面して作られた更に分厚い鋼鉄の壁も無意味とばかりにバラクーダ号の火力を前に吹き飛ばされ

「シャウツ！やっぱコイツあ凄まじいっしょ!!さっきの要塞砲もそうだがこの船がありやあ海賊も海軍も目じゃ無いっしょ!!」

言い放つネロを他所にナミは操舵をするチョッパーに

「チョッパー、もうちよいあつちの船に寄せて頂戴」

との指示、当然近づけば相手がこちらに乗り込んで来る可能性もあるので

「で、でもナミ！近づいたらあの大砲で撃たれるぞ!!」

と反論する。

「落ち着きなさいチョッパー、もしあの大砲をこっちに向けたとしても船の高さに差がある以上相手は射角がとれないわ…つまり近づいた方が有利ってわけよ」

「な、成る程…流石ナミ！考えてんだな!!」

「それから人質になってるウソツプを助けなきゃなんないんだけど…チョッパーは船の操舵をしてもらわなきゃいけないし、あの船にメリー号を並走させる以上あたしは離れられないし…ゾロは何やってんのよ!」

の  
そうして考え込むナミであったが縛られた風に見せているアピスの

「うーん…ねえ海賊のお姉さん、わたしのお友達に手伝ってもらっていい?」

との言葉に疑問を抱くも彼女から話を聞いて

「成る程…確かにそれだったらあたし達も脱出できるしゾロも回収出来てウソツプも助ける事ができるわね…」

「でしよ?というわけで…シグマさーん!!」

とアピスが大声で呼べば

「ぐるぐるー!!」

と中央島の天辺からメリー号の甲板に変わった風体の熊が着地、その衝撃で船は大きく揺れるもバランスを崩しそうになったナミを熊が長い腕で支える。



「壁を代用したとは言え最も突進力のある雷霆を受け流すなんて…流石に海賊狩りの名は伊達ではありませんね」

「うるせえ、そもそも自分から名乗った覚えはねえよ!!」

それと共に再び三刀を振り上げるゾロに

「まあいいでしょう! 何としてもわたしは貴方を海軍に入れてみせます!!」

時雨金時を上段に構えるたしぎであったが

「うおおおおおおん!!」

「なあっ!？」

「えっ! 熊!？」

両者の剣戟は突如として間に飛び込んだシグマの両腕により耳障りな金属音を響かせて止められたのだった。

乱入！海軍本部曹長シグマ！

ゾロとたしぎの刀を弾いた腕は大きく振り抜かれ、咄嗟に間に二刀を挟み込んだもののゾロの体は大きく吹き飛ばされる。

「なんで熊がこんなところに!?総員抜刀!かかれっ!!」

「ぐるるる!」

当然いきなり現れて一騎討ちを邪魔した目の前の熊に対して時雨金時を構え、サガも花州清水を構え剣客隊の面々もたしぎの指示により抜刀し目の前の何故か困惑しているかのような乱入者に飛びかかる。

「っ!かてえ!」

「気をつける!かなりの硬度だ!!」

「パラミシアでござるか!」

まるで鋼鉄を斬りつけたかのような手応えに剣客隊の面々はたじろぐも

「鉄であろうが剣士なら斬ってみせなさい!!」静の秘剣：空蟬っ（うつせみ）”!!」

それと共に鞘内に刀を納めたたしぎの居合撃が熊に向かうも

「隊長の空蟬を避けた!」

「…疾さが足りませんでしたか、先の先というにはまだまだですね」

熊は先程剣客隊の攻撃を受け止めたのと違い、まるでその威力を察したかのようにふわり、とまるで風に舞う紙の如く避けてみせた。

「その海兵達!仲間に向けて剣を振るうとは何事だ!!」

これは手強い…そう考えて刀を構え直す剣客隊の面々とやり合うべきか…と考える乱入者、シグマであったが両者に緊迫した空気の流れる中にかけられるそんな声に両者がそちらを向けばそこには金髪に髭を蓄えたマツカラン中尉。

「…はい?仲間に向けてって…わたし達は海賊狩りの捕縛を邪魔した熊を倒そうと…」

「ん?君らは確かスモーカー准将の元にいた…だったらまあ知らないのも無理はないか、彼はシグマ曹長…動物でありながらきちんと海兵

だ」

「…はあ!? 何で熊が…あ、ゾオン系と言うことですか?」

「いや、能力者では無く普通に熊だな。と、紹介が遅れたなわたしはマツカラン、中尉をやらせてもらっている」

「どうも、剣客隊隊長で大尉を務めていますたしぎです…って何で! 熊が! 海兵なんですか!!」

目の前の乱入者、しかも熊が自身と同じ海兵と聞いて混乱するたしぎだったが

「む? シグマ曹長、帽子とスカーフはどうした? それだと野生の熊に間違われても仕方ないだろう」

「ぐるぐるぐるるるる」

「すまんがわたしは君の言葉はわからんな」

それと共に何処に持っていたのか海兵のキャップを被り、白地に赤いラインの入ったスカーフを装着した目の前の熊…シグマに

「…本当に熊が海兵だなんて…というか貴方が海兵でしたら何故海賊狩り捕縛の邪魔をしたのですか!!」

「ぐるぐるぐるるるるるる!」

たしぎの言葉にゴイング・メリー号を指差すシグマ

「何て言ってるかわかりませんよ!! マツカラン中尉! 彼は何て言ってるんですか!!」

「いや、わたしも何て言ってるかはわからないよ。因みに彼じゃ無くて彼女だよ」

「…メスなんですかこの熊…いえ、シグマ曹長でしたか」

「まあアピスお嬢さんとは仲良くしてみたいだし早く助けろとでも言いたいんじゃないかい?」

「人質? バラクーダ号を奪った麦わらの一味がドックにいた者達を人質にとつたと聞いていますがその中にもそのアピスお嬢さんとやらが?」

「いや、向こうを見てくれ…並走してる小型帆船の方だ、マストに少女が縛られているだろう?」

その言葉にたしぎはサガから渡された単眼鏡を覗き込むと



「なっ！何故この海軍要塞にあのような少女がいるのですか!!」

マツカラン中尉の言う通りベージュの髪を緑のリボンで括った少女がマストに縛られており横にはふき飛ばされた時に壁にでもぶつかったのだろうか、頭を押さえる海賊狩りを心配するかのような大柄な男。

「彼女は我らの総司令官であるクリーク中将が東の海で拾った子供だそうだ…どんな事情で拾われたかはわからんが中将殿はよく孤児を拾って来たりするからな、そしてそのシグマ曹長は彼女と仲が良くその為にさつきと助けてくれと乱入したのだろう」

流石にそんな風に言われては自分達がまるで人質をほっぽっていいと言われているような気がしてしまい

「…人質救出作戦の指示をとっているドレイク大佐の元に向かいます、確かに先に捕縛しておかなかったわたし達の落ち度ですね、すみません」

マツカラン中尉に素直に謝るたしぎ。

「いや、別に責めてる訳ではないが…それより第八部隊が秘密裏にバラクーダ号に乗り込むべく準備をしている…恐らく白兵戦となるだろうから君たち”海軍剣客隊”に協力をお願いしたい」

「了解しました、所でスモーカー准将がどこに行ったかご存知ないですか？」

「いや、見ていないな…まあ何かあったら連絡させてもらう、では人質達の救出を頼みます」

それと共に剣客隊は納刀しつつ一糸乱れずに作戦指揮者の方へ

「ふむ…流石モモンガ中将の肝煎りと言うだけあっていい練度だな、第八部隊とどっちが強いかな?…所でシグマ曹長、クリーク中将殿が何処に行ったか知らないか?連絡が取れなくて困っているのだが…」

「ぐるーるぐるるぐるるうるる」

「やはりわたしには君の言ってる事はわからないな、アピスお嬢さんならわかるんだろうが…しかし彼女もそう簡単に人質になるとは思えんが何かあったのか?」

マツカランはそう考えながら第八部隊の指揮を取るべく足早に作

戦指揮所へと向かうのだった。

何とかかんとか!!タイトルが思いつかない!!

「さーて状況はわかってるっしょ?お仲間の命が惜しけりやこっちの指揮下に入ってもらうとこだが…」

「くっそー!ウソツプさえ助け出せりやあんな奴ぶっ飛ばしてやんに!!」

「落ち着けルフィ:頭に血が上つてりや纏まる考えも纏まんねえ、しかも妙な体術使いやがるしあの”カゲ”とか呼ばれてる連中も含めどつかの組織のもんだろ。」

…おれが教わったのは通りすがりのおっさん、多分海兵だろう:…そして東の海でやり合った鉄拳のなんちゃらとかいう奴もナミさんのお母様も海兵だった:…つて事はイタチ野郎、同じような体術を使うテメエは海軍の人間:…と言いたいとこだがそれなら何故わざわざ軍艦を奪ってこんな騒ぎを起こしてるのかが解せねえ。

なら答えは:…テメエは海軍の秘密組織の人間、表沙汰に出来ない事をやる海軍の裏の人間若しくは海軍崩れの海賊つてとこか?」

これまでの状況や自分の推論を混ぜてそう言うサンジであったが「シャウっ…いいトコついてるが惜しいっしょ!!:…つとまあおれが何者なのかはどうでもいいっしょ、今の状況は”麦わらの一味”が人質を盾として海軍新鋭艦である”バラクーダ号”を強奪、そしてそのままこのバラクーダ号ごとこの要塞を脱出しようとしている:…筋書きはこんな風になってるっしょ」

ネロの答えに

「いいトコついてる?…つて事は海軍じゃ無くて近しいが別の:…それこそ海軍より上の組織:…まさか!!」

「さてどうだか、わざわざ自分の正体をペラペラ喋るほど自信過剰じゃないっしょ」

「ちっ、嫌なモンに首突っ込んだか:…それがどうしたイタチ野郎、こっちはさっさとテメエらをぶっ飛ばして脱出すりゃいい話さ、ご丁寧に邪魔だった水門までぶっ壊してくれたようだしな」

「そんな簡単にぶっ飛ばされる程甘い鍛え方はしてねえっしょ:…なあ

麦わらのルフィ、船長はテメエだろ？大人しくこっちの言う事に従って欲しいっしょ」

それと共にウソップの傍にいたカゲの一人が鋭く尖った鋼鉄の指先をウソップの喉元に突きつければ更に顔を青くするウソップ。

「ひ、ひいつ！命ばかりは!!」

「おいどうするよ船長、このままじゃジリ貧だぜ？協力して運良く脱出できたとしても後ろから撃たれるのが目に見えてるぞ？」

ウソップの状況とサンジの言葉に考え込むルフィ、そして両腕を大きく掲げると

「…よしっ！作戦たーいむ!!」

とバツテンを作り叫ぶ。

「…許可するっしょ」

流石にこれにはネロも毒気を抜かれたのか、どの道自身の方が優位にあるとの判断は変わらずそう言ってみせる。

「もうちよつと真面目にやれ!!」

そんなルフィの頭にサンジの蹴りが入るも

「いやあだつてよお、おれがいくら考えてもいい手段思いつかねーし…ナミとかチョッパーも来てるしそれならみんなで話し合った方が絶対いい手思いつくんじゃねーかなーって」

そんな一幕はあったもののウソップを除く一同＋αはゴーイングメリー号の甲板で車座になり話し合う。

「さてとまずは今の状況をなんとかしなきゃなんねえが…おれとナミさん、ルフィにクソ剣士にチョッパー…ウソップは人質になってるがナミさん、ロビンちゃんは戻って来てないのかい？」

「誰がクソ剣士だクソコック」

「ちよつと、話が進まないから二人ともいがみ合わないでよ。」

ロビンはまだ戻って来てないわね、まあロビンの事だから上手くやるとは思っただけど…」

「となるとおれ達のやる事はウソップの救出とロビンちゃんとの合流、それが出来次第この要塞からの脱出といきたいところだが…」

そうして思案するサンジに

「ねえねえ海賊さん達、早くしないと本格的に海兵さん達動き出しちゃうよ？・そうなたら脱出も難しくなると思うんだけど…」

「ぐるぐるぐるるるる」

と縛られたふりをしているアピスからそんな声がかかる。

それで気づいたのだからルフィは

「お？・何だお前…ってか熊あ!？」

大きく驚くもののナミの

「ああ、そこら辺はやったからもういいわよ…その子はアピス、奇特な事に人質のフリして海賊であるあたし達を助けてくれようとしている子よ」

「そっか、ならいいや!」

「よろしくね麦わらのお兄さん!わたしも何か手伝えたらいいんだけど…流石に言い訳が効かなくなっちゃうからごめんね」

「大丈夫よアピス、これでもあたし達は結構な修羅場くぐり抜けて来てるんだから、安心なさい!」

そう言うナミだったが突如として響く水音と共にメリー号の船縁を掴む腕

「よおねーちゃんら、その話おれも乗っ付けてくれや」

現れたのは海水の滴る水色の髪にアロハシャツに海パンの大柄な男。

「誰?!？」

「ちっ!・海兵か!!」

咄嗟に立ち上がりナミを後ろに庇うサンジ、ルフィは拳を構えゾロも刀の柄を掴むが

「待て待て!・おれはただの船大工、フランキーってもんだ!・アンタら長つ鼻の兄ちゃんの仲間だろ?・おれは長つ鼻の兄ちゃんとか整備兵のおっさん達を助け出してえだけだつて!」

と突如現れた乱入者フランキー、その存在に麦わらの一同は顔を見合わせるのだった。

## 動き出す一味！人質奪還の狼煙！！

ルフィ達が突如として現れた男、フランキーに経緯を聞けば自身達の仲間であるウソップとフランキーは同じ船室に閉じ込められた後ウソップだけが連れて行かれた事によりピンときたらしく船の壁に穴を空けて脱出して来たとの事だった。

「ただの船大工って…海兵じゃ無くて民間人なのに何でこんなトコに？あだし達を騙そうとしてるんじゃないでしょうね？」

「疑りぶけえねーちゃんだな、おれはちよつとした伝手でバラクーダ号の見学に来てただけだ。」

んで長つ鼻のにいちゃんとはそんな時にちよつと話してな、あんなだけ船を愛してる男が捕まってんだ…それは船大工としては見過ごせねえ、救ってやりてえと思うのが人情ってもんじゃねえか？」

そう言つてのけるフランキーに一味は確かに嘘は無さそうだと判断、そう言う事であればウソップ and 他の人質奪還に際して手伝ってもらおうという話に、そして更にはナミが持っていた子電伝虫が鳴き出した。

アラバスタの後船に乗り込んだ時にロビンから渡されたがずつと鳴かなかつたそれがいきなり鳴き出したので半ばその存在を忘れていたナミは驚きつつも応答。

「もしもし？」

『ああ繋がったわね、良かったわ。航海士さん、私はいつでもそちらに戻れるわ一応今はバラクーダ号とこちらの船が見下ろせる場所にいるのだけれど状況はどうなってるのかしら？』

「ロビン！良かった無事だったのね…とりあえずさっさと要塞から脱出と行きたいのだけれどウソップが人質になってるのよ、ついでによくわかんないけど船大工の人がウソップと人質を助けたいって話になった上にルフィがその話に頷いたもんだからどう人を分けたものか悩んでるのよねえ…」

『そうね…ここから見える人数だと黒尽くめの集団は5人ほどだけど船内にも数名がいると思われるわ。』

人質になったと言う海兵及び整備兵の姿は見えないので恐らく船内：私の予想だけれど纏めて閉じ込めてはいないんじゃないかしら？』

「…そうなる少し面倒ね、根拠は？」

『多分機関室と操舵室：…そしてそれから戦闘室、連装砲の操作にも人質が割り振られているでしょう、とてもじゃないけどバラクーダ号を奪った人間達に使い熟せるとは思えないもの。』

何せ人質は整備兵が多数：…という事は船の事に通じる人間が多数いるという訳だから見逃す手はないでしょう、私が犯人ならそうするわ』

「…確かに、一箇所に固まってるかも何ていうのは甘い考えだったわね」

『それからナバロンの海兵側にも動きあるみたいね、こちらからだど部隊を編成してるのが見えてるわよ？熱風部隊』と名高いナバロン第8部隊に合わせて剣客隊が合流しているわね、恐らく回り込んで死角になっている船尾側からの潜入をするんじゃないかしら？動くのなら早めに動いた方がいいわよ？』

「え？…こっちが見える場所にいるの？何処？」

ロビンからの通信に辺りをキョロキョロと見渡すナミだったが

『あまりキョロキョロしてると変な疑いを持たれるわよ？私がいるのは外周島の頂上、そちらからだど数本の木が集まってる辺りね…』

ロビンのその声に慌てて首を巡らすのをやめて目だけで見つけようとするも、見つけられず

「…こっちからじゃ見えないわ…とりあえずウソップと人質の人達を解放したら間髪入れずメリー号でさつき爆発した水門を突っ切るんだけどロビンは乗り移れそう？」

『ええ、問題ないわよ。メンバーはどう振り分けるつもりかしら？』  
「とりあえずチョッパーは舵をとってもらおう必要があるしあたしも指示を出さなきゃならないから動けないわね…」

「おれ！おれはあのイタチ男ぶっ飛ばすぞ!!」

「護衛はお任せ下さいナミさん!!」

「…じゃあルフイはウソップ奪還の為にあの首謀者の気を引いてもらうとして、サンジくんが護衛となると人質救出するのがその船大工の人とゾロだけなんだけど」

『…それは少し怖いわね、もしもこの状況ではぐれでもしたら』

「…そうよねえ、よしサンジくん護衛はいいから人質の人達の救出をお願い。船大工の人は人質が何処にいるかわかるんでしょ？」

「おう、恐らくだがあれだけの人数を船内で長つ鼻の兄ちゃん抱えて移動させられる間にそれっぽいトコは何箇所か検討がついてる」

「…クソ剣士とかよ、まあナミさんが言うんなら仕方ねえ足引っ張んじゃねえぞ？」

「ああ？そりゃこっちのセリフだアホコック」

再び言い合うサンジとゾロにナミはため息つきつつ両の拳を振るう。

「いい加減にしろって言ってんでしょ!! ったく毎回毎回よくも飽きないものね!!」

「ご、ごめんナミさん」

「つくろ！本気で殴りやがって!」

「所でロビンの見立てによれば船内にもあの黒尽くめが数名いるって言うってたけど何とかなりそう？」

「ああ、奴らはカゲとか呼ばれてたが…まあ問題ねえ」

「へっ、パクリ女との勝負はその熊に中断されちまったからな…そのカゲとやらにぶつけさせてもらおうか」

「仕方無いでしょ、負けるかもとは思ってなかったけどあの人数を振り切ってメリー号までアンタがたどり着くの待ってたら脱出のチャンス逃しちゃうじゃない」

「…まあ奴との勝負はまた次回に預けとくとするか、よし行くぞクソコック！さっさとウソップを回収してオサラバするぞ」

「あーおい待て!! テメエが先に行ったら迷子になるに決まってるだろ!! 場所をわかってる海パン野郎を前にしろ!!」

「騒がしい兄ちゃんらだな…ちと燃料が心配だがまあ何とかなんだろう」



それと共にフランキーの先導でサンジとゾロが人質救出に

「よし！じゃあ作戦も決まったしおれはアイツをぶっ飛ばしたらい  
んだな!!」

「アンタ話聞いてないでしょ！ゾロ達が人質を救出する間アイツを釘  
付けにしとくのがアンタの役目だからね！」

『船長さん、援護はするけれど監獄弾には気をつけてね？アレは能力  
者にとってかなり厄介な代物だもの』

「おっし任せとけ！待ってろイタチ野郎!!」

ナミとロビンの言葉にルフィは手のひらに拳を叩きつけると先程  
相対していたネロの元へと向かったのだった。

モネとロビン、二人は仲良し！

褐色のマントを羽織り木々の密集した地域に伏せたロビンは子電伝虫を繋いだままライフルについたスコープを覗く。

「航海士さん、船外に出てる敵は首謀者と思しき男を含め5名：四名が船首甲板に、一人がマスト上部にて見張りを行ってるからコックさん、剣士さん、船大工さんの突入には気をつけて」

『わかったわロビン、引き続き何かあったらお願いね？』  
「了解、何かあったらまた通信するわね」

そう言いながら一度子電伝虫を切るロビン、別に繋いだままでも良かったのだが”黒電伝虫”なんて電波を盗聴可能な個体がある以上油断は出来ないと考えそのままスコープをずらし海兵達の方を覗き込む。

「…熱風隊こと第八部隊に剣客隊が合流、先程の剣士さんとの戦いを見る限りなかなかのレベル。」

コックさんとあの黒尽くめの敵の戦闘を見る限り負けるとは言わないけど…少し梃子摺るかもしれないわね」

それと共に後ろに現れた気配へと向けて太ももに装着していたナイフを抜き放つも

「ちよつと、久々の再会なのに物騒な事じゃない？」

「モネー…久しいわね、息災かしら？」

そこにいたのは同じ年という事であってロビンが親しくしていたモネ、緑色の長髪に抜群のプロポーションを誇る美女、麦わらの一味とはドラムで一度会っており、その後クリーク達と合流したユキユキの実の能力者にして凄腕の医者であった。

「お陰様でね、貴女も楽しく海賊やってるみたいじゃない？」

「まあ今まで潜入していた所と比べると楽しいと思えるわよ？」

抜き放ったナイフを再びホルスターに仕舞いつつその場に伏せるロビン

「今までは潜入クリークさんに海賊の情報及び居場所を報告する為

だったものね、潜入しているのにのんびり出来るのは久々なんじゃない？」

モネもそう言いながらその場に座る。

「そうね、まあもつともそのお陰で潜入した海賊は悉く海軍により壊滅：お陰で悪魔の子やら疫病神、死神なんて渾名もついたけれどね」  
「言いたい奴には言わせておけばいいじゃない、まあ海軍とロビンを繋げる事も出来ていない者達が真相を掴めるとは思えないけれどね？」

「：簡単に掴まれても困るけどね」

現在ロビンについて彼女と海軍：本部中将であるクリークの繋がりを知ってるのはごく一部である。

「まあクリークさんがそこら辺は嚴重に隠してるみたいだし：お陰で貴方はオハラを逃げて以降転々と居場所を変えながら裏世界に参入。

潜入した海賊を破滅させる女として噂されながらもグランドライオンに入ってしまった頃クロコダイルのスカウトによりバロツクワークスへ。

クロコダイルの情報操作のお陰でここ数年は表舞台から消えていたがアラバスタ王国での一件以来再び表舞台に、海軍では麦わらの一味に新たに参入したと思われるわよ？まああくまで今までと同じく腰掛けだと考えているようだけど：貴女はどうするつもり？」

モネの言う通り知ってるのはごく一部、大半はクリークの知識にある通りの生い立ち：8歳の頃ではなく10歳の頃にズレたとは言えまだその年の少女が3900万という金額をかけられた故に少女は過酷な人生を送り”生きてはいけな”と後ろ指を指され、裏世界においては様々な人間を裏切りながら生き延びてきた：”と思われる”。

まあ実際のところは幼少時からクリークの元で保護され、クリークの影響下にあるファウス島において18になるまでの間に様々な技術を吸収させながら欺瞞情報としてクリークの知識にあった情報を流していた故に政府諜報機関や海賊達が掴んでいる情報とロビンの生き様には大きな差がある。

「そうねえ…おじさま曰く麦わらのルフィの元にいればポーネグリフは近道だと言っていたけれど…」

「ふーん？まあわたしとしては貴女と航海するのも楽しいと思うんだけれどね？」

「まあ流石に私と海軍…というか現役中將が繋がってるのを知れば追い出されるかも知れないわね、まあ色々と手のかかる子達だし折を見て一味からは脱退するまでは付き合うけれどね？」

まあひよつとしたら船長さんの事だから…とは思わないでも無いが自分がオハラの関係者である以上かかる火の粉は大きくなるだろう、そうなると楽しみに海賊をやっている彼らの道が途切れる事になり、それでは彼らに申し訳がたたない…それ故に暫くしたら離れるつもりであった。

「ふうん？そう言えば麦わらの一味にはわたしの弟子がいるのよ、わたしに及ばないとは言え医術の腕は確かみただしそれなりに腕はたつ…まあ過去が過去故に臆病な気質もあるみただけだけど良かったらそれと無く見といてあげてくれる？」

「船医さんの事かしら？腕は確かみただけですけどそう言えば彼の出身はドラムだったわね、だったら貴女も一味に入る？退屈はしないと思いうけれど？」

「あら、それも面白そうだけれど…まあ一味に入るのは無理だけれど遊びには行くかもよ？シユガーもクリークさんのお気に入りがあると聞いてうずうずしてるみたいだしね…その内一人でも突っ込んでいきそうだからそのうち貴女達の前に現れるかもね？」

「あの子はおじさまが大好きなもの…嫉妬もあるのかもしれないわね？」

ロビンはそう言いながら軽く笑うと再びスコープを覗き込むのだった。

唸る舌戦、カゲ対麦わらの一味!!

密かに海中を進みフランキーが脱出に使った壁の穴からバラクーダ号に乗り込んだゾロ、サンジ、フランキーの三名は船倉下部にあると思われる動力室へ

「帆船だろ？別動力があんのか？」

「この船はちよつと特殊でな、補助として”すくりゆう”とか言う新型の機関を積んでるそうだ」

「へえ、風が無くても進めるのは便利そうだなつと！」

動力室の前に差し掛かったところでいきなり物陰から現れたカゲの振りかぶった腕をゾロは身を引く事によって回避。

「どいてろクソ剣士！フランシエ・シュートっ!!」

それと共にサンジの蹴りがカゲの腹部へと吸い込まれるが

「ふっ！その程度の攻撃、我らのボディーマーの前には効かんわ海賊めっ!!」

「ちっ、割と強めに蹴ったつもりだったが、さっきはルフィが吹っ飛ばしたからな…」

カゲが身に纏っているボディーマーによりダメージは見られずならば、と

「役にたたねえなクソコック！三刀流・鬼斬いっ!!」

今度はゾロが斬りかかるもダメージは見られず高笑いするカゲ

「ふはははっ無駄だ海賊め！貴様らの攻撃など我らの前では無力!!」

「テメエこそ役に立ってねえじゃねえかクソ剣士…待てよ？ボディがダメならこれならどうだ！ウイユ…！ネー！ジュー！ブーシュー！ダン！マントン！トロワジエムシュートっ!!」

「大人しく人質になつてもらふべらっ!？」

あれほど頑丈だったボディの耐久はどこへやら、カゲは顔面のアーマーを叩き割られてその場に倒れ伏す。

「やっぱりな…顔面は呼吸や視界の確保もあるだろうから胴体よりは脆いと思つたが…というか普通に蹴れば壊せたか？」

「何の音…っ！侵入者かっ!!」

したたかに壁に打ち付けられたカゲにより物音で気づいたのだから、動力室から更に現れたもう一人のカゲ

「よし、次はおれがやる」

「おうマリモヘッド、奴ら特殊な鎧着てやがるから狙うなら顔面を…」  
「そんなせせこましい事やってられっか！ふうっ、一刀流…獅子歌歌!!」

それと共にゾロの身体はカゲの後ろに

「ば…ばかな…我らのボディアーマーは迫撃砲さえ無効化する筈…」  
「へっ、その程度斬れなくてはこの先やっていけねえよ」

倒れ伏すカゲにそう言っただけのゾロだったが

「おいクソ剣士…ザコ相手に大技連発しているとバテちまうぞ？」  
「はっ、自分が弱えとこ狙ってしか倒せねえってか？」

「カツチーン！上等だクソマリモ野郎、次出てきた奴はおれにやらせろ、別に弱点なんざ狙わなくても倒せるっての！それが戦略ってもんだろ」

そして尚も言い争う二人に道案内としてついて来ていたフランキーは

「…船でも思ったが仲の悪いにいちやんらだなあ？いや、喧嘩するほど仲が良いってやつか？」

と零せば二人は

「誰が仲良しだ海パン野郎!!」

と揃って否定するのであった。

一方その頃ルフィは

「よしイタチ野郎！覚悟しろ!!」

と、両の拳を構えネロの前に再度現れた。

「おー麦わらのルフィ、いい作戦は思いついたか？」

「おう、とっておきの作戦だ!!おれがここでお前を吹っ飛ばせばいいって事だろ!!」

「…おいおいおい麦わらのルフィ、お前お仲間が人質になってるって

事忘れてるっしょ?」

「それは忘れてねえぞ!でもウソツプなら大丈夫だ!何たっておれ達の仲間なんだからな!!」

首に鋭い鋼鉄の爪先を突きつけられたウソツプはルフィのその言葉に

「ルフィ…お前ってやつは…おれをお前達みたいなのと一緒にすんな!!おれは狙撃手!援護が専門!おれは弱いんだからな!!」

ホロリと涙ぐんでみせたものの怒涛の勢いで否定する、流石にこの状況下で脱出できるような手段はないらしい。

「シャウツ!随分と仲間を信頼してるみたいっしょ…時に麦わらのルフィ、さっきのスーツ男はどうしたっしょ?」

「ん?サンジか?サンジならゾロと一緒に…っとこれ言っちゃいけねえやつだった!」

慌てて口を塞ぐルフィだったが

「ゾロってのは海賊狩りか、ふーん成る程成る程…おれの前にお前が来て時間稼ぎ、本命はさっきのスーツ男とロロノア・ゾロが人質を奪還、お前と二人で挟み撃ちにしてこいつを助け出すって寸法っしょ、いいとこついてるっしょ?」

「スゲー!何で分かったんだ!!」

時すでに遅し、流石にここまで状況が揃えば否応にも予想はつくネロ。

「おいお前…ついでにお前もだ、船に鼠が入り込んでやがるから仕留めてこい」

「了解しましたネロさん!」

その言葉と共に船外にいたうちの二人が船内へと向かう。

「麦わらのルフィ、いいことを教えてやるっしょ…テメエは丸ごとぶっ飛ばして何とかなつたようだがカゲ共は特殊合金で作られたアーマーを装着してるっしょ、対物理に優れ戦艦の大砲すら無効化する上に戦闘力においても厳しい修練を乗り越えて超人とは言えねえもののテメエらみたいな億もいってない弱小海賊の相手なんざ赤子の手を捻るよりも簡単っしょ」

「何が言いてえんだ？」

「つまり作戦が上手く行つて人質救出の後にこのおれを挟撃なんて希望なんざ抱くだけ無駄って話だ……」

「へっ！やってみなくちゃわかんねえだろ!!」

そう言つて睨み合う二人だったが

「ぐあっ!？」

「ちっ！強行してきたか!!敵襲！ネロさん敵襲です!!」

その声にネロは舌打ちしそうになりルフィは

「ほら見ろ！ちゃんとゾロもサンジも上手くいって……」

「バラクーダ号強奪事件の主犯と思しき麦わらの一味を発見!!これより海賊共を制圧する!!」

「海兵じゃねえか!!サンジとゾロじゃねえじゃん！」

そんなツツコミをこだまさせるのだった。



吹き荒れる熱風魂！ナバロン第八海兵隊！！

ルフィの元に第八部隊こと熱風隊が現れたのと時を同じくして

「ロロノア・ゾロ！ここで相まみえるとはいいい度胸ですね！！」

「げっ！またお前か！！」

剣客隊を引き連れ船尾から船内に突入したたしぎとカゲを打倒しつつ人質を解放し回り、数人の元・人質を引き連れたゾロとサンジが船内通路で鉢合わせ。

「おお！海兵さんら！！おれ達人質になってたんだ、助けてくれ！！」

そしていきなりそう言い出すフランキーにサンジとゾロは驚き

「テメエどういこうったー！」

「おいコラ、先にてめえから三枚にオロすぞ？」

胸ぐらを掴むもフランキーは落ち着いて

「まあ待てよコツクのにーちゃんに剣士ののにーちゃん、海軍に捕捉された以上ここでやり合うのは下策ってもんだ、後の人質は海兵達が解放してくれるって事だからテメエらは先に行きな、長つ鼻のにーちゃんを助けるんだろ？」

そう二人にだけ聞こえるような声で話せは確かにフランキーの言う通りここで時間を取られるのは望ましくないと考え直す二人。

「ちっ：場合によっては甲板やゴーイング・メリー号の方にも海兵が殺到している可能性がある以上グズグズしてられねえ」

「うっし、じゃあここはトンスラさせてもらうか：悪いなパクリ女！アンタとやり合うのはまた今度にさせてもらうぜ！」

そう声をかけるとゾロとサンジは後ろに連れていた人質をかき分けて逃亡

「なっ！待ちなさいロロノア・ゾロ！！」

当然剣客隊を指揮して追いかけてようとするもそう広くも無い船内通路では直ぐに動くこともできず更には

「海兵さんら！他にもまだ捕まってる人質がいるんだよ！！早く助けてやってくれよ！！」

とのフランキーの言葉にたしぎは少し考え結論を出す。

「っ…仕方ありません、総員予定通り人質の救出に当たります。サガさん、何人が引き連れてこの人達を待機させているボートに、残りはわたしについて来て下さい…その人、残りの人質がどこにいるかわかりますか？我々で見取り図は預かったのですが人質の場所がわからないんですよ」

「恐らく連装砲の操作や戦闘室…あとこのこと、ここじゃねえかと思うが…機関室や操舵室は何か知らねえがさっきの海賊二人がおれらを見張っていた黒尽くめのやつらをぶっ飛ばしたから問題ねえ筈だ」  
「…仲間割れ？いえ、それは考えづらいですね。兎に角考えるのは後です、我々は迅速に人質を奪還し後顧の憂いを無くしてしまいたまいます」

「そう言いながらたしぎは残りを引き連れてフランキーが教えてくれた方へ」

「頑張れよにいちちゃんら、無事に脱出出来るのを祈ってるぜ」

「おい海パン男、何黄昏てんださつきと行くぞ？」

数人の海兵と整備兵を引き連れたサガはフランキーにそう声をかけるのだった。

「なっ！海兵!？」

「ひよっとしてゾロ達のもとにも行ってるのか!?!どうするナミ!こっちは二人しかいないぞ!」

そして海軍が人質奪還を目的としている以上当然アピスを人質（ということになってる）としているゴーイングメリー号の方にも海兵が当然乗り込んで来ていた。

「大人しくアピスお嬢さんを解放しろ海賊め!!」

「武器も持たずに来るなんてあたし達が二人だからって舐めてるんじゃない?」

…とは言え乗り込んで来たのは5人ほどの海兵でいずれも武器を手にしていないものの恐らくその筋骨隆々とした体つきから拳闘術使いだと判断しナミはクリマ・タクトを素早く連結しアピスの前に構える。

「ナミ、こいつらさつきロビンが言ってた熱風隊って奴らか？ 剣持つてるようには見えねえけど…」

チョッパもそう言いながら大柄な人間形態の両の拳を構える。

「その通り！ 我らはナバロン海兵隊、熱風魂見せてやれ！ いくぞお前ら！！」

「「応っ！！」」

「総員構え！ 拳砲” 斉射っ！！」

リーダー格と思しき男がそう言うのと同時四人が正拳に構えるとその拳を振り抜きナミとチョッパは距離があるのに何を？ と考えるも一瞬ナミの脳裏にリトル・ガーデンで出会った男の姿がよぎり「チョッパ伏せて！！」

咄嗟にその場で屈むとオレンジの髪を衝撃波が揺らし船室の壁に響く打撃音。

「ほう！ 我らが拳砲を避けるか！！」

「ナミ！ 何ださっきの！？ 離れてるのにパンチが飛んで来たぞ！！」

「ビビが言ってたわ！ 拳を振り抜いた衝撃を飛ばす技があるって！！ あいつらそれを使ってる！」

「なら近づけばいいんだな、うおおおおお！」 重量（ヘビー）ゴング” っ！！」

それと共に分厚い筋肉で覆われた拳がリーダー格のボディにまともにヒット、本来であれば岩をも砕く拳でありまともにヒットすれば戦闘不能に陥ってもおかしくない一撃だったが

「ふっ、いい拳だ！！ だが我々の鉄塊の前には威力が足りん！ 拳砲っ！！」  
リーダー格の男は悠々とチョッパの拳を受けるとお返しとばかりにその拳を振るう。

「ぐっ!? くそこいつら鉄みたいに硬え!! 能力者か!？」

「…いえ、ひよつとしたら Mr. 6 も？ アンタ達ひよつとしてそれは能力では無く体術の一種でしょ!! 昔ベルメールさんから聞いたわ、海軍には体を鉄みたいに固くしたり斬撃を飛ばしたりする技があるって！」

「くくく、海賊ながら博識だな…そう！ 我ら熱風隊は” 鉄塊” と” 拳

砲”を使う1・5式使い!!鋼鉄の肉体たる”鉄塊”とそれを転用した”拳砲”を併せ持つ我らはこの鍛え上げた肉体のみで戦場を駆け抜けてきた!!我らの肉体の前に大人しくするがいい海賊!!”

そう言いながら思い思いのマツスルポーズをとる5人

「暑苦しい見た目と裏腹に厄介な体術もあつたもんね…はいそーですかって大人しくできるんなら海賊やってないわよ、海賊なんて縛り首確定になるじゃない!!」

「安心しろ、このナバロンでは生捕が基本となっている…貴様らは懸賞金は未だかかっていないようだし大人しくアピスお嬢さんを解放すれば丁重に扱おう、だがなおも抵抗すると言うのなら…」

「っっ…」

「少し痛い目を見てもらうぞ海賊共!!」

そう言つて5人の海兵は再び拳を構えるのだった。

三つ巴の戦闘、熱風隊 V S 麦わら一味 V S 海イタチの  
ネロ!!

バラクーダ号甲板に一斉に突入してきた熱風隊ことナバロン第八  
海兵隊はカゲ、ネロ、ウソツプを数十名をもつて瞬く間に包囲。

「シャウツ！随分と手が早いっしょ海兵共、だがこの船にはアンタら  
のお仲間が人質となつて乗つてるんだぜ？こつちに手を出せば人質  
がどうなるかなんてわかるっしょ」

取り囲まれた海兵達に対して一々相手をするのは面倒だと考えた  
ネロがそう言うも

「ふっ！既に海軍剣客隊が人質の奪還に着手している!!もうその手は  
効かんど!!貴様ら是我々熱風隊がここで捕縛する！」

との言葉にネロは難しい顔をする。

「剣客隊：確か腕利きの剣士を集めた部隊っしょ、下にいるカゲ共で  
対応できるか？いや、アーマーもあるし剣士程度に遅れはとらないっ  
しょ。」

それよりどつちかと言うと：知ってるっしょ、テメエら確か徒手格  
闘に特化してるとか聞いてるっしょ：だがその程度でおれの前に立  
ち塞がろうなんざ笑えるっしょ!!」

それと共にネロは剃を使い移動目の前の男に対して戯れとばかり  
に人差し指によって繰り出される一本貫手：しかしネロの指銃は標  
的の肉体に触れると同時に、耳障りな音によって止められた。

「ふっ！我々の鋼の肉体の前にその程度の攻撃が効くとも思つたか  
!!」

「テメエ！鉄塊”を習得してやがるってことは六式使いか!？」

「ほう：海賊なのに博識だな、我々は海軍に伝わる体術のうち二つを  
会得したナバロン海兵隊!!我ら鋼の肉体の前にその程度の攻撃は無  
意味と知れ！そしてくらうがいい拳砲っ!!」

それと共に風切り音と共に振り抜かれる拳、当然ネロも座して待つ  
つもりはないので剃を使って後方に下がる。

「ちっ、確かに六式が海軍にも伝わる体術である以上会得する奴がいてもおかしくねえか…だがたつた二つか？随分と中途半端なこつた、六つ全てが使えてこそつしよ！嵐脚・線!!」

それと共に横に広がる斬撃では無く縦に広がる斬撃をネロは足を振り下ろすことによつて巻き起こすも

「海賊でありながら六式を理解し剃に指銃、そして嵐脚を使い熟す三式使いとは驚いた!!だが…その程度の斬撃で我らの肉体に敵うと思つてか!!」

交差した腕で斬撃を受け止め散らす海兵にネロは不機嫌そうな顔つきになる。

「ちっ、本気じゃねえとは言え結構力はこめたつもりだったが…二式使いとは言え鉄塊だけならかなりのもんだな、面倒くせえが…カゲ共！人質も手加減もいらねえ!!相手は六式を使うとは言えたつたの二式使い、こうなつたら麦わらも纏めてさっさとぶっ潰しておしまひしよ!!」

ネロの指示と同時にカゲ達が動き出しウソツプは解放されると同時慌ててその場を脱出しようとするも

「人質を確保！君、危ないから離れていなさい!!」

「え？なつ!!?うおおおおあ!!」

大柄な海兵に身柄を確保されると同時、包囲網の外側に放り投げられる。

「よくわかんねえけど…しっしっし、ウソツプがいねえって事はあいつぶつ飛ばしてもいいんだよな？ゴムゴムのお…ピストぶつ!!」

「くっ、流石にゴム人間とあつて拳砲では効果が薄いか!!」

「いきなり殴りやがつて！何すんだお前!!」

「何するも何もあるか！打撃が効かずとも戦いようはいくらでもある!!」

それと共にルフィの腕を取り地面に引き倒すとそのまま掴んだ腕を捻りあげる

「ちっ、これも駄目か!？」

「よーし、かかつてくるんなら海兵も敵だな！ゴムゴムの銃弾（ブレッツ

ト) ”」

「つつ！その程度で我々の肉体を貫けると思うな!!」

そしてバラクーダ号の甲板ではそこかしこで衝突するネロとカゲ達に海兵、そしてモンキー・D・ルフィ、更には

「もののついでだ！貴様もここで仕留めてくれる!!」

「ひいつ!?やめろおっ!」

カゲが放つ鋼鉄のガントレットによる貫手がウソップに襲い掛かるもその攻撃はウソップの掌によって受け止められ

「何っ!?威力だけならネロさんの指銃にちよつと劣るくらいだぞ?」

「くっ…つてこりゃ衝撃貝（インパクト・ダイアル）、おしこれなら!!」

それと共に今度は逆の手で貫手を繰り出すも再び掌で止められる攻撃、よく見ればウソップは手に貝殻、衝撃を吸収するインパクトダイアルを持っており繰り出される攻撃をひたすらインパクトダイアルで防ぐ立ち回りを続け更には

「なっ!?こつちにも海兵が来てやがったか!!」

「つてかどういいう状況だよ！ウソップが戦ってるって事は人質はもう気にしなくていいのか!」

「くっ！麦わらの仲間か、船内には海兵隊が突入した筈だが入れ違いになっただか!」

「船室から!?ネロさん！やばいですよ!!人質が奪還されてるかも知れないです!」

「五月蠅いっしょ！泣き言言ってる暇あったらさっさと全員ぶちのめすっしょ！相手は木端海賊にたかだか二式使い、何のためにお前らを連れて来たと思ってるっしょ!!」

船室の扉を開け放ち出てきた二人の男、ゾロとサンジの出現に警戒する海兵とネロ達

「ゾロ！サンジ！ウソップなら助けたから後はこいつらぶつ飛ばすだけだぞ!!」

そう言っって笑うルフィにゾロとサンジは

「へっ、わかりやすくもいいじゃねえか…」

「つたく、だからつてこんな滅茶苦茶に…まあいいさ、さっさと三下共

をぶちのめしてこんなところはオサラバだ」  
と乱戦となった甲板上での戦いに突入するのだった。



脱出せよ！要塞ナバロンの包囲網！！

「吹っ飛ばー！マキシマ・ヘビー…コング！！」

それと共にメリー号へと乗り込んだ海兵隊の身体が大きく吹き飛ばされそのまま海へと落ちる。

「ぐっ!?やるな…我らの鉄塊でも流石にその衝撃は殺せんか、その体格も見た目だけでは無いようだ」

隊長格と思しき海兵はそれと共に拳を繰り出すも

「ランブル！毛皮強化（ガードポイント）！！」

鋼鉄の拳は衝撃を殺され柔らかくに受け止められる。

「な!?…そうか貴様ゾオン系か、ゾオンは3形態に変化可能…にしてはえらく珍妙な動物みたいだが」

「誰が珍妙だ！まあいい、これでお前も吹き飛ばー！腕強化（アームポイント）！からの…刻蹄・桜（こくてい・ロゼオ）！！」

まるで毛玉のような姿から一転、腕の筋肉が盛り上がった姿に転じたチョッパーはそのまま頑丈な蹄をもつてして相手の腹部を撃ち抜くも流石に相手も一筋縄ではいかず

「っ…凄まじい威力だな…だがそれでも我らの鉄塊を打ち破る程ではない!!」

海へ吹き飛ばされながらもそう言う海兵には目もくれずメリー号へ乗り込んだ他の海兵にもその剛腕を振るい次々に海へと吹き飛ばしていく。

しかし

「悪魔の実の可能性を考えたのだろうか…先程言っただろう、これは我らの鍛え上げた肉体が為せる技、海に叩き落としたぐらいで我ら第8海兵隊、熱風隊を破れると思っただか!!」

隊長格が海面から飛び出し船縁に降り立つと同時に、他の面々も海中から飛び出し隊長に習い拳を構える。

「流石にこれで決着つてわけにはいかないか…後は頼んだぞナミ!!」

「よくやったわチョッパー!!さて海兵さん達?しばらく眠っててよ、サンダーボルト…テンポ!!」

その言葉に隊長格がそちらを見ると同時

「何をぐあああつ!？」

いつの間にか頭上に広く展開された黒雲から降り注ぐ雷に打たれ海兵達は再び海へ

「な、なんだ!？」

「雷!?!ぎやああああ!!」

「さっきまで晴れて…ぎゃん!!」

そしてメリー号含めバラクーダ号の上にも広がっていた黒雲からも雷が降り注ぎ

「おし!ナミがやったのか!!って危な!？」

「おйлファイ!今のうちにさっさとズラかるぞ!!」

「え、まだアイツぶっ飛ばしてねーぞ!」

「んナミさーん!!今行くよ!!」

バラクーダ号の甲板で戦っていた一味の面々も降ってくる雷を他所にメリー号へと駆け抜ける。

「おいテメエら!!奴らを逃すんじやねえっしょ!!」

「し、しかしネロさんこの雷ではぎっ!」

そう反論しかけたカゲが雷に打たれるのをみてネロは

「ちいつ、しょうがねえさっさと海兵共を排除しやがれ!!とりあえず海に放り捨てて艦内を再度制圧!人質は奪還されたが船の動かし方は見てたからわかるだろうし奴らを追いかけるっしょ!!」

流星に世界政府の特殊部隊とあってネロのその指示と共にカゲ達は二人組を作ると断続的に降り注ぐ雷からなんとか逃げつつも混乱する海兵達の隙を突いて撃破、次々に海へ放り込んでバラクーダ号を再度制圧。

幸いにも一番邪魔になりそうな剣客隊は人質達と共に姿を見受けられず恐らくは人質救出に合わせて脱出したのだろうと察しながらも木炭エンジンを再始動徐々に離れていく麦わら一味の船を追いかける。

小型故に小回りの効くゴーイングメリー号はすぐさま舵をきり破壊された北大水門へ、そしてバラクーダ号もその巨体を軋ませながら

それに続き

「まさか熱風隊が排除されるとは…直ぐに戦車隊を出せ！包囲させていたんだ、奴らをあのまま逃してなるものか!!」

当然逃がしてなるものか、とドレイク中佐のその言葉に待機していた通信兵は慌て電伝虫に向かって指示を出せば待機していた第3世代機であるヴァルキュリア型戦車十数台が一齐に動き出し先を行くバラクーダ号に対して砲撃を仕掛けた。

しかし

『着弾…依然として船速変わらず!』

『駄目です!バラクーダの装甲が抜けません!!』

各戦車からの報告にドレイクは立ち上がり受話器を掴むと

「馬鹿正直に船腹を狙ってもその砲塔でバラクーダ号の装甲を抜けるわけないだろう!!奴らは今木炭エンジンに加えて機帆を広げる事によって速力を確保している、なら何処を狙うかわかるだろうが!!」

『り、了解!!』

その言葉に居並んだヴァルキュリア型戦車達の砲塔がズズズ、と動き出し斜角をとれば一齐に放たれる砲撃。

しかし機帆へと向かった空中で砲弾は連続して爆発

「何が起きたあっ!!」

『すみません!迎撃されました!!第二射装填します!』

「見ればわかる!何に迎撃された!!」

そう言いながらドレイク中佐が双眼鏡を向ければ目に映るのは甲板にて数名の影が大型のバズーカーを構えており、再び放たれた戦車隊からの砲撃に対し発射、まるで獲物を狙う鷹の如く砲弾へと向かえば次々に食い破り最後には集団から逸れていた戦車に着弾、爆発を引き起こした。

「ひゃっはあつれ見たか海軍!!これが”イーグル・クロウ”の威力つしよ!!総員今のうちにさっさと脱出するつしよ!こんだけデカイ手土産がありやあのケチ臭い長官も認めざるを得ないつしよ!!」

そんな事を言われているとは露知らず

「ええい軍艦を出せ！幸いにもバラクーダ号は船足が遅い！戦車隊は速度を上げ先に向かった小型帆船を追え！！出航準備にはどれくらい必要だ！」

「はっ！基地全体が非常体制にありますので30分もあれば可能かと！！」

「遅い！15分でやれる筈だ！！封鎖の意味は既に無い、準備出来た船から南大水門へ向かわせろ！」「り、了解っ！！」

「それから海に落ちた海兵達を引き上げる！それから医療班を手配、中央塔司令室にもバラクーダ号の監視を行うように通達！」

「…見ている麦わらめ、我らナバロンからそう簡単に逃げられると思うなよ？」

矢継ぎ早に指示を出して両の拳を打ちつけたドレイク中佐にダニエル少尉は答えると慌てて指示を実行しに駆け出すのだった。

司令室での舌戦！要塞司令カミソリジヨナサン！！

「ふむ…こうなつてはやむを得ないか」

中央塔から眼下に広がる景色を見下ろすナバロン要塞司令であるジヨナサン、彼の目には丁度北大水門を通り抜ける小型帆船と追走する十数台の戦車隊、そしてその後方に最新鋭艦<sup>艦</sup> という事になっている。バラクーダ号がおり更にその後ろには出航準備をしている軍艦。

『後から文句を言われても受け付けん、本当に構わないのだな？』  
「ふつ、あんなものはあくまで餌だよアイザック少将。

少し考えればわかるだろう？確かに防御力は凄まじいものの大型艦よりも遅い船足、このグランドラインでやっていくには力不足だよ」

『の割にはナバロン要塞砲に加え大水門を破壊、その攻撃力は凄まじいものだと思うが？』

「あれも新型の特殊弾頭あつてこそそのものだよ、しかも加工技術の関係でここ以外での生産は恐らくは不可能」

『そうなれば必然、普通の大砲を乗せるしか無い…確かにそう考えれば頑丈なだけでしか無いな』

「まあだからと言つてくれてやるわけでは無いがね、ああドレイクくんにも連絡をする様に、中將がいつも言つてるように報連相は大事だからね？」

『わかつたこちらから連絡しておこう…ではこれより海軍工廠特務隊は攻撃準備に入る、吉報を待つ事だな』

「噂の戦鳥騎の活躍を楽しみにしているよ、ではまた後程アイザックくん」

『作戦決行も近いというのにあまり大っぴらに見せたいものではないのだがな』

そう言つて切られる電伝虫を尻目にジヨナサンは考える。

当初は少し弛んでいる感が見える独立遊撃隊に発破をかける為にあえて麦わら一味の侵入に対して要塞内で仕舞いにしようとしたが世界政府がこのような手を使つてきた以上そうも言つてられまい。

バラクーダ号を奪ったのは麦わらの一味という事になってるらしいが恐らくは世界政府かブルーマリナーの手の者だろう、元々ここで新造艦を作っているというのはガルガンチュアのカバーとして広く流していた事もあり周知の事実、恐らくはコーギーやシェパードか若しくはその上の指示で動いたのだろうと察せられる。

「全く：世界政府は何を考えているのやら、ご自慢の諜報機関も蜂1号のダミーを掴まされているようだし味方同士で足を引っ張っても喜ぶのは海賊だけだと思わないのかね」

ジョナサンはそう考えて溜息を吐きながらも電伝虫の受話器をとると再び何処かしらに連絡を取ろうとしたタイミングで

「やあやあジョナサン要塞司令殿、少しいいかね？」

止めようとする海兵を無視して入ってきたのは二人組の男

「これはこれはシェパード監査官殿にコーギー殿、総司令は見つかりましたかな？」

海軍本部査察官であるシェパードと世界政府役人のコーギーが横柄な態度で顔に笑みを浮かべながら司令室へと入ってきた。

「いやいや残念ながら見つからないようでね、まるで我々に会いたくないかのようじゃないか、まるで何か隠しているかのよう」

「それはそうと色々話を聞かせてもらおう必要があると判断したのだが？」

「ほお、一体何の話ですかなあ？」

「決まっている！アレの事だ!!」

あくまで飄々としたジョナサンにシェパードはがイライラしたように眼下に映る追走劇を指差せばコーギーが追隨するように

「海賊に侵入された上に独立遊撃隊にて建造された最新鋭艦をまんまと奪われこの責任は要塞司令として一体どうとられるおつもりですかなあ？」

と軽く笑いながら聞くもジョナサンは

「おや、まだ奪われたと決まったわけでは無いと思いますがねえ：工廠特務隊も動きましたしこの騒ぎもそろそろカタがつくと思いませんか？」

とどこ吹く風とばかりの返答にコーギーは口を開こうとするが

「そんな事はどうでもよろしい！それよりあの船だ、新型艦の建造は聞いていたがあのような強力な船だとは聞いていない！どういう事か説明してもらおう!!」

それよりも早くシエパードが机を叩きながらそう怒鳴る。

「おや、どういう船を作るかは総司令官からセンゴク元帥に上奏されている筈ですが…もしや聞いてないの?」

「ぐ…そんな事はどうでもよろしい！兎に角船を取り返した暁にはあの船は色々と調べる為にマリノフォードに曳航させて頂く、勿論異論は認めんぞ!!」

シエパードのその言葉にジョナサンは十中八九なんのかんの理由をつけてあの船を手に入れるつもりなのだろうと考えるも

「おお、それは無理な話ですな」

とシエパードの考えを否定する。

「何だと貴様！海軍本部監査官であるこのワタシに逆らう気か!!」

「いやはや落ち着いて頂きたいシエパード監査官殿、船が無事に残ればシエパード殿の言うとおりにするのもやぶさかでは無いですが…先程言いませんでしたかねえ?工場特務隊が動いたと」

「工場特務隊がどうした、確かに上に来ているらしいが…」

「工場特務が…まさか戦鳥騎か!!」

ピンと来なかったシエパードと違い世界政府の役人であるコーギーは”色々と”知っているのでピンときたのだろう、窓を開けてバツと上空を見上げる。

そこにはコーギーの思った通り、5つほどの影が破壊された北大水門へと向かっていく姿だった。

出撃！青空を舞う戦鳥騎！！

「シャウツ！要塞さえ出れりやこつちのもんっしょ！！あの戦車さえこの船の装甲を抜けねえみたいだしな！！」

「ネロさん！この後はどうします!?」

「去り際の土産に一発ぶち込んでやるっしょ!!」

北大水門を抜けたバラクーダ号、その上でネロは高笑いしつつカゲにそう指示を出す。その耳が風切り音を捉えた。

「うん？何事っしょ」

ネロがその方向に振り返ると同時に連続して鳴り響く銃声。

「くっ、敵襲！総員構えろ!!」

「挨拶代わりにガトリングとはやってくれるっしょ!!しかし戦鳥騎まで持ち出して来るとは…」

幸いにもかたや鉄塊を会得しかたや特殊アーマーを着込んでいるとあってネロ達にとつてたかだか銃弾でありダメージは無かつたものの船の上を横切る影を見つつネロがそう叫ぶ。

そこにいたのは両翼にガトリングを装着、両足は樽をしっかりと掴みそして所々に装甲を施された巨大な鳥が五羽、そしてその背にはそれぞれ鞍と鐙が取り付けられそこには軽装ではあるが特殊な装備をした海兵が騎乗していた。

突然ではあるが世界政府の下部組織に”法番隊”という部隊が存在する。

普段はエニエスロビーにて警備等の任務に就いている彼等は正式名称を”法の番犬部隊”と称され大型犬に跨る武装した兵士の部隊であり、四足で自在に走る獣の脚力と両腕に鋭い鉤爪を伸ばし人間の器用さを併せ持ったまさに”人獣一体”の恐るべき集団だ。

そしてそれをヒントに”この世界には大きな鳥がいる、ならば人鳥一体の部隊があれば革新的では無いか?”とカフウの背に乗ったコツトンを見て思いついたクリークが上奏、数回の話し合いを経て有効だろうと判断されたその計画、大型鳥類を飼い慣らし武装する”戦鳥騎計画”が実行に移されその成果が今まさに動き出したのであった。



「くっ、やはりガトリングでは効かんか！総員火炎擲弾用意!!」

その言葉と共に五羽の戦鳥騎は一矢乱れぬ動きで腰に取り付けられた筒を手に取りると一切に投げつけられれば筒はバラクーダ号の甲板にぶつかると恐らく陶器で出来ていたのだろう、液体が広がると同時に一気に燃え上がった。

「やってくれるじゃないっしょ戦鳥騎共!!テメエら火を消せっ!鉄で出来てんのは装甲と骨組みだけだ!!奴らはおれが仕留めるっしょ!!」  
「しかしネロさん!相手は空を…」

「舐めんなっしょ!渡月歩(わたりげっぼう)からの暴風嵐脚(ぼうふうらんきやく)!!」

カゲ達に怒鳴ると同時に空に飛び立つネロ、更に月歩で対空したまま連続して脚を振り抜けばそこから飛び出すのはまるで暴風のような斬撃の嵐。

しかし相手もさるもの…戦っているネロは知る由も無いが今戦闘中の戦鳥騎はサウスブルーから持ち込まれた種である”超スズメ”、組織内では一式小型単座戦鳥騎、”飛鳥”と呼ばれ装甲が少ない代わりにある程度のスピードを出せて小回りも効く、故に五羽全てが次から次へと襲い掛かる斬撃を軽やかに交わし、お返しとばかりにガトリングが発射される。

「しやらくせえっしょ!嵐脚・線弧(せんこ)!!」

大きく半円を描いてネロが足を振ればそれと共に繰り出される弧を描いて走る斬撃を5騎は上空に飛び上がる事によって回避

「やむを得ん、当初の司令通り目標を破壊する!総員爆撃投下!!」

飛燕隊隊長のその言葉と共に超スズメ達の脚に掴まれた樽が真っ直ぐバラクーダ号へと投下され…そして連続して起こる大爆発、都合5回の爆発でどこかに致命的なダメージを受けたのだろう船足は遅いながらも悠然と進んでいたバラクーダ号はその歩みを止めゆつくりと傾き始めれば流石にネロとその部下達もここからの立て直しは不可能だと判断したのだろう。

「ちっ、やってくれるっしょ、まさか自沈させるとは…流石に仕方ねえおいテメエら撤退っしょ!!」

「ネロさん！撤退ってどこに!？」

「そんな事は自分で考えるっしょ!!」

ネロは月歩で素早くその場を離れカゲ達は慌てて海中に潜り散りに分かれてその場を離れるのだった。

「よし、恐らく先行する小型帆船と合流する気だろう。あちらには戦車隊が向かっている、連携して叩くぞ!」

それと共に五羽の飛燕は一矢乱れぬ動きで方向転換、そのままゴーイングメリー号の方へと向かうのだった。

一方バラクーダ号撃沈の報告を受けたナバロン要塞司令室では

「サンタマリアより連絡、バラクーダの撃沈を確認したとの事です」

「うむ、戦鳥騎を出してくれたアイザック少将には後で礼を言わねばな」

通信兵の言葉に頷くジョナサンだったが流石に聞き捨てならなかったのか

「どういう事だジョナサン中将！あの船を沈めただど!?!何を考えている!!」

シエパードが凄まじい剣幕でジョナサンに詰め寄るも

「何を言っているのですかな？奪取された以上撃沈もやむを得ないでしょう、初手で要塞砲を壊された以上要塞内から出られては撃沈した方が安全で手っ取り早いと思いますけどねえ」

「だからと言ってあのような…あのような強力な兵器をみすみす沈めるとは何を考えている！あの船の建造費用もタダではないのだぞ!!」

「みすみす敵の手に渡してあの砲口が市民に向けられた時監査官殿は責任をとれるのですかな？」

それにあの船の建造費に関してですがほぼ総司令の私費で賄われているのですが…ひよつとしてご存知ない?」

「っ屁理屈ばかり述べおって…もういい！兎に角現物が押収出来なかった以上あの船の設計図や資料はこちらに渡してもらおうぞ！わかったな!!」

「ああ、コピーでもいいからこちらにもお願いしますよ。勿論構わな

いですよねシエパード殿？」

話を聞いて考えていたコーギーはここは情報だけでも取っておくに越した事は無いと暗に手勢を貸した事を含めて言えば

「構わん、では我々はこれにて失礼する!! 果たして今回の事件の責任は誰が取ることになるか…せいぜい短い間だろうが要塞司令の地位をゆつくり過ごす事だな!!」

コーギーは頷き声高にジョナサンを怒鳴るとやれやれ、と首をすくめるジョナサンを他所に二人して扉から出ていくのだった。

恐るべき猛者、海軍戦鳥騎部隊！

一方、先行してナバロン要塞を脱出した麦わらの一味だったが「くそっ！まだ後ろから何か追ってきてやがるぞ！…小型の船か？」

ゾロのその声にウソップが振り向けばそこは潜入している時に説明された兵器が十数台程接近していた。

「げえ!?戦車じゃねえか！先手必勝、必殺・火薬星!!」

それと共にウソップの攻撃は狙い変わらず砲塔に向かい爆発

「…おい、効いてねえじゃねえか!!」

しかし戦車隊は爆煙を悠々と抜け出し先頭車体が至近へ、その連装砲塔がメリー号へと照準を向けた所で

「三十六煩惱砲っ!!」

「ゴムゴムの攻城砲!!」

「ムートンショット!!」

ゾロによる飛ぶ斬撃、ルフィによる威力を溜めた両手拳、サンジによる高威力の後ろ蹴りが戦車に向かい砲塔を真つ二つに、車体をひしゃげさせ、パドルを破壊され沈黙

「なんだ、見掛け倒しか？」

「なんだ、邪魔口のやつより殴りやすいじゃん」

「やつば足さえ壊しちゃえば動かせねえみたいだな」

いかに銃弾や大砲くらいなら弾き返す装甲も水陸両用の為第二世代に比べて装甲が薄いヴァルキュリア型では流石に弾く事も出来ず嘘のようにあっさり撃破されたのだった。

当然戦車隊もただ見てるだけでなく先頭の一台が沈黙したのを確認した後機銃を放ちながら後退、メリー号を半円状に包囲したまま遠距離からの砲撃で仕留める方向にシフト、迂闊に近づかないとあつては攻撃手段は限られる為ウソップは慌てて船尾の大砲へ、ルフィ達三人は飛んでくる砲弾をゴムゴムの風船や刀、蹴りで弾き返しながらかんとかメリー号を守る。

「おいナミー…これじゃラチがあかねえぞ!!」

「ちよつと待って！一気に離脱しようにもまだロビンが戻ってきてな

いのよ!」

「みんなあ! 要塞の方から何か飛んで来てるぞ!!」

刀で砲弾を弾き返しながら怒鳴るゾロにナミが返し、更にはチョツパーの報告にナミがそちらを見ればそこには徐々に近づいてくる黒い影

「また新手!? ただでさえ手一杯なのに: ってロビン!」

「おお! 何だあれ!? 面白そうなのつけてるな!!」

要塞から飛んで来た黒い影: 小型のハングライダーを背中にロビンが微笑みながら軽く手を振っている姿を見てナミは安心すると目を輝かせるルフイに

「よし! とりあえず男共は戦車の無力化を急いで!! この空模様: 恐らく風が来るわ! ロビンが戻り次第一気に逃げるわよ!!」

と叫びながら前方の雲の動きを見つつそう指示を出す。

しかし物事はそうそう簡単には動かない: 突如として響く大爆発の音に一味の面々がそちらを見ればあれだけの堅牢さを誇っていた新型の海軍艦“バラクーダ号”が炎上しつつゆっくりと傾いていく姿だった。

「爆発!? 何がおこったの!!」

「急に爆発したぞ!!」

ナミとチョツパーはその光景を見てそう叫ぶが

「航海士さん! 船医さん! 直ぐに戦鳥騎が来るわ、急いで離れましょう!!」

小型のハングライダーを折り畳みながら言うロビンの言葉に疑問を浮かべる。

「センチョウキ?」

「さっきのネツプウタイとかいう奴みたいなのか?」

「チュチュチューン!!」

「目標! 前方小型海賊船、撃てえっ!!」

「: とか言ってる間に来たわね」

ロビンのその言葉と共に響く鳴き声と銃声

「何だありや!? 鳥が翼にガトリングつけてやがる!」

「くっそ、タダでさえ戦車とかいうのの相手に忙しいってのに！」  
「うおおおおゴムゴムのおピストルっ!!」

当然追っ手とあれば座して見てる訳もなくルファイが向かってくる相手に拳を打ち込むも

「っ報告の通り直線的な攻撃だな！」

軽やかな動きであっさりと躲されお返しとばかりにガトリングでの連射が叩き込まれる。

「そんな効かねえ！お返しだ、ゴムゴムのHEATガトリングっ!!」

「っ、ぐああああっ!!」

「ビショップ曹長!?くっ各騎上昇、爆撃用意!!」

「しかしヴィルケ隊長!バラクーダへの攻撃で投下用の爆弾は全部使用しており…」

「ならば火炎擲弾用意!相手は木造船、バラクーダよりはやり易いだろう!!」

戦鳥騎部隊”飛鳥隊”隊長である指示により上昇した各騎、それぞれから放たれる円筒状の物体がメリー号に当たると同時に割れると炎上

「げっ!?おいやベーぞナミィ!」

「やってくれるなクソ鳥共!タリアトリーチェ!!」

「水ー!メリー号が燃えちまう、急いで消さねえと!!」

「なんて面倒な事を!これでなんとか、レイニーテンポ!!」

ナミの機転で炎の勢いは減じたものの消えない炎に流石のロビンも

「悪く思わないでちょうだいね、トレスフルール・クラッチ!!」

「ぢゅぢゅっ!!」

「なっ!?この能力、ニコ・ロビンか!!」

「大丈夫か中尉!流石に相性が悪すぎるな…総員撤退するぞ!」

「しかしヴィルケ中佐!」

「落ち着け中尉、目標であるバラクーダは撃沈したし麦わら達の船にもダメージは与えた。ただでさえダメージを受けている騎がいるのだ、ならば今後の攻勢作戦の為にこれ以上無駄な損耗は避けるべきだ

ろう」

「…了解しました、全騎帰投！後はナバロンの戦車隊に任せるぞ!!」

それと共に去っていく空飛ぶ影にナミは安堵しつつ

「…とは言えまだ戦車も残ってるのよね、ウソツップ！ロビン！雨を降らせてるけど流石においつかないから消火をお願い！チョッパは舵を！ルフィ！ゾロ！サンジくん！何とかあいつらを纏めて遠ざけて！その隙に一気に離脱するわよ!!」

何とか海軍の追手を振り切るべく手早く指示を出していくのであった。

## 最高権力 ドンクリーク

白猫のスモーカー率いる専任の追撃班や剣客隊、更にはナバロンからの追手など複数の追撃勢力をからくも退け海軍独立遊撃隊本部、通称”ナバロン大要塞”からの脱出を果たした一味。

空島で手に入れた黄金を奪われていたという一幕はあったもののロビンの機転で無事にそれも取り返し一行は次なる島、ロングリングロングランドへと到着、しかし唯一の島民であるトンジツトとの交流を経て一味の元に現れたのは”海賊潰し”の異名をとるフォクシー海賊団、そして更には

「なあっ!?なんでお前がここにいるんだ!わる執事!!」

「ちつ、随分と出世したのは知っていたが、まさかここで会うとはな」  
「それに斧のやつも!」

「喚くな騒がしい…おれが何処に居ようがテメエには関係ないだろう」

その側には、かつて東の海であいまみえた強敵、百計のクロと斧手のモーガンの姿がそこにはあったのだった。

一方その頃レッドラインの上に位置するマリージョア、絢爛たるパングア城にある”権力の間”、そこには五人の男達…五老星の姿があった。

黒のスーツに黒いネクタイ、まるで喪服のような服を着た四人と白衣着流しに白鞘の刀を持った一人…誰も彼も歳を経た男達だが背筋はシャンと伸び、その眼光は鋭く全く老いを感じさせない姿で話し合いを行うこの者達こそ天竜人こと世界貴族の最高位にして、世界政府の最高権力者である5人の老人達。

「…まったく鈍熊め、なんと言うものを世に出してくれたのだ」

「これが世に出ようものなら大騒ぎになりかねんぞ?」

「いや、それは早計だろう」

「然り、いくら装甲が厚かろうが防御力で勝る船なぞ他にもある…宝樹アダムがいい例だ」



「装甲を厚くした所で船足が落ちるだけ、前半ならまだしも新世界の海賊相手には力不足もいとこだろう」

「ただの的とでも？だがスペインダムは例の船で艦隊を作り世界政府の私兵隊を作るべきだと主張しているぞ？」

五人の間にはコーギーやスパンダムが手に入れたバラクーダ号についての詳細な設計図やナバロン要塞、独立遊撃隊の情報やコーギーやシェパードの所見、それに付随する報告書：更には各サイファーポールからの報告書や四皇の動き、海軍からの報告書等が山と並べられていた。

「…何を考えているのだあの男は、何故海軍があるのにわざわざ別の軍を持つ必要がある？」

「全くだ、何のためのサイファーポールだと思っている…大方強力な戦力となり得る船を見て己の権力を高めようと言う算段だろう」

「建造するにしても少数で留めるべきだろう、幸いにもレッドポート周辺やインペルダウン周辺と防御艦でも活躍出来る場所には事欠かぬからな」

「そう言えばジェルマ王国からの戦力に関してだがアレは問題ないか？」

「ああ、黒ひげの手の者が襲撃をしかけて来たが活躍ぶりに問題は無いようだ。海軍と連携して見事に追い返したらしい…ジャッジめ、随分とあの口約束に入れ込んでいるらしい」

「仕方あるまい、あのマリージョアの襲撃によって随分と数が減ったのだ…気は進まぬがそうも言つてられん、それにこちらの都合にいいのも事実、使えるうちは有効に活用せねばならん」

「しかし何を考えているのだ黒ひげとやらは…しかし奴が覆面髑髏かどうか、それが問題だな」

「ふむ、そこで捕まえてしまえば早い話だったのだが…黒ひげと言えば白ひげ海賊団に潜入していたCP9が追っているとのことだったな、どうなっている？」

「幸いにも四海や新世界では無く前半にいる事はわかっている。となればいくら周到と言えど居場所を探るのはそう難しい話でも無いだ

ろう」

「何やら不穏な動きもあると聞いたが？」

「そうは言っても他の海賊との接触があつたくらいだ。随分と色々な海賊に声をかけているらしいが恐らく戦力の拡充と言つた所ではないか？」

「マーシャル・D・ティーチ：Dの名を持つ者、か」

「そう言えば例の大型作戦”815”とやらだが海軍の動きは？」

「まるで読めん、報告では恐らく白ひげを標的にしているのでは無いかとの事だが複数の艦隊が四皇それぞれをかき回っている」

「海賊へ情報が流れるのを嫌つてか我々への報告も機密扱い、よほど知られたく無いと見える」

「それだけでは無い、意図的なものだろうがビッグ・マムの海賊団は随分と戦力を削られてはほぼ万国近辺に封じ込められているらしい」

「厄介と言えばカイドウもだ、ワノ国近海に海軍艦隊が陣取っている為迂闊に武器の受け取りが出来ん：センゴクめ、一体何を企んでいる？」

「海軍は工廠があるから問題ないだろうが：それよりも北の海だ、このままでは各国への武器の供与が難しい」

「：武器の供与が滞れば我々が支援している北の海の国々が破れる可能性もある、そうなつては統一も不可能になるぞ？」

「何にせよ海軍の狙いをハッキリさせるべきだ、場合によってはこちらで強権を振るう事も考えねばならんだろう」

「：あまり気軽に振るうものでは無いがやむを得まい。それから早急な黒ひげことティーチの捕縛もだな、奴はマリージョア襲撃の主犯とされていながらも白ひげ海賊団からの出奔や七武海への自薦などどうも不可解な点が多い」

「複数の海賊に声をかけていると言つたな、戦力拡充以外に何か狙いがあるのかも？」

「あくまで勘だが：なにやら悪い予感がする、海軍の件も含めてな」

「：どうやらその勘とやらもあながちハズレでは無いかもしれん」

と眼前に広がった書類に付随した写真を指差す長髪の男、そしてそ

ここには覆面髑髏の最有力候補とされる黒ひげこと”マーシャル・D・ティーチ”、そしてもう一人

「…とうに死んだと思っていたが」

「海王類に喰われたと聞いたが生きていたか…既に80近いだろうに、”D”に接触して何を考えている？」

「奴が動く以上座しているわけにはいかんだろう」

”最悪の戦争仕掛け人”…全く厄介な時に厄介な男が黒ひげに関わったものだな、黒ひげに割いているサイファーポールを増員させるべきだな」

「四皇はどうする？」

「赤髪は暴れさせこそすれ自分から世界をどうこうするような男ではあるまい」

「白ひげもだ。例の黒ひげの件で殺気だっているものの誰かれ噛み付くほど凶暴では無いだろう」

こうして今日も聖地マリージョアのパンゲア城内”権力の間”では世界情勢に関する議論が行われサイファーポールや海軍に意思決定が下されるのであった。

## 手配更新 ドンクリーム

マリソフオード海軍本部元帥執務室。

そこには元帥であるセンゴク、そして海軍手配班総括を務めるブランニユールの姿があった。

「ふむ…どうやらナバロンは随分とやられたようだな」

海軍独立遊撃隊本部”ナバロン要塞”の激動は直ぐに海軍のトップであるセンゴクの元に情報が届けられた。

「ええ報告が来た時はわたしも驚きました、海軍最強の部隊と名高きかの独立遊撃隊がこうまで被害を受けるとは…」

「どれくらいかかりそうだと云っている？」

「そうですね…ジョンナサン中将によれば一月ほど、まあ試作最新鋭艦のバラクーダの撃沈処分は仕方ないとしても北大水門にナバロン要塞砲、更には追手を減らす為か戦車格納庫の破壊に複数の艦船が舵を壊されているとあつてはそれぐらいはかかるでしょう」

その被害報告の前にセンゴクは頭を抱えるも起こってしまった事は仕方ない、と気持ちを切り替えどう対応するかを考える。

「ふむ…となればしばらくナバロン周辺海域が手薄になりかねんな、どこか戦力を回せそうな艦隊はあるか？」

「そうですね、世界政府の意向により新型艦…2番艦のバスと3番艦のボニータがそれぞれレッドポートとインペルダウンの駐留艦隊に合流予定との事です。そこでこちらから抜いては？」

センゴクの言葉にブランニユールは政府からの情報を思い出しそう伝えるが

「レッドポートはまだしもインペルダウンか…気は進まんが仕方あるまい、四皇戦力の漸減もせねばならぬし迂闊に他の支部から戦力を引き抜く事は出来んからな」

センゴクは難しい顔をして懸念を示したものの大型作戦の件もありやむを得ないかと考え直す。

「しかしこれでモンキー・D・ルフィも一億の壁を越える事になりましたがどうされますか？」

”海軍もしくは世界政府に対して重大な損害を出している”か、これだけの事を起こされた以上こちらでも本腰を入れねばならんだろう”  
通称”一億の壁”

手配班設立にあたり厳格に基準化されたそれは

”本部佐官クラスを退ける実力”、”非合法海賊である”、”過去に一般市民に対し損害を与えている”、”海軍若しくは政府に対して重大な損害を出している”の四つがあつて初めて億越えクラスの危険度を誇るとするものであり、これにより懸賞金と危険度、戦力の不均等を是正する為のものである。

「例の”新型艦の強奪を企んだ”という証言に疑念はありますがそれを置いても戦力はかなりなもの：一味も戦車隊、戦鳥騎、ナバロン第8海兵隊に海軍剣客隊を退ける程の実力、もはやルーキーというレベルを大きく逸脱しています」

今回”モンキー・D・ルフィ”に関しては海軍施設であるナバロン要塞でかなりの損害を出した為に”海軍若しくは政府に対して重大な損害を出している”という項目に当てはまり今までの罪状を含め四つを満たした為に一億の壁を超えたと判断されたのだった。

なお”モンキー・D・ルフィ”に対する”過去に一般市民に対し損害を与えている”という項目に関しては”海賊王の処刑台に対しての破壊行為によるローグタウンの収益に対する損失」とされている。「まったく、どいつもこいつも今回は随分と好き勝手やってくれる」  
”最悪の世代”ですか：まあ”モンキー・D・ルフィ”がそこに数えられても一向に不思議ではないですね」

センゴクの言葉にブランニューは最近呼ばれ出した”最悪の世代”と呼ばれ、高額で手配された面々を思い出す。

”悪童”に”大喰らい”、”魔術師”に”海鳴り”：随分とバラエティ豊かな事だ」

「違法海賊だけでなく今回は公認海賊も粒揃いですからね、”フェニックス海賊団”や”トラファルガー海賊団”なんかはメキメキと力をつけています」

「上は相変わらず横槍を？」

「ええ…トラファルガー・ローに懸賞金をかけるべく圧力をかけてきています、何らかの罪を被せるべく偽情報などが多いですが幸いにも厳格に審査していますので今の所は問題ありません」

「うむ…世界政府は何の為にクリークが制度を厳格化したと思っ  
ているのだ。」

「いや、それ程までに政府はオペオペの実を危険視していると捉えるべきか？」

「ともあれ先ずは麦わらです、流石に今回の件は厳格に処理すべきかと…少なくとも1億はかけても問題は無いのでは？今までの性格から鑑みるにこの先も問題を起こすのは確定事項でしょう」

ブランニューのその言葉にセンゴクは腕を組んで考え込むと

「ふむ…アラバスタ以降目立った動きは無かったものの今回の件に関してはその戦力を含めて危険視せざるを得んだろう、モンキー・D・ルフィに関しては倍近くに引き上げろ」

「倍ですか!?わかりました、ロロノアはどうしますか？」

「そうだな、剣客隊の報告ではかなり技量を高めているとの事だったが…あの剣客隊を相手に凌げるとなると奴も懸賞金を上げるべきだろう」

「了解しました、ではこの二人に関しては持ち帰り引き続き協議します」

「頼んだぞ、ああそれからニコ・ロビンに関してだがその一味の中にいる事は確定なのだな？」

「はっ、スモーカー准将からの報告もあり間違いないかと」

「…疑念はあるが”古代文字が読めるかもしれない”という政府の懸念がある以上何もせんわけにもいかんか」

「彼女に関しても早急に捕縛するように上から指示が出ていますからね」

「とりあえず彼女に関しても任せ、わたしはこれからジョナサンとナバロン再編の調整に入るから用があれば声をかけてくれ」

その言葉にブランニューは自身の部署に戻ると協議を重ね数日後

モンキー・D・ルフィ 1億8000万ベリ

ロロノア・ゾロ

9000万ベリ

ニコ・ロビン

6900万ベリ

大幅に引き上げられた3人の懸賞金にある者はいい獲物だと考え、ある者はいい相手になるかもと目をつけ、またあるものは随分と調子に乗っていると考え急激に有名になった海賊に世間は好奇の目を向ける

「ワハハハハ……ここにいたかニコ・ロビン。プルトンと共にこいつの身柄も手に入れりやおれの将来も安泰だ、なんとかして確保してえとこだな……」

そして世界政府の司法機関であるエニエスロビーの一室、そこで更新された手配書を見た一人の男は笑いながらそう算段を立て始めたのだった。

## 450 話記念 もしも彼がCP9だったら？

「ブルーノよお、だから言ったじゃねえかお前の鉄塊は柔いんだって…カルシウムちゃんたらねえから負けんだよ」

その声はギアセカンド…パンプアップを応用することにより血液の流れを加速させCP9の一人であるドアドアの実の能力者であるブルーノを打ち破ったルフィの耳にやけに響いた。

そこにいたのは黒いスーツに黒いネクタイ、まるで喪服のような服装のその男の手には何やら白い液体が入ったボトル。

「お前…お前もこいつらの仲間か？」

ザワリとした重圧にルフィは真剣な目つきで、肩を大きく上下させながらも向き直り拳を構える。

「さてね…もしそうだと言ったら？」

「お前もぶっ飛ばしてロビンを返してもらおう!!」

それと共にルフィは疲労感を押し殺し拳を構えながら、真つ直ぐと目の前の男に突っ込んで行き

「はてさて…まあ給料分くらいは働くとしようかね」

男はバキバキと指を鳴らしながら麦わらのルフィを迎え撃つのだった。

時は少し遡る。

ウォーターセブンにて長年の潜入を終えてエニエス・ロビーに帰還したルッチ達は、長官であるスパンダムの前で他のCP9であるジャブラ、フクロウ、クマドリも一様に集結していた。

「長官、そう言えば先生の姿が見えませんか？」

一同が集まった所でカリファが、後一人の姿が見えない事に疑問を呈すると

「なんだ、男の心配か？」

「長官、セクハラです」

「聞いたのはお前だろうが！ …ふん、奴ならどっかで昼寝でもして



いるだろうよ！ 全く親父の頃からだか何だか知らねえが、CP9の癖に長官であるこのおれの命令を聞かないとはなんて野郎だ：あークソ！ 思い出したらムカついてきた！」

いけすかない顔を思い浮かべて吐き捨てるスパンダム

「：長官、奴を始末するならおれにやらせろ」

「ぎやはは！ 一回も勝ててねえ癖によく言うもんだな！」

更にはコキリと指を鳴らしながら言うルッチにジャブラが笑いながら言った。

「五月蠅い、野良犬風情が吠えるな：いや、弱い獣ほどよく吠えるのか？」

「ああん!? 黙って聞いてりゃ誰が野良犬だ化け猫如きが！」

それと共に人獣形態へと変化するジャブラ

「ガルルル：ほう、先ずは貴様から殺してやろうか」

ルッチも負けじとばかりに人獣形態へと変化していくが

「ちよつとおやめなさい二人とも！」

「随分とつつかかるのおジャブラの奴」

何とか周囲の宥めによりようやく落ち着く二人であったが

「全く：ルッチもいい加減先生の事諦めたらいいのに：」

カリファは昔から見てきた二人の衝突を思い出しながらそうため息をつくのだった。

ロブ・ルッチにとってその男は一言で言えば“越えるべき壁”であった。

白兵においては最強とされる肉食系ゾンの能力を持ち、桁違いの戦闘能力と任務のためには一切の情を捨て去る冷酷さを併せ持つ、まさに“殺戮兵器”とでも呼ぶべき存在であるルッチ。

そんな彼は幼少より優れた戦闘力を見せ、自分より歳上であったブルーノやジャブラを置いて一足先に養成所を出た後、僅か13歳にてCP3へと配属されとある任務で500名もの兵士を殺してのけ、その功績をもつてして最年少でCP9へと配属、そんなルッチを待つて

いたのがその男達だった。

「へえ、お前が新入りか？聞いたぞ？ 13歳で大したもんだ」

「全く…うちの子と3歳しか変わらないのに、全く末恐ろしいものだな」

二人の男、一人は細身で眼鏡をかけておりもう一人は筋骨隆々とした厳つい顔をした男。

「…貴様らは？」

「おーおー、随分と小生意気な事だな」

「この歳ならそんなものだろう、男の子なら尚更な」

自分を見下ろすその男達にルッチは本能的に舐められていると感じ、ならばとばかりに両手の人差し指を伸ばしそれぞれに突き入れる。

”指銃（しがん）”と呼ばれる技がある。

主に海軍や政府の実働機関にて扱われる実戦体術である”六式”のうちの技の一つであり、基本的には指を立て、超スピードで相手の身体を貫くという一本貫手である。

単純であるが、これが熟練の技術を持つてすれば人体すら容易く貫く凶器となり、当然ルッチもその凶器を今まさに相手に突き立てようとしたが

「おっと、随分と物騒だな」

「いい指銃だ、流石にこの歳でCP9に配属されるだけの事はある」

かたや大きな手のひらで受け止められ、かたや軽く後ろに下がる事で避けられその攻撃は不発に終わった。

「ちっ…嵐脚っ!!」

ならば、とばかりにルッチは脚を振り上げ鎌風をおこしたものの、細身の男には同じく嵐脚で相殺され、筋骨隆々とした男には簡単に腕で払われてしまった。

「いやはや13でこれは凄まじい、流石この歳で加入するだけの事はあるな」

「それよりもまずこの直ぐに手が出るのを何とかすべきだろう、長官は一体どうお考えなのやら」

「どうせあのちよーかんの事だから何も考えてないだろ」

自身の攻撃を簡単にいなされ、ならば多少本気でいこうとルッチが低く構えた所で

「誰が何も考えてないだクリーク！それにラスキー！」

「わたしは何も言っていないですよスパンダイン長官」

「これはこれはちよーかん殿、お呼びになったと聞きましたか？」

「お前の長官呼びには敬意を感じねえんだよクリーク！…まあいい今回呼んだのは他でもない、先日我らがCP9に新しく入ったロブ・ルッチについてだがしばらく教育係としてお前ら二人に任せる」

「お言葉ですが長官、確かに強さだけならそれなりのものでしょうか。血の気が多すぎます、まずはそこを矯正してからの方がいいのでは？」

「ふん、それならその性格もそっちで何とかすればいいだろう。確かお前は娘がいただろうが子供を導くのも大人の務めってやつだ」

と話し合うラスキーとスパンダイン、そしてやる気なさそうにその傍に突っ立っているクリークという男に対し、チャンスとばかりに”剃”を用いて相手の背後に周り飛び上がると

「死ねえっ！ 嵐脚っ！」

空中で大きく加速させた脚を相手の首に対して振り抜いたものの、その攻撃は首に当たると同時、異様な感触にて阻まれた。

「子供だから元気なのはいいが…ちよつとはしやぎすぎだな！」

それと共に握り拳をつくる目の前の男にルッチはすぐさま

「くっ！ 鉄塊！」

身体を鉄の硬度に変化させる剛体術をもつてして攻撃に耐えようとしたものの、頭に落ちるその衝撃に耐え切る事は出来ず

「おいクリーク！ 折角の金の卵になにやってんだてめエ！」

「ふむ、いくら鉄塊が使えるとはいえ流石にお前の拳には耐えきれんか…まあそりやそうだろうな」

スパンダインと呼ばれていた偉そうな男や、ラスキーと呼ばれていた細身の男がそう言っているのを聞きながら、ルッチは目の前の自身の頭に拳を喰らわしたクリークと言う男を見つつ

『いつか絶対殺してやる…!』

倒れる寸前の彼の目は、そんな事を物語っているように凶暴な目付きをしていた。

そこからルッチは二人の男、コンビで動く事が多いラスキーとクリークという二人の諜報員と共に、普段の訓練や任務として潜入や暗殺などをこなしていく日々が続いた。

スポンジが水を吸うように戦術や知識、闘い方をどんどん吸収する一方で舐められたままの自分ではない、とばかりにある日はすれ違い様に不意打ちを、またある時は寝ている所に襲撃を、そしてまたある時は養成所にて他の面々に紛れて暗殺を、と夜討ちに朝駆け、不意打ち暗殺、罠に騙し撃ち、狙撃に奇襲とあらゆる手を使ってクリークを殺しにかかったものの全て命を奪うまでには至らず、それどころか「いやー、そんなんじゃないつまで経ってもおれを殺す事は出来ねえぞ?」

「っ…殺す」

「あんまカリカリすんなってルッチよ、そんなじゃゴムゴムの実を赤髪に奪われた誰かさんみたいに肝心な時に失敗するぞ? カルシウムとれカルシウム」

とばかりに牛乳瓶を押しつけられる始末。

それからラスキーが一線を退いたりゾオン系悪魔の実を手に入れ使い熟すべく修練を重ねその戦闘力に更に磨きをかけた長官がスパンダインの息子であるスパンダムになったりしながら10年以上の歳月が経ちCP9のメンバーの殆どが入れ替わった頃にはその強さを政府上層部や海軍上部、七武海にすら認められCP9史上最も冷酷でそれに見合う強さを併せ持つ殺戮兵器と呼ばれる程になっていたが

「奴に勝てねば意味が無いっ…!」

ルッチは強さを貪欲に求め、決して満足する事なく修練を重ね任務に邁進するのだった。

そんな折にルッチはある潜入任務を受け他のCP9のメンバーと共にウォーターセブンのガレーラカンパニーに潜入、長い期間をかけ

てようやく任務を完了し自身の所属するエニエスロビーに帰還したのだった。

そしてそんな彼の眼下で睨み合う二人の男。

「ば、馬鹿なっ! CP9”で…”六式使い”で…”能力者”だぞ!?! 道力800を超える超人ブルーノが…負けたってのかあんな小僧に!?!」  
睨み合う二人の傍で倒れ伏すブルーノを見た自身の上司がそう喚くも

「喚くな、耳に障る…能力にかまけて修練が足りないから無様を晒す、いかに超人とはいえつねに研ぎ澄まさねばあなるのは自明の理だ」  
と冷静にバルコニーから激闘が始まった裁判所の屋上を見下ろしながら吐き捨てる。

「おのれ若造」ときが舐めやがって!!おいルッチ!他の奴等を全員ここに集めろ、CP9に…テメエらに麦わらのルフィ及びその一味の”完全抹殺指令”を言い渡す!!」

「ふん、不要な事だ…奴がやり合っているのに何を焦る必要がある、いかに気分屋な奴と言えど給料分くらいは働くだろう」

「ぐ…いいから呼べと言っている!おれはお前らの上司だぞ!!」

「奴が麦わらを捕縛して後の残りはゆっくり包囲して片付ければいいだけの話だ…」

「いいから全員を集めろと言ってるだろうが!奴の力なんぞ無くてもテメエらがいれば問題ねえんだよ、さっさとしろ!!」

その言い様にルッチは一瞬人差し指を突き出しかけるが

「…まあいい、今度は奴に何をやらかしたか知らんが精々背中から刺されなければいいがな。おいお前、他のメンツを集めろ…長官殿のご命令だ」

こんなクズを始末して自身が追われるのは割に合わないと考え直しその手を下げると壁際に控えていた役人の一人に指示を出し自身は傍の椅子を持ってくると腰を下ろし激闘を行う二人をジッと見据えるのだった。

「ゴムゴムの…JETピストルっ!!」

ルフィは最初から様子見無しに自身の身体をポンプ代わりに爆発的な加速を生み出す技術、ギアセカンドにて目の前の男に攻撃を叩き込むが

「中々の速さだが…そんなんじや俺には当たらんねえな」

「くそっ！アイツには当たったのになんで当たらんねえんだ!!」

ブルーノを撃ち抜いた拳はクリークに擦りすらせずに避けられる。

「まあブルーノは長い間酒場の店主やってたらしいし鈍ってたんじやねえのか？次はこっちからいくぞ、”骨法・五指穿銃（こっぽう・ごしせんがん）!!」

それと共に大きく振り抜かれるクリークの右腕、離れた所で何を？とルフィは一瞬考えるもその答えは多数の衝撃と共に自身の元へと届きルフィは大きく吹き飛ばされながらも空中で何とか体勢を整え直し着地

「ぐっ!?何だこれ…骨?！」

自身へと衝撃を届けたソレは白い小さな塊…指先の骨であった。

「おー正解だ麦わらのルフィ、まだまだ行くぞ?」

それと共にバキバキと今度は肘を鳴らせばメキメキと皮膚を突き破り鋭く尖った骨が何本も飛び出し

「気持ちわりい！何だお前、能力者か!？」

「おいおい、悪いが残念ながらただの人間だよ」

「まあいいや、そんなら骨ごと折ってやる！ゴムゴムのJETバズーカ!!」

それと共にブルーノを沈めた爆発的な加速をした双掌打がクリークに向かい

「屍骨脈…俺の攻撃は骨、骨芽細胞や破骨細胞をも自在に操りカルシウム濃度すら自由に操る」

「ぐちやぐちやうるせえ!!吹っ飛べ！」

それと共にクリークはルフィのゴムゴムのバズーカに対し腹を見せてそのまま双掌打はクリークに衝突、ブルーノと同じくこれで倒れ伏すかとルフィが気を抜きかけた所で

「…最高密度の骨は鋼よりも硬い、ブルーノは退けてもそれじゃ俺

は倒せないな」

その言葉と共にルフィに振り下ろされるブレード

「ぐっ！思ったより頑丈だな!!」

咄嗟に避け、ならば今度は近づいてから攻撃しようと思えば

「迂闊に飛び込んでカウンターには気をつける方だな」

皮膚を突き破り鋭く尖った肋骨がルフィを襲う。

「げっ！また骨か!？」

「変則的だろ？おれは能力者じゃないんでね、無能力でどうやったら能力者にも勝てるか色々試してたらいつの間にかこんな事が出来るようになったのさ」

「…お前強いな、ならもつと面白いもん見せてやるよ」

そう言いながら親指を咥えるルフィであったが

「おっと、今はここまでにしとこう…既に給料分は働いたからな」

「ん？何言ってるんだお前」

そう手で制すクリークにルフィは疑問を呈すが

「なに、どつかのバカが言うことを聞かないとか何とかで給料をカットしやがったからこれ以上働く義理は無い。だから今日のところはここまでだ」

それと共に地面に置いていた牛乳瓶を拾い上げると一気に呷り倒れていたブルーノを肩に乗せるとその場から立ち去ろうとする。

「なっ！逃げんのか!!」

「別に逃げねえよ、来るんなら来ればいい…そんなときや相手してやるさ。」

ま、お仲間もこっちに向かっているみたいだし来るんなら万全な体制で来るこった…ロビンの嬢ちゃんを取り戻したい気持ちはわかるがうちの奴等は生半可じゃねえからな」

それと共にクリークはブルーノを肩に背負ったまま月歩で裁判所の屋上から飛び立ち

「くっそー!!あのホネ男ぜってーぶつとばす…でも疲れたなあ、やつぱ身体がついていかねえや、腹減った…」

ルフィはその場で座り込みながらもポケットから肉を取り出してかぶりつき

「おい、何故麦わらを見逃した…答え次第ではここで殺してもいいんだぞ？」

「殺せるもんなら殺してみろ…って言いたいとこだが給料分はちゃんと働いたからな、これ以上やる義理はねえよ」

バルコニーに着地、ブルーノの状態を確認するクリークにルッチが額に青筋を浮かべながら近づけば飄々と返すクリーク、その言葉にルッチはギロリとスパンダムを睨み

「貴様…こいつが気分屋だとわかってる癖に任務への対価までケチるとは何事だ！こうなるのはわかりきってるだろうが!!」

「ヒツ…」

「もういい…貴様如きにおれ達を使いこなせる訳がなかったか。どうせ奴等はこつちに来る、バスカビル如きには止められんだろう…各自それぞれ塔内に散らばって迎撃、文句はあるか？」

「おい、何てめえが仕切ってたんだ」

「黙れ、文句があるなら実力で来い…フクロウは跳ね橋を越えてきた奴等に宣戦布告して来い、そうだな…ニコ・ロビンの手錠の鍵を持つてると言えば食いつくだろう」

と、文句を言いかけるジャブラをルッチはギロリと睨みつけ封殺すると

「チャパパー任せておけー」

「カクにカリファ、あのバカが与えた悪魔の実は問題無さそうか？」

「任せて、ちよつと変則的だけれど問題無いわ」

「わしは気に入るとる、後は実戦で調整するわい」

「他は適当に奴等を相手してやれ、戦いぶりを見るに我々も本気だから必要がある…貴様はニコ・ロビンを見ている、個人的な依頼なら問題無いだろう」

矢継ぎ早に指示を出しルッチはそう言って懐から出した財布を投げつけるルッチに

「可愛い後輩の頼みだ、まあいいだろ」



クリークは片手で受け止めながらそう言っ  
て財布をポケットに仕舞うのだった。

## 特命任務 ドングリーク

「何故あれだけの戦力でたった一隻を拿捕する事も出来んのだ!!」

「し、しかしあの能力!あれでは近づいた側から武器は奪われる上にその武器は奴の手足となるのですよ!?!いくら数があつてもあれではどうしようもありません!!」

海軍本部元帥室、そこでは元帥であるセンゴクが一人の海兵から報告を受けていた。

「だとしても17隻もの大艦隊だぞ!?!この忙しい最中に世界政府の命令だから捻出したというのに…接触すら出来てないとはどういう事だ!」

「こちらが海軍と見るや否や攻撃を仕掛けてきたのにどうしろと言うのですか!それにわたしはやはり反対です、今回の件からしても奴の凶悪さは明らか!それを七武海候補などと、そもそも七武海という制度自体が…」

「…世界政府の命令だ、モーブナ大佐貴様の主張は聞いていない。もういい下がれ」

「っ…失礼します」

とセンゴクは報告に来た海兵を下がらせると頭を抱える。

「…まったく海賊嫌いは結構だがあも表に出しては政府に睨まれる事ぐらいわからぬのか、仮にも佐官ならそれくらいの事は弁えるべきだろうに。」

いや、兎に角まずはこの件を片付けるべき…そう言えばクリークがこちらに向かっているのだったか、ここは奴に頼むとしよう圧倒的な個であれば話を通すぐらい訳なからう」

センゴクはそう考えながら傍の電伝虫の受話器をとり番号を押せば

『はっ、こちら海軍独立遊撃隊旗艦“フイーネ・イゼツタ”通信室』

「うむご苦労、海軍本部元帥のセンゴクだ。クリークの所に取り次いでくれ」

『センゴク元帥!?!あ、いえ失礼しました直ぐに中将に繋がます』

すると回線が切り替わる音と共に

『こちら海軍独立遊撃隊総司令のクリークです、御用と伺いましたが？』

との応答。

「おお久しいなクリーク、ナバロンでは随分と大変だったようだな」  
『いえいえナバロンでは“色々” 思惑が重なった事であるの結果になったわけにして…まあこれでナバロンの結束はより強く、海軍は強奪された上で撃沈処分と大々的に取り上げられる事で本命から目を逸させ、戦鳥騎は蜂1号の予行にもなりと色々メリットはありましたかね』

その言葉にセンゴクはナバロンにクリークがいる上であの海軍独立遊撃隊にあれだけの被害が出た事に疑念を抱いていたがやはり何らかの事情があつたのだろうと察した。

「…何を考えているか知らんがもし海軍を裏切ろうものなら容赦はせんぞ」

とは言えあまり自由にやられ過ぎても困るので軽く釘だけは刺しておく。

『まさか、これでも海軍隆盛の立役者なんて呼ばれてるんですよ？わざわざ裏切るメリットなんざゼロでしょう』

「…まあいいだろう、では“四海制覇” やら“公認海賊”、”独立遊撃隊”なんかを立案し軌道に乗せた海軍の立役者に一つ任務を任せようか」

クリークの言葉にセンゴクは顎に手を当てながらそう言えば受話器からは

『前置きがその言い方だと厄介な命令だと推察できますが？』

と、クリークの嫌そうな声。

「何、簡単な話だ…ユースタス” キャプテン” ・キッドはわかるな？」

『そりやまあ、懸賞金2億六千万とかなりの出世頭ですからね』

「奴を七武海候補とすべく動きがあつてだな…」

『は？奴を七武海候補に？クロコダイルの後任は銀狐じゃなかったのですか？』

「ああ先日世界政府から正式な辞令が出て内々ではあるがクロコダイルの後任”は”銀狐のフォクシーで確定した」

『クロコダイルの後任は?…ああ、バーソロミューですか』

「その通り、奴の最終施術が正式に決定した…お前の言っていた通り意思を持たぬ者をわざわざ七武海に任命する必要は無いだろう」

『ええ、本来はコントロールできない海賊の特権をもってして政府の制御下に置くのが七武海…ならば自我の無い完全なるサイボーグには必要無いでしょうからね』

「その為に奴を…最近で最も勢いのある海賊”悪童”ユースタス・キッドを七武海に任命すべく政府は動いている」

『…ああ、最も勢いがある故にという事ですか』

「その通り、まあ奴が就任すれば…であるが大々的に発表する事でそれほどの勢いがあれど政府の下につかざるを得ないと他の海賊に周知させる事が目的だ」

『はあ狙いはわかりますが奴のもう一つの異名を…奴の引き起こした”鉄底海域”を忘れたので?』

”鋼鉄喰らい”か…確かに奴が海軍に与えている被害は甚大だ。つい先日も軍艦を二十隻近く沈められた所だ、しかしだからこそダクリーク。だからこそ早めに首輪をつけねばならん。

それにこれは世界政府の決定、こちらで好き勝手決めるわけにはいかんのだからだろうか?」

『了解しました…ところで何故この件を俺に?まさか任務と言うのは…』

「なに、丁度マリンフォードに向かっているのだろうか?近くの支部から連絡があつてな、丁度近海を通るようだからお前がユースタスに接触し七武海就任についての感触を確認してきてもらおうと思つてな」

『…蜂1号の調整があるのですか?休暇を切り上げさせてまで早く戻つて来いと言つたのはセンゴク元帥ではありませんでしたか?』

「なに、作戦の調整については最近シューゾ少将が率先して行つているようで少し余裕が出来たのでな…ジョンサンやアイザックとの調整は済んでいるのだろうか?」

『…まあわかりました、所で急ぐ必要がないなら少し遠回りして帰還しますがそれでよろしいですか?』

少し考えたのだろう、最初無言になったものの引き受けてくれた事に安堵しつつ

「早急では無くなったというだけだ、あまりゆつくりする時間は無いからな?ではくれぐれも頼んだぞ?」

そう言つて通信を切るのであった。

(まあ奴がこの話を受けるとは限らんが話を通すだけで世界政府からの指示は果たしたと考えていいだろう、それよりも新世界側の戦略を考えねば…)

そんな事を頭で考えながらではあつたが。

## 七武海誘　ドンククーク

「ちいつ、なんつう硬さしてやがるっ!!」

「悪いな、俺を貫きたきやもつと鍛える事だなっ!」

そしてぶつかる鋼鉄の拳と鈍色の棍。

とある島の浜辺で二人の男が衝突していた。

赤い鷗の海軍コートを羽織り、腰には長剣、胴鎧にレギンスのガンレットを装着した腕には”白尾棍”…そしてそんなシンプルな武装のクリークに相對するのはただでさえ鋭い目付きが更に鋭く凶悪な人相を持つ男。

まるで燃えるが如く逆立った赤い髪にはゴーグルを着用し、素肌に分厚いトゲの意匠がある赤いファーが付いた派手な茶色のコートを羽織り、そしてその両腕は異形と化したその男こそ”ユースタス・キッド”…”キャプテン・キッド”の異名の他に”悪童”、”鋼鉄喰らい”と呼ばれる男である。

時は少し遡る。

クリークは指令により”七武海候補”として感触を確かめるべく”ユースタス・キッド”に接触すべく近隣の支部から報告があった地点に向かっていた。

程なくして情報通りキッド海賊団の船…ゴーグルのついた燃え盛る骸骨の旗印に恐竜らしき生物の骨をまるまる船首に加工した特徴的な船である”ヴィクトリア・パンク号”を発見、接触しようとしたところこちらの赤い海軍旗を見た途端俄に戦闘態勢に入るキッド海賊団。

こうなつては纏まるものも纏まらない為少し離れた所でフィーネ・イゼツタ号は停船しクリークは単身で慌ただしくなつたヴィクトリア・パンク号へと向かったが

「鈍色の鎧に赤い海軍マークのコート…まさか海軍本部中將の鈍熊かつ!キッド、奴はまずいくれぐれも穏便に済ませろ!!」

両腕のブレードを展開して身構える男のその言葉に

「へえ……この前大艦隊を沈めてやったつてのに海軍も懲りねエな……いや、懲りたから中将なんて送り込んできやがったのか？」

両腕を組んだまま大胆不敵に軽く笑みを浮かべながら言つてのけたのだつた。

「懸賞金7200万”殺戮武人”のキラーク：手甲鎌とはまた随分と珍しいもんを使つてるな」

緊張をほぐすべく軽口を叩いて見るがそれに対して軽く身構えるキラーク、更にキッドが

「おいおいこつちは無視か、しかしあの赤カモメのトップがわざわざおれ達に何の用だ？」

と凶悪な笑みを浮かべながら軽く腕を振り他の船員に後ろに下がるように指示

「とりあえず落ち着いてもらおうか、こつちに戦闘の意思は無い」

「ほお？てつきりこの前沈めた艦隊のお礼参りかと思つたが……じゃあ一体何しに来たつてんだ？」

そう言いつつも全く警戒を緩めず尚且つ直ぐに動けるようにしているキッドにこれは難航しそうだなと思いつつも

「ユースタス・キッド、お前七武海になる気はあるか？」

「……ああ？」

意表を突く事には成功したのだろう、凶悪な笑みを崩さぬままに一瞬固まるキッドを他所にクリークは更に話を続ける。

「世界政府からのお達しでな、お前を七武海にしようという動きがある。まあ本来であれば伝書だけで済ませる所だが流石にお前を七武海にするとなると色々ハードルがあるからな」

「おれを七武海にだあ？ああそういやニュースクーで見たぜ、クロコダイルが何やらやらかしたらしいな」

「まあな、そこで早急に七武海を決めるべく動いたわけだが……まあ別に今すぐ決めろと言うわけじゃない、急ぎでは無いからな」

「はっそんなんでもいい……答えはノーだ！磁気弦（パンクギブソン）!!」

それと共に恐らく船に乗せていたのだろう、数々の武器がキッドの

右腕に集まり巨大な腕と化すとその鋼鉄の巨腕は何の警戒も無かつたクリークを叩き潰した。

”ジキジキの実”、それがキッドが食した悪魔の実である。

その能力は自分を中心に強力な磁気を発生させ、周囲に存在する磁気の影響を受ける金属類を引き寄せる事ができるというものだ。

「へっ、本部中将と言えどこんなもんか…」

そしてキッドはその能力でかき集めた金属類を自分の思うままに組み合わせ、巨大な腕や全身を包む鎧のようにして操り、生身であれば問題ないような攻撃が金属によりそのままキッドに反映、単純な攻撃力や防御力は通常時と比べて大きく強化される。それがキッドの戦闘スタイルである。

そして今回も船に満載していた武器の山の一部を能力で纏い、一瞬で巨大な腕を作り出しクリークの意識外より叩き潰したのだった。

「キッド…くれぐれも穏便にと言っただろうが!!」

いきなりの凶行にキッド海賊団No.2であるキラはキッドを怒鳴るも

「はっ、このおれに七武海なんて巫山戯た話を持ってくるからだ…それより甲板直さねえとな」

キッドは悪びれる様子もなくキラの言葉を流しながら自らの攻撃で甲板に空いた大穴を見ると同時

「…話が気に入らないとは言え随分といきなりだな、”悪童”とは随分といい二つ名がついたもんだ」

大穴から伸びた手に顔面を驚掴みにされた。

「なっ！テメエ!?!」

「まあいい、船の心配をするなら心置きなくやれるよう場所を移動しようか」

それと共にキッドに叩き潰された筈のクリークは、キッドの顔面を驚掴んだままその場から飛び立ち、空中を駆けると近くの小島に移動したのだった。



## 鋼鉄魔人 トンクリーク

「キッド!? くそっ! 船を動かさせ!!」

キッドが連れ去られ残されたメンバーはキラーの言葉に慌てて動く一方

「やってくれんじゃねえかよ! 磁気弦 (パンクギブソン) !!」

キッドは砂浜に投げ出されると同時に、素早く体勢を立て直すと巨大な鉄腕を振り下ろすものの

「余程元気が有り余っていると見える…どれ、少しもんでやろうか」

その巨大な鉄腕はクリークの右手で受け止められていた。

「本部中将…思ったよりやるじゃねえか、だったらこれでどうだ! 磁気万力 (パンクヴァイス) !!」

それと共に巨大な鋼鉄の左腕が動き両手でクリークを挟み込み潰そうとするものの

「なかなかの力だが…俺を潰すにはパワー不足だな!!」

両腕で受け止めると共に身を躍らせ抜け出るとキッドの眼前に、そのまま両手で持った白尾棍を振り抜いた。

「っ!? あぶねえじゃねえか」

振り抜くのに合わせて大きく飛び退くキッド、しかしその不自然な動きに

「…ひよっとして回避も能力か?」

とクリークが疑問を抱けばキッドは意外そうな顔をする。

「へえ、もうタネは割れてんのか…察しの通りテメエの武器ではおれにダメージは与えられねえよ!!」

”反発 (リペル) ”、キッドが持つ能力である磁気を操る力で自身と他の金属を同極の磁性体へと変化、反発させる能力である。

キッドの不自然な回避は自身がクリークの武器と同極となり、反発によって触れる前に大きくその身を引き離すという仕組みによっておこったものである。

「成る程…だったからこれならどうだ?」

それと共にゆるく突き出される白尾棍、当然キッドは手を翳して”

反発」で弾こうとしたが

「ぐっ、力が…テメエ!!」

「成る程、いくら斥力があっても海楼石は弾けねえか」

白尾棍は文字通り柄尻だけが白い鈍色の棍であり、本体は海軍で作られた比類無き頑丈さと超重量を持つ特殊合金製、そして白い部分は海楼石で出来ている。

故にいくら斥力を発生させようとも突き出された柄尻は何の影響も受けずにキッドに接触し途端にキッドの力を奪い去ったのだ。

「海楼石…海軍はそんなもんまで常備してやがんのかよ!」

力が入らないながらも何とか腕を動かそうとするキッドであったが

「まあいかにお前が強かろうと能力者である以上この縛りからは抜けられないか」

それはクリークが白尾棍を逸らした事により怪訝な顔に

「テメエ…どういうつもりだ!!」

「なに、少しもんでやると言った筈だ…こんなもんですぐ決着をつけてしまうのも野暮だろう? 安心しろ、海楼石は使わないでおいでやろう」

更にはその余裕綽々といった態度にキッドは舐められていると感じたのだろう憤怒の表情へと変化した。

「このおれを…舐めてんじゃねえぞ赤カモメえっ!!」

そう怒鳴ると同時、キッド海賊団の船であるヴィクトリア・パンク号と

「キッド! 無事か!」

「丁度いいタイミングだ…テメエはぶっ潰してやるよ! 磁気魔人(パンクロットン)!!」

キララの声にキッドは凶暴な笑みを浮かべてヴィクトリア・パンク号に手を翳せば宙を舞う船に積み込まれた鉄屑や武器の山、更には「ほう、2台もがめてやがったか…まあ確かに相性はいいだろうからな」

クリークの視線の先には空中を飛ぶ2台の水陸両用戦車の姿、恐ら

く”鋼鉄喰らい”の異名が誕生した”鉄底海域”の件、10隻の軍艦と水陸両用戦車50台の大部隊を一人で沈め去った事件の時に手に入れていたのだろうかと考えながら再び棍を構える。

「無惨にブツ潰れやがれ!!」

そして振り下ろされる超重量の鋼鉄の塊。

全身に鋼鉄を纏い、更には鋼鉄を纏った両腕の先には超重量の鋼鉄の塊である戦車が存在を主張しておりその猛威がクリークを叩き潰すべく何度も振るわれる…しかし

「磁気を操る…ここまで重量のあるものを自在に操るとは確かに凄まじいものだな」

「ちいつ、なんつう硬さしてやがるっ!!」

その鋼鉄の猛威はクリークの振るう棍と纏った鎧を突破する事が出来ずキッドは歯噛みしていた。

「悪いな、俺を貫きたきやもつと鍛える事だなっ!!」

そして更に鈍い音を響かせながらぶつかる鋼鉄の拳と鈍色の棍にキッドはこのままでは攻め手にかけてと判断したのだろう、意図的に海楼石を使わないなんぎこつちを舐め腐っている赤力モメに一泡吹かせるべくジキジキの能力を発動させた。

「磁気弾（パンクショット）!!」

そしてクリークに襲い掛かるのはキッドが身に纏っていた鉄屑や武器、更には戦車がまるでショットガンのように襲い掛かる。

その凄まじい物量にクリークは一瞬驚いたものの直ぐに自在に棍を振るうとそれらをいなし、弾き、叩き潰しとどんどん捌いていく。

「確かに威力は高いだろうが、武器である鎧を捨ててよかったのか？」

捌きながらもそう軽口を叩けば

「問題ねえよ…わりいがこのモードは慣れてねエ。それに、同時には使えねえからな…!!」 磁気影（パンキツシュ）”!!」

それと共にクリークは何かを感じとったのか直感的に両手で棍を持ち上げればそこにはいつの間にか手にしていた黒い剣を振り下ろすキッド。

「…何かと思えば弾いた鉄に紛れての不意打ちか？」

「はっ、どうだろうな？まあテメエなら受け止めると思っていたが：  
吠え面かきやがれ」

凶悪な笑みを浮かべたキツドのその言葉と共に黒い剣は流動し始めると甲高い音を立てながら白尾棍と接触した部分に激しい火花を散らし始め

「なっ！嘘だろおい!？」

クリークはこの戦闘で初めて驚愕の表情を見せるのだった。

## 悪童鈍熊 ドンクリーク

クリークの驚愕は最もである。

彼はビッグママ編までと割と中途半端で所々曖昧ではあるが”原作知識”というものを持っており、当然ユースタス・キッドの事も覚えていた。

磁石系の能力者であり、武器や鉄を自在に操って攻撃に使う凶悪な海賊：それがクリークがキッドに抱いていたイメージである。

当然接触するにあたってその人となりや戦闘手段、能力なども詳細は調べて接触にあたった：しかし

”ソレ”は聞いてねえぞ!!”

キッドの手に持つ黒い剣：派手に火花を散らしながら高速で流動するソレを白尾棍で受け止めるながらそう叫ぶが

「ハッ！とっておきだ：おれを舐めた事後悔しやがれ!!”

それと共に更に激しく火花を散らしながら押し込められる黒い剣

「磁気的能力で砂鉄を整形、更に超高速で流動させる事で相手を”削ぎ斬る”：まるでグラインダーだな!!”

「ほお：”ぐらいんだー”が何かは知らねエがタネには気づいたか。だがいくら気付こうが無駄だ！えらく硬いようだがこのブレードに斬れねえもんはねエ!!”

その言葉と共にキッドの砂鉄剣が白尾棍に更に食い込み流石にこのままではキッドの言葉通りになると感じたクリークは大きく後ろに飛び退き体勢を立て直そうとした：しかし

「当然そう動くよなあ赤カモメえっ!!”

剣を作り出している右腕を振りかぶり左の掌を飛び退ったクリークに向けたキッド、その言葉と共に後ろに飛び退きかけた体勢のまま前に引つ張られるクリーク

「っ!?!そうか斥力が使えるなら引き寄せられてもおかしくなかったか!!”

直ぐに引き寄せられた事：自身の鎧が磁力で引き寄せられた事に思い当たったクリークであったが

「その通りだ!!そして気づいた所でもう遅えんだよ!!」

そのまま中途半端な姿勢のまま飛んで来るクリークにキッドは更に砂鉄剣を高速で流動させ剣が発する音はクリークの広い胴に当たると同時更に甲高く響き渡り…そして数秒の拮抗の後に砂鉄剣は振り抜かれクリークはその場で膝をつく。

「ぐっ…ハアハア、流石に砂鉄を操るのはまだ慣れねえな…」

そしてキッドもその場でしゃがみ込み大きく肩を上下させる。

無理もないだろう、キッドが使った磁気影（パンキッシュ）…自身の持つ磁力を操る力で砂鉄を集め超高速で流動する剣を掌に作り出す技であるが構想はあったものの習得したのはつい最近である。

それ故にまだ荒削りな部分が多くまず砂鉄を集め圧縮して整形し流動させるという特性上かなりの集中力を必要とする上にその為砂鉄と鋼鉄の同時併用は出来ない。

それ故に大抵の物は切り裂く莫大な攻撃力を持つ反面防御力は自身のタフネスで耐えうるしか無い為精神的負担も大きく、更にあくまでも剣を振るうのはキッド自身である為今までジキジキの能力で戦って来たキッドには未だ剣に慣れないという欠点もある。

本来であれば実戦で使用できるものではないが舐められていると感じたキッドは相手が思ったより手強かったという事もあり切り札を切ったのであった。

「くっそ、かなり消耗したが…コレが本部中将にも通じるってのがわかっただけでも収穫か」

そう言いながら立ち上がり仲間達の元へと踏み出そうとしたキッドであったが

「いやあ…悪いな、正直舐めてたよ」ユースタス…キヤプテン…キッド”。

まさか特殊合金性の武装をここまでにしてくれるとは思わなかった、詫びと言っては何だがちよつとだけ真面目に相手してやろう」

その言葉と共にドサリ、ドサリと重たい物が地面に落ちる音。

その声にキッドが苦虫をダース単位で噛み潰したような顔をしながら振り向けばそこには纏っていた胴鎧、レギンス、ガントレットを

外し諸肌になったクリークの姿

「デメエ：間違いない、斬った筈だがどういうカラクリだ」

それと共にキッドはスツと目線を脱ぎ捨てられた胴鎧に向けるがそこにしつかり残る真つ二つに切断した痕に何かの能力かと考えるも

「なに、ただ単に斬れ味が足りなかったただけだろうさ」

クリークのその言葉に言う気は無いのだろうと考え再び磁気弾で弾き飛ばした金属を呼び集め更にはクリークが脱ぎ捨てた鎧も吸収し巨大な人型を形成

「上等だ：なら今度こそ潰してやるよ赤カモメえ!!」

大柄なクリークを更に軽く見下ろすかのような鋼鉄の巨人と化したキッドはそれに見合う巨大な拳を振り上げる。

「さてちよつとだけ本気出すと言った手前半端はやんねえからな？」

それに対しクリークはその言葉と共に拳を構え

「ブツ潰れやがれ！磁気弦・歪（パンクロットン・ゲイン）!!」

それと共にクリークに振り下ろされる両手を組んだ振り下ろしがクリークを襲い

「せいぜい気張れよ？六大召式・絶招”六王砲”（ろくだいしようしき・ぜっしょう）ろくおうほう”）!!」

クリークの打ち上げた拳はキッドの巨大な鋼鉄の拳とぶつかり、そしてその瞬間に発生する轟音と爆発するかのような衝撃波。

その姿のまま数秒が立った所でバラバラと剥がれ落ちる金属と共に鋼鉄の巨人の中心から倒れ落ちて来たキッドをクリークは受け止めると地面に横たえる。

「まあこんなもんか：とりあえず元帥には七武海にはなりそうに無いと報告だけしておくか」

動かないので脈と瞳孔を確認し意識を失ってるだけだと確認したクリークは立ち上がるも

「キッドを離せ!!」

いつの間にか船から降りて接近したのだろう、それと共に振り下ろされるキラーの手甲鎌。

「キッド海賊団No. 2のお出ましか…お前さんらの船長なら気を失ってるだけだ、連れて行くんなら連れて行きな」

しかし剥き出しの腕で受け止めながらそういうクリークにキラーは

「貴様…おれ達を捕まえなくていいのか？」

とキッドに肩を貸しつつそう尋ねれば返って来たのは

「本来であればしよっぴいてお終いなんだがな…上が七武海にしようとしている人間を勝手にしよっぴくわけにはいかねーんだよ」

という言葉だった。



## 和国情報　ボンクreek

センゴクの命令によりユースタス・キッドに対し七武海就任の意思を確認したクreekは一路マリノフォードへと向かっていた。

夜も更け既に皆眠りにつく時間、フィーネ・イゼツタ号は海上にて停泊しクreekは自身の部屋にて

「まさかキッドがあんな隠し球持ってるとはな…流石に修理より新造した方が早いか」

真つ二つになってしまった愛用の白尾棍と胴鎧を持ち上げどうしたのかと考え込んでいた。

元々棍も鎧も自身の怪力に耐えうる武器を、とのクreekによる強い要望により海軍で開発された特殊合金で作られており、この特殊な合金は複数種の金属を掛け合わせて作られたものであり例え大砲の砲撃でも傷一つ出来ないほどの比類なき頑丈さを持つ。

そんな丈夫な金属であれば他にも色々有用性がありそうであり、事実海軍でも当初はこの金属で大砲の弾や武器を作ろうとした動きもあったがこの金属は類い稀なき丈夫さを持つ反面しつかり欠点…同じ体積の金属と比べても数十倍以上の重さという理由があり、当然そんなものが一般海兵に運用出来るわけもなくこの特殊合金を海軍装備に使う計画は頓挫。

しかし重さだけなら何のその…という結論に至ったのがクreekでありこの馬鹿げた頑丈さと重さを持つ金属に圧力をかけて更に高圧縮させてクreekの装備は作られていた。

故に尋常な事では傷一つつく事無く、その超重量ゆえに振り回すだけで圧倒的な威力を持つものこうなってしまうと新造した方がいいか？と考えながら何とかくつかないかと試していると突如鳴り出す電伝虫。

普段は鳴る事の無いプライベートの電伝虫にクreekは怪訝な顔になりながら受話器をとる。

「片手に」

『ピストル』

「心に」

『花束』

「唇に」

『火の酒』

「背中に」

『人生を』

その合言葉の声に聞き覚えがあつたクリークは

「ドレークか、久しいな」

と声をかけた。

『お久しぶりですクリーク司令、今大丈夫ですか?』

「ああ今はフィーネ・イゼッタの上だし白電伝虫もあるから盗聴も問題無い、どうだワノ国は?」

ドレークからの通信にそう尋ねるクリーク。

ドレークはかつてミニオン島にてクリークが救つた少年であり、当然の如く救われた恩義もあり海軍へと入隊、そのまま独立遊撃隊に所属してメキメキと頭角を表し、悪魔の実を食べてからもその実力を伸ばし続け今では一端の強者として成長。

そして数年前、クリークが原作にて語られていたものの詳細を知らない故に調査と知識の補完を合わせて独立遊撃隊の中でそれなりに腕の立つものを原作で名前の出ていた国々へと送り込んでおり、そうしたクリークの指示によりドレークが潜入した先こそが”ワノ国”：グランドライン後半の航路、通称”新世界”にある世界政府未加盟国であり、同時に他国の立ち入りを制限する鎖国国家として知られ、更に”サムライ”侍と呼ばれるワノ国独自の戦士の強力さ故に世界政府すら立ち入れない強国とされている国であつた。

『酷いもんですよ…無事に潜入はできてますがワノ国の将軍である”黒炭オロチ”、そして国を守る守護として”明王”の位についたカイドウが手を組んでから二十数年…二人が推し進める採掘場と武器工場のせいで川は汚水にまみれ、国土は荒野と化し、住民達は食う物にも困る有様…何故海軍は動かないんですか?』

しかしドレークが潜入し調査したその実態は将軍オロチと四皇の

一人であるカイドウが結託、百獣海賊団の本拠地ともなったワノ国は反抗勢力は悉く滅され、プロパガンダとして国を守ろうとした者達は悪者とされ、民を省みぬ悪政もあり貧富の差は激しく、川は汚染され、と酷い有様でドレークは何とかならないのかと聞くものの

「そうは言ってもな…ワノ国は世界政府非加盟国、それにワノ国には”サムライ”がいる故に世界政府は手を出したからん…そうなれば我々海軍としては黙って見てる他無いんだよ」

クリークとしてはそう答えるしかない。

『しかし…奴らの横暴は目に余ります、それにどうもワノ国で作られた武器はオロチを通して世界政府へと流れているみたいで…首城であるオロチ城にてサイファールポールの姿が見受けられました』

「…成る程世界政府の武器の出所はワノ国だったか、道理でワノ国近海で世界政府の船が多かったわけだ、積荷を改める訳にはいかんかな」

『それから気にされていたカイドウが総督を務める百獣海賊団の構成ですがカイドウを筆頭に3人の大幹部と6人の幹部、更には傘下の海賊団の数も含めると二万近く、真打ちと呼ばれる実力者を除けば実力はそこまでありませんがそこに更に將軍オロチの軍勢を加えると三万近くになります』

「三万か…現地の反抗勢力は残ってないのか？強いんだろその”サムライ”ってのは」

『ええ…ざっと調べた感じですがそれぞれ刀の扱いに長けており、独自の剣術を使う者も多いとか…ですが反抗勢力に関しては十八年前の事件以降オロチにより念入りに芽を潰されています』

「事件？何かあったのか？」

『はい、実は現將軍黒炭オロチの前に次期將軍と名高かった”光月おでん”という者がいたらしく、彼らがカイドウとオロチに対して大々的に反抗を起こしかなりの激闘を引き起こしたものの敢えなく鎮圧、それ以降はごく小規模の反抗が散発する程度で殆どのサムライは牙を磨かれたも同然ですね』

「…となるともし対応する場合現地勢力はアテにならないな、激闘だっ

たのならかなり強いんだろ？生き残りはいなかったのか？」

『それが妙な噂がありました…』

「妙な噂？」

『反抗勢力の主力とされる9人の侍なんです。死体が見つかっておらず、更には20年後には蘇って自分を殺しに来るとオロチは怯えてるようです』

「んなアホな…18年前に反抗がおきて20年後って事は2年後か…ん？二年後となると麦わらが関わるのか？」

その時クリークは自身で言った言葉に3D2Yと言う単語が脳裏に浮かびそれと共に麦わら帽子を被った青年を思い出す。

『麦わらが何か？』

「…いや何でもない、他に反抗勢力の生き残りは？旗印になりそうな奴とかいないのか？」

『それが何とも…一応調べてみますが恐らくサイファーポールの方が色々知ってるかもしれません』

「ふむ…わかった、また何か続報があつたら知らせてくれ」

そう言ってクリークは受話器を置くと軽く考えに耽るのだった。

「サイファーポール…恐らく取引はかなり前々からあるだろうしワノ国の情報があるとしたらエニエスロビーかマリージョアってどこか、どうしたもんかな…ん？笛の音？誰だこんな夜更けに…」

どこからか聞こえてくる笛の音に疑問を抱きながら。

## 夢跡始末 ヨンクリーク

「ぶぽー！ぽびぺっぺー!!」

「うるせえドラゴンもどき、マジで焼いて食ってやろうか！」

「ごめんなさいクリークおじさん！タツさんも落ち着いて！」

「だがアピス、無理な事は分かってたのに何故ここまでやる必要がある？」

「ごめんなさい！でも事情があったの!!」

「ぶぽーびっぽー!!」

「テメエは黙ってるドラゴンもどき！」

白尾棍の切れ端にグルグルに巻き付けられたタツノオトシゴとクリーク、両者はお互いに睨み合いその真ん中ではアピスが何とか仲裁すべくオロオロとしていた。

何故このような状況になったのかと言えば元凶は縛られたタツノオトシゴでありそれに協力していたアピスによってファイネ・イゼツタ号に乗っていた者達は夜、寝ている間に過去一年ほどの記憶を奪われるといった事件があった為である。

捕まったタツノオトシゴ：タツと言う名の生物は突然アピスの元に降ってきたらしくそこで動物の心がわかるアピスが事情を聞き、実は能力者でもあったタツに協力、ネムネムの実の能力で相手から記憶をエネルギーとして奪う力でファイネ・イゼツタ号に搭乗した者達からたまたま眠りについていかなかったクリークとギンの他数名の夜番を除いてここ一年程の記憶を奪い去っていたのだった。

「事情はあったかもしれないんが記憶を奪ってちゃんと戻ったからいいもの…何らかの副作用があったらどうするつもりだ!!」

「ぶっぶびぽーく!!」

「千年竜になる為って…タツさん、記憶を奪ってみてわかったでしょ？貴方は千年竜にはなれないって…」

アピスがタツに協力した事情…それはタツはかつて見た千年竜になる為であった。

当然千年竜についてはよく知るアピス、彼が千年竜になれない事は

知っており説明だけでは頑なに認めない彼に対してどうやってなるのか尋ねた所返ってきた答えが記憶をもらう事で千年竜になれるとの答え。

「だいたい千年竜についてならあの時の…ロストアイランドでの記憶を見せた方が早かったんじゃないのか？」

「あ…それもそうか、わたしの記憶とか見せれば早かったかも…」

「だいたいタツノオトシゴであるお前と千年竜では種族自体が違う！お前が記憶を何らかのエネルギーとして変化してもそれは千年竜じゃない!!」

「ぽふてぴっ!？」

「それにアピスも！事情があるならまず相談!!報告、連絡、相談は大事だと言っただろうが!!」

「う…ごめんなさい、その時はわたしが何とかしなきゃって思って…」  
「まったく…お前は動物の心がわかる分動物達に対して親身になるのはわかるがちゃんと周りの気持ちも考えて行動する事だ、何かあつて取り返しのつかない事になったらどうするつもりだ？」

「…うん、気をつける」

「それからタツとやら、子供を巻き込むとは何事だ！今回はアピスに免じて許すが次やったら今度は鍋にしてやるからな…」

そう言いながらがんがらじめにしたタツの縄をとくクリークだったが

「ぶつぶくぶー!!」

「ちよつとタツさん！あつかんべーじゃないよ！お鍋にされちゃうよ!？」

「…ほういい度胸だ、鍋の前に刺身にしてやろうか？」

そうしてバキリと指を鳴らすクリークに

「ごめんなさいクリークさん！タツさんにはちゃんと言い聞かせておくから!!」

アピスはタツを小脇に抱えるとそさくさとその場を離れるのだった。

「まったく…まあいい、子供のフォローは大人の仕事だからいいがな。

しかしネムネムの実ねえ、色々と有用そうだがやっぱ原作で出てないのもあるんだなあ…」

などと考えながら歩いていると

「中将、本部からの通信が入ってますので通信室までお願いします」

傍に来た海兵の言葉に考えを中断し通信室へ

「はいこちらクリーク」

『どうもクリーク中将、こちら情報編纂室です』

その電伝虫の相手にクリークは頼み事をしていたのを思い出し

「情報編纂室って事はワノ国についてか、CPの情報とかもあるか？」

『それが…世界政府に対してワノ国に関する情報を要請したのですが機密につき教えられないとの一点張りです、更にマリージョア及びエニエスロビーの資料室も入るのを止められました、海軍と言えど気軽に立ち入っていいものではないとの事です…』

「…成る程、情報をこっちに回したく無いという事か」

『一応海軍内で掴んでいる情報については資料に纏めてそちらに届けさせる予定です』

「そうか、手間をかけさせて済まないな」

『いえ仕事ですから、それからセンゴク元帥からの伝言も預かっています』

「センゴク元帥から？内容は？」

『“あまり藪を突くな”との事です、海軍が世界政府の下部組織である以上あまり危ない橋を渡るのは辞めておけという事かと』

「…前向きに善処しよう」

『それからワノ国においてはかの四皇の一角である”百獣のカイドウ”がいます、その事を含めての忠告では無いかと』

“この世における最強生物”ね…不死身との噂もあるが果たしてどんなものやら」

『その恐るべき戦闘力はさておき十数回の捕縛をされて40回以上の死刑宣告を受けながら絞首・断頭台・串刺しなど全てが奴の肉体に通じず結局最後は逃げられ…捕まえた海軍の面目は丸潰れですよ』

「ああ、九隻以上沈められた奴専用の巨大監獄船か…いくら改良は続

けてても圧倒的な力の前にはどうしようも無いってか？」

『既に十隻目が建造中です、今度は科学班と特技研の協力もあるのでかなりの効果が見込める筈ですが…』

「何とかなればいいがな…よし、追加でわかっているワノ国の情報に合わせてカイドウ及び百獣海賊団の情報についても纏めて送ってくれ」

『了解しました纏めて一緒に送ります、それでは編纂に入るので失礼します』

そうして切れた通信を他所にクリークは

「マリージュアとエニエスロビーはダメか…となると少し危ない橋を渡ってもらう事になるが頼んでみるか」

そう考えながら早速手紙を書くべく文面を考えながら自身の部屋へと向かうのだった。



## 仲間の行く末

記憶を奪われるというハプニングはあったものの、麦わらの一味は無事に造船の島として名高い”ウォーターセブン”へと到着。

一味の面々はそれぞれ分かれて、空島で手に入れた黄金の換金やウォーターセブンの造船会社であるガレーラカンパニーへの相談など一通り終えて、再び一味はゴイングメリー号へと集結していた。

「メリーが直らないって…この船大工はスゴインじゃないのか!？」

造船所に行っていたルフィとナミ、ウソップの話を聞いてチョップがそう言うも

「さっきも言ったけど竜骨に酷いダメージがあるらしいわ。だから例え伝説と言われるような船大工でも直す事は出来ないそうよ」

ナミの返事にサンジは一番反対しそうなウソップに聞けば

「おいウソップ、お前はそれでいいのか?メリーを一番大事にしたたのはお前だろ」

「…っ!いいわけねえだろ!!」

ウソップの絞り出すような声にやはりか…?と思いつつ

「幸いにもメリーは頑丈だし何とかなるんじゃないかねえのか?」

「そうだ!おれはまだこの船に乗ってあんま経ってねえけど、空島とかの時も大丈夫だったんだぞ!!」

「…コックさんに船医さん、この船は東の海から来たと聞いているわ。それまでのダメージはずつとこの船に蓄積してきた」

「だな、確かに人間なら幾度の波を越えりや強くなるだろうさ…だがコイツはずつとダメージを蓄積してきた。それが致命的な所にきてるってこったろ」

ルフィとチョップが出した意見はロビンとゾロに否定される。

「ま、これについては船長が決めるこった…メリーに乗り続けるにしろ降りるにしろ文句は言わねえよ」

「そうね、私も剣士さんと同意見ね」

「どうすんだルフィ?船大工から話を聞いているのはお前とナミさんとそれからウソップだけだ…おれ達がとかかく言えるもんじゃないだ

ろ」

サンジのその言葉に腕を組んで考え込むルフィ。するとナミが

「幸いにもお金ならあるわ…聞いて驚きなさい、空島の黄金とビビから貰った銀とベリー、占めて3億8000万ベリーよ!!」

「3億!? すぎえ!…でもそれだけあつてもメリーの修理は出来ないのか…」

「例え乗り換える事になってもこれだけあれば問題無いわ、だからお金の事は心配しなくてもいいわよ。だからメリーに関しては船長であるルフィ、それから一番この船と関わりが深いウソップが決めて頂戴」

ナミのその言葉にウソップは深く息を吐くと

「お前らには言つてなかつたがよ…メリーが保たねえつてのはあのナバロンでも言われてたんだ」

と話し始めた。

ウソップがナバロンの船大工であるメカオから聞いた話を一味は黙つて

聞いた。

船へのダメージ、メリーの現状、そして空島で見たメリーの化身…クラバウターマンの話。

「メリーはおれ達にとつてどんな波も戦いも一緒に乗り越えてきた大事な仲間だ! メリーを乗り換えるなんていいわけがねえ…いいわけねえが、このまま船出すればメリーにおれ達を殺させる事になる。そうなればおれはここでメリーを乗り換えるより後悔する…」

そしてそう話を締めくくつたウソップだったがそこに騒がしい声が響いた。

「よおよおにいちちゃんら、えらく辛気臭え空気じゃねえかよ」

そう言いながら一飛びでメリー号の甲板へと乱入してきたのは

「ああ! お前ナバロンにいた海パン野郎!? なんでここに!!」

「よう長鼻の兄ちゃん! 何でここにおれがいるかって? そりやおれが船大工だからだ!!」

水色の髪に櫛を入れながら決めポーズをとる海パンにアロハシヤ

ツを羽織った男であった。

「あ、アンタ何しにここに来たのよ！あたし達今大事な話してるんだけど!？」

いきなりの乱入者にナミはウソツプが改良したクリマ・タクトを構えるも

「落ち着きなよねーちゃん!? そういや自己紹介してなかったな、おれはフランキー…アクアリアってとこで船大工兼解体師をやってるモンだ」

慌てて手を振る男…フランキーにナミは訝しげに尋ねる。

「…ナバロンの事ではお礼を言うわ、でも船大工兼解体師があたし達海賊に何の用?」

「おれはこの船を愛してるにいちちゃんに免じていい話を持って来てやったってわけさ、ルートを辿ればだいたいこの島にアンタらが着く可能性は高いし待ってりやそのうち会えるかもと思ってな…この島にはおれも伝手があつてなアンタら麦わら一味がこのウォーターセブンに入ったのを今朝知つたというわけだ」

「おいフランキーだったか、いい話つてのは何だ?」

「まあまあ焦るなよ麦わらのにいちちゃん…そっちの黒髪のねーちゃんがニコ・ロビンだな? いっぺん会ってみてえと思つてたんだ」

それまでの軽薄な雰囲気から一転、鋭い目つきになったフランキーにサンジが軽く腰を落とすもその前に刀の柄に手をかけるゾロ。

「どうしたクソマリモ、てめえもロビンちゃんを守る気になったのか?」

「アホ言えクソコック…どうやらお客さんだぜそれも随分と物騒なな。」

そう言つてゾロが顎で島の方を指し示せばそちらを見たウソツプとナミが叫ぶ。

「なっ! 赤カモメ、なっなんでこんな所に!？」

「しかもなんて数よ! 冗談じゃないわ、タダでさえメリーの事ではないなの!!」

ゾロの言つた客…そこにいたのは赤い海軍マークを背中に掲げた

集団であつた。

## 仲間の危機！ロビンの行く末

ウォーターセブンの外れ、岸边に停泊したメリー号を一個中隊…2  
5人程の海兵が半円状に包围。

そしてその中から一際体格のいい男が前に進みでる。

「さて…ナバロンでは随分と色々やってくれたようだが元気そうで何よりだ麦わらの一味諸君」

赤い海軍マークの入ったコートに鈍色の胴鎧、そして腰に長剣を差したその男にルフィは

「おまっ要塞のドングリ男！おれを捕まえに来たのか!!」

と叫びながら素早く拳を構え、ルフィのその言葉にナミはナバロン要塞でのルフィの台詞を思い出し

「ドングリ…まさか鈍熊のクリーク!?なんで海軍本部中將がここにいるのよ!!」

「中將!?海軍でも上から数えた方が早い実力者じゃねえか!!」

ナミの言葉にウソツプは慌てて立ち上がると愛用のパチンコを取り出して構える。

「へっ、敵は赤いカモメ共か…相手にとって不足はねえな」

「ったく…こっちは大事な話し合いの最中だったのに、まあさつさと済ませてしまおうぜ」

そう言って刀を抜き放つゾロに爪先で地面を叩き軽く腰を落とす  
サンジ

「随分と好戦的な事だ…だが今回は別にお前達を捕らえに来たわけじゃない、今回用事があるのはお前だニコ・ロビン」

クリークのその言葉に一味の視線がロビンに集まる。

「…海軍が私に一体何の用事かしら?」

「ニコ・ロビン、少し我々と共に来てもらおう…まあ断ってくれても構わんがその時はそれ相応の対処をさせてもらおう」

クリークのその様子に

「おいクソゴリラ…ロビンちゃんを捕まえに来たってか?そんなんさせてたまるかよ!!」

そう言いながらサンジが飛び出しそれに続いてゾロも無言で刀を抜き放ち

「ロビンは渡さねえぞ！ゴムゴムのピストルっ!!」

そしてルファイが長く伸ばした腕で威力を増した拳を叩きつけるが「ぐっ!?かてえ!!」

「ちっ、能力者か!」

「盾のおっさんみたいなのか!!ならゴムゴムの…キャノン!!」

ダメージは通らず、ならばもっと威力のある攻撃を当てればいいとばかりに少しの溜めの後にルファイの双拳が突き出される。

「…その程度では倒れてやれんな、熊手拳砲っ!!」

しかしその攻撃さえもクリークは軽く受けると今度はお返しとばかりに掌底を叩き込めばルファイの体は大きく吹き飛ばされ

「ルファイ!」

「クソッこれが中将クラスかよっ!!」

サンジとゾロがそちらに向かうもそれを阻むように

「ボスの邪魔はさせない」

「すまないね、これも任務だからね」

両手にトンファアーを持った海兵と両腕に盾を装着した海兵が二人の前に立ち塞がった。

「あつ！テメエ愛しのハニーちゃんと一緒にいた盾男じゃねえか!!」

当然見覚えのある姿にサンジが怒鳴るも

「いやはやあの時は潜入調査って事でね、本来はこっちが本職さ。海軍本部大佐”鉄壁のパール”…以降お見知り置きをつけてね?」

「油断するなよパール、相手はあの”海賊狩り”と”赫脚”の薰陶を受けた男だ…」

「テメエ…随分とやるようだな」

「海軍本部大佐”鬼人のギン”…別に覚える必要は無い」

ゾロとサンジの前に立ち塞がるギンとパール、そして更にクリークに相対するルファイ…それぞれ緊迫する空気の中動いたのは

「条件が一つあるわ」

そう言って武器を構えるナミ達を手で制して前に出るロビン

「出来る範囲なら聞こう」

「抵抗はしない…その代わり彼らを見逃すのが条件よ」

「な!?何言ってるのよロビン!!」

ロビンのその言葉にナミが驚き

「か、海軍がなんだってんだ!!ロビンは連れて行かせねえぞ!!」

「お、おれだって!腕強化(アームポイント)!!」

連れて行かせてなるものかとウソツプがパチンコを、それを見て  
チョッパーが腕を変化させるも二人の目の前に降り立つ影

「ごめんなさい、でもお願いだからこのまま大人しくしててね?」

「お前!ナバロンの時の!!」

「アピス!?それに熊も!」

シグマが両腕で地面に押さえ込みその肩に乗ったアピスが申し訳  
なきそうに言う。

「さて、悪いがニコ・ロビンは連れて行かせてもらおうぞ?」

「ロビンは連れて行かせねえぞ!!ゴムゴムの…バズーカ!!」

「学ばないな…その程度の威力では倒れてやる事は出来んと言っただ  
ろう」

今までどんな敵でも吹き飛ばしてきたルフィの双掌打はクリーク  
を吹き飛ばすどころか後退させる事すら出来ずそれに対してクリー  
クがサツと片手を上げると後ろに控えていた海兵の一人が大型の銃  
を構えるとそのまま発砲

「ふにゃ…力が…」

そのまま監獄弾…海楼石を用いた鋼鉄製の網に囚われたルフィを  
他所にロビンに手を伸ばすクリークだったがその手はナミのクリマ・  
タクトによって払いのけられる。

「仲間を黙って渡すほど落ちぶれちゃいないつもりよ」

「いい啖阿だ、流石ベルメールの義娘だな」

「アンタどこかで…?」

「さてな、少し眠っててくれ」

それと共にクリークの人差し指がナミの首筋を一突きすると意識  
を失いその場で倒れるナミ。

「テメエくそゴリラ！ナミさんに手え出しやがったな!!」

当然サンジがクリークに蹴りかかろうとするがその蹴りはパールに止められ、ゾロもギンと相対して何度か刀とトンファーを合わせるも攻めあぐねていた。

「さてニコ・ロビン、仲間に残す事があれば言っておくといい」

「そうね……ごめんなさい船長さん、ちよつと行ってくるわ」

監獄弾に囚われたルフィにそう言い残すロビン、止めようとなんとか力が入らないながらも腕を伸ばすルフィだったが

「ああ……くれぐれも追って来ようとしなくてくれよ？それなりに対応しなければいけないからな」

そう言っつてその場から去るクリークとロビン、追いかけてしようとするも独立遊撃隊が立ち塞がり何とか相手が退く頃にはロビンの姿は無かったのであった。



## 花と鈍熊 ドンクリーク

「おれはロビンがいなきやイヤだ！仲間をとられて黙ってなんていられるかよ!!」

「お、落ち着けよルフイ。今行ったらまた赤カモメにやられるぞ？それにロビンがどこにいるのかわかるのかよ？」

「バカ野郎！ロビンちゃんが攫われたんだぞ!!例え居場所が分からなくても仲間が奪われたんなら助けに行くのが道理つてもんだろぅが!!」

「ちよつとは落ち着きなさいよアンタ達！ロビンがあたし達に手を出さなつて意味わかんかったの!?!そのままだとあたし達は捕まつて終わりだったのよ！」

「…どうしたもんかなこりゃ」

仲間であるロビンを連れて行かれ、何の策も無く走り出そうとしたルフイやサンジをなんとか他の者が止める中困惑するフランキー、一方その頃

「あんなお芝居まで挟んで連れ出してくれるとは随分と情熱的ね」

「仕方ないだろう、流石にお前と俺の繋がりがバレるのはまずいからな、どうだ麦わらの一味は？」

停泊したフィーネ・イゼツタ号、その応接室にクリークとロビンの姿があった。

「そうね、いい子達よ？見てて飽きないし」

立ち上がろうとしたロビンを手で制してクリークは飲み物を用意しながら声を掛ければ薄く微笑みながら言うロビン

「仲間に恵まれたようで何よりだ、ポーネグリフは順調か？そのまま麦わらの一味として最果てを目指すのもありだとは思うが…」

「それも悪くないかもしれないわね、今抜けた所でおじさまの負担が増すだけだし…それにあの子達も心配なものね」

「まあ船長からして危なっかしいからな…」

そう言いながらロビンの前にコーヒーを置き反対側に腰掛けると

ロビンと居住まいを直し

「さて…じゃあ本題に入ろうかしら、カフウからの手紙には”力を借りたい”との事だけだったけれど何をやったらいいのかしら？おじさまが頼みだなんて珍しいわね」

ウォーターセブンに向かう途中、カフウが運んできた手紙には手を貸して欲しい事があるからウォーターセブンについたら話を合わせて欲しいと書かれていた。

手紙はクリークの直筆で間違い無かった為ロビンはそれに従い一味の前から姿を消したのだ。

「…かなり危ない橋を渡ってもらう事になる」

「と言う事は政府か海軍関係かしら？」

深刻そうな顔にそう考えたロビンだったが

「エニエス・ロビーに潜入してもらいたい」

クリークのその言葉にロビンは一瞬目を見開く。

「あら…それは随分と骨が折れそうな仕事ね、事情を聞いても？」

”ワノ国”を知ってるか？」

「…確か鎖国をしている新世界側の国家ね、”サムライ”と呼ばれる独自の戦士団を保有しているとの噂だったかしら？」

「その通り…だが情報が殆ど出てこない、というより抑えられてて閲覧が許可されていないが正解か」

「おじさまならそれこそワノ国に直接潜入しそうなものだけれど…」

「…ま、まあ兎に角ワノ国には部下が潜入しているんだが過去にあった事件で不明瞭な部分もあり”サイファーポール”の活動も確認できてな、どうやらワノ国の上層部と世界政府の上層部が繋がってるのはわかった…だからこそエニエス・ロビーとマリージョアの情報室に用事があるわけだ」

ロビンの疑問にそう説明するクリーク、ロビンは成る程と頷きつつ「マリージョアには誰が？パンゲア城程では無いと言え警備は厳しいんじゃないかしら？」

「ああテゾーロの方に頼んだ、彼女なら問題なく警備を出し抜けるだろう」

「彼女：ああトロトロの実の、確かにそれなら何とかかなりそうね。そして私がエニエス・ロビーを担当という事ね？」

「かなり危ない橋になる、報酬も望む物を出すし断ってくれても構わんぞ？」

「冗談言わないでちょうだい、折角おじさまが頼ってくれたんだもの：危ない時は助けてくれるのよね？」

「そりゃ勿論、例え海軍にいられなくなったとしても助けるさ」

勿論ヘマをするつもりは無いが任せろという風に胸を叩くクリークにロビンは少し嬉しく思いつつも疑念点を聞いておく

「どうやって警備を誤魔化すの？マリージョア並とは行かないまでもかなり厳しいと思うし連行される筈の私がいなければ騒がれると思うけど？」

「一応これを嵌めてもらう」

そう言いながらテーブルの上にゴトリと乗せられたのは白い特異な形をきた大きな手錠

「へえ、でも海楼石の手錠なんてつけてたらそれこそ潜入も一苦労なのだけれど？」

見覚えのあるソレにロビンがそう言うが

「安心しろ、アシエ博士に頼んで精巧に作っちゃいるが偽物だ：まあ重さは再現してるがな」

「なるほど、能力を使えないフリしておけばいいのね？」

クリークの言葉に察して偽の海楼石手錠を軽く持ち上げる。

「ああ、とりあえずそれを装着してまずは：：そうだな、何処で聞きつけたのか知らんがアイスバーグがお前に会いたいと言ってきてるんだがどうする？」

「アイスバーグ：ああ、何処かで聞いたと思っただけど確かならウォーターセブンの市長じゃなかったかしら？ガレーラカンパニーの社長も兼任してた筈だけど：：そんな人が私に何の用かしら？」

「まあ予想つくがな：：安心しろ、過去に縁があつてなアイスバーグは俺も少し知ってるが別に騙したり何て事は無いさ」

「予想：：ひよつとしてオハラ関係かしら？思いつくのはそれくらいだ

けれど」

「当たらずとも遠からず……まあ会わなくても問題は無い、少し時間は空くが専用列車が既にエニエスロビーからこつちに向かっているからな」

「…待っておじさま、政府専用列車ってまさか」

「ん？専用列車がどうかしたか？」

「…あの子達が私を追いかけて来るのは十分に考えられるのだけれど、世界政府専用列車って数年前に竣工した装甲列車じゃ？」

「…ま、まあ奴等なら何とかするだろ。それにそれなりに事情通じやないとお前が捕まったからといって真っ直ぐエニエスロビーに行くとは思わんだろう」

ロビンの言葉にクリークは原作での一連の騒動を思い出し一瞬言葉に詰まりつつもまあ主人公達なら大丈夫だろうと考え直しそう言うのだった。

メリーとロビン、仲間を救え！

「おいおいちょっとは落ち着けよお前ら、あんな女を追いかけるともりか？」

「おい海パン野郎、何だその言い草は…てめえにや関係ねえだろうが」  
そう言うフランキーだったがサンジはその言葉にカチンと来たのか睨みつける。

「関係ねえでもねえさ、それにこれは親切心で言ってるんだぜ？あの女に関わるのは辞めとけ…行き着く先は一味の破滅だ」

「お前がロビンの何を知ってるんだよ！ロビンはおれ達の仲間だぞ!!」

鋭い目つきで言うフランキーにルフィもフランキーに詰め寄る。

「全てとは言わねえ、だがおれもなああの女にはちつとばかり用があつて調べてんだよ…てめえらは何であるの女が賞金首になつてるか知ってるのか？」

「そりゃクロコダイルのところにいたんだから色々と裏の関係でしょ？それくらいみんなだつて知ってるわよ」

「あめえ…、まったくあめえよてめえらは。懸賞金額つてのは何も強さだけじゃねえ政府に及ぼす危険度も示している…だからこそあの女は僅か10歳にして”3900万”の懸賞金が掛けられた」

「10歳!?!」

「それも知らなかったってか…それからは子供ながらに上手く生きて来たんだろうさ、裏切つては逃げ延び取り入っては利用し…そのシリの軽さで裏社会を生き延びてきたあの女が次に選んだのがテメエらの一味ってわけだ」

「テメエ…さつきから聞いてりや随分とカンに障る言い方すんじやねえか、ロビンちゃんに何の恨みがあるってんだ!!」

フランキーの言葉に胸ぐらを掴むサンジだったが

「別に恨みなんてねえ…あるとすりゃあの女が手配される原因になつた話くらいだ」

「手配される原因…?」

「はっ、あの女を助けたとしてテメエらが厄介な女を抱え込みまっ

たと後悔する日も遠くねえよ。

それが証拠にあの女がウエストブルーで確認されて約10年…ニコ・ロビンが関わった組織は”全て”壊滅している、奴一人を除いてな…この意味がわかるか？」

「それが何だつてんだ、別に昔は関係ねエだろ!!」

フランキーはそう言い放ったルフィの目を見てため息を一つ吐いた。

「まあいいけどよ、んで…取り返すのは勝手だが何処に行くか知ってるのか？」

「お前!ロビンが行ったトコ知ってるのか!」

思わずフランキーの胸ぐらを掴むルフィであったが

「だから落ち着けての!…恐らくだがエニエス・ロビー、その可能性が高い」

「エニエス・ロビー?何処かで聞いたような…思い出した!確か政府所有の島よね?」

フランキーの言葉にナミが昔聞いた話を思い出す。

「へえ博識じゃねえか嬢ちゃん」

「おいナミ!そのエニエスつてどこにロビンが連れて行かれたんだな!」

「ナミさん、そのエニエス・ロビーつて島は何かあるのかい?政府所有つて言うならあまりいい予感はいしねえが…」

「あたしの記憶が確かなら”正義の門”がある場所よ」

””正義の門”?なんだそれ?」

””司法の島” エニエス・ロビー…そこに連行される事こそが罪人の証として誰もいない裁判所を通過、やがて冷たく巨大な鋼鉄の扉に辿り着く…」

「それが正義の扉つてか?たかだか扉如きに随分と大層な名がついたもんだ」

「はっ大層でも何でもねえぜ長鼻のにいちゃん…正義の門は罪あるものが潜れば二度と日の目は見れねえ絶望の扉さ」

「…その先には何があるんだナミ」

フランキーの言葉に嫌な予感がしたのだろう、ナミにそう聞くル  
ファイであったが

「正義の門を抜けた先の行き先は二つ、一つは世界中の正義の戦力の  
最高峰である”海軍本部”そしてもう一つは捕まった罪人の行き着  
く墓場、拷問室と死刑台が立ち並ぶ政府所有の大監獄”インペルダウ  
ン”」

「まさかロビンは監獄に連れて行かれちゃったのか!？」

「そんな!!ならロビンを助けなきゃ!」

ナミの言葉にウソップ とチョッパーが悲鳴を上げる。

「よし!ならメリーで今からそのエニエスってところに行くぞ!!」

「待ってなロビンちゃん!必ずおれが助けるからね!!」

フランキーの言葉に直ぐに動こうとしたルファイとサンジだったが  
そこにナミが待ったをかける。

「ちよつと待って!ロビンを追いかけたとしてメリーがそこまで持つ  
の?途中でメリーが力尽きたら目も当てられないわよ!」

「ねーちゃんの言う通りだ: : :なあ長鼻のあんちゃんよこのままなら間  
違い無くこの船は途中で沈む、ガレーラの船大工にも同じ事言われた  
んじゃねえか?」

ナミの言葉にフランキーも頷きつつ言う。

「ぐつ: : :だがメリーは頑丈だ、おれが補強してやればロビンを迎えに  
行くくらいなら」

「いや途中で沈む: : :お前らどうしてもあの女を迎えに行くつもりか  
?」

「当たり前だ!仲間は見捨てねえ!!」

ルファイのその言葉にフランキーはガシガシと頭を掻きつつしばら  
く考え

「ちつ、ここまで愛されてる船を見捨てんのも船を愛してる奴を見捨  
てんのも寝覚が悪い: : :おい麦わら。テメエらはニコ・ロビンを取り返  
したとしてこの船は間違いなく沈む、それどころか迎えに行く前に沈  
む可能性も高エ、わかるな?」

「メリーは大切な仲間だ、それでも!今出来る事をやらないで他の仲

間を見捨てるなんておれには出来ねエ!!」

ルフィの言葉にフランキーは大きくため息を吐きながら

「…おいテメエら、こっからぐるりと島を回って東に行つたところに小せえ島があるからそこに船を回せ」

「急に何を言い出すのよアンタ」

その言葉に一味は頭に疑問符を浮かべ、ナミもそう聞か

「いいから黙って従え…テメエらのこの船をこのおれが補強してやるってんだ、当然手伝ってもらおうぞ」

返ってきたのは思わぬ言葉であった。



## 鈍熊市長 ドヤクリークさん

ウォーターセブンの沿岸、多くの解体された船や壊れた船などが集まる通称” 廃船島”

そこに船大工を名乗ったフランキーと彼の指示により移動したゴーイング・メリー号と麦わらの一味

「何これ、まるで船の墓場じゃないの…」

「お前！メリーをこんなところに置いてく気が!!」

廃船島の様子にルフィがそう言いながら拳を構えるが

「おいおい、先走り過ぎだ麦わらのルフィ。いか teme era、補強はしてやるがこの船は間違いない最後の船出になる…場合によっては再びこの場所には戻ってこれねえ、今のうちに降ろすモンは降ろしておけ」

とルフィを宥めつつ言うフランキーにナミは頷き指示を出す。

「…みんな、航海に必要な最低限の物以外は宿に置かせてもらいましよ」

「それから… teme eraはこの船の最期を看取る覚悟があるんだな？」

「…メリーが走れなくなるのは悲しいけどよ、でも別に今までの旅が無くなる訳じゃねえんだ。覚悟なら出来てる」

「へっ、いいぜ麦わらのルフィ… だったらこの船の修理はおれフランキーが請け負った!! そうだな… 半日ってどこか、それまでに荷物は運び出しておくとして… 何人かこっちを手伝ってもらおうぞ」

「ならおれが手伝うぜ！」

「あ、おれも手伝う！ 力仕事なら大丈夫だぞ!!」

そう言いながらフランキーについて行こうとしたウソップとチョッパーにナミは

「ちよつと！ 先に自分達の荷物を纏めなさいよ、特にチョッパーは船医なんだからね!!」

そう言いながら少し寂しそうにメリー号の船縁を撫でるのだった。

一方その頃ウォーターセブン、ガレーラカンパニー本社屋の応接室

にて

「ンマー、横槍を入れてすまんなクリークさん」

「別に知らない仲じゃ無い話すくらの席は作ってやるさ、どうせ専用列車が来るまでは待たなきゃならんしな」

ウォーターセブンの市長にしてガレーラカンパニーの社長であるアイスバーグと海軍本部中將であるクリークが顔を合わせていた。

アイスバーグたっての希望によりニコ・ロビンと一度話をさせて欲しいとの事だったので、公式には政府専用海列車が到着するまで警備しやすい場所として社屋を提供という事にしつ

「そして…はじめましてになるかニコ・ロビン、おれはアイスバーグつてもんだ」

「会えて光栄よ、市長にして社長そして優秀な船大工とも聞いているわ」

こうしてアイスバーグとニコ・ロビンの対談が成ったのであった。

「…済まないがクリークさん、ちよつと話があるもんで二人にしてもらつても？」

「む…流石にいくら市長とは言え一般市民と賞金首を二人きりにするわけには」

「ンマー、そこを曲げて何とか頼む」

そう言いながら頭を下げるアイスバーグに少し思案しつつロビンを見れば指を軽く動かし”問題ない”とのハンドサインに

「…まあそこまでして頼むのならよっぽど大事な用事なんだろう、部屋の外にいるから終わったら呼んでくれ」

「すまないクリークさん、後で礼はさせてもらう」

そう言うアイスバーグの言葉を背中に受けつつ廊下に出て扉を背に、恐らくアイスバーグはロビンの真意について問いたただすのだろうと考えながら静かに待つ。

アイスバーグもプルトンと呼ばれる古代兵器が存在する事を知っている身、同じく古代兵器復活の可能性を持つニコ・ロビンがいる以上復活した古代兵器に対抗せざるを得ない以上それを確認しておくべきだと考えたのだろう。

そう考えていると廊下の先にカートを押す人影、そちらを見れば「ああ秘書さん、アイスバーグなら大事な話中だから今は止めておいた方がいい」

カートの上にはトレイにポットと人数分のカップを乗せており恐らく気を利かせて飲み物を持ってきたであろうカリファの姿にそう声をかけた。

「まさか敬愛すべき社長と賞金首を2人つきりにしたのですか？海兵としての自覚が足りませんね、もし社長が人質に取られたらどう責任を取られるおつもりで？」

鋭い目つきでそう言うカリファに確かに何も知らなければ尊敬する社長の身を心から案じているように見えるなと思いつつ見聞色で周囲を探る。

「まあ相手は海楼石の手錠をしている上に何かあったらこちらで何とかするから問題ない」

「…いいでしょう、何かあった場合然るべき筋に報告させて戴きます」「それより秘書のお嬢ちゃん、ちよつと面白い噂を聞いたんだが…」「別にお嬢ちゃんと呼ばれる程の歳ではありません、セクハラです。それで面白い噂とは何ですか？」

クリークの言葉にムツとしつつも大人しくアイスバーグの話が終わるのを待つ事にしたのだろう、カートを横に避けてその場でカップの一つに紅茶を注いでいくが

「サイファールポールって知ってるか？」

「確か世界政府の諜報機関ですね、それが何か？」

「一般的にはNo. 1からNo. 8の八つの部隊に分かれているとされているが実は9番目の部隊があるらしいんだよ」

「それは初耳ですね…それが面白い噂ですか？」

「まあ続きがあつてな…そのサイファールポールNo. 9がこのウォーターセブンで暗躍しているらしい」

「そんな存在がこの島に？一体何の目的で…」

顎に指を当てて思案するカリファ、その姿に焦った様子は一切感じられない。やはりCP9の諜報員だけはあつて顔に出すような愚

は犯さないようだ。

「これも噂だが実は市長であるアイスバーグが世界政府にとって都合の悪い物を持っていているらしくてな…それを奪取する為に潜入しているらしい」

「興味深い話ですね。実際世界政府の役人であるコーギー殿も頻繁に訪ねて来てますし、もし本当なら社長を守る為にも警護を増やすべきですね」

そう思案するカリファを他所に暫くして扉を開けたアイスバーグが出てきて話は終わったと伝えてきたのだった。

## 水都策謀 トンクリーク

ロビンとの面会を無事に終えたアイスバーグにカリファに聞こえない範囲で少し考えていた事を伝えてみる。

「ンマー確かにアンタの懸念は最もだが生憎とおれの手元にあるのは本物じゃない」

「ああ、そこら辺ならトムさんから聞いています：別に本物じゃなくていいさ、”誰かさん達”が誤認してくれればいいだけの話だからな」

「世界政府：確かに最近コーギー氏がしつこくてな」

「なに、悪いようにはしない：必要なのは”何らかの設計図をアイスバーグから俺が受け取った”という事実だけだ」

「ンマー：いいだろう、あんたはトムさんの恩人でフランキーの恩人でもある。アンタ程のお人が言うんなら信じてみるさ：設計図はこつちだ」

そうしてアイスバーグと共に執務室へ、床の金庫から取り出された精巧な偽物の設計図を受け取ると

「確かに：これは”本物”として扱わせてもらおう、これでトムさんからアンタに受け継がれた世界政府が”執心の”設計図”は海軍の手に渡ったわけだ」

封筒に入れそのまま懐に仕舞った。

「やれやれ：これで肩の荷が下りたな、ンマーいい加減にコーギー氏にもうんざりしてたところだな」

「まあ存在が世界政府に漏れた以上遅かれ早かれ何らかの手を打たなきゃならなかったんだ、そのまま隠し続けておいても強硬手段に出られる可能性が高い」

「ンマー：随分と物騒な事だ」

「いやいや充分ありうる話さ、サイファーポールは知ってるだろう？」

「政府の諜報機関：相手が悪いか、このままおれが持つていても奪われる可能性があるな」

「奪われるだけで済めばいいな：9番目のサイファーポールが動いて

いる」

「…殺しの許可を持つサイファーポール、都市伝説じゃなかったのか」  
「当然ここにも深く入り込んでいる…誰の事か聞くか？」

「ンマー…別に言わなくても予想はつく」

「そうか…流石市長にして社長、言わなくても秘書と職長のルッチが  
CP9だと見破っていたか」

「なっ!?カリファとルッチが!」

そんなクリークの言葉に驚いたように目を見開くアイスバーグそ  
んな彼にクリークは

「…予想だにしてなかった顔だな」

「いや、二人は8年以上ここにいるんだぞ!」

「そりゃ諜報員だからな…:とか予想って誰だ」

「てつきり裏町のマイケルとホイケルかと…」

「誰だよ!」

そんなやりとりをしつつも説得により無事に目的であったプル  
トンの設計図(偽)を手に入れたので

「後は世界政府にこつちが持つてる事を伝えりやいか…」

そう考えつつ仕事に戻るといふアイスバーグと別れロビンの待  
つ応接室へ、そしてその道中に肩に鳩を乗せ帽子を被った男の姿に立ち  
止まる。

「…確かガレーラの職長の、ルッチだったか?アイスバーグでも呼び  
に来たか?アイツならドックに向かったらしいが」

「ポッポー、こいつはロブ・ルッチでおれは鳩のハットリつてもんだ!!  
アイスバーグさんを呼びに来たんだが…:入れ違いになったか」

喋り出した鳩を見て随分と器用なもんだなと思いつつも丁度いい  
のでこれ見よがしにアイスバーグから受け取った封筒を取り出し

「そーいや最近世界政府から役人がしよつちゆう顔を出してたらしい  
が…原因となってるもんはこつちで預かったからアンタら職人さん  
は安心して仕事してくれ」

そう手の甲で叩きながら言えば

「…それは?」

「大きな声じや言えねえがとある特殊な船の設計図でな、どうやらこれ。狙ってる奴がいるらしくてそれならば…とアイスバーグ社長がこっちに預けてくれたわけだ」

とほぼ核心を言ったにも関わらず表情一つ変えないルッチ。

「いやはやそれはありがたい…こちらとしても海賊の船を作る手前政府の目があるとやり難くてな」

「随分と上手い腹話術だな…まあガレーラカンパニーは政府と海賊の船を作っている以上仕方あるまい」

「クルツポー、しかし特殊な船の設計図か…どんなものか見たい所だが」

「やめとけやめとけ、見たが最後サイファーポールに狙われてこうだぞ?」

そうやって首にトントンと手刀をあてて見せるとルッチは肩をすくめつつ

「随分と物騒な事だっポー」

「それだけの代物って事さ…とりあえず海兵がいるとやり辛いかもしれんが夜までには出て行くから安心してくれ」

そう言っただけのままロビンの待つ応接室へ向かったのだった。

一方で声をかけられたルッチはカリファアの報告によりクリークの真意を確認する為にわざと目の前を通りがかつたのだが

「厄介な…赤カモメが首を突っ込んでくる所か設計図まで奴らの手に渡っているだと…」

思っていた以上の厄介な事態に表情には出さないながらも考え込みつつ歩く。

元々カリファアから報告を受けていたのは「サイファーポールがこの島で暗躍している事を察している」かもしれないとの事でカリファアが疑われているのか、潜入しているカリファアと自分がバレているのか、それとも本当に単に世間話で話したただけなのか…それを確認する為だった。

世界政府にとって重要懸念事項となっている”古代兵器の設計図

” …とは言え狙っているのはCP9長官で過去にも設計図を狙ったスパンダムではあるが、何はともあれスパンダムはその”設計図”の奪取の為に所持していると思いき二人、アクアリアに住む”トム”とそして彼の優秀な弟子でありウオーターセブンのボスである”アイスバーク” …この二人のどちらかが所持していると断定、それぞれに人員を振り分け調査、監視を行なっていたのだが…

「古代文字を読む事が出来るニコ・ロビンの身柄に加え古代兵器の設計図も奴の手の内…早急にトムを監視しているカクとブルーノを呼び寄せるべきか、設計図が赤カモメの手に渡った以上潜入の意味も無い」

そう結論を出し一応は上司になっているCP長官スパンダムに密かに連絡をとるのだった。



## 花と鈍熊 ドンクリーヌ

ルッチとの会話を終えてロビンがいる応接室へ、見張りを行なっていた海兵と入れ替わりにフィーネ・イゼツタ号に伝令を任せロビンの反対側に腰をかける。

「あら、おかえりおじさま…随分と色々動いてるみたいね」

「おいおい、周囲に気配は無いからいいが気をつけるよ？繋がりがあるれば大変な事になるぞ？」

「あら、私も昔と比べたら成長したのよ？近辺の気配程度なら読めるわ」

ロビンのその言葉に軽く驚きながら見聞色の覇気を軽く広げてみるがその言葉通り近くに人の気配無く

「へえ…それは見聞色の覇気も習得が近いな、だがとつかかりを掴めたとはいえまだ先は長い、修練を怠らない事だ」

「それは勿論、それよりおじ様が昔に言っていたけれど見聞色の覇気を習得した者は未来を見通すようになると言っていたけれど本当？」

「ああ”未来視”か…相手の気配をより強く感じとる”見聞色の覇気”、そして更には相手が次に何をしようとしているか見えると言う。

そしてその一つ先が”未来視”、言わば見聞色の真髄であり少し先の未来を見通す事が出来る…らしい」

「らしい？おじ様はその未来視とやらは使えないの？」

「まあな、俺はそんなトンデモ能力持ってねえよ」

「海軍でも上位の戦闘力を持つおじ様が？よっぽど難しいのね…」

「いや、どちらかと言えば適正の問題だろう、昔っからどうも見聞色の覇気は苦手だな…相手の気配を探ったり相対した相手の動きを読む程度は出来るが未来を視るなんざとてもじゃないが無理だな」

「相手の気配を感じとり相手が何をしようとしているのか見通す力…空島の心綱（マントラ）に似ているわね」

「ご名答、そのマントラこそ見聞色の覇気の事だ…エネルギーはそれに加えて雷の力、微弱な電気の力で電波を操り強化していたらしいがな」  
「空の神様の事も知っていたのね…そう言えば皆で空島に行った時に

面白い物を見つけたのだけれど…」

「おお！黄金の鐘か、以前見学した時の写真は纏めてあるぞ？何枚かは渡そうと思つて持つてた筈だが…」

「黄金の鐘樓の土台に落書きがしてあつたのだけれど」

ロビンの言葉にコートの内側を探つていた手が止まる。

「あー…誰だか知らんが貴重な遺跡に落書きをするなんて罰当たりな奴もいたもんだなあ」

「ええまったくね…人は過去には戻れない、無価の大宝に”D・クリーク参上!!”なんて落書きをするなんて、ひどい事するわね」

「いや、まあ溶剤で落とせるかもしれないし彫つてあるよりもましなんじゃないか？」

「色々と聞きたい事はあるけれど…何か弁明はあるかしら？」

「…その場のノリと勢いでやった、すまん」

などと身長3メートルを超える大男が身の丈半分ほどの女性に不覚にも頭を下げている頃

『クソがあー！ニコ・ロビンの身柄に加えてプルトンの設計図を手に入れただあ!?!たかが中将如きが何処まで祟りやがる!』

エニエス・ロビーにてルツチの報告を受けたCP長官”スパンダム”は荒れていた。

”設計図”がアイスバーグの手から渡つた以上潜入の意味は無い、我々は引き上げるぞ」

電伝虫の向こうで吠えるスパンダムに対してルツチは言うも

『鈍熊のクリーク…トムの時に加えてまたしてもおれの邪魔をするか!!』

余程腹に据えているのかぶちぶちと文句を言うスパンダム。

「おい聞いているのか、次の指示を寄越せ」

まあ無理も無い、かつてスパンダムが司法船襲撃の罪をトムに被せプルトンの設計図を手に入れるべく動いたが、それはクリークの手によつて防がれたのが8年前。

そして今回は古代文字を読める可能性を持つオハラ生き残りに

加え狙っていた設計図を目の前で搔つ攫われるという事態にスパンダムはイラつきながらも多少強引な手を出して使つてでも取り戻すべく指示を出す。

『ちっ…時間がねえが早急にブルーノとカクをそっちに向かわせている、テメエらは奴等に協力するフリをして政府専用列車に同乗し奴から設計図を奪取しろ!!』

「ほう…あの赤カモメと対立するつもりか？」

『それが何だつてんだ!!こっちは五老星からの指示を受けてんだぞ？たかだか田舎周りの中将如きが…このおれに楯突こうつてんなら潰してやろうじゃねえかよ!!』

「おれ達にニコ・ロビンの身柄の確保と設計図の奪取をしろと？随分と無茶を言う…」

『はっ、専用列車が出た以上どうせウオーターセブンからはこっちに直行だ…別に”中で何が起きよう”と関係ねえ、例え護送している海兵が襲われて死んでもな』

「…いいだろう、だが相手はあの海軍最強と名高い赤カモメだ。期待はしない事だな」

『ワハハハハ、少なくともお前らCP9は最強の諜報機関…超人であるお前らが負ける筈ないだろう』

「だどいいがな…まあ相手は中将最強と名高いあの男か、不足は無いな」

『コーギーの奴にはこっちから言っておく、恐らく専用列車がそっちに着くのは夜遅いと思うがそこで合流しろ』

その声にルッチは通信を切るとカリファと共に直ぐに引き上げの準備にかかるのであった。

## 装甲列車 ドンクリークさん

ウォーターセブンにある海列車専用の駅「ブルーステーション」、普段は他の島との定期便や観光客で賑わうホームだったが今は物々しい警備で海兵や世界政府役人などが所々に屯しており一般人の姿は殆ど無かった。

「おーおー、仮面なんざ着けてあれで誤魔化せてるつもりか？」

そんな中でクリークは「重要参考人」となっているロビンを傍に仮面をつけて離れた所に佇む仮面をつけた2人、それから数名の黒スーツの政府役人を見ながら言う。

「ボス、相手は世界政府の諜報機関なんですから無用な警戒はさせませんで下さい」

そんなクリークと同じく傍にいたギンが苦言を呈するも

「別に”こつちからは”何もしねえよ、それよりも麦わら達の様子は？」

「現在廃船島にて船の改修しています、間に合うかは五分つてとこですすね」

クリークとギンがCP9に軽く視線を向けており視線を向けられたルッチ達は

「ルッチさん！カリファさん！長期任務ご苦労様です!!」

並んで敬礼する黒スーツの役人達に顔を顰めていた。

「仰々しい…赤カモメの目もあるんだ、直ぐにやめさせろ」

「はっ！申し訳ありません!!」

大袈裟な敬礼をやめさせたルッチは自身に来る視線に気づきそちらに目をやれば

「鈍熊の横にいるあの黒髪の女がニコ・ロビンか。見てやがるな、気づいたか？」

「まあ仮面だけで誤魔化せるものでもないでしょう、わたし達は実際に彼と対面している訳ですし」

「まあいい、おれ達は予定通り奴が持つ設計図とニコ・ロビンの身柄を抑えるだけだ」

「いつ仕掛けますか？その貴方、カクとブルーノの合流は？」

「はっ！先のサン・ファルドにあるクーナ・ステーションにて合流する予定です!!」

「何にせよ簡単には行かんだろう…だが相手にとって不足は無い」

その言葉に疑問を浮かべる政府役人を他所にルツチは仮面の下で  
凜猛な笑みを浮かべていた。

そして響き渡る警笛にホームにいた者達がそちらを見れば波を蹴  
立ててゆつくりと侵入してくる重々しい黒鉄の車体…この世界には  
未だ二機しか存在しない海列車2号機”ファイブスター”の到着で  
ある。

「アンタらが運転士か？」

「俺は機関士つすけど…」

「私が運転士ですけど何か用ですか海兵さん？」

「名乗り遅れたな、中将を務めさせてもらってるクリークだ。運転士  
はいるか？」

「中将?!運転士のクニヤージ・ポジヤルスキーです！」

「失礼しましたっす！機関士のドミートリー・ドンスコイっす!!」

「あまり畏まらないでくれ、少し頼みたい事があってだな」

「はあ…」

「我々の旗艦であるファイネ・イゼツタ号が並走する予定だからあま  
りスピードは出しすぎないでくれよう…」

「こいつは機嫌を取るのが大変なんですがね…わかりました、では指  
示通りに走らせてもらいます」

到着と同時にクリークは先頭車輛に近づき一言二言話すと装甲海  
列車の威容を眺め

「鉄甲戦艦程では無いが…普通の海賊にや荷が重いかもしれんな」

そう考えつつ客車へと乗り込みロビンもそれに続いて乗り込む。

鋼鉄の装甲を持ち、あちこちに砲塔や機銃を備えたこの海列車であ  
るが元々ただの試作機であり失敗作…蒸気機関の制御が出来ずス  
ピードを上げ続けるブレーキの効かない暴走列車であったが、海列車  
の就航という快挙に際してその性能に目をつけた五老星が製作者で

あるトムに政府専用車の製作を依頼、その過程で希少物の運搬や罪人の護送などに際し身を守る為武装化なども持ち上がり完成したのが装甲海列車”ファイブスター”であった。

その装甲海列車”ファイブスター”にクリークやロビンに続いてどンドン乗り込んでいく独立遊撃隊の海兵やルツチやカリファ達政府関係者が乗り込んで行き日が落ちた中を警笛と重々しい、鉄の軋む音を響かせながら動き出し、それと共に連絡を受けた独立遊撃隊旗艦である”フイーネ・イゼツタ”号がゆつくりと岸壁を離れ動き出したのだった。

一方その頃麦わらの一味+αのいるウォーターセブン郊外の廃船島

「おしーこれで完成だ!!」

フランキーの声にルフィがそちらを見れば

「おー！メリーがカメになった!?!」

言葉の通り羊頭をしていた船首が姿を変え言葉通りカメをイメージした姿、その上比較的小型であったメリー号であったが一回り大きく角張ったデザインとなり、更に甲板がまるで亀の甲羅のように覆われていたのだった。

「確かゴーイングメリー号だったか…こいつあゴーイングメリー号改めてアーマード・メリー号だ！」

ダメージを受けていた竜骨に新しく沿う形でキールを補強、した上に外装も補強…海軍とやり合うんだ、防御力も必要になる。外殻原理を用いて船を完全に覆う代わりに防御力と耐久力を持たせたもんだ。

鉄材を使ってる上に大型化したから元のメリー号に比べりや足は遅えがな」

「ちよつと、ロビンを取り戻すのなら少しでも足が早い方がいいんじゃない?」

フランキーの言う事が事実であれば少しでも早くロビンの身柄を取り返すべきとの判断であり当然の疑問。

「へっ安心しろよ嬢ちゃん…こいつにやおれ開発の”コーラエンジン

”って機関を積んでんだ、あくまで帆走の補助だがはつきり言つてこのアーマード・メリーなら必ず追いつくぜ」

だが胸を張つてそう自慢するフランキーにナミは納得するも今度はウソツプの

「スピードが出るのはいいがメリーは大丈夫なのか？竜骨にダメージがあるんだ、走つてる最中にメリーが力尽きでもしたらそれこそロビンを助ける所の話じゃねえぞ？」

との疑問にフランキーはアーマード・メリー号の外装をコンコンと叩きながら説明する。

「竜骨は補強してあるつての、ついでに外装もジャンク理論つて船体構造論を参考にしてんだから安心しろよ」

「ジャンク理論？何だそりゃ？」

「竜骨を使わねえ船の一種さ、九蛇とか花ノ国の一部なんかで使われてっし：そうだな近海だと縛り首のビガロとかの船だな」

横で聞いていたサンジの疑問にそうフランキーが説明をするも首を傾げる一同に

「ま、まあこいつなら追いつけるだろうつてこつた：ほらさっさとしねえと追いつけなくなるぞ!!」

フランキーのその言葉に一同は相互に頷き合い

「おし、じゃあロビンを助けに行くぞ!!」

ルフィの掛け声と共に出航する準備を始めたのであった。

## 列車襲撃 ドンクリーク

既に夜もふけた中、海軍独立遊撃隊旗艦である”フィーネ・イゼツタ号”及び罪人とされているニコ・ロビン、クリーク達海軍一行、C P 9 達政府関係者を乗せた政府専用列車”ファイブスター号”はウォーターセブンを発ち、サン・ファルドで政府関係者を収容した後一路エニエスロビーへと向かっていた。

その先頭車両、貴賓室にてクリークは聞こえてきた音に対して目を開く。

「やはり来たか…」

その言葉に向かいに座っていたロビンがそつと耳を澄ませば軽く聞こえる砲声と騒ぎ声、更に車両が大きく揺れると共に減速、そしてややあつて後部車両からこちらに駆けてくる足音と共に貫通扉が開かれ海兵の1人が駆け込んで来た。

「ほ、報告します!!後方より小型船一隻、旗印は髑髏に麦わら…麦わらの一味です!恐らくニコ・ロビンを取り返しに来たものかと!!」

「報告ご苦労、状況は?」

「発見が遅れた為既に最後部車両にて戦闘状態になっております!」

海兵のその報告にクリークは一瞬固まりややあつて

””フィーネ・イゼツタ号”が並走していただろう、接近に気づかなかったのか?」

「それが…灯りを落としてこの闇夜に紛れて接近されました、気づいた時には最後尾の砲塔車両に船ごと組みつかれています!!」

「さっきの衝撃はそれか…要するに今現在麦わらの船を引き摺ってる状態で更には交戦状態か」

「申し訳ありません…まさかこの闇夜の中を明かりも点さず接近してくるとは考慮してませんでした」

「まあ随分と腕のいい航海士がいるのだろう、それより政府側はどうしている?」

「サイファーポールの方々ですか?彼らなら座して動かず、各々の車両にて万全の状態を迎え撃つようです」



「となると迎撃に出ているのは海兵だけか」

「はっ、後部2車両に待機していたTボーン大佐率いる第58海兵隊が交戦中です!」

「報告」苦労、近づかれる前に気づいていれば大砲撃ち込んで終いだっただが…まあこちらは俺とギンが見ているし持ち場に戻ってくれて構わん」

「はっ!では失礼します!!」

クリークはそれと共に再び後部車両に向かう背中を見送りつつやあつてため息を溢した。

「来るかもしれないとは思っていたけど随分と大胆に攻め込んできたわね」

そう言つてクスリと笑うロビンに

「愛されてるじゃねえか…まあ思ったより大惨事になつてるがな、これも原作補正つてやつか?」

クリークは最後の方だけ小声で呟くと少し思案する。

「それで?私は攫われてもいいのかしら?」

「そうは言つても潜入はしてもらいたくないからな迎撃はさせてもらうさ…もつともどつちかと言えば相手は麦わらと言うより」

ロビンの言葉にそう返すクリークがそこで返事を途切れさせると共に窓が蹴破られるのは同時であつた。

「さて髑髏の被り物に熊の被り物とはまるで仮装のような格好だな…麦わらの一味つて事にしておこうか。要件は?」

乱入者に対して素早く視線を巡らせこの仮面は誰だつたかな?と、考えつつ構えれば控えていたギンも素早くトンファーを構える。

それに対して乱入者2人も無言のままゆっくりと構えそのまま体勢を低くクリークとギンの2人に襲いかかり正体不明の二人組とクリーク達は衝突したのであつた。

一方、その戦闘を窓から見ている者がいた。

「なんで戦闘がおきてんだ？」

両手足に自身で発明したタコを模した特殊な装備“オクトパクツ”を着けて列車の外板にへばりついていたのは麦わらの一味の狙撃者のウソツプであった。

「ちよつとウソツプどうしたのよ、ロビンはいたの？」

ナミの声にハツと意識を戻して窓を覗き込んでいた体勢から列車の上に戻ると

「いや、いるにはいたんだが…」

「いるんならさっさと助けに行くわよ！」

「いや、ロビンはいるんだがなんか変な被りもんの奴らとあん時の海兵がやり合ってたんだよ」

ウソツプのその説明に同じく両手足にオクトパクツを装備し動くとしたナミは再び身を伏せると

「…え、なに仲間割れ？」

「わかんねえよ、どうする突っ込むか？」

「予定が崩れたわね…回り込んで何とかロビンを救出できないかしら？」

そう言いつつ考え込む2人、ロビンの救出にあたって麦わらの一味は一つの作戦を立てていた。

装甲列車の構造はフランキーが知っていた為恐らく捕まっているのは先頭の貴賓室かその次の兵員車両だろうと判断しまず改造されたアーマード・メリーにより最後部から夜闇に紛れての強襲。

そしてチョツパーとフランキーにメリーで待機してもらい離脱準備を整えてもらいつつ、戦闘力に長けたルフイ、ゾロ、サンジの3人で列車の後部にて派手に騒ぎを起こしてもらい戦力をそちらに集める。

そして手薄になった隙に上部からウソツプとナミがロビンを救出…という筋書きだったのだが予想通りロビンは先頭車両にいたものの海兵と知らない戦力が交戦しており割って入れそうな雰囲気ではなかったのだ。

ウソツプの言葉に少し考え込みナミもそつと窓から顔を覗かせれ

ばそこにはいつか見た海軍中将とトンファーを持つ海軍佐官、そして  
髑髏と熊の被り物に派手な仮装服の二人組が激しく戦闘を行なっ  
ており

「仲間割れってわけじゃなさそうね、顔も隠してるしロビンを狙って  
る別組織ってのが妥当な線かしら」

「どうする？ 反対側から回り込んでロビンと合流して逃げるか？」

流石にそんな戦闘の中に割ってはいるほど豪胆では無かった為そ  
う提案するとナミは

「ウソップ…」

「お、なんかいい手を思いついたのか？」

「ちよつと行ってロビンを攫ってくるのよ！」

「あんなに割って入ってか!? 無茶言うな！」

「まあ冗談はおいといて…とりあえずこの列車を停めるわよ」

そう言って動力車両…メリーに組みつかれ速度を落としたものの  
未だに元氣よく黒煙を吐き出す機関車両の方に向かったのだった。

## 武装列車の大騒乱

Tボーン大佐は善人である。

元はとある王国の騎士という一風変わった経歴を持ち、無益な殺生を好まず民間人を守るために海軍に所属、ストレート軍曹を副官として主に近接戦闘に特化した第58海兵隊の隊長を務めている。

西に迷子がいれば行つて一緒に親を探し、東に困つたお年寄りがいればおんぶして目的地まで連れて行き、具合の悪い人がいればすぐさま救護に入り、関わつたものは最初はその顔の怖さに慄くものの一度関わればその善性に気づき”顔は怖いけど良い人”という結論に落ち着く。

だがそんなお人好しとも言える性格をしている彼だが戦闘となれば愛剣である身の丈ほどの巨大なバスタードソード”バンブー”を手に優れた剣士として戦う海軍でも指折りの実力者であり、今まさに愛剣を手に襲撃者と戦つていた。

「大事な仲間を取り返しに来たとやえど…それを見逃しては罪なき市民達が救われぬのだ!!直角閃光…ボーン…空割(ソワール)!!  
それと共に繰り出されるのは直角に軌道を描く斬撃に相對したゾロが素早く両手に持つ二刀で何とか逸らし

「真つ直ぐな太刀筋だが…随分と鋭いじゃねえか!」

そのまま斬りかかるも軽装を主とする海軍において鉄兜にスケイルメール、更にその上から和胴鎧という重装備にその刃は阻まれる。

更には

「前にいる者は全員退いておくのだあ!!吸気機構作動…食らうがいい海賊共おっ!!直列直進・猪突猛進!!」

襲撃にあたつて自身の武器を貨物車両にとりに行つていたストレート軍曹が通路の先で自身の武器である巨大なランスを構え何やら操作すれば甲高い音と共に周囲の空気を吸い込みややあつて爆発的な加速と共に真つ直ぐに突つ込んで来ており

「なあっ!?あつぶねえだろ!!」

「なんだあの加速力!」

「すげー!!なんだあれカッケー!!」

三者三様戦闘を行なっていた3人：ゾロ、サンジ、ルフィは1人は目を輝かせながらも慌てて飛び退きそのまま通り過ぎるのを見送った。

しかし休んでる暇もなく

「よそ見とは随分と余裕があるようだな！直角飛閃・ボーン珠雨（ジューウル）!!」

Tボーンのまるで雨のような連続突きが襲いかかる。

「させつかよ！タリア：トリーチェ!!」

「嵐脚だと!？」

振り抜かれるサンジの脚が鎌風を生み出すとTボーンへ真っ直ぐ向かい、海賊が海軍の技を使った事に驚いたTボーンの一瞬の隙をつき

「本当ならサシでやり合いたかったが：悪く思うな！三刀流・牛針!!」

ゾロの3刀による連続刺突が打たれようとした所で

「うまく避けたな海賊共！だがおれの槍から逃げられると思うなよ！

直列爆進：猪突猛進!!」

それと共に先程走り去っていった方角から再び飛んでくる巨大なランス：とそれを手にしたストレート軍曹。

ゾロとサンジ、ついでにTボーンも慌ててその場所を避けるもその進行方向にはルフィが仁王立ちに待ち構えており

「何やってんだルフィ！さっさと避ける!!」

ゾロのその言葉にルフィは

「しっしっし：ちよつと試してみてえ事ができたんだ」

と返すのみ、それを見てストレート軍曹は勝ちを確信し

「何をする気か知らんが：おれの辞書に曲がるという文字は無い!!そのまま串刺しになるがいい!!」

自身も踏み込む事で更に加速、それに対してルフィは自身の右手の指先を左手で真っ直ぐに引っ張り前方に構える。

「ゴムゴムの：盾!!」

それを見て思わず天を仰ぐゾロとサンジ、もつとも見えるのは無骨

な天井だったが。

「馬鹿かお前は！そんなんで受け止めれるか!!」

「ちっ、世話のやける!!」

それと共に飛び出すゾロとサンジ、かたやルフィを通路から退けるべく、かたやストリート軍曹を蹴り飛ばしに動くも

「何処へ行くのだ、まだ決着はついていないぞ!!」

ゾロはTボーンに阻まれ

「っ！目測を誤ったか！」

サンジの蹴りは急加速したそのスピードに虚しく空を切りストリート軍曹の巨大なあのランス：海軍特殊兵装研究班で開発された”ダイアルによる前線突破を目的とした試作6号兵装”は自信満々に両手を構えたルフィと激突したのであった。

時は遡り最後尾では麦わら一味と海兵隊が、貴賓車両でクリーク及びギンと正体不明の2人が戦っている頃。

その隣の兵員輸送車両ではCP9のルッチとカリファが襲撃に対して動こうともせずリラックスしていた。

本来であればアクアリアに出向しておりサン・ファルドで合流したカクとブルーノもいる筈だが2人の姿は見えない：何故なら何を隠そうクリーク達と戦闘を行なっている2人の襲撃者はルッチ達と同じくCP9の一員であるカクとブルーノだからである。

本来で有ればここにいる4人で襲撃をかけプルトンの設計図とニコ・ロビンの身柄を奪取したいところではあったが流石に政府関係者と海軍の間で表立って争いを起こすわけにはいかず仮面をつけてるとは言え顔が割れているルッチとカリファは待機、顔を見られていないカクとブルーノが念の為に顔を隠した上で襲撃となったのだった。

「上手くいくでしょうか…」

「奴等も六式を修めた超人：相手が本部中将とは言えそうそう遅れはとらん筈だ」

「しかし2人で良かったのですか？バレると面倒な事になるのではな

いかと」

「なに、どうやら麦わら達が仲間であるニコ・ロビンを助けに来ているんだ…あの被り物の2人もきつと麦わらの一味に違いない。

例え身柄を確保されたとしてもこちらに引き渡させる事は可能だろう」

ルツチのその言葉にカリファはまあ自身達の長官であればそれくらい強権を振るうだろうと納得し方が一に備えてびっしりと棘が生えた鞭を手元に引き寄せ、ルツチも指を鳴らしながら獰猛な笑みを浮かべるのだった。

## 激突！海賊狩り V S 船斬り！！

結論から言うところルフィの思いつきはそこそこ上手くいった…が、誤算だったのはストリート軍曹…ひいては”試作6号兵装”の突破力。テスターとしてストリート軍曹が持つこの武器、元はクリークの専属武装開発班が前身となる”海軍特殊兵装開発班”にて開発されたそれは空島の特産であるダイアル、その中でも風を吸気、排出する風貝（ブレスダイアル）複数個を今までに培った機械技術と融合させ”前線の一点突破”をコンセプトに作られたこの長大なランスはルフィに止められはしたもののその圧倒的推進力によってそのまま直進、ルフィを巻き込んで戦っていた第五車両の扉を貫通はおろかぶち抜いて第四、第三車両まで吹き飛んでいったのであった。

「まったく世話のやける…おいくそコック！」

「おれに命令してんじやねえよマリモ野郎！」

それを見たゾロはサンジに声をかけ、サンジも当然とばかりにルフィを追いかける。

「逃すと思っっているのか!!直角閃光”ボーン空割!!」

「テメエの相手はおれだよ!三刀流…竜巻!!」

当然Tポーン達海兵は止めるべく自身の得意とする武器を手にサンジの方へ向かうも三刀を構えたゾロの前に吹き飛ばされた。

「ぐうっ!何という凶暴な太刀筋!!剣客隊を撃ち破ったその実力は確かだったか!!」

「最初は真っ直ぐすぎて読み易いと思ったが…アンタこそ随分と鋭い太刀筋だな!」

「知れた事!私は海軍本部大佐、罪なき人々の為にこの刃は振るわれるのだ!!直角変華(ちよつかくへんげ)”ボーン・離蓮(リバス)!!」

それと共に振り抜かれるのは大上段から真っ直ぐに走る剣閃、当然真っ直ぐ故に読み易いその剣をゾロは軌道を読んで避け、逆に斬りかかるうとしたもの

「なっ!」



「読み誤ったな海賊狩りよ!!」

一転、振り下ろしは地面スレスレで止められそのまま振り上げられた。

「なめ…るな!!」

「よくぞ避けた!!だがこれは避けられぬだろう!曲がった太刀筋大嫌い  
…直角飛鳥” ボーン・大鳥(オードリー)”!!」

何とか不安定な体勢ながらTボーンの剣を避けるもその代償として大きく間合いを開けられるゾロに更なる追撃が迫る。

「つー三刀流・牛針!!」

当然素直に斬られるわけにもいかず連続した突きによって何とか剣撃を放ち間合いをとると仕切り直しとばかりに両者は再び己の武器を構える。

かたや海軍剣士にしては珍しい両刃のバスタードソードを、かたや剣士としては珍しく三刀を用いてぶつかると二人の戦闘は更に激しさを増していくのであった。

一方列車を止めるべく行動をおこしたナミとウソップ は見つからないように慎重に列車の上を進み先頭の動力車へ、何やら忙しそうに機器をいじる2人の男が運転室にいるのを確認するとそれぞれ頷き合い二手に分かれると

「ちよつと寝ててね!」

「必殺・鉛星!!」

左右の窓から飛び込み奇襲をかけ素早く運転士と機関士を気絶させると電光石火の早業でウソップの持っていたロープで2人を縛り合せ

ると一息つく。

「うしーで、こっからどうすんだ?」

「兎に角まずはこの列車を止めるわよ」

そう言つて設備に向き直ったナミだったがそのまま両手を上げて

固まる。

「…どうしたナミ、列車を止めるんじゃないやなかったのか？」

「えーと…これってブレーキどれかしら？」

「おい、止め方わかるんじゃないのかよ」

「仕方ないじゃないの！蒸気機関なんて知識でしか知らないのよ！しかも実物の止め方なんてわかるわけないじゃない!!」

そう、蒸気機関の知識こそ知っていれどもこの世界では一般的な物では無い為にいまいち詳細がわからず設備を睨みつける。

更に言えばこの”武装装甲列車・ファイブスター号”は加速し続けるスピードを何とかする為に複雑な操作機構を持ち、更にこの運転室から各車両の操作などが行える為にかなり複雑な運転設備を備えている。

運転士のポジヤルスキーと機関士のドントスコイはベテランであり2人は運転中は常に計器に目を配りつつ各機関を細かく操作して適切なスピードで運転させていたのだ。

当然そんな複雑な機構を初見の2人が理解できる訳も無く

「とりあえず適当に動かしゃ止まるんじゃないやねえのか？」

「そうね、レバーとかボタンとかスイッチとかあるけど…まあ操作すればそのうち止まるでしょ」

「だな…まあこういうのはどっかに緊急用の操作機構がある筈…」

ウソップがとりあえず目の前にあったパネルを開ければそこにはズラリと並んだダイヤルとスイッチ。

とりあえずダイヤルをひねれば微かに耳に聞こえる駆動音、正解かと思いつつ横のスイッチを押せば砲撃音が響き渡った。

「あ、やべ」

「ちよつと何やってんのよ!?今のつてここに来る途中にあった大砲じゃないの!？」

ナミの言った言葉は正解でウソップが触ったダイヤルは回転砲塔の向きを、スイッチが発射ボタンであり、緊急用として運転室から各武装が操作できるようになっていたのだ。

「誰が運転室にこんなもんがあるとと思うんだよ!?!?てかそう言うならお前がやってみろよ!?!」

その言葉にナミは

「よーし見てなさい…!」

そう腕まくりして目の前の設備に向き直るのだった。

激走！夜闇を走るファイブスター号！！

「何だ!!どこからの砲撃だ!?!」

ファイブスター号に併走していたフィーネ・イゼツタ号では突然の砲撃に混乱していた。

「そ、それが前方のファイブスター号からの砲撃です!!」

「何だと!?!襲撃の報告は受けたが既にそこまで敵の手に落ちたのか!!」

報告しにきた海兵の言葉にこのフィーネ・イゼツタ号にて総指揮代理を務めるアケヘンデ少将は愕然とする。

「し、詳細は不明!!ですが砲撃は間違いなくファイブスター号の第五車両砲塔からです!」

「準備していた突撃隊はどうなった!!」

「問題ありません!現在第六車両に移乗している途中です、先程の砲撃の件もおつて詳細な報告が…」

「ほ、報告します!第六車両が切り離されました!!」

その途中で更に見張りの海兵からの報告に

「何だと!?!直ぐに突撃班を回収!第六車両に食いついていた海賊船はどうなった!!」

「例の海賊船であれば海中に沈む姿が確認されています!恐らく乗り捨てられたのでは無いかと!!」

「沈んだ?確かに奴らの船はほぼ限界だったと報告が来ていたが…まあいい!突撃班を回収後直ぐにファイブスター号を追うのだ!」

「報告します!!第六車両に続いて第五車両も切り離されました!!」

「何っ!第六車両に続いて第五車両もだと!?!乗車していたTボーン大佐達から連絡は!!」

「連絡ありません!こちらからの連絡にも応答無し、戦闘中か撃破された可能性が高いかと!」

「ぬう海賊め…先程第五車両からの砲撃があったと考えれば海賊にや

られ占拠された可能性が高いか」

「直ぐに救出隊を編成します!!どちらに向かいますか!」

その言葉にアケヘンデは少し考え

「切り離された第五、第六車両の方だ!敵は第四車両より前に向かった可能性が高いが置き去りにされた者達を見捨てる訳にはいくまい。

それにファイブスター号にはクリーク中将もいる!海賊達も船を失った以上は袋の鼠、場合によっては”58海兵隊”の救出後に本艦で攻撃する可能性もある、中将のセルベアリシア号を動かす準備もしておくのだ!」

「りよ、了解です!!」

と、次から次に的確な指示を出していく。

「切り離されたのは二車両、…問題無いと思うが曰く付き故に暴走しなければ良いが…」

本来なら停車させる予定であったがウソップによる遠隔操作での誤砲撃、更にナミの誤操作による車両の切り離しの所為もあり、アケヘンデはとある懸念を胸に海軍独立遊撃隊は動き出したのであった。

一方その頃そんな大事をしでかしたとはつゆ知らず、運転室の2人は目の前の設備を操作して何とか列車を止めようとしていた。

「…なあナミ、気のせいならいいんだが何かスピード上がってねえか?」

しかしウソップの一言によりナミがふと外を見れば列車が蹴散らす飛沫が先ほどより高く、風を切る音も先程より大きく聞こえていた。

「…言われてみればそうね、操作を間違えて速度を上げちゃったかしら?」

「何やってんだよ全く、止める筈なのにスピード上げてどうすんだよ!」  
「し、仕方ないじゃない!それよりもウソップ、蒸気機関ならどっかに蒸気を送ってるパイプがある筈だからそれを止めればこの列車も停まるんじゃないかしら?」

「ならこいつじゃねえか？一際でかいし」

と言いながらウソツプはひと抱えほどある大きなバルブを叩いて見せれば

「成る程、いかにもって感じね…123で回すわよ」

「おう！いくぞ、1・2の…3!!ぐつ…つて固えな！」

「逆かしら？今度は反対側に回してみるわよ1・2の…3!!」

突然であるがこのファイブスター号、今でこそ立派に二代目の海列車、政府専用列車として活躍しているが元々は初代海列車の試作機にして失敗作である。

何故か蒸気機関の過剰稼働により異常な量の蒸気が送り込まれ続ける故に加速しつづけるその姿はまさに”暴走海列車”と言っても過言では無かった。

原作ではトムの死後、どう調整してもそのスピードを抑える事が出来ず倉庫にて死蔵され、仲間のために自ら仲間達の元を去ったニコ・ロビンを迎えに行くために再び日の目を見たものの最後は無事に一味をエニエスロビーに届けて消えていった最後に一花咲かせた列車であつた。

だがこの世界線では未だにトムが存命であり、世界政府の命令の元専用列車が造られる事となりその為にこの試作機を流用、メインとなる蒸気機関にガチガチにリミッターをつけ流入する蒸気量を制限し、更には機動車両含め後部車両全てに装甲を施し重量をアップさせる事で著しく速度を落とし、更にベテランの技師達が細かく蒸気量を調整する事により特別性のブレーキで停止出来るようにしたのが政府専用武装列車”ファイブスター号”の真の姿である。

そしてこのファイブスター号、万が一に備えてリミッターの解除機構が存在し加速する事が可能である。

後部二車両、それも装甲を持つ上に砲塔を積み重量の嵩む二車両が分離、そしてそうとも知らずに解除されたリミッター。

ガコンという重々しい音と共に車体が揺れ出し

「お……おい、さつきより何か明らかに加速してねえか？」

「……何かまずいもの動かしただかしら」

五老星にあやかった名前を持ち、政府の特別な列車として長らく働き続けた武装列車は全てを擲ち”暴走列車”と成り果て今まで抑えられた鬱憤を晴らすかの如く加速し始めるのであった。

## 暴走海列車!?!機関室での激闘!

「さて…お目覚めのところ悪いんだけどちよつとこの列車を止めてもらえないかしら?」

ファイブスター号の正運転士をつとめるポジヤルスキーはその声に運転中に後ろからの衝撃で気を失った事を思い出す。

目の前にはオレンジの髪的女性と長鼻の男、傍には縄で縛られたこの列車の正機関士であるドンスコーイが恐らく自分と一緒に気を失わされたのだろう、縄で縛られた状態で項垂れていた。

「あ、あんたら何が目的だ!このファイブスター号は政府専用列車、こんな事してタダで済むと思つて…」

「あー、そういうのはいいからこの列車を止めてくれるとありがたいんだけど…」

目の前のオレンジ髪の女性、ナミの言葉に少し思案すると共に違和感に気づく。

いつもより大きく揺れる車体、ボイラーの異常な稼働音、そして轟々と風を切る音。

バツと速度計を見ればそこにはメーターを振り切つてレッドゾーンに突入している針。

更に複数に細分化された圧力計を見れば全ての計器がイエローゾーンを超えてレッドゾーンに入っていた。

「あ…アンタら何をやった!?!」

「うおびつくりした…まあ落ち着けよおっさん、おれたちはこの列車を止めてほしいだけなんだ、目的を達したらずぐに出て行くから危害を加えるつもりはねえよ」

突如声を上げたポジヤルスキーに今度は長鼻の男、ウソップがそう言うもその言葉にポジヤルスキーが目の前の2人はこの海列車については殆ど知識が無いと推察、恐らく止めようとして適当にいじつたのだろうとアタリをつける。

「いいから今すぐこの縄を解け!ドンスコーイの縄もだ!!」



「わかった、わかったからくれぐれも暴れないでくれよ？」

その言葉と共に縄をとくウソツプ　ともう1人の縄をとくウソツプ。

「起きろドンスコイー！」

「あれ：すんません、ちょっと寝てたつす」

「いいから起きろ！緊急事態だ!!ファイブスターを止めるぞ!!」

ガクガクと揺さぶり機関士を起こしたポジヤルスキーは後ろで棍とパチンコを手に見守る2人を他所に設備に手をかける。

「うわっ！なんつすかこれ、圧力計がほぼMAX!?!速度計も振り切ってるじゃないっすか!!」

「扱い方を知らんごつかのバカ達が無茶な操作をしたんだよ！いいから止めるぞ!!」

「なんて無茶を：つて第五、第六車両が分離されてるつすよ!?!」

ドンスコイーの声にポジヤルスキーが頭上の装置を見上げると平時は7つ赤く光ってるランプが後ろ2つ消えており、既に後ろの二車両との連結が切れている事を示していた。

「なんてこった：いや、軽くなつたぶん止められるかもしれん」

そう話す2人を他所に

「おいどうしたんだよ？列車を止めるだけでいいんだぜ？」

「いまいち事態を把握してないウソツプ　がそう声をかけるも

「いいから何かに捕まってる！舌噛んでも知らねえぞ!!」

「そう言い捨てて再び操作に戻る。」

「ぐっ：加減弁が閉じれないっす！」

「速度は落とせないか：ブレーキをかけるぞ!!」

それと共に続け様に三つのレバーを振り下ろすもブレーキはうんともすんとも言わず沈黙を返すのみ。

「三つともダメか！速度が速すぎる：逆転機を動かせ、ブレーキ代わりにはなる！」

「やってみるっす!!」

そしてドンスコイーがレバーを操作し前進と後退を切り替えると酷く耳障りなギヤリギヤリした音の後にバキリと何か金属が弾けた

ような音。

「げーぶっ壊れたっすよ!？」

「なんだと!?おいアンタら本当に何をやった!!」

「いよいよな事態にポジヤルスキーは原因だと思われる2人に言うも」

「何って…列車を止めようとしたただけだって、そりや操作がわかんねえからダイヤルとかスイッチとかバルブとか動かしたけどよお」

その言葉にポジヤルスキーがイヤな予感がした方向を見ればそこには動かされた形跡のある大型のバルブ。

それを見たポジヤルスキーは

「すまん、ちよつとどいてくれるか?」

後ろから見守っていたナミとウソツプ にどいてもらおうと後部に備え付けられた戸棚をあけて派手な色のジャケットを二つ取り出し、一つをドンスコーイに投げると自身もジャケットを羽織り今度は反対側の電伝虫を手にとる。

「おい、助けを呼ぶつもりか!？」

「今更呼んでもどうしようもねえよ、いいから黙ってろ」

それを見て止めようとしたウソツプ だったがポジヤルスキーの何とも言えない気迫に怯み

「おい、何か雲行きが怪しくねえか?」

「そ、そうね一旦列車を止めるのは諦めてロビンの様子を見に行った方がいいかしら…」

そう話し合い出す2人を他所にポジヤルスキーは軽く息を吸うと

「本日は当列車をご利用いただき誠に有難うございます。ご乗車の皆様にお知らせいたします、当列車は襲撃犯によりリミッターが故障、あらゆる手を尽くしたものの止める事叶わず暴走状態にあります。」

故に第一車両以降のお客様方には申し訳ありませんが客車と動力車両を切り離させていただきます、ご乗車のお客様方は衝撃にお気を付け下さい」

その言葉と共にイヤな予感がしたウソツプ 達が装置の方を見ると同じくポジヤルスキーの言葉を聞いていたドンスコーイがナミも

操作していたスイッチを落としていき、それと共に残り五つの赤く点灯していたランプが一つを残して消えていき、それと共に更に揺れが酷くなる。

「暴走状態ってどう言う事だよ!？」

「言葉通りだよ!!リミッターが外れたこの列車のスピードは上がり続ける、それこそ自力で止められない程になー!」

「ウソツプ　!後ろが切り離されてる、戻れないわよあたし達!」

「被害を最小限にする為に後ろは切り離させてもらったつすよ!」

「:ちよつと待て、自力じゃ止まれねえって事はおれたちどうなるんだよう!」

「まあこのまま乗ってれば超速でエニエスロビーにご到着だろう」

「まあそのまま勢い余って門に飛び込むかもなんで命の保証はしないつすけど」

「ゴホン:それでは襲撃犯の皆様、良い旅を」

「ごーきげんよう!」

その言葉と共にポジヤルスキーとドンスコイは左右それぞれの扉を開け放つと飛び出しようやく事態の重さを知ったナミとウソツプの2人は一気に顔を青褪めさせたのだった。

## 暴走列車 ドンクリーク

ニコ・ロビンの身柄を手に入れるべくやってきた正体不明（とされる）襲撃者、その二人組との戦闘を経るにつれ異常に揺れる車体や砲撃にクリークは違和感を持つも、先程の車内放送でようやく合点がいったクリークは拳で相手を殴り飛ばし距離を離すと動力車両と第一車両を繋ぐ扉を開く。

しかし扉の先には既に夜闇が広がり、そこにいた筈の動力車両は僅かな光を灯して既に離れた場所におり目は細めてみればそこには何やら焦った様子のナミとウソップの姿。

「むう…無視するわけにもいかんしさつさと片付けて追うべきか」

そうして向き直ったクリークは先程まで戦っていた牛の仮装をした男と、ギンと戦闘を行っていた熊の仮装をしていた男は姿を消しており

「おじさま、彼らならおじさまが外を確認する間に姿を消したわよ？事態が急転したし退がった方がいいと判断したんでしよう」

「…ボス、やはり奴らの正体はサイファーポールですか？」

「ま、十中八九な…古代兵器復活の可能性を持つロビンと俺が手に入れた設計図の奪取を狙っての事だろう」

「とりあえずフィーネ・イゼツタ号と連絡をとります、ボスは奴らを追いますか？」

「いやそれよりも動力車両の方だな…アレだ、政府専用列車であるファイブスター号を襲撃の上暴走させたとなればその身柄を拘束せねばなるまい」

「…ボス、別にボスの麦わら鼻屑今に始まった事じゃないんでそこまでして理由を立てなくとも」

「建前ってのは大事だろ、しかしそうなるとお前が心配だな」

「あら、心配してくれるのはありがたいけど…能力が使えない事になっただけでも相手を退ける事くらいできるわよっ…」

そう言ってブーツに仕込んだナイフを見せるロビンに

「随分とおつかないな……とりあえず動力車両を追って麦わら一味の2人を助け……じゃない身柄を拘束したらファイナー・イゼツタ号に曳航してもらおうか」

そう言いながら屋根によじ登るクリークと

「おじさまー？結構離れているし速いけれど追いつけるのー？」

窓から身を乗り出してそう声をかけるロビンに

「まあギンも見ておけ……これから剃と月歩を極めた長距離高速移動術を見せてやろう」

そう言うと共に客車の天井に両手をつき膝を曲げると深い前傾姿勢をとると同時太腿の筋肉が大きく隆起するのが見えると共に察しがついたのだろう

「おじさまー……ここでそんな事したら！って言ってる場合じゃないわね！！貴方も衝撃に備えなさい！」

そう叫ぶと同時慌てて車内に引つ込み椅子に捕まりギンもこういう時は従った方がいいと理解している為慌てて手近な手すりをしっかり掴む。

「いくぞ……剃動・縮地無疆（そりつど・しゆくちむきよう）！！」

そう言うと同時に、限界まで大きく前傾したクリークが爆発的な踏み込みと共にその場から爆音を残して消えると同時車体が大きく沈み込む。

当然であろう、この海列車がレールを走るとは言えそのレールは特殊な木材とワイヤーで作られたいわば“浮かぶレール”でありクリークの爆発的な力を大地の如く受け止めれるわけも無く大きく撓み列車もそれに合わせて上下しようやく収まり

「もう、びしょびしょじゃない……おじさまってたまに後先考えないわよね」

「見事に天井もぶつ壊れましたね……足場が悪いところでやるもんじやなさそうっすねあの移動方法」

上下に揺さぶられた時に開いた窓や扉から海水が入り込み内部は海水まみれに、そして踏み込んだ天井も無事で済む筈も無く無惨に大穴を開けていたのだった。

瞬動・縮地無疆はクリーク曰く瞬間移動術である刺と空中移動術である月歩を極めた移動術：…としているがその理屈で言えばCP9のメンバーが使えてもおかしくは無い。

しかしそれだけではこの移動術の習得はできない、何故ならクリークが前世の記憶をヒントに開発したこの技に必要なのは圧倒的な、特に脚部の筋力であるからだ。

前世の記憶をこちらの世界に落とし込むにあたって必要なものが欠けていた故に他のもので代用、長年の鍛錬において発現させた圧倒的筋力に加えて武装色の覇気で強化したフレームと肉体で踏み込む事こそこの技の真髄である。

最もそれ故に飛び立った場所はだいたい大きく破損するので足場が悪い所でやるような移動方法では無いが。

まるでミサイルの如く合間合間に虚空を蹴り加速するクリークは途中でオレンジの浮力ジャケットを着た2人を目撃するとその場で宙を蹴りながら滞空、声をかければ最初は驚かれたものの顔を見ればやはり出発前に話をした運転士と機関士であった。

詳しく事の経緯を聞きやはり動力車両に2人が取り残されている事を確認、そのまま放つとく訳にもいかず先に2人を両脇に抱えたクリークは一旦止まった客車両の元に戻ると2人を置いて再び遙か先を進む動力車両へ、ロビンに怒られたので今度は気を付けつつ飛んだ為小破に留まりクリークはそのまま今度こそ前方を走る動力車へ向かった。

一方猛スピードで走る先頭車両に取り残されたナミとウソップ、何とか停めようとするも何をどうしていいかも分からず、これはいよいよこの猛スピードの中を何とかして脱出するしかないとして使えそうな物を探していた。

「急げ急げ！脱出するにしても遅くなればなるほどルフィ達と離れちまう！」

「わかってるわよ！ああもう、こんな広い海で身一つで放り出される

なんて…」

その言葉と共に沈み込むように大きく揺れる車体。

「うおっ!?何だ今の揺れ!」

「大きい波でも越えたんじゃないの?」

「ナミだけに?」

「下らないこと言ってるんじゃないわよ…でも脱出したとしてアイツらちゃんとあたし達を見つけてくれるかしら?」

「その為に何か使えそうなもんが…お!まだ残ってるんじゃないか…」

その言葉にナミが振り返ればウソツプの手には派手なオレンジ色のジャケット、先程運転士と機関士が羽織って外に飛び出した装備だった。

「あらいいじゃない…ってどうしたのウソツプ?」

だが役に立ちそうな物を探し出したウソツプはまるで信じられないモノを見たかのように目を大きく見開き体を戦慄かせており

「ナ…ナミ…ま、窓に…」

指を指すウソツプにナミが後ろを振り返ればそこには窓があり逆さになった強面がこちらを見つめていた。

「ほお、まだ無事だったか」

「で、でたー!!!」

自分達しかいない筈のしかも猛スピードで走る列車に現れた顔に悲鳴をあげるのだった。

## 一味危機 ドンクリーク

「くっらえっ！必殺・火薬星!!」

得体の知れない人物に驚くも直ぐに気を取り直したウソツプは得意のパチンコで火薬を仕込んだ弾を相手に撃つも

「今更その程度じゃあなあ」

その爆発は壁を突き破ってきた重厚なガントレット手により軽く受け止められる。

「海軍!? しかもロビンを連れてった奴じゃない!!」

「さて…とりあえずここまでの騒ぎをおこしてくれたんだ。身柄は拘束させてもらうぞ?」

「もつと広さがあれば…折角の新型がお披露目出来ないじゃない!」

「下がってるナミ!…こんな狭いとこじゃクリマ・タクトは使えねえ!!」

「これならどうだ!三連…火薬星!!」

ウソツプの言葉にナミは下がり今度は三連続で爆発が襲い掛かるも

「その程度では効かんと言ってるだろう…まあ暴れられると途中で落としかねんし意識は奪わせてもらう」

それと共に大柄な体躯から繰り出される手刀、それは狙い変わらず火薬星を放ったウソツプに向かうも

「なんのお!!」

間に挟み込まれたウソツプの掌で受け止められた。

「ほう?」

変な手応えにクリークはもう一度手刀を振り下ろすもウソツプは屈み込んでクリークの懐に入り込むと

「効かねえよ!それから礼を言っとくぜ、あんたの衝撃は頂いた!!」

それと共にぴたりと胴体に押し当てられたウソツプの掌。

「なるほど衝撃貝か、まさかこれで逆転したとでも?」

「へっ、随分と余裕そうだな…衝撃は防具じゃ止められねえ、そんな丈夫そうな胴鎧を着込んでるからって安心してるのか?」



「さてな、こつちも言っておくがそれを撃つのは物凄く痛いぞ？それこそ肩が外れかねんぐらいな」

「ぐっ…」

「いいから撃ちなさいウソップ！肩の一つや二つ外れたって構わないわ!!」

「いやおれの肩!!だが…やらなきやいけねえ時つてのはあるんだよ!!くらえっ”衝撃っ（インパクト）”!!」

それと共に今まで溜め込まれたエネルギーがダイアルから放たれそれと共に

ウソップが自身の腕を押さえて膝をつく。

「ウソップ!?また無茶したわね…」

「痛っ…本気で肩が外れるかと思った…」

「動ける?いいからさっさとこんなところオサラバよ」

そう言つてウソップに肩を貸しその場から離れようとしたナミだったが

「何処へ行こうというのかな?」

その声と共にインパクトダイアルをまともに受けた筈の巨体がガントレットに包まれた腕を伸ばし

「嘘!?!まとも当たった筈よ!!」

「…これが海軍中将つてやつかよ」

「まあなんだ…とりあえず暫くは眠っている」

それと共にクリークの伸ばされていた腕に装着されたガントレット、その手の甲から麻酔ガスが噴出され2人はその場に倒れ込み

「さて、後はこいつを止めるか否かだが…やるんなら強引にやるしかない上に果たして政府専用列車をぶっ壊して大丈夫なもんなのか…」

懸念であった2人を確保したクリークはそう考えると下手に責任を被せられても困ると思ひ直し眠ったナミとウソップを両脇に抱え込みそのまま暴走する動力車から身を躍らせる

「月歩変式…剃月（ソルルナ）!!」

まるで消えたかのようにその場から姿を消したのであった。

クリークが停止した海列車に戻ってきた時には既に傍にはフィネ・イゼツタ号が停泊して牽引の為に多数の海兵が作業を行なっていた。

そのまま今度は静かに半壊した海列車に着地、一度大きく揺れると慣れているのだろう、海兵隊は何事も無かったように作業を続ける中、クリークはそのまま両脇にナミとウソップを抱えてロビンの元に向かうと

「あら長鼻くん航海士さん…意識が無いみたいだけれど？」

「なに、眠っているだけだ…それよりフィーネ・イゼツタ号に移動するぞ、流石に残りのこの車両全部引っ張って行ける程パワーは無いからな」

それと共に再び移動するクリークであったが

「おどれクソゴリラ！んナミさんとロビンちゃんを何処に連れて行くつもりじゃコラア!!」

ルフィーのフォローをすべく走ってきたサンジに鉢合わせ、そのまま蹴りかかってきた相手の攻撃を顔面で受け止めた。

「何処と言われても…ニコ・ロビンは当初の予定通りエニエス・ロビーに、こっちの2人は政府専用列車を暴走させたとあつては身柄を拘束せざるを得なくてな、しばらくフィーネ・イゼツタの牢にでも入れておくさ」

「ちっ、かてえな…能力ってよりもあのイタチ野郎みてえな、ロクシキだったか？」

自身の攻撃に何の痛痒も感じてないかのような姿にサンジは舌打ちし

「まあ能力では無いな…鉄塊を使つてるとも言っていないがな」

「へエ…ならこれでどうだよ、粗碎っ（コンカツセ）!!」

空中で身体を回転させるとその勢いのまま踵での蹴りがクリークの頭部にヒット

「流石…並の相手なら鉄塊をかけていても今の蹴りで崩れていただろう。

だが…これでも本部中將をやつてな、その程度では倒れてやれん

のさ」

「そりやどうも…まったく褒め言葉に聞こえねえよ、どんな身体してんだアンタ」

それでもダメメージの見えない姿に流石は海軍中将という地位にいるだけはあると考え直す。

「さてな…とりあえず出てきた以上はお前も拘束させてもらおうぞ?」

「やれるもんならな!薄切肉のソテー(エスカロップ)!!」

それと共に飛び上がり再び頭部に回転蹴りを放とうとしたが

「あまり本部中将を舐めない事だ…」片方斧(かたえおの)」

両脇に2人を抱えたまま振り上げられた左脚がそのまま真っ直ぐ振り下ろされるとそのままサンジに直撃、その身を地面に叩きつけたのであった。

## 事態真相 ドンクリーク

「おじさま…」

クリークの攻撃に対して意識を落としたサンジに対しロビンがジト目でクリークを見るがクリークとしては何もしいない訳にもいかなかった為

「いや、こうも正面から出て来られると周りの目もあるし対処せざるをえんだろう、ましてや見逃すなんてのは無理な話だ」

首をすくめるもロビンは

「それはそうだけど…でもこうなるとみんな来ているんでしようね、こんな面白味の無い女の何処が気に入ったのかしら」

「愛されてるじゃねえか、それだけあいつらの一味にとって不可欠って事だろうよ」

更に追加でサンジを脇に抱えたクリークが言えば

「だからって無茶はいただけないわね、長鼻くんは航海士さん、コックさんまで捕らえられて…一味が全滅したらどうするつもりなのかしら」

「それがあの船長が慕われる理由だろうさ…知ってるか？かの海賊王ゴール・D・ロジャーは”仲間を侮辱した”という一点で一国の軍隊を潰した事もあるって話だ、つまりはそういう事だ」

「どういう事かは知らないけれどあまり無茶はしないで欲しいわ…」

クリークとギン、そして海楼石製の手錠（偽物）をはめたロビンはフイーネ・イゼツタ号に移乗、確保されたウソップ、ナミ、サンジも船内にある牢へと入れられたのであった。

一方でそれを見ている者もいた。

「あんのバカ…あっさり捕まってるじゃねえよ」

船が最初に切り離された5、6号車の人員を救出に来たタイミングに紛れて乗り込んだゾロである。

甲板の物陰からウオーターセブンでも見た海軍中將が両脇に仲間である3人を抱えているのを見てどうしたものかと考えるも

「メリーは姿が見えねえが…あの船大工の言つてたのが本当なら問題ねえとしてルフィの野郎は何処行きやがった？」

画期的な案は出て来ず、仲間も捕まっており合流も出来ない以上少し様子を見ておいた方がいいと判断し再びその場で息をこらすのだった。

そして一方のルフィであるが、ストレート軍曹に弾き飛ばされたのは貨物車両として使われていた四号車。

ぶつかつた衝撃で箱が散乱し、そこから食糧が顔を覗かせていた為お腹が空いていた事もあつたので

「猪突：撃進!!むう！何処へいった麦わらのルフィ!!」

爆速で後ろを通り過ぎて行つたストレート軍曹を尻目にその場で食事に移行、2回ほどの激しい振動でようやく周囲を見渡すとそこには大型の長銃を構えた海兵がズラリ。

「び、びぶのびび!!」

「ようやく気づいたね麦わらのルフィ…呑気に食事とは随分と優雅な身分だね？」

「ばーばばえはべばばば!!」

「やれやれ、口にモノを入れたまま喋るもんじゃないよ？」

海軍コートを羽織り、背中に巨大な盾を背負つた男…海軍本部少佐であるパールがそう言うのとルフィは口の中のモノを飲み込み

「お前あん時のタテ男!!」

と言いながら立ち上がると共にそつと周囲に目を配る。

「残念ながら扉は抑えてある、さて…このまま大人しく捕まる気はあるかな？」

「断る!!」

「そうか…放て！」

ルフィのその言葉はパールにとって予想していた言葉だったのでそのまま腕を振り下ろせば一斉に発射されたのは海楼石の礮が編み

込まれ、能力者相手に多大な威力を發揮する” 对能力者捕縛用監獄弾”：通称”黒色弾”であった。

しかしあつさり捕まるかに見えたルフィであったが

「そいつはもう見たから捕まんねえぞ！ ゴムゴムのお：銃乱打!!」

連続した踏み込みによる移動：かつてベルメールが使っていたのを見て多くの戦闘を経て使いこなすようになった”剃”を連続使用した後に再び自身に銃口が向けられる前に囲んだ海兵に対し乱打、多くの者が咄嗟に避けた為にゴムの反動で威力を増した拳は次々と貨物車両の壁に、いくら装甲列車とは言え内側から断続的に加えられた衝撃に耐え切る事は出来ず

「いやはや：滅茶苦茶するじゃないか麦わらのルフィ」

「ししし、まだまだ！ ゴムゴムのお：火山!!」

それと共に今度は振り上げられた脚が貨物車両の天井を砕きながら吹き飛ばし周囲に残骸をばら撒きパール達海兵はそれに対処しつつも

「列車を暴走させるどころか：このままこの列車ごと沈める気かい？」

そう言葉をかければ

「これで戦いやすくなつたぞ！ 今度は加減しねえ：ゴムゴムの”HEAT”ピストル!!」

返ってきたのはかつてリトルガーデンにて自身が何気なく話した技の原理を完全に取り込んだルフィの赤熱した拳であった。

ぶつかりあうのはゴムの特性と完全に身につけた特殊な歩法で縦横無尽に動き回る麦わらのルフィ、対して相手は海軍本部少佐であり”カチカチの実”の能力者であるパール。

その様子を少し離れた列車の屋根から見ていた仮面の男は

「チツ：何をやっている海軍め、あんなモノさつさと仕留めてしまえば済む話だろうが：」

苛立たしげに歯を鳴らせば

「まあ落ち着かんかルツチ、どのみち列車が動けん以上赤カモメの船

に牽引してもらわねばわしらも帰れんじやろう」

傍にいたフードを目深に被った男が言う。

「…それよりもニコ・ロビンの身柄はどうする？それから例の設計図もだ」

それを横目に鉄仮面の大柄な男が言うと頭部を覆う仮面をつけた女性が

「二度失敗しておきながら貴方がそれを言うのブルーノ？さっきの襲撃でカタをつけていればそれで済んだ話だったのよ？」

との厳しい叱責。

「まあそう言わんでくれカリファ、あんなイレギュラーがおこった以上一度は退くべきと判断したのはわしじや、そうブルーノを責めんでやってくれ」

そう、何を隠そう貴賓車両にいたクリーク達を襲ったのはサンファルドで合流したCP9のメンバーであったカクとブルーノであった。

2人は設計図を持つてると思いきもう1人の候補であった船大工のトムがいる”アクアリア”にて潜伏、見事に町に溶け込んでいたが目的の物が見つかった為長官であるスパンダムからの指示により急遽引き上げ、最短距離で合流し、ニコ・ロビンの身柄とプルトンの設計図を手に入れる為に強襲、それが一連の流れである。

立ちほだかる強敵！CP9ロブ・ルッチ！

”CP9”：正式名称はサイファーポールNo.9と呼ばれ、本来は8つある政府の諜報機関”サイファーポール”において存在しない筈の9番目である。

彼らは”闇の正義”の名の下に、あまり表沙汰に出来ない仕事をこなし、その過程で非協力的な市民への殺しを世界政府から許可されており、今回も古代兵器プルトンの設計図の確保の為、有力保持者がいるウォーターセブンとアクアリアに潜入していた。

しかし紆余曲折あり本来の任務である古代兵器の設計図奪取に加え、古代文字解読の可能性を持つニコ・ロビンの身柄の確保という任務まで与えられた挙句に本拠地であるエニエス・ロビーに向かう筈の海列車はニコ・ロビンを追いかけてきた麦わらの一味の強襲により動力である先頭車両が離脱、海面に轢かれたレールの上で立ち往生した為に並走していた海軍艦が牽引を行うべく海兵達が作業、その傍らで麦わら一味の船長である”麦わらのルフィ”と海軍コートを纏い大盾を背負う海兵が戦う様を見ていたが

「…これ以上余計な時間を食うのは御免だ」

傍で話し合うカリファ、カク、ブルーノを尻目にルッチは立ち上がって踏み込むと同時に、その場から姿を消し

「とっ！横入りは良くないんじゃないかなっ!!」

「うお！なんだお前!」

次に現れたのは今まさに戦闘が行われている只中、ルフィはゴムの特性によって、パールは両腕を重ねる事によってルッチが繰り出した指銃を受けたのだった。

「我々はエニエス・ロビーに向かわねばならん、いつまでそんな海賊如きにかかっているつもりだ」

「いやはやいきなりこちらにも攻撃を仕掛けてきておいてよく言うねえ？政府の人間が海軍に攻撃するとは何を考えているのかな？」

「…時間を掛け過ぎるからだ、ここからはこちらの流儀でやらせても



らう、海軍如きは下がっている」

ルツチの言葉にパールはチラリとフィーネ・イゼツタの甲板を振り返ればこちらを見ていたクリークが軽く首肯するのを確認し

「…まあいいよ、こっちは別に政府の諜報機関とぶつかる気はないからね」

「あ！おれの相手はどうすんだよタテ男!!」

「残念、君の相手はこちらがするそうだ」

ルフィの言葉をさらりと流して後ろに下がるとパール、それと共に今度はルツチが前に

「なんだお前、変な仮面なんかつけて…」

ルフィのその言葉を意にも解さずに振り抜かれる指銃は正確にルフィの首を狙うも

「生身であれば風穴が開いたものを…」

「っ！さっきもやってきたけどゴムだから効かねえぞ!!」

その特性故に貫く事は無く、それ故にルツチは

「成る程、ならばこちらの姿でいかせてもらおう…勿論そちらは無防備に受けてくれて構わんがな」

自身に眠る能力を呼び起こすとその身体を隆起し、瞬く間に豹の特徴を持つ獣人へと変化させたのであった。

そこからはまさに激戦…片やゴムという特性を活かし数々の戦闘を経験、強敵に相対して成長してきた麦わらのルフィ。

片や現CP9のメンバーの中でも最強と名高く、そしてサイファールポールが発足して史上最も強く冷酷な“殺戮兵器”と評される程であり、動物の特性を持つゾオン系ネコネコの実・モデル豹の能力者でもあるロブ・ルツチ。

2人は正面からぶつかり合い、ルツチが使うのは高い技量を持つ超人体技である六式、普段であれば打撃を無効とするルフィに有利な体術によるぶつかり合いであったがそこに獣人化が加えられると身体能力、凶暴性が高くなつたルツチに天秤が傾き

「まだ使いたくなかったけど…そうも言ってらんねえか！ギア…2

(セカンド)!!」

ルフィはゴムの特性を活かして自身の体をポンプ代わりにパンプアップ：血液の流れを通常より上げ、爆発的な瞬発力を得て猛攻をかけた。

なおこの技：ギア2（セカンド）と呼ばれる技だが一挙手一投足のスピードを上げ爆発的な加速を得る技であり、常人ならば心臓が破裂する程の血流速度であるがルフィはゴムの身体を持ってして、それとは別に強靱な弾性を持ち超高血圧に耐えうる筋肉・血管があれば類似の能力者であったり、それだけの頑強な身体を持つ人間であれば使用が可能だろう。

突如として上昇した圧倒的スピードとそれに伴う攻撃力の上昇にルッチは軽く驚くも

「最初は驚いたが…もう見飽きたな」

「へっ！だったらおれにそのシガンってやつ当ててみる！ゴムゴムのおJETピストル！」

「だから見飽きたと言っている…生命帰還・”攻式”紙会武身からの混成接続、指銃・黄蓮!!」

それと共にルッチの体がそれまでの筋骨隆々とした姿から収縮、ひと回り小さくなると先程まで速さで圧倒していた筈のルフィに難なく追いつくと右手で鋭く尖った爪による指銃を連続して撃ち放ったのだった。

これはルッチがどこかで聞いた噂話をモチーフに作り上げた技であり、自らの体を全て知覚しコントロール下におく”生命帰還”、それと噂話で聞いた”筋繊維を収縮する事により出力と硬度を上昇させる事が可能”という話を元に生命帰還で自身の膨らんだ体を圧縮、スピードと硬度の上昇に合わせ攻撃力は通常の姿より上がり、自身の切り札の一つとしていた技である。

「…ちっ、手早く終わらせせてもらおうぞ」

しかしその代償として多くのエネルギーを消費する為ルッチは軽く舌打ちしつつ大きなダメージを負ったルフィに向き直る。

「へへっ、お前そんな技持ってたのか…でもロビンは返してもらおうぞ

!!ゴムゴムの：JETバズーカ!!」

だがルフィもダメージ故に解けそうなギア2を何とか維持して攻撃を繰り返したが

「見飽きたと言っている!!人越・ねじり指銃（じんえつ・ねじりしがん）!!」

それと共にルフィの攻撃を避けつつ前に出たルッチによる肩から腕へ、更には手首へと回転を加え貫通力を上げた指銃が突き刺さると同時に”まるで至近で爆発を受けたかの如く”吹き飛ばされ

「覚えておく事だ麦わらのルフィ、”人を越えて”こそ我々CP9：貴様らのような半端な海賊が我々相手に楯突いた事を後悔する事だ」

それと共に落ちていた仮面を拾い上げ、徐々に獣人化が解けていくにも関わらず鋭い、獰猛な目つきを隠すかの如く己の顔に付け直すのであった。

## 花熊船問 ドンクリークさん

「さて…何か言い残す事はあるか麦わらのルフィ」

「おれは…まけねえっ！」

そう言いつつ立ちあがろうとするが、ダメージが大きく上手く立ち上がれないルフィに対し

「そうか、だがこれが現実だ…たかだか一海賊風情が政府に楯突くものじゃあない、精々あの世で悔いる事だ」

ルフィの首へ目がけて右脚を大きくルツチが振るう。

勿論超人体技である六式を修めたルツチの振るうそれは技であり、その右脚は鎌風を纏い当たればルフィの胴体と首が永遠の別れを交わした事であろう。

しかしそれは

「おっと、それは流石に海兵として見逃せないかなあ？」

後ろに下がっていたパールにより受け止められた。

「…何のつもりだ、貴様らは海軍だろう？ 何故海賊を殺すのを邪魔立てする」

「海軍だからさ、一応の方針として無闇矢鱈と殺すもんじゃないという方針になっててね…それ以上やるというなら今度はこつちが相手になるよ？」

「ほう…たかだか海軍少佐如きが吠えるものだ」

バキバキと指を鳴らすルツチに対しパールも両腕を鋼鉄へと変化させる。が、

「いつまでやりあってるつもりだ…流石にこれ以上やるようなら上の方に報告させてもらうぞCP9。お前もだパール、無用に政府側の人間と争うもんじゃない」

牽引作業の指示を終えたギンが声をかけた。

「こつちは止めただけなんだけどねえ…まあ政府組織と無用に争うつもりは無いよ」

両腕の鋼鉄化を解くパール

「ちつ、まあいい…それより出発はまだか？我々も遊びで来てるわけではないんだが」

ルッチも舌打ちしつつも同じく構え掛けていた腕を下ろしこの場での激突は回避された。

「とりあえず無理すれば全員フィーネ・イゼッタに乗船出来るが…色々と機密の多い船でな、そのまま列車ごと牽引していくからアンタらは予定通り海列車に乗っていてくれ」

「こちらは一刻も早くエニエス・ロビーに急いでくれればそれで構わん」

姿をかき消すようにその場から離れるルッチ、それに続いてパールも船に戻ろうとした所で

「パール、その麦わらは…とりあえず医務室で治療してやってからフィーネ・イゼッタの牢に入れておけ」

ギンの指示にダメージが大きかったのだろう、気を失っていたルフィを抱え上げるとそのまま船へと戻るのだった。

そして一方、甲板からルフィとルッチの戦闘を見ていたクリークはその戦闘が決着を迎え、牽引準備の完了報告に対してロビンと共に船底階に向かう。

「私ってこんな海軍艦の深くまで入り込んで大丈夫なのかしら？」

「まあいつCP9が狙ってくるか分からんしな…少なくとも上にいるよりか俺の側にいた方が安全だろう」

「あら…嬉しい事言ってくれるわね」

「ん？ 何の話だ？ …よし、鍵はこれであつたか」

フィーネ・イゼッタ号による海列車の牽引。いくら多機能なフィーネ・イゼッタとは言え、海列車を引っ張りながらこの夜の海を帆走で航行するのは大変なのだ。それ故、この船に搭載された非常用推進機関を動かす為、クリーク達は降りてきたのだった。

フィーネ・イゼッタ号のほぼ船底近く、この下には海楼石が敷き詰められた層があるだけであり最下層と言っても間違いは無い。クリークが目の前扉を開けると、そこにはクリークの身の丈程の大き

な機械が鎮座していた。

「これがおじさまの提唱した理論を実用化したスクリュー機関：造りは思ったより簡素なのね」

備え付けられたシートに跨りペダルに足を乗せるクリークを他所に、話には聞いていたが実際に見るのは初めてであるロビンがシャフトやギアボックスを見つつそう零せば

「まあ足で漕いだ動力をギアからシャフトに伝えるだけの代物だからな、機械式ならもつと複雑になるんだろうが…」

クリークからは納得のできる答え。

「機械式にはしないの？ 海軍の技術力なら容易だと思っけれど」

「これが作られた当初なら兎も角、今は機械式にするのも容易だろう。

実際に：例えば海軍の新型艦とか次期公認筆頭候補のトラファルガーのとか機械式スクリュー機関を持つ船もあるしな」

「だったらどうして？ 独立遊撃隊は忙しいし、ドックに上げて載せ替えている暇が無いとかかしら？」

「別に載せ替えてもいいんだが：今更載せ替えるのも手間だし、人力であれば構造が簡素故に多少の無茶も効くし、何かあった時に修理が容易だという利点もある。

さて：あーあー聞こえてるな司令室？ 今から五分後に機関を始動する、急な発進と衝撃に気をつけるように船内に通達を頼む。一応海列車のお客様方にも伝えておいてくれ」

『こちらアケヘンデ、了解しました』

備え付けられた伝声管の蓋を開け、クリークはそう告げるとそのまま蓋を閉じ軽く目を閉じて集中する。前方に何も無いかの確認の為、見聞色の覇気を広げれば

「ん？ 何だこの気配？」

「どうかしたの？」

「いや、船の外に気配が…」

「ああ見聞色を使ってたのね、海王類かしら？」

「いやもつと小さい…人？」

そこに引つかかったのは二つの気配。

しかも海王類などでは無く、大きき的には人であるが場所的には海の中であつたのだ。船底にしがみついているなどでは無い限り、人などいない筈である。

「またジョークさん、船底にくっつけてるの？」

「いや、あいつは別件でシユガーとモネと一緒にモリアのそこ行つて  
るが…ん？ この船の真下か？」

更に深く気配のある方に集中し、何かの構造物がフィーネ・イゼツ  
タ号の船底にくっついてしていると判明する。秘密裏にギンに確認を頼  
めば、ややあつてその正体が”六号車切り離し時点で、海中に没して  
いた筈の麦わらの海賊船である事が判明したのだった。

## 鈍熊目的 ドンクリークさん

船体をギンギシと鳴らしながらも暗い海を航行するフィーネ・イゼッタ号と牽引された海列車。

『ちゆ、中将！エニエス・ロビーが見えたのでスピードを…うぷつ、スピードを落としてください!!』

「ん？ああ了解」

船体を省みないかのような無茶なスピードでの航行は陽光に照らされたエニエス・ロビーが見えた所でようやくスピードを緩め、それと同時に酷い揺れによる影響で気分が悪くなったのだろう、競うように甲板に出て船縁から身を乗り出す者が多数。

「もうちよつと漕ぐスピード手加減しても良かったんじゃない？」

「半分程の力でしか踏み込んでないぞ？ロビンも平気そうじゃないか」

「あら、これくらいで酔う程ヤワな鍛えられ方はされてないつもりよ？」

「まあそれもそうか、さてメリー号は…？ふむ気配は変わらずか、途中で剥がれたりはしなかったようだな」

「船医さん達も捕まえるのかしら？もう何かこのまま全員おじさま達に捕まりそうな勢いなのだけれど…」

見聞色の覇気を広げるのを止めてロビンの疑問にクリークはふむと頷き少し考える、そして出てきた言葉は

「そうだな、ここで一網打尽にしても…いやお前にも話しておくか、俺はアイツら麦わらの一味を”捕まえるつもりは無い”」

海賊を捕まえるのが仕事である海兵としてはあるまじき言葉であつた。

「…それは私が彼らと共にいるからかしら？私がいるからおじさまは彼らを捕まえる気が無いと？」

「いや、別に手加減とかそういう事じゃないさ…俺はあの一味に少しやって欲しい事があってな、それこそこの海の安寧の為に」



「それは…私が聞いてもいい事かしら？」

クリークの言い方にロビンは少し悩むも尋ねればクリークは周囲を見渡しロビンの方に向き直り話始めた。

「まあ…なら周りに聞かれる心配も無いだろう…そもそも俺が当初からモンキー・D・ルフィに注目してたのは知ってると思うが…さてそれは何故だ？」

「それは…」D”の名前を持つてるからかしら？まさかおじさまは”

D”の意味をご存知なの!？」

「いや流石にそこまでは知らないが…別に”D”だけなら奴以外にもいるさ、例えば祖父であり本部中將である”モンキー・D・ガープ”、かの海賊王”ゴール・D・ロジャー”、王下七武海が一角”ポートガス・D・エース”、覆面髑髏の正体という事になっているマーシャル・D・ティーチ、後既に故人ではあるがお前も覚えてるだろうハグワール・D・サウロとエースの母親であるポートガス・D・ルージュ、伝説の大海賊”ロックス・D・ジューベック”そして公にはなっていないが次期公認筆頭候補であるトラファルガー・D・ワテール・ロー、ざっと思いつくのはこれくらいか」

「多いのか少ないのか…あのティーチやトラファルガー・ローも”D”の名を持つてたのね、そしてロックス…かつて海賊王と覇を競った伝説のロックス海賊団の元締め、こうして聞くと錚々たるメンツね」  
「まあ話を戻すが俺が奴に注目するのはその血筋と性格故だ、奴の父親は”モンキー・D・ドラゴン”、革命家だ」

「彼のフルネームなんて初めて聞いたわよ!?!まさか船長さんの父親があの革命家ドラゴンだなんて…え、これって聞いてよかったのかしら？」

「驚愕に目を見開くロビン、無理もない”革命家ドラゴン”は直接世界政府を打倒目標としている組織のトップであり故にその名は広がっているもののフルネームなどは一切不明だったからである。」

「ま、くれぐれも内密にな、海軍の英雄の孫にしてかの革命家の息子、そして四皇の一角である赤髪の薫陶を受け、東の海からここまで数々の試練をくぐり抜けてきた奴の成長速度…いやはや末恐ろしく思う

よ」

「…おじさまは何を考えているの？船長さんに何をさせる気？」  
「別に今すぐ何かやってもraithたいとかいう訳じゃない…俺は麦わらのルフィに対して一つの定義をつけている。」

”未知数の潜在能力”…奴はこの先航海の中で成長し覚醒、やがてはかの四皇にすら牙を届かせるだろう」

かつての”知識”を思い出しながら、多少の”ズレ”があるとは言えこのまま行けば間違いない”知識”通りのルートを進むのだろうと考えながら伝えれば流石に平静でいられたのか

「まさか…船長さんと四皇をぶつける気なの!?無謀よ!いくら船長さんが強いと言ってもそれはこの”前半の海”だからこそ通用する話、後半にナワバリを持ちその頂点に君臨する”白ひげ”、”赤髻”、”百獣”、”ビッグマム”…誰とぶつかったとしても勝つ事は不可能よ！」

珍しくその声は驚愕に満ちていた。

「どうどう、落ち着けロビン…教えただろ?どんな時でも冷静に、それにさつきも言ったが今すぐどうこうという話じゃないさ」

「そうは言っても…」

「最終的に麦わらは海賊王になる事を目標としている、ならばそのうちぶつかったも不思議では無いだろう?」

「…その過程で四皇とぶつかるのは止められないと?誰にぶつかったも多少強くなっただけじゃ勝てないわ、それこそおじさまや他の大将クラスの実力を持ってないと勝負にすらならない」

「買い被りすぎだ、いくら俺が中将とは言えあんなロギアお化けどもにや敵わんよ。」

それにロビン、ポーングリフを追えば今のままなら必ずビッグマムにぶつかる、例えあの麦わらが四皇に挑まなくてもそれは避けれん事実だ」

「それはどういう…」

「ま、お話はここまでだ。そろそろあの長官にも会っておかにならんだろう…それからロビン、四皇もひよつとしたら三皇になるかもし

れんぞで?」

「まさか海軍が?…それこそ大混乱必須じゃない、海が荒れるわよ?」

「詳細は伏せるがじきに時代は大きく動くだろうさ、まあ心配いらんだろうが乗り遅れるなよ?」

そう言つて甲板にあがるクリークに対してロビンはその場で少し考えるもその後ろに続くのだった。

## 鈍熊愚者 ドンクリークさん

「長官！ルッチ氏の「ご」一行が到着されました！」

「帰ったか！通せ!!」

司法の島「エニエスロビー」

世界政府中枢に繋がる政府の玄関とされ、海底監獄インペルダウン及びマリントフォードの海軍本部と並ぶ三大機関とも評されている島である。

その島の建物、島全体を見渡せる大窓のある部屋にて名目上はエニエスロビーのトップでありルッチ達CPの長官であるスパンダムはその報告に嬉々として答えた。

「長官、お久しぶりで…」

「長年の潜入ご苦労！よく戻ったなルッチ、カク、ブルーノ、カリファ！」

「セクハラです」

「名前呼んだだけだが!？」

「ご要望のプルトンの設計図は存在は確認したものの奪取は叶わず…同じくニコ・ロビンの身柄も確保は叶いませんでした」

ルッチの簡潔な報告にスパンダムは軽く舌打ちをしてドカリと椅子に座りこむと

「ちっ、やはり赤カモメの奴らが邪魔だったか？政府専用列車であるファイブスター号の強襲に破壊なんて大被害を出しておきながらお前らでも無理とはな…」

結局暴走したファイブスター号であるが猛スピードでエニエスロビーに向かう中で議論は紛糾したもののこのままではエニエスロビーに対して大きな被害が出ると判断、貴重な海列車であるものの背に腹は変えられぬという事でエニエスロビーからの砲撃によって破壊されており再び走るにはかなりの年月を要する有様となっていた。

「まあ海賊共の襲撃はありましたが…お望みならば今すぐ殺して設計図とニコ・ロビンの身柄を確保して来ましょうか？」

指を鳴らし獰猛な笑みを浮かべるルッチだったが

「まあ待て、どの道奴らもこのまま素通りとは行かんだろ…海軍本部に行くのには来るだろうしその時にこのおれ自ら言えばいいだろう、なんとたっておれは五老星からこの任務を受けているんだからな!!」

「そういうえば長官、フクロウ達はどうしたんじゃ？奴の事じゃからてつきり手合わせでもしかけてくるじやろうと思っと思ったんじゃが」「ん？ああジャブラがああ”白ひげ”のところに潜入してたのは知ってるだろうが…フクロウとクマドリなら奴の応援に行かせてる。

なにはともあれ5年間の任務ご苦労！報酬というわけでもねえが後で渡してエもんもあるんだが…とりあえず先ずは忌々しいあの赤カモメに会ってからだな、ルッチ以外は隣の部屋で待機してろ」

「セクハラです長官」

「指示しただけでか!？」

「長官」

「な…何だ」

「本部中将の鈍熊ですがどうやらウォーターセブンに来た時点で我々CP9の事を掴んでみたいですが、実際にアイスバーグの秘書をやっていた時にカマをかけられました」

「またセクハラって言われるかと思っただが…しかし何処で漏れた？お前らがバレるようなハマを犯すとは考えづらいが」

「セクハラです」

「何が!？」

「それより長官殿、任務は続行でいいので？お望みならば始末して手に入れて来ますが…」

「ワハハハハ！まあ待てルッチ、あくまで海軍はおれたち世界政府の下部組織…おれが言えば大人しく設計図とニコ・ロビンの身柄を渡すだろう」

そう自信満々に言ったスパンダムであったが

「いや、それは断らせてもらう」

実際に対面したクリークから返ってきたのは否定の言葉であった。「おれは五老星からこの任務を受けてるんだぞ!!そのおれに逆らうとはどういう事かわかってんのか!？」

威圧を目的として背後にルツチとブルーノを並べ、向かいに座ったクリークにそう凄むスパンダムであるが

「ならばこちらから五老星に直接渡せば済む話、わざわざそちらの手を煩わせる事もない」

「ああ!?!こちらら全人類の平和の為に働いてやってるんだぞ!そのおれを邪魔する愚か者共は大きな平和への犠牲として殺してよし!!」

おれ達が寄越せと言う物すら大人しく寄越さねエ奴は死んで当然!そこんとこわかってんのか、ああ?」

「ほう…それはこの俺を殺すと、そう言ってるのか?」

クリークも勿論その程度で怯むわけも無く両者は睨み合う。

「ワハハハハ、まさか…世界の平和の為に戦う仲間をおれが殺すわけねエじゃねえか、ただ不慮の事故とかが起こるかもしれないって話だ」

「ハツハツハツ、そちらこそ不慮の事故には気をつけるといい…夜の来ぬ不夜島とは言え光の届かぬ所はあるだろうしな」

「いいだろう…ならその代わりとしてそのニコ・ロビンの身柄はこちらで引き受けてやる」

流石にスパンダムもこの場でクリークを排除してプルトンの設計図を手に入れようとするほど浅慮では無くその目的は副案であったニコ・ロビンへと移ったがクリークは不思議そうな顔。

「何がその代わりになるのかわからんが…それも断らせてもらう、彼女の身柄はこちらで確保した以上責任をもって海軍本部に送り届ける義務がある。

別に五老星から命令を受けたとかでもあるまいし何故そちらに身柄を引き渡さねばならんのだ?」

「ああ!?!その女は世界を恐怖に突き落とす”古代兵器”を復活させ

ようとした悪魔の土地”オハラ”の忌まわしき血族だぞ！それを庇うつもりかてめェ!!」

「なんだ、彼女の身柄を確保したと言う手柄でも欲しいのか？ならこっちから上に口きいてやるから今日の所はそれで納得しろ、いい大人なんだから政府と海軍でやり合っても仕方ないのはわかるだろ？」

そのクリークのバカにしたような言い方にスパンダムは激昂し思わず怒鳴りそうになるも後ろに控えるCP9の存在を思い出し一つの計画を思いついた。

「そうだ…なあ鈍熊中将、テメェ最強の中将なんて言われてるんだろ？ならちよつとうちの部下と模擬戦でもどうだ？スキルアップって事で…これも政府と海軍双方の交流を兼ねての事だ、勿論断らねえよな？」

「ああ当然だともお互い”仲良く”しないとなあ？」

クリークはスパンダムの薄笑いしつつの提案に頷き了承したのであった。

## 熊豹激突 ドンクリークさん

「随分と大仰な鎧だ、それに剣に棍とは随分とやる気のようにだな？」  
「戦える手段…それこそ”武力” ってのはあればある程いいに決まってるだろ？」

「ふ…しかしそれなら一般の海賊が勘違いするのも無理は無い。」

だが知っているぞ鈍熊、貴様実際は我々と同じく六式を極め体術を得意としているらしいな？」

「ほう…まあ別に隠しているつもりは無いんだがな、体術勝負が望みか？」

「是非その強さを御教授頂きたいものだ、なあ”最強の中將”？」

エニエスロビーに作られた屋内庭園、普段は水が流れ緑豊かな働き詰めの者達を癒す空間は緊迫した空気に満たされていた。

隠す意味もないだろうと仮面は外し、上着を脱いで鋭い目つきで腕を構えるルツチ。

それに対してクリークも示威を目的としてフル装備で相對、しかしルツチの提案にまあ構わないかと考え海軍コートに加え武装一式を外したタンクトップにズボンと身軽な格好になつてはゆつくりと構える。

「両者準備は…いいようじゃな、長官曰く死んでも恨みつこ無しと言うとつたがあくまで”交流試合” って事じゃから程々にの」

「殺す気で行つても死にはしないだろう、なんと言つてもあの赤力メモのトップなのだからなあ!!」

カクの言葉を他所に踏み込み、それと共に繰り出されるルツチの指銃。

「随分といきなりだな」

「易々と止めておきなながら…それとも卑怯だと言うか？」

様子見と言えど鍛え抜かれ、人体すら容易く貫く筈の指銃はクリークの掌に易々と受け止められていた。

「いや？どんな手段であれ最後に勝つ事こそ本当の強者だ、別に卑怯



だのどうの言うつもりは無い」

「全く同意だ！指銃・黄蓮!!」

「紙会・桜舞（かみえ・おうぶ）からの…嵐脚・辻風!!」

ルツチの右手から放たれたのは相手を簡単に蜂の巣にしてしまえる指銃の連射。

相手の攻撃を先読みし紙のようにヒラヒラと躲す特殊な歩法である”紙絵”。

”桜舞”は”紙絵”を更に突き詰めて”剃”の足運びを加え進化させた無音と幻惑の足運びであり、それによりルツチの攻撃は幻像を貫いただけで終わり、お返しとばかりにクリークの両脚が振り抜かれ巻き起こされたのは十字を描く鎌風。

「分身だ?!?っ鉄塊!!」

しかしルツチとて六式を極めたいわば”超人”

「だろうな！拳砲!!」

瞬時に肉体を硬化、そのままノーダメージで受けると共にクリークは踏み込み、好んで使う変形型の六式…指銃の要領で拳を繰り出す”拳砲”はルツチの身体を大きく吹き飛ばした。

「飛ぶ指銃…撥（ばち）!!」

「遠距離体術か！ならばこちらも…飛拳砲!!」

かたや一本拳、かたや拳を振り抜く事で生み出された衝撃波はぶつかり合いそれに紛れるように

「嵐脚・凱鳥（がいちょう）!!」

ルツチは踏み込むと共に身体ごと脚を回転、振り抜かれた脚がおこした鎌風は通常の嵐脚とは比較にならず周囲の壁に斬撃痕を刻みながらクリークに迫る。

「それが凱鳥か、なら…鎌威断つ（かまいたち）!!」

しかしそれに対するは腕ごと振り抜かれた手刀、それと共に巻き起こされた鎌風がルツチの凱鳥と衝突し相殺した。

「ふむ…腕で嵐脚を放つとはな?」

当然六式にそんな技は無くルツチは軽く驚くも

「不可能では無いだろう、多少コツがいるとは言え腕に脚部並みの筋

力をつければやれん事は無い。

それに六式つてのは割と自由度が高いからな、使い易いように改良出来るならそれに越した事は無い」

クリークの言葉を聞き全身の筋肉を隆起させ豹の特性を持つ人獣型へとその身を変化。

「それはいい事を聞いた…ならばゾオン系ならやれるかもしれないという事だろう？嵐脚・豹尾！」

月歩にて宙に飛び上がりそのまま右脚を軽く回して生み出された螺旋を描く斬撃は真つ直ぐクリークへ

「そうだな、ゾオン系はそれだけで純粹に身体能力を一段上のステーションに引き上げる。」

この豹尾とやらもそのうち尻尾で出せるかもしれないな、飛拳砲!!」ぶつかり合った衝撃波は相殺、半ば予想していた結果にルツチは舌打ちするも

「その通り、迫撃においてゾオン系こそが最強の種だ…ロギアやパラミシアに遅れはとらん」

「全くだな、特に肉食系なら尚更…まあ凶暴性が増すのが珠に疵だが」

「疵などと…おれにとつては最早慣れたものだ！指銃・斑（まだら）」

先程までより更に身体能力が上昇し、更に鋭い爪による両腕での”

黄蓮”を超えた指銃の連射

「いい指銃だが…悲しいかな威力不足だな？」

しかしそれですらクリークの肉体を貫く事は出来ずならばとばかりに軽く右腕を何度か振り擽猛な笑みを浮かべて右腕を振り抜けば

そこから生み出される衝撃波が真つ直ぐにクリークへ

「カマイタチ…だったか？」

「さっきのさっきで覚えるとは随分と…だがまだ収束が甘い、これじゃ切り裂くのはまだ無理だな」

避ける事すらせず平然とその身で受けるクリークにルツチはほんの少し苛立つもそこは諜報機関の人間、直ぐに冷静になり改めてクリークを観察する。

「鉄塊か…にしても妙だな、瞬時に切り替えてるにしてもそれにして

は動きが多い」

「誰も鉄塊をしていると言った覚えは無いが…それに鉄塊をかけたままでも動ける技術が無いわけでも無し」

「鉄塊拳法…あの野良犬以外にも使える奴がいたとはな」

「そつちではそう呼ぶのか、こちらでは”金剛体術(こんごうたいじゆつ)”と呼んでいる…続けて行くぞ!”崩拳砲つ!!”」

放たれたのは腰から肩に、肩から肘に、そして手首へと回転エネルギーを伝え威力を増幅された拳、当然鉄塊を発動させて拳を受けるルツチであつたが

「つ…!!拳砲”とか言ったか、たかだか”指銃”の出来損ないと思つていたが成る程貫通力は劣れど威力は上…フクロウが好んで使うのも理解した」

その威力はルツチの鍛え上げられた鉄塊を持つてしても完全に防ぐ事は出来ず軽く眉を顰めるルツチ。

「流石CP9最強、この程度では倒れんか」

「抜かせ…だが興が乗つた、少し本気でいかせてもらおう”攻式・紙絵武身”…おれの技は一段階進化する、これまでと同じだと思わぬ事だ」

それと共に元の体から獣人化により二回り近く大きくなった身体を圧縮、人間の姿と変わらぬ大きさに変化させ再び構えたのだった。

## 花の確執 ドンクリークさん

海軍本部中将”鈍熊”クリークとCP9最強の”殺戮兵器”ロブ・ルツチ、両者が激しく戦闘を繰り広げる一方で独立遊撃隊が確保した”とされる”ニコ・ロビンはエニエス・ロビーの一室に勾留されていた。

勿論海楼石の手錠（偽物）をはめられ、同じ一室にはフル装備の独立遊撃隊の海兵が2人が待機と嚴重な警戒の元にあったが

『ふーん、国を守る明王にワノ国のトップである將軍…そしてその地位にあるカイドウにオロチ、先代將軍である光月家の息子と娘、それと赤鞘と呼ばれる九人の家臣は18年前のオロチ反乱時に行方不明…なるほどなるほど、これは使えそうだわ。』

あら、こっちは…やはり世界政府はカイドウと武器の取引を行っていたのね、それが北の海に流れて…道理で戦争が40年も続いているわけね。

へえ…カイドウに息子、しかも爆弾付きの鎖…となると親子仲はあまり良く無いって事かしら？』

ロビンの持つ”ハナハナの実”の能力、それは自身の身体をあらゆる場所に咲かせる事であり今回ロビンはクリークの”鎖国によりあまり情報が入ってこず、更には政府から差し止められているワノ国の情報の収集”という依頼により、まず各所に目と耳を…更には腕まで咲かせエニエス・ロビーのあらゆる資料を閲覧、その頭脳と記憶力をもつてまたたく間に情報を集めていく。

しかしそんな中響くノックの音にロビンが能力の使用を止めて目を開けるとそこにいたのはCP長官のスパンダム。

「スパンダム殿？何故ここに…？」

「ああ？おれはサイファーポールの長官だぞ！何だおれがここにいちや不味いつてのか？」

「い、いえそんな事はありません！」

「おいそれよりも海兵共、おれはこの女に話があるから少し出てろ」

「え？いやしかし…」

「この女は古代兵器復活の鍵を握ってるかもしれないねえんだ、政府の間としちゃ話ぐらいは聞いたく必要があるってもんだろ？」

「はあ、それはわかりますが…」

「おん？それとも何か？このおれに逆らおうってか…サイファール長官であるこのおれに!!」

今回ニコ・ロビンの見張りとして待機している2人の海兵、彼らはスパンダムについては彼の性格と無茶振りをしてくるかもしれない、という話しをクリークから聞いており、その場合は頑なに断つても面倒なので、あまりにも無茶なお願いで無い限りは聞いてやれという指示をもらっていた為にお互い頷き

「…わかりました、では我々は表にいますので何かあればお声がください」

そのまま部屋の外に、思い通りにいったスパンダムは笑みを浮かべロビンに向き直る。

「さて…こうしてちゃんと話すのは初めてだなあニコ・ロビン？おれはサイファール長官のスパンダム…ちよつと色々話を聞かせてもらいたいんだが、勿論嫌とは言わねえよなあ？」

「あらご丁寧に、そんなお偉い長官様が私に何の用かしら？」

「…気に入らねえな、テメエは海軍に捕まって能力も封じられてるっていうのに随分と余裕そうな顔だな。まさかテメエこの先どうなるのかわかってねえのか？」

「私はこの後独立遊撃隊と共にマリンプォードへ行くんでしよう？」

「ハハハ、あのお優しい中将の事だから無体はしねえだろうが…果たしてその後はどうなるかなあ？お前は幾度も死んだ方がマシだと思う程の苦しみを味わう事になる…」

「まあ怖い」

「舐めてんのか？テメエの身柄は必ずこっちで手に入れてやる！覚悟しておけ…痛めつけて、利用して、海に捨ててやる！お前の存在はそれほど罪深エんだ、わかってんのか!!」

「まあ貴方達が私の事をどう思おうと勝手だけれど”やれるものなら

” やつてみたら?”

「デメエ：そんなデメエに一つ教えてやる。18年前デメエの故郷であり悪魔の地オハラを焼き払ったバスターコール、当然覚えてるよなあ?」

「：私が忘れるとでも?」

「ハハハッその顔だその顔!随分と余裕そうで気に入らなかつたが：そのバスターコールを発動したのはスパンダイン、おれの親父さ!!」

「：へえ?」

「要するになあ：あんまり舐めてつとかつての惨劇がもう一度起きてもおかしくねえって話だ」

「それならここで止めておいた方がいいかしら?」

「ハハハハッ笑わせる!止めるだと?能力も使えねエデメエがどうやっグフツ!」

それと共にスパンダムは喉に突き刺さるロビンの膝。

「デメツ何じやが!」

突然の強襲に混乱しつつもスパンダムはゾオン武器である”象剣ファンクリード”を抜き放ち構えれば

「人を呼ばれても面倒だから：先に声を出せないようにしようと思つて」

今度はロビンの脚がスパンダムの首に振り抜かれ再び喉にダメージを与え、更には

「その剣も危ないわね」

手錠をしたままスパンダムの手首を握ると共に捻り上げ”ファンクリード”を取り落とさせ、先ほどのダメージにより上手く声を出せないスパンダムはドアに駆け寄る。

「：ツ!?：デメ!!」

「少し：大人しくしておいてもらえないかしら?」

足払いと共にスパンダムは引き倒されると再び喉に突き刺さる膝、床と挟まれた事により更なるダメージを与えられた事で咄嗟に止めようとしたスパンダムだったがその腕を掴まれると共に

「：ツ!?：ア!!」

グルリと捻られると共に鈍い音が響く。

「さて…別に今更どうこういうつもりは無いけれど、ケジメは必要よね?」

しかしそこで響くノックの音、スパンダムは何とか声を出そうとするも喉が抑えられ声は出せず、ならばこのまま表の海兵が不審を抱いて踏み込むのを待てばいいと考えるも

「スパンダム殿?先程から物音が…」

「んんっコホンっ…ああ!?!少し暴れたから大人しくさせただけだ!!お前らは黙って表を見張ってろ!!」

ロビンの口から紡がれた自身の声に目を見開く。

「か、かしこまりました…ただあまり手荒な真似をされるとこちらもそれなりの対応をしないといけませんので…」

「フン!そのぐらいわかっていると云ってるだろうが!!…ふう、あら驚いた顔をしてるわね、貴方CP9の長官なんでしょ?」生命帰還” っ て知らないの?」

そして再び静かになる外にロビンは一息、そして目論みが崩れたスパンダムはなんとかこの状況を脱出すべく頭を回転させるも

「さて…」口封じ” っ て知ってるかしら?手錠って振り上げて叩きつけるだけでも十分な威力を發揮するのよね」

その言葉に床に引き倒されたスパンダムは顔を青くさせると重そうな手錠をつけたロビンの両腕がその顔面に向けて振り下ろされたのだった。

## 熊豹決着 ドンクリークそん

「えげつねエな喉に齒、顎もか、更には腕と指も：随分と念入りに壊してやがる」

「海軍では”口封じ”って呼ばれるやり方っすね、完全に喉を潰した上に齒を折り顎も外して喋れなくした上に、指の骨と手首、腕も折って筆談すら出来なくするやり方っすよ」

ニコ・ロビンが勾留されていた一室、簡素な椅子とテーブルに海楼石の手錠をはめられた彼女が勾留されていた一室は見張りの海兵が数回目の確認をした時には既に彼女の姿は無く度重なる暴行でも受けたのか顔を腫らしたスパンダムが倒れていたただけであった。

「：海軍には随分と恐ろしい技術があるんだな」

「サイファアールポール長官の負傷にニコ・ロビンは行方不明：まあいいとりあえずこっちはルツチさん達に報告だな」

「こっちはとりあえず中将に報告っすねー」

担架で運ばれるスパンダムを他所に話し合う海兵と政府職員、身柄を慎重に扱う必要があるニコ・ロビンと、見張りを追い出して接触を凶り返り討ちにされて逃走を許したスパンダム。

2人はとりあえずこの事態に頭を抱えつつも上司に報告する為に駆け出し、一方その頃相対するクリークとルツチ。

「この程度ではなからうが：この技は鉄塊すら貫く、死んでくれるなよ海軍中将!六王銃”（ろくおうがん）!!」

六王と呼ばれる技がある。

六式の全てを極限まで高めた者のみが見える究極奥義であり、両拳を相手に当て、凄まじい衝撃を相手の体内に送り込む技である。

相手の防御を貫通する防御不可能な正に一撃必殺の技であり、当然CP9でも最強と名高いルツチは会得している故に死んでも構わないとばかりにクリークに放った。

「貴様っ…」

「それが”六王銃”…いい技だ、浸透勁とでも言うべきか?”インパク



ト”や”リジエクト”にも似ているな」

まともに喰らったにも関わらず、平然とした顔で技の批評までする相手に一瞬激昂しかけるも

「…随分とおかしな手応えだが、何か体内に仕込んでいるのか？」

「ハハハ、改造人間でもあるまいしそんなびっくり機能は持つてないな」

「ほう、”パシフィスタ”に”ジェルマ”例はいくらでもある、それとも…貴様の提唱した”ミリタリスト”とやらの関係か？」

直ぐに落ち着き冷静に分析する。

「まさか…ちやんと内臓まで鍛えてるだけだ」

「貴様…巫山戯ているのか!!」

「巫山戯てはいない、まあ良いものを見せてもらった礼にこちらの六王も見せてやろう」

「何を…まさか!!」

「”鉄塊”、”紙絵”、”指銃”、”剃”、”月歩”、”嵐脚”…六つの技の要諦を以て放つ六式の奥義、ならば海軍にも使える人間がいてもおかしく無いとは思わないか？」

それと共に両腕を持ち上げるクリーク、その構えは奇しくもルッチが六王銃を放つ時と同じく両拳を上下に置いた構え。

「面白い…ならば受けてやろう、鉄塊・剛!!」

「とは言え自己流だがな、六大招式…絶召・六王砲!!」

ルッチの胴にピタリと当てられるクリークの両拳、それと共に吹き飛ばされるルッチであったが

「ぐっ…何という衝撃、六王銃に拳砲とやらの威力を混ぜ込んだか」

「道理で…鉄塊だけじゃ無いな、紙絵で衝撃を流したな？」

想定したよりも軽い手応え、それに対して考察するクリークと技を受けた事により六王砲の原理を理解したルッチ。

次こそ決着とばかりに再び対峙する両者であったが

「ルッチさん！カクさん！ちよ、長官が襲撃されました!!」

「中将!!ニコ・ロビンが逃走しました!!」

政府職員と海兵の報告に両者は手合わせを中断

「ふん、これからという時に…」

「何をやっとするんじゃないやあの男は…わしらが相手をしとる間にニコ・ロビンを尋問すると言ったがまさか逃げられるとはの」

その報告に再び武装を纏いコートを羽織るクリークに対してルツチとカクは気が進まなそうな顔をしつつも状況を確認すれば”勾留していたニコ・ロビンの逃走”及び”CP長官スパンダムは負傷による戦線離脱”

更には恐らくニコ・ロビンの身柄を取り返しに来たのであろう、”麦わらの残党による強襲”、その隙を突かれて捕縛していた麦わら一味の逃走”と立て続けに起こっており政府職員、及び海兵は対応に奔走していたのであった。

「残党だと？奴らの船は沈んだと海兵側から聞いているぞ？」

「それが…護送船の真下海中から急浮上してきまして、恐らく潜水艦の機能を持っていたのでは無いかと」

「まあいいくだらんバカ騒ぎなど直ぐに止めてくれる…カリファとブルノはどうした？」

「は！お二人なら既に現場に向かっています」

「長官殿はバカをやらかして不在…おれが指揮をとる。法番隊は有罪陪審員を全員出せ、多少の足止めにはなるだろう、おい本部中将」

一通り確認を終えてクリークに声をかけるルツチ

「どうしたロブ・ルツチ」

「ニコ・ロビンは海楼石の手錠をはめていたな、鍵をこちらに渡してもらおう。それを餌に海賊どもを叩き潰す」

「…いや、既にそっちの長官がニコ・ロビンに不用意に接触して逃した以上そう簡単に信用出来んな」

「チツ…まあいい、いくぞカク。海賊共を全部殺してこの騒ぎは終いだ」

それと共にCP9最強”殺戮兵器”の異名をもつロブ・ルツチが動き出し

「ほう…色々変わったかと思っていたがやはりここでCPと麦わら一味はぶつかるか…というか潜水艦？」

知識と色々違う事態にクリークは納得しつつも首を傾げるので  
あつた。

## 手配更新 ドンクリークさん

” エニエスロビーの陥落”

” 司法の番人” として長きに渡り君臨してきたその報告に聞いたものは、そこまでの事では無いだろう” と楽観視していた。

何しろ島には政府職員に加え、専属で配置された海兵及び護衛艦隊、高い機動力を持ち、人獣一体と名高い” 法番隊”、死刑囚とは言え高い戦闘力を持つ” 有罪陪審員”、そして更には政府諜報機関たるサイファールポールといった、何も考えなければ軽く一国を落とせるくらいの戦力が揃っていたからである。

だが被害の全容が知れると揃ってある者は驚愕を、ある者は歓喜を、そしてまたある者は頭を抱えこれからの事に頭を悩まし、兎にも角にもたかだか数名の一海賊が起こした被害は甚大な物であった。

世界政府専用武装装甲列車” ファイブスター号” の襲撃、暴走、沈没に始まり、エニエスロビー駐留艦隊の壊滅、本島上陸における各施設の破壊、法番隊、有罪陪審員といった戦力の壊滅、サイファール長官であるスパンダムに対する暴行、独立遊撃隊旗艦である” ファイーネ・イゼツタ号” に対する襲撃とそれに付随して専用戦車である” セルベアロシア号” の強奪、そして公にはなっていないがCP9の壊滅：特にCP9史上最強と呼び声高く、最も冷酷な殺戮兵器、と呼ばれるロブ・ルツチの敗北は誰も予想だにしていなかった。

『その場にいなながら何故止めれんかったあ!!』

「いやあ無茶言わんでください元帥：先立って報告した例の設計図の事はご存知でしょうか？」

麦わらの一味には逃げられ、諸々の後始末をしつつ報告しない訳にも行かないのでセンゴクに通信を繋いで事の詳細を伝えていけば恐らく通信の向こうでは頭を抱えている姿がありありと想像出来た。

『いくらお前が手を取られたとは言え遊撃隊の本隊が居ながら：責任問題になるぞこれは』

「いやあ奴らの船は沈んだと聞いていましたので海中から奇襲を受け

るとは思ってもよらず、後責任問題と言うなら設計図を狙って来た襲撃者相手に文句言つてくださいよ、アレらの相手が無ければ麦わらの迎撃に出れてたんですから」

『…恐らく想像はつくが、何処の手の者だ?』

「CP9です、長官のスパンダムの指示だそうです。勿論設計図については後で五老星の方に上げる事も伝えてありましたよ? 因みにニコ・ロビンの身柄も狙っている感じがありましたね」

『あの男…全く手柄狙いか何か知らんが余計な事を』

「それに麦わらの迎撃にはかのロブ・ルツチが出たと聞いていたので大丈夫かと思つてたんですがね…彼の実力は知つていたのでまさか彼が負けるとは思ってもよらず」

『確かにそれについては同意見だ…しかし此度の事で奴らの危険度は大きく跳ね上がった、懸賞金も更新せざるを得ないだろう』

「一味全員ですか? しかもこの前のナバロンの件で更新したばかりですよ?」

『勿論だ、こうなつては麦わらの首一つで済む問題では無い…全くあの血族は次から次に問題を起こしおつて、それより奴らの逃げた先はわかつたのか?』

「いやー、アイツら俺の”セルベアリシア号”を強奪して逃げて行つたんですよ? アレに追いつける手段なんて”マガツノ”くらいしか居なかつたので…」

『ああ、あの鬪魚とやらか…兎に角お前は一度こっちに戻つて来るのだらう? その時に詳しく報告を、場合によっては世界政府側にも報告と抗議を行う必要もある』

「エニエスロビーの方はどうしますか?」

『そちらは政府の者に任せて構わん、こちらからも言つておく。お前にはまだやつてもらわねばならん事が大量にあるのだから急いでこちらに戻るように』

「了解しました」

それと共に通信が切れるとクリークは息を吐き出し

「しっかし結果だけを見れば原作通り麦わらの勝利とは言え…随分と

過程が変化して来てるな、CP9もあの4人以外見てないし…やつぱ  
ジャブラが白ひげのところに行ってた関係か？」

原作との違いを考えつつこれからの方針を組み立て直すのだった。  
そうして世界政府、海軍共に後始末に奔走し襲撃犯である麦わらの  
一味は軒並み懸賞金額が更新。

CP9のロブ・ルツチを破った船長であり主犯とされる”麦わら”  
モンキー・D・ルフィ”3億ベリ”

同じくCP9のカク、本部大佐であるTポーン他多くの海兵や政府  
の戦力を撃ち破り、高い戦闘力を持つと考えられる”海賊狩り”ロロ  
ノア・ゾロ”1億6000万ベリ”、”黒足”ヴィンスモーク・サン  
ジ”9000万ベリ”

”ファイブスター号暴走の主犯である”泥棒猫”ナミ”3000  
万ベリ”、”長鼻ウソップ”3000万ベリ”

CP長官であったスパンダムへの暴行、更に古代文字が読めると考  
えられる”悪魔の子”ニコ・ロビン”8000万ベリ”

そして一味のエニエスロビー襲撃に際して大きな要因であると考  
えられる”鉄人”フランキー”4400万ベリ”

これらの手配額更新とエニエスロビーの襲撃は瞬く間にニュース  
となり、世間はこの話題で持ちきりになるのであった。

そして一方

「よお…随分と久しぶりじゃねえかティーチ？」

「おお、ジャブラじゃねえか…なんだ、隊長だったサツチの敵討ちか  
？」

「グランドライン”バナ口島”そこで因縁ある者達が出会うので  
あった。」

## 闇狼問答 ドンクリークさん

「ゼハハハハ！ エニエスロビーの襲撃にあ随分やるじゃねえか最近の奴らは!!」

「オイオイオイ笑いごとじゃねエよティーチい、これで万が一警備が厳しくなったらどうするんだ、おれの祭りに差し障りが出るかもしれねエじゃねエか」

「グランドライン」バナロ島、点在する村の一つに2人の男の姿があった。

普段は穏やかな気質を持つ人々が暮らす長閑な村であったが周囲の家は固く戸を閉ざし村に来て一通り暴れた男達を恐々と見ていた。彼らは「黒ひげ海賊団」、黒ひげことマーシャル・D・ティーチを船長として結成された海賊団である。

「よお、見つけたぜティーチ：それに」祭り屋か、死んだと思つてたが」

そこに声をかける1人の男、目元に走る傷と細い髭を生やし長い髪を後ろで辮髪にしたその姿に

「おお四番隊の副隊長様じゃねえか：なんだサツチの敵討ちにでも来たか？」

「狼牙」のジャブラ：わざわざこいつを追つて来やがったか」

ティーチは嬉しそうに、そして「祭り屋 こと」ブエナ・フェスタは顔を顰めた。

「ブエナ・フェスタ」

かの海賊王「ゴールド・ロジャー」や金獅子シキ、「孤高の赤」パトリック・レッドフィールドなど錚々たるメンツがこの海で暴れ回っていた時代に「フェスティバル海賊団」を率いて彼らと争つていた男である。

「祭り屋」の異名を持ち人を熱狂させる事が生きがいで、晩年海王類に食われたことで十数年前に死んだものと思われていた男である。

世間的には死んだと思われていたが「ある物」を持つて何とか海

王類の胃袋から脱出、そして何の因果がめぐり合ったフェスタとティーチとはある目的の為に手を組んだのだった。

「安心しろティーチ：別に敵討ちって程じゃねえさ、勿論船長にも止められたしな」

「ゼハハハ何はともあれ久しぶりじゃねえかジャブラ：どうしてここがわかったんだ？」

「まあ不要な問答はよそうぜティーチ、この状況は理解してんだろ？」

「ゼハハハハ：まあその前に一つ提案があるんだジャブラ」

「提案？」

「おれの仲間になれジャブラ！おれと一緒に世界をとろうじゃねえか！！」

おれが成り上がるための計画も立て直した！“白ひげ”の時代は終わる！！テメエが来てくれりや心強いってもんだ！！」

「へえ、テメエが白ひげをやるってか？」

「ああ、今は無理だが：おれははずれ”白ひげ”、ひいては四皇を下して海賊王になる！！」

「ぎやはははは！！海賊王とは大きくでたなティーチ！！：だがその心意気は嫌いじゃねえぜ」

そうして右手を差し出すジャブラ

「おお、わかってくれたかジャブラ！！四番隊副隊長が加入とは嬉しいニュースだ！“連合”の奴らにも周知しねえとな！！」

当然ティーチはそれに応えるべく右手を差し出して握手をしようとした所で

「と言うとでも思ってたのか？指銃！！」

左手で突き出される一本貫手、無防備に受けたティーチは肩を抑えつつ飛び退いて

「ぐつテメエ…！！」

「ぎやはははは！油断したか？油断したな！決して気を許すな：おれは”狼”！油断させて喰い殺す！！」

「くそつ道理だな：まあ”仲間殺し”は大罪だもんな、テメエはおれをぶつ殺したくて仕方ねえんだろ？」



確かにテメエの隊長であるサッチはおれがぶつ殺した!!でも仕方が無かったんだよ…」

「奴が手に入れた悪魔の実が関係あるのか?」

「いい勘してるじゃねえか…おれは凶鑑に載ってる実の形は全部覚えて、だから奴が手に入れたのがずっとおれが探してた実だとわかった。

白ひげの所にずっといたのもその実が転がり込んでくる確率が一番高えと思ってたからだ!」

「それでサッチを殺して奪った…と」

「まあハズミってやつさ…この能力はおれを選んだんだジャブラ、ゼハハハハ!これでおれは最強になれたんだ!!」

それと共に黒いモヤのようなものがティーチの体から漂い始める。

「ロギアか?影…いや違えな、ソレがためえの執心してた悪魔の実の力だったか?」

「ゼハハハハ!!その通り…見ろ、ロギア系の中でも更に異質!おれは”闇”だ!!たかだか”狼”が”闇”に勝てるか?」

そして一気にティーチの体から噴き出す”闇”にジャブラは少し考えるもやる事は変わらないとばかりに構える。

「おいティーチ!テメエこんなところで騒ぎを起こすつもりか!!」

「黙ってるフェスタ!コイツあここで潰さねえとまた追ってくる!!テメエはグローセアデ号に下がってる!!」

「ちっ…テメエが暴れると後が面倒なんだぜ?まあ精々死なねえようにしろよ!!」

それと共にその場を逃げ出すフェスタ、当然ジャブラは見逃す筈も無く右腕を上げて”仲間”に指示を送る。

「おうジャブラ、何の合図か聞いても?」

「おれが一人でここに来たと思ってるのか?当然逃げる奴がいたらそいつを狙うのは間違ってる無いだろ?」

そう言いながら人間の姿から自身の能力である人狼形態へと変化するジャブラ

「仲間?まさか誰か隊長でも連れてきてたのか!」

「ぎやはははは…安心しろよティーチ、テメエを追ってきたのはおれ一人だ」

そう言っただけ今度は左腕を上げるジャブラ、それと共にいつの間にか潜んでいたのか建物の影、屋根の上、路地裏から次々と黒の三揃の男達が飛び出してくると瞬く間にティーチを円状に囲み全員がその手に持った銃を突きつけた。

そしてその男達の胸には5つの円を十字で繋いだマーク、当然ティーチもそのマークを知っており苦々しい顔をする。

「世界政府…どういう伝手か知らねえが面倒なもん引つ張り出しやがって…」

「ぎやはははは！改めて自己紹介としよう…おれはジャブラ、政府諜報機関”サイファポールN.O.g”のジャブラだ、さっき言っただけ計画も含めてテメエにや聞きたい事が山ほどあるんだ、当然一緒に来てくれるよなあ？」

ニヤリとした笑みと共に明かされたその正体にティーチは驚くのだった。

## 闇狼激突 ドンクリークさん

「ジャブラてめエ…オヤジを、おれ達を騙してやがったのか!!」

白ひげ海賊団の仲間であった”狼牙”のジャブラ、そんな彼のカミングアウトにティーチは驚愕すると共に激昂した。

「騙した覚えはねえが…本当の事を言っていない自覚はあるがな」

「サイファーポール、まさか政府の犬が入り込んでやがるとは…」

黒ひげにとつてジャブラは四番隊副隊長であり80000万の首である実力者であり、まさか世界政府の手の者だとは考えもしなかった事である。

「そうは言うがなティーチ…おれが”白ひげ”なんて大物の所に危険を犯して潜入したのはテメエのせいなんだぜ?」

「何だと…?」

”マーシャル・D・ティーチ”…白ひげ海賊団に20年以上所属する古株でありながら最悪の犯罪者”天竜人殺し”であり、正体不明である5億の賞金首”覆面髑髏”ティーチの最有力容疑者、それ故に世界政府は多少の無理をしても潜入任務を決定した」

「ほんとにどこのどいつか知らねえが余計な事しやがって…そのせいでおれが立てていた計画はパーだ!!覆面髑髏のティーチ”はおれじゃねエ!!」

「まあ安心しろティーチ…」覆面髑髏”が最初に確認されたのは18年前のオハラにおけるバスターコール、そしてその後マリージョア襲撃事件…その後だ、おれが潜入したのは。

次いで各地で奴隷の解放や王族の襲撃が確認されている…その過程でてめエが動いてねえのは確認出来た」

「おお…じゃあおれが疑いは晴れたって事か!!」

「ああ、だがここに至ってはもうそれ所じゃねえんだよティーチ…お前が”覆面髑髏”か否かなんぞ関係ねえ、言いてえ事は分かるだろう?」

「何を…まさかテメエ!」

「天竜人への暴行、そして何より最悪とされているのが：原理は不明ながら」天竜人のみに発病した病瘵”により天竜人はその数を半数以下に減らした：お陰で世界政府の面目は丸潰れ、今は分かりやすい成果つてのが必要なんだよ」

「このおれを犯人に仕立てようつて腹づもりか!!」

「ま、恨むんなら白ひげの庇護から抜け出した自分を怨むこつた：そのまま大樹の下にいりやこうはならなかったんだがな」

そう言いつつ完全に獣人型へと変化したジャブラは腰を落として構える。

「上等だ：おれはおめエにや殺されねエ、数ある悪魔の実の中で最も凶悪とされるのがこのカログア系”ヤミヤミの実”：おれあ”閨人間”になつたんだ!!」

「閨?ぎやははは!!黄猿大将みたいな光ならまだしも閨にどんな攻撃力があるつてんだよ!十指銃!!」

それと共に繰り出される鋭く尖ったジャブラの十本指はそのまま黒いモヤを立ち上らせるティーチの胴体に突き刺さる。

「ぎやはは、ソレ本当にロギアか?ロギアならこの程度受け流せるだろうが」

「ぐうつ!!イテエ：が、掴んだぞジャブラあ!!」

馬鹿にしたように笑うジャブラだったがティーチは自らに突き刺さった腕を掴むと変化は劇的であった。

「なっ!?おれの獣化が!ティーチ!てめエ何しやがつた!!」

獣人形態となつていたジャブラの姿が元の間人形態へと戻りその隙を逃さずティーチは腕を振りかぶると

「閨つてのはな：全てを引き摺り込む”引力”だ!!」

「っ!なんつう馬鹿力だ!!」

「ゼハハハハ!ゾオンの能力者だけあつて頑丈だな：おれはロギアだが攻撃を受け流すなんざ出来ねえし痛みも常人以上に引き込みまう：だがそのリスクと引き換えにおれは”悪魔の力”を引き摺り込む!!」

「ちつ、覇気より厄介なモン手にいれやがつて：」

「おれが能力者の実体に触れりや能力者はその間いかなる能力も使えなくなる!!だからこそおれは“ゾオン”、“ロギア”、“パラミシア” 己の能力を過信するこの世の全ての能力者に対し…おれは防衛不能の攻撃力を得た!!」

「触れてなけりやいいんだろうが!!嵐脚・孤狼(ころう)!!」

殴り飛ばされると共に再び獣化、獣化により上昇した身体能力で空中で右脚を振り下ろせばそれと共に繰り出される狼の形をした鎌風

「なっ!?だが…闇の引力は全てを引き摺り込む” 闇水(くろうず)”!!」  
だがティーチもジャブラの攻撃を受けながら右手を翳すとそのまま” 闇 ”でその身体を引き寄せ振り下ろした脚を掴むとそのまま地面に叩きつける。

「ぎやはははは!!確かに厄介な能力だが…その程度がどうしたってんだよ!!鉄塊拳法・狼弾(おおかみはじき)”!!」

例えゾオン系の能力を解除されたとしてジャブラは六式を極めた超人の一人、しかもその中でも全身に”鉄塊”をかけたまま動けるという特技を持つ故に直ぐに攻撃に転じそのまま両手の甲をティーチに叩き込んだ。

「ぐっ。しびてえ…」

「ぎやはははは、こっちのセリフだけ随分と打たれ強いじゃねえか」  
片や悪魔の実の能力を無効化し、自身も高い戦闘力を持つティーチ。

そして片やゾオン系の能力者であり、六式を修めた超人であるジャブラ。

例え悪魔の実の力を無効化したとて高い戦闘力を持つジャブラと、体の構造の異形さ故か異常なタフネスを持つティーチの戦闘は膠着状態へと変化していくと思われた矢先

「あぁ?」

突如飛んできた銃弾がジャブラに当たり弾かれると共に、周囲に矢が射かけられ爆発、その煙が一瞬でティーチの姿を覆い隠したのであった。

## 闇狼決着 ドンクリークさん

飛来した矢と共に起こった爆発と銃撃、”新手か…”と考えつつも油断なく構えて爆煙が晴れるのを待つジャブラだったが

「なっ、増えやがっただど!？」

煙が晴れた先にいたのは右往左往するティーチ”達”の姿だった。

「これもヤマヤマミの实の力だつてか？」

そう言いながらも手近にいたティーチに殴りかかれば

「なっ！ジャブラさん、待つてくだぐふっ！」

何やら言いながら吹き飛ばされるティーチ”だった”男、吹き飛ばされた後は政府役人を示す黒スーツに身を包んでいた。

更には先程と同じく飛んでくる銃弾と矢、飛来するソレを掴み取る  
と

「体格は変わらねエが…何かの能力で手下共にティーチの姿を重ねてやがるのか？それにこりやダイナ石、こんなモン使つてる奴がいるたあな」

矢尻の代わりについていたのは薬液と赤子の拳くらしいの鉱石が入ったカプセル、その鉱石は空気に反応して爆発をひきおこす鉱石である”ダイナ石”であり、流通は厳しく管理されている筈の代物であった。

”ダイナ石”じゃなくて良かったと言うべきか…まあ何にしる逃す気はねエぞティーチい…」

目を閉じて耳と鼻に意識を集中、獣人化したジャブラの嗅覚、聴覚は通常でも人である状態の十数倍に匹敵し、更に集中すればその分感覚は鋭く変化する。

更には白ひげの船に潜入している間に覚えた”見聞色の覇氣”を発動、それにより周囲で右往左往するティーチ達の中に本物がいない事を察知、そして急速に戦場を離脱する気配が”二つ”

「やられた！あんの野郎逃げやがったな!!テメエら、何いつまでも狼狽えてやがる!!」

「す、すいません!!」

「もういい、おれは奴を追うからテメエらはフクロウ達と合流しろ：逃げたとしても船さえ抑えりや問題無エ」

「り、了解しました!!」

手早く指示を出し踏み込むとまるでその場から消えるように遠ざかる二つの気配を追う。

「ヤミヤミの実」：早急に長官に報告すべきだな、それに”計画”、”連合”とやらについても吐かせる必要が…」

そう考えつつも気配に追いついたジャブラだったがそこにティーチの姿は無く、だが確かに見聞色の覇気はそこに二人いる事を示していた。

「姿が見えねえ…それも”ヤミヤミ”の力だっつかティーチい!!」

「ゼハハハハよく見破ったじゃねエか、流星の”イロイロの実”も見聞色の覇気には通用しねエか、なあ”サイコP”？」

「流星は政府の隠し球、おれの自慢の能力がDisable…」

ティーチと共にいたのは長いツバのキャップに派手なピンク色をしたフード付きの丈が長いダウンジャケットを着た男

「ティーチの仲間か…姿を消していたのはテメエの能力か？」

「Correct answer!!おれは”イロイロの実”のカモフラージュ人間”サイコP”い!!」

「わざわざ追ってきてくれたトコ悪いが…テメエはここで仕舞いだジャブラあ!”闇穴道（ブラックホール）”!!」

それと共に飛び退くサイコPとティーチの足元に広がる闇、当然ジャブラの足元にも広がり得体の知れないソレに飛び退こうとしたが

ぞぷり

踏み込んだ筈の足が地面に広がった闇の中に沈み込む。

「何だこりや!これも”闇の引力”だっつか!？」

足だけで無く腰、胴体、首へと闇に飲み込まれてゆくジャブラ

「言った筈だぜ?おれの力は全てを引き摺り込む”無限の引力”!!テメエも例外じゃねえんだよ!!」

それと共に伸ばした腕さえ飲み込まれジャブラは完全に姿を消し

「That's horrible…」

「闇の引力は物体を無限の力で押し潰し、そして凝縮する…勿論生物も同じくなあ!」解放（リベレイション）”!!」

それと共に広がる闇からジャブラの体がどさりと溢れ落ちた。

どれ程のダメージを受けたのか全身は傷だらけに、更には意識も失い動く気配すら無く

「後はフェスタの野郎を追った奴等か…」

「Hey temporary boss…サイファーポールは面倒だぜ、もしや”計画”漏れてはねえか?」

「ゼハハハまさか、それこそ漏れてりゃこんなもんじゃ済まねえだろうよ」

そう話しながら倒れたジャブラをその場に放置して”グローセアデ号”が停泊していた海辺に移動すれば

「ガイララララ!遅かったじゃねえかティーチ!!」

そこにいたのは巨大なキューブハンマーを持ち眼鏡をかけ特異な髪型をした男、そして周りにちらばるのは何個もの立方体。

「ぬう不覚…まさかティーチがこれ程の戦力を備えていたとは!!」

「ちやぱぱー、動けないし面倒な能力ちやぱー」

否、幾人もの襲撃者をサイコロ状に押し固めた物体であった。

「ゼハハハハこつちも襲撃があつたんだよ…それよりさっさと離れるぞガイラム、おいビョージャック!!」

「エホツエホツ…どうしたティーチ?」

ティーチの呼ぶ声に出てきたのは角兜をかぶり、点滴をつけた小柄な老齢の男

「ジャブラの野郎はCP9で、更にはおれが”覆面髑髏”じゃねえと知った上で狙ってきやがった…”計画”を早める、連合の奴らを集めろ!!」

「わ、わかった!!その代わり…」

「ゼハハハハ!安心しろ約束は守る!!」

こうしてサイファーポールの襲撃により”黒ひげ海賊団”…そし



て複数の海賊残党を纏めた『海賊連合』が動き出したのであった。

## 情報奪取 ドンクリークそん

ウォーターセブン” 廃船島”

エニエスロビーからからくも脱出した麦わらの一味はとりあえずほとぼりをさますべく変装の上潜伏をしていた。

何しろエニエスロビー襲撃により一味のトータルバウンティ（総合賞金額）は大きく増加、今まで乗って来た船でありもう一人の仲間でもあった”ゴーイング・メリー号”も補強したとは言え無理をさせた代償に大破、轟沈し次の島に行く手段さえ失っていた。

「それにしても…まさかエニエスロビーに襲撃するなんて無茶したわね船長さん？」

「だってよー、仲間が捕まったんなら助けに行くだろ？」

「別に戻って来ないなんて一言も言っていないわよ？」ちよつと行っていく” って言ったじゃ無い」

「えー：ならなんで海軍の奴らに大人しく着いてったんだ？あん時ぶっ飛ばしときゃーよかったじゃんかー」

「バカねルフィ、あの時ロビンが大人しく連行されてなかったらアンタもあたし達もあの場で捕まっておかしくなかつたのよ？」

確かにアンタもゾロもサンジくんも強い：けれど相手は次期大將とも呼ばれる最強の中將、アンタの夢もあたし達の夢もあの時絶たれていたかもしれない。

「だつたら一旦は連行されたフリをして警戒が緩んだところをロビン一人が逃げ出せばなんとかなる：そう考えたんじゃない？」

「まあ概ね正解よ航海士さん：でも代わりに船大工さんが新しい船を作ってくれているのは不幸中の幸いね」

そう、一味が仲間の救出の為に手助けした”カティ・フラム”こと”フランキー”はナバロンでウソップに聞いた話を元にお助け料と称してなんと二億ベリーもの大金請求、一味の金庫番でもある”ナミ”と喧々轟々のやり取りをした後紆余曲折を経て一味に加入した上に、新しい船を建造するはこびとなったのだった。

一方こちらは「海軍独立遊撃隊」の旗艦であるフィーネ・イゼツタ号の一室

「はっはっは、まさかメリーが沈んだとは言えうちの旗艦に潜入した上に専用戦車の“セルベアロシア号”をパクって逃走するとは驚いた」

「笑い事じゃないですよボス、ただでさえ色んな所に睨まれてるんですから：“世界政府”や“ブルーマリナー”、“革命軍”とかこれを材料に嬉々としてこちらを排除しようとする勢力もあるんですよ？」  
何やら読み物をしているクリークに拾われて以降長い間右腕を務めて来たギンが苦言を呈すも

「なーに、そんなの気にしてたら世界を変えるなんざ夢のまた夢だ、それにこれを見てみる」

それと共にクリークがギンに手渡したのは紐でまとめられた分厚い冊子。

先程までクリークが読んでいたソレをギンは受け取りパラパラと流し読めば

「こりやまた：ワノ国の情報だけじゃなかったんですか」

「情報制すものは世界を制す”：いい言葉だと思わないか？」

クリークが見ていたのはロビンがエニエスロビーで手に入れた情報とテゾーロ配下の諜報部に所属する“ハニークイーン”がマリージョア潜入で手に入れた情報を纏めた報告書であった。

当初予定していた“ワノ国”の国内情報だけでなく各国の内部情報や世界政府の動向などクリークがこれから動くにあたって色々役割立ちそうな情報が載っていた。

「うわあ…確かにこれだけ情報があれば首の一つや二つ吹っ飛びますね、政府も海軍も」

「例えば…北の海で続いている内乱、ワノ国でカイドウが作らせている武器が世界政府に流れてそこから北の国の加盟国、彼らが雇った海賊に流れている。」

そしてそれに反抗するのが非加盟国、そちらの裏にいるのが”ジェルマ王国”

そして笑える事に政府とジェルマ王国は裏で手を結んでる上に最近じゃ”革命軍”まで出張ってきて三つ巴になってるらしい」

「ノースと言えば北方方面軍はステンレス中将の管轄ですか…まああの人も大概ベテランですし上手く動くと思いますけど」

「当然こんなもんバラしたら混乱必至だろうさ…それこそモルガンズのところにも持ち込めば上手く爆発させてくれるだろうさ」

”新聞王(ビッグ・ニュース)”モルガンズ：確かに敵に回すと色々厄介そうですね」

「だからこれを気にして軽々しく動く勢力なんざ気にしなくても問題無い、どつちかというと黙々と牙を研いでいる手合いの方が厄介だ」  
「それもそうですね…この氷街道を抜ければ後はマリンプォードまではあと少しですしそれまでには各勢力も落ち着いてるでしょう」

今回の件によりだいたい上から怒られたもののクリークに直接の責任は無く、多くの原因はサイファーポール長官である”スパンダム”の過失が大きいとされその任を解かれると共に更迭、更にはCP9まで投入したティーチの捕縛にも失敗、麦わらの一味に敗れた事もあり大きく戦力と信頼を欠いた為これを機にサイファーポール自体も再編が決定していた。

「…ま、ところどころ違いはあるが大きく見れば知識通り…となると次はやはりモリアの所か？」

クリークはそう呟きつつ今頃スリラーバークでゆつくりしているであろう自身の仲間達を思い浮かべ

「ちゅ、中将大変です!!魚が海軍旗を…遊撃隊の海軍旗を奪っていきました!!」

新たに入ってきた報告に首を傾げつつ報告書を仕舞うのであった。

## 氷街道中 ドンクリークさん

「旗が盗られたね…まあ落ち着け、相手は空を飛んでたんだろ？空であいつに敵う奴はいねえよ」

その言葉に報告をしに来た部下は少し考えると

「…あつ！すいません、あまりの事に気が動転してました。」

あ、それから航海士長の報告なんですけどどうやら人為的に氷山が動いており抜け出すのに時間がかかりそうとの事です」

「氷山が？海流じゃ無くてか？」

「いえ、行手を塞ぐように動いているようです」

そう会話しながらクリーク達が甲板に出ると響く鳴き声と共に大型の鷲が近くに、その足にはしかとじたばたと暴れるまるで鳥のような魚のような生き物を掴んでおり、口には持っていたという赤い海軍旗が啜えられていた。

「よくやったカフウ、後でコックにミネストローネを作るように言うておこう」

「くるるるっ!!」

上空を飛んでいた”トリトリ”の実”の悪魔武器、ゾオン系悪魔の実を食べた武器であるカフウは旗を奪取されると共に強襲、犯人？の確保と旗の再奪取を果たしており直ぐに事件は片付いた。

「ぴー…ぴー…とうるるるー!!」

「さて…トンビウオだったか？恐らく人為的なものだろうなっ!!」

そう言いながら魚のような体に翼と嘴を持つ不思議生物”トンビウオ”をわしりと掴んだクリークに

「…そういうえばこの海域はバウンティハンターの”アッチーノ・ファミリーが狩場にしていましたね」

「アッチーノ・ファミリー？」

報告を持ってきた海兵の補足が入りクリークのは額に指を当て記憶を辿る。

「ボス、例の”旗狂い（フラッグマニア）”ですよ、公認海賊からも苦

情が出てた…」

「そういやそうだったな、無断で偽の海軍旗やマークも使ってるんだったか、構成は？」

「確か…父親であるドン・アッチーノとその子供にあたる五人兄妹で、最近新しく流れの賞金稼ぎが加入したという情報があつた筈です」

「どうしますボス、正式に抗議しますか？しかし…確かに海賊内では抜けられないと有名な海域ですが我々海軍が通る分には手出しは無かつた筈…」

「まあ赤い海軍旗はそうそう手に入るもんでも無いしここで狙つたのも領ける話だが…こうなつては少し釘を刺しておく必要があるだろう」

「了解しました、では航海士長にアッチーノファミリーの本拠に向かうよう伝えて来ます」

そう言つてこの場を離れようとした海兵にクリークは首を振る。

「いや不要だ、それよりもこの氷街道をさつさと抜けるように伝えてくれ」

「…まさかお一人で？」

「確かに頭は能力者とは言えあくまで軽く釘を刺す程度だ、それよりも当初の予定通り船をマリノフォードへ進めておいた方がいいだろう。

俺は月歩も使えるし”マガツノ”も連れて行くから追いつくのは問題ないだろう？」

「ですが先に行く手を塞ぐ冰山を何とかしないと…大砲でも撃ち込みましょうか？」

「ちよつと待て…ああ、やっぱ下になんかいるな、ギンお前も”見て”みろ」

その言葉にギンが下の方に見聞色の覇気を広げ

「これは…一旦航海士長に船を停めるように伝えてこい。

何かの生物が大量にいるな、恐らくこいつらが冰山を動かしている…下手に動いても無駄だろう」

「了解しました！」

「正体も確かめとくか…マガツノお、下にいるのを打ち上げろ!!」  
「ブモモオツ!!」

その言葉と共に海面に飛び出したのは背中に架台と鞍と鏡、そして頭部にはライトとハンドルを装着した魚が顔を出す。

その体には銃弾程度なら軽く弾き返す黒い堅牢な鱗を生やし、鋼鉄並みの硬さを持つ鋭く尖り内側に湾曲し右側に大きな傷が走る一対の大きな角、そして角の根本まで裂けた口には下手な鉄板程度なら易々と噛み砕く鋭い牙がビツシリと並んでいた。

”鬪魚”と呼ばれる固有種でありその凶暴さ、寧猛性ゆえに本来であれば人に飼い慣らせるものではない…しかし何の因果かクリークに目をつけられたこの個体はクリークと戦い、そして今は敵わないと逃げ出そうとした所で捕獲された個体である。

最初は定期的に叛逆をしていたものの今では納得したのか完全にクリークや他ごく一部に対しては大人しくなっており、今回もクリークの指示に従い下にいた生物を打ち上げると共にべしやりと甲板に叩きつけられたのは

「何だこりや…ペンギン？不つ細工だなー」

「ギシャー…ギシャー!!」

鋭い牙にヒレの先には鋭い爪を生やしたペンギン、この辺りに生息する固有種であり肉食で寧猛な生物であった。

海中から急に叩き出されたからか混乱はあっただろう、しかし直ぐに目の前の生物を敵と見定め鋭い牙で噛み付いた。

「ほら、怖くない怖くない…怯えていただけなんだよな？つて今アピスいないんだつたな。」

とまあ下にいるのはこいつらみたいだ、恐らく固まって冰山を移動させてるんだろう…まあ俺は釘を刺しに行ってくるから対処は任せた」

そう言つてそのまま棍と剣を握むと船縁を乗り超え海上にいたマガツノにフワリと跨る。

「さて…最近ゆつくり出来てなかったした久々に散歩といくかマガツノ？」

「ブモモっ!!」

「カフウは何か見つけたらそっちの方向に飛んでくれ!!」

「くるるるるっ!!」

それと共に大きく羽ばたくカフウ、クリークはそちらに向かってマ  
ガツノに指示を出すのだった。



## 暑家問答　ドンクリークさん

空からと海から、更には見聞色の覇気も使った搜索ともなればあつけなく”アツチーノ・ファミリー”の構成員と思しき者達を捕縛。

適当に小突き回して話を聞けば流石に海軍の旗を奪うのはどうかと反対した者が多かったが、一味の頭である”ドン・アツチーノ”たつての希望により今回の襲撃が決定。

予想では見つかる前に奪取、よしんば見つかったとしても予備もあるだろうし海賊と違ってそこまで重視せず先に進むだろうという希望的観測により行われた行為であった。

そうして紆余曲折ありアツチーノ・ファミリーの本拠地である”ラブリーランド”へと案内してもらったのだが

「んー…でも海賊じゃん？」

「パーパの言う通りだね、公認だろうが何だろうが海賊は海賊…むしろ旗しか奪ってないんだから有難く思っしてほしいよ」

「流石兄さん！全くもってその通りだ！」

アツチーノファミリーの頭であるドン・アツチーノとその双子の息子達、長兄であるカンパチーノとブリンドと話し合いの場を設け今回の”赤い海軍旗”の強奪未遂と”公認海賊の旗の奪取及び襲撃、更には勝手に海軍のマークを利用して色々とやっている事について問いただした所このような答えが返って来た。

「しかしなあ…旗しか奪って無いと言うが、取り返しに来た者達は手酷くやられたと報告が来ているが？」

「それは仕方が無いよ中将さん、襲撃しに来たなら応戦するのが当たり前だ」

「そーだぜ兄さん、それともおれ達は黙ってやられるとそう言いたいのか？」

「別にそうは言っていない、公認海賊から旗を奪うのを辞めればいい話だろう？非公認の海賊の旗を奪うのに文句を言っているわけでは無い」

「やーだねー、なんで海賊相手にこつちが譲らなきゃなんねーんだ」

そう否定するのはファミリーのボスであるドン・アッチーノ、名の知れた賞金稼ぎであり戦闘に向いた能力“アツアツの実”の能力者であり、そして有名な“旗狂い（フラッグ・コレクター）”でもある。特に自身が賞金稼ぎでもある為海賊旗を奪い取るのを好んでおり集めた海賊旗は数百を超えてるとの噂であった：それだけ海賊が多いと嘆くべきかもしれんが。

しかし普通の海賊ならまだしも海軍からきちんと認可を受けた公認海賊に関しては別である、海賊旗にかける思いは海賊も公認海賊も一緒であり旗を盗られたならそこで終わるものではない、大抵が旗を取り返すべく動いて”アッチーノ・ファミリー”に返り討ちにあった為海軍には相談が寄せられていた為今回海軍旗強奪の件もあり動いたのだった。

「面倒だなー…何ならやっちゃおう？」

「そーだねパーパ、いくら話しても無駄みたいだし」

「ボホボホホ、どうせこの氷街道は抜け出せないんだ：ただ海軍艦が一隻氷山にぶつかって沈むだけの話だ」

尚も言い募るがドン・アッチーノは首を縦に振ろうとせず面倒になったのか話し合いの場は一気に緊迫した空気になる。

「んー海軍と事を構える気は無かったけど：色々言われるのも面倒だしなー、いざ子供達よこいつを倒して船を沈めて”あの”赤い海軍旗をおれのところに持ってこいー」

「ケーケツケツケ、悪いが仕留めさせてもらおうつケ!!」

「おーほっほっほ！わたし達の華麗なるコンビネーションを見せてあげるわ！」

「任せてくれアルベル！相手が中将だろうが何だろうがおれ達2人の愛の前に不可能なんかないぜ!!」

ドン・アッチーノのその指示に部屋に入ってくるファミリーの幹部でもある三男のホツケラと長女であり第4子であるアルベルとその夫であるサルコー、情報によればあと一人いるらしいが今回出てくる様子は無い。

ならばとばかりに両足を踏み締め全身から気迫を出すイメージで力むも周囲には何の影響も無く

「何かしたかったのかな？まあそちらが来ないならこちらから行くけどねー！」

「ボホボホホ、きつとおれ達の前で動けなかったんだろうさ！」

「…ま、おれが覇王色なんぞ持つてるわけないもんな」

不発に終わった攻撃にやはりかと思いつつまずは手近にいたアルベルの額に手加減したデコピンを当てると一撃で白目を向きその場で倒れた。

「アルベル!!てめえ何しやが…」

妻をやられたからだろうか、目を吊り上げ激昂するサルコーに対して首の裏を手刀で軽く打ち据えればその場で倒れ二人はコンビネーションを見せる事なく倒れる。

「ケケッ！よくも妹夫婦をやったつケ!!」

そこに飛んで来るのはホツケーで使われるパツク、どうやら手に持つスティックでこちらに複数個弾き飛ばして来たがその程度でダメージを受ける筈も無く無視して近づこうとしたが

「ほお…何かの薬剤でも仕込んでるのか？」

着弾と同時に、パツクが当たった場所が凍りつき動きを阻害する。

「ケツケツケ！どうだこのおれの特性パツクの味は随分と冷たいだろつケー！」

「まあ別に影響は無いが…これならどうだ？」

その自慢げな声に腰に下げたハンドガン”ベアコング”を抜き放ちそのまま連射、七発全部撃ちきるも

「び…びつくりしたつケ、ケーツケツケ！でもこの距離で外すなんざそんなピストル怖くねえつケえ!？」

銃弾は全て外れホツケラの後ろの壁に、それを見て安堵するホツケラだったが突如として銃弾が爆発

「さて…そちらから近づいてくれるとは随分と親切だな」

哀れホツケラは後ろからの爆風により吹き飛ばされたクリークの目の前に、そのまま拳を振り下ろされ床面に叩きつけられると呆気な

く意識を失ったのであった。

## 長兄奮闘 ドンクリークさん

「いやはや随分と好き勝手やってくれるじゃあないか」

「ボハハハハ多少はやるようだが…弟と妹を倒した事後悔させてやる!!」

その言葉と共に双子の兄弟の弟であるプリントが殴りかかってくると同時その腕を掴んで投げ飛ばしそのまま後ろのカンパチーノに攻撃を加えようとした所で

「ぼくら双子の力を侮ってもらっちゃ困るな」

カンパチーノが手を翳すと同時に空中に投げ飛ばされたプリントが吸い寄せられるようにクリークの背中から強襲。

だがそれはクリークが軽く避ける事により双子同士でぶつかると思いきや

「避けたつもりかい？甘いね!!」

「食らうがいい！ラブリーバズーカ!!」

今度は反発するかのようにプリントが両手を交差した状態でクリークに攻撃、不可思議な動きにクリークはすこし考えるもまた少し横にずれる事で回避

「随分と…変な動きだな、何かの能力か？」

「よく気づいたね、そうぼくたち2人は磁力を持っている。時には同極で引かれ合うように」

その言葉を示すようにカンパチーノが手を翳せばプリントが歩いてもいないのにカンパチーノの元に

「そして時には対極で反発するように！」

今度はそう言ったプリントが今度は弾かれるかのように移動

「我ら兄弟のこの絆、それこそがこの磁力!!」

「磁力ねえ…何か悪魔の実の能力か？磁力はキッドがジキジキだったかを使ってたし金属はくっつかないみたいだが…ペタペタとかその辺りか？」

クリークのその推理にカンパチーノは溜息をつきながらかぶりを

振る

「やれやれこれだから海兵は：悪魔の実なんて不粋な物と一緒にしないで欲しいな」

「ボハハハハ！これはおれ達兄弟の強い絆!!」

「そう！ぼくら双子の間にあるパワー：それは愛！固く結ばれた兄弟愛故の力だ!!」

その断言にクリークはしばし無言になるも

「：はあ、まあ何かの特殊な超能力という事にでもしておくか。それはそうと後がつかえてるからな、手早く終わらせてもらおうぞ!!」

「やれる物なら：」

「やってみろ!!」

それと共に2人はクリークを間に置いた状態で腕を振り上げると引かれ合う力を発動、素早いスピードで両者がクリークに向かうも上空に飛び上がったクリークを挟み込む事は出来ずそのまま

「斧鉞：同舟（ふえつどうしゅう）!!」

空中から落下する踵落としが2人の脳天に直撃、決着はついたかに見えたが

「ぐっ：思ったよりやるじゃ無いか、これが海軍中将の力ってやつかい？」

当たり前が良かったのか意識を絶たれたプリントを他所にカンパチーノが立ち上がり構える。

「む、少し甘かったか？まあ弟は気絶してるしこれで”磁石パワー”は使えねえだろ」

「舐めないでくれ：ぼくはアッチーノ・ファミリーの長兄カンパチーノだ、どちらかというところの方が得意なんだ」

その言葉と共にカンパチーノの身体がひと回りほど隆起しよりマツシブな体つきになる。

「奇遇だな、おれも肉体には多少の自信がある。どっちが上が比べてやろうじゃないか」

「いい覚悟だね：なら第二ラウンドと行こうじゃないか!!」

それと共に両者はて四つで組み合うと共にカンパチーノが押し込

もうとするも

「どうした力自慢、この程度か？」

「馬鹿にしないでくれ!!」

押し込もうとするもビクとも動かないクリークにカンパチーノは軽く驚くと共に更にその両腕が隆起、自身の全力を持って相手を押さえ込むべく力を込めるも

「これが全力か…その程度で得意とは随分と自信があつたらしい」

クリークは組み合つた掌に徐々に力を込めていきそれと共にカンパチーノの手に走る痛み

「ぐっ！これが海軍中将…」

「まあ実力はあるんだろうが…大海を知る事だな」

その言葉と共にクリークは両腕を振り上げるとそのまま宙に浮いたカンパチーノを床に叩きつけると

「がっ!!ごめんパーパ…」

そう言い残してカンパチーノは意識を失つたのだった。

「さて周りは片付いた…次の相手はアンタか？それとも旗は諦めるのか？」

まあ海軍に手を出した以上それ相応のペナルティはあると思うが…」

カンパチーノ、ブリント、アルベル、サルコーが戦う間に全く動かずに寝そべった状態で観戦していたドン・アッチーノにそう問い掛ければ

「ぐはははは…我が子供達が相手にならねーか、流石は海軍中将とでも言つてやるぜ、プシュー!!」

「それにしては随分と余裕そうだな、言つとくがこれ以上やるってんなら更にペナルティは重くなるかもしれないぞ？」

「なーに、この氷街道で軍艦が一隻沈み…そして犠牲者の中には海軍中将もいた…それだけの話しだろ」

それと共に立ち上がるドン・アッチーノ、上半身は何も身につけておらずまるで風船のように膨らんだその身体が徐々に赤みを帯びていく。

「アツアツの実…自身の身体を高温にする能力だったか？」

「その通りよく知ってるじゃねーか…ならおれに敵わねーって事もわかんだろ？」

徐々に高温になるアツチーノと共に部屋の温度も徐々に上がりまるでサウナのような暑さへ変化

「随分と自信があるようだが…そりやちよつと本部中將を舐めすぎだ」

そう言いながら相対したクリークは背中に背負っていた白尾棍を引き抜き構えるのだった。



## 鈍熱激突 ドンクリークさん

「すげえ自信じゃねえか…だがおれの能力はわかってんだろ？プシュー！」

「当然」

「ぐははいい度胸だ、このわたし自ら戦うのは久しぶりだが…簡単に終わってくれるな」

それと共にアッチーノが腕を振りおろせばそのまま超高温の熱波が襲いかかる。

「こんなのはなあ…マグマお化け相手に慣れてんだよ!!」

しかしいくら熱と言えど白尾棍を振り抜く事により熱波はクリークを逸れて壁に当たると同時にドロリと溶ける

「まあ小手調べじゃこんなもんか…ならこれならどうだ?」熱波（あつぱー）”!!”

両手を構えたアッチーノはその場でまるで風を起こすように両腕を振り抜けば高音の熱波がクリークへと襲う。

「だから慣れてると…言ってるだろうが!!」

白尾棍を回転させ盾の如く逸らしそのまま”剃”を使って踏み込み、更に下から掬い上げるように振り抜くが

「ちっ、頑丈な武器だなー面倒くせえ、だったらこれだ!」熱化粧（あつげしよう）”!!”

それと共に身を振るように回転、熱気により竜巻を作り出し作られた竜巻はクリークへ、更には

「ついでに”熱揚（あつあげ）”!!…うん?何で浮かねえ?」

「成る程、上昇気流で相手を上空に押し上げる技か?…まあ俺を浮かせたいんならこんなじゃ足りねえよ」

熱気により強い上昇気流を引き起こしクリークを上空に打ち上げるべく技を振るうもクリーク自身と装備の重さ故僅かに浮かす事しか出来ず

「プシュー、馬鹿にしゃがってだったらこいつだ!」熱物矢（あつもの

や)!!」

ならばとばかりに足元の空気を急激に熱くすると共に全身を超高温化し突撃、受け止めようにも触れればもちろんタダでは済まず避けられるようなスピードでも無い。

「ま、馬鹿正直に正面から来られてもな」

ならばと白尾棍を使い受け流そうとした所で

「ぐははははーそれは読んでいたぞ!!」

攻撃をさせて受け止める事により溶かそうという算段だったのだろう、宣言通り読んでいたかの如く棍の中程を掴んだアッチーノだったが掴んだ身体ごとそのまま持ち上げられると流石に不利を悟ったのか掴んだ手を離すと空中で体勢を立て直しクリークの真上に

「ならこいつはどうだ？ スチーム：アイロン!!」

「いや、流石にそれには当たってやらんぞ」

それと共に空中で大の字に、より一層身体を赤熱化させるとまるで全てを押し潰さんとばかりにその巨体を落下させるも流石にそんなわかりやすい攻撃に当たってやる義理も無く横に避けるとそのまま床に、更には床を溶かして更に下へ下へと向かい最上階から一階まで溶かし尽くすとクリークはアッチーノを追い飛び降りて一階に

「ぐははははやるじゃねえか…しかし何だその棒？ 掴んだ時ちよつとしか溶かせなかつたぞ？」

「ちよつと特別性の合金を超圧縮してるだけだ、マグマお化け相手にもそうそう溶かせねえ代物だよ!!」

その勢いのままにアッチーノの体勢を崩すべく白尾棍を振り抜き足払いをかけるが流石に相手も前半とは言え”億越え”を数多く狩ってきたグラントラインでも指折りの賞金稼ぎ、躲すと同時に踏みつけ

「マグマお化けつてのはあれか、大将だろ？ ぜつてーおれの方が強いんだろーけどよ…だから溶かせないわけねーじゃねーか、熱量アーツ 3000。Cお!!」

踏みつけたまま赤熱化、更にはぼんやりと輝き出しどんどんと体温を上昇しそれに伴い周囲の気温も上がっていきとうとう耐熱温度を

超えたのか白尾棍が赤熱化、咄嗟に”黒化”させようとするも一歩遅くぐにやりと曲げられ

「げっ！本気で溶かしやがった、3000°Cだあ？最高何度あんだよ!!」

「知りてーか？おれのアツアツの実はな…」10000°C”だ!!熱量アーツ5500°C!!」

それと共にアツチーノの拳が煌々と輝くと共にクリークに振り抜かれると共に熱波がクリークを襲う。

「ちっ、少し注意するだけの筈が面倒な事に…ここが冰山でよかつたぞ、全ての水分が持つてかれるわけじゃねえみたいだしな」

月歩で飛び上がると同時体勢を立て直しぐにやりと曲がった白尾棍を背に戻すと腰に佩いた七星真剣を抜き放つ。

「ぐははよく避けたじゃねーか、まー安心しろよ最高温度は出さねーでやるよ」

「ほう余裕のつもりか？」

「まー最高温度だと家が無くなるどころがこの氷街道も海も干上がっちゃうからな…まあそれでも中将相手には十分だろ、相手が大将でも問題ねーくらいだ」

「随分と大口叩くじゃ無いか…三大将相手でも勝てるぞ？」

「ぐはははは…知ってるぜ？今の大将は全員ロギアなんだろ？」マグマ”に”氷”に”光”…マグマも氷も溶かし尽くす上に光なんぞ効くわけねーだろ」

「それは随分と…だったらその光とやらを受けてみる”KZRレーザー”!!」

煌々と輝きながら言つてのけるアツチーノに、ならばとクリークのガントレットから”ピカピカの実”の能力を擬似的に再現したレーザービームが走ると共にアツチーノの肩に指先大の穴を開けた。

「ぐうっ!?何を…」

「おや？光なんぞ効かないんじやなかったのか？」

「馬鹿に…するんじやねーぞ!!熱量アーツ8000°C!”熱焼き球GO(あつやきたまご)!!」

思わぬ攻撃に逆上したアッチーノであつたが流石にこれで決着がつくわけもなく次々と生み出されるのは超高温の熱球、触れば全てを溶かし気化する程の熱量がばら撒かれる。

「流石にこりゃ：最高温度じゃ無くてもこの氷山が無くなりそうだな」

「舐めた口きいてんじゃねーぞ!!熱帯輪（ねっタイヤ）”!!」

熱球と同時に、自身もその身体を縦に回転させまるでタイヤが転がるようにクリークに突撃

「まあ思つたより厄介だが：この氷街道を無くすわけにもいかんな」

それに合わせるように七星真剣を振り上げ

「ぐちやぐちやうるせー！そんな剣なんぞ溶かして：がつ！」

そのまま袈裟懸けに、七星真剣は超高温をもともせずアッチーノを斬り付けると共にその回転は止められ膝をついたのだった。

## 特兵装研　ドンクリークさん

アッチーノファミリーの処遇に関しては紆余曲折あったものの、強力な賞金稼ぎであり海賊を相手に治安に貢献していたのは事実であるが流石にここまでの騒ぎとなると無罪放免というわけには行かず一味の頭である”ドン・アッチーノ”の数病程の収監及び賠償でカタがついた。

甘いという声もあつたがこの件に関わっていない末娘の存在もあわさつての今回の決定、どの道頭であるドン・アッチーノが不在な以上戦力は大きく低下、今までは億越えも相手にしていたようだがアッチーノがいない以上一味の弱体化は免れないであろう。

その他諸々の用事を片付けつつフィーネ・イゼツタ号はようやく海軍のお膝元である”マリンフォード”へと入港、諸々の報告や指示を終えて自身が割り当てられ一応の代表を務める区画”海軍特殊兵装開発研究部”、通称”特装研”へと足を向けた。

「あ、お久しぶりですクリーク中將今回はどうされました？」

「また何か厄介事かしらあ？あらいぶ使い込んでるみたいね」

「ふええ、何で”スーパー超合金”製の棍がぐんにやりしてるのお!？」

「あ、クリーク中將そういえば試製ミリタリストの方どうでしたっす？一応武装の方は色々改良加えて開発進めてるっすけど」

”海軍特殊兵装開発研究武部”、通称”特装研”は主に海軍における特殊な武装の開発と研究を主な仕事とする機関であり、彼等彼女等は当時まだ尉官だったクリークが身に纏う武装の製造開発に関わっており後に専属の武装班へ、更に海軍科学班と海軍技術班が再編された際、クリークが代表となつた特装研へと組み込まれ今では各部署において主任となっている者達であり、武装の開発研究の傍らでクリークの武装の開発及び製造、そしてその武装の報告を受けレポートを海軍において一般的な武装の開発研究を行う海軍本部科学技術部にフィードバックするのが主な仕事である。

その為クリークは武装のメンテナンスの為にここを訪れたのだっ

た。

「ん？ああちよつと能力者とやり合つてな…」

胴鎧やガントレット、レギンスや白尾棍を運んで次々に並べていくクリークだったがそれに対して研究員達が色々意見を言うがやはり愛用していた白尾棍、海軍において開発された超頑丈ながら超重量を持つ特殊合金、”スーパー超合金”で作られ、先端に海楼石を埋め込んだ特製の棍がぐにやりと曲がっていたのには全員頭を抱えており「どんな化け物ですかソレ…少なくとも中将くらいの怪力がないとこうと見事に曲げれない筈ですよ？」

「あら…ねえこれひよつとして熱かしら？力尽くでは無く高温にて軟化したつて所かしら？」

「ええ！でもでも、この合金は赤犬さんでも溶かせないですよお！どれだけの高温を受けたんですかあ！？」

「とは言えこれはもうダメっスねー…一応修理はできるっスけどそれよりいい物があるんスよ」

修理か新規に開発か悩んだもののそのうち主にクリークの近接武装を担当していた男が部屋の奥へといくと車輪つきの架台を押して戻つて来た。

「これは…まさか、加工出来たのか!!」

「いやー、苦労したっスよ？まあ加工については棒状にするだけなんでも何とかなったっスけどまず覇気を使える中将の武器にこの量の海楼石を使用するなんて勿体無いか過剰戦力とか反対意見も多かったんスよ？」

架台に立て掛けられていたのは多少歪ではあるが一本の白い棍、その”海”のエネルギーを持つ海楼石のみで作られた棍であった。

「そうか？海楼石製の武器がありや一般海兵でも能力者を倒せるようになるんだぞ？」

「あー確かにそうですが中将、基本的にだいたいパラミシアは何かしらの弱点を持ちますし、ゾオンも普通のものであれば一般の海兵でも対処可能です。それにロギアに関して海軍の四人、七武海の一

人、中将の教え子あたりですか？基本的にはこちら側の者ですし他にもいるでしょうけどわざわざわざわざ貴重で加工が難しい海楼石製の武器を作る程では無いですから」

「…言われてみればそうか、前に作られた海楼石製の銃弾もあまり成果は無かったしな」

ほぼチームリーダーとなつている男のその言葉にクリークは確かにと頷く。

「その為の黒色弾…監獄弾なんかの特殊弾頭があるんじゃないスか」

「それより持ってみたらどうかしら？白尾棍よりかなり軽くなつてから振りやすいと思うわ」

その言葉にクリークは海楼石製の棍を掴むと軽く数回振り回す

「うーむ…」

「ふええ、何か気になる事でもありますかあ？」

「いや、軽すぎて落ち着かなくてな…」

「あー…確かにあつちとは重量が比べ物にならないツスからねー」

「何とか重く出来ないか？見た目より重いだけでも奇襲になるしやはり重い方が威力が出る、というか…このままだと軽すぎてすっぱ抜けそうだ」

満を辞して作られたフル海楼石製の棍であつたが今まで使つていた白尾棍と比べ重量が桁違いに軽かつた為になんか納得がいかず、最終的には特殊合金である”スーパー超合金”のパイプに海楼石製の棍をぶち込む事により”折れず、曲がらず、超重い”の三拍子が揃った新たな棍が完成したのであつた。

## 新型兵装　コングリーくさん

「じゃあ後は任せる、何かあつたら総合研究区画に連絡をくれ」

「了解つスー、あ中將は要望とか無いっスか？」

「そうだな…ああ、真七星剣の鞘なんだが変えてもらう事は出来るか？」

「あー、だったら鞘も例の合金で作っておきますっス」

「あとついでと言っては何だが鞘は”赤”で仕上げてくれ」

「赤？色の指定とは珍しいですね中將」

「まあちよつとな」

”白頭尾棍”の調整を任せクリークとチームリーダーを務める男は嚴重に警備されたゲートを潜り、更に昇降機にて地下へと向かう。

”総合研究区画”

マリンフォードの地下に位置し、主に”海軍本部科学技術部”と”

海軍本部特殊兵装研究部”が機密性の高い研究及び開発を行うエリアであり、現在の一角では”本部科学技術部”が主導するサイボーグ”平和主義者（パシフィスタ）”と”特殊兵装研究部”が主導する人工外骨格”戦争主義者（ミリタリスタ）”の最終調整が行われていた。

パシフィスタは王下七武海である”バーソロミュー・くま”の細胞を元に造られたクローンを素体として人工的に改造、兵器を内蔵したサイボーグであるがミリタリスタはそれと違い兵器として装備するアーマースーツである。

「中將の報告を元に現在は装着の簡易性を重視した方向へとしていますが、最もその分前の型と比べてパワードスーツとしての機能が若干低下しています…」

ミリタリスタには”一般的な海兵”の戦力の上昇を目的としており最終的には非能力者でも能力者と渡り合える装備の開発を目標として現在はアーマースーツの開発がメインとなっている。

「多少と言っても一般の人間と比べるとかなり高いんだらう？それな



らば問題無い」

「そうですね少なくとも10倍くらいのパワーを出す事が出来ますので大型の火器も運用出来ますよ？因みに内蔵兵装としてこちらで開発、試作品に搭載していた”KZRレーザーシステム”なんですがDr. ベガパンクの協力の元パシフィスタに搭載していた”ベガパンク式ビームレーザーシステム”を統合研究、それにより完成した光学兵器”キザルパー・レイ”を搭載、これにより威力が上昇、攻撃だけでなく飛行も可能となっています」

「ほう、となると”風貝(ブレス・ダイアル)”を利用したジェットパックの開発は中止したのか？」

「いえ、研究は続行していますよ？現在中將の専用スーツを開発中ですのでそちらに搭載すべく改良を行なっています」

「しかしレーザービームだけとなると攻撃面が不安だな」

「一応外付けの兵装として連装式のガトリングと衝撃貝(インパクト・ダイアル)”の仕組みを人工的に再現した機構を搭載しています」

「概要は聞いていたが…成功したのか？」

「はい、もつともオリジナルと比べると衝撃吸収能力は落ちますが…いつその事Dr. ベガパンクの”バトルスマッシュャー”のように衝撃を放つ方向に特化させるプランも進行させています」

「まあ攻撃にはそれくらいあれば十分か、防御力はどうか？」

「そこも問題無いかと、海軍で開発した”スーパー超合金”に対してテゾーロ財団から技術供与を受けた”ワポメタル”を混合焼成、頑丈さは割と落ちましたが重量をかなり軽くする事に成功しました」

「割と？具体的にはどのくらいだ」

「破壊テストは何度も行っていますので…そうですね大砲の弾程度であれば余裕で防げます、流石にガープ中將に本気で攻撃してもらった時は大穴が空きましたが…」

「まああの人も割と規格外だしな…しかしそれくらい頑丈ならば問題ないだろう、最も”新世界”では通用しないかもしれないが”ミリタリスト”も”パシフィスタ”も」

「そうは言っても中将、今量産されているのは最終試験型…いわばプロトタイプです。」

完成形が出来上がれば新世界でも通用するレベルになるかと」

「そうだな、例え海軍が編纂され四海には手が回るようになったとは言えグランドライン、特に後半は未だに手が回らない場所もある…その一助になってくれれば良いんだが。」

とりあえず”ミリタリスト”に関してはそのまま進めてくれて問題ないだろう」

「了解しました現在最終調整中ですので…恐らく一ヶ月ほどで最初の五体がお披露目できるでしょう」

「一ヶ月か…例の作戦には間に合わんか、投入できれば心強かったんだがな」

「ああそう言えば大規模な討伐計画があるとか…詳細をお聞きしても？」

その言葉にクリークは少し考え

「教えたいのは山々だが…そうだな、詳細はふせるが今の所はかの”白ひげ”が討伐目標という事になっている」

”四皇”ですか!?!…ん?…という事になっている?…」

「まあ長い付き合いだから言いたい事はわかるだろう、ちなみにこの話は秘密で頼むぞ?…」

「は、了解しました」

そのまま考え込むチームリーダーの男をよそにクリークは”ミリタリスト”の完成状況に満足しつつ昇降機とゲートを抜けて地上へ、そんなクリークに

「あ、クリーク中将!センゴク元帥が探しておられましたよ、至急元帥執務室に顔を出すようにと言っていました!」

通りがかりの海兵が声をかけクリークは”やはりあの報告書だけじゃダメだったか…”と考えながらその足を元帥執務室に向けたのであった。

## 戦国鈍熊 Doonクリークさん

”魔の三角地帯（フロリアントライアングル）”

グランドラインに存在し、毎年百隻以上の船が消息を絶つという噂をもつ霧が晴れない海域である。

噂では海域内での天候の急変や磁気の異常、ノックアツプストリームや何らかの超常の力が働いている等の噂があつたが真偽は不明、そんな中麦わらの一味はエニエスロビーでの激戦をくぐり抜け、新たな仲間として船大工であるフランキーが加入、エニエスロビーで没したゴーイング・メリー号の後継であるサウザンド・サニー号に乗りログポースが指す次の島へと向かつていた。

しかし彼らは航海の中で罫の仕掛けられた流し樽を開けてしまい嵐を越えた折に魔の海域と恐れられるフロリアントライアングルに誘導されるかのように突入、そして深い霧が立ち込める海域において彼らが出会つたのは幽霊船：そしてその船に一人残された動く骸骨の”ブルック”であつた。

「お、お前なんで鏡に映らねえんだ!!」

「ほんとかー!?!スゲーな!!」

波長があつたのかブルックとルフィは意気投合、そして彼を交えて食事の後に彼の身のの上、そしてどうして骸骨になつたのかを聞いて納得した一味、ブルックは悪魔の実”ヨミヨミ”の実の能力者であり生きてゐるは間はカナヅチになるだけの”死んだら一度だけ蘇る能力”を持つていた：が運悪く死んだ後に自身の身体を探す為に一年かかりその間に蘇るべき身体は白骨化、そこに魂が舞い戻った結果動く骸骨の出来上がりである。

しかし鏡に映らない彼の姿に一味は騒然、すわ吸血鬼かと警戒するも

「ヨホホ吸血鬼：ですか、そんな大層なものでも無いですよ。」

全てを一気に語るには：：私がこの海を漂つた時間はあまりにも長い、私が影が無いこと、そして骸骨である事は全く別の話なのです」

そしてそこからブルックが話したのは”影を奪われた”という事実とそれに対して一緒に取り返しにいかうと誘うルフィ、当然”影を奪った相手”その強大さを知るブルックはそれを断りようやく人と会えたこの瞬間を忘れぬ為にも楽しい時間にしようとしたところで壁をすり抜けて船内に現れたのは得体の知れぬゴースト、そして大きな振動と立て続けにおこりサウザンド・サニー号は魔の海域を彷徨うゴーストアイランド”スリラーバーク”の中に囚われたのであった。

一方その頃海軍本部があるマリントフォード、元帥執務室にて海軍元帥であるセンゴクの怒声が響いていた。

「色々小言はあるが…とりあえず古代兵器の設計図を手に入れたとの事だったが紛失とはどういう事だあ!!」

「いやそうは言ってもセンゴク元帥、こちらら悪魔の実の能力も持っていない一般海兵ですよ？」

それに設計図だってそんな特殊な素材ではなかったつぽいですし相手は10000度までの熱を操る”アツアツの実”の能力者、そこまで気が回らなかつたんですよ」

センゴクが頭を抱えているのはクリークが手に入れた古代兵器の設計図（偽物）その顛末であった。

偽物である事を知っている為馬鹿正直に上に提出するわけにも行かず”古代兵器の設計図”とされていたそれはクリークとドン・アツチーノの戦いの中で消失、世界政府…というよりCP長官だったスパンダムが狙っていた唯一現存する”古代兵器”の設計図は世の中から消えたのだった。

「かの最悪の戦艦”プルトン”の設計図を手に入れておきながらこの体たらく…五老星に何と報告するべきか。

全て燃えたと報告書にあったが残骸の一つも残っていないのか？」

「そーですね、灰程度の残骸はありましたが流石にそれを提出するわけにはいかないでしょう」

「…いや一部でもあれば能力を使って元に戻せないかと思っただけだ

”モドモド”の能力なんかなら復元可能だったかもしれないからな」

センゴクのその言葉にクリークは”その手が…下手に持つてこなくてよかったな”と思いつつ

「確かゼファー教官のここにいましたね、まあ五老星も本腰いれてたわけじゃ無いみたいですし作戦を実行していたスパンダムは更迭されたみたいですから問題無いのでは？」

いけしやあしやあと言つてのけた。

「はあ…しかしお前の悪い癖だぞクリーク、本来なら厄介な能力を持つとは言えドン・アッチーノ程度の者、最初から全力であれば設計図を守りつつ短時間で撃破できただろうに」

「そうは言いますがセンゴク元帥、経験上何をされたかもわからない状態で倒すと相手は高確率で反撃してくるもんですよ、だからこそあえてこちらは丁寧に関手にもわかる実力で対応してるんですよ」

「…まあいいそれで対応できているのは事実だしな。」

エニエスロビー襲撃に関しても色々言いたいのが済んだ事をとやかく言つても仕方なからう、それよりもその襲撃を行った海賊”モンキー・D・ルフィ”だがお前は どう見る？」

「あ…ありや端的に”頭より身体が先に動くタイプ”、損得では測れない人間ですよ。」

だから今回の件も仲間一人を取り返す為に”世界政府”に喧嘩を売った、俺は詳しく知りませんがその昔いたらしいじゃないですか、”仲間を侮辱されただけで一国の軍隊を潰してみせた男”が」

「…ロジャーか」

「まあかの海賊王とは交流が無かったので噂程度でしか知らないですが”麦わらの一味”の海賊としての性質はあの”赤髭”や”白ひげ”に近いものでしょう、少なくとも何の罪もない堅気に故意に手を出すような奴では無いのではないかと」

そんなクリークの評価にセンゴクは頷きつつクリークに新たな任務を与え

「成る程…お前の評価は理解した。とりあえず補給等が終わり次第お前には新世界へと向かってもらうが…問題は無いな？」

「帰ってきたばかりなんですが…休みは？」

「ならば明日は休んでいい、お前には新世界で各四皇の包囲及び戦力の漸減についてもらう」

「そりやまた…了解しました」

クリークは嫌そうな顔をしながら好き勝手やってる自覚はあるので不承不承ながら頷くのであった。

## ナイトメア・ビフォア・ゴーストアイランド

深い霧の漂うゴースト島に上陸したルフィ、ロビン、フランキーを待っていたのは不気味な島に不気味な城、そしてツギハギの不気味な生物達であった。

本来であれば上陸する為に買い出し船「ミニメリー」への試し乗りとしてナミ、ウソップ、チョップの三人が上陸して”しまった”のだが、この世界線では”何かがあるかわからない”としてエニエスロビーから撤退の際に奪ってフランキーが改造を施した元・クリーク専用水陸両用戦車”セルベアリシア号”にて真っ先に行きたがったルフィ、楽しそうだからとスリルを求めて兼冷静なお目付役としてロビン、そしてセルベアリシア号の操縦もありフランキーの三人が島に上陸したのだった。

早速とばかりに目を輝かせるルフィにツギハギ生物の処置に既視感を覚えるロビン、そして色々考察しつつも警戒しながら操縦するフランキー、セルベアリシア号に乗って襲ってくる生物を撃退しつつ目に映った大きな建物へと進むそんな三人の前に現れたのは小柄で縫合痕をもち自らを”ヒルドン”と名乗る不気味な男。

ヒルドンが言うにはこの島は独自の生態系を持ち色々世間の常識からすればおかしい生物がいるがあまり気にせずついでに不要な攻撃は控えて欲しいと伝え、よければ三人をこの島に唯一あるホテルに招待したいと伝える。

ルフィは快く、そしてロビンとフランキーは十中八九何かしら罠だろうと思いつつもその誘いに乗りこの島にあるホテルへ、そしてそこに待っていたのは

「ふーん、あんたがアイツのお気に入り…」

「ん？誰だおめえ」

「し、シユガー様！何故こちらにいますでし!？」

「別に私が何処にいてもいいじゃない、それともここにいたら不都合なの？どうなの？」

年齢は20代ほどだろうか、緑色の髪を後ろに流した美女。

シユガーと名乗った少女はロビンを見ると人差し指を唇に当てつつ三人を案内してきたヒルドンに詰め寄る。

「い、いえてつきりモネ様と一緒に診療棟の方におられるかと思ってましたので…」

しどろもどろに答えるヒルドンだったがシユガーという名前と特徴的な髪色にフランキーが少し考えようやく思い出した。

「シユガー…おいおいおい、ひよつとして”シユガー・ソング”のシユガーか!?なんでアンタみたいな歌姫がここに？」

シユガー、テゾーロがオーナーを務める”ステラ・プロダクション”に”星の金歌”の異名を持つステラや”深海の唱声”の異名を持つマリア・ナポレと共に所属する歌手である。

その容姿と甘く鈴を転がすような歌声に魅了されたファンは多くそれ故にフランキーもその姿を新聞で見かけて頭の隅に覚えていたのだった。

「別にただの休暇、ここ静かで落ち着くし変なのも来ないし。

にしても私を知ってるならあんたファン？ファンなら一応大事にしてあげる」

「お？知り合いかフランキー？」

「知ってるっちゃ知ってるが…まあおめえ歌とか興味なさそうだしな…」

「む！そんな事ねえぞ、音楽家だって仲間にしたしな!!シユガーって言ったか、おれは…」

「知ってる、3億の首…麦わらのルフィでしょ？」

「おう！そして海賊やってんだ!!歌上手いんならこんど歌ってくれよ、新しく仲間にした音楽家もいるんだ!!」

「そう、気が向いたら歌ってあげる…それからヒルドン、アンタの主人に伝えなさい”気が変わったから加勢してあげる”って」

シユガーのその言葉にヒルドンは軽く驚くと共に気まぐれな客人の事、また参加しないと言い出されても困るので

「お客様方、部屋はいくらでも空いているのでどこでも適当にお寛ぎ



くださいでし！ワタシは少し食事等々の準備をしてくるでし!!」

そう言いながら窓から飛び出してその翼をはためかせて自身の主人である男の元へ

「おー、空飛んだぞアイツ！悪魔の実か!？」

「そういうヤアンタ休暇つて言ったが…いねエどこ行つたんだ？」

「やっぱりモネもいるのね、果たして偶然かおじさまの采配か…さてこうなるとちよつと準備しておいた方がいいかしら？」

そうして残された三人はそれぞれ考えつつもルフィは早速とばかりに不気味な雰囲気漂うホテル内を探索し始め、フランキーは表に停車させたセルベアリシア号を移動させに、ロビンは持つてきていた子電伝虫でサニー号で留守番するナミ達に連絡をとるのだった。

一方その頃、海軍元帥であるセンゴクから色々小言を言われつつ報告を済ませたクリークは修練場へと足を運んでいた。

普段から基礎練を欠かさないクリークであるが今回はこの世界に存在し、悪魔の実の能力への対抗策として大きなウェイトをしめる”覇氣”、それに関して確かめるべくこの場所に足を運んだのであったが

「ん？特装研の鈍熊じゃねエか、悪いがここはこいつのテストで使ってるぜ？」

「科技研の金太郎…じゃなかった”戦桃丸(せんとうまる)”か、D r. の護衛はいいのか？」

そこには既におかつぱ頭に目元に傷跡の残る大柄な男”戦桃丸”と王下七武海”暴君”くま…と瓜二つの姿をした海軍が開発を行なっているサイボーグ”パシフィスタ”という先客がいたのだった。

## 鉞担鈍熊 ドンクリークさん

「“パシフィスタ” …これだけの火力を持ちつつ平和主義とは言いえて妙だな」

「そっちのところの”戦争主義(ミリタリスト)” …だってこっちの事言えねえだろ」

パシフィスタの可動実験、修練場に用意され鉄柱で造られていた標的はほぼ全てがパシフィスタが両手と口内に内蔵したビーム装置により溶解、実験はほぼ問題なく進んでいる事を示していた。

「随分と順調そうだ、”蜂一号”には投入できそうか？こちらのミリタリストは調整が間に合いそうになくてな」

「”蜂一号”ねえ…四皇全てに攻撃を仕掛けるなんて本気か？世界政府が黙ってねえぞ？」

それに戦力の分散なんざ愚の骨頂、相手にするんなら四皇全てではなく一人に絞るべきだろ」

「そこまで掴んでたか、今のところ政府は攻撃目標を白ひげだと思ってるらしい、まあ作戦終了後は詰問なりなんなりあるだろうがそこは何とかなるだろうよ…それに何も四皇全てを殲滅しようってんじや無い、あくまで攻撃を仕掛けるだけだ…四皇一人討ち取るのにも建前ってのが必要でな」

「…成る程、政府に黙って四皇全てに攻撃を仕掛けつつ”四皇のうち誰か”に戦力を注ぎ込んで潰そうってハラか、誰を狙ってやがる？」

「その辺りは秘密だ、本当の目標が漏れて警戒されると厄介だからな」  
「おいおい、わいは世界一ガードの固い男…したがって口も固いんだ、例えばターゲットの四皇が誰かなんて漏らすつもりは無エ」

「それでもだ…まあこの作戦が成功すりゃ政府がキレそうってヒントぐらいなら出しといてやろう」

「政府がキレる…？四皇をもってして戦力が均衡してる以上誰を仕留めようがキレると思うぜ？」

「ま、ヒントは出したんだ…表の目的は白ひげ討伐、裏の目的は四皇の弱体化、しかして真の目的は果たして誰の討伐だろうなあ？因みに知ってるのはほんの一握り、くれぐれも漏らしてくれるなよ？」

「何を考えてるか知らねえが…同じ技術屋のよしみで忠告しとくがあんまり政府を舐めねえ方がいいぜ？腐っても世界政府は世界政府”不都合には砲弾を”なんてのはザラだ、意向に逆らって動いても碌な事になりやしねエ」

「心配してくれるのは有り難いがまあ上手くやるさ、それより折角だ…少し試したい事があつてな、”世界一ガードの固い男”の力を借りたい」

「試したい事…？まあいいぜ、丁度テストもひと段落ついたとこだし”最強の中将”の胸を貸してもらおうとするか」

そう答えると共に腰を低く落とし両掌を構える戦桃丸、それを見てクリークも構えると共に踏み込み撃ち慣れた右拳を抜き放つもその拳は戦桃丸が左手掌を側面にあてがうと共に横に逸れ、ならばと逸らされながら左足を跳ね上げて今度は頭部を狙えば戦桃丸は右肘を上げるとその攻撃を確と受け止めた。

そうして何合かクリークが拳撃や蹴撃を加えるも戦桃丸は巧みに衝撃を殺しつつ受け止めて見せ

「成る程”世界一ガードの固い男”とは自ら言うだけの事はあるようだ」

「ただの徒手空拳を防いだくらいで褒められてもな…まあそれにしても随分と重たいが」

「まあ伊達に鍛えちやいねえさ…さて、じゃあちよつとばかり試すとして…なあ戦桃丸、覇気とは何だと思う？」

「覇気が何かって言っても…覇気は覇気、鍛錬して得た戦闘技術じゃねエか？」

「まあそれも当てはまるだろうが…あくまで個人的な意見だが俺は”覇気”は生命エネルギーのようなものだと考えている」

”生命エネルギー”？気力とかそんな感じのイメージか？」

「まあそんなイメージでも構わん、特に顕著なのが武装色…そして生

命帰還を修めているならば…」

それと共に体から覇気を立ち上らせると集中し見えないながらも非常にゆつくりとした速度だが動かして体全体に纏っていき、更には体全体に纏った覇気を拳の方に集めてみせる。

「よし、こうして拳に覇気を集める事も可能ってわけだ：おれは体から覇気を放出し覇気を纏うこの技術を”纏(てん)”、そして不必要な覇気を身体各所に流す技術を”流(りゅう)”と名付けている、戦闘時不必要な場所の覇気を文字通り拳や脚に流す事でまるで見えない鎧を纏うかのごとく格段に威力と防御力を上げる技術だ」

そう言いながら覇気を分厚く纏った拳を構えるクリークであったが

「あー…非常に言いにくいんだがよ、それわいも使えるぜ？」

「何…だと…？」

戦桃丸のその言葉にしばしフリーズした後自身に前世の知識を元に考案した技術が既に存在した事に驚くのであった。

そうして戦桃丸が話してくれたのはクリークの知らない技術であった。

覇気を使う際に力を込めるのではなく、不必要な場所の覇気を拳や武器に流すイメージで使う事により武装硬化の更に上位に位置する技能たる覇気の鎧であり、戦桃丸も門外不出で伝えられたが修得は覇気に対する認識・知識も重要な事もあってか会得は難しく、習得している者も少ない技術らしい。

覇気が必要な場所に”流す”ことで、体の外に大きく覇気をまといまるで”見えない鎧”のように敵の攻撃を触れることなく防御し、覇気を用いてる為能力者相手にも有効な手段で試しに会得していると言う戦桃丸に使ってもらえば”足空独行(あしがらどっこい)”という両掌を使った技にクリークの拳は着弾の寸前で弾かれ、拳を撃った自身が後退させられた事にすこし驚き、この技術を練り上げれば”切り札”の一つに十分なり得ると考え再び集中して体内から立ち上る覇気をコントロールし始めたのであった。

## モンスター・オブ・デッド・ムーンナイト

「ったくあの女、人遣いが荒いんだよクリークの野郎から可愛がられてるからって調子に乗ってんじやねえだろうな…いつペン泣かしてやろうか？」

霧に包まれたゴーストアイランド…王下七武海の一角”影の王ゲッコー・モリア”が所有する海賊船”スリラーバーク”、上陸したメンバーだけでなくサウザンド・サニー号に残っていたメンバーも大量のゾンビの襲撃を受け散り散りに、何とか合流を果たすも既に”四怪”と呼ばれる三人の幹部とゲッコー・モリアによる戦いの最中で戦闘の中核となるメンバーの影は抜かれ劣勢に追い込まれていた。

そんな中先に”スリラーバーク”へ上陸していた骸骨剣士ブルックからもたらされた情報により再びメンバーが集結、情報の共有を行い”影の奪取”を目指して再び動き出したのだった。

差し当たって邪魔になると思われる幹部の三人を抑え更に今も戦闘中であると思われる仲間（候補）のブルックを援助に向かう為に一味は四手に分かれ、その中でもトップである”ゲッコー・モリア”を倒すべくルフィは走っていたが前方で何やらぶつくさ言いながら歩いてくる影を見つけて急停止そして

「お!!おーいブルックー!!良かったー無事だったのかー!!」

臙脂色の海賊コートをキツチリ襟まで着込み、バンダナを付け口髭を生やした髑髏頭に向けて声をかけたのだった。

一方その頃ブルックの影を入れられたかつての強者”剣豪リユーマ”の死体を用いて造られた改造ゾンビとの戦いを制したゾロであつたが

「刀三本…お前、海賊狩り？」

霧深い空から降ってきた問いかけ。

羽ばたくは両腕が変化した黒い蝙蝠の翼、薄い緑の長い髪に赤い

瞳、そして美しい声を奏でる口元から覗く一對の鋭い牙：それを見たブルックが目つきを変え再び仕込み刀に手をかける。

「ゾロさん、私は吸血鬼みたいな大層なものじゃないと言いましたが…」

「ん？言ったかそんな事？」

「彼女こそが本当の意味での吸血鬼：5年前に見た時彼女は蝙蝠の翼をはためかせて空を飛び、船一隻を瞬く間に殲滅：船ごと沈めていました。」

気をつけて下さい、彼女こそが”四怪”が一人”吸血姫（ヴァンピレス）” シュガーです!!」

「へえ…ようするに手強いつてわけか、いいじゃねえか腕が鳴る」

ブルックの言葉に対して獰猛な笑みを浮かべ再び刀を引き抜いて片手で構えると逆の手を構えた腕にかける。

「別にお前に用は無い、麦わらのルフィは何処？」

「はっ、居場所を知りたきや言わせてみるこつたな…一刀流・三十六煩悩鳳（36ポンドほう）!!」

それと共に独特の構えから斬撃が空にいたシュガーを襲うもその姿は無数の蝙蝠へと変化し刀を振り抜いたゾロの後ろに、更には数瞬で人の姿へ戻り鋭く尖った手刀が突き放たれゾロが咄嗟に左手で抜いた”雪走”の腹を盾に受け止める。

「止めるなんて生意気…いいよ少しだけ付き合ったげる、どうせアイツほど保たないだろうし」

それと共に逆腕の拳がゆつくりとゾロに向けて振るわれるもこの程度なら、とそのまま受け止めて逆に斬りかかろうとしたゾロだったがゾワリときた直感と共に右に避け、今度は反対の拳が繰り出されると共に再び左に避ける。

「ふーん、か弱い女の拳くらい受け止める気概も無いんだ」

「…何かあんのかその拳？」

「別に？ただの普通のパンチ、次は避けないで」

「まあ態々当たってやる義理は無エよ!!」

それと共に下側から掬い上げるように振るわれた”雪走”だった

が

「捕まえた…逃げないでね」

そのまま刀身を掴むと共に拳を振りかぶり、再びゾワリときた気配に対してゾロが頭を下げればそのまま拳は外壁へ突き刺さると共に爆発するかのように粉碎された。

「な…何という…、ゾロさん気をつけて下さい!! 吸血鬼と言えば怪力で有名です!!」

「バレちゃった…逃げないでって言ったのに」

「言うのが遅エよ!! まあいい要するに見かけ通りって訳じゃ無いってこつたる、仕切り直しといこうじゃねえか」

それと共に”和道一文字”、”三代鬼徹”、”雪走”の三刀を構えるゾロ

「命まではとらないであげる…でもちよつと骨がありそうだし一本や十本くらいは覚悟しといて」

それと共に両手の爪を鋭く尖らせたシュガーはその口元から鋭い牙を見せて笑みを浮かべるのだった。

そしてシュガーと同じく”四怪”が一人”ゴーストプリンセス”

の異名をもつペローナを相手に一味の狙撃手であるウソツプが立ち向かっていった。

ホロホロの実際の能力者でありその力は霊体を生み出し操るという簡単なもの…しかし霊体による攻撃は物理的な物では無く精神的な物、故にその攻撃に対応できたウソツプは一人残ってペローナの足止めを行っていた。

当初はペローナの”ネガティブ・ホロウ”の攻撃を受け切ったウソツプが優勢であったが一時姿を消し再び現れたペローナは空を飛び回る上に物理攻撃を無効化、更には爆発する霊体を操る事で一気に形勢は逆転。

瞬く間に追い込まれていくウソツプであったが前に教わった通り決して考える事を止めず今のペローナの状態に違和感を覚えそして”霊体”を操るといふ相手の能力を元に”今戦っている相手”の

正体に辿り着き

「なっ！てめえ何処を狙ってやがる!!」

「必殺・アトラス彗星!!見つけたぞ……アレがお前の本体だ!!」

ウソツプが四連の火薬星で爆発させた壁の向こうには天蓋が、そしてそこには戦っている筈のペローナが俯いた姿で座り込んでいたのだった。



## ヴァンプ・オブ・プリンセス

ウソツプ の推理は正しく、見失った一瞬の隙に彼女は”ホロホロの寒”の力により自身を意識と姿を持つ霊体：つまり幽体離脱を行い”姿が見えて空を飛び、壁も人もすり抜け大きさも自由自在”すなわちゴーストとなっていたのだった。

それにより本体が意識を失う為無防備になるというデメリットはあるものの霊体故にどんな攻撃もすり抜け、逆に”ゴースト・ラップ”という爆発する霊体を使って戦闘を優位に進めていた。

しかし本体が見つかってしまえば話は別、様々な絡め手を用いてペローナを精神的に追い詰め止めとばかりに”10t”と書かれた巨大なハンマーを構えると

「お前はおれをみくびりすぎた：おれはイーストブルー1番の怪力で知られた男：」

「なつテメツまさか”東の海の怪力王”!? 実在してたのか!!」

「：そうだとも!!このおれこそが”東の海の怪力王”!!」

「ばっ、馬鹿野郎!!逃げ場もねエのにそんなんでも殴られたら死んじまうじゃねエか!おいよせ、やめろ!!」

「ウソツプ：」

「私が悪かった!そうだ!お前の仲間にも手は出さねえエ!!」

「ゴールデーン：!!」

言い募るペローナだったがウソツプは意にも介さずハンマーを擦り上げる。

「許して!お願いやめてー!!!」

「パウンドおっ!!」

それと共に弾けるハンマー。

極度の緊張状態にあったペローナは泡を吹いて気絶

「お化け屋敷のプリンセスが風船と玩具のゴキブリで気絶してりや世話ねえな：：このおれに”ネガティブ”と”ウソ”で勝負を挑んだのが大間違いだぜ!!：：にしても”東の海の怪力王”かあ確かにハン

マーを使う時にやいいハツタリになりそうだな!!せいぜい夜明けまで寝てるこつた!!」

こうしてウソップ とペローナの戦闘はペローナの気絶により決着したのであった。

一方その頃シュガーと戦闘していたゾロであったが

「まるで人体が刀みてえに…: どういうカラクリだ?」

三刀を振るうもシュガーの体はまるで刃を通す事なく、逆に刀もかくやと言わんばかりにシュガーの手刀、足刀がゾロに向かって縦横無尽に振るわれる。

「どういうカラクリも何も…: お前サイファーポールとやり合ったんでしょ?」

「シガンとかテツカイとやらか…」

シュガーの言葉にゾロは撤退時に少しやり合った長鼻の男を思い出す。

「拳砲とか指銃は趣味じゃないからこつち…: 刀ではない虚な刀”虚刀(きよとう)”、別にアイツに教わったからつてわけじゃない」

「全身武器つてかよ…: どんだけ鍛えたのか知らねえがご苦労なこつた、こうして持ち歩けば済む話だろうに」

「普通は一振り、お前でも三振り…: でもこうやれば四振り、いつまで避けられる?」

それと共に再びの手刀足刀による猛攻、ゾロは時に防ぎ、時に受け流しつつ機を伺い

「怪力つてんなら止めてみる!!」一剛力羅(いちゴリラ)、二剛力羅(にゴリラ) ”三刀流…: 二” 剛力斬えつ (ニゴリザケ) ”!!」

「また捕まえた…: 軽いよお前の刀」

左右の腕の筋肉を肥大化させると共にシュガーを力任せに吹き飛ばそうとしたが、その目論みは斬撃を捌かれると共に”雪走”の刀身を掴まれ動きを止めさせられた事で潰えた。

「おれの剣が軽い…: だと!!」

「ああ、別に思いとか覚悟とかそんなんじゃないし物理的な話…: 軽くて振りやすそうが良い刀なんだろうけど…: 欲を言えば破壊力が欲し

かたつたって話」

それと共にシユガーは刀身を握った拳に力を込めると共に捻ればローグタウンから苦楽を共にしてきた”雪走”はあつけなく折れた。「なっ！テメツ!!」

「さて後二本…剣士なんて不便なものね、得物が無くちや戦えないなんて。三刀流が二刀流になったけどどうする？続ける？」

「意趣返してか…別に二刀になったからって戦えねエわけじゃねエよ”二刀流 弐斬り（にぎり）”」

それと共に折れた”雪走”を腰に”和道一文字”を右手で順手に、”鬼徹”を左手で逆手に二本を前方で水平に構えた。

そうして再び激突する両者であったがやはり三刀から二刀になった影響は大きく、圧倒的な手数を持つシユガーの猛攻を全て捌き切る事が出来ず細かい傷が増えていく。

そしてそれを見ていたブルツクは何か自分にも出来ることは無いかと周囲を見渡しある一点に目が止まりそちらに駆けていくと”ソレ”を掴むと

「け、剣士さん！これを使ってください!!」

ゾロの背に向けて”剣豪リユーマが使っていた刀”を回転をつけて投げたのだった。

回転の途中で鞘は抜けたものの刀自体はそのまま真っ直ぐ飛んでいき、チラリとそちらを見たゾロはニヤリと口角を上げ右手にしていた”和道一文字”を再び口に咥えると飛んできた刀をガシリと掴み構える。

「さて…仕切り直しといこうじゃねエか吸血鬼、サムライには悪いが四の五の言ってられねエんでな」

「黒い刃…エロゾンビの黒刀？流石に今のわたしじゃ折れないし…まあいいよ”麦わら”ならお気楽そうだったし自分で探すから」

それと共に両腕を広げ蝙蝠の翼へと変化させようとするが

「おいテメエ…ここまでやって逃げるつもりか!!」

「逃げる…？見逃したげるって言ってるんだけど」

ゾロの言葉に立ち止まると足元にあった”雪走”の刀身を拾い上

げると

「なっ!？」

「何をっ!!」

驚くゾロとブルック、当然であろう先程まで戦っていた目の前の相手が突如として刃を首元に当てるのと共に首を引き斬ったのだから。

とめどなく流れ出す血液に駆け寄ろうとしたゾロとブルックだったが

「剣士さん！止まってください!!」

血液の動きに違和感を感じたブルックの声にゾロは足を止めれば

「追われても面倒だし…足りないならこの子が相手してあげる」

斬った筈の傷は無く何事も無かったかのように言いながら両腕を蝙蝠の翼へと変化させるシユガーと、そして溢れ出た血液はシユガーの姿を形作りゾロへと両手を構え

「ほんと…悪魔の実ってのは何でもアリだな」

「尋常ではない回復力に血液まで操りますか…」

「じゃあね海賊狩りに骨男、縁があつたらまた相手してあげる」

そう言いながら”吸血姫シユガー”は血で出来たヒトガタを残して霧深く漂う夜空へと羽ばたいたのだった。

ホウ・ノー・グライ・ウオーター・ノウ・ソー・コカラ

ナミ、ロビン、チョッパーは船から持ち去られた金品を取り戻し、あわよくば相手のお宝も手に入れる為に行動していた。

途中で遭遇した”五福星隊”と名乗る動物の特徴を持った個体や銃火器と一体化した個体を打ち破り三人はようやく怪しいと睨んでいた地下へと足を踏み入れたのだった。

しかしそこにあつたのはお宝では無く

「こんなところにいたのね…因みに聞いても問題無いかしら？」

「ちよつと研究をね、七武海の懐だものそうそう見つからないわ」

ずらりと壁一面に並んだカプセルにさまざまな機械、そして白衣に眼鏡姿のモネだった。

「ああ!!お前ドラムにもナバロンにもいた雪女!!」

「ホントだ!何でこんなとこに!?!」

「また会ったわねDr. チョッパーにオレンジ髪の航海士さん?」

「まさか…この島にいたゾンビを作ってたのはお前か!どういうつもりだ、あれは”死体”だら!!」

そう言いながらずらりと並んだカプセル、そしてそれに入った”不自然なほど”同じ顔をした男達の姿を見るチョッパー

「あら失敬ね、死者を悼む心くらいは持つてるつもりだし別に”死体”を使つてるわけじゃないわよ?少なくともわたしが作った個体はね」

「死体…じゃない?いや!確かに動物や兵器が混ざつてたけどアレは確かに人体だ!!それに壁のカプセルも死体じゃないか!!」

「うーん何て言つたらいいかしら…Dr. チョッパー、”血統因子”は知ってるかしら?」

「血統因子…そういや昔ドクトリーヌが言つてた気がする、全ての生き物には”血統因子”って生命の設計図が存在する…だったか?そ

れが何の関係があるんだよ！」

「まあドクトリーヌに教えたのはわたしだけれど良い例えね、血統因子はその昔ベガパンクを含む科学チームによって発表されたものよ。

”人体の設計図”というからにはそれこそちゃんと設備と技術があれば人体を培養する事だって可能なの、言ってる意味はわかるかしら？」

「な、まさか!!いくらなんでも”人間”そのものを作る筈ねえだろ!!」

「ところが…それが出来てしまったのよ、”複製(クローン)”とでも呼びましようか、例えばジェルマの”ソルジャーズ”に”天竜騎士団”、海軍の”パシフィスタ”や医療分野においてもDr. ルークの四肢再生手術やドクトルホグバツクの臓器移植手術など利用方法は多岐に渡るわ」

「何だって!?!いや、確かに本人の手足や臓器が有れば移植の難易度は下がるけど…」

「優れた肉体から得た血統因子を用いての肉体培養と改造、そして大家のゲツコー・モリアによる”影の憑依”…それで外にいるゾンビの出来上がりよ」

「驚愕の事実を前に考え込むチョッパー、そして話を聞いていたナミも

「ところで…あ、モネって呼んでもいいかしら?アタシ達の船に積んでたお宝がとられたんだけど何処にあるか知らない?てつきりここが怪しいと思ってたんだけど…」

「構わないわよ、お宝なら…きつとペローナね恐らくこの塔の上部…渡回廊を抜けた先がペローナの管轄エリアになってるからそこじゃないかしら?」

「なるほど渡回廊ね…よし、行くわよチョッパー!ロビン!」

「え!待てよナミ、まだ聞きたいことが色々…」

「なんか海軍がクローン作ってるとか”天竜騎士団”とか色々やばい話が出て来たのよ!?!これ以上にここにいたらもつとヤバイ話が出てくるかもしれないじゃない!!お宝の場所はわかったんだしもうここに

は用は無いわ!!あ、ドラムで助けてくれたことには感謝するわ」

「どういたしまして、因みに海軍のクローンはかの天才科学者ベガパ  
ンク主導の元で王下七武海のクローンに機械技術を融合して…」

「あーあー聞こえない!!」

「ふふふじゃあ行きましようか航海士さんに船医さん、貴女も息災で  
ね?」

その言葉と共に三人は診療棟を離れると教えられた渡回廊の方へ  
向かうのだった。

そしてその頃ブルック（ブルックでは無い）を見つけたルフィはこ  
の島の主である”王下七武海”にして”影の王”ゲッコー・モリアと  
の戦闘を経てとうとう吹き飛ばしたが

『キシシシ…この身体を吹っ飛ばすとは随分とやってくれるじゃ  
ねえか』

吹き飛んで壁に叩きつけられるモリア、そしてそれに対してやっと  
一息つくルフィだったが地面に倒れ伏したモリアの身体が突如とし  
て”裂けた”

『折角モネに作らせたつてのによお…この礼はきっちりするべきか  
?なあおい』

「何い!アイツの中からまたアイツ出てきたぞ!!」

そしてその中から現れたのは先程までの肥満体から一転、鍛えられ  
細く引き締まった肉体のモリアが出てきたのであった。

「着ぐるみゾンビだ…勿論入ってる影はおれのだしテメエの攻撃はこ  
の着ぐるみゾンビを抜いておれにダメージを与える事すら出来な  
かったってわけだ…」

「くっそー!ならもう一回ぶっ飛ばすだけだ!!ゴムゴムの…」

「キシシシ!遅え、”憑影真似（カゲマネ）”…」

「なっ!動けねエ…何をした!!」

攻撃しようとした体勢で固まるルフィ、よく見れば影がなくなった  
筈の

自身の足元にモリアから繋がった影が出来ていた。

モリアが腕を上げればルフィの腕もそれに合わせて持ち上がり  
「簡単なこった、おれの影をお前自身に繋いだ事でおれの動きしかて  
めえは出来ねえってこった…さて後は”テメエ自身”とやってもら  
うか」

と原理の説明をするモリア、更には腕を真っ直ぐ掲げると降ってく  
る巨大な体躯

「でけえ！何だこいつ!!」

巨人をも超える”古代巨人種”、かつて”国引き伝説”を残したと  
いう”魔人オーズ”が500年の時を経て立ち塞がったのだった。



## 驚天動地 ドンクリークさん

ぷるぷるぷる、ぷるぷるぷる

鳴り響いた電伝虫に嫌な予感が胸をよぎった。

ほぼ明け方に、しかも一部の者しか連絡先を知らないプライベートな電伝虫を冷静さをもって受話器をとる。

「片手に」

『ピストル』

「心に」

『花束』

「唇に」

『火の酒』

「背中に」

『人生を。こちら雪、手短に言うけどおじさんのお気に入りが敗れたけど…』

「え、マジ!? んんっ、それは本当か!？」

モネの言葉に思わずフリーズする。

モネはクローンの研究のためこちらから口を利いてゲツコー・モリアの下で研究を行っていた筈…となると当然麦わらの相手はゲツコー・モリアなのだが原作では死闘だったと言え打ち破った筈だが…まさかその後のバーソロミュー・くまにやられたのか？

『敗れたというか…撤退ね、おじさんの予想だと最終的にゲツコー・モリアと麦わらのルフィによる一騎討ちになるって言ってたけど…』

「ん? 外れたのか?」

『おじさんが警戒していた”古代巨人種”を撃破して一騎討ちにまでは持ち込んでただけ…流石に七武海は荷が重かったみたい。』

今はお仲間達が麦わらのルフィを引つ張って森に潜んだ所よ、消耗も酷いみたいだったし立て直しには少しかかるかもしれないわね』

モネの報告に頭を抱える。

確かにゲツコー・モリアが原作と違ってそこまで怠惰になっておら

ず、原作と比べて全盛期に近い戦闘力を維持していた事は知っていたが…

「まさかここで大きく予想が外れるとはな…回復次第再び戦闘になると思うか？」

『まあ麦わらと海賊狩り、黒足の影はとられたままみたいだし取り返しには向かうと思うわ、例えばゲッコー・モリアが殺すつもりは無いとしても』

確かにゲッコー・モリアの能力的に本人が死ねば折角手に入れた影も消えてしまう…ならば殺す事はしない、となれば回復しさえすれば再び影を奪還しに動くのは間違いないだろう。

「因みに一つ聞くが…バーソロミュー・くまはそちらにきているか？」

『いいえ、来ていないけど…』暴君”がどうかしたの？』

…ここでも差異が出ているか、と考えつつ

「…仕方ない、それとなく麦わら達をサポートして影を取り返させる事は可能か？人員が必要なら早急に送るが」

『だったらシユガーが来ているからおじさんから伝えてもらえないかしら、あの子もおじさんの頼みなら聞くでしょうし』

「ん？シユガーも来ているのか？さて、ひよつとしてシユガーも今回の襲撃に加わってたとか？」

『ええ、相手が麦わらのルフィって知って積極的に”夜討ち”に加わってたわよ？』

「シユガーあ…麦わらに何の恨みがあるってんだ…まあいいシユガーがいるならジョークもいるな、陰ながら麦わらをサポートして影を取り返させて出港させてやれ、アイツらにはまだやってもらわにやいかん事が山ほどあるんだよ」

『麦わらのルフィの事はっかりでちゃんと構ってあげないから拗ねたんじゃないの？』

「拗ねたって…子供じゃあるまいし」

『ともあれシユガーに代わるわ…シユガー、おじさんから』

『何？』

「久しいな、今は休みか？」

『休暇、オーナーからも許可はとってる』

「そうか、所で今回は麦わらの夜討ちに参加したと聞いたが…」

『わたし、そつちとの連絡役とは言え一応幹部だし偶には働く』

「そうか…少し頼みがあるんだが聞いてもらえるか？」

『何？』

「麦わら達が影を取り返す手伝いを…」

『ヤ』

「ええ…アレだバレないようにこつそり協力してくればいいし、何だったら手伝いの費用としていくらか出すぞ？」

『ヤ』

「なら今度好きな料理なんでも作ってやるぞ？ふわとろたんぽぽオムライスとかどうだ？」

『…それだけ？』

「よし！ならなんでも一つお願いを聞いてやろう、欲しいものとか、食べたいものとか…」

『ならスパアイランド』

シユガールの言葉に少し考える、確かグラン・テゾーロの系列で50種類以上のプールや温泉、カジノや高級レストランもあるスパ・リゾート船だったか、そういやフロリアン・トライアングル近海にいらんだしそれで行きたいって事か？

「わかった、ならシユガーと…それからモネも一緒に行つてくるといい、チケットはとれ次第カフウにでも届けさせよう」

『クリークも』

『…ん？』

『クリークもスパアイランドに行く』

「いや、俺はちよつと休んでる暇が無くてだな…」

『なら麦わらは手伝わない、お姉ちゃんにも手伝わないように言う』

「おつふ…いやとりあえずそれ以外で何か…」

『何でもするって言った』

「う…うーむ…わかった何とか上に掛け合ってみよう、休み取れなかつたら…」

『何でもするって言った』

「ぐう…まあ一度は言った事だ、今度一緒に行くか」

『なら麦わら達手伝ったげる、今日中に終わらせるからスパアイランドは明日』

「明日あ!?!おいシュガー、明日は流石に…」

『シュガーならもう行ったわよ、頑張って明日は空けてね?張り切ってたし昼頃には決着がつくかもしれないわね、それじゃあわたしも手伝いに行ってくるわ、明日スパ・アイランドで会いましょう?』

そうして切られる電伝虫、クリークは頭をガシガシかきつつ

「とりあえずスパに関しちやテゾーロに頼むとして…元帥に明日の休みを直談判して…」

そう考えながらミルクと砂糖をたっぷり入れたスペシャルコーヒーを淹れて口にしながらデスクに置かれた新聞をとりチラリと眺めれば

”海軍大型作戦発動!!狙いは四皇が一角白ひげか!?”

トップを堂々と飾った見出しにコーヒーを吹き出したのだった。

## 海俠鈍熊　ドンリリークさん

作戦の詳細を知らなかった他の将官や交流がある海兵達から色々聞かれるのを適当に流しつつ元帥執務室へ

「センゴク元帥！サンタマリアの投下訓練確認も併せて昼には発ちますが問題無いでしょうか！」

新聞を読んでいたセンゴクに開口一番そう言うのとセンゴクは目線を上げてこちらをじっと見た。

「…今朝の”世界経済新聞”は読んでいるか？」

「そりゃあ情報は大事ですから…」

「なら私の言いたい事もわかるよな？」

「えー…例え”公表用の作戦計画であっても簡単に漏れていいものではない”って感じですか？」

「まあ50点ぐらいだな…恐らく世界政府からの問い合わせはあるだろう、下手すればこれを機に七武海、ひいては他の四皇も動きかねん。

そんな時に作戦立案者の貴様がないと…どうなるかわかるか？」

センゴクの最もと言えば最もな言葉に少し詰まるも

「では今からマリージュアに飛んで五老星に直で説明を行ってきます、こつちから出向けば時間短縮にはなるでしょう。」

四皇についてはその後サンタマリアに搭乗、訓練確認後そのまま新世界へ向かえば抑止力くらいになるでしょう」

これならばいけるだろうと折衷案を出した所で元帥執務室の電伝虫がふるふるすると鳴き出しセンゴクは二、三言話すところをチラリと見た。

「…ふむ、丁度いいこれから作戦立案者を向かわせる」

「早かったですね、五老星あたりですか？」

政府あたりからの電話か？とあたりをつけつつ通信を切ったセンゴクに尋ねれば

「七武海の”海俠”だ、一番ドックに乗り込んで来ている。

まああの男の事だ、裏の目的である”四皇”の戦力漸減については

話しても構わん…:…というか話さねば納得せんだろう」

「五老星相手の説明はどこまで?」

「裏まで話して構わん、何なら作戦説明もして構わんぞ? どうせ根掘り葉掘り聞いてくるだろうからな」

「了解、ではジンベエに説明後すぐにマリージョアに向かいます」

頼んだぞ、とセンゴクの言葉に頷きつつおのれモンガンズめと思いつつながら窓から飛び出すと月歩でそのまま一番ドックへ、腕組みして瞑目した大柄な男の前に降り立つ。

「お主じゃったか…:…一体白ひげの親父さんを狙うとはどういう了見じゃ!! 白ひげの親父さんもお主と同じく魚人島を守つとる…:…いや魚人島だけじゃなか、他にも親父さんの名前で守られとる島は多い! 今海軍と白ひげの親父さんがぶつかりやあどうなるかはわかつとるじやろうが!!」

青い肌を持ち目の前でそう捲し立てる厳しい強面の男…:…彼こそ王下七武海の一角”海侠のジンベエ”の異名で世に知られるジンベエザメの魚人であり、七武海に加入する前は魚人達で構成された”タイヨウの海賊団”の2代目船長を務めていた大物海賊である。

「まあ落ち着けジンベエ、事情は説明するからあまり声を荒げないでくれ」

「言うとする場合か!! 白ひげの親父さんと海軍がやり合ったらそれこそこの海は荒れる、そうなってみいいらんもんが噴き出てくるのはわかるじやろうが!!」

「だから落ち着けというに…:…今朝の新聞を見て来たんだろうが結論から言えばありやモルガンズの早とちりだ」

「早とちり…:…じゃと?」

その言葉と共に少し落ち着いたジンベエに機を逃さず肩を組むと「これは大つぴらには出来ないが”白ひげ討伐”はあくまで建前、狙ってるのは四皇の、特にビッグマムやカイドウの戦力を減らすのが目的だ」

小声で告げればジンベエは考え込んだ。

「…ちゆう事はどの道親父さんと海軍はぶつかるとちゆう事じゃろう、確かにお主には魚人島の事もあり世話になった、じゃがそれは白ひげの親父さんも一緒じゃ…じゃから場合によっちゃわしはここで」  
「まあ落ち着いてくれ。」海侠”とも呼ばれるアンタの考えもわかる、白ひげが他の海賊の抑止力になってるってのも同感だ…だからこそ四皇全体の戦力漸減作戦だ」

軽く拳を握るジンベエにもうちよい突っ込んで説明をすれば

「…何が言いたいんじゃ」

「まあ四皇全てに対して一度に戦力を当てるわけだが…いくら海軍全ても相手に圧力を与えるほどの戦力を全てに配置出来ると思うか？」

具体的に言えば場所によっては睨み合いで終わったり話し合いで終わったりする事もあるって事だ」

「…茶番っちゆうことか」

「さて何の事だか。ようするにジンベエ、アンタの心配は無用のもんだ…くれぐれも他に漏らしてくれるなよ？白ひげ討伐に反対したアンタが七武海を脱退してインペルダウンに投獄なんてストーリーにやしたくないからな」

クリークの説明に対してジンベエは拳を下ろすと考え込み、そして自分なりに納得したのか

「…もし万が一があつてみたい、わしは自身を賭してでもお前さんを討つぞ」

そう言い残して去ろうとした所でついでもうひと押しと

「まあ安心しろとは言わねえが…おれはスカルの協力者だ」

そう告げた所でジンベエは少し固まると顔色を変え両手を構えるも言葉の意味を理解したのだろう。

「お前さん知つて…ワハハハハ！そういうことじゃったか!!わかつた、わしは何も聞かんかったって事じゃろう」

「わかつてくれたなら何よりだ、まあ後でテゾーロあたりから聞いてくれ」

その言葉にジンベエは納得したのだろう、後ろ手に片手を上げると

そのまま海へ飛び込み、一つ目の用事は片付いた為クリークはその場で轟音を響かせて地面を破壊しつつ縮地無疆にて跳躍するとそのまま月歩で五老星に作戦の説明を行うべくマリージョアへと向かうのだった。



## 空塞鈍熊      ドンドンドーンク

” 聖地マリージョア”

この世界唯一の大陸である” レッドライン” に存在する聖地である。

十数年前におこった災厄により多くの数を減らした天竜人や五老星、政府関係者” など” が住まう土地であり、いわば世界政府における首都に等しい地点でもある。

高さ1万メートルの場所にあり、唯一の出入り口は足元にあるレッドポートという港からシャボンを使ったエレベーターで昇るだけでありその天然の要塞と呼べる地の利もあつて立ち入れるのは（一部例外はあれど）世界政府関係者のみだった。

とは言えそれを素手で登り切つて侵入、災厄を引き起こしたものもいるがそれは一旦おいておこう。

そんな難攻不落とも呼ぶべきマリージョアに連続して響き渡る砲撃のような音、すわ襲撃かと常駐していた海兵、天竜人の護衛を行う天竜騎士団は慌てて音のした方向に走るも上空を舞いながら徐々に遠くなつてゆく赤い海軍マークを背負った姿に” なんだいつものか…” とそれぞれ元の持ち場に戻つていく。

そんな者達をパンゲア城から眼下に見下ろす五人の老人達、彼らこそが世界政府最高権力である” 五老星” であり彼らは先程までこの場で語られた大規模作戦について意見を出し合つていた。

「蜂一号計画：奴の話だがどう思う？」

「四皇の討伐では無く戦力の漸減か：確かに四皇が減るより荒れずに済むだろう」

「” 暴君” が席を降りる故に七武海は一席が内定しているとは言え現在二席が不在、更には超大型ルーキー達の新世界入りも近い：確かに奴の言う通りこの先新世界は間違いなく荒れるだろう」

「その為に先手を打つて四皇の戦力を減らしておく：確かに一理ある」

「いくら四皇とて戦力が減じれば多少は大人しくなるだろう、しかし海軍にそこまでの事が出来るのか？ 相手は“白ひげ”、“ビッグマム”、“カイドウ”そして“赤髯” いずれも化け物揃いだぞ？」

「作戦概要には三大将も投入しての作戦とあるが…これでもし逆に海軍がやられようものなら目も当てられぬぞ？」

「…いや問題あるまい、多少海軍がダメージを受けたところで回復は容易かろう。”パシフィスタ”も直に本格稼働に入る事だしな」

「先行して天竜人の護衛に配属されると聞いたが？」

「いくら天竜騎士団が設立されたとして所詮はクローン、もし万が一があつてこれ以上数を減らされてみる、目も当てられんぞ？ それこそ本当であればマリージョアから出ないでほしいものだが…」

「言つて聞くのなら苦勞はせん、全く…それこそ海軍大将を護衛にしたいくらいだ」

そうして五人で話し合いながらも時間は過ぎ、再びの王下七武海の陥落という知らせにようやく一同により“蜂一号”計画は承認されたのだつた。

一方クリークは報告を終えたその足で休みなく空を飛びフロリアン・トライアングル近海へ浮かぶりゾート船 スパ・アイランド”：の上空に停泊した空中要塞“サンタマリア”へと着地、そのまま司令室へと足を向ける。

「久しいなアイザック少将、息災か？」

クリークがそう声をかけたのは長身のがつしりとした体に紺色のスーツ、そして白衣の上に更に青色のコートを羽織ったサングラスをかけた男。

「久しぶりだなクリーク中将…連絡を受けてから半日しか経っていないが近くにいたのか？」

海軍本部少将にして科学者、海軍工廠拠点 ジュエル・アイランド”の専任守衛総監であるアイザックであり、クリークが彼が幼少の折に母親を助けた事により知った仲なのであつた。

「いや、マリンフォードにいたぞ？ 出発前に可愛い教え子の頼みを聞

かなきやならんのとフォローしないといかん奴がいるもんで少し急いで飛んできただけだ」

「月歩…しかもマリソフオードから飛んできたときたか、あいも変わらず無茶をしないでかすな貴様は」

「まあそれが取り柄だしな…それより投下訓練は？」

「問題無い、新型戦鳥騎”飛龍”を加えての投下訓練も完熟率80%という所か…このままいけば問題無く下準備はこなせるだろう」

「ふむ、投下する食糧の準備は？」

「生鮮食品は無理だからな、工廠にて秘密裏に生産させた保存食品を搬入させている…栄養価やカロリーは問題無い、なんなら食べてみるか？」

そう言つてアイザックが差し出したのは一本の固焼きビスケットのようなもの。

特に疑問に思わず口に含むも

「…なるほど味はお察しつて感じだな」

「いきなりだったからな、そこまで調整している時間は無かった」

「まあ潜入しているドレークからの報告によればだいぶ酷いらしい…テゾー口を通して裏から援助はしているが焼石に水らしいからな」

「そこに降つてくる食糧か…ずっと続けるつもりか？相手は”非加盟国”、それこそ元帥や世界政府に知られたら小言では済まんかもしれんぞ？」

「まさか…とは言え俺達海軍は”正義の味方”だからな、無辜の民が苦しんでいるのに放っておくつてのは個人的に気に入らんからな」

”身勝手な正義” 故か…まあ貴様には恩がある、正式な命令として出ている以上文句は無いし誰かに報告するつもりは無い。

だが一つだけ言っておく、アンタを慕つてる人間は大勢いるんだ。くれぐれも無茶はしてくれるなよ？」

そんなアイザックにクリークは分厚い胸板を叩くと

「はっ、これでも本部中将なんぞな…無茶も無謀も承知の上、どの道誰かがやらねえといつまで経つてもこの海は変わらない…だからこそ”天秤”を揺らす必要がある…つと、じゃあ俺はこのままテゾー口と

連絡をとった後”スリラーパーク”に向かう、お前達は俺を投下後予定通り新世界へと入ってくれ”

その言葉にアイザックは一度頷くと両足を揃えて

「了解しました!!当要塞は中将閣下の投下後、直ちに新世界へと向かいます!!目標は”ワノ国”、中将閣下の潜入におけるサポート、及び

”蜂一号・改”第一次作戦に全力であたる所存であります!!”

ビシリと立派な敬礼をしてみせたのだった。

## 450話記念 もしも彼が極道を目指したら

男は憧れていた。

新世界に存在し、知ってる知識の中ではほぼ語られる事なく、サムライや忍者がいるという昔の日本をモチーフにした鎖国国家”ワノ国”に。

新世界は魑魅魍魎の跋扈する魔境、それ故に彼は己を鍛え、仲間を集めて旗揚げをし、九死に一生でリヴァースマウンテンを越え、時には海賊を倒し、時には海軍に追われ、ぶつかり、今度はレツドラインをくぐり抜けてようやく到達した新世界。

それまでとは比較にならない過酷な海域だったがなんとか乗り越え、そしてとうとう辿り着いた”ワノ国”

だが彼は知らなかった。

「なんねい…」

男が憧れ、旅を続け、滝を何とか登りきり上陸した国の実態を。

広がるのは人が住める場所ではないと言われるほどの無法の荒野、更には設立された武器工場などにより汚染された空気や水。

そんな土地故に作物は殆ど実らず、人々は日頃食うものにも困る有様。

他にも無実の罪で民が囚われたり、強制労働の為に連行されたりととてもじゃないがマトモな国では無かったのだ。

男は知っていた、かつてワノ国でカイドウとゲッコウ・モリアがぶつかった事を。

その後敗れたゲッコウ・モリアはワノ国を去り、カイドウがワノ国に居座り実質的な百獣海賊団の本拠地になった事を。

だが男は知らなかった。

カイドウが本拠地にした後に行った事を。

「百獣海賊団の母港じゃなかったか…海賊なら戻ってくる港くらい大切にせんね!!」

ギン！おいたちの飯は最低限残して炊き出しばする、パールは荷物

ば下ろす指揮、エリックはカタギのもん達に説明ば、ベアキングとエルドラゴは周れば警戒しとつて！」

理想とかけ離れたその景色にとても見過ごす事など出来ず、すぐさま何とか困窮する人々を助けようと船に積んであつた物資を解放、近海で待機していた船団に連絡をとり物資を集めさせる傍らで飢えた民たちに感謝をされつつ情報を集めていく。

当然鎖国体制の国家に入国したからには追手が出されるもなんなく処理しながら將軍オロチ、明王カイドウ、光月家、サムライ、赤鞘、おでん、大看板、鬼ヶ島、武器工場、などなど多くの情報を集め、全体が落ち着いたのを見て幹部達と一緒に今後の方針について話し合う。

「よかね、追手が既に出てそいつらば倒しとる以上時間はなか：出来るならカイドウばくらしたかばつてん人手のいっちょん足りん」

口火を切つたのは”海乱鬼（かいらぎ）組組長”、”海力乱神（かいらきらんしん）のクリーク”

黒い袴に藁草履、白い羽織を素肌の上に直接纏つた巨漢であり旗揚げは最弱、又は最も平和と呼ばれた東の海からだつたが瞬く間に東海の海賊を纏め上げてグランドライン入りした傑物である。

「どうします叔父貴、船団を招集させますか？」

「ギンの言う通り招集ばかけたかばつてんおい達の船に乗つとる物資だけじゃ足りんけん追加は必要やろ：」

「では物資を集めるメンバーと別に二隻くらい上陸させますか？」

「そうね、そこから本拠地はこつからちよつと離れた島つけんがギヤンザックもこつちにこさせることとして」

「了解しました、上陸したのは本船の”八幡（ばはん）”と各隊の頭船四隻：人数は三千つてとこですから二、三隻上陸させれば五千は超えますね」

そう意見を出し纏めるのは”海乱鬼組若頭”にして”鬼人鬼手（きじんきしゅ）”の異名を持つギン

クリークの率いる海賊団”海乱鬼組”のNo. 2であり組長であるクリークの右腕である。

「いやはや組長の突飛な意見には慣れたつもりだったけど…相手はかの“四皇”が一角、百獣のカイドウ”だよ？いくら組長が十億越えでも相手は懸賞金、40億”を越える化け物、それに噂だと本拠地には一万か二万はいるらしいじゃ無いか、どうやって倒すつもりだい？」

冷静な意見を出すのは、海乱鬼組一番隊隊長”にして”堅城鉄壁（けんじょうてつぺき）の異名を誇る鉄壁の防御を持ち、どんな攻撃ですら跳ね返す盾術の達人である。

「そがん言ってもこいば見過ごせってね、そいは粋じゃなか！そいに懸賞金〓強さってだけじゃなからうもん」

「まあ”政府にとつて”の危険度でもありませんけど…」

「まあ自分で言つとつてアレばってんカイドウが弱かって事はなからう。

言うちや悪かばってんがうちの組は数は多か、そいばってん一部を除いてそこまで強うなか、やけん戦力ば集めんばとけど…」

「ぐはははは！・ヨンコーだろうが何だろうがおれに任せてもらえりや全てぶつ飛ばしてやるぜ!!」

自信満々に大声で言うのは赤いたてがみのような髪を持ち、さながら獅子のような姿をした大男。

元は一海賊団を率いていたがクリーク達海乱鬼組との抗争の後に敗れ一味に加わったパラミシア系”ゴエゴエの実”の能力者であり、現在は二番隊の隊長を務める”伏魔響声（ふくまきようせい）”のエルドラゴ

「四皇ば相手にするつて言うならせめておいは倒せてからにせんね、今のわいが言つてもやられるだけたい」

「ぐははは、言うじやねえか！」

「別においだってわいらに死んでほしかわけじゃなかばい？それにこの国の民もそうたい、やけん戦えるもんば集めんばっちゃろーもん」  
「フンお人好しめ、この国の事ならこの国の人間に片づけさせるべきだろう…キサマは言つていただろうが、この国には”サムライ”とかって化け物達がいるのだろうか？」

不機嫌そうにクリークを睨みつけるのはグレーのスーツを纏いきッチリとネクタイまでつけたサングラスの男、”海乱鬼組三番隊長”にして”飛鎌威断（とびかまいたち）のエリック”

元々は東の海で傭兵をやっていたが運悪くクリークを獲物とした所で敗北、度重なる襲撃と説得を繰り返し最終的には一味に加わる事となった鎌鼬を生み出す事が出来る”カマカマの実”の能力者である。

「…そうたい、確か前の將軍の”おでん”とかが死んでから反抗した面々が捕まつとるとやったか」

クリークのその言葉にギンは大雑把ながらも住民達の話しによって作られた地図を広げる

「確かこの”兎井（うどん）”に囚人ば働かせる採掘場のあったとやったか？」

「ええ、それから首都であると思しき花の都…その一角”羅刹町”にも罪人が捕まっているとか」

「…そしたらギン、採掘場ば襲撃して人ば集める事は出来るね？」

「そうですね少なくともカイドウの戦力が常駐してないとは思えませんし…一斉にいなくなるタイミングなどがあればいいのですが」

「おい聞いたかクリーク、なんか来週あたりこの国では祭りがあるらしいぜ、国を挙げて祝うようなでけー祭りが！いい女とか美味しい飯とか出るかもしれねーし折角だからそれまでいようぜ!!」

真面目に話し合ってる中そんな事を言いながら近づいてきたのは元は一つの海賊団を率いる船長であった巨漢の男。

粗野で粗暴ながら熊の毛皮を被りクリーク達”海乱鬼組”との抗争の後に勝てないと悟り一味に加わった四番隊長を務める”鋼人拳魔（こうじんけんま）”の異名をもつベアキング

「ベアキング…今は大事な話し合いをだな…」

あまりにも能天気な言葉にパールがあきれつつ苦言を呈するも

「国を挙げて…とでもじゃなかばってん祭りばしとるような生活じゃなかやろうに…ひよつとしたらチャンスかもしれない」

クリークの言葉に少しギンは考えると



「…なるほど上が主導して行う祭りなら手薄になる場所が出来るかもって事ですか、少し村人達に話を聞いてきます」

「方針としちや簡単ばい、追加で各隊の残りや五番隊ば来させるのと捕まっとる”サムライ”達ば率いて本拠地つちゆう”鬼ヶ島”殴り込みばかける。

将軍の”オロチ”ば捕まえてくらしやよかやろうけど”カイドウ”もおるやろうけんそいは俺が相手するたい」

クリークの言葉に周囲は少し思案するも

「流石に組長とは言えカイドウを一人で相手にするのは…」

「ぼってんカイドウんところは三人の大幹部に加えて六人の幹部もおるっちゃしお前達にはそいの相手ばしてもらわんと」

「キサマ…このワタシがサムライとやらを使えと言ったばかりだろうが！キサマもそうだがお前ら全員結論を出すのが早すぎる、もう少し情報を集めてだな…」

「はつまどろっこしい、おれの”獣王轟咆(ブラストハウリング)”でその鬼ヶ島とやらをぶっ飛ばして全員で殴り込みかけりや済む話だろ」

「そんな簡単にいくかバカめ、おい組長キサマならわかるだろうワレワレがワノ国に入る時滝を越えたがあれは簡単だったか？」

エリックの言葉に少し考えるクリークだったが

「…簡単じゃなか、ほんなら百獣海賊団は簡単に滝を越える方法ば持つとるか別に入口があるっていいいたかど？」

「その通り、いまギン副船長…若頭が祭りとやらの情報を集めてるがそれだけじゃ足りない。

情報ってのは大事だ、確かにキサマは強い…それこそ大将相手でもやり合えたんだ、だからカイドウの相手は出来るだろうさ。

だが足りぬのだ…軽く情報を集めただけでも四皇カイドウに億越えの大幹部三人に六人の幹部、そして構成員は少なくとも二万近く、だからこそ情報がある。

奴らに決定的な一撃を与えられるような情報が…おれに情報を集めさせる、キサマの道を作ってやる」

そう言つてサングラスをくいと上げるエリック

「よか、せいぎんたエリックには情報集めば任せるといふ：せいからベアキングにエルドラゴ」

「おう！」

「なんだ？」

「わいらは目立つけん一緒に囷ばしてもらうたい、そんな代わし派手に暴れてよかけん情報が揃うまで追手ばひきつけとつたらよか：せいから二人とも本気で能力ば使うとはダメけんね、後カタギに手ば出さんこと、おいの拳が喰るばい」

「むう、まあ精々派手に暴れてやるさ」

「ぐはは！何ならそのまま幹部とかもぶつ倒してやろうか！」

「せいからパールは船団の指揮ば頼むたい、一番隊と併せて頭のおらんくなる二、三、四番隊の総指揮ば任せ、直に上がってくるザンギャックば下につけるけんギンと一緒に攻め入る準備ば頼む」

「了解、組長はどうするんです？」

「おいはちよつと気になる話のあつたけんせいば探ってくる」

「気になる話？キサマ自ら動くような話か？」

「えらく腕のたつ盗賊がおるらしかけんな…」

そう言いながら住民から話を聞いた”頭山”と呼ばれた山の方を見れば情報を集めて戻ってきたギンは”また組長の悪い癖が始まつた：”と頭を抱えるのだった。

クリークの悪い癖、それは

「カタギのもん迷惑かけるとば放つとくのは”粹”じゃなか」

一般市民に被害を与える者をどつき回して更生させる事である。

因みにクリーク率いる海賊団”海乱鬼組”の構成メンバーもエルドラゴ、ベアキング、ギャンザックなどかつては殆どが”モーガニア”に属する者達であつたがクリークの悪い癖により今は更生し、多少の荒さはあるものの今では”海乱鬼組”の幹部を務める程になつたのであつた。

そうして”海乱鬼組”は將軍オロチと明王カイドウが一堂に会する火祭りの”大宴会”、それに合わせて襲撃を行うべく着々と準備を

行なっていくのであった。

## 赤鉄の咆哮

『さて：：前回”白海”から落ちた時は問題無かったが：：』

空中要塞サンタマリアに設置された栈橋で一つの大柄な鎧の人物はそう零しつつ下を覗き込む。

真つ赤な全身を覆う装甲は肌一つ見せる事なく全身を覆っており、その表情は伺い知れなかつたが、当然中にいるのは言わずと知れた”海軍本部中將 鈍熊のクリーク”その人であり纏っているのはクリーク専用の”機動外骨格ミリタリスト”、その先進技術試験機であつた。

とは言え量産型のミリタリストは既に諸々の試験もほぼ終わりかけている為今やこの機動外骨格：：いふなればパワードアーマーはミリタリストの新たなオプションや機能等を試験的に盛り込むためのクリーク及び特装研のオモチャ兼実験機という扱いを受けているが。

閑話休題、内部のゴグルで下をズームするも遙か7000メートル下に広がっているのは深い霧であり目標としている島の影は見当たらない。

『：：なあカフウ、辺りの鳥が集めてきた情報っただけどほんとにこの下であつてるか？』

「クルルル!!」

元気の良い返事にクリークは少し悩むも

『まあ能力者じゃ無いから海に落ちたからと言つてどうにかなるわけでもなし：：まあ本番にも備えてやるしか無いか』

と、その言葉と共に空中に身を躍らせるとそのまま重力に従つて真つ逆さまに落ちていく。

一方こちらはスリラーバークにて全員満身創痍ながらも何とか”七武海”のゲツコー・モリアを倒し影を取り戻した麦わらの一味。

誰も彼もがその場で座り込み、モリアに影をとられ森に潜んでいた

者達が歓喜の喜びで一味に駆け寄り、何の企みか一度麦わらのルフィがモリアに破れた後に手を貸してくれたモリアの一味と思しきモネとシュガーを怪訝に思いつつも藪を突く気は無いのでそれとなく礼を言って終わりにしておこうとナミが立ち上がりかけたところにソレは降ってきた。

どれほどの高さから落ちてきたのかはわからないが両足での着地とほぼ同時に両膝、腰、肘、肩とぐるりと回転するように着地した真つ赤な全身鎧に中身が入ってる事を確信してクリマタクトを持ち上げる。

『：ゲッコー・モリアは敗北、そして下手人はお前たちで間違い無いな？』

酷く硬質的なその声と赤い全身鎧の姿、多少の意匠は違えどその姿にナミは東の海“アールンパーク”で戦った姿を思い出した。

「緋色の鳥」…だったかしら？随分とまあ流暢に喋るようになったわね？」

「うわー、なんですかあの目に悪い真つ赤つかな全身鎧…」

呑気な感想を紡ぐブルックを無視してナミは相手の姿を確認すれば前に見た時より一回りがつしりとした巨体、背中には前回無かった黒い筒が二つに腕周りや足回りにも色々増えているのを目敏く気付き周囲に警戒を促す。

「泥棒猫のナミ…航海士にして一味の頭脳だったか」

それと共にナミに向かって向けられる掌、前回の記憶を元にすぐさま回避行動をとると共に

「チョップパー！フランキー！ロビン！後ついでにブルック！こいつは敵よ、前の時は全身あちこちに武装を仕込んでたから気をつけて!!」

そう声をかければ赤い全身鎧の姿を確認した一味は

「んー？どつかで見たよーな…？」

腕を組んで首を傾げるルフィに

「げえっ!!あん時の赤鎧!!ルフィ、アールンのところで戦った奴だよ!!ここまで追ってきたのか!?!」

ビームの嵐を思い出したのだろう、慌てて瓦礫に隠れつつもルフィ

に向かつてそう叫ぶウソップ

「へえ、あん時の：前は斬れなかったがいい機会だな」

　　獯猛な笑みと共に再び刀に手を添えるゾロ

「テメエ、とつくにタネは割れてんだよ！」

　　それと共に懐に飛び込み向けられた腕を蹴り上げるサンジ

「な、何だこいつフランキーみたいなロボか!？」

「おれはロボじゃねえ、サイボーグだ！」

　　当然やる気満々な面々を見たチョッパーとフランキーはかたや人間に近い大きな体躯を持ちパワーを出しやすい”重量強化型（ヘビーポイント）”へと姿を変化させ、かたや左手首をスライドさせて四つ並んだ銃口を乱入者へと向ける。

　　そしてロビンは少し考えるような仕草をして後ろにいたモネとシユガーを見ればモネは肩をすくめる姿を、シユガーは満足そうに頷く姿を見てやっぱり：と顔を覆うもいつもの事かと思いい直しゆつくりと両手を交差しいつでも能力を発動できるように構えればそれと共に蹴り上げられた右腕が光線を放つと共に

「かてエのはわかってんだ、一刀流居合：獅子歌々!!」

　　懐に飛び込んだゾロはかつて鋼鉄の硬度を持ったMr.1さえ切り伏せた斬撃を放つも耳に響くのは酷く耳障りな金属同士のぶつかる音

『ふむ、まだ正面からは斬れないか…』

「ちっ、これでもダメか！」

　　結果を見る前に手応えで察したのだろうすぐ後ろに飛び退くゾロにサンジは

「何やってんだへボ剣士!!堅いってんなら：コリエシユートっ!!」

『いい蹴りだ：だが止められた時の事も考えておくべきだったな』

　　腕を蹴り上げたのとは反対側の脚で巨体の首に対してハイキックを振り抜くも相手はびくとも動かず、更には蹴り上げた足は掴まれた上にそのまま瓦礫に向かつて投げつけられるとその身体は強かに打ちつけられた。

「お、おいサンジ!!くそっ三連：火薬星!!」

自分が隠れていた瓦礫のすぐ側に叩きつけられたサンジを瓦礫の後ろに引つ張り込みつつ炸裂弾を三連射するウソップ に対してお返しとばかりに背中から右肩に迫り上がってきた太い筒が向けられると低い音と共にばら撒かれる弾丸。

「ガトリンググ ！？いえ、斬れないなら一点に集中させれば」夜明け歌（オーバード）・クー・ドロア！！」

当然自らの影が入っていたゾンビのように馬鹿げた筋力を持つわけではないので飛びはしないが、それでもなお鋭い突きが頭部の脆いと思われたガラスらしきスリット部分へ

『狙いはいい…だが貫くには少し足りないな』

それと共に今度は背中から左肩に迫り上がる黒い筒、そこから放たれた砲撃でブルツクは大きく吹き飛ばされたのだった。

## 赤貝足熊 ドンクリークさん

「サメ野郎の時といいやってくれるじゃねえか！」

吹き飛ばされたブルツクを見て今ならば行けると判断したのだから、ゾロが三刀を構えて踏み込むのに対し今度は左手を向ければ

「またビームか！だが出させるかよ、鬼…斬りいっ!!」

それと同時に相手を吹き飛ばす威力を持つ斬撃が放たれるも途中で威力を吸い込まれるように止められた。

『隙と見たか？なら甘い』 衝撃（インパクト）』

そして吸い込まれた衝撃は逆にゾロの体を吹き飛ばし、更には続け様に慌てて両拳を構えるチョッパーに右腕を向けると手首からワイヤーを射出。

「つと!!何だこれワイヤー？こんなんでおれを捕まえがっ!!」

スピードが遅かった故に難なく掴んだがそこに流されたのは高圧の電流、流石にゴムでも無い普通のゾオンでは耐え切れるわけも無く意識を落とした。

「ビームにガトリング にキャノンに衝撃波と電撃…随分と多彩なようだがまだ色々持つてそうじゃねえか」

そう言いながらフランキーが右手の皮膚を模したグローブを外せば現れる鋼鉄の拳。

『鉄人（サイボーグ）』フランキーだったな、御名答とでも言った方がいいか？』

そう答えながら左肩のガトリングが銃弾を吐き出すも流石に相手がサイボーグとあってか

「いてててて！だが効かねエよ!!ストロング…ハンマー!!」

前面から受ける銃弾の雨をもともせず近づき鋼鉄の拳を振りかぶるとそのまま頭を殴り飛ばした…が、

『いい拳だ…だがまだパワーが足りないなっ!!』

常人であれば首根っこごと吹っ飛ばしたであろう威力の拳はまるで分厚い壁でも殴ったかのように頭部で止められ、お返しとばかりに



右拳がフランキーの胸部にへと向かい、多少の物理ダメージなど緩和する筈のボディにめり込む拳。

「フランキー…ちよつと痛いかもだけど我慢しなさい!!サンダーボルト…テンポ!!」

そこに降り注ぐのは機会を窺っていたのだろう、いつの間にか作られていた上空の黒雲から降り落ちる雷、これで多少動きが止まればと思いつつクリマタクトを構え直すナミだったが

『狙いはいい、ただ残念ながら対策済みだ』

「えっ!はや…」

直撃した時の衝撃に紛れて後ろに回ったクリークにより首筋を打たれて気絶させられると

「っ…お前えっ!!ゴムゴムの銃っ!!」

瞬く間に仲間を倒されたからだろう驚きも一瞬、すぐさまゴムの性質を利用した拳を振り抜くもクリークは意にも介さず逆に装甲に覆われた拳を叩きつければそのままルフィは吹き飛ばされた。

『さて、打撃は効かないのだろうか?』

「っゴムゴムのお銃乱打!!と…斧おっ!!」

しかし流石三億の首とでも言うべきか吹き飛ばされ様に体勢を立て直し、着地と同時に”刺”と呼ばれる高速歩法を用いて目にも止まらぬ程の乱打を浴びせかけ、更に上空に大きく伸びた足を振り下ろし渾身の踵落としを入れるも

『まだまだ…まだ足りんな!!』

「っふっ!」

腹部に当てられた掌、そしてそこから発せられた衝撃波が全身を通り抜け思わず膝をつく。

更には膝をついたルフィを蹴り飛ばすと右肩のガトリングが唸りを上げて加勢しようとしていたかつてゲッコウ・モリアに影を奪われて森に潜んでいた”被害者の会”を薙ぎ払い、更に左掌を両手を構えたままのロビンに向けてと徐々に強くなる光に

「お前の相手は…おれだろうか!!ギア2(セカンド)”ゴムゴムのJ E T攻城砲(キャノン)”!!」

だがそこに先程より圧倒的に速さを増した、鋼鉄のアーマーさえ打ち貫く拳が連続して放たれるのに対しクリークは焦る様子も無く無防備に受けて見せる所か

『それだけか？巨人の拳とやらを持っているのだろうか？』

右腕を掲げると装甲がガシャガシャと組み変わり二回りほど大きな拳へと変化そのまま振り下ろす。

「なら見せてやる！ギア…3（サード）”骨風船（ほねふうせん）”!!」

それと共に大きく息を吸い込むと指の骨を噛んで風船のように思い切り息を吹き込んで骨をまるで風船の如く膨らませるとそのまま腕に、巨大化した拳で受け止めた。

これこそがルフィが開発したギア2に続く三つ目の戦闘形態”ギア3（サード）”である。

主にスピードをパンプアップによって超強化するギア2とは趣を異とし、こちらはパワー重視の強化であり、風船という名前の通りに指の骨を噛んで風船の如く吸い込んだ息を吹き込み骨内部をパンパンに膨らませるのが特徴である。

『成る程これが”巨人族の拳”か？』

受け止められたまま背部の武装を二つとも起動、ガトリングとキャノンが発射されるも

「骨風船は硬エんだ！そんなの効くか!!ゴムゴムの…」巨人の銃（ギガントピストル）”!!」

しかし決して見かけだけでは無く、骨内部に空気が入っているからかかなりの硬度を持ち、弾丸や大砲程度ではびくともせず更に攻撃にあたってはその巨大さと硬さ故にスピードこそ落ちるものの攻撃力は圧倒的に増し、クリークに向かって振り下ろされた。

『ふむ、モリアに破れたと聞いたが杞憂だったみたいだな…』

しかしそこには殆どダメージを見られない赤い装甲を持つ人影。流星に背面に背負っていた武装こそへしゃげて変形しているものの装甲本体には然したるダメージは見受けられず

「ならこれでどうだ!!」

とルフィは右手に集中させていた空気を今度は右足に送り込みそ

のまま巨大な脚を振り上げた所で眼前にクリークの左手が、そのまま突き出たノズルから噴出された白いガスをマトモに吸い込み、かなりの激戦であったモリアとの戦闘から連戦だったからかその場で気絶するように倒れたのだった。

## 第503話

麦わらのルフィを睡眠ガスで眠らせ、唯一残ったロビンに対しても数合打ち合った後に”問題無い”と判断し、一振りで数十打を浴びせる掌打を打ち払いながら近づくとそのまま気絶させた。

元々クリークの目的として”麦わらの一味の現在の戦闘力把握”、”試製パウードスーツ（ミリタリスト）のテスト”、”ゲッコー・モリアへの協力依頼”の3つ。

特に一味の戦力把握についてはクリークの知識では辛勝だった七武海が一角”ゲッコー・モリア”に敗れたと聞いた為過去の色々な行動により”知識”よりも戦力が低下しているのでは無いかと考えた為急務であった。

だからこそこの襲撃であり全員との戦闘であったが今のレベルであれば問題ないだろうと判断し一味との戦闘を終えて子電伝虫で近くにいるであろうモネとシュガーに後を任せて三つ目の用事を済ませる為にその場で”見聞色の覇氣”を円状に広げる。

”見聞色の覇氣”とはざっくり言えば相手の持つ覇氣を読む力であり、それにより相手の動きや感情、果ては未来視すら可能にする力でもある。

達人ともなれば息一つで島一つ覆うレベルで展開できるがこの男は残念ながら見聞色の覇氣にそこまでの適性が無かった為その展開域は500メートル程度、麦わらの一味以外の気配は感じ取れないと見て今度は地面に耳を当て暫く集中すれば

「足音二つに何か引きずる音…これか？」

数多響く音から目的のものを見つけ出すと背部のジェットパックを起動、その場は向けて飛び出した。

「モリア様！もうすぐ屋敷だ!!ちくしょう、ゾンビ達が使えりや…」

「言っても始まらないだろペローナ、麦わらの野郎まさかモリア様をぶっ飛ばすなんざやってくれる…」

意識を失ったゲツコー・モリア、そしてモリアを支えて屋敷まで運ぶペローナとアブサロム。

本来であればモリアの能力”カゲカゲの実”の力によってこの島に蔓延る千体ものゾンビ軍団を使って防衛なり殿軍なりさせるところであるがゾンビ軍団は麦わらとモリアの戦闘において最後にモリアが使った”影の集合地（シャドーアスガルド）”：今まで集めた全ての影の力を自身に取り込むという技で全て全滅、更にはその後意識を絶たれた事により今まで集めた影は全て解放され今のモリアには自身の影しか残っていないかった。

「ちっ、モネがいりゃこんな傷あつという間に治療できるのに：おいアブサロム！てめえがしつこいから嫌気がさして裏切ったんじゃねえかよ？」

「な、失敬な!!おいらは正々堂々正面からプロポーズしてたさ！」

「よく言うぜ覗き魔、能力使ってりゃバレねえと思ってたのか？」

そして先の戦闘によって半壊した屋敷にようやく到着し慣れないながらもモリアの傷を治療し始める二人であったが

「アブサロムにペローナ、そして影の王ゲツコー・モリア：少し話でもしようじゃないか」

その手は目の前に降り立った全身赤鎧の男の言葉で止まったのだった。

タイトル四字縛りがキツイので暫くは数字話でいきます。

「何だおまえ、今時全身鎧なんぞ時代錯誤な格好しやがつて」

「ガルルルル：モリア様が弱つてるとみて漁りにでも来た賞金稼ぎか？」

身長は大体モリアの半分程、えらくゴテゴテとした赤い全身鎧に背中には大砲などの武器を背負っているのを確認したペローナは自身の直ぐ側に自身の能力で生み出された複数体のゴーストを、そしてアブサロムは両腕を闖入者へと向けいつでも攻撃できる体勢をとる。

『まあ落ち着け、別に戦闘をしに来たわけでは無い：とは言え』和平の使者なら槍は持たない”という言葉もあるしこの格好だと警戒されても仕方ないだろう』

その言葉と共に空気が噴出するような音と共に一人で鎧が外れていき最後に残ったフルフェイスの兜をとるとその下から現れたのは薄紫の短髪に厚い唇を持った厳つい顔の男、歳の頃は恐らく3、40代頃でがっしりと鍛え上げられた肉体や細かに残る傷跡で戦闘を生業にする者だと判断できる。

当然相手：クリークが武装解除したとは言え警戒を緩める訳もなく先手必勝とばかりに

「信用する筋合いなんざねえよ！ネガティブ・ホロウズ！！」

能力で生み出した通り抜けた相手の心を虚に：極端にネガティブな思想にさせるゴースト達を一斉に放つも触れる直前で男の腕が振り払うように動くとゴースト達は掻き消され

「ペローナのゴーストが!?ならおいらの”死者の手”を食らえ!!」

ならばとばかりにアブサロムが両腕に嵌め透明となったバズーカーを撃ち込むも

「話し合いに来たと言った筈だが…」

「効かねえ：能力者か？だったらこいつはどうだ”特ホロ”!!ぶっ飛ば

「しちまえ!」神風ラップ!!」

自身のネガティブホロウもアブサロムのバズーカも効かずならば、と生み出したのは巨大なゴースト、生み出されると同時にクリークに向かうと同時に大口を開けて相手を飲み込み大爆発を引き起こした。

本来であれば相手に喰らい付かせてから破裂させる技であり、その威力は人体が一撃でバラバラになるほど…しかもゴースト故に物理的に取り除くことはできないため、その威力もあつてペローナにとっては最大威力の攻撃であつたが

「私の”特ホロ”が効いてねえだ!!」

「威力は大きいしこの前半の海までなら通用するだろうが…何如せん威力不足だな、そして…いくら透明になつてようがコレだけ近いと流石にわかるぞ?」

「な!おいらの事が見えてるのか!」

相手が悪くクリークは全くの無傷、それどころかアブサロムの”スケスケの実”の能力による透明化で爆発に紛れ近づき不意打ちしようとした腕が掴まれていた。

「さて…肝心な話し相手は目覚めていないし、しばらく大人しくしていてもらおうか”拳砲”!!」

そしてそれと共に片腕を掴まれたアブサロムの腹部に拳が撃ち込まれ意識を絶たれ

「おいアブサロム!てめえあれだけシユガーから改造されておいてなにアツサリ気絶してやがる!!く、来るんじゃないねえ!!ミニホロ・ラップパレード!!」

ペローナも複数の手のひらサイズのゴーストを何体も生み出し弾幕を作り出すが意にも介さず近づくとその姿にせめて自身の育ての親であり大事なボスを守ろうと立ち塞がる。

「やれやれ、話し合いに來ただけだと言うのにまるでこつちが悪者みたいだな…悪く思つてくれるなよ?」

そう言いつつペローナに伸ばされた腕であつたが

「キシ、キシキシ随分とウチの子分共が世話になつたな…」鈍熊」  
「影を使った腕…!」

その伸ばされた腕はガシリと地面から伸びた”影”で出来た腕に  
掴まれ一瞬気を取られると同時に

”礼”はしてやる…”突影狼（つきかげろう）”!!”

狼を模った影がクリークへと向かい吹き飛ばしたのであった。



## 第505話

”王下七武海”と呼ばれる組織がある。

世界政府に協力する事、及び上納金を条件に、数々の特権：指名手配・懸賞金の解除や一定の条件のもと他の海賊や世界政府未加盟国からの略奪行為まで認められた7人の大海賊の総称であり、かの大監獄”インペルダウン”ならば最下層に収監される程の猛者達である。

なお海軍が設立した”公認海賊”とはまた別の組織となる。

閑話休題、現在の王下七武海は

先立って除名となった”砂の王”クロコダイルを含めて世界最強の剣士とも称される”鷹の目”ジュラキユール・ミホーク、元・加盟国国王にして政府に従順な”暴君”バースロミュー・くま、海賊国家アマゾン・リリー国王”海賊女帝”ボア・ハンコック、ジンベエザメの魚人であり魚人達で構成された海賊団を率いる”海俠”ジンベエ、最年少で七武海入りし希少なロギア的能力者でもある”火拳”ポルトガス・D・エース：そして最後の一人こそ今正にクリークを吹き飛ばした旧懸賞金三億六千万の首にして”影の王”ゲッコウ・モリアである。

やはり：随分と姿が違っているな。

衝撃に吹き飛ばされながらクリークが考えたのはそれであった。

クリークの”知識”では殆どを部下に任せきりで長年の不摂生故か上半身は肩幅が狭く痩せているが下半身はでっぷりと太ったラツキョウのような体型で長く大きな首と腕、そして対照的に足は短く不恰好な姿であった。

「モリア様あ!!」

「ぐっ：ペローナ、そこで伸びてるアブサロムを連れて下がってろ」

「でもあの麦わらにやられた怪我が！私も戦うぞ!!」

「足手纏いだ、おまえには荷が重いつて言っただよ：相手は”あの鈍熊だぞ!!」

「鈍熊：まさか赤カモメの!?!何しに来やがった!!」

「とにかく下がってる! 欠片蝙蝠(ブリック・バット)」、ダメージな  
んぎねえんだろ? なあ鈍熊あ!!」

しかし目の前のモリアは身長こそ変わらないもののその身体は見  
苦しく無い程にすっかりとした体つきであり鋭く尖った耳と角、白い  
肌もあつてかまるで”悪魔”のような姿だったのだ。

「やつと起きたかゲッコー・モリア、起き抜けに悪いがこちらは話し合  
いに来ただけだ攻撃の意思は無い」

生み出され襲い来る無数の”影”で作られた蝙蝠をいなし、弾きな  
がらそう提案するも

「キシキシ、何の用か知らねえがおれは今気がたつてんだ…それにま  
だ”礼”が足りてねえんだよ、影箱(ブラック・ボックス)」、”憑  
影(シャドール)”!!」

その言葉はモリアが手のひらを向け握るような動作と同時影の蝙  
蝠達が一斉に纏わりつき影の立方体を作り上げた事で途切れ更には  
「キシキシ、ついでだ! 影塞(ブロックビット)”!!」

追撃とばかりに立方体に影の杭が突き刺さり地面に縫い止めると  
モリアそのまま踏み込むと大柄な体格に見合った影を纏う拳が何度  
も影の箱に振り下ろされたのだった。

## 第506話

「仕方ない、少しばかり手荒に行かせてもらおうか」嵐脚・困断（かこいたち）”!!”

閉じ込められた影の立方体をクリークが両断すると同時、モリアは飛び退き

「全部消えたから丁度いい…てめえの影を寄越せ」角刀影（つのとかげ）”!!”

今度はトカゲを模った影がクリークへと向かう…とは言え諸肌にも関わらず身体にも服にもダメージは見えず

「太陽の下に出られなくなるのは困るからそれは御免だな、”連装飛拳砲!!”」

両拳から撃ち出された衝撃波がトカゲを模った影を吹き飛ばした。「ちっ…影さえありやカタがつくつてのに…」

”超人系（パラミシア）”カゲカゲの実、それこそがモリアが食した実でありその効果は至極単純”自身や相手の影を操る”というものである。

しかしそれ故に多彩な効果を持ちモリアは能力を研ぎ澄ませ基本技能となる”自らの影の実体化及び操作”に加え自身と影の居場所を入れ替えたり、他人の影と自身の影を同化させて操ったり、他人の影に対して物理的な干渉を行ったりする事が可能となっていた。

何よりゲッコー・モリアが開花させた能力の中で厄介なのは”影を奪う”事である。

他者に能力を使用し影を奪い取った後、契約することができれば持ち主を離れた影を能力者に従わせることが可能で、影を奪われた者は鏡や写真に映らなくなり、直射日光を浴びると消滅するという凄まじい効果であった。

更には奪った影を死体や物体に入れば、元となった生物同様に動かすことができる上にその影を取り込めば、短時間だが、入れられた影の力を得ることが出来るのだ。

その点ゲッコウ・モリアは実に1000体という多くの人間の影を集めて改造死体に押し込んだ”死なず、恐れず”の不死の軍団を作り上げていたのであった。

「成る程…麦わらが破れたと聞いたが実際やり合って納得した」

想定していたのは王下七武海”最弱”、端的に言ってクリークはモリアを侮っていた。

とは言え無理もない、クリークの”知識”では昔こそかの四皇・百獣のカイドウと渡り合ったとは言え今は昔、大きく弱体化しており無理なパワーアップにより自身の能力の根幹たる影を制御出来なくなり麦わらのルフィには敗れ、ドフラミンゴからも”七武海には力不足”と評されジンベエからも”鍛錬不足”と言われたりしたからであつたが”今”のモリアは別物であつた。

先立つて麦わらの一味とは軽く手合わせをこなしおおよその戦闘能力は把握している。

故にこうして実際モリアとやり合ってみれば能力の根幹たる”影”の展開速度、身体の動き、技のキレに身体能力などいずれも高いレベルを持ちモネやシュガーの手助けがあつたとは言えよくこのモリアに勝てたもんだと内心賞賛した。

しかし

「どうしたゲッコウ・モリア、”たったそれだけの”影で足りるのか？」

「てめえ…どっかで見てやがったな、よくもぬけぬけとお!!”影等蝙蝠（ブリック・バット・ブレット）!!」

影を操るといふ特性上自身の影を含めて他人の影があればあるほど戦力を増す。

麦わらとの戦闘前はそれこそ千体の影を所持していたモリアであつたが先の戦闘で切り札の一つ”影の集合地（シャドー・アスガルス）”により全ての影を自身に取り込んで拳一つで島を割るほどの大幅なパワーアップを果たしていたが流石に自身の許容量を超えたのか最終的に全ての影を抑えることが出来ず解放する羽目になつていたのであつた。

「嵐脚・辻風」!さて、そろそろ仕舞いでいいか? いい加減話し合いに移りたいんだがな」

幾重にも生み出された鋭く変化した蝙蝠をクロスした飛ぶ斬撃で弾き飛ばしつつ言うクリークであったが

「キシキシシシ…舐めてんじゃねえぞ鈍熊ア!! そんなに”影”が欲しけりや飽きる程くれてやるよ!! 全ての影はおれの支配下にある!! 広がりがれ”影の拡散点(シャドー・ミドガルズ)”!!」

自身の影を収縮させた次の瞬間爆発的に四方八方に広がった影を見て一気に警戒レベルをあげたのだった。

## 第507話

モリアの能力は自身や相手の影を操る事である。

影を自由な形に物質化したり、自身の影を媒介に相手の動きを媒介したりかなり汎用性に富む能力でありざっくり言えば”生物の影を操る”事だと考えていた。

だからこそ失念していたのだ、今のモリアは”自身の影”しか持たない状態であり能力の発動には全力を注げる…”他人の影”では無く”周囲の影”を掌握する可能性を。

モリアの影が広がると周囲の影、建物や瓦礫の影と同化してゆく。

”憑影法師(ドッペルシャドル)”…キシキシ、悪いが今は細かい制御は出来ねエ…死んでくれるなよ鈍熊あ!!”

作り上げられたのは見上げる程の影の巨人、大きさにして50メートル程だろうか、巨人族を遥かに超す巨人が腕を振りかぶるとそのままクリークへと振り下ろした。

”鉄塊…驚いたな、生物の影だけじゃ無いのか!!”

その威力は凄まじく流石に島を割る程では無いものの、拳が振り下ろされた所はまるで隕石でも落ちたかの如く抉られており影の巨人が見掛け倒しでは無い事が伺える。

”ぐっ…キシシ、奥の手つてのは持つとくもんだろ?”断影(タチカゲ)”!!

拳ではダメージがないと見てか指を開き鋏を模るとそのまま閉じれば影の巨人も同じような動作をとる、最もその指は刃物のように鋭く変化しており挟まれれば人体など容易く、それこそ紙のように切断されるだろう。

「大断嵐脚(おおたちらんきやく!!)だったら大元を落とせば済む話だな!!」

巨大な鎌風を起こし弾き上げると同時、大きく踏み込むとモリアの眼前へ、そのまま拳を振りかぶると目の前の目標に撃ち込むも

「キシキシシ狙いはいい…だが残念、おれと影はいつでも入れ替えられるんだよ！」影尾鉈（かげひなた）”」

モリアに着弾した筈の拳はいつの間にか入れ替わった影へと、そして更には今度は鋭く変化した手刀が振り下ろされ、当然避けるべく動こうとした所で

「むっ、何だ!？」

「キシキシシ」影縫（カゲヌイ）”、動けねエだろ…忘れたのか？おれは影を操る、勿論テメエの影も例外じゃねえ!!」

モリアの言葉にクリークが自身の足元を見るといつの間にか自身の影が縫い止められるように影の杭が刺さっており影の動きが固定されると共にクリーク自身が縫い止められるが如くその場で固定されており、動けないクリークに対して巨大な鉈のような手刀が振り下ろされる。

しかし

”金剛鉄塊”、たしかに対した威力だ…だがこの程度で俺は斬れんよ」

地面に深い斬撃が刻まれたにも関わらずクリークは全くの無傷。

「六式とやらか！だが動けねえ事には変わりねえだろ！咬限影狼（かみきりかげろう）”!!」

それと共にモリアの両手が狼を模ると同時巨大なモリアの影の両腕が狼へと変化しクリークを噛み砕くべく迫るのだった。

## 第508話

動くことは出来ないが金剛鉄塊は発動出来た、ならば動かずにこの拘束を破つてしまえばいい。

そう判断したクリークは手足に薄く纏わせていた覇氣の出力を上げると同時全身に広げて行けばそれと同時に武装色の覇氣特有の”黒化”が全身へと広がるに連れ影の拘束が弱まっていき全身が武装色に覆われた時にはクリークの影も拘束から解放されていた。

「何て硬さしてやがる!!しかしやはり覇氣を使ってやがったようだが遅え!」

拘束を解いたクリークであつたが眼前には大型の影絵の獣が迫るも焦つた様子もなく

「心意六王・熊手拳砲!!」

武装硬化により黒化した拳は影の巨人を獣へと変化した腕ごと爆散させると共に、月歩と荆を合わせた”瞬動(しゅんどう)”にてモリアの眼前へそのまま反対側の拳を振り抜くも流石に素直に当たつてくれる訳もなく

「ちつ、”速くて硬い”…単純に面倒だなテメエは!!”角刀影!”」

咄嗟に一步下がると共に掌を上には振り上げれば呼応するようにトカゲを模つた影が拳を振り抜いたクリークに突き刺さる。

「通らんさ!」飛拳砲・斉射八連”、”踏砲・判子!!」

本来であれば人体など容易く貫く影のトカゲであつたが、クリークを貫くには至らず空中へ打ち上げられるだけに止まり、更にはそのまま落下しながら拳を撃ち出す事で追撃を防ぎ着地と同時に両脚で地震の如く地を揺らした上で両腕に覇氣を集中させながら再びモリアの眼前へ。

「っ!」影塞幾重(ブロック・ビット・ブロッカー)!!」

目の前に迫つたソレに対して本来であれば自身と影の居場所を入れ替えた所であるが先程爆散させられた為もう一度影法師を展開させるにはほんの少しだけタイムラグが発生する。



ならば防いだほうが早いと判断したモリアは杭を模った影を地面から数十、数百と形成し自身とクリークの間に影の盾を作り出したが触れる直前クリークの拳が影の盾へと触れ

「心意六王・大熊展腕通背拳砲（だいゆうてんわんつうはいけんぽう）！！」

幾重にも重なった影など無かったかのようにモリアは吹き飛ばされたのだった。

タネは簡単でありクリークが使ったのは俗に言う”遠当て”の一種である。

自身の覇気と拳の威力を命中させた物質に内部的な衝撃を与えその先にある対象に拳を当てる技であり、展開された影の盾を通り抜けモリア自身に攻撃が入ったのだった。

原理上はどんな硬い鎧や表皮の相手でも内部にダメージを与えるというクリークが生まれる前の”知識”と現在までの経験を元に編み出した”対装甲”を持つ貫通属性の拳であった。

## 第509話

「モリア様っ!!」

吹き飛ばされたモリアに駆け寄るペローナとアブサロム。

例え足手纏いと言われようとも動かないと言う選択肢は無くかたや巨大なゴーストを、かたや両腕をクリークへと向ける。

「ぐっ、お前ら！下がってろと言っただろうが!!」

「でもモリア様！ただでさえ麦わらとのダメージが抜けてないんだ！これ以上は無茶だ!!」

「モリア様、おいら達の影を使ってくれ！もう一度オーズを動かせりや海軍中将なんぞには負けねえ!!」

「黙ってろ!!また…また失ってたまるか!!シャドー・ミドガ…ぐっ!!」

再び自身の影を広げようとしたモリアだったが流石にダメージが堪えたのか痛みが走ると共にその発動は途中で止まった。

「だから話し合いに來ただけだと言ってるんだが…」

「それにしても随分と暴れてくれるじゃねえか!!」欠片蝙蝠（ブリック・バット）」

「あんまり大っぴらにしたくは無いんだが…」百獣のカイドウには退場してもらおう、今回はその協力の要請だ」

流石にこのままでは罅が明かないと判断したごく一部の将官以外は知らない爆弾を落とした。

「何…だと…?」

流石にその効果は絶大であった。

何しろかの四皇の一人”百獣のカイドウ”と現七武海であるゲッコウ・モリアの間には因縁がある。

かつて二十年程前…新世界”ワノ国”においてモリアはカイドウとぶつかり当時のカイドウと互角に渡り合いこそすれ、その時にモリアは全ての部下を失っているのだ。

「さて、話を聞く気になったか?」

「は…?何を言っやがる!?!」

「だから言っているだろう」百獣のカイドウ”には退場してもらおうと」

「馬鹿な！相手は四皇、三大均衡を崩すとしても言うのか!?それも海軍が！」

「既に作戦は発動している、対外的に表の目的として四皇”白ひげ”の討伐…これは穏健な勢力であり、大海賊時代以前から存在する最もネームバリューを持つ故に最初から”隠れ蓑”とする為選ばれた。

モルガンズにすっぱ抜かれた事もあって世間の大多数が知ってるのはこちらだ。

そして裏の目的としてこの大海賊時代に楔を打ち込む為に各四皇勢力の戦力漸減…とは言え白ひげや赤髪に対しては穏当なものとなるだろう、政府筋や多くの海兵が知っているのはこちらだ。

そして真の目的、それこそがワノ国を根城とする四皇が一角”百獣のカイドウ”の討伐、それに付随しての”ワノ国”の解放…それこそ知っているのは海軍本部の中でもほんの一握りだ」

「待て…海軍が独自に四皇の一角を落とすだと！それに”ワノ国”の解放？海軍は何を考えてやがる!？」

あまりに予想外の話にモリアは愕然とし、更にそう問うも

「え、聞きたい？今のワノ国の事情はかなりドロドロだぞ？多分知ったら世界政府辺りから睨まれるかもしれないがそれでも聞きたいか？」

クリークはその言葉に少し怯み

「キシ、キシキシシ…いいだろう、とりあえずまずはテメエのいう”話し合い”とやらに乗ってやろうじゃねえか」

そう言いながらモリアはあちこちに走る痛みを抑えつつ再び立ち上がったのだった。

## 第510話

「さて、モリアはこっちに引き込めた…となると次は“オーズ”の改装か、モネには提案してあるから取り掛かってもらおうとして何人か特技研から呼び寄せるか」

スパアイランドホテル…モリアが根城としていた”魔の三角地帯（フロリアン・トライアングル）”近海で運営している世界政府公認のスパ・リゾート船にある富裕層向けホテル、その最上階のスイートルームにクリークの姿はあった。

「投下は順調で警戒した様子は無し…ふむ、これなら問題無く潜入出来そうだな」

本来であれば豪華な内装に優美な景観、まさに一部の金持ちだけが泊まる事を想定された豪華な部屋であったがリゾート船全体と大海原を見渡せるカーテンは閉め切られ、机や床の上には多くの書類やファイル、電伝虫などが置かれ雑然とした雰囲気を放っておりクリークは各部署から今回の作戦の進捗についての報告書を確認しつつ次の準備を進めていた。

そこにノックの音が響き答える前にバンツとドアが開け放たれ

「シュ、シュガー様！流石に押し入りとなると、わたしが！このわたしが叱られてしまうので…ってああっ!!」

「表に出ろ」

そこにいたのはシュガーとこのスパ・リゾート船”スパ・アイランド号”の担当支配人であるドラン。

開業以来、毎年100億ベリーの売上げを誇るの”スパアイランド”は”黄金帝”ことテゾーロがオーナーを務める”ステラグループ”に所属する超巨大リゾートであり、50種類以上のプールや温泉にカジノや高級レストランなど流石に本拠地たる全長10キロを超える巨大艦”グラン・テゾーロ”とは比べるべくも無いがそれでも設備としてはグラウンドラインの中でも指折りの規模を持っている。

そんな船のオーナーを務めるドランは成功者とも言える部類でもあったがその眉は下がり、何とかシユガーを穩便に止めようとしていたがその努力は実らなかつたらしい。

「何しろシユガーも”ステラグループ”に所属するアイドルであり超VIP、しかもクリークはクリークで自身の所属するグループのトップと交流がある海軍本部中将、最上位のVIPルームとは思えない部屋の中の様子を見て胃の辺りをそっと抑えていた。

成功者とは言え雇われの身、今この場では一番下っ端なのだ。

「シユガー、ノックはいい事だが…せめて返事をしてから開けてくれないか？あんまり公には出来ない資料なんかもあるんだ」

「着いてから一歩も部屋から出てこない引き籠もりの言う事なんて聞かない」

流石にそこを突かれると少し言葉に窮する。

クリークとてシユガーの思惑自体は察しており、少しでも自身に休んでもらおうと今回の件を画策した事はモネからそれとなく示唆されたからである。

「とは言え現在カイドウを追い落とす作戦…”蜂一号作戦”が大詰めのな事もありなかなか手が離せないでいたのだ。

## 第511話

新世界”ワノ国”

ここでは数日前からおかしな現象が起きるようになっていた。

「…何だありやあ?」

最初に見つけたのは腹を空かせながら食料を少しでも多く集めるべく山に分け入った男であった。

男が見つけたのは一つの樽、どこから落ちてきたのか半ばひしゃげており中からは握り拳半分ほどの銀色の物体が溢れていた。

普段は見慣れない物にふと上を見上げるも当然何があるわけでも無く武器代わりの棍棒を構えながら恐る恐る近づき爪先でつつくも反応は無し、たくさん散らばるソレを一つ手に取れば

「軽い…何だ金目のもんじゃなくて銀紙か」

見たままの金属では無かった為少しガツカリしつつも銀紙で密封されたソレを男はベリベリと剥がせばそこには薄茶の物体

「こりや…まさか全部食いもんか!」

かつての昔縁日で見かけた焼き菓子に酷似したソレを見て男はバツと半壊した樽をみやる。

念の為に軽く匂いを嗅ぎ、少しだけ舐めてみるも異臭やおかしな味は無く、少しだけ齧りとつてみれば美味しいと言うわけでは無いが今現在飢えている状態からしてみれば僥倖という他は無くあわてて散らばったソレらを集めると大慌てで来た道を戻っていく。

この天からの恵みを一刻も早く飢えた村人達に届ける為に。

同じような事はあちこちで起きており汚染された地故作物は殆ど実らず、まともな食料も一部の勢力がほぼ独占してる状況故にこの天からの贈り物の噂は瞬く間に近隣に広められ、半信半疑ながら飢えには勝てず探しに出た人々は次々とソレを見つけたのだった。

当然誰かが置いているのだらうとこの情勢を快く思わない一部特権階級の者達は部下に命じて犯人を捕まえるべく手勢を動かすも樽

や銀紙、包まれた堅焼きのビスケットに犯人を示すような手掛かりは無く、分かったのは夜の間はどこからとも無く降ってくるという事だけであった。

だからこそ毎晩どこからとも無く降ってくる食糧に人々はいつの間にか”月からの贈り物”と呼び始めその噂はワノ国全土へと広がっていくのだった。

「不味い!!なんだこれは!」

当然快く思わない者達もいる。

ワノ国の中心に位置し、最も栄える”首都”とも呼ぶべき”花の都”、更にはその中心に位置し一際高い場所にある”オロチ城”、その最上階の一室にて二人の男がいた。

かたや斜め丁髷頭に王冠を被り、等身が低めで割とずんぐりした体格に似合わない派手な着物を着た巨漢。

”月からの贈り物”ですか、まるで光月を懐かしむかのような呼び名ですな」

かたや頭部、耳たぶ、顎鬚などが異常に伸びた袈裟の意匠をもつ着物を着用しサングラスをかけた男。

「ええい!そんな物はどうでも良いのだ!わしの国で好き勝手しおつて:いつになったら犯人を捕まえてくる!!」

「なに分相手は空の上から:落ちてきた瞬間までは確認できましたが空を登っていけるわけでは無いですしなあ」

”ワノ国”の国王とも呼ぶべき存在であり”將軍”の地位にある”黒炭オロチ”と彼に仕える”オロチ御庭番衆”の隊長”福ロクジユ”であった。

「ちい、空の上にも飛べれば早いものを」

「カイドウ様に頼んでみては?」

福ロクジユの言葉にオロチは懺然とした顔をしてその時の事を思い出す

『ウオロロロロ:最近齒向かう奴もいなくて退屈だったんだ、丁度い

いじやねエか…』

「…との事だ」

「あの方でしたら確かに…念の為何人か藤山に送ります、山頂から投げている可能性もゼロでは無いでしょう」

そう言いつつ福ロクジユは指示の為にその場を後にし

「おのれ光月の亡霊共があ…まだ二十年も経た無いうちに動きおつて!!」

残されたオロチは苛立たしげに朱盃から酒を呷るのだった。



## 第512話

”スパ・アイランド”にて休養と少しだけゴタゴタはあったものの新七武海の”銀狐”フォクシーとの会談も終わりクリークの姿は空中要塞”サンタマリア”にあった。

本来”サンタマリア”は新世界にて海軍において使用される武器や艦船の実に6割近くの製造を行う大規模秘匿工廠”ジュエルアイランド”の上空にて防衛や警備を行う”工廠特務”の直轄であり、基本的に他の事柄に関わる事は無い。

が、現在”サンタマリア”はとある任務の為、防衛管轄である”ジュエルアイランド”を離れ新世界ワノ国付近の上空高くに浮いており、要塞外苑部の広場には武装化された大型鳥類：通称”戦鳥騎（せんちようき）”達が騎手と共に羽を休めていた。

そんな中を周囲を見渡しつつ歩くのは青い髪にサングラス、そしてスーツの上から白衣、更にその上から海軍コートを羽織った大柄な男：このサンタマリアの総司令官にして海軍工廠特務部隊隊長、そして優秀な科学者でもある海軍本部少将であるアイザックと、紫の短髪に鈍色の胴鎧、そして背中に赤い海軍マークの入ったコートを羽織った巨漢：海軍独立遊撃隊隊長にして”特殊兵装研究所”所長、最強の中将とも噂される海軍本部中將”鈍熊”ことクリークである。

「前段階の様子はどうか？」

「投下し初めて数日は経つが特に問題は無いな、上空まで確認しに向かう様子も今は無い」

「ふむ…カイドウは空を飛べると聞いていたが杞憂だったか？わざわざ警戒して戦鳥騎で運ばせていたが」

「今の所カイドウに動きは無い、報告が上がってないか知ってて無視しているかは知らんがな。」

それより本気で潜入するつもりか？既に”草”は放っている、わざわざ貴様自ら行くメリットが無いだろう」

「…そう言うな、実際俺は知識でしかワノ国を知らん。」

それに前から興味はあったんだ、知ってるだろ？あの国の固有戦力を」

「侍」か：相当なモノだと聞いてるが？」

「センゴク元帥も警戒する程だ、それに気になる事もある」

「聞いてもいい話か？」

「ああ、色々調べてもらったんだがワノ国の今の將軍は先代からの篡奪で今の地位に就いている。

そして正当性のある後継者は18年前に現將軍に処刑された：だがそいつには二人の子供がいたらしい、しかも死体は見つかってない」

「ほう？」

「カイドウの排除に併せて現將軍には消えてもらおう、流石に色々やり過ぎ：というか単純に今後にあたって邪魔だ」

「となれば後継が必要だな：例え生きてたとしても命を狙われてるんだ、国を出てるんじゃないか？」

「その線は薄いだろう、当時8歳と6歳：協力者がいたとしてもあの国の立地だ、簡単には出れんさ」

「ならば国内に潜んでいる：か、今回の潜入はそれを？」

「ああ28歳に26歳：少し若い気もするが上手く片付けば補佐くらいならこちらから出す事も出来る」

「雛を数えるのは躰ってから」という言葉もあるぞ？」

「む：まあ代案はあるさ、それより改装は？」

「ああ完了している：とは言え元々のミリタリストを”飾りつけ”しただけだな」

クリークとアイザックの目線の先、そこには懸架台に吊るされた武装鎧：ワノ国の鎧兜に酷似したパワードスーツ”ミリタリスト”が吊るされていたのだった。

## 第513話

ワノ国、花の都。

微かな月が空に浮かぶ夜も更けた時間、カン三郎は提灯持ちと共に屋敷への家路を急いでいた。

「ひとーつ…人のこの世に生き血を啜り」

「…む、声？」

そこに響く声、カン三郎は刀に手をかけ提灯持ちも灯りを持ち上げ周囲を見回す。

「ふたーつ…不埒な悪行三昧」

しかし周りは塀に挟まれた一本道、こんな夜とあつては道行く者もおらず声の主の姿は見えない。

「何奴だ！姿を表せ!!」

「みつつ…醜いこの世の鬼を」

カン三郎に応えるかのように再び響く声。

「…そこか!!」

その声の方向に向き直ると同時、提灯持ちも灯りをそちらに向け「月に代わってお仕置きよ!!」

闇夜の中、塀の上に向けられた提灯の前に照らされたのは赤備えの鎧武者。

「何奴!!」

カン三郎は手をかけていた腰の刀を抜き放ち大上段に構えれば鎧武者も”真つ赤な鞘”の直刀を抜き放ち正面に構える。

「何奴？それを知る必要は無い…お前の悪事は明白、俺は月の代わりにそれを裁く」

「あつあつあ、さては貴様か最近噂の”辻斬り亡霊”とやらは。

光月の縁者かどうかは知らんがおれの刀の錆となれ愚か者め!!キエアアアアアツ!!」

ワノ国が”平和”になって数十年、フリ四郎と共にワノ国の武器事情を一手に担うようになってから自身が刀を振るう事も殆ど無く

なつたとはいえ、その程度で身につけた技が無くなるでもなし目の前の不埒者を両断すべく飛び上がり大上段からの一撃を繰り出す。

「なん…だと…」

しかし下手な鉄板程度なら真つ二つに斬ることが出来る自身の斬撃は傷一つつける事なく鎧に阻まれ

「斬奸剣（ざんかんけん）!!」

返礼とばかりに振り下ろされた剣はカン三郎が防ぐべく咄嗟に掲げた刀ごと切り裂いたのだった。

「ひ、ひいつ！来るんじゃねえ!!」

そのまま腰を抜かし後ずさる提灯待ちを尻目に赤い鎧武者は

「天網恢々、疏にして漏らさず…」月”はいつでも見ているぞ」

そう言いながら夜闇に紛れるようにスツと姿を消したのだった。

最近ワノ国で噂になっている”月からの贈り物”、それに続くかのように噂として語られ出した存在があった。

「またかい…これで何件目だ？」

「今度は悪代さんだつてよ…」

「奉行所は何をやってるんだ？…どうにも最近物騒で敵わねえや」

「大きな声じや言えねえが…」例のやつ”、將軍様がえらくご立腹だそうだ、見廻共もピリピリしてやがる」

噂になってているのは”辻斬り”である。

勿論今までに辻斬りが無かったわけではない、しかし今回の辻斬りで狙われていたのはいずれも土族や役人、このワノ国においては上位の階級の者達ばかりであった。

「それに…聞いたかい？逃げ延びた提灯待ちの話しじゃ下手人は真つ赤な鎧兜に赤い鞆の剣を持ってたつて話だぜ？」

「赤い鞆…？まさか、赤鞆くに…」

「しっ！バカヤロウ、聞かれたらどうすんだ！…兎に角それもあつて將軍様はだいぶ苛立つてるみてえだ」

「あれから18年も経つてるつてのに…まだ怯えてるのか？奴等は死んだんだろ？」

「ああ、その筈さ…だが例の”月からの贈り物”に加えての”赤い亡霊”の騒ぎ、だいぶきな臭くなってきたと思わねえか？」

「だけどよう、將軍様には、あの”百獣海賊団がついてんだろ？奴らが本腰いれりや直ぐに片付くだろうよ」

「だといいがよ…」

そんな外からの話を聞きながら”これならそろそろ釣れるかもしれん”と集中を解いてそのまま考えるクリーク。

噂になっている”赤い亡霊”、勿論この男の仕業であった。

かつての話に寄せた甲斐もありほぼ意図した通りの噂になっており、このままいけば目的が釣れるのも近いだろうと判断しそのまま隠行

で気配と物音を消しながら高速でその場を離れる。

元々クリークがこのワノ国に降り立ったのは何点か目的があった。

まず第一に”ワノ国”についての把握。

これはひとえにクリークのワノ国に対する知識が少ないからであり、知っているのはロビンが潜入で得た知識、海軍にある知識、そして前世で覚えている”万国編”途中までの知識であった。

次にワノ国の先代將軍”光月おでん”の血縁である兄妹の搜索。

「確か”モモノスケ”だったか？あんなナリで28には見えなかったが…ボニー辺りに絡んだつとこか、アイザックにはああ言ったがカイドウから逃れるため外海に出てる可能性もあるか…」

故にパンクハザードで登場した光月家の血縁についても覚えておりそしてもう一人妹がいる事も掴んでいる。

そしてオロチ配下と百獣海賊団の戦力把握と漸減及び息子との接触。

その為にあえて伝説の”赤鞘九人男”ともそれそうな格好でオロチの配下を斬りつつ釣り出しを企んでいるのである。

赤鞘の生き残りがいると知れば光月の生き残りからの接触、若しくはオロチ配下の上位勢、ドレークを潜ませているカイドウの配下まで釣れるかも…と考えながら

「先生！鈍パチ先生！！またゴネてる奴がいるんでいつちよやつちやつ

てくませえ!!」

「またか、まあ飯と宿代くらいは働いてやる」

「流石先生！こつちです、相手はそこらのヤクザもんですが長ドス  
持ってるんで注意してくませえ!!」

その声にクリーク改め”黒駒 鈍パチ（くろこま どんぱち）”は  
賭場の用心棒として仕事をすべく立ち上がるのだった。

## 第514話

その日も百獣海賊団が真打ち、赤旗こと”デイエス・ドレーク”は賭場”フシミ”でいつものように丁半博打に興じていた。

数年前に名を上げ新世界入り、懸賞金額1億8000万…通称”億超え”とも呼ばれる実力者であったが劣勢を悟ってか百獣海賊団の傘下入り。

傘下に入った後もメキメキと実力を上げ百獣海賊団でも上澄みである真打ちへと出世、その統括でもある”飛び六胞”への昇格は間違いないだろうと言われている実力者でもある。

そんなドレークが一月前から始めたこのギャンブルだが”丁半博打”と呼ばれるワノ国においては割とポピュラーなサイコロ二つを使った賭博で出目を合わせた数で偶数を丁、奇数を半と呼びそのどちらかを予想して賭けるというシンプルなものだがドレークは最初こそ必要があつたので賭場に入りにしていたが、最近はシンプルだからこそディーラー（サイコロを振る人間、ワノ国ではツボ振りと呼ばれる）や他の客との駆け引きを楽しんでいた。

他の客が粗方丁半を決めコマ札（賭札、現金の代わりとなる）したところで

「…半だ」

ドレークが高くなったコマ札の半分を前に出せば

「丁方、半方コマ揃いました…勝負!!」

ディーラーの掛け声と共に晒される二つのサイコロ、出目は三と四「シソウの半…」

それにより丁方へと賭けていた者達のコマ札がため息と共に回収され半方に賭けていた者達に分配、更に高くなったコマ札を尻目にドレークは一息つく。

「さて…イカサマが無い分大分読み辛くなって来たな」

純粹にディーラーの腕に感心しつつ次の勝負に備えるドレークであつた。

そんなドレークが通っているこの賭場”フシミ”、元々は狂死郎一家に所属する”狛狐のフシミ”が”希美”の跡地で開いていた小さな賭場であった。

イカサマ上等な賭場であり、自身も最初はイカサマの洗礼を受けたもののある事情でイカサマは禁止、更には自身の我儘から上役の伝手により十日程前からこの花の都内でも開かれており、客足は中々の盛況。

頭である”狛狐のフシミ”も最初こそぐちぐちと渋っていたもののこの盛況ぶりに手の平を返して、上客であり花の都へ誘致の段取りをつけてくれたドレークには揉み手で対応するようになっていた。

次の勝負に備えて再び見聞色の覇気を発動させるドレークだったがその横にドカリと座った知った気配に発動を止める。

「よう赤旗、随分と稼いでるみてえじゃねえか」

「そつちこそ随分と”派手に”やってるみたいじゃないか黒駒の”

”黒駒 鈍パチ”、一月程前に希美の跡地で細々とやっていた”フシミ”に現れた男で、最初は丁半博打を調子良く打っていたものの、あまりの勝ちっぷりに業を煮やした賭場側がイカサマを行ったのが悪手であった。

イカサマを指摘されたもののだったら実力行使だと言わんばかりに繰り出した10人ばかりいた刀持ちの用心棒は呆気なく素手相手に全滅。

当然賭場の頭である”狛狐のフシミ”もその拳の前に晒されていたが誠心誠意土下座して勝ち分の金銭を対価にどうにか和解、そしてその腕つぶしの良さ（ついでに全滅させられた用心棒の代わり）に是非にと頼み込み宿と飯と金銭を対価に居着いており、ドレークとは多少の諍いこそあったもののウマがあつたのか今ではこうしてドレークが顔を出している時には時々一緒に打つ仲でもある。

…というのが周りの見方であったがその実は全く違う。

海軍本部中將にして海軍独立遊撃隊長”鈍熊のクリーク”、そしてその部下であり数年前から先に百獣海賊団に潜入している”デイ



エス・ドレーク”

クリークのワノ国潜入に合わせて、二人の接触及び情報交換の為にこの関係が作られており、方法としてはワノ国で大手を振るっているオロチ一派に所属するヤクザ者である狂死郎一家、中枢ならまだしも末端とあつて所属は容易く更にはそれを百獣海賊団のドレークに秘密裏に伝え偶然を装い賭場に来て貰えば容易く、それぞれの力を軽く見せつつ後はほとんど拍子に金を持たない者は暮らせない花の都でも容易に入り込んで情報収集とオロチ一派に対しての工作を行うといったものであつた。

「カイドウの動きは？そろそろ釣れそうか？」

「残念ながら今の所はまだ待ちだ、幹部を出す予定も今のところ無いらしい」

「そろそろ焦れて”飛び六胞”とやらあたりが出てくるかと思つたが…」

「個人的に動くのは止めていないがな、血の気が多いのは何人が飛び出している」

そう話す二人であつたが、当然生命帰還による特殊な発声により周囲には世間話程度にしか聞こえておらずこうして堂々と話をしていった。

「そうか…まあ釣りは気長にやるもんが、カイドウの息子と光月の兄妹については何かわかつたか？」

「そりやまあ…しっかし何考えてんだ？光月の兄妹ってのはこの国を任せるのに血筋がいるって事だろうが」

「俺もワノ国に潜入してまだ一月程だが…どうにもカイドウを倒してはいお仕舞いとはいかんたるこの国は。仮にも国の守護を担う”明王”、となれば後継が必要だろ。」

光月の妹姫とカイドウに敵対している息子、二人をくつつけた上でバックアップにテゾーロがついての加盟国入り…これなら光月を悪だと思つている世代にも有効だろ？」

そう得意げに話すクリークだったが

「二つ訂正しておくが…確かにカイドウに息子はいる、だが女だぞ？」

「は？いや、息子だろ？」

「ああ、だが女だ」

「いや待って聞いてないぞ!？」

ドレークからの言葉に思わず声が大きくなるのだった。

## 第515話

「エニエス・ロビーの資料には息子って書いてあったし、こっちに来てからも息子としか聞いてねえぞ…。あれか、家庭の問題的なやつか？」

「なんだそれ…。先代の將軍”光月おでん”はわかるだろ？」

カイドウの息子”ヤマト”という名前だが彼女はそれのおでんに憧れている、そのために自らを”光月おでん”を名乗り、彼と同じく男として生きるようになったわけだ」

「そうか…。いや、光月おでんとは敵対してたんだろ？カイドウはそれで納得してるのか？」

「さあな、カイドウと敵対してるのもそこら辺が理由かもしれない上に彼女には逃亡したり外そうとすれば爆発する枷が両手に嵌められている。」

だが、対外的には娘では無く息子として扱っているから納得…してるかは知らんが問題にはしてないんだろう」

「さて…となるとどうしたもんか、カイドウの血縁なら問題ないと思っただが」

「別に妹姪じゃなくても兄がいるんだ、ならそつちと組んでトップに据えれば問題無いだろう？」

「いや、散々探しているがどうやら兄の方は国内にいない可能性の方が高い。」

勿論外海も秘密裏に搜索させてはいるが…全く情報が上がってこない。」

なお光月の兄、”光月モモの助”についてクリークは存在を知っている。

本編パンクハザード編にて登場したまだ幼い少年、光月の名前こそ名乗ってないものの彼こそが光月おでんの息子であるモモの助である。

初登場時は本来であれば28歳、それにしても随分と幼くクリーク

は年齢を操るボニー辺りにチョツカイを出して幼くなつたと推測している：が、実際には全く別の要因である。

光月おでんが死亡した18年前、光月おでんの妻“トキ”の持つ悪魔の実の能力”トキトキの実”の能力によって”モモの助”、“錦えもん”、“カン十郎”、“雷ゾウ”、“菊之丞”の5人は20年後の未来に飛んだ為に成長が無いままだったのだ。

しかしそんな事は露知らず、恐らくカイドウから逃れる為に外海にいとクリークは仮定して捜索を行なっていた。

その為当然ながら捜索の成果は虚しく、モモの助も錦えもんも後からドレスローザで登場したカン十郎も見つからず今はかつて光月おでんが白ひげの船に乗っていたという情報から白ひげの周りを密かに探っている段階である。

「赤鞘九人男と呼ばれていたメンツでイゾウは白ひげの所に、ついでにミンクの国”モコモ公国”、ここにもかつて赤鞘の”イヌアラシ”と”ネコマムシ”もいる。」

恐らくこのどちらかに匿われてるんじゃないかと思うんだが…」  
「下手に藪をつつきたくはないな…と、忘れないうちに返しておく」

ドレークがそう言いつつクリークの肩に手を置けば袖から顔を覗かせる一匹のネズミ、そのネズミはそのままクリークの懐へと入り込む。

「おお、役に立ったか？八代目は」

「まあな、”色々と”例えば…」

そう話をしながらコマ札の山を高くする二人であったが

「ちくしよう、こんなのイカサマだ!!このおれが、ワノ国一の相撲取りであるおれが一回も勝てないなんて事があるわけないっぺ!!」

二人のコマ札は大声を出して掌を床に叩きつけた男により跳ね上げられる。

二人がそちらを見ればそこにいたのは身長は5mほどだろう、縦にも横にも大柄な銀杏マゲに三つ編み二つを垂らした一人の男。

「そうだそうだ！この人を誰だと思ってやがる!!」

「この人は国技の星（すたあ）、横綱の浦島関だぞ!!」

「浦島さんをイカサマに嵌めようなんざ舐めてんのか!!」

ついでと言わんばかりに同調してがなりたてる取り巻きと思しき男達。

「誰だありや、浦島って知ってるか？」

「浦島といや相撲のトップだったな、おれが来た時には既にいたが：ずっと負けてばっかりで一度も当たってないが」

崩れたコマ札を積み直す二人だったが浦島は立ち上がりコマ札と現金の換金を行なっていた店主のフシミの襟首をつかみ上げ

「町人風情がこのおれを嵌めようだなんて舐めた真似してくれたなあ！」

「ひっ！イカサマなんてしてねえ!!それに”狂死郎一家”の賭場で暴れてタダで済むと：」

「ごちやごちやうるせえ！せいぜい後悔するっぺよ!!」

そのまま腕を振りかぶると壁に向かって軽々と勢いよく投げるも

「おっと、雇い主をぶん投げられちゃ困るな」

クリークが片手でキャッチ、そのまま床に下ろす。

「お前：イカサマ店主を庇うっぺか！」

「おっとお客さん、言いがかりはよしてもらおうか」

「イカサマでもなきやおれが一回も勝てないなんてあるわけねえ!

流行つてると聞いたからわざわざ横綱であるこのおれが来てやつたと言うのに：いい度胸だっぺ!!」

「負けたのはお前がへたくソなだけだろ、自分のポンコツを人のせいになされてもなあ」

「お前：このおれをポンコツだとお!!甘い顔してればつけ上がりやがって!!死ねえええ!!」

クリークの言葉に激昂したのかそれと共に勢いよく平手を叩きつける浦島。

並の男であれば吹き飛ばされ全身の骨が折れるような代物だがクリークは平然とそれを受け止めており

「さて：こうなつてくると営業妨害もいいとこだかどうかするよっ：」

「きよ、狂死郎一家を舐めやがって、それも大事なお得意様が来てる時

に：横綱だか何だか知らねえがいい度胸してるじゃねえか!! やつちやつてくだせえ鈍パチ先生っ!!」

「お、チンピラならまだしも相手横綱だろ? やつてもいいのか?」

「やりたかねえが：舐められたままじゃ花の都に誘致してくれた狂死郎の親分に面目がたたねえからな」

「極めて了解、相手はワノ国一の相撲取りってんだ：報酬は弾んでもらうぜ?」

そう言っつてクリークは両拳を金属を叩きつけるような音を出しながら打ちつけ合うのだった。

## 第516話

「おい！黒駒のと浦島がやり合うぞ！！巻き込まれてたまるか！」

「誰か、狂死郎の親分に知らせてこい！！相手が浦島じゃ分が悪い！！」

慌てて逃げる客や賭場衆、達賭場「フシミ」は混乱に陥っていた。

「士族のおれに平民如きが楯突くつぺか！！脳天かち割って見せしめにしてやる！！彼岸張手（ひがんはりて）！！」

クリークか構えると同時、激昂した浦島が張り手を突き出し正面から直撃する。

「…威力はあるようだがそれだけだな、ワノ国一の相撲取りと言っていたがこんなもんか」

「なっ！おれの張り手に何をした！！」

「なんだ挑発でもして欲しいのか？あの程度でワノ国一とはよく言っただもんだ」

「お前…吐いた唾は飲めないっぺよ、死ぬ！」菩薩張手（ぼさつはりて）！！」

それと共に今度は両手で連続して放たれ全て目の前の男に叩き込まれると相手はビクともせず

「数を増やせばいいってもんでも…いや、戦いは数とも言うが」

「舐めやがって…なら」耳潰し！！「ついでに」目潰し！！」

それと共にクリークの頭を挟んで行われる柏手、更には浦島の二指がクリークの顔面に向かうも

「おいおい、相撲じゃ無いからいいものの本来は禁じ手だろ？相撲取りの誇りもないのか？」

「ぐうっ、指が…さては妖術使いか！！」

余程の勢いがあつたのだろう、両目を貫かんとした二本指は脛を貫く事すら出来ず指を痛めただろう二指を庇う浦島、あまりの防御力に妖術使い…ワノ国という悪魔の實の能力者かと疑うも

「なんの事だ？ただ鍛えてるだけだ…そっちの鍛え方が足りないんだ

よ」

そう挑発してみせるクリークに

「ここは土俵じゃねえっぺ…いい気になるなよ平民如きが!!彼岸拳(ひがんこぶし)！からの”菩薩拳(ぼさつこぶし)”!!」

そうして繰り出されるのは拳打の嵐、連続して繰り出される重い拳の雨だったが

「相撲取りの矜持はどうした横綱…ただのラッシュになってるじゃねえか」

その両拳はあつさりと掴まれ止められた。

「止めたくらいでいい気になるなっぺ！彼岸放(ひがんばな)”!!」

その状態で繰り出されるのは左足を高く上げての顔面を狙った蹴り、その大きき故に容易くクリークの顔面を狙うも

「…拳に蹴りか、ワノ国一でこれなら他が察せるな」

「があっ！くそ、それを貸せ!!」

掴んだ両腕がグツと握られると同時にあまりの痛みに呻くもそれを耐え、取り巻きが腰に刺していた長ドスを抜き放つ。

「おいおいおい、刃傷沙汰は相撲取りには御法度だろ…」

「知った事ないっぺ！おれを誰だと思つてやがる、ワノ国一の相撲取り、横綱の浦島とはおれの事だ!!」

士族のおれが平民如きに負けるわけねえ！このおれに逆らつたのをあの世で後悔するっぺよ!!」

それと共に大上段から振り下ろされる長ドスだったが

「武器を使つてもこれか、張り手の方が威力があつた分まだマシだったな」

「は?」

袈裟懸けに振り下ろされた長ドスは薄皮一枚さえ斬る事も無く金属音と共に肩口で止まり

「そいつは手放してもらうぞ」

長ドスを握つた両腕を蹴り飛ばせば鈍い音と共に長ドスは天井へと刺さる。

「腕が、おれの腕が…」



「さて、好き勝手させてやったわけだが…勿論礼は返さなきや失礼だよな？」

それと共にギチリと拳を握るクリークに浦島は

「ま、待て！おれはこのワノ国一の相撲取り、横綱だぞ!!」

折れた両腕を上げ止めようとするも

「それがどうした、難癖つけて暴れておいてはいいそうですかで済むと思ってたのか？」

「か、金なら払うっぺ！腕が折れてんだ、これ以上は…」

「これに懲りたらもうちよつと謙虚になることだ…一撃必中・鈍蜂（いちげきひつちゆう・どんぱち）!!」

それと共に浦島に突き刺さる拳、同時にその巨体は吹き飛ばされ壁を突き破り大通りへ、地面に転がされた時には白目を剥いていたのだった。

そしてそこに近づく男、3m程で側にはクリークと浦島がぶつかる前に店から走って行った賭場衆の男が肩で息をしていた。

「さてはて…盃交わした子分の頼みと来てみれば、これはどういう事だ狛狐？」

水色の特徴的な髪型に青を基調とした着物、そして腰には侍しか帯刀を許されぬ菱鏢の大太刀。

「き、狂死郎親分…」

賭場の主である”狛狐のフシミ”が盃を交わした”狂死郎一家”の元締め”居眠り狂死郎”がそこには立っていたのだった。

## 第517話

”居眠り狂死郎”

現將軍家”黒炭家”御用達の両替屋であり、ワノ国の裏社会を取り仕切るヤクザ”狂死郎一家”を率い民衆から恐れられる存在でもある。

18年前光月一派の騒動があつた頃は無名であつたものの、その騒動の後光月に味方して壊滅した”ヒョウ五郎一家”などヤクザ達のカラとなつたナワバリを掌握し、新たに両替商や遊郭などの事業展開を始め大成功を収め、めきめきと実力を発揮し今やワノ国一のヤクザの大親分。

冷静冷徹な性格であり、オロチ一派の士族や見廻衆などと比べても高い実力を持った男で、オロチからの信任も篤く自身も”オロチ様”と様付けをしており、さらに自らを”將軍の犬”と自称して命令に従う忠実な一面を見せる。

が、裏ではオロチの陰口を堂々と叩くなどその態度はとても尊敬しているとはいえず、予言に怯えるオロチを馬鹿にしている節も見せている。

とは言え、將軍に齒向かつた者は誰であろうと処断するという厳格さを持つてゐる事により民衆からは一家共々恐れられ、オロチからの信頼はそれなりに厚い：そしてそんな男が出てきた理由。

この賭場が末端とは言え”狂死郎一家”の系列であり、ドレークから百獣海賊団幹部である”飛六胞”のササキへ、そしてその友人である狂死郎へと話が行つて花の都にて開かれた賭場だからこそそこで何か起これば報告があるのは当然、例え三下であつても己の部下がやられれば一切の容赦をしない任侠心を持つており相手がワノ国一の横綱”浦島閔”となれば荷が重いだろうという判断で出て来たのであつた。

自身が顔を出せばいくら浦島と言えど引き下がるだろうと判断していたがその予想は外れ、目の前には倒れ伏す浦島とぶち抜かれた壁

の向こうには黒い着流しの大柄な男。

「アンタが例の用心棒か…黒駒ねえ、本物か？」

「何の事だ？この名前なら死にかけの爺さんに頼まれただけだ」

当然嘘である。

この名前は先に潜入していたドレークから勧められた名であり、これを名乗る事で生きているかもしれない”赤鞆”やオロチ施政下以前のヤクザ者を釣り出す確率を上げるための名前である。

「へえ…生きてるとは思わねえが、その爺さんとやらはくたばったのか？」

「どうの昔にな、アンタが”居眠り狂死郎”か色々噂は聞いている」

「奇遇だな、こっちもそちらさんの噂は色々聞いてる…浦島をここまでするたあ随分と腕がたつじやねえか」

そう言いながら気を失った浦島を足で軽くこづく狂死郎。

「飯と宿代ぐらいいは働くさ、まあ運動にもならなかったが」

「ハハハ、剛毅なこった…おれのここに来る気はねえか？」

気になる名前とその腕つぶしの強さにそう勧誘をかけてみる狂死郎。

クリークはオロチ麾下の中でも一番腕がたち、百獣海賊団幹部”飛六胞”の一人である”ササキ”の友人でもある為警戒をしているが、実はこの”居眠り狂死郎”こそがかの”赤鞆九人男”が一人”傳ジロ”であり、死亡を偽りいつかオロチを打倒すべく、自身を偽って側に潜入していたのである。

その為”黒駒”という名前には少し因縁がありそれを名乗る+性格に難はあれど強さは本物の浦島を容易く地面に伏せた事から上手くいけば2年後の”決戦”で大きな戦力になるかもしれない、と打算の元勧誘をかけてみるが、そんな事は知る由も無しオロチ一派の中でも腕利きであり中枢の一角でもある狂死郎に面には出さないものの軽い警戒をする。

「すまんな親分さん、一宿一飯の恩ってのがあるんでな…もう暫くは用心棒をさせてくれ」

「そうかいそうかい、まあ気が向いたら屋敷まで来るといい。」

腕つぶしもあるようだしアンタなら直ぐにオロチ様に御目通りが叶うかも知れんな」

確かに中枢に入れるのは魅力だが狂死郎が自身を怪しんで来たという可能性がある以上迂闊には乗れないと考えていると

「おっと、あんまり友人を困らせないでもらおうか」狂死郎親分」

そこに賭場の中から見ていたドレイクが顔を覗かせた。

「おお、どれいく殿ではござらんか。

いやあ鼻屑にしてもらつてありがたい限りで」

「狂死郎親分こそ、随分とこの賭場で儲かっているらしいじゃないか。

それよりその奴にはウチから勧誘かけているんでな」

「おっと、競合相手がカイドウさんとこだと分が悪いな。

おいお前ら、そのデカブツを屋敷まで運べ：誰の賭場に手を出したかハッキリさせてやる」

「まあ暫くは気楽な用心棒生活をしてるさ、確かに実際にオロチ將軍を見た事は無いから気になると言えば気になるが」

クリークの返事に気を悪くするような素振りも見せず部下に指示を出すと馬鹿にするように笑いながら

「ありや臆病モンだからな、特に最近じゃ例の辻斬り騒ぎ：例の亡霊よ、オロチ様は”赤鞆九人男”の仕業だと思ってるらしい」

「カイドウさんは自身に反抗する者が久々に出て来たという事ではばらくは様子を見るそうだ。

それによれば死体は見つかってないと聞く、それこそ隠れ潜んでる可能性も無いとはいいきれんだろう」

「ハハハ、馬鹿馬鹿しい：もし生きてるといふならひとつ手合わせしてもらいたいもんだ。

おい狢狐しつかりこいつに報酬は弾んでやれ、浦島をぶちのめしたんだケチるんじゃねえぞ？」

「へ、へい！」

「それでは拙者はこれでどれいく殿も、黒駒のも気が向いたらおれの屋敷に顔を出すといい」

そうして去って行く狂死郎を見ながらクリークは袖に潜ませてい

た諜報ネズミ、”イシズミVIII世”に指で指示を出し傘下の”タビネズミ”部隊を招集させつつ

「…ひよつとしたらそろそろ出張ってくるかもしれない、二、三日中にまた”亡霊”が出るのでそのつもりでいろ」

ドレイクにそう小声で告げつつクリークは次の相手を誰にするか考えるのだった。

## 第518話

ワノ国、花の都。

微かな月が空に浮かぶ夜も更けた夜、再び響く亡霊の声。

「ひとーつ…一夜一夜に人見頃」

「フフフ…来たか」

そこに響く声、花の都の奉行である”遠山辻ギロー”は手に持った提灯を大きく二度振るとそのまま投げ捨てる。

「ふたーつ…富士山麓、鸚鵡鳴く」

”赤鞘の亡霊”だの何だの騒がれても自身が誘い込まれたとも知らずにノコノコ出てきおつて…オロチ将軍のお膝元、この花の都を騒がせた罪は重いぞ?」

そのまま軽く腰を落とし自らの佩刀、”試し斬り”でも鋭い斬れ味を発揮した業物”念仏丸”に右手を添えた。

「みつつ、醜いアヒルの子」

「なにを言いたいかわらんがしよせんは”亡霊”…死人の戯言よ、今の世はオロチ様の治世、大人しく墓の下に帰ることだな」

それと共に刀を抜き放つと青眼に構えて相手を探す。

周りは塀に挟まれた一本道、こんな夜とあつては道行く者もおらず声の主の姿は見えない…が

「そこだ！往生するがいい!!」

左側の漆喰塀に刀を突き入れれば刀は頑丈な塀を容易く差し貫き、強い手応えと共に勝利を確信した辻ギローはニヤリとして相手を刺し貫いた刀を引き抜こうとするも

「むっ、勢い良くやり過ぎたか…」

塀を貫通して相手に突き刺した念仏丸はビクとも動かず、今度は力を込めて引き抜こうとした所で

「月に変わって…お仕置きだ」

バキリ、と何かを折るような金属音と共に軽くなる刀。

「なっ…貴様生きて!」

驚く辻ギローだったがその言葉は塀と共に吹き飛び地面に叩きつけられた。

「色々と言ったようだが…オロチのお膝元である花の都の奉行がこの程度か」

塀の向こうから現れた男、刺し貫いたとら思った念仏丸は半ばから折れて男の左手に、刀身を掴んで止めていたと悟りギリと歯を鳴らし立ち上がる辻ギロー

「貴様が”亡霊”か、随分とハッキリした亡霊もいたものだな。

だが…たった一人で何が出来るというのだ、囲めっ!!」

その声と共に赤鎧の亡霊…クリークを囲んで一斉に現れる同心達、よほど本気で捕まえに来たのかその数は50を超えており辻ギローも折れた念仏丸の代わりに新たに刀を与力から受け取り

「花の都の与力と同心全て…とはいかんが大半がお前を囲んでいる、逃げられると思うなよ?」

「いくら数が増えたところで…俺を止められると?」

「そうか不足か、だが安心しろ囲んでいるのがこれだけとでも?」

そのまま馬鹿にしたようにニヤリと笑えば

「見廻衆500騎…そろそろオロチ様もご立腹でな、悪イがテメエはここで捕らえさせてもらうぜ、手脚の一本や二本は覚悟しな」

包围された一角から出てきたのは金髪を結ったサンングラスの男、花の都の警邏を担当する”見廻り衆”、その勢力は五千人に及びオロチ一派の中でも”狂死郎一家”に次ぐ大所帯でありそのこのトップである”ホテイ”であった。

当然クリークも釣ればいいなと思っていた人物でありまさかこうも易々と出て来た為予定を変える。

「さて、潔くお縄を頂戴する事だ!!」

「おめエら、やっちまえ!!」

辻ギローとホテイの声に一斉に包围網が狭まりクリークへと殺到、しかしクリークは焦る事なく腰を落とすと右脚を大きく振り上げ

”踏鳴判子・陸津波（ふみなりはんこ・おかつなみ）”!!」

そのまま地面に叩きつければ大地が大きく捲れ上がった。

当然一人を捉えようと殺到していた者達はそんな想定外に飲み込まれ、寸前で飛び退いた者達も続け様に飛んで来た石礫によりダメージを受けた所に

「貴様らも知るがいい」赤鞘の所以を…嵐一閃（あらしいっせん）!!」

それと共にクリークによつて引き抜かれる赤い鞘の直剣、かなりの長さを持ちかつては”呪われた聖剣”として祀られていた常人ならば振るのも難しいソレをクリークが易々と振り抜けば捲れ上がった地面ごと包囲網の殆どが斬り破られ、指揮をとっていた辻ギローとホテイが再び刀を構えようとした時には二人にも複雑な紋様を持つ刀身が迫っており

「なつ、まさか貴様妖術使いか!!」

「おいおいおい！聞いてねエよ、何だこの化け物!!」

辻ギローは身を屈める事で、ホテイは刀を使って刀身を逸らせて大きく後ろに退がる。

「ふむ、やはり丈夫なのはいい事だな」

そう言いながら刀身を確認するクリーク。

余談ではあるがクリークの膂力では通常の武器は振れば壊れるような使い方しか出来ず、それこそ世界最強の剣士”ミホーク”の持つ最上大業物の”夜”や、かつてワノ国にいた伝説の剣豪”サムライリユーマ”の所持していた大業物”秋水”などの恐竜が踏んでも1ミリたりと曲がらない頑丈さを持つ”黒刀”を手に入れるべく動いていた所に転がり込んで来たのが今まさにクリークが振るっている”七星剣”である。

所以妖刀や魔剣の類であるがクリークの覇気によつて屈服させられ、更には仕掛けや拵えも新たに施されて生まれ変わった”七星真剣”、その特性は何と言つても”折れず、曲がらず、よく斬れる”という三拍子揃った物でそれこそクリークが全力で振るっても壊れる所か、刃毀れ一つ無く応えた為愛用していた。

閑話休題、想定していた以上の事態に辻ギローもホテイも慌てて追加の戦力をスマシ（スマートタニシ、電伝虫と似た特性を持つ）で呼



び寄せようとするも包囲網はどんどん討ちとられていき、与力や同心達を指揮していた辻ギローも斬られ、ホテイにも大上段から剣撃が振り下ろされようとした所で

「おーおー修羅場でござるなあ」

受け止めたのは菱鏢の大刀。

「き、狂死郎親分!!」

釣り上がった目にワノ国特有の髪型にポンパドールを合わせた特異な髪型、オロチからの信頼も篤い”狂死郎一家”の親分、”居眠り狂死郎”が到着したのであった。

## 第519話

「二睦月（ひむつき）」

” 赤鞘の亡霊”、赤備えの鎧武者の大上段から振り下ろされた剣戟を自身の太刀で止めた狂死郎であったが

『随分と力任せな、だがコイツあ…強いな』

思った以上の重さに痺れる手を握り直しながら警戒度を更に上げる。

ワノ国一のヤクザである” 狂死郎一家”、その元締めであり將軍” 黒炭オロチ”の信頼篤い” 居眠り狂死郎”であるがその正体は全滅したと思われている先代將軍” 光月おでん”に使えた、赤鞘九人衆”が一人” 傳ジロー”である。

その正体を知る者は一人であり、己が仇であるオロチの前ですらその激情を隠しここまで上り詰め、主君の妻である” 光月トキ”の残した予言

” 月は夜明けを知らぬ君

叶わばその一念は

二十年（はたとせ）を編む月夜に九つの影を落とす

まばゆき夜明けを知る君と成る”

それを20年後と読み解き、来る日までどれだけ屈辱だろうと雌伏の時を過ごしていた。

だがまだ予言まで二年ほどあるにも関わらずこの一月ほど前から囁かれ出した” 赤鞘の亡霊”、かつての仲間の生き残りか若しくはそれに近い者かと考えるもそれにしては規模が小さく、接触をしようにも神出鬼没。

それ故に情報こそ集めているもののその正体は掴めておらず、今回花の都の奉行である辻ジローが持ちかけてきた共同作戦に渡りに船とばかりに乗ったのだが

「二如月（ふかきやいらぎ）」

袈裟斬りからの左斬り上げ、V字を描くそれを後ろに下がる事によつて躲し、そのまま直剣を振り上げ無防備になった胴部を右から薙ぐも

「わはは、随分と頑丈な鎧でござるなあ」

鉄さえ切り裂く自身の斬撃は傷一つ付けることすら敵わず、突きを主体とする構えに変わる。

「三弥生（みやよい）」

それと共に赤鎧から繰り出されるのは高速の三連刺突、受け流し様に装甲が薄いと思しき関節部に刺突を入れるも通らず：しかしこの一連の斬り合いで狂死郎は確信した。

”コレ”は赤鞘の、仲間達の誰でも無い：例え十数年を経て剣筋が変わったと言え、それにしても差異が酷く何より：

「四卯月（ようつき）」

四角を描く高速の四連斬撃を跳ね上げ自身の刀の鋒を向けおどけたように口元に手を当てる。

「いやはや、成る程大した力自慢でござるなあ！それに多少の心得はある…。」

何者かは知らねエが：さつきからなんだ”ソレ”は。チャンバラごっこじゃねエんだぞ？虚も実も無エ、ただの力任せに高速で刀振つてるだけだろ」

「五臯月（いつさつき）」

言葉を返す代わりに放たれた突きから始まる五連斬は内側から掬い上げるように受け流され

「ほらな、言っちゃまえばアンタのは童が棒切れ振り回してんのと殆ど変わらないでござる」

それと共にわざとらしい笑みを消して大太刀を脇構えに柏低く落とし

「侍…ナメてんじゃねエ」

踏み込むと共に一閃、特殊合金で作られた本来刀で傷がつくような物では無いにも関わらず鎧武者、ミリタリストの胴体には深い傷が刻

まれていた。

「非礼を詫びよう、所詮オロチの飼犬などと侮つて悪かった」

「…浅かったか、本当に随分と頑丈な鎧でござるな」

傳ジローは警戒を解かないままに、最初と違い真つ二つにするつもりで斬つたにも関わらず中身に届いて無い事に今度は本気でそう溢す。

しかしやはり相手はオロチに敵対しているものの光月に属する者では無いとアタリをつけこのまま好き勝手されてはオロチ一派、ひいては百獣海賊団の警戒を大きくするだけだと判断し再び刀を構え直すも

「どういうつもりか…」

異名の元となつた赤い鞆に仕舞われ相手はゆつくりと拳を前に腰を落とし居合などでは無い、完全に拳闘の構えをとっていた。

「詫びの代わりと言つてはなんだが…精々死んでくれるなよ？」

それと共に吹き上がる圧力、咄嗟に刀を自身の目の前に構え直すも「やっぱり侍じゃねエな、何処の何者だてめエ!!」

「一撃必倒・怒鈍蜂（いちげきひつとう・どどんぱち）!!」

かろうじて見えたのは構えた大太刀は真つ二つに折れると共に自身に迫る拳。

受け流すべく添えた手は弾かれそのまま凄まじい衝撃に後ろに控えていた一家の子分達と共に纏めて吹き飛ばされた。

ややあつて最初は互角、更にはあれだけやって傷一つつけられなかつた相手の鎧に大きく傷を入れた狂死郎にこれならいける！と確信していたホテイ達は自陣営でも最強と言うべき狂死郎が敗北した事に思い至ると

「っ…テメエら退けっ、退けええええ！相手は化け物だ!!」

それと共に逃げ出しかけていた包囲網は一気に崩れ、誰しも自身の命が惜しいとばかりに逃げ出し、狂死郎も子分達に運ばれていき周りには気を失つたり、傷で動けぬ者達ばかり。

「さて…仮にもワノ国トップのヤクザがいきなり死んでは混乱がでないからな、まあこれで暫くは動けねえだろ。」

しかし：まさかこのミリタリストにこうもハッキリと斬ってくれ  
るとはピンキリつて事か、案外”侍”も侮れねえもんだ」

そんな者達に目もくれずクリークは先程の一撃で刻まれた深い斬  
撃痕に手を当てつつ、尋常では無い防御力を誇る大鎧を模した外骨格  
”ミリタリスト”、それを貫通こそしなかったもののその威力に侍に  
ついて評価を上方修正しつつその場から素早く去るのだった。

## 第520話

” 居眠り狂死郎の敗北”

この報告はオロチ一派に対して激震をもたらした。

特に將軍である黒炭オロチは怒りと共にそれを超える程の恐怖を感じており、彼に襲つて来たのはまるで亡霊の足跡が後ろからヒタヒタと迫ってくるような震えるほどの寒さ。

当然座したままであるわけもなく、見廻衆や狂死郎の証言からすぐさま莫大な懸賞金をかけてお尋ね者として手配、更には協力関係にある百獣海賊団にもあらゆる手を使い協力を頼み込み、その甲斐あつて彼らの本拠地である鬼ヶ島から実力者で構成される”真打ち”及び、その中でも”飛六胞（とびろっぽう）”と呼ばれる幹部集団から二人の戦力が花の都に常駐。

しかしそこまでしたにも関わらずオロチの寒気は消える事なく、亡霊に怯えるのだった。

一方、一命を取り留めた狂死郎であるが、治療されたとはいえ怪我が治つてないにも関わらず登城しオロチに報告、その後一刻も早く怪我を治すべく自身の屋敷で療養に努めていた。

そんな彼の屋敷に訪れたのは一人の女性。

彼女こそがワノ国のトップアイドルとも言われる花魁であり、それこそ男の憧れにして女のカリスマに併せ高い教養と国をも揺るがす程の美貌を持ち神にも落とせぬ気高さはもはや”女の完全体”とも称されている”小紫”その人である。

そんな彼女が狂死郎の見舞いに来たのは”小紫”が狂死郎一の待つ遊郭に所属しているからであり、別に特別な理由は無い：少なくとも表向きは。

「丑三つさん、怪我は大丈夫？」

「すいません不覚を：いや、相手を見誤りました」

共に連れて来た禿や護衛を下がらせ狂死郎と二人になる小紫。

「見誤った…じゃあ」 亡霊 は皆が噂してるような光月の生き残りでは無いと？」

「ええ…アレは”赤鞆九人男”の誰でもありません、オロチに敵対しているのは間違いないでしょうが」

「…お母様の言った二十年には少し早い気もするけれど、動くべきだと思います？」

「いえ拙者もあなたもここまで潜り込んだ身、今ここで動いては全てがバレてしまいます。

オロチはあなたがおでん様の娘とも知らずに惚れ込んでいる、お辛いでしょうが…」

「いえ、あと少しだもの…それに”亡霊”が暴れ始めてからオロチはそちらに執心よ？」

「ははは、ワノ国一の花魁を差し置いて將軍の心を射止めるとは大したものですね」

狂死郎の軽口に少し笑うと小紫は少し悩む。

「…亡霊”を仲間にする事は出来ないかしら、少なくとも丑三つさを相手にここまでやれるのなら」

当然そう提案する彼女はただの花魁である筈が無い、彼女こそ18年前に滅ぼされた”光月家”の遺児である”光月日和”：クリークが探している光月の血を継ぐ兄妹の片割れである。

18年前、彼女は城が焼け落ちるのに紛れて”赤鞆九人男”の一人である”河松”と共に脱出。

当初こそ二人でいたものの、5年以上の放浪生活の末に数少ない食料を彼女に与え気遣い、年々寡れてゆく河松を見て彼が自分を守る所為で死んでしまうのではと不安になった彼女は、自身がいなくても彼一人なら生き延びる事が出来ると考え置手紙を残しその前から姿を消した。

その後何の因果か既に花の都では大きく名を挙げていた狂死郎親分の元に辿り着き、オロチの懐に入るために”光月日和”の名前を隠し絶世の美貌を持つ最高の花魁”小紫”となったのである。

「いえ、やめておいた方がいいでしょう。」

”亡霊”の目的が読めない上に、相手は何者かわからない以上迂闊に手を出せば大火傷するかもしれません。

せめて頭山にいるアシユラ童子がこちらに味方するか、行方不明の河松が見つかれば：」

そして”居眠り狂死郎”こと傳ジローはそんな彼女をサポートし、表ではオロチに忠実なフリをしながら裏では彼女が”花魁”としてオロチ陣営から巻き上げた金銭を義賊”丑三つ小僧”としてばら撒き、少しでも苦しむ人々の為にと動いていたのだ。

しかし狂死郎は今回の負傷によりしばらくは動けず、小紫もいざという時：正体がバレそうになったり、オロチが力づくで娶ろうとした場合にどうするかを話し合う為に見舞いと称して狂死郎の元を訪れており、二人は”赤鞘の亡霊”や今後の事などを話し合うのだった。

天井裏に一匹の鼠がいる事などまったく気づかずに。



## 第521話

目標のうちの一つ、”光月の血縁”について手がかりを得たクリークはドレークにも事情を話して花魁”小紫”を調べ上げ、ほぼほぼ間違いないだろうと断定。

ならば目標のうちのもう一つ、”カイドウの血縁”を確保すべく動く事としドレークに探させた所”鬼ヶ島”：百獣海賊団が拠点としているワノ国本土から少し離れた島に在るとの事であった。

ならばこちらに来た時に拐かせばいいだろうと考えたものの相手はカイドウから爆弾付きの鎖をつけられている上に鬼ヶ島の外へ出る事は無いという事だった為こちらから迎えに行く必要があると判断し早速とばかりに動き出す。

「…その前に少し片付けとく必要があるか」

そしてその夜、再び亡霊が花の都に現れた。

「な、なんだと！飛び六胞が!?馬鹿な!!」

朝起きて早々、オロチに知らされたのは再びオロチを恐怖に震わせる報告であった。

自陣営の最高戦力が”亡霊”に敗れた為、協力関係にある百獣海賊団から派遣してもらった戦力、多少の譲歩は迫られたもののワノ国将軍である

己にとつては民がいくら連れ去られようが死のうがどうでも良いと判断。

故に派遣されたのは百獣海賊団の中でも腕利とされる”真打ち”100名に更にその上澄みとされる”飛び六胞”の二人、ページワンとアンキロー。

震える程の寒さこそ無くならなかったもののこれだけの戦力があればいくら”亡霊”と言えど容易く己の元には辿り着けない：そう思った矢先の派遣された百獣海賊団の壊滅である。

『ウオロロロ、亡霊の癖に随分と”骨”があるじゃねエか…』  
「笑い事じゃない！どう落とし前をつけるつもりだ!!」

直ぐにカイドウへと繋ぎをとり捲し立てるも帰ってきたのは楽しそうに笑う声。

『いいじゃねえか、退屈凌ぎには丁度いい…それに光月の生き残りかは知らんが聞きてエ事も出来た』

「聞きたい事？兎に角相手はきつとこのおれを狙ってる、誰のおかげで武器が手に入っているのかわかってるんだろっうな!!」

オロチのその言葉にカイドウは舌打ちしながら追加の戦力を約束しオロチは少しだけ安堵して通信を切る。

「亡霊 め…だが悪足掻きもこれで仕舞いだ」

少しマシになった震えを抑えてオロチは新たに常駐が決まったメンバー：百獣海賊団における三人の大幹部が一人”疫災のクイーン”に加え、飛び六胞の”うるテイ”、“フーズ・フー”率いる真打ち含め500名、いよいよ本腰をいれて動き出した”百獣海賊団”を迎え入れるべく指示を出すのだった。

勿論そんな大規模に動けば当然潜入しているドレークを通してクリークの耳にも入ってきており

「となれば想定通り鬼ヶ島の戦力は普通より少ない…そろそろ動くか」

巷では夜な夜な”亡霊狩り”が始まっており、特に飛び六胞が一人”うるテイ”は先に来ていた弟の”ページワン”が重傷を負って戦線を離脱した事により仇討ちとばかりに積極的に亡霊を探し回っているとの事だった。

思っていたより大物が動いた為動くならばこのタイミングだろうと考え新月の夜に浜まで出ると指笛を鳴らす。

暫くして海の中から現れたのは一対の角を持つ巨大な黒い魚。

裂けたような大きな口には鋭い牙がビッシリと生え、全身を覆う漆黒の鱗は生半可な攻撃では通用せず、湾曲した大きな角には傷が刻まれており、何も知らないものが見ればその凶暴な見た目にすぐさまそ

の場を逃げ出すであろう。

これは”闘魚”と呼ばれる魚類であり、本来であればこんなところにいる生物では無い。

闘魚はグランドラインのドレスローザからグリーンビット近海にしか生息しない魚であり、その性格も顔と同じく凶暴な魚であるが：「よし、出来るだけ静かにあの島まで頼んだぞ”マガツノ”」

そのまま軽く地面を蹴って背中に取り付けられた鞍に跨るクリーク。

そう、この男は本来ドレスローザの固有種であり決して飼い慣らす事の出来ない凶暴な性格の闘魚を何度も力により屈服させる事で船代わりに自身の乗騎としていたのだ。

当然亡霊の姿では目立つ事この上ないのでいつもの全身鎧の上からは全身を覆う外套を纏っており、更には新月に海中を進んでくるとあつてはそうそう見つかるものでも無く、クリークはそのまま容易く百獣海賊団の本拠地である”鬼ヶ島”へ上陸したのであった。

## 第52話

「さて、探すにしろ何にしろ騒ぎを起こしといた方がいいか…」

何か騒ぎが起きていれば見つかるリスクも低くなるだろうと考えその場から大きく飛び上がると月歩で空を駆け回りながら内蔵していた焼夷榴弾を地上へとばら撒いてゆく。

それと共にポツポツと赤い光が灯る建物、徐々に広がるソレに百獣海賊団の者も気付いたのだろう、あちこちから騒ぐ声と共に大量の構成員が建物から飛び出して来ていた。

「減ったとは言え…やはりまだ多いな」

ワノ国本土の方に戦力を割いたにも関わらず、わらわらと出てくる百獣海賊団の構成員にゲンナリしながらも流石にまともに相手をしていられないのですぐさまその場を離れ目星をつけていた建物に潜入する。

肝心の目的：カイドウの息子である”ヤマト”の所在については潜入済みのドレークからの情報で何箇所か目星はつけており、警戒すべきはその父親のカイドウと三大幹部の残り二人である早害のジャックと火災のキングの三人でありこの三人に見つかる前に素早くコトを済ませねばならない。

隠密行動で進みつつ、目星をつけていた建物を確認していくも

「ありや確か中級幹部の”ササキ”…だったか？」

一つの建物の前に酒を飲みながら陣取る一人の巨漢。

身の丈3mは超えているだろう、両肩の刺青や緑のザンバラ長髪、特徴的な牙から情報を得ていた戦力のうちの一人、”盛っ切りのササキ”と判断し見つからないように上空へと月歩で移動、一撃で戦闘不能にすべく上空から奇襲し手刀を撃ち込むも

「ぐっ…ちくしょう、何だテメェ!!」

足元を陥没させる程の威力だったにも関わらず腰から刀を抜き構えるササキ。

「ちっ、これだから古代種は…」

ササキはゾオン：動物系の能力者であり食べた悪魔の実は”リュウリュウの実古代種・モデルトリケラトプス”、恐竜のゾオンである。古代種はシュガーの”ヴァンパイア”やマルコの”フェニックス”などの幻獣種に次いで極めて珍しいとされる”古代からいる生物”をモデルとした種であり、傾向としては兎に角打たれ強く頑丈。

更には変身すれば身体が通常のゾオンよりも大型化し、それに比例して耐久力も含めパワーも桁違いに向上、先に相手をした”モデル・アンキロサウルス”のアンキローと”モデル・スピノサウルス”のページワンも思っていたより頑丈で時間がかかった事を思い出しこちらも低く構える。

…とは言え流石にあの衝撃を受けてノーダメージという訳では無いもの

「何処のどいつか知らねエが…いい度胸だ！おれを誰だか知ってての事だろうなあ!!」

それを上手く隠し刀を振り上げるササキにこちらも七星剣を抜き放ち相手の刀を受け流し様に胴体に蹴りを叩き込みふき飛ばしたのだった。

## 第523話

「ぐっ…クソっ次は受け流せると思うな！」

かなりの力で叩き込んだ蹴りだったが吹き飛ばす程度にしか効いておらず、更にはササキの構えた刀が毛羽立つように刃が開くと徐々に甲高い音を響かせながら回転を始める。

「随分と変わった刀を持つてるな」

「絡繰螺旋刀（からくりらせんとう）…どんなもんかはその身で味わってみろ！」

それと共に振り抜かれる鋭く回転する刃、当然こんなものに当たれば肉は裂けズタズタに、当たり所が悪ければ骨まで削り取られる事だろう。

先程と同じく受け流してカウンターを入れようにも変に回転している事により下手すれば反発して弾く事も考えられた為振り下ろされた刀に向かって腕を伸ばせば手の甲から生える三本鉤の爪、耳障りな音を立てて受け止めると共に絡繰螺旋刀は絡めとられ、更にはおまけとばかりに手首から炎が噴き出されササキに襲い掛かる。

「何だそりゃー！」

流星にたかが火炎放射でダメージこそ無いものの驚きか反応によるものか咄嗟に後ろに下がるササキに対してクリークは全身を覆っていたマントを取り払い

「まあ…そっち風に言うなら”絡繰鎧”ってところか」

絡め取った螺旋刀を腰に指して今度は左手をササキに向ける。

マントの下には真っ赤なワノ国式鎧兜、素肌が見える所は無く全身をくまなく装甲が覆っておりその堅牢さが伺えるが

「真っ赤な鎧兜…そうかお前がカイドウさんが言ってた”亡霊”とやらか。

ワノ国の歴史に興味は無エが…てめエを討ちとりや他と差がつくって事だろうがよ!!」

それと共に変化するササキの姿、元々3メートルを超える巨漢だっ

だが更に大きく、姿を変化させ肌は硬質に、首周りには頑丈な棘付きのERIと頭には2本の角が生えそこに立っていたのは、リュウリユウの実古代種・モデルトリケラトプス”により獣人形態へと変化し10m以上に巨大化したササキであった。

クリークはこの亡霊の姿を晒した以上、他に連絡を取られる事を警戒して左手首に仕込まれた榴弾砲を向けていたがどうやらササキは手柄を独り占めする為に単独で戦う事を選んだ事にニヤリとしつつ身を低く七星剣を構えるも

「手加減は無しだ…さっさと片付けさせてもらうぞー！」

その言葉と共に首周りには生えた棘付きのERIが周り始める。

「いや、そこ回るのか!？」

自身の常識との剥離に思わず驚くクリークだったがその回転は止まる事なく更に速度を増し甲高い音が響きだすと共にササキの体がフワリと浮かび上がり

「へりケラトプス!!」

空を飛ぶ推進力であると共にまるで丸鋸のように回転するERIが自在に空中を動きクリークへとぶつかり耳障りな音でミリタリストタを削り取ろうとするも

「アンキロサウルスもそうだったが巫山戯やがって…生物学者に謝れ!!」

七星剣をフルスイングし吹き飛ばそうとするも自在な空中軌道によりフワリと避けられそのまま距離を取られ、今度は四手足をついた状態から再びERIが回転し

「何を言うー！トリケラトプスはこういう恐竜だ、こうやって自在に空を飛び狩りをしていたんだよ！弾丸（タマ）ケラトプス!!」

それと共に今度は回転を推進力に変え、向上した筋力で踏み込みクリークを鎧ごと串刺しにすべく迫るササキ。

「成る程そうだったのか…ってそんなわけねえだろうが!!」トリケラ拳砲”!!」

それに対してクリークは両手の甲をそれぞれ天地に向け拳を突き出し、極端に深く身を沈めた構えから背中、腰、踵、両膝に仕込まれ

たジェットダイアルを起動させ莫大な推進力と共にその拳を突っ込んでくるササキの眉間に叩き込めば

「ぐおっ……くそっ、意識が……」

いくら外装が頑丈でも中身まではそうも行かず、自身の飛び込む力とクリークの拳による衝撃で脳が揺らされ意識を失ったのだった。

「ったく……一回リトルガーデンかぼんぼり様の腹の中にでも行つてこいってんだ、あとトリケラトプスは草食だったの」

それと共にクリークは戦闘で破けないように脱ぎ捨てたマントを被り直し

ササキが陣取っていた扉に向き直ると

「さて……初めましてとでも言うべきか、アンタがカイドウの娘でいいんだよな？」

開かれた扉の向こうで金棒を構えた二本角の女性に問いかけるのだった。



## 第524話

その言葉に女性…カイドウの娘であるヤマトはこちらを少し睨むと

「そう聞くのなら先にキミが名乗ったらどうだい？」

そう言いながらも意志の強そうなその目は油断なくこちらを見据え、細身の金棒を正面に構えた。

恐らく歳の頃は20後半、白から緑へと変化する独特の髪色を後ろで纏め、側頭からは真紅の湾曲した2本角、白を基調とした和装に仁王髻のような帯を腰に巻いており独特な風情を感じさせ

「名乗るにしてもこの場では差し障りがあるのでな…正義の味方とも言うっておこうか」

「馬鹿にしてるのかな…？でもまあ、助ける道理は無いけどこれだけ暴れてくれたんだから敵って事でいいよね！」

クリークの言葉が気に入らなかつたのだろう、ヤマトはそのまま金棒を振り上げて踏み込むとそのまま大上段から振り下ろす。

流石に”あの”カイドウの娘と言うべきかその金棒はかなりの衝撃を伴っており右腕で受け止め様に

「随分と血の気が多いな！カイドウとは敵対していると聞いていたが…」

そのまま左足を振り抜くも金棒を盾に受け止められる。

「随分と頑丈な鎧だね…ならっ”雷鳴八卦（らいめいはつけ）”!!」

それと共に放たれるのは”カイドウ”の得意技としてもよく語られる莫大な覇気を纏わせ、そのまま振り抜く技である。

ただしそのまるで稲妻のように迸る覇気を纏った金棒の威力は絶大であり、更には威力が高いだけでなく未来視に至った猛者であつても回避は困難という恐るべき攻撃速度。

咄嗟に腕を交差して受け止めたものの本来ならば並大抵の攻撃は通じない特殊合金製の鎧は腕部が半壊しクリーク自身も後ろに退がらせれた。

だがそれよりもクリークが驚いたのは

「まさか、”硬(こう)”を使えるものがここにもいるとはな…」

それと共に七星剣を抜き放ち腰だめに構えるクリークと仕留めきれなかつた事に警戒を上げるヤマト。

「こう？何だいそれ？」

「覇気には次の段階がある…普段なら体内で流れる覇気をそれこそ身体全体に纏う”纏(てん)”、これはまるで見えない鎧を纏っているように攻防力を上昇させる…そして武器や銃に覇気を纏わせ切れ味や耐久性、速度などを格段に上昇させる”周(しゅう)”」

それと共に七星剣が黒く染め上げられていき

「…そして覇気を特定の部位に集中させる”硬”、”周”こそ使える者は割と見かけるがこの”硬”を使える者はあまりいないと思っていただぞ」

完全に黒化した七星剣はまるで嫌がるかのように震え甲高い悲鳴なような音を発し始めた。

「ふーん？外の世界だとそう呼ぶんだ、最もこつちだと流桜(りゅうおう)と呼ばれてるけどね、その程度腕に覚えがある者なら誰でもそれくらい使えるよ」

「大した自信だな、なら受け止めてみる事だな!!嵐一閃(あらしいつせん)!!」

「っ!!雷鳴八卦!!」

そうしてそのままぶつかる剣と金棒。

だが交差する二つの獲物はまるで見えない何かを纏っているかのように触れ合う事はなく、更には甲高い音を立てる七星剣が少し押し込まれるように動いた事で鏝迫り合いから金棒を立てると滑らせ落とし様

「鳴鏑あつ(なりかぶら)!!」

持ち手側を振り抜いての覇気を含んだ衝撃波を打ち込みクリークを吹き飛ばした。

大抵の相手なら一撃で仕留める事ができるもののクリークにダメージは見られず、ヤマトが奥の手を出そうとした所で

「…あんまり時間をかけられんし手短にいこう。

アンタがヤマトでいいんだろ？俺はお前を攫いに来た」

「…はあ？」

悪魔の實の能力を発動させようとした矢先のクリークのその言葉に力が抜けたように疑問符を浮かべたのだった。